現代日本文學全集
VII

廣津柳浪集
川上眉山集
齋藤緑雨集

杉浦非水裝幀

改造社版

柳浪（上）と扇面。眉山（中）と原稿。綠雨（下）と手柬

「柳浪・眉山・緑雨集」目次

廣津柳浪集

川上眉山集

齋藤緑雨集

廣津柳浪集

父柳浪について

父は餘り私達に向つて文學談をした事はなかつた。殊に自作については殆んど口を開くことがなかつた。

併し稀に父が話した話から父の創作態度を推測して見ると、初期に「殘菊」等を書いた時分、何を書いても主觀的になるので、どうかしてその主觀の色を作から沒したいと苦心したらしかつた。女を書いても男を書いても結局作者の「私」が色濃く出てしまふ。それは作者の説明が惡いのだ。そこで説明を極力省いて、會話と狀態の描寫とで人物を現す事に努めようと決心し、作風を一變するために、二三年何も書けなくなつた時代があつたといふ。そんな風にしてやつとその新しい書き方を支配出來るやうになると、『變目傳』『黑蜴蜓』『龜さん』『今戸心中』『河内屋』などが、續けて書けて來たものらしい。

父はその書き方を極端まで押詰めて考へた事もあるらしい。總ての地の文はみな説明であるといふ風にさへ考へたらしい。そして會話だけで書かうと考へたらしい。何かの場合に森鷗外氏にその話をしたら、「だが、それは損ではないか』と鷗外氏が云つたといふ話を父は私にした事がある。

全部を會話で書くといふ極端な考へ方は、終に實行しなかつたらしいが、併しさういふ考へ方は、父の作の會話を多くし、追々に父の作を冗漫にして行つた嫌ひがある。舊い型を打破する時に役立つた武器に、今度はみづから因はれたのである。

それから父はこんな事をも話した。「尾崎（紅葉氏）が或時、「君はたとひ一言一句でも、西鶴や近松にもないやうな名文句を自分が書いてゐると思ふ事はないか」といふから、私はそんな事は考へて見たこともない、と答へた。すると尾崎は「さうかね。自分にはあるがなあ」と云つた。そして更に尾崎は、「君は一つの名文句を生かして使はうと思ふために、作の筋を變へる事はないか」といふから、「そんな事は自分にはない」と答へると、「さうかね。僕はある」と尾崎は云つた』

自分はこの話に紅葉氏と父との相違がはつきり解ると思ふ。

父は想像力といふ事についてこんな事を云つた。「想像力を働かして見て初めて想像が湧くのだ。自分の頭にどんな想像力があるかといふ事は、働かして見なければ解りはしないのだ。働かして見れば、思ひも寄らぬ微妙さが人間の頭腦にはあるのだ」

父は書けなくなつた理由について云つた。「自分が書けなくなつたのは、自分を省みるやうになつたからだ。後を見ずに、眞直ぐにばかり向いてぐんぐん進んで行く方が作者はのびる」

父は苦笑しながらかうも云つた。「人間は自惚れが強くて、傲慢である方がいい。俺にはその兩方が足りなかつた。俺は、誰かが字を書いて呉れなどといふ、すると、それが何だかからかはれてゐるやうな氣がする。——さういふ感じ方が惡いのだ」

父は明治以來の文士の中では、字が上手だつた方の一人だつたらしい。けれども、そんな感じ方のために、人に賴まれても字は殆んど——何枚といふ程度しか書かなかつた。

父は晩年は文壇との交渉を絶つて、淋しくて、そして孤獨だつた。

昭和四年一月二十二日

廣津和郎

今戸心中

(一)

大空は一片の雲も宿めないが黒味渡ツて、廿四日の月は未だ上らず、靈あるが如き星のきらめきは、仰げば身も冽る程である。不夜城を誇顔の電氣燈にも、霜枯三月の淋しさは免れず、大門から水道尻まで、茶屋の二階に甲走ツた聲のさゞめきも聞えぬ。

明後日が初酉の十一月八日、今年は稍温暖く小袖を三枚重襲る程にもないが、夜が深けては流石に初冬の寒氣が身に浸みる。

少時前報ツたのは、角海老の大時計の十二時である。京町には素見客の影も跡を絶ち、角町には夜を警めの鐵棒の音も聞える。里の市が流して行く笛の音が長く尻を引いて、張店にも稍雜談の途斷れる時分となツた。

廊下には上草履の音がさびれ、臺の物の遺骸を今室の外へ出して居る所もある。遥かの三階からは甲走ツた聲で、喜助どん〳〵と床番を呼んで居る。

『腌膳いよ。餘りしつこいぢやアないか。くさくさ爲ツちまふよ。』と、自烈體さうに廊下を急歩で行くのは、當樓の二枚目を張ツて居る吉里と云ふ娼妓である。

『其樣事を云ツてなさツちやア困りますよ。鳥渡お出でなすツて下さい。花魁、困りますよ。』と、吉里の後から追縋ツたのはお熊と云ふ新造。

吉里は廿二三にもならうか、今が稼ぎ盛の年輩である。美人質ではないが男好のする丸顔で、而も何處にか劍が見える。睨まれると凄い樣な、覗然されると戰付きたい樣な、淸しい可愛らしい重縁眼が少し催涙んで、一の字眉を癪だと云ふ鹽梅に釣上げて居る。纈腮を態と突出した程上を仰き、左の牙齒で上唇を嚙んで居るので、高い美しい鼻は高慢らしくも見える。懐手をして肩を搖ツて、昨日あたりの島田髷をがくり〳〵と點頭かせ、今月一日に更衣を爲たばかりの裲襠の裾に廊下を拭はせ、大跨に而も急いで上草履を引摺ツて居る。

お熊は四十格向で、薄痘痕があツて、小鬢に禿があツて、右の眼が曲んで、口が尖らかツて、如何見ても新造面——意地悪別製の新造面である。

二女は今まで爭ツて居たので、腌膳がツて室を飛出した吉里を、お熊が追掛けて來たのである。

『裾が引摺ツてるぢやアありませんか。爲樣がない事ね。』

『好いぢやアないか。引摺ツてりや、如何したと云ふんだよ。お前さんに調へて貰やア爲まいし、關ツてお呉れでない。』

「左樣さね。花魁をお世話申した事はありませんからね。」

吉里は返辭を爲ないでさツ〳〵と行く。お熊は倘ほ附纏ツて離れぬ。

「ですがね、花魁。餘り我儘ばかりなさると、私が御内所で叱られますよ。」

『ふん。お前さんがお叱られぢやお氣の毒だね。吉里が斯う〳〵だツて、お神さんに何とでも訴けてお呉れ。」

白字で小萬と書いた黒塗の札を掛けてある室の前に、吉里は歩を止めた。

「善さんだツてお客樣ですよ。先刻から御酒誂

お來てるんぢやありませんか。』

『小萬さんもお客だッて。誰がお客で非いと云ッたんだよ。當然な事をお云ひでない。』と、吉里は障子を閉けて室内に入ッて、後をぴッしやり手荒く閉めた。

『如何したの。また癇癪を發してお居でだね。』

次の間の長火鉢で燗を爲ながら吉里へ聲を掛けたのは、小萬と呼び當樓のお職女郎。娼妓染みないで何處にか品格もあり、吉里には二三歳の年増である。

『だッて、餘り罷踏いんだもの。』

『今晩もかい。能う來るぢやアないか。』と、小萬は小聲で云ッて眉を皺せた。

『察してお呉れよ。』と、吉里は戰慄しながら火鉢の前に蹲踞んだ。

張替へたばかりではあるが、朦朧たる行燈の火光で、二女は呢と顔を見合せた。小萬が莞爾すると吉里も左も嬉しさうに笑ッたが、又左も術なさうな色も見えた。

『平田さんが今お出でなさッたから、お梅どんを直に知らせて上げたんだよ。』

『さう。難有う。氣休めだともッたら、西宮さんは實があるよ。』

『早く奥へお出でな。』と、小萬は懷紙で鐵瓶の下を煽いで居る。

吉里は燭臺煌々たる上の間を眩しさうに覗いて、『何たか悲アしくなるよ。』と、覺えず腮を襟に入れる。

『顔出だけでも好いんですから、鳥渡彼方へお出でなすッて下さい。』と、例のお熊は障子の外から聲を掛けた。

『靜かに爲てお呉れ。お客さまが居らッしやるんだよ。』

『御免なさいまし。』と、お熊は障子を開けて、『小萬さんの花魁、如何も濟みませんね。』と、莞爾會釋し、今奥へ行かうとする吉里の背後から、『花魁、困るぢやアありませんか。』

『今行くッたら能いぢやアないか。あゝ罷踏いよ。』と、吉里は振向きも爲ないで上の間へ入ッた。

客は二人である。西宮は床の間を背に胡坐を組み、平田は窓を背にして膝も崩さずに居た。

西宮は卅二三歳で、むッくりと肉づいた愛嬌のある丸顔、結城紬の小袖に同じ羽織と云ふ打扮で、何處とたく商人らしくも見える。

平田は私立學校の教員か、專門校の學生か、又小官員とも見れば見らるゝ風俗で、黑七子の三紋の羽織に、藍縞の節絲織と白ッぽい上田縞の二枚小袖、帶は白縮緬をぐいと緊り加減に巻いて居る。歳は廿六七にもならうか。髮は[illegible]で櫛の齒も見えぬが、房々と大波を打ッて艶があッて眞黒であるから、雪にも紛ふ襟足の色が一層引立ッて見える。細面ながら力身をもち、鼻がすッきりと高く、きッと締ッた口元の愛嬌は靨かとも見紛はれる。兎角柔弱たかる金縁の眼鏡も厭味に見えず、男の眼にも男らしい男振であるから、遊女なぞには別けて好かれさうである。

吉里が入ッて來た時、二客とも其顔を見上げた。平田は直ぐ其眼を外し、思出した樣に猪口を取ッて仰ぐが如く口へつけた、酒があリしや否やは知らぬが。

吉里の眼も先つ平田に注いだが、直ぐ西宮を見て懷愛しさうに莞爾笑ッて、『兄さん。』と、裲襠を引摺ッた儘走り寄り、身を投掛けて男の肩を抱いた。

『はゝはゝゝ。門迷を爲ちやア困るぜ。何だ、先刻から二階の欄子から覗いたり、店の格子に蟋蟀をきめたり爲て居た癖に。』と、西宮は吉里の顔を見て笑ッて居る。

吉里は態とつんとして、『餘り馬鹿にお爲なさんなよ。そりや昔の事ですのさ。』

『さう諦めてゝ呉れりやア、私も大助りだ。あいたたゝ、太股ふツつりのお身替なざア、些と難有過ぎる方だぜ。此上臂突にされて、ぐりぐりでも極められりやア、世話アねえ。復讐が可畏から、覺えてるが能い。』

『だツて、餘り憎らしいんだもの。』と、吉里は平田を見て、『平田さん、お前さん能く今晩來たのね。未だお國へ行かないの。』

平田は鳥渡吉里を見返ツて直ぐ脇を向いた。

『さアそろ／＼始まツたぞ。今夜は紋日でなくツて、紛紜日とでも云ふんだらう。彼方でも始まれば此方でも始まる。西の市は明後日で御座い。さア負けたア／＼、大負にまけたア／＼。』と、西宮は理も分らぬ事を云ひ、態とらしく高く笑ふと、『本統に馬鹿に爲て居ますね。』と、吉里も笑掛けた。

『戯言は戯言だが、先刻から大分紛雑てるぢやアないか。餘り癇癪を發さないが可いよ。』

『だツて。ね、そら‥‥。』と、吉里は眼に物を云はせ、『だもの、些たア癇癪も發りまさアね。』

『さうかい。來てるのかい、富澤町が。』と、西宮は小聲に云ツて、『其も好いさ。久振で――餘り久振でもなかツた、一昨日の今夜だツけね。其でも先ア久振の積りで、おい平田、盃を廻したら可いだらう。おツと、お代目だツた。おい、未だかい。酒だ／＼。』と、次の間へ掛けて呼ぶ。

『もう少時。お前さんも性急だ事ね。つひぞない。お梅どんが氣が利かないんだもの、加炭どいて呉れりやア好いのに。』と、小萬が煽ぐ懷紙の音がして、低聲の話聲も聞えるのは、未だお熊が次の間に居ると見える。

吉里は紙卷煙草に火を點けて西宮へ與へ、『まだ何か云ツてるよ。あゝ、可厭だ／＼。』

『また可厭だ／＼を始めたぜ。彼人も相變らず能く來てるぢやアないか。餘り我等に負けない方だ。迷はせて置いて、今更厭だとも云へまい。旨い言の一語も云ツて、些たア可愛がツて遣るのも功德になるぜ。』

『止してお呉んなさいよ。一人者に爲ツたと思ツて、餘り酷待ないで下さいよ。』

『一人者だと。』と、西宮は態とらしく云ふ。

『だツて、一人者ぢやアありませんか。』と、吉里は西宮を見て淋しく笑ひ、屹と平田を見詰めた。見詰めて居る中に眼は一杯の涙となツた。

(二)

平田は先刻から一言も云はないで居る。酒の無い猪口が幾度飲まれるものでもなく、食ひたくもない下物を挘ツたり、煮付く樂鍋に杯泉の水を加したり、三つ葉を挾んで見たり、種々に自分を持扱ひながら、吉里が此方を見て居らぬ隙を覘ツては、眼を放し得なかツたのである。隙を見損ツて、覺えず今吉里へ顏を見合せると、涙一杯の眼で怨めしさうに自分を見詰めて居たので、はツと思ひながら外し損ひ、同じく呢と見詰めた。吉里の眼にはら／＼と涙が零れると、平田は耐らなくなツて垂頭いて、深く息を吐いて涙ぐんだ。

西宮は二人の樣子に口の出し端を失ひ、酒は無し所在はなし、又もや次の間へ聲を掛けた。

『おい、まだかい。』

『あゝ漸と出來ましたよ。』と、小萬は燗瓶を鐵瓶から出しながら、『其樣譯なんだからね。いいかね、お熊どん。私が又後で能く云ふからね、今晩は我儘を云はせて置いてお呉れ。』

『どうかねえ。お頼み申しますよ。』と、お熊は唐紙越に、『花魁、此方の御都合でねえ、能御座んすか。』

『膿脂いよツ。』と、吉里も唐紙越に睨んで、『人の事ばツかし云はないで、自分も氣を付けるが能いぢやアないか。些たア其處で燗番でも爲る

が好いんさ。小萬さんの働いてお居でなのが見えないのか。自分が嫌なら、誰か遣しとくが能いぢやアないか。」

「はい〳〵。どうもお氣の毒さま。」と、お熊は室外へ出た。

「不統に誰か遣してお吳んなさいよ。お梅どんが何處か居るだらうから、來る樣に云ツてお吳んなさいよ。」と、小萬も上の間へ來ながら聲を掛けたが、お熊は既う居ないのか返辭がなかツた。

「彼樣可厭な奴ツちやアないよ。新造を何たと思ツてるんだらう。花魁に使はれてる奉公人ぢやアないか。餘り愚圖々々云はうもんなら、御內所へ斷ツて遣るぞ。何だらう、奉公人の癖に。」

「もう好いぢやアないかね。新造衆なんか相手にしたツて、如何なるもんかね。」

小萬は上の間に來て平田の前に坐ツた。

平田は待兼ねたと云ふ風情で、「小萬さん、一杯獻げようぢやアないかね。」

『まアお熱燗い所を。』と、小萬は押へて平田へ酌をして、『平田さん、今晩は久振で醉ツて見ようぢやありませんか。』と、客と吉里を見ながら云ツた。

「さうさ。」と、平田は少時考へ、ぐツと一息に飲乾した猪口を小萬にさし、『如何だい。醉ツても可いかい。』

「さうさなア。君まで僕を困らせるんぢやアないか。」と、西宮は小萬を見て笑ひながら、「何だ、飲めも爲ない癖に。管を卷かれちやア、旦那樣が又お困り遊ばさア。」

「何時私が管を卷いた事があります。」と、小萬は仰山らしく西宮へ膝を向け、「さアお云ひなさい。外聞の惡い事をお云ひなさんなよ。』

『小萬さん、お前も醉ツてお遣りよ。私や管でも卷かないぢやア遣瀨がないよ。ねえ兄さん。』と、吉里は平田をじろりと見て、西宮の手を確と握り、「ねえ、此位な事は勘忍して下さるでせう。」

「さア事だ。一人でさへ持餘しさうだのに、二人まで大敵を引受けて溜るもんか。平田、君が一方を防ぐんだ。吉里さんの方は僕が引受けた。吉里さん、さア思ふ樣管を卷いてお吳れ。』

「ほゝほ。彼樣事を云ツて、又私を嘖めようともツて。小萬さん、お前加勢してお吳れよ。』

『いやな事だ。私や平田さんと仲能くして、大人しく飲むんだよ。ねえ平田さん。」

「ふん。不實同志揃ツてやがるよ。平田さん、私が其樣に怖いのかい。醉着きも爲ませんからね、安心してお居でなさいよ。小萬さん、注いでお吳れ。」と、吉里は猪口を出したが、小杯〳〵ツて面倒臭いね。」と傍に在ツた湯呑と取り替へ、「滿々注いでお吳れよ。」

「そろ〳〵お株をお始めだね。大きい物ぢやア毒だよ。」

「毒になツたツて關やアしない。お酒が毒になツて死んぢまツたら寧そ苦勞が無くツて……。』と、吉里は垂頭き、握ツて居た西宮の手へはらはらと涙を零した。

平田は額に手を當てゝ横を向いた。西宮と小萬は顔を見合せて覺えず溜息を吐いた。

「あゝ、つまらない〳〵。」と、吉里は手酌で湯呑へだく〳〵と注ぐ。

『お止しと云ふのに。」と、小萬が銚子を奪らうとすると、「酒でも飲まないぢやア……。」と、吉里が又注ぎに掛るのを、小萬は無理に取上げた。吉里は一息に飲み乾し、顔を顰めて横を向き、苦しさうに息を吐いた。

『剛情だよ。また後で苦しからうと思ツて。』

「お酒で苦しい位な事は……。察して下さるのは兄さんばかりだよ。」と、吉里は西宮を見て、『勘忍して下さいよ。もう愚癡は溢さない約束

でしたッけね。ほゝほゝゝ。』と、淋しく笑ッた。

『花魁、花魁。』と、お熊が又しても室外から聲を掛ける。

『今直に行くよ。』と、吉里も今度は優しく云ふ。お熊は何も云はないで彼方へ行ッた。

『鳥渡行ッて來ちやア如何だね、も一杯威勢を附けて。』

西宮が與した猪口に滿々と受けて、吉里は考へて居る。

『本統にさうお爲よ。餘り放擲ッといちやア不可いよ。善さんも氣の毒な人さ。此樣に冷遇ても厭な顏も爲ないで、毎晩の樣に來てお居でなんだから、怒らせない位にや爲てお遣りよ。』と、小萬も吉里が氣に觸らない程にと言葉を添へた。

『また無理をお云ひだよ。』と、吉里は猪口を乾して、『はい、兄さん。本統に善さんにや氣の毒だとは思ふけれど、顏を見るのも可厭なんだもの。信切な人ではあるし……。信切にされる程厭になるんだもの。誰かの樣に、實情が無いんぢやアなし、義理を知らないんぢやアなし……。』

平田はぷいと座を起ッた。

『お便所。』と、小萬も起たうとする。『なアに。』と、平田は急いで次の間へ行ッた。

『放擲ッてお置きよ、小萬さん。何處へでも自分の好きな處へ行くが好いやね。』

次の間には平田が障子を開けて、『おやッ、草履がない。』

『また誰か持ッてッたんだよ。困る事ねえ。私のを穿いてお出でなさいよ。』と、小萬が聲を掛ける中に平田が重たさうに上草履を引摺ッて行く音が聞えた。

『意氣地の無い歩きッ振ぢやないか。』と、態とらしく云ふ吉里の頬を、西宮は鳥渡突いて、『ははゝ。大分愛想盡を仰有るね。』

『云ひますとも。ねえ、小萬さん。』

『へん、また後で泣かうと思ッて。』

『誰が。』

『好し。屹度だね。』と、西宮は念を押す。

『ふゝん。』と、吉里は笑ッて、『もう虐めるのは澤山。』

店梯子を駈上る四五人の足音がけたゝましく聞えた。『お客さまア。』と、聲々に呼びかはす。廊下を走る草履が忙しくなる。『小萬さんの花魁、小萬さんの花魁。』と、呼ぶ聲が走ッて來る。

『いやだねえ、今時分になッて。』と、小萬は返辭を爲ないで眉を顰めた。

ばた／＼と走ッて來た草履の音が小萬の室の前に止ッて、『花魁、鳥渡。』と、中音に呼んだのは、小萬の新造のお梅だ。

『何だよ。』

『鳥渡お顏を。』

『あい。初會なら謝罪ッてお呉れ。』

『お馴染ですから。』

『誰だ。誰が來たんだ。』と、西宮は小萬の顏を眞面目に見詰めた。

『おほゝ――、妬けるんだよ。』と、吉里は笑出した。

『はゝはゝゝ。如何だい、僕の藥鑵から蒸氣が發ッてやアしないか。』

『あゝ、發ッてますよ。口惜いねえ。』と、吉里は西宮の腕を爪捻る。

『あいた。酷い事を爲るぜ。おゝ痛い。』と、西宮は仰山らしく腕を擦る。

小萬は莞爾笑ッて、『餘り酷い目に會はせてお與れでないよ、蟲が發ると困るからね。』

『はゝはゝ。でかばちもない蟲だ。』と、西宮。

『ほゝほゝ。可愛い蟲さ。』

『油蟲ぢやアないか。』

「苦勞の蟲さ。」と、小萬は西宮を鳥渡睨んで出て行ッた。
折から撃ッて來た拍子木は二時である。本見世と補見世の樓の鳥が各自棲に歸るので、一時に上草履の音が轟き始めた。

（三）

吉里は今しも最後の返辭をして、わッと泣出した。西宮はさびたの烟草を拭ひながら、戰へる吉里の島田髷を見詰めて術なさうだ。
燭臺の蠟燭は心が長く燃出し、油烟が黒く上ッて、燈は暗し數行虞氏の涙と云ふ風情だ。
吉里の涙に咽ぶ聲が稍途切れた處で、西宮はいゝ、さびたを拭つて居た手を止めて口を開いた。
「私や氣の毒で耐らない。實に察しる。此で、平田も心殘りなく故郷へ歸れる。私も心配した甲斐があると云ふものだ。實に難有かッた。』
吉里は半顔を上げたが、返辭を爲ないで、懷紙で涙を拭いて居る。
「他の事なら何とでもなるんだが、一家の浮沈に關する事なんだから、如何も平田が歸郷らない譯に行かないんでね、私も實に困つて居るんだ。』
「家君さんが何故御損なんか爲すッたんでせうねえ。」と、吉里は矢張涙を拭いて居る。
「何故ッて。手違だから爲方がないのさ。家君さんが氣抜の樣になッたと云ふのに、幼稚い弟はあるし、妹はあるし、お前さんも知ッてる通り母君が死去のだから、如何しても平田が歸郷ッて、一家の仕法をつけなければならないんだ。平田も可哀想な譯さ。』
「平田さんがお歸郷なさると、皆さんが樂にお成りなさるんですか。』
『さうは行くまい。大概な事ぢや、中々樂に爲ると云ふ譯には行かなからう。それで、急に又出京ると云ふ目的もないから、お前さんにも無理な相談をした樣な譯なんだ。先日來の樣にお前さんが泣いてばかり居ちやア、談話は出來ないし、實に困切ッて居たんだ。此で私も漸と安心した。實に難有い。』
吉里は口にこそ最後の返辭をしたが、心には未だ諦めかねた風で、深く考へて居る。
西宮は注ぎ置きの猪口を口へつけて、『おゝ冷たい。』
『おや、濟みません、氣が付かないで。ほゝほゝほ。」と、吉里は淋しく笑ッて銚子を取上げた。
眼千兩と云はれた眼は眼蓋が腫れて赤くなり、紅粉はあはれ涙に洗ひ去られて、一時間前の吉里とは見えぬ。
「如何だね、一杯。」と、西宮は猪口をさした。
吉里は受けて酌いで貰ッて口へ附けようとした時、生憎涙は猪口へ波紋をつくッた。眼を閉ッて一息に飮乾し、猪口を下へ置いて俯頭いて又泣いて居た。
「本統でせうね。」と、吉里は涙の眼で外見惡さうに西宮を見た。
「何が。」と、西宮は眼を丸くした。
『私や何だか……、欺される樣な氣がして。」と、吉里は西宮を見て居た眼を疊へ移した。
「困るなア、如何も。まだ疑ッてるんだね。平田が其樣男か、其樣男でないか、五六年兄弟同樣にして居る私より、お前さんの方が能く知ッてる筈だ。私が眞逆お前さんを欺す……。」と、西宮が倘ほ說進まうとするのを、吉里は慌てゝ遮ッた。『あら、さうぢやアありませんよ。兄さんには濟みません。勘忍して下さいよ。だッて、平田さんが餘り平氣だから……。』
「なに平氣なものか。平生彼樣に快濶な男が、碌に口も利き得ないで、お前さんの顏色ばかり見て居て、此處にも居得ない位だ。」
『本統にさうなのなら、兄さんに心配させないで、直接に私に能く話して呉れるが能いぢやア

ありませんか。』

『いや、話したらう。幾度も話した筈だ。お前さんが相手に爲ないんぢやないか。話さうとすると、何を云ふんですと云ッて腹を立っッて、平田は弱切ッて居たんだ。』

『だッて、私や否ですもの。』と、吉里は自分ながら可笑くなッたらしく莞爾した。

『それ御覽。其だもの。平田が談話す事が出來るものか。お前さんの性質も、私は能く知ッて居る。其だから、お前さんが得心した上で、平田を故郷へ出發せたいと、斯うして平田を引張ッて來る位だ。不實に考へりやア、無斷で不意と出發て行くかも知れない。私は兎も角、平田は其樣不實な男ぢやない、實に止むを得ないのだ。もう承知してお呉れだッたのだから、くどく云ふ事もないのだが……。お前さんの性質だと……もう解ッてるんだから安心だが……。吉里さん、本統に賴むよ。』

吉里は又泣出した。其聲は室外へ漏れる程だ。西宮も慰めかねて居た。

『へい、お誂。』と、仲どんが次の間へ何か置いて行ッた樣である。

また障子を開けた者がある。次の間から上の間を覗いて、『おや、座敷の花魁は未だ彼方で御在ますか。』と、聲を掛けたのは、十六七の眼の大きい可愛らしい女で、これは小萬の新造のお梅である。

『平田さんも未だお出でなさらないんですね。』と、お梅は仲どんが置いて行ッた臺の物を上の間へ運び、『お飯に爲すッちやア如何で御在ます。皆さんをお呼び申しませうか。』

『まア好いや。平田は吉里さんの座敷に居るかい。』

『はい。お一人でお臥ッて居らッしやいましたよ。お淋しいだらうと思ッて私が參りますとね、彼方へ行ッてろと仰有ッて、何だか考へて居らッしやる樣ですよ。』

『旨く云ッてるぜ。淋しからうと思ッてぢやアなからう、平田を口說いて鉢を喰ッたんだらう。はゝはゝ。好い氣味だ。乃公の云ふ言を、聞かなかッた罰だぜ。』

『あら、彼樣事を。覺えて居らッしやいよ。』

『本統たから、顏を眞赤にしたな。はゝはゝは。』

『あら、何時顏なんか眞赤に爲ました。其樣事をお云ひなさると、斯うですよ。』

『いや、御免だ。擽るのは御免だ。降參、降參。』

『もう云ひませんか。』

『もう云はない／＼。仲直りにお茶を一杯。湯が沸いてるなら、濃くして賴むよ。』

『いやな事だ。』と、お梅は次の間で茶を入れ、湯吞を盆に載せて持ッて來て、『憎らしいけれども、はい。』

『いや、難有いな。此で平田を口說いたのと差引に爲て遣らう。』

『まだ彼樣事を。』

『おッと危い。溢れる／＼。』

『此樣時でなくッちやア、敵が取れないわ。ねえ、花魁。』

吉里は淋しさうに笑ッて、何とも云はないで居る。

『今擽られて耐るものか。降參、降參、本統に降參だ。』

『屹度ですか。』

『屹度だ／＼。』

『好い氣味だ。謝罪らせて遣ッた。』

『はゝはゝ。お梅どんに擽られて耐るもんか。男を擽る急所を心得てるんだからね。』

『何とでも仰有い。どうせ貴郎には勝ひませんよ。』と、お梅は立上りながら、『御膳はお後で、皆さんと御一處ですね。も少時してから又參り

ます。」と、次の間へ行ッた。
誰が覗いて居たのか、障子をぴしやりと外から閉てた者がある
「あら、誰か覗いてたよ。」と、お梅が急いで障子を開けると、ばた／＼ばた／＼と廊下を走る草履の音が聞えた。
『まア。』と、お梅の聲は呆れて居た。

（四）

『如何したんだ。』と、西宮は事ありさうに入ッて來たお梅を見上げた。
『善さんですよ。善さんが覗いて居なすッたんですよ。』と、お梅は眼を丸くして、今顔を上げた吉里を見た。
『おへない姤漢だよ。』と、吉里は腹立しげに見えた。
『先刻からね、花魁のお座敷を幾度も覗いて居なさるんですよ。平田さんが怒んなさりや爲まいかと思ッて、本統に心配しましたよ。』
『餘り其樣眞似をすると、謝絶ッて遣るから好い。あゝ、自由にならないもんだ事ねえ。』と、吉里は西宮をつく／＼視て、垂頭いて溜息を吐く。
『座敷の花魁は遅う御在ます事ね。鳥渡見て參りますよ。』と、お梅は次の間で鐵瓶に水を加す音をさせて出て行ッた。
「西宮さん。」と、吉里は聲に力を入れて、『私や如何したら可いでせうね。本統に辛いの。私の身にもなッて察して下さいよ。」
「實に察しる。」と、西宮は少時考へ、『實に察して居るのだ。お前さんに無理に頼んだ私の心の中も察して貰ひたい。中々私に云へさうも無かッたから、最初は小萬に頼んで話して貰ふ積りだッたのさ。小萬も其樣事は話せないて云ふから、仕方なしに私が話した樣な譯だからね、お前さんが承知して呉れただけ、私や倚ほ察して居るんだよ。三十面を下げて、馬鹿を盡してる位だから、他には笑はれるだけ人情は先ア知ッてる積りだ。何卒、平田の爲だと思ッて、我慢して、ねえ、吉里さん、何卒頼むよ。』
『仕方がありませんよ、ねえ兄さん。』と、吉里は終に諦めたかの如く云放しながら倚ほ考へて居る。
『私も此樣苦しい思を爲た事はない。』
『斯う云ふ果敢ない縁なんでせうよ、ねえ。考へると、小萬さんは羨ましい。』と、吉里は染々云ッた。
『いや、私も來ない積りだ。』と、西宮は斷乎云ひ放ッた。
『えッ。』と、吉里は吃驚して、『え、何故。如何なすッたの。』と、西宮の顔を見詰めて呆れて居る。
『いや、何故と云ふ事もない。辛いのは誰しも同じだ。お前さんと平田の苦衷を察しると、私一人如何して來られるものか。』
『何故其樣事をお云なさるの。私や其樣積りで。』
『そりや解ッてる。其で來る來ないと云ふ譯ぢやない。實に忍びないからだ。』
『いや、いや、私や否ですよ。私が小萬さんに濟みません。平田さんには別れなければならないし、兄さんでも來て下さらなきや、私や如何します。私が惡かッたら謝罪るから、兄さん今迄通り來て下さいよ。私を可哀想だと思ッて來て下さいよ。え、能御座んすか。え、え。』と、吉里は詫びる樣に頼む樣に幾度となく繰返す。
西宮は垂頭いて眼を閉ッて、呢と考へて居る。
吉里は其顔を覗込んで、『能御座んすか。ねえ兄さん、能御座んすか。私や兄さんでも來て下さなきやア……。』と、又泣聲になッて、『え、能御座んすか。』

西宮は閉目ッて垂頭いて居る。
『能御座んすね、能御座んすね。本統、本統。』と、吉里は幾度となく念を押して西宮を點頭かせ、はアッと深く息を吐いて涙を拭きながら、『兄さんでも來て下さらなきゃア、私や生きちやア居ませんよ。』
『よろしい、よろしい。』と、西宮は點頭きながら、『平田の方は斷念ッて吳れるね。私もお前さんの事に就いちやア、後來何とでも爲ようから。』
『詮方がありません、斷念らない譯には行かないのだから。もう、音信も出來ないんですね。』
『さア。さう思ッて居て貰はなければ……。』と、西宮も判然とは答へかねた。
吉里は少時考へ、『餘り未練らしいけれどもね、後生ですから、明日にも、も一遍連れて來て下さいよ。』と、顏を赧くしながら西宮を見る。
『もう一遍。』
『え、、故鄕へ發程までに、もう一遍御一緒に來て下さいよ、後生ですから。』
『もう一遍。』と、西宮は繰返し、『もう、其樣間はないんだよ。』
『えッ。何時故鄕へ立發んですッて。』と、吉里は膝を進めて西宮を見詰めた。
『新橋の、明日の夜汽車で。』と、西宮は云ひ惡さうである。
『えッ、明日の……。』と、吉里の顏色は變ッた。
西宮を見詰めて居た眼の色が異樣くなると、齒をぎりぎりと嚙んだ。西宮が吃驚して聲を掛けようとした時、吉里はうゝんと反ッて西宮へ倒れ掛ッた。
折能く入ッて來た小萬は、吉里の樣子に吃驚して、『えッ、如何お爲なの。』
『如何した所ぢやアない。早く如何かして吳れ。如何も非常な力だ。』
『しッかりお爲よ。吉里さんしッかりお爲よ。反ッちやア不可いのに。あら其樣に反ッちやア。』
『平田は如何した。平田は、平田は。』
『平田さんですか。』
何時かお梅も此室に來て、驚いて手も出ないで、茫然突立ッて居た。
『お梅どん其處に居たのかい。何を茫然してるんだよ。平田さんを早く呼んでお出で。氣が利かないぢやアないか。早くお爲。大急ぎだよ。反ッちやア不可いと云ふのにねえ。しッかりお爲よ。吉里さん。吉里さん。』
お梅は俄かに周章出し、唐紙へ衝當り障子を倒し、素足で廊下を駈出した。

（五）

平田は臥床の上に立ッて帶を締掛けて居る。其帶の端に吉里は膝を投掛け、平田の羽織を顏へ當てゝ伏沈んで居る。平田は上を仰き眼を合り、後背からは淚が頰へ線を畫き、下唇は嚙まれ、上脣は戰へて、帶を引くだけの勇氣もないのである。
二人の定紋を比翼につけた枕は意氣地なく倒れて居る。燈心が焚込んで、あるか無きかの行燈の火光は、「春如海」と書いた額に映ッて、字形を夢の樣にして居る。
歸期を報せに來た新造のお梅は、次の間の長火鉢に手を翳し頰を焙り、上の間へ耳を聳てゝ居る。
『もう何時になるんかね。』と、平田は氣の無い樣な調子で、次の間のお梅に聲を掛けた。
『も少時前五時を報ちましたよ。』
『え、五時過ぎ。遲くなッた、遲くなッた。』と、平田は思切ッて帶を締めようとしたが、吉里が動かないので其效がなかッた。
『彼方ぢやアもう支度を爲てるのかい。』
『はい。西宮さんは些ともお臥らないで、此方

の……。」と、云過ぎようとして氣が付いたらしく、お梅は言葉を切ッた。

「さうか。氣の毒だッたなア。さア行から。」

吉里は何ほ帶を放さぬ。

「まア好いよ。其樣に急がんでも好いよ。」と、聲を掛けながら、障子を開けたのは西宮だ。

「おやッ、西宮さん。」と、お梅は見返ッた。

「起きてるのかい。」と、西宮は態と手荒く唐紙を開け、無遠慮に屏風の中を覗くと、平田は帶を締了らうとする所で、吉里は後から羽織を掛け、其手を男の肩から放し難さうに見えた。

「失敬した、失敬した。さア出掛けよう。」

「まア好いさ。」

『さうでない、さうでない。』と、平田は忙がしさうに顏を搖ぶりながら室を出掛けた。

「あゝ、烏渡、あの……。」と、吉里の聲は戰へた。

「おい、平田。何か忘れた物があるんぢやアないか。」

『なに無い。何にも無い。』

『君は無からうが……。おい、おい、何を其樣に急ぐのだ。』

『何をッて。』

西宮は平田の腕を取ッて、「まア何でも好い。用があるから……。まア、少し落付いて行くさ。」と、再び室の中に押込んで、自分はお梅と共に廊下の欄干に倚れて、中庭を見下して居る。

研出した樣な月は中庭の赤松の梢を屋根から廊下へ投げて居る。築山の上口の鳥居の上にも、山の上の小さな辨天の社の屋根にも、霜が白く見える。風はそよとも吹かぬが、しみる樣な寒氣が足の爪先から全身を凍らする樣で、覺えず胴顫が出る程だ。

中庭を隔てた對向の三つ目の室には、まだ次の間で酒を飲んで居るのか、障子に男女二個の影法師が映ッて、聞取れない程の話聲も聞える。

「中々冷えるね。」と、西宮は小聲に云ひながら後向になり、背を欄干に倚せ變へた時、二上り新内を唄ふのが對面の座敷から聞えた。

「わるどめせずとも、そこ放せ、明日の月日の、無い樣に、止めるそなたの、心より、かへる此身は、どんなに〳〵、つらから――」

「あれは東雲さんの座敷だらう。さびの有る美い聲だ。何處から來る人なんだ。」と、西宮がお梅に問ねた時、廊下を急ぎ足に――吉里の室の前は別けて走る樣にして通ッた男がある。

お梅は一寸西宮の袖を引き、「善さんでしたよ。」と、彼男を見送りながら細語いた。

「え、善さん。」と、西宮も見送りながら、「ふらむ。」

三つばかり先の名代部屋で唾壺の音をさせたかと思ふと、吃驚する樣な大きな欠伸をした。

途端に吉里が先に立ッて平田も後から出て來た。

「お待遠さま。兄さん、濟みません。」と、吉里の聲は存外沈着いて居た。

平田は驚くほど蒼白めた顏をして、「遲くなッた、遲くなッた。」と、獨語の樣に云ッて、忙がしさうに歩き出した。足には上草履を忘れて居た。

「平田さん、お草履を召して行らッしやい。」と、お梅は戻ッて上草履を持ッて、見返りもせぬ平田を追掛けて行く。

「兄さん。」と、吉里は背後から西宮の肩を抱いて、「兄さんは來て下さるでせうね。屹度ですよ、屹度ですよ。」

西宮は肩へ掛けられた吉里の手を確と握ッたが、妙に胸が迫ッて返辭がされないで、唯點頭いたばかりだ。

『平田さん、お待ちなさいよ。平田さん。』

お梅が幾度聲を掛けても、平田は尚ほ見返らないで、廊下の突當りの角を表梯子の方へ曲らうとした時、

『何處へお出でなさるの。此方ですよ。』と、聲を掛けたのは小萬だ。

『え、何だ。や、小萬さんか。失敬。』と、平田は小萬の顏を珍らしさうに瞶視めた。

『如何なすツたの。ほゝほゝゝ。』

『お草履をお穿きなさいよ。』と、お梅は上草履を平田の前に置いた。

『あ、さうか。』と、平田が上草履を穿く處へ西宮も吉里も追ひついた。

『餘り何だから、如何爲すツたかと思ツて‥‥。平田さん、私の座敷へ入らツしやいよ。寛々お茶でも召上ツて。ねえ吉里さん。』

『難有う。いや、もう行から。ねえ、西宮。』

『其樣事を仰有らないで。何ですよ、まア好いぢやアありませんか。』

西宮は呪と小萬の顏を見た。吉里は西宮の後に垂頭いて居る。平田は廊下の洋燈を意味もなく見上げて居る。

『もう此儘出掛けよう。夜が明けても困る。』と、西宮は小萬に眸せして、『お梅どん、帽子と外套を持ツて來るんだ。平田のもだよ。人車は來てるだらうな。』

『もう先刻から待ツてますよ。』

お梅は二客の外套帽子を取りに小萬の部屋へ走ツて行つた。

『平田さん。』と、小萬は平田の傍へ寄り、『本統にお名殘惜う御座んす事ね。何時又お目に掛れるでせうねえ。御道中をお氣をお付けなさいよ。貴郷にお着きなすツたら、鳥渡知らせて下さいよ。ね、能御座んすか。此樣事にならうとはね。』

『何だ。何を云ツてるんだ。一言云ひや濟むぢやアないか。』

西宮に叱られて、小萬は顏を背向けながら口を噤んだ。

『小萬さん、種々お世話に爲ツたツけねえ。』と、平田は云掛けて少時無言。『どうか賴むよ。』其聲には力があり過ぎる程だが、其上は云ひ得なかつた。

小萬も何とも云ひ得ないで、西宮の後に垂頭いて居る吉里を見ると、胸がわく〳〵して來て、淚を溢さずには居られなかツた。

お梅が帽子と外套を持ツて來た時、階下から上ツて來た不寢番の仲どんが、催促がましく人車の久しく待ツて居る事を告げた。

平田を先に一同梯子を下りた。吉里は一番後れて、階段を踏むのも危險いほど力無さうに見えた。

『吉里さん、吉里さん。』と、小萬が呼立てた時は、平田も西宮も既う土間に下りて居た。吉里は足が縮んだ樣で、上框までは行かれなかツた。

『吉里さん、鳥渡、鳥渡。』と、西宮も聲を掛けた。

吉里は一語も吐さないで、眞蒼な顏をして呪と平田を見詰めて居る。平田も呪と吉里を見て居たが、堪へられなくなツて横を向いた時、仲どんが耳門を開ける音がけたゝましく聞えた。平田は足早に家外へ出た。

『平田さん、御機嫌よろしう。』と、小萬とお梅とは口を揃へて聲を掛けた。

西宮は又今夜にも來て樣子を知らせるからと、吉里へ言葉を殘して耳門を出た。

『おい、氣をつけて貰はうよ。御祝儀を戴いてるんだぜ。左樣なら、御機嫌よろしう。どうか又お近い内に。』

車聲は走り初めた。耳門はがら〳〵と閉められた。

此時まで枯木の如く立ッて居た吉里は、小萬に顔を見合せて涙をはら／＼と零し、小萬が呼掛けた聲も耳に入らぬのか、小走りの草履の音をばた／＼とさせて、裏梯子から二階の自分の室へ駈込み、まだ温氣のある布團の上に泣倒れた。

（六）

萬客の垢を宿めて、夏でさへ冷つゝ名代部屋の夜具の中は、冬の夜の深けては氷の上に臥るより耐へられぬかも知れぬ。新造の注意か、枕頭には箱火鉢に湯沸が掛ッて、其傍には一本の德利と下物の盡きた小皿とを載せた盆がある。裾の方は屛風で圍はれ、頭の方の障子の破隙から吹込む夜風は、油の盡きかゝッた行燈の火を煽ッて居る。

「おゝ、寒い／＼。」と、聲も戰ひながら入ッて來て、夜具の中へ潛込み、抱卷の袖に手を通し火鉢を引寄せて兩手を翳したのは、富澤町の古着屋美濃屋善吉と呼ぶ吉里の客である。

年は四十ばかりで、輕からぬ痘痕があッて、口つき鼻つきは尋常であるが、左の眼蓋に眼張の様な疵があり、見た所の下品小柄の男である。

善吉が吉里の許に通初めたのは一年ばかり前、丁度平田が來初めた頃の事である。吉里は兎角善吉を冷遇し、終宵全く顔を見せない時が多かッた位だッた。其にも構はず善吉は毎晩の様に通詰め通透して、此十月頃から別して足が繁くなり、今月になッてからは毎晩來て居たのである。死金ばかりは使はず、きれる處にはきれもするので、新造や店の者には何時も笑顔で迎へられて居たのであつた。

「寒いッたッて、篦棒に寒い晩だ。酒は醒めて了ッたし、これぢやア爲様がない。もう無かッたか知ら。」と、德利を振ッて見て、「だめだ、だめだ。」と、烟管を取上げて二三吹續けさまに烟草を喫んだ。

「今彼處に立ッて居たなア、小萬の情夫に成ッてる西宮だ。一處に居たのはお梅の様だッた。お熊が云ッた通り、平田も今夜はもう去るんだと見えるな。座敷が明いたら入れて呉れるか知らん。いゝ、其様事は如何でも好い。座敷なんか如何でも好いんだ。鳥渡でも一處に寢て、今夜限り來ない事を一言斷りや好いんだ。もう今夜限り屹度來ない。來ようと思ッたッて來られないのだ。まだ去らないのかなア。もう歸りさうなものだ。大分手間が取れる様だ。本統に歸るのか知らん。去らなきや去らないでも可い。情夫だとか何だとか云ッて騒いでやアがるんだから、どうせ去りやしまいよ。去らなきや其で好いから、顔だけでも好いから、鳥渡でも好いから‥‥。今夜限りだ。もう來られないのだ。明日は如何なるんだか、まア分ッてる様でも‥‥。自分ながら分らないんだ。あゝ‥‥。」

方角も吉里の室、距離も其位の處に上草履の音が發ッて、「平田さん、お待ちなさいよ。」と、お梅の聲で呼掛けて追掛ける様子である。其後から二三人の足音が同じ方角へ歩出した。

「や、去るな。愈よ去るな。」と、善吉は撥起きて障子を開けようとして、「またお梅にでも見付られちやア外見が惡いな。」と、障子の破隙から少時覗いて、莞爾しながら又夜具の中に滑り込んだ。

上草履の音は少時すると聞えなくなッた。善吉は耳を澄した。

「矢張去らないんだと見えらア。去らなきやア吉里が來ちやア呉れまい。あゝ。」と、善吉は火鉢に翳して居た兩手の間に頭を埋めた。

少時して頭を上げて右の手で烟管を採ッたが、敢て烟草を喫まうでもなく、顔の色は沈み、眉は皺み、深く物を思ふ體である。

『あゝッ、お千代に濟まないなア。何と思ッてるだらう。横濱に行ッてる事と思ッてるだらうなア。すき好んで名代部屋に職へてるたア知らなからう。嘸ぞ恨んでるだらうなア。店も失くした、お千代も生家へ返して了ッた――可哀想にお千代は生家へ返して了ッたんだ。乃公は酷い奴だ――酷い奴なんだ。あゝ、乃公は意氣地がない。』

上草履は又遙かに聞え出した。梯子を下りる音も聞えた。善吉が耳を澄して居ると、耳門を開ける音がして、續いて人車の走るのも聞えた。

『はゝはゝ、去ッた、去ッた、愈よ去ッた。此から吉里が來るんだ。乃公の外に客はないのだし、屹度乃公の處へ來るんだ。や、走り出したな。あの走ッてるのは吉里の草履の音だ。裏梯子を上ッて來る。さ、愈よ此處へ來るんだ。屹度さうだ。屹度さうだ。そら此方に駈けて來た、』

善吉は今にも吉里が障子を開けて、其處に顏を出す樣な氣がして、火鉢に手を翳して居る事も出來ず、横にころりと倒んで、屛風の端から一尺ばかり見える障子を眼を細くしながら見詰めて居た。

上草履は善吉が名代部屋の前を通過ぎた。善吉は吃驚して起上ッて急いで障子を開けて見ると、上草履の主は果して吉里であッた。善吉は茫然として見送ッて居ると、吉里は見返りも爲ずに自分の室へ入ッて、手荒く障子を閉めた。

善吉は何か云はうとしたが、脣を顫はして息を呑んで、障子を閉めるのも忘れて、布團の上に倒れた。

『畜生、畜生、畜生めッ。』と、少時して斯う叫んだ善吉は、涙一杯の眼で天井を見詰めて、布團を二三度蹴りに蹴つた。

『おや、何を爲て居らッしやるの。』

何時の間に人が來たのか、人が何を云ッたのか、兎に角人の聲が爲たので、善吉は吃驚して起上ッて、呢と其人を見た。

『おほゝゝゝ。善さん、如何爲すッたんですよ、まア其樣顏を爲すッてさ。さア彼方へ參りませう。』

『お熊どんなのか。私や今何か云ッてやアしなかッたかね。』

『いゝえ、何にも云ッてらッしやりはしませんかッたよ。何だか變です事ね。如何か爲すッたんですか。』

『如何も爲やアしない。なに、如何するものか。』

『ぢやア、彼方へ參りませうよ。』

『彼方へ。』

『去跡になりましたから、花魁のお座敷へ行らッしやいよ。』

『あ、さうかい。はゝはゝゝ。そいつア剛氣だ。』

善吉はつと立ッて威勢能く廊下へ出た。

『まアお待ちなさいよ。何かお忘れ物は御在ませんか。お紙入は。』

善吉は返事も爲ない。お熊が枕頭を片付ける中に、早や廊下を急ぐ其足音が聞えた。

『まるで夢中だよ。私の云ふ事なんざ耳に入らないんだよ。何にも忘れなすッた物は無いか知ら。そら忘れて行ッたよ。彼樣に云ふのに紙入を忘れて行ッたよ。烟草入もだ。爲樣がないぢやアないか。』

お熊は敷布團の下に在ッた紙入と烟草入とを取上げ、盆を片手に持ッて廊下へ出た。善吉は既に廊下に見えず、彼方の吉里の室の障子が明放してあつた。

『早くお臥みなさいまし。お寒う御在ますよ。』と、吉里の室に入ッて來たお熊は、次の間に立

ッた儘上の間へ進み難さうに見えた善吉へ云つた。
上の間の唐紙は明放しにして、半押除けられた屏風の中には、吉里が彼方を向いて寢て居るのが見える、風を引きはせぬかと氣遣はれる程意氣地のない布團の被け樣をして。
行燈は既に消えて、窓の障子はほの〴〵と明るくなッて居る。千住の製絨所か鐘が淵紡績會社かの汽笛が遙かに聞えて、上野の明六時の鐘も撞ち始めた。
『善さん、しッかり爲さいよ、お紙入なんかお忘れなすッて。』と、お熊が笑ひながら出した紙入を、善吉は苦笑を爲ながら胸もあらはな寢衣の懷裡へ押込んだ。
『少時お臥るが能御座んすよ。』
『もう夜が‥‥明るくなッてるんだね。』
『なに貴郎、まだ六時ですよ。八時頃までお臥ッて、一口召上ッて、其からお歸んなさるが能御座んすよ。』
『さう。』と、善吉は尚ほ突立ッて居る。
『花魁、花魁。』と、お熊は吉里へ聲を掛けたが、返辭も爲なければ身動きもせぬ。
『爲樣がないね。善さん、早くお臥みなさいまし。八時になッたらお起し申しますよ。』
善吉がも少時居て貰ひたかッたお熊は室を出て行ッた。
室の障子を開けるのが方々に聞え、梯子を上り下りする草履の音も多くなッた。馴染の客を送出して、其噂を爲て居るのもあれば、初會の客に別を惜しがッて、又の逢夜を約ッて居るのもある。夜は愈よ明放れた。
善吉は一層氣が忙しくたッて、寢たくはあり、妙な心持はする、機會を失ッて、まじ〳〵と吉里の寢姿を眺めて居た。
朝の寒さは一入である。西向の吉里が室の寒さは耐へられぬ程である。吉里は二つ三つ續けて嚔を爲た。
『風を引くよ。』と、善吉はわれを覺えず吉里の枕頭に近づき、『此樣事を爲てるんだもの、寒い筈だ。私が着せてあげよう。おい、吉里さん、吉里さん、風を引くよ。』
吉里は袖を顏に當てゝ俯伏し、眠てるのか眠てないのか、聲を掛けても返辭を爲ぬ所を見ると、眠てるのであらうと思ッて、善吉は呢と見下した。
雪よりも白い領の美しさ。ぼうッと而も白粉を吹いた樣な耳朶の愛らしさ。匂ふが如き揉上は充血くなッた頰に亂れ掛ッて居る。袖は涙に濡れて、白茶地に牛房縞の裏柳葉色を曇らせて居る。島田髷は全く根が拔け、藤紫のたまこの半掛は脫れて、袘は不用ものゝ樣に突出されて居た。
善吉はやゝ少時瞬もせず吉里を見詰めた。
長鳴するが如き上野の汽車の汽笛は鳴り始めた。
『お、汽車だ。もう汽車が出るんだな。』と、善吉は尚ほ吉里の寢顏を見詰めながら云ッた。
『如何しようねえ。もう汽車が出るんだよ。』と、泣聲は吉里の口から漏れて、つと立上ッて窓の障子を開けた。朝風は颯と吹込んで、吃驚して居た善吉は縮み上ッた。

（七）

忍が岡と太郎稻荷の森の梢には朝陽が際立ッて映ッて居る。入谷は尚ほ半分靄に包まれ、吉原田甫は一面の霜である。空には一群々々の小鳥が輪を作ッて南の方へ飛んで行き、上野の森には烏が噪ぎ始めた。大鷲神社の傍の田甫の白鷺が、一羽起ち二羽起ち三羽起つと、明日の酉の市の賣場に新らしく掛けた小屋から二三個の人が現はれた。鐵漿溝は泡立ッた儘凍ッて、大音寺前の温泉の烟は風に狂ひながら流れて居る。

一聲の汽笛が高く長く尻を引いて動き出した上野の一番汽車は、見る〳〵中に岡の裾を繞ッて、根岸に入ッたかと思ふと、天王寺の森に其烟も見えなくなッた。

窓の鐵棒を袖口を添へて兩手に握り、夢現の界に汽車を見送ッて居た吉里は、既に烟が見えなくなッても、尚ほ瞬も爲ずに見送ッて居た。

『あゝ、もう行ッて了ッた。』と、呟く樣に云ッた吉里の聲は顫へた。

まだ溫氣を含まぬ朝風は頰に砭するばかりである。窓に顏を晒して居る吉里よりも、其後に立ッて居た善吉は戰へ上ッて、今は耐へられなくなッた。

『風を引くよ、吉里さん。寒いぢやアないかね、閉めちゃア如何だね。』と、善吉は齒の根も合はないで云ッた。

見返ッた吉里は始めて善吉を認めて、『おや、善さんでしたか。』

『閉めたら好いだらう。吉里さん、風を引くよ。顏の色が眞靑だよ。』

『あの汽車は何處へ行くんでせうね。』

『今の汽車かね。靑森迄行かなきや、仙臺で止るんだらう。』

『仙臺。神戸には何時ごろ着くんでせう。』

『神戸に。それは、新橋の汽車でなくッちやア。まるで方角違ひだ。』

『さう。さうだ新橋だッたんだよ。』と、吉里は垂頭いて、『今晩の新橋の夜汽車だッたッけ。』

吉里は次の間の長火鉢の傍に坐ッて、簞笥に倚れて考へ始めた。善吉は窓の障子を閉めて、吉里と火鉢を挾んで坐り、寒さうに懷手を爲て居る。

洗物を爲て來たお熊は、室の内に入りながら、『おや、もうお起きなすッたんですか。も少時お臥ッてらッしやれば可いのに。』と、持ッて來た茶碗小皿などを茶棚へ仕舞ひかけた。

『なにもう寢なくッても──此樣に明るくなッちやア寢ても居られまい。何しろ寒くッて、此ぢやア耐らないや。お熊どん、私の着物を出して貰はうぢやないか。』

『まア好いぢやアありませんか。今朝は寛々なすッて、一口召上ッてからお歸りなさいましな。』

『さうさね。如何でも好いんだけれど、何しろ寒くッて。』

『本統に馬鹿にお寒いぢやアありませんかね。何か上げませうね。鳥渡これでも被ッて居らッしやい。』と、お熊は衣桁に掛けてあッた吉里のお召縮緬の座敷着を取ッて、善吉の後から掛けて遣ッた。

善吉は莞爾して左右の肩を見返り、『こいつア剛氣だ。これを借りても能いのかい。』

『善さんの事ですもの。ねえ、花魁。』

『へゝゝゝ。旨く云ッてるぜ。』

『能くお似合なさいますよ。ほゝほゝ。』

『はゝはゝ。袖を通したら、可笑なものだらう。』

『なに、貴郎。袖をお通しなすッて立ッて御覽なさい。屹度能くお似合なさいますよ。ねえ、花魁。』

『眞逆。はゝはゝ。』

『ほゝほゝ。』

吉里は一語も發はぬ。見向きもせぬ。矢張簞笥に倚れた儘考へ込で居る。

『さう爲て居らッしやる中に、お顏を洗ッていらッしやいまし。其間にお掃除をして、直にお酒にする樣に爲て置きますよ。花魁、お連れ申して下さい。はい。』と、お熊は善吉の前に楊枝箱を出した。

善吉は吉原楊枝の房を挘ッては火鉢の火にくべて居る。

「お誂は何を通しませうね。早朝んですから、何も出來ヤア爲ませんよ。柚豆腐にでも爲ませうかね。それに油卵でも。」

「何でも能いよ。湯豆腐は結構だね。」

「それで能御座んすね。ぢやア、花魁、お連れ申して下さい。」

吉里は何も云はず、ついと立ッて廊下へ出た。善吉も座敷着を被ッた儘吉里の後から室を出た。

「花魁、お手拭は。」と、お熊は吉里へ聲を掛けた。

吉里は返辭を爲ない。既や二三間彼方へ行ッて居た。

「私にお呉れ。」と、善吉は戻ッて手拭を受取ッて吉里を見ると、もう裏梯子を下りようとして居た所である。善吉は足早に吉里の後を追うて、梯子の中段で追付いたが、吉里は見返りも爲ないで下湯場の方へ屈ッた。善吉は少時待ッて居たが、吉里が急に出て來る樣子もないから、われ一人悄然として顏を洗ひに行ッた。

其處には客が二人顏を洗ッて居た。敵娼は何れも其傍に附添ひ、水を汲んで遣る、掛けて遣る、善吉の目には羨ましく見受けられた。

客の羽織の襟が折れぬのを理しながら善吉を見返ッたのは、善吉の連初會で二三度一座爲た事のある初緑と云ふ花魁である。

「おや、善さん。昨夜もお一人。餘り酷う御座んすよ。一度位は連れて來て下すッたッて好いぢやありませんか。本統に酷いよ。」

『さう云ふ譯ぢやアないんだが、彼人は今此地に居ないもんだから。』

「虚言ばッかし。能う御座んすよ。たんとお一人でお出でなさいよ。』

「困るなア如何も。」

『なに、能御座んすよ。覺えてお居でなさいよ。今日は晝間遊んでお居でなさるんでせう。』

『なに、さう云ふ譯でもない。』

「去らないでお居でなさいよ、後で遊びに行きますから。』

「東雲さんの吉さんは今日も流連すんだッてね。』と、今一人の名山と云ふ花魁が云掛けて、顏を洗ッて居る自分の客の書生風の男の肩を押へ、『お前さんも去らないで、夕方までお居でなさいよ。』

「僕か。僕は不可ん。なア君。』

『さうぢや。何れ又今晩でも出直して來るんぢや。』

「能御座んすよ、お前さんたんざア如何せ不實だから。』

「何ぢや。不實ぢや。」

「名山さん、金盥が明いたら貸してお呉れよ。」と、今客を案内して來た小式部と云ふ花魁が云ッた。

「小式部さん、之を上げよう。」と、初緑は金盥の一個を小式部が方へ押遣り、一個に水を滿々と湛へて、「さア善さん、お用ひなさい。もうお湯が些ともないから、水ですよ。』

「いや、結構。難有う。」

『今度お出でなさる時、屹度ですよ。』

善吉は嗽を爲ながら點頭く。初緑等の一群は聲高に戯れながら去ッて了ッた。

「吉里さん、吉里さん。」と、呼んだ聲が聞えた。

善吉は顏を水にしながら聲のした方を見ると、裏梯子の下の處に、吉里が小萬と話を爲て居た。善吉は少時見詰めて居た。善吉が顏を洗ひ了ッた時、小萬と吉里が二階の廊下を話しながら行くのが見えた。

（八）

桶には豆腐の煮える音がして盛んに湯氣が發ッて居る。能代の膳には、徳利が袴を穿いて、兒戯見たいな香味の皿と、木皿に散蓮華が添へ

て置いてあッて、猪口の黄金水には、櫻花の瓣が二枚散ッた書と、端に吉里と假名で書いたのが、浮いて居るかの樣に見える。

膳と斜めに、茫然箪笥に倚れて居る吉里に對ひ、旨くも無い酒と太刀打を爲て居るのは善吉である。吉里は時々伏目に善吉を見るばかりで、酌一つ爲て遣らない。お熊は何か心願の筋があるとやらにて、二三の花魁の代參を兼ね、淺草の觀世音へ朝參りに行ッて了ッた。善吉のてれ加減、僅かに溜息をつき得るのみである。

「吉里さん、如何です。一杯受けて貰ひたいものですな。斯うして飮んで居たッて――一人で飮むと云ふ奴は、どうも淋しくッて、何だか飮んでる樣な氣が爲なくッて不可いものだ。一杯受けて貰ひたいものですな。はゝはゝ。私なんざア流連を爲す玉で非いんだから、もう直にお暇とするんだが、花魁、今朝だけは器用に快く受けて下さいな。これがお別れなんだ。今日限りもうお前さんと酒を飮むことも無いんだから、器用に受けて、お前さんに酌を爲て貰やア能い。もう、それで好いんだ。他に何にも望は無いんだ。改めて獻げるから、ねえ吉里さん。器用に受けて下さい。」

善吉は注置の猪口を飮乾し、手酌で又一杯飮乾し、杯泉で能く洗ッて、『さア獻げるよ。今日限りなんだ。能いかね、器用に受けて下さい。』

吉里は猪口を受けて一口飮んで、火鉢の端に置いて、呢と善吉を見詰めた。

吉里は平田に再び會ひ難いのを知りつゝ別離たのは、死ぬよりも辛い――死んでも別離る氣は無かッたのである。けれども、西宮が實情ある言葉、平田が四苦八苦の胸の中、其情に迫られて是方なしに承知は爲た。承知は爲たけれども、心は平田と共に平田の故鄕に行く積りなのである――行ッた積りなのである。けれども、別離て見れば、一處に行ッたはずの心に直ぐ其人が戀しく懷愛しくなる。も一度逢ふ事は出來まいか。あの人車を引返させたい。逢ッて、も一度別離を告げたい。まだ云殘した事もあッた。聞殘した事もあッた。もう如何しても逢はれないのか。今夜の出發が延されないものか。延びる樣な氣がする。も一度逢ひに來て吳れる樣な氣がする。屹度逢ひに來る。いえ、逢ひには來まい。今夜是非夜汽車で出發く人が來さうな事がない。屹度來まい。汽車が出なければ好い。出ないかも知れぬ。出ない樣な氣もする。屹度出ない。私の念ばかりでも屹度出さない。それでも意地惡く出たら如何しよう。どうしても逢へないのか。逢へなけりや如何爲たら好いだらう。平田さんに別れる位なら――死んでも別れないんだ。平田さんと別れちや生きてる甲斐がない。死んでも平田さんと夫婦にならないぢや置かない。自由にならない身の上だし、自由に行かれない身の上だし、心ばかりは平田さんの傍を放れない。一處に居る積りだ。一處に行く積りだ。一處に行ッてるんだ。何樣事があッても平田さんの傍は放れない。平田さんと別れて、如何して斯うして居られるものか。體は吉原に居ても、心は岡山の平田さんの傍に居るんだ。と、同じ樣な考が胸に往來して、何時迄も果しがない。其考は平田の傍に行ッて居る筈の心が爲て居るので、今朝送出した眞際は一時に迫ッて、妄想の轉變が至極迅速であッたが、落付くに從れて、一事に就いての妄想が長く且つ深くなッて來た。

思案に沈んで居ると、種々な事が現在になッて見える。自分の樣子、自分の姿、自分の妄想が悉く現在となッて、自分の心に見える。今朝の別離の辛さに、平田の帶を押へて伏沈んで居たのも見える。わる止めせずとも東雲の室で二上り新内を唄ッたのも、今耳に聞いて居る

樣である、店に迯出した時は恰で夢の樣で、其時自分は何と思ッて居たのか。あの事もあの事も、あれも此も云ひたかッたのに、何で自分は云ふ事が出來なかッたのか。いえ、云ふ事の出來なかッたのが當然であッた。あゝ、もう彼車を止める事は出來ぬか。悲しくて耐らなくなッて、斷出して裏梯子を上ッて、座敷へ來て泣倒れた自分の姿が意氣地なささうにも、道理らしくも見える。萬一を希望して居た通り、其日の夜になッたら平田が來て、故鄕へ歸らなくとも能い樣になッたと、嬉しい事ばかりを云ふ。其を聞く嬉しさ、身も浮くばかりに思ふ傍から、何奴かが其を打消す、平田は愈よ出發したがと、信切な西宮が何時か自分と差向になッて慰めて吳れる。音信も出來ない筈の音信が來て、初から終まで自分を思ッて吳れる事が書いてあッて、必ずお前を迎へる樣にするからと、平生の平田の書振其儘の文字が一字々々讀下される樣に見えて來る。かと思ふと、自分は何時か岡山へ行ッて居て、思ッたよりも市中が繁華で、平田の家も門構の立派な家で、自分の豫て思ッて居た樣な間取で、庭もあれば二階もあり藏もある。家君さんは平田に似て、それで柔和で、何處か氣拔が爲て居る樣にも見え、自分を見て何處から來たかと云ひたさうな顏をして居て、平田から仔細を聞いて、急に喜び出して大層自分を可愛がッて吳れる。弟も妹も平田から聞いて居た年頃で、顏付格向も豫て想像して居た通りで、二人とも如何にも可愛らしい。妹の方が少し意地惡ではないかと思ッて居た事迄其儘で、此が少し氣に喰はないけれども、姉さん〳〵と慕ッて吳れて、東京風に髮を結ッて吳れろなどと云ふ所は、又中々愛くるしくも思はれる。豫て平田に寫眞を見せて貰ッて、其顏を知ッて居る死去ッたお母さんも時々顏を出す。此が又優しくして吳れて、お母さんが居たなら、お前を故鄕へ連れて行くと、何樣に可愛がッて下さるだらうと、平田の寢物語に聞いて居た通り可愛がッて吳れるかと思ふと、平田の許嫁の娘と云ふのが働いて居て、其顏は豫て仲の惡い樓內の花子と云ふ花魁其儘で、可愛らしい樣な憎らしい樣な、如何しても憎らしい女で、平田が故鄕へ歸ッたのは此娘と婚禮する爲であッた事も知れて來た。矢張さうだッた、私や欺されたのだと思ふと、悲しい中に又悲しくなッて淚が止らなくなッて來る。西宮さんが其樣虛言を云ふ人ではないと思返すと、小萬と二人で自分を種々慰めて吳れて、小萬と姉妹の約束を爲て、小萬が西宮の細君になると自分も其處に同居して、平田が故鄕の方の仕法がついて出京したら、二夫婦揃ッて隣同志家を持ッて、何時までも親類になッて、互に力になり合はうと相談も爲て居る。其も夢の樣に消えて、自分一人になると、自由にならぬ方の考ばかり起ッて來て、自分は如何しても此樓に來年の四月迄は居なければならぬか。平田さんに別れて、他に樂みもなくッて、何で四月迄此樓に眞似が爲て居られるものか。他の花魁の樣に、直ぐ後に賴りになる人が出來さうな事はなし、賴みにするのは西宮さんと小萬さんばかりだ。その小萬さんは實に羨ましい。此から始終見せられてばかり居るのか。何故平田さんが彼樣事になッたんだらう。も一度平田さんが來て吳れる樣には出來ないのか。此から每日々々可厭な思ばかりするのかと思ひながら、善吉が自分の前に酒を飲んで居る、其一擧一動が悉く眼に見えて居て、これが其人であッたならと、覺えず溜息も吐かれるのである。

吉里は悲しくもあり、情なくもあり、口惜しくもあり、果敢なくも思ふのである。詰る所は、賴りないのが第一で、如何しても平田を忘れる事が出來ないのだ。

今日限りである、今朝が別れであると云ッた善吉の言葉は、吉里の心に妙に果敢なく情なく感じて、何だか胸を壓へられる樣だ。

冷遇て〳〵冷遇抜いて居る客が直ぐ前の樓へ登ッても、他の花魁に見立替をされても、冷遇て居れば結局喜ぶべきであるのに、外聞の意地ばかりでなく、眞心修羅を焚すのは遊女の常情である。吉里も善吉を冷遇ては居た。併し、憎むべき所のない男である。善吉が吉里を慕ふ情の深かッただけ、平田と云ふ男のあッた爲に煩厭かッたのである。金に動く新造のお熊が、善吉の爲に多少吉里の意に逆ッたのは、吉里をして心よりも倍ほ強く善吉を冷遇しめたのである。何だか知らぬけれども、可厭でならなかッたのである。別離と云ふ事について、吉里が深く人生の無常を感じた今、善吉の口から其言葉の繰返されたのは、妙に胸を刺される樣な心持がした。

吉里は善吉の盃を受け、少時考へて居たが、懲て快く飲乾し、『善さん、御返杯ですよ。』と、善吉へ猪口を與へ、『お酌を爲せて戴きませうね。』と、銚子を放れて酌をした。

善吉は眼を丸くし、吉里を見詰めた儘言葉も出でず、猪口を持つ手が戰へ出した。

（九）

『善さん、も一つ頂戴爲ようぢやアありませんか。』と、吉里は態とながら莞爾笑ッた。

善吉は少時云ふ所を知らなかッた。

『吉里さん、獻げるよ、獻げるよ、私や此でもう澤山だ。もう思殘す事もないんだ。』と、善吉は猪口を出す手が戰へて、眼を合淚して居る。

『如何爲すッたんですよ。今日限りだとか、今日が別れだとか、其樣可厭な事をお云ひなさらないで、末長く來て下さいよ。ね、善さん。』

『え、何を云ッてるんだね。吉里さん、お前さん本氣で……。はゝはゝ。串戲を云ッて、私をからかッたッて……。』

『ほゝゝ。』と、吉里も淋しく笑ひ、『今日限りだなんぞッて、其樣事をお云ひなさらないで、此迄通り來てお呉んなさいよ。』

善吉は深く息を吐いて、淚をはら〳〵と零した。吉里は昵と善吉を見詰めた。

『私や今日限り來られないんだ。吉里さん、實に今日がお別れなんです。』と、善吉は猪口を一息に飲乾し、ぢッと垂頭いて下唇を噛んだ。

『其樣事をお云ひなさッて、本統なんですか。何處か遠方へでもお行でなさるんですか。』

『なアに、遠方へ行くんだか、何處へ行くんだか、私にも分らないんですがね……。』と、又ぢッと考へて居る。

『何ですよ。何故其樣心細い事をお云ひなさるんですよ。』と、吉里の聲も稍沈んで來た。

『心細いと云やア吉里さん、』と、善吉は鼻を啜ッて、『私やもう東京にも居られなければ、何處にも居られなくなッたんです。私も美濃屋善吉――富澤町で美濃善と云ッちやア、些たア人にも知られた店も有ッて居たんだが……。お熊どんは二三度來て呉れた事もあッたから知ッて居よう、三四人の奉公人も使ッて居たんだが、僅か一年過つか過たない内に――花魁の處に來初めてから丁度一年位になるだらうね――店は失くなすし、家は他人の物になッて了ふし、はゝはゝ、私や宿無になッ了ッたんだ。』

『えッ。』と、吉里は吃驚したが、『ほゝほゝ、戲言お云ひなさんな。其樣事があるもんですか。』

『戲言だ。私も戲言に爲たいんだ。』

善吉の樣子に戲言らしい所はなく、眼には淚を一杯もッて、膝を攫んだ拳は顫へて居る。

『善さん、本統なんですか。』

『私が意氣地なしだから……。』と、善吉は其上

を云ひ得ないで、頬が顫へて、上脣も何ほ顫へて居た。
　冷遇ながら産を破らせ家をも失はしめたかと思ふと、吉里は空恐ろしくなツて、全身の血が冷渡ッた樣で、而も動悸のみ高くして居る。
『お神さんは如何爲すッたんです。』と、稍あッて問ねた吉里の聲も顫へた。
「嚊かね。」と、善吉は少時默して、「宿無になッちやア、夫婦揃ッて乞食にもなれないから、生家へ歸して了ッたんだがね‥‥。はゝはゝ。」と、善吉は笑ひながら涙を拭いた。
「まアお可哀想に。」と、吉里も垂頭いて歎息する。
「だがね、吉里さん、私やもう此で好いんだ。お前さんと斯うして――今朝斯うして酌を爲て貰ッて、快い心持に醉ッて歸りや、もう未練は殘らない。昨夜の樣子ぢや、顏も見せちやア貰へまいと思ッて、お前さんに目付ッたら怒られたかも知れないが、餘所ながらでも、せめては顏だけでもと思ッて、小萬さんの座敷も覗きに行ッた。平田さんとか云ふ人を送出しにお出での時も、私や覗いて居たんだ。もう今日限り來られないのだから、お前さんの優しい言葉の一語も‥‥。今朝斯うしてお前さんと酒を飲む事が出來ようとは思はなかッたんだから‥‥。吉里さん、私や今朝の樣に嬉しい事は無い。私や花魁買と云ふ事を知ッたのは、お前さん處が初めてなんだ。私は他の樓の味は知らない。遊び納も亦お前さんの處なんだ。其間には種々な事を考へた事もあッた、種々な事を思ッた事もあッたが、もう今――明日は如何なるんだか自分の身の置場にも迷ッてる今になッて、今朝になッて‥‥。吉里さん、私や何とも云へない心持になッて來た。」と、善吉は話す中に斷えず涙を拭いて、打出した心には何の見得も無いらしかッた。
　吉里は平田と善吉の事が、別々に考へられたり、混和ッて考へられたりする。もう平田に會へないと考へると心細さは一入である。平田が據ない事情とは云ひながら、何とか自分を爲て吳れる氣があッたら、何とか爲て吳れる事が出來たりさうなものとも考へる傍から、善吉の今の境界が、いかにも哀れに氣の毒に考へられる。其も自分故であると、善吉の眞情が恐ろしい程身に染む傍から、平田が戀しくて〳〵耐らなくなッて來る。善吉も今日限り來ないものであると聞いては、此ほど實情のある人を、何で彼樣に冷遇くしたら、實に惡い事を爲たと、大罪を犯した樣な氣がする。善吉の女房の可哀想なのが身につまされて、平田に捨てられた自分の果敢なさも亦一入になッて來る。其で、耐らなく平田が戀しくなッて、善吉が氣の毒になッて、心細くなッて、自分が果敢なまれて沈んで行く樣に頭が森となつて、耳には善吉の言葉が一々能く聞え、善吉の泣いて居るのも能く見え、耐らなく悲しくなッて來て、終に泣出さずには居られなかッた。
　顏に袖を當てゝ泣く吉里を見て居る善吉は夢現の界も辨らなくなり、茫然として涙は却ッて出なくなッた。
『善さん、勘忍して下さいよ。實に濟みませんでした。』と、吉里は漸く顏を上げて、涙の目に善吉を見詰めた。
　善吉は吉里から此語を聞からとは思掛けぬので、返辭も爲得ないで、たゞ見詰めて居るのみである。
『それでね、善さん、お前さん如何爲さるんですよ。』と、吉里は氣遣はしげに問ねた。
「如何ッて。私や如何とも未だ決心て居ないんです。横濱の親類へ行ッて世話になッて、何樣に身を落しても、も一度美濃善の暖簾を揚げたいと思ッてるんだが、親類と云ッたッて、

世話して呉れるものか、呉れないものか、其も不明いのだから、横濱へ進んで行く氣も爲ないんで……。』と、善吉は少時考へ、『如何なるんだか、自分ながら不明いんだから……。』と、青い顔をして、ぶるッと戰慄へて、吉里に酒を注いで貰ひ、續けて三杯まで飲んだ。

吉里はぢッと考へて居る。

『吉里さん、頼みがあるんですが。』と、善吉は懷裡の紙入を火鉢の縁に置き、『お前さんに笑はれるかも知れないが、私やね、何だか去るのが否になツたから、今日は夕刻まで遊ばせて置いて下さいな。紙入に五圓ばかり入ツて居る。其が私の今の身上殘らずなんだ。昨夜の勘定を濟して、今日一日遊ばれるか知ら。遊ばれるだけにして、どうか置いて下さい。一文も殘らないでも能い。今晩何處かへ泊るのに、三十錢か四十錢も殘れば結構だが……。何、殘らないでも好い。ねえ、吉里さん、さうしといて下さいな。』と、善吉は顏を少し赧めながら而も思入ッた體である。

『能御座んすよ。』と、吉里は輕く受けて、『遊んで居て下さいよ。勘定なんか心配しないで、今晩も遊んで居て下さいよ。これは能御座んすよ。』と、善吉の紙入を押戻した。

『それは不可い。それは不可い。どうか預ッて置いて下さい。』

吉里はぢッと善吉を見て居る。其眼は物を云ふかの如く見えた。善吉は紙入に手を掛けながら、自分でも解らない樣な氣がして居る。

『善さん、私に委せてお置きなさい、惡い樣にや爲ませんよ。能御座んすからね、其お金はお前さんの小遣に爲てお置きなさい。多寡が私なんぞの事ですから、お前さんの相談相手にはなれますまいが、出來るだけの事は屹度爲ますよ。能御座んすか。氣を落さない樣に爲て下さいよ。またお前さんの小遣位は、如何にでもなりますからね、氣を落さない樣に、能御座んすか。』

善吉は何で吉里が此樣事を云ッて呉れるのか解らぬ。解らぬながら嬉しくて耐らぬ。嬉しい中に危まれる樣な氣がして、虛情か實情か虛實の界に迷ひながら吉里の顏を見ると、如何見ても以前の吉里に見えぬ。眼の中に實情が見える樣で、如何しても虛情とは思はれぬ。小遣にせよと云はれた其紙入を握ッて居る自分の手は、虛情でない證據を攫んで居るのだ。如何して此樣事になツたのか。と、解らないながらに嬉しくて耐らず、何時か明日の我身も忘れて了ッて居た。

『善さん、私もね、本統に頼りがないんですから。』と、吉里ははら／＼と涙を零して、『此から頼りになツてお呉んなさいよ。』と、善吉を見詰めた時、平田の事が種々な方から電光の如く心に閃いた。吉里は全身がぶるッと顫へて、自分にも解らない樣な氣がした。

善吉は唯夢の中を辿ッて居る。たゞ吉里の顏を見詰めて居るのみであッたが、軈て涙は頰を流れて、それを拭く心もつかないで居た。

『吉里さん。』と、廊下から聲を掛けたのは小萬である。

『小萬さん、まアお入りな。』

『何人かお居でなさるんぢやアないかね。』と、小萬は障子を開けて、『おや、善さん。お樂みですね。』

小萬の言葉は吉里にも善吉にも意味あるらしく聞えた。其は迎へて意味あるものとして聞いたので、吉里は何も云ひたくない樣な心持がした。善吉は云ふ術を失ッて默ッて居た。

二人とも返辭を爲ないのを、小萬も妙に感じたので、此も無言。三人とも何となくきまりが惡く、白け渡ッた。

『小萬さん、小萬さん。』と、遠くから呼んだ者

がある。
見ると向廊下の東雲の室の障子が開いて居て、中から手招する者がある。それは東雲の客の吉さんと云ふので、小萬も一座があッて、戯言をも云合ふ程の知合である。
『吉里さん、後刻に遊びにお出でよ。』と、小萬は云捨てゝ障子をしめて、東雲の座敷へ急いで行ッて了ッた。
其日の夜になッても善吉は歸らなかッた。夜の十一時頃に西宮が來た。吉里は小萬の室へ行き、平田が今夜の八時卅分の汽車で出發した事を聞いて、また西宮が持餘すほど泣いた。西宮が自分一人面白さうに遊んでも居られないと、止めるのを振切ッて、一時頃歸ッた時まで傍に居て、愚癡の限りを盡した。
善吉は次の日も流連をした。其次の日も去らず、四日目の朝漸く去ッた。それは吉里が止めて置いたので、平田が別離に殘して置いた拾圓の金は、善吉の爲に殘りなく費盡し、加上一二枚の衣服までお熊の目を忍んで典けたのであッた。
それから後、多くは吉里が呼んで、三日にあげず善吉は來て居た。十二月の十日頃までは來たが、其後は登樓ることがなくなり、時々耄碌頭巾を冠ッて忍んで店まで逢ひに來る樣になッた。田甫に向いて居る吉里の室の窓の下に、鐵漿溝を隔てゝ善吉が立ッて居るのを見掛けた者もあッた。

（十）

午時過ぎて二三時、昨夜の垢を流淨して、今夜の玉と磨くべき湯の時刻にもなッた。
おの〳〵思々のあかい、い道具を持參して、早や流しには三五人の裸美人が陣取ッて居た。
浮世風呂に浮世の垢を流し合ふ樣に、別世界は別世界相應の話柄の種も盡きぬものか、朋輩の惡評が手始めで、内所の後評、廓内の評判、檢査場で見た他樓の花魁の美醜、檢査醫の男振まで評し盡して、後連とさし代れば、さし代ッたなりに同じ話柄の種類の異ッたのが、後からも後からも出て來て、未來永劫盡きる期がないらしく見えた。
「愈よ明日が煤拂だッてね。お正月と云ッたッて、もう十日ツきやアないのに、如何したら好いんだか、本統に困ッちまふよ。」
「如何せ、もう爲樣がありやアしないよ。賴まれる樣な客は來て吳れないしさ、如何なるものかね。其時や其時で、如何か斯うか追付けとくのさ。」
「追付けられりや、誰だッて追付けたいのさ、私なんざ其が出來ないんだから、實に苦勞で爲樣がないよ。お正月なんざ、本統に來なくッても好いもんだね。」
『千鳥さんは其樣事を云ッたッて、蠣殼町の彼人が如何でも爲てお吳れだから、何も心配しなくッても好いぢやアないかね。』
「どうして〳〵。其樣譯に行くものかね。大風呂敷ばッかし擴げて居て、眞逆の時になると、何時でも逃出して二月位寄付きもしないよ。彼樣奴アありやしないよ。』
『私なんか、三ケ日の中にお客の的が未だ一人も無いんだもの、本統にくさ〳〵しッちまふよ。』
「二日の日だけでも好いんだけれど、三日で無くッちやア來られないと云ふしさ。其も未だ本統に極らないんだよ。」
『小萬さんは三日とも西宮さんで、七草も西宮さんで、十五日もさうだッさ。彼樣お客が一人ありやア客の心配も入りやア爲ないし、小萬さんは實に羨ましいよ。」
「西宮さんと云やア、彼人と能く一處に來た平田さんは、好男子だッたッけね。」

『名山さん、お前岡惚してお居でだッたね。』
『虚言ばッかし。ありや初緑さんだよ。』
『吉里さんは死ぬ程惚れて居たんだね。』
『さうだらうさ。あの善さんたア比較物にもなりやしないもの。』
『どうして善さんを吉里さんは情夫に爲たんだらうね。最初は、氣の毒になるほど冷遇ッてたぢやアないかね。』
『其が好くなッたんだらうさ。』
『吉里さんは浮氣だもの。』
『だッて、浮氣で惚れられる樣な善さんでもないよ。』
『其樣事は如何でも能いけれども、吉里さんの樣な人はないよ。今晩返すからとお云ひだから、先月の、さうさ、廿七日の日にお金を二圓貸したんだよ。いまだに返金さないんだもの。彼樣義理を知らない人ッちやアありやア爲ないよ。』
『千鳥さん、お前もお貸しかい。私もね、白縮緬の帶とね、お金を五拾錢借りられて、矢張其ッ限りさ。帶がないから、店を張るのに、何樣に外見が惡いだらう。返す〳〵ッて、もう十五日からになるよ。』
『名山さん、私のなんかも酷いぢやアないかね。お客から預ッて居た指環を借りられたんだよ。明日の朝までとお云ひだから貸して遣ッたら、其ッきり返さないのさ。お客からは責められるし、吉里さんは返して呉れないし、私や此樣に困ッた事はないよ。今朝催促したら、明日迄待ッて呉れろッてお云ひだから、待ッて遣る事は待ッて遣ッたけれども、吉里さんの事だから怪しいもんさ。』
『二階の花魁で、借りられない者はあるまいよ。三階で五人、階下にも三人あるよ。先日出勤した八千代さんから迄借りてるんだもの。彼樣子供の樣な者まで欺すとは、餘りぢやアないかね。』
『だから、段々交際人がなくなるんさ。平田さんが來る時分には、彼樣に仲能くして居た小萬さんでさへ、もう疾うから交際はないんだよ。』
『彼樣義理を知らない人と、誰が交際ふものかね。私なんか今怒ッちやア損だから、我慢して口を利いてるんさ。もう直お正月だのに、何時返して呉れるんだらう。』
『本統だね。明日指環を返さなきや、承知しやアしない。』
『煤拂の時、衆人の前で面の皮を引剝いてお遣りよ。』
『其位な事をしたッて平氣だらうよ。彼樣義理知らずはありやアしないよ。』

名山が不圖廊下の足音を見返ると、吉里が今便所から出て湯殿の前を通る處であッた。しッと云ッた名山の聲に、一同廊下を見返り、吉里の姿を見ると、流石に氣の毒になッて、顏を見合せて言葉を發する者もなかッた。

* * * *

吉里は用事をつけて此十日ばかり店を退いて居るのである。病氣ではないが、頰に瘦が見えるのに、化粧を爲ないので、顏の生地は荒れ色は蒼白めて居る。髮も櫛卷にして巾も掛けずに居る。年も二歲ばかり急に老けた樣に見える。

火鉢の縁に臂をもたせて、兩手で頭を押へて垂頭いて居る吉里の前に、新造のお熊が烟管を杖にしてじろ〳〵と見て居る。

行燈は前の障子が開けてあり、丁字を結んで油煙が黑く發ッて居る。蓋を開けた硯箱の傍には、端を引裂いた半切が轉がり、手箪笥の抽匣を二段斜めに重ねて、唐紙の隅の處へ押付けてある。

お熊が何か云はうとした矢先、階下でお熊を呼ぶ聲が聞えた。お熊は返辭をして立たうとして、また鳥渡蹲踞んだ。

―ねえ、能御座んすか。今晩からでも店にお出なさいよ。店にさへお居なさりや、御内所のお神さんもお前さんを贔屓にしてお居でなさるんだから、又何とでも談話がつくぢやアありませんか。ね、能御座んすか。あれ、又呼んでるよ。能御座んすか、花魁。もう今ぢや來なさらないけれども、善さんなんぞも當分呼ばない事にして、ねえ花魁、能御座んすか。鳥渡行ッて來ますからね、能く考へて置いて下さいよ。今行くてえのにね、五月蠅く呼ぶぢやないか。能御座んすか、花魁。』

お熊は廊下へ出ると其儘階下へ駈出して行ッた。

吉里はぢッと考へて、幾度となく溜息を吐いた。

『もう可厭な事た。此上苦勞したッて――此上苦勞するがものアありやしない。私や本統に濟まないねえ。西宮さんにも濟まない。小萬さんにも濟まない。あゝ。』

吉里は歎息しながら、袂から皺になッた手紙を出した。手紙とは云ひながら五六行の走り書で、末にかしくの止めも見えぬ。幾度か讀返す中に、眼が一杯の涙になッた。終に思切ッた樣子で、宛名は書かず、自分の本名のお里のさ、印とのみ筆を加へ、結文にして又袂へ入れた。それで又少時考へて居た。

廊下の方に耳を澄しながら、吉里は手箪笥の抽匣を行燈の前へ持出し、上の抽匣の底を探ッて、薄い紙包を取出した。中には平田の寫眞が入ッて居た。重ね合せてあッたのは吉里の寫眞である。

呪と見詰めて居る中に、平田の寫眞の上にはらはらと涙が落ちた。忙てゝ紙で押へて涙を拭取り、自分の寫眞と列べて見て、又泣いた上で元の樣に紙に包んで傍に置いた。

今一箇の抽匣から取出したのは、一束づつ捻紙で絡げた二束の文である。此は悉く平田から來たのばかりである、捻紙を解いて調べ始めて、其中から四五本選出して、涙ながら讀んで涙ながら卷納めた。中には二度も三度も讀返した文もあッた。涙が赤い色のものであッたら、無數の朱點が打たれたらしく見えた。

此間も吉里は絶えず耳を澄して居たのである。今何を聞付けたか、つと立上つた。廊下の障子を開けて左右を見廻し、障子を閉めて上の間の窓の傍に立止ッて、又耳を澄した。

上野の汽笛が遠くへ消えて了ッた時、口笛にしても低い程の口笛が、調子を取ッて三聲ばかり聞えると、吉里は密と窓を開けて、次の間を見返ッた。手は何時か袂から結文を出して居た。

（十一）

午前の三時から始めた煤拂は、夜の明けない中に内所を了ひ、客の歸る頃から娼妓の部屋部屋を拂き始めて、午前の十一時には名代部屋を合せて百幾箇の室に蜘蛛の網一線剩さず、廊下に雜巾まで掛けて了ッた。

出入の鳶の頭を始め諸商人、女髪結、使屋の老物まで、目錄の外に内所から酒肴を與へて、此日一日は無禮講、見世から三階まで割れる樣な賑ひである。

娼妓も亦氣の隔けない馴染の外は客を斷り、思々に酒宴を開く。お職女郎の室は無論であるが、顏の古い幅の利く女郎の室には、四五人づつ仲の能い同志が集ッて、下戸上戸飲んだり食ッたりして居る。

小萬はお職ではあり、顏も古ければ幅も利く。内所の遺物に持寄りの臺の數々、十疊の上の間から六疊の次の間まで殆んど一杯になッて居た。

鳶の頭と店の者とが八九人、今祝めて出て行

ツたばかりの處で、小萬を始め此糸初紫初緑名山千鳥など何れも七八分の醉を催し、新造のお梅まで人と汁粉とに醉ッて、頬から耳朶を眞赤に爲て居た。

次の間に居たお梅が、『あれ危い。吉里さんの花魁、危う御座んすよ。』と、頓興な聲を上げたので、一同其方を見返ると、吉里が足元も定らない迄醉ッて入ッて來た。

吉里は髪を櫛卷にし、お熊の半天を被ッて・赤味走ッたがす絲織に繻子の半襟を掛けた綿入に、緋の唐縮緬の新らしからぬ長襦袢を重ね、山の入ッた紺博多の男帯を卷いて居た。鳥渡見た處は、もう五六歳も老けて居たら、花魁の古手の新造落と云ふ風俗である。

呆れ顔をして兇と見て居た小萬の前に、吉里は倒れる樣に坐ッた。

吉里は蒼い顔をして、其癖目を坐ゑて、莞爾と小萬へ笑掛けた。

『小萬さん。私やね、大變御無沙汰しッちまッて、濟まない、濟まない、ほんーとうに濟まないんだねえ。濟まないんだよ、濟まないんだよ、知ッてゝ濟まないんだからね。小萬さん、先日ッからさう思ッてたんだがね、もう好い、もう好い、其樣事を云ッたツて、ねえ小萬さん、お前さんに笑はれるばかしなんだよ。笑ふ奴ア笑ふが可い。いくらでもお笑ひ。さアお笑ひ。笑ッてお吳れ。誰が笑ッたッて、笑ッたッて能い。笑ッたッて可いよ。察してお吳れのは、小萬さんばかりだわね。察してお居でだらう。察してお居でだとも。本統に察しが能いんだもの。ほゝほゝゝ。おや、名山さん。千鳥さんもお居でだね。初緑さん。初紫さん。此糸さんや、お吳れな其盃を。私やお酒が旨くッて、旨くッて、旨くッて、本統に旨いの。早くお吳れよ。早く、早く、早くさ。』

吉里はにや〳〵笑ッて居て、其で笑ひきれない樣で、目を坐ゑて、體をふら〳〵させて、口から涎を滴らしさうにして、手の甲で度々口を拭いて居る。

『此糸さん、早くお吳れッたらよ。盃の一つや半分、私に吳れたッて、何でもありやア爲ないからよ。』

『吉里さん。』と、小萬は呼掛け、『お前さんは大層お酒が上ッた樣だね。』

『上ッたか、下ッたか、何だか、些とも、知らないけれども、平右衛門の臺辭ぢやアないが、酒でも些と進らずば……。ほゝ、ほゝ、ほゝゝほゝゝゝ。』

『飲めるのなら、いくらだッて飲んでお吳れよ。久振で來てお吳れだッたんだから、本統に飲んでお吳れ、身體にさへ觸らなきや。さア私がお酌をするよ。』

吉里は垂頭いて、少時は何とも云はなかッた。

『小萬さん、私や忘れやア爲ないよ。』と、吉里は染々と云ッた。『平田さん……。ね、あの平田さんさ。平田さんが明日故郷へ行くッて、其前の晩に兄、に、に、西宮さんが平田さんを連れて來て下さッた事が……。小萬さん、能く私に覺えて居られるぢやアないかね。忘れられたいだけが不思議たもんさね。丁度此座敷だッたよ、お前さんの此座敷だッたよ。此座敷さ、彼時や。私が癇癪を起して、湯呑で酒を飲まうとしたら、毒になるから、毒になるからと云ッて、お前さんが止めてお吳れだッたッけねえ。私や忘れやア爲ないよ。』と、聲は沈んで、頭は漸次下ッて來た。

『彼時のお酒が、何故毒にならなかッたのかねえ。』と、吉里の聲は愈よ沈んで來たが、俄然に可笑さうに笑ひ出した。『ほゝ、ほゝゝゝゝ。お酒が毒になッて、お溜小法師があるもんか。ねえ此糸さん。ぢやア小萬さん、久振でお前さん

のお酌で……。』
吉里は小萬に酌をさせて、一息に呑む事は飲んだが、酒が口一杯になッたのを、耐忍して辛と飲込んだ。
『ねえ、小萬さん。彼時のお酒が毒になるなら、此お酒だッて毒になるかも知れないよ。なアに、毒になるなら毒になるが能いんさ。死んぢまやア其ツ切ぢやアないか。名山さんと千鳥さんが彼樣可厭な顏を爲てお居でだよ。大丈夫だよ、安心してえてお吳んなさいましだ。死んで花實が咲こかいな、苦しむも戀だツて。本統に旨い事を云ツたもんさね。だもの、誰がすき好んで、死ぬ馬鹿があるもんかね。名山さん、千鳥さん、お前さんなんぞに借りてる物なんか、ふんで死ぬ樣な吉里ぢやアないからね、安心してえてお吳んなさいよ。死ねば頓死さ。さうたりや香奠になるんだね。ほゝほゝゝ。香奠なら生きてる中の事さ。此糸さん、初紫さん、香奠なら今の中にお吳んなさいよ。ほゝ、ほゝゝ。』
『あ、忘れて居たよ。東雲さん處へ鳥渡行くんだッけ。』と。初緑が座を立ちながら、『吉里さん、お先きに。花魁、また後で來ますよ。』と、早くも小萬の室を出た。此糸も立ち、初紫も立ち、千鳥も名山も出て行ッて、終に小萬と吉里と二人になッた。次の間にはお梅が火鉢に炭を加いで居る。
『小萬さん、西宮さんは今日はお出でなさらないの。』と、吉里の調子は急かに變ッて、仔細があるらしく問掛けた。
『あゝ、來ないんだよ、二三日脫されない用があるんだとか云ッて居たんだからね。明後日あたりでなくッちやア、來ないんだらうと思ふよ。先日お前さんの事をね、久しく逢はないが、吉里さんは如何してお居でだッて。彼人も苦勞性だから、矢張氣になると見えるよ。』
『さう。西宮さんには私や實に顏が合はされないよ。だがね、今日は急に西宮さんに逢ひたくなッてね……。二三日お出でなさらないんぢやア……。今度お出でなさッたらね、私が斯う云ッてたッて、後生だから話して置いてお吳んなさいよ。』
『あゝ、今度來なすッたら、知らせて上げるから、遊びにお出でよ。』
吉里は少時考へて居た。そして、手酌で二三杯飲んで、また少時考へて居た。
『小萬さん、平田さんの音信は、西宮さんへも無いんだらうかね。』と、吉里の聲は存外平氣らしく聞えた。
『あゝ、彼時きり手紙一本來ないさうだよ。西宮さんが出した手紙の返事も來ないさうだよ。だがね、人の行末と云ふものは、實に豫知らないものだねえ。』と、小萬が呢と吉里を見詰めた眼には、少しは冷笑を含んで居る樣であッた。
『まア其樣もんさねえ。』と、吉里は輕く受け、『小萬さん、私やお前さんに賴みたい事があるんだよ。』
『賴みたい事ッて。』
吉里は懷中から手紙を十四五本包んだ紙包を取出し、それを小萬の前に置いた。
『此手紙なんだがね。平田さんから私ん處へ來た手紙の中で、反故にしちや、餘り義理が惡いと思ふのだけ、昨夜調べて別にして置いたんだよ。もう仕舞ッて置いたッて仕樣が無いし、殘しときや手拭紙にでもするんだが、それも餘り義理が惡い樣だし、お前さんに預けて置くから、西宮さんに賴んで、序の時平田さんへ届けて貰ッてお吳んなさいよ。ねえ小萬さん、お賴み申しますよ。』
小萬は顏色を變へ、『吉里さん、お前さん本氣でお云ひなのかえ。』
『西宮さんへ話して、平田さんへ届ける樣にし

てお吳んなさいよ。』と、吉里は同じ事を繰返した。

『吉里さん、如何して其樣氣になッたんだよ。其樣に薄情な人とは、私や今まで知らなかッたよ。眞逆に手拭紙にもされたいからとは、餘り薄情過ぎるぢやないかね。平田さんを其樣に忘れてお仕舞ひでは、餘り義理が惡からうよ。』

『だッて、もう逢へないと定ッてる人の事を思ッたッて……。』と、吉里は垂頭いた。

『私や實に呆れたよ。此樣稼業をしてるんだから、其時までも――一生其人に情を立ッて、一人で居る事は出來ないけれども、平田さんを善さんと一處にお爲では、お前さん濟むまいよ。善さんが何樣に可愛いか知らないが、平田さんを忘れちや、餘り薄情だね。』

『私や善さんが可愛いんさ。平田さんより何程可愛いか知れないんだよ。平田さんの事を…、まア左程にも思はないのは、私や餘程薄情なんだらうさ。』と、吉里は垂頭いてぢッと襟を嚙んだ。

『本統に呆れた人だよ。能いとも、お前さんの勝手にお爲。お前さんが善さんと今の樣におなりのも、決して惡いとは思ッて居なかッたんだが、今日と云ふ今日、薄情な事を知ッたから、もうお前さんとは口も利かないよ。さア、早く歸ッてお吳れ。本統に呆れた人だよ。』

吉里は悄然として立上ッた。

『此度平田さんへ屆けてお吳んなさいよ。』

小萬は返辭を爲なかッた。

次の間へ出た吉里は又立戾ッて、『小萬さん、賴みますよ。西宮さんへも宜しくねえ。』

小萬は又返辭を爲なかッた。

吉里はお梅を見て、『お梅どん、平田さんの時分には種々お世話になッたッけね。西宮さんがお出でなさッたら、吉里が宜敷申しましたと云ッてお吳れよ。お梅どん、賴みますよ。』

お梅は垂頭いて、これも返辭を爲なかッた。

吉里は上の間の小萬を睨と見て、軈て室を出て行ッたかと思ふと、隣の尾車と云ふ花魁の座敷の前で、大きな聲で大口を利くのが、いかにも大醉して居るらしく聞えた。

其日も暮れて見世を張る時刻になッた。小萬は既に補襠を着、鏡臺へ對ッて身繕ひして居る處へ、お梅が周章しく駈けて來て、

『花魁、大變ですよ。吉里さんがお居でなさらないんですッて。』

『えッ、吉里さんが。』

『御内所ぢや大騷ぎですよ。裏の撥橋が下りてて、裏口が開けてあッたんですッて。』

『え、さうかねえ、まア。』

小萬は驚きながらふッと氣が付き、先刻吉里が置いて行ッた手紙の紙包を、未だ仕舞はず床の間に上げて置いたのを、包を開け捻紙を解いて見ると、手紙と手紙との間から紙に包んだ寫眞が出た。其包紙に字が書いてあッた。もしやと披げて讀下して、小萬は驚いて蒼白になッた。

一筆書殘しまゐらせ候。無據覺悟を極め申候。不便と御推もじ願上まゐらせ候。平田さんに濟み不申候。お前さまにも濟みませぬ。されど私事誠の心は寫眞にて御推もじ被下度暮々もねんじ上げまゐらせ候。平田さんにも西宮さんにも今一度御目に掛りたく、これのみ心殘りにおはし候。何方さまへも、お前さまより宜敷御傳へ被下度候。取急ぎ何も〳〵申殘しまゐらせ候。

おまん樣

人々

さとより

寫眞を見ると、平田と吉里のを表と表と合

せて、裏には心と云ふ字を大きく書き、捻紙にて十文字に絡げてあッた。

小萬は涙ながら寫眞と遺書とを持ッたまゝ、同じ二階の吉里の室へ走ッて行ッて見たが、素より吉里の居らう筈がなく、お熊を始め書記の男と他に二人ばかりで騒いで居た。

小萬は上の間へ行ッて窓から覗いたが、太郎稲荷、入谷金杉あたりの人家の燈火が散見き、遠く上野の電氣燈が鬼火の樣に見えて居るばかりだ。

次の日の午時頃、淺草警察署の手で、今戸の橋場寄りの或露路の中に、吉里が着て行ッたお熊の半天が脱捨てゝあり、同じ露路の隅田河の岸には、娼妓の用ゐる上草履と男物の麻裏草履とが脱捨てゝあッた事が知れた。

けれども、死骸は容易く見當らなかッた。翌年の一月末、永代橋の上流に女の死骸が流着いたとある新聞紙の記事に、お熊が念の爲に見定めに行くと、顏は腐爛ッて其ぞとは決められないが、着物は正しく吉里が着て出た物に相違なかッた。お熊は泣く〳〵箕輪の無縁寺に葬り、小萬はお梅を遣っては、七日々々の香華を手向けさせた。

（明治二十九年八月）

雨

（一）

今日で十日ばかりと云ふもの、一時間とは靑空を仰いだ事がない霖雨に、たべての人氣を腐らす中にも、其日々々に朝夕の料を稼がねばならぬ細民の難澁は、實に眼も當てられぬ有樣、此上一週間も此雨霽れずんば、先づ米屋を手初として、酒屋質屋などの打壞が初まるであらうと、穩かならぬ噂さへ立つて、引立つは米の價ばかり、十五圓を割るは今の間と蠣殼町の繁昌に引替へ、此地芝濱松町の南の端、はや新網と町の名を呼ばるゝ邊は、敷居羽目の斧苔と齊しく、人に人の色なく、ひツそりとして野良犬一匹通らず、血の通へる物とては住んで居さうにも見えぬ。

一昨日の午後ちらと日光を見たばかりで、昨日も今日も能くも倦きもせずに降る雨かなと吐息つく〴〵と歎たぬ者もないのである。

東京の貧民窟と呼ばるゝは、北の下谷の山伏町豐住町、南では此處と名に著き芝の新網——其新網を町の名に呼ばれながらも、これは尙ほ其入口を大通に控へた三軒立の長屋がある。其長屋の南の端、左は横町に沿うた角の家には、三月ばかり前に轉住して來た年の若い夫婦者が住んで居るので、其女房の美貌が仇になつて、一時はあらぬ噂さへ立てられたのであつた。

午後の二時頃、尙ほ止まず降りしきる雨の中を、直ぐ傍の横町——これより內は別世界とさるゝ貧民窟——から年輩十五六の小娘が出て來て、角の家の前に步を止めた。三處ばかりばらり引裂けた古蛇目傘を半開にして、肩まで藏れるばかり深く翳し、形も消果てた中形の浴衣に、帶と云ふも名ばかり、男物と女物との古下駄を片足づつ、跛では無いかと思はるゝ步調で步いて來て、件の家の前に佇立んで、少時考へて居た。

『姉さん、御在でなさるの。』

「志米ちやんかい。』家內からは斯う問返して、三尺の半窓を開いて顏を出したのは丸髷の愛くるしい、色のくツきり白い、年輩十八九の女である。

娘は傘の裂目から女を見上げて、『兄さんもお在でなさるの。』

「いゝえ、一人で淋しかつた處だわ。早くお入りよ。』と、娘を見下した眉を顰めて、『まア裾が代なしよ。早くお入りよ。能く降る雨ではないかね。もう愚癡も云ひ倦きツ了つたよ。』と、はたと障子を閉した。娘は軒下に入つて、傘を疊みながら、怨めしさうに空を眺めた。白いとよりは蒼き迄顏の色は變れながらも、眼も口も十人並、中高で髮の毛が房々して居るだけに、一入立上つて見られるのでもあらうか、貧民窟に珍らしい容色と、此も此邊の評判ものに成つて居るのである。

娘は自分の足の泥に汚れたのに眉を皺せて、「溜らないわ。』と、怨めしさうに呟きながら、徐かに格子戶を開けた。途端に內からも前の女が障子を開けて、娘に雜巾を與へて、「氣味が惡さうね。』

『宛然溝の中を步く樣なのよ。』と、娘は雜巾で足の汚を拭かうとしたが、まだ卸立てらしいのに氣を兼ねたのか、「これで可くツて。』

「あゝ、可いとも。』と、女は娘が脚を拭くの

を見下して居る。
　成程彼此と評判もされた筈である。角通の小紋の浴衣の何だ左まで古からぬのに、赤萬筋の九齋の襷犬を、無造作かに引掛け、南京繻子と御納戸地に白く七草を抜いた中形メレンスとの晝夜帯、鬢の毛一筋亂れて居らぬ。姿さへ斯うきりゝと締つて見えるのに、色は抜けるほど白く、濃き眉、黒目勝の重縁眼が顔の全體を明るく見せて、口尻きと上つて、利かぬ氣らしい中に、愛嬌もあるのである。
　娘は僅かに脚を拭き了つて、『代なしに爲ツ了つてよ。今洗つてよ。』
『何だねえ。』と、女は娘の手から雑巾を引奪つて、莞爾しながら、『志米ちやんは何故其様に遠慮深いんだらう。』
『だツて。』と、お志米も莞爾して、『餘り濟まないもの。』
『ほゝほ。それがお前さんの十八番だよ。其處の障子を閉めて、此方へお入りよ。』
　女は座敷にも茶の間にも唯一室の六疊に入つた。
『今日も亦本統に寒いわね。』と、娘は六疊に入るより長火鉢に手を翳して、室の内を見廻した。『お八重姉さん宅へ來ると、此だから本統に快い心地だわ。』
『何うしてなの。』と、臺所との隔の障子を細目に開けてぽんと雑巾を投込んで、はたと閉しながらお志米を見返つたお八重は、『何うして私ん處が快い心地なんだらう。』
『何うしてツて。』と、お志米は又室の内を見廻しながら、『廣くツて綺麗で。』
『ほゝほゝゝ。本統に廣いわねえ、へん唯た六疊一室ぢやないか。上口の二疊なんか、無くツたツて同一よ。』
『だツて、私の宅なんか。』と、お志米は額を皺めて、『三疊一間限りだのに、七人なんだから、辛と坐れるばかしなのよ。加之に汚穢くツて、人が住んでる樣ではないわ、姉さん宅は本統に綺麗ね。』
『綺麗な事があるもんかね。道具と云つたツて、箪笥が一棹あらうではなしさ。この火鉢とその鼠不入と、押入に葛籠が一つあるばかしなんだから、情無いぢやないかね。』と、お八重は氣味惡さうに疊を押へて見せて、『疊ツて云やア此通りじめ〳〵するしさ、熟く可厭に成ツ了つてよ。』
『だツて、疊は雨の所爲だわ。』と、お志米は斯う云ひ掛けたが、何うしたのか悲しさうな顔を爲て、一寸横を向いた。
　雨は大粒に成つたのか、板葺の屋根にばらばらと、音が高くなつた。
　お八重は徒らに裏手の障子を見返つて、『また降が強くなつたんだよ。何と云ふ人泣かせな雨だらう。』
『本統だわねえ。』と、お志米は一入悄然として、『私も此雨の所爲でね。』と、聲が潤んだと思ふと口が利けなくなつた樣子で、垂頭いた睫にほろりと溢れた涙が、玉を結ぶ間もなく浴衣に消込んで了つた。
　お八重は氣遣はしさうにお志米の顔を差覗いて、『志米ちやん、何うお爲なの。雨の所爲で……雨の所爲で何うお爲なの。』
『私はね、明日ツから、もう遊びにも來られなくなつてよ。』と、左なきだに形も分らず色褪せた浴衣の袖に、止度たく溢るゝ涙を押へた。
『明日ツから遊びに來られないツて……え、何うして。』と、お八重は膝を進めて、『志米ちやん、何うしてもう遊びに來られなくツて。え、え。』
『姉さん、此樣怨めしい雨ツちやないわねえ。』と、お志米は其處に泣伏して了つた。
　雨は一入勢を増して、簷の溜を一時に決

したかの如く、お志米の泣く音も紛れて聞えず、お八重の眼にも何時か身を知る雨が降注がんばかりに見受けられた。

（二）

お八重はお志米が雨を怨む心根を、大方は推量し得たらしく、深く息を吐いて、

「志米ちゃん、此雨に泣いてる人は、お前さんばかしではないわ。三日か四日の降雨ならだけども、もう今日で十二日降續いてるんだもの、誰だッて泣かない者があるもんかね。稼業には出られないし、お米は高くなるばかしだし……何も此樣に降らないだッて、せめて一日や二日はお天氣に爲て呉れたッても可いんだわ、ねえ志米ちゃん。」

お志米は唯首肯いたばかしで、尙ほ泣いて居たが、軈て俤かに涙を拭うて、

「だからね姉さん、私は實に口惜いのよ。此樣に雨さへ續いて降らにきやア、私だッても阿母さんと同作に、神明樣におでんの店も出して居られるし、每晩多少づつか稼けるんだけども……阿父さんだッても、一日步きやア、十錢や十五錢は、拾つた屑ばかしでも取れるんだけども……私ん宅では人數が多いんだのに、後は私よりかも幼少い者ばかしだし、もう何うにも斯うにも仕樣が無いからね、私に田舍の料理店へ奉公に行けッて、阿父さんが……。」と、覺えず聲を逸まして、「阿母さんも左樣してお呉れでなきやア、何うしても遣切れないからッてお云ひだしね。」

お八重は氣の毒さうに吐息をついて、

「田舍の料理店へお行でなの。」

「左樣なのよ。もうね、先刻世話を爲る人が來て、手金を渡して行つたんだから、可厭だと思つたッても、もう仕樣が無いんだわ。」

「もう極めてお了ひなの。」と、お八重は一人太き息をついて、「志米ちゃん、田舍へお行でではね、其は何樣に辛いか――本統に辛いんだよ。私も覺えがあるけれどもね……」と、我知らず斯う云出して、はッと氣付いて覺えず顏を赤くした。

お志米も覺えず眼を丸くして、「姉さんも田舍にお居での事があつて。」

お八重も今は隱してもと思つたのか、お志米を見て莞爾して、「お前さんとは姉妹の樣にしてるんだから、隱しや爲ないけどもね、他の人へは云ひッこなしだよ、いゝかい。」

「それは大丈夫よ。」

「また種々た事を云はれるのが可厭だからね、誰にも話してお呉れでないよ。」と、お八重は呉々も念を推して置いて、身の上を話して聞かせた。

お八重の父は左官の勘兵衛と呼ばれて、一廉の親方株であつたが、不圖病に罹つて死去つた後、まだ一周忌も過たない中に、生の母のお重が鬼金と呼ばるゝ遊人と情を通じて、亂行の結果、十六歲の春八王子の達磨茶屋に賣飛ばされて、今年十九の春迄丸三年の間、世にも辛い稼業を爲て居た其辛かつた事の數々を物語つた。で、今夫としてる吉松とは、去年の春から思合つて、其々稼ぎ蓄めた金で、綺麗に前借を返して、此春の末に東京に歸つて此處に世帶を持つたと云ふのである。

「だからね、志米ちゃん、私も隨分苦勞を爲て來たんだよ。」

「本統だわねえ。」と、お志米はお八重が既往の果敢なかつた身の上に同情するに付けても、今は自分も去る身の上に成行くかと、將來の覺束なさに、一入胸が迫るのであつた。

お八重はお志米の樣子に、せめては慰め遣らうと、「だけども、お前さんは親兄弟の爲なんだから、お茶屋奉公をお爲だッても、まだしも

[illegible]がお付きだけども、私なんぞは阿母さんの爲だとは云ひ條、親の道樂の爲に地獄へ墮されたも同樣だからね、其當座は何樣に口惜かつたか知れやしないよ。それでもね、辛い／＼と思つて稼いでる中に、吉さんと今の樣に成つたんだから、まア多少安心した樣なものさ。だけどもね、頃日ではね、又阿母さんが三日に上げず來るんだから、實にうんざり爲ッ了ふのよ。八王子から東京へ歸つて來た事も、阿母さんに知らせなかつたんだよ。それだのに、如何して此處を探し當てたんだか、毎日の樣に出掛けて來て、やれ小遣錢だ何だッていたぶられるんだから、實に遣瀨が無いんだよ。いくら親だッても、吉さんの前もあるしね、さう／＼は私にも出來ないから、たまには可厭な顏をする事もあらうぢやないかね。左樣爲ようもんなら、直ぐに怒鳴るんだから溜らないわ。志米ちやんも知つてお居でだつたわねえ、つい一昨日だッても如彼なんだからね、世間に外聞が惡くッて、私やもう困切つてるんだよ。』

『お氣の毒だわねえ。』と、お志米は自分の上は忘れた樣に、唯お八重が親ゆゑの苦勞に同情するのであつた。

お八重は深い歎息を吐いて、『私なんざ、阿母さんが何うかお成り迄は、一生涯責められるんだよ。あゝあ。』

折柄入口の方に人の氣配が爲た樣に思つた。雨は何ほざア／＼と音立てゝ降つて居る。

お八重は眉を顰めて、『誰か來た樣だよ。またか知ら。』と、覺えず肩を縮めた。

『兄さんでせうよ。』

『左樣ではないよ。吉さんは未だ歸つてお入での時分ぢやないんだもの。』と、お八重は辛さうな顏を爲て、ほッと息を吐いた。

けれども、入口の物音は、お八重の空耳らしく、格子戸を開ける樣子もなく、耳を澄せば唯雨の音ばかりである。

お志米は何ほ耳を澄して、『左樣ではなさささうよ。』

お八重も僅かに心が落付いた體で、『まア可かつた。また阿母さんならと、私は何う爲ようかと思つたよ。あゝあ、難有かつたわ。』

お八重は何ほ安心ならぬのか、入口の二疊に出て行つて、障子を細目に開けて家外を見ながら、『志米ちやん、些とは小雨に成つてよ。何時あがる雨なんだらう。』と、火鉢の傍に歸つて來た。

『姉さん、私はもう辭去つてよ。』と、お志米は身綺麗を爲したから、先刻話した通りだからね、私はもう姉さんに逢へなくツてよ。今日がお別れなのね。』

『何だねえ、志米ちやんは、縁喜でもないよ。』と、お八重は態とお志米を窘める樣に、『もう逢へないだの、此がお別れだのッて、縁喜でも無い事をお云ひでないよ。八王子には懇意に爲た人が澤山あるから、手紙で頼んで上げようからね、餘り心配お爲でないが可いわ。』

『何卒、宜敷ねえ。』と、お志米は何ほ辭しかねた體で、『宅の方もね、お頼み申しますよ。』

お八重は首背いて、『私だッてもお前さんが知つてお居での通りだからね、お世話なんて出來やしないけども……其樣に心配お爲でないよ。』

『有難う。ぢやアね、姉さん、少時お目に掛りませんから……。』と、お志米は又ほろりと涙を溢した。

お八重は態と笑爾して、『後で又、私が逢ひに行つてよ。何れ明日お立ちなんだらう。』

『いゝえ、今夜汽車に乘るんだッてね、先刻の人が夕刻迎ひに來る筈なの。』

『えッ、今夜、まア。』と、お八重は何か餞別をと思ふけれども、差當つて思付いた物も無いので、

聊か當惑しながら、「志米ちゃんに何か形見を上げたいんだけども……あらッ、おほほゝゝゝ。形見だなんて、志米ちゃんの事ばかしも云へないわ。ほゝほゝゝゝ。何れ後刻に行つてよ。其時何か上げたいと思ふけども……。」

「姉さん、其樣事はよくッてよ。」と、お志米はお八重の顏を見向かず凝視めて、「ぢやアね……少時御目に掛れないんだわねえ。姉さん、煩はない樣にお爲なさいよ。」

『あゝ！ 難有う。志米ちゃんも氣をお付けよ。』と、お八重は何とも云へない程に悲しくなつて、「志米ちゃん、私はお前さんに別れるのが實に辛くッてよ。眞實の姉妹の樣な氣がするんだものねえ。」

お志米は又其處に泣伏して了つた。

お八重は聲に力を籠めて、「志米ちゃん、勘忍してお呉れよ。私が此樣事を云つてお前さんを泣かしては惡かつたわねえ。もうお泣きでない。ねッ志米ちゃん、さッ、ね。」

お志米は僅かに顏を上げてお八重を見戍つたが、「姉さん、私はもう何にも云はなくッてよ。」

お志米はもう全く口を利き得ぬ。口を利けば淚が突掛けるので、袖に顏を押へて立上つた。

お八重も立上つて、お志米の後から上口の六疊に尾いて行きながら、「私は後刻で屹度行つてよ。」

お志米は其擧止に辭別の意を告げて、情なさうに片足づつの古下駄を穿き、破蛇目傘を取上げた。

「志米ちゃん、鳥渡待つてお呉れよ。」

お八重は急いで六疊に駆戻つて、押入から袋の儘の蝙蝠傘を出して來た。

「志米ちゃん、失禮だけどもね、之を持つてッてお呉れ。まだ其樣に古いんではないんだよ。何處へ行つたッて、直ぐ入用もんだしね、それに外見ないから、持つてお行でよ。たに、私は可いんだよ、また何うにでも成るんだから……其樣に遠慮してお呉れでないよ。私の寸志だと思つて、何卒持つてッてお呉んなさい。」

「さうですか。濟みません。」と、お志米は又少時泣いて居た。

小止になつて居た雨は、風さへも加うて、橫に格子戶へ吹掛けるのである。

「志米ちゃん、もう少うし小雨になるまでお待ちよ。」

「難有う。」と、お志米は吹込む風に、淚の頰に亂掛る鬢の毛を掻上げながら、「もう四時だしね、宅にも用がありますから。」

お八重は首肯きながら、『それも左樣ね。』

「姉さん、難有う。」

お志米は蝙蝠傘を雨に當てまいと小脇に抱へ、破傘に風を銜いて家外に出た。すッぽり肩まで藏した傘の破目から、お八重を見上げて、

「兄さんへも宜敷ねえ。」

「難有うよ。」

傘も裾も風に煽られ、雨と戰ふお志米の姿を、お八重は如何にも哀れに見遣る間に、早くも角を曲つて見えなくなつて了つた。

「本統に可哀想だわ。」

お八重が悵然として身を倚せて居た障子を吹倒すばかり、又一陣の風が雨を擲つが如く吹付けたので、覺えずはたと障子を閉めて、

「まア何て雨なんだらう。」

ざッ／＼と風に擲たるゝ雨に、障子の紙は看々淋落ちんばかり濡れて了つた。

「まア此樣の無い雨だよ。」

人に對つて怒るが如く呟き、戶を締めようと障子を開けた時、格子戶を瓦羅理と開けて飛込んだ者がある。

「あゝ强い雨だ。」

「吉さん、お歸りかい。」と、お八重は覺えず聲を迎まして、「早く戸を閉めてお吳れよ。」
「おい來た。」
吉の手に戸は閉められて、土間も上框も眞暗に成つて、六疊から映す明りがお八重の半面を青白く見せて居る。
吉松は鼓舌を爲て、「此奴ア詮樣が無いや。」
「ほゝほゝ。鳥渡待つてお吳んなさいよ。」
お八重は手燭でも持つて來る氣か、臺所に駈けて行つた。

（三）

お八重は吉松の單衣の雨に濡れたのを絞つて、衣紋竿に通して緣側と出入の鴨居に掛けた處へ、吉松は臺所から脚を拭き〳〵六疊に入つて來た。
「本統に困らし了ふぢやねえかなア。彼樣に降つてやがらア。」と、吉松は長火鉢に胸を焙りながら、『おゝ寒い。』と、ぶる〳〵ッと體を戰はした。
お八重は吉松が赤裸々で火鉢に當つて居るのを見て、氣の毒の眉を顰めながら、『それでは詮方が無いわねえ。』
『なアに、風を感く事もあるめえよ。』
「鳥渡此でも引掛けてお居で。』と、お八重は着て居た袢天を脫いで、吉松の背後から掛けて遣つた。
「ふゝ、こいつは剛氣だ。」と、振返つて、「お前が風を感いても困るぜ。』
「なアに、私は大丈夫だよ。」と、お八重も火鉢の前に坐つて、吉松に顏を見合はせて莞爾した。
「はゝはゝゝゝ、何と見える。』
『ほゝほゝゝゝ、さうさね。手をお通しが可いぢやないか、人品が惡く見えてよ。」
「さうかも知れねえ。此で股火でも爲ようものなら、何の事はねえ、大部屋にごろついてる野猿と云ふものだ。それ、芝居で能く演るぢやねえか。まづ彼の形てえものだ。」
「本統にさ。」と、お八重は鳥渡小首を傾げながら、「餘り外見よいものではないわ。」
『まア可いッて事よ、誰に見せようぢやなしさ。」
『だッて。』と、お八重は押入から、結城紬の袷の引解きにしたのを持つて來て、『何うせ洗張をするんだから、御得意のだッて構はないわねえ。ほゝほ。』
「不可え〳〵。お客の物を着ちやア濟まねえ。それに誰か來て見ねえな、大きにいゝきまりが惡からうぢやねえか。吉ん處では、客の物を着やアがると云はれてもならねえ。まア止しに爲ようよ。」と、吉松は袢天の胸を掻合はせた。
「それも左樣さねえ。」と、お八重は力なげに、又押入に入れて、「ぢやア、火鉢に焙つて乾かさうかね。」
お八重は臺所に行つたが、軈て風なくとも塵に成つて飛散さうな粉炭を十能に持つて來て、火鉢に入れながら、
「鳥渡避いてゝお吳れよ。」と、自分も袖に口を掩うたのであつた。
吉松も身を退きながら、「もッと粗え處は無えのか。」
お八重は憮然たる顏付で、
「もう疾うに買らなきやならないんだのに、我慢して使つて居るんだよ。」
「左樣か。」と、吉松は眉を寄せて、「薪も無えんだらうな。」
「あゝ、漸と明日の朝ぐらゐは。」
『詮樣が無えなア。」と、吉松は紺に染つて居る指先を熱くと雨も徒らに眺めながら、「あゝあ、何うする事も出來やしねえ。愚癡を云つたッて詮樣が無えけれど、箆棒な雨ぢやねえか。何時

まで降りや氣が濟むと云ふんだ。えゝ、又大粒に成つて來やアがつた。』

「彼の風の音ツちやア無いわ。』

『見ねえ、乃公の手を。』と、吉松は淋しげな笑を漏らしながら、『滅法綺麗に成りやがつたぢやねえか。』

お八重は吉松の手を見る事は見たが、何にも云はないで溜息を吐いた。

『天氣にせえなりや、お前にだツて心配はさせねえんだが。』

『いゝえ、私こそお前さんに御氣の毒だわ。』と、お八重は詫びるが如き語調で、『お天氣の所爲で、此樣に困つてる最中に、阿母さん迄お前さんに無理を云ひに來るんだもの、私は實に濟まないと思つて居るわ。』

吉松は態とかも知れぬが、事もなげに笑つて了つた。

「はゝはゝ、お前また、其事ばかし氣に爲てるんぢやねえか。お前のお袋は乃公のお袋ぢやねえか。何もお前が。』

『それが普通の阿母さんならだけども。』

『一通りだらうが、二通りだらうが、其樣事は何うでも可いや。お袋が來なさる都度に、乃公が意氣地が無えとは云ふものの、何時だツて碌に世話も出來ねえから、それが乃公は氣の毒でならねえんだ。』と、吉松は氣の毒さうに横を向いた。

『何うしてお前さん、飛んでも無い事だわ。彼樣阿母さんがあるもんだから、末始終はお前さんに愛想を盡かされはしまいかと思つて、其が心配でならないんだよ。』と垂頭くと共に深く息を吐いた。

『はゝはゝゝゝ。お前と乃公とは、其位の事で、愛想が盡きるの盡きねえのツて云ふ仲ぢやあるめえと思ふんだ。え、左樣ぢやねえか。八王子に居た時から、隨分苦勞も爲て居らア。東京へ歸つてからは、お互に苦勞の爲ツくら、辛棒の競べツくらを爲ようツて約束だ。それだのに何もお前、其位な事で心配する事は無えぢやねえか。乃公が早く一人前に成りせえすりや、今の思ひはさせねえが、何を云ふにも紺屋の手間取職人ぢや仕樣が無え。』と、吉松は歎息しながらも不圖思出した體で、『お八重、親方の方の話も旨く行かねえや。』

『左樣。』と、お八重は更に當惑の色を見はし、『矢張此不景氣の所爲なんだね。』

吉松は首肯き、『結局其なんだ。此雨續ぢやア何うする事も出來ねえ。手前の事だから、何とか爲て遣りてえんだが、さう／＼前貸も出來ねえから、此處は一番耐忍して貰ひてえツて、斯う親方に斷られて見るてえと、それでも無理に貸してお呉んねえたア、乃公には何うも云へねえや。』

『左樣ですとも。』と、お八重は吉松が意中を察すると氣の毒でならぬ。けれども、差閊へて居る朝夕の料を如何したものかと、思餘つて、胸を手で押へて垂頭いて居る。

吉松も少時は無言であつたが、肌寒さに覺えずぶるツと顫へて、

『いやに寒いぢやねえか。えゝ、何に付けても癪に障るなア此雨だ。この雨せえ降らなきやア、お前に此樣に苦勞もさせねえんだが、まだ彼樣に音が爲て居やがらア。』

お八重も歎息して、『本統に此雨には、何樣に困らされてるか知れやしないよ。あツ、お前さん、彼の志米ちやんね、彼の娘も可哀想に。』

『えツ。』と、吉松は何と聞いたのか、痛く驚いた體で、『志米坊が何うしたい。』

『八王子へお茶屋奉公に行くんだツさ。』

『えツ、八王子へ、酌婦になつてか。』

『矢張、雨の所爲なんだツさ。』

『うむ、雨の所爲でか。氣の毒なこツた。相手

が明手だから、喧嘩にも成られえが、何れ程人が痛むか知れやしねえ、此のさき一週間止まれえで居て見ねえ、大概な者ア倒死ッ了はア。えゝ、又大降に成つて來やアがつた。』

お八重は障子の方を見返つたが、もう雨に愚痴を云ふ氣力も盡きたのか、垂頭いた儘溜息を吐いて居る。

吉松は俄かに思付いた體で、「お八重、乃公は今一度出掛けて來ると爲べい。」

「何處へお行でなの。今日はもうお止しよ、此雨風では又ぐしよ濡れにお成りだよ。それに……談話に夢中に成つて忘れて居たよ。」と、お八重は緣側から吉松の單衣を持つて來て、「此火では爲樣が無いけども。」と、火鉢を搔廻すと、火に成つた粉炭がばち／＼と撥ねながら、一時火氣を增したかと見る間に、黑く火の色を失ふのである。

「あゝ、本統に爲樣が無い火だこと。何時乾る事だか。」

「何時か乾るにや違えねえ。はゝはゝゝ。」と、吉松は淋しげに笑ひ、單衣の一方を引張つて手傳ひながら、「濡れる位な事は厭ッちや居られねえ。明日の朝、お前を魔誤付かす樣ぢや可哀想だ。」

「なアに、私や何うでも可いんだから、今日はもう行かないでお吳れよ。それにお前さん、いくら何だッて、此樣衣を着せちや出せないわ。」

「なアに構ふ事があるものか。」

「いゝえ、お前さんはお構ひでなくッたッて、私が外聞が惡いわ。一日や二日は、よしんば食べる物が無くッたッて、私や何とも思やしないよ。今日はもう直ぐ寢ッ了ふ事にお爲な。」

「まだ日は暮れめえぜ。」

「暮れようが暮れまいが、其樣事は何うでも可いよ。宅だけ暮れッ了つた積りでお居でな。」

『それも左樣か。ぢやア、左樣しべいか。』

「だけども、可笑い樣でもあるし、果敢ない樣でもあるし。」と、お八重は莞爾した。

「はゝはゝゝ。これが貧乏の中の取柄かも知れねえ。」

「それは左樣だね。ほゝほ。だけども、お前さんはお腹がお飢きではないか。」

『なアに。』

「今夜のはあるんだよ。だけど、お菜が。」と、お八重は臺所に行つて、何か探して居る樣であつたが、水口を開ける音をさせて、

「吉さん、小雨に成つたよ。」

「難有え、出掛けて來べい。」

今日は後生だから止してお吳れな。私は鳥渡お菜を見て來るよ。」

「其樣物は入らねえ。止しねえ、おい止しねえッてば。」

水口を閉める音が爲た後は、臺所に人の氣配もしなかつた。

（四）

吉松は耳を澄したが、臺所にお八重が在る樣子が無いらしいけれども、眉を顰めながら、

「おいお八重、行かねえでも可いんだぜ。止しねえ、止しねえ。おい、おい。」

臺所には返辭のある可き筈が無い。

「とうと行ッ了やがッたんだな。止しや可いんだのに。」と、口で斯う云つて、『だが彼の厚意が難有えや。乃公の事だこえと、自分の事は忘れッ了つて、出來るだけの事を爲て吳れるんだからな。あゝあ、實に勿體ねえ。彼の位な器量を持つてやがッて、氣立が好くッて、實意があつて、亭主を大事にするてんだから、まア申分の無え女だ。其位な女の癖にしやがッて、乃公の樣に意氣地の無え紺屋職人なんぞを、何だッて此樣に思つて吳れやがるんだか、乃公には實に解らねえ。吉の野郎は果報者だッて、

八王子に居た時にも、熊の野郎や八の野郎が能く云やがつたッけが、箆棒めッ、女の方から、やいの／＼を極められたッて、果報も何もあつたもんけい、女の一人や二人は、何時だッても附着いてる八百だ。お八重の阿魔が欲しきやア呉れて遣らアッて、太平樂を列べて居たッけが、同棲に成つて、斯う爲て居て見ると、彼女の難有さが、乃公は身に染々と染みる樣だ。それに付けても早く一軒前の店を作えて、せめて朝夕の心配だけでも爲せたく無えと思ふんだが、其處までに成るのは、まだ何時の事だか知れねえしと……あゝあ、乃公は何だッて斯樣意氣地の無え野郎に生れて來たのかな。それに生憎と此雨天だ。親方の方だッても、左樣々々は貸されねえと云はれて見りやア、其も無理は無えんだ。外に當は無えけれども、お八重に心配させるのも氣の毒だから、的は無えが出掛けて見ようとは思つたッけが……今日はお八重の云ふ樣に、寢ッ了やア其ッ限りだが、明日に成りやア又、其故に苦勞を爲にやならねえ。あゝ、乃公ほど意氣地の無え野郎はありやしねえ。それにしても、お八重は何處まで行きやアがつたかなア、早く歸つて來やがりや可いに。」

吉松はお八重がもう歸る時分と、臺所の水口が今にも開くだらうと思つて、其方に氣を配ると、屋根に當る雨の音が、氣の所爲か又強く高く聞える樣である。

「又強く降出した樣だな。早く歸つて呉れりや可い。」

途端に水口が開いた。

吉松は隙さず、「お八重。歸つたか。』

『私だよ。』と、皺枯れた老女の聲。

「えッ。」と、吉松は顏色を變へたが、直ぐに語調を和げ、「阿母さんですかい。」

「あゝ、左樣さ。飽きねえで能く降るではないかね。鼻緒は斷らすしさ。』と、お八重の母のお重は濕んだ雨傘を上蓋の上に投出した樣子で、「吉さん、手拭でも何でも可いから貸してお呉れな。』

「はい／＼。」と、吉松は手拭を持つて行つて遣つて、「此雨に能く出て來なすッたね。」

お重は紫色の齒齦を見はしながら、「雨なんぞを厭つてる樣な身分ではないんだよ。おほほ。」

吉松は何とも云ひ得なかつたが、聽て、「加之に陰氣と寒いや。」と云掛けたが、自分が袢天一枚、お八重の袢天を素肌に着て居たのに氣付くと、お八重の母親だけに一入極りが惡く、覺えず胸を合はせて押へて居る。

お重は見返つて其と見るより、「吉さん、剛勢意氣に見えるよ。お前は男前が好くッて、色が白いと來てるんだから、能くお似合ひだよ。斯う見た處は、何うしても素人たア見えないよ。」

「戲言云つちやア不可え。」と、吉松は頭を搔きながら六疊に逃込んだ。

お重も續いて六疊に入つて來て、家内を見廻しながら、

『お八重は留守なのかい。」と、しがみつく樣に火鉢に取付いた。

『たアにね。留守と云ふんぢやねえが……もう歸る時分でさア。』

「左樣かい。』と、お重は吉松の樣子をじろ／＼見ながら、『本統に意氣だよ。』

『ふゝん、詰らねえ事を……。』

吉松の垂頭いた樣子が、お重には何と見えたのか、むッとした體で、これも少時は無言で居た。

吉松は火鉢の傍を見返り、「鐵瓶を何處へ遣りやがつたか知ら。』

「お茶なんざ、喫みたくも無いがね、炭があるんなら少許貰ひたいもんだね。」

『えッ、炭。』と、吉松は額を赧くしたが、無いとも云へなかつたか、臺所から十能に粉炭を抄つて來た。

お重は見るより、『おや〳〵、情ない炭だ。』と、袖を振ひ且つふッ〳〵と吹くのである。

吉松は苦い顏を爲ながら臺所に行つたが、十能を擲つたのではなかつたらしいが、擲つた樣な音が聞えた。

お重は臺所の音を聞くと共に、眼を險しくして見返つた。

吉松は鐵瓶を下げて來て、『急には沸きさうにもねえや。』

『當然さ、お前。お湯は炭で沸かすものだと思つてたよ。此處のはお世辭にも炭とは云へないね。おほゝ。』

吉松は益す額を赧めて、何とも云ひ得なかつた。

お重は吉松が額を眞赤にしたのを見るより、『吉さん、お前怒つたのかい。』

『えッ、怒つたッて、私がですかい。』と、吉松は眉を寄せる。

『さうさ。炭が粉名だから粉名だと云つたのが惡かつた樣だね。』

吉松は眼を睜つて、『阿母さん、其は違はア。私や怒る處ぢやねえ、體裁が惡い位なもんだ。』

『へん、其なら其で、何も十能を擲出すにはあたるめえよ。』

『えッ……あッ、彼の十能。』と、吉松は頭を掻いて、『なアに、擲出したなんて、其樣譯ぢや無えんで、竈の端に載ッけようとしたのが、滑つて轉がり墜ちやがツたもんだから……はゝ、全く左樣なんだから、氣に障つたら勘忍してお吳んなさい。』

『左樣お云ひなら、左樣だとして置かうさ。』と、お重は忽ち思直した樣であつた。

吉松はお重が何時になく――何時もの樣にひねくれもせずに、直ぐに機嫌を直して吳れたのを不思議だと思つて、却つて氣味を惡がつて居た。

お重は悄乎とした語調で、『吉さん、お前なんざ、縱んば粉名にしても、火鉢に火を絶やさないだけでも、私なんぞから見りやア羨ましいよ。』

吉松は覺悟して居ながらも、さてはと覺えず息を吞んだが、直ぐに笑顏を作つて、『阿母さん、私が意氣地が無えからなんだ。何卒ね、今少時の處だから、耐忍して居て下さいな。』

『お前が左樣云つてお吳れだと、私だッても愚痴を溢したかアないさ。だけどもね、吉さん。』と、お重は吉松の顏を見上げて、不足らしい色を眼と頰とに匂はしながら、『私も此年に成つて――もう五十五と云ふ歳を爲て居てさ、貧乏暮にもう殆と飽きッちまつたんだよ。お八重でも今些し、私の事を思つて吳れるんだと、私だッて此樣に苦勞は爲やしまいと思ふんだよ。吉さん、惡く思つてお吳れでは困るよ。』と、態と莞爾笑つて、『それでもお前が優しくしてお吳れだから、私や本統に嬉しく思つてるんだよ。だけども、如彼して別に住て見るてえと、一軒前の入費は掛るしさ、ついお前やお八重に相談に來ない譯に行かなくなるんだよ。吉さんこそ好い面の皮だわねえ。おほほゝゝ。』

吉松は淋しげに笑を含んで、『なアにね、私が屆かねえんで、阿母さんにも氣の毒でならねえんでね。』

『氣の毒だと云へばね、吉さん、實は今日來たのも、お前とお八重に相談があつて來たんだがねえ。』

お重は斯う云ひさして、何處で貰つて來たのか、口付の紙卷莨の半紙に包んだのを袂から出して、粉名炭を穿くりながら火を點けて居る。

（五）

お八重は水口を威勢よく開けたが、其處に傘と下駄のあるのを見るより、
『お客さまなの。』
「左樣さ、お客さまがお入でだよ。」
お八重は母お重の聲と聞くより、覺えず氣の無い聲で、『まア。』
「吉さん、お聞きよ、直きに如彼だ。』と、お重ははや聲に權を有つた。
『お八重、先刻から待つて居たんだぜ。大分遲かつたな。』
「あゝ、鳥渡志米ちやん宅へ寄つて來たんだよ、又出直すのも億劫だと思つたから。」
「さうか。早く此處へ來るが可いや。』
お八重は足を拭いて、臺所と六疊との間の障子を開けて、熟とお重を見下し、
『阿母さん、何うお爲なの。」
『何がだよ。』と、お重は横を向いて居る。
『いゝえさ、此御天氣だのに、何うしてお入でだと云ふんだよ。』
「何う爲て來るものかね。矢張歩いて來たのさ。』
「沒曉いわねえ。」と、お八重は膨れる。
『何が解らないんだ。用があればこそ、此降雨最中に出て來たのさ。」と、お重は憎々しい語調だ。
『阿母さんの用なら、聞かないだツて知れてるよ。』
『憚りさまさ。』と、お重は凝乎とお八重を見る。
お八重は態と頓着しない風で、「吉さん、鳥渡駈出して行つて來る積りだつたけども……嘸ぞ待遠だつたらうね。』
『なアに、乃公は何うでも可いんだが、阿母さんがお出でだから、お前が歸つたら、お茶でも入れてえと思つて居たんだが。」
「お茶は御生憎さまなの。」
「左樣か。」と、吉松は當惑の體だ。お八重は澄まぬ顏を爲て横を向いて居る。お重はじり〳〵して來た樣子で、
『お八重、お前は何だな、酷く澄まねえ顏を爲て居る樣だね。』
「左樣見えて。』と、お八重は見向きもせぬ。
『これ、左樣見えてたア何と云ふ云草だよ、え、何てえ云草だ。』と、お重の膝は漸次お八重の方へ押向けられた。
『何でも無いぢやないかね。左樣見えるとお云ひだから、左樣と云つたばかしぢやないか。』
吉松は目顏でお八重を叱りながら、「お八重、阿母さんに何てえ口の利き樣だ。お前が惡いや、默つて居ねえ。阿母さんも勘忍して遣つてお呉んなさい。え、公乃が預るてえ事にするから、ねえ阿母さん、勘忍してお呉んなさい。』
「なアに私や構はないさ。だけども、今の樣ぢや、最初ツから宛然喧嘩面なんだもの。なアに可いよ、吉さんが左樣云つてお呉れだから、私や其で濟すがね……お八重、些とはの、親へ口の利き樣ぐらゐは。』
お八重は聞えたか聞えぬ程の小聲で、『親が親らしきやアね。』
吉松は態と高く鼓舌を爲し、「解らねえなア。何然默られえんだ。」
『はい。』と、お八重は默つて了つた。
三人とも少時は無言、唯雨の音がめげずに屋根を打つのである。
お重は何時までも默つて居得ずに、徐々口を利き初めた。
『吉さん。お前に私の口からは云難いんだがね。』と、身じろきもせぬお八重を憎さうに見ながら、『お八重が如彼では相談に成らないんだがね、吉さん、何うだらうかねえ、さう〳〵は

相談された義理では無いんだが。」と、語を切つて吉松の樣子を窺つた。
「極つてるんだよ。」と、お八重は佛頂面を爲る。吉松は何とも返辭を爲得ないで、私かに溜息を吐いた。
「吉さん、不可いかねえ。」と、お重は膝を進めて、「私だツて困らなきやア、好んで此樣事をいひたかアないんだけれども……吉さん、何樣もつかねえ。」
お八重は傍から、「阿母さん、今日は不可いんだから、其樣事を云はないで、歸つてお吳んなさい。私から斷つてよ。」
お重は眼に角を立てた。
「何だとえ。私から斷るツて云ふんかい。お前と話して居やアしないんだよ。吉さんに賴んでるのだから、傍から生意氣な口を利かないが可い。」
『いゝえ、口を插さない譯には行かないよ。』と、お八重は火鉢越に母の顏を屹と見て、「此宅はね、吉さんと私とが立ツてるんだからね、お金の相談や何かはね、私だつて默つて聞いてる譯には行かないんだよ。左樣ではないかね、能く考へて御覽が可いわ。阿母さんが吉さんに其樣相談をお爲のも、私の……ね、左樣だらう。それだとお前さん、吉さんだツて私の關係から、阿母さん〳〵て優しくしてお吳れたんぢやないか。私は其が實に嬉しい――吉さんが阿母さんを優しくしてお吳れだから、私は何樣に嬉しいか知れないよ。ね！　其だのに、阿母さんが幾度も〳〵お金の。」
「幾度なものか。」と、お重は空嘯いて居る。
「いゝえ、幾度もですよ。」
『まア可いッて事よ。』吉松が目顏で押へるのを、お八重は態と知らず顏で、
『それはね、互に繫がる緣だから、苦勞も樂みも共に爲ようと云ふのならだけども、阿母さんは自分ばかし可きやア、子や婿は倒つて死んだツて關はないツてんだから。」
「まア飛んでも無い。」と、お重は躍氣と成ツて、「云草に事を缺いたツて、其樣他聞の惡い事を。」
『いゝえ、左樣ですもの。』と、お八重は何時になく母には語を利かせず、「亡父さんがお死りだつた後の事を……私が何の爲に八王子へ行つたか、借金に借金を背負つたのも何の爲だか、阿母さん、能く考へて御覽よ、悉皆お前さんの歡樂の爲ぢやないかね。私は思出しても實に口惜いわ。阿母さんの道樂の爲に、地獄へ墮されて了ふのかと思つて、私は何樣に口惜かつたか。」と、潸々と涙を溢して、「亡父さんが生きて居てお吳れだツたら、阿母さんも彼樣鬼畜たんぞと。」
吉松はお八重が語も紛るゝ程の高い咳拂を爲し、「お八重、何だな、くだらねえ、昔の事を繰返したツて、詮樣が無えや、阿母さん……實はね阿母さん。」と、頭を搔きながら、「實は此通り炭も無え始末なんだ。親方へ相談に行つて見たんだが、其も斷られて、漸と今歸つて來たばかしなんでさア。着物が雨に濡れツ了やア、此通り着替も無え始末なんだ。出來る時でせえありやア、阿母さんの賴みだもの、私や何うにでも爲る氣だ。爲る氣はあつたツて、此始末では、手も脚も出ねえんだから、お氣の毒だが、今日は不承してお吳んなせえな。ね、阿母さん、お願えだ。此雨せえ歇れりやア、また何うにでも都合の付け樣があらうと云ふもんだ。何卒其まで耐忍して居てお吳んなさいな。」
「雨が霽る迄とお云ひなんかい。」と、お重は嘲る樣に、「何時に成つたら霽る雨だか、吉さん、お前には分つてるんかい。」
『えッ。』と、吉は言句も出ぬ。
お八重は溜らなくなつて、「阿母さんが聞い

ておいでな。』

「何だッて、私に聞いて來いと云ふのかい。』

「あゝ左樣さ。』と、お八重は取つて投る樣な語調で、「神明さまだッて御存じではあるまいよ。」

「此兒は何を云ふんだらう。ほゝほ。宛然狂人だよ。」

「氣が狂やア阿母さんの所爲さ。』

「何を云つてやがるんだ。相手にするだけ馬鹿馬鹿しいよ。吉さん。』と、お重はお八重が罵るのを耳にも掛けないで、「雨が霽りやね、私にだッて何うとか成るんだよ。此雨の中が凌げないから、其で態々出て來たんぢやないか。吉さんは血氣盛の男だもの、私の樣な老耄婆たア、同一に成らたからうぢやないか。爲てお呉れの氣があるんなら、何うにか成らない事もあるまいと思ふのさ。』

『左樣云はれるてえと、私が如何にも意氣地が無えんで……意氣地が無えにや違ひねえんだが。』

「吉さん、默つてるが可いんだよ。』と、お八重は吉松の語を遮つて、『何もお前さん、お前さんが意氣地があらうがあるまいが、云譯をするには當らないよ。困難つてるのはお互だから、何うも爲樣が無いぢやたいかね。もう相手にお成りで無い方が可いよ。』

『お前は默つて居ねえ。』と、吉松はお八重を窘めたが、又手自分も云ふ可き語が無いので、太き溜息を吐くのみであつた。

『本統に能くつべこべと話を出しやがるよ。』

『阿母さんの御仕込だもの。』

『直に如彼だ。』と、お重は又例の紙卷莨を出してすぱ〳〵と喫むのであつた。

お八重は母が紙卷莨を銜へて居るのをじろりと見て、『口でばかし困るッたッて、阿母さんたんざ安氣なもんさ。』

お重は莨の灰を火鉢の五德に擦附けながら、『口ばかしとは、何が口ばかしなんだよ、何が安氣なんだよ。』

『紙卷莨でも喫してられりやア、結構なものだと云ふ事なの。』

「何だッて、此莨が。』と、お重は半喫殘りの莨を凝乎と見ながら、「此莨だッて——何うした莨だと思つてるのかい。』

「何うお爲のだが、私へお聞きだッて知るものかね。」

「左樣だらうさ。阿母が倒死らうが何うしようが、平氣で居るお前には、此莨だッて阿母さんが何うして有つてるんだか知れめえさ。』

「知らないものは爲樣が無いよ。』と、お八重は煩擾さうに首を傾げて頭を掻くのである。

「此莨だッて、今來がけに、金さん處へ。』と言掛けたが、稍周章た語調で、「金さんと云つたッて、お前の知らねえ金さんだ——町内の鳶頭の金さん家へ、今來掛けに寄つた處がの……うむ左樣だッけ。おいらが嗜きな莨も喫まねえで居るもんだから、金さんのお神さんが可哀想だッて——本統に可哀想だッて、此莨を呉れたんだよ。人樣のお惠で、漸と此莨にありついたのさ。お八重。』と呼掛けたけれども、お八重は返辭をせぬ。『お八重、返辭を爲ねえ氣かい。可いとも、返辭を爲なきやア爲ねえが可いのさ。唯た一人の親に、碌に莨も喫ませねえ樣なしがねえ思をさせときやア……それでがみ〳〵と今の樣な事を云つて居ようと云ふんだから、お前も實に孝行なものさ。孝行な娘を有つたばかしで、莨の合力に歩いてりや、實に幸福なものさ。吉さん、私ほど幸福な者は無いんだね。」

吉松は胸を刺さるゝ樣に覺えて、「阿母さん、もう何も云はねえでお呉んなさい。私が意氣地がねえから、阿母さんやお八重に——親子の間で顏を顰め合ふ樣な事にもなるんだ。阿母さ

ん長え間たア云はねえから、お天氣になる迄我慢を爲て居てお呉んなさいな。』

『私は我慢を爲るのさ――何時迄だッて我慢を爲たいんだけども、世間で我慢を爲て呉れねえから困るんだよ。お米だッて米屋でお天氣になる迄我慢を爲て呉れて、ずん〳〵持して呉れりや可いんだがね、私の方には其様米屋が居なからうではないか。八百屋だッて肴屋だッて、悉皆因業な奴等ばかしでね、酒屋の三河屋なんぞと來た日にや、吉さん、お話にならないんだよ。私は何様にでも我慢をするがね、世間が其なんだから、私ばかしの自由にならなからうではないか。』

吉松も何とも云へないで、溜息を吐いて默つて了つた。

『阿母さんの近所ばかしが左樣だと云ふんではあるまいし、此邊だッて御同樣さまさ。』と、お八重は態と火鉢の火を撥りながら『此樣炭でだッて我慢すれば出來ない事は無いんだし。』

『お前には出來ようさ。おいらとは違つて年は若えし、吉さんと二人てんだらう、我慢をするにも張合ひがあらうと云ふもんだが。』

『阿母さん、其樣戯言なんぞ止してお呉んなせえ。』と、吉松は苦笑を爲ながら、『此後幾日も此樣天氣でも居めえから、長い間とはいはない、三日ばかし待つてお呉んなさいな、後生だから。』

お重は迂かしさうに吉松を見て、『吉さん、ぢやア、斯うしてお呉れな。お天氣にさへなりやア、お前が都合が好くなるとお云ひだらう、此雨が止んで了ふまで、此家へ置いて貰はうではないか――御邪魔でも、ねえ吉さん。』

『眞平御免だよ。』と、お八重は云放つた。

『何だ、眞平御免だ。此阿魔ア、阿母に對やアがッて。』

お重がお八重へ立掛らうとするのを、吉松は慌忙てゝ押隔てゝ、『阿母ア、勘忍してお呉んなせえ。お八重、お前が何にも云ふには及ばねえや。阿母さん、能らがす、私が何うにでも爲やせうよ。』

『ぢやア何かい、私を此處に置いて呉れるてんだね。』

『なアに、左樣ではねえが。』と、吉松は術なげな語調で、『阿母アを此處に居て貰つたッて、寢酒の一杯も自由にやならねえから……さうするよりか、私も種々考えてるんだが、えゝと……うむ、左樣だ。私やア鳥渡出掛けてきて、幾許か算談して來る事にして……お八重、お前もな、乃公が歸つて來る迄は、阿母アへくだらねえ事を云ふんぢやねえぞ。阿母アへも憚んで置くが、私が歸つて來るまで。』

『あゝ可いとも。』と、お重は首肯いた。

お八重は吉松の顏を見上げて眉を顰めながら、『出掛けるッたッて、何處へお出掛けなの。』

『何處へだッて可いや、まア默つて居ねえ……おい、其着物を取つて呉んな。』

『着られやアしなくッてよ。』と、お八重は衣紋竿に干した吉松の單衣を、兩手で押へて見ながら、『氣味が惡くッて、何うして着られるものかね。』

『裸體では出られねえし、氣味の惡い位は耐忍すらア。』

『お止しなさいよ。御飯も食べないでさ。』

『歸つてからにすらア。』

吉松はお八重の止めるにも關はず、單衣を肩に掛けたが、覺えず首を縮めて、『成程、冷ッこいや。』

『毒だよ。お前さん。』

『背に腹は代へられねえや。阿母ア、ぢやア行つて來やす。』

吉松が後からお八重も上口に附いて來て、夫の肩に手を掛けて、

『出掛けて來るツてお前さん、當がお在りなのかい。』

『的は無えけれど……心配しずに待つて居ねえ。』

吉松は後から抱付くが如く肩に掛けて居たお八重の手を徐かに押除けて、軈て土間に下りた。

（六）

吉松は家外に出ると、雨は小降になつて居るけれども、空は一面に些しも切目なき灰色の雲に閉ざされて、梅雨の如き細い雨がしと〳〵と降つて居る。

吉松は後を見返つて、『お八重、まだ迚も霽らねえや。見ねえ、此降り振ぢや、何時霽ると云ふ的がねえや。』

『本統だわねえ。それに、此雨が一番濡れるんだよ。お前さん、的がありやアしないんだらう。』

『無くツたツてお前、何とかしなくツちや、仕方が無えや。』と、吉松は傘を開けようとすると轆轤の緣が腐つて居たのか、ぼろり柄の尖が脱けた。『仕様がねえな、傘までがこれだ。』

『乾す事が出來ないから、腐ツちやつたんだよ。』

『人間まで腐りさうだもの、傘なんざ無理もねえや。』

吉松は何處かで多少の金を算段する積りで、家外に出る事は出たが、的が無いので足の向け樣に困つて、兎角踏出しかねて居る。

『傘の柄は脱けるし、緣喜が惡いから、止してお吳れな。』

お八重は的も無いのに此雨中を、吉松に彷徨かせるのが氣の毒で、頻りに止めるのであつた。

吉松は默然と佇立んで居たが、何か急に思出した體で、『おゝ、左樣だツけ、悉皆忘れて居た。』

『まア、突然に、吃驚したよ。何をお忘れなの。』

『餘事ぢやねえが、先刻親方の處で左樣云つたツけ、何時霽らうと云ふ的も無えから、急ぎの品は催促されるのも煩擾せ、一日返しちやツた方が可い。吉、お前ん處へ行つてるのも、羽縫が僞てあつても無くツても可いや、後刻に纏めて持つて來て吳んねえツて、親方に賴まれて居たんだが、つい忘れツ了つて、今漸と思出したんだ、何處へ行くツたツて他に的も無えんだから、行きやア矢張親方の處だ、其品を持つてくのを機けに、もう一遍親方を口說いて見ようと思ふんだ。貞渡包にして、此處へ持つて來て吳んな。』

『左樣。』とばかしで、お八重は考へて居たが、『そこへ來てるのは、三品だよ。薄色縮緬の紋付に、紋織お召が一枚に、引解の結城紬の男物とで三品なんだよ。』

『さうだ〳〵、其三品がありやア澤山だ。』

『何が澤山なんだよ。』と、お八重は何と云ふ事はなしに聞咎めた。

『えッ、何が澤山て……澤山だから澤山だツて云ふんだ。』と、吉松の語調は稍亂れながら、『此雨の中を、風呂敷包を引背負はうと云ふんだから、三品位が關の山――持つてくには澤山だツて事よ。早く持つて來て吳んねえ。』

お八重は何故と云ふ事はないが、合點の行かない樣な氣がしたけれども、宅に預つて置いたツて、此最中に羽縫なんぞを僞る氣にもなれないから、持つてツて返した方が世話が無くツて可いと思ふので、茶の間に來て、押入から右の品々を取出して、風呂敷包にすることにした。

お重は凝乎と見ながら、『お八重、大した物が藏つてあるんだね。』

「悉皆御得意の預り物さ。親方から返して呉れろッて云つて來てるんだから、吉さんが序に持つてお行でなんだよ。」
『ふーむ、左樣かい。惜しいものだ、今返すのは。何うだらう、阿母さんへ二三日――お天氣になるまで貸してお呉れでないか。』
「戲言は止して下さいよ。苟めにも親方から預つてる品を、私達の自由にでもなるものの樣に。」
お重は直ぐに佛頂面、『不可きやア不可いッて、一言云やア分つてらア。何か云ふてえと、二言や三言では濟されえんだよ。』
「はい〳〵。大きに惡う御座んしたね。」
お八重は上口に來て、「お前さん、濡らさない樣にお爲よ。」
「大きに左樣だ。」と、吉松は背向きになつて、「背負はして呉んねえ。」
「はい。」と、お八重は背負はして遣る。
『ぢやア、ちよッくら行つて來るぜ。』
『早く歸つてお呉れよ。親方の處で不可くッても、他へ御廻りで無いよ。』
『うむ、直に歸つて來らア。』
吉松は傘の柄を何うにか斯うにか翳せるだけに突込んで、霧の如き細い雨の中に出た。
「風をお引きでないよ。」
「大丈夫だ。」
吉松は何うしたのか家の前を右へ行かうとしたので、お八重は早くも聲を掛けて、「吉さん、何處へお行でなの。」
「うむ、左樣だッけ。親方の處へ行くのには、路が違つてやがらア。はゝは。」
吉松はお八重を見返つて、淋しげな笑を見せて、路を左へと急いで行つた。
お八重は不圖染々世の中が可厭な樣な氣が爲た。
格子戸を閉めようともせず、靑く濕氣を帶びた土間、雨の透入つた壁などを、氣の無ささうな顏をしながら凝視めて、眼に涙を有つと共に、
「實に氣の毒だッちやアないわ、吉さん勘忍してお呉んなさいよ。」
胸で斯う語つて、袖口で涙を押へて居た。
『お八重や。お八重や。』
茶の間からお重が三聲ばかり呼んだけれども、お八重は返辭もしなかつた。
雨は依然しと〳〵と根能くも降つて居て、漸次空が暗くなつて來た。もう日が暮れるのか知ら、とお八重は體を橋の如く格子戸に兩手を掛けて、空を見上げて、ほッと息を吐いて、
「まア何と云ふ可厭な空だらうね。吉さんが歸つてお出でまで、大雨にならない樣にしたいわ。」
お八重は何の神にか知らねど、鳥渡手を合せて拜んで、格子戸と障子を閉めて茶の間に來た。

（七）

お重は例の卷煙草を出して、火鉢の中を撈つて居たが、「あゝあ、情ない事た、到頭煙草の火を玉無しにしッ了つた。お八重、燐寸はあるかい。」
『燐寸位はありますよ。』と、お八重は火鉢の抽匣から燐寸を出して遣つて、直ぐに横を向いて考へて居る。
お重は莨に火を點けて、二吸ばかり深く吸つた後、「お八重、お前は阿母さんの云ふ事だと、何を云つたッても惡くお取りだから困るんだよ。」
『だッて、私には阿母さんが御云ひのやうな事は出來ないもの。』とお八重は涙含んで、「今日では吉さんと云ふ亭主はあるしさ、お茶屋奉公なんぞ、もう眞平だよ。」

「お前は左樣お云ひだがね、今日の樣では末の見据が付かなからうよ。」と、莨の灰を落しながら、「此雨には誰だツて困らない人は無いさ。だけども、火鉢には火が無くなる、人が來たツてお茶も出せないツてえなア、餘り酷からうよ。吉さんが老朽ちた老人かなんかなら、私だツて此樣事は云やしないさ。今の若さにお前、此樣では濟むめえと、阿母さんなんぞは思ふのさ。お前の容色があつてさ、今一度奮發して御覧な。隨分立派な、歴とした旦那が直き出來ようてもんだ。旦那取が可厭だツて云や亭主にしたツて、もツと甲斐性のある男が、降るほどあらうではないか。阿母さんだもの、お前の爲にならない事は云はないからね、考へ直して見ちやア何うだい。吉さんなんぞに、何時まで附いてたツてお前。」

「阿母さん、後生だから其樣事を云つてお呉れでない。」と、お八重は母の語を遮つて、「甲斐性がなからうが、働があるまいが、私には其樣不人情な事は出來ないんだよ。吉さんに働が無くツて、一生今日の樣だからツて、私は少しも厭はないのだから。」

『お前は厭はないかも知らねえが、おいらは左樣は行かねえよ。」と、お重は吸掛けの紙卷莨をお八重に與へようとしたけれども、お八重が受けなかつたので、ぷツとしながら、「いやならお止しな。無理に喫んで貰はうたア云はないよ。何うせ男に親を見替へようてお前の事だから。だがね、お八重、おいらは何樣事があつたツても、お前を手放す事は出來ねえから、お前が依然吉さんと手を切らなきやア、私も吉さんの仕送を受けなくツちやならねえから、其積りで居て貰はうよ。年を老るてえと何かが氣急しくなつて、待少が無えんだから吉さんにも其積りで頼んで置いて貰ひてえよ、些とやそツとの我儘は、お前も默つて通して呉れようしさ、吉さんだツて女房の親なんだもの、相應に無理も聞いてお呉れだらうし……まア可いや、お前が其樣に惚れてるんなら、阿母さんには氣に入らねえが我慢して遣ると仕ようさ。』

お八重は何とでもお云ひなさいと云つた風に澄して居る。

二人が何か話して居る中に、互に顔が朧になつて來た。雨の吹込むのを怖れて雨戸を閉めてあるから、平日よりは暮方が早いのであらうが、兎に角日が暮れかゝつて來た。

「お八重、燈火をお點けでないか。」

「燈火なんぞは何うでも可いわ。」と、身を起さうともせぬ。

「燈火が無きやア、不景氣で陰氣で。」

「不景氣だツて陰氣だツて可いわ。燈火があつたツて、何うせ陽氣にならうではなしさ。」

「何うすれば其樣に渦毛が曲つてるんだらう。何う云へば斯う云ふで。』

「後生だから、何にも云はないでお呉れよ。少し考へてる事があるんだから。」と、深く〳〵垂頭いて了つた。

『考へるんならね、序に阿母さんの事も能うく考へて貰ひてえもんだ。」

「煩憂いわねえ、默つてゝお呉れツて頼んでるのに。」

お八重はついと立つて、吉松の歸宅を待受ける積りか、上口の方に行かうとした時、水口の開いた音が爲た。

「おやツ。」

お八重が振返つた時、

「お八重、お八重。」と、水口から呼んだのは吉松である。

「お歸りなの。」

お八重はいそ〳〵臺所に行つて見ると、吉松はづぶ濡れになり、頭が脱けて能くは疊めぬ傘を投出して居た。

吉松は袖を捻つた樣に腕捲りをした手に持つて居た竹皮包と、一束の葱とをお八重に渡した。

『何を買つておいでなの。親方の方が好結果と見えるね。』と、お八重は嬉しげに顏の色がさえざえとして居る。

吉松は首背きながら、『まア後で話さア。』と、外から炭を一俵土間に持込んで、『お前は焜爐に火を澤山煽起しねえ。』

『お前さん何うお爲なの。』と、お八重は眼を丸くして、『大變な景氣だわね。』

『まア可いッて事よ。伊勢本の小僧が酒を持つて來る筈だ。』

吉松は聽て足を洗つて、茶の間に來た時には、濡れた單衣は臺所に脫棄てたのか、裸體になつて居た。

『阿母さん、御免ねえ。』と、又もやお八重の袢天を引掛ける。

お重は臺所の問答を聞いて居たので、もう至極の上機嫌である。

『吉さん、上首尾だつたと見えるね。』

『なアに、其樣でもねえんで。だが、待たせて濟まなかつたよ。』と、吉松は洗つたかとも見ゆるばかり濡れた頭髮を氣味惡さうに、左右の手の指の股で、頻りに梳るのであつた。

お八重は炭斗に炭を出して來て、『阿母さん、火鉢に火を煽起してお吳れ。直にお湯が沸く樣に、澤山炭を加いで下さいよ。お酒を吞つて上げるんだよ。』

『えッ、お酒を……大變な騷に成ッ了つたよ。』と、お重はほく〳〵もので、臺所から消炭を探して來て、火を煽起し始めた。

吉松は堅く腕組をなし、きちんと膝を合せて坐つて、お重とお八重とがいそ〳〵と働くのを見て居たが、何處にか沈着かない樣があり、且つ私かに溜息さへ吐くのであつた。

聽て酒も來て、燗も出來、焜爐に牛肉の煮える音が聞える樣になつた時には、お重の相好はもう崩出して居た。

『お八重や、不思議なものだねえ、先刻とは全然違つて、此樣に陽氣になッちやッたよ。お酒と云ふ物は陽氣だね。お酒にしても、お金のお蔭だと思やア、何を云つたッて世の中はお金の事さ。ねえ、吉さん、お金ほど難有え物はありやしないよ。』

吉松は首背きはしたが何にも云はないで、お八重が酌をするまゝ、續けさまに杯を七八重ねたのである。

『お八重、久振りだ。』と、お八重に猪口を與へて、『己等が酌を爲よう。』

『左樣。』と、お八重は酌をして貰つて一口喫んで、嬉しさうに吉松の顏を見た。

お重は二人の樣を、流石に憎いとも見ぬらしく、『吉さん、私まで氣が嬉しくなッちやッたよ。お金さへあれば、直に斯う世界が變ッ了ふんだから、本統にお金ほど陽氣な物はありやアしないよ、ねえ吉さん。』

吉松は苦笑を爲ながら、『まア其樣ものかも知れねえ。』

『なに知れねえ事があるもんかね。お金さへありやア、親子の間だッて、夫婦の間だッて、口論一つ出來ようではなしさ、此通り仲良くして行かれるんだよ。おほゝ、ねえ。吉さん、欲しい物はお金だね。おほほゝほゝゝ。』

吉松はお重の高聲が、催促がましう聞えたので、鳥渡上口の土間に出て行つて、茶の間に復つた時は、掌の中に何か握つて居た。

『阿母さん、幾許か纏めて何してえと思つたんだが、酒と此ッぱかしきやア出來ねえんだ。些少のは分つてるが、今日は此で不承してお吳んなさい。』

吉松がお重の前に置いたのは、五十錢銀貨幾

個かを重ねたのである。

　お重は斯くと見るより、舌衝しながら銀貨を取上け、「一い二う三い四う五い六う」と、数へ了つて吉松の顔を見上げて、「二圓あるんだね。何うも難有う、済まないね。此はまアお貰ひ申して置くよ。」と、紙に捻つて帯の間に挿れて了つた。

　お八重はお重に與へ方の多過ぎたのが不平らしく、「吉さん、阿母さんに彼様に遣ツ了つて、宅の事は可いの。」

「まア可いツて事よ。お前は默つて居ねえ。」と吉松は叱と斯う云放つたが、もう酒が醒めて了つたのか、但しは若く酔ふのが其稟性であるのか、顔の色が青白めて眼には異様な光を持つて居た。

「だツて、阿母さんに彼様に膽斗お遣りでなくツても。」

　お重はお八重の顔をじろりと見ながら、早くも其詞を遮つて、『三圓のお金が多いツて云ふのかい。多きや返しても可いや。だがね、おいらの胸算用だと、もう二兩位は――五兩のお金は呉れたツて可かアねえかと思つてるんだよ。』

「まア阿母さんは。」と、お八重は呆れ果て、『何うすればお前さんは、其様に悪どい事が云へるんだらう。呆れて物も云へないよ。』

『物が云へなきや、引込んでるが可いのさ。』と、お重は吉松に對ひにこ〳〵しながら、「吉さん、左様ではないかね……吉さんの前だけども、私なら彼品で默つて十五兩は借りて見せるよ。左様さね、吉さんの事だから……私へ三兩……左様さ。」と、小首を捻りながら、『まアざツと積つて壹兩二分、合せて四圓五十錢と見たツて、吉さんの懐中にや何だ五圓と、半端が幾許か殘つてようと云ふもんだ。吉さん、御手の筋だらうね。おほおほほゝゝゝ。』

「えツ。」と、吉松の顔色は上の如くなつたが直ぐに思直した體で、「はゝはゝゝゝ阿母さん、そりや何の話ですかい。」

「お分りでなきア、まア止しませうよ。お八重、もう一杯酌いで呉んな。」

　お八重はもう怒切つて居て、酌をして遣る處でなく、『阿母さん、お前さんはまア何をお云ひなんだよ。云ふ事に事を缺いて、まア飛んでも無い事をお云ひだよ。』

「何が飛んでもない事だよ。其様に違つた事は云はねえ積りさ。吉さんが先刻の物で融通をしたツて云ふんなら。』

『吉さんが何時其様事をお云ひなんだよ。』

　お重は冷笑ひながらも、「さうさね、おいらが悪かつたら――おいらの邪推だと云ふんなら、謝罪らうよ。ねえ吉さん、謝罪つたら勘忍してお呉れだわねえ。」

「なアに、謝罪つて貰はないだツて、其は可いんだが……えゝツと……お八重、家外は依然降つてやがるだらうな。」

「お前さん又何處かお出掛けなの。もう今夜は止して下さいよ。」と、お八重は耳を傾けて、「お聞きよ、何だか雨の音が聞えてる様だよ。」

「左様か。」と、吉松は不愉快さうに其處を見廻して居たが、ごろりと横に倒れて、取つて付けた様に、「いやに悪く酔ツ了やアがつた。阿母さん、御免ねえ。』

　お八重は押入から枕を出して來て、吉松の頭に宛行つて遣りながら、「風をお引きだと不可いよ。」

　吉松は默つて居る。

　火鉢の傍に復つたお八重も、物思はしげに垂頭いて、お重の方は見返りもしなかつた。

『やれ〳〵……そろ〳〵お暇申しますかね。』と、お重は猪口を置いて、「吉さん、今夜はお

お神さんの事だから、お八重さんがお困りだらうからッて。』
「あのお神さんが。』
「うむ、まア左様だ。漸との思で何とも云へねえ位苦しい思をして、漸との事で十五両……十両貸してお呉んなせえと遣付けて見たんだが、五、五、五両にして置いたんだ……其中から三両だけお袋に遣ッ了つたんで、……左様だ、半端ばかしが彼此、三四十錢は殘つてる筈なんで。」と、吉松は酒に噎せた故か、斯く語るさへ如何にも苦しげであつた。
「だから、私が止めたんだのに。」と、お八重は詰らなさうに吉松を見て、「阿母さんに三圓だなんて、何だッて御遣りなつ。」
「まア可いや。明日に成りやア、又明日の風が吹かうおやねえか。」
『風ツて云やア、又土砂降になッちやツたよ。』
「為様がねえなア。何うせ為様が無えや、寝るてえ事に為よう。』
「あ、左様しませう。」
お八重は飯を食つたけれども、吉松は腹が一杯だと云つて、其儘寝て了つた。
雨は雨戸をた〻く程の横降になつて、吉松は眠らず、お八重も眠れず、十二時迄が過ぎまで話聲がして居た。

（九）

雨は其後幾日か降續けて、何時霽る〻とも見えなかつたが、其間吉松は毎日金の算段に出掛けて行くので其が何時も成功して、朝夕に事缺かざるだけの米薪の料を、お八重に給へつつ幾日かを送つて居た。のみならず、其都度酒を調へて來ては氣が鬱ぐの、陰氣であるのと、膽斗は喫めぬ口だけれども、酒の氣が無くなると、情なくて居るので、お八重は氣掛りでならぬけれども、此雨に氣を腐らすのは、自分とても同一である、女と違つて男は別けて迂かしさも幾倍であらう、それに付けても、早くお天氣にしたいものだと掃晴娘の幾箇かが軒端に釣されたけれども、其甲斐が無かつた。
吉松の元氣は昨日迄は兎に角挫折けずに居た様だが、今朝は茫然火鉢の前に坐つて、稍雲の薄くなつた空を、懐愛しげに見上げて居る中に、何時となく雨も止み雲も動出して、ちら〳〵と日の光さへ漏れ初めた。
臺所に居たお八重は、吉松の傍に飛んで來て、「吉さん、お天氣になつて來たよ。御覧よ、緣側へ日が當つて……ねッ、ほら。」
吉松は首肯いたばかりで、依然元氣が無いのである。
『お前さん、何うお為なの。漸とお天氣になつて、まア可いと思ふと、お前さんが煩つてでもお呉れだと、それこそ打ツたり蹴ツたりなんだわ。』
「心配する事アねえよ。」と、力の無い聲で斯う云つて、落膽して居るかの様。
お八重は吉松の顔を覗込んで、「今日の事なら、もう心配お為でなくツても可いよ。お天氣にさへなれば、私だッて内職をしたッても、お前さんに心配させはしないよ、吉さん、餘り考へてお呉れでないよ。』
吉松が依然元氣の無い顔をして考込んで居るので、お八重は臺所を了つた上でと彼方へ行つた。
途端に格子戸を開けた者がある。お八重が行かうとするのを、吉松は乃公がと上口に出て行つた。今來たのは親方から遣ひに、小僧の源が來たので、吉松に直ぐに來る様にと云ふ事と、羽織によこして置いた物は、何れも大急ぎの品であるから、直ぐに持つて來て呉れる様にとの事であつた。
吉松の顔色は赤くなり又青くなつた。直に後

から持つて行くからと、小僧の淵を浚して置いて茶の間に戻つた時は、顔は人の色を失つて居た。

水仕事を了つて來たお八重は、吉松の顏を見るより吃驚して、『お前さん何うお爲なの、まア顏の色と云つたら。』と、凝乎と見つめる。

『なアに、ど、ど何うするものか。親方の處から、迎へをよこしたんだが……今日は何だか氣が進まねえんで……何も今日に限つて天氣になりやアがらねえだッて。』

『其樣事をお云ひだッて爲樣が無いよ。久振りにお天氣になつたんだから、親方の方だッて仕事が溜つて居ようし……あゝ、斯うしたら可いだらう。私が親方の處へ行つて、吉さんは病氣で今日だけ上れませんからッて、斷つて來ようよ。それに、お神さんへ先日のお禮も云ひたいのだし。』

『止しねえ、止して呉んねえ。お前を遣るくれえなら、乃公が行かア。』

『だッて、お前さんは……可笑いわねえ。』と、お八重は奇幻な顏をして居る。

『可笑きやア笑ふが可いや。』

吉松の語調が何時となく荒々しかつたので、お八重は默つて了つた。

お八重は少時して、『まア熱いつたッちやアない。』と押入から團扇を出して來て、襟を寛げながら胸を扇いであつた。

家根には彼方此方鳥が啼交はし、緣の端には麥藁蜻蛉が來てとまり、遠くの方には蟬の聲も聞えるのである。

『御免なあい、御免なあい。』

放擲つた樣な語調で案內を請ふのは、今歸したばかりの小僧の源の聲である。

吉松は吃驚しながら立上つたが、お八重の方が出口に近かつたので、早くも上口に出て行つた。

吉松は今更お八重を止めもならず、出ても行かれず、坐つても居られず、立つたり居たり、緣端に出たり、臺所に行つたりして居たが、お八重が顏を歸して茶の間に戻つた時には、火鉢の傍にきちんと坐つて、腕を組んで垂頭いて、石の如くに堅くなつて居た。

お八重は急いで茶の間に來たが、吉松の此樣を見ると、悲しさが先に立つて、涙に眼前が暗くなつて、悄々と其處に坐つた。

稍あつて、『吉さん、飛んでも無い事を爲ておくれだつたわね。』と、泣出さぬばかりの聲である。

『勘忍して呉んねえ。』と、吉松の聲は泣いて居る。

『いゝえ、其は私の方で云ふ事だわ。吉さん、云後れたけども、何卒勘忍してお呉んなさいよ。』

『お前が惡いんぢやねえや。』と、吉松は指頭で涙を拂つた。

『まア、其よりか、差當つて何うしたら可いか知ら。吉さん、斯うなつたら斯うッて的でも御在りだつたのかい。』

『そ、そ其時には、乃公だッて、斯うも爲よう、彼あも爲ようッて、考えてた事もあつたッけが、此樣に早く御天氣になりやがッて、今日の今ッて事に……乃公にや的も考も出、出なくなッて了つたんだ。』と、自棄に成つた樣な語調で、『何うせ爲樣が無えんだ。』

『爲樣がないッて、お前さん、其で濟みやア可いけども……。』と、お八重は考へながら、『お金は幾許なの。』

『お前のお袋が云つた通り、十五圓なんだ。』

『十五圓。』と、お八重は一人當惑の眉を顰めて居たが、軈て吉松の顏を凝乎と見て思切つた樣子で、『私が又八王子へ行つたら。』

『不可え。』と、吉松は言下に止めて、『お前と離

別れて何を爲たッて面白い事があるもんか、又お前に苦勞をさせるのは、乃公にや出來ねえ。』
『だッて、お前さん。』
『お互に今日まで苦勞を仕合つたんで、もう澤山だ。何時まで同一事を爲て居たッて、此より樂みだと云ふ事アあるめえと思ふんだ。』と、吉松は懷愛しさうに お八重の顏を見ながら、『お前に好い考案がありやアだが‥‥別れるなア御免だぜ。』
『私だッてお前さんに別れるのは。』
二人は凝乎と眼を見合せたが、お八重は涙に吉松の顏が見えなくなつた時、覺えず泣聲を上げて、『二人一處に、何うにでも、成る樣に成ッ了へば、私は實に本望だわ。』
『うむ。』と云つて、吉松は屹とお八重の手を握つた。
お八重はもう何事も思はず、ひしと吉松の手に縋つて居た。

* * * * *

其夜は幾十日振の月夜、而も十六夜の月は、一片雲なき空に懸り、星の光も別けて麗しく、芝の大通が埋るばかり人出の多かつた夜、吉松とお八重は二人手を攜へて、納涼にでも行く體で家を出たぎり、つひに歸らなかつた。二日過ち三日過つ中に、種々の噂の種にされたが、死んだのか生きて居るのか、結局分らず了ひであつた。

八幡の狂女

（一）

赤坂溜池の並木の櫻花が夕風に散る五時頃、鴛鴦と呼ぶ待合の隣家に、高松と瀬戸の表札を打つた門を入つたのは、電信配達夫であつた。

『高松さん、電報。』と、二聲ばかり呼ぶと、返辭と共に小走りの足音が聞え、玄關の障子を開けて顏を出したのは、召使らしい年輩十六七の女である。

『電報。』と、愛想も無く鋭く云つて渡した電信を受取ると共に、小女は急いで奥へ行つた。

『奥さん、電信が參りましたよ。』

茶の間に小說らしい書を讀んで居た女主は、電信の宛名を熟くも見ず、受取用紙に到着の時を五時十分と書入れ、認印を捺して小女に與へた。

小女が受取紙を玄關へ持つて行つた後で、直ぐに封を切つて讀下すと共に小首を傾けた。

『チチシススグカヘレスズキ……父死す、直ぐ歸れ、鈴木……鈴木と云ふのは……宅へ來たのか知ら。鈴木と云ふ人から、此樣電信が來る譯は無いのだし……臺灣の旦那さまから來たんだと思つたのに……。』と、此處に到つて、初めて宛名を能く讀んで見た。

『おやツ、高松方かねとしてあるよ。かねと云ふのは……兼や、鳥渡お入で。兼や、兼や。』『はい。何か御用で御在ますか。』と、もう臺所に働いて居たと見えて、前の小女が襷を脫しながら、敷居の外に手を支いた。

『兼や、此處へお入で。お前の家の苗字は鈴木と云つたツけね。』『はい。』『ぢやア此電信は、お前の宅からお前に來たのだよ。』『えツ、私の宅からで御在ますか、あの私へで御在ますか。』と、如何にも氣遣はしさうにもう顏色を變へて居た。

女主は首肯きながら、『宅に來たのだと思つたものだから、つい私が開封したんだがね、實に濟まなかつたね。』『いえ、如何致しまして。あの、何と書いてあるんで御在ますか。』『まア此處にお入で。』と、女主は電信をお兼へ渡して、『何だか、大變な……。』『えツ、大變な……。』と、お兼は電信を持つ手が震へながら、『父、死す……まア、父死す――阿爺さんが死んだツて……』と、覺えず聲を逆まして、『奥さま、奥さま、阿爺が死んだんで、死んだんで御在ませうか。ま、ま、死んだんで……。』と、聲も語調も亂れた。

『電信で見ると左樣だね。』『まア阿爺さんが……病氣だとも、如何かあるとも、何にも音信が無くツて突然に……まア如何したんで御在ませう。』と、泣聲に成ると共に、袖で涙を蔽うた。

『左樣さね、電信の事だし、委しい事は書けも爲ないのだから……何にしてもお前は直ぐ歸らなければなるまいが……。』『はい、奥さま、誠に濟みませんけども、二三日、葬式さへ濟ませますと、直ぐに又歸つて參りますから……。』『それは可いがね……他の事とは違ふのだし、私の方が何樣に不自由でも、其樣事は云つて居られないのだから……。』

女主の樋野の外には、下婢としてお兼が居るばかりで、主從二人の所にお兼に行かれては、今夜からもう困るのである、樋野も清く暇を遣りたい――それも二三日と云ふのではあるし――けれども、語調には幾分か遺憾さうな所も見え

る。お米も其を察しると、如何にも氣の毒で、強ひてとは云ひかねるが、強ひて乞はねばならぬ場合であるから、自儘過ぎると思はれてもと覺悟した。

「それでは奥さま、何卒二三日……實に濟まないんで御在ますが……。」と、電信を見ながら、またほろ〳〵と涙を溢すのである。

此樣を見ると、樋野は一層淸く暇を遣りたいので、「私の方は好いのだから……不自由と云つた處が二三日の事だし。其位の事なら、一時誰か賴む樣にするからね。此方の方は心配しないで、直ぐに出發が可いよ。」「はい、難有う御在ます。實に濟みません。」と、額を疊に擦付けて禮を云つた。

『お前の家は、慥かお前の兩親二人ツきりだツけね。』「はい。阿爺と阿母と二人限で御在ますから……それで御在ますから、阿母が一人で何樣に困つて居りませうかと思ひますると……。」と、又さめ〴〵と泣く。

『其では尙更、今からでも可いからね、直ぐに出立が可いよ。』「はい、實に濟みませんけれども、其では今夜の汽船で參りたいと存じます。」「あゝ左樣お爲。今夜船が發るんだね。」「はい、寔、巖島を十時に發ます船が御在ますから……葬式さへ濟ませますと、直ぐに歸つて參りますから。」「左樣爲てお呉れ。此方もお前が知つて居る通りだからね……直ぐに支度を爲るが可いよ。」「難有う御在ます。」

お米は悄然と女主の前を退いて、臺所に來るともう遠慮する人も無いから、聲こそ立てないが泣けるだけ泣いて居た。

『病氣には違ひないけども、どうしてまア此樣に急に……前から知つて居ると、鳥渡でも逢ひに行つたものを。親子三人、他に賴に爲合ふ人と云つては無いのだから、阿母さんと私と二人切に成つて了つたのだから……あゝ心細い事だ。私よりか阿母さんが嘸ぞ心細く思つてお居でだらう。何にしても早く行つて、阿爺さんの切ては死顏にでも逢はねば……奥樣からは直ぐお暇が出たし、早く今夜の船に乘つて、故鄕の八幡に着いて、父が死去の樣子も聞きたい、母にも逢ひたいと、何時か淚を收めて、臺所の用を出來るだけ手早く爲し了つた時は、もう日が暮れて居た。

『米や、お前支度が出來たかね、鳥渡來てお呉れ。』「はい。」

お米を待ちかねて居た樋野は、「お前もう支度は出來たのかい。」「はい。此から致しますので……。」「これから、まだ支度をお爲では……。」「はい。御臺所の……。」「其樣事は打擲らかして置いたツて可いんだのに……直ぐ支度を爲てお呉れ。これはね……。」と、樋野は包金をお米の前に置き、「ほんの私の寸志だけだが……いゝえ、其樣に御禮をお云ひ程は入つて居ないのだよ。お前の往復の旅費に足るや足らず、足りないかも知れないがね、ほんの寸志だよ。」「はい。」と云つたばかりで、お米は餘りの嬉しさに禮も口には出ぬ。

『お前が遠慮するだけは入つて居ないのだよ。それから、此は香奠に、何卒御佛前へ供へてお呉れ。又此はね、お前の阿母さんへ……何か品物でもと思つたがね、途中の荷物に成つても爲方が無いし、此樣時には少許でもお金である方が便利だらうと思つて……尤も少許だよ。」「はい。」と、お米は難有さに泣いて居る。

『ほゝほ、其樣に禮をお云ひだと、却つて恥かしい位なのだから……。」と、今度は紙の上に十二圓の兌換券を列べたのを、お米の前へ押遣り、「お前の給金の殘が此だけに成るのだから……さうだつたね、確か十二圓……。」「はい。其は、あの、お預け申して置きたいので御

在ますから・・・。』、『いゝえ、持つてお行でが可いだらうよ。お前の宅でも其だけの準備はあるだらうけどもね、何様に質素にしても、兎角に掛りたがるものだから、用意の為に持つて行くが可いよ。不用なかつたら、其時に私が又貰らうぢやないかね。』、『はい、奥さまが左様仰有つて下さいますから、此も頂戴致して参ります。阿母が何様に喜びますか――嘸有ら御在ます。私に迄此様に澤山に・・・。』と、片手に押戴き、片手には涙を押へながら、『それでは支度を致しましても・・・。』、『あゝ可い處ぢやないよ。お前一人ではあり、夜船ではあるし、餘計な物は持つて行かないが可いよ。ほんの着替だけにしてお置き。』、『はい。左様致します。』、『それでは、鳥渡御免を被ります。』、『あゝ鳥渡待つてお呉れ。』と、呼止めて、『お前が靈巖島へ行く時で可いがね、琴平町の姉さん處へ寄つてね、これ〱だから誰か二三日貸して下さる様にと、頼んで行つてお呉れ。』、『はい。屹度お寄り申しまして、私からも能らくお願申します。』、『左様してお呉れ。ではね、お前も早く支度を爲るが可いよ。』、『はい。』

　お兼が支度にとて退つた後で、槌野もお兼の意中を察して、心細さに悄然として居た。

（二）

　午前の汽船とは違ひ、午後も夜十時の房州通の汽船は、荷物を積むのが目的で、乘客は極めて尠い。今夜なぞは僅か七八人、十人とは無い様である。

　薄暗い船室に、何れも手荷物に倚掛り、又は枕なぞにして、船の機關の響に體を搖られながら、二三の人の他は半睡つて居るらしい。

『お前さまア何處迄行かッしやるかね。』と、廿二三歳の田舍商人らしい男が、直ぐ其前に退屈さうに燈火を仰いで居た五十ばかりの男に問掛けた。

『私ですかい。』と、若者を見返つて、『八幡へ歸るですよ。』、『八幡・・・ぢやア北條から上らッしやるだね。』、『左様でがすよ。お前さまア？』、『私は館山で上るでがす。』

　此問答を不圖聞付けて、手荷物を枕に横に臥つて居た一人の女が、そッと寢返を爲て、年の老つた男を見るより、覺えず聲を掛けた。

『隣家の叔父さんでは無いかね。』

　男も女を見て、『やッ、お兼さんでねえかね。』、『どうも似た聲だと思つたら・・・。』と、お兼は起上つた。

『叔父さんは何時東京へかね。』、『はアい、今朝の一番に乘つかつただよ。』、『左様でしたか。今朝の一番に・・・。』と、お兼は眉を逆めて、『左様でしたか。』、『お前は何しに歸るだかね。』、『私ですか。阿爺が死んだッて、電報掛けてよこしたから・・・。』、『えッ、阿爺さア死んだ。』と、老人は吃驚した顔を成し、『乃公は今朝一番で出たけんど、お前の阿爺さま死んだなんて事些とも聞かなかつただがね。』、『左様でしたか。それでも電信が來たんですから・・・。』と、お兼も小首を傾けた。

『電信來たと云ふでは・・・人には頓死と云ふ事もあるだで・・・。』と、老人は如何にも氣の毒さうに、『それが本統だと、實に氣の毒だアね。乃公が今朝出る時まで、其様事噂にも聞かねえだから・・・尤も、甚兵衛さアが昨夜歸らねえッてね、お前の阿母が心配して居た事は知つてるだけんど、頓死ぬなんて其様事あるべいたア、乃公は如何も思へねえだがね。』、『あの何ですか。阿爺さんが昨夜歸らないッて、阿母さんが心配して居たのは、其は何時の事でしたか。』、『それかね、左様さね、昨夜十一時――もう十二時だつたかも知れねえね。』、『昨夜十二時。』と、お兼は考へながら、『何か間違の様な事でも・・・。』、『左

樣だね。だが何だ、昨夜間違あつただと、昨夜の中に乃公の耳へも入らねえぢやなんねえだが、何にも聞かれえだから、間違あつたた思へねえね。』、「左樣ですねえ。でもね、電信が確に來たんですからね。まア如何したと云ふんだらう。」と、お兼は父が死んだと云ふのは間違で、電信の文字の過誤であつたかも知れぬ、間違であつて呉れゝば此上も無いがと、既に死んだものと思定めて居たのに、此所に疑念を生じて、兎つ追つ思案に暮れるのである。

老人も思ひかねて、『如何も其樣事は無えだツぺいよ。乃公は甚兵衛さアと昨日の午前にも口を利いただからね。頓死云ふ事もあるけんど…眞逆其樣事あるべいたア思はれねえだよ。』、『叔父さんは昨日の午前にお逢ひなすつたんですか。病氣の樣な樣子も…。』、『病氣所でねえ、酒に食酔つて、好機嫌だツけが…。』と、老人はお兼を呪と見て、「此頃はえらく酒が上つたでね、昨夜なんぞも何所かで又酒飲んで居べえツて、お北さん(お兼の母)とも話した位だよ。」、『お酒を。』と、お兼は眉を寄せて、『其樣にお酒だツても、深くは飲まなかつたんだのに。」、「いや、それがえらく飲めるだよ。以前は好人物だツけがね、港の方に仲間が出來てからはア、濁人が變つて來たツてね、村でも人が噂爲て居たツけが…。」、「港の方に仲間が出來たツて…それは何の仲間ですか。矢張漁師の…。」、「それなら何だ可えだが…。」と、手眞似を爲ながら、『博奕の仲間出來たでね、賭博事を覺えると、また飲酒事も覺えるものだでね、えらく酒上つて居ただよ。』、「左樣でしたか。」と、お兼は覺えず溜息を吐いて、勝負事には得て爭論の起るものだと云ふから、其間違から、ひよツとして其樣事にでもと、考へると斯うして船に乘つて居ても、早く母に逢つてと、もう氣のみ焦つて胸がわく／＼する。

「いや、博奕と大酒とだけは爲ねえもんだよ。彼の温順しかつた甚兵衛さアが…さア何時だツけエか…うむ左樣だ／＼。先月の—三月の初旬だツけが、港の與九郎とえれえ喧嘩ぶツただよ。」、「えツ、阿爺さんが喧嘩を—其樣劇い喧嘩を…。」と、お兼は呆れて了つて、屹と老人の顏を見ながら膝を進めた。

老人は首肯きながら、『お兼さア、阿爺さアの此頃の樣子を知らねえだから、其樣に吃驚爲るだがな、其喧嘩は甚兵衛さアが勝つてな、與九郎が逃げて了つたと云ふ事だよ。」、「まア。」と、お兼は其時は勝つたからこそ能けれど、もし負けて怪我でも爲れたなら…と思ふ其人は死んだとの電信、彼を思ひ此を思ふと、一刻も早く八幡へ着いて實否を正したい、あゝ、船の歩の遲い事だと、唯もう曉天近く成るのを俟つのである。

「私等が方にも、大喧嘩があつたでがすよ。」と、館山の者と名乘つた男は、斯う云出した。

お兼は後に下つて了つたが、老人は乘出して、「矢張博奕か酒からだツぺいね。」、「はア左樣でがすよ。喧嘩の擧句、解死人騷で、一月ばかしてえものは、はア手古摺つて了つたでがすよ。」

老人は首肯きながら、『いやもう喧嘩は可厭だでねえ。それも漁場の爭論なら、乃公だツても他に後は取らねえがね、博奕や酒の上の喧嘩ぢやア、はア外分が惡いだからね。』

隅の方から寢惚けた聲で、『北條には何時に着くでせうかな。』と云ふのは書生らしい男である。

館山の男は、『さうでがすな。彼是四時、五時には成りやすまいよ。』、『まア五時と思はんければ成らんかな。』とばかりで、また寢て了つたらしい。

話聲は此所に消えて、彼老人も手荷物に頬杖を支きながら、こくり／＼と眠つて居る。中に

は艪をかいて居る者もある。幸ひに浪が穏かなので、嘔吐者などは無く、至極静かな中に、お兼のみは時々溜息を吐いて、寝返を打ちなどして、唯父と母との事を思ふより外はなかつた。

（三）

鏡が浦一體にまた朝靄に被はれて鷹の島も沖の島も、唯薄黒くそれかと思はるゝばかりだ。唯富士山の頂上には、朝暾の影を映し、伊豆の方の海面に、青く水蒸氣が立上るばかりで、館山、北條、那古あたりは未だ其ぞとは見定められぬのである。

富山の半面に朝暾の影の映つた時、大房の岬に當つて、汽笛の音がぶぶー〳〵と盛んに起つた。

汽笛を鳴らして鏡が浦へ入つて來たのは、東京灣汽船會社の中村丸である。

今は肌を刺す程の風では無いが、北風の綿を透して、戰慄はるゝのを厭はず、中村丸の甲板に唯一人の女が鐵の欄干を両手で確と握つて陸の方を見詰めて居るのである。

船形を横に見る頃には、那古の山にも朝暾が映つて、鷹の島も沖の島も見え、那古、川崎、港の川口、八幡の濱も見える。浪除の松林の中は尚ほ暗くして、直ぐに彼方の我家は見えぬが、八幡宮の石の鳥居や、松林と松林の間に奥深く認められた時は、女は覺えず手を合せて伏拜んだ。

八幡を背後に見る頃には、北條の渡船場に人の影が見え、艀はもう中村丸近く艫寄せるのである。

女は渡船場に艀から下りるが早いか、濱邊傳に八幡の方へ駈出した。

まだ艀の中に居た老人は聲を掛けて、『おーい、お兼さア、同伴に行こでねえか。おーい。』

お兼は聞えぬのか、返辭もせねば見返もせず、老人が渡船場に立つて見送つた時は、もう二町も距れて、見る〳〵其影が小さくなつた。

『無理も無えだよ。乃公陸の方を行くべい。』と、老人が北條の方へ行かうとした時、中村丸は又もや盛んに汽笛を鳴らした。見返ると、もう館山に船脚を止めて、艀が艫寄せる彼方、鷹の島にはもう一杯の日光が映つて居た。

* * * * *

まだ芽を出さぬ槿の生垣の裏口から、息を切つて入つたのはお兼である。

見ると、まだ雨戸が開けて無い。唯雨戸の節穴から家内に火の點いて居るのが僅かに認められて、家内には誰か人の居るらしい氣配である。お兼は少時歩を止めた。家内の様子を窺ひ見たいとの念もあつたらうが、それよりは直ぐ入つて行つて、父は愈よ電信の通りであつたら、如何しようとの畏怖を抱いて居るからである。

藁葺の屋根には苔蒸し、差掛つた樹の見る影も無いのも、我家の懷愛しさは、朝暮思出さぬ事も無かつたので、直ぐに戸を打いても入りたいのを、我ながら不思議なほど入りかね、悄然として佇んで居ると、家内からは母の聲が朧げながら聞えた。

『お兼が歸る迄、其儘爲て置いて呉れさッせい。今日はア午前には戻つて來るだ思ふからね、』『お北さアの云ひなさる所も無理は無えだよ。昨日の電信を見たら直ぐに來なさるに違えねえだよ。彼兒は彼通りの親思だで……。』と、云ふのは、汽船で出會つた彼老人の妻の聲である。

問ふ迄も無く父が死んだのは、家内の母等の語の様子でも知れて居るので、お兼は今更の様に悲さが胸に迫つて來て、覺えず一聲高を上げて泣出した。

『誰だか泣いてる様だよ。』

老人の聲が呼ぶ間に、お北はもう雨戸を開けた。
『ヤアッお兼でねえかよ。』、『阿母さん、まア大變な事に成つたのね。』と、お兼は涙をほろ〳〵溢しながら、母の顏を見上げた。
『お兼さん、えらく早く來さッしやつたの。』
お北も涙を押へながら、『當信見たかね。』、『あア。』と、お兼は顏に袖を當てゝ泣くのである。
『まア入んなさるが可え。』
隣家の女房は下りて來て、お兼の肩を押へて、徐かに家内に伴うた。
お兼は宛然十二三の子供の様に、押されながら僅かに家内に入つて、上框を上るにも足元を忘れて、押据ゑられても尚ほ顏から袖を放さなかつた。
『お兼や、様子は後で話して聞かせるだがね、阿爺さアの顏見るが可えだよ。』と、お北は泣きながら、『お前歸宅る迄は、明日に成つても、其儘爲て置く積りだッけが、早く歸つて呉れたで……。』と、後は何を云ふのか解らぬ。
お兼は袖を除つた。見ると二枚折の半屏風が逆さに立てゝあつて、古びた白金巾を敷いた臺の上には、紙の戒名を貼付けた白木の位牌、花立香爐、燈明には黑き油烟立上り、蠟燭は燃切つて僅かに灰を止め、線香の烟に家内が暗く見える。
お兼が香爐に香を撮込む傍から、隣家の女房は、『實に飛んでも無え事でね、お前さア嘸ぞ驚きなさつたらうね。』、『はい。如何して此様事に……。』と、お兼は顫へる膝を進めて、片手に屏風を搔除けながら差覗くと、父は死骸と成つて横臥り、顏には白き巾が掛けてあつた。
『阿爺さん。』と、其一聲は腸を絞つて出たので、後は唯泣いた。
お北は泣伏して居ながら、『もう顏見ねえが可いだよ。』、『其方が……。』と、隣家の女房がお兼の眼の前を遮る様に手を伸して、屏風で圍まうとした。
『あら、叔母さん、東京から態々歸つて來たのは、阿爺さんの——せめては阿爺さんの死顏にでも逢ひたいと思つて……。』と、突と身を寄せて、徐かに白巾を除くと共に、覺えず泣聲を迸まして、『あらッ阿爺さん。』と、云ひながら、我知らず四邊を見廻した。
甚兵衞の顏は、最後の苦痛を思遣らるゝ程——如何にも其口惜さが思遣られた。眼は生ける澤こそ無いが、今尚ほ敵手を睨んで居る様で、左の口尻から頰へ筋が釣つて、現はれた齒は嚴と嚙締られて、唇には血を洗はれた痕が殘つて居る。で、顏色に、毒にでも中つたかの様に、薄く紫を帶びて居た。
お兼は徐かに父の顏に白巾を掩うて、少時は尚ほ其所に泣いて居たが、軈て母の傍に來て頻りに涙を拭うて居た。
お北は娘が歸つた爲に、今迄張詰めて居た氣が弛んだのか、もう泣崩折れて居る。
隣家の女房は、『お北さア、折角お兼さアが歸つて來たのに、お前さアが其では成ん無えだ。これ、お北さア、それはア詮様が無えだよ。』、『甚兵衞さアが彼様に成つて了つただからね……お兼や、お兼や、あゝ如何しべいかね。おらもう一所に死んで行きてえ思ふけんど……。』と、聲や話調ばかりでは無い、様子がまるで狂はしげに見えた。
母が此有様であるから、お兼が自然氣を張らなければとの意も起り、漸う涙を收めながら、『阿母さん、阿母さんが其様事をお云ひですと、私が如何して可いんだか……阿母さん、阿母さん、後生だから沈着いて居てお呉んなさい。え、阿母さん、私も種々阿母さんへ——種々聞きたい事もあるんだしね……阿母さん、阿爺さんは病氣だつたの。え、阿母さん。』、『病氣

なら、其りゃ定業だけんどな……まア情ねえッて、此樣情ねえ事あるもんでねえよ。おら話しるさへ……。」と、また泣く。
隣家の女房は氣の毒に膝を進めて、「お禰さア、阿爺さアに代つて、おれ話しるがだね……。」「いや、おらが話爲べい。」
斯う云つた男の聲に、お禰は此時初めて氣付いた樣に次の間を見た。尤も、二三人の人が次の間に居る樣に思はぬでは無かつたが、其も此も忘れて了つて居たのであつた。
「お禰さア、お前乃公を見忘れてるだね。」
斯う云つて入つて來た男は、年輩四十五六、色は赤黒く、張切れる樣に堅肥に肥滿つて、如何にも岩乗作である。太き眼の鋭く、眼尻に長い毛の生えた豆粒程の黒子があつて、口は大きく、齒齦が紫色である。髮も鬚髯も何時手を入れた儘か、茫々として居て憎さげに汚らしいので。お納戸地に紺の格子縞の布子に、黒木綿の三尺帶を締めて、上から廣袖の長褞袍を被つて居た。
「それも左樣か、忘れるも無理で無え。お前が何だ此ッぱかしの時……。」と、手眞似で身材を示して、「六歳か七歳か、何でも其位の時分には、能く見た事があつたよ。乃公はね、湊の與九郎と云ふだがね……。」
お禰は與九郎の名を聞くと共に、夢中で聞得た話を思起して、慄然として熟と其顏を見詰めた。
お北は尙ほ泣聲で、「お禰や、與九さんへ能く禮を云ふが可えよ。阿爺さアの今度の事に就いて、與九さんがえらく肩を入れて世話爲て呉れさッしやるだよ。阿爺さアと長え馴染と云ふでも無えのに……能うく禮を云ふが可えだよ。」「なアに、禮なぞ云うて貰ふべい思ふなら、乃公はア世話爲ねえだ。お禰さア、禮を云ふ事成んねえだ。可えか。」
お禰は唯目禮したのみであつた。
お北は又、「それに阿爺の死骸見付出して呉れたのも、與九さんだでなア。」
阿爺の死骸を見付けだしたと云ふので察すると、父は非業の死を遂げて、一時は人にも知られぬ處に打棄てられて居たものと見える。夢中で聞き得た、博奕大酒の上の間違から、他の爲に非業な死を遂げたのであらうと察しられる。それには、曾て與九郎と爭論を爲た事があるとやら聞いたのも思浮め、其與九郎が此男であるのかと思ふと、何とも云はれぬ心持が爲て、他から怪しまるゝ迄與九郎の顏を見詰めて居た。
與九郎はお禰が自分を凝視めて居るのは、父の最期の——いや死骸のあつた場所、其有樣を聞きたい爲であらうと、斯う思つて、一層得意氣に語り初めた。
與九郎が云ふ處に依ると、甚兵衛は八幡濱の北、湊川の川口の直ぐ南の、東に寄つた松林の中に殺されて居たと云ふのである。何者に殺されたかは、北條の警察署から出張した警部巡査が、非常の熱心を以て手掛を探したけれども、何の見出し得た處も無いと云ふのである。就いて馬鹿を見たのは自分で、最初に死骸を見出したと云ふのと、先月甚兵衛と口論した事があると云ふのとで嫌疑を掛けられ、昨朝拘引せられて、漸と嫌疑が晴れて放免されたのは、昨夜の事で、それから此家へ一足切つて、まだ一度も自宅へ歸らぬと云ふのである。
「警部だア巡査だア云つたッても、はア馬鹿な者でねえか。はゝは、一番最初に見付けた云うて、汝甚兵衛殺したであらうッて、阿房めッ、乃公を北條さア引張つて行きアがつて、えらく調べただよ。いくら調べたッて、知らねえ者が知る筈が無えだから、乃公ア知らねえ一點張で押通して了つただ。證據ねえだから——あるべい筈の無え證據なら、何處からでも出て來べいが、無え證

樣有る筈が無えから、嫌疑霽れたツて歸したツけが、はゝはゝゝ。警部だア巡査だア云つても、はア馬鹿ばかり揃つて居やがるだよ。あは、はゝゝ。」
與九郎は斯う大笑しながら頗る得意らしく見受けられた。
お兼は少時何とも云はなかつたが、與九郎の談話を聞いて居る中に、何と無く譃言が混つて居やアしないかと思はれてならぬ、けれども、警察署の取調を受けて、少しも疑ふ所が無かつたればこそ、直ぐに放免されたのであらうから、與九郎が云ふ所は少しにても譃言のあらう筈が無い、無論あるまい、けれども、何故か如何も疑はしくてならぬ、何で左樣思ふのか、自分にも分らぬ、船中で聞き得た、先月父と爭論したと云ふ其事からであらうか、いや、左樣でもあるまい、其は警察署でも嫌疑を懸けて、一旦拘引したけれども、疑はしい點が無いとして放免したと云ふのだもの、それを自分が強ひて疑ふので無い、無論疑ひはしない、けれども、與九郎の眼が――彼眼の働が如何しても譃言を語つて居るとしか思はれぬ、左樣ではあるまいけれども、如何も彼眼が氣に成つてと、唯此ばかりを種々に考へて居た。

（四）

甚兵衞の葬送は一昨日濟んで了つた。昨日からは急かに淋しく成つて、お北とお兼と二人語合ふ所は、詰りは歸らぬ愚擬に止まるのであつた。
今日はお兼が前に墓參に行つて來て、此から母が行かうと云ふので、其支度を爲て居た。
お北は今年が三十七歲、未だ老い朽ちたと云ふのでは無いのみか、姿も顏貌も此邊には人目を曳く方である。お兼は母に比べると、十三の年から東京の水に磨いた所爲か、母に似て、それよりは數段美しいのみならず、心に働はあり、物事に忠實ではあり、體も骨を惜まぬので、高松の女主の槌野が又無い者と愛して居るのである。
お北は支度を爲ると云つても、唯着物を着替へるばかりであるから、捻珠を手にして上框を下りようとして、さて圍爐裡の傍に鳥渡立膝を爲て、烟草を一吹した。
お兼は裏の藪から、樒の枝を折つて來て、母が土間に下りるのを待つて居る。
お北は鳥渡お兼を見返つて、「お前は鳥渡でも東京さへ行つて來るだね、如何しても。」
お兼は首背きながら、「どうせ左樣爲なきやアね、奧樣に濟まないもの。亡父さんの香奠から阿母さんへの御土産、私の往復の旅費にと云つて、此ばかしでも三圓からのお金を――殘らずで五圓から下すつたんだもの。此方で困るからと云つて、私が行かないで人を遣つたんぢや、餘り恩を知らない樣だもの。」、「左樣だとも。他人さまの恩を忘れては濟まねえ、お前が自分で行つて、理由えお話し申して、お暇アお貰ひ申すが可えよ。亡父さア四十九日でも過んでるだと、おらも御禮旁々一伴に行くけんど、それも成んねえし。矢張お前一人行つてた、お暇いただくが可え。それも初七日でも濟ました上が可えだよ。」、「それがね阿母さん……。」と、お兼も上框に腰掛け、「彼方では全く女中が無いんだよ。奧さまと私と二人の處に彼電信が來たもんだから、直ぐにお暇をいたゞいて來たもんだからね、嘸ぞ困つて居らッしやるだらうと思ふよ。葬式さへ濟みますと直ぐに歸つて參ります、二三日で能う御在ますからと云つて、直ぐ其日に發つたのだからね、嘸ぞ待つて居らッしやるだらうと思ふよ。阿母さんも一人で淋しいだらうけどもね、二三日一人で居てお呉れで無いか。私は明朝の一番で行つてね、明後日明後々日――明後々日か其次の日には些度お暇をいた

アに、構つて呉れねえ方が勝手だでね。」と、太助は上框の前に立ちながら、「お兼さア、淡の與九が繁々出入する様だがね、彼野郎性質の悪い奴だでね、些とでも氣許しちや成んねえよ。」、「はい、私も何だか彼人は嫌ひなんですよ。阿母さんも嫌がつては居ますがね、今度の事で種々世話を爲て呉れたと云ひますし、私が來てからだツて、葬式の時や何か鳥渡々々世話に成つたんですから、悪い顔も出來ないんですけども……何だか氣味の悪い人でね、私は彼人の顔を見るとね、斯う身柱が……。」、「左様だツペい。」と、太助は首肯き、「此村でこそ何だえれえ悪い事も爲ねえ様だが……。」と、眉頭を顰めながら、「支那の戰爭に軍夫で行つた時に、えれえ悪い事ばかし爲たで、首切られる處だつた云ふだよ。それから何處へ行つて居ただか、昨年の夏ふらりと歸つて來やアがツて……いや不良え野郎は、何時迄も不良えだえ。」

お兼は我知らず膝を進めて居て、「悪い事ツて、何様……。」、「人殺も爲たと云ふし……。」「『えッ、人殺。』と、お兼は覺えず聲を上げて、我ながら驚いて四邊を見返りながら、小聲に成り、「まア人殺なんぞを、へえ〳〵。」

太助も聲を潜めて、「寄せ付けねえが可えだよ。お袋にも注意ける様に、乃公からも云ふがの、お前も云ふが可えだよ。」、「はい。阿母さんへも能うく左様云ひませう。」と、お兼は茶を酌んで出しながら、「叔父さん、私は又東京へ——鳥渡の間ですがね——明日の一番の汽車で東京へ行くんですがね、濟みませんけども、何卒宅を氣を付けて下さいよ。三四日の中には御主人からお暇をいたゞいて歸つて來ますからね、何卒お頼み申します。」

太助は呪とお兼の顔を見て、「三四日の中に暇貰つて歸つて來るだね。」、「はい、無理にもお暇をいたゞいて歸つて來ます。」

太助は頻りに首肯き、「其なら可えがね、長く行つてるで無えよ、乃公だツても、隣家には住んで居る、年來の懇意だで、出來るだけ氣付けるだがね、一日も早く歸るが可えよ。」、「はい。何卒お頼み申します。」、『可えとも〳〵。時に阿母は、何かな、墓參だんべいね。』、『はい。もう歸る時分ですよ。』、『左様かの。』と、老人は兩手を後で組んで伸を爲し、「さてお暇と爲べい。』、『まア可いでせうのに。』、『なアに又何時でも來るだから……用あつたら裏から、呼ばるが可えよ。』、「如何も難有う御在ます。」、「やれやれ、年は老らねえもんだよ。」と、太助が又伸を爲て、背戸から出て行かうとした處に、丁度お北が歸つて來た。

「おや、まア可えでは無いかねえ。」、「留守にえらく話込んで居ただよ。はゝはゝゝゝ。お兼坊、お前も些と遊びに來るが可え。」、「はい、難有う。叔父さんも亦晩にでも。」

太助はもう行つて了つたと見えて返辭を爲なかつた。

お北は閑爐裡に手を焙りながら、「誰も來なかツたかな。」、「あのう、與九郎とか云ふ……。」

お北は眉頭を顰せて、「又來ただね。何爲に來るだか……。」

二人は迷惑さうに顔を見合せた。

（五）

高松槌野は夫の豊治が上官の命を受けて臺灣への出張中、下婢のお兼と共に留守して居るので、いとゞ淋しい處に、其氣に入りのお兼が房州へ歸つて、此四五日は別して淋しく暮して居た。

「もう歸る筈だのに、如何したと云ふんだらう。尤も、種々取込んでも居ようし、初七日でも濟してから歸る積りかも知れないよ。併し、兎も角も手紙を出した方が……。」

態々手紙を書いて状袋に入れ、切手迄貼つて、「苦や、苦は其處に居ないかい。」、「はアい。」と、答へて茶の間に入つて來たのは、お兼が居ない中、親類から手傳に來て居る下女のお苫である。

「お前ね、鳥渡之を投函て來てお呉れ。」、「はい。」、『郵便箱の在る處を知つてお居でかい。』、『はい、存じて居ります。』、「左樣かい、御苦勞だね。』、『如何致しまして。』と、お苫は唐紙を締めて郵便を入れに行つた。

槌野は茶を入れて一口飲みながら、『兼位た女は、もう二人とはありはしないよ。苫だツても普通の下女よりか餘程可いんだけども、兼を使つて居た後には、迚も一處に成らないのだから……もう一二年も使つて居たら其内には婿でも取るだらうし、其時には出來るだけの事を爲て遣りたいよ。もう足掛四年居るのだから、もう一二年も……。』

お苫が歸つたのか、徐かに唐紙を開けた者がある、槌野もお苫が歸つたのだと思つたので見返もせず、「大層早かつたね。』、「奥さま、唯今歸りました。大變に遲くなりまして……。」、「おやツ。」と、槌野は見返ると共に、吃驚する迄喜んで、「まア兼歸つて來たね。ほゝほ。私や何樣に待つて居たか……今丁度手紙を投函に遣つた處だよ。」、「如何も濟みませんでした。」と、疊に額を摺付けながら、「直ぐ歸つて參ります積りでお暇を願ひましたのに此樣に遲くなりまして……。』、『如何してお前、普通の時とは違ふし、如何して左樣行くもんかね。だがまア、能く歸つて來てお呉れだツたね。」、『はい。實に申譯が御在ません。母からも宜敷くお詫を申上げる樣にと、呉々も申しまして御在ます。」、「左樣かい、丁寧にまア。私の方ではお前が歸つてさへお呉れだと、其より嬉しい事は無いのだよ。お袋から迄其樣詫なんぞと……序の時に、宜敷く云つて遣つてお呉れよ。』、「はい。難有う御在ます。」とお兼は臺所へ行つて盆を持つて來て、風呂敷包を解いて中の物を載せて、其を槌野の前に進めた。

『おや、お土産かい。此樣事をお爲でなきやア可いのに。おや、室鯵の干物だね。私が好物な事を知つてるものだから、能くねえ。如何も難有う。」、「ほんの些少で御在ますけども、母と私とで、昨日干上げたんで御在ますよ。」、「まア、お前と阿母とで。」、「はい。實は昨日彼方を發ます積りで御在ましたけれども、奧樣に差上げます樣な物は、田舍の事ではありますし、何にも無いんで御在ますよ。一日でも後れては濟まないんで御在ますが、一日延しまして……。」、「左樣かえ。能くねえ。何より結構だよ。』と、槌野は甚く喜んで居たが、「おゝ、左樣だツけ。矢張何だつたかい、病氣で死去つたのかえ。」、『はい。それが奥さま、斯うなんで御在ますよ。』

お兼は涙ながらに、父甚兵衛が非業の死を遂げた事を物語つた。

槌野は吐息をついて、『まア！ 左樣だつたのかい。まア氣の毒だ事ねえ。それで、誰が殺したとも……。」、「はい、其が不明ないんで御在ますよ。奥さま、私は實に口惜う御在ましてね……。』、『道理だよ。些とも手掛が無いのかい。」、「はい。警察署でも隨分手を盡してるさうで御在ますけども……。」、「警察で其樣に骨を折つて居るのなら、早晩知れるに違ひないよ。」、「左樣ですけどもね、私は實に口惜う御在ますからね……。」と、背後を見返りながら、「私が男兒で御在ましてね、母を養つて呉れる者さへありますと、私や屹度此敵を……。」、

槌野は聲を潛めて、「お前には其敵の見當が……。」、「いいえ……警察でさへ知れないんで御在ますから……。」と深く息を吐いた。

「如何かして知れさうなもんだね……。」

槌野が何ほ語を繼がうとした時、お苫が歸つて居るのか、臺所の方に物音が聞えた。

「苫が來て居て呉れるんだよ。お前は苫を知つて居たッけね。」、「はい。琴平町さまの。」、「左樣なの。また今夜にでも話を聞かうからね、少時休息お爲が可いよ。」、「はい。それでは餘り我儘で御在ますが……。」「さア早く彼方へ行つてお休み。」、「はい。」と、お兼は次へ下つた。

「まア何と云ふ氣の毒な事だらう。」と、槌野は深く溜息を吐いて、「如何かして早く其科人を探して遣りたい事ねえ。」

臺所の方には、お兼とお苫と挨拶して居るのが、くど〳〵聞えるのである。

＊　　＊　　＊

夜に入つては雨がしと〳〵と降初めて、うそ淋しい。此樣晩には早く寢た方がと、槌野はお兼の疲勞さへ思遣つて、お苫と共に十時頃に寢かして了つた。

けれども、毎夜小說を讀まねば睡れぬ癖が付いて居るので、槌野は枕行燈の燈心を加へて、某氏譯の探偵小說を讀んで居た。

隣家の待合の鴛鴦で、二組ばかり藝者が上つて、一時は面の憎い迄馬鹿騷を爲て居たが、それも何時か靜まると、下の裏座敷の四疊半あたりに、爪彈のしんめりとした音締で、端唄の佗た聲が聞え出した。槌野は其に耳を傾けて、臺灣の夫の上なぞ思浮めて居たが、何時か其も聞えなくなつて、聽てうと〳〵と寢入つて了つた。

丁度二時の時計を報つた時、お苫がけたゝましい聲を上げて、「あゝッ、お兼さんが……奧さま、お兼さんが大變で御在ます。」

槌野は吃驚して飛起きたが、まだ夢の樣な氣が爲て居る。

『おほほゝゝゝ。』と、いかにも聲高に笑つたのはお兼である。

「あゝ、氣味の惡い。」と、駈けて來る足音が爲て、茶の間の唐紙を開けたのはお苫だ。

「苫、何だよ——如何したんだよ。」、「奧さま、お兼さんが……。」と、茶の間に入つて唐紙をぴしやりと閉てゝ、「お兼さんが、氣が、氣が、氣が、狂つた樣で御在ますよ。」、「えッ、兼がかい。」、「はい。」、「如何してね。」と、槌野は寢衣の上に羽織を重ねた。

「あらッ、何だか云つてますよ。ね、奧さま、何だか云つてますでせう。」

成程お苫の云ふ通りである。何を云ふのか確とは聞取れぬが、何か泣饒舌に饒舌つて居る樣である。

「餘り心配したからだらうよ、可哀想にまア。」と、槌野はお苫に命じて雪洞に火を點けさせながら、「お前に何か云ひでもしたのかい。」、「いいえ、左樣ぢやありませんけれどもね……私が不圖睡を覺しますとね、お兼どんが何だか云つてるんで御在ますよ。私や其聲で睡を覺したんかも知れませんよ。阿父さん、能くお入でだなんて——お兼どんの阿父さんは死去つたんで御在ませう 私や餘り氣味が惡う御在ますから、奧さまをお覺し申したんで御在ます。」、「口惜いだらうね、阿父さん。」と、又お兼の聲が聞える。「なに彼樣奴なんぞね、何でもありやアしないよ。早晩見てるが可い。」と、如何にも口惜さうな語調で云つたかと思ふと、もう笑ふのである。『ほゝほゝゝあゝ可笑い。可笑い〳〵。本統に可笑いぢやないか。おほおほ、おほほゝゝゝ。」、「彼樣に笑つて……氣味が惡う御在ます事ね。」

槌野は小首を傾けながら、『氣が狂つたのかねえ。」、「屹度左樣ですよ。左樣でなきやア……。」

お苫の詞の了らぬ内に、「お苫さん、お苫さん、お前さんは其處に何を爲てお居でなの。お苫さん、お苫さん。』、『お苫や、お前を呼んでるよ。」

お苫は縮上つて、「あら可厭だ、如何為ませう。』、『ほゝほ。何も其様に恐怖がらないでも……。』、「だツて、私の名なんぞを、……。』、『おほほゝゝ。お苫さんが、あれ〳〵、あれ〳〵、あれ……おほほゝゝ。』、『奥さま。』と、お苫は槌野に寄添うて、『如何したら可いでせう。』、「如何する事も無いよ。私と一所にお出で。』、「私は……。』、『お前が前に立たなきやア……燈火が後に在つてはお前……。』、『私は御免下さいまし。』と、雪洞を畳に置いて突出した。

『ほゝほ。苫も餘程臆病だよ。其雪洞を取つてお呉れ。』、『はい。』と、雪洞を槌野へ渡して、『だツて、私の名を呼んだり、笑つたりして、私が如何か為てでも……何か為てでも居る様な事を……おゝ氣味が惡い。』と、迯巡を為るのである。

『本統に氣が狂つたのか知ら。』と、槌野は獨語の様に云つて、徐かに次の間に入つた。お苫は獨身では殘つても居得ぬのか、此は次の間の入口まで來て、及腰に成つて差覗いて居た。

槌野が雪洞を翳して見ると、お兼は敷布團の上に膝も崩さず、屹と槌野を見上げたが、其人とは認め得ないのか、遺恨でも含んだ體で、朱の如く成つた顔に、瞬れるだけ眼を睜つて睨んで居るのである。

槌野は慈母が愛兒に對する様な語調で、「兼や、お前氣分が惡いのかい、如何かお為だつたのかい、え。まア顔が眞紅に成つて――餘程上せてお居での様だから、――少し氣を沈着ける様にお為。兼や、左様為て御覽。お前は何か餘程……兼や、私だよ。兼や、私だよ。』、『お兼どん、奥さまなんだよ。』と、お苫も遠くから聲を掛けた。

お兼は屹とお苫を見返つた。『御隣家の叔母さんですか。』、『あらッ。』と、お苫は尻込しながら、『私の事をお隣家の叔母さんだツて。』

槌野は其處に坐つて、『兼や、お前私が分らないかい。え、私の顔が不明いのかえ。』と、お兼が此でも認め得ぬのか、これでもかと云ひたげに、自分の顔をお兼の眼の前に寄付ける様に為る。

お兼の眼の色は全く狂氣したものの様に見えて居たが、此時平生の色に返つた様に――それも瞬時で、忽ち泣出しさうな顔に成つて垂頭いて了つた。

槌野は緩かに右の手をお兼が背に置いて、「兼や、氣を鎭靜けなきやア不可いよ、些し氣を鎭めて御覽。兼や、少しは靜いたかい。水でも上げようか。苫や、お前水壺に水を一杯……靜かにお為よ。靜かにして水を持つて來てお呉れ。』、「はい。」とは云つたが、何だ恐怖しかつて居て、容易に行かうとはせぬ。

『お前が何なら、私が持つて來るからね、お前は此處に來て、兼の背中を擦つて遣つてお呉れ。』、「はい。いゝえ、私が水を持つて參ります。奥様、何卒其御雪洞を……。』、「燈火を持つて行かれちやア……。』

お苫が雪洞を持つて行つたので、後は暗黒く――眞暗と云ふのでは無く、一間隔てた臺所の障子に映つた明に、幽に人の顔の形位は認め得らるゝ程である。で、槌野はお兼の背を擦りながら、片手にお兼の手をぢッと握つた途端に、お兼は其前から泣いて居たのか、槌野の手の甲に二滴三滴涙が墮ちた。

『兼や、お泣きの事はないよ。能うく氣をお鎭め。お前に心配な事があるのなら――お前に料見の付かない様な事があるのならね、遠慮しないで、私へ相談してお呉れ。及ばずながら私が力に成つて上げようからね。いゝかい、解つたかい、解つたら、氣を鎭めて、沈着いて居なければ……。』、「はい、お水。』と、お苫が持つて來た

水壺を、槌野はお兼の口元に差付け、『さアお水だよ。一口飲んで御覽。そして氣を鎭めて‥‥飲みたく無いのかい。飲んだ方が可いだらう。さアたツた一口‥‥。』

槌野は口と手で強ふる樣にして、水を唯一口お兼に飲ましめた。お兼は深く強き溜息を一時にほうツと吐いて、徐かに顏を上げた。『兼や、鎭靜いたかい。』、『お兼どん、もう快いの。』

お兼はしげ〱と槌野とお苫の顏を見て、さて四邊を見返つて、きよろりとした眼をしながら、『奥さま、私は如何かしたんで御在ますか知ら。』、『お前、もう何ともないかい。』、『はい、私は如何かしたんで御在ますか知ら。』と、倚ほ顏を赧めて、心の底に甚く恥羞を知つて居るらしい體で、『お苫さん、私は‥‥。』

お苫は此處ぞと云ひたげに、『私は實に吃驚してよ、まア何樣に氣味が惡かつたか‥‥。』

槌野は早くも遮つて、『なに、如何もお爲ぢやないのだよ。お前が惡い夢でもお見だつたのか何かでね、大層魘されて居たから、それで‥‥。』、『あの私がで御在ますか。』と、お兼の驚きかたが如何にも態とらしかつたが、直ぐに垂頭いて、『左樣で御在ましたか。如何も誠に濟みません。奥樣、何卒彼方へ行らツしやつて下さいまし。お苫さん、どうも難有う。いろいろ御世話に成つたんでせうね。』、『本統に私はねえ‥‥。』、『苫や。』と、槌野は叱る樣に睨んだ中に、其と心得る樣に眣して、『何にもお前、別段後で覺えてる樣な事はお云ひで無かつたぢやないかね。夢や寢語だもの‥‥能く聞取りもしなかつたのだし‥‥兼や、お前靜かにして睡て了ふが可いよ。苫や、お前も早く睡てお呉れよ、御苦勞だつたね。』、『いゝえ、如何致しまして。』、『私も彼方へ行つて睡るからね、お前なぞもお睡よ。』と、立上つて、『苫や、もう今夜は深更いんだからね、談話なんぞ爲ないで睡てお呉れよ。』

お兼は兩手を支いて叩頭を爲た。お苫は槌野の後から尾いて來るので、槌野は見返りながら莞爾したが、聲には態と力を入れて叱るのである。

『苫、お前は如何したと云ふんだよ。お寢と云つたら寢るが可いぢやないか。』、『ですけども、私は‥‥。』と、泣出しさうな聲だ。

『本統に苫の臆病ツちやア無いよ。ほゝほ。ぢやア、斯うお爲。今夜だけ、枕頭に洋燈を點火てお置き。それならお前にだツて寢られるだらう。雪洞を此處に置いて行くよ。』、『濟みませんけれども‥‥。』と、お苫は僅に力を得たのらしい。

槌野は茶の間に來て寢たけれども、お兼の事を種々考へて、五時過まで睡られなかつた。次の間に其後何事も無かつたのか、槌野が睡を催した頃には、お苫の鼾聲が聞えて居た。

(六)

翌日に成つて、お兼は如何であらうかとは、槌野が昨夜睡に入る迄の氣懸であつたが、今朝に成つて見ると、別段平日に異つた事は無い樣である。唯、顏の色が蒼白めて居て、人を見る時の目の配が態とでは無いかと思はるゝ程鋭い。此とても昨夜睡眠が不足かつたので、斯うであらう、いまに十分神經が鎭まつたら、何時迄斯うでもあるまい、父は非業に死し、其下手人さへ知れぬと云ふのに、母一人を故鄕に殘して、自分は此方に來て居るのだから、惡い夢も見る筈、寢惚ける事もある筈、何にしても可哀想である、今後は一層目を掛けて、出來るだけ世話もし、慰める樣にも爲て遣らうなぞと、槌野は茶の間の火鉢の傍に茶を喫みながら考へて居た。

丁度午前の十時頃でもあらうか。今しがた八百屋の小僧が、小松菜を持つて來ながら、お苫

に何か戯言を云つて居る樣であつたが、何事の可笑い事があるのか、仰山なお苫の笑聲が聞えた。
「また苫が、何か笑出したよ。本統に彼兒は仰山だよ。」と、槌野は獨言を云ひながら立上つたが、心にはお兼が又如何かしたのではあるまいかと、先づ其が氣遣はれたのである。
「奧さま／＼。」と、お苫は茶の間の庭に廻つて來て、「お兼どんが何樣に可笑う御座んせう。おほほゝゝゝ。井戸繩に斯う取捕まりましてね……おほほゝゝゝ。可笑な事を――はんちやアはんちやア、はんちやア〳〵ツて……ね、奧さま、ほら聞えますでせう。おほほゝゝ、」「兼はやがかい。」と、槌野が耳を澄すと、成程お兼の聲で何か云つて居るのが聞える。
「ね、奧さま、ほゝおほほゝゝゝ。」「また如何か爲たのかね。」と、茶の間から庭下駄を穿いて、お苫を前に立てゝ井戸のある方へ行つて見た。
お兼は頭に手拭を被り、襷掛の而も徒跣に成り、裾を高々と端折り、井戸繩を兩手で攫んで、はんちやア〳〵と掛聲を爲ながら力を極めて曳いて居るので、水を打明けられた片方の釣瓶は、お兼が繩を引く毎に地上を轉げるのである。
「はんちやア〳〵。それ〳〵〳〵。曳いたり曳いたり。はんちやアろツく、はんちやアはんちやア〳〵。」と、お兼は夢中に成つて、聲を上けながら繩を曳くので、釣瓶は車に曳付けられて、車と共に曳かるゝ度に搖るゝ水を四邊に迸らしながら、今に引切られて落ちようとするのである。
「まア何を爲るんだらうね。」と、槌野も呆れて、聲を掛ける事さへ出來ぬ。
「はんちやア〳〵ツて、何の事で御座んせうね。おほほゝゝ。」「私にも些とも解らないんだよ。」と、小聲に成つて、「昨夜から矢張氣が狂つたんだね。」「左樣ですよ、屹度左樣なんで御在ますよ。あら、彼樣眞似を……ほゝほゝおほほゝゝ。」
お苫が笑ふのも無理は無い。お兼は其邊に在る有の石と云はず木片と云はず、目に觸るゝ物を拾取りながら、倚眼を八方に配つて、「あれッ、其處に小鱸が居るだに……お辰さア、それッ主が足下へ、黑鯛が掛つてるだに……あゝれ、網引張らねえでは……あれ、あれ、あれ、大けい太刀魚が逃げるだに……あゝッ、網の外へ突走つただ。」
察する處濱邊に地曳網を掛けて、今しも僅かに引寄せ得た積りらしい。
槌野は僅かにお兼が樣を察し得て、「海か何かで魚を取つてる處なんだよ。」、「左樣かも知れませんね。あれッ、彼樣、籠なんぞを手桶の中へ……。」と、眉を寄せて、「汚いぢやありませんかね。」
槌野は深く溜息を吐いて、「愈よ氣が狂つたんだよ。お前御苦勞だがね、矢代さんへ行つてね、先生に直ぐに御來診を願ひますツて、能うく頼んで來てお呉れ。」、「はい。奧さま、お一人で御宜敷いんですか。」、「別段酷く暴れるんぢやないから……先生が御來診なさる迄、そツと此儘にして私が見張つて居るからね、お前成丈け急いで早く行つて來てお呉れよ。」、「はい、直ぐに行つて參ります。奧さまお一人で御宜敷いんですか。」、「成るッたけ早くね。」、「はい、驅けて行つて參ります。」
お苫は其儘駈出して醫師を呼びに行つた。
お苫が駈けて行く足音を聞付けたのか、お兼は屹と其方を見送つて居た。
「お辰さア、もう歸るだね。お前歸るなら、おらも行くべいから……。」と、駈出さうとする。
「あゝッ、これッ、兼や……。」と、槌野は周章てゝお兼が前に廻つて、「兼や、お前何處へ行か

うと云ふんだよ。』

お兼は熟く槌野の顏を見て居る。

『兼や、お前は私をお忘れだッたかい。』と、槌野は涙を含んだ。

お兼は槌野の眼の涙を認めた樣であつたのと共に、鋭く釣上つて見えた眼に涙がにじんだ。で、首肯きさうであつたが、忽ち淋しさうな笑聲を上げた。

『ほゝほゝゝ。奧さまですね。』『私だと知つてるのかい。』『何時此八幡にお入でなさいました。丁度能御座んしたよ、今地曳網が上つたばかしの處ですから……ほら奧樣、彼處に鯛が。御覽なさいましよ。おう可笑い。おほほゝほゝ。彼樣顏を爲て私を睨むぢやありませんか。おい、お辰さア、又おらを置いてくだね、こうれ、待つて吳れるが可いだよ。』

又駈出さうとするお兼を、槌野は僅かに支へて、『兼や、お前は私に地曳網を見せるッて、今左樣お云ひぢやなかつたかい。』『地曳でえすかい。今曳く所だで……。』と、お兼は又も前の井戸繩を取上げようとした。

あゝ、もう澤山なんだよ。

槌野はお兼の手を止めようとして、覺えず庭下駄を踏返して倒れようとした、お兼は見るより覺えず手を伸して支へようとしたが、槌野が踏止り得たのを見るより、『ほゝほゝゝ。如何しただよ、お辰さア。足痛めたでねえかね。』

槌野は熟とお兼を見て、『また私を忘れて了つたのだよ。氣の狂ふと云ふのは、まア實に可怖いものだこと、兼が此樣に──如何見たッて、平生の兼と思へやアしないよ。本統に可哀想だッちやア無いよ。如何かして直して遣りたい事。急に治らないものか知ら。矢代先生に診て戴いたら、何とか樣子が明るだらうから、其上で何とか……それにしても、お袋の方へ電報を打たなければ……突然に電報が行つたら、お袋が何樣に驚くか知れないよ。亭主に死別れたばかしの處に、また娘が氣が狂つたと知らせて遣つたら……あゝ、何と云ふ氣の毒な事だらう。』

お兼は槌野の方へ背を見せて居たが、何を感じたのか、ほろり〳〵と涙を溢して居た。

（七）

お北は昨日亡夫の初七日を濟ましたばかりであるが、一日たりとも成す事も無く生活さるゝ身の上でないから、昨夜風の吹いたのを幸ひに、松林に松葉搔に出掛けた。

昨夜は風の上を小雨さへ降つたので、今はもう午時少し前であるが、うら〳〵と日は映つて居るけれども、松林の中は砂地に尚ほ濕を有ち、こぼれ松葉も多くは乾いて居らぬ。やはらかな太陽の梢頭を漏れ、乾いた樣に丸く白き形を砂地に落した中に、穴を這出した辨慶蟹が、紅の樣に眞紅な甲を乾し、同じく紅い鋏を徐かに動かしながら、眼を立てたり伏せたりして居る。そよとの物音にも、直ぐに穴に逃込み、または松の幹を廻りながら這上りなどするのである。

たツた今迄、二三の子供が蟹を探しながら、此松林の中を步いて居たが、何時か其が見えなくなつた時、また一人の松葉搔が、四邊に目を配りながら入つて來た。誰か人でも探す樣子であつたが、遙か彼方に松葉を搔いて居るお北を認めると、背負籠を一搖搖上げて、足早に其方へ進んで行つた。

お北も早くも足音を聞得たのか、見返ると共に聲を掛けた。

『おや、隣家の叔母さんも來やしたね。』

お北を探ねて來たのは、隣家の太助爺の女房のお重であつた。

『此林で無かツぺい思つたでねえ、おら彼方へ

行つて見ただよ。彼方に見え無えから、多分此所だッぺいと思つて……。』、「左樣でえしたか。お前さア來なさるなら。鳥渡聲掛けるだッたに……。」、「なアにね、急に用出來たでね。」、「私へですかい。』、『左樣だッて事、あの……。』と、云掛けたが、又何か思出したらしく、「お北さア、與九さアがね、また拘引られただよ。』、『えッ。』と、お北は吃驚して、『警察署へでえすかい。』

お重は首肯きながら、『左樣だッぺいよ。巡査さん三人來て拘引つて行つただからね。おらが今此所へ來る時、八幡樣の御華表の前で、ぱッたり行合つたで、おらア吃驚げて了つただ。」

お北は近々と進寄つて、お重の顏を穴の明く程視詰めて、『今度は何だッて拘引られただか、叔母さアは聞きなさらねえかね。』

お重は急かに小聲に成つて、『見て居た者の噂聞くとね、今度も甚兵衛さんの事に就いてだア云ふがね。』

お北は少時語が無かつたが、軈て太き溜息を吐くと共に、「矢張左樣でえすかね。私もね、左樣ではあるめえか——與九さんが……とは思ふだけんどね、警察署へだッて證據上がんねえ云ふだし、私が素人の力では迚も證據探る事出來ねえだから……お鐱も其事ばッかし云つて居たでえすよ。爺さアの敵探さねえぢやアてね、だけんど、彼兒は御主人あるだで……。』

お重は忽ち一大事を思出し得て、『あれッ、おらとした事が、肝腎の用事忘れて居ただよ。お北さアを探しに來たのも、此用ある故だつたに、年い老るとはア忘れッぽく成つて、詮樣が無えだよ。』と、頻りに懷中を探りながら、『東京から電信來ただよ。』、『えッ。』と、お北は顏色を變へて、お重から受取る間も待遠しさうで、開いて見るか見ないで、もう泣出して了つた。

『お前さア留守だで、おらが所の太助さアが代理で受けて置いただよ。まア何でも大變な事出來ただから、汝早くお北さアに逢つて、渡して來るが可えッてね……。』、『叔父さアは宅に在なさるかねえ。』、「居るだよ。』、「叔父さア相談べいしねえでは……。』

お北は背負籠は云ふ迄も無く、熊手も投出した儘、我家の方へと、松林から麥畑を横斷つて駈出した。

お重はお北の後姿を見送り、『無理は無えだ。亭主は殺されただし、嬶は東京で狂人に成つた云ふだもの……何だッて又此樣に不幸ばかり續くだね。ああッ。』と、歎息しながら、此時初めてお北が殘して置いた背負籠と熊手とを見て、「やれ〳〵、此はアおらが背負込んだだよ。はゝはゝゝゝ。』

* * * * *

太助の家の上框には、お北が唯泣入つて居る。太助は圍爐裡の傍に、烟管を銜へた儘兩腕を組んで、思案に餘つた體である。

少時して太助は烟管の吹殻を爐縁で打きながら、『どうも詮樣事がねえだ、乃公が行つて、お鐱兒の暇乞つて來る事に爲べいよ。』、『えッ。』と、お北は涙の顏を上げて、『叔父さんが東京さア行つて呉れさッしやるでえすか。』、『詮樣事が無えだよ。お前行きてえにも、まだ佛の初七日濟んだばかしでは、左樣も成んねえから、詮樣事が無えだ、明朝の一番の汽船で、おらが出掛けべいよ。』、『左樣して呉れさッしやるだと、途中も安心だでね、濟みましねえがね叔父さア、お賴み申しやすよ。』

太助は首肯きながら、『可えとも〳〵。四隣は相見互だ。だアけんどなア、お鐱ッ兒引取つて來てからが又、お前が嘸ぞ困るこんだらうと思ふてえと、おらは又其が氣の毒でなんねえだよ。』

お北は首肯きながらも、『氣狂つた云ふから

ね、何様に成つてるだか思ふとね、早く顔見て、様子が知りてえでえすからね……叔父さア済まねえけんど、明朝ハ一番でお頼み申しやすよ。旅費は東京の奥さまより香奠だの土産だのッて、先日お兼が歸つた時貰つたのが、倘だ手付かずにあるだからね、其を持つて行つて呉れさッしやい。今持つて來やすから。』、『なアに、其には及ばねえだよ。』

太助が聲を掛ける中に、お北は裏口から自分の家へ行つた。

「可哀想な事ばかり見るだ。ああッ……何だッて又、氣狂つただか。尤も當人の心地に成つたら、其もはア無理でねえ。」

太助がお兼が氣が違ふ程に成つた心根、其が爲に心も暗く成る迄に心配して居るお北が意中を思遣つて、頻りに歎息して居る所に、お北は紙包を持つて入つて來た。

『叔父さア、此所え拾圓あるだからね、此儘お預申しやすべい。』

太助は眼を丸くして、「何で其様に入る事があんべい。一圓札の一枚もありやア澤山だアよ。」、『いゝえ、萬一又何様事で入費掛らねえでもありやしねえ。此金悉皆費つた所で、お兼の御主人様から下さつただから、お兼の爲なら些とも惜い事ねえだから……それには病人の事だでね、何様事がありやすかも……。」、『よしよし。お前の云ふ所にも無理は無えから、乃公が預つて行く事に爲べい。鳥渡受取の一札書くべいから。』、『あれッ叔父さア、其様他人行儀しなさるでねえ。』、『はゝはゝゝ。乃公が又自用にでも……。』、『ほゝほゝゝ。叔父さアに其様事、湊川逆さに流れたッて有る事でねえから。』、『はゝはゝゝ。一同が左様云つて呉れるが、まア乃公の一徳かも知れねえだ。あはゝゝゝ。』、『爺さア居なさるかね。』

入口から聲を掛けながら、直ぐに上框に腰を掛けたのは、權十と云ふ若者である。

「やア、お北さアも來て居ただね、與九の野郎奴今度ははア逃れッこは無えッて云ふだよ。お北さアは倘だ聞かねえだかね、與九が又警察へ拘引げられただよ。』

お北は首肯き、『それ聞いたでえすがね、おらが所の爺さア殺したッて證據でも上つたでえすかね、權十さア、お前それ聞きなさらねえか。』、『それがだよ。證據上つたッて評判だよ。』、『えッ、證據が……。』と、お北は飛上らんばかり喜びながらも、眼には早やはら〳〵と涙を墮すのである。

「矢張與九さんがおらが所の甚兵衛さんを……證據上つたッて、其本統の事だんべいね。』

權十は昂然として、「おれはア虚言吐く事嫌いだで、正直一方で通してるだからね。それも他の事とは違ふだ、間違へば人一箇の命に關はる事だ。』、『いえ、左様思つて呉れさッしやると、おらはア詫する端を失ふだよ、お前さアが虚言吐かねえ事は、村中で誰一人知らねえ者ねえだもの、おらが何だッてお前の語疑ふ事あらう、評判だッて云ひやしたから、其評判に間違がありは爲ねえかと思つてね……氣に障つたら、勘忍して呉れさッせいよ。』、『左様云はれて見ると……おらも惡かつたで、勘忍して呉んなさろ。』と、權十も氣の毒さうに詫びながら、『お北さアが倘だ聞かねえかも知んねえと思つたでね、それで乃公態々知らせに來ただ。今度と云ふ今度は、甚兵衛さアの讐復れべい。爺さアは如何思ふだね。』、『左ればだよ。』と、太助は熟と考へた。

お北も權十も太助が一言に、與九郎が罪跡の判然するものの様に心得たのか、瞬もせず其顔を見詰めた。

太助はやゝ暫してから、「乃公にも何とも云へねえだよ。それにしても先づ耳寄の談だで、

『詮様が無い事ねえ。』と、槌野が立上つた時、また案内を乞ふ聲が爲た。

『はい、御免なすつて下せえまし。』『誰だらう、聞付けない聲だが……兼の宅から來たのか知ら。それにしては聲が男の樣だつたよ。』『御免なすつて下せえまし。』『はい、はい。』と、槌野は返辭を爲て置いて、お苫を呼んで取次を命じようと思つたが、つい自分が出る氣に成つて玄關へ行つた。

『御賴み申しますで御在ますが……。』『はい、何方ですか。』

槌野が玄關の障子を開けると、年頃六十近い田舍者らしい老人が小腰を屈めて居て、槌野を見るより式臺に兩手を支いて丁寧に叩頭を爲るのである。

『何方から御出でなの。』と問ひながらも、其と察して『兼の宅からですかね。』『へえ、左樣で御在ますので、御主人樣へ御目に掛りてえで御在ますが……。』『あの主人に……主人と云ふのは私ですがね……。』『はア、左樣さまで。』と、槌野を仰視て、式臺へ額を摺付けながら、『お初に御目に掛りますで御在ますが……私はお兼の隣家に住んで居りやす者で、大塚太助……お兼がお袋からも宜敷く申しまして御在ます。』『左樣。彼電信を見てお入でだらうね。』『はアい。電信見たで御在ますよ。お兼が氣ミア違つたッて……まア如何した事だんべいッて諸々評議盡した上で、太助何うつたで御在ますよ、はアい。お兼何所へ居るで御在ますか、早く樣子を見てえで御在ますが……。』『左樣かい。勝手の方に廻つて下さい。其所を明けると、直ぐに臺所だから……お前にも聞えるだらう、ね、ほら、彼樣事を云つてるのが。』『はア、成程、地曳網曳いてるで御在ますな、はゝは。』

太助は教へられた通りに開から裏へ通ると、其所に井戸があつて、地曳の掛聲を爲ながら井戸繩を曳いて居るのはお兼である。

『やれ、飛んでも無え……。』と、太助は見るから眉頭を顰めて、『こーれ、お兼坊、何に串戲して居るだよ。』『誰、串戲に地曳ひくもんで……。』と、お兼は太助が房州の語を聞くより、一層其地に在つて地曳を曳いて居る心地が爲るのか、『はんちやア〳〵、曳いたり〳〵、それ〳〵〳〵それ、はんちやア〳〵……。』『おほほゝゝ。本統に可笑いッちやないよ。』と、お苫が笑入りながら斯う云つたので、太助は臺所に人のあるのを知つて小腰を屈めた時、槌野も臺所に出て來た。

『見てお呉れ、如彼だからね。』『いや如何も……。』と、太助は頭を後へ撫でながら、『えれえ事で御在ます。』と近々とお兼の傍へ歩み寄つた。

お兼は見返ると共に太助を認めたのである。

『お隣家の叔父さア、えれえ大漁だアよ。』『左樣か左樣か。』と、一層近く歩み寄つて、『お兼坊や、如何しただ。』『如何も爲ねえだよ。はんちやアッ〳〵、はんちやア〳〵。』

太助は槌野に顏を見合せて、如何にも當惑の體であつたが、不圖思付いて、『うむ。お兼坊、お前に喜ばせる事があるだよ。』『おらに喜ばせる事があるッて……。』と、お兼は井戸繩を曳く手を止めて、鋭い眼に熟と太助を凝視めた。

『分明つただよ、お前の親父の甚兵衞どんの敵分明つただよ。』『えッ。』と、お兼は井戸繩をはたりと落して、『親爺さアの敵知れたッてかね。』『うむ。それ知らせてえ思つて、態々來たださから、地曳網所でねえだ。』

お兼は喜ばしげにいそ〳〵として、頭の手拭を脱りながら、『親爺さア敵知れたアて、湊の……。』『おう、湊の與九郎が警察署へ拘引られたのだ。今度は證據も上つてるだ云ふから……。』『それ本統の事だッぺいね。』『太助

お何處言吐くべい。其に就いて種々談話あるだから、まア足でも洗ふが可えだよ。」

お兼は首肯きながら、直ぐに手桶の水を荒々しく自分の足へ注掛けた。

槌野は太助に向ひ、「お前も草鞋でも脱いで、此方へ上るが可いよ。」「はい／＼。御免被りますべいか。」

槌野は、「苫や、お前氣の毒だけれどもね、釣瓶や何かを元の樣に爲て置いてお呉れよ。』、『はい、はい。』と、お苫は急に笑顏を收めて、澁々水口を下りた。

「兼や、お前此叔父さんをね、お前なんぞの部屋へ案内するが可いよ。」

お兼も槌野が此命令は解し得た樣である。

「叔父さア、此方へ來て下さいよ。」と、俄かに語が變つた、思ふに、心の在り所一つで、語迄直ぐに變つたのであらうか。

「お前兼と談話が濟んだら、彼方へ來てお呉れよ。種々聞きたい事も話したい事もあるのだから。」、「はい。」

槌野は茶の間へ、お兼と太助は女中部屋へ入つて了つた。

お苫はもう不平で堪らぬ。

『狂人の後掃除なんざ、餘り氣の利いたもんぢやないよ、飛んだ處へ飛沫が來たもんだ。」

不平たら／＼と釣瓶を提げて、井戸へ卸さうと爲て、覺えず手を滑らしたので、車井のがら／＼と高く鳴りながら、釣瓶の水に落ちた時にはけたゝましい其物音に、お苫が誤つて陷落つたのでは無いかと、槌野は茶の間から驅出したほどであつた。

* * * * *

槌野は手を支いて居る太助と、其後に垂頭いて居るお兼に對ひ、「一時左樣爲た方が、お袋の方でも安心だらうし、當人も氣を置く人も無くツて、却つて病氣の全快も速からうから、左樣爲た方が可いだらうよ。病氣でも治つたら、又來られるなら來て貰ひたいのだし……尤も一時の事かも知れないから、存外速く治る樣な事に……それだと云ふと私の方も仕合せだし……。』と、お兼の方を見た。

お兼は太助が何と云つて聞かせてか、唯見た所では、些とも病氣らしい處が無い程である。

太助は幾度となく叩頭を爲ながら、「此方樣でも早速困らツしやるで御在ませうが、お袋がえらく心配爲て居ますだで……いや、我儘ばかり、得手勝手ばかり申しやして、何ともはア相濟みましねえ。お袋も其事ばかり申しまして御在ますよ。」「なアにね。私の方では、決して惡くなんぞは思はないからね、お袋が安心する樣に云つてお呉れ。お前の方でさへ承知お爲だと、東京に留めて置いて、病院へ入れても可いけれどもね……いえ、其よりか矢張お袋の方へ行つた方が、早く氣が鎭まるかも知れないよ。」と、槌野はお兼を見て、機嫌を迎つて遣る樣な語調で、而も笑さへも含んで、「兼や、お前今は餘程靜謐いて居る樣だね。」

お兼は顏を赧くして、微笑を含みながら、「私や何とも無いんですよ。もう何處へお供を致しましても能う御在ますよ。おほほゝゝ。」

何の爲に笑つたのだか、其笑聲さへ幾分か鎖を持つて居る樣で、氣が狂つて居ると思うて聞くと、氣味が惡くなるのである。

けれども、槌野は平生の通りの語調で、「左樣さね、お前が病氣さへ治つてお呉れだと、又何處へか、鎌倉へでも江の島へでも……いえ、房州のお前の方の、其八幡へ遊びに行つても可いよ。其時にはお前が方々へ案内してお呉れだらうね。それに付けても、早く病氣をお直しが可いよ。」

お兼は悲しげな顏を爲て居る。

太助は下げて居た頭を少し上げ、顔を斜めにして槌野の顏を仰ぎ見ながら、「此夏は是非とも來さッしやる樣にお待ち申しますだ。海水浴もえらく開けたで御座ますが。北條は云ふ迄もねえでがすが、八幡の濱邊も、海は淺えし、浪は立たねえでね、海水浴には上も無え處だッて、去年なぞはえれえ人で御座ました。東京からばかり八千人も入込んだッて云ふでがすよ。」

槌野は首背いて、「私も今年は如何か都合を爲て出掛けませうよ。」、「はア、何卒、お待ち申しますでえすから……お宿なら、お兼の宅でも、私が宅でも、到底此方樣見る樣な綺麗では無えでがすが……。」、「いゝえ、其樣事は構はないが……兼や、それ迄にお前も全快して居てお呉れよ。」

お兼は益す悲しさうな顏をして、熟と槌野の顏を見て居たが、忽ちほろ／＼と涙を溢して、「私、病氣でも何でも無いんだのに――奧樣、私や些とも病氣ぢやありませんよ。それだのに病氣だッて御有るんだから……。」、「あゝ、左樣だつたね。お前は病氣でも何でも無かつたのに……ほゝほゝゝ。私が惡かつたから勘忍してお呉れよ。

お兼は莞爾して、「奧樣が彼樣事を……おほほゝゝゝ。おう、可笑い／＼。私がかツぽれを踊るんで御座ますッて。おゝ、羞かしいわ。だッて、矢張踊るんですッて――出來やしないのに――。」と云ひながらもう立上るのである。「沖いの暗いのうに……こら／＼ッ。」

お兼は早や踊出したのである。

槌野も覺えず笑出すと、太助は苦々しい顏を爲ながら、「こーれお兼坊ッ……。」、「紀伊の國蜜柑船、やれこの……。」

お兼は次の間へと踊つて行つた。

「まア上手だこと。おほほゝゝゝ。」

お苫が笑ふのと、お兼が踊るのとで、次の間は湧返る程の騷である。

茶の間には槌野が覺えず溜息を吐くと、太助は鼻汁を啜上げて横を向いた。

（九）

房州の八幡に連歸られた後、お兼は東京に居た時よりは多少か――いや見違へる程穩靜いて、人の目に立つ程狂出した事は無かつた。けれども、甚兵衛が死ぬ前迄のお兼とは、全然別人かと見える迄陰氣に成つた。と思ふと又、驚くばかり多辯な事もあつた。母の手助を爲て松葉搔にも行けば、地曳網の綱を曳きに行く事もある。氣が狂つて居るとは村中に誰知らぬ者もないが、それかと云つて他の嘲弄物に成る樣な事も無かつた。

お兼が氣違沙汰の他の口に上らぬ樣に成ると共に、與九郎の事も餘り噂をせぬ樣に成つた。尤も與九郎は他の罪に依つて、警察署に拘引げられたのらしく、其犯罪は千葉の裁判所の宣告を受けて、今は重禁錮の刑に處せられて居ると云ふ事である。

五月が過ぎ六月も暮れて、今は七月の中旬に成つた。八幡村は東京からの海水浴の客に、日毎に賑かに成り行いて、旅店は云ふ迄も無く何處の貸間も殆んど人で以て埋まるばかりである。

お兼の家は人に貸す可き室も無いので、此處のみは雜沓を免れて、親子二人の他には、門口の松の樹頭に蟬音が訪れるのみである。

お兼は緣側に出て、陰氣な顏を爲て空を眺め、母のお北は乾物に爲る小鰺を井戸端で料理して居た。

「阿母さん、東京だと今日は盂蘭盆の十三日なんだよ。」、「東京は新暦だて、今日は丁度盂蘭盆の十三日……また東京の事考へ出した

だた。」
お爺は沈んだ語調で、「去年の今日は奧樣の
お供を爲て、淺草の門跡樣へ御參詣を爲たんだ
よ。」、「左樣だつたかね。」、「今年は自宅に居る
んだから……此方の爺は來月だね。」、「左樣だ
よ。」、「燈籠釣つて、亡父さんの……。」と、ほろ
ほろと淚を溢した。
お北は此體を見て、また病氣でも發るのでは
無いか、如何かして紛らして遣りたいと思ふけ
れども、鳥渡思付も無く、空しく四邊を見廻
した時、のッそく背戸から入つて來たのは、
北條郵便局の配達夫である。
お北は早くも認めて、「郵便でえすか。何處
から來ただか。」と、郵書を受取つて、「御苦勞樣
でえした。」
配達夫はお爺を見て笑ひながら行つて了つ
た。お爺が氣が觸れて居るとは、彼等も豫て聞
いて居たからでもあるのか。
「お爺や、何處から來た郵書だか、鳥渡讀んで
吳れるが可えよ。」
お爺は手に取つて熟と見て、「おやッ、東京
の奧樣から……阿母さん、東京の奧さまか
ら……。」、「えッ、東京の奧さまから、何用出
來ただ。」と、お北は庖刀を手にした儘、緣側に
腰を掛けた。
お爺は早くも封を切つて讀行きながら、「奧
さまが御入でなさるッて云ふんだよ。」、「奧樣
が何處へ行かッしやるだッて。」、「何處へッて、
此處へだよ。留守居の都合が出來たから、二週
間ばかしの心算で海水浴に行くから、宿や何か
を宜敷く賴むッて……。」、「奧さまが此方へ來
さッしやるッて……。」と、お北は忽ち當惑の色
を現はし、「お宿を爲べいにも、此樣に汚い處へ
置く事も出來ねえだし……はアて如何したら可
かッぺいか。」
母が心配するのに引替へ、お爺は如何にも嬉
しさうで、「奧さまが御入でなさると——丁度
私も病氣が治つて居る處だし——方々へ御案
內を爲て……あゝ、何樣に樂しいだらうねえ。
阿母さん、今日は何日だッけね。」、「何日だッ
て、十三日だよ、先刻自分で云つて居たでねえ
かよ。」、「左樣だッけね、ほゝほゝゝゝ。今日が
十三日だと、四、五、六、七、十八日まで、ま
だ六日あるんだよ、六日過つと奧さまが入らッ
しやるから……阿母さん、十八日に彼方を立つ
てお出でなさるんだよ。」、「そりや可いけんど、
お宿を如何したら可かッぺいか。」
お爺は事も無げに、「隣家の叔父さん處を…
…。」、「隣家は貸さねえだよ。昨日も今日も、借
りてえッて幾人も尋ねて來るだけんど、誰にも
貸さねえだ。客なんぞ面倒臭えッて云つてるだ
から、とても貸す事無えだから……。」
お爺は微笑を含みながら、「他の人になら貸
さないかも知れないがね、東京の奧さまにな
ら、屹度貸して吳れるよ。」、「それだと好えけ
んど……如何だッぺいか知ら。」と、お北は何處
迄も覺束なく思ふらしい。
「なァに屹度貸してお吳れだよ。」と、お爺は何
處迄も貸して吳れるものと信じて居るらしく、
「叔父さんが東京に私を迎ひに來てお吳れの時
に……。」、「えッ。」と、お北は熟とお爺を見て、
「お前を迎ひに行つて吳れさッしやつた時に、何處
だッて。」
お爺は顏色を變へたが、直ぐ笑出した。
「左樣々々、私け彼時氣が變に成つて居たんだ
から、何にも知らない筈なんだから……。」、「そ
れだで。おら怪しいと思つたよ。」、「ほゝほ
ほゝ。私や何を間違へて居たんだか……。」、
「だから怪しいだよ。ほゝほゝゝゝ。」、「だがね
阿母さん、私が叔父さんに譯を話して賴んだら、
承知してお吳れかも知れないよ。」、「如何だか
ね。」と、お北は何處迄も危んで居る。

兎も角も私は行つて頼んで見るよ、」夫婦とも面倒な事嫌いな性分だで、如何だッぺいかな。」

お爺は婆の話を後に聞きながら、隣家へ行つて了つた。

お北は父小鐵を料理ながら、「お爺がえらく御世話に成つた御主人様だで、出來るだけ御馳走爲ねえぢやなんねえだが……此節も乾物にして東京さアへ送つて上げべい思つたけんど、來さツしやれば、此も不用に成るだから……いやいや、矢張乾かして置いて、其内に又佳品を足して置いて、歸らツしやる時に土産に成る様に爲て置くべいよ。」

何時の間に人が後に來て居たのか、突然に聲を掛けた者がある。

「乃公が手傳つて遣らうぢやねえか。」「えツ。」と、お北は振返つて吃驚して、覺えず聲を上げた。

「あゝツ、あれえツ。」

けれども、お北の聲は隣家迄聞える程高くはなかつた。

「何だッて其様に吃驚するんだ。おい、お北さん、少時逢はなかつたツけね。」「お前は與九さんでねえかね。」と、お北の聲は顫へて居る。

「何だ、與九さんぢや無えかッて。おい、おい、お北さん、此時の間に乃公の顔を忘れて呉れやアしめえ。與九さんでねえかッて聞くなア、餘り情が無さ過ぎようぜ。」

千葉の裁判所で重禁錮の刑に處せられたと云ふ與九郎が、如何にして歸村したのか、刑期滿ちて放免されたのであらうか、顔の肉は少しも落ちず、頬髯は昨日あたり剃つたらしく、髪も刈立の五分刈、白地の荒い格子縞の浴衣に三尺帶を締め、麻裏を突掛に穿いて、片褄の端折つた奴を小脇に挾んで、鋭い眼に熟とお北を見据ゑてゐる。

お北は庖刀を片手に持つた儘、何とも云ひ得ないで居る。

「おい、お北さん。」と、冷かな笑を含んで、「甚兵衛さんが死んだ時にや、些たア世話も爲てある積りだ。そればかりぢやねえ、乃公が今度喰込んだてえのも、原因を云やア甚兵衛さんの御蔭なんだ、面白くもねえ、唯た一度か其達喧嘩した事があるからてえんで、乃公が何か甚兵衛に遺恨でも含んで居やアしめえか、甚兵衛を殺したなア與九郎ぢやあるめえかッて、人をつけ、乃公を拘引けてきやアがッたんだ。元を云やア左様なんだ。それが原因で飛んでも無え、十年前の古疵が三月の重禁錮たア、餘り馬鹿々々しいぢやねえか。え、お北さん、お前ん處のお蔭ぢや、此樣目に迄逢つたんだぜ。漸と昨日放免に成つたばかしだ。おいお北さん、喜んでは呉れねえ迄も、能くお入でなすつた位の挨拶は爲たッて可からうぜ。」と、縁側にどッかと腰を卸した。

もと／＼可怖らしく思つて居たのに、夫の甚兵衛を殺害したらうとの嫌疑のある與九郎、それが此時の間に語の調子さへ全然變つて、一層可畏き樣に成つたのであるから、お北は齒の根さへ打顫うて、何とも云ふ事が出來ぬ。あゝ、誰か早く、隣家の太助さんでも早く來て呉れゝば可いのにと、眼を偸んで隣家の方を見るばかりだ。

「おい、如何したてえんだ。返辭も爲ねえたア……。」と、つか／＼とお北の傍に歩み寄つて、「おい、返辭位出來さうなもんだ。まア其も可いや。時に今日は種々相談があつて來たんだ。家外で談話も出來ねえから、まア家内へ入らうぢやねえかね。澁茶の一杯位飮ませて呉れたツて、餘り惜しくもあるめえぜ。」

與九郎は強ひてお北を促して、家内に入つて圍爐裡の傍に胡坐を組いて、「おい、火の傍は熱

くッて不可え。其團扇を取つて呉んねえ。」
お北は可怖しさが一杯で云はるゝ儘團扇を取つて遣つた。
お北は何故に此程與九郎を怖れるのであるか、自分にも其仔細を思ひ得ぬ位だ。夫が死んだ頃には、萬事に氣を付けて呉れて、難有い迄に親切な人だと思つた事もあつた。夫を殺した嫌疑者と云ふのが第一に、畏怖の念を發させたのであるけれども、それも證據と云ふ證據も無かつたのか、他の罪で三月の重禁錮で昨日放免されたと云ふのだから、唯疑はしいばかりで、其者であらうとは認める事が出來ぬ。けれども、一旦其疑を掛けた男ではあり、語の調子さへ全然一變して、一言口を利いても、底意ありげな氣味の惡さに、斯う可怖しく感ふのかも知れぬが、いや其ばかりでは無い、お北をして斯く怖れしむるのは、如何も他に其だけの仔細がありさうに思はれるのである。
お北は縮み上らんばかり怖を有つて居るのを、與九郎が十分見透して居るから、思ふさまの言を云ひ、思ふさまの振舞を爲る積りには見えるが、さて相手が斷つ口さへ利き得ないと、幾分か拍子拔が爲たのか、烟草二三服する間は他を顧みながら何とも云はなかつた。
圍爐裡の傍に垂頭いて、火を發すでもなく火箸を弄んで居るお北を、與九郎は熟と見て居たが、何と思つたか輕い笑聲を漏らした。
「はゝはゝゝゝゝ、お北さん、お前も餘程沒分曉え樣だぜ。お前、何ぢやねえか、村の奴等が後評を云やがる樣に、お前も乃公を……うむ左樣だ、左樣に違えねえ。お前も乃公が甚兵衛さんを……。」と云ひさして、覺えず衷と衷とに目を配つた。
お北も畏怖を有つた眼で、凝乎と與九郎の顏を見詰めた。
「左樣に違えねえ。お前も乃公が甚兵衛さんを殺したんぢやア無からうかッて、村の奴等と同一に乃公を疑つてるんだと見えるな。おい、串戯ぢやねえぜ。乃公だッてお前……そりや隨分惡い事を爲た事もあらア、全然爲ねえたア云はねえが、遺恨も無え自分の朋友を、殺すなんてえ事が……乃公にや何だ其樣度胸は無え。おい、考へても見るが可いや。現今の警察の目を潛つてお前——何時迄潛つて居られるものぢやねえ。其奴を乃公は二度迄も——お前等も知つてるだらうが、二度迄も拘引げられてりや。おい、いゝか、乃公が若し甚兵衛さんを殺して居て見ねえ、乃公が何樣にしらを切つたッて、其處は先方も商賣だア、乃公の首を今迄胴に着けちや置かねえぜ。なア左樣ぢやねえか。村の奴等ア、何の證據を見込んで居やがるか知らねえが、今日に成つても乃公を疑つてやアがるてえ事たが、はゝはゝゝ。警察の眼は確なものだ。乃公を斯うして歸して置くんぢやねえか。え、おい、お北さん、お前、依然乃公を疑つてるんぢやねえかい。おい、如何だね、疑つてるんなら疑つてるッて、判明と云つて貰はうぢやねえか。え、おい、如何なんだ。」
與九郎は調子を強めつ弱めつ、斯う云ひ來つて語を切つて、熟とお北を見据ゑた。
「おい、お北さん、お前も村の奴等と同一で、依然乃公を疑つてるんだな。返辭を爲ねえ處を見ると、其に違え無えや。」「なに私がお前さん……。」と、お北は詮方が無く、「私がお前さんを疑つてるだなんて、其樣事は些とも無えですよ。甚兵衛さんの葬式出す時なんぞは、一方ならねえ御世話さアに成つて居やすから……。」「お前は其事を忘れねえんだな。」と、お北を見据ゑた與九郎が眼は一層鋭かつた。
「私だッて人樣の恩を知らねえ事は無えだからね。」と、殆んど口の中であつた。
「ぢやア、乃公の恩を忘れねえと云ふんだな、

うむ、左様か。左様聞きやア乃公だツて、快い心地がすらア。はゝはゝゝ。村の奴等の百人の嫌疑受けて居たツて、お前一人が左様思つて居て呉れりやア千人力だ。はゝはゝゝ。』

與九郎が快げに打笑ふのに反對へて、お北は何とも云へぬ苦痛が、垂頭いた其顔に見えるのである。

『それに就いちやア、おいお北さん、お前に相談してえ事があるんだ。』、『えツ。』と、お北は肩を縮めた。

『はゝはゝゝ。何も其様に微怯々々する事アねえぢやねえか。』

與九郎は口付の紙卷莨に火を點けながら、しげしげとお北の様子を見た。

背戸の入口の蔭には、何時の間にかお鎌が身を潜めて耳を澄して居た。

（十）

與九郎は一本の紙卷莨を喫盡すまで、唯お北の様子を窺つて居るのみであつたが、吸殼を圍爐裡へ投込むと共に、表裏の入口を見返りながら、聲を潜めて話出した。

『お北さん、相談てえなア他でもねえが……。』と、態とらしく考へて、『實はあの何だ、お前の方では迷惑かも知れねえが、今日からお前の家に、乃公を同居さして貰ひてえんだ。』、『えツ。』と、お北は吃驚して顔を上げた。

『何も其様に驚く事アねえや。』と、強めた語調を直ぐに又弱めて、『突然に斯う云出しちやア、お前が吃驚するなア、無理も無えんだ。だがねお北さん、先刻から話してるんだが、村の奴等が今日日になつても、甚兵衛さんを殺したなア湊の與九郎だツて、寄ると觸ると云つて居やがつた日にや、またいつ何時先日見た様な馬鹿な目に遭ふかも知れねえんだ。お前も考へて見て呉れるが可いや。覺えも無え事で疑られてよ、其評判が高く成つたと云つちやア、警察に拘引げられて見ねえ、乃公だツてお前、其都度に餘り好い心地も爲なからうぢやねえか。其奴が僥倖と、お前は乃公を疑らねえと云ふし、葬式の時に世話に成つた恩は忘れねえと云つて呉れるしよ、今の處ぢや乃公お前一人を力だと思つてるんだ。可いかい、えお北さん。乃公が同居させて貰ひてえと云ふなア其處なんだ。村の奴等が何を云やがつたツて、お北さんが同居させて遣るんぢや、甚兵衛さんを殺したなア與九郎ぢやなかつた、全く寃罪だつたんだと、一同が斯う思つて呉れようと云ふもんだ。えお北さん、物の道理が其様ぢやねえか。如何だい、お北さん、お前が諾とさへ云つて呉れりやア、乃公だツて、其恩報をすらアな、報恩と云つたツて、今此處に金を持つてるんぢやねえが……左様だ、お前とお鎌坊とを遊ばせて置いて、乃公が一人で稼いで見せらア。お前、唯た三人ばかし、乃公だツて男だ、其位な稼は朝飯前だ。おいお北さん、默つて居ちや困るぢやねえかね。おい、何とか挨拶を爲て呉んねえ。』

お北は何と答へ様も無い。一言の下に謝絶する道は知つて居るが、此無法者が斯う云出したからには、謝絶りたりとて、一應では承知を爲まい、さればとて、素より承諾す可き事で無いから、何と云つて斷つたものかと、其口實に當惑して居る。

與九郎はお北の様子が承知しさうにも無いのを見て、一入語調を強めた。

『おい、お北さん、お前は、乃公が此位事を分けて頼んでるのに、承諾ちやア呉れねえ積りだな。それなら其で可い。乃公も無理にや頼まねえ。其返報にや、乃公も亦考案があらア。おい、能く聞きねえよ。乃公は甚兵衛の爲に――甚兵衛さんが殺されたばかしで、此難儀を爲て居るんだ。いゝか。乃公は甚兵衛さんが何處の何奴に

殺されたか知らねえんだ。そいつがお前……能く聞かれえか。其奴がお前、何處の何奴が甚兵衛さんを殺したか知れねえ、其何處の何奴かの爲に乃公ア、甚兵衛さんを殺したらうッて嫌疑を受けて、其爲に拘引げられた事が二度だ。いいか、云つて見りやア、甚兵衛の爲に――甚兵衛が意氣地なく殺されたばッかりで乃公は此難儀を爲てえるんだ。知らねえ者は知らねえ――甚兵衛を殺さねえ者が殺した者に成つちやア、それこそ世の中にや神も佛もねえ事に成らア。其處は剛氣なもんで、流石に其筋の眼は確いだぜ。村の者がわい〳〵云やがるから、警察でも二度迄拘引げちや見たものの、知らねえ者は矢張知らねえに成つて、斯うして娑婆に出て來られるてえなア、お天道様ア見透しだ。おいお北さん、警察にだッて鬼ばかしやア居ねえもんだ、おいお北さん、乃公が甚兵衛を殺さねえ――甚兵衛さんの死んだのに關係の無え事ア、お前だッて、乃公が此位云つたら解らねえ事アあるめえ。其ともお前は、乃公が甚兵衛さんの下手人だと思つて居るんかい。おい如何だい、判明云つて見ねえ。え、おいお北さん、お前は乃公を……。』

お北は與九郎が語の調子よりも、眼を怒らしてじり〳〵と詰寄る見脈に、如何なる事に成行からかと其が可怖しさに、稍語調を亂しながら、「ど、ど、如何して其様事を――お前が其様事を爲なさるだなんぞ、私は些とも……。』、『お前は左様思つちや居ねえ。へゝ、其奴ア難有え。だが難有えたア云條、其に違えねんだからな。』と、與九郎は得意らしく見えたが、直ぐに又語調を強めて、『おいお北さん、お前が些とも乃公を疑つて居ねえと云ふんなら、乃公が此様に困つてる事を……お前だッて些たア氣の毒だ位にや思つて呉れるだらう。』、『それはもう實に御氣の毒で成んねえから……。』、『ぢやア、お前だッて乃公を同居さして呉れたッて可い筈だ。え、左様ぢやねえか。無理に云ひてえたア思はねえが、詮方が無え、器用に承知爲て貰はらぢやねえかね。』

お北は垂頭いて返辭をせぬ。

『お北さん、お前依然不承知なんだな。』、『私は承知爲ねえでも無えけんど……。』と、お北は術なげに、『世間が承知して呉れねえだから……。』、『えッ、世間が承知爲ねえッて。』、『左様でえすよ。お前だッて考へて見なさるが可え。』と、お北ははきとした語調で、『私とお兼と二人ッ切り――女ばかりの處へ、男一人同居しる事、世間で何とも思はねえ事無えだから……それにお前だッて、まだ年老つたと云ふでねえし、私だッて尙だ四十に成らねえだから……善え事は一口云はねえで、惡い事だと十口にして云ふ世間だでね、お前が私家へ同居して見さッせい、世間の人が何と云ふだか知れたもんでねえよ。』『何と云つたッて可いぢやねえかね。知らねえ奴等が何と云つたッて……知つて了やア何でも無えや、なア左様ぢやねえか。お北さん、お前だッて何時迄野暮を云つてたッて……。』、『野暮かも知んねえけんど……。』、「ぢやア如何爲ても承知が出來ねえと云ふんだな。』、『御氣の毒でえすけんど……。』、『いゝ、もう頼まねえ。其返報にやア……。』と與九郎は裂けんばかりに眼を睜きお北を睨み詰めた。手が一つ動かば、如何なる事をも爲かねまじき氣勢が、あり〳〵と認められた。

お北は何として可いやら……隣家の太助に援助を乞ひたく思ふけれども、聲を出して叫びもせば、逃げんとする氣勢を見せもせば、與九郎が手を下さんは知れ切つて居るので、何とする事も出來ず、空しく與九郎の手を下すのを待つより外は無いのである。

『おい、お北、手前の様に強情な阿魔アはねえ。乃公が彼位譯を云つて聞かせても……いや、も

う何にも云ふ事アねえ。手前が乃公に辛かつた其復讐にや、えゝと・・うむ、左樣だ。手前の亭主の甚兵衛の爲に、乃公が難儀を爲てえるんだから、いゝや、手前を殺しちやつて乃公も・・罪もねえ乃公を村の奴等が寄つて集つて、早晩にや罪に落して了やアがるに違えねえ。其迄おめおめ待つてゝ馬鹿を見るよりか、此處で汝を殺して乃公も死んぢやつた方がまだしも勝しだ。さア、汝ッ、覺悟を爲やアがれッ。』、『あれッ、與九さん、其樣無法な・・・。』、『無法だらうが、何だらうが、もう斯うなりや、何にも可怖えものは無え。さア覺悟を爲やアがれ。』

與九郎は得物を探すのか、其邊見廻しながら、早くもお北の肩を攫まうとした。

『おほほゝゝゝゝ。』と、突然笑聲を上げて、與九郎とお北とが立つて居る土間へ入つて來た者がある。

與九郎が吃驚して振返ると、お兼が手を拍きながら笑つてる。

『ほゝほゝゝゝ。おゝ可笑い。おゝ可笑い。與九さんと阿母さんと演劇を爲て居るんだよ。早く御遣んなさいよ。面白いわ——面白くツて面白くツて爲樣がないわ。おほほゝゝゝ。』、『何だを云つてやがるんでい此狂女めツ。』、『さア早く——早くツてえのにねえ。與九さんの役が松助、阿母さんが秀調と云ふ處だよ。おほほゝゝほ。』と、お兼が頻りに可笑がりながら手を拍くのは、喝采する積りらしいので。

與九郎はお北の肩を押へながら、『此狂女めツ、乙う騷ぎやアがると、手前も其儘ぢや置かねえぞ。』、『えツ、私も斯う爲て居ちやア不可いんだツて。私にも演劇を爲ろツて。おや嫌だ。私にや其樣眞似は——與九さんの樣に器用ぢやなくツてよ。矢張與九さんと阿母さんとが丁度可いんだわ。早く、も一度、阿母さんもよう。本統に巧いんだもの——與九さんは宛然役者だよ、音羽屋ツて賞めたくなるわ、音羽屋ア、おほほゝゝゝ。私一人で見るのは惜いわ。あゝ左樣だ、お隣家の叔母さアん・・・叔父さんも・・・。』、『えゝ、喧しいやい。大きな聲を爲やがるぢやねえか。』、『叔父さんも叔母さんも早く來て御覽よ。叔父さアん・・・叔母さアん。面白いんだからさ、早くよう、早く來て御覽よう。叔父さアん・・・。』、『えゝ、此狂女めツ。』

與九郎が太助夫婦を呼立てるお兼を捕へようと、手を緩めたかと思ふとお北は早くも振拂つて裏口へ逃出した。

『うぬツ、逃げたツて・・・・。』

與九郎がお北を追掛けると、お兼も其後に尾きながら大聲を上げて、『あゝ、面白い。本統に面白い芝居だよ。叔父さアん、叔母さアん・・・。』

お北も逃げながら聲を限りに、『誰か來て下さいよ。早く、誰か、誰か、誰か・・・。』

お兼が手を拍いて呼立てるのと、お北が命限りの叫聲とで、隣家の太助夫婦は云ふ迄も無く、折柄濱からの歸途に松林を通掛つた二三人の漁夫も共に、お北の家の裏口へ駈集まつた。

與九郎は斯くと見るより、ぷいと松林へ駈込んで其儘姿を隱して了つた。

太助夫婦漁夫等がお北を取卷いて、事の仔細を問ふ傍には、お兼が依然ほゝほゝと笑ひながら、『あゝ、面白かつた。叔父さん〳〵、叔母さん叔母さん、今度は阿母さんと叔父さんと叔母さんとでお遣りなの。また面白いよ。ほゝほゝおほほゝゝゝ。』と、また〳〵手を拍いて、頻りに狂言の幕明を催して居た。

（十一）

鏡が浦には折々鯨が群を爲して磯近く泳寄る事がある。一月ばかり前にも、三頭ばかりの

鯨が湊の濱で捕れた事があつたが、此七月の末の二十九日に、五六百頭の鯨が――五島とか呼ばれる小鯨ではあるが――一網に館山の濱近く曳寄せられた。此様事は幾年ぶりにも無いと云ふので、濱邊の賑は云ふばかりも無い。海水浴の爲に東京其他から入込んだ遊客連は、各々小舟を仕立てゝ網の傍近々と漕寄せるので、遠く八幡濱から望むと、其船を見るばかりでも、一の眺望に成る程であつた。

で、八幡濱の午後は、平日ならば海水浴の客の爲に、海も埋るばかりであるのが、鯨見物の方に人を奪はれて、僅かに村の小兒等が二三人波の子(小さい貝の名)を拾つて居るばかりで、如何にも物淋しい程であつた。

昨夜から空が曇つて、折々は雨を漏らす事もあるので、照付ける日光こそ頭を燒付けるほどではないが、風が無いので、濕つた砂地のいきれに、何とも云へず蒸暑い。波除の松林の梢は少しも動かず、草の香に息も吐けぬ程だ。

今日は東京から高松槌野が着すると云ふので、お北と太助夫婦は其待受の準備に、朝から魚を調へる、室の掃除をする、午後に漸と息を繼いだのである。此中にお兼ばかりは、槌野が愈よ今日着ると云ふ事を告げた時に何とやら嬉しさうな様子を見せたばかりで、後は忘れて了つた様に、唯一人小唄など唄ひながら松林の中や濱邊を遊んで歩いて居た。東京から歸鄕つて後、大いに病氣が鎭靜いて居た様であつたが、與九郎がお北を脅かした其時から、又もや氣が狂出して、今日に成つても少しも快い方には向はぬのである。

東京から御主人が御入でなすつたら、娘も大きに鎭靜きましてと喜んで貰はうと樂んで居たのに、此頃の様では却つて御心配を掛ける様なものだと、お北が心を苦しめて居るのに引替へて、お兼は今しも松林を北へ〳〵と、湊川の傍近くへ來た。

四邊を見廻すと人一個見えぬ。唯生草を飼葉に鼻綱長く繋がれた牛が、土手の下に草を食つて居るばかりである。

今迄は世の憂き事も樂しき事も知らぬ氣に見えたお兼が、忽ち悄然として首を垂れると共に、はら〳〵と涙を落して、土の稍凹んで野薔薇の蔓繁つた處を凝視めた。

父の甚兵衛が殺されたと聞いて、主人に一時の暇を乞ひ得て歸鄕し、其殺された場所として案內されたのは、丁度今お兼が涙を流しながら凝視めて居る其處であつた。

お兼は何にも云はなかつたが、軈て其處に蹲いた時には、口の中で何やら念ずる樣子であつた。無論人に語りもせねば、幸ひに此迄他に認められもしなかつたが、其實お兼は每日一日も缺かさず、此松林の此處に來て、必ず何か念ずるのであつた。

お兼は軈て立上つて、忽ち樣子を變へて――歩形まで尋常ならぬ樣を爲ながら、松林を濱邊に出ようとした。

「やツ、お兼の氣狂阿魔だな。」

斯う聲を掛けたのは、彼與九郎である。彼日以來、お兼の家には流石に一度も立寄らなかつたが、濱邊は素より村內は日々徘徊して居たので、今しも濱から湊へ歸らうとして、此松林に入らうとした途端に、圖らずお兼に出逢つたのである。

お兼は與九郎を見るより、敢て避けようとせぬばかりか、却つて莞爾しながら其傍へ近寄つた。

「與九さん、芝居が本統に面白かつたよ。また爲て見せてお呉れでないか。え、え、また爲て見せてお呉れでないか。與九さんは巧いわ。ほゝほゝゝ。其樣に睨めると、宛然音羽屋よ。能く似合ふわ。阿母さんが秀調與九さんが松助、

何樣に面白いだらう。さアお入でよう、與九さん。さア 私が連れてツて遣るわ。さア與九さん。」

お兼が與九郎の手を取らうとすると、與九郎はお兼の肩を倒れよとばかり突いた。

「狂氣阿魔めッ、手前も其處で死ッ了ふが可いや。」

お兼は危く倒れようとして、僅かに踏止まつたが、人から突かれたのか如何したのか、其等の事さへ殆んど辨別が無い樣である。

「ほゝほゝゝ。私も芝居を爲るの。可いわ、與九さんなら演つたッて可いわ。ぢやア、何を爲ようねえ。私は女だからお輕、與九さんが勘平……ほゝほゝゝ。能く似合ふわ。さア早く遣らうよ。」、「何を云つてやがるんでい。手前、何にも解らねえと見えるな。馬鹿めッ、因果な阿魔ぢやねえか。手前のお袋のお北の阿魔を、如彼して放擲らかして置くなア惜いもんだと思やこそ、甘く同居てえ事にしてよ、其から手に入れようと思つたんだが、彼女が強情な處へ持つて來て、手前が騷ぎやアがるもんだから……。」、「だから、早く家へ來て、阿母さんと芝居を爲るが可いんだよ。阿母さんと三人だと、左樣さねえ……左樣々々、阿母さんが戸無瀨、私が小浪、與九さんが其だと本藏よ、音羽屋の本藏だッて可いわ。與九さんの本藏、早く見たいわ。阿母さんが斯う振上げた手の內かッて……。」と、お兼は落ちて居た木片を拾つて、戸無瀨の身振を爲るのである。

「はゝはゝゝ。狂人てえものは爲樣が無えもんだなア。乃公の云ふ事が手前にや解らねえんだな。おい、お兼。」、「お兼ぢやないよ、今は小浪ぢやないかね。」と、もう小浪の積り、振袖を着た身のこなしを爲ながら、「力彌さんの宅はもう……。」、「はゝはゝゝ。大笑だ。」と、與九郎は何を云ふもお兼が正しくは解し得ぬのを見据ゑたのか、四邊を顧りながら、「おい、手前歸つたらな、阿母に左樣云ふんだ。いゝか、能く覺えて歸つて、阿母へ云ふんだぞ。」

お兼には聞えぬのか、其とも聞付けぬか……いや聞得たりとも、解し得ようとは見えぬのである。何處までも小浪の積りらしく、稍衣紋を拔いて、打澄して佇立んで居る。

「おい、歸つたらお袋に云ふんだぞ。先日の復讐にや、如何するか見やアがれッて、可いか。屹度復讐をするから覺えて居ろッて、可いか、おい。」、「もう可いんだのにねえ。私一人此樣に舞臺に出てるのに、阿母さんが來ないんだよ。阿母さアん〳〵。」、「阿魔ッ、大きな聲を爲るない。えゝ、もう傳言するがものはねえ。おい・阿魔、手前も阿母も……阿母も手前も……。』と、與九郎は前にお兼が涙を垂れた野薔薇の茂に掩はれた凹を見て、「へん、其意趣返にや、阿母も、手前も、甚兵衞見たいに此處で成佛させて遣るんだ。おいお兼ッ。」

お兼は覺えず戰慄した樣子で、與九郎の顏を見た眼に尋常ならぬ光を帶びたばかりでなく、見る〳〵外眦が釣上つたのである。

「やッ、手前、乃公の云ふ事が……。」、『おほほほゝゝゝ。今振上げた手の中かッ……あらッ、不可いわ、誰も無用とも御無用とも云はないんだよ。ほゝほゝゝ。與九さんは九段目を知らなくッて。本統に知らなくッて……まア九段目を知らなくッて。おほほゝゝゝ。」、「何を云つてやがるんだい。狂人に成つちやア、口惜いも悲しいも解らねえかも知らねえが、汝もお袋も早晚見ろッ……。」と、彼凹を指さしながら、「甚兵衞の後を追はせて遣るから、左樣思つてるが可いや。も一度お北を脅迫して見て、それでも聞きやがらねえ時にや……親子三人一穴てえのも氣の毒だが、此も因緣だと諦めるが可いや。」、「因緣だッて。」と、お兼はけろりとした

顏を爲し、何を因緣を付けるんだッて、私に。え、左樣。おほほゝゝゝ。因果因緣聞いても哭んねえッて、ほら、昨日も通つた祭文語が能く云つてよ。因緣てえた其れ。」、「はゝ、可哀想な者だなア。親父が殺されたんで氣が狂やがつて云ふんだから、全體云やア乃公の爲にやア……。」と云ひ掛けて、呪とお兼を見て「おい兼……。」と、つか〳〵立寄つた。

「またお兼ッて云ふのかい。小浪と云はなくッちやア……。」、「えゝ、此阿魔ッ。」

與九郎はお兼を何とする積りであつたか、確と其手首を攫んだ時、直ぐ其處の土手の下で、一聲高く長く牛が吠えた。

「えゝッ。」と、與九郎は覺えずお兼が手を放して「吃驚させやがつた。今日にも限らねえ。」

與九郎は田甫に設けられた低く狹い土手の方へ行くのである。お兼は追縋つて、與九郎が肩を攫んだ。

「おゝ痛い。何を爲やがるんでい。」

與九郎は見返りさまに、お兼が肩を控と突いて、突倒して置いて、「馬鹿に力がありやがらア。狂人にや馬鹿に力があるたア聞いて居たが……おゝ痛い。」と、肩を擦りながら、「起きねえか。おい、起きねえのか。狂人めッ、又と今の樣な眞似を爲やがらうもんなら、今度は命が無えぞ。へん、何てい樣だらう。」

與九郎は急歩に湊の方へ行つて了つた。

お兼は突倒された時、打處でも惡かつたのか、俯伏に倒れた儘、少時は起上らなかつた。が、與九郎の影が見えなくなつた時、半身を起して、眼には溢るゝばかりの涙、彼野薔薇に掩はれた凹地を呪と凝視めて居た。

何處とも無く砂地を踏む足音が聞えると共に、お兼は手早く涙を拭うてけろりとした顏を爲し、横に臥た儘小唄を歌つた。

「やア、此處へ居ただね。えらく方々探ねただよ。」と、云ふのは隣家のお重の聲である。

お兼には尙ほ其聲が聞えないのか、依然小唄を歌ふのであるが、何を唄つて居るのであるかは、聲が低いのと調子が亂れて居るのとで解らなかつた。

お重はお兼の顏を見下しながら、「東京の奧さま來さッしやつたに、お兼さア此處へ何爲て居るだよ。東京の奧樣、兼やは如何したッて探して居さッしやるだから、こうれ早く起きて、早く歸宅つて哭れるが可えだよ。」、「東京の奧さま……。」と云ひながら起上つた。

「兼やは如何したッて探ねて居さッしやるだよ。」、「東京の奧さま、臺灣さア突走つたッて……。」、「ほゝほゝゝゝ。何云ふだか、お前には。」と、お重はお兼が腕を抱込んで、「さアおらと同行に歸るだよ。」、「おほほゝゝゝ。叔母さア芝居爲るのかね。」、「なに云つてるだよ。」、「奧さま臺灣へ突走つたら、私も突走るんだよ。」

お兼は斯う云ふが早いか、お重に抱へられた腕を拔くと共に驅出した。

「こうれ、何處さ突走るだよ。」

お重もお兼の後を追うたが、年老いたる足の如何して若き歩に及ばう。お兼は松の間を滑り滑り、早くも其姿が見えなく成つて了つた。

（十二）

お重が氣遣つた程にも無く、お兼は一直線に我家へ馳歸つたのであつた。

一目見るより驚いたのは樋野で、覺えず涙含みながら、「兼や、お前は又病氣が發つたんだッてね。」

お兼は莞爾と笑を含んで居るけれども、他の者に對つた時とは違ひ、何處にか恥羞を帶びたかの樣に顏を赧めて、他の者との樣には口を利かね——他の者との樣に口を利かぬ處では無く、全く無言で居るのだ。

槌野は手巾で眼を拭ひながら、『銀や、お前は私を忘れは爲まいね。』

お銀は初めて口を開いた。で、云ふ事が餘り唐突である。

『奥さまは臺灣へお行でなさるんですか。』、『何だとお云ひなの。臺灣へ……ほゝほ。』と、槌野は覺えず微笑を漏して、『私は房州に來て居るんだよ、房州の八幡の銀やの宅に來て居るんぢやないか。全く解らないのかね。』とお北を見返つた。

『はアい。如何か爲ると、解る事もある樣でえすよ。私の云ふ事でえすと、大概は解る樣だと思ひますけんど……それも先ア……。』、『左樣かい。』と、槌野は首肯きながら、『銀や、お前はもう東京の事はお忘れだらうね。』

お銀は何と思つたか莞爾して、而も羞かしさうな顏を爲た。

『ほゝほゝゝゝ。お前は間違へた樣だね、お前が如何して此樣にお成りだか――病氣の所爲ではあらうけれども、實に可哀想で詮樣が無いよ。』と、槌野は又もや手巾で顏を掩うた。

『難有う御在ます。』と、お北ははら〳〵と涙を溢した。

傍に畏つて居た太助も、帶に挾んで居た手拭で眼を拭ふと、お重も垂頭いて思はず鼻汁を啜つた。

『一同泣くんですか。奥さまも……。』と、お銀は熟と槌野を見て居たが、『私も悲しくなつて來たよ。』と、云ふかと思ふと、今迄耐へに耐へて居たのでは無いかと思ふほど、兩袖に顏を押へて泣出した。

『銀や迄泣出して。』と、槌野は氣の毒に成つて、『銀や、お泣きでないよ。私が惡かつたね。さアもう泣かないからお前も……阿母さん、お前何とか云つて遣つて、もし眠る事が出來るんなら、少し寢かした方が可いだらうよ。銀や、お前少時お寢でないか。それが可いよ、左樣お爲。』

母が子を慈む樣な槌野が語も、お銀の耳には入らぬのか、返辭は無くて依然泣入つて居る。

『惡い事を爲たね。此樣にお泣きの事があるのかい。』、『はい。いゝえ。』と、お北は不思議さうにお銀を見て、『此樣に泣いた事なんぞは……ねえ隣家の叔母さア。』、『左樣でえすよ。此樣事は無えで御在ますがね。病氣に成つてからはね、笑つてばかし居るでえすから……東京のお客さまへ御目に掛つたで、急に悲しく成つたかも知れねえでがすよ。』、『左樣かねえ。私に逢つたからね。』と、またほろりとして、お銀の傍に立寄りながら、『銀や、お前少時寢て見ては如何だね。左樣お爲。左樣すると、氣も鎭靜くだらうよ。ね、左樣お爲。』

お銀は槌野に手を取られても、他の者へ對する樣に振拂はうとはせず、曳かるゝ儘に土間に廻り、上框にて母に足を洗つて貰つて、悄然として奥――と云ふも次の間と云ふだけであるが――へ連行かれた。

太助は小首を傾けて感歎しながら、『えれえ奥さまでねえか。あれで無えと、氣違つた者が、如彼溫順くなる事でねえだよ。東京の奥樣アえれえお人だ。』、『本統だよ。』と、お重も相槌を打つて、『彼鹽梅ぢや、お銀坊の病氣治るかも知れねえ。』、『なア お北さア。奥樣ア十日も此地へ居て吳れさツしやつたら、お銀坊の病氣治るかも知れねえだよ。』、『左樣でえすよ。叔父さアの云ひなさる通り、えらく氣鎭靜いた樣でえすから……。』と云ひながらもお北は奥の樣子を見て居る。

軈て奥から出て來た槌野は、手巾で涙を拭きながらであつた。

『奥さま、御難有う御在ました。』

上框に手を支へ、お北を槌野は止めながら、「静かに爲て居るが可いからね……では私は御隣家へ……。」、「左樣で御在ますか。それでは叔父さア叔母さア、御賴み申しやすよ。」、「えゝともえゝとも。座敷の掃除も今朝の中に爲てあるだで……。」、汚えのは仕樣も無えでえすが、東京の御客さまア、何卒御遠慮さツしやらねえで……。」と、お重は云捨てゝ我家へ駈けて行つた。

槌野はお北を見返つて、「一夜儘、少時靜粛にして置くが可からうよ。」と、太助に對ひ、「お前さん、御迷惑だらうがね……。」「如何致しまして。さア斯う御行らツせえまし。」

お北は隣家へ行く槌野を見送りながら、如何にも嬉しさの餘りらしくほろりと涙を溢した。奧にはお兼が忍音に泣くのが尙ほ聞えて居た。

（十三）

お北はお兼が奧に晝間の儘、寢て居るのか覺きて居るのか知れぬが、臥した儘であるから、別段心配する事もあるまいと、日暮頃から隣家へ行つて槌野の機嫌を伺つた末、つい雜談に更かされて十時頃迄留守にして居た。「あゝ左樣だつた。」と、お北は不圖思出した體で、「まだ蚊帳を釣つて遣られえだツけが……一人で釣つたかも知れねえけんど……。」、「まア左樣かい。此まア酷い蚊だのに……。」槌野は團扇を揮つて群り集る蚊を拂ひながら、「蚊帳を張つて遣らないぢやア……早く行つて張つて遣るが可いよ。」、「それでは奧さま、失禮でえすけんど……。」、「あゝ可いとも、私に其樣に心配してお呉れでなくツても、早く兼やの處へ行つてお遣り。私が歸京る時には、兼やを借りて行つて、病院へ入れる樣にするからね、お前も安心してお居でが可いよ。」、「はい、難有う御在ます、何卒お願申します。また明朝早く參りますでえすから……叔父さア叔母さア、お願申しやすよ。」

お北は我家へ歸らうと太助の家を出た。

今日は舊曆の七月の六日、月は松林の梢頭高く、見上ぐれば南の空を稍西へ傾いて居た。晝間は彼曇天であつたのに、何時の間に斯う霽れたらうか。何にしても明日の奧さまの鯨見物には此上もない都合だと思ひながら、お北は我家へ入らうとした。

家外の此白晝の樣なのには引替へ、家内にはまだ燈火を點けなかつたので、一寸先も見えぬ樣な暗黑である。

「お兼や、覺きてるだかね。」と、聲を掛けたけれども返辭をせぬ。

「まだ睡てるだかね。睡てるは可えけれど、まだ飯も食はねえで――晝飯も食はねえだから、嘸ぞ腹減しただらうに。お兼や、眼覺めただかね。」

幾度聲を掛けても返辭が無い。

「依然寢てるだと見えるよ。能く睡られるこんだ。尤も、病氣の所爲で、毎晩々々寢苦しがつてるだから、半日一日睡通すのも無理は無えだよ。」

暗いと云つても我家であるから、知れ切つた案内、足で探るほどにも無く進み入らうとした時、突然人聲が聞えた。

「畜生ツ〳〵。」と云ふのはお兼である。

「犬居るだかね。」と、お北は遙かに聲を掛けた。

「畜生ツ〳〵。それ犬が表へ廻るよ。阿母さん、早く隣家へお逃げが可いよ。畜生ツ畜生ツ。狂犬めツ〳〵。」

お北は何かは知らぬけれども、狂犬と聞いたので吃驚して、お兼が隣家へと云つたので覺えず隣家の方へ逃げながら、「お兼、お前怪我す

るでねえよ。』『おいお北ツ。』と、直ぐお北の背後に聲があつて呼掛けたのは、彼與九郎である。

『あれツ。』と、お北は逃出した。

『待たねえかツ。』と、與九郎が捕へようとした手先は確かにお北の着物には觸つたけれども、攫むには及ばずして逃げられたのである。

『えゝ失敗つた。彼狂氣阿魔が騷ぎやアがるからだ。えゝ、せめてもの腹癒だ。』

つか／＼と家内へ入つて、上框に片足を掛けると、『畜生ツ／＼。ペツ、ペツ。』『えツ、唾液を吐掛けやがつたな。見ろツ、らぬツ。』

與九郎は足元を忘れて駈出さうとして、何に躓いたのであるか、けたゝましい音と共に前へ倒れた。

『ほゝほゝおほゝゝゝ。』と、高く笑ひながら手を打くのはお兼である。『與九さん、何爲てるんだよ。』『此阿魔ツ。』と、立上りさま與九郎は攫へ居た棒を振上げながら、お兼の聲の爲た室へ飛込んだ。けれども、此室は一入暗くて、眞に黑白も分かぬのである。

『阿魔めツ。』と、盲打に棒を振ふのであるけれども、或は柱、或は唐紙などを打つた音ばかりで、お兼が何ほ居るか居ないかさへ分らぬのである。

『何所へ行きやがつたか。逃げた樣子は無し、何所へ隱れて居やがるに違えねえ。やい、氣狂阿魔、出ねえかツ。』『ペツ／＼。』と、唾を吐く音が直ぐ其所の戸の外に聞えた。

『阿魔めツ、家外に居やアがるんだ。』と、縁側に出ると、僅かに三寸ばかり開けられた雨戸の間から、方角が違ふので月光こそ映さないが、ぼうツと家外の明るさが見えた。

與九郎は直ぐ樣出ようとしたが、雨戸の間が狹いので、身を藻掻く間に、お兼が手を拍いて笑ふ聲が、もう十五六間先に聞えて、隣家の太助の家の方には、提灯の光さへ見えるのであつた。

『えゝ、また彼阿魔の爲に……今度見付けたら、もう生かしちやア置かねえぞ。』

與九郎は月光に其と認められるお兼を、さも惡げに屹と睨んで居たが、生垣を押破りさま何所ともなく逃去つた。

『ペツ／＼、畜生ツ／＼。』と呼ぶお兼の聲は尙ほ少時聞えて居た。

（十四）

今日は鯨見物を勸められて居たので、今朝は早く起きる積りであつたが、昨夜のお北の家の騷の爲に寢床に入つたのは十二時過であつたから、思の外に睡過して、漸く眼を覺したのは、午時近い十一時過であつた。

何時の間にか蚊帳が除られて居たから、槌野は睡覺めた時、早くも寢過ぎたのを知つたので、直ぐに起上つたが、如何したのであるか、些頭が重い樣に思つた。けれども、其は一時で、面を洗ひ膳に向つた頃にはもう、何とも無い樣に成つた。

『鳥渡々々。』と、お重を呼んで、『昨夜もう彼から何事も無かつたらうね。』『はアい。何事も無かつたでえすよ。』『左樣かい。』と、首肯きながら、『お兼は今朝は如何して居るかね。』『はアい、彼兒は相變らずで御在ましてね、先刻も其所の縁先で何で御在ましたよ、ホーカイ節か何かを……おほゝ。』

槌野も莞爾して、『其ならば先ア可いけれども……』『お袋も先刻、御機嫌何に參りましたでえすがね、お客さま尙だ睡て御座らしやッたで……。』『ほゝほ。本統に能く睡た事ね、面目ない位だよ。ほゝほゝゝ。』『なアに貴女樣ア、他に用あらッしやらねえだもの、晩景まで寢さツしやつたツて、能う御在まさア。はゝ

はゝゝ。』

『だッてお前、鯨見物に……。』と、云掛けて、此所から見える松林の中に人が集つて居るのを認めて、『おやッ、澤山な人ぢやたいかね。何か彼所に在りでもするのかい。』、『はアい鯨持つて來ましたで。』、『えッ。』と、槌野は眼を丸くして、『鯨が彼所に……。』、『はアい、村の者が鯨三頭ばかり買つて來たで御在ますよ。それをまた貴女さまア、先刻から彼所で料理爲てるで御在ますよ。それ見物しべいッて、彼樣に人集つてるでえすよ。はアい。』、『左樣かね。では私も、船たんぞで遠く迄行かないでも、彼所へ行つて見る事に爲ようね。』と、槌野は縁に立つた。『これを借りても可いだらうね。』、『はアい。穿かしやつて下せえまし。足痛くさッしやるかも知れねえけんど……。』、『其樣でもあるまいよ。おやッ、些とは痛い樣だけれども……本統に意氣地が無いわねえ。ほゝほゝゝ。』と、槌野は笑ひながら、太助の宅の圍の外へ出た。

お重は手に編笠を持ちながら槌野を追つて來て、『これ被らッしやらねえと、お顔の色が黒くなるでえすよ。』、『えッ、之を被るの。』と、槌野は少しく難色を帶びた。

『東京から來て御座らッしやる人は、誰だッて之被らッしやるでえすから……。』、『左樣かね。ぢやア私も被つて見ようかね。』と、槌野は編笠を被つて紐を結びながら、『ほゝほ。お正月たら鳥追だけれど、今ぢや……さうさ袴を穿くと、まるでホーカイ節だよ。ほゝおほほゝゝ。』

槌野は戯れながらお重に別れて、彼松林近くへ行くと、成程婦人の多くは――無論海水浴に來て居る客――自分と同じく編笠を被つて居る。で、其九分は浴衣掛に細帶一つである。見た樣が隨分能く無い方であるから、槌野は眉頭を顰めながら、彼等の群に交つて差覗くと共に、覺えず慄然として身を退いた。

『まア氣味の惡い。』

胴切にされた鯨の胴の幾箇とも無く、草の上に置かれて、黒赤き其肉の外へめくれて、刻まれた脊髓の白くして血に塗れた樣など、直ぐに他に聯想される物がある――人も輪切にされたならばとは誰しも聯想せぬ者は無いのだから、槌野は顔色の變る迄に可怖しく思つた。あゝ此樣物なら、見るでは無かつたと、早くも歩を返すと、何時其所に來たのか、自分の後にお兼が立つて居た。

『兼や、お前何時來たのかい。』

槌野が聲を掛けたけれども、お兼は聞付けぬのか返辭をせぬ。其鮮槌野の顔を見たのであるが、まるで路傍の人に對すると同一で、まるで忘れて了つた樣である。

『如何したのだらう。』

槌野が不思議がつて斯う呟いた時、お兼は見物して居る人を押分けて中へ入つた。で、槌野も亦お兼が何を爲るのかと差覗くと、今度は一層樣子を見る事を得た。前に見た時は、鯨の胴切の他見る猶豫が無かつたが、今度は其の料理して居る人々――荒拵にして居る者、脂肪と肉とを切放して居る者、肉を鹽漬にして居る者、脂肪を竪に薄く刻んで居る者など十五人ばかりの此等の人々が、何れも手を血に塗らして刀を取つて居るのである。中にも、脂肪を刻んで居る者は多くは女――お兼ほどの年頃の娘も三人ばかりは混つて居た。能く彼樣眞似がと、槌野は身柱寒い樣に思つた。

脂肪を刻んで居た娘の中の一人が、何時かお兼を認めて、『お兼さア來ただね。加勢に來たただね。おーいお兼さア。』、『おう、お兼さアが。』と、他の者も聲を掛けた。

お兼は返辭を爲なかつたが、彼等がお兼を呼んだのを聞くと共に、屹とお兼を見返つた者が

あつた。お兼も亦其男を凝視めて居たのであつた。それは肉を鹽漬にして居た男である。
槌野も覺えず其男を見ると、四十歳以上の何所となく可怖しい――何故に左樣思つたか自分にも解らぬが、此男が與九郎と云ふのでは無いかと思つたのである。
途端にお兼が件の男に聲を掛けた。
『與九さん、今夜も私の宅にお入でかい。』、『何を云つてやがるんでい、氣狂めッ。』と、いかにも憎さげに睨み付けて、『何か云やアがらうもんなら、手前も打殺して了ふから、左樣思つてるが可いぞ。』
肉と脂肪を切放して居る男が、『おい、與九郎、お兼ッ兒をお殺すだ云ふが、汝他にも打殺した者があるだな。』
槌野が其男を見ると、自分が宿を爲て居る家の主人の太助であつた。
『えッ。』と、與九郎は覺えず顔色を變へたが、忽ち笑出した。『はゝはゝゝゝ。他に打殺したものッて、昨夜犬打殺して遣つたんだ。』、『なに、犬か。お兼ッ兒は人間だで、人間を序に打殺す云ふだから、汝以前人でも打殺した事でも…。』、『おい〳〵、戯言を云つちや不可えぜ。おい、爺さん、此所にや澤山人も居らア、途方もねえ事を云はねえが可いぜ。それで無くッても嫌疑られてる與九郎だ。詰らねえ事を云つて貰ふめえよ。』、『なに、犬なら可いだ。』と、太助は又刀を動かし始めた。
『おい與九さん、お前今夜も宅の母親さんを口說きに來るんかい。』、『えッ、何だと。』と、與九郎は看々顔を紅くした。
『與九、汝、お北さアを口說きに行くだな。はゝゝゝ。』と、高く笑つたのは、鯨を荒扱に爲て居た男である。
『おほほゝゝ、ほゝほゝゝゝ。』と、聲を合せて笑つたのは女の連中である。
見物人の中にも笑出した者があつた。
『おほほゝゝゝ。』と、お兼は別けて調子高く笑つて、『そりや可笑いのよ。與九さんが阿母さんと演劇を爲るの。忠臣藏の九段目…斯う振上げた手の中かッて…おほほゝゝゝ。』
一同聲を合せて、南風で打寄する浪の音も紛るゝばかり笑つた。尤も、此は全くお兼が樣の可笑いのを笑つたのであるが、與九郎は自分が此ほど笑はれたかと思つたので、嚇と怒つて、早くもお兼が頭上に拳を揮つた。が、お兼が目早く避けたのであるか、それとも偶然であつたのか、與九郎が拳は空を打ち、力餘つて危く前へのめらうとした。
『あははゝゝ。はゝはゝゝゝ。おほ、はゝゝ、おツほッほッ、はツはツはツ…。』
笑聲一時に發つた。
『此阿魔ア、何時も〳〵、乃公の邪魔ばかり爲やがらア。えゝ。』と、早くもお兼の手首を捕へた。
『おい、與九、氣い狂つた者相手に如何するだ。放せ、放すが可えだ。』と、太助は早くも聲を掛けた。
『兼や、早くお逃げよッ。』
槌野が氣を揉む中に、與九郎はお兼が兩手を捕へると共に一振ふつて、横さまに地上に撻と投付けた。
『與九、大人氣ねえだ。』、『狂人捕へて何するだ。馬鹿野郎ッ。』、『汝、心に暗え事あるだで…何するだ、何云うたッても、氣狂つてるでねえか。』
一同立つて與九郎の無法を詰るのである。
お兼が嘸ぞ痛かつたらうと、誰一人氣の毒がらぬ者は無いのに、其程でもなかつたのか、起上るより早く、また調子高く笑ふのである。
『おほほゝゝゝ。私と與九さんと芝居をするんだッて。おほ。與九さん、さア可いかね。』と、

よろ〳〵與九郎の傍に近寄つて、「斯う振上げた……。」、「まだ懲りやがらねえのか。一同見て呉れるが可い。此通り強情な阿魔ぢやねえか。」
與九郎は又もやお兼を突飛ばすと、お兼はばたり其所に倒れた。
槌野は如何かしてお兼を伴ひ去らうと思ふけれども、自分一人の手に合はぬ事を知つて居るから、誰にか借りる手がと、左右を見返つた時、遙か彼方に、お北が駈けて來るのが見えた。槌野は覺えず手を擧げて 麾いた。

（十五）

お兼は尙だ懲りぬのか、また立上つて、また與九郎の傍近くへ、よろめき行くのを槌野が止めようとしたけれども間に合はなかつた。
『與九さん、お前、今夜も、おほほゝゝゝ。』、『えッ、尙だ懲りねえのか……。』
與九郎が又手を動かさうとするのを、太助は早くも間へ分入つた。
『大概に爲るが可えだ、汝がお兼ッ兒を――世間狂人に成つてる者を、今の樣な事するだで、世間が汝が甚兵衛殺したんべいなんて噂するだ。大人氣ねえだよ。汝も聞譯の無え男でねえか。」、「斯う振上げた……。」、「爺さん、此だから乃公だッて……。」、「お兼、如何したッよ。」と、お北は駈付けるより斯う云つて、お兼が着物の砂に塗れたのを見るより、「誰が此樣に爲ただよ。これ誰が此樣目に――普通でねえ者を……太助叔父さア、誰がお兼を……。」と、物狂はしい體である。「おゝ、與樣も居さッしやつただね、誰がお兼を……。」と終に泣聲に成つて、與九郎が傍へつか〳〵と進んだ。「與九さん、お前だッぺい、お兼を此樣目に……。」、「うむ、乃公が爲たんだ、餘り解らねえ狂人だから……。」、「おゝ、餘り解らねえ狂人だからッて……狂人だから解らねえだよ。何を云つたか知らねえけんど……おゝ、左樣だ。お前の事云うたら――皆の衆聞いて居さッしやる所へ、お前がおらへ云つた事打撒けたら……打撒けて見べいか。おらが所へ同居させてッて賴んだ事もあるだよ。それ聞かねえッて手籠に爲べい爲たり……おゝ、昨夜もだ。おらを殺して遣るべいッて長え物持つておらを追掛けた事忘れる事ねえ筈だ。皆の衆、聞いて呉れさッせいよ。お兼が狂人は狂人でも、おらがこと心配してるか爲て、此野郎が私を――其所へお兼が出て來ては邪魔しい〳〵するだで、それ根に持つて、普通でねえ者を、此樣目に逢はせるだよ、これ與九郎、今こそ云ふだがね、甚兵衛さア殺したも汝だッぺい。」、「何だと、人が知りもしねえ……。」、「ええ、何吐け〳〵云ふだよ。おら今こそ云ふけんど、甚兵衛さア死になさる前にも、汝おらを口說いた事忘れる筈はねえだよ。」
與九郎は何時か顏色が蒼白めて居た。
「默つて聞いてりやア口から出放題に勝手な熱を……ええ、今一言云つて見やアがれッ……。」、「云はねえでかよう。皆の衆、聞いて呉れさッせい。此與九郎が甚兵衛さんを殺しただから――甚兵衛さアを殺しただから……。」
何時か遠く〳〵開いて輪を畫いて居た見物人へも、判明と聞取られる程に、お北は與九郎の罪を訴へるのであつた。
『人殺かッ。』と云ふ語が所々に唱へられて、與九郎の耳に入るので、與九郎は數千の敵中に圍まれた樣に思はれた。
「ええ、默つて居りやア。」と、與九郎は太助が支へて居た手を振拂つて、お北へ飛掛るより早く頭髮を攫んで引倒して捻伏せた。
「一人に覺えもねえ難題を吹掛けやがつて、太え阿魔だ。」と、二つ三つの拳が早くもお北の頭上に加へられた。

「おゝ、おらも甚兵衛さア見る様に、殺すなら殺せ。」と、お北は夢中に成つて叫ぶのである。

「誰か助けねえかよ。」とは彼此の口より一時に唱へられた。

ばら／＼と二三人の人が立寄つた時、其時よりも疾くよろめきながら與九郎が後に廻つたお兼は誰が持たせたのか、何時の間に拾取つたのか、手には鯨の胴も一撃の下に斷たる可き鋭利なる庖刀を提げて居た。

人々があッと云ふ間も無く、お兼は巾を裂く様な聲に顫へを有ちながら、「斯う振上げた：：。」と、庖刀を逆手に取直した。

『何を爲やがる。』と、お北を捻伏せて居た與九郎が背を伸さうとした眞正中に、突下ろすお兼の力と伸上らうとした與九郎の力とで、唯一刀に胸迄刺貫かれて、あッと云ふ間も無く與九郎は絶命した。

見て居た數十の人は一人として聲を發する者は無かつた。月暗く波死したる夜半の八幡の松林も此白晝の此些時の間の淋しさには及ぶまいと思はれる程であつた。

此寂寞を破つて發せられたのは、お兼の例の笑聲である。

「おほほゝゝゝ。斯う振上げた：：。」と、手眞似を爲たが、前に提げて居た庖刀は刺貫いた儘與九郎が體に留められたのであつた。

見物の間には一種の物音が——聲であるのかも知れぬが——喚出した。

「ほゝほゝゝゝ。もう芝居は濟んぢやつたのか知ら。」

斯う云つた儘、お兼は少時默然として佇立んで居たが、何と思つたのか突然我家の方へ駈出した。

「あらッ、兼や、お前は：：。」

槌野がお兼を追行く其後から、既に起上つて居たお北は、肩から胸へ與九郎の血を浴びた儘、同じくお兼の後を追掛けた。

見物は云ふ迄も無く、彼村の者共も、鯨と與九郎の死骸を見張らせる爲に一人を止めたばかりで他は皆お北の家へと急ぐのであつた。

* * * * *

顏の色蒼白に成りながら兩手を支いて居るお兼を、槌野は涙の眼に熟と見て居る。傍にはお北が泣崩れて居るのである。

此室には此三人より外、隣家の太助さへ居らぬので、槌野とお兼の間には、半紙——何か書かれて卷かれた半紙が、二本まで置いてあつた。

槌野は涙を抑へながら、「お兼や、能くお前は彼男：：を親の敵を討つたのだから：：なにお前、罪人と云へば罪人だけれども：：。」「奥様が左様仰有つて下さいますけども、人一個を殺したんで御在ますから、私や此儘警察署から、巡査さんが御入でなさるのを待つて居ますよりか、寧そ：：。」「そりやもうね、其が人の道だけれども、お前には母親があるのだよ。今後お前お袋は誰がお前：：私の云ふ通りにお爲。」と、槌野は前にあつた半紙を取上げた。

「はい、私も阿母さんが居ますから：：。」「それだから何所迄も狂人に成つてお居で——狂人で通して了つてお呉れ。え、お兼、可いかい、お兼。」と、槌野は半紙の卷いたのを懐中に入れて了つて、『遺書なんぞが殘つて居ちやア、とても狂人では通せないからね、此は私が預つて置くよ。』「はい、私が與九郎を殺して、私がまた刑罰に成りましたら、阿母さんが如何爲かと其が心配に成りましてね、彼様氣の狂つた眞似なんかを：：。」

家の外には太助の聲で、「誰も入るでねえぞ。見世物でねえだから：：。」と、頻りに人を制するのが聞えた。

「それだから、何所迄も氣狂で通してお呉れ。

ね、ね、兼や。』と、お北を見返りながら、『お前が居なくなれば、お袋がお前…。』
お北は唯泣いて居て口を利き得ぬ。
『左様ですけれども、奥さまア…。』と、お兼は如何にも術なげに、『人を一個殺したんですから……。
途端に、『加害者は…。』と、太助に問うたらしい聲は、警官ではないかと、槌野ははッと思つた。
『兼や、いゝかい。』と、槌野はお兼の耳へ口を寄せて、『狂人で通せない迄もね、決してね、敵だと狙つて居たなんぞと云ふぢやないよ。』、『は、はい。難有う御在ます。』、『此所に居るのか。』と、太助に案内させて、北條警察署の警部巡査が四五人、どや〳〵と入つて來た。
お北はお兼が今殺されもするかと泣くのである。
警部は槌野等を一應尋問した上で、軈て巡査に命じてお兼を護送させた。
娘と共にと泣狂ふお北を槌野は、強ひて支へて、僅かに門口から見送らせた。お兼は例の調子高な笑聲も上げず、極めて靜粛に見受けられたが、北條迄付添つて行つた太助が歸つてからの話には途中では高聲に笑ひもすれば、また低聲に小唄も歌つたと云ふ事であつた。

＊　＊　＊　＊

お兼は警察署の調を受けたばかりで、數日の後に放免された。村の者誰一人として警察署の處置を賞讃せぬ者は無かつた。
また數日の後には、お兼は母と共に東京赤坂の高松が家に引取られて、今尚ほ其家に在ると云ふ事である。

（明治三十四年四月）

變目傳

（一）

神田猿樂町に仁壽堂と稱ぶ藥種店あり。正午少し過ぎしかと思ふ頃、いと材低く小柄なる男つと入來れば、早くも見付けし店番の小僧三吉。

『やア變目……。』

『何だと。其樣事を云ふと。』

『やア御免だ。もう云はない。』

つい口を滑らし、何とか爲れはせずやと、傳吉が顏を見上けたる小僧の三吉が前に、傳吉は白銅貨一枚を投出したり。三吉が呆れ顏して、容易くは手さへ觸れねば、傳吉はにや〳〵と打笑みつ。

『早く納つてお置きよ。誰かに見られちや不可いから、早くお納ひよ。能いツてば、能いぢやないか。其代りにやお賴みがあるんだ。』

『賴みツて、何です、傳さん。』

『お前使に行つてお吳れでないか。遠方ぢやアないんだ。お前知つてるだらう、横町の質屋を。それ伊勢屋さんさ。彼家の常さんね、彼の番頭さんに、手紙を賴まれてお吳れでないか。』

『番頭さんに、手紙を。』

『うむ。店番は私が爲てるから。』

『行つたツて能いんだけれども……。』

小僧は奧の方を見返り、其眼を白銅貨に移し、また傳吉の顏に移して、白銅は欲しいし、眼玉は怖しと云ひさうな風情。

傳吉も奧の方を見込みて、少時思案し、

『定どんは居るのかい。』

『今晝飯。定さんが濟むと、私が代るんです。』

『ぢやア定さんが來たら、定さんに話して、三どんに行つて貰ふ事に爲ようよ。何だね、早く納はないのかなア、見られちや不可いぢやないか。それ何人か來るやうだよ。』

傳吉奧の方を見返りたる時、奧より出來りしは此家の娘お濱、年齒は十六七にて、此邊にて女親に羨まるゝ評判娘。容姿おしなべて十人並に勝れ、兩親ともに早く別れて、兄の手に成人りたれば、兄も心を用ゐて飾らせ、白粉こそ濃からね、花羞かしく粧りたり。

傳吉はお濱に顏を見合はするより、急にきちんと體裁作りて、

『お濱さん、今日は。』

愛嬌つくりてにこ〳〵と打笑めば、お濱はいやとのみ會釋さへ爲すや爲さず、奧深く走入りしが、たまで高からねど笑ふ聲の店へ聞えぬ。

『何だ、何が可笑いんだらう。三どん、奧ぢや大變に笑つてるぢやアないか。旦那は在宅かえ。』

『えゝ。』

『お濱さんは、まだ極らないかい。』

『極らないツて。』

『何方かへお嫁にいきなさるんぢやアないかね。』

『お嫁に。ふゝゝゝ。如何だか。』

『何を笑つてるんだ。』

『ふゝふゝゝ。』

傳吉尙も小僧に問はんとする時、

『傳さん、お出でなさいまし。』

奧より立出でて聲を掛けしは、定二郞とて廿一二歲、此家の主人の從弟なるが、修業の爲にとて店の若者番頭がはり、傳吉とは親しく物云ひかはす交情なり。

『定さん、鳥渡君に賴みがあるんだ。如何でせう、三どんを横町まで、横町の伊勢屋さん迄貸して貰ふと云ふのは。え、定さん。』

傳吉は定二郎が傍に居寄りて、過半忍び音に云ふ。

定二郎は飲込顔。

『能うがす。おい、三公。手前鳥渡横町まで行つて來るんだ。』

『三どん、濟まないが、之を常さんに。能いか、伊勢屋の番頭さんだぜ。呼出して、内々で、他の人に見られない樣に、手渡しするんだよ。伊勢屋の家の人に見られちやア困るんだから。』

傳吉は豫て認め置き持參せしにや、懷中かい探りて手紙取出し、之を小僧の三吉に渡せば、三吉は鼻薬の效驗尻輕に、直樣横町へ走り行きたり。

定二郎は傳吉が顔を見て態とらしく打笑み、

『傳さん、此頃は河岸をお變へなすつたね。伊勢屋の番頭さんと旨く遣つてますね。今の手紙も何でせう。女の處からなんでせう。私を拔きの内證々々で、餘り浮氣を爲なさりやア、お濱さんに云付けますぜ、お濱さんに。』

『しいツ、何を云ふんだね。其樣事ぢやないんだから……。』

傳吉氣遣はしけに奥の方を見返れば、定二郎態とらしく、

『はゝはゝゝ。』

（二）

彼の變目傳と云へるは、神田淡路町に洋酒を卸小賣店、埼玉屋の主人傳吉、手廣しと迄にはあらねど店付淋しからず、相應に商賣もあるなり。

老母と親子水入らずの中に、店には小僧を使ひて三人生活。老母にやさしく孝行を心懸け、商賣の都合を見ては小僧を添へ、駒込へ墓參にも遣れば、觀音へも參詣させる。寄席は義太夫が好きなればとて、月の中には二度か三度、缺かさせぬ倅傳吉が孝養を、嬉しきに付けての親の望は、早く好い嫁を與ひ、初孫を膝にしたく、我子よりは先づ世間へ、其となくほのめかせど、又手他から貰ふに、ゆき丈揃つて、直ぐ間に合ふと云ふ譯には行かず、長し短しに埒あかねば、老母が嫁の事を口に爲初めてから、三年ばかりは夢の間に過ぎたりき。

今年は傳吉廿七歲、尙ほ獨身に爲し置く事、老母はいと不便なりと案てど、傳吉は何とも思はぬ氣色にて、去年あたりから時々夜遊することあり。さればとて、終夜家を空けるにもあらず、商賣を怠るとにもあらねば、よも沈淪することはあるまじ、其の中には相應な嫁を迎へてと、其のみを思ふ親心に、強ひて迫るにはあらねど、誘ひを掛くる事もあり。

『傳吉や、お前が厭がるから、其で私も焦思ない樣なものだがね、もうお前は廿七におなりだよ。獨身も能いさ。其で立通すのも、お前の希望なら、私が兎や角云ふ事もないのだけれど、斯うして店を張つてお居でだと、世間體もあるし、萬事に不自由をお爲だし、私も段々老除は爲て來るし、何だか淋しい樣で、心細くもあるし。如何だらう、お前其氣になつてお呉れでないか。それだと、私も實に安心するから。』

矢張此迄通り否で押通すか、但しは心が動き始めたかと、母はぢつと我子の顔を見詰めて、樣子如何にと窺ひたり。

母が緣談を口にすると共に、傳吉は帳場格子の傍なる帳簿引寄せ、俄かに繰初めしが、此時漸く母の方を振向き、

『慈堂、緣談事を聞くと、私や可厭な氣になるから、もう止してお呉れよ。慈堂が其樣に心配なら、私だツて如何したツて否だたア云はな

い。だがね、私の女房なんぞになる女が、其樣酔興な女が何處にあるもんぢやアない。』

と、又もや帳簿を繰初めぬ。

『何を云つてお居でだよ、お前は。女房に來る女がないッて。それは、お前何をお云ひだよ。串戯お云ひでないよ。』

眼を丸くしたる母の顏を、傳吉は見返り、

『だッて、慈堂。私の事を世間ぢや、變目傳だの蜘蛛男だのッて、衆人がさう云つてるぢやないかね。だもの、此樣男を亭主にする女が、何處にあるもんかね。』

帳簿はたと閉めて、煙管手に取り上げ、伏目になりつゝ煙草を喫む。

傳吉が我と我身を歎てるが如く、身材いと低くして、且つ肢體を小さく生れ付きたり。ゆきは六寸五分、丈は三尺一寸、其にても尙ほ踵を掩すばかりなる着服は、羽織にも好みて赤出の唐棧縞を用ゐ、常に手を懷にし、肱下緊突掛けて、ちよこ〳〵と小走りに歩める樣、往來の人目を惹けば、口惡善なき童等は、蜘蛛男又は侏儒と綽號し、彼を見るごとに、興ある事にして打ちはやす。顏は丸額にして、鼻は形よく、口元に愛嬌あれども、左の後背より頰へ掛け、湯傷の痕ひッつりになりて、後背を堅に斜めに釣寄せ、右の半面に比ぶれば、別人たるが如く見ゆ。此にぞ、變目傳の綽號は附けられける。態とらしく笑を含めば、厭ふべき目付いとゞ氣味惡く、女童など親しまん樣なし。されど、口に毒を含まず、氣輕に而も人と爭はねば、何方にても憎きものにはされず、物淋しき折など、遊びものとして待たるゝ事もありけり。

母は傳吉が諦め顏に、我女房となるべき女の、いかでか世にあるべき、われは變目傳蜘蛛男なればと、伏目になりて煙草を喫める樣を見れば、其意中の不便さに、はや淚のせき來るを、態と笑に紛らし、

『ほゝほゝゝ、お前またきまりを云つてお居でだよ。他人が何と云つたッて、些とも關ふ事はないぢやないかね。其樣人達の世話になりやア爲まいし、斯うやつて、獨立で店を張つてるし、立派なもんだアね。大きな體格を爲て居たッて、土方だの、人足だの、人に使役はれてるぢやないかね。お前が小さいからとッて、何も羞かしい事があるものかね。大男總身に智惠が廻りかねとさへ云ふよ。私の血統に私が濟まないのさ。私の過失でお前に湯傷をさせて、其樣顏に爲たのだから。勘忍してお呉れよ。生得の片輪ぢやあるまいし、顏にいゝひッつりがある位は、瘡痕から見りや、お前何でもありやしないよ。人は見目より心と云ふぢやないかね。男振を望で來る樣な女房なら、此方からお斷りさ。お前が私に委せてさへお呉れなら、屹度立派な嫁を探して見せるよ。世間は廣いやね、馬鹿な娘ばかりありやアしないよ。お前、私に委せてお呉れでないか。』

母が斯く云へる間、傳吉は煙管を手にせし儘、往來を見遣りて、耳を傾け居る樣もなく、母が迫れば、唯打笑めるのみなり。

『お前、なには如何だらう。あの仁壽堂のお濱さんは。私は大層能ささうに思ふんだよ。』

お濱と聞いて、傳吉は覺えず母の顏を見返りたり。

頰赧くなりて、何となく羞を含みたる我子の樣子に、母は傳吉が顏をぢッと見詰めぬ。

『だめだよ、母親さん。呉れるものかね。』

『だッて、呉れないたア限らないやね。お前彼娘なら……。』

母は云掛けてぢッと見る。傳吉は例の目付ににやりと打笑み、

『ふゝふゝゝ。だめだよ。恥をかくばかりだよ。』ついと立ちて店へ出でたり。

（三）

傳吉は幼時より女達に除ものにされ、物心つきては、人の我を侮り輕しめ、尋常ならぬを云ひ罵るに口惜しく、尾張町の洋酒問屋へ奉公せし中も、身を粉にして立働き、主人の信用を得たる結果、朋輩五人ありし中に、逸早く店を持たせて貰ひ、母に不自由な思させざる迄にはなりしなりき。されば、商賣には目先きゝて利潤も尠からねば、店の品物思ふ儘に積みたるが上、現金の貯蓄も相應に出來、二間の間口を近き中に三間にしてなど、母を喜ばすれば、母も其を樂しみにして、其程の身代になりしを見れば、其日に眼を瞑るとも苦しからじと、親子慰め勵まし、別けて母は日毎に其を云ひ出で、私に安心させて、お前も出世をしてとばかり、老の心のさしも急がるゝ。

我と我身の不具らぬに愛想つきて、男女の交りはなり難しと諦めながらも、世の人々の夫婦相攜へて睦みたる、若き男女の相愛し相慕へる樣など見聞くに、流石情の春を催し、われ亦彼如くあらんにはと、物ほしき心の出でざるにはあらず、されど、幼時より他人の侮蔑には慣れたり、其色目に其意中を推量の敏捷より、先方の所作に望を失ふことのみ多くて、我は所詮獨身すべきものとして、世には生れ出でしなるべし、女を見返りもすまじと決心しけるが、叉手徐を思ふ心こそ儘ならね。

仁壽堂の主勝之助と云へるは、傳吉が尾張町の洋酒問屋へ奉公せし頃、葡萄酒火酒などの取引より懇意を結び、傳吉淡路町に店を開く事となりたれば、路の近きに利便多しとて、傳吉が店より葡萄酒など買入るゝ事にし、傳吉も開業の折柄、仁壽堂を第一の得意として、いと親しく出入せるなりき。昨年の秋の事なりき。或日の誰彼時、傳吉仁壽堂に到りしに、勝之助は喜び迎へて、今日は妹お濱の誕生祝に、心ばかりの赤飯、他に馳走とてもなけれど、快く飲んでは下さるまいかと、奥へ誘ひけるに、傳吉も祝とあるに、飲めぬ口ながら辭退もならず、二杯三杯と過しければ、心地面白うなりて、例の斜めなる眼をいとゞ斜めにし、誰彼の差別なく笑い掛くれば、氣味惡きながらも興あるに、人々は能き遊び物を得たり顏に、尙も酒を强ひつゝ笑ひ興ずれば、傳吉今は舌も廻らぬ迄醉うて、

「旦那、も、も、もういけやせん。こ、これで、お、お納めに。えーい。も、も、も、もう…。」

盃を下に置かんとする傳吉が手を、傍に在りしお濱は逃さず握りて、

「傳さん、いまお一杯。お一杯召上つて下さいよ。」

愛嬌づきたる眼に笑を含みて、傳吉が顏をぢツと見る。

お濱其時は十六歲。花の蕾の笑みがてに、得も云はれざる風情あるに、今日は其身の誕生日なればとて、兄の指圖に衣服より髮飾、心を用ゐて粧りたるが上、賑かなる性質なれば、能く語り能く笑ひ、興に入りたる樣、鉢植の櫻花の室に咲きて、我は顏なる、折からの酒の席には、いと詠めあり。

傳吉はお濱に手を取られて、

「も、も、もう…。」

頭ゆらめきつゝ、注がせじと爭へば、お濱は尙も手を握りしめて放さず。

「傳さん、おいや。私のお酌では、おいやなの。お酌ぐらゐ侮せて下さつたツて、能いではありませんか。」

兄と定二郎とに顏を見合はせ、袖もて口を押へつゝ笑を忍びて、尙も手を放めず强ふれば、傳吉は重げなる頭を擡げて、お濱の顏を見るより、例のにやり〳〵と打笑む。

我は女に愛されず、優しき言葉を掛けらるゝ

事なしと諦めたる傳吉、今しもお濱が我手を取りての言葉に、若心の春の蕩せる折柄、逆上し耳に情ありと聞きなし、うつゝ心になりてお濱を見れば、莞爾笑を含みし頬に、ぽと茜さし、愛嬌滴るが如き眼して、屹と我を見居たりき。

「お濱さんの代りですぜ。傳さん、後は思ひざしにするんだ。はゝはゝゝ。」

定二郎傍より酌をなしつ、笑ひながら傳吉に目遣す。

お濱は定二郎を屹と睨み、取居たる傳吉の手を放せば、傳吉はあまされて意氣地なく猪口の酒を打こぼし、

「お、お、思ひざしだツて。じよ、じよ、串戯云つてらア。いひ〱〱。」

傳吉が笑聲の可笑きに、人々哄然と笑へば、傳吉も同音にえへ〱〱と氣味惡く打笑みつ。

斯くて傳吉は次の日より、尠くとも日に一度は、仁壽堂へ來らざることなき樣なり行きたりき。

（四）

お濱が誕生祝の次の日より、傳吉日毎に仁壽堂に出入れば、定二郎は早くも傳吉が意中を覺りて何だ變目傳の憎體め、人並にお濱さんを張りに來る處が可笑い、と、心に笑ひて謔戲半分、お濱傳吉を戀へりなど云ふに、傳吉は顏を赧くし、嬲り人を馬鹿にせぬが能いなど、怒りし樣を見すれど、心は色に見はれて、定二郎店に在らざる折、小僧の三吉にお濱の事を尋ねし事さへあり。

其を三吉定二郎へ告げければ、定二郎は益す興に入りて、お濱が兎云ひし、角も云ひしなど、眞實しやかに誘へば、傳吉は思に得堪へず、確と聞定めし上にて、何とかなるべき戀ぞと、定二郎が我店に來りしを、夕飯時なればとて、萬世橋手前の去る小料理屋へ伴ひたりき。

定二郎心中益す可笑く、馳走のなり德、構ふものかと、伴はるゝ儘傳吉が馳走になりしも幾度か、其都度傳吉を喜ばすれば、傳吉は終に意中を打明け、お濱に果して我を憎からず思ふ心あらば、其を確かむるだけの、何にても能ければ證據を見たし、一生後生のお願なれば、定さんの働きを賴みます、其代りには、何にてもお望次第、御馳走ならば、馳走りませう、欲しい物は進ぜませう、と退引ならず賴めば、定二郎は安受合ひ、證據だけならば、明日にも見せる事に致しませう、本公の身なれども、別段金錢品物に望なし。其代りには一度は樣子だけにても見たき、吉原を一度見せては下さるまいか、お前さんの好事話に、私の馬鹿々々しさも、と、兎角して傳吉を勸め、いやと云ふを吉原へ引出したりき。

定二郎が豫て馴染める女の許へ、初會の體にして傳吉を誘ひ、其が相方に飲込ませて、金が情夫なる好遇に、一度が二度となり、三度が四度となれば、傳吉は早や夢の心になりたりしが、お濱の事は露しも忘れしにはあらざりき。

定二郎がお濱の返事なりと云ふを聞くに、書いたものは後に殘れば、若し間違から思ふ儘にならざる事ともなりたらば、何時までも恥辱を見んは最口惜し、さればとて、此と云ふ物なきにあらねど、其は多く兄の知りたる物のみにて、調べられたる時に云譯なし、何をがなと思へど、心に任せねば、縫取の寫眞挾みに、お前樣と私と二人が名の頭文字を、羅馬字もて縫取り、其を變らぬ心の記證に進らすべし、人目を偸みて爲す業なり、今日明日と云ふ譯にも行かねば、氣長に其日を待つて下され、其よりも先だつお願は、一日も早く、兄さまの許を得玉ふ樣爲したし、其も今年來年は、些と仔細ありて――其仔細は追てお話し申すべけれど――兄樣得許さ

るまじ、萬事もお目に掛りたる節、互の思ふ儘をも打明けたしと云ふなれば、傳吉は彼寫眞挾の出來上る日、お濱に相見る日の來れかしと、待席千秋も啻ならざるの思に、一日々々と送りたりき。

傳吉は仁壽堂への日參を、一日たりとも怠りし事なし。今は我と許嫁の如き心地するお濱の樣子に、定二郎我意を通じたる徴も見えて、顔を合はすれば赧くなりて走り隱れ、たま〳〵座を共にする事あるも、態とらしく顔を背向けて、目も合はぬ樣もてなす。あれ程にせずとも、定さんの外に誰かは知るべき、人目なき折には、走り隱れずとも、一言位は交してもと、酒の上にて定二郎に愚癡をこぼせば、其は戀なれぬ未通女の常情、其處が難有い身上なりと、一口に云ひ捲られて、女心は流石に可愛しなど思ひつゝ、例の寫眞挾は今日か明日かと、待つ間に其年は暮れて、今年も早や春の末とぞなりける。

傳吉は初めの中こそ、定二郎に誘はれても進まざりし吉原へ、後には我から定二郎を誘ふ事さへある樣になり行きたり。遊びに慣れざる哀しさには、云はるゝ儘に貪られ、定二郎にはお濱の一條を賴みたる弱みに、時貸の二圓三圓疊りて百圓近くなりたれば、二百圓近かりし貯蓄も夢の間に消失せ、問屋へ不義理の借も出來たる上、辛苦經營せし家さへも抵當に入れ、其返濟期限も早や數日の間に迫り來りぬ。

斯くとも知らぬ母は、倅傳吉が嫁を急ぎて、其意の仁壽堂の娘お濱に在る事を知り得たれば、如何にもして望を達しさせ遣りたく、其となく探り見しに、既に他に約束ありて、今年の暮には輿入の筈なりと云ふ、之に落膽したれど、氣の小さい倅に斯くと知らさば、失望の餘り病にても惹起さば何とせん、お濱に優るとも劣らざる嫁を探しあて、一日も早く安心したしと、其のみを苦勞にして、寄席に見し女、緣日に見し娘を、其となく聞合せなどしけり。

（五）

貯蓄も盡き果て、家は抵當に入れ、其期限既に來らんとし、問屋には信用を失ひて、店の物品に盡きたるも多く、傳吉が此頃の心の苦痛は云ふばかりなし。

父には顔も見知らぬ頃に死別れたれば、母の愛身に染みて難有く、母思の心に此頃の内情を、微塵だも母に悟られなば、其心配の程も想察られて、傳吉は家に在りても針の席に坐する心地なり。洋紙の紙幣ほどに切りたるを封じて、何ほ貯蓄ある態になし置き、店には商品ばかりかは、空箱を列べて體をも欺き、われ一人火の車に乘りて、東奔西走の甲斐もなく、家を抵當の期限は、早や明後日の朝までと、僅かに金方の猶豫を請ひ得たりき。

明日中に元利合せて百七十何圓の大金、今の身にいかでか覺のあるべき、何とせばやと左思右考思案に思案を重ぬれども、此と思付きたる手段なし。思餘りて不圖思出せしは、彼仁壽堂近き横町の質店、伊勢屋の番頭常藏が事なり。さる頃の話に、給金其他にて百圓以上主人に預金あり。自分店を持つ時の準備なれども、確かなる抵當あらば、隨分貸出したきものなりと云ひし事あるを、圖らずも思出しぬ。傳吉は覺えず打笑まれて、直ちに猿樂町に走り行き、常藏を呼出して、斯く〳〵の次第なればと樣子を打明け、人一人助けると思ひて、融通なし呉れまじきやと賴みけるに、常藏は抵當さへある事なら、其に確かなる保證人をと云ふ。直ぐ其處の仁壽堂にてはと傳吉當座の間に合せを云へば、常藏は快く承知し、明日の正午過ぎ、仁壽堂にて證文と引替にすべしと約束しぬ。傳吉は重荷の過半を卸したる心地にはなりたれども、又手仁壽堂が印を捺して呉るべきか、一つ脱れて又

一つ、何となるやら一寸先は闇路を辿りぬ。
　昨今の取引にもあらず、我心を知りたる仁壽堂・打明けて相談せば、承諾せざる事はよもあるまじ、常藏へも打明け頼みたればこそ、貸して呉れる迄に話も運びたれ、打明けるが一の手と、其足にて直ぐに仁壽堂へ行き、旦那は、と問へば、在宅なりとの三吉が答に、萬事が好都合らしく思はれ、奥へ行きて勝之助へ面會したり。
　勝之助今しも外出けんとせし處にて、傍にはお濱兒の帽子を捧ち居たり。
「傳さん、切角お出でなすつたんだが、無據い急用で、直渡出掛けますがね、今直ぐに歸るんだから、遊んで居て下さい。お濱、お茶でも入れてな。傳さん、御免なさい。」
　斯く云ひ置きて、勝之助は命じ置きたる人車を急がせ出行きたり。
　直ぐに歸るとありしを頼みにして、傳吉再び元の座に着けば、お濱は下女ともぐ\/其邊片付けつゝ、
『傳さん、お生憎樣で御在ましたね。今お茶でも入れますから。』
『お濱さん、構はないで下さい。兄さんは何處まで。』
『兄で御在ますか。』
　お濱は傳吉に顏見合せ、可笑さに笑ひ掛けしが、頬を赧くして垂頭きたる、其風情の傳吉には得も云はれず美しくも愛らしきに、胸の憂思打忘れて、覺えずにこ\/と打笑みぬ。
「お濱さん、定さんね、定さんは留守ですか。」
　問掛けし心の裏は、定二郎の名をあげて、其と云はねど互の心を通はす棧道となさんと思ひしなるに、お濱は其と覺らざるにや、傍に在りし下女に顏見合せ、ほゝほゝゝと高聲に笑ひ、下女に耳語するより早く、小走りに店へ出行きたり。
　傳吉はお濱の所作面白からねど、箸の轉びしにも笑ふは娘の常情、戀なればと聞きしは此處か、勝之助は留守なり、定二郎此に在りなば、情らしき言葉の一つや半分は交さるべきに、殘惜や、と店の方を見れば、お濱は小僧の三吉に、何やらん細語きつゝ笑ひ居る。
　下女は臺所より、澁茶一碗粗末なる茶臺に運びて、傳吉が前へ置くより、此も亦店へ走り行きて、お濱三吉と三人が聲にて、笑ふ聲のいと興ありげなり。
　傳吉は手持なく茫然坐り居りしが、勝之助の歸宅遲からば、斯くてあるも其甲斐なし、我店にも用は殘りたり、如ずお濱に打明け、其取次もて勝之助へ頼ませ置かんには、空しく此處に手を束ね居るには勝らめと、思ひ定めたがらも、直接にお濱を呼びかね、店口へ出で行きて、先づ三吉を呼びたり。
「傳さん、何です。ふゝゝゝ。」
「何でもないんだが、お濱さんに鳥渡。」
『お濱さんに。ふゝふゝゝ、お俤さん\/、傳さんが鳥渡ですツて。ふゝふゝゝゝ。』
　小僧三吉飛上りつゝ笑ひ興ずれば、お濱は知らず顏に往來を向きたり。其顏をさし覗きて、三吉はゝはゝゝと笑立つれば、下女も同音に、ほゝおほゝゝ。

（六）

　笑ふ聲のみは高く聞えて、お濱の來るべき氣勢なければ、傳吉いよゝ手持なく、柱時計を見れば四時過ぎて早や五時に近し。斯くて何時まであるべきにもあらず、二三日以來心配の餘り、店に手も付かざりしなれば、何とたり居る事やらん、小僧一人にて困る位は[illegible]たけれど、空壜の内證をお袋に見られもせば、これこそ一大事、此まで包み隱したれば、其と知りての吃驚痛心は如何ならん、請判の一條、素より捨置き難け

れども、一度歸宅りて又出直し來らば、直ぐに歸ると云置きし勝之助、ゆる〳〵との面會懇談もなるべし、間違へば迷惑を掛ける一條、直接には云出し惡し、前以てお濱に口を切らせ置きたけれど、未通女の羞かしきにや、人前あればにや、寄付かざれば詮なし、寫眞挾も未だよこさず、しんみりとの情話もせず、情らしい言葉一つ、當面には交さざれど、定公萬事を飲込みたれば、正可に間違のあらう筈なし、定公此に在らば、極めて好都合なれども、其も此も今云うて今の間に合ふにもあらねば詮なし、斯く物を思ふ中に、眞渡歸りて出直し來るこそ、却つて早手廻しなれ、早歸らんと心は焦れど、お濱來りて談話することもやと、もぢつきながら起ちかねたり。

斯くとも知らぬ店の三人、笑ふ聲は奥へ筒拔なれど、語るは忍音の中にも小僧の三吉。

『お濱さんに眞渡と云つた顏なんざア、お鍋どん、お前の惚れさうな顏色で、實に凄いもんだぜ。いやアにい、にや〳〵と笑やアがつて。』

『へん、眞平御免下さいましだ。私が惚れさうな顏色だなんて、三どんお見立が恐入るよ。彼樣變目の一寸法師なんぞに、何ぼ何だツて、ねえお孃さま。』

『ほゝほゝ、何だか知れやアしないよ、鍋は物好だから。よか〳〵の飴屋の兒を追掛けてあるくんだもの。ねえ三吉。』

『さうですよ、本統ですよ。そら彼蜘蛛男のよかよか、ねえお鍋どん。お前あの飴屋に惚れてるんだらう。先日彼處の横町の角で、さうだ今年のお正月だ、煙草を買ひに行つた歸途に、彼一寸法師と何だか話をして居て、岡持の中から旨さうなのを一本、そーツと遣つてたぢやないか。僕ア怪からん事だ、一番お孃さんへ告發爲ようかと思つたんだけれども……。』

『何だツて。三どん、も一遍云つて御覽な。』

『ほゝほゝゝ。』

『あてられたもんだから、眞赤な顏を爲てらア。わアい〳〵。』

『何を云ふんだ。二本棒の寢小便小僧の、三太郎の嘘吐野郎め。』

『おほおほゝゝゝ。』

『一寸法師を情夫に持ちやア……。』

『いつ情夫に持つた。一寸法師や變目傳……。』

『シツ、大きな聲をお爲でないよ。鍋、もう能いぢやないかね。三吉、もうお喧嘩でないよ。』

『だツて、口惜う御在ますもの。』

『口惜きや、何とでもするが能いや。』

『爲なくツて如何するものか。』

下女怒りて小頭を捕へんとすれば、小僧は手の下を摺拔け、

『あかんべい、此處までお出で、甘酒進じよ。』

『憎いねえ。』

下女追廻れば、小僧は奥へ遁行かんとして、はたと人に突當りぬ。見れば、傳吉何時の間にやら奥と店との境に立居たり。

『おや、傳さん、えへゝゝゝ。』

小僧眞顏を爲ながら假笑をすれば、お濱はお鍋に顏見合せ、きまり惡げなり。

『傳さん、もう、お歸りなさるの。お構ひも致しませんで。』

『えゝ、いえ、なに。』

傳吉苦い顏をして店へ出づれば、お濱はお鍋と共に其間に奥へ走り入り、聽て押殺せし樣なる笑聲の聞えぬ。傳吉は奥を見返りたれども、何とも得云はで、ついと往來へ出でしかと見れば、例の如く小走りに、ちよこ〳〵〳〵。

（七）

其夜九時過ぎ十時に近き頃、仁壽堂は早や店を閉しけるが、主公勝之助は尚ほ歸宅せざるにぞ、お濱は兒を待つ間の淋しく、お鍋とも〴〵店へ

出來りて、火鉢を中に定二郎三吉、四人手を拱しつゝ、若き者の癖とて、根なし草に花は咲きけり。

小僧の三吉はお鍋を見てにこ〳〵顏。

『お鍋どん、先刻は面白かつたね。』

『面白いもんかね。串戯ぢやない、覺えてお居でよ。』

お鍋が口惜げなる顏を、お濱は横からほいほゝゝゝと打笑ふ。

『三公、如何したんだ。お鍋どん、何が其樣に口惜しいんだね。お濱さん、何かあつたんですか。』

定二郎が問にお濱は笑ひながら、斯々云々なりと、傳吉が來りし晝間の始終を物語りぬ。

『はゝはゝゝ。其奴ア面白かつた。變目傳先生、嘸ぞ怒つたらう。』

『怒つたか、怒らないか、私と鍋は奥へ逃げたから知らないけれども、三吉が餘り大きな聲をしたもんだから。』

『はアくしよい。私ばツかしの所爲に爲て居なさらア。お鍋どんが胴滿聲を出すから不可えんだ。』

『胴滿聲だとえ。生意氣な事ばツかし。』

『ほゝゝゝ。また始めるよ。兄さんがお歸りだと不可いから、もうお止しよ。』

『三公、如何だつたい。ぷツ〳〵怒つて歸つてツたらうなア。』

『何だか沈鬱の蟲で、此樣鹽梅しきに腕組をして、ちよこ〳〵ツと駈出して。』

三吉は傳吉の身振を學び、左眼の後眦を指もて押へて、お鍋が前へ其顏をさし出す。

『またするよ、其樣眞似を。憎らしい三公だよ。』

『だツて、此目付が能いツて、お前能く惚話てるぢやないか。お濱さんに鳥渡と云つた時や、お孃さん、丁度此樣鹽梅しき。』

今度はお濱の前に顏を出せば、

『馬鹿だよ、此子は。』

お濱平手もて三吉が頭をぽんと打つ。

『ざまア見るが能い。好い氣味だよ。お孃さんもツと打つてお遣りなさいましよ。』

お鍋嬉しがれば、三吉又もや云はんとして眼を丸くす。

『三公、もう止さないか。其から如何した、變目公がお濱さんに逢ひたいツて。』

『えゝ。お濱さんに鳥渡此處までツて。』

『其時旦那は居なさらなかつたのか。』

『えゝ。』

『はゝゝ、鳥渡あたつて見ようと云ふ洒落なんだ。』

『洒落だなんて、何だよ、定さん。』

『實はね、お濱さん、斯うなんです。』

定二郎は傳吉がお濱に戀慕せる始終をお濱へ語り聞かせぬ。おのれが傳吉を惡所へ引入れし一條を除き、其外はいと委しく、お濱より起證がはりに、寫眞挾を贈る筈に欺き訛きし一事に說到りし時、お濱は戰慄しつゝ、定二郎が顏を屹と見て、

『定さん、お前さん本統に其樣事を云つたの。』

『馬鹿に爲て遣らうと思つて、面白半分に。はゝはゝゝ。』

『いやな人だよ。其樣事を。串戯ぢやないよ。まア如何爲たら能いだらうねえ。』

お濱は身を縮めて顏色を變へつ。

『はゝはゝ。なに何でもありや爲ませんやね。心配する事があるもんですか。』

『だツて、ねえ鍋。』

『だからで御在ますよ、お孃さまが傍に居らつしやると、何だかもぢ〳〵して、何か云ひたさうな顏をして、ねえ三どん。彼樣人は執念深いもんだツて、誰でしたツけ、さう云つてる人がありましたよ。』

「いやな事ね。」
「彼樣のが迷つて出るんだ。お鏡さん恨めしいッ。どろ〳〵〳〵。」
三吉突然にお鍋が前に垂れたる手を出せば、お鍋はお濱の方に身を縮めつ。
「あれッ、いやな三どんだよ。お止しよ。氣味の惡い。」
「三吉、お止しッてば。私や氣味が惡くッて、仕樣がないよ。如何したら能いだらうね。」
お濱は怖氣立ちて、後見らるゝ心地せる折しも、店の戸をとん〳〵と叩く者あり。四人は一齊に顏を見合せぬ。
「御免なさい。」
「どなたア。」
「私ですよ。」
「私ッて。傳さんの聲の樣だ。傳さんですか。」
「えゝ、淡路町の變目傳です。定さんかい。」
變目傳と聞くより、お濱は顏色變り、お鍋ともども物に迫はるゝが如く奧へ逃入りぬ。

（八）

「傳さんですか。」
「傳吉です。定さん鳥渡開けて下さい。」
「へい。今開けます。鳥渡お待ちなすつて。」
お濱を始め三吉お鍋等が今夜の話の模樣にては、變目傳心持を惡くしたるは云ふ迄もなし、お濱が樣子に、われに欺かれたるを覺りて、一理窟云はんが爲め、夜中態々出來りしにはあらざるか、さあらんには、鳥渡面倒なるべけれど、誤魔化し樣なきにもあらざるべし、兎角あたつて碎けろ、多寡が變目傳、何程の事やあらんと、定二郎は胸を据ゑ、店の耳門を開けたり。
「さアお入りなさい。大層遲いぢやありませんか。」
「えゝ、些と遲く出掛けたのです。」
傳吉は車戸の內へ顏ばかりを差入れ、店の樣子を見廻し、三吉が會釋には知らず顏なり。
「旦那は。未だ歸宅んなさらないんですな。」
「へい、まだ留守ですが、まアお入りなさい。」
「旦那が御留守なら……。」
顏を退きて、少時は無言。
「定さん。」
「え。」
「鳥渡顏を貸して下さいな。」
「何か御用で。」
「鳥渡此處迄でも能いから。」
「お入んなすつたら能いでせう。」
「なに、鳥渡、內證の、その。」
「內證の。何です。」
「まア能いから、手間はとらせないから。三公、鳥渡賴むぜ。」
「さうですか。ぢやア行きませう。」
定二郎は傳吉の言にまかせて、家外へ立出でたり。月はあれども、夜の靄にや朧なるに、仁壽堂が軒端の洋燈も薄靄に包まれ、光線遠くへは達かず。行人もありやなしや、醉には欲しき夜風の、素面には冷々とうそ寒し。
「定さん、つき合つて貰へようか。」
「つき合へッて、何處へです。ふゝん、解りやした。例の、北廓の、近日の觀梅式を、私に見せて遣らうと云ふんでせう。へゝゝゝ。」
傳吉がつき合へと云ひしを、定二郎はわが好める方へ早飲込し、月光に傳吉が顏をさし覗けば、常にもあらず冷笑へり。
「氣樂云つてらア。定さん、其樣話ぢやないんだ。實はね、君に聞きたい事もあるし、賴みたい事もあるんだから、何處かで鳥渡一杯遣りながら、如何だらう、付合つて貰へようか。」
何氣なき體には見ゆれど、聞きたい事、賴みたい事と、云ひし折の傳吉が聲の顫へに、怒氣滿々たるも見ゆれば、安く踏んで居る定二郎も、流石に好い心持せず。

「へい、難有いんですがね、今晩は大將も未だ歸らないし、今日本町に行つた使の返事も云はないぢやなりやせんし。其にね、實は昨夜、その、餘り遲くなつたもんだから、大きに大將の御前が不首尾なんで。實に濟みませんが、今晩の處は惡しからず……』

「能らがす。無理には賴みますまいよ。だがね、定さん、考へりや不思議だね。何時でも、否だと云つた事のないお前さんが、今晩に限つて……。まア其も能いや、ねえ定さん。』

『どうも困りましたなア、さう感つて下さつちやア。決してさう云ふ譯ぢやないんだのに。』

「定さん、私や理窟を云ふのは嫌ひだ、また理窟も云へない。何も云へないかはりには、一度云つた事は、決して忘れないよ、聞いた事も亦忘れないよ。私がお前さんに賴んだ事があつたツけが、定さん、忘れやしまいね。』

『え、忘れやせん。お賴みなすつたてえのは。』

『寫眞挾は何時よこすんだね。もう半年から以前の事だよ。お前さんは、もう忘れなすつたらう。』

傳吉は足を止めて、定二郎が顏を見上げたりしが、竪に曲みし左眼に、月光を受けし決じさ、定二郎は覺えず悚然として、人欲しさらに前後を見廻したり。

（九）

『へゝゝゝ。定さん、もう忘れなすつたらうね。』

傳吉は定二郎に對ひ、同じ言葉を繰返し、にやにやと笑へる顏の、月光は朧ながら、定二郎が眼には、白晝よりも尙ほ明かに見ゆ。

『其を忘れて溜るもんですか。私や今日お濱さんから、お前さんへ傳言を聞いてるんですよ、あのお濱さんから。』

「ふん、お濱さんからの傳言も久しいもんさ。』

『そりや傳さん、お前さん其樣事を云ひなすつちやア、お濱さんが可哀想ですぜ。今日私が本町から歸ると、お濱さんが可哀想に、私を見てい、ほろ／＼と……。』

『ふゝん。成程、また定さんの十八番だ。』

傳吉は冷笑しつゝ、顏を背向けて月光を仰ぎ見る。定二郎も密かに冷笑ひて、

「傳さん、譃なら譃になさるが能らがす。私や譃言家で能い。譃言家なら譃言家になりやせうさ。ですがね、聞いただけの傳言は云はなくッちやア、私がお濱さんに濟まないから、まア譃にして、聞くだけは聞いて遣つて下さいな。お濱さんが涙を溢して、私に云ひなさるにやア、三吉と鍋が斯々云つたから、私は傍で聞いてゝ、實に口惜かつた、口惜かつたけれども、私が何か云ひ出さうものなら、三吉は彼樣多辯だし、鍋は直きに廻氣を出す女だし、萬一兄さんの耳にでも入らうものなら、淫奔しい事でも爲て居る樣で、さう思はれるだけも、嚴格い兄さんに濟まないから、一處になつて笑つてたけれども、私や口惜くもあるし、お氣の毒でもあるし、如何爲ようかと思つたよッて、可哀想にお濱さんが泣きなさるんです。傳さんが私も三吉や何かと一處になつて、失敬な事を云つてた樣に、思つてらッしやりやしないかと思ふと、私や悲しくなるよッて、お濱さんが可哀想に、傳さん、泣きなさるだらうぢやありませんか。一寸法師だの、癭目……何ぞッて、三吉と鍋が口惜い事を云ふんだよ、人は美目より心ぢやないかね、私や傳さんの實意のおあんなさる處に、何爲してるのさ、それに失禮ぢやないか、兄さんに云付けて、二人とも追出さないぢや置かないよッて、傳さん、大層怒つてお濱さんが、可哀想に泣きなさるんです。傳さん、些たア本氣で聞いて下さいな。お前さんだッて、女の心持を知らない方ぢやなし、北廓でだッて、好いとか惡いと

か、樓中に評はれて、花里さんを泣かせなさる位たもの、お濱さんの様子を見なすつたばかりでも、少しや察してお居でなさるでせう、ねえ傳さん、お濱さんが散々泣いたり怒つたりした後で、定どん、後生だから、私の心持を傳さんにお話し申し置いてお呉れッて、傳さん、本氣で聞いて下さいな。傳さん、それぢやア餘り非道いぢやありませんか。お濱さんが可哀想だ、え傳さん。』

　定二郎は傳吉が様子を窺ひながら、さも實事らしく述了り、此方を向かせんとして、尚ほ顔を背向けし傳吉が手を執れば、傳吉はぶる〳〵と打慄ひぬ。定二郎打驚きて、覺えず其手を放せば、傳吉は淚を含みて垂頭きたり。

『傳さん、私もお願ひだ、お濱さんを惡く思はないで下さいよ。え、後生ですから。』

『寫、寫、寫眞挾は。』

　傳吉の聲顫へば、定二郎は隙さず、打笑ひつ。

『はゝはゝ。大層氣になるんですね。其樣に氣に爲なさらないでも、もう疾くに出來てるんですぜ。』

『え、出來てる。もう疾くに。』

『えゝ、出來てるんですとも。其を家の大將に――さうだ、昨日の朝だ――大將に見付けられて、こりや能く出來てる、乃公に少し貸しといて呉れを食つたもんだから、仕方なしに大將に貸したんです。嘘だと思ひなさるなら、明日にも來て御覽なさい。大將が何時も坐つてる處の、傍の柱に掛けてあるから。』

『定さん、困りましたな。』

『困る處ぢやない、お前さんよりかお濱さんの方が、餘程困つて居なさるんですぜ。傳さん、お前さんも隨分罪を作んなさるね。』

『罪作りッ。ひゝひゝゝ。何の事だか。』

『何の事だかで、追拂ひは、え、傳さん、些と酷過ぎやすぜ。はゝはゝゝゝ。』

『何れお禮はするけれども、寫眞・・・。』

『大丈夫です。二三日待つてお遣んなさい。』

『あ、忘れた。定さん、一つお頼みがあるんですが。』

『え、頼みッて。』

　お濱の一條を、漸との思にて、どうか斯うか切抜けし處へ、またもや頼みとは何事ならんと、定二郎は氣の無ささうな返事をなし、傳吉が樣子を見れば、以前とは其見幕正反對りたれども、顔に心配の色も見え、云惡げにもぢ付けり。

　傳吉は自分が浪費の結果、家屋抵當の一條より其期限の迫りし事、抵當物に金を貸し呉れる人ある事、其保證人に仁壽堂の主人を頼みたき事など物語りて、首尾能く事成就せば、百圓近き豫ての借金は返濟されずとも能ければ、證人一條を仁壽堂の大將に頼み呉れまじきやと、退引させず頼めば、定二郎は主人仁壽堂、證人に立つべき人ならぬを知れども、浪費は自分が教へしも同樣、殊に百圓近き借金もあることとて、否まん樣なく、心安けに受合ひたり。傳吉は甚く打喜び、明日を契りて、其夜は其儘定二郎と手を分ちぬ。

　既や四五軒離れし頃、傳吉はちよこ〳〵と定二郎が後を追來りぬ。

『定さん、おやア頼みますよ。其から・・・お濱さんも氣に爲ない樣に、ねえ定さん。』

『畜生ッ。情夫の友達にや、何がなるッ。』

『ひゝひゝゝゝ。頼みますよ。』

（十）

　傳吉が母は朝の食事を終り、小僧は店に働き居り、既や九時近き頃、傳吉は漸く床を出來りて、茫然火鉢の傍に座を占めたり。

　母は熟々倅の顔を見て、又手眉を顰めつ。

『お前、如何かありや爲ないかね、顔の色が惡い樣だよ。』

氣遣ふ母の顏を見上げて、まぶしさうに垂頭く傳吉。

『いゝえ、何ともありや爲ないよ。色の惡いのは寢起の所爲かも知れない。』

『それなら能いけれどもね、大層魘されてお居でだつたから、何か夢を御覽かえ。』

『夢を。魘されて居た。なアに、夢も何にも見やア爲ないよ。』

母が夢を見はせずやと問ひし時に、傳吉の面に驚きの色見はれしが、忽ち其色は消えて、何氣なき體なり。母は伜の樣子に眼を放たず、眉根にいよゝ皺を寄せつ。

『一面でもお洗ひだつたら、能いかも知れないよ。お湯を酌つてあげるから、お待ちよ。』

『なに能いよ。水で澤山だ。』

『顏色は惡いし、まアお待ちよ。風でも引いてるんだと不可いから、水はお止し。鐵瓶にも一杯沸いて居るし、銅壺のお湯を足したら、手水を遣ふには澤山だらうよ。』

『あゝ、澤山だとも。濟まないなア。』

『可笑な事お云ひでないよ。』

母が心盡しの湯に、傳吉は顏を洗ひ終り、火鉢の傍に來りしが、母の眼には傳吉が顏色、倘ほいと惡し。何とせしにやあらん、昨日からの樣子、合點の行かざる事多しなど氣遣ふ中、傳吉は時計を仰ぎ見て、甚く打驚き、

『やツ、もう九時だ。こりや大變だ。斯う遣つちや居られない。母親さん、羽織をお吳れ。』

周章せし伜がさまに、母は背後より羽織を着せ遣りなどし、

『お前、直ぐ出掛けるのかい。』

『あゝ、斯うしちや居られないんだから。』

『何がまア其樣に多忙しいんだらうねえ。』

『なアに、何でもないんだよ。約束しといた處があるもんだから。』

『店の用でかえ。』

『え、まア其樣やうな事で。約束が九時なんだよ。』

『其にしても、まだ朝飯も食べないぢやないかね。』

『朝飯なんざア。些とも飢きや爲ない、胸が一杯の樣で。』

『何だねえ、朝飯なんざアだツて、勿體ないよ。まア鳥渡お坐りよ。何だらうねえ、此子は。お坐りと云つたら、まアお坐りよ。一碗だツて能いから、朝飯は食べてお出でよ。それに、お前に聞きたい事もあるから。』

豫て膳立なし置きし膳を、母は伜の前へ無理押しに押付けたり。傳吉も心は急きながら、詮方なさに膳に向ひぬ。

『如何したんだよ、昨日の朝から出たり入つたり、些とも落付かないで、そは〳〵してお居での樣に、私には見えるよ。昨夜も遲く歸つてお出でだし、何か心配な事ぢやないかい。』

『母親さんは困るよ、直き心配するから。なアに少し引取物があるので。人と組合で爲たもんだから、今日受渡しをするんだし、其で昨日から多忙しいんだよ。母親さん、些とも心配する事アないよ。』

『其なら能いけれどもね、知らないから矢張心配するのさ。其からね、先刻竹村とか云ふ人がお出でだツたよ。』

『えツ、竹村が。』

傳吉は色動きて、母の顏を見詰めつ。

『何とか、云つて居たかね。』

『あの、今日ですが、御承知でせうなア、念の爲め、お門を通りますからツて、鞄を提げてね、二重外套なんぞ着て居る、立派な人さ。長太郎、先前の人は、他に何にも云はなかつたの。』

『へい、今日が期限ですが、御承知でせうな、後刻お待申しますと申しました。へい、此だけ

で御座ます。』
小僧の長太郎が店より怒鳴るが如く叫べば、傳吉は叱と抑へつ。
『もッと小さな聲を爲ないか。其樣事を大きな聲して、怒鳴る奴があるか。』
『へいッ。』
『お怒りでないよ。其組合とかの人かね、竹村と云ふ人は。』
『えゝ、さうなんで。』
『も一杯お食べよ。一膳飯は緣喜が惡いと云ふよ。お茶につけようかね。其からね、お前に相談があるんだがね、好い嫁の口があるんだよ。話の樣子だと、至極好ささうだし、お前に話さうと思つて、昨日から待つてたんだよ。如何だらうねえ。』
母が熱心には引替へ、いと冷淡なる傳吉、箸を進めて知らず顏。
『お前は仁壽堂の お濱さんを望んでお居でだし、私も至極能さゝうに思ふし、手を廻して聞合せて見るとね、お濱さんはもう疾うに他に契約つてるさうだから、其方は仕樣がないから、其で他に…。』
『へゝへゝゝ。母親さん、何を云つてるんだよ、お濱さんが他へ極つてるなんて。』
『仁壽堂の親類を知つてる人があるからね、其人に聞合せて貰ふと、其話さ。』
『其樣事があるもんかね。』
『だッて、お前親類の人が云ふんだもの、極つてる先方の家まで知つてるんだもの。本町の二丁目か一丁目の藥種屋だッて。』
『本統かい。』
『本統だとも。お前に譃を吐いて如何するものかね。』
『本統! 親類の藥種屋!』
傳吉は胸逼迫り氣激し、眼を見張つて母の顏を見詰め居りしが、忽に放心せしが如く、手に持ちし箸と茶碗を取落せば、八木の落花狼藉、母は呆れて倅が顏を見詰めたり。

（十一）

仁壽堂の主勝之助は、烟管を膝に、苦り切つたる顏色、傍には妹お濱涙ぐみたり。
晝の食事を終りて、店へ出でんとする定二郎を見るより、勝之助がかんとたゝく烟管には、吐月峯も割れつべし。
『定二郎ッ。』
『へい、何の御用で。』
『ずッと此方へ來るが能い。』
『へい。』
『お前は困つた男だな。』
『へい。』
『お前は淡路町の傳吉に、お濱の事について、何と云つた。其處で云つて見なさい。』
『へい。』
定二郎はお濱が兄に告げしと覺り、下げし頭を斜めにしてお濱を見れば、さし俯頭きつゝ、襦袢の袖に涙を押へ居る。
『お前は實に怪からん男だ。』
『へい。』
『へいとさへ云つてりや、濟むと思つて居なさるのか。如何に若年と云つたッて、餘り斟酌が無さ過ぎるぢやないか。串戲だと云つて濟むことだと思つて居なさるのか。傳吉だッて、お前一軒の主だ。立派な店を持つてる一軒の主だ。體格が小さからうが、眼の傍に疵があらうが、お前から見りや、尊まなけりやならない人ぢやないか。其人を欺したばかりぢやアない、若し間違や、お濱を疵物にするのだ。能く考へて見るが能い。お前はお濱と從弟ぢやないか。自分の從妹が迷惑して、嫁入前に惡い評判を立てられるのを、お前は好みなさるのか。串戲にも程があつたもんだ。面白半分に云つたんだと

か、お前は云つてるさうだが、お前それで濟むと思つて居なさるのか。定二郎、默つて居ちやア分明らんよ。お前は情合と云ふ事を知らないのだ。私もお前とは從兄弟だ。從弟のお前が能くなれとこそ思へ、惡くなれとは夢にも思はない。其にお前は、串戲や面白半分に、お濱を種に使つて、彼正直な人を欺すと云ふことがあるかい。若しも彼人が、仁壽堂のお濱と私とは、斯う云ふ約束があるんだと、世間へ吹聽したら、お前は如何ならうと思ひなさるのだ。其でなくツても、人の口は兎角擬階い。一寸法師だとか、變目傳だとか綽號をつけられて居る人と、馬鹿な評判でも立つたら、それこそお濱は一生癈人同樣になるのだ。實に何とも角とも云ひ樣のない人だ。實に怪からん。』

勝之助は妹お濱が嫁入前の惡名を得んことを氣遣へると、定二郎が不心得を怒れるとに、額に筋見ゆる迄憤りつゝ言懲す。定二郎は頭も得あげで、句頭々々に首肯くが如く恐入り、折々お濱が方を竊めに仰ぎて、執成を望むの意を見はすのみ。

『實に如何も驚いた男だ。横濱へ出狀つて、斷るより仕方がない。』

『兄さん、其も餘りですから・・・。』

お濱は此處に言葉を挾みつ。

『定さんだツて、串戲半分に云つたんだと云つてお居でだし、もう勘忍してあげて下さいまし。私の事から起つたんですから、定さんが横濱へお歸りだと、叔父さんや叔母さんにもお氣の毒ですし、兄さん、今日の處は勘忍してあげて下さいましな。』

少しく茜させし眼もて、兄を仰ぎつゝ詫言すれば、定二郎も漸く取付端を得て、

『どうも、實に其樣譯では。此樣事にならうとは。何とも申譯も御在ません。どうか。惡う御在ました。どうか御勘辨なすつて・・・。』

『兄さん、定さんも彼樣に謝罪つてお居でだから、勘忍して上げて下さいな。』

『どうも、實に怪からん事だよ。氣を付けなさい。お濱、三吉を呼んで來な。彼奴も多辯でいかんよ。小僧の癖に爲やがつて。』

勝之助の色稍和らぎし樣子に、お濱は三吉を呼びにとて店に行きしに、何時の間にか傳吉來居たり。此方を見つゝにや／＼と笑みたるに、お濱の昨夜の事の思ひ合され、氣味惡さに會釋も得せず、三吉を呼ぶさへ忘れて奧へ逃歸れば、下女のお鍋も遙かに傳吉を認め、お濱に顏を見合せしが、愼みなき心に臺所へ隱れさま、忍び音に笑はんとして、覺えず聲高く笑ひ出せば、お濱も此に催され、聲こそ出さね笑ひ掛けし顏を、早くも兄に見られたり。

『なにを笑ふのだ。』

『あのう、傳さんが店にお出でのを、鍋が見て・・・。』

『えッ、傳さんが來て居なさるのか。定二郎、機を見て、傳さんに詫びるが能いぞ。鍋、何を笑ふのだ。お濱、お前迄が云ふ口の下から、笑ふと云ふ事があるかい。一同不可よ、些と氣を付けるが能いぞ。定二郎、早く店へ行つて見るが能い、何の用で來なさつたか。』

（十二）

定二郎は漸と虎口を脫れたる心地、ほッと息をついて店へ出づれば、傳吉見るより、

『定さん今日は。』

にや／＼と笑ふさまの、今日は定二郎にも何とやらん不氣味なり。

定二郎は今しも傳吉が事より、主人の小言は聞きたり、傳吉へ對し何やらん落付かざる心地もすれど、豫てより彼を呑み居ることとて、傍に寄りて平生に變らず物すれば、忍び音になりたる傳吉。

「一體何でせう、どんな横町の伊勢屋さん迄、足袋貸しては貰へまいか。」
定二郎は心得、主人に命じ、傳吉が使にとて出し遣りしが、心に怪しき處あるより、何がな譯の種あれかしと、意味もなく傳吉に笑ひ掛けしが、傳吉が主人へ託せし手紙より思ひつきて、別けて意味ありけに打笑み、
「傳さん、私を抜きなんざア酷いよ。此頃ぢやア伊勢屋の當さんと、旨く遣つてお居でなさるね。今の手紙も何でせう、女の子の處から、へゝへゝゝ。私を抜きの内證々々で、餘り浮氣を爲なさりやア、お濱さんに云付けますぜ、お濱さんに。」
斯く云掛けて、定二郎は今の小言を思ひ出し、人や聞くと奥を見返れば、傳吉は其をお濱へ告げんが爲めの所作なりと心得、同じく奥を見返りつ。
「しいッ、何を云ふんだ。其様事ぢやないんだから……。」
「はゝはゝゝ。」
定二郎は覺えず聲高に笑ひしが、主人へ聞えやせしと、またもや奥を見返りぬ。
傳吉は今朝我家を出掛けに、母より聞きたりしお濱が縁談の一條、先づ第一に氣に掛りて、其實を定二郎に問はまほしけれども、其にも勝して當座の要事は、仁壽堂が證人一條なり。承諾せしが、さはさりしが、一期の浮沈にも關はる事と、定二郎が傍へ居寄りて、尚も忍び音の耳に口。
「定さん、昨夜の一條ね。」
「へい、お濱さんの。」
「其ぢやアないよ。旦那が承知して下すつたらうか。」
「あツ、さうだつた。すツかり忘れてしまつた。」
「えッ、忘れたッ。」
傳吉の顔は見る〳〵中に蒼くなりぬ。定二郎も流石に氣の毒顔。
「實に濟まない。忘れたと云つちやア實に濟みやせん。が、實はね、大將の歸宅が、昨夜大分遅くなつて、話す間がなかつたのに、今朝から[illegible]節でまるで寄付けない始末なんで。私も今朝飯を食つた所さ。だもんだから、云はう云はうと思つて居て、忘れるともなしに、つい忘れたもんだから、傳さん、勘忍して下さい。實に濟みません。」
傳吉は腕組して身動きだにせず、さし俯頭いて言葉なし。定二郎かにかくと言葉に花を持つて、傳吉を慰めんとすれども、傳吉は溜息つけるのみなり。稍ありて傳吉は腕をほどき、定二郎が顔をヂツと見詰めたり。
「實に困つた。併し、仕方がないです。だがね、定さん、私やお前さんに……。」
「へえ。」
「まア其も能いさ、其も能いさ、お濱さんは本町に約束が……。」
傳吉の聲は顫へて、眼は輝けり。定二郎はぎよツとせり。
「お濱さんの縁談は定つてるんだね。」
「えッ、なんですツて。」
「定さん、とぼけちやア不可いよ。」
「とぼけるツて。」
「ふん、お濱さんは本町の親類へ歸嫁く事に極つて居て、今年の暮には、婚禮かあるんぢやアないかね。」
傳吉冷笑しつゝ云へば、定二郎は心中甚く打驚き、如何にして其を知りたるにやと、當惑限りなけれど、例の調子にて誤魔化さんと、眞顔になりて屹と傳吉が顔を見る。
「困るなア、直にしやくりに乗んなさるんだから。誰かに又何か云はれたんでせう。本統に困ツちまふなア。其様事を云つちやア、傳さん困

るぢゃありませんか。』
『困るッて、お前さんがかえ。』
『私も困れば、お濱さんも困りまさア。』
『お濱さんも。へゝん。』
背後に足音あり。傳吉振返れば、主人勝之助出來りしにて、傳吉を見るより、莞爾打笑みつ坐りたり。
『ヤア傳さん、昨日は失禮しました。』
『いえ、如何致しまして。またお邪魔を致して居ります。』
傳吉、勝之助と話し始めしに、定二郎は圖らずも脱し得て、ほッと息をつきたり。
『一直きに參りますッて、常さんがさう云ひました。』
……
往來より高聲に呼びながら、歸り來りし小僧の三吉、主人勝之助が店に在りしを見るより、急に悄然て片隅に蹲跪る折しも、奥より出來りし下女のお鍋。
『三どん、早く食べて仕舞つて下さい。』
『へーい。』
走入りさまに傳吉を見返り、其眼をお鍋に見合せ、例の如く笑はんとすれば、お鍋は叱と、拇指を出して眼を丸くす。三吉は首を縮めて、口の中にて、『へゝへゝゝゝ。』

(十三)

昨日伊勢屋の番頭常藏との約束は、仁壽堂を證人に頼み、仁壽堂にて受渡をなす事としたりしに、仁壽堂證人の一條、未だ其運びに至らざるに、常藏は早くも此家に來らんとす、今頼みて今承諾なし呉れべきか、其は豫め何れとも測り難し、されど、定二郎が云ふ所に依れば、今朝より極めて機嫌惡しと云ふ、笑顏はなし居れども、何とやらん濟まぬ色も見えて、平生我に對する如くならざる所もあり、如何せば可ならんか、と傳吉が思案に迷へりとは、知らう樣なき勝之助、傳吉が顏をじろりと見て、
『傳さん、何か儲口ですかね。』
『えゝ、なに、儲口と云ふ譯ではないんですが、實はその……。』
傳吉は云はんとして云損じ、ふいと往來を見れば、我家を抵當と爲し居る高利貸の竹村、何時か仁壽堂の前に立居たり。はッと思ひ、惡い所で、と顏を避さんとすれども、見合せし眼を何方へか轉らるべき、爲方なさに會釋をなせば、彼は笑を含みて、仁壽堂へ入來らんとす。此店にて催促せられもせば、仁壽堂が手前面目なしと、急ぎ駒下駄を穿きて往來へ出でたり。
『傳吉さん、今朝からお前さんに逢ひたいと思つて、お前さんの宅へばかしも二度行つたよ。』
『いや、どうも恐入ります。私の方から鳥渡伺はなければならないんですけれども、昨日から其、何で。……誠に失敬ですが、鳥渡其處まで來て戴きたいもんで。』
『其處まで。何處へだね。鳥渡此處の店を拜借して、其で事は分るぢゃないかね。』
『えゝ、其はさうです。さうですけれども、其、鳥渡、鳥渡其處の角まででも能いんですから、誠に失敬ですが。』
竹村は厭がらせ顏に、此にて用談を爲さんと云ふを、傳吉は兎角して誘ひ行きぬ。
『傳吉さん、能いのかい。今日が期限ですぜ。明日の朝になりや、爲方がないから、持出す事にして居るんだ。印紙を張るばかりにしてあるんだ、御覽なせえ。』
竹村は鞄の口に手を懸けんとして、傳吉が樣子を見る。傳吉は頭も打振はる。
『能うがす。能うがす。今晩までには、何樣に遲くなつても、此度、此度持つて行きますから。ね、ね、大丈夫なんで。夜が明けたッて、夜が明けたッて……。』
『串戲云つちや不可いよ。夜が明けりや、もう

明日ぢやないかね。』
『え、明日、明日……。』
『明日ぢやア仕方がないぢやないかね。今夜の十二時迄が今日さ。』
『さうです。知つてます。今晩の十二時……。遅くなつても、夜が明けても……。』
『はゝはゝ。傳さん、同じ事ばかり云つたツて仕様がないよ。能いんですな、今晩の十二時。』
『えツ、えツ、能うがす、能うがす。竹村さん、岐度御迷惑は掛けませんから、私のお袋に聞かせないで、賴みますよ。』
『それは承知だ。だから、お前さんの店に二度も行つたけれど、何も云はなかつたのさ。』
『何も云はないで。難有うがす。云はないで、難有うがす。』
『ぢやア、能いんだね。間違へば母親さんの耳にも入る譯だし。能いんだね。』
『えツ、能うがす。』
『今夜の十二時まで。』
『えゝ。』
竹村は退引させず言葉を番ひ、我さす方へ急ぎ行く。
傳吉は竹村が後影を見送るともなく、立ちたる瞬動かず、其眼には涙が溢れんばかりなり。
『やア、傳さん。』
『えツ。おツ、常さんですか。』
『先刻は態々お使で、恐入りました。もツと早く參りたいと思つたんですけれども、主人の用がつい濟みかねたものですから、誠にお待たせ申しました。』
『いえ、なアに、お多忙しい所を。』
『多忙しくもないんですけれども、主人の用だもんですから。ぢやア、仁壽堂さんへ。』
『え、鳥渡、あの、何で。』
傳吉は此に到りて進退谷りぬ。的もなき金を、漸く常藏より借得る事になりて、稍心の落付きしも束の間、期限は今夜の十二時、其金は我前なる人の懷中に、手を出せば攫める様なれども、證人なきばかりに、如何にとも詮方ないたりとて追付かず。あゝ、證人になつて吳れる人が、と胸は拶らるゝより尙ほ苦し。

（十四）

安會席の奥まりたる一室、客は傳吉と常藏、下物は甚く荒れて、酒は既に亂に入りたり。
乞食伊勢屋の名を取りたる家の番頭、久しぶりに身になる下物の、喉から引込まるゝばかりに堪えて、半生噛まぬだけ盃に早く、既や酔も廻らぬ迄になりたり。
『傳さん、も、も、一杯。げえい。』
傳吉は下物も味ひなく、酒も咽を下らず、飲めども食へども、酔ひもせねば腹も膨れず、胸は拶らるゝが如く、何とも云はん方なし。
今しも常藏が咲したる猪口を、受けることは受けながら、口をつける程の氣力もなく、茫然と常藏が顔を見て居れば、常藏は一人機嫌。
『傳さん、傳さん、す、す、すぐに御返、御返杯と願ひたいね。仁、仁、仁壽堂の、た、た、大將迎え、迎へ〳〵。』
『今、其、使を遣つたんですがね、今、客、客來があつて、鳥渡手が脱されないから、少時待つて戴きたいと云つて來たんです。常さん、御迷惑でせうが、どうか、も少し待つて戴きたいもので。』
『も、も、も少時。よ、よ、よがす。こ、こ、斯うなりや、ど、どうせ、め、迷惑序でだ。ね、ね、傳さん、はゝ、はゝゝ。お、お、おは、仁、仁壽堂の、お、お濱さん、お濱さんだ。ち、ち、畜生ツ、僕、僕なんざア、い、いの、命も入んねえ、入んねえ。ち、ち、畜生ツ。でツ、でツ、傳さん、お、お、お前さん、い、い、美女だ。ち、畜生、た、

堪んねえなア。』

「はゝはゝ。大分御執心ですな。お前さんも美女だと思ひなさるかね。」

「な、な、何だツて。お、お、思ひなるかツて。えへ、えへ、えへ。お、お、お濱さんの爲めなら、でツ、傳さん、ぼ、僕ア何だツて、ほ、欲しかアない。こ、こ、此だつて……。』

常藏は懷中に手を差入れ、胴卷を引出し、傳吉が前へぽんと投出す。

『こ、こ、此金だツて、す、すぐ、直ぐに奉るねえ。はゝ、はゝ、あは、はゝ。』

『お濱さんの爲めなら、此をツ。』

傳吉は胴卷を取上げしが、二百圓近き手當り、此故に此苦勞をする事ぞ、と覺えず手に力の加り、夢心地になりて、常藏が顏を見詰めつつ戰慄ふ。

常藏は膝行寄りて、傳吉が手にせし胴卷を取らんとせしに、傳吉が手には力入りたれば、生醉本性違はずして、俄かに心付きしか、傳吉が手より奪ふが如く、我懷中へ押入れたり。

『はゝゝゝ。』

『はゝゝゝ。』

『傳さん、お前さんに上げるなア、ま、ま、未だ早えんだ。えーい。仁、仁壽堂の大將、あ、あ、餘り……。』

「鳥渡待つて下さい。もう一遍使を遣るから、もうなに、直きです。人車を持たせて遣るから、もう長くは待たせやせん。鳥渡、鳥渡、も少し。」

傳吉は常藏が樣の一變せしに、我も氣付きて心に驚き、常藏を待たせ置きて、座を立ちたり。

仁壽堂の來ると云ひしは素より譌言、常藏を此へ引出せしも、一時を欺きしにて、常藏が樣子を窺ひ、切羽詰りし難儀を打明け、一判にて金を借らんが爲めなりしに、常藏が今の樣子、到底も承知せん望なし。何とせばやと、奥より表へ出來りたれども、迎を出す用あるにもあらねば、また私に立戻りて、便所へ入りたり。便所を出で、手を洗ひつゝ空を仰げば、庭もせに櫻花の咲き亂れて、雪洞の火影にちらり〳〵、花瓣の梢頭はなるゝ風情、得も云はれざるに、覺えず見惚れたりしが、我に還りし時、全身ぶる〳〵と戰慄ひぬ。われ知らず前後を見返りし眼光いと鋭く、首肯くが如くいと深く呼吸をつく。

『お、おーい。おーい。でツ、傳さん。』

常藏が我を呼びつゝ手を拍けるに、傳吉は我にもあらず走り戻りつ。

『常さん、今ツ、今直きに。ぢやア熱燗のを、もう二三杯。え、さうして常さん。常さん、此ツ限ぢや、餘り濟まないから。』

折能く來合せし女中の、銚子を手にしたるを見て、傳吉熱燗かと問へば、熱燗と答ふ。それ幸ひと無理强に立續けて四五杯、自分常藏に酌する傍ら、手早く勘定を濟まして、足元覺束なきを介抱しつゝ、家外へ出でたり。常藏が無用と辭する人車に、相乘しつゝ其と指圖すれば、人車は猿樂町へは行かずして、萬世橋を北へ、常藏は其とも知らず、醉に夢地を辿るなるべし。

（十五）

次の朝仁壽堂の勝之助は、平日よりは早く店へ立出で、彼方此方藥瓶など調べ居り、葡萄酒の罎を取上げ、透し見て小首傾け、

『定二郎、此は如何したんだ。些ともないぢやないか。此樣事を爲て置いちやア困るよ。早く取替へて置くが能いよ。』

『へい。もう、其ツ限で外にもありませんから、其でつい、不注意せんでしたけれども。』

「もう、皆無。其樣筈はないぢやないか。』

『へい、もう一罎あつたと思つたんですけれども、昨日調べて見ましたら御在ません。』

「なけりや、無いで爲方がない。直きに取寄せないぢや困るよ。埼玉屋へ鳥渡三吉を走らせ

て、半ダースばかり取寄せなさい。』
『へい。三吉、傳さんの所へ行つて、葡萄酒を半ダース。大急ぎだよ。』
「へーい。」
三吉は命を受けて、履物穿くや否や走り行く。
勝之助は倘ほ其他をも調べ終り、火鉢の傍にむづと坐り、定二郎が顏をじろり〳〵。
「定二郎、お前倘些と氣を付けなければ不可ぢやアないか。今調べて見ると、毒藥の棚に錠が卸してないぢやないか。どうも困るよ。其と云ふのも、店を疎かに思ふからだ。昨夜は何處へ行きなすつた。』
「へい、鳥渡。」
『鳥渡だ。鳥渡行つて、今朝歸つて來る奴がありますか。何を馬鹿を云つてるんだ。此迄もさうだ。私が知らん顏をして居れば、能い氣になつて、氣を付けないぢや不可いよ。』
『へい、どうも恐入りました。』
『若い者だからと云つて、今から其様事では、迚も見込がない。私なんぞも……。』
昨夜定二郎が他に泊りたるを、勝之助は云懲さんと、益す說き進まんとせる時、醫師の處方書を持參し、調藥を請へる客あり。定二郎は此に便を得て、勝之助が前を脫れ、調藥に掛からんとせる折しも、ちよこ〳〵と小走りに店先へ來りしは傳吉なり。
傳吉は半生襟にしたるお納戸縮緬の領卷に、顏の半分を掩ひ、何やらんそはつきたる様子。
勝之助は早くも聲を掛けたり。
『傳さん、今宅から來なすつたかね。』
「え。いえ、今朝早く出掛けたもんですから。」
『今實は葡萄酒をお貰ひに上げたんだが、お留守では分るまいね。』
『なに、分らない事もありますまい。が、澤山ですか。』
『なアに、半ダースばかり。まアお掛けなさいな。』
「へい。其位なら無い事もありますまい。」
傳吉は店頭に腰を掛けて、領卷の半を除りしに、顏色は灰よりも倘ほ青し。
「傳さん、如何か爲すつたかね、大層顏色が惡い様だが。』
勝之助が驚き問へば、傳吉は勝之助の顏を屹と見返し、其眼を定二郎が方よりぐるりと往來へ轉し、再び勝之助が顏を見る。
「どうも心配な事が起つたんです。横町の伊勢屋の番頭さんが、昨夜出たツきり歸宅らないんですから、其で私はひどく心配して、今朝も朝から、まだ食事も食べないで……。如何も困ツちまつたんで。」
『へえ、さうかね。それは伊勢屋さんでは心配だらう。彼常さんとか云ふ。』
『えゝ、其常さんがなんで。』
「定二郎、お前聞いたか、其様噂を。」
「いゝえ、其様噂は些しもない様です。」
『さうですかえ。それでは先ア……。實に心配爲ツちやつたんです。』
「お前さん、彼番頭さんと、其様に懇意に爲なさるのかね。」
『えツ。えゝ。實は昨日、鳥渡話す事があつたもんですから、鳥渡そ……。」
定二郎調藥を終りて客に渡せば、客は歸り去りぬ。定二郎も火鉢の傍近く坐りて、傳吉に問掛けたき樣子なれども、主人の前なるに口を出しかね、もぢ〳〵せる處へ、小僧の三吉走り歸りぬ。
『埼玉屋さんでは、傳さんが留守だから分りませんて申しました。やア、傳さん、此處に居なさるんですね。お前さんの家では大變。』
「えツ、大變。」
傳吉は愕然として立上りぬ。

（十六）

傳吉は我家に變事ありとの三吉が言葉に、愕然として立上りしが、眼光鋭く四邊に働き、又もや領卷をもて顏を包みぬ。

勝之助は定二郎に顏見合せ、三吉に對ひて、

『大變て、何だ。』

『なアに、傳さんの母親さんが、傳さんが昨日から歸んなさらないと云つて、大變に心配して、泣きさうな顏をして居なさつたんです。』

「何だ。大變だなんて。傳さん、母親さんが心配してお居でだと云ふから、早く歸つてお上げなさい。」

「へい。なにね、昨夜遲く歸つて、今朝早く出たもんだから、お袋は寢て居て知らなかつたんです。三どん、大變だッて云ふから、私や吃驚した。嚇殺しちやア嫌だぜ。」

『まア何しろ、早く歸つておあげなさい。母親さんに心配させちやア、可哀想だ。』

「えゝ、さう爲ませう。なにも心配しなくッても能いんだけれども……」

傳吉は溜息つくが如く呼吸を深くつき、立去らんとして去りかね、動もすれば奧を見がての樣子。三吉は俄に思出せしが如く、定二郎に對ひ、

「定さん、大變な事があるよ。」

「大變な事ッて。」

「人殺し。」

「えッ、人殺しッ。」

傳吉は飛上らんばかりに打驚き、覺えず二三歩あゆみ出せしが、俄に氣付きて、いたく落付きて、又もや腰を掛けたり。

『あゝ、吃驚した。三どん、人殺しと云ふなア、何處にあつたんだ。何人が殺されたんだね。』

「吉原田甫。」

「えッ、吉原田甫。」

「吉原田甫のね、直き此方の入谷だとか云ふんです。空屋の中に坊さんが。」

『なに坊さんだッて。ふうッ。』

「えゝ、坊さん、お醫者の坊さん。」

定二郎は冷笑しつ。

「何だ、お醫者の坊さんだ。今時坊さんのお醫者があるものか。」

「だッて坊さんのお醫者だから仕方がないや。もう一週間も前に殺されたんだらうッて。慘酷ぢやありませんか、素裸にして、細引で頸を縛つて、細引の兩端を斯う云ふ鹽梅式に、兩方の柱に縛つてあつたんですッて。』

何ほ三吉が語る所に依れば、吉原田甫に枕みし入谷村に新築せし三軒立の長屋あり。四隣遠ければにや、移り住む者もなかりしに、今より一週間ばかり以前、一人の賤しからぬ女、件の長屋の差配人方へ來り、彼の長屋の中央なるを借受けたしと申込みたり。兎角緣遠かりし家の、借人つきし事とて、差配人は喜び承諾きたれば、何れ一兩日中に轉住し來るべしと約し置き、女は歸り去りたり。其後一週間ばかり過ぎたれども、何の音沙汰もなかりしかば、差配人は待草臥れて、樣子見かたぐ、三町ばかり離れし件の長屋へ到り見しに、未だ移り來らざるにや、三軒ながら以前の儘の明屋なり、差配人は舌打しつゝ家内を改め置かんと、先づ中央なる長屋の戶を開きしに、一種異樣の惡臭鼻を衝いて起りたれば、いゝぎよつとしながら家内を覗けば、人の立てるが如きを見たり、吃驚しながら、瞳子を定めて態々透し見しに、叉手も無慘なり、素裸にせし坊主を細引もて絞殺し、其兩端を左右の柱に繫ぎたれば、死骸は宙に釣され、一寸見には、立ち居るが如く見えしなりき。竹の皮と空樽、箸茶碗などの、四邊に捨てられたる外には、一物だもあることなし。差配人は膽を消して直ちに巡査派出所へ注進せしに、本署

より警部を始め刑事巡査醫師など馳付けて検視し、其々調査を遂げたりしに、此に思合する訴あり。其も亦一週間程以前の事なりき。淺草小島町に山村と呼ぶ、今年六十七歳になれる漢家の老醫ありき。或夜の一時近き頃、山村が門を叩き、急病人あればとて、來診を請ふものあり。深夜なれば老人の大儀がりて、謝絶したりしに、是非に先生の御來診を願ひたし、病人も其を生前の賴みなりと申せばとて、泣かぬばかりの賴みに、山村老醫も憐れを催し、直ぐ後より往診すべしと答へしを押返して、お迎の人車を引かせたれば、此にて直様お出でを願ひたしと云ふ。老醫は其意に任せて迎の人車に載せられて出行きしまゝ、翌朝に到るも歸宅せず、次の日も音信なければ、家内一同周章狼狽し、處々を尋ねれども、病家の町名番地を聞置かざりしかば、たえて手掛りあることなし、詮方なきまゝ訴へ出でしなりと云ふ。老醫が家よりの訴と、入谷村の差配人の訴と、頭の丸きよりして符合せるにぞ、直ちに老醫が家人を呼寄せ、長屋の中なる死骸を示せしに、老醫が家人は見るより驚き悲み、此に相違あらじと云ふ。死骸は其儘家人に引渡せしが、其筋の人々の鑑定によれば、犯人等は前より深く計りて、先づ差配人を欺きて長屋を借受くる事になし置き、其夜山村老醫を欺きて此へ連れ込み、斯く慘酷なる罪を犯せしに相違なし。其目的は老醫の所持の金時計を奪はんが爲めにして、迎の爲めにとて人車を持行きしは、如何にも其計謀巧妙なり、且つ其犯人の中には、女も加はり居るとの事迄は想察らるれども、手掛りとなるべき一物も殘り居らざれば、警官等も流石に手を付けん樣なく、今に其手掛りだになしと云ふ。

三吉が人殺しの一條を語れる中、傳吉は俄に思出せし事ある樣子にて、急ぎ仁壽堂を辭し去りしが、我家の方角へは行かで、水道橋の方へ、例の如くちよこ／＼と走り去りぬ。

（十七）

傳吉が母は、一夜たりとも家を明けし事なき倅が、昨夜は終に歸り來らざりしかば、何とせし事やらんと待明せし疲勞をも忘れて、今か／＼と門に立ち内に入り、心も落付かざる所へ、仁壽堂より小僧の三吉、葡萄酒を半ダースとて來りたれば、長太郎に命じて出させんとするに、なしと云ふ。棚に在る其壜はと問へば、長太郎もぢつきて急には答へず。尚ほ迫り問へば、空壜なりと答へぬ。傳吉が母は三吉が手前も氣の毒さに、傳吉留守にて分り難ければ、歸宅次第調べさせ、此方より持參致さすべし、旦那の前惡からず申してと云へば、三吉は心得走り去らんとす。

「もし、もし、一寸。」

傳吉が母は三吉を呼び止めつ。

「もし、仁壽堂さんへ、傳吉が參りはしませんでしたかね。」

「何時です。」

「あの昨晩か、今朝ほど。」

「いえ、今朝は未だお見えなさいません。昨日は晝間お出でなさいました。」

三吉は昨日晝頃、傳吉が仁壽堂へ來りし事より、自分が伊勢屋の番頭へ使せし事、豫て其名を知り其顏を見知れる竹村と云ふ高利貸と、傳吉が仁壽堂の店前にて出會ひ、共に立去りしが、其より後今朝に至るも來らざる由を物語りぬ。

「高利貸の竹村。」

傳吉が母は斯く呟きて後、

「どうも難有う御在ました。實はね、昨日から未だ歸宅らないもんですから、如何したかと思つて、心配してるのですよ。萬一、お前さんへ傳吉が來ましたらね、私が心配してるから、早く歸る樣にと、お前さん能うくさう云つて下さ

いよ。」
『えゝ、お出でなさつたら、屹度能くさう云ひますよ。」
「何卒ねえ。一寸。」
二錢銅貨一枚、三吉が手へ握らせ、
「本統にお頼み申しますよ。」
『どうも濟みません。難有う。」
羨ましげなる長太郎を見返りたる三吉。
「長さん、あばよ。」
勇みに勇んで走り去りぬ。
傳吉が母は、今の三吉が言葉を思ふに、高利貸の竹村、昨日二度まで傳吉を訪ね來りし其人の名も竹村、傳吉が何の爲めに高利貸を知つて居るのか、昨日の朝の話には、何か組合の引取物がある、其仲間を竹村と云つた樣であつた、多分組合仲間の人だらう、其でなければ、高利貸なんぞを知つてる筈がない、其に違ひない、其は其として、如何してまア歸宅らないんだらう、遊びをする樣子ではあるけれども、一夜でも泊つた事はないのに、據ない交際でもあつて、其で歸られないのかも、知れない、其なれば其の樣に、端書でも出して呉れゝば、此樣に心配は爲ないのに、何にしても早く歸宅つて呉れなければ、仁志堂さんの註文もあるのに、まア何を爲てるんだらうねえ。
『御免下さい。』
『へい。』
見れば、昨日も二度まで來りし竹村、今も今とて心に掛れる竹村、遠慮もなげにずツと入來りぬ。
『傳吉さんは御在宅でせうか。鳥渡お目に掛りたいのですが。』
「傳吉で御在ますか。唯今出まして留守で御在ますが。』
「留守ですツて。』
「へい。まだ歸宅りませんので。』
竹村は奥の方を差覗きつ。
「留守ぢや仕方がないです。お歸んなさつたら、さう云つて下さい。昨夜が期限の事を承知して居なすつて、今朝になつても挨拶を爲なさらないから、仕方なしに訴へます。今日此から裁判所へ出ますから、其積りで居なさる樣にと、能くさう云つて下さい。左樣なら宜しく。」
云捨てゝ歸らんとする竹村、傳吉が母は周章狼狽して、
「貴所、もし、鳥渡お待ちなすつて下さいまし。裁判所へお願ひなさるツて、そりや何をで御在ます。」
「成程、お前さんの知んなさらないのは、尤もです。」
竹村は此家を抵當に傳吉へ貸金ある事、昨夜の十二時が其期限なる事、昨日傳吉と堅く約束せし事など云聞かすれば、傳吉が母は呆れ果てて、少時は言葉もなかりけり。
『まア實に驚いて仕舞ひますねえ。まア如何したら能う御在ませう。お腹もお立ちなさいませうが、傳吉が歸宅次第、何とか相談を致しまして、決して御迷惑は掛けませんから、せめて傳吉が歸宅ります迄、御猶豫を御願ひ申します。決して御迷惑は掛けませんですから。」
「なアに、其樣に心配を爲なさらないでも能いんです。今日願つて今日立退いて貰ふ譯でもないんですから。傳さんもお若いから、つい此樣事になつたのでせう。お前さんには、お氣の毒た譯だが、はゝはゝ。傳吉さんがお歸んなさつたら、話して置いて下さい、何れ又來ますから。」
竹村は云ひ捨てゝ歸り去りぬ。
如何も金を借りる譯はないのだが、貯金もある事だしと、傳吉が母は先づ簞笥の奥の小抽匣から、金包を出して封押切り、見れば洋紙の紙幣の形したるが入りたるに、吃驚して顏色變り

ぬ。此にて家を抵當の借金の譯も分りたれど、彼傳吉が、如何して斯樣事を。昨日の朝の顏色惡かりしも道理、昨日より今日歸宅せざるも道理、其に付きても氣の小さい倅、もし無分別にてもと思ひ付きては、心配で〳〵堪らず、あー、氣に掛る、家どころではない、傳吉が無事で居て吳れます樣にと、俄かに神棚に燈明をあげなどし、半狂亂になりて立ちつ居つ。

（十八）

傳吉が仁壽堂に立寄りしは、一にはお濱に見え、一には伊勢屋の樣子を聞かん爲めなりしなり。伊勢屋には變りたる樣子もなく、近處に何の噂もなしと聞くに、先づ心を安んじたれども、お濱は姿も見えねば、聲さへも聞く事なし。定二郎に尋ね見ばやと思へど勝之助傍に在れば、其便を得ざりし中、小僧の三吉外より歸り來り、淡路町の我家に變事ありと云ふに、心愈よ驚き、殺人談の一條に到りて、結末まで得聞かず、そこ〳〵に仁壽堂を辭し去りしなりき。

何とか思ひけん、我家の方角へは足を向けず、水道橋より人車に乘り、車代を取極めずして、ひた急ぎに急げと命じぬ。車夫が其向ふ所を問ふに氣付き、上野へと命じたりしが、壹岐坂下に到りし時、王子へ急げよと云ふ。車夫心得白山を上り路を右へ轉ぜんとするを、唯眞直に板橋へ到れと命ず。車夫は傳吉を仰ぎて呆れ果てしが、車代に厭ひなしと云ふに勇みて、巢鴨病院の此方迄到りし折、拔道あらば其を通りて、又もや王子へ行くべしと云ふ。車夫は此に到り、人車を止めて傳吉が顏を打眺め、商賣なれば車代次第、何れへ行くも命の儘なれども、王子ならば王子、板橋ならば板橋、到達くべき場所を確と定め玉へと云へば、傳吉は梶棒を卸させて飛下り、一圓札一枚、御苦勞と云ふまゝ車夫に攫ませ、とある小徑へ走り入りたり。

傳吉は小徑に走り入り、角一つ曲るより、ひた走りに一町ばかり走りぬ。軈て足を止めて躊躇ふ體なりしが、またもや小走りに急ぎ初めぬ。或時は畑を橫ぎり、或時は人家の垣を潛り、兎角して染井の共同墓地へ來りぬ。墓地より王子道へ出で、折しも來合せし人車に飛乘りしが、花見客のいと多きに氣付きて、飛鳥山の此方にて人車を捨て、山下の駄菓子屋の裏口より湯を請ひ、銀貨一枚投出して、裏道傳ひに瀧の川に到りしが、此にも足を止めで、彼方此方を彷徨ひ、稻荷の社より鐵道線路を望むと其儘、停車場へ駈付けたり。折しも切符を賣初めたれば、傳吉は熊谷までの乘車券を買求め、場の一階に小さくなりて列車の來るを待居たりしに、乘車切符を改めんとするに到りて、何とか思ひけん、場を外に走り出で、又もや人車を雇ひて、根岸まで急げと命じぬ。道灌山下に到りし時、又もや惜氣もなく一圓紙幣を與へて、人車を下りて小徑を山下に走り入りぬ。日暮里より谷中の墓地へ紛れ入り、芋坂を根岸へ下りんとして又踵を返し、墓地の間を彼方此方へ縫ひて、上野の山中へ入りしは午後五時を過ぎたりき。

＊　＊　＊　＊　＊

櫻花は忍が岡に散りて、隅田堤にも今は稍盛りを過ぎたれど、去年よりの約束なりと、お濱にせがまるゝまゝ、勝之助はお鍋を供に三人、向島の歸途、上野も捨て難しとて、屛風坂より歩を入れしに、榮枯は二勝地にも著しく、竹屋の渡の人に人を積みたるには引替へ、櫻が岡には落花の痕をも印めず、晩鴉空しく塒に噪ぐあるのみ。

お鍋は何をか見出しけん、お濱が袖を曳きて、指す方を見るより、お濱の顏色は變りたり。

『おや、傳さんぢやないかえ。』

『なに、傳さんが。』

勝之助も氣付きて彼方を見れば、彼名殘をの

みとゞめたる黒門を出來りて、大佛の前をちよいゝいゝ、こちよこ歩めるは、黄昏の遠見にも傳吉に紛れなし。

「如何して彼樣處を歩いてるんだらう。宅へ歸つたのか知らん。」

勝之助斯く云ひける途端に、撞出したる鐘聲の、突如として傳吉が頭上の鐘樓に起れば、傳吉は飛上りて、物に追はるゝが如く一散に走り出しぬ。

『ヤア駈出した。』

勝之助お濱等顏を見合せし間に、傳吉は何地行きけん、既や其姿見えずなりぬ。

（十九）

勝之助お濱等は傳吉を見失ひ、鐘聲に驚きて走りし彼が樣を笑ひ、彼の母が彼昨夜歸らざりしとて心配へること、且つ彼が今朝店に來りし折の擧動の尋常ならざりし事など、語り合つゝ歩む中にも、お濱は何となく氣味惡く、夕嵐の別けて身に染む心地し、清水堂を後になし、既に石坂に下らんとせる時、人あり、背後に在り。

『お濱さん。』

呼掛けたる聲音は覺えある傳吉。お濱は覺えず叫びて兄が腕へ縋りつく。勝之助は妹を圍ひつゝ振返れば、傳吉悄然として立居たり。

『へゝゝゝゝ。』

『傳さんぢやないかね。如何爲なすつた。』

『えゝ。』

『家へ歸りなすつたかね。』

『えゝ。』

傳吉は勝之助へ答へながら、其眼は兄の背後に齒の根も合はで、戰顫へるお濱へぞ注ぎける。

勝之助はお鍋に眴せし、手もて後ざまにお濱に敎へて、先へ行けと命ずれば、お濱はお鍋と手を取り合ひ、石坂の過半は駈下り、三枚橋の此方、往來繁き邊に、兄を待合すなるべし。

傳吉は覺えず二三歩あゆみ出し、石坂を下り行くお濱に目も放たず、恍然として立ちたる顏色、勝之助は身柱寒き心地す。

『傳さん。』

『えゝ。』

振向きたる傳吉が眼には涙見えたり。

『大層顏の色が惡いぢやアないかね。如何爲なすつたんだね。』

『何だかね、心持が惡くツてね、心配事が出來たもんだから。』

『心配事ツて、何樣事なんです。』

『なにね、私が遊蕩をするツて、お袋に、お前さん所の三どんが、種々な事を云つたもんだから、お袋は心配するし、泣いて心配するし、私や居ても立つても居られないんだから……三どんには困ツちやツた。』

『三吉が。それは如何もお氣の毒でしたね。彼奴は多辯で仕樣がないなア。歸宅つたら叱りませうよ。其位の事なら、私が母親さんに、心配爲なさらない樣に、能く云ひませう。』

『えゝ、さう云つて遣つて下さい、心配爲ない樣に。お袋は可哀想だ。旦那賴みますよ。』

傳吉は垂頭いて眼を閉せしが、涙は眼蓋を漏れて、はら〳〵と落ちたり。

『ぢやア、あれから宅へ歸んなすつたんだね。』

『えッ、烏渡、烏渡歸つたんだけれども。』

『そりや能かつた。時に傳さん、お前さんは今頃何處へ行きなすつたんだね。』

『えツ。なアに、烏渡用があつたもんだから。……旦那、お濱さんは、何時お嫁に行きなさるんです。』

傳吉は輝くが如き眼して、勝之助が顏を屹と見れば、勝之助は愕然とせしが、俄然笑ひ出しぬ。

『はゝはゝゝゝ。お濱がお嫁に。何時の事だか、

まだ的もありやア爲ない位さ。」
「また、的も、極らないんで。へゝゝゝゝ、」
傳吉は輕く淋しく笑ひ掛けしが、俄然耳をそばだて、其眼は四邊にきよろ付きぬ
「旦那、御免なさい。」
「傳さん／＼。」
勝之助が呼ぶを耳にも入れず、傑の如くちよい、いちよこと小走りに走り出せしが、清水堂の此方の坂に、頭の隱るゝと共に、飛下りるが如く走る足音聞えたり。
勝之助も妹の上氣に掛れば、急ぎて石坂を下り、三橋へ來り見れば、お濱はお鍋と共に心も落付かで待ち居たり。
「兄さん、早く人車で歸宅りませうよ。」
「あゝ、歸らう。だがね、鍋は留守に爲たし、定二郎と三吉が留守居だから、何もお菜がないだらう。何處か、其邊で食事でも食べて行からよ。」
「いゝ私やもう今事なんか如何でも能いの。早く歸宅りませうよ。」
「其様に心配する事があるものか。乃公に任せて置くが能い。」
兄の言葉にお濱も詮方なく、後見返りつゝ池の端なる、とある鰻店が樓上に上り、小西湖の夕景得も云はれざる眺に、お濱はお鍋と共に欄に倚り、覺えず樓下を瞰れば、傳吉がちよこ／＼と走りて、寶丹の角の方へ急ぎ行く後姿ぞ見えける。お濱は慄然として逃入りぬ。
食事漸く終れば、お濱が頻みに勝之助は人車を命じ、鰻店が前より車上に送られて、一同猿樂町へぞ歸りける。定二郎店に見えざるに、勝之助は何れへ行きしぞと三吉に問へば、今し方横濱の親御急病なりとの迎に、御留守なれども餘事ならねば、一晩のお暇を戴きました、宜しく申す樣にと申置いて、取るものも取敢ず新橋へ急ぎ行きたりと云ふ。勝之助は小首を傾けしが、三吉へ小言も云はれず、外に來客は、と問へば、定どん出掛けられし少し前に、あの傳吉さんが、と聞くに、勝之助お濱は顏見合せて打呆れ、少時は言葉もあらざりき。

（二十）

仁壽堂の勝之助は、昨夜より定二郎横濱へ行きたれば早朝より店に坐り、新聞紙を手にして、先づ雜報より讀初めたるに、「入谷村の人殺し」と題する標目あり、此ぞ昨日の三吉が話の一條なるべしと讀行けば、三吉が語りし所と大同小異なり。次に又人殺しの標目あり「太郎稲荷の人殺し」と題したり。又かと獨言ちつゝ讀行きけるが、其殺されし男の名、町所番地を讀むに到り、愕然として新聞紙を取落したり。
新聞の記事に寄れば、太郎稲荷と[illegible]との間俗に吉原田甫と呼べる田の中の、畔より一間ばかりを去れて、何者にか殺されし男の死骸ありしを、昨朝通り掛りし者見出し、巡査派出所へ訴出でしにぞ、其筋の人々出張して、檢視せしに、手拭をもて絞殺せしにて、其傍には淺黄木綿の胴卷捨てあり、外に加害者の手掛りとなるべき品も殘らねども、被害者の袂に鼻をかみし二番半紙ありしにより、前夜吉原に遊びし者なるべしと其筋の人は鑑定したり、直ちに其々加害者捕縛の手配に及びしが、未だ少しも手掛りを得ず、被害者は神田猿樂町○丁目の質商伊勢屋某方の番頭常藏と云ふ者なりとぞ記したり。
勝之助は件の記事を讀終ると共に、傳吉が或は其加害者にはあらずやとの疑念、忽然其胸中に畫かれたり。傳吉が昨朝我店に來りし時の顏色擧動、一昨夜彼が家に在らざりし事、昨夕上野にて逢ひし時の彼が樣子の不思議なりし事等、一々彼が其加害者なるべしとの推斷の材料となり來り、殊に小僧三吉を顧みて常藏へ手紙を送

りし事、常藏が直ぐに來るべしと返事せし事の如きは、動かすべからざる證據なるが如く勝之助は感じたり。斯く推斷し來れば、昨朝來りし時、常藏が昨夜より歸らずと云ひし事、三吉より我家に變事ありと聞きて、愕然として立上りし事、人殺しと聞きて駈出さんとせし事、入谷村の人殺事件を得聞終らざりし事、上野にて鐘聲に驚き逃出せし事、石坂より上り來る人の足音に耳をそばだて、俄に暇を告げて清水堂の傍の坂を馳下りし事、自分との對話の中に、心配な事が出來しと云ひ、居ても立つても居られぬと云ひし事等、彼が加害者たるを確むる證據ならざるはなし。

勝之助は三吉に命じて、横町の伊勢屋の樣子を見來らしめしに、三吉歸り來りて、彼家の小僧の談話なりと云ふを聞くに、常藏一昨日出でし儘歸り來らず、昨日晝頃其筋の通知に依りて、常藏が吉原田甫にて絞殺されしを知りたり、店の名前にも關ればとて、死骸は常藏が受人に引取らせたり、尤も一昨日家を出る時、豫て主人に預け置きし金百八十何圓に、主人より借用せし金十五圓を所持し居たり、胴卷は死骸の傍に捨てありたれども、中なる金は奪はれしと見えてなし、蝦蟇口に兌換券二圓と、銀貨に銅貨取交ぜ四十何錢は、其儘懷中なし居たりしとなり。

常藏が二百圓の金を所持せしは新聞紙に見えざる所なれども、昨日傳吉が仁壽堂の前にて、高利貸の竹村に出合ひ、共に立去りしを知りたる勝之助には、傳吉が金を要すべき事情あるも想像され、常藏が金を所持せし事も、亦傳吉が加害者なるべしとの推斷を確むるに似たり。

斯くて勝之助が腦裡に湧き來りし疑問は、傳吉が既に其筋の捕ふる所となりしか、否やなり。未だ捕へられずば、今は何處へか脫れたる、既に捕へられたらば、何處にてか捕へられたる、何れにしても可哀想なるは傳吉がお袋なり、斯くと聞きなば、如何に驚き悲しむやらん、氣の毒な事を見るものかなと、加害者は傳吉に決したるが如き心地し、三吉に命じて淡路町へ走らせ、傳吉が家の樣子を探らせんとせり。

三吉が常藏殺されたりとの告に、お濱も店へ出來り、お鍋も店奥の境に立ちたり。

折しも歸り來りし定二郎を見るより、勝之助は早くも聲を掛けたり。

「おい、定二郎、大變な事があるよ。」

「へい、何で御在ます。」

定二郎は頭から大變事ありと聞きて、驚きながら主人の前に坐りぬ。

「おい、番頭が殺されたぜ。横町の伊勢屋の番頭が。」

「えゝッ、常さんがですか。」

定二郎の顏色は見る〳〵中に土の如くなりぬ。之を見し勝之助はぎょッとして、屹と定二郎に目をつけたり。

（二十一）

三吉は主人の命を奉じて、既に淡路町の埼玉屋へ走り行きたり。勝之助はお濱に命じ、お鍋を伴ひて奥へ去らしめたり。後には勝之助と定二郎とのみなり。

勝之助は聲を潛めつ。

「定二郎、お前は如何思ふ。私は傳吉が……。」

と、言葉を切りて、定二郎が顏をぢッと見れば、定二郎は顏色土の如くなりしのみならず、甚く畏怖を懷ける樣子なり。

「そ、そ、さうです。かも知れません。」

「まあ如何して殺す樣な氣になつたか知らん。」

「わ、わ、解りませんな。な、な、何しろ、た、た、大變です。」

定二郎が常藏殺されしと聞くより、其驚ける樣の勝之助が目に見ゆる程なると、應答の言葉

の樣子、何となく落付かざるに、左る事はあるまじとは思へど、萬一定二郎が傳吉と共謀して、常藏を絞殺せしにはあらずや。一寸法師の樣なる傳吉か、大男の常藏を、おのれ一人の力にて殺し得べしとは思はれず、殊に一昨夜は何れへ泊りしか、定二郎家に在らざりき、一昨夜は卽ち常藏が殺されし夜なり、よし傳吉と共にせずとするも、何等かの關係なくては叶ひ難し、横濱の父病氣なりとて、昨夜我歸宅を待たずして出行きしが、其前に傳吉來りて、定二郎と何やらん密話き居りしとは、三吉が見たりとて我に告げし處なり、幸ひにして傳吉と共に自ら手は下さずとするも、傳吉を欺き且つ教唆し、手を下さしめしにはあらざるか、主人の妹其身の從妹を餌にして、傳吉を欺きし程の彼なればと勝之助は痛く心を勞し始めたり。

「定二郎、お前昨夜は何處へ泊んなすつた。」

「へい、昨晩は。あの、何です、横濱の宅へ泊りました。まだお詫も致しませんでしたが、昨夜はお留守に横濱へ參りまして、どうも恐入りまして御在ます。」

「それは能いとして、お前本統に横濱へ行きなすつたか。」

「へい、兩親からも宜しく申しました。なに、親父の病氣も大した事はありませんで、今朝私が歸ります時には、もう起きましてね、平生と些とも異らない樣になりました。幸中の樣な鹽梅で、一時は非常に驚きました。さうです、其から忘れて居りました、歸途に辨天通を通りますと、甲州屋さんで私を呼びまして、鳥渡頼みたいと云ひなすつて、此お手紙を旦那へ……。」

定二郎は懷中より甲州屋が書狀を取出し、勝之助へ呈せしを手に取り上げ見れば、紛ふ方もなき甲州屋が手蹟、文言も覺えある事なりければ、先づは心安しと、勝之助は覺えず胸を撫で下しぬ。

折柄三吉歸り來りぬ。埼玉屋が樣子を問へば、傳吉は留守にして、傳吉が母は何事のあればにや、目を泣腫らし居れりと云ふ。此にて、勝之助は、常藏殺害の下手人は傳吉に相違あらじと思ひ定めぬ。且つ定二郎三吉等を戒め、自然探偵來ることあるやも測り難ければ、其節は一通り傳吉に就いて、知れる處は隱す事なかれ、されども、此方より賢ら立ちて、推測の陳述を爲すべからずと、堅く云ひ渡したり。

斯くて其日も黃昏近くなりたれども、幸ひに探偵は來らざりき。勝之助は稍心落着き奧へ入らんとせし時、郵便配達二通の書狀を投込み走り去りたり。定二郎は書狀を手に取りあけ、表書を見るより顏色驚き、電光の如く一通を袖にし、一通は仁壽堂宛なれば、之を勝之助へ呈したり。勝之助は定二郎が擧動に、又もや心安からず思ひ惑ひぬ。

（二十二）

定二郎が横濱へ行きたりし事の僞言ならざるは、甲州屋が手蹟にも知られたれど、平生に異りて顏色の惡き、溜息をつきがちなる、店の客にも怖るゝ氣勢、心地惡しとて食の進まざるなど、勝之助のみにはあらず、お濱が目にも付きて、如何にせしにやと兄に問ふ程なれば、勝之助は傳吉に關係なしとは信じながらも、何ほ心安からざりしに、夕刻の怪しき書狀は、又もや疑念を生ぜしめたり。

其夜仁壽堂は平日よりも早く店を閉め、十時前に何れも床に入りたり。勝之助は床に入りたれども、傳吉が事より定二郎へ關りたる痛心と、傳吉が上の氣に掛るとの二つに、容易くは夢も結び難し、十二時も聞きたり。枕頭の時計の針は一時を指さんとすれども、眼は愈よ冴えて、妄想は縦横に走り廻る。傳吉が上は詮なけれど、定二郎は其身の從弟にして、彼が兩親、我爲め

には叔父叔母より頼まれたるに、其中妻もなく重罪を犯せしとありては、何とか申譯を爲すべき。甲州屋の書狀もあり、昨夜は橫濱に相違なけれど、一昨夜は何れへか泊りたる。殊に怪しむべきは夕刻の手紙なり。傳吉からの手紙にてはあるまじきか。傳吉のならば、先づ常藏の下手人と決りたるに、其書狀を受くべき筈なく、又我に隱すべき道理もなし。唯々願ふ所は、傳吉が犯罪に關係せざる事なり。

勝之助と一室を隔てたる定二郎も亦寢られざるにや、輾轉反側溜息をのみつきけるが、勝之助の耳に入れば、勝之助は愈よ疑念を增長して、倘も樣子を窺ひたり。

二時過ぎしかと思ふ頃、店の方に當りて、硝子と硝子とを觸れしむる音の聞ゆるに、勝之助は愕然として床を出でたり。察する處、定二郎彼犯罪事件に關係し、其露見を怖れて、毒藥を服むにはあらずやとの想像は、電光の如く勝之助の腦裡に閃きたり。足音を忍び、私に店を窺へば、定二郎が調藥臺の前に立ち、片手には水杯片手には壜を持ちて、戰慄ひつゝ飾がんとせる姿の、心を細めし洋燈の光明の朦朧たる中に見られたり。

「定二郎。」

「へツ。」

定二郎は吃驚して、覺えず手にせし水杯を取落し、勝之助を見返りし眼は輝き、身體は戰慄せり。

『あゝ、吃驚しました。』

「お前よりも、私の方が餘程吃驚した。何を爲て居るのだ。其壜を此方へ渡しなさい。』

「へい。」

勝之助は定二郎が手より壜を奪ひ取り、透し見るに、思ひしよりは壜も大きく、毒藥にはあらずして亞爾固爾なりき。此に少しは心を安んじ、定二郎を我寢所へ伴ひ來りぬ。

「定二郎、悉皆打明けて云ふが能い。私が惡い樣には計はない。亞爾固爾なんぞを何にするのだ。』

『へい、餘り寢られませんものですから。』

『なぜ其樣に寢られないんだ。何か仔細があるだらう。今も云ふ通り、私に悉皆打明けるが能い、決して惡くは計はない。』

「へい。斯うなりやもう悉皆申します。私や飛んでもない事を爲ました。

「伊勢屋の番頭を、傳吉と一處に殺したんだらう。』

『えツ、どうしまして。私が、何で、其樣、串戲を仰有つちや困ります。他人でも聞かうものなら大變です。今お話し申します。今ツ。』

定二郎が橫濱へ行きしは實事なれども、父の急病と云へるは根もなき譌言なりき。彼が橫濱へ行きしは傳吉に誘はれしにて、昨夜は橫濱の遊女屋に一夜の夢を結びしなりき。常藏殺害の一條は、彼は夢にも知らざる事にて、今日しも仁壽堂に歸り來り、始めて之を知りしなりき。彼が面色土の如くなりしは、殺人犯の傳吉と共に一夜を遊びたるより、連坐の憂目を見んことを怖るゝが故、お濱の一條欺かれたるを覺らば、彼我を恨むの餘り、連坐の罪を負はせんことを怖るゝが故、彼に百金近き借財あれば、何とやら、心穩かならず、一念我を恨むに至らば、其等を種に連坐せられんことを怖るゝが故なりしとぞ云ふなる。

定二郎は語り終りて、倘ほ戰々兢々たれども、勝之助は漸く心を安んじたり。

彼怪しき書狀はと問へば、昨夜の横濱の遊女からなりと云ふ。馴染かと問へば、初會なりと答へ、傳吉と共に今朝遊女屋を立出でしかと問へば、彼は後へ流連りたりと答ふ。且つ遊女より文の樣子は、昨夜のお連樣、頻りにお前樣を待たせたまへば、初の御見のお馴染は薄けれ

ども、取敢ずお迎までにと書きたり。

勝之助は少時思案せしが、前後の樣子に想像を加へて、傳吉は横濱にて多くは既に捕縛せられしならんと覺りぬ。遊女よりの文は餌にして、定二郎を釣寄せんが爲めなるべしと覺りぬ。思ふ所を定二郎に申聞け、身に犯せし罪なければ、彼方の餌に釣られて、夜明けなば一番汽車にて横濱へ下り、昨夜の遊女屋へ到り見よ、其座にて多くは拘引せらるべし、拘引せらるゝとも、少しも恐るゝ所なければ、有體に陳述せよ、さあらば、仔細なく無罪の放免を得べしと教へ、定二郎が怖ろしさに進まざるを諭して自身新橋迄見送り、一番汽車にて横濱へ下らせたり。

（二十三）

勝之助は定二郎を横濱へ遣はし置き、新橋よりの歸途、埼玉屋の樣子倘ほ氣遣はしければと、反對の軒下を通り見るに、店は平常の如く開かれ、別に異りし樣子なし。既に通抜けんとせし時、小僧の長太郎走り來りて、宅のお神さんがお目に掛りたければ、お手間は取らせませぬ、鳥渡お立寄を願ひまするとの口上に、流石に見捨てかねて、進まぬながら其が店先へ到れば、傳吉が母は早くも出迎へ、先づ〳〵と請ずるに、店先へ腰を掛くれば、何卒此方へと云ふ。詮方なく奥へ通れば、傳吉が母は挨拶するより先づ、涙はら〳〵と落しぬ。

「貴所、もう心配な事が出來まして、私は如何致さうかと存じます。銀座の本店の方へ相談に參らうかと存じますけれども、長太郎ばかりで留守が御在ませんから、其も出來ませんので。貴所一昨々日から私一人で氣を揉んで居るもので御在ますから、もう貴所唯わく〳〵致しますばかりで。」

傳吉が母涙を拭へば、勝之助は道理なりと思ひながら、其と指しては云ひ難く、態と素知らぬ顔。

「其はまア嘸ぞ御心配な事で。傳吉さんは如何なすつたのです。」

「へい、傳吉が居りますれば、此程までに心配は致しませんけれども、如何致したので御在ますか、一昨々日出まして、何處に何を致して居るので御在ますか、まだ歸宅らないので御在ますよ。まア之を御覽なすつて下さいまし。」

傳吉が母は勝之助が前へ書付を出したり。勝之助は傳吉が母の言葉に、常藏一件は未だ知らざる事を知り、件の書付を見るに、高利貸の竹村より傳吉に係る、家屋抵當貸金支拂の命令書なり。

「貴所、其樣お書付が裁判所から、まア可怖いぢや御在ませんか、裁判所から其樣書付が參つたので御在ますよ。私には如何して能う御在ますか、女の事で些とも解らないので、實に當惑して居るので御在ますよ。餘り失禮では御在ましたけれども、貴所のお通りなさいますのを、お見掛申しましたものですから、御無理に御立寄を願ひまして、誠に濟みませんで御在ます。」

勝之助は此にて傳吉が金の入用を知り得たれど、傳吉の母が相談に對しては、如何とも口の出し樣なし。家は怖るべき命令書に接し、子は人を殺めて、既に死地に就けるに、其を知らずして倘ほ頼みとせる親心、察し遣りては胸も痛めど、愁ひに關係ひてはと、勝之助は命令書の意義を説聞かせ、一日も早く其手續を付けらるべし、傳吉殿留守なれば、今日にも本店へ相談されよ、命令書の期限内に先方との折合さへ付けば、何の仔細もあるまじければと慰め置き、辭し去らんとすれば、店口へ送り出でたる傳吉が母。

「どうも難有う御在ました。若し傳吉にお逢ひでもなさいましたら、どうか直きに歸還ります樣に、仰有つて下さいまし。彼樣事が御在ます

のに、一昨日から昨日の午時頃までは、入替り立替り傳吉を尋ねてお出での方は御在ますし、今日は未だ何人もお出でなさいませんけれども、實に困るので御在ますよ。」

「へい。傳さんにお目に掛つたら、能うくさう申しませう。餘り御心配なさらないが能う御在ます。」

勝之助は傳吉が母を慰め置き、我家へ歸り來り、お濱を招きて、定二郎を横濱へ遣はせし始終、傳吉が母の不便なる事ども、私に語り聞かすれば、お濱は傳吉が常藏を殺せしかと思へば、彼が姿の眼の前に隱見く樣覺えて、怖ろしさ身に染渡り、傳吉が母の心を察すれば、氣の毒さに涙ぐまるゝ。

（二十四）

其日は定二郎終に歸らざれば、勝之助は果して我推量に違はず、定二郎は拘引せられしなるべし、拘引せらるればとて、殺害事件にさへ關係なくば、明日にも放免せられて歸り來べし、左まで心配するには及ばねども、定二郎が自分へ云ひし所と、其實際とに相違あらば、其罪は脱れ難し、此期に臨んで僞言を吐ふまじとは思へど、人の心の測り難きに、兎角一兩日待ちての上と、何ほ安からざる思をなす。

次の日も勝之助はお濱と共に定二郎が噂に落せし夕刻、定二郎歸り來りぬ。唯今歸りましたと云ふ聲、顏付に勇みあれば、勝之助もお濱も共に打喜びて出迎へ、奧へ伴ひ行き、又手樣子はと問初めぬ。

「旦那の仰有つた通りで御在ました。遊女屋へ入らうと爲ますとね、前から網を張つて居ましてね、變な男がずつと私の傍に寄つて來ましてね、お前は定二郎と云ふ人だらうと云ひますから、さうですと云ひますとね、御用だと云つて、何時の間に掛けたんですか、ぐッと引張るから、見ると手に繩が掛つてるんです。」

『さうだつたらう。さうだらうとも。』

『嘸ぞ可怖かつたでせうねえ。』

「えゝ、覺悟して行つたんですけれども、何とも云へない可厭な心持が爲ました。」

「さうだつたらうねえ。」

「其から横濱の警察署へ連れて行かれますとね、東京の探偵が出張して居ましてね、其探偵に引渡されて、東京へ送られたんです。横濱には私の家があるんでせう。親類もあれば、朋友も澤山あるんでせう。白晝腰繩で連れてかれるんですから、私や實に死んで仕舞ひたくなりました。探偵に賴んで頰冠を爲て貰ひました。」

「まア可哀想に。」

「身から出た錆だから爲方がないさ。それで何かい、伊勢屋の番頭を殺したのは、矢張傳吉だつたのかい。」

「え。さうなんで。東京へ送られてから調べられたんですがね、私の居た所と羽目一重でしたから能うく聞えました。私や實に驚いて仕舞ひましたよ。ぺら〳〵と平氣で、悉皆白狀つたんです。私や實に驚いちやッた。」

「さうか。其から如何だつた。」

『今話します。伊勢屋の番頭さんを、吉原田甫へ引張出して絞殺したんですとさ。搔撮んで手取早く話しますとね――種々な事を云つたんですけれども、聞えなかつた處もあるし――金故に常さんを殺したんですッて。彼高利貸の竹村、御存じでせう、彼竹村へ家を抵當に入れて置いた處が、期限が來ても金の的がないもんだから、伊勢屋の番頭さんに話して、貸して貰ふ事になつたんですが、證人がないんです。常さんが仁壽堂の旦那が判を押して下されば と云つたので、傳さんは仁壽堂の旦那に賴むからと云つて、彼日常さんを引張出したんですッて。實は

彼前の晩に、旦那に頼んで呉れろッて、私は頼まれたんです。』

「さうだつたのか。それならば兎も角も私に話せば能いのに、何とか仕様があつたらうのに。」

『さうは思つたんですけれども、其晩には遲く歸つてお出でなすつたし、次の日には傳さんの事で、旦那に小言を聞きましたし、お話する間がなかつたんです。其前の日の夕方と、其日の午時頃傳さんが來たのは、其事をお頼み申す筈だつたんですッて。所が其機會がなかつた中に、竹村に出會して漸と竹村に話をして、其晩の十二時迄猶豫して貰ふ事にして、竹村と別れた處に、常藏さんが來て仁壽堂さんへ行かうと云ふのを、まだ旦那に話は爲てないし、仕方がないから、旦那も後からお出でなさる筈だからッてと、常さんを欺して、連雀町の安會席へ連込んだんですッて。其料理屋で常藏さんが醉つた紛れに、胴卷を出して傳さんに見せたさうです。傳さんが其を見るてえと、魔がさしたのですッて。調べられてさう云ひましたよ。其から急に其金が欲しくなつたのを、常藏さんが覺つた樣だから、無理に酒を進めて醉はせて、送る積りで人車に乘せて、吉原に引込ませて、自分の馴染の樓に登つたんださうです。此馴染の樓から足がついたさうです。馴染の樓に行く奴があるもんですか。此が全く魔がさしてたんですねえ。其から其樓で又醉はせて、吉原田甫へ引張出して、常藏さんが小水をして居る所を、田甫へ陥ちると危險からッて、押へて居て遣る積りで、背後から手拭で絞殺したんですッて。役人が其方の樣な小男が、一人の力では中々人は殺せない、何者か手傳つた者があるだらうと尋ねますとね、いえ私一人です、ぐッと締めると、ばた〳〵と手足を動かしたと思ふと直きに倒れました、人間は此樣に脆弱いものとは思はなかつたと云ひましたよ。私や實に驚いちまッた。どうも實に驚きましたよ。旦那人間は其樣に脆いものですかねえ。」

「私が知るものかね。脆いか脆くないか、人を殺した事がありや爲まいし。串戲云つちや不可いぜ。」

「まア可怖いことね。まア其樣可怖い人だつたのかねえ。』

『お濱さん、傳さんは貴女に餘ぽど氣が殘つてるんですよ。貴女の事も云ひましたよ。』

お濱は慄然として、兄が傍へ身を寄せたり。

『えッ、私の事を。まア如何したら能いだらうねえ。』

（二十五）

勝之助は妹お濱の事を、此期に至りても、傳吉が尙ほ口にしたりと聞くより、呆れながらも定二郎が傍へ膝を進めつ。

『何だと、傳吉がお濱の事を云つたッて。役人の前でかね。』

『えゝ。白洲でです。私が惡いのです。私が好い加減な事を云つて、傳さんを欺したのは、私が一生の過失でした。何卒勘忍して下さいまし。傳さんが白洲で云ひますにはね、私は人を殺したのですから、大罪を犯したのですから、どんな御處刑でも受けます、併し、私は心に掛るものがあります、私のお袋と、私の……女房とはなつて居ないけれども、約束をしてあるお濱と云ふ娘があります、私は罪人ですが、お袋は何にも存じません、私は身を八裂にされても、お袋やお濱にはお祟のない樣に願ひます、お慈悲を願ひますッて、幾度もさう云ひましたよ。其でね、役人が、其方の母や妻となるべき女が、情を知つて居るのでなければ、問ふべき罪がないのだから、其樣心配は致さんが能いと、云つて聞かせましたらね、難有う御在ますッてね、結局泣出してね、白洲でお

いおい泣くんですよ。私もね、餘り可哀想で、私も泣きました。」

「まア其樣に傳さんが……。」

お濱は甚く感動して、襦袢の袖にて涙を押ふれば、勝之助も傳吉が心中の氣の毒さに、垂頭いて歎息しつゝ、少時は言葉も出でざりき。

「旦那、傳さんが此樣事にたつたのも、原因はと云へば、悉皆私から起つたのです。私が能い加減な事を云はなければ……。私が傳さんを罪人にしたのも同樣です。」

定二郎は此迄勝之助へ隱し居りし、傳吉を吉原へ誘き出せし初めより、其後もお濱を餌にして彼を欺き、彼の金に我樂みを盡せし事、百圓近き金を借出せし事、斯かる事より傳吉金に詰りて、家屋を抵當にせし事情を、いと委しく述べ終り、傳吉が常藏を殺せしは、其金を奪ひて、家屋を抵當より救はんとせしにて、家屋を救はんとせしは、母に心配を掛けざらんが爲め、お濱に愛想を盡かされざらんが爲めなり、傳吉が斯く迄心を惱まし、其身を忘るゝに到りし家屋は、われ勸めて抵當に入れしめしに等しく、われ常藏を殺せしに等しく、われ傳吉を殺さんとするに等し、されど事此に到りては、如何とも詮方なければ、世にも賴りなき傳吉が母を、我母としも思ひて養ひ慰めんと、涙と共に云出でぬ。

勝之助もお濱も共に定二郎が改心を喜び、哀れたる傳吉が母に就いては、力の許す限り共々慰め遣らんと約し、中にもお濱は今日より我家へ引取りてと迄云ふを、勝之助は傳吉が事落着迄は情なきに似たれど、關係せざるこそ能けれ、傳吉が心を留せる家屋は、私かに竹村へ相談して、此方へ取止むる手段あらんと云へば、お濱は、成る事ならば、一日も早くさうして上げて下されと云ふ。萬事は私に委せ置くべしとの勝之助が言葉に、定二郎も甚く打喜びぬ。

定二郎は俄かに思出せしにや、お濱に對ひて、

「此樣事を云ひますと、お濱さんも能い心持は爲ますまいが、傳さんが白洲から出て來た時に、私に顏を合せると、差入物を、何卒お濱さんにと、たッた一言云つたんです。誠に濟みませんが、お濱さんのお名を使して下さいまし、明日にも私が行つて來ますから。」

「其樣にまで、私の事を思つてお居でたのかねえ。兄さん、能う御在ませうね、明日にも定さんに行つて貰つて。」

「能かろ。併し、世間には知れない樣に爲たいものだ。定二郎、お前能く心得てた。」

「へい。承知致しました。」

次の日朝疾く、定二郎は監獄署へ行き、お濱の名をもて、傳吉へ半紙幾帖かを差入れたり。之を手にせし時の傳吉は嬉泣きに泣いたと云ふ。

斯くて間もなく、傳吉は絞罪となりぬ。

傳吉が母は、傳吉が犯罪の一條を聞きし時は、殆んど狂せんばかりに歎きけるを、定二郎日毎に訪ねて慰め居たりしに、愈よ絞罪に處せられしと聞きては、共に死なんと歎きしを、仁壽堂の勝之助お濱共々に力をつけ、心の限り慰め遣り、後には我方へ引取り世話しけるに、お濱が本町の親戚へ歸嫁ぎて間もなく、二三日の病氣に、姥櫻の敢なく枯れて、空しく恨のみを殘しけるこそ哀れなれ。

（明治二十六年十二月）

淺瀬の波

（一）

梅花は既に散り、櫻花は今一雨を待ちかね、夜風は尚ほ肌に浸みながら氣は浮立つ。翌月の一日を廓の花開き——追々洲崎の世界にならうと云ふ三月の末である。

西の空は一面に曇り、南から寄せて來る雲は月を歩ませながら、果は風雲の樣になつて消えてしまふ。黑み渡つた海面には、金龍時に影を躍らせ、岸打つ波の音は戯るゝかの樣で、而も淋しさを加へて居る。遙かに見ゆる芝浦の料理店には酒客の燈火低く、高きは愛宕の塔か。一點又一點白金臺より伊皿子臺に連り、千點臻る處は品川の青樓か。其が又七砲臺邊から沖に連る漁火、亂れては狐火の遊ぶかとも疑はれる。點々盡くる邊三四高く掛つて星かとも見ゆるは、夜泊夢は穩かなる帝國の軍艦であつて、その四半時毎に夜を警むる鐘の音は、人をして不覺に無限の感を惹かしむる。幾千不幸の女に、此鐘の音を聞いて思鄕の涙を墮さぬものは、恐らく一人も無いであらう。

夜を晝なる廓にも夜は更くるものか、電氣燈は氣の故か睡るが如く、引手茶屋の軒行燈は夢の如くである。波の音にも紛れず遙かに聞える投節は、蛤町あたりの漁場から辨天の土手傳ひに、一廻まはらねば寢られぬ手合が、ひけ前をそゝりに來るのである。

十二時を打つと引手茶屋はばた〳〵と店を閉めて了つた。仲の町は早くも深夜の光景に變り、一望數町の間に、大門の巡査派出所と鍋燒饂飩との他覺きて居る者は見えない。

突當りの土手の蔭から現はれた二個の人がある。それは男と女で、何やら小聲に話しながら仲の町の角へ歩いて來た。

男は盲縞の腹掛に印袢天一枚、八反の三尺を締り加減に結び、半股引の外は臑も露出して、地廻ででもあらうかと見ゆる風俗である。年は廿八九。髮を五分に刈り、色の淺黑い、鼻の高い、眼の淸しい、苦味走つた面體。左の肩に手拭を置き、其を擔いだ樣に拳頭を作へ、樫齒の足駄に砂利を蹴飛しながら、右の手は女と手を引合つて居る。

女は廿二三歳にもならうか。夜目には別けて色の白さが目に立つ。鼻つきが尋常で、口元か締つて、頰には云はれぬ愛嬌もあるが、何となく眼に劍があり、其が却つて面の全體を引立たせて居る。髮は鴨脚返に護謨珊瑚の根掛、黃楊の簪櫛を右に斜めにぐいと插し、頰に落掛かる愛嬌毛を右の手で搔上げながら、左手は男の腕に搦ませて、其指尖を組合せて居る。二枚重ねたガス雙子の布子の上着は鱶とか云ふ縞の赤味走つたのに、白ツぽい細綿の細雙子の書生羽織。帶は南京繻子と更紗形のキャラコの晝夜帶。鼠縮緬の膝蔽を長目に締め、紺足袋に雪駄を穿き、男の歩に合せて徐かに歩んで居る。

「ぢやア可いんだな。今夜中に形をつけねえぢやア、諄々云ふ樣だが、乃公はもう此土地にゃ居られねえんだ。旨く調金て吳んねえよ。乃公は此から河岸を一廻まはつて、例の家に行つて待つてるぜ。」と、男は摑んで居た女の手を放さうとする。

「まアお待ちよ。」と、女は男の手を一つしやくつて、「お前、又河岸なんか登樓るんぢやアないよ。」

『へん、お株を云つてやがらア。くだらねえ事を云つて居ねえで、早く行くが可からうぜ、お前の情人が待つてるんぢやねえか。』

「お前も亦十八番を云つてるよ。他に其様人がある位なら、此様心配を誰がするもんか。」

「だッて今、待つてる人があると云つたぢやねえか。」

「そりやアあるのさ。そりやアお前……。』と、女の語調は稍沈んだが、忽ち又元に返つて、「お前が行つて不可いとお云ひなら、私だッて進んで行きたかありやアしないよ。お前、お倉さんなんかに、誰が好き好んで頭を下げに行く奴があるもんかね。お前が可いなら、私や行かない方が何程善いか知れやしないよ。おやア、もう何處へも行かないで、直ぐに例の處へ行かうぢやアないかね。さアお行でよう。』と、すれ氣味になつて男の腕を引張り行く。

『おい、おい、戯言云つちやア不可えぜ。お倉さんの家に行くなッて誰が云つたい。今夜中に是非入用金だ。此様事を云はねえで、本氣で調金て來んねえ。』

『いやな事た。』

「何だと。」と、男は歩を止めて、「お前今、彼處で受合つたんぢやアねえか。今夜中に調金ねえぢやア、乃公はもうお前にも逢はれねえんだぜ。」

「いやだッたら否だよ。』と、女は態とらしく男を離れ、「河岸の女にでも相談お爲なさいましだ。」

「箆棒めッ。大概に爲ねえか。何時河岸なんかに女をこさへたい。」

「何時だッて可いぢやアないか。お前は口先が巧いから、何様女だッて迷はされるよ。屹度情婦が出來てるんさ。其情婦の處に行つて費ふお金を、何も私が辛い思をして調へる事もないのさ。』

「其情婦ッてえなア、何様女だ。』

「何様女だッて可いよ。」

『それ見ねえ。はゝはゝゝゝ。無え情婦の名は指されめえ。』

「いゝよ。どうせお前には口先ぢや及はないよ。」

「口先で及はたきやア、如何爲ようと云ふんだ。」

「如何爲ようと、私の勝手ぢやないか。私の苦勞してるのは、お前さん、お前には見えないんだね。」

「乃公の苦勞してるのも、お前にやア知れめえよ。』

「お前は口が巧いんだよ。』

『お前のお仕込だからよ。』

「ほゝほゝゝゝ。馬鹿にお爲でない。』

「怜悧にやア倚ほ爲れめえ。』

『もう可いよ。」

『よけりや如何する。』

「如何でも可いよ。あゝ、本統に苦勞だッちやアない。」と女は男の腕にしがみ付いて、胸に顔を押當てた。

月は雲に入つて、沖の漁火の影も稀疎になつた。警火夫の鐵棒の音が、二丁目の方から冴えて聞えて居る。

『おい、止しねえ、外見ねえや。』

「外見なくッたッて可いよ。』と、女は倚ほ離れぬ。

「それ見ねえな、誰か來るぢやアねえか。』

『え。』と、女は男を離れようとして、「ありやア櫻屋の提灯だから、此方側に來やアしないよ。それ御覽な、向側へ行くぢやアないかね。』

「そりやア可いが、もう十二時餘程過ぎたらうぜ。先刻から頼んでる一件は、お前大丈夫受合つて呉れるだらうな。近くとも二時迄にやア、如何したッて入用んだぜ。え、おい、本氣になつ

て心配して吳んねえよ。其金が出來ねえ事になりやア……。』と、男は深く溜息を吐いた。

『何とかするからね、其樣に心配お爲でない。』と、女は電燈の光明で熟々と男の顏を見て、『三さん、今度迄は私も何樣にでも爲て都合するからね、お前も其氣になつて、もう博奕ごとは決して爲ない樣にしてお吳れよ。何時でも其でお前も苦勞お爲なら、私も心配してるんだからね、お前又本統に止してお吳れよ。今晩のお金も、お前又其樣事に入用んぢやアないかい。』

『戯言云つちやア不可え。もうお前、其樣事ア爲やア爲ねえ。お前に心配させて、其樣氣樂な博奕なんぞ爲て居られるもんか。大丈夫だ、安心して居て吳んねえ。』

『さう。さうだと、私も本統に嬉しいけれども、又先般の樣な事があると……。』

『大丈夫だよ。お前が今一度爲て見せろてツたツて、乃公はもう眞平だ。今夜の事ア、お前本統に善いだらうな。』

『昨日の二兩は、お前如何お爲だえ。』と、女は稍不平らしう、『それに又今夜五兩と云つては、昨日の今夜だもの、私だツて途方に吳れるだらうぢやアないかね。先般の時なんざ、私はお前にも話せない樣な、實は可怖思をして、漸と間に合はせたんだよ。此とは私を可哀想だとお思ひなら、本統に眞面目になつてお吳れよ。え、三さん、後生だから。』

『大丈夫だと云つたんぢやア、お前にやア分らねえんだな。猜疑のも大概にするが可いぜ。』と、男は漸う焦躁出し、『お前が其樣に云やア、仕方がねえ、乃公も其氣にならうよ。今體お前に無理を云へた義理ぢやアねえや、なア。仕方が無え、お前にもう逢はれねえと、乃公も諦めると爲ようよ。何時また逢へるか知れねえが、お前も先ア達者で居て吳んねえ。あばよ。』

男は未練氣もなく突然女の手を振拂ひ、急歩に既や二三間離れた。

『何だねえ、三さん。』と、女は男に追縋つて腕に釣下り、聲は泣出しさうになつて、『何を其樣に腹をお立ちなんだよ。』

『何でも可いや。放しねえ。え丶、放さねえか。』

『いやだよ。え丶、誰が離すものか。』と、女は夢心。『お前は私が否になつたから、其で其樣事を云つて、逃げようともつてるんだね。い丶え、さうだよ。さうに違ひないよ。さうだ、さうだ、さうだ。私は今迄欺されてたんだ。あ丶、口惜い。』

『大きな聲を爲るのは止しねえ、外聞ねえや。』

『外聞なくツたツて可いよ、外聞ない位……。』と、女は猶も男の腕を抱込み、泣聲になつて、『お前に見棄てられりやア、私や生きては居ないから、さア何樣にでも好い樣にしてお吳れ。さア、さア、三さん、私、思切つて死なれる樣に、さア何樣にでも、お前の勝手に、私や打たれたツて……。打つなりと、如何なりと、さア三さん。寧そ殺しといてから、私を殺しといてから、何處へなりとお前の好きな處へお行でよ。さアお殺しよ。殺してお吳れよ。殺してお吳れ、殺してお吳れ。』

女の聲は益す高くなる。男は他人に聞かれはせぬかと、きよろ〱四邊を見廻しながら小聲に女を制するけれども、女は少しも聞入れず、猶高聲に泣きもし饒舌りもするので、男は終に持餘して、少時は途方に暮れた。

（二）

赤柳條の唐棧の羽織に、紺に鼠の千筋のガス、雙子の袷、節博多の帶を貝の口に結んで、八幡黑の駒下駄を突掛けの足の運びは、いづれは曲輪者の妓夫とも見える風俗である。年は四十三四にもならうか、髪は水々と油を塗り、左額よ

り領まで一筋亂さず分け、香水の匂は惡く鼻を衝すばかりである。赭顔をてか／＼と光らせて、鼻の尖は酒毒に紫色になり、眼は細いながらも一曲ありさうにて、口は常に澁面づくつて居る。

件の男は辨天橋の傍を人待顔に、彼方此方を彷徨いて居るので、斷えず廓の方を見返りながら、足音を聞けば其かと透して見、來る者も來る者も違ふので、時々は鼓舌しつゝ尙ほ去りもせずに居る。

『今晩なんざ、また箆棒と冴返つて寒い晩だ。はアッくしよ。風でも感いちやア、串戲ぢやアねえ。』と、男は藍鼠縮緬の領卷を脫し、頭巾代りにした其端を領に押込み／＼、『剛氣と待たせやがるぢやねえか。直きに行くから、一歩先に行つて呉れろと云やアがツて、もう彼此一時間にもならア。何を爲て居やがるんだらう、箆棒と永えぢやねえかなア。先刻打つたのが十二時だ。魔誤々々してりやア直きに一時だ。本統に串戲ぢやねえや。』

男は尙ほ少時彷徨いて居ると、風に送られて遙かに聞えるは新甲子の時計の一時である。

『串戲ぢやアねえ、ありやアもう一時だ。今迄來ねえてえな。』と、男は又廓の方を透して、『もう先に行つてるんぢやアねえかなア。辨天邊で新辨天の方から、先に行つたのかも知れねえ。一歩後から直ぐ行くと云つたんだから、如何しても此樣に遲くなる事は無え筈だ。もう先に行つてるかも知れねえ。それに違えねえ。屹度先に行つてるに違えねえ。縱んば行つて居ねえにしても、如何したツて彼家に來て、乃公に會はねえぢやアならねえんだから、何ちにした處で、彼家に來ねえ譯にやア行かねえんだ。串戲ぢやアねえ、何の爲に此樣處に立つてたんだか、餘り馬鹿々々しくツて話にもならねえ。おゝ、寒。いやに寒いなア。風でも感いちや堪らねえ。早く行つて溫まんねえぢやア……。』

男は辨天橋の袂を河岸に沿うて艦材堀の方へ急いだ。艦材堀の前の橋を西に渡つて、右に曲つて、又右に前の橋と列んだ橋を東に渡り、行く事半町ならずして、田舍料理明保野とした行燈の出た小料理店がある。

『いやに薄暗え行燈を出しときやがるぢやアねえか。』と、男は呟きながら、ずツと門口を入つた。

二三人の下足を直して居た女中は、足音に顏を上げて、『おや、辨さん、お出でなさい。大層お深更ぢやアありませんかねえ。』

『此で深更ツて如何するものか。此からが乃公なんぞの世界になるんだらうぢやアねえか。はゝはゝ。』

『それは左樣ですけれども。』と、女中は莞爾して、『今夜はお一人。』

『なに、さう云ふ譯でもねえんだが。』と、辨三も莞爾して、『乃公を尋ねて來て居やアしねえか。』

『いゝえ。何人も。』

『はてな。』と、辨三は片足上りながら、『何を爲て居やがるんだらうなア。串戲ぢやアねえ。』

『何人がお出でなさるんですよ。』

『なに、誰でも可いんだがね。裏二階の例の座敷は明いてるかい。彼室が塞がつてりやア、他室でも可いんだが。え、如何だい、おい、賴むぜ。』

『丁度今明いた所ですから。』と、女は先に立つて案内する。

辨三は女の後に隨ひながら、『如何しやがツたらう。乃公よりかも先に來て居ねえぢやならねえんだのに。もう一時過ぎてらア、ねえお花どん。』

『えゝ、さうですよ。もう一時、十五分も過つてませうよ。何人が入らツしやるんですよ、え

辨さん。』
『まア誰だッて可いや。』
『よかアありませんよ。』と、お花は階段を上つて、『危う御座んすよ。』
『大丈夫だ。此家の階段から、戸迷ひしたッて墜落ちる事ちやアねえ。』と、辨三も漸と二階に上つた。
二階の客室は僅かに二室のみである。階段の取付の室には客があると見えて、男の影法師が障子に二箇映つて居る。
女中のお花は奥の一室の障子を開けて、『妙です事ねえ。辨さんがお出でなさると、何時でも此度此室が明いてるんですもの。此座敷は餘程辨さんと緣が深いんですよ。』
『さうかも知れねえ。はゝはゝゝ。』と、辨三は笑ひながら室内に入り、有合せた火鉢に倚ほ火の氣があるので、直ぐに跨火を爲て、『えゝ、寒い。風を感いたかも知れねえ。いやに悪寒しやがらア。何物ででも可いから、熱燗酒を一本、兎も角も前に持つて來て呉んねえ。下物なんか後になつたッて可いから、一本熱燗して、頼むぜ。』
『えゝ、能御座んす。今夜は其樣に寒かないんだのにねえ。如何爲すつたんですよ。』
『如何したも斯うしたもありやア爲ねえ。お前、二時間も辨天橋の處に突立つてたらうぢやアねえか。』
『おやまア、二時間たア大變だ事ね。ほゝほゝほゝ。』と、お花は笑ひながら、『それも仕方ありませんやね、彼人を待つてなすつたんですもの。』
『違えねえ。冷熱の演鬪ぢやアねえが、野郎の寒戰も難有くねえ奴さ。はゝはゝゝ。其樣事は如何でも可いや、熱燗を一本、大急ぎで、頼むぜ。』
『今持つて參りますよ。參りますけれどもね、後からお出でなさる方を教へて下さらないぢや、いや。』
『くだらねえ事を云つてるぢやアねえか。』
『くだらなかアありませんよ。私が當てゝ見ませうかね、矢張お勝さんでせう。ねえ。ほゝほゝゝ。』
『誰だッて可いぢやアねえか。お前も餘程苦勞性だぜ。』
『苦勞性にもなりまさアね。本統に見れば見る程惚々するんですもの。辨さんが夢中にお爲んなさるも無理はありませんよ。私も彼容色の半分だッて可いから、美い女に生れて來たかつたわ。』
『はゝはゝゝ。旨く云つてるぜ。お花どん位な容色を持つてて、其樣事を云つちやア、女冥利に盡きようぜ。』
『おほほゝゝゝ。辨さん大概にお爲なさいよ。何が女冥利に盡きるんだか。お勝さんを彼樣に迷はしちまつて、能く男冥利に盡きなくッてね。ほゝほゝゝ。』
隣の座敷では突然聲を鼓らした。『はアい。』とばかり、お花は座を立つた。
『本統に早く頼むぜ、お銚子だけでも可いんだから。』
お花は首肯いて出て行き、隣室の用を聞いて、何やら小聲で笑ひながら、急いで階段を下りて行つた。
辨三はお勝が來るのを心待に待ちながら、彼が來たならばと、樂しき方の妄想ばかりを畫き、覺えず微笑まれもして、今か〳〵と耳を澄して居る。
『畜生ッ、旨く遣つてやがるぢやアねえか。』と、突然隣室に發つた男の聲は、笑を帶びて居るかの樣にも聞えた。
辨三は覺えず耳を聳てた。
『本統によ。』と、今一人の男の聲で、『さうよ

なア、三の野郎めッ、兩手に花と洒落て居やがらア。なア熊、手前だッて乃公だッて、此だッて情婦の一人や半分位、出來た事もありやア、また此から出來ねえとも限らねえや、なア。だがな、彼奴の様な譯にやア行かねえ。なアに三の野郎だッて、男が美いッたッて、男振で女が思付きやア爲めえし、其處へ行つちやア乃公だッて、なア熊、餘り敗は取らねえ積りだ。おい、さうぢやアねえか。箆棒めえ、世界の色男は、乃公一人だと云はねえばかりに爲て居やがるから、乃公ア癪に障つて爲様がねえんだ。」

「はゝはゝゝ。八、手前が何様に力身だッて、女に掛けちやア、三の野郎にや及はねえや。』

『及はねえと。箆棒めッ、彼奴ばかりが男ぢやねえや。』

『さうよ。手前も男だ。男は男だが、小綺麗なのと、小汚ねえんぢや、まる〳〵十割方手前の方で分を出さねえぢやア、女の方で相手に爲ねえから治まらねえや。手前なんざ、彼様に爲れてやがッて、其でせえ河岸の女を斷念れねえんぢやアねえか。三の野郎を見や。河岸の東雲は彼通り血道を揚げてやがるしよ。其にお勝の阿魔も夢中になつて騒いでやがらア。手前なんざア、鯱鉾立を爲たッて、彼半分の眞似も出來めえ。」

「へん、餘り安く見縊るない。手前の様な友達甲斐の無え奴ア、相手にならねえんだ。」

「はゝはゝゝ。手前の相手にやア眞平だが、お勝の様な女を、一晩でも抱寢をして、なア八、何とか甘ッ垂れられて見てえや、なア。畜生ッ。」

「此畜生ッ。いやに三公の肩を持ちやアがッて、其癖内訌してやがッて、箆棒で、意氣地のねえ、爲様のねえ野郎だ。其お勝てえなア、萬字樓の新造のお勝か。あの色の白え、眼に權がある。」

『うむ。其萬字樓のお勝よ。』

萬字樓のお勝と聞いて、辨三は顔色變り、眼を瞬り、火鉢を離れ、唐紙に身を寄せ、一層聞耳を立てた。

『彼畜生、旨く遣つてやがらア。』

「それ見た事か。手前だッて餘り羨ましくねえ事もあるめえ。まア東雲は其様でもねえが、萬字樓のお勝ばかりは、如何かして見てえや、なア。』

『見てえ、見てえ、乃公も餘程如何かして見てえや。三の野郎めッ、餘り有卦に入り過ぎてやがらア。それで、何か、お勝と東雲と二人で身揚を爲て、三の野郎を買つてやがるんだな。」

「さうよ。彼奴ア二人を旨く扱つてやがるんだ。お勝から卷上げちやア、東雲の處に行きよ、東雲から取つたんぢやア、お勝と媾曳爲て居やアがるんだ。其が毎晩と來てるから堪らねえや、二女とも工面十面の苦みをしてると云ふ事たぜ。』

『ふう、さうか。あゝ、一晩でも其様目に會つて見てえなア。』

「やい〳〵〳〵。確乎爲ねえか。箆棒めッ、錢の出た酒でい。其様に幾杯も溢されて、お溜小法師があるもんけい。』

『いゝや、其様に怒らねえでも。其から如何しやがッたい。いゝッてこと、今夜の酒は乃公が一人で持つて呉れべい。』

『はゝはゝゝ。話を聞いて惚くなるなア、手前ばかりだ。』

「何でも可いから、其から如何したい。』

「其からよ、お勝だッて堪らねえや、なア。多寡が新造の身分ぢやアねえか。其處には其、捨てる神あれば助ける神だ。お勝に惚くなつて、せつせと注込んでる野郎があるッてえ噂だ。』

『へえ。旦那取でも爲てやがるんだな。』

『なアに、旦那取ぢやアねえッてことよ。何でも矢張萬年町の内に居る野郎だてえんだ。書記だとか、番頭だとか店番だとか云ふんだがな、其處は乃公も未だ委しくは聞かねえんだ。』
『畜生ッ、旨く遣つてやがるぢやアねえか。』
『おい、悉皆忘れてたぜ。今晩吉ん處で、それ旦那衆も二枚ばかし入つて、面白え勝負があるんだとか、手前先刻云つてたぢやねえか。そろそろ行つて見べえか。』
『違え無え、悉皆忘れて居たい。行くべい行くべい。』
辨三は隣室の話説は我上に關り、而も面白からぬお勝が噂は、何ほ半信半疑ながら、顏色蒼くなる迄激して、お勝が來たなら先づ第一に其から質して、と、お花が持つて來た銚子を、旨くもなくぐい飲にして、今か〳〵と待つて居る。
隣室の二人の客が歸つて了ふと、流石に夜更けての木場の夜、長州の廓内に歸り後れた雨が、音も淋しく、ぽつり〳〵屋根に音のするのは、宵からの彼雲が風にも吹拂はれず、終に雨になつたのである。

（三）

『何だなア、乃公の心持を知らねえか何ぞの樣に、今の樣に怒る奴があるもんか。串戲ぢやアねえや、お前の爲にやア、乃公は何程壽命を縮めさせられてるか知れねえや。』と、三吉は漸くお勝を和め得て、下らねえ事から案んでもねえ事にならうとした。『ぢやア、此處で分手れるとして、乃公は一廻まはつて、先に彼處に行つて待つてるぜ。』
『まアお待ちよ。』と、お勝は三吉の袖を尚ほ放さず、『もう其様處なんか廻らないで、直ぐに彼處に行つて待つてゝお呉れ。』
『直ぐにだア。串戲ぢやねえ。お前、彼樣老婆さんを對手にして、三十分と待つてられるものかな。お前の來る前にやア、屹度行つて待つてるからな、お前も早く行つて早く來て呉んねえよ。大丈夫だてえのに、矢張疑つてるんだな。』
『お前が背岸を離るのなら、私も一處に跟いてくから、さう思つてお居で。』
『矢張疑つてるんだな。其様事を云つたり、此様事を爲たりして時間を潰してた日にやア、お前今夜の間には合はねえぜ。ぢやア、斯うしべい。乃公がお前と一處にお倉さんの家に行くとしべい。』
『其様事か、お前。』と、お勝は三吉の袖を放した。
『それ見ねえ。乃公が一處に行かうと云やア、不可えと云ふし、此様事をして時間を潰してちやア、お前。』と、三吉は又焦躁かゝつた。
『ぢやア、お前の勝手にお爲。屹度彼處に行つてお居でよ。餘り方々素見さないでね。浮氣なんか爲ようもんなら……。』と、お勝は少し笑を含んで、『ぢやア、行つて來るよ。』
『うむ。行つて來て呉んねえ。大概、大概ぢやアねえ、本統に大丈夫だらうなア。』
『あゝ、何とか[illegible]爲て來るからね。』
『三時にやア如何したッて入用んだぜ。あれ見ねえ、もう甲子樓の時計が一時半過ぎてらア。三時まで後一時と三十分しきやねえぜ。大丈夫かい、え、おい。』
『私に委せて置くさ。』
『ぢやア、お賴ん申しやす。』
『ふん。能くお賴みなさる事で御座ますよ。』
『惚れられた因果か、畜生。』
『ほゝほゝゝ。何處まで人を馬鹿にしてるんだらうねえ。』
『馬鹿になる程惚れたが無理か……。』と、三吉は小唄をうたひながら既に二三間離れたが、又思出した樣に振返つて、『おい、三時までだぜ。』

『あゝ大丈夫だよ。』

「惚れた心に聞いて見るツか……。」

お勝は三吉の後影を見送つて、覺えず深く溜息を吐きながら、小唄の聲の聞えなくなる迄立去り得なかつた。

* * * *

一人は絆天着の遊人、一人は曲輪者とも見ゆる唐棧打扮、押合ふほど肩と肩とを寄せて、小聲に話しながら食料町から出て來た。

『ねえ久さん、さう云ふ譯なんだ。乃公と三公と二人だと、鳥渡何處へ連れてくたツて、風俗を變へさせる迄の始末も出來ねえんだ。だから、お前ん家を頼んで、悉皆風俗を變へさせて、今夜の中に曲輪を出してえと云ふんだ。少しほとぼりの消める迄伏せといて、其から旨く嵌込みてえと思つてるんだ。お前、一本や一本半にゃア踏める玉だぜ。三人山分にすりやア、お前だツて餘り損は行かねえ話だ、なア。一肌脫いで呉んねえな、え、久さん。』

久は頻りに首肯き、『よろしい、一肌脫いで斷行けると爲よう。今夜なんだね。』

『さうさ。三時半頃にやア三公が引張り出す筈だから、乃公とお前はお前ん家に待つてゝ、今夜中に何とか爲てえと思つてるんだ。』

「所で、何だね、何にしたツて、先立つ奴が五兩と三兩は入用うと云ふもんだ。」

「其にも三公が飮込んでるんだ。だから、お前と乃公たア詰り手を貸しやア可いんだ。それでお前、三十と五十は懷中に入らうてんだから、お前だツて餘り憎くねえ仕事ぢやアねえか、なア。」

「いや、其奴は難有え。簪なんぞも何とか爲なけりやなるめえ。いや、其奴はまア私の方で、ね、そら、乃公の嚊の妹よ、彼奴の簪も明いてるから、何とでも誤魔化せようと云ふもんだ。ねえ、兼さん。」

「それよ、其奴が肝腎だから、久さんでなくツちやアツて、三公も云やアがるし、乃公も亦お前にや世話になつてる事もあるしよ、是非お前に儲けさせてえと思つてね。」

二人が牒し合せの話に實が入り、覺えず聲が高くなつた時、前方から人の來る足音が聞えた。

久七は叱と兼八の語を遮り、『如何だね。鳥渡何樓かへごろ寢てえなア。』

「さうよなア。」と、兼八は近付いた人影を電氣燈の光に透して見て、「誰かと思やア、お勝さんぢやアねえか。」

「何人。」と、お勝は歩を止めて、「おや、兼さん。」

「おや兼さんぢやアねえや。おめえ今夜は明番か。」

「さうでもないんだがね、鳥渡用があるもんだから……。」

「何だか知れねえぜ。餘程怪しいや。はゝはゝ。」

「其樣んぢやないよ。」

「何だか知れたもんぢやアねえ。うむ、さうだ。お前三公に逢つたか。お前に是非逢ひてえ用があるツて、先刻逢つた時云つてたぜ。」

「さう。今鳥渡其處で……。」

「逢つたのか。其ぢやア可いや。」

「少し急ぎなんだから、御免なさいよ。」と、お勝は兼八に會釋し大門の方へ急いで行く。

久七と兼八とは小聲に話しもし、笑ひもしながら、二丁目の方に曲つて了つた。

* * * *

「待つてゝ呉れゝば可いが、餘り遲くなつたから、怒つて歸つたかも知れないよ。さうだと、今夜の間には合はないし。」と、お勝は明倖野の行燈を見掛けて、橋を渡りながら、「兼さんが居て呉れなからうものなら、如何する事も出來な

いんだし。」と、一寸歩を緩めた。
空は全く雨雲に閉ぢられて了つて、暗さは暗し、雨さへぽつり／＼降出した。
「まア困つた事ねえ。とうと降出しちまつたよ。」と、お勝は呟きながら、半町ばかりの間を駈出して、漸と町佐野の門に着いた。
出合頭に町佐野から二人の客が帰る所で、一人はお勝を見るより、『よう／＼、噂をすりやア影てえんだが、影どころぢやアねえ、御本尊様のお勝さんが来たのも不思議だ。はゝはゝゝ。如何だい、お勝さん。』
「おやッ。」と、お勝は吃驚しながら、『おや、熊さんぢやアないかね。」
「はい／＼、私や其熊さんだがね、お前さんは其お勝さんなんで。」
『ほゝほゝゝ。熊さん、何を云つてるんだよ。』
「何も云つてやア爲ねえんだが。はゝはゝゝは。お勝さん、餘り腕が凄過ぎらアね、情夫の掛持を取るなんざア、濟崎始つて以來、お前一人だッて評判だぜ。」
『何を云つてるんだよ。」と、お勝はぎよッとして「熊さん、串戯にも其様事を云つてお呉んなさんな。餘り他聞が悪いぢやアないかね。』
「はゝはゝゝ。他聞より乃公に聞かせて遣りてえや、なア。畜生ッ。」
「大概にしてお呉れ。」と、お勝は勃然として門を入つた。
「おや、お入でなさいまし。」と、女中のお花は莞爾して、「あの先刻から……。」
お勝は目顔で押へて、「お神さんに鳥渡用があるんですから……。」と、態と大聲く云ふ。
「さうですか。どうか此方へ。」と、お花は繕つた様な繕らない様な挨拶をする。
お勝が前にお花が後から、足早に奥に入つて了つた。
『はゝはゝゝ。彼畜生、旨く遣つてやがるぢやアねえか。』
「堪んねえや。熊、河岸の閻魔の處へでもぶち上るべい。」
「畜生、覺えてやアがれよッ。』

（四）

「如何したんだよ、辨さん。」と、お勝は辨三の顔を見て、「可笑いぢやないかねえ、お前さん、私とは口を利くのも厭なの。」
辨三は寒さ凌ぎに、ぐい飲の酔が早くも廻つて、赭顔が一層赤くなり、眼には一種の悪視を含ち、平生活商つくつた口を何ほへの字形にし、引締めて云へば、固り切つて居る。
「遅刻くなつたのは、私が悪いけれども、其様に怒らなくツたつて可いぢやアないかね。鳥渡の積りだつたのが、お常さんに止められたもんだから、つい遅刻くなつたんぢやアないかね。遅刻くなつたのは私が悪いから、怒られたツて爲様が無いけれども、何も其様に、お前さんでもないよ、お怒りのは。」
「さうよなア。」と、辨三は冷たく、「怒るなんて、其様氣の強え事ア、乃公の體に出来ねえかも知れねえ。併し、何時でも欺かれてばかりは居ねえ積りだ。人を馬鹿にするのも大概にしねえ、ようッ。」
「お前さん、如何したんだよ。」と、お勝は稍辨三の意を察し得たけれども、何ほ知らぬ振を爲し、「お前さんを馬鹿にするの何のツて、何の事だか、餘り可笑いぢやアないかね。」
「可笑きやア、勝手に笑ひねえ。馬鹿にされたから、馬鹿にされたと云ふんだ。」
「何だねえ、まア。私が遅刻くなつたのが、お前さんを馬鹿に爲たとお云ひのなら、先刻から私が悪かつたツて、此様に謝罪つてるぢやアないかね。」

「謝罪つてるツて。お前、本氣で其樣事を云つてるんだな。」
「謝罪つてるのに、本氣も本氣でないもあるもんかね。」
「それに違えねえんだな。ぢやア、まア一杯飲みねえ。」と、辨三はお勝に猪口を與へ、酌を爲ながら兇と顏を見た。其眼には些の油斷もない。
「ほゝほゝ。辨さん、機嫌を直してお呉れかい。あゝ、私は漸と此で安心したよ。」と、お勝は猪口を乾して靦然しながら、「勘忍してお呉れでなきやア、私や本統に何樣しようかと思つたよ。はい。」と、猪口を差す。
「もう一杯重ねねえ。」と、辨三は尙ほ莞爾ともせぬ。
「飲めとお云ひなら、飲む事は飲むがね。」と、お勝は態と嬌態調子になり、「如何其樣に今夜は難かしく爲てお居でだよ。些とも平生の樣ぢやアないわ。」と、少し膝を進め、眼に媚を持つて、堪へざるものの如く辨三を見て居る。
「はゝはゝゝ。」と、辨三は態とらしく笑つて、「お前の其術にやア、何時も乘られて居たんだが、今夜は其ぢやア行かねえ。」
「何ですツて。其術だの、乘られるだの、行かねえのツて、何の事だか、私には些とも解らないよ。」
「大概に遠恍けとくが可いや。」
「何ですツて。」
「お前、今何と云つた。眞實乃公に謝罪ると云つたなア、よもや忘れやア爲めえた。」
「だから、先刻から謝罪つてるぢやアないかね。」
「本氣で謝罪る積りなら、何故本統の事を云はねえんだ。」
「本統の事ツて。」と、お勝は遠恍けて、「何て云や可いの。」
「お前の心に聞いて見ねえ。」
「お倉さん家で遲刻くなつたんだから、其より他に謝罪り樣はないぢやアないかね。」
「ふん、飛んでもねえお倉さんだ。」
「えツ、何ですツて。」
「お倉さんの家にやア、三の野郎は居めえツて事よ。」
「三の野郎ツ。」と、お勝は態と呆れながらも、眼には少し權が見えたが、忽ち笑出して、「おほほゝゝ。何だらうねえ、其三の野郎ツてお云ひのは。」
「さうよなア。」と、辨三は迸出る樣な憎味を持ち、「お前が知らなきやア、云つて聞かせて遣らうよ。三の野郎てえなア、萬字樓のお勝と云ふ新造と、河岸の東雲と云ふ遊女と、二人で血道を上げてる破落戸の三吉よ。」
「えツ。」と、お勝は顏色を變へて、「河岸の東雲ツ。」と、獨語の樣に云つた。
「どうだい、え。お前だツて驚かずにやア居られめえ。おい、お勝どん、お前も東雲の事は知らなからうよ、なア。東雲もお前の事は知らねえとか云ふ事た。お前も東雲も他に情婦のある事ア知らねえで、巧く三の野郎に翫弄にされてるんだぜ。」と、辨三は嘲弄る樣に云ひ來つたが、俄に語調を變へて、「それもよ、あの野郎に馬鹿にされて、入揚げて、翫弄まれてるお前や東雲は自業自得と云ふもんだ。それは可いや、それは當然だ。だが、其お前の財布になつて、白癡にされたな、誰だと思ふ。おい、お勝どん、お前も隨分思切つて、乃公を能くも馬鹿にして呉れたぜ。え、おい、四十面下げて、お前に此樣に馬鹿にされようたア思はなかつたんだぜ。能く考えて見ねえ、お前は乃公を其樣にしちやア濟まねえ譯がある筈だぜ。お前、よもや忘れは爲めえな。」
お勝は此家に來て辨三の顏を見た時、其樣子

の平生と異つて居るのと、門口で出會つた男の讒言とを思合せて、辨三が或ひは三吉と自分との情交を知つたのではあるまいかと思つた。けれども、此一事を云出めて、辨三の疑念を打消すのは、何でもない事と多寡を括つて居た。案に違はず、辨三の不機嫌は三吉との情交を聞嗅つての嫉妬と知れたから、何處迄も知らぬ覺えぬで押通さうと思つた處へ、意外にも三吉には自分の他に東雲と云ふ情婦のある事を聞き得て、若しや自分の外に其樣女がと思つて居た疑念に投じたから、扠てはと口惜さの念が一時に満じて、其東雲を何ほも確めたいと、覺えず其名を口にしたのである。けれども、流石に辨三に憚つて、其を質問さうとの勇氣は出なかつたが、三吉の自分に對する樣子が、此頃に到つて往々異つて見えぬでもなかつたが、今其東雲故だと知つて見ると、胸がわく〳〵する程騒立つて、辨三が語の過半は殆んど感ぜぬほどであつた。けれども、お前は乃公を其樣にしちやア濟まねえ譯だぜと云はれた、辨三の一語は、胸に必至と徹へて、東雲の事も何も一時に消えて、慄然として辨三を仰視ぬ譯には行かなかつた。

　お勝は屹と顔を上げて、「私が如何して、辨さん、お前さんを其樣に‥‥。三さんだなんて、そりや誰か私を憎んでる人が、お前さんに有りもしない事を云つて、お前さんを怒らせて、私を困らせようと思つてるんですよ。私は、全體、串戯ぢやアないよ。餘り人を馬鹿に爲てるぢやアないかねえ。お前さんに相続だと思はれちやア、私實に埋らないよ。何たらうねえ、まア彼樣破落戸なんぞを。」

「まア可いや。お前はお前の好きな事を云つてるが可いや。乃公はもう眞平御免だ。考えても見ねえ。人を、何のかい、情夫の處え運ぶ金をよ。串戯ぢやねえ、大概自擬にしとくが可いぜ。今夜だツて、さうよ。今夜中に五兩入用から、是非都合して貰ひてえツて、お前が彼樣に頼むから、今夜此家でお前に與りてえと思つて、」と、辨三は脇の財布の中から兌換券を六七枚お勝の目前に突付け、『これを見ねえ。約束の他に小遣もと思つて、これ此通り都合は爲て來たんだぜ。三の野郎の事を聞かなからうものなら、此券も亦野郎の處え運ばれて、馬鹿見た上に又馬鹿を見せられる所よ。』と、財布を懐中して、「お前も見掛に似合はねえ、餘り腕が凄過ぎようぜ。』

　お勝は東雲の事の半信半疑と、辨三が感情を直させようと、二つに思を惱して居た處に、今又兌換券を見せられて、今夜中に五兩の金がなければと、三吉が申渡し樣ふで、其が無ければ、此、贈目になるかも知れぬと云つた、其語が今耳に聞かれる樣で、欲しいのは云ふ迄もない、手を出して掴んで、遣間したい程にも思ふのである。

　けれども、考へれば考へる程、辨三の機嫌を直させるより外に手段がないと考へた。金を首尾能く貰ひ受けて、情夫の急を救ふのも、辨三次第である。若しやと思ふ東雲の事の實否を正すのも、辨三の口占一つにあるのである。

　とは思ふけれども、誰から聞いて三吉の一條を疑つて居るのであるか、彼が疑念の淺深を測らねば、何と口の開き樣もない。其便を得ない中はと、お勝は何も云はないで、唯垂頭いて居るより外はなかつた。

「おい、お勝どん。おい、おい。」と、辨三は俯頭いて居るお勝に、無理に顔を上げさせて見ると、眼に一杯涙を持つて居た。

「はゝゝはゝ。」と、辨三は覺えず笑つたが、お勝の涙を流石に憎と見ないでもない。けれども、三吉の事が果して實情であるか無いか、其涙が三吉の事を知られて、自分に辱しめられたからであるか、事實でもない三吉との浮名が口惜

いからであるか、元來お勝に惚れて居る辨三の心には、惜いと思ふ傍から、彼を憐む念も萌して、何れにも結構し得られるので、果して三吉の事が實情であるか、ならば其が虚説であつて貰ひたくも思つて居るのである。

『お前さんに左樣思はれりやア、私ももう爲方がありません。』と、お勝は手巾を顔に當てゝ、悄然として口を閉ぢた。

『へん、乃公が無理に思ふんぢやアねえぜ。お前が思はれてえから、此樣事にもなつたんだ。串戯ぢやアねえや、此迄白痴にされてた、乃公の氣にもなつて見るが可いや、なア。』

『お前さんにさう思はれてちやア、私ももうねえ……。何とでも思ひなさるが可いんですよ。』

『なに、何とでも思へだツて。』と、辨三の聲は稍鋭くなつて、『乃公が何と思つたツて可いたア、お勝どん、お前も急に好い度胸に成つたぢやアねえか。先般の事を考えて見ねえ、乃公の口が鳥渡でも滑らうもんなら、お前は斷うしちやア居られめえぜ。萬字樓を首になるばかりぢやアねえや、此土地を構はれた上に、惡く行きやア三月や半年臭え飯も食はねえぢやアならねえんだ。お前、それを忘れやしめえな。』

お勝は顔を上げて呪と辨三の顔を睨んで、又垂頭いた。

『お前が忘れたと云やア、又更めて云つて聞かせて遣らうさ。さうだ、去年の暮の廿七日の朝の事た。高圓さんの初會のお客の歸後に、お前が居ようたア知らねえから、ふいと乃公が入つて行くと、お前が周章てゝ帶の間に插んだなア、袱紗包の紙入だから、乃公も實ア吃驚して……。』

『辨さん。』と、お勝は屹と顔を上げて、『あれは私が惡かつたのさ。自分でも惡いと思つたから、お前さんに打明けて、其時相談したんぢやアないかね。其からお前さんと此樣譯にはなつたのだし、何も其樣にお前さんの樣に、何かと云ふと擔出して、何時までも恩に被せないだツて、私は忘れは爲やアしないよ。三公とか野郎とか、誰が云つたか知らないけれど、人の噂を證に取つて、疑ふにも程があるよ。此迄の樣でもない、餘りお前さんも薄情いぢやアないかね。私に引目があるんだから、遠慮して云はないけれども、それぢやア辨さん、お前さんも餘り手前勝手ぢやアないかねえ。』

『何だと、手前勝手だと。』と、辨三は膝を立直して、『さア、其手前勝手の譯が聞きてえ。』

『譯も何もないぢやアないかね。私を自由に爲て居ながら、人の作略に乘せられて、無理な事ばツかしお云ひのは、私は手前勝手と思ふんですのさ。私が厭になつたから、愛想が盡きたとか云ふのなら、何故打明けて云つてお吳れでないんだ。それが私は口惜くツて……。』と、お勝は口惜さうに垂頭いて、手巾で顔を押へながら身を顫はす。

辨三は早速の返辭を爲し得ないで、お勝を見詰めて居るばかりである。

『ねえ、辨さん。』と、お勝は一人膝を進めて、『私はお前さんに愛想を盡かされて、無根い無理を云はれて難癖をつけられて、其で突出されるのは否だから、さア何とでも、お前さんの勝手に爲てお吳んなさい。』と、お勝は辨三に體を突付けた。

『勝手に爲ろてツたツて……。』と、辨三は大いに痿んで二の足を踏んで居る。

『あゝ、口惜いツ。』と、お勝は泣聲になつて、辨三の膝に緊と縋付いた。

辨三は茫たり恍たり、少時は何と爲ようとの分別も出なかつた。

折から雨は屋根板を敲立てゝ、承霤を傳ふ雨水は、谷川の流るゝ音と紛ふばかりである。

（五）

道幅は僅か二間に足らぬ洲崎の曲輪の河岸通に、未だ素見客の絶え〴〵ながらも散見く二時前、降るかと見れば止み〳〵した雨が、俄然大粒になつたかと思ふと、車軸を流すばかりの大降になつた。

俄の大雨に逃場を失つて、思はぬ樓に登る者もあれば、其もならぬは軒下の雨宿りに、吸付烟草の瘦我慢ながら、大口を敲いて居る者もある。

立花樓と稱ふ小格子の店先の、隣家との界目に、格子の内と外ながら、口と耳とを取替して居る男女があつた。俄の雨宿りは立花屋の軒下にも二人の男が逃込んで、其一人は内の女と話して居た男に突當つた。

『何を爲やがるんでい。胴盲めッ。氣を付けやがれい。』と、女と話して居た男は怒鳴りながら見返つた。

『何だ、胴盲だ。生意氣な事を拔かしやがりやア、打ちのめして遣るから、さう思やアがれ。』

『何だと。大きな事を拔かしやがらア。手前なんぞに打ちのめされて……。』と、男が格子を離れようとすると、女は押へて居た袢天の袖を尙ほ押へて、『三さん、お止しよ。未だ談話があるんだのに、お止しよ。危いよ。』

『いゝから放しねえ。生意氣な事を拔かしやアがらア。』

『何だ、手前は三公ぢやねえか。』

『手前は、八か。や、熊も一緒か。頰冠を爲て居やがつたから、手前達たア思はなかつた。』

『乃公も三公たア思はなかつたんだ。其樣薄暗え處に居やがるもんだから、顏が見えやア爲ねえや。』

『八さん、一吹お喫んなさいよ。』

『おや、東雲さんか。此奴ア難有え。』

『三公、手前不相變旨く遣つてるぢやアねえか。なア八。』

『さうよなア、熊。うむ、さうだ。おい、三公、手前に話してえ事が……。おい、熊。手前話して遣るが可いや。』

『だツて、東雲さんの前ぢやア、なア八。』

『おや、私の前だと云へない事なの。』

『まアさ、なア八。』

『さうよ、なア。』

折から甲子樓の時計が二時を打つた。

『何でい、ありやもう二時か。』と、三吉は二人に向ひ、『二時を打つちやア爲樣がねえや。一緒に其處まで行きながら、話を聞くと爲ようか。』

『うむ。雨も丁度止んぢまつた。さう爲べいか。』と、三人は軒を離れた。

『三さん、鳥渡、未彼の……。』と、東雲は聲を掛けた。

『解つてらア。もう可いんぢやねえか。』

『可いんだけれどもね……ぢやア、屹度可いね。』

『大丈夫だ。』

三人は立花樓を離れて、食料町の角まで來た。

『おい熊。乃公に話してえ事があると云つたなア、一體何樣事た。』

『あれか。何樣事もありやア爲ねえんだが、手前もツと確りするが可いぜ。』

『確りしろツて、何を確りすりやア可いんだ。』

『何をツて、箆棒めツ、自分の情婦を他の野郎に勝手にされて、知らねえで居る頓癡氣があるもんけい。』

『えツ、何だと。』

『何だとぢやアねえや、なあ八。三の野郎も女に掛けちやア、如此だ。はゝはゝゝ。』

『三公、手前本統に知らねえのか。手前にやア何樣に可愛い女か知らねえが、餘り踏付けに

爲て居やがるぢやアねえか。手前が下見不知の男なら、乃公だッて何とも思やア爲ねえんだ。友達の三公が踏付けにされて居ちやア、乃公だッて其處は友達贔屓だ、默つちやア居られめえぢやアねえか。お勝の阿魔ア、彼婢ア餘程大膽え阿魔だぜ。』
『えッ、お勝の阿魔?!』
『さうよ。乃公は今熊公と二人で、見て來たんだぜ。なア、熊。』
『さうだ〱。彼婢ア本統に大膽え阿魔ぢやねえかなア。手前と云ふものを袖に爲やアがつて、彼畜生、他の野郎と媾曳を爲て居やアがるんだぜ。』
『他の野郎と。八、熊、虚構ぢやアあるめえな。』
『箆棒めッ。手前に虚構を語いたッて、何になりやア爲ねえや。乃公達は今見て來たんだ。』
『其樣事と云つて、乃公を弄ぶんぢやアあるめえな。』
『手前を弄ぶ。はゝはゝゝ。其だから手前はお目出度えんだ。其樣に癡験えから、彼奴等に踏付けにされるんだ。』
『何處に居やアがつたんだ。相手は野郎だな。』
『何を云つてやがるんでい。はゝはゝゝ。女の相手は野郎と定つてらア。』
『手前達の知つてる野郎だな。』
『さうよ。薬研堀の辨三てえ、そら、彼豬面の、いやに面を光らせてやアがる、氣障な野郎よ。相手は彼辨の野郎だ。』
『ふうむ。』と、三吉は深く息を吐いた。
『三公、確り爲ねえか。手前も色男の樣でもねえぜ。彼樣辨の野郎なんぞに、情婦を奪られたと云つちやア、友達一統の面汚しにならア。』
『さうよ。思切ッちまふか、辨の野郎に呉れて遣るか爲ッちまへ。串戯ぢやねえや、本統に確乎しろい。』
『よし。何處に居やアがつたんだ、手前達や見たてえんだな。』
『今居る處か。なによ、手前も知つてるだらう。それ、あの明保野の裏二階よ。熊、未だ居るだらうよなア。』
『未だ居ねえでか。乃公達が出て來る時入つてッたんだから、居るとも〱、今行きやア屹度居やがらア。三公手前行く氣はねえのか。』
『明保野だな。お勝には未だ他に用もあるんだ。八、熊、難有え、能く知らして呉れた。』
『餘り小癪に觸るからよ。』
『三公、手前行かねえのか。』
『行く。屹度行く。兼に鳥渡逢ひてえ事があるんだから……。ぢやア、乃公は此處で別れると爲よう。今夜の禮は明日すらア。なア、八公、熊公。』
三吉は何氣なく二人に別れた。二人は少時三吉を見送つて居た。

（六）

雨あがりではあるけれども、強雨であつた爲に砂利の見るまで洗流して、思の外道を泥濘くは爲なかつた。
空は南から切れた雲が、西から東へ動いて、月は既う入つたらしいが、一點二點それからそれへと數へれば、星も十ばかりは出て居る。
辨三とお勝とは明保野を出て、今しも艦材堀の橋を東へ渡つて居る。
辨三は一方ならず醉うて居る。お勝も亦眼の縁に茜さすほど醉したらしい。
歩形は衛になりながら、踏堪へられないだけに、却つて歩の疾い辨三に、後れまいとお勝も急いで居るけれども、雪駄を預けて明保野で借受けた足駄の歯が前後跛なので、踏歩定まらず、用心すれば用心する程後れ勝である。

『辨さん、待つてお呉れよ。』と、お勝は二間ばかり離れた男を呼掛け、『此樣處に置いてき堀に爲ちやア否よ、辨さん、辨さんと云ふのにねえ。』

『はゝはゝゝ。又かい。』と、辨三は踏止つても何ほ蹣跚きながら、『もう、何時だともつてるんだよう。先刻報つたのがもう二時よ。何時まで此樣とこを彷徨いてたッて、はゝはゝゝ、餘り香しくもなささうだ。用せえ濟ましやア、思ひ置く事更になしか。はゝはゝゝ。飛んだ茶番の重次郎さ。』

『ほゝほゝゝ、お前さんは本統に氣樂だよ。』と、お勝は漸う追付き、『私は未だお前さんに話があるんだよ。二時過ぎてたッて……。』と、些渡考へ、『何時になつたッて可いぢやアないかね。話しながら、もつと緩々お歩きよ。ねえ、辨さん。』

『さうよなア。お前と斯うして歩いてる處を、彼奴に見せて遣りてえけれど、まア其よりか早く歸つて、緩々一人で寢た方が、危ッ氣が無くッて可ささうだ。』と、辨三は又急がうと爲かかる。

『あら、危いぢやアないかね。』と、お勝は辨三の腕を支へて、『お前さんは此樣に醉つて。あれ又、危いと云つてるのにねえ。本統に話があるんだからね、え辨さん。後生だから、もッと緩々歩いてお呉れよ。』

『はゝゝ。お前の話てえのは聞かねえだッて、又先刻の金の話に定つてるんだ。元來お前に與りてえともつて、態々持つて來たんだから、與りてえのは山々だが、先ア二三日試した上で、二つに一つの返辭を爲ようよ。』

『矢張私を疑つてるんだよ。お前さんも男らしくも無いぢやアないかね。あれ程先刻謝罪つて、三さんの事だッて、今の事ぢやアないけれども、それは昔斯々だッて、お前さんには云ひたくなかつた、昔の恥辱まで打明けて、私は彼樣に謝罪りましたよ。昔の事なら勘忍爲ようッて、機嫌を直してお呉れだから、私は實に嬉しくッて、漸と安心して居たのに、又其樣事を云出して、私を何處迄虐めたいのかねえ。お前さんも餘りだよ。』

『そりや不可え。お前が何樣に恨んだッて、今夜は如何しても遣られねえんだ。本鄕に居る叔母さんから賴まれたと云ふんだが、お前に叔母さんがあるてえなア、乃公ア此まで聞いた事もありやアしねえ。お勝どん、さうぢやアねえか。お前が何樣に欲しがつたッて、今夜は如何したッて與れねえから、まアさう思つて居て貰はう ぜ。』

『辨さん、それぢやア、お前さんも餘り酷いぢやアありませんかね。』

『何が酷え。』

『酷いのさ。私は酷いと思ひますね。散々人を嘖めて置いて、謝罪らせまでした上に、今になつて其樣事をお云ひのは、餘り酷からうぢやありませんか。』

『酷きやア酷いに爲とくが可いや。今夜は如何したッて與られねえんだ。』

『如何してもですッて。』

『さうよ。』

辨三は云ひ捨てゝ徃來狹しと蹣跚きながら先に歩く。お勝は其處に立縮みになつて、われを覺えず考へて居る。

お勝は三吉に約束の五圓の金を、無理にも辨三から取得たいと思つて居るのである。明保野で三吉との情交を發かれ、東雲の事を聞いた時は、口惜くもあれば腹も立ち、何となつても構はぬ氣になり、金の事も忘れて了つて、情夫が其樣心であるなら、何も此程心配までして、盡す事はないのである、直樣此處を飛出して、三吉に會つた上で、東雲の事を問質してと、一途

に思ひ詰めても見たけれども、今夜入用との金の事、辨三に見られた先微の客の紙入の事なぞを、云はれもし考へても見ると、さう無分別に此處を斷出しても歸られぬ。辨三を怒らせれば、其身の破滅は見えて居る。約束の金の都合が出來ねば、可愛い男にも今夜が別れとなるのである。それを思ひ之を思ひ、辨三に腹も立たせず、三吉にも別れぬやう、東雲の事も聞定めたく、いよ／＼堪らぬながら、辨三に詫言して、漸と其機嫌は直させた。けれども、三吉に就いての疑念を繰返しては、厭味を混ぜた辨三の繰言が、全く三吉の事を知らぬでもないらしければ、實はと其を昔にして、今は全く關係なき事、お前さんとの情交を知らない人達が、知つたか振に云ふのであらうが、今は他人も同樣に爲つて居る、それとも、矢張疑念が晴れぬのなら、明日でも明後日でもさうでない證據も見せれば、お前さんの指圖次第、何樣事でも否は云はぬ、と、種々の言葉を盡し、其上の戀仕掛に、辨三も三吉に就いての疑念は全く晴した樣にも見えた。それから又酒になり、辨三の爲る儘にもなつた後、もう此上はと金の事を話し出すと、又三吉の事を云出して、今夜の金は否だと云ふ。情夫に遣るの何のと、其樣譯でない事は、もうお前さんにも解得つた筈。實の事は叔母さんに頼まれたのでと、本郷には叔母がある事にして、其難儀談を懇々と爲た上で、此は貰ふ積りでなく、二三日の融通の爲と思うて、私を救けると思うてと、口を酸くして頼んだけれども、辨三は容易く聞入れる樣子がない。今夜はもう遲いから、此家は兎も角歸るとして、路次尚ほ話すと爲ようとの、辨三が言葉には背きかねて、氣が急きながらも、お勝は辨三の爲すまゝに、明保野を出て川端傳ひに此處迄は來たのである。

約束を爲といて、今になつて、男らしくもない男を的にして、此樣馬鹿々々しい眞似までするとはと、お勝は歩む氣力もなくなり、立竦みになつて考へるともなく考へて居た。

辨三は往來狹しと蹌踉きながら、獨語を云つたり笑つたりして、前へどし／＼行く樣子。

右方は川、左は藪陰の垣根に沿ひ、楠の大木の五六本打冠さる樣に覆つて居るので、月は無いながらも川は明るいが、道は咫尺も辨じ難い暗々たる闇である。

お勝は此間に立つて、辨三の足音を聞きながら、やゝ少時立つて居た。

いくら考へて見た處で、辨三を欺してなりとも金を取らねば、三吉との約束の始末は付かぬ。彼樣に色々云はれた上に、可厭な漢に自由にされて、可愛い男の今夜に迫つた難儀を救ふ事が出來ないかと思ふと、哀しくもなり、情なくもなり、又腹も立ち、口惜くもあるので、考へれば考へる程思亂るゝばかりである けれども、如何思つても考へても、辨三の懷中の彼叺の財布の中の金がなければ、三時迄の約束の今は二時過、情夫の難儀を救ふ道はない。客の紙入に手を掛けたのも、可厭な男に肌をゆるしたのも、可愛い男の機嫌の好い顏を見たいばかりで、此迄の苦勞もした心配も爲た。此上とても、何樣事でも、今更厭ふ所でないから、今一度辨三を搔口說いてと、お勝はぢツと耳を澄ますと、辨三の足音は稍遠くなつて、折々は立止りもするか、聞えたり聞えなかつたりする。

此處で別れて了つてはと、お勝は急に歩を疾めて、『辨さん、待つてお吳んなさいよう。』と、二聲ばかり呼掛けると、辨三に聞えたのか、足音が止んだのは立止つたのか、長く嚔をするのが遙かに聞えた。

辨三は既に楠樹の藪陰を通過ぎて、左へ砂村に通ずる枝流に架つた小橋の上に立ち止つて、懷手を爲た儘欄干に倚掛り、眠れるが如く頭を垂れて、川の中を覗いて居た。

雲は全く吹拂はれて、星月夜に川面も暗からず、淺瀬の波は退汐に激して、きら〳〵と光りながら流れて居る。

お勝も漸く小橋の上に來た。見れば、睡て居るかとも思はれる辨三の樣子に、ゆり起さうかと立寄つた足元の、此頃取替へでもしたのか、二枚ばかり新らしくなつて居る橋板の上に、夜目ながら黑く物らしき物を見付けた。何の氣なしに身を屈めて、手に取上ぐるより吃驚しながら、私かに辨三を窺ふと、欄干に倚り掛つた儘身動きもせぬ。お勝は手も戰へ足も顫へ、全身の血が頭に上つて、胸が唯わく〳〵するばかりである。

お勝が拾上げて手に持つて居るのは、辨三の叺の財布である。中にはお勝が欲しくて〳〵ならぬ五圓の金が入つて居る。辨三に斯うと知らせるのも惜しく、されぱとて打捨てられもせぬ。此さへあればと、直ぐに懷中に押込んで、辨三の氣付かぬのも僥倖、此儘これを持つて逃げて、三吉の急場の用に立てたいとは、山々思ふ所である。思ふ所ばかりでなく、さう爲たい。さう爲ようかと、既に思定めんと迄して、忽ち胸に浮んだのは、曾て客の紙入に手を掛けた事である。其時の怖ろしさが、今の心にひしと思合されて、今の怖ろしさは又一入である。財布を手にした儘、早速の分別も出でず、夢とも現ともなく其儘立つて居た。

欄干に寄掛つて居た辨三が、あまされて倒れようとした物音に、お勝は吃驚して、手にした財布を背後に隱し、

「辨さん、まア危いよ。其樣事をして居て、萬一墮落でもすると……』と、辨三の肩に手を掛けようとして、掛けも得ないで躊躇つた。

『お〻寒い。』と、辨三は戰慄しながら欄干を離れた。

『風を感いちやア詰らないぢやアないかね。それに、本統に危險いんだもの。辨さん、さア行からぢやアないかね。』と、お勝は素知らぬ顏に勸めながらも、辨三が財布に氣が付きはせぬかと、心も心ならず凝と其顏を見詰めて居る。

『あ〻快い心持だつた。おい、お勝どん。』と、辨三は身繕ひしながら、『今夜は俺棒と泥醉つちやアツたぜ。お前が後から來るのを待つてる積りか何かで、つい何だ、乃公アつい快い心持に。は〻は〻〻〻。』

『本統にお前さんは氣樂だよ。段々深更くなつて、もう三時にたりやア爲ないかともつて……。辨さん、さア行からぢやアないかね。』

『さうさ。そろ〳〵行くと爲よう。頭がいやにふら〳〵しやがツて。おいお勝どん、お前先に行きねえ。』と、辨三は空を仰いで、『やア難有え。明日は降雨かと思つたら、すツかり星になつて了つた。』

『本統だね。降雨れるかと思つたら、此晩梅ちやア、先ア大丈夫だらうね。』

『大丈夫だとも。お勝どん、先に行きねえ。』

『お前さん前にお行でよ。』と、お勝は前に立つのが怖ろしくも思はれる。

「お前の方は足駄だらうぢやアねえか。乃公は駒下駄で大失敗よ。お前の後に隨いてくから、道の善い處を、お頼ん申しやすぜ。』

『ぢやア、私が前に行くよ。』と、お勝は後にして居た手を縮めて、袖口に財布を隱しながら、橋を離れた。

『おい、鳥渡待ちねえ。』と、辨三は校流に沿うた砂村道に曲りながら、『お勝どん、此方い行くんだ。』

『えツ。』と、お勝は立止り、『何だねえ、辨さん。其方い行きやア、砂村に行くんだよ。』

『さうよ。』

「私は砂村なんか。もうお前さん、彼此三時になるぢやアないかね。』

一箆棒めツ。疝氣の稲荷に願掛爲やしめえし、砂村くんだり誰が行くもんかな。其方い行きやア、直ぐに平井町だ。知つた奴等に出會しちやア爲樣がねえや。まだ些と、お前に話してえ事もあるんだから、少許ばかしの迂路だ。其樣事を云はねえで、付合つて𥡴れるが可いや。』

『だツて、餘り淋しいんだもの。』

『淋しいから、此方い行くんだ。談話を爲ながら歩いてるにやア、淋しい方が可いぢやアねえか。それも、たんとの迂路になるんぢやアねえ。直ぐ其處の、長州樣の手前の原を突切つて、新辨天の土手に出て、あれから廻つて歸りやア可いんだ。ねえ、お勝どん、乃公ア此儘歸るなア、何だか未だ殘り惜い樣でね、も些と一處に歩きてえんだ。はゝはゝゝゝ。如何だい、お勝どん。此樣に悦くしたなア、まア誰が惡いと思ふんだ。おい、おい、何だな、何も愚圖々々する事アねえや。此方い來ねえ。可いぢやねえか。』と、辨三はお勝の手を取つて引張つた。

お勝は無論行きたくない。早く辨三の手を脱れたいと思つて居る。けれども、倘ほ懷中にも入れ得ないで、左の袖口に隱して居る財布がある爲に、振切りもされない樣な心持が爲て居るのだ。それかと云つて、おめ〳〵辨三に隨いて行つて、空しく時を過すのは、三吉の方が氣に掛つて、少時も斯うして居る氣はない。けれども、辨三の方も振切る程の勇氣は出ぬ。辨三を怒らせて、後で財布の無い事が知れたなら、其こそ此儘免しはせまい。自分に關係も何も無い、客の紙入の事でさへ、彼通り執念深く、何かと云ふと云出す程の辨三だもの、醉つて居るのを付込んで、盜まれたとでも思はうものなら、何樣無法な事を爲ようも知れぬ。此儘返さうと思つた所で、今更らしら出されもせぬ。と云つて、此儘持つて行つて、三吉に渡した所で、後の始末は何うとならう。三吉に此々と實情を打明けたら、隱して居た辨三との情交を知られて、相談に乘つて𥡴れる所でなく、何樣手荒な事も爲かねぬ。其場で直ぐに愛想を盡かされ、情夫には捨てられる、辨三には可怖しい所へ願出されて、何樣事にならうも知れぬ。考へる程、財布を拾つて隱して居たのが仇になつて、何ともかとも爲ようがない。今此を出したなら、隱して居たのを根に持つて、愈よ自分に貸しては𥡴れまい。と云つて、金が無ければ三吉に如何も濟まぬ。返しもされねば、持つて行くのは倘ほ怖ろしい。寧そ三吉に出來ない事を打明けようか。それも辛い。辨三に財布を返さうか。愈よ金の的はなくなる。今更仇になつた財布は、倘ほ袖口に隱しながら、胸は亂れた絲の如くで、何と思ひ分く方もないのである。

お勝は今辨三に手を取られて、進まぬ方へ引かれ行くので、振切つて駈出してと、心には幾度か思ひながら、終に其氣になり得ずして、おめおめと辨三の爲す儘に隨いて行く。

お勝等が砂村道へ半町ばかり入つた時、小橋を人の走る音が後に高く聞えたので、お勝はふいツと振返つたが、唯森々と淋しくして、木場の方に犬の吠えるのが斷續に聞えるばかりだ。

（七）

明保野では辨三等を今夜の客の終にして、女中のお花は二階から膳や何かを下に卸し、そろそろ軒行燈を取込まうと、門口に出ようとした時、ぬツと入つて來た男がある。

『今晩はもう火を落しましたから……。』と、お花は謝絶らうとした。

『上るんぢやアねえ。』と、男の聲は射る樣に鋭く、『お前ん家にお勝てえ女が來てる筈だ。鳥渡逢ひてえんだから案内しねえ。』と、はや泥足の儘片足上つた。

『え、お花さんと仰有るんですか。』と、お花は男の顔色が尋常ならず、眼の色さへ變つて居るので、氣味惡さうに逡巡した。
『來て居ねえ筈はねえんだ。』と、男は早くもお勝が預けて置いた雪駄に目をつけ、此雪駄があるからにやア、未だ居やアがるに違えねえや。さア座敷に案内しねえ。』
『もうお歸んなさいました。』
『もう歸つたッて。えゝ、馬鹿にするない。歸つた奴の履物のある筈がねえや。』
『それはお預り申したので御在ます。雨後で歩けないからと仰有つたので、手前の足駄をお貸し申しまして……。』
『預けて行つたんだッて。虚言ぢやアあるめえな。』
『虚言だと思ひなさいますなら、二階にお行でなすつて、見て下さいまし。』
『居なけりやア可いや。野郎も同伴に歸りやアがつたんだな。』
『はい、男の方と御同伴でした。』
『お前、野郎の名を知つてるだらうな。』
『辨さんとか仰有る樣ですよ、能くは知りませんけれども。』
『愈よ辨の野郎に違えねえんだ。彼野郎めッ。如何だい、姉さん、今夜初めて來たんぢやアあるめえねえ。時々來て居やアがつたんだらうな。え、如何だい、おい。』
『さうですよ。時々お出でになりますよ。』
『時々來やアがるんだッて。お勝もか。』
『はい、よく御同伴に。』
『さうか。ふうむ。』と、男は深く息を吐いて、『歸つたなア、何時だい。今なのか。先刻なのか。徐程前なのか。』
『たッた今でしたよ。』
『たッた今。』
『其處でお逢ひなすつた位でせうよ。』
『さうか。難有う。』
男は疾風の如く明保野を馳出した。お花は呆れて、少時は軒行燈を取込むのも忘れて居た。

* * * * *

洲崎の廓の大門の派出所の巡査は、今しも往來の一人の男を呼止めた。男は彼三吉で、巡査の前に小腰を屈めて居る。
『何で先刻から鳥鷺々々しちよるんかア。』
『へい。なに、其、何なんで。鳥渡逢ひてえ奴がありやすので、へい。其奴を探してえともつてね、へい。私や胡亂な者ぢやアねえんで、へい。』
『胡亂な奴ぢや無かちやらう。汝が面ア毎日見て知つちよるけんが、胡亂な奴ぢや無かこたア。けえどんが、もう汝三時ぢやなッか。度々彼方い走り此方い走り爲ちよるけん、何事かア思うてなう、呼うで見たのぢや。何事も無かんば可か。もう汝が家さ歸つて、寢るが可かど。』
『へい。難有う御在やす。もう一度尋ねやして、へい。どうも、誠に相濟みやせんで、へい。』
三吉は幾度か巡査に叩頭して、漸く其手を脱し、橋を外に渡ると、早歸を狙ふ夜明の車夫が五六人、話にも勞れて、中には提灯の股火に一睡の夢を結んで居るのもある。
三吉は鳥鷺々々其邊を見廻しながら、眞直に西平井町にだら〳〵坂を下りようとした。
『おい、おい。』と、下から上つて來ながら聲を掛けた男がある。
『誰だ。兼か。』
『兼かぢやアねえやな。手前何處を誤魔付いてやがるんだ。もう三時ぢやアねえか。久公も大飲込に飲込んで、悉皆用意をして待つてるだらうぢやアねえか。』
『可いよ、承知だてえ事よ。』と、三吉は疾いで坂を下りようとする。
『おい、おい、おい、三公、手前何處え行くん

だつと、兼八も後から尾いて來る。

『何でもねえ、何でもねえ。手前は來て呉れねえでも可いや。』

『何でもねえツて、手前間違はうもんなら。』

『可いツて事よ。』

『可いツて事よツたツて、串戲ぢやアねえぜ。手前、如何か爲やアしねえか。』

『可いツて事よ。烏渡お勝の阿魔に逢はねえぢやア……。手前、何處かでお勝に逢やア爲なかつたか。』

『いんにやア、乃公ア會はねえ。ぢやア、何だな、金が未だ不調えんだな。』

『それもよ。まア可いや。乃公ア直きに行くから、手前能く氣を付けてゝな。』

『其奴は合點だ。ぢやア、手前直きに來いよ。』

『可いツて事よ。』

三吉は兼八に別れて、新辨天の入口の角に立ちながら、辨三とお勝に尋ね會ふべき方角を考へて居た。

三吉も亦お勝が彼を慕つて居る樣にお勝を愛して居るのである。今夜兼八等と計つて東雲を逃亡させるも、東雲が三吉故ならばと打込んで居るので、田舍へ連れて行つて金に爲て、其金でもつてお勝と世帶を持たうと云ふのが、其大目的なのであつた。けれども、東雲を斯々であるとは、流石にお勝には打明得ないで、退引ならぬ入用のある事にして、金の工面を賴んで置いたのである。然るに、明保野でお勝と辨三とが斯々であると、八五郎と熊吉とから聞得てからは、一途にお勝が憎く、辨三が憎く、見付次第に思ふ儘に、殺して了ふか、片輪者にするか、二つに一つの手段を取る積りで、先づお勝が今夜行くと云つたお倉の宅から、念の爲に尋ねたけれども、今夜は未だ來ぬ、又來る程の用事も無いとの事を聞得た。此に愈よ八と熊との報の根なし事では無かつたのを知り、憤々の情堪へ難く、道に足駄を脱捨て、一散走りに明保野に駈付けて、愈よ其と確め得た。其上今夜一度のみならず、此迄斷えず媾曳して居た事まで聞得たので、口惜さと嫉さとで、胸は湧返る樣である。今夜お勝と出會ふ筈に約束して置いた老婆の家に三度、お倉の家も二度まで敲き起したけれども、お勝の樣子が知れぬ。曲輪の內も探して見る、外も探して見る、巡査には怪しまれる、實に〳〵憤怒に堪へないので、東雲の事などは殆んど胸中に浮びもせぬ。兼八に出會つても、何を聞いたのか、何を云つたのか、云つた事も聞いた事も殆んど覺えがないのである。

三吉は新辨天の入口の四角に立ちながら、少時考へて居たが、如何も怪しくてならぬのは明保野の亭駄である。も一度今度は家探しを爲てなりともと、又明保野を指して駈出した。

（八）

毛利家の拜借地とやらにて、其邊にては長州邸と稱へて居る一圍とは、跨ぐに難からぬ小溝一つを境界にして、一方は新辨天に續いた原がある。其中には池ばかりが三つ四つ、大なる潮入の材木の置場が一個、堀割の川もあれば、作事物も二棟ばかりはある。

遙かに廓の電氣燈が暗々たる中に、一道の光を放つて居るばかりで、其方に對へば、土手に高い松樹も影の如く、辨天堂の屋根も其かと見えぬのでもない。其他は川と池と潮入の材木の置場が水の爲に見ゆるばかりで、家も森も立木も注意ければ、處々に唯一團の雲かの如くに黑ずんでは居るので　靜かさは、靜かさと云ふよりも淋しさは云ふばかりもなく、鬼氣人を襲ふ樣で、時々池に潑ねる魚の音にも、何驚き心地はする。

前に立つは辨三、酒氣尙ほ去らぬか、幾度か躓き幾度か倒れんとしては歩んで來る。後には

お勝が悄然として、探歩に辿つて居る。
『お勝どん、今お前の云つたのに違ひなきやア、乃公だツても何もお前、無理に意地を惡くして、お前を困らせたかねえや。ねえ、さうぢやアねえか。お前に三公てえ情夫があるのも、今夜明保野で、隣室に飲んで居た野郎に聞いたんだ。東雲とか云ふ三公の情婦の事も、其奴等からの又聞なんだ。それも可いや。お前と三公と今ぢや何でもねえと云ふから、其樣事ア如何だツて關はねえや、なア。其ぢやア何だな、お前愈よ乃公の世話になる氣だな。え、お勝どん、掛引の無え所を、此處で判然云つて呉んねえ、も一度判然云つて呉んねえ。』と、辨三は引上げてある材木の端に腰打掛け、『お勝どん、お前も此處え掛けるが可いや。』
『何だか暗黒だから、何處に掛けて可いんだか。』と、お勝は全く見えぬでもない木の上を、手で探り見ながら、首を伸して覗いて見て、後は川ぢやアないかね。辨さん、此處は危い樣で。』
『なに、大丈夫だよ。お前も其處へ掛けるが可いや。』
『何だか私は危險で。』と、お勝はソツと腰を掛けて、『川だか池だか知らないけれど、落人ちようものなら、深さうで、何だか氣味の惡い處だ事ね。』
『落人ツちやア大變さ。深えの何のツて、底まで材木が入ツてるんだから、落人ツちやア命はねえのよ。深くねえにした處で、材木に喫はれりやア、何樣游泳の名人でも、助からねえと云ふ事た。』
『まア。』と、覺えずお勝が立上るのを、辨三は確乎押へて、『乃公が付いてりや大丈夫だ。もツと此方に寄つて掛けねえ。』
『さうかね。大丈夫かね。』と、お勝は辨三の傍に掛けようとして、ふと氣が付いて、何ほ手にして居た彼叺の財布を帶の間に插んだ。
『お勝どん、今の相談は如何する氣だ。お前が其氣なら、乃公の方は望む所だ。一緒に世帶を持ちせえすりやア、お前が毎日寢て居たツて、困らせる樣な乃公ぢやねえや。世辭や愛想は拔きにして、動かねえ所を云つて呉んねえ。え、如何だい。今更虚も云やしめえが、も一度判然聞きてえんだ。こう、お勝どん、お前何故默つてるんだ。否なら否だと云ふが可いや。』
　お勝は聞くのも否である。けれども、財布を拾つてからは、何やら底に怖氣があつて、平生ほどは判然口も利き得ないで、斷る程の勇氣が出ない。
『お前、如何しても否なんだな。』
『なに、お前さん、否だと私は云つてやしないよ。』
『それだと、乃公の言になつて、一處に財布を持つ積りなんだ。』
『はア、そりや私も然うつてでも….。だけども、一度は叔母さんとも相談して….。』
『なに、叔母さんに相談する。はゝはゝゝ。お前も餘程解らねえな。叔母さん〳〵と云ふけれども、お前乃公と一所になる時、何時叔母さんに相談したんだ。叔母さんが不可ねえと云ひや、如何する氣だ。十五や十六の小娘ぢやアあるめえし、馬鹿氣た事は云はねえもんだ。へん、面白くもねえ、大概にするが可いや。』
　お勝は何とも返辭をせず、頭垂いた儘考へて居る。
『返辭を爲ねえのは否なんだらう。否ならば否で可い。お前が其樣、水臭え心を持ちやア、乃公だツて其通りだ。能く考えて見るが可い。乃公の云ふ事を聞かねえで、其でお前濟む氣で居るのか。乃公の口が一つ滑りや、お前はさうしちやア居られめえぜ。其を乃公は誰にも云はねえ。其上お前の爲には、隨分相應に力に爲つた

積りだ。今夜の五兩の金だッても、お前ハ返濟次第ぢやア、今此處でだッて渡して遣らア。』

お勝は金さへ今異れる事なら、一寸伸びれば尋と云ふから、世帶を持つ事の約束して、此財布を返して見て、更めて貰ひ受けようと、帶の間へ手を入れ掛けた。

『やア、ねえぞ。』と、辨三は愕然として立上つて、懷中を探り、袖を探り、果は衣を振つて探して居る。

お勝は此處にと云はうとして、云出し損ねて、云はれなくなつて、洩出したい樣な心持もする。

辨三は探しかねて、『財布が無えぞ、財布が無えぞ。』と、尙懷中を探りながら、『お勝どん、お前が知つてる筈もねえんだが、乃公は醉つて居たから覺えねえが、もし明保野に忘れや爲なかつたか、お前覺えて居やア爲ねえか。そらお前も知つてる叺の財布だ。中にや六兩ばかり入つてるんだ。お前知らねえか。覺えねえか。え、お勝どん。』

『私がですか。』と、お勝の聲は顫へた。

『いや、お前が持つてると云ふんぢやアねえ。乃公が明保野に忘れやしめえか。それをお前が知らねえかッて云ふ事よ。』

『私が……。』と、お勝は此處にと云ふ積りで云ひ切れなかつた。

『お前がたア云やア爲ねえ。如何したッて明保野だ。お前も一緒に來て異んねえ。』

辨三は殆んど醉も醒め果て、お勝を催して明保野に行かうとする。其時お勝は何とも云はれない程怖ろしくなつて、我を覺えず紙入を出した。

『え、何だ、そりやア。』と、辨三は手を出して握つて見て、『何だ、お前が持つて居たのか。』と、吃驚もし呆れもして、憎くなつて腹が立つて、『ええ、ふざけた眞似をするぢやアねえか。』と、お勝の手から奪ふが如く財布を取つた。

『辨さん、私は惡氣ぢやアないんですから……。』

『なんだッて。惡氣ぢやねえッて。ふざけるない。乃公が醉つて、知らねえかともやアがッて、惡氣ぢやねえたア、何の事だ。矢張手前は泥棒氣が失しやアがらねえんだ。畜生ッ、如何するか見やアがれ。』

『辨さん、勘忍してお異んなさい。私は本統に惡氣でもつて……お前さんがお落しだから……。』

『ふざけるない。乃公が落したのを拾つたのなら、先刻から探してる時、何故默つて居やアがつたい。手前は矢張三次の野郎に貢ぐ積りで、乃公の懷中から拔きやアがつたな。ぬけ〳〵乃公を欺しやがつて、此迄能くも弄びやアがつたな。手前の樣な泥棒阿魔は、もう勘忍がならねえんだ。さア一緒に歩びやアがれ。』

お勝は辨三に手を取られて引立てられながら、今は爭ふ氣力もないが、却つて度胸は坐つて來た。

『そんなに手荒くお爲でなくッても、私は決して逃げやアしないよ。如何しても泥棒にお爲のなら、私も泥棒になりませうさ。財布はお前さんに返しましたよ。お金が無くなつてるかも知れないから、能く改めて見て下さい。』

『無くなつてりやア、手前が盜んで居やがるんだ。いや、さうだ。此財布は矢張手前に持たして置くんだ。』

辨三は財布をお勝の懷中に押入れたが、お勝は其さへ爭はぬ。

『さア歩びやアがれ。』と、辨三は小突廻して引立てようとしたので、お勝は其手を拂ひ除けようとして、思はず辨三の頰を打つた。

『打ちやアがつたな。此阿魔、如何するか見やがれ。』と、辨三が拳を揮つて打つて掛つたので、

お勝は覺えず身を避した。辨三は機をうたれて前にのめッて、材木に足を取られて、翻筋斗うつて潮入の池に落入つた。

お勝はハッと思つて覗いて見たが、辨三の姿は見えぬ。材木に吸はれると、水練の名人でも命を助かる者はないと云つた、辨三の話を思出すと、怖ろしさは身に沁み渡つて、我を忘れて駈出した。眞直に行けば、直ぐに新辨天の土手に出るのを、元來た道に引返して、轉びもせずに駈出した。

（九）

三吉はお勝辨三を尋ねかねて、再び明保野に走着いて、寢て居るのを敲き起して、如何しても隱して居るにして爭つて、家探を爲ても見えないので、終に口論迄して、一層怒氣滿々として血眼になりながら、砂村に通じた彼枝流の小橋の上まで歸つて來た。

蟻の這ふのも見えよと迄、眼も神經も鋭くなつて居る三吉が、今小橋に一歩踏掛けた時、砂村の方から人の走つて來る足音がして、三吉の眼前を掠めて、平井町の方へ走つて行つた。

それは女で、跣足で、息を切つて、三吉の橋に居るのも認めないで走つて行つた。三吉は若しやと思つて、女に追縋つて、能々見ると、尋ねて居るお勝であるから、おのれと云ひさま飛掛つた。

「辨さん……。」と、お勝は辨三に追付かれたかと思つたので、詫る積りの一聲が僅かに一句出たのである。

「何だ、辨さんだ。此阿魔アッ。」と、三吉は飛掛り樣お勝の首を攫んで引倒した。

辨三でなくして三吉であつた事は、お勝は既に其聲でも悟つた。けれども、喉を攫まれて物を云ふにも聲は出ぬ。況してや、三吉は既や拳を揮つて、二つ三つお勝の顏を打つた。お勝は苦しさにも堪へず、云譯する聲も出でず、もがきながらも手を合せて、僅かに拜み得たばかりである。

「今更其樣眞似を爲やアがつて、此阿魔アッ、如何するか見やアがれ。」と、三吉はお勝が手を合せただけ却つて怒りを增し、傍に在る石屋の石片の手頃の御影石を拾つて、微塵にせんと振上げた。

お勝は氣も魂も身にそはぬ。全身の力を籠めて、僅かに喉を締められて居た手を脫し得た。途端に御影石はお勝の顳顬骨に打下された。お勝は夢心に叫んだ。「人殺しいッ。」と、其も唯一聲。

三吉はお勝の悲鳴を聞いて、後は喉を打た、此も夢に夢見て居る心地である。

自首して出た三吉と、訴出た濡鼠の辨三と、逃出しながら手筈が違つて大門の派出所に捕へられた東雲とは、共に富岡門前の警察署で顏を合せた。

三吉は辨三を見るより、飛上りさま五つ六つ頭も破れよと打擲けたが、忽ち巡査に引別けられて別室に置かれた。

三吉は其日の中に警視廳へ送られて了つた。

平井町の新造殺と、一朝の内に評判になつて、態々讀賣に作つて呼賣をしたものもあるので、浮名は不滅の遺恨と共に、其當座の小唄に殘つた。

（明治二十九年一月）

龜さん

(一)

野州烏山に一人の名物男がある。那須郡に入つて、單に龜さんとさへ云へば、あの法恩寺の息子かと、誰一人笑を含まぬ者はない。

年は廿三歳であるが、身材は漸と十三四の少年位しかない。頭が大きく、猪首で、體は豐に肥えて居るが筋に緊りがなく、歩む時の肉の動きが、衣服をも波立たせる程に見受けらるゝ。首を少し前へ屈めて据ゑて、兩手をだらりと垂げて打振り、足の土踏まずが腫れて歩き惡いかの樣な歩形の、而も内股であつて、いかにも切なさうに、一歩々々に身を左右に振つて行く樣子は、宛然不隨の脚氣患者である。坊主頭を、寺道心の樣に綺麗に剃つて居る事もあれば、又願仁坊主の如く汚く髪を伸して居る事もある。額は大面で、眉毛は濃いが鋭くない。鼻は小鼻が低く、頭が丸くて且つ太い。口は大きく、厚い脣が外に反つて、締がなく、紫色を爲た齒齦が露見れて居る。眼も大きく、外眦が下り、眼睛が鈍く、上を仰ぐ時に見ゆる下瞼の裏は朱を流した樣で、まことに氣味が惡い。けれども、眼にも口にも、笑ふ時は不思議に愛嬌が出て、邪氣の無い心の底までも見え透き、何人も能く渠を憎み得る者はあるまい。

渠は殆んど一度も怒つた事がない。渠が赤くなつて氣色ばんだ顏を、見たと云ふ者は未だ一人も無いのである。物を云ひ掛けると、答ふるよりも、先づ、ゝへゝゝと笑ふが其常である。嘲られても笑ひ、笑はれても笑ふ。怒るの情と悲しむの情とは、渠には無いのであらうか。いや、殆んど全く感情を有たないのだ。と、或者は評した位である。故なく渠を打たうとする者があつても、先づ眼と口との例の愛嬌で迎へて、尚ほ及ばなければ、終に走つて之を避ける。而も其人に一點の怨情を留めず、一瞬の後は滔天の仇をも、全く忘れ果てたかの如くである。

渠は須藤龜磨と呼ばれ、烏山にては第一に數へらるゝ法恩寺の總領に生れたのであるが、經も覺えなければ、法衣も好まない。何を教へても其甲斐がない。唯笑ふばかりが能であつて、また其魯鈍なる性質をも示して居る。父の僧も我子ながら愛想を盡かして、此樣子を產したのも、前世の業因でがなあらう、到底經を讀ませ寺を繼がすべき者でないと、幼時思棄てゝしまつた。哀れな小僧さんよと、檀家の人々が氣の毒がつて、龜さんの衣食の料を、毎年別段に寺に納める事にしたので、朝夕の糧、四季の着物は、姉の初枝と云ふのが、母が龜さんの事を苦に病んで死んでからは、凍えず飢ゑざる迄に世話を爲て居るのである。

或年の秋、旅役者の市川某一座が演劇を興行した事があつた。興行は四日間で、毎日狂言を差替へ、妹背山と天神記と八百屋お七とお半長右衛門とを演じたのである。龜さんは此演劇を四日とも缺かさず見物した。桂川のお半も見、妹背山の雛鳥も見、賀の祝のお千代お春八重をも見、お七の火刑をも見た。春を解せず情事を知らない心には、其筋を會得する事が出來ぬので、妹背山桂川に窈窕たる少女の美しさに見惚れたが、其悲慘には少しも感じない。ふき替の首の實物でないのを認め、ころりと舞臺に投出されたのを見て、世に類なく可笑なものとして興じたばかりである。賀の祝に三人

の花嫁が、喜劇にも似た一場の可笑味は、最も面白いものとして、女の樂しく愛すべきものである事を深く思ひ初めた。お七が火刑に處ふ一場の悲劇には、上もなく怖るべきものとして戰慄した。其罪の怖るべきよりも、其刑の怖るべきに面を被うて、唯怖るべきものとして戰慄したのである。

龜さんは全く感情のない動物でもない。美しき物を愛するの情も、怖るべき事を怖るゝの情も有つて居たのである。一度演劇を觀て、人間に娘ほど美しく愛らしい者はないと知り初めてから、女の中に混つて遊ぶのを好む樣になつた。加之可笑いのは、演劇の娘の身振假聲を覺えて、興に到ると自分一人の時も賀の祝を演じ、人に望まるれば、時も選ばず場所も關はず、毎時も喜んで其眞似をするのである。平生愚鈍な男に、如何して此記憶力があるのか、癡漢も馬鹿にされぬ者よと、人々を驚かしめた。けれども、情事は尚ほ解し得ないので、娘の中で遊んだり踊つたりするけれども、人も咎めず又厭ひも爲ない。却つて翫弄物として愛されて居た。

其でなくても憎氣のない男が、一藝をさへ得たから、遊女町の娼妓等には別して可愛がられる。客ある毎に招いて翫弄物にすると、客も面白がつて纏頭など與へる者もある。盛場で此樣に珍重するから、鳥山の近在は云ふに及ばず、那須郡一圓、野州にての都會宇都宮迄も龜さんの名は響き渡つて、名物男として知らない者はない樣になつたのである。

（二）

仲町に金花堂と稱ぶ小間物店がある。主人の市兵衞と云ふのは、東京者で江戸兒氣質、殊に面白い氣の男であるから、龜さんを又なく贔屓にして居た。其娘のお清と云ふ近所にての評判娘も、龜さんを面白がつて、態々菓子などを買つて置いて遣る樣にするから、一日の內には三度も四度も、龜さんが金花堂の閾を跨がない事はなかつた。

今日も遊女町からの歸途と見え、龜さんは金井町の方から仲町の方に歩つて來た。

一昨日剃つた位の頭に、其素性を幽かに見せては居るが、着物は下妻木綿の中古の綿物、帶は小倉の角帶を貝の口に結んで、殆んど臺ばかり殘つた日和下駄を穿いて居る。例の通り首を据ゑて猫背になつて、兩手をぶらりと垂げて、肩をゆりながら歩いて來た。

見た處は平生の龜さんである。人に顏を合せると、ヘヽヽヽと例の如く笑ふ。その又龜さんが通ると、老人も見送つて笑へば子供等も遠くから眺めて笑つて居る。龜さんが通る處は、一時に福の神が門口に來たかの樣に見受けられた。

龜さんは金花堂の前まで來た。此時何か考へて居るらしかつたが、見向きもしないで金花堂を通り過ぎようとした。店番を爲て居た金花堂の市兵衞は、笑ひながら見て居たが、聲を掛けて龜さんを呼止めた。

「龜さん、おい龜さん。如何したね。二日ばかり來なかつたぢやアないか。どうだ、お茶でも飮んでかないか」と、市兵衞は店口に出て行つて、笑ひながら腮で招くと、龜さんは、ヘヽヽと笑つて、市兵衞の顏を見詰めた。其見詰めた眼が平生とは異つて居る、何となく異つて居た。市兵衞は少し變だとは思つたが、別に氣にも止めないでまた腮で招いた。

市兵衞の顏を見詰めた儘、龜さんは矢張何か考へて居たが、思ひ出した樣に笑ふと、急に威勢を出して、金花堂の門を入つた。

市兵衞は龜さんの肩を叩いて、「おい、如何したい。大層お見限りだね。何處か出掛ける家が

出來たと見えるね。遊女町の方でも忙がしいのかい。』

『へゝッ、へゝッ。』と、龜さんは何とも答へないで、唯笑つて居る。

「お前だから、間違の起りさうな事もないから、まア好い樣なものの、稻荷の岳のお辰の家へは行かないが能いぜ。え、龜さん。昨日も一昨日も、お前がお辰の家へ入るのを見たてえ人があるよ。止しなせい、彼樣家へ行くのは。」

龜さんは市兵衛が言葉に、色を動かした樣に見えたが、矢張笑つて居るばかりである。

「お清さんは。』と、少時して龜さんは問掛けた。

『奥に居るだらうよ。』と市兵衛が答へると、「さう。」と云つて、『へゝへゝ。』と龜さんは笑つたが、何となく調子が平生とは異つて居た。けれども、市兵衛は氣も付かないで居ると、龜さんは何時もの通り、奥のお清が所に、體が重たさうに肩を搖つて、兩手を振りながら入つて行つた。

市兵衛は早く妻に死れて、娘お清の外には、店に小廝、臺所に下女、一家四人暮なのである。小廝は使に出し、下女は直ぐ那珂河向うの京野の宿に遣つたので、今日は親子二人の外には誰も居ない。奥には唯お清ばかりである。

「妙な坊主だ。併し、可哀想な男だ。」

市兵衛は店に居て、奥は氣にも爲ないで、斯う獨語を云つた時、「何を爲るんだよ、あれ、龜さん、怪しな……。何だよ、此人は。』と、やゝ高くなつた聲が聞えた。其聲はお清である。如何したのかと、市兵衛が耳を澄した時、ばた／＼と物音がするかと思ふと、「あれーッ。あれーッ。家君さん。早く誰か。龜さんが。あれーッ。』と、急を呼ぶお清の聲に、市兵衛は吃驚して、宙を飛んで奥へ駈込んだ。

『家君さん、早く如何かして下さいよ。あれッ、馬鹿、馬鹿、馬鹿、馬鹿龜が。何をするんだよ。馬鹿、馬鹿、馬鹿龜ッ。」と、お清は龜さんに押付けられたが、口には救を呼び且つ罵り、手は乘掛る龜さんを撥返さうと爭つて居たが、駈込んで來た父の顏を見るより力を得たので、「家君さん早く……。』と云ひながら、龜さんの面を搔挘つた。『あいたッ。』と、龜さんは覺えず手を寬めた。お清は此かの隙を此處ぞと撥返したが、尙ほ起上る間が無いので、すかさず這出して、漸と立たうとして及腰になつた所を、龜さんは摑附からうとして、其手は僅かにお清の帶を攫んだ。お清は龜さんに帶を攫まれて、前へばたりと兩手をついた。又起上つて、又倒れた。

今しも駈込んで來た市兵衛は、其と見て走り掛つて、頰も曲めと龜さんの横面に鐵拳を加へて、よろめく所を肩も碎けよと突いたので、龜さんはどーんと倒れた。

「どうした、どうした。」

市兵衛が娘に樣子を問掛けた時、倒れて居た龜さんはむく／＼と起上つた。

『あれ起きた。家君さん、早く、早く、早く追出して下さい。』と、お清が叫ぶと、龜さんはお清の顏を睨むが如く見詰めた。

烈火の如く怒つた市兵衛、お清を後に庇ひながら、一歩でも進んだら、撲り倒さうと身構へし、龜さんを睨み付けて、

「お清を如何するのだ。馬鹿坊主めッ。身動きでも爲やアがると撲り殺すぞ。恩知らずの馬鹿坊主めッ。」

お清に搔挘られた爪の痕は、眉間から斜めに頰へ掛けて血を吹いて居る。平生は左程にも見えなかつた濃い眉、太い鼻、大きい口が何となく猛惡らしく、血走つた眼が丸く大く而も輝いて、殆んど龜さんではないかの樣である。

龜さんは市兵衛に罵られて、お清を見て居た眼を市兵衛に移し、瞬もしないで其顏を見詰

めて居る。
『怪からん奴だ、何だと思つてるんだ。今の樣な眞似を、二度と再び爲ようものなら、警察署へ引張つて行くからさう思へ。馬鹿だと思つて油斷してると、飛んでも無え馬鹿坊主だ。』
又罵る市兵衛。罵られた龜さんは、其だけの惡事を爲たとは思はぬ樣な顔付、聽て、へヽヽと、例の如く笑ひ出した。
『笑事ちやアねえや。笑つてさへ居りや能いかともやアがツて、馬鹿坊主めツ。』
『へヽへヽ。旦那さア、俺お淸さア好え事してやるだ。』
『何だと。』と呆れる市兵衛。
『何を云ふんだ、淫亂坊主めツ。私を如何するツて。家作さん、早く追出して下さいよ。』と、怒つた眼に涙ぐむお淸。
龜さんは矢張『へヽツへヽツ。』と、笑つて居る。
『また笑やアがるた。此樣馬鹿を相手に爲たツて爲樣がねえ。お淸、今日の事は勘忍して遣るが能いや。其代りにやア、以來もう足踏もさせねえぞ。可哀想だと思つて可愛がツて置きや、好い氣になりやアがツて、飛んでも無え坊主だ。おい、また打たれねえ中に歸りやアがれツ。』
市兵衛引立つれば、龜さんは首筋を攫まれながら、無理に顔を捻向け、『私俺何惡い事爲やした。如何爲なさるのけ。』と、幾度となく問ねる。
『何を云ふのだ、馬鹿奴ツ。もう乃公の宅へ來るぢやアねえぞ。』と、市兵衛は龜さんを店口に引摺り行き、往來に突放して、渠が臺ばかりの下駄をも投出した。
誰が聞き附けて誰が傳へるともなく、金花堂の店前には既や黑山の樣に見物人が集つて居た。市兵衛に事の仔細を問ねる者と、龜さんの四周を取圍いて居る者と二派に分れて、喧々囂々として耳も聾るゝばかりである。
龜さんは突放されて、踏止まり得た處に立止つた儘、殆んど失神したかの如く、茫然として、少時は血も循環はぬかの樣に見えた。
『お淸さアをけい。』と、市兵衛に問ひ得た一人の男が、龜さんを見返りながら云つた。
『其樣事知る譯なかッぺいに、誰か教えた者あんべい。惡い事するでねえけ。』と、今一人の男が云つた。
『誰が此樣人と同衾する者あるもので、私等はい、亭主と三日同住に居らないでも、龜さアとなら可厭でがんすよ。おツほツほツほツほ。』と、大口を利くのは、田町の貴次郎と呼ぶ[illegible]者、其調子と笑ふ聲、如何にも可笑いので、傍に居た菓子屋の娘か、『おほゝゝゝ。』と高く笑ふと、其に催されて、一同囀るゝばかり笑ひ出して、其餘波が少時は鎭まらなかつた。
龜さんは笑聲に埋められても、少しも感じないらしい。最初の姿勢其儘で、眼は何處を見るともなく、瞬つたなりに坐ゑて居る。『何と云ふ樣けい。』とはだけた着物の前を治して遣る者があつたが、少しも知らない樣である。『さア早く歸んなさろ。』と、下駄を拾つて來て、足下に置いた者もあつたが、其聲も耳には入らないらしい。人々は尙ほ其四周を取卷いて、云ひたい儘の評を爲て居た。
龜さんは宛然枯木の如くである。身も動かさない、口も利かない、眼も動かない。少時してから、少し首を傾げて、何か考へるらしく見えた。軈て眼を閉ぢて、兩手をだらりと垂げた眼を閉ぢたのは一瞬の間で、再び眼を開いて四邊を見廻した時は、平日の龜さんに少しも異はない。人々は愈よ近く渠を取卷いた。
『えへゝゝゝ。』と、龜さんは故ありげに笑つた。其顏は一種異樣で、其聲の調子も異樣で、伏目に爲つた下瞼が朱く見えて、何となく凄い。

其前面を圍んで居た者は、思はず逡巡して、女は多く男の後に隠れた。

人々が騷ぎ立つ中を、龜さんは何物か見付けたかの如く屹と睨んだ。氣味の惡い其赤目は、彼の菓子屋の娘が人の後に避けようとするのを認めたのである。龜さんはづか〳〵と進んで、早くも娘の袖を攫んで、にや〳〵と笑つて其顏を眺めた。

『今度はお光さアが見込まれただア。』

『はゝゝ。面白えでねえけ。』

『なに、面白え事あんべい。お光さア早く逃げなさろ。』

『これ、何故唯見てるだよ。早く袖放させて遣るが能えでねえけ。』

傍からわッ〳〵と騷ぎ立てる。娘は顏を眞赤にして、袖を振れども拂へども、龜さんは兩手を掛けていッかな放さず、娘が引くに隨れて渠も進んで、其手は終に娘の肩に掛らうとした。

『あれ、あれ、あれー。』と娘は泣聲を上げて、逃げようと身をあせる。龜さんは引寄せようと爭つて居る時、『何するだア、これ。馬鹿龜めッ。』と龜さんを突飛ばした者がある。途端に袖付からばらりと綻びて、娘も龜さんも後居に倒れた。娘は早くも人衆に紛れて、二三軒南の我家に駈込んで、母に訴へる泣聲が高く聞えた。此處にもはや四五箇の人が集つて罵つて居る。

龜さんもむく〳〵と起上つて、娘の後姿を認めると、直ちに其を追はうとした。

東側の荒物屋から丸顏の愛嬌娘が、今丁度見物しようと往來に出て、『龜さん、如何したけ。』と聲を掛けると、龜さんは其聲に隨れて顏を捻向け、女と見るより又其方へ向つて進んだ、手には菓子屋の娘の片袖を打振りながら。

『姉さア、早く逃げなさろ。』と、叫んだのは、其娘の弟である。

何の譯か譯が解らないので、娘は呆然して立つて居た。人々は『あれ〳〵。』と、叫んだ。娘は倚ほ逃げる氣は付かないのである。

龜さんは近く娘の傍に進んで、例の如くにやにやと笑つて、今や娘の手を攫まうとする。阿鼻と人々が叫んだ時、忽然として龜さんは倒れた。人々はあッと叫んだ。

天秤棒を取直した娘の弟は、無理押に姉を門口から押入れ、龜さんが倚ほ追つて來たなら、また打倒すぞと云はぬばかりに身構へて居る。

打倒された龜さんは、起きも得ないで、殆んど息も通はないかの樣である。

『死んだのでねえけ。』

『打殺しちや惡かッぺいに。』

『なに、死なねえ〳〵。呼吸してるでねえけ。』

二三の人が顏を見合せながら、龜さんの頭に近付いた時、龜さんはむく〳〵と起上つた。

『ヤア、起きたぞ〳〵。』『これ、女は傍へ行くでねえ。また攫まるだッぺい。』と、彼も此も亦騷ぎ立てた。

龜さんは恨めしさうに左右を見廻し、細語く樣に何か云つたが、誰にも能くは聞えなかつた樣である。再び左右を見廻しながら、二步ばかり歩むと、脚の痛さに堪へないのか、ひよろ〳〵と危く見えて、終にぺたりと坐つた。人々は又其四周を取卷いた。

觀者の中から、いや其背後からつと前に出て、龜さんの傍に進寄つた女がある。人々の眼は悉く其女に集注つた。

色白の細面で、身材がすらりとして、何處やらに品格もある。眉つきから、鼻、口、何れも十人並で、黑味勝の目のきりゝとして、利發らしく、何處に出しても羞しからぬ女。年は廿五六にもならうか。これは龜さんの姉の初枝である。如何見ても姉弟とは見えない。其で同胞

の資質の母常で、龜さんが今日まで成人つたのは、此女の弟思ひの精と、檀家一統の惠とに依るのである。

賽立つて居た人々は、初枝が來たのを見て、少時は水を打つた樣に鎭つた。其で初枝が何とするかと、多くは氣の毒さうに眺めて居る。

初枝は坐つて居る弟の傍に立寄つて、暫と其姿を見詰めた。而して其眼を轉して、怨めしさうに荒物屋の息子を見た。再び弟を見返つた時には、眼に一杯涙をもつて、其が潸々と落ち掛るのを袖で押へて、少時は無言であつた。人々は顧り返つて、龜さんの爲にも、荒物屋の息子の爲にも、辯じて遣らうとする者もない。

「龜や、お前は何をして、其樣目に會ひやしたのけ。」と、問掛けた初枝の聲は、涙をもつて、顫へて、而も何處となく鋭かつた。

龜さんは坐つた處は動かず、瞬をするばかりで、仰いで姉の顔を見ようとも爲ない。

姉は弟の顔を覗き込んで、『お前、目が見えないのけ。これ、龜磨、わしらの顔見えないのけ。これ、見なさろ、お前の姉さアでねえけ。龜磨や、龜磨や、これ龜磨、如何されたのけ。何悪い事爲たか知んねえけんど、脚腰も立たねえで、眼まで見えねえ樣に……。』と、聲の末は涙聲になつて、終に抗へ得ないで泣出した。

泣聲の耳に入つたのか、龜さんは泣いて居る姉を眺めて、不思議さうな顔を爲て居たが、「へゝゝゝ。」と、例の如く笑ひ出した。

姉は弟の笑つた聲に、顔を上げて弟を見ると、弟も亦姉を見た。見合せた眼の何れにも涙は見えたが、姉と弟との涙は何れも思々の涙で、弟の涙は姉の涙と異つて居たのである。弟は姉と認め得ないで、其眼には單女の顔が映つたばかりである。

龜さんは再び異しく笑つて、立上るかと思ふと、現在姉にひしと抱きついた。

「これ、何する。龜磨、私らを何うするのけ。」と、初枝は龜さんの手をもぎ放さうとしたが、女の力に角ひ得ないで、危く既に倒されようとした。

人々は又々わツ／＼と騒ぎ立てた。

「騒いぢや不可いよ。姉弟の辨別まで無くなるたア、考へりや可哀想だ。」と、人々を制しながら、早くも龜さんの片腕を攫んだのは金花堂の市兵衛である。

「市兵衛さア。如何か爲て下さいやし。これ龜磨、姉だア云ふに、姉だア云ふに。」と、初枝は市兵衛に救を求めて、弟の手を放さうとし、顔は眞青になつて、聲もきれ／＼に顫へて居た。

『ようがす。私が引受けました。お前さんは其方へ退きなさるが好い。さア、好いかね。大層な力だ。えゝッ放さねえのか』と、市兵衛は終に龜さんを引放した。龜さんは、而かい、なるのを、市兵衛は相撲の手の泉川に極めつけ、『初枝さん、先にお出でなせえ。私が連れて行つて上げやせう。まア能いさ、樣子は後で話しやせうよ。斯うしといちやア、氣の上るばかりで爲樣がない。』

「難有う御在やす。お頼み申しやす。」

初枝は羞しさも羞し、氣遣はしさも氣遣はし、市兵衛に連れられ行く弟の後から、鬢の亂を掻上げる心も付かないで、悄然たる姿は、如何にも哀れに見えた。

觀者の三分の二は彼等の後を追うた。けれども、一人減り二人減り、法恩寺の門の此方迄は、尚ほ二三人見送つて居る者もあつたが、門を入る時には、はや一人も附いて來る者はなかつた。

市兵衛は漸と法恩寺の門内に龜さんを連込んで、先づ此で安心だと、初枝と顔を見合せた時、門の扉の蔭から出て來た者がある。市兵衛も初枝も其を認めなかつたが、あい、い、あせりながら鞘を捻

向けた綾さんは早くも其を認めて、尚々あせり出した。其とは知らぬ市兵衛は、此で逃げられて溜るもんかと呟きながら、益す綾さんの腕を捻上げる。初枝は誰か呼んで來て、市兵衛に力を添へさせたいと、前へ駈抜けようとした時、背後から聲を掛けた者がある。其聲は女の聲である。市兵衛も初枝も吃驚して振返つた。

『おい、綾さん、お前さん如何したんだね。何て意氣地のない人だらうねえ　金花堂の旦那、餘り手荒な事を爲ないで下さい。』

單聲を掛けられてさへ吃驚した市兵衛、今又思ひ掛けぬ言葉を聞いて、呆れ果てゝ見詰めて居るばかりである。初枝も餘り思ひ掛けないので、吃驚した脚も縮むばかりに覺えた。

市兵衛が手のゆるんだ途端に、綾さんは振切つて身を脱れて、女の傍に走つて行つて、其手を確と握つた。

『何だらうねえ、此人は。其樣眞似を爲ないで落付いておいでよ、外見惡いぢやないかね。今日からお前さんの家に置いて貰ふんだから、談話があるなら、寛々爲ようさ。何だねえ、まア、呼吸を都合してさ。ほゝほゝ。もう何樣事があつたツて、お前さんの傍は離れないよ。手なんか攫まないで、安心しておいでツたら。夫婦にならない中から、此樣に世話が燒けちや、お神さんに爲つてからが思遣られるよ。ほゝほゝほゝ。』

女は稻荷の崖のお辰――烏山にて其腕の入墨から、蝮蛇と綽號を得つた、稻荷の崖のお辰である。

市兵衛は容易くは手をつけ得ない。初枝は尚更である。雙方睨合つて、何れも無言。綾さんが嬉しさうに、へゝへッ〳〵と笑ふばかりである。

（三）

お辰の素性を知つて居る者は、烏山に一人もない。東京者であらうとは、其言葉によつて誰も疑はないのである。宇都宮から烏山に流れ込んだ事を、犬打童も知つて居るが、其以前は何處に居たのか。合戰場に居たと云ふ者もあれば、いや仙臺に居たと云ふ者もある。何れ海に千年川に千年の功の者、此烏山で山に千年の行をするのだと、渠に手を燒いた男が口惜まぎれに惡評を云つた事があるが、今日乞食同樣の境界に零ちても、尚ほ烏山を去らない所を見ると、或はさうかも知れないなどと中には眞面目な顏を爲て云つた者もある。

今でこそ何人も相手に爲ない、惡魔か何ぞの樣に怖氣を顫ふが、一時は烏山の花と迄評はれたのである。お辰が仲町の或旅店に着いた時は、天女の降臨つたかの樣に目を驚かして、渠が町中を見物して歩いたら、其後からぞろ〳〵と見物人の見物人が從いて歩いた位である。一月ばかり居る中に、江州の出店の主人の外妾になつた。其も一時で、一年ばかりの中に五人迄旦那を代へた爲に、妾として見返る者が無い樣になると、渠は忽ち遊女町に左褄を取つた。遊女町七軒百人の遊女は、渠一人が爲に顏色を失つたばかりでなく、目早い客は忽ち蝮蛇に呑み去らるゝので、三月ばかりの中に遊女町を構はれたのである。遊女町を構はれると、治町の酒樓に絃歌を涌かせて、一時は遊女町に客の跡を絶たせたが、其も亦一夢で、見込めば必ず呑む蝮蛇の毒氣を畏怖れ、猫の額ほどなる土地に、渠が爲に三人迄家を破つてから、那珂河畔の秋風に今盛の花は散つて了つたのである。此時烏山を見捨てたら、今の境界には零落なかつたかも知れぬが、今一人行掛けの駄賃にと、根強く烏山に祟らうとした報いか、渠が代々失望して、去來と思つた時は、酒樓からの前借買掛りなどの爲に、身動きも出來なかつた。

加之酒樓にも身を置きかぬる樣になつても、誰一人渠を憐れと見る者はなかつた。渠は夜眠るべき處もないので、稻荷の岸に一家死絶えた家の、尙無住であるのを倖にして、自分勝手に其家に住む事にしたのである。食ふべき物は素より無い。けれども、流石に乞食も出來ないので、乞食よりも尙劣つた畑荒し、玉蜀黍甘藷なぞを夜々盜んで、僅かに生命をつないで居るのである。乞食同様と云ふよりも、乞食にも劣つたと云ふ方が適當な境界に零落て了つたのである。

お辰は今此樣身分になつて居るから、遊女町へ往來の町の者、又は在郷者なぞを目的にして、金井町の燒跡に、夜々春を賣りに出る事にした。けれども、渠が顏を見ると、在郷者迄が相手に爲ないので、渠は小遣にさへ在付く事が出來なかつた。

或夜お辰が春を賣らんと、無理に燒跡に引張込んだ男を能く見ると、法恩寺の龜さんである。渠は咂舌をして、龜さんを突放した。其時渠は不圖考得いた事があるので、終に龜さんに春を敎へたのである。一たび敎へた後は、再び見返らとも爲ないのである。けれども、龜さんは每日稻荷の岸の孤屋にやつて來る。朝も來る、晩も來る、日に幾度となく來たけれども、渠は門口から追返して家內には入れなかつた。三日目にも龜さんは終日お辰が門に立つて居た。けれども、渠は僅かに窓から顏を見せたばかりである。四日目には窓をも閉めて、終に顏を見せなかつた。龜さんは淚を流して、恨めしさうに立去つた。

龜さんが金花堂を騷がし、仲町を騷がしたのは、此四日目の歸途なのである。

斯くの如く龜さんを弄んで、遂に顏さへ見せなかつたお辰が、何時の間にか法恩寺の門內に、却つて龜さんを待つて居ようとは……。

（四）

節は十一月の下旬である。四方山に抱かれて、懷にも似た烏山ではあるが、袷に羽織では凌ぎ惡い程の寒さで、見ゆる程の高山の嶺は、多くは白妙の雪の衣を重ねて居た。

今日は少し空模樣が惡く、まだ些と早過ぎるが、或は雪かとも思はるゝ雲の色。下駄の音が日中ながら冴えて、法恩寺の墓地は、霜柱で脚が堪りやしねえと、寺男が手に息を吐掛けながら口說いたほど寒い。

庫裡の圍爐裡に立膝して、手を翳し居る女がある。渠は稻荷の岸のお辰である。

此頃は中形の模樣も不明いほど、汚れて鼠色になつた單衣一枚に、身も袖も裂け綻れた羽織の、捻れた樣な眞綿の尾を引いたのを引掛けて居る。其でも地質は縮緬、其だけに又見惡さも一層である。帶も細帶の、此も縮緬の果とは見えるが、殆んど心ばかりになつたのを、二重廻して前で結んで居る。髮は無造作な櫛卷にして、脂氣もなく汚れても居るが、其なりに櫛の齒だけは、流石に末まで通つて居るらしい。動もすれば落掛り、而も風に弄ばれ勝ちの鬢の毛を、煩さうに搔上げる細い指の美しく白いのよりも、尙ほ白い瓜實の細面は、頰がこけて顴骨も露である。細き鼻は瘦せ過ぎ、淋しさうに見ゆる口元には脣の色を失ひ、一文字の眉も末に至つて形がくづれ、きれ長く權のある眼は陷んで、眉間に八字を描せて人を見る時、異樣な光は射るばかりで、如何にも凄い。廿八とか九とかであるのを、廿二とか三とか知つたか振の客の批評に委せて笑つた年も、いつか十歲を一年に窶れて、三十二三か四五かと見ゆる程である。

お辰は鐵火箸の長いので、圍爐裡の火を撥りながら、「おい、もつと炭を打込むが好いぢやア

ないか。何だねえ、吝嗇れた眞似を爲ないで、其處にあるのを一依打撒きな。何だッて、叱られやすッて。ほゝほゝ、どうせ元來ロハなんだらう。坊さんの癖に、餘程かたじけねえんだね。其樣んぢやア、老爺さん、お前なんぞにも好遇は爲たからね。好いや、もう少許辛棒お爲。私が愈よ龜さんのお神さんに爲りや、お前なんぞも可愛がつて上げるよ。如何したんだねえ。老爺さん顫へてるのかい。ほゝほゝ。お前を無理に抱いて寢ようと云やア爲まいし、胴顫なんぞ爲て、外見ないよ。早く炭を打込んでお吳れ。おゝ寒い。お寺なんてえもなア、どうせ陽氣な事アなからうが、いやに陰氣で、いやに惡寒いもんだね。」

お辰が對面に火に當つて居るのは、六十ばかりの老僕である。田舍漢の氣が小さく、お辰が樣を見るのも氣味が惡いので、頭を垂れ耳を潰し、而も落付いた顏をして、幾吹ともなく煙草を吃んで居る、煙管を持つた手の顫慄は止まらないで。

「鳥渡お貸し。」とお辰は突然に老僕が手から煙管を奪つた。「遠慮なしに御馳走になるよ。もう斷らなりや、ねえ老爺さん、一切親類交際の事さ。序でに袋も貸してお吳れ。」と、鳥渡煙管に引掛けて、煙草入迄取上げ、袋の中を覗いて見て、「おや、おや、昔なら山八だが、其丈にも吃めなささうだね。仕方がないや。飢じい時の不味ものなしだね。お前に贅澤云つたッて仕樣がないね。ねえ老爺さん。」と、呆氣にとられて居る老僕の顏を見ながら、一吸ひ吸つたが、ペッ／＼と唾液を吐いて、煙管と煙草入とを老僕の前に投け出した。老僕は慌てゝ其を拾つて、懷中に確と押込み、お辰の顏を見詰めて呼吸も爲得ない。

「何樣に羽尾打枯したッて、お辰さんにや、まだ其樣葉は吃めないんだよ。爺さん、お前奧へ行つてね、煙草を持つて來てお吳れ。いくら吝嗇だッて、和尙さんのはお前のの樣ぢやなからうね。水戶の雲井と迄は行かなくッても、東在の上葉位は吃んでるだらう。餘所行の煙草をお吳んなさいッて、お前持つて來てお吳れな。序でにね、金花堂の市兵衞さんにでも、龜さんの姉さんにでも──たしか初枝さんとか云ふんだね──、何方にでも好いから、さう云つてお吳れ。何時まで待たせなさるんですッて。早く、話をつけてお吳んなさいと云つてお吳れ。好いかい。串戯ぢやないやね、長く待つたりや、如何して吳れると云ふんだか。いくら惚れてる龜さんのお神さんになりたいからッて、白痴にされにや出掛けねえッて。好いかい。ほゝほゝ。豆を喰つた鳩ぢやアあるまいし、眼ばかりぱちくり爲せてやがるよ。好かねえ老爺だよ。」

お辰は老僕を見送つて冷笑つたが、「おゝ寒い。」と、肩を縮めて、「とうと炭を加ないで行つて了やアがツたよ。」と長火箸を伸して炭箱を引寄せ、まだ八分目ばかりある炭を、一時に圍爐裡に打投すと、炭の粉が煙の樣に火氣に煽られる。お辰は其を頭から被つて、顏を獅嚙めて、「これでも今ぢやア、曠着の一張羅だよ。」と、袖で拂つて居る。

『いやどうも、大層待たせて濟まなかつたね。』と、お辰の對面に坐つたのは金花堂の市兵衞である。お辰はじろりと見て膝を直した。

市兵衞は直ぐには口を開かず、先づ煙草を吃んで、至極落付を見せて居る。

お辰は冷笑つて口を切つた。

「金花堂の旦那、如何して下さる事になつたんですよ。お前さんが乃公に任せろとお云ひなさるから、お前さんなら根が江戶の人ぢやアあるし、萬更野暮な捌も爲なさるまいと、樂みに爲て待つてたんですよ。え、金花堂さん、如何して吳れなさるんですよ。」

市兵衛は首肯きながら、また一吹煙草を吃んで、又手呪とお辰の顏を眺めた。

『私に任せて呉れたからにや、決して悪い樣にや爲ねえ積りだ。だがね、お前に能く聞分けて貰ひてえ事があるんだ。お前も聞いて知つてるだらうが、俺さんの事に就いちやア、檀家任せで、和尙さんだツて自由にやアされねえ事になつてるのさ。俺さんの食扶持から衣服の世話まで、悉皆檀家で爲てるんだから、お前の事にした處が、和尙さんや初枝さんが勝手に如何する事も出來ねえのだ。ねえ、さう云ふ譯なんだから、今日此で直きに決めると云ふ事にや、如何しても運ばれねえ。聞き分けて貰ひてえと云ふのは、此處の事だ。好いかね、是非私に委せろと云つて、今更此樣事を云つたら、金花堂も口ほどに無え男だと、お前に笑はれるのも乃公は苦しい。苦しいけれども、如何も檀家任と聞いちやア、其に口出しは爲惡からうぢやねえか。口出しが爲惡いからと云つて、一旦委せて呉れろと云つたからにや、乃公が何處までも引受けて、お前の悪い樣にや決して爲ねえ。今日の處は乃公の腹で、多分の事も出來ねえが、多少何とか爲ようから、氣には入るめえが、も一度乃公に任せて貰はうぢやねえか。ねえお辰さん、其で不承して貰ひてえものだなア。』

左右追返した上で、其からの談判に爲たい。檀家一統を相手と云ふ事にすれば、お辰等も手の出し樣に困つて、談判の結了も速からうとは、市兵衛が初枝と相談した處の策である。

お辰は市兵衛が胸中を見透し得たかは知らぬ。けれども、檀家一統を相手に取るのは非常な不得策である。お辰も其を知らぬではない。市兵衛の策は、果してお辰が氣勢の幾分を折き得たのである。

お辰は態とらしく冷笑つて、

『旦那、此樣に長く待たせといて、お話はもう其ッ切りなんですかい。』

『さうさ。お前も話の解らねえ人ぢやなし、も一度私を買つて貰はうぢやないかね。』

『ふん。』と、お辰は鼻で笑つて横を向いた。

市兵衛もむかツとして、『ふんたア、何でい。乃公の云つた事が解らねえのか。』と、聲にも稍、角が立つた。

『旦那、お前さん怒つたのですか。』と、お辰は市兵衛が顏を見て、『ほゝほゝ、氣に觸つたら、勘忍してお呉んなさいよ。お前さんの樣でもない、怒るなア野暮ぢやありませんかね。東京の人の樣でもないのねえ。お前さんの云ひなさる事が解らないとか、又はお前さんの顏を潰したとか云ふのなら、そりや解かねえ事もあるまい。委せろと云ひなさるから、はいはいとお前さんの顏を立てゝ、其で任されたア、私の方で頼かありやア爲ないよ。ねえ旦那、さうぢやありませんか。私もお前さんの顏を立てるからにや、お前さんも私の云ふ事を、一條位は立つてお呉んなさるでせうね。え、金花堂の旦那。』

『如何しろと云ふんだ。』

『如何しろッたッて、解りの好い旦那の事だから、私が云はないでも、大概察して居なさるでせうね。其とも解らないの。解らなきやア、云ひませうかね。私を話のつく迄、此處へなり、お前さん處へなり、引取つてお呉んなさいと云ふ事さ。一吹貸してお呉んなさいよ。』と市兵衛が煙管を取つて、はたきもせずすうツと一つ吃んで、『あゝ漸と口が直つたよ。』と、澄したもの。

市兵衛はお辰が自分の煙管を口にしたのを見て、苦い顏をしながら、少時考へて居た。

『さうも行くめえよ。』と市兵衛は口を開いた。『此寺にやア、今も云つた通り、檀家に相談爲なけりや、人一箇でも無斷ぢやア置かれねえのだ。また乃公の家と云つた處で、お前の以前が以前

だから、と云つちやア、氣に觸るかも知らねえが、素人家にやまア不向と云ふもんだ。近所の手前もあるし……。」と、お辰が顔を睨と見て莞爾笑ひ、「どうだ、お辰さん。其樣違廻しの謎の掛競は、もう止す事にして、手取早く打明けるとしちや如何だ。若し折合ふなら、今日の中に談判を決定て了はうぢやねえか。お前が龜さんを、はゝはゝ、そりや云はねえでも知れ切つてらア。誰が好き好んで、はゝはゝ、相手も相手によるぢやアねえか。」

『何が其樣に可笑いんです。』と、お辰は態と眞顔になる。

市兵衛は尙ほ笑ひながら、『何がッて。相手も相手によるのさ。龜さんが相手ぢやねえか。誰がお前實情で彼樣人を、はゝゝ、大概乃公だッて察してるんさ。』

『おほゝゝ。可笑な事をお云ひなさるのね。龜さんだから、其で何ですッて。私が實情ぢや無いだらうと云ふんですか。』

『さうさ。』

『ふゝん。』とお辰は冷笑ひ、『お前さんなんか、男振が好くッて、怜悧な人で無くッちやア、女は惚れないものだと思つて居なさるんだね。それや素人の考でさアね。私なんざア欵が曲つてるから、其樣在來の何處へでも落こッてる樣な男は嫌ひさ。實情で惚れて、生命も不用いてえ位實がありやア、私の方だッて、自慢ぢやアねえが、腕の蝮蛇と列べて、其人の名を入墨つて、一生連添つて見たいと思ふんですのさ、お前さんには可笑いか知らないが、未だ龜さんの名こそ入墨らないけれど、私や龜さんに、一生委せたんですよ。龜さんも私に惚れてるんさ。私が一所に死なうと云つたら、龜さんは直きに死んで呉れるでせうよ。私に惚れて呉れたから、私も惚れたのさ。何も可笑い事アないぢやありませんかね。龜さんが彼樣人だからッて、餘り捨てた男でもありませんのさ。餘り笑つて貰ひますまいよ。男振で戀を爲やアしまいし。』

『はゝはゝ。成程、所以を聞きや難有いが、狂言も大概にして、早く大詰を見せた方が、お前の爲だらうぜ。』

『何ですッて。狂言と云ひなさるのかね。』

『さうさ。狂言と云やア、如何するんだ。』

『如何も爲やア爲ないのさ。お前さんの樣な人の相手に爲つてる隙はないからね、お前さんは自分勝手に何とでも熱を吹いてるが好いやね。東京の人だと言ふから些たア話が解るかと思つたら、矢張烏山の風吹烏でかア〳〵我鳴つてるばかりぢやア、お辰さんの相手にや、些と荷が勝ち過ぎた樣だね。何の事た。馬鹿々々しい。』

お辰が手の煙管を、市兵衛は引奪るより早く逆に取つて、

『何だと。も一遍云つて見やアがれ。』

『おほゝゝ。私を如何爲ようと云ふんだね。餘り騒がれちやア、臆病風が吹いてお寶物がお肌薄で居らッしやるから、些でも引いちやア龜さん難儀だよ。ねえ旦那、些とお靜かにお賴み申しますよ。乃公を買つて呉れ〳〵ッて、白癡が商賣に出やア爲まいし、腕が無くッて押の強いばかりぢやア、誰が相手にするもんかね。打つなら打つて見るが能いや。生身に疵でも付けて見なさい、其儘ぢや濟まさないから。其積りで、打つとも突くとも、さア勝手に爲てお呉れ。腕の入墨も伊達にや入れないよ。蝮蛇お辰を打つ氣なら、生殺しにされちや祟るかも知れねえから、息の根まで止める覺悟で、さアお打ち。何故打たないんだよ。打つのが厭なら突いてお呉れ。え、市さん、如何したてえんだね。へん、さう安くは打たれまいよ。打たないのなら、ねえ旦那、煙管をも一度貸してお呉んなさいな。』

あゝ、口が變挺來だ。一服貸して頂戴よ。煙管と戀たア、一度味を覺えちやア、一生忘れられないんだとねえ。ねえ金花堂さん、ほゝほゝほゝゝ。』

　飽まで不敵なお辰が樣子に、市兵衛も持餘した。身分の無い者を相手にして、爭ふ程損なものはない。お辰を打ち据ゑるのは手もない事である。引摺出して門前拂を喰はすのも、難い事ではない。けれども、形の如き女であるから、流石に手の付け惡い氣味もないではない。兎角は一旦機嫌を直させて、寺を引取らせた上で、靜かに相談して、旅費を與へて此烏山を去らせるのが、一番上策だと考へ付いた。

　市兵衛は顏色を和らげてお辰に對ひ、

『斯う爲つちやア、肝腎の話の方がお留守になる樣な譯だから、今の言葉の行違はまアお互に勘忍する事として、折合の付く樣な談判を爲ちやア如何だらう。』

　お辰も莞爾と笑つた。

『ほゝほゝ。旦那がさう折れて下さりや、私だッて憎まれ口を利きたかアありませんやね。ぢやア、早い處が、如何して下さるんですよ。』

『さア其處なんだ。先刻も云つた通り、檀家の方があるもんだから、今日は何うも運び惡い。其で今日はまア私が、ほんのお前の顏を潰さない丈の規模を附けるとして、明日にも明後日にも、私の方から相談に行く事に爲よう。餘り香しくも無からうが、其で今日の處は不承しといて貰ひたいね。』

　何と返事をするかと、市兵衛は氣遣ひながらお辰の顏を見詰めると、お辰は別段考へる程でもなく、容易く首肯いた。

『さう強情ばかりも張りますまいよ。ねえ。ぢやア、旦那にお委せ申しませう。今日は今日ですがね、此限り追拂ひなんぞは……。』

『大丈夫だ。其樣事をするもんかね。乃公も金花堂だ。お前が器用に承知して呉れたからにや、乃公も器用と迄は行かなくとも、出來るだけの事を爲よう。此は餘り些少いが、ほんの規模までだ。惡く思はないで。』

　市兵衛は懷中から紙包を出して、お辰に與へた。これは初枝と相談して、初めから包んで置いたのである。初めは一圓であつたが、市兵衛は懷中で又一圓を加へて、二圓にしたのである。

　お辰は紙包を輕く戴いて開いて見た。少時は何とも云はないで見詰めて居た。餘り面白からぬ顏付を爲ながら。

『氣の毒だけれども……。』と、市兵衛は言葉を添へた。

　お辰は首肯いて懷中して、

『明日にも來て下さいますね。』と、念を押した。

『明日か明後日か二日の中には屹度行くよ。其から、龜さんは先ア當分呼ばない樣に爲て貰ひたいね。』

　市兵衛が力を込めた頼みを、お辰は輕く首肯いて暇を告げ、明日を約して歸つて行つた。市兵衛は漸と呼吸をついた。

　蔭に偸聽きして居た初枝に、市兵衛は十分自分の意見を話すと、萬事宜敷頼むとの返辭だから、龜さんは當分寺から出さない樣にと、深く戒めて置いて我家に歸つた。

　十分注意を爲て居たのであるが、初枝が便所に入つた間に、龜さんは疾くも見えなくなつた。其は其日の夕方、燈の點くか點かないかの頃である。

　初枝は驚いて、金花堂に駈出した。

（五）

　先づ雪にはならなかつたが、那須山の雪颪は肌に砭するばかりである。夕方になつては風が一層勢を增して、颶風に限るひゆうッ〳〵と

鳴くが如き聲が、烏山を掠めて、那珂河の瀬音と互に競つて、國見峠の方へ消えて行く。寒さに怖れて、和泉町にも仲町にも金井町にも、烏山の南北を通じて三ヶ町の間に、一望全く人影を見ないのである。警察署と郵便局の瓦斯燈は、却つて淋しさを添へ、遊女町の樓々の軒提燈は、一個の影さへ見せて居ない。

稲荷の崖は金井町の西裏の南寄なのである。直ちに那珂河に枕んでは居ないが、下には小川があつて、其上に突出て居る高地である。三方は桑畑に圍まれて、人家と云つては、お辰が住んで居る家より外にはないのである。平日風穏かな日でも、何ほ寂寞に勝へないのに、況して今夜の様な時には、僅に臨んだ狐狸でさへ、恐らくは其棲を出づる事は出來ないであらう。朔風のみ吹荒るゝ稲荷の崖に、狐火の如き火の光が、忽ちにして明え、忽ちにして滅え、時々ぱツと焚立つ。此は彼のお辰の家より漏るので、稲荷の崖に於ける唯一の人類の棲家である。

此火の光を目的にして、暗黒々裡を朔風を負ひつゝ進み行く一箇の黒影がある。それは正しく人で、手には五合徳利を提げ、何やら口の内にて呟き、折々へゝツへゝツと笑ひつゝ行く。

黒影は漸く火の光の下に近づいた。家の内では早くも足音を聞付けたらしく、忽ち聲を掛けた。其聲は女で、これはお辰である。

『龜さんかえ。』

『へゝツ、へゝツ。』と、笑ふ聲は既に家の内に聞えて、お辰の前に立つたのは、彼の法恩寺の龜さんである。

『あい、御苦勞々々。』と、お辰は龜さんから酒徳利を受取つて、鳥渡香を嗅いで、指を入れて嘗めて見て、忽ち莞爾と笑つた。

『能く使を爲てお呉れだツたね。それでも、用が足りるから感心だよ。』

『へゝツ、へゝツ。』と、龜さんは例の如く笑つて居る。

『また笑ふよ。私や厭さ。何だか氣味が惡い様でね。』

『へゝへゝゝゝ。』

『またかえ、氣に爲るねえ。』と、お辰は徳利を、焚火に火燗にして、『冷酒も此樣に寒くなつちやア、もう燗酒の事だ。龜さん、お前向側からあたツてお居でな。今お燗が出來たら、お前にも一杯御馳走爲ようね。』

龜さんはお辰が傍を放れないで、既に微醺を帯びて居る上に火にあぶられて、ぽツと赤くなつたお辰の横顔を眺めて現はない。

お辰が家は六疊二間に、廣く土間が取つてある。土間には今焚火をして居るので、其火光で家内を見ると、疊もなく、障子もなく、釜もなく、竈もなく、人類の住み得べき準備は全く無いのである。壁に寄せて、堆く置かれた藁と、二三枚の席とは、お辰の起臥何れにも用ひらるゝ、晝夜の料らしい。此他には眞に一物をも留めない空屋である。門口は北に設けられ、其に隣りて小窓のある外には、何處にも息抜きさへ無いので、土間の焚火の煙の爲に、風が強くたかつたなら、迚も呼吸は吐けないであらう。

お辰は既や二三椀を傾け、息を長く吐いて、茶碗を龜さんに與へた。

『一杯ぎりだよ。後請は眞平だよ。さアお酌を爲てあげようね。其代りにや――此樣に可愛がツて遣る代りにや、何でも私の云ふ通りにするんだよ。さうかい。お前は其だから可愛いんだよ。先刻云つた事ア、忘れやア爲まいね。何だね、ちびり／＼飲まないで、ぐん／＼飲んで早くお返しな。』

龜さんはにこ／＼しながら、お辰の命の儘、一息に飲干して、茶碗を返した。

『能いよ、お前のお酌よりか、私や此方が勝

賀川なり、二本松なり、福島なり、或は方角を變へて、水戸へなり、何處へなりと都合次第で、推んで行く心算である。

龜さんを留守つた後で、お辰は今日歸途に買つて來た下物を出して、思ふまゝ飲み且食つた。久しく泄み得なかつた酒を、前に二合、後に五合、一滴も殘さなかつたのである。自分は何れ八合位と、多寡を括つて醉はぬ積りであるが、既に酒に飲まれて、また十分火に爍られて居る火力酒力は頭を捕へて、殆んど死人の如くした。躯は地上に倒れて、土を嘗め土を攫んで、挌なとして眠つて了つた。

風力は益々猛威を逞しくして、お辰が家はいゝゆらめきつゝある。法恩寺の鐘は今しも十時を告げた。家の外には、怪しき物音が聞えつゝある。

（六）

龜さんは何ほ來らざるか。

お辰は尚ほ昏睡りたるか。

土間の焚火は何ほ其餘燼をたもちたるか。

金花堂の市兵衛は初枝の報せによつて、龜さんを見たくなつた事を知り、そのお辰が家に行つた事を知つたのである。初枝は依頼ますり、自分も亦馳け掛つた用、瀬でも灘でも乘切つて見る積りであるから、直ぐにも迎ひに出掛ける筈であつたが、無據き用があつて、直ぐにと云ふ譯には行き兼ねた。當人に出会ふは、遅い方が却つて便利かも知れぬと、初枝にもその意を得させて、一應初枝を歸して、自分も當用に掛つて居た。

初枝が再び金花堂に來たのは、夜の八時である。其時までは、市兵衛の用事が未だ濟まなかつた。九時になり十時になり、漸と用が片付いたから、いさとばかり仲町を出たのは、十時少し過ぎでもあつたらうか。

風はます／＼勢荒んで、市兵衛は半分は其力で、仲町から金井町に吹送られた。金井町を裏に出ると、四方吹きはらした桑畑であるから、北風を左頬に受けて、耳も頰も切られる樣である

「ひどい風だな、おゝ寒いぞ、寒いぞ。困つた馬鹿坊主だ、彼樣惡婆に引掛けられて、乃公迄大弱りを爲せられる奴よ。一方が馬鹿で理窟がないんで、一方が蝮蛇と來てるから、始末におへないぞ。居て呉れりや好いがな。居たからうものなら大事だ。また那珂河へ網を入れるの？山の中を鉦太鼓で、迷子／＼も下さらないからた。何處に居て呉れりや好いがな。おゝ寒い／＼。意地惡く横面へ吹きつけやがる。」

市兵衛は獨語きながら、桑畑の間を稻荷の崖に辿つて行く。

突然にぱち／＼と云ふ音が聞えた。急かに向うが明るくなつた。吃驚して向うを見ると、今自分が尋ねて行かうと云ふ、稻荷の崖が火事だ。他に家はない、お辰の家が火事だ。と一散に路も選ばず駈出した。

稻荷の崖のお辰の家は、既に門口一面の火となつて居た。門の戸はまだ燃えぬけないが、窓は既に火に破られ、舐るが如き火焰は舌を吐いて、軒の藁葺を嘗めようとして居る。風は益す荒んで、見るが如き小家は、瞬間も堪へまいとさへ思はれた。

市兵衛は近づく儘一箇の黑影が火焰の中を駈廻るのを見出した。愈よ大變だ、と叫びながら駈付けて見ると、彼の黑影は龜さんが家の四周を駈廻つて居たのである。

「龜さん、火事だな。如何したんだ、如何したんだ」と、市兵衛が聲を掛けたけれども、龜さんは一言も答へず、輒ち高梁竿又は桑の枯枝なぞを抱へて來ては、火勢を助けようと投掛け

に居たのである。
　市兵衛は益す傲いて、馬鹿にしても爲る事が餘り馬鹿々々しいと、少時は聲も出なかつた。
「おい、何をするんだ。火事を焚付ける馬鹿が何處の國にあるもんか。お前にも呆れて了ふよ。お辰は如何したんだ。家内に居るのか。居ないのか。え、如何したんだ、龜さん、龜さん、如何したんだ。」
　龜さんは尚ほ答へない。依然として焚付を運んで居る。市兵衛は放棄つては置けないから、龜さんの腕を確と押へた。
　此時金井町の警鐘を打出した。龜さんは半鐘を聞くと、市兵衛に執られて居た腕を振解いて逃けようとした。市兵衛は又取つて押へて放さない。二人が爭つて居ると、背後に可怖しき音が聞えた。二人は吃驚して振返ると、門口の戸が燃拔けて倒れたのであつた。途端に人の呻る聲が聞えた。二人は又吃驚して能く見ると、家の内には一箇の人が、今しも起上らうとする所である。龜さんはあッと叫んで、べたりと坐つた。
　火の中で呻つたのはお辰である。渠は泥醉した儘、前後不覺で居たのである。自分の身さへ知らぬのであるから、龜さんと約束した法恩寺の十時の鐘を聞き付けよう筈がない。窓や戸の隙間から、段々に吹込む煙が、一陣怒濤しつゝ襲つた時、其火の餘燼が八面に散亂したのも、素より知らなかつたのである。火が發したのも知らぬのである。火は內から燃え、風は外から襲ひ、窓を打破つて、火氣の漸々盛ならんとしたのも、知らなかつたのである。泥醉して地上に俯臥したのは、渠が一時の僥倖で、さうでなくば疾くに焦死んで居たかも知れぬ。渠の兩手足の幾分かは、既に火に燒られて居た。然も尙ほ死なない事を得たのは、泥醉して居る爲に熱を感じないから、泣叫いで煙を食はないのと、顏を地に臥して火氣を吸込まなかつた故である。今や渠が運命の終りは迫つて、門口の戸は敢なくも燒倒れた。疾風は遠慮なく吹込んだ。火焰は容赦もなく地を這ひつゝ焚上つて、渠が醉も終に生きながらの焦熱地獄の苦痛には敵し得ないで、夢現の界に起上つた。けれども、火焰を横面に被りて、あッとばかり倒れた。倒れて起きようとして又倒れたので、渠は地上に這つて、僅かに一呼吸の安きを得たのである。
　龜さんと市兵衛とがお辰を火焰の中に認め得たのは、此時である。お辰が龜さんと市兵衛とを、家外に認め得たのも、亦此時である。お辰は苦しき聲を上げて叫んだ。
　龜さんはお辰に救ひを呼ぶ聲を聞いて、魂魄は天外に飛んだ。此時に於ての機轉は、元來遲に甘無なのである。渠は片手に確と市兵衛の袂を捉へ、片手にお辰を指さした。けれども、口は宛然啞の如くである。唯あゝと叫ぶさへ如何にも切なさうで。
　市兵衛も助けて遣りたいとは思ふ。けれども、火中に走り入つて救ふには、既に其時が後れて居た。渠も終に施す術も無いのである。
　火怒れば風走り、風怒れば火從ふ。煙は渦の如く卷いて、藁葺の片廂は既に落ちんとして居る。
　お辰は龜さんも市兵衛も、自分を救ひ得るの意なしと信ずると、忽ち一念の擬を呼び起して、居あがり瞋怒り、はたと睨んで、歯をきりきりと噛んだ。
「奴、能くも、欺して、市兵衛に話しやがつたな。酔つてる所を、や、や、殺すんだな。市兵衛、う、う、奴が智恵かッて、能くも……、能、能くも……」

其聲は胸を刺す樣で、斷々に顫へて居ただけに、大焦熱の苦も想ひ遣られる。

龜さんは云ふ所を知らない。單手を打振つて他意のないのを示し、涙は頰を流れて、口はべそをかいて居る。

市兵衞はお辰の怨みの言葉が、何の意を含んで居るのか、素より知らぬ所である。けれども、此火災に就いて、龜さんが何か關り知る所があるらしく覺り得た。覺り得ると共に、非常に愕いて、此も口を利き得なかつた。

龜さんと市兵衞とが强ひても辯解しようとする樣子がないので、お辰は自分が邪推を其と愈々深く信じた。其は放火の一大事を、愚鈍の龜麿が市兵衞に話し、市兵衞の入智惠で、却つて自分を燒殺すのだと邪推したのである。其であるから、腹が立つ、口惜い、怨めしい、情ない、悲しいの情が一時に發して、胸は裂ける樣で、挘られる樣で、何とも斯とも云はれたものでない。自らは非業と信じて燒殺されるのだものを。況して渠は蝮蛇のお辰である。

渠等が思ふも語るも聞くも一轉瞬の間である。轉瞬、刹那、風は狂ひ、火は舞ひ、家の生命も屋根へ焚拔けるのが終である。其終もはや何時までの生命であらう。

『あゝ、切ない、あゝ、だ、だ、誰か。えゝッ畜生めッ。ど、ど、如何するか見……。』

お辰は既や這つて居る事も出來なくなつた。土間の隅に逃げようとした時、又もや狂風は怒號して吹込んで、門口の戸の半分火になりながら未だ粉碎けないのを、今しも逃げようとするお辰が上に吹被らせた。お辰は悲鳴を發して飛上つた。火は粉碎になつて、頭とも云はず、顏とも云はず、衣服とも云はず、何處にも此處にも全身に降掛つた。大悲鳴は叫ばれて、彼は撻と倒れた。渠の逃げようとする心は、尙ほ立上つた。髮は殘らず焦げて了つた。衣服は袖も袂も裾も焚上る火である。手足は殆んど見定むるを得ない。苦しむ顏は、誰が能く見る事が出來よう。

龜さんは叫び、泣き、起ち、跪き、合掌し、念佛云ふ。

市兵衞も覺えず合掌した。

慘！ 慘！ 見るに忍びぬ。寫すに忍びぬ。

軈て撻と倒るゝ音のみ聞えた。

市兵衞はお辰が斃れたのを見て、急かに龜さんの手を引立てた。龜さんは殆んど歩み得ない。市兵衞は龜さんを引摺る樣にして、何者にか追はるゝが如く、路もない桑畑に紛れ込んだ。

人聲は近づく。提灯の火は桑畑の間に散見く。五ケ町の警鐘は尙ほ連打に打つて居る。

風は未だ止まない。終宵吹通すのであらうか。折々は尙ほ彼の怒號の聲も聞える。

＊　＊　＊　＊　＊

法恩寺の墓地の一隅に、卒塔婆一本の新墓が出來、常時香花の斷えた事はない。墓はお辰を葬つたので、每日々々參詣するのは龜さんである。必ず香花を手向けて、其眼は何時もうるんで居らぬ事はない。

龜さんは女の中に交らなくなつた。寧ろ厭ふ程である。娘を見て追掛けるなぞの事は勿論ない。狂言の假聲身振も僞なくなつた。無論遊女町に行く事もない樣になつた。

多辯とも云はれる程であつたが、殆んど啞兒の如くなつた。へゝッへゝッと笑ふ事ばかりは、今も昔も異らないのである。

人の居ない處なぞで、男と女と話でも爲て居ると、啞兒の如き渠の口は開かれるのである。

『へゝッへゝッ、危險えよ、危險えよ。』

（明治三十年作）

黒蜻蛉

（一）

年齢廿五六の男、風俗は職人。既に暮れんとする夏の日の、暑熱尚ほ堪へ難くてや、記章袢天の胸を開きて、浅黄の色褪せし手拭に汗を拭きつゝ、襟より腰には蔽ふものもなくて、裾も鼻緒も砂塵に汚れたる麻裏を、突掛草履の歩いそがしげなり。

身材は短き方にて、肉肥満たり。悪気なき丸顔の色白く、鼻は高からねど形状好く、細く長き眼は常に笑めるが如く、口は屹と結びたれど、むつかしげならず、耳を蔽ふばかりに伸びし頭髪は、垢づき乱れたり。

日本橋區濱町三丁目を傍眼もふらず、頭は重げなれど歩はせはしげなり。ふと面を上げて我ながら呆れし風情。

「何の事だ。おや〳〵。」と呟きつ歩を返し、右側なる薬種屋の横手の露路へ入りたり。

露路を入れば、奥には三軒立の棟割長屋。取付には相用の井戸あり。井戸に沿ひし長屋の一番軒より、足音を聞付けしにや顔を出だしは、[illegible]陸頭の老婆なり。

「與太さん。」と、老婆は通掛りし男を呼び掛け、「如何だつたい。産婆は居たかい。」と、眉根を顰めて返辭を伺ふ體。

與太郎は上眼に老婆を見て、點頭く様に合點し、「あゝ、直きに行くッて。」

「そりや好い鹽梅だ。早く來て見れねえぢや、何だか心細くッて。其もね、私に經驗がありやア、騒ぎやねえんだが、はら〳〵するばッかしで、役に立ちやア為ねえ。何方にしたッて早く來て貰ひてえ。それにお前、困ッちまふよ、ねこにも、と、拇指を出して眼を丸くし、此方にやア、お都賀さんが、今にも出産しさうに唸るッて、うん〳〵呻鳴つてるのに、徳利と首引きか何かで、怒鳴りッ通しだらうぢやないか。お都賀さんが可哀想だから、私もお前の歸宅る迄ともつて、今し方迄介抱てたんだけれどね、終にや私に噛つて掛るんだよ。お都賀さんにや氣の毒だが、仕様がねえから、いま引上げたところさ。お前早く歸宅つて遣んねえ、お都賀さんがお前を待つて泣いてるわな、可哀想に。」

「すまねえ、すまねえ。」と、與太郎は[illegible]に打詫びつゝ、嘆息す。[illegible]今は[illegible]。「なにお前、お前にや實に氣の毒さ、性來だから為様がねえが、お前の父さんだけれど、彼様人は無えよ。お前は孝行だし、お都賀さんは順しくするんだし、何にも不足アあるめえに、如何して彼様だらうかねえ。」

「どうも為様がねえ。叔母さん、お前にや實に濟まねえ。」

「あれ、また怒鳴つてるよ。早く歸宅つてお遣り。」

「實に為様がねえなア。」

與太郎は老婆に離れ、空屋を一軒隔てし長屋の東隅、我家の門口を入るより早く、小言は[illegible]へ落掛り來し。

「やい、與太、與太ン坊、何處を魔誤ついてやがるでい。噂の事だ。ぢやア、鼻汁ッ垂しめッ、二つ返辭で跳出しやアがッて、親に心配をやアがられえんだな。お都賀と共謀になつて、親に當りやアがるんだな。當るなら當つて見ろい、いゝ年は老つたッて[illegible]の吉五郎だ。」と

おねえよ。』
『爲樣がねえものを、何故こせえやアがッたんでい。』
『だッて……。困ッちまはア。』
『何だと。困ッちまふだア。』と、乘出すが如く顔を進めて眼を怒らし、『生意氣なことを拔かしやアがるない。箆棒めッ、手前の樣な意氣地なしにや、嚊は有てねえッて、最初ッから云つてるんだ。嚊を有ちやア兒が出來るてえなア、手前の樣な沒分曉漢にだッて、分らねえ事はあるめえ。今でせえ、箆棒めッ、たッた一人の親の口を乾しやがるぢやねえか。』
『家爺、靜かに云つて吳んねえな。』と、與太郎は家外を見返り、『外聞が惡いやね、親の口を乾すだなんて。』父を見る眼も自づと力む。
吉五郎は空になりし德利を板の間に投出し、『其面何でい。其樣面ア爲やがつて、如何爲ようと云ふんでい。やい與太ッ、手前外聞が惡いてえ事知つてる氣か。よう、與太ッ。』
與太郎は相手にたらざるこそ能けれ、とは思へども立ちもならず、今は佗くに尻を据ゑつ、腰の煙草袋を取り出し、伏目になりて煙草を吸む、其眉頭には顰みも見ゆ。
吉五郎は德利を取上げ、これ見よがしに振搖かしつ。『六十近い老親の口に、好い酒一杯宛行へねえで箆棒めッ、外聞が惡いたア、何吐しやがるんでい。年老つて樂が爲たけりやこそ、手前の樣な無氣力野郎を、馴れねえ男の手一つで人間並に爲て遣つたんだ、職業も碌素法出來ねえ木葉大工の癖しやがッて、直きに嚊の詮索よ。親へ樂な思ひもさせやがらねえで、嚊の御託も凄じいや。初めッから云はねえ事ちやねえんだぞ。お都賀が來やがッてから、口が殖えたの何のッて漸々乃公の口を締りやアがつて、此頃ぢやア五合と相場を定めッちまやアがつたぢやねえか。此上孩兒なんぞ出產されて、おたまり小法師があるもんかい。孩兒が生れりやア、乃公はどんな目に會はされるかも知れやしねえ。へん、老人の乾物なんざア、何處へ拵つてッたッて、錢にやなるめえぜ。加之に無言の脂ッ氣なしと來ちや、與太、手前捨所にも魔誤つくだらうぜ。』と云ひ止んで、空德利を傾けて茶碗へ傭がんとし、『へん、何の事アねえ、のゝ字を書いたッて初まらねえ奴よ。』と、又もや德利を投出しぬ。
『無えんだねえ。なけりや今買つて來るよ。濟まねえけれど、產婆が來る迄だ、鳥渡待つて吳んねえよ。お前の云ふ通り、お都賀を娶つたなア、自分が惡かつたから勘忍して吳んねえ。今更追出されるもんでもねえし、其に孩兒が出來ちやア、もう爲方がねえよ。お前が年老で、四肢は漸々きかなくなるし、其世話をさせてえと思つたから、お都賀を娶んだ樣なもの、如何した譯だか、お前の氣にや入らねえし、自分ア實に後悔してるんだ。だがね家爺、お前だッて孫だ。自分だッて自分の孩兒の面初めて見るんだから、今日は先づ目出度えんだ。子よりも孫は可愛いとさへ云ふ位だから、お前も勘忍して機嫌を直して吳んねえよ。今日一日——孩兒が出產しやアがるまで、後生だから機嫌を直して、溫和く飮酒で居て吳んねえ。產婆が來せいすりや、自分が大阪屋へ行つて、お前の飮みてえだけ、一升だッて二升だッて買つて來ようよ。後生だ、孩兒が出產するまで、家爺、耐忍して居て吳んねえ。』
『箆棒めッ、世間の奴等ア知らねえが、おらア孫の面なんざア見たくもねえんだ。お都賀の腹から出やがるんぢや、どうせ人間並の面アして居めえよ。手前、產婆なんざ呼ばねえで、香具師でも呼んで來やアがりや能いんだ。其方が餘程儲けづくだぜ。』
屏風の内には忍びかねてや、呻鳴る聲のいと

苦しげなり。

與太郎は屛風の方を見返り、また父の方に對ひて、『まア能いやね。どうせ碌な孩兒や出來めえよ。種々事を聞いちやア血が上るめえとも……。』と、靜かに立ちて屛風に立寄る。

吉五郎は見送りて冷笑ひ、『へへん、嗅となりや彼樣阿魔でも、憎くもねえさうだ。はゝはゝ。酉の市の賣殘りなら掃物だが、蟾蜍の隻目と來ちやア、昔なら兩國だが、今ぢやア奧山もんだ。生れた其子が蛇男。親の因果が子に報う、やア評判ぢや〳〵。』と、空徳利もて板の間を打ち敲く。

女房の手前氣の毒さは云ふにも足らず、萬一血の上る事ありもせばと、與太郎は挘りたき程切なき胸を、斯かる父を有ちし身の不勝と押鎮めても、流石に涙ぐみたる眼に、屛風の中をさし覗けば、お都賀は枕に額を押當て、岳父の惡口に裂けなんず胸の苦しさに、時を限つて催し來る陣痛を、聲立てまじと身を悶えて忍べる體。與太郎は見るに眼を閉ぢ、枕頭に坐りし膝は戰きたり。

お都賀の肩に手を掛けたる與太郎、『お都賀。』『え。』と、お都賀は顏も得あげで、僅かに漏らす返事だに、忍音にして涙をもちたり。

『辛棒して呉んねえ、よう。今なア、産婆も今來るから、霎時の間の辛棒だ。耐忍してなア、自分が知つてらア、手前が心配することアねえんだ。能いか。恨むない。恨んで呉れるな、よう。お願ひだ。』と、耳に口を寄せつゝ云へば、『あー、なアに、私や恨む――人を恨む事はねえよ、自分を恨むばかりなんだよ。だがね與太さん、私や實に因果なんだね。考へると……。』と云ひかけて、扨手に夫の手を確と握り、身を顫はしつゝ泣く。

（二）

お都賀は俗に厄年と云ふ十九。細面にして下品ならぬ面貌も、名から松皮と稱ばるゝ黑痘痕、眼さへ左には星入りたり、鼻も口も尋常ながら、眉毛は赤土の土手に、枯木の扶疎なるも斯くや。髮はいゝいゝぼじり卷の鬟も髱も、火の點くばかり脂なく亂れぬ。苦痛に神勞れ氣衰へ、結びし脣頭打顫ひ、夫を見上げし眼は、白眼に血さへ走りたり。

面は人の花、眼はまた面の花なるべし。色の白きにも七難は匿すと云ふに、面の色は黑きが上に赭味を帶ち、薄痘さへ可厭なるを、目に釘する松皮痘痕、吉五郎が口癖として、隻目の蟾蜍と罵れるも、憎きが上の惡口のみにはあらざりけり。

なべての上に美しきを愛づるは、自然なる人情、況して百年偕老の妻を選まんに、美人癡漢と眠れるが多き世に、如何なれば一つならず二つまで、花の色香なきをば摘りたりし、與太郎が意中こそ不審しけれ。

與太郎と吉五郎とは、血を分ちし親子にはあらざりけり。吉五郎が女房われに子なきを悲しみ、世話する者あるに任せ、親知らずの約束して、腹も痛めず我子となせしは、與太郎が二歳の秋の暮なりきと云ふ。

雛人形はおろか、狆猫さへ生けし子の心になりて愛づること、石女には多き例なれば、況して神かけ欲しかりし兒の、われを親とし馴染むに、他家の親には笑はるゝまで、限りもたう鍾愛がりし與太郎が養母は、今より十年以前、春三月雪降りし年の、其月の上旬より餘寒に中てられ、幸なく餘病さへ起りて、半月とは臥しもせで、散るを櫻花の盛りなる頃、脆くも世を捨てたりき。斯かりしより後與太郎は吉五郎が手に成人りて、聽てぞ小腕ながら父には勝り、朝夕に追はれざる迄にはなりけるなり。似た者夫婦のみにはあらざりけり。吉五郎は其妻に異

りて、與太郎を子とし愛せるならねば、女房世を去りし後は、職業思はしからずとて、我のみ酒臭き息を吐きても、與太郎へは朝夕を缺かしめし事も多かりき。斯くしつゝも尚ほ與太郎を養ひ、螟蛉なる由をも知らしめざりしは、思ひの外小腕の利きて、あはれ一人前の大工となりなん見込あれば、これに依りて老後を安くせんと思ひたればなりけり。養母が與太郎の螟蛉なる由を、彼のみにはあらず、世間へも深く包みし上、度々住居を轉へたれば、與太郎は其を知らん機會なかりき。父の辛きにつけては、飢に眠られざる夜半の枕に、亡母愛懐の涙に注げど、さて父を恨まん心はなく、命とし好きなる酒なるを、何程飲まれたればとて、何程の事かあるべき、稼ぐに追付く貧乏なしとさへ云ふものを、老後を樂しくさせてこそ、養育の恩の萬分一をも報ずるなれと、日毎の賃金は我手へ留めずして、悉く父に呈し、尚は酒料の不足ることを憂へ、おのれは粗衣粗食を分とし、花街は云ふも愚、つい鼻の前なる部代の矢場さへ覗きしことなかりき。されば、仲間の若者等には、交際を知らざる唐偏朴、さては愚頭與太と綽號せられて、列外にされたれども、我は我たり、人並に外るればとて何かあるべきと、其を口惜しと思ふ氣色だにあらざりき。

されども、節を知らず飽くことを知らず、限なき酒料ばかりかは、吉五郎が鯨飲三昧に、與太郎一箇の腕に油を絞ればとて、いかでか支ふることを得べき。稼いでも〳〵、朝夕の出入に不足を責められ、たま〳〵病氣或は職業なき爲め家に在れば、其日の料にも差はるゝ不始末。酒なければ瞬時もあり難き、父が不機嫌を見るが可厭さに、四苦八苦の算段も盡きがてなり。加之朝夕の炊事も其手にすなれば、四六時中心も骨も折れ果てんとし、怠るとにはあらねど、自然と職業に身の入らざる日さへあり。職業に身を入れねば、得意場の思惑悪しく、うけ悪ければ賃錢も少なく、結局は父の不機嫌を見ることぞ辛けれ。世をも人をも無情く覺えて、今は根氣も盡果てたるを棟梁の某見かねて、其が内幕を聞きもし協議をも遂げたる末、是を救はんには、女房を娶つの外あるまじと勸めけるを、肉身分けし親子差向にてさへ、圓滑は行き難き中へ、他人が入りてはと、與太郎最初の中は拒絶りたれども、女房は家を治むる道具、此なくては如何でか家始まるべき、家始まらずば、いかでか世に立つことを得べき、殊に父御の介抱を委み置かば、後やすく心も長閑に、職業にも充分身を入れらるべし[illegible]、自然と生活も樂になりて、父御[illegible]出來[illegible]道理にはあらずやと、眞心あ[illegible]、似合しき縁もあらばと縦み[illegible]父へ其由を告げけるに、吉五郎は心中面白からず、嫁とは云へど心置かれて從來の我儘はなるまじ、云はゞ敵を二人にするも同じこと、今でさへ酒料の不足勝なるに、人一箇殖えるだけ影響を食うて溜るものかと、[illegible]に應じて應ど云はねば、與太郎は板挾みになりて困じ果て、父不承知なるを如何にせん、押して娶らば娶つて風波の起る種ぞと、棟梁には謝絶りけるに、其樣没分曉漢の親があるものぞ、乃公に任せよと、吉五郎に會ひて理害を論しけるに、道理には横紙も破れず、澁面つくりながらも承知しければ、相談は早く嫁を迎ふるばかりに進みたりき。

斯くて、棟梁が媒酌に迎へしは、何處へ出しても羞しからぬ容女、色白にて眼に權をもち、口尻あがり小股しまりて、亭夫を引掛け善妻下駄を突掛けし姿は、與太には[illegible]と仲間に評判され、羨まるゝ迄夫婦間は睦まじかりしに、何とかしけん廿三日目に逃歸り、彼方より無理離緣をなりぬ。次に迎へしは、むつちり

した丸、眼の下に黒子あり、愛嬌ぽた／＼と落ちなん風情、年も十七咲出でし花に比べたりしに、或夜泣明せし次の日、吉五郎が洗湯へ行きし留守の間に見えずなりぬ。六人目迄は三十日とは辛棒せず、何れか逃歸りたれば、後には、何か有るまじき評判も立ちて、媒酌せんと云ふ者さへあらずなりき。七人目に來りしは、今の女房お都賀なりける。

與太郎は六人の女房に懲り果て、此上は一生獨身に暮すの外なし、父を見送りし上ならば、また御門徒をも願ひませうが、先づ其まではと、たま／＼世話せんと云ふ者あるをも謝絶りたりき。さるに、不思議なるは父の吉五郎、前に嫁を迎ふるは不承知なりしに似ず、頻りに與太郎を促し、一日も早く七人目を迎へよと云ふ。萬事に父の命を背かざる與太郎なれども、懲りる仔細ありて懲りたりし今日、容易くは承引かざりしに、餘りに迫らるゝ事の切なるより、又同じ事を繰返すも可厭なれど、詮方なきまゝ無益と思ひながらも、七人目を迎ふることとはなしけり。

生來の不具ならねば、容姿には望みなし、私唯素直にして實意深く、堅物の岳父の機嫌を損ねざらん女をとのみ望む。縁ある身には道理ある希望なれども、何かが隱れなき評判となりたれば、與太さん一人の處ならば、望んでも遣りたきものなれども、あの岳父殿がと、後を見するものみなりしに、去る人の世話にてお都賀と見合せし時は、いかに容姿に望みなしとは云ひながら、與太郎は此はと二の足を踏みたりしが、女らしき女には既に懲り果てたり、此女ならば去る事もあるまじ、花ありても實なくば何かせん、外見は瓦礫たりとも、内に金玉を包みたらんこそ、家に取りての寶なるべけれと、即座にお都賀を娶るべしと約したりき。斯くと聞きたる吉五郎、喜ぶかと思へば不承知を唱へて、一つには家の飾りともなるべき女房、醜貌にも程こそあれと難ずるを、一旦約せしを犬猫同樣、掌かへす違約もなるまじ、兎角に私が望みなればとて、終にお都賀を娶りたりき。前々の六人の嫁には異りて、お都賀が輿入の其夜より、吉五郎莞爾ともせざれば、岳父は辛き者とは聞きたれども、此ほど迄とは思ひ掛けざりき。とは云へ、兩親には幼時死別れ、憐みにすべき兄弟もなければ、親戚とても補つては呉れざる、生來ならねど不具に等しく、色も香もなき此身を、縁ものとは云ひながら、女房に爲つて呉れたる夫の志こそ忝なけれ、岳父の何程も辛くば辛かれ、見事に辛棒爲遂げて、鬼を佛に爲しなんこと、我心の持ち樣一つなるべしと、お都賀は健氣にも思ひ定めつ、留守勝なる夫、家にのみ在る岳父の何れへも、陰陽なく眞心もて仕へけるにぞ、今度こそはと、與太郎が頼母しく思へるには引更へ、吉五郎は朝から酒びたしの我儘三昧、下女同樣に追使へど、はい／＼と[illegible]しないには、野分もすさぶに張合なく、兎角して一月餘りは過ぎたりき。

或日の夕暮なりき、與太郎は例の職業に出でゝ留守なりしが、何事の發れるにや、お都賀は俄然泣聲立てつ、家外へ逃出しぬ。一軒おきて隣家の老婆、其聲を聞付けて馳來り、何事ぞと問へども、お都賀は仔細を云はで唯泣くのみ。家内をさし覗けば、吉五郎眼を怒らして突立ちたるが、家外まで追出でんとするにもあらず、老婆が來りしを見て、何とやらん手持無沙汰の氣色見ゆ。

老婆は解けかゝりしお都賀が帶を引締め遣りつ、「泣いてちやア見ツともねえよ。まア如何したてえんだね。お都賀さん、私に理由を話しなさるが能い。吉さん、お前さんも、樣子は知らねえけれど、まア勘忍して遣つて呉んなせい

よ、與太さんは留守し、まア靜かに……。お都賀さん、如何したてえんだよ。」と、雙方を押和め、樣子を問糺さんとすれども、お都賀は尙ほ泣入りて言葉はなし。

「お媼さん、放棄ツといて吳んねえ。太い阿魔だ。其樣面アしてやアがつて、生意氣を吐すたい。與太が歸宅つたら、何だとか吐しやアがつたな。うすら野呂の與太兵衞を誤魔化しやアがつて、能い加減な作言を吐きやアがると承知しねえぞ。何だッ、其面ア。昨日の蟷螂よろしくてえ面ア爲やアがつて生氣意な事吐すない。作言つきやアがると、生かしちや置かねえから、さう思つてやアがれ。お媼さん、放棄ツといて吳んねえ。此樣強情な……太い阿魔ツちやねえ。與太に何とでも云つて見ろい。作言をつくなら吐いて見ろい。」

いざと云はゞ、打ちも掛りたん吉五郎が見幕に、老婆は仔細は知らねど、また例の一件ではあるまいか、まさか今度のに其樣事はと、尙ほ疑ひを存しつゝお都賀を問糺むれど、泣入りて仔細を語らず、僅かに口を開きて、「何樣面ア爲て居たッて、ゝまで……。」と、云掛くれば、吉五郎が噛付く如き怒聲に、云はんとしては云ひかぬる風情なり。老婆は愈よ其と覺れど、知らず顏に吉五郎を和めつ、お都賀を慰めつ、兎角しける處へ、與太郎歸宅りたりき。

老婆は與太郎に對ひ、おのれが見し樣子を語りて、仔細は知らねど、お都賀どの惡きものなれば、惡き樣に誣の僞樣はお前の心に在るべし、互ひに他人が入つたなら、そこには蓋も入る道理、親子夫婦は人水入らずの和合をと、好機會にして歸り去りぬ。

與太郎は詫をするにも、謝せしむるにも、さし當つて迷惑したれど、何がなしに酒の事と、泣居るお都賀を叱りて酒屋へと走らせ、何事も酒に免じてと、膳を[illegible]はず下物も二三品、飲らぬ口ながら其身も脣を濡し、仔細は不言不語、一場の段落はつきたりき。

此よりの後、お都賀は吾父の顏を見れば、淺猿しやと思ふ心の動きて、包むとすれど色に出づれば、吉五郎は日續けに昨日の蟷螂と罵りつ、酒に怒を漏らして夫婦に當れば、與太郎が眉間の顰み、お都賀が眼の紅からざる日とてはなかりき。

斯かる中にお都賀は身姙りたりしが、他家にては打祝ふべきを、吉五郎と云ふものあればこそ、因果を宿せしかの如く打歎く、夫婦の意中こそ哀れなれ。

（三）

偉作にして血も上らず、嗜兒にも恙なく、お都賀は夫の優しきを[illegible]の守札とも縋りて、產婆來りし後は思ひの外に產も易く、身二つになりし嬉しさ何物にか比ふべき。

產聲にも力あり、男兒なりと聞くに、與太郎が喜ぶ顏を見るより、產婆も手柄顏に吉五郎が傍へさし付け、「御覽なさいまし。御器量好しで入ッしやいます。丸々とお肥りなすつて、此お可愛いこと。まア笑ひさうな顏をなさつて。」と、笑を含みつ、「まアお爺ちやんですよ。」と、愛想を花に孩兒を見せけるに、此時までも德利を放さざりし吉五郎、振向きだにせざれば、產婆は繼ぐべき言葉を失ひて呆れたり。

與太郎は斯くと見て、產婆が思はん所も氣の毒さに、『家翁、鳥渡見て遣つて吳んねえ。切角產婆さんが連れてッて吳れたんだよ。可愛くもあるめえけれど、ねえ家翁。』と、促されたる吉五郎、「何だ見て吳んねえだ。何を見るんでい。」と、漸くにして朦朧たる醉眼を此方へ向けたり。

「何だ。孩兒か。見ろてえた、此か。はゝ、不思議だなア。此でも人間並の面アしてやアが

るから、變挺來だなア。生れねえでも好いんだに……。痘痕面もしねえで、眼も雙方ある處がまア儲けもんだ。何だツて。可愛かろだア。産婆さん、串戲云ひッこなしだぜ。自分は此奴の方か、餘程可愛いや。なア、手前とが一番氣が合つてらア。何時見ても憎くねえな、手前ばかりだ。さアもう一ッ可愛がつて遣るべい。』

吉五郎が言葉の終れる途端に、屛風の中なるお都賀、はアと聲立てつゝ泣く。産婆は驚き呆れながら萬一の事ありてはと、與太郎へ眼顏の指圖に、與太郎はお都賀が手を屹と握りしめ、耳に口を寄せて、『今始まつた事ちやアねえや。耐忍して。能いか。氣を落付けてなア。何と云つたッて能いや。今手前が如何か爲つて見ろ、おいらが困るばかりぢやアねえや、何にも知らねえ孩兒が、第一可哀想だ。耐忍して哭んねえ。能いか。さア氣を落付けねえ。な、な、な！能いか。』と、吉五郎へ聞えざる程に慰めますなり。

お都賀は夫の心配するが氣の毒さに漸う涙を拭ひつ、袖より僅かに顏を脫し、與太郎を見て言葉はなく首肯きしが、見まじとすれど見ゆる屛風越の舅父の顏の、惡鬼羅刹よりも尙ほ怖ろしさと、當座の口惜しさと、行末の覺束なさとに、忍べども降りかゝる身を知る雨に、又も袖を蔽ひて泣く。

斯くて其日は暮れぬ。次の日より與太郎は職業を廢みて、お都賀が傍に付添ひ介抱なす。産婆への禮物を始め種々の費用、準備より二倍の上となりたるに、職業を廢める事とて、吉五郎が酒料を云ふ儘に應ぜざればとて、不足のたらたらを、朝まだきより怒鳴り立つるに、與太郎が困じ果つるよりも、傍に聽く身のお都賀の辛さ。夫の志の難有きに付けても、少しも早く床を上げてと、心急ぎのみせらるれど、重病の後に等しき疲勞に起きんとはもがけど、眼くらみ頭ふらつき、思ふ儘になり難きこそ術なけれ。

遠慮會釋もなき父に追使はれ、酒屋其外への走り使ひ、孩兒を懷にしての炊事、男の身にはなるまじき事を、いやな顏一つ見せず、朝から晩まで煙草のむ間もなき與太郎が骨折心配に、お都賀は耐へ兼ね、剽輕してはと止めらるるを、最早何の事もなければと起出で、足元の危きを見せじと踏みしめ／＼、まだ鉢卷は得脫らで臺所に立働くを、舅父が例の惡口は例の癖と耳にも止めず、其日より夫を勸めて、職業へと出し遣りぬ。後髮ひかるゝ心安からで、與太郎は一軒措きし隣家の老婆に留守の間を注意けてと、萬事を賴み置きて、漸く職業に出づることとなしけり。

一日も氣の晴々すると云ふ事はなけれど、孩兒の命名日も昨日と過ぎ、昨夜からは與吉々々と、日に夜に可愛さの勝りて、宮參をも身分相應に濟ましぬ。此頃は既やそろ／＼笑ひ掛くるに、食初の百日も明日となれば、贅澤らしうはあれども朱の膳と朱の腕、眞似ごとに等しき形ばかりの品ならば、高價きことはあるまじ、今日の歸宅掛けに、お前さんの見繕ひにて、調へて下されと女房の賴みに與太郎も首肯きて出行きたれば、お都賀は心嬉しく、夫の歸宅を午前より待受けたりき。

秋の日の暮れ易くて、隣家の質商の土藏に晷なくなりければ、お都賀は門に立ちて、夫の歸宅を今やと待ちける後に、大欠伸しつゝ午睡より目ざめし吉五郎、『げーい。あッあー、あー厭な氣持だ。何だ、もう暮れるのか。暮れようが暮れめえが、夜が明けようが明けめえが、其樣事にやア用はねえ。やい、お都賀。居ねえのか。何だ、其樣所へ茫然突立つてやアがツて、如何したてえんだ。さア早く燗を爲ねえか。いや、燗する前に、大阪屋へ行つて來るんだ。愚頭々々

しねえて、早くしろい。」と、叱咤するが如きは舅の何時の調子。
「おや、お掛をなすつたの。今行つて來ますよ。」と、お都賀は内に入りて、財布を出して中を探れば、こは不思議、今朝まで正かに在りたる銀貨合せて二十何錢、何時の間に何人か出せしか、數を盡して失せたるに胸を破し、驚き呆れて言葉も出でず。
吉五郎はぎよろりと見つ、「如何したてえんだ。何だ、其樣面ア爲やがつて。無えのか。酒買ふ錢が無えのか。」
「無い筈はないんだけれど……。」
「無えんだけれど、如何したてえんだ。」
「どうも不思議だ事。如何したてえんだらうなア。」
「不思議だ。何が不思議なんでい。財布へ入れてえたのが、無えてんだな。」
「えー、正かに、私が入れといたのに……」と、お都賀は首を傾けたり。
吉五郎はお都賀を睨みし眼を光らし、「なにを吐しやがるんでい。乃公が竊取したてえのか。」
『あれ、お家爺さん。さうぢやアありませんよ。』
「さうぢやねえ。さうでなきや、如何したてえんだ。やい、お都賀。考へて見ろい。能いか。此家に居るものア、手前と乃公と其孩兒と三人だ。能いか。其孩兒がよもや……手前の腹から出やアがつたんだが、手も足も動けねえで、眞逆盜は爲めえよ。能いか。して見りやア手前が盜んだてえんだ。ふざけた言吐しやがると、承知しねえぞ。」
「あれ、また、お家爺さん、何ですねえ。其樣事が……何人が其樣事を思ふもんですかね。」
「思はれて溜るかい。阿多福め。やい、毎日手前能くも其樣事を吐しやアがつたな。其樣事を吐すからにや、手前手證を見たてえんだな。面白えや。さア何處へでも引張つてけ。警察へでも、何處へでも突出して見ろい。」
お都賀は今は泣聲になり、「まア如何したら能いだらうねえ。お家爺さん、氣に觸つたら勘忍して下さいよ、何も其樣事を思つて云つたんぢやアないんですから。本統に飛んでもない。何樣にでも謝罪りますから。」と、吉五郎が前へ手を支き、詫言しつゝ涙はら〳〵と落しぬ。
「ぢやア何だな。手前が譫言を吐きやアがつて、其を乃公の所爲にする積りだつたんだな。』
「あれ、其樣……。如何してお家爺さんに……。其樣可怖しい事を……。」
「いや、さうだ。其に違いねえ。うぬッ、如何するか見やアがれ。」
吉五郎あはや拳撲らんとするに、お都賀は眞吉に怪我あらせてはと、『お家爺さん、勘忍して下さい。』と、叫びつゝ眞吉を抱へて、水口より家外へ逃出しけるに、折能くも與太郎歸り來りければ、お都賀は嬉しく、「お前さん。」と、ひしと夫に縋りて、遂に聲を立てゝ泣出したり。
與太郎は驚きながらも、また例の一件かと、故らに落付きて、其仔細を問ねんともせず、先づ傍にお都賀を制し、静かに家内に入り、早引見袋の煙草を手玩もて弄びなどして、さて父吉五郎へ會釋しぬ。吉五郎は與太郎が落付過ぎたるに、一入怒氣を加へ、「與太ッ、毎日を追出しちまへ。彼樣阿魔を宅に置くことアならねえぞ。」
「えッ。」と、與太郎は父の顔を仰ぎて、「追出しちまへッて。何だか知らねえが、家を勘忍して遣つて見んねえ。お都賀、手前早く來て謝罪つちまへ。不可ねえぢやアねえか。此から氣を付けろい。』
『謝罪つたッて承知出來ねえんだ。親に向やアがつて、竊盜呼ばはり爲やがつたんだ。」

「何だッて。家爺を窃盗だッて。お都賀、手前何を云つたんだ。家爺が窃盗なんて。他の事たア一處にされねえ。如何したんだ。如何した譯なんだ。さア其譯を話して見ろ。次第に依つちやア、おいらも承知出来ねえぞ。さア早く云はねえか。」

夫にまで誤解へられて何となるべき、とお都賀は先刻の始終を述べ了り「いくら私が氣が利かないからと云つて、お家爺さんを窃盗だなんて如何して其樣事を云やアしません。其樣可怖しい……。」と、云掛けて又もや泣聲になりて、末は確と聞取難し。

「はゝはゝゝ。」と、與太郎は笑ひ出し、「こりやア大失敗だ。家爺、勘忍して呉んねえ。お都賀、手前が悪いんでもねえんだ。おいらの大失敗なんだ。今朝手前が與吉が食初の祝の、膳と椀と欲しいてえから、今日歸路に買つて來て遣りてえと思つたんだが、懐合が悪いから、手前の財布をはたいて行つたんだ。云つて置かうと思つたんだがつい忘れッちまつて……。」と、頭を掻きつゝ父に對ひ、「さう云ふ次第なんだから、家爺勘忍して遣つて呉んねえ。おいらが大失敗だ。」

夫の言葉に胸撫下せしお都賀が眼前へ、與太郎は買來りし註文の品々を列べたり。

お都賀は膳と椀を手に取上げ、「お前さんが持つてくなら持つてくと、さう云つて置いてお呉れだと、此樣事にやならないのに。其を聞いて、實に安心したよ。」と、云ひつゝ手にせし物を熟視て、嬉しさは色に見えて莞爾し、「好い事ね、可愛らしくッて。」と、ひねくり既や餘念なけなり。

「塗が好いから、思つたよりか散財つて來た。財布の底を拂いちまつて、これ此通りだ。」與太郎財布を拂き見すれば、お都賀は心に驚き、ちッと夫の顏を見る。與太郎も其と氣付きて、失敗りたりと思へば、自然と眉間も曇るめり。

樣子を見居たる吉五郎、「與太、そりや何でい。鳥渡見せな。何だ、孩兒の祝の膳椀だと。馬鹿野郎め、何の眞似爲やがるんでい。大事の親の口を乾しやアがつて、其樣眞似爲て見てえんだな。えーッ。」と、罵るかと見る間に、足を上げてお都賀が方へ蹴付けたり。

あなやとばかりお都賀身を避せば、膳は飛んで柱に當りて緣離れ、椀は不運にも與吉が頭をいたと打つ。わッとばかりに泣出せば、餘りの事に與太郎も、「家爺、お前も餘り……。」と、云掛けしが思返し、さし垂頭きて眼を閉れば、お都賀は我も共音に泣きつゝ、「えゝ、だがよ〳〵。」と、與吉が頭を撫でつ擦りつ。

（四）

「如何だの、お都賀さん。今日は些たア快いかの。」

水を汲みにとて、井戸端に來りし隣家の老婆、溝を前にして小兒の襁褓を洗淨め居るお都賀に聲掛け、背に負ひたる與吉が顏をさし覗き、「睡眠だね。あれ笑ふよ、夢を見てるさうな。ほゝほ。まア何てい可愛い顏だらう。あれ、また笑ふよ。吉さんにや可愛くねえのかの。可哀さうに、酷い事を。まだ熱は解れねえかい。飛んでもねえお祖父さんだなう。」

「あー、まだ解めねえで困るのさ。」と、お都賀は老婆の顏を仰ぎ見、「爲方がねえやね、長いものにや卷かれろてえから。だがね、此兒も可哀想だよ。罪もねえ、何にも知らねえものを……寧そ死んぢまつた方が、此兒の幸福かも知れねえよ。ねえ、をばさん。」と、さし垂頭きて眼には涙見ゆ。

「戯言お云ひでないよ。お前が其樣ぢや爲樣がねえよ。なにお前、何時まで生きてられるもんでねえやね。其中にや樂にならアね。短氣を出

さねえで、辛棒してお居でよ。御覧な、また笑つてるよ。孩兒は本統に佛樣だなう。與太さんも辛い事たらう。お待ちよ、私が洗つて遣るから、早く浴けてお仕舞ひよ。さア能いかい。』

『はい、難有うよ。はゞかり樣。本統だよ、與太さんが可哀想さ。自分の亭主を稱めるんぢやねえけれど、彼樣好人物は滅多にありやしねえよ。本統に可哀想だよ。ねえお婆さん。大概の人なら、いくら親だッて、如彼に爲せちやア置かねえやね。自分勝手を云ふんぢやねえけれど、お爺爺さんが居なかッたら、與太さんも何程樂だか知れやア爲ねえよ。與吉坊だッて、此樣酷い……。』

『本統にさ。だがね、憎まれ者何とかとやらでね、自由にやならねえもんさ。もう長い事もあるめえよ。』

『勿論ねえけれど、餘り辛い時や、其樣感情も出るのさ、與太さんを樂にしてえと思ふとね。』

お都賀は洗ひし襁褓を絞らんと腰を伸し、露路より見ゆる本街の往來ざわつけるを見て、

『お婆さん、何かあるのかねえ。往來が大層賑かぢやアないかね。』

『うー、彼かい。彼やお前葬送があるんさ。』

『何家から出るんだらう。何人が死んだんだらうねえ。』

『私も今聞いたんだがね、それ此先の吳服屋の甲州屋さんね。彼家の旦那が一昨日の朝死んでたんだッて。其をお前、同室へ寢てえたお神さんが、些とも知らなかつたてえんで、世間ぢや種々な事を云つてるんさ。可哀想に彼のお神さんが、彼樣可愛らしい顏をしてえて、眞逆に其樣……。情人があるの何のッて、世間ぢやア云つてるんだが、眞逆其樣事アありや爲めえよ。』

『おや、まア。眞逆ねえ。其に何たてえぢやないかね。今ぢや嚴重しくッて、藥種屋だッてお上の規則があるてえから。』

『そりやアさうだがね。さうばかりも云へねえやね。「亭主投げるにや、何の手が好かろ、青い蜥蜴に蠅虎まぜて」ッて、唄にせえあらアね。』

『おや、其樣唄が……。』

『お前なんざア知るめえよ。私の娘の時代に流行つた唄なんだよ。「青い蜥蜴に蠅虎まぜて」、その後ア何とか云つたッけ。中々流行つたもんさ。』

『青い蜥蜴に蠅虎まぜてッて。可怖い唄だ。あゝ、慄然とする。』

折から甲州屋の葬送露路前を通ると聞くより、老婆は其を見物せんとて、草履に下駄踏み違しつゝ走り行く。お都賀は小唄を聞きてより、身柱寒き心地し、顏色さへ變りて、葬送を見んともせず、少時は茫然として立ちたりしが、古五郎に呼ばれて、急ぎ我家に入りたり。

* * * *

四五日過ぎての午後、お都賀は井戸端に、我が夫幼兒の衣服を洗濯しけるに、例の老婆も濯物せんとて出來り、何時も話種は盡きぬものにや、世間話に餘念なし。

『お婆さん、何の事もありやア爲ねえよ。唄なんか虚言なんだね。』

お都賀は斯く云ひて何氣なき體。老婆は聞くより吃驚し、覺えずお都賀の顏を見詰めたり。

『唄なんか虚だッて。お都賀さん、お前……。』

と、丸くせし眼に前後を見廻し、小聲になりて、

『お前、試しでも爲たのかい。』

『なアに。ほゝほゝゝ。お婆さん戯言云つちやア不可だよ。』とは云へども顏色かはり、無理笑の聲淋しげなり。

『其なら能いけれども、私や吃驚しッちまつたよ。』

『なアにね、唄なんかに在ることア、大概嘘だから、青蜥蜴なんか何にもなりや爲めえともつて、云はねえでも好いことを。ほゝほゝほゝ。』

『そりやさうさ。其樣事があつちやア溜らねえよ。お前の所の吉さんなんざ、何を食はしたツて效くめえよ。青蜥蜴で無效きやア、黑蜥蜴でも食はして遣るさ。はゝはゝゝゝ。』

『お婆さん、其樣事を。あゝ、可怖いこツた。』

『さうさね。串戲にも此樣事は。おや、もう暮れるよ。』

『私ももう止さうよ。お婆さん、また明日。』

『あー。與吉坊又熟睡だね。ぢやアお去らば。與太さんが歸つたら遊びにお出でよ。』

『えー、難有う。』

* 　* 　* 　*

或夜の事、與太郎は仲間の集會に夜を深かし、歸宅せしは十二時餘程過ぎし頃なりき。

戸外より聲を掛けれども答なく、戸をたゝけども返辭なし。詮方なさに戸をこぢ明けて内に入れば、燈火消えたり。不審ながら尚ほお都賀を呼びけるに、鼾聲だに聞ゆることなし。加之可厭な臭の胸を突くばかりなれば、心驚きせられて、火鉢を探り當てゝ燧木取出し、火を擦るより打驚きて、覺えず尻居に倒れたり。

父吉五郎耳口より血を吐き、拳を握りて死し居たるに、與太郎はあツと一聲、吃驚に打たれて何事とも辨へず。お都賀も見えねば、與吉も見えず、如何にせしやらんと、此にも思ひ惑へる折しも、隣家の老婆入り來り、懷には與吉を懷きたるに、與太郎は一層疑ひ起りつゝ、樣子や知りたると問へば、老婆も吉五郎が樣に膽を潰して、少時は息をもつかざりき。

老婆も樣子は知らねど、今より一時間ばかり前にお都賀來りて、買物に行きて歸り來る中、與吉を預りてと云ふに、今宵に限らず幾度も先例あり、何の仔細もあるまじと預りたりしが、今しも與太さんの聲聞えしより、與吉を返さんとて來り見れば、此有樣に膽を潰せしなりと云ふ。

與太郎は早くも手洋燈を點し、四邊見廻せば、今しも我が引出せし火鉢の抽匣にや挾まれたりし、手紙らしきものの落ちてあり。手早く取上げ見れば、お都賀より與太郎へ殘したる遺書なりき。與太郎は此にも膽を破し、遺書を見詰め、讀めども其意を解り得ず、持ちし手の戰慄はるるのみ。

：：自分ながら自分の氣が明りませぬ、何を爲たのか、唯夢の樣な氣が致し候、怖くて居ても立つても居られませぬ、死にゝ參り申候、私は氣が違つたのだから、氣違ひだと思つて、何卒勘忍して下さいよ、お前さまを樂にしたい、他に願ふ事は何にもないのです、私をおちたいでせう、殺したいでせう、私も殺されたいのが願に候、お前樣のお歸りを待ち候へども、待つて居る中も怖くツて、家内に居る事が出來ず候、坊はお隣の婆さんに預け置き候、可哀想なのは坊に候、坊に別れるのは悲しいけれど、生きては居られない私は惡人、人を、家爺を、勘忍し下され度候、惡人の子だけれどもお前さんの子だから、可愛がつて下され度候、私は死にゝ行きます、達者で居て下さい、坊も達者で居て下さい、あー書きたい、種々な事が書きたい、もう書けませぬ、まだ忘れた事が澤山あり候、坊を頼み候、惡いけれども勘忍して下されたく、どうか察して下されたく、此ばかりが願ひに候、もう紙が：：

紙盡きて筆も亦盡きたり。盡きざるは與太郎が遺憾と涙となり。傍より差覗く老婆も涙禁

の乗れば、懐中なる與吉も何に驚きけむ、わッとばかりに泣出しぬ。

人を頼みて警察署に訴へ、檢視を受け手續きをも濟し、其夜は父の屍を守り明し、心には掛りながら、お都賀の行方は探しかねたりき。

翌朝まだきに、警察署よりの召喚に出頭し見れば、濱町河岸の杭に流れ掛りし水死の女あり、人相其方が妻に似たればとの申渡しに、それはと驅付け見れば、面影も變らざるお都賀の死骸に、與太郎は人目も耻ぢず泣き倒れたり。

嫁と舅なれども敵同志を、同じ日にも爲されまじと、一日引續いて二箇の棺桶に、施主は與太郎と與吉と一日づつ、知れると知らざると、見る者泣かざるはなかりき。

晝間は乳を貰ひにとて、夜間は泣く子をすかさんとて、或は人の門に立ち、或は子守歌うたひ歩く、物の哀れは與太郎が上にぞ止めたりける。

（明治二十八年五月）

女子參政 蜃中樓

序

蜃中樓とは蜃が吐出した氣の中に玲瓏たる樓閣が層々疊々巍乎として出現せるを申せしものなるは、何人も御存じの事にて、彼れ蜃何等の幻術ありてかゝる手品を遣ふか、如何も不思議だ虛說だらうと或人に質せし所、イヤ一概にないとは云へぬ、理外の理と申して隨分奇幻な事もあるものなりとの說法に、成程と又或人に尋ねて見ると、そんな馬鹿な事があるものか、それは海天の水蒸氣に陸地の樓閣が映寫つたので、森羅萬象どんな事物でも理窟に合はぬと云ふ事はない、理外の理が聞いて呆れると一本遣込められ、成程之も御尤なり、扨何方に理窟が有るのか無いのか薩張理由が譯らず考へて見てもわからないから如此事は如何でもよいと有耶無耶にしてうつちやつて仕舞つた。此小說も之と一般で如此出來事が出來ようが出來まいが有らうが無からうが、女子に參政の權が有ると云へば無いと云ひ、ないといへばかんと云ふ。作者の意匠も有耶無耶で有るから、寓意も有耶無耶の中に有るでもよし無いでもよし。標題に僞なし。うやむやと筆を擱く。

柳浪子

第一回

汽笛長鳴一道の黑煙を殘して新橋を發しぬる列車は、早くも品川の停車場に達しぬ。「驛丁」品川引品川引。中等室よりは一人の老人出で去りしのみ。ヒラリ〳〵と乘込むもの二三人。そが中に年は十八九でもあらうか、よも廿年には上るまじとぞ見ゆる洋裝の美人あり。色はクッキりと白き中に、何となう淡紅を帶びたる桃の花を吉野紙にて二重程包みたらん樣なり。綠の烏髮は其色艶々しく、房々と束ねたるを細くして、美しき頸の傍りにわがねつ。眉は少しく濃き方にて、其間割合に狹きは怜悧の質をあらはし、半ば笑ひし薔薇の樣なる脣は、愛嬌づきたる中にキッとりキミありて女子には有り難き決斷に富むめり。大理石にて巧を凝らせしにやと見ゆる小さくして高き鼻に、跨り懸れる秋水の眼は細き方なれども、キレ長く、突然開きて見る時には隨分太うなりて微妙の威容も含めり。衣服のとりなりは都雅艶麗にていかほど踏倒した處が貴女の價には十分の品格。先づ車中の人々に會釋し、窓の傍りまでも送り來れる四五人の貴女等と握手、接吻、別意を表しける内に、汽車はコット〳〵動き初めぬ。美人は尙も窓外に顏を出し……半身を出し……ハンケチを振りしが、汽笛と共に停車場は見えずなりしや、漸に窓を離れ……袴をたゞし……徐かに座に就き、乘合の人々をズラリッと瞥見し、手提カバンの口を開きて何にやあらん小形の洋書を取り出で、眼と共に膝に置きつゝ默讀すめり。乘合の人々は十二三名もあるべし。官吏あり、紳士あり、書生あり、商人あり。服裝も雜多にてなか〳〵一々形容し得べくもあらず。其廿餘の眼は悉く件の美人に注ぎて離れず。おの〳〵種々の想像をいだきにさても美麗なる婦人も有るものかな、容顏とりなりの優にやさしき、

某殿の御前にてや在す。さるにても供人をも召連れず、中等とは人品に似合はざるぞ、さては貴女にてはあらざりき、歌妓の輩にや。さはれ逢り來りし婦人の中には某大臣の夫人某侯の御上もおはしましぬ。されはこそ平人にては在すまじ。讀み玉へるは如何なる書にやあらん。聖書かさては小說か。受け玉へる教育もさぞあらん。隣に倚けたるは何者ぞ。無下に賤しき人品なるに、彼の細腰と相摩し玉腕と相接しぬるぞ、如何なる好日月の下には生れぬる。車中の艷福は彼の者に止めけるよ。アレ眦を斜になし玉の顔を盗るゝ罵を。ソレ流涎か……危險りし無禮者めが。あはれ乃公と席を代へなば……イヤ此方より移り行かんか。抜も〳〵とうつゝになりし書生の手はゆるみてと思はず取り落せし新聞紙をハット慌てゝ取上げ、有繋は羞かしくや顔色青色に變じ、目に觸るゝ所を見當もつけず二三行ムク〳〵と讀み行き、猿の如き眼を斜にして再び美人に注ぎ、俄に一轉して相對せる紳士に向ひ、

「書生」イヤ先生、今日の新聞を御覽になりましたか。例の女子參政黨の運動が非常に活潑になりましたな。「紳士」ハハア未だ見ませんが、どんな事を記載て居ますな。「書生」マア御覽なさい。此處の所を……ソレ其處にあります。「紳士」成ツ、ハハア女子參政黨の運動……

と十行ばかりサラ〳〵と讀み去り、

「紳士」なか〳〵活潑になりましたな。昨日の集會で大阪の會議へ臨まする女學士の投票を施行したと見えるが、何人か其選に中りましたな。……エー山村敏子女史が最多數の投票を得て其選に當られ直ちに明日發程せらるゝ由。……フー山村敏子と云ふのは……「書生」非常の美人で、年こそ若いが學識もあり、經驗もある女丈夫と云ふ事です。「紳士」左樣々々、いつも厚生館や鴎遊館の演說會に出席する女學士ですた。「書生」さうです。其演說筆記を讀みましたがなか〳〵壯快な議論を吐きますぞ。女子參政黨の錚々なる女學士丈あるです。

此時廿餘の眼は再び彼の美人に集りしが、美人は少しも知らざるものの如く、尚ほも膝なる洋書を讀みて居れり。

「紳士」其演說で思ひ出すが、エヽト左樣さ、モウ十四五年にもなるが、國會開設第五記念會の會場で其頃の總理大臣の夫人が女子參政權と云ふ題を掲げて滔々懸河の辯を揮つて、女子と雖も參政權なき理由はあるまい、正理公道によりて妾等は參政の權を有するものなりと說き起し、非常なる熱心を以て其局を結ばうと一層聲を張り上げ、嗚呼同胞姉妹よ、姉妹は姉妹自身の護身の寶玉を暴戾なる惡漢に奪ひ去られて却つて惡漢其もの爲めに苦楚辛痛の境界に沈んで居るのを口惜しいとは思はれぬか、殘念とは考へられぬか、妾は思うて玆に至りますれば、精神激昂して胸も張り裂くばかりであります、嗚呼同胞姉妹よ、姉妹は妾等と共に協力して、姉妹固有の寶玉を彼の惡漢の手裏より奪ひ返さうとは思はれぬか、と說き了つて拍手喝采の中に控倒し、大騷動を仕た事があつたが、婦人の演說で以てあの位慷慨悲壯なのは我社會で聽いた事がないて。それから女子の參政論が非常な勢力を得たので、漸く二三年の經過で倒れる事は倒れたが、イヤハヤ一時は社會の秩序も爲めに紊亂して仕舞ふかと思つた位で……「書生」へヘエそりやア大變でしたな。僕なんざア漸く小學校へ通ふ位の時だから、殆んど記憶しないが、僕の母なんぞも其事から親父と喧嘩をしたさうで……ハ、ハ、イヤたか〳〵大變でしたら。「紳士」イヤヤウ

大變の何のと云つて一通りの騷ぎではなかつた。離婚の訴訟を起すやら決闘を挑むやら、中にも甚しかつたのは某大臣の令孃が今少しで結婚を仕ようと云ふ運びになつて居た某博士、即ち其情郎、を狙撃したなぞは、まるで狂氣の沙汰さ。處で當時の内閣が何の利する處があつたか、女子參政案を議院に提出したからたまらない。狂擾し切つて居た人心は、また一層の激昂を加へて、社會は實に浮雲の如しさ。「書生」實に非常ですな。裊娜娉婷綺羅にだも堪へざる夫人令孃が優艶なる固有の美德を捨てゝ、劣等なる職工社會にさへ稀れに見掛くる位の血まぶれ騷ぎを始めるなどは、まるで血の道の所爲としか思はれませんた。「紳士」左樣血の道……血の道に相違ない。評し得て妙だ。血の道より恐可きものはないてアハアハアハ。

紳士の隣に在りし六十歲許りの老紳士が、いかにも嘆息に勝へないと云ふ樣子で、

「老紳士」アア此樣なる急激不法の議論が頻りに我邦に流行するは、實に奇怪千萬ではあるが、これと云ふのも此三十有餘年の間輕躁浮誇の風が段々行はるゝ一證であつて……アーア嘆息の外なしです。「書生」イヤ老先生、先生の御心配なさる程でもありますまい。既に英國に於ても一昨年でしたか女子の投票がウエストミニスターに於て舉行され、昨年は佛國の代議院でも參政案を可決しましたが、將來の結果は如何でありませうか。今日から豫想する事は出來ないにしろ、それ程の妨害を社會の文明に與へる事もありますまい。「紳士」左樣々々、婦人の敎育と云ひ、智識と云ひ、其頃に比ぶれば非常に進步して居るから、以前程の騷ぎ程には過激な出來事も……

新聞記者らしき男が傍より突然と、

「記者」イヤさうでもありませんて。成程表面から觀察したらば、君の御論の樣に智識敎育が十分進步したに相違ないが、それと共に進んだのは何でありませう。即ち恐るべき驕慢心であります。アヽ優美なる婦德は地を拂つて、唯々傲然男子を凌辱しようと云ふ惡念の增長せる今日の婦女子が、どうして男子と調和親愛する事が出來ませうか。實に國家の爲めに憂ふべき事ではありませんか。「老紳士」然り／＼。實に名論。德行ある婦女には寳玉よりは光澤ありと素ロモンの云はれたのは其處の事ぢや。婦女子が十分に男子の愛敬を得ようと思へば、先づ婦德を高めるのが專一ぢやて。夫を何ぞや。今日の婦女子は妾等は唯女なるによりて尊重敬愛さるべきものだと心得て居るのは、實に誤謬の甚だしきものでは御座らぬか。「記者」老先生、御尤です。萬一これ等の婦女子に怪我にも參政權を與へる樣な事があつたら、それこそ大變、再び二十年度の血の道騷ぎを今日に見る事になりませう。

年の頃五十ばかりの商人、

「商人」ヘヘエそんなに血の道が流行りませうか。能い事を伺ひました。早速賣藥やを開店しまして、淸婦湯や實母散の賣廣めでも致しませう。ハ、、、、。「皆々」ハ、、、ハ、、、、。

と哄然一笑して又々眼は美人の身上に集りぬ。

此時美人は少しく耳を傾けしやに見えしが、商人の辭の切れしを好機とや思ひけん、突然座を離れて突立ちぬ。スハ美人の怒りを招きしよ、如何なる議論をや云ひ出でぬらんと、廿餘の視線の蒐りし美人の秋水は、怒りを含みて見ゆるものから、俄に莞爾と片頰に笑みて徐かに人々に會釋をなし、今や嫣たる桃の脣を開きて雛鶯の音を發せんとする機會に、先刻より隅の

傍に頭を傾れつゝ人々の話を聴き居たる官員風の年は四十左右の男が出抜けに美人に向ひて、

「官員」山村のお嬢さん。‥‥敏子さん。‥‥お嬢さん

と呼び掛くるにぞ、美人は静に開かんとせし脣を堅と結びて其人を見るに、父某と同郷の人にて、今は總理大臣の秘書官なる谷川登なりければ、丁寧に挨拶の禮を與へて、

「敏子」オヤ谷川さんで入らッしやいましたの。妾は少しも存じませんでしたよ。誠に失禮を致しましたネエ。「谷川」イエ如何致して私こそ、‥‥大森から乗車致した時に能く似たお人とは思つたが、書籍を御覧なすつてお顔が能く識別んので突然お尋ねも致し惡く態と扣へて居たのですが、何方へお出掛です。殊にお一人で。「敏子」ハイアノ急に思立ちましてネエ。大阪へ參るので御在ますよ。「谷川」ヘエ大阪へ。それは一向に存じませんで。御親類へ御逗留にでもお出でなさるので。「敏子」ハイ何れ櫻田へも尋ねます積りではありますが、今度は氣樂な旅行ではありませず。參政黨の黨用を帶びて參るのですから。「谷川」ハヽアそれでは例の參政黨一件で大阪の大集會に御出席なさるので。「敏子」ハイ時日が大變に切迫して居ますので、昨日急に下阪する事に決しましたのですよ。如何せ妾なんぞが參つたッて仕方がありませんけれども、何でも妾に行れと黨員がお勸告なさいますし、御存じの通りのお先き走りだもんですから。オホヽヽヽ。「谷川」イヤ結構です。智識もあり名望もある貴婦人に富んでお出の參政黨から、未だお年若の貴嬢を推撰して、東京黨員の代理とせられたのは、固より夫丈けの學識德行ある貴嬢なればこそ此重大の責任ある名譽を得られたので、中々容易な事ではありませぬ。過刻から同車の諸君も色々評論があつた樣でしたが、中々重大な問題ですから小心と勇氣とを併用されて、年來の希望をお達しなさるを希望します。イヤ何も彼も御承知の貴嬢に箇樣な事を申すのはルーサーに説法とやら、ハヽヽハヽヽ、今にお子さんの樣な心持が致すのでハヽヽハヽヽ。

敏子も微しく笑を含みて、

「敏子」イエ如何致しまして、御存じの通り學問もありませず、經驗にも乏しい妾の事で御在ますから、どうせ黨員方の御希望通りに滿足を與へるのは覺束なう御在ますが、一旦黨員の依頼を受けて見ますと、力の及びます限りは、例ひ生命を擲ちましても、主義の爲めに犠牲となりましても、決して厭ひません決心で御在ますよ。ホヽ、此樣事を申して生意氣な女だと御思召も羞しう御在ますネエ。

谷川は二つ三つ頭をふり、ア、壯烈なものだと云はぬばかりの面色にて、

「谷川」如何して如何して生意氣な事がありませうか。夫程の御決心がなければ、イヤ御決心が必要であるので我黨も最も貴嬢に望む所ですが、呉々切望するのは避けられる丈けは粗暴な手段はお避けなすッて、何處迄も平和の手段に出でらるゝのを。‥‥先年一時は天下を震動する程の勢力を得ました平權黨も、激昂のあまりに社會の秩序を紊亂する樣な暴擧を企てた曉、終に輿望を失つて倒れた事もありますから。「敏子」ハイ御注意は難有う御在ます。お禮を申しますが、我參政黨員にはそんな粗暴な姉は決して無い積りで御在ますよ。淸婦湯の必要もありますまいと存じますよ。例ひ血の道から起つた事に致しましても、此血の道は何物が起させたのでありませうか。人權否社會の如何なる不調和から起つたのでありませうか。嗚呼、[illegible]同

貴姉妹が日夜苦痛に沈みつゝある血の道は、何等の靈藥を用ひて全快致しませうか。清婦湯でありませうか。實母散でありませうか。否々是等の草根木皮ではありません。正理公道によりて調製しました參政權と云ふ一粒の萬金丹であります。嗚呼諸君よ、諸君は妾等……が、

「呼夫」鶴見引　鶴見引し

山村の敏子は、過刻より此美人が彼の女學士でありしか、汝手も/\と敏子の顔をのみ見詰めたりし同車の人々に對ひ、今や滿腔の熱血を注ぎ一先きの評論に駁撃を試みんとせし演説も、驛夫の爲めに腰を折られければ、遺憾ながらも座にかへり、再び運轉を始むるを待ちて件の演説を續がんとせしに、谷川は之を止めて、

「谷川」何れ東海道鐵道でせうから、神奈川停車場でお別離ですな……

と紙入より一葉の名刺を取出し、

「谷川」現に大阪改進黨員で久松幹雄と云ふ男は、隨分學力もあり、思想もあり、中々有爲の人物で、何かに付けて御相談相手に爲らうと思ひますから、私よりも電信にて御紹介致して置きませうが、此名刺をお持參なすッて御閑暇の折にお尋ねなさる樣に致したら御在ますた。」「敏子」ハイ大阪へ行りましたら早速お訪問致しませう。兼々お名は伺つて居ましてもお目に懸つた事はありませんが、貴公の御知己では猶更幸ひで御在ますから……それでは御名刺は頂戴致しますよ。

と名刺を請ひ受け、手に携へし洋書に挾みてカバンに納めける。折柄汽車は早くも神奈川の停車場に着しぬ。

第二回

大阪の北濱と中の島公園とを接續せる難波橋の鐵橋を南より北へ渡りつゝある一箇の婦人、年は二十の上を一つ二つや越えぬらん。中脊にして豐肌なり。さはれ不恰好と云ふ迄にはあらず。爲永時代の美人相ではなけれど、所謂當世ポチャ丸の婀娜ッぽい方、きまり通り新月の眉、秋水の目元、唯少しく上瞼が重たさうにて睡起ではなきかと見ゆれど、こゝの處が千タラだと意を傷ます若殿原もあるべし。髪の束ね樣、衣裳のとり合せによりて察するに、これが平生のたしなみとは見えず、夜會にでも臨まうと云ふ打扮、足の運び方などは大概な男よりも活潑さうにて、洋袴のさばきも馴れたものなり。箇樣に活潑な足どり故、かの長々しき鐵橋をば早くも渡り了りて公園の彼方此方を見廻しつゝありしが、倏ち木の間に姿を隱しぬ。……驀て記念碑の傍より現はれ出で……し足……ぬき足共同腰掛に倚りて人待顔なる紳士の背後に廻り出で、突然肩の邊をグット摑む。紳士は不意の攻擊にハット腰掛を離れ振返りて屹と睨みしが、婦人はさも嬉しさうなる聲音にて、

「婦人」オホオホオホ。「紳士」エ、艶子さんか。吃驚した。サン/\人を等候して置いて嚇殺もないもんだ。「艶子」ホヽ餘り憎らしいからですよ。オヽ苦しい呼吸が、ハズムわ。何でも先に來ようと思つて一生懸命急いだのに憎らしいよ。「紳士」ハヽヽ、何の事だ先に來て待たされた上に憎まれた日にやア好い面皮だ。

と戯れつゝも腰掛にかゝれば、艶子も同じく座を占めぬ。此紳士の容貌と其打扮をいかにと云ふに、年は二十六七なるべし、中肉中脊にして、色白く、眉秀で、鼻筋通り、唇は朱を塗りしが如く、齒は瓜核を列べたらん樣なり。モミアゲの濃きと額際の雁金とは、此男が最も得意の處なるべく、眼は儼然とした方にはあらねど、十分の愛嬌を含みたれば、婦人の心を動かす作用は此處にありとぞ見ゆめる。黒のフロック

コートに黒の絹帽子を冠りて、胸間にはゴールの鎖燦然と輝やく。ポッケットよりハンカチーフを出してプーンと鼻汁をかみ、人中を三四度クッ／＼と拭ひ、「紳士」今日は珍しくお歩行ですな。夜會に行くのに馬車なしも妙なものだ。「艶子」そりやアさうですわ。如何して／＼歩行くことなんざア出來やアしませんけども、過刻の手紙にも云つてあげたでせう。ソレ東京の從妹が來たもんだから。「紳士」さうだツて、エ、と山村鍾子さんとか云つて、東京參政黨の女學士だと新聞紙にも出て居た。昨朝の浪華タイムスにも。「艶子」ハアその鍾子さんと云ふ從妹が……「紳士」鍾子さんが來たと云つて馬車に乘れないと云ふのも變な譯だ。「艶子」夫れが斯うですよ。今晩は舞踏に鍾子さんも招待されてお出だから、お前が案内をして遣るが能いツて叔母さんがお云ひですのさ。否と云ふ譯にはいかないぢやアありませんかネエ。敏子さんの方へは叔母さんから文がまゐつて、艶子が誘引にあがると云つてあるもんだから、それで家を出る時は馬車で出たんですワ。「紳士」フウーその馬車は如何おしです。「艶子」馬車……それはネエあの橋詰で下りてネエ、馬車ばかしを鍾子さんの旅宿へ迎へにやつたんでさアネ。「紳士」馬車ばかり……貴孃がお出でなくツても能いのかネ。「艶子」能い事はありませんわネ。だけども妾が行けば郎君と此園で斯うやつてお目に掛る事が出來ないから……少し脇へ廻る要用が出來まして中の島の公園でお待ち合せ申しますツて、千吉（御者なるべし）へよう云ひ含めて遣りましたわ。……浮田さん、妾は是程までに思つて居るのに、それに郎君は……ア、氣が氣ぢやアないわ。「浮田」エ何が。「艶子」何がツておとぼけだよ。エ、憎らしい。「浮田」アイタ、アイタ、ア、痛い。譯も云はずに、憎らしい、ブツのは亂暴だ。「艶子」亂暴でもよう御在ますよ。人には如此に氣を揉せて置いて郎君は矢張今でも松山の操さんの事で種々苦勞をしてお出なさるからさ。「艶子」エ、またあんな事を云つて誤魔化さうと思つて、憎……ホ、ホ、ホ、。「浮田」ヘン以前の事を云へばお互さ。さう云ふ人も久松の幹雄さんには……餘り人の事ばかりは云はれまい。去年の舞踏の間違から、仕方なしに斯う云ふ譯になつたから憮脈ながら、……「艶子」エ仕方なしに……憮脈ながら……浮田さん、郎君は仕方なしに憮脈ながらかも知りませんかネ、今更其樣事を仰つたツて、それやア餘り薄情ですよ、如何したの、違たつたか……久松さんを……無葉つた事も無いぢやアありませんけれども、郎君と如此譯になつてからは、彼樣に頑固ばかし云つて、お由の兩親の目を偸んで、あの、あの、と都合をする苦勞は並大抵ではありませんよ。だから早く兩親に申込んで、結婚の出來る樣にして下さいましなネエ。「浮田」それは我輩も御同樣で、早く結婚をするのは最も希望する處であるが、先日もお話した通りまだ財産が……其財産が此地にないので、例ひ御兩親に申込んだ處が、何處の馬の骨か何樣身元の者か、一個の貧書生としか思はれぬ我輩に、オイソレと御承諾もあるまい。「艶子」イ、エそりや郎君の遁辭ですよ。先日のお話に、お國には令尊の御遺言でそれ相應の財産をお兄いさんが預つて居らツしやるぢやアありませんか。眞實に妾を思つて下さるのなら、今財産を取寄せると云ふ必用があるのではなし、唯お兄いさんに御照會なすツて財産の有無を證據立さへなされば宜いんぢやありませんか。其上で兩親へ申込んでさへ下すツたら、兩親

だッてさう頑固な事ばかしを云やアしませんわネ。例ひ頑固な事を云つたにしろ、自由結婚の今日ですものを、其時は如何でもなりますさア。ネエ浮田さん、後生ですから一日も早くさうして下さいな。ネニ。エ。エ。

浮田は先ほどより傍を對きて眉間に八字を寄せ、いかに答へて此攻撃を避けんかと、いろ〳〵に思案なせども當意即妙の智恵も出でねば、却つて無造作に、

「浮田」そりやさうサ。さうすりやア譯はない。何も譯はないのだが、少々事情があるので：：「艶子」エ事情：：其事情とは何ですよ。先日から尋ねたツて何時も曖昧な事ばかし云つてエ：：浮田さん、其事情とは何ですよ。早く云つてお聞かせなさいよ。「浮田」エエーナニ何でもウウー其内には話さなくッても：：「艶子」いやですよ。浮田さん、モウ其遁辭は聞きませんよ。サア早くサア。「浮田」マア其樣に性急なくとも。「艶子」いや〳〵、ア、自烈體よ。「浮田」ウウー。

此艶子と云へるは、浪華の豪商櫻田千樹の愛女にて、母は山村の鄕子が亡母の姉なれば、鄕子とは從姉妹なり。大學へこそ入らね高等中學は卒業せし程にて相應の智育をも德育をも受けぬれば、靜淑き方にはあらねどお轉婆の渾名を下すは無理なり。素より女兒とては艶子のみなれば兩親の鍾愛は插頭の花掌中の玉も啻ならず。早や破瓜にもなりぬれば、よき婿がねを選びてと、人にも賴み兩親も探求しぬれど、所謂襷には長し帶には短く、此五六年を空しく過しぬ。されば艶子は大概な女なれば、一人二人の子供をも設けぬべき年となりて猶空閨を守りぬることのいと淋しく覺ゆるものから、多情淫蕩の性ならぬもいつしか壯年才子をもて世にうたはるゝ久松幹雄といへるに懸想し、人知らぬ思ひの積りては遣るせなく、先づ母なる人に事由を打明け、父の許容をも得てければ、人もて久松に云ひ遣りたるに、幹雄といへるは獨子にて、婿とありては應じ難し、賜はらば申受けんが、そも今と申しては、：：：まづ少時は交際を結びて、互の性情をも知了たる上、また其時の相談もあるべしと、一理ある久松の答辭に艶子は滿足すべくもあらねど、一概に拒絶られたと云ふでもなく、後來の期望がないでもなし、殊には今より久松氏と公然て交際る身となりしを、せめてもの排憂と、某會の舞踏、某家の夜會にも、久松と手を携へ馬車を共にし、傍觀には夫婦とも見らるゝ程いと親しく往來りける內、或時某家の夜會に臨みて第一場の舞踏は既に了りぬ。第二場には間もあるべし。イザ庭內を逍遙して少時なりとも呼吸を休ぎなん、久松の君は何處におはすと、彼處此處を尋ぬれど、幹雄は何れの席にやまじりぬらん、影だにも見えねば、今は同伴者もなくて唯一箇庭に下りて隨意逍遙しつゝありぬ。折しも烏羽玉の暗夜にはあれど、室內より燈光のさせると、處々に點せる瓦斯燈の光に、さして暗黑ほどにもあらねば、足にまかして行くともなしに木立間深なき方に迷入るに、瓦斯の光も遮られて小暗くなりぬる木の下に人ありて立つめり。艶子は猶ほ認めずや間近くなるまゝに、彼者突然聲を放ちて艶子の君かと問ふ。艶子は仰けに倒れん許りに覺えず二三步退きつゝ、速ぎ踵を返さんとするに、再び艶子の君と呼ぶ。其聲低うして久松の聲音に似たり。サテは我夫か、アナ嬉しと胸は躍れど尙ほ進みかねつゝ、久松の君にやと問ふにさなり〳〵と答ふる聲は、いと微音にして、英國語なり。今は相違あらじと思へば傍近く進みよるに、彼者は前に立ちつゝ、尙も黑闇叢裡へ誘ひ行きぬ。折柄梢頭を拂ふ金風の颯々たるは蟲聲の喞々に和して夜は既に三更の頃にや。

握り、

「敏子」艶子さん、今日はいろ〳〵難有う御座いますよ。サゾお友達でしたらネエ。折あしく東京の會員から電報が參つたものですから其回答や何かでツイ如此に遲刻しまして……「艶子」イヽエネエ、妾もたッた今參つたんですよ。貴孃は妾なんぞとは違つて、大層御用がおあんなさるから……妾こそお約束をして置いてそして伺らんなんてほんに濟みませんネエ。急に無據い要事が出來ましてネエ。「敏子」ナニネエ御入來つても却つて失禮を致す所でしたよ。艶子さん。此お人は。「艶子」エ此人は……此人はネエ、法學士で浮田青洋とおッしやるんですよ。妾も今此處でお目にかゝつた所ですよ。

と先刻より一揖せしのみ敏子の顏を打まもりて茫然たる浮田に對ひ、

「艶子」浮田さん、

と鋭く注意を與へ、

「艶子」此方はネ、山村敏子さんと云ふ妾の從妹ですから……「浮田」ハ、アさらですか。御高名は新聞紙でも伺つて居ましたが、以後は御懇意を……

敏子は丁寧に腰を屈め、

「敏子」イエ恐縮ります。以後は何卒艶子さん同樣に御心易くお願ひ申します。「浮田」エ。「敏子」艶子さん、今馬車で行らッしやつた方ネエ、何とおッしやるお方なの。「艶子」エ今の馬車の……あれは久松幹雄と云ふ改進黨の主幹と松山操といふ女學士ですよ。

敏子は今僅かに鐵橋を渡り了りて將に影見えずならんとする馬車を遙かに見送りて、

「敏子」……あのお方が……久松幹雄と云ふ改進黨のウ、ン……。

第三回

浪華第一の名勝靑灣のほとり網島の中程に、宏壯の洋館聳えぬ。主人は天方某、大阪改進黨の首領とも云ふべく、現に國會議員として勢力あり。一昨年來野に退き、今は閑散の地にあれども、常に輿論の向背に注意し、傍ら後進の同黨員を養成すめり。此天方家の家例として年々四月三日即ち神武天皇の大祭日を卜して、朝野の貴女紳士を招待なし、夜會を開く事なり。今年も早や其當日に近づきぬれば四五日前より室内の粧飾、庭内の掃除に、一家恰ら沸く樣にて混雜云ふ許りなかりき。

今日は四月の三日、天方家夜會の當日にして、豫て午後六時よりとの案内なるにぞ、招待に應じぬる貴女紳士は早くも馬車をきしらせて來會しつ。門内とも云はず、門外とも云はず、玄關に通ずる四五間ばかりの一條の道を除けば、殆んど立錐の地なき迄に輪摩し、轂撃ち一馬嘶きて萬馬之に和しなば、天柱も折れ地維も挫けん。此一事を見ても平生交流の廣きも、今宵の盛會なるべきも、想像られぬ。又もや車聲をリン〳〵と響かせ門内に乘入りつゝ玄關の前にて横ざまに馬車を止め、徐々として地に下り立つは何人ぞ。彼の女學士山村の敏子と櫻田の艶子なり。豫て待受の取次出迎へ、某殿にて在すと問ふ。兩女は乃ち名刺を出して案内を請ふに、直ちに隣室へこそは導きぬ。此室には二人の紳士ありて丁寧に來駕を謝すにぞ、兩女も禮をかへしつゝ眸を上げて其人を見るに、主人天方某と久松の幹雄なり。艶子は久松と見るより豫ては覺悟なしつれど、又今更に慙愧に勝へねば態と敏子に後れし樣とて其背後に彷徨り、敏子が天方との挨拶を了りつ久松に向ふるを見るより、直ちに天方へ握手を施し、其が隨に扶けられつゝ敏子に先ちて延かれ行くめり。敏子は此人こそ前に公園にて見受けし人よ、久松某よと思ふものから、素より閑談の場にあらねば

谷間より紹介ありし事をもきこゆべきふしもなく、唯定式の挨拶をなすのみ、是も亦退かれて次の待合室へは入りぬ。此室の装飾の華麗なるは云はずもあれ、精巧を極めし子持ランプは壁間の花瓦斯と映じて白晝をも欺くと云ふべからめれど、花の如く玉の樣なる貴女紳士等を照すに、太陽の光線にては現はし得ぬ一種の光彩を放つは、是も形容出來べくは思はれず。其が中に敏子と松山の操とは、玉の中のダイヤモンド、花の中の花王とも見ゆめり。萬眸盡く兩女に萃りしは、また無理ならずとや云はん。扠も羨敷きは美人の上にぞある。

敏子は本夜の來客中參政黨の女流も多き事故、此人々と櫻田の艶子、さては、天方の夫人、久松の幹雄等の周旋にて、初對面の人々に紹介さるゝに何れにても丁寧なる待遇を得たれば、心中の滿足は云ふ許りなく、今は唯容貌上の敵手なる松山の操の隣席に座を占め、四方八方の談話をなすに艶子は心ならずも其傍らに侍りぬ。

「敏子」アノー艶子さん、過日中の島の公園地を久松さんとお相乘で南の方へ行らッしッたのは慥か操さんでしたネエ。「艶子」ハア久松さんとネエ。「敏子」操さん、妙な事をお尋ね申します樣で何だか可笑しう御在ますがネ、久松さんとは最早永らく御交際なさいますの。「操」エ久松さんと……お交際致すのですか、さうですネエ、昨年の暮からで御在ましたッケ。「敏子」夫ではモウ久松さんの平生の御持論も何奈な性質の方と云ふ事も詳細御存じで居らッしやいませうネエ。「操」左樣で御在ますネエ、御持論といつて別段私の持論は斯々だとお話しなすッた事もありませんが、改進黨員で居らッしやるから大體の主義は何人でも大概は御承知だと思ひますネエ。「敏子」ホヽヽ、成程是れは妾の伺ひ方が惡う御在いましたネエ。その御持論と云ふのは男女同權に付いての御持論と云ふことでありますよ。「操」さうで御在ますネエ。それとても別段伺つた事はありませんがネエ。日本でも此頃は男尊女卑の惡風が大概はなくなつた樣だ、男女は同權たるべきものだ、と被仰ッた事もありましたネエ。「敏子」アノなんで御在ますか、男尊女卑の風俗は惡むべし、男女は同權たるべき筈……男女は同權たるべき……それでは女子參政と云ふ事についても先づ御同論と思つてもよう御在ますネエ。「操」ハイ參政權の事に付ては何奈云ふ御持論があるか知りませんが、女子と云ふものは何處迄も順良なるがよし、美徳を傷けぬが肝要だ、と云ふ事は伺つた事も御在ますが……と答ふる所へ、久松が來りければ、此問答は此處に終りぬ。折から會食の知せリーン〳〵リーン。

會食は既に了りぬ。舞踏の第一場も果てぬれば、敏子は艶子と共に天方夫人の背後にそひてトある一室に誘はるゝに、此室は廣さ三間四方もありなん、中央には圓形のテーブルを備へぬ。三女は銘々安樂椅子に倚りつゝ、給仕が運び來りぬる珈琲を以て咽喉を潤し少時は氣息を休むるなるべし。天方夫人と云へるは年の頃三十七八の婦人にしては脊高き方にて、少しく盛りは過ぎぬれど、尚ほ春光は退かずして老鶯に惜まるゝ容姿はあるめり。視線を敏子の面に注ぎて、何か考へつゝありしが、忽ち莞爾と笑を含みて、

「夫人」敏子さん、切角お出を願ひまして如此不整頓な夜讌では誠にお慚愧しう御在ますよ。文物流行の中心とも云ふべき東京の夜讌や、舞踏にお慣れなすッて入らッしやる貴嬢には嘸可笑しう御在ましたらうネエ。「敏子」イヽエ如何致しまして、如此に萬事が整理して居て十分の滿足を來客に與へると云ふ事は、

東京の昨好會の貴婦人方の夜會に致しましても此樣には參りませんよ。イ、エお世辭では御在ませんよ。妾は其お世辭を申す事が不調法で御在ますから……これと申しますのも少しも交際に熟練ないからで御在ますよ。どうぞ此上ともお引きまはしをお願ひ申します。「夫人」ホ、ホ、敏子さんの御謙遜にも恐れ入りますネエ。貴孃程お學問があり、お交際が御上手で居らツしやれば御十分で御在ますよ。良人が官に在ります頃はお兩親へもお目に掛りましたが、其頃は學校へ御寄宿なすツて居らツしやるとか申す事で御在ましたよ。去年良人が東京から歸りました時、よく貴孃のお噂を致して大層お賞美申して居りましたが、今日こそは妾も成程と思ひましたよ。ネエ艶子さん。

艶子は從妹の事ではあり、敏子を賞める譯にも參らず、且つ少しは此方へもお裾分があつてもよささうだと思つて見れば、餘り快くはなけれど、自己が同伴なせし親族が賞めらるゝ事故肩身が廣く覺ゆるから、得意の廉が無いでもなし。斯樣に思想が混雜つた時にはどんな面色をするであらうか、そは看官の評判にまかして、先づお預りと致し置かうか。イヤ試に申さうなら、口元が莞爾笑へど目元迄は得達せず、額骨と鼻のほとりが兩思想の關ケ原唯浮田(金吾秀秋)が心にかゝるとは、ちいツと穿ち過ぎた作者の筆癖。

「艶子」ハイ左樣で御在ますネエ。それに敏子さんは綺麗でお出ですから。

艶子が終りの一句は心ありてか、將たあらずや、こゝが少うし問題でありしに、夫人は一向に無頓着にて、

「夫人」さうですよ。今夜は舞踏室が敏子さんと操さんとお兩女の爲めに一層の光輝を增したやうでしたネエ。

艶子は再もや洩らされぬる上、操をさへ加へたれば、いとゞ不快に勝へずや、何か用ありげに座を離れて入口の傍らに徘徊せしが、軈て何處へか消え失せけり。彼の操の一句は艶子ばかりでなく、敏子にも幾分かの感情を發せしめし樣なり。其の何の故なるやは敏子の心に問はずもあらば、今將た誰かは之を知るべき。夫人も俄かに座を離れて、

「夫人」敏子さん、誠に失禮ですが、また直ぐに參りますからお無聊う御在ませうが、少しお待ちなすツて下さいましよ。艶子さんはどうおしでせうネエ。「敏子」ハイイエどうかお構ひなすツて下さいますなよ。妾も御一處に……「夫人」イエマア此室にお出なさいよ。嘸お疲勞でしたらうに。

と足早に出去りぬ。敏子は一人跡に殘り、あるは壁間の畵面をながめ、あるは飾花を弄びつ、少時は斯くてもありしが、

「敏子」マア艶子さんは何處へお出でだらう。艶子さんと云へば今少し學問があると能いけれども……イヤ智育はあの位でマア可いとした所が、德育がもう少うし……叔父さんも叔母さんも隨分御注意なさる樣だが……妾には如何も了解らぬ事があるよ。過刻の浮田とか……あの浮田と云ふ人は如何だらう。法學士だと云ふが……何だか面白くない人の樣だよ。艶子さんは何故にあんな人と……如何も樣子が妙だよ。マサカ其樣事も……だけれどもこれ許りは別だから……去年だツけが、久松さんと結婚をするとか約束をしたとか手紙をおよこしだつたが、今晩の樣子では……今ではもう久松さんとは、あの久松さんなら隨分……演說筆記を見た事もあるが、思想もあり經驗もあり、交際もなか〳〵馴れたものだ……如何かして我が黨員にあんな人を欲しいものだが……が、それも久松さんの持論

を聞いた上の事、手段は隨分あるだらう……貴女が斯く注意して居るも無理ではない。貴女と云へば松山の操さんとか……今は久松さんのスウヰートハート(愛婦)の樣だがなかなか蔦子さんとは一緒にされない……あの人も女子參政權に異論はあるまい……ないに相違ないよ。女で以て女の權利の伸長るのを好まぬと云ふ人もない筈だから……

と敏子が遣懷の央に人の來るけはひあるにぞ、扨は蔦子が來りしかと入口の扉を見守めて居り。敏子は蔦子や來りしと入口の扉に目を注ぎつゝありしに、蓦然たる足音は我家をかすめて漸々に遠くなりぬ。相手は蔦子にはあらざりしと何も自問自答、

ア丶參政權も何時になったら目的を達しる事が出來ようか。其爲めに出張した關西の大集會も意外な出來事で、秋まで延引する事になったが……アアー自由にならぬものだ……東京からの電報では保守黨内閣に於ても、來春の國會には參政案を提出しようと云ふ評判があるさうだが……果してさうなって見れゝば、實に我黨の、否同胞姉妹の最大幸福であるけれども、なかなか急な譯にも行くまい……アーア待遠しいことだ。待遠しいと云へば蔦子さんは何處へお出でだらう。あの人も久松さんと結婚をおしたら實に仕合せであつたらうに。浮田の樣な……イヤそれも初めて對面たばかしで一概には云へぬけれど、どうも久松さんと比較べて見れば、一寸見ても……持論女子參政に就ての久松さんの持論……未だ何もはしないが多分同意だとは思ふけれども、それとも……改進黨の内でも參政權を賛成する人もあれば、反對する人もあるから、今の内でなければ……黨議が定まつてしまへば容易に動かす事は出來ないから……此頃に訪問して見ようか、既に一面識もあり、谷川さんからの紹介もある事だし……あんな人の援助を得れば、改進黨の援助を得る事となれば……保守黨は素より參政案を提出しようと云ふ位だし、異論のあらう筈もなし、其他の微々たる政黨は決して心配するには及ばず……アアー何卒さうしたいものだ、こうなったらマア何程に嬉しいだらう……東京の方は同黨の姉妹が盡力してお出だから、それは能いけれども……折角姉妹に推薦せられて、姉妹の依賴を受けて、此大任を負うて居て見れば關西の輿論を喚起すると云ふのは……實に容易な事ではなく、萬種の障碍を受くるは豫期する所であるから、如何なる困難に出會はうとも非常の熱心を以て之を打破し去り……力竭きれば仕方もないが。主義の犠牲となるのは豫て覺悟をして居る事だから……

と何を思ひ出せしにや、默然として、

萬一そんな事にでもなったら、さぞ嚴父さんが……一人の弟は未だ漸く中學に通ふ位だし、大學を卒業する迄は迚も十分の孝養も出來はせず……ナニそれも御病身でさへなければ、未だ漸く五十歲をお超えなすツたばツかしだから、政治世界に奔走もなさらうに……アアー殘念な事だ……

敏子はこゝに至りていとゞ悲容をあらはし、目に浮びし涙をハンカチーフもてソーッと拭きながら、

それに付けても慈母さんが生存なされば決して心掛りはないけれども……

と悲哀の情は面に溢るゝばかりなりしが、漸く思ひかへしけん、眼を閉ぢたるまゝ頭を後ざまに傾け、ブルブルと搖かし僅かに眼を開きしが、涙神經の抑衝は尚ほも減ぜざるにや、又もやハラハラと降りかゝる涙をハンケチーフにて確と押へ、涙痕の斑々たる處など拭ひながら、

ア、アモウ思ふまい考へまい、アアー愚癡だ愚癡だ、こんな愚癡な考へを起さうよりア、ア…艶子さんにでも見られたら、平生に似合はないと笑はれる所であつた。アアー考へまい考へまい、こんな事を考へるより、次の土曜日に開かるゝ演說の趣向でも考へる方が大阪へ來て初めての演說だし、東京參政黨の主義を代表せねばならぬから…普通の事では輿論を喚起する事は出來まい…如何說き起さうか…ウウー冒頭はこんな風に結局はこんな工合に…

と敏子が前の悽愴たる顏面は忽ち壯快の色をあらはし、兩手をもて前額を杖へ、方に考案に沈みつゝありしに、突然室戶をひらくものあり。敏子は艶子にやと頭を擧ぐるに先づ瞳子に寫りしは久松の幹雄にして、背後なるは松山の操なり。兩人ともに莞爾と笑みて敏子の傍近く進めば、敏子も立ちて之を迎へ、各々椅子に倚りつゝ久松先づ口を開かんとする折、又もや室戶を開くものあり、三人共に頭をかへして之を見るに、天方夫人と艶子の二人なり。艶子と久松とは例によりて氣味合あるべけれど、そは看官の推測にまかしぬ。

「夫人」敏子さん、嘸お待遠でしたらう。久松さんも操さんも御一處でしたネエ。モウ第二の舞踏が始まりますから、サア舞踏室に行らしツて下さいましよ。

此時奏樂嚠喨として室外俄かに喧騷しきは衆賓舞踏室に麕集るにやあらん。

第四回

室内の粧飾は華美と云ふにはあらねど、最も清潔を旨となし、壁間には有名なる英雄又は烈女の肖像、或は川水の油畫を掲げぬ。這は家主某姓が先つ年歸朝の節携へ來りしものとぞ云ふ。壁にそひて書箱あり。其數三つなるべし。縱は五尺にして幅は六尺もあらんか。蓋はヒラキの硝子戶を用ひし。そが一脚の上に安置しぬる白大理石の彫刻あり。年は六十ばかりなるが卽ち家主の亡父にして、曾て倫敦に留學せし砌有名き彫刻師に依賴へ追孝を表せしものとなん。件の彫像を前になし覆布をしぼり上げぬる窓を左になせしマホガニーの卓子あり。上には子持墨壺とも云ふべき、我邦にては先づ珍重しさうな墨壺には一本の鵞毛筆を危險しく斜に插みつ。五六冊の洋書と大判の洋紙とが机上の粧飾とはなるめり。橙色の洋絹をもて包みし二脚の椅子の一脚には紳士ありて倚れり。柔かく艶やかなる髮の毛は嘗てガンベッタ流と稱して一時佛國に流行せしも斯くやありけんと思ふ許りに、極めて左の方なる眥の上にあたれる邊より分ちて、額の廣きは寬裕の度量をあらはし、眉は濃き方にはあらねど眼光炯々として人を射り、遠く望めば怖るべく、近く馴るれば一種微妙の穩波をたゝへぬ。顴骨秀で鼻高く、堅く結んで容易く開かざる脣は沈勇にして果斷にや富める。所謂相貌堂々として威あつて猛からずとや云ふべき。黑の綾織のフロックコートに、白と黑との大名縞の細き方なるズボンを穿ちつ。白シャツには士官襟を嵌め、襟飾は黑の蝶形の極淡泊なるを用ひ、右手には一張の新聞紙を取り、左手は臂を屈めて机に倚すめり。今一脚の椅子には窈窕たる美人、髮は飽くまで黑くして額際の見事なるは暗黑き雲の内に芙蓉峯が聳えし樣なり。眉は女子にしては少しく濃すぎて見ゆれど、目はパッチリとしていかにも可愛らしき黑目勝、紅脣は平生笑を含める樣にて其愛嬌云ふばかりなけれど、顴骨のあたりに那邊となく凛然犯すべからざる威嚴の相あり。材は一寸を伸すべからず、また一寸を縮むる能はぬ誠に釣合よき體格なるに、三越織物改良社が精巧を極めし革色博多の

洋服を穿ちし。本體の粧飾が餘り上品すぎると云ふ批評家あれば、イヽヤ此處が此貴女の價値だと眉を入れる辯護者もあり。何らにした處が、皆様に世間に尊とまるゝ程の評判高き佳麗とは見えけり。男は未だ三十歳に及ばず、女は既に破瓜を過ぎたり。かくて一室に相對して頗る打ちとけたる様なれども、其中にも自然たる別はあるなり。或る交際場裡の老將の話に、あれ程に男女相親みて斯く迄にまた別あるものは、倫敦の淑女紳士に於ても稀に見受くる位とぞ云ひける。又手此男女は何人ぞや。看官少時癢を忍びて次の問答の條に至り、作者が麻姑爪を借すをば待ちね。美人は机の上なる紙片を認め、暫く無言なりしが、徐に彼の黒み勝の目をもて片頬に笑を含みつゝ紳士の眉間のあたりを見つめて、

「美人」アノーそれは新聞の原稿で御在ますの。

「紳士」左様です。「美人」毎日々々の事で居らツしやるからサゾ御面倒で御在ませうネエ。「紳士」左様、唯面倒なので閉口しますな。ナニそれもクダラヌ事であれば何でもないが、苟くも社會の大事だとか黨議に關する社説であると、十分に論旨も立て文章も練らんければ改進黨の機關たる浪華タイムスの名譽に關するからして‥‥「美人」さうで御在ませうとも、假にも改進黨の主義を代表する新聞であつて見れば‥‥嘸お骨力が費れませうネエ。アノー何だそうで御在ますネエ。國會創設の頃までは東京でさへ他國語の新聞は一社も無かつたさうで御在ますが、今では大阪でさへも浪華タイムスをはじめ、日本人の主筆なのばかしでも三四社もありますから、隨分盛大にはなりましたので御在ますネエ。「紳士」サア盛大に赴きましたとも、國會創設前には唯日本獨立新聞と云ふが東京に一社あつたばかりで、夫も主筆は外國人であつたさうで、其後に起つたのがないではないが、朝に起れば夕に仆れると云ふ有様で‥‥加之新聞條例と云ふものがあつたので‥‥「美人」左様ださうで御在ますネエ。今日では言論も自由になりましたが、二十年頃の人は誠に氣の毒で御在ますネエ。其御草稿は如何な主意の社説で御在ますの。「紳士」これは何サ、昨日參政黨のクラブで演説された山村敏子さんの女子參政權を駁撃うと云ふので‥‥「美人」アノ敏子さんの‥‥さうで御在ますか、妾は昨日は無據い要事がありまして傍聽に參りませんでしたが、今日の新聞に其筆記が御在ませうネエ。「紳士」あります、あります。サア御覧なさい。

と紳士は手に持ちし浪華タイムスを美人に渡せば、美人は請けて讀み始めぬ。

松山の様は浪華タイムスの見出を讀去りつゝ、

「[illegible]ァー此處にあつたよ、こゝに‥‥山村女學士の演説‥‥昨日午後一時より女子參政黨の倶樂部に於て開かれし同黨員の演説會は、聽衆無慮千二百名はありしならんが、過半は女流にて充てられし、何れも參政熱心の女學士が滿腔の熱血を注ぎて演ぜらるゝ事故、一として慷慨悲壯ならざるはなきが、中に東京の同黨員中に錚々の名ある山村敏子女史の演説は、議論風生、勢奔馬の如く、殊に聽衆を感動せしめ終始喝采の聲絶えざりし、今茲に速記法により筆記せし其大意を掲ぐれば、女史は先づ妾は參政の熱心者であります。參政氣違であります。世には非參政論者なるものがありますが、其説を聞きますのに男女は同權なるものにあらず女子は其精神力に於て男子に劣る事數等なり、故に參政權を與ふべからず。と云ふのであります。これが反對論者の金城鐵壁とも恃んで居る處でありますから、妾は今日此の一説につ

き駁擊を試みようと致します、と說き起し、諸君反對論者は斯る說を爲すにも拘はらず、人間の幸福は上帝の好むところであると申します。誠に然り、實に人間の幸福は上帝の好まるゝ所に相違御在ません。果して然らば人間の最も好みます幸福は何でありませうか、唯人間か天然に受け得たる能力を動かすべき自由權でありませう。(謹聽 斯く一方には自由權を貴び置きながら、唯婦人の上にばかり體格と氣質とに些少の差違あるを口實となして、幸福の根本とも申すべき權利を與へないと云ふ理由はありますまい。(喝采)諸君男女同權に就ては世に三條の異說があります。第一には婦人は全く權利なきものなりと云ふもの。第二には婦人は全く權利を有せぬではないが、其の權利を男子に比ぶれば數等を下れりと云ふもの。第三には婦人と男子とは同權なりと云ふもの。此三說が普通世間に唱へらるゝ所のものであります。諸君、此第一說卽ち婦人には全く權利なしと云ふ說を、推擴めますれば、上帝が婦人を創造せられた目的は、婦人を全く男子の權力の下に置いて男子に生殺與奪の權を握らせ、婦人の幸福安寧生命等の得失迄も、男子の意思一つに委すと云ふと同樣であります。諸君、世に如此な道理が御在ませうか。(ノー〳〵)又之を纏めて申しませうなら、上帝は婦人を下等人類となしまして、男子をして婦人を吾より一等下りたる人類に取扱はしむる事になりませう。如此な道理が世に在りませうか。(ノーノー)是等は寔に採るにも足らぬ議論で、今時斯樣な馬鹿氣た說を吐く人がありませうか。(笑聲)若しもありましたなら、それこそ向見ずの猪武者でありませう。(大笑)如此說は齒牙にだもかくるに足りませんから、今日最も勢力を得て居ます第二說、卽ち婦人は權利がないではないが男子よりは數等を下つて居ると云ふ說に就て申しませう。諸君、此第二說の意味を推究めましたなら、次に述べる數ケ條の疑問が起ります。第一、若しも婦人の權利が男子の樣に大きくないとしますれば何程婦人の權利が男子より小さう御在ませうか。第二、男女の兩性におきまして男子の生れながらに受得たる權利は何程で、婦人の受得たる權利は何程であつて、其精密なる割合は何程でありませうか。第三、諸權(言論自由權の如き)の中で何と云ふ權が男女兩性に一樣に適用まりませうか。第四、男子の何と云ふ權が婦人の何々の權に如何場合に優つて居りませうか。諸君、斯樣に疑問を設けて反對論者に明解を求めましたなら、果して十分なる明解を得る事が出來ませうか。(ノー〳〵)例ひ出來るに致しましても尙ほ第五の疑問が殘つて居ります。(謹聽)萬一も男女の權利に天然の差違があるものと致しましたなら、其當然の權利を男子には何程婦人には何程と平等に配分致すには何人が其職分に當りませうか。上帝でありませうか。イヤ〳〵上帝は人間の幸福を好むものなりとは彼の反對論者でさへも申すでは御在ませんか。シテ見れば上帝が婦人の幸福の根本とも云ふべき權利を分配さるゝに男女其等を異にせらるる理由はありますまい。(謹聽)さすれば第五の疑問に於ては遂に反對論者でも亦終に妾等を滿足さする程の妙解はありますまいと妾に於ては斷定致します。(謹聽)嗚呼何人か男女同權ならずして女子に參政權なしと云ふや。斯く明々瞭々たる道理のありて存するものを。(大喝采)‥‥‥眞實にさうだよ。敏子さんの演說の通りだ。これから精神力の處には如何な名論があるかしらんエート。

作者曰本日と明日とは些と議論ヶ間敷

き處で婦女幼童には面白からず。活潑者には迂と評されんが、脚色に於て止み難ければ、唯二日間の事なり、看官幸に咎め玉ふな。

「美人」…諸君、これより婦人は精神力が男子よりも數等劣れりと申す說に付いて申上げませう。斯様な人等は婦人は男子と同様な權を爭ふとも、素と精神力が男子よりも劣つて居るからして、到底之に爭ひ勝つて其要求を全うする理がないと思つて居りますが、實に道理を知らない言分ではありますまいか。（謹聽）故に妾は今茲に數例を掲げまして、古來婦人で以て或は政治上に大功勞を顯はし、或は文學技藝の蘊奥を極めまして巨名を鴻響された中で最も著明しい人々を擧げて、證據立てようと思ひます。先づ我邦には神功皇后がお出なされます。また外國の女王の中で申しませうならアルミコヤが皇后セノビヤの如き、女王ケセリーンのごとき、また女王マリヤセンザアの様なかた〳〵が在らせられます。學術にはソーメルビールがあり、經濟には著明なるミッス・マルチー、ミッス・フホーセットがあります。理學に長じたるアダム・ド・ステイルがあれば、政治學を修めて世に名高きマダム・ローランドがあります。詩歌に秀でたるは衣通姫、小野小町、伊勢の御息所を初めとして、數へ擧ぐるに遑がありません。ウヰリヤム・ブラッチフヲルドの傾にタイスが有ります。ベマンセスと云ふ人が有ります。ランドンスが有ります。プローウヰングスが有ります。戯曲には小野お通。ジョアンナ・バイルリーがありますれば、高名小說家には紫式部、ホーステンスがあります。此外にも數へ擧げましたなら、實に大層な事でありませう。今申す通りに、婦人で男子に勝つた人がこれ程ありますが、諸君は尙ほ婦人は其精神力に於て終に男子に劣れりと申さるゝか。（ノーノー）恐らくは此人々を以て男子の精神力に劣れりとは思はれますまい。（婦人の傍聽席よりヒヤ〳〵の聲盛んに起る）諸君、凡そ世の中の物は何物によらず化醇淘汰の理によりて進歩すると云ふ事が正理である以上は、今日我邦の同胞姉妹の中にも必ずローランド夫人、ステイル夫人、其他の烈女賢婦を乏しからぬ事と存じます。（婦人席及び男子席の一半には喝采湧くが如く、男子席の過半にはノー〳〵の聲盛んに起る）諸君、反對論者の中にはまたかゝる說を唱ふる者がをります。婦人は常に學問思想熟練ともに男子の様には[illegible]なし、また女子は中學大學の様な男子を教育する場所に入れても其功あるものにあらず、又婦人の心思より顯れた事蹟を見るに、大志を抱へて之を事業に企てたものが稀少い、また婦人は如何に奬勵するも之が志を引立てるの功を奏したる稀れなり、と申す人が隨分世にはありますが、寔に道理のなき說であつて、斯様な思想を抱いて居つて女子の教育を致しますから、其教育法も宜しからず、女子の精神力のあり丈けを働かせませぬから、其儘其の持前[illegible]れになるのであります。（喝采）決して精神力に優劣のあるのではありますまい。（喝采）諸君、妾は今一歩を讓りまして、女子が天より授りたる智力は男子の様に深くない、又、女子の感覺と云ふものは男子の様に深くない、常に大凡一様の模様で以て反撥力に乏しい、と云ふ此二說を假に適當のものと致しましても、男子同様の廣き區域の内にあるものではないと云ふ說は如何も默つて居る譯には參りません。（ヒヤ〳〵）今其道理を推究めて申しあげませう。（謹聽）第一、男女の才智の深淺を測定り、其割合で以て權利を定むるの說が

適當でありますれば、男子と男子との間にも其天授の才智の異ひますのは丁度人面の各々違つて居る樣であります。果して然らば何故に其割合に應じて權利を分配せぬのでありませうか。また如何にして之を實地に施しませうか。（謹聽）第二、果して第一の説が確固不拔のものでありますれば、先づ男子一體の才智の平均をとり、其平均才智よりは一層鴻大なる才能を有つて居る婦人が世間には隨分ありますが、是等の婦人は其才智が優つて居るから其優つて居る丈け男子よりも多量の權利を與へねばならぬ道理ではありませんか。（謹聽）第三、右に申しました道理に因りますと、男子には此程、婦人には此程、と格別に配分する權利を取り極むる事は先づ差置きまして、婦人中に於て此婦人は此程、彼婦人は此程、男子中に於ても此男子は如何程、彼の男子は如何程、と一人づつの才智を定むる標準と、其測定めたる才智の割合に應じて、一人毎に附與ふる權利を測ります標準を見出さねばなりますまい。（謹聽）果して此標準を見出す事が出來ませうか。（ノーノー）斯る道理があるにも構はず、男女は同權なるものにあらず、婦人は精神力に於て男子に劣れり、故に參政權を與ふ可からず、と云ふ論者がありませうか。妾は決してあるまじとは思ひますれど、演説に新聞に時々如此暴論を聞きますのは、妾の社會の爲めに最も悲しむ處であります。（大喝采）……ウヽム實に能く論じたよ。妾も敏子さんと共に參政權に盡力しようかしらん。

紳士は美人が敏子の演説を讀み、大に感情を起せるを見て倏ち大聲に打笑ひ、

「紳士」アハアハアハ操さん、貴孃も敏子さんの演説に御同意ですかな。「操」ハイ久松さん、貴郎は又何でお笑ひなさいますの。「久松」其譯は外でもありません。敏子さんの演説の主意は、學理イヤ哲學家の口吻を氣取つた言分で、實際上から如何なる結果を生じようかと云ふ思想に乏しいので、試に我輩が之を論駁しようなら……

此時部屋のヒラキを開きて、

「下女」旦那樣申上げます。山村樣が御出でに成りました。「久松」ナニ敏子さんが。此室へお案内申せ。

第五回

山村の敏子は參政黨倶樂部の演説を了り、直ちに歸京なすの都合なりしに、支障はることありて二日を延ばし、今は要事も果てぬるから、歸京の準備は整ひつ、明日は浪華を發しなんと早朝より來客に應接なし、痛く疲勞を覺えぬるにぞ、窓の下なる寢椅子に倒れて新鮮の空氣に浴しつ四五葉の新聞紙を讀むに、前に爲せし倶樂部の演説に種々の批評を加へ、或は駁し、或は贊しぬる中に、敏子が最も意を注ぐは久松幹雄の主筆にして改進黨の機關なりと云ふ彼の浪華タイムスなるべし。敏子は聽て讀み了りて不平の色は滿面に溢るゝばかり、鬱蒼として水も滴らんと見ゆる庭前の新樹を仰ぎて倏ち嘆息の聲を放ち、

「敏子」アアー何故に我黨の主義は斯樣に社會に容れられざるか。何故に社會の耳目とも云ふべき新聞記者は斯く迄に不條理を唱ふるであらうか……アー浪華タイムス……浪華タイムスばかりは、斯樣説は吐くまい。必ず贊成すると思うたに……今日の社説はマア實に酷い事を書いたよ……宇内の女子をして一朝政事に參與せしむるに至らば、其結果は……其結果は他なし。國の繁榮を妨け、人の智識を害ふ……のみ。アー何と云ふ事だらう。公道によりて是非とも得なければならぬ女子の參

政か：：國の實益を妨げ：：人の言論を害ふ：實に酷い事を　他の新聞は兎も角も浪華タイムス：　久松さんの主筆の浪華タイムスが：：これか久松さんの立案かしらん。これが改進黨の黨議かしらん。よもや：：よもや沈着なる改進黨が此樣な粗暴な議論を吐きはしまい。恐らく久松さんでは。さうだそれに違ひはない。乾度さうだよ。先日久松さんにお目に掛つた時：：松山の操さんも來てお出だつたが：：暗に探つて見るのに、男女同權と云ふ事に付いては異論はない樣であつたが、參政權のことに付いて別に如此意見があるのかしらん。アーア今四五日も歸京の猶豫があれば：：今一度演說會を開いて浪華タイムスを讀むと云ふ題で以て十分に輿論に訴へても見ようが、何分明日と云ふものだから：：投書をして見ようか。イヤ夫も愚案では十分の論究も出來ず：：何よいよ、東京へ歸つてから諸新聞に訴へて輿論の方向を視察する方が：：併し殘念な事だよ。ミス〱如此反對論に出會つて居ながら：：アアー今四五日の猶豫が欲しいよ、東京へ電信をうつて見ようか：：アーア。

敏子が述懷の央に旅館の給仕女が手に一箇の書狀を持ち來り、敏子に呈するにぞ、敏子は之をとりて封筒を讀むに、山村敏子殿、東京女子參政黨幹事より、とありて、梅田の電信局より配達なせしなり。敏子は何事にやと慌忙しく封おし切りて之を讀むに、

　昨日の會議は貴孃が尙ほ浪華に止まられんことを決議す。委細は書狀。

とあるにぞ一たびは喜悦の眉を開き、一たびは不審の眉をひそめぬ。敏子は給仕女を退けし後、

「敏子」何だネエ。ツイ先日急ぎ歸れと云ふ電信を發して置いて、又歸るな：：何だか少しも分解らないよ。如何したんだらうネエ。委細は書狀とあるからそれはそれでよしとして置いて：：愈此地へ留ると云ふ事になれば、反對論の：：浪華タイムスを論駁ことも出來るよ。演說會を開からか：：先づ投書で以て輿論に訴へようか：：マア手段はどちらでも能いが：：アーア浪華タイムス、あの久松さんがこんな論を書きはしまい。多分外の人に違ひはない。併し：：人の思想は分らんもんだから、若しも久松さんであつたら：：實に惜い。あれ程の學問もあり、名望もあり、殊には風采：：人に愛敬さるゝ程の風采があつて：：衆人が愛慕するのも無理はないよ。妾でさへ：：これ迄そんな事なんぞは少しも起した事のない妾でさへ：：初めて會つた時に如此人が我黨員にあつたなら：：と思つたのが：：お目に掛る度に愛慕の情がアーア：：操さん、松山の操さんは實に羨敷い：：實に一生の幸福だよアーア：：イヤイヤ如此事は思ふまい。若しも久松さんが反對論者であつたら：：アーア思ふまい〱モウ思はない〱：：何だか少し催眠い樣な。昨日からの應接でこんなに催眠いのかしらん：：アーア實に自由にならぬのが憂世とは云ふが：：これ程に熱心して居る參政權も：：全く容れられないではないが：：隨分反對論者が：：浪華タイムス：：久松さんが：：あんな議論を：：愛慕の情と云ふものは：：妙なものだよ：：ご幸福だ：：操さんは幸福だよ：：アーア自由にならぬ參政權：：公道と云ふものも男と云：：ふものは久松さん、あんな：：議論を：：幸福：：：自由に：：操さん：：タイムス：：參政：：權：：公道：：自由：：に：：久：：ま：：つ：：久：：ま：：

二十七八歲の紳士と十八九の貴女いかにも睦ま

しさうに腕打組み、

「貴女」アノー久松さん。「久松」なんですな、敏子さん。「敏子」アノー今日の浪華タイムス。社説ネ、あれは貴郎がお書きなさいましたの。「久松」あの社説ですか。イヤあれは我輩でないので……「敏子」さうで御在ませうネエ。妾もさう思ひましたよ。貴郎がどうしてあんな粗暴な事を……實に嬉しう御在ますよ。「久松」どうして／＼、我輩があんな粗暴な社説を書く譯はありませんな。「敏子」夫では何で御在ますか。女子の參政には貴郎も御異論は御在ませんでせうネ。「久松」左樣々々大贊成ですな。寶セット夫人や、我ラット夫人なぞが、頻りに唱へられた通り、婦人が政權に參與さるゝは、民主政體の一原素でありますからな。「敏子」エ貴郎は實に其通りに。「久松」イヤ我輩も改進黨の主幹をも勤め、社會の耳目として許さるゝタイムスの久松です。虚妄の言は吐きませんぞ。「敏子」イエ虚妄のなんのとそんな譯ではありませんよ。それではいよ／＼……如此嬉しい事は……それに改進黨一般のお方は。「久松」イヤそれも悉く女子參政の贊成者です。今日其樣道理に暗い、男女同權ならずなぞ……イヤ馬鹿々々しい議論で……「敏子」それではいよ／＼婦人に政權を與ふる事になりましたら其結果はどうなりませうネ。「久松」イヤどうからのと云ふ事はありません。國の繁榮を助け人の智識を增す許りで……「敏子」屹度さうなりませうか。「久松」左樣屹度なりますな。「敏子」アーアこれで安心致しました。あの社説を讀んだ時には……腹が立って／＼貴郎がお書きなすッたかと思ふと實に胸が裂ける樣で御在ましたよ。「久松」さうでせうとも、御尤です。我輩もさう思ひましたな。「敏子」虚妄ばッかり……アノー久松さん。「久松」ハイなんです。「敏子」アノー操さんネ。「久松」ハイ。「敏子」操さんは何時御結婚なさいますのですかネエ。「久松」さうですな、未だ少しも知りませんな。「敏子」ホヽホヽ、貴郎が御存じない事があるものですかネエ。「久松」でも存じませんな。「敏子」まだあんな事をおッしゃるよ。オー可笑しいホヽ、ホヽ。「久松」ハヽハヽ、敏子さんは妙な事を……どうも了解らない。「敏子」お了解なさらずば申しませうよ。アノー……貴郎と操さんの御結婚ですよ。「久松」エハヽ、ハヽこれは妙だ。ます／＼了解らない。「敏子」お隱しなすッてもいけませんよ。操さんとお約束のある事は何人も知らない人はありませんから。「久松」イヤ困りますな。實にそんな無根の説を立てられては。「敏子」まだあんな事を。「久松」交際は隨分親密に致しますが、約諾があるなぞは全く……「敏子」眞實で御在ますか。「久松」イヤ久松決して虚言は云ひませんぞ。「敏子」……夫アノー……アレ御覧なさいましよ。控訴院の河岸を……アレ貴女が、操さんの樣な貴女が、アー操さん……スヤ見えなくなりましたよ……控訴院からアレ……女が縛られて……巡査が護送して……何の罪でせうか。國事犯……イヤ其樣事は未だ新聞にも見えませんネエ……モウ廿年餘も以前に岡山の景山英とか云ふ女教師が外患に關する罪とかで、あの裁判所で公判を受けた事があったさうで御在ますが、其目的と手段が迂だとか評した新聞もあったと云ひますが、其志は……其志は實に憐むべく欽むべしではありませんか。オヤモウ中の島の公園に參りましたネエ……アー彼處で艷子さんが。ホヽ、ホヽ、貴郎も操さんとお同乘で……アー好い景色だ……オヤ何處でせうネエ、オルガンを……過日の夜嚥……天方さんのお家は……アあの邊だけどもあの

製造所の後になつて……アレ〳〵都鳥が、オヤ沈んで、ア……また浮んで……アレ〳〵二羽ともにマア、遠くに行つて仕舞ひましたよ……どうも優美な鳥では御在ませんか。大阪の青灣もよう御在ますが、どうも此墨田川には……都鳥ばかしでも及びませんネエ。……大層に人が……旗が立つて……運動會かしらん……オーあの先に立つて來るのは、鋭一に似て居る樣だよ……アー鋭一々々、鋭一に違ひないよ。アレ駈出して、アヽ危險々々……鋭一かえ、マア呼吸を切らして、エなに家嚴さんが……御病氣で大層お惡い……それで報知に……あの家君さんが、何故電信で報知せないんだネエ……サア直ぐに出立しよう。まだ大丈夫汽車の間には會ふだらうから、サア……ナニ人力車を持つて來た……オー慈父さん、如何なさいました。マア大層に疲瘦なさいましたネエ。鋭一お藥はこれかえ、サア一杯召しあがりまし……アヽ一寸お待ち遊ばせ、藥がこぼれます。オーお熱が、お手の熱いこと。お手をお放し遊ばさんと、ア藥が……エー慈父さんと思つたら、エー浮田さん、アー鋭一々々、早く鋭一引……

敏子は自己が叫びし聲に愕然として眼を開けば、正に是れ南柯の一夢にして、身は大阪田簑橋の旅館なる窓前の寢椅子に横はりて、冷汗衣をひたすばかりなり。何時の程にか來りぬならん、給仕女傍らに侍りて一片の名刺を呈し、

「女」今此方が入らツしやいましてお目にかゝりたいとおツしやります。「敏子」エ此人が……浮田青萍……アノ此人がエーイ……

山村敏子が旅宿なる鳴鶴館を回顧みつゝ、ステッキと口笛とにて拍子を取り、田簑橋を南へ渡り、又東へ折れ、河岸傳ひに公園の方へ行くは彼の浮田青萍なり。

「浮田」アー恐入つた。どうも……美人ではあるけれども、あの威稜が……凛然たる威稜があつて、迚も迚も犯す事なぞは、イヤ思ひもよらぬ。殊に如何したのか、何だか不快な目付で以て我輩の顏を。どうも不思議だ。實に分らぬ。女學士、女學士と云ふものは總てあんなもの、かな。イヤ山村に限つた特性らしいて、何かと云ふと二言目には男女同權、女子參政、實に答辯に究する位だ。いかに熱心と云つても、あの位熱心なのも、實に極端に走つた熱心家だ。どうだらう。あんな女を細君にした日にや。イヤそれこそ大變だ。何一つ専斷所か、倏ち婦人の權利を枉屈するとか、イヤ公道に背くとか、餘程お心よしの良人なら兎も角、始終風波が。アー僥倖々々。尤もウンとはなか〳〵承諾せまいが、しなくて僥倖。イヤこんなときには遁。ハヽハヽドーンと喰つた方が、風流男子の價値と云つたら、イヤハヤ倒産會社の株券同樣。アーア浮田程の好男子が松山の操、彼婢にも喰へば、また喰ふなぞは自分ながら嘆息の極、とは云ふものの嘆く可からず。釋尊其人でさへも、緣なき衆生は度し難し。ハヽハよく〳〵女學士緣が、アーア斷念々々。さはらぬ神に祟りなし。仰ぐべく馴るゝ可からず。是れ實に山村敏子の謂ひか。アーア眞平眞平桑原々々。桑原と謂へば桑間の女子と一般、一時の情慾の勃發から、あの艶子と去年の夜嚥に、イヤ實に亂暴、自分ながらよくあんな亂暴を、若しも女學士、それこそ事だ。そこはそれ、少し愚圖のかはりに、が愚圖と云つても相應に教育もあるから、時としては一本、横面位はポーンと來るから、殊に、結婚期督促の眞額梨割には、マダ〳〵と受流してばかりも、アーア浮田程の法學士も、イヤハヤ答辯に困却するて、ぢやと申してこれなりにもされずか。もと〳〵

細君と云ふ積りで。アーアこれが猪食つた何とやら。エー仕方がない。ポーン、イヤ婦人は婦人だけに容易に心が移り悪いから、且つは浮氣らしい内にも一人を、我輩一人を思ふ。エヘ、グット思つて居るから隨分決闘の申出位は、アーア今の計と云つたらソーサ、矢張結婚の一事だ。が財産、それがないので、またある位なら、松山、松山に公然申込む事も。アーア金が敵のチョンと云ふ幕切れにも、久松、久松位に金力があれば、ナアニ松山だッて、財即是權の格言は如何なる場合にも當嵌るから、夫故にこそあの久松に、イヤ久松もなか〳〵の色師だて。山村、山村もなんだかイヤアに久松の主義はとか持論はとか、どうも少し氣が揉めるぞ。エー、久松の野郎、松山と云ひ、山村まで、エーどうして遣らう、ウム、ウム、よし……よし、細工はリウ〳〵、ハヽハ青萍先生の方寸の内に、エー吃驚した、何人だ突然に……

と浮田は僅かに獨語を止めて、其人を見るに、年は四十前後にもならうか、セビロの服を穿ちて中形の帽子を手にせる商家の手代らしく、小才の利きさうな男が曾て面會せし事さへなきにいと馴れ〳〵しく、いと丁寧に會釋をなしつゝ、

「男」へヽヽ、だしぬけにお呼止め申しまして、イヤ實に恐入りましたが、エー貴下様は浮田様で入らッしやいませう。「浮田」左様、我輩は浮田ぢやが、何か御用かな。「男」へイへイそれでは貴下様がへイ浮田様で、私はエーあの櫻田千樹の番頭で、へイ横田奸吉と申しますへイ。「浮田」フフーム。櫻田さんの、フフーム。「横田」イエ御不審はへイ御尤で御在ます。まだ手前主人もへイお目に掛りました事はないさうに御在ますが、少々先生に御鑑定をお願ひ申したいへイ訴訟事件が御在ますので。「浮田」ハハア訴訟事件で。「横田」へイそれで唯今御尊宅にお伺ひ申します處で、へイ。「浮田」へヘーさうかな。成る、イヤ參りませう。直ぐにでもよろしい。「横田」へイ早速御來駕下さいますれば、へイ主人に置きましても、へイ私も使に上りました甲斐が御在まして、へイ難有う御在ます。「浮田」イヤ職業の事ぢやで、直ぐに御同行致さう。たしか高麗橋通であつたな。「横田」へイ四丁目で南側で御在ます。エー私が乘つて參つたと申しましては寔に失禮で御在ますが、どうぞ、此人車へお召し下さいまして。「浮田」イヤそれは。

浮田は件の人車に打乘り、櫻田がりへ急ぎ行きぬ。横田は遙かに之を見送り、

「横田」イヤなか〳〵好男子だ。孃が、無理もねエ、へ、甘くやつてやがるなア。

第六回

浮田青萍は櫻田艶子が父千樹の請に應じ、その家に至りて横田某より云々なりとの旨を申し入るゝに、取次は再び出來りて此方へ來ませと請ふ。浮田は延かれて應接所に到るに、有繋に豪商の住居とて、善盡し美盡し、華麗云はんばかりなりし。浮田はテーブルをめぐれる椅子の内態と客席をはづして腰打掛け、室内の粧飾品など心に批評しつゝ我愛婦の住居とおもへば心惡からずも、主人はいかなる人物にや豫て艶子の話によりて頑固なりとは聞きつるから、應對はとやせんかくやせん、人の嗜好を見て説くべし、といふヲレートリイ(縱横術)は、豫て知りつ、機に臨み變に應じ取入る手段のなからずやはと、眼を轉じて室戸に注ぎ、早や來れかしと待ちつゝあるに、軈て空咳二つ三つを相圖となし、徐に室戸を開きて入り來る其人を見るに、年は六十の上を四つ五つや重ねし、さはれ髮の毛は倘艶ありて、白毛七歩に黒毛三歩、

所謂胡麻鹽にして、齒の缺ちたる方なり。眼は猛き樣なれども亦た柔和なる處なきにあらず。鼻は高くして、其尖七面鳥の嘴に似たり。四五日前にや剃りたる鬚毛を植ゑしばかりの三歩程も延びにし儘に取りまかれぬる口は、ウケ脣にして、滿面つくれり。身には支那形の寢衣を穿ちて、足には毛絲の假靴をはきぬ。右手にはゴム製の烟草一管のパイプを滑ませ、左手には人を握りつ、椅子を離れて迎へぬる浮田と三歩ばかりの處まで進みて、日本定式の會釋をなすにぞ、浮田も兩手を膝のほとりまで下げつゝ、いと丁寧に禮を返し、互にお定まりの辭讓の後に、彼此共に席につきて少時は無言にてありしが、千樹先づ口を開きて、

「千樹」イヤどうも態々御招請申して誠に失禮で御在ますな。「浮田」イヤどう致しまして、態々御使でなくとも一寸端書でも遣はされば早速參堂致しませうに、却つて恐縮致しました。「千樹」どう致して、拙者がお伺ひ申す筈で御座つたが、御覽の通り無禮な樣子で、ハイ四五日前より少々感冒の氣味と見えましてな。アハ、ハ、老人になりてはモウ一寸した事も障りますので。「浮田」イエ御尤です。どうも此頃の樣に時候が不順では、私なぞも時々やられますから、貴老方は別して御攝養が第一で御在ます。「千樹」ハイ梅雨中はイヤモウ冷えると思へば暖く、暖いと思へば冷える。老人因却致しますな。併し近年は大分虎列刺も流行致さん樣で、先づ今年なぞも左程の事はありますまいな。「浮田」左樣、此鹽梅で參れば左程の流行もありますまいが、イヤ既に四五日前眞性患者が一人あつたさうで。「千樹」左樣々々、油斷大敵とやら、今年なぞも等閑に致すと早速先年の樣な慘毒を流しますぞ。先生はお壯年から御存じあるまいが、エート拙者などが二十代の頃、左樣さ、明治十五年で御座つたが、イヤモウ非常の流行で、石川縣とかでは、一村人口を絶つた事なぞもあつて、アーア怖るべし怖るべし。「浮田」イヤ實に怖るべきものであります。油斷致すと今年なぞもまた流行致すかも知れません。先づ注意に注意を加へて豫防致すが第一で御在ます。時に先刻御使の趣では何か訴訟事件とか申す事で。「千樹」ハイイヤ先生をお煩はし申す程の事件では御座らんから、奸吉でも、ソレ先刻差出しましたあの横田でも代人に出さうと思ひましたが、女と申すものはイヤモウクダラヌ事を心配致すもので、家内が申すには、幸ひ貴方がお知己の、イヤツイまだ御近付も致しませんが、[illegible]子が種々御厄介になりますさうで。「浮田」エ……イエどう致しまして、時々夜會や舞踏で御目に掛りますが……「千樹」イヤモウ我儘者で嘸ぞ失禮ばかり致す事でハ、ハ、……幸ひ娘が御知己の浮田さんとおッしやる法學士が居らッしやるから、其お方に御鑑定を願つてと斯樣に申すので、ハイそれで先生の御光來を願つた譯で御座るが、イヤ御多忙の處を恐入ります。「浮田」イエお辭では却つて恐縮致します。ナニ職業の事ですから決してそんな御配慮は御無用に願ひます。シテ其鑑定を致すは何樣事件で御在ませうか。「千樹」イヤ些細な事で、先生の御鑑定を煩はす程の事件でも。それはマア段々御話し申しませうから、それに萬事は横田に委任致し置きました。あれから詳細は御聽取を願ひます。エー誠に初めてのお出でに何の御愛想もありませんで恐入つた譯です。粗末で御口に合ふ樣なものも。ハ、ハ、氣は心とやら別席で晩餐を差上げたい積りですが、それに家内も御知己になつて置きたいと申すので、ハ、ハ、。「浮田」イヤそれは恐入りました。

此時下婢出來りて、
「下婢」よろしう御在ます。　「千樹」ウム・・・・浮田さん、それでは・・・・
櫻田家の座敷には櫻田夫婦、愛娘艶子、浮田の四人、既に會食を了りて四方八方の世間話興ありけに打くつろぎぬ。千樹の妻政子といへるは、千樹には十歳ばかりも劣りて材は少しく低き方なり。目鼻口の配置など愛娘とそツくりにて、艶子が五十前後にもなりにし後はまた斯くぞあるべく思はる。身には愛娘が手になりしコハク織の常衣を裾長く着なし、襟其外の粧飾などなるべく目だゝぬを選めど、價は價だけの値打ありて何處となく奥床しく見ゆめり。年頃の娘を持ちぬる母親の常情とて、若き男子をし見ればかゝる人をこそ愛娘の婿がねになど思ふ心先づ胸に浮べば、今又浮田が容姿の瀟洒にして、とりまはしの怜悧けなる、法學士と聞きつるに學識もさぞあらめ、何國の人にて親元はいかにや、久松の樣に獨子なるか、たゞしは二三男にてあるべきか、艶子とは好き配偶に見ゆるが、イヤ外面はともあれ其性質こそ、など思ひつゞけて、始終浮田の擧動にのみ目を注ぎてありしが、此頃には二三十年前と違ひて先づ表向丈けは婦人の前にて その許しを得ざる内は煙草を喫まざるの風紳士社會に行はれぬれば、政子は浮田に對ひて、
「政子」浮田さん 御遠慮なくお煙草を めしあがりましな。
浮田は素より愼深からず、耐忍薄き性質なる上、食後の喫煙は何人にてもいと欲しく思ふが常なり。されば浮田が左の手は早くもポッケットの内なる卷煙草入を確乎と握り詰め、さても氣の利かざる婦人かなと少しは恨めしくも覺ゆるに、漸く政子の一言を得し事故、直ぐ樣然らばと云ひたさう、口つきなれどもソコはグット辛棒して、
「浮田」ハイ難有う御在ますが、左程に思ひませんで・・・・　「千樹」浮田さん、よろしいお構ひなく。拙老もお招伴致します。どうも煙草も自由に喫まれんなぞはイヤハヤ文明國の風習か何かは存ぜぬが馬鹿々々しい譯で。斯樣に女が跋扈致すもあまりあまやかし過ぎるからです、ナアニお喫んなさい。御招伴致さう。
とかくしより煙草入とペーパーを取出し、シガレットをこしらへれば、浮田も卷煙草を出して火を點ずる。
「艶子」ホ、ホ、家嚴さんがまた例の通り・・・・何かと云ふと直ぐにあまやかし過ぎるとおッしやるよ。ネヱ慈母さん。　「政子」イヤ おまへなぞは難有く思はなければならないよ。母なぞが十代の頃にはなか／＼今の樣な世の中ではなかつたよ。まづ學校と云つてもその中には小學校なぞも漸々設立にはなつたけれども、初めは寺小屋と云つて規則も何も立たない所へあがるのさ。それで教はるものは何かと云へば、今日ではモウ見る事も出來ない女大學、女今川の樣なもので、何でもかでも良人を大切にしろ、良人の云付けはよかれあしかれ決して背くな、云ひなり次第になつて居るのが婦人の美德と云ふもの、と教へる事だから、おまへなぞは夢にも見る事の出來ない程に男の勢が强かつたのさ。それから西洋の學問が入つて來て、男女同權と云ふ事を云ひだしたものだから、これまで壓制けられて居た反動力とやらで、其同權說が大層盛んになる事はなつたけれども、其頃の女と云つては皆母なぞの樣な無學なものばかりだから、直ぐに火の消えた樣になつて仕舞ひ、また昔同樣になりさうだつたが、其内には學問ばかりでなく、西洋の風俗迄が入つて來て、ヤレ交際會の、ヤレ夜會のと、後には男子方までが舞踏を稽古なさる樣になつて、一時に

競爭ぎだしたものだから男女の交際をする事などはこれまで少しも知らない上に、例ひ子供でさへも男女席を同うするはよくないと教へられ居た人たちが、急に席を同うする所ではなく、夜ふけさふけまでも手を取りあつて遊ぶのだから、イヤモウいろ〳〵可厭しい評判もあり、ひどい噂なぞも聞えるから、年頃の娘を持つた親達は隨分心配な事ばかしで困り切つたが、マア此頃の夜會にはそんな噂なぞはなく、婦人の地位も學問と共に進んで、あの敏子の様な女學士も大分出來て、これからいよ〳〵婦人の幸福もますばかりであらうが、唯外形の幸福がましたばかりでは何にもなりません、それと一處に婦人の道と云ふものもよく守らなければなりませんぞ。浮田さんの様なお方々と御交際申すのでは、猶更品行に注意してお笑ひを受けぬ様にせねばなりませんぞ……浮田さん、貴君もまたお心づきの事がありましたら、どうぞ御遠慮なくおしかりをお願ひ申します。オホ、何と云ふ事でありませう、過刻から妾一人でおしやべりを致して居つて。オホオホオホ。

政子が愛娘を思ふ眞實心、彼の浮田に迄も注意を頼めるいと難有かるべき事なるに、艶子と浮田とは顔見合せ、サテは母上には兩人が交情を知り玉へるにや、知りて斯く宜ふは心には早や許し玉ふにこそと、自己等のたはむれし心より都合よき註釋は下すものの、有繫に慙差みて得ら答へず。艶子は態と聽かざる眞似して用ありげに父に對へば、浮田は腮と額と平行する程に頭を下げ、ツト模糊有無の間に答をなすめり。千樹は、政子よく云ひたりと云はぬばかりの面色にて、パイプ(西洋の烟管)を握りたるまゝ脣より一寸程遠ざけつゝフーッと煙を吐き、

「千樹」コリャ艶子、母の云ふ事をよくきけよ。今政子がはなした通り、二三十年前の敎育と云ふものは、女には七去三從と云ふ事があつて、女は男に從へ、どこまでも從順でなければならぬ、從順に從順にと仕立てあげた故に、從順な方の美徳は誠に賞すべきであつたが、利があれば害が伴ふ。まゝ卑屈と云ふ方に傾き過ぎ、唯々男子の壓制を受けるばかりで所謂深窓にばかり養はれて、世事に通ぜず、智識の發達すると云ふ事がなかつた。其内には政子も云うた通り、西洋の思想が入つて來て、いよ〳〵内地雜居にでもなつた日には、艶子なぞは知らんが、其頃には今日の様に外國人と軒を列べて住む様な事もなく、居留地と云ふものがあつて外國人は其處より外へ住居が出來なかつたものぢや。サア其内地雜居と云ふ事になれば、外國の貴女紳士と交際をせねばならぬ。それには此迄の東洋婦人の有樣では迚も行かぬ。サア智識を進めろ、サア交際の稽古をしろと、何かが一處にぶつかつて、西洋婦人が交際の經歴には多くの月日をも費し、また其間には一種微妙の道徳が伴ふ事を知らず、唯無暗に外形にのみ倣らて、徳育も智育も共割に進んで居られば、外國人にきかれたなら實に面目ない様な出來事も度々であつて、嘆息の外なかつたぢや。艶子、よく聞けよ。今日の交際會や夜會には、それ程の弊害もあるまい。婦人の智育も十分であらうが、どうも徳育が後れ勝になつて居る故、愛兒なぞも手離して夜會や何かにはやりたくない。併し世の風潮にはどうも爭はれぬもので、聖人でさへも物は凝滯せず、よく世と推移ると云はれた位で、唯乃公ばかりが頑固な事ばかりも云はれず、仕方なしに夜會にもやる様なものの、乃公の志でないのぢや。よいか艶子、弟共はまだ學校へ通ふ位の年で、先づ今の處では大丈夫であるが、愛兒が其手本になる様に十分に品

行を愼んで、櫻田の家名を汚したり、世間に笑はれる樣な事のない樣にくれ〳〵も賴むぞ。よいか了解つたか。此頃の女は自由結婚を此上もない事と心得るが、イヤ昔の壓制婚姻に比較ぶれば決して惡いとは云はぬ、自由結婚と云ふ事を惡くは云はぬが、唯其利を採らずにどうかすると其弊にのみ流るゝぢやて。こゝの處をよく注意致せよ。よいか了解つたか。ハヽハヽ、浮田さん、嘸御退屈でしたらう。イヤどうも此頃の女の生意氣にも困りますな。ハヽハヽハヽ。

浮田は政子のお談議漸と濟んだかと思ふとまたもや千樹の說法に退屈なし、明瞭り切つた事を老人はこれだから困ると、グット吞み殺した欠伸の淚を利用する積りでもなからうが、ハンカチーフにて拭きながら、アアーット感嘆の聲を粧ひ、

「浮田」アアーッ實に感激の至りです。實に金玉の御教示、艷子さんは其樣事は大丈夫ですが、世間一般の婦人に聞かして頂門の一針と致して遣りたう御在ます。どうも我輩などへもよき御教戒で實に感服致しました。「政子」イエ世間の御婦人方は兎も角も、艷子なぞはよく注意けねばなりません。山村の敏子とは從姉妹で御在ますが……あの娘は幼年折に母に死なれまして、父親の手ばかりで教育されたせゐで御在ますか、大層しッかりして居ますが、どうも艷子はどう云ふもので御在ますか年も三つ四つ上のくせに、兩女一處によりますと敏子の方が姉の樣に見えますよ。母が無ければそれ丈に苦勞も仕ますし、どうしても何かにつけて違ふ處が御在ますよ。隨分妾が氣を付けます積りで御在ますけれども、まだねッから子供で困りますよ。「浮田」イエどう致しまして、艷子さんは御發明で御出ですから、夫に……實に從順しく世間の婦人の樣では有りません。又敏子さんもなかなか……「千樹」ハイ敏子も先づどうかかうか人にも知られる程に成りましたが、女子にしては過激な方で、イヤモウ女子參政なぞと飛んでもない考へを起して居つて困ります。「浮田」イヤ今日も一寸伺ひましたが、隨分御熱心の御樣子で……「艷子」浮田さん、郎君は敏子さんの旅宿へお出でなさいましたの。「浮田」エ、ハイ。「艷子」オヤさうで御在ますか……慈母さん、アノー敏子さんが昨日御出での時明日お發程なので今晚訪問ることに約束して置きましたから、今から一寸行つて參りますよ。「政子」アイ行つてお出で。母からも宜しく申したと……「艷子」ハイ。「浮田」イエ敏子さんの御出立は御延引に成つた樣で御在ました。「艷子」イエ浮田さんネ、さうでは有りませんよ。「浮田」ハハア成程さうで……夫では我輩もモウお暇に致しませう。何れ訴訟事件は橫田氏を明日御遣はしになりますれば、其節よく伺ひまして、また御相談を……「千樹」それではどうぞよろしく。「政子」誠におかまひ申しませんで。「艷子」浮田さん、御免下さいましよ。「浮田」イヤモウどうぞ、それではまたお伺ひ申しませう……

第七回

松山操は今宵も某氏の夜讌に招請かれけるから、自己が化粧部屋にこもりてかれこれと粧飾を凝らすに、衣服の艷麗なるは云はずもあれ、腕環襟飾も最も時好の新形なるを採擇みて跡沓をさへ意を用ひて、今は化粧も了りぬればいと大いなる照姿鏡に向ひて倘ほも裝飾など今日の粧飾に似つかはしきを見定めつゝある。姿容天性の美貌なる上、心をこめて磨きたる事なれば、秋水を出づるの蓮とも、春月に垂るゝ柳とも、喩へん方なく麗はしく、實にや命をたつ

の斧とはかゝる美人をや云ふべき。時は既に午後五時を報じぬ。夜嚥の時期にも近づきしや、一人の侍女いそぎ室内に入り來りて操の傍に侍立し、

「侍女」アノー、お嬢さま、モウ五時を報ちましで御在ますよ……お馬車も用意が出來ましたよ。「操」さうかえ、今直ぐに參るがネ……どうなすッたのかネエ。久松さんはモウお出でなさる時刻だがネエ。

操が不審の眉をひそめぬる折、室戸の外より侍女の名をば呼ぶものあり。侍女は操に會釋して出去りしが、又直ちに入來り、

「侍女」久松さんからお手紙で御在ますよ。

侍女は手に持てる書狀を操が手に遞與せば、操は取りて之を見るに、松山操樣、久松幹雄より、とあり。さては何か支障の出來て其を云ひおこし玉へるにやと、封押切りて讀下す操の面色は一句々々に變り行きて、果てはハラ〳〵と降りそゝぐ身を知る雨を見られじと、手紙を時の笠宿り額にかざし、忍ぶなる操が意中を察るやしらずや、侍女は慰め顏に聲打ひそめて、

「侍女」お嬢樣、どうか遊ばしましたの。お心持でもお惡ういらッしゃいますか。

問はれて何と岩間の躑躅、赤らむ目元に何となう、少しく怒を含める樣子。

「操」使は待つて居るかえ。「侍女」ハイどうで御在ませうか、一寸尋ねて參りませう。「操」アイさうしてお吳れ。そして何人が受取つたのかも……「侍女」ハイ畏りました。

操は侍女を出し遣りつゝ、こゝ恨めしと思へる手紙を再び押延し、目には憤怒の焔を燃へど、眉には不審の雲舞ひて、少時は口をも開かざりしが、漸々に淚を飮み込み、

「操」アアー賴まれないは人情だ。行路の難きは山でも川でもない。唯人情の反覆にありと、古の人も云はれた通り……マアどう云ふ間違なのか。何だか少しも了解らないよ。此手紙の樣子では、唯文面にあらはれ居るのは……思ふ故ありて、貴孃との交際を絕つ……其理由は敢て說明を要せず。何だか少しも了解らないよ。思ふ所……マアどんな理由があつて……あれ程に堅くお約束をして、いやらしい事をこそしないが、行末は……あれ程の約束も。ニー欺弄されたのか……久松さんに限つてそんなお方では決してないが、マアどう云ふ理由……其理由は說明しない……其理由は……說明しない……アー久松さんにも似合はないよ。それやモウ萬事に行屆かないから交際を絕つと云はれても仕方がなく、自分が不束だから人を怨恨みはしないけども、何も少しも覺えがなくッて突然にこんな事を云はれては……世間の手前もあり……お友達の批評もあるから、どうもこれなりに……これが久松さんがツマラヌ人ならば兎も角さ、改進黨の主幹なり、浪華タイムスの主筆なり、非常の名望もあつて、衆女が交際を求めようと競爭した上で、アーアあの[illegible]子さんが能い手本……初めは羨んだ身が今は羨まるゝ身になつたのに。こんな事があつては實にお友達にも顏が會はされぬ……マア如何しようか。久松さんにお目にかゝつて……今から久松さんのお宅に、イヤ〳〵……例ひ來訪あるとも面會は謝絕す……斯う書いてあつて見れば、御面會もあるまい。餘程の御立腹と見えて平生とは字形迄が亂暴だ。久松さんのなされ方にしてはあんまりだと思ふ事もあるけど、御目にかゝらねばそれも明解らず、と云つて面會は謝絕する……お尋ね申す事も出來ず……アー能い事があるよ。今日の夜嚥には久松さんも招待されて居らッしゃるから、其時にお目にかゝつて……如何云ふ理由か伺つ

て見よう……が、矢張此通りであつたら、其時はどうしようか……アーア……

侍女は急ぎ足に操の前に來り、理由を知らう筈はなけれど、自己も失望しましたと云ひさうな面付にて、

「侍女」アノーお使は歸りましたさうで御在ますよ。おさし置でよろしいと申して。「操」フムさうかえ……何人が受取つたのだかネエ。「侍女」ハイアノ湯川さんがお取次を。「操」湯川が……「侍女」モウ直きに六時になりますよ。早く行らツしやらねばお遲くなりませう。「操」アそれではまゐらうよ。「侍女」何もお忘れ物は。「操」イエ何もない樣だよ。

松山の操が乘用の馬車はいと輕捷なる構造なり。馬も太く逞しき月毛の逸物なれば、遲緩なるべき筈はなけれど、操はヒタいらちにいらちて、自身手綱を取り鞭を鳴らせば、馬は平生慈悲深き主人が、かく頻々と鞭を下すは扠手も不思議な事かな、モウこれよりはと獸語を解する耳もて聽きなば聞えさうな勢にて、フーッフーッと鼻の孔より兩道の呼吸を吹出し、龍の雲に乘ぜしも斯くなん、蹄地につかず空を躍り、某家へ走せ付けるに、數十の馬車の行儀よく整列せるは、其主人々々が既に來りて若干の時を經しとは知られぬ。先に馬は不思議なりと覺えし疑團も茲に氷解せるから、聊か恨めしく思ひし念も全く消え失せぬめれど、唯消失せず遣る方なきは主人操が腦裏にわだかまりて、頭蓋も裂け破れんばかんの久松と云へる曲者なるべし。操はこは後れけるよと車を飛下らん程に心いらち氣あせれど、供人共にはしたなく思はれんもうしろめたく、徐々と馬車を下りて取次人に延かるゝまゝ、まづ待合室に到り見るに、人一人も居らざれども今までは人多く集りしかと思はるゝ氣はひ、よく整へる部屋の内のどことなく亂れしに見られぬ。操は猶ほも取次を急がし立てゝ、會食の席へと案内さるゝに、數十の卓子に數百の來客いと行儀よく列びつゝ、未だ箸を擧ぐるにはいたらず。久松の君はいづこにと會釋するも心は空なり。操は座中の人々やと見渡すに、正客の席とも云ふべき所には天方某を初めとして、一黨の首領とも云はるべき人々大阪府知事某伯爵などもあり。少しく離れて婦人勝なりと見ゆる席には、某伯爵夫人、天方夫人、某侯の令嬢、續いて山村の敏子、櫻田の艶子、其他貴夫人令嬢等いと多く着席なし、二三箇の男子もまた其間にまじりぬ。操が再び視線を放ちし折に瞳子に寫りしは何人ぞ山村敏子と天方夫人との間にはさまり、さも愉快らしく打談へる久松の幹事なり。操はツカ〳〵と進寄らんとしてまたはしたなしと猶豫ふ內、當家の夫人來りて迎接の疎略なりしなど打わび、此方へと請ぜらるゝに、此時は既に席盡く塞りて唯一脚を餘せるのみなり。操は件の空席へ誘はれて椅子にはかゝれるものから、終始彼の一席にのみ眼を注ぎて、若しも久松と面を合さば久松は如何なる擧動をかなす。そのふるまひこそ操にとりては玉となりて全からんか瓦となりて碎けんか、二つ一つの大事なるべし。さはれ久松は操が今此席に來れるを知るや知らずや、唯山村の敏子と相對して更に餘念もあらぬ樣なり。操は久松が此方を見よかし〳〵とそれのみに心をとられて、魂魄既に天に歸りて空しく、形骸ばかりを留めぬる樣に少しも四肢をも體をも動かさず。唯平生には人を腦殺するの眼も、今は嚇殺せんずる程にいとすごく見ゆめり。操が隣席の紳士先ほどより操の擧動に目を注ぎつゝ何か考へつゝありしが、突然と操に向ひ、

「紳士」操さん……操さん……如何なすツたのです。操さん……

と三聲程呼びぬれども、操は耳に入らずや、入

りしも鼓膜は震動を覺えぬにや、何ほも以前のありさまにて彼の一席をのみ見つめぬ。此度は紳士もやゝ鋭く注意を與へけるにぞ、操は漸くに心付き、

「操」ハーイ‥‥

と答ふる聲もいと力なく、催促されて仕方なく、お間に合はせると云はぬばかり。紳士は少しくムツトせしにや、

「紳士」エー操さん、何か御不滿の事でもあるのですか。

操は紳士に一回は一回より鋭く話しかけられぬる事のいと五月蠅くはあれども、さてはあまりに無禮ならめ、何人にやと漸く其人を見るに彼の浮田青萍なりけり。こは要なき人に會ひけるよ、折惡かりしと思ふものから、交際場裡の花王とも世に評はるゝ身は斯る時にも思ひかへし、

「操」オヤ浮田さんで居らツしやるの。どうも少しも存じませんで誠に失禮を致しましたネエ。

浮田もさる者なれば、面をかへし、例の愛嬌深き目に莞爾と打笑み、

「浮田」イヤ我輩こそ突然と驚かしまして失敬ですが、何か非常に御熱心に御心配、イヤお考への樣ですから、それでハ、ハ、失敬を致した譯です。「操」ハイイヱ難有う御在ます。「浮田」其後は久しく御訪問も致さず、お目に掛りませんでしたが‥‥ハ、ハ、今夜はお一人ですか。「操」ハイ。「浮田」例のハ、ハ、久松君と御一處ではないんですか。「操」ハイ。「浮田」久松君は如何なさいました。「操」ハイ。「浮田」オー久松君はあすこに、御一所におなりではどうです。「操」ハイ。「浮田」あの久松君の隣席の貴女は何と云ふ人です‥‥御存じありませんです‥‥か。其次のは、あの天方の奧さんの隣の人は‥‥操さん、どうなすツたのです‥‥

浮田は操が初めの内こそ自己の問に答へけるが、それさへ有無の間にありて、後には全く答をさへなさず。こは乃公を輕侮れるよと思へば、有繫に男子の常にして、非常に激怒を發し、斯る場所をも打忘れ、既に口を開かんとなす時、食事茲に始り隣席の某に催されつゝ僅かに箸を擧げけるは、幸とこそ云ふ可けれ。操は山海の美味好味も全く箸に上らず、早や會食の了れかしと心そゞろに急ぐなるべし。

操は山海の珍味にも箸を擧げん心なく、平生はいと好もしとたしなめるものをさへ、悉く給仕に奪ひ去られて唯會食の了らんことをのみ刹那一日と待つ程に、漸くにして會食も果てつ。イザ舞踏室へと主人が案内に、操は此時にこそと久松等がまとゐせし彼の席に近づかんと思へど、數百の來客が一齊に席を離れし事故、雜沓云ふばかりなく、なか／＼に近づき得べうもあらず。さはれ斯くて止むべきにあらねば、力のあらん限り否一倍の膂力をふるひて押分けくぐり拔け、僅かに彼の席に達しければ、アナ嬉しと胸先づ躍りて久松の君と面を見るに、其人ならずあらぬ人なり。こは心得ずと彼方を見れば、先の人々と思はるゝ一むれが一かたまりとなりて押し行くに後れて行くは艶子なり。あの内にこそ相違あらじとからくも追付きていかにと見るに、艶子と腕打組めるは浮田なり。こは要なし何處にぞと視線の達かん限り求むるに、久松も見えねば敏子も在らず。操はさがしながらもまれながら、行くともなく止まるともなく、終に舞踏室に來りぬ。此時は來客各々偶を求めて折から奏する樂につれつゝ、二人一組となりて踊るなり。操は未だ相手を求めず、彼の君は、彼の君は、何處にぞ、何處にぞ、と又もやキツトと打見れば、遙に間は隔つれども、中にも目だつ一組こそ、慥に久松と敏子なれ、操はハツト

心も空目はくらみても猶躊はず、足空さまに翻け寄らんず勢をとゞめて抑りとゞけども放さぬ人あり。こは口惜しと見返り、何人なれば妨げなすぞと怨み顔にこれを見るに、大政改進黨の首領なる天方某なりけるにぞ、操も遂に拂ひかね、ふたゝびも天方と踊れば踊る氣もそゞろ足も亂るゝ亂拍子、亂れ苦しき操が暴動を天方知るや知らざるや猶ひとなりまた楯となり、すれ違うても久松と云ふに云はれぬ松山の操が心いかならん、想ひやるだにいたましき。斯くて二人一組は四人一組と變り、或は離れ、或は合し、踊る程に舞ふ程に、操は素より舞踏の技には此道の最手と呼ばれて世に許されし達者なるに、先刻よりの物思にも心神いたく惱亂なし、今は舞踏に堪へざる迄に腦も破れんばかりなるにぞ、天方へ由を告げて打わびつゝ、しばし傍らに立ち、さすらへば天方はいと信切に慰喩めて、

「天方」操さん、先刻よりの御樣子がどうも……非常に御煩悶の樣ですが、此室においでゝは何かにつけ……猶ほおのぼせなさらうから、お歸宅の方がよろしからう。「操」ハイ難有う御在ます。少うし斯うして居りましたら回復なりませうから……妾は自宅へ歸りますのは……却つて斯うして居ります方が勝手で御在ますから。「天方」イヤ成程それもよからう。それでは少うしお休息なさい、失敬しますぞ。

天方は又もや相手を求めて舞踏のまとゐへは入るめり。操は眉間に八字を畫き、米カミのあたりを兩手にて押へ、吐く息太くして吸く息小さく、目には無念の涙浮び玉を結びてこぼれんばかりなれども、視線の注ぐ所は何處なるべき。看官も亦推し玉はめ。漸くにハンカチーフにて涙を拭ひ、胸の中にて語る樣、

「操」今日のお手紙と云ひ……今晩の御樣子と云ひ、いよ／＼……愚癡な樣だけども、アアー頼まれぬは人の心……先刻からすれ違つたり……顏を見合せたりしたけれども……例ひ聲をお掛けなさらずとも何とか……アレ／＼あんなに敏子さんとばツかり初めツから……敏子さんとばツかり、あア親密になさるのはどうも不思議でならない……敏子さんは女子學校の熱心者で倶樂部の演説には妾も感服して既に參政黨に加入しようと思つた時久松さんが……それで成程と思つて別段抵抗する譯ではないけれども、反對の主義を取つて盡さうと思ふのにそれに久松さんが……どうもお心がわからない。是非一度何はなければ……先刻の會食の時にも……今此舞踏でも……アーアあの時天方さんに止められねば如何な事をしたかも……あの時の苦しさ／＼胸も裂け骨もくだけ……アー苦しい……これが以前であればこんな時にも久松さんの……アー苦しい……アレ／＼此家の夫人が……久松さんと何か……久松さんはアレお歸りなさる樣だ……敏子さんにも夫人にも御挨拶を、天方さんとも何か話して、アお歸りだよ。アレ久松さん、アレ、アレ、一寸久松さん、久松さん。

操は苦痛をも打忘れ此時を過してやはと二三步足を移すや否、アッと一聲叫びもあへず仰むけにドウと倒れて悶絶しぬ。

第八回

松山操が父凌雲といへるは、元と第二大學醫學部の教授なり。曾て官命を帶びて歐米を巡回し、醫學上の取調をなせし程にて、歸朝の後は評判いよ／＼高く、既に部長にもなさるべかりしを、時の大學總理と意見あはず、俄かに退けられぬれども、家は素より富裕なり。上等の生活をなすに差支なきから、唯著書にの

み從事して開業を營まずと云ふ。是を何故ぞと尋ぬるに、凌雲は施術よりも寧ろ學理に精通し、所謂學醫とか云ふものにて醫業に從ふよりも著書の方益あるが故とぞ。今年は五十五六歳なるべし。髮薄くして前頭部は燒山の樣に赤光に光りて、後頭部と顱頂部のほとりは下れば下る程毛多くなりて、鬚は[illegible]ほど園木茂れるに似たり。面もまた赤ら顏にてデップリと肉づき、目鼻立口元は柔和なる方にて、笑みなば大黒天に髣髴たらんかし。總て學者たちの容貌ならず。此の人にしてさる學力あらうとは初對面には思ひ掛けざる位。妻はお節と呼びて四十七八にもなりぬらん。良人の體格とはまるで反對、優形の品よき方なり。目涼しく鼻高く、頬は少しくこけ落ちて顴骨鋭く出でぬれども、もと〳〵醜婦ならぬ昔の面影殘りていと上品なる扮なれば、キツトしてすごき程なり。夫婦の間に一男一女あり。兄の英村は父の箕裘を續ぎ、十五歳にして第三大學の醫學部に入り、二十一歳の時業を了り、次で帝國大學院に入る事を許され、選科を修めける内、或る醫學上の大發明をなしぬ。既にして大學院を退き醫學部の助教となり、教諭となり、先の發明の功を賞して博士の榮稱をさへ附與され、今猶東京に在りて大學に教授たりとぞ。妹は即ち操にて十八歳なり。今春女子大學を卒業なせし後は父母の許に孝養して、折々に女子同攻會などへ出席するを自身が職務とはなしけり。家庭の教育も誠に嚴格にて、夜會舞踏などへも父母何れなりとも付添はねば操一人にては遣さぬ程なり。然るに如何なる故にや、操が久松と親密の交際をなす樣になりて後はまた以前の樣に嚴格にはなさず、隨分一人にても心安く出しやるめり。斯く云へばいささか不審の樣なれども、若き娘を持ちぬる父母の心にかゝる變化をなす事は珍しからず。唯久松の人となりを信慕せると操が性質を信ずるの深さによるなり。今日も夫妻相對して何事にや打語へるが、凌雲は毎にかはらずいと平和の面色なれども、お節はどことなく心配らしき内に少しく怒を含める樣子、

「お節」それでも良人あんまりでは御在ませんかネエ、マア云はゞ云ひ掛り同樣少しも覺えのない事……を。「凌雲」その覺えのないのが第一の強みぢや。左樣に心配する事はない。

「お節」良人がさうおッしやるのに妾がさしでがましく申上げるにも及びませんけども、あんまりだと思ひますよ。これが外の事なら兎も角もで御在ますが、今度……今度醫術上の事であつて見ますと何か一時の事にしましても世間の批評もありますからネエ良人。「凌雲」マアよいから、おまへは默つて聞くがよろしい。何かの間違で其内には必ず明白になるから。「お節」それはもう素より形のない事で御在ますから、[illegible]、實は[illegible]在ませんが……いかにしても[illegible]な事で。「凌雲」[illegible]作田も[illegible]でもあるまい。今日は貴方から湯川を談判に遣して見よう。湯川を呼びなさい。「お節」ハイ。

と机上の呼りンを鳴らせば、三十ばかりの品よき侍女室戸を明けて入り來り、なかば腰を屈めて、

「侍女」お召し遊ばしましたか、何ぞ御用で御在ます。「お節」湯川は居るかえ。「侍女」ハイ。「お節」一寸呼んでお呉れ。「侍女」ハイ畏りました。唯今。

と侍女は出去りしが、少時ありて入り來るは、年の頃三十前後顏立は賤容すべき特點はなけれど、眉は漆の如く濃く、目は豆の樣に丸く、溫面作りし口元と、顴骨の間に小鼻のほとりより起りし皺樣の累畳著しく、笑ふ時には媚びるが如く、こゝの處が少しく油斷の出來ざる樣

なり。お節の傍らに侍立し、

「湯川夫人、お召しで御在ましたか。」「お節」アイ呼びましたよ……良人湯川が參りました。

「凌雲」ウム湯川、おまへ御苦勞ぢやが、櫻田千樹の家へ行つてなア。「湯川」ハイ。「凌雲」櫻田に面會して、おまへも……知る通り、昨日代言人とかの浮田……乃公も一兩度は會つた事はある。何でも法學士ぢや。其浮田がまゐつて云ふには、櫻田より乃公へ貸金がある……一萬圓の貸金がある。其返濟期限は先々月ぢやが、其後度々催促致しても今に返濟がないがどうして呉れると申して來たぢや……どうも乃公に了解らんて……櫻田に金談をした事もなし、催促を受けた事もない、何かの間違であらうと申せば、イヤ確固たる證書があると申すぢや。證書があらば見せいと云うて證書を見たが、成程乃公の實印が押してある……どうも乃公には了解らんぢや。湯川、おまへ櫻田に面會して、別段談判と云ふ程の事ではないが、貸借をした時の手續をよく聞いて來て呉れ。了解つたか。其手續を詳細に尋ねるのぢやぞ。決して議論がましい事を申してはならぬぞ。よいか。「湯川」ハイ委細承知致しました。「お節」湯川、マアどうした間違かなう。「湯川」左樣で御在ます。「凌雲」湯川、イエ參りましたら明瞭しませう。「凌雲」湯川、早く行つて呉れ。御苦勞ぢやの。「湯川」ハイ、どうも恐入ります。左樣ならば……

と湯川は櫻田許へ急ぎ行くらん。

「凌雲」節、操の容體は今日は如何ぢやな。熱度はどの位ぢや。「お節」ハイ今朝は七度二分で御在ましたよ。毎日午前は左程には御在ません。「凌雲」モウ十一時ぢや。ま一度驗熱つて見たがよい。「お節」ハイ。「凌雲」直ぐに知せなさい。「お節」ハイ。

「操」敏子さん、實に難有ら御在ます。毎日々々御訪問なすツて……此御信切は忘れませんよ。「敏子」イエどう致しまして、心にはいろいろ思つて居りましても、どうも毎日多忙しいものですから思ふ樣には參りませんよ……アレそんな事をなすツてはいけませんよ。なんですネエ。サア矢張御横になつて居らツしやいましよ。

松山操は某家の舞踏の折、久松の擧動に激して其席に悶絶なし、更らに人心地つかざりしを來會の人々、殊に山村の敏子が自身が姉妹にても斯くまでにはと思はるゝ程いと信切に介抱なし、人心地つきて後も何くれと心づけ醫師の體を動かすを許すに及びて迎の人々も夥多來りぬれど、敏子は猶ほ心おち居ずかき抱かんばかりに馬車に乘らせつ、自身相乘して途すがらも心の限り介抱なし、其が家へ送り届け、翌日よりは一日もかゝさず尋ね來りてとにかくと慰めぬるは難有かるべき志なり。操は舞踏の場にて久松と手を取り合へこれ見よがしに舞ひ踊れる嫉ましさ限りなかりし敏子が介抱によりて蘇生でしなれど、後に母なる人より承知なし、其好意を喜ぶにつけても、敏子が意中をはかりかね不審はれやらねども、其翌日よりは日として敏子の訪ひ來らぬ、[illegible]さなきだに人の心の美しさに、先に嫉ましと思ひぬる無念の情もやゝ薄らぎ、親しき友とも又なき姉妹とも頼母しく覺えて、敏子が來るべき時刻をひたすらに慕はしく、侍女に尋ね問ふ事さへあり。さはれ久松を思ふに至れば其想感は敏子の上にも及びて種々の妄想を起しもすらん。今日もまた敏子が來るべき時刻ぞと心待しける處へ、敏子は侍女に延かれて操が病室へ入り來り、兩女相對して一二語を交へし後、操は今日は大分快しとて起き直らんとなすを敏子は頻りに止めけれども、操は從はずして寢臺に坐り、

「操」今日は大きに快う御在ますが、イヽエ、よう御在ますけれども、矢張り氣が鬱ぎまして……致しますネエ。「敏」イヽエ矢張り何ともありはしませんよ。御病氣の時には仕方がないぢやアありませんか。およッて居らッしやれば能いに……アレそんな堅ッくるしく、もちッと御自由になさいましよ。「操」ハイ先日からどうもいろ／＼御多忙しい處を毎日々々……貴孃は何故にさう御信切で居らッしやいませうネエ。私はアノー……貴孃の樣な……姉妹があつたら何程に嬉しからうと思ひますよ。ホヽホヽ失禮な事を。ホヽホヽホヽ。

敏子も莞爾と打笑み、

「敏子」オヤ操さん、またお世辭で御在ますか。妾は先日から黙つて居りますが……能し少し御話し申したい事も有りますけれども、それはマア今でなくッても大急もありませう。殊に御病氣にもさはる樣な事でもあつては大變で御在ますから……實にあの舞踏室で貴孃が御發病の時には實に吃驚致しましたよ。思ひ出しましても怖う御在ますネエ。「操」モウ／＼其時には……妾はモウ何だか唯夢中で御在ましてネエ。貴孃のおくつて下さいましたのも少しも存じませんで、跡から申聞けられて……また其時にはどうも何だか……お禮の申上げやうも御在ません。「敏子」操さんなんですネエ。お禮々々ツてモウそんな事をおッしやつては困りますよ。「操」イヽエ……

操は敏子が言葉の中に話したい事と云ひしも何事ぞ、敏子は久松の事にや、もし然らんには何とか答へん。殊に先日の兩人の擧動、今此樣にふし芝のこりかたまりし病の基因も、みんな兩人が上なるぞや。さはれ女學士と云はるゝ身のさる不正事せんやうなければ、よも彼の事にはあるまじきぞ。且つは此程よりの敏子が信切喜ばしきに付けて、また不審の限りなり。要こそあれ彼方より口を開かん其折に、又臨機の術のあるべしと思案に沈みて見えければ、敏子は不審の眉をひそめて、

「敏子」操さん、どうかなさいましたの。御氣分でもお惡いの。エマアおよつて居らッしやいよ。「操」イヽエさうでは御在ませんよ。「敏子」何をマアそんなにお考へなさいますの。御病氣の時にはお惡う御在ますよ。「操」ハイ。「敏子」なんですネエ。操さん、何かお心にすまない事でもありましたら、行屆きはしませんけれども、又どうとか御相談のお相手にもなりませうから、決して御遠慮なさらずに。「操」ハイ有難う御在ますが、そんな事では……イヽエ何にも思つて居るのでは御在ませんよ。

敏子は操が答の曖昧ならぬにます／＼不審に堪へず、我身の上に付きて思ふにや、さらずば仇しことなるか、近き頃は久松氏と絶えて訪れ來らじと侍女等の噂せしが、そは如何なる譯ある故か、今此操が思ひ惱めるもさる節なるか、いかにぞや、先づ打出して試みんと、一きは膝をすり寄せつゝ、

「敏子」操さん、妾にはどうも了解りませんよ。何かお考へなすッて居らッしやるに違ひありませんよ。何ですよ。何を考へて居らッしやるの。イヽぢやありませんか。妾におッしやつたッて。アノー何で御在ませう。アノー……久松さんの事で御在ませう。ネエ。

操はハット顔打赤め、何と答もくちなしの口をつぐみし其所へ人の入り來るけはひぞする。

操が母お節は愛娘が病氣いかにぞや、今朝は熱度も低かりしが其後の容體心元なく、操が病室に入り來れば、愛娘は物思はしげに寢臺に坐り、山村の敏子に對ひ居り。お節は軈て進み寄り、先づ愛娘が顔色を一寸見て敏子に向ひ丁寧

に禮を施し、
「お節」敏子さん、どうも難有う御在ます。お蔭様で操もだん〳〵快い方で御在ますよ。舞踏室で發病致した時、若しも貴嬢が居らッしやらねば、マアどんな事になつたかも……全く貴嬢のお蔭で御在ます。操、敏子さんの御信切を忘れてはならないよ。能くお禮を申しなよ。「敏子」オホホヽ、叔母さんのまたあんな事を……困りますよ。「お節」イヽエその上にこんなに毎日々々、實にお禮の申上げ様も御在ません……操、おまへ熱はどうだネ。大層快い。それは能い鹽梅だネ。マアそんなに起坐て居ては惡から。御免を蒙つて横におなり。ネエ敏子さん、横になりました方がよろしい様で御在ますネエ……おまへがそんな苦しさうな顏をして無理に坐つて居ては、敏子さんも却つてお困んなさるよ。サア横におなり。そしてこれを、此驗溫器をかけて御覧。サア横になつて、それこれを……
お節は操を仰けに臥させて、腋下に驗溫器を挿入し、再び敏子に向ひて、
「お節」アノー敏子さん、モウ永日大阪へお逗留なすッて居らッしやるさうで御在ますが、まだ御歸京にはなりませんので御在ますか。「敏子」ハイ又種々用事が出來ましたので、まだ歸京します譯には參りませんで御在ますよ。それにモウ大集會にも餘程近くなりましたから、それが済んだ上で……またどうなりますか分りませんので御在ます。「お節」へ……それではなか〳〵直ぐに御歸京の樣な譯にも參りませんネエ。さぞ令母さんがお待ちなすッて居らッしやいませうネエ。「敏子」妾には母が御在ませんのですよ……十歳の時に死なれまして……
敏子は涙こそこぼさね面色どことなく愁を含みて、孝子の情は自然に溢れぬ。お節も敏子が心中を察しやり、少しは慰まん便にもと敏子の父は現に上院(元老院)議官なるを、豫て聞き知りけるから、態と面に愛嬌を含みて、
「お節」しかし令尊は誠に名譽な地位に入らッしやいますから……凌雲なぞに比べますれば實にお羨しう御在ますよ。「敏子」イヽエ父なぞはモウ仕様が御在ません。あれで體質でも丈夫で御在ますれば、ま少うしも政治世界に奔走致す事も出來ませうに、誠に殘念で御在ますよ。「お節」それはマアいけませんで御在ますネエ。貴孃が居らッしやらねば嘸御不自由で居らッしやいませうネエ。「敏子」ハイさぞ不自由だらうと思ひます。併し出立します時にも主義の爲めには身をも忘れる位でなければ不可、決して老爺の事なぞを思ふな、とくれ〴〵も申聞けまして御在ます……それはモウ主義の爲めに自分が倒れる位は何とも思ひません。けれども老年の父の事を考へますと實にどう致さうかと思ふ事も御在ますよ。「お節」アアー實に恐入りました。夫程の御決心はなか〳〵出來る事では御在ません。操なぞのよいお手本で御在ます。
操は先刻より母の敏子が問答を眠れるが如く聞き居りしが、此時驗溫器を一寸見て母に對ひ、
「操」慈母さま、モウよろしう御在ませう。一寸御覧なすッて下さいまし。「お節」アイ……八度五分……まだどうも高いネ。併し一體の氣分は段々よいやうだから、マア精出してお薬をお飲み。敏子さん、誠に失禮で御在ますが、凌雲が一度お目にかゝつてお禮を致したいと申して別室でお待ち申して居りますからどうぞあちらへ御出でを願ひたう御在ます。「敏子」ハイそれは恐入りますネエ。操さんまた伺ひますが一寸御免なさいましよ。
「操」イエどうぞ、御免なさいましよ。
敏子は操に會釋をなし、お節に延かれて別室

きて寫さず。千樹は香味をふりかけて先づ一匙を啜りつゝ、

「千樹」敏子さん、今日はどうであつたな。「敏子」ハイお蔭様でよい保養を致しました。かねがね舞子の濱の景色のよい事は伺つて居りましたが、東京にも一寸御在ませんよ。淡路島はまるで畫にかいた様に前にあらはれ、六甲山が左に聳えて居る工合は實によう御在ますネ。あの六甲山丈けでも東京では……マア富士山は見えますけども……よい景色で御在ますネエ。それに住吉の社もよう御在ましたよ。近邊が製造所やなにかですこしも趣がない處へ古風な日本建築の神さびた宮作りは何とも申されませんですネエ……あの高燈籠も……惜しい事には大破してしまつて見る影もない様になつて居りますが、あれは名高い名所で御在ますからどうとか保存の致し方もありさうなものだと思ひますネエ大叔さん。「千樹」左様、建築法の巧拙は乃公にはわからんが、あア云ふ古物は可成保存して置いて後世の參考に供したいものぢや。「政子」ほんに左様で御在ますネエ。妾なぞの娘の頃とはまるで様子がかはつて、あの鳶田……「敏子」慈母さん、鳶田……鳶田とは何處で御在ますネエ。「政子」アーおまへは知るまい……汽車が出來てからは何人も通るものもなく、今は知らぬ人が多いが、あの供養塔……有志者が義捐金を募つて建設したあの供養塔が、その名殘で昔の斬首場なんだよ。「艶子」オー怖い、斬首場……あんな處で昔は人の首を斬つたので御在ますの。ひどい事をネエ。「千樹」ウム隨分殘酷な事をしたのぢや。徳川政府の頃には尚だ殘刻な事もあり、維新後も暫時は梟首なぞがあつたが、漸々に改良して今日では絞首臺をも廢して電氣で以て死罪を行ふ様になつたが、イヤ人智の進歩と云ふものは恐るべきもので、此上どんな發明があるかも知れんぢや。生きながら日數を限つて呼吸を止める様な懲戒法が發明されんとは云へぬ。「政子」左様で御在ますよ。それにあの火あぶり……小說なぞにあります女の火あぶりと云ふものは全くあつたので御在ますかネエ。

艶子は件のはなしを瞬もせず兩親の瞳子をかはるがはるに見詰め口を結びて聞き居りしが、敏子はかゝる話を好まぬにや、先程より窓外にのみ眼をそゝぎつ。今政子が女の火あぶりと云へる一語を聞くより、つと身を起して窓に立ちより、彼の浪華オペラの方をながめありしが、敏子の鼓膜は何にや感ぜし、瞳子を目じりに移して頭を傾け、眉間に八字をあらはしぬ。

山村敏子が耳を聳てしは隣室の窓を洩れ來る二三人の聲にぞありける。さはれ全く判然と聞き得るにはあらず、唯風の媒介によりていとかすかなるこそ、却に敏子が注意をば惹き起すめれ。其が聲音によりて推量るに三人共に男ならんが、其人品は一樣ならず。一人は紳士らしき口調にて辯說もいと爽快なれども輕佻にして少しも落付ありとは覺えず。又一人は商人らしく甚だ野卑なるが上に、奸譎の口氣をさへ含みぬ。此二人は敏子の鼓膜に初めての見參にはあらじ。彼者どもにてはなきかとも思へど、相違なしと迄の鑑定は覺束なし。今一人は書生らしくもあるなれど、書生にしては少々ふけ過ぎて三十の上をや出でぬらんか。其人をば見ずして聲もてトふ事故敏子は斷定せしにはあらねど、腦裏には件の其人の體形を巧みに畫きて、丁度極の好劇家が曾て一覽せし事ある院本をいと上手なる太夫の語るを聞くに同じく、聲と共に雛形は種々の奇觀をば呈するなるべし。

旦那、レコは甘く行きましたか……レコとは……レコさ……あれ程危險な事を行はして

置いて、イヤアにとはなどとは妙ならずですな……イヤさう云ふ譯ではないが、餘り突然であるから、ハヽハヽ、妙々奇々怪々快々。マア斯う云ふ次第さ。エート先夜の寄席に丁度隣席にレコが來たのさ。所がソレ、ソレであるから、其容體と云つたらまるで狂人同樣、實にゾットする程の劍幕で以て、ツカ〳〵と奴の傍らに行かうとすると、ソレ僕の○○、例の奴が奴と脣を交へて居るので、グット癇癪玉の樣な眼玉で奴の方ばかりを○○此處が妙さ。これ程迄にと思ふと妙なもので、我輩も少し變手古な氣になつて、二つ三つカラカッて見たが、實に冷淡極まる待遇に出喰したので、此度は此方の癇癪玉がグーグーと喉佛の近所まで飛出した處をグーッと飲込んで耐忍したが、アー今になつて考へると飛出さないで仕合。マ少しで意外の恥辱を受ける處であつた……へヘーそれでは旦那がまた脣鐵砲を……ハヽハ、先生、いつも御失敗ですな……イヤ別段脣鐵砲と云ふ譯でもないて……ナアニどつちにしても同じですぜ。ハヽハ、……ハヽハ、先生、奇々妙々と云ふのは其脣一件で……ナアニ馬鹿云へ。今のは冒頭の御愛嬌と云ふものさ。これからが愈々

快々の處に運ばうと云ふのです。マア其人とは誰を云ふ、それがソレ[illegible]御存知の人であるかして、ナそこで僕の方と云ふ手段があるか何乘で[illegible]付けて、其處は其當の[illegible]に相違ないとすると云ふ事さ。コレ君はよく〳〵知つて居らうが、果して事實であるかな……事實々々、相違ありませんな……フーン、さうかな。併し不思議だて、僕の奴にはソレ、○○斯う云ふ譯だから、却つて奇貨とすべきであるが、ハテナア不思議だ。手段が○○何とか手段があるかも知れんぞ。マアそれはそれとして一件はどうだ。我輩から先日申込んで置いたので何とか返事をする筈ぢやが。○○少しも樣子はわからんかな。其事に就て昨日でしたが僕に其答辯委員を命じましたぞ。其主意はソレ斯う〳〵です……成る、それを見て來い。○○其手續を調べて來いと云ふので、何か手段がある事と見える。こちらでも之に應ずる手段を施さずばと云ふのは、一理ある懸念だが、ナアニ大丈夫さ。十分の證據物を握つて居る以上はよろしい我輩が確と保證致すから、其邊の懸念は無用ぢや。へヽ時に何か我輩に相談したい事がある樣な手紙であつたが如何なる事柄かな……

ヘイナニそれは旦那にお話し致すも實に面目ない次第ではあるが[illegible]、吾々の云ふ譯でありますので、[illegible]、又は御依頼やますかネ。それですから、先方では一層早く出るに極つて居りますし、若し之れを洩しでもしさうな云ふ事はあるまいが、萬一漏れる樣な事がありますと大變ですから、旦那の御含みなすッてよう御在やすかネ。それそこの處を何卒分御辛抱願人の共謀であるのですから先生御事御方便を懇願致したいのです……へヘーさうか少しも知らなんだ。實に驚くなア。併し斯うなつた以上は何とかしなければならんが、實に亂暴な人たちだ……旦那面目もありやせんが、どうとかネエ。僕の發意ではありませんが、かゝる場合に立到つては先生の御趣向を願ふより外はないです……旦那、ナアニ先方でも根がないんですから、小六ケ敷く掛合つたら幾許かの內濟と來るは必定と高をくくつて掛つたのですが、今の口振ではどうも行きさうにありやせんので、それからお願ひ申す事になりやしたのです。旦那素より一つ分けですから、ソレハヽ、ハヽ、お前さんの、へへ彼の一件もネ、よ御ざりやすかハヽ、ハヽ……ソー併し證據物がそんなものであつては困る

るて。〇〇エー遣つけて見よう。よろしい承諾致した……それではいよ／＼ハヽハ、旦那もなか／＼拜金宗の信者だから、アハアハハヽハ、ハ、、、。

敏子の立聽は斷續に係りし隣室の人語の、其端聲は聞き得たれど、此處ぞと思ふ肝要の點はいと曖昧にして、其主旨を推察するに由なし。さはれ舞踏室の大騷動と云へる一語は少しく心當りなきにもあらねど、果して然りとは定め難し。よし假りに我想像の如くに定め置いて推量らんに松山の操女が發病の折に……そを介抱しつゝ同乘して送り付けしとは我上を云へるなるべし。其後親密に出入すると云へるも、亦我上をさせるなるべし。こは共に衆人の知れる事にて不審あるべき筈ならぬに、そを奇貨……操女の發病を、其不幸の遭遇を……奇貨とすべきに……奇貨とすべきに……此一語こそ不思議なれ。妾が操女を介抱しつゝ親密に訪問るゝは女子の身の晴の場所にて形の如き不幸に遭ひぬる我上にも思ひ比べつ、いといたましくありけるから、殊には久松氏が絶えて訪問なさぬ由さへ不審のかぎりなるに、不思議の事をきくものかな。彼等はそも何者ぞ、何ものなれば斯く迄に我上操の事をさへかにかくと批評はするぞ……彼者に……かれとは思ふものから、今一人は聲音さへに馴染なし。且つは彼奴等の、二人のものが共謀して、某家と某家の間にたちて不義の財を得んとぞする。いと憎むべき者共かな。こは推測には止まれども、證據物と云へりしは……證據物とはいかなるものぞ。今少しく話聲の高かりせばそも詳細に知るべかりしを。さても殘念しき事よ。殘念しき……ホヽホ、我上と思ひ某家と思ふも、皆妄想によるものを我ながらもホヽ、ホ、、。

敏子が想像力の鋭敏なる、尚ほかにかくと我に聞て、我に係へて、參政權の事、久松の事、都なる父の事、鋭一の事、艶子の事、其他の事迄も想像しつゝ、庭前に今を盛りと咲き亂れし紫陽花のある部分をヂット見つめて交睫さへせず。紫陽花若し心ありて物云ふ事を得ば、あんな綺麗な美人に見つめられては誠に羞しい。併しあア交睫もせずに居ては雙眼が疲れるであらうに、と迷惑しさうな容體。敏子が斯く見つめし眼を鳥か何かは知らずスーッと掠むるものあり。敏子は我れ知らず瞳子を轉じて其方を見れば、こは鳥影にもあらず、梢が風にゆらめきしにもあらず、先に隣室にて物語せし人々にやと思はるゝ三人の男が前後ヒラリ／＼と件の料理店を出來るにて、其場所はさまでに遠からず、敏子が視線内の極めてかたすみの一部分にてありし。敏子が瞳子を轉ずる途端に彼の三人も二階を見あげぬ。其内の二人は浮田青洋と櫻田家の手代横田好吉なり。今一人は敏子も全く顏馴染なきにあらねど剎那の内には思ひ出です。件の三人も敏子が此家の二階にあらうとは思ひがけず、額面に入りし肖像の樣に窓の内に立ちて凜然として見下せるにぞ、茫然足を止めて三人共に會釋をなすに、いつの程にか艶子は敏子の後に立ちて思はず聲を放ちて、

「艶子」オヤ浮田さんが……

敏子は後に人立つとしも知らず、艶子は尚ほ兩親と共に打語ひつゝあるべしと思ふに、突然耳元よりしかも鋭き聲音は敏子の鼓膜に非常の激震を與へしなるべし。敏子はふりかへりて艶子の顏を見再び頭を回せし折には浮田等の一行は何處へ立去りしや影だにも見えずなりぬ。艶子も敏子と平行する程に進みて、窓に手をつきつゝ彼方此方を見廻し、故らに庭前の樹木にのみ其瞳子は止りぬれど、兎角斜め勝ちに時々一轉すめり。敏子はさこそと思ふを色にも出さず、

「敏子」艶子さん、今のお人は慥か浮田さんでし

たネエ。
鶴子は敏子が浮田と自己との譯あるを知りて斯くは問ふにこそと少しく面を赤めやすらん、併し敏子の問が虚心平氣ならん、おのれが良心の返照によりてさる邪推は生ずるならんに敏子が今の問は怪しく何ありげに聞えければ、鶴子はハイと答へしのみにて、しばし第二の語を出さざりしが、

「鶴子」……さうですネエ。浮田さんの様でしたネエ。「敏子」それに一人は貴嬢のうちの横田のやうで御在ましたが、今一人の男は……妾も見た様にも思ひますが……どうも思ひ出しませんよ。鶴子さんは御存じではありませんかネエ。「鶴子」アノー三十ばかりの男ですか……あれはネ松山の……妾もよくは存じませんが、何でも松山の書生で湯川とか云ふ人ですよ。「敏子」エアノ松山のウウーン……

敏子は心の中に、さては松山の書生なりしか、顔馴染ありしも宜なりき。今又さきに隣室にて彼の人々が打語らひし事のこゝろを思ひ計るに、疑團の幾分かは了解しぬ。彼の横田と湯川とが松山横田と両家の間に共謀しぬる事のありて、尚は亦た浮田に結みきこえ爲すよしありと覺えたり。證據物と云ひたりしは訴訟にても起すにや。覺束なき事にこそ。鶴子と浮田とが交情の密なるは豫て知りつ。鶴子に問はゞ知るよしあらんと、先ほども庭前をながめつゝある鶴子に向ひて、

「敏子」鶴子さん、妙な事を伺ひますがネ、貴家と松山さんとの間に何か……訴訟事でも出来て居ますのですかネエ。

鶴子は何故にや少しく快からぬ面色にて語勢さへに鋭く、

「鶴子」ハイアノネ、松山と云ふ人はひどい人ではありませんかネ、實にヅウ〳〵しい人ですよ。妾のうちからお金を借りて置いて期限が來ても返濟さず、催促をしても返濟さず、それに却つて不理窟を云つて借りたとか借りぬとか云ひますので、父も大層怒つて居りますよ。「敏子」ヘーさうで御在ますか。成程ウウーン……

第十回

山村敏子は關西大集會の當日の早や近づき、且つは日々小集會、あるは演説、さては交際などにいとまなく、東京の參政會へは絶えず書状の往復はなすものの、俗に所謂用にかまけて父なる人の安否を訪ひ參らす事の後れがちになりけるから、さては子たるの道に背くべし、父上の御病氣とてかゝる事を心には掛け乍らは在れども、妾が日夜思ひ參らす情に父上にも御存なく使なく遠ざかりおはすらめ。また一ツは何とかせし、妾が東京を出づる時には不日に此度の事ぎはなりしに、其成績はいかにぞや。手紙にも云ひよこさざるは不幸にも不首尾なりしか、何れにしても其さまを告げ知らしなば、いかばかり嬉しとも嬉しとも思ひますがとなるべきに、あな心なの鋭一や。懐かしの父上や。斯く遂にいと永く此地に滞まる事とし知りなば、侍女をも伴ふべく他の準備をさへなすべかりしに、斯くとは思ひ掛けざるから、伯爵山村高豊の長女としてかくやつ〳〵しきさまにては、人の批評も招くべく、且つは不便の限りなり。由を參政黨の姉妹にきこえて一たび東にかへり上り、父上の安否をもたづね參らば、鋭一の學の程をも試みてんか。イヤ〳〵此事よりの電信にも、次でおこせし書状にも、關西の事は一に貴孃に委任すべし、現内閣が女子參政に對しての其方向は略ぼ一定して、來春の國會には必ず參政案を提出すべし、關西の輿論を喚起して關西の氣勢を鼓舞するは正に此時にあり、機運に來れり、機既に熟しぬ、唯貴孃の熱心如何にあるべし、

勉強玉へよ、と歎たらへ此身を嘆じ迄に積みとなせる姉妹の意中を思慮れば、今更何と云ひ遣るべき。殊更父上の出立の折に我事をな心に掛けそ、主義の爲めには死をだも厭はず、身をさへ忘れよとおきて玉ひし御心を推量れば、おめ／＼と郷へや歸られん、いかにせまじと孝子の情思こゝに溢れて、涙さへはふり落ち、思案に沈みける處へ、給仕女は徐かに室戸を開きて敏子が傍らに侍立なし、

「給仕女」お郵便で御在ます。書留ださうで御在ますが印から領取書は出して置きました：：へイ。「敏子」アイそれは難有うよ。御苦勞だつたネエ。「給仕女」イエどう致しまして、おかまひも致しませんでホヽホヽ。

と給仕女は辭し去りぬ。敏子は手紙の表書を見るにまがふべくも有らぬ鋭一が筆なるにぞ思はずも、

「敏子」オー鋭一から、アー嬉しい。何と書いてあるだらうか。書留にしたのは何かハテナア：：

と獨語つうちに早くも封をひき裂き、サラ／＼サラと乾智を讀み了りつ、また卷き返し讀み返す文字に泪を入れつゝも、

「敏子」ナニ姉上樣の御安否：：エー妾の事なぞはどうでも能いよ。嚴君さまとおまへにさへかはりがなければ：：試驗には及第致し候間御安神被下度：：試驗も無滯及第したッてアー嬉しい／＼。記憶力もあり勉強もするから落第する樣な事は決してなからうとは思つたけれども、お前がこんなに永く知らして呉れないからマアどんなに心配を致したらう。しかし及第すれば結構だよ。アー實に嬉しいよ。勉强に越す事はないからどこ迄も怠らずに勉強してお呉れよ。これが妾のお願ひだから：：早速御報知仕候筈の處卒業證書を授與され候上と存じ斯く延引仕候段幾重にも御海容奉願上候：：なんだらうネエ。何も謝まるには及ばないよ。卒業證書を受けた上慥かに卒業がわかつた上それから知らせようと思つたので、それで此樣に遲くなつたッて、實に感心だ。大事を取る所が感心だよ：：當夏より愈々第一大學に入り候間御放慮被下度これ全く嚴君姉上御兩所樣の御慈愛且つは教員諸君の教育の信切なるに由り申候：：愈々大學に：：嚴君さまも嘸ぞお喜び遊ばさう。アー妾も實に嬉しい。それにつけても母堂さまがお出遊ばして鋭一が此樣によく成人するのを御覽遊ばしてお喜び遊ばすのを見たなら、マアどんなにどんなに嬉しからう。鋭一も嘸ぞ殘念に思ふだらうよ。未だお顏も覺えない頃におわかれ申したのだからアーア／＼と少時は涙にくるゝなるべし）モウ大學に入れば五年の卒業だから、たとひ妾がなんとならうともモウ：：心掛りもないから：：御病身な嚴君さまを十分御介抱申す事も：：早く五年立てばよいアーア：：月日の立つのは永いものだ、早く立てばよい。ホヽホヽヽ。マアなんだらうネエ妾は。どうかして居るよ。早く中學を卒業して大學に入つて嬉しいと思へば、また早く五年立てばよいッて。ホヽホ。慾には限りのないものだよ：：參政黨の夫人令孃方も時々御訪問有之候に付嚴君にも實に御滿足の樣御見受申候：：衆朋友が御尋ね下さるッてそれはさうだらうよ。みんなが信切で御出だからほんたうに嬉しいよ。みなさんにもお目にかかりたいけれども、それも儘にはならずアーア：：エナニ別啓、別啓とは何だらうか氣にかゝるネエ：：

敏子は絶えて久しく音信なかりし實弟鋭一よりの親書に接し、父高潔が安否鋭一が試驗のさまなど知られし上書状を讀去る内にも、種々樣々

の想像を起しつゝ、別段に心を悩ましむる程の事もなく、殆んど讀了らんとするに、奥に巻込めたる別紙あり。こは何をか認めぬると手早く開きて之を見るに、先づ別啓としるしぬ。敏子は何事ともわきまへねど何となう心悸きて呼吸を飲みつゝ讀行くに、

「敏子……此事は父上より御報知申上げざる樣堅く御申聞け有之候に付態と別紙に認め申候素より本紙の如きも父上の御面前にて御指圖により相認め候故十分に意中相盡し候事も難叶候父上御事……エ嚴君とまで何とか……過日總理大臣家の夜會に御臨席被遊候處宴散じしは殆んど午前一時頃と相成御歸途裏霞ケ關にて某家の馬車と父上の御乘車と衝突致し候爲め父上には……エーマー危險い事例ひ夜にした處で燈を點して居ない事もなからうに……衝突致し候爲め父上には路側の深溝に御陥落被遊候……マア大變だ彼處の溝の深いのに、御影の石垣になつて居るから、若しも……其爲めに後頭部に一ケ所……エあの御頭蓋に……尤も漸く二針程縫ひ候位にて左程の事には無之樣醫士は申候得共腰部を強く打挫被遊候事故御歩行は勿論翌日より御平臥被遊候……ア、大變だ、大變な事になつた。マア如何したらよからうか。御つむり……おつむりを二針も縫つては……何しお醫者は何と云はれても御膽將で居らッしやるのに、アーア如何したら……それにお腰を……強く……マア何て云ふ事だらう彼處は石垣だから、エー御醫者……御醫者は何が利かない御醫者だ……アーアマア如何したらよからう……御歩行も出來ず、御平臥なすッて……嘸ぞ御不自由だらうよ。お老年ではあり、御癇氣の強い方だからさぞ……せめて妾がお側に居つたら……アーア歸京りたい……マアどうしよう……其後の御容體はどうだらうか。アーア氣に……、つて氣にかゝつて……其後醫士の申聞候通り頭部は殆んど御全快被遊候間御安神可被遊候……アーよかつた。マア嬉しい事だ、おつむりの方は御全癒なすツたツて、アーアこんなに嬉しい事は、併し……腰部の挫傷は少しく腐敗致し未だ御轉臥も御不自由にて殊に蓐瘡相發し候末患邊には御全癒も覺束なく存ぜられ候……アア困つた事だ。御老年だけに壯年者の樣には營養も十分にならうし、時候は熱くなる、其上蓐創……蓐瘡が發しては猶更……以前聞いた事もあるが、蓐瘡は全癒し悪い上に係病を誘發し易いと云ふ事だから、兼て御病身なのにこんな不幸な事が……マーア困つた。困つた。どうしようか……大集會の期日もモウすぐだし、盛に評判になるけれども、かうなつてはモウ仕方がないから一旦東京にかへつて……その上でまた手段もあらうから、さうだ〱それが……さうしようとも……

尤も右は早速御報知申上候筈の處父上より堅く御差止有之候のみならず若し敏子が此事を傳聞して歸京致す樣の事有之に於ては決して面會を不許は勿論親子の情誼も茲に終るものと知るべし苟くも社會の爲めに同胞姉妹の爲めに前途に横はる障碍物を打破して女子參政の大志望を達せんと欲する者が親の病氣又は親族の事情の爲め又は自己の便宜の爲めに姉妹の依託を受けたる大任を捨てゝ其志を挫折するが如き事ありては、社會に對し姉妹に對し不忠不義たるのみならず父に對しては不孝の子たるべし、決して敏子に告知らすべからずと被仰聞候小弟に於ても醫士の言は有之早速御全快の御事とも存候に付其下にて御報知申上候心得にて暫く今日迄延引相成候次第宜敷御賢察被爲下候樣奉希上候……アーア……實に恐入つ

た家件さまのお言葉．父の病氣と聞きて歸京致す樣なものでは……艶子の情實も……茲に……然ると知れてはナア貴方に……お側に居つて御介抱申す事も……歸京する事は猶更マア……何と云ふ難有き仰せだらう。歸京などゝ思つたのは實にはづかしい。家件さまの樣なお心には如何したらなれるだらう。妾も一層奮發して十分に目的を達しなければ……併し御病氣……御大病を知つて居ながらお側で御介抱する事も出來ないとは……マア何と云ふ不幸な身の上だらう……お側に居つて御介抱申すのが不孝……御介抱申さぬのが孝行……どちらが眞實の孝行……であるか……アーこゝの判斷が……こゝが思案の極意であらうかアー……ア……

敏子は家弟鋭一が書狀を得て、父高潔が不慮の出來事によりて今は病臥しつゝ不快は覺束なく、且つは世に難有き志さへ知り得しかば懷かし氣遣はし嬉しさの思想はかはるがはる腦裏に湧き出で、一たび都に歸らんか父の教訓に戻るも苦し、暫時留りて姉妹の爲めに盡さんか不孝の子たるを如何にせん。心二つに身一つの胸のうやむや遣るせなく、思案に心暮れがての燈火點す爲めかあらずか、室戸を開き入り來るけはひ、給仕女と思ふから敏子は猶ほもそが儘に左右の掌を顏に押へ、猶ほとにかくと未來の成行、父の事、鋭一の事、我身の上をも思ひかね、覺えず深く息氣を吸き、漸くホット吐く肩をソットおさふる人こそあれ。こは何ものぞと思ふものから、敏子は敢て驚かず給仕女が心安だてに斯く無禮なる惡戯やするとキット頭をめぐらすに、思ひもかけぬ艶子なりけり。艶子は今日しも敏子の許を訪問れんと父母には告げて心の中には彼の蕩郎浮田の宿所を訪ねけるに、浮田殿は昨日より歸り玉はずとボーイの告ぐるに快からず、さりげなく其家を立出で中の島の某亭にや、道頓堀の臨江閣にやと、させる用有りとにはあらねど、若しや外に……と云ふ妄想の爲めに、此方に走り彼方をさがし、終にめぐりめぐりて鳴鶴館の前に來りければ、先づ敏子を訪ね見ばやと前に父母への虚言は實事となり、給仕女が案内せんとなすをも退けつゝいとしづかに忍び足に敏子が部屋の扉をソット開きいかにやと見るに、敏子は一人机に倚り書狀らしきものを繰り廣げて思ひに沈める體なり。艶子が第一の妄想は消え失せぬれど、またも第二の猜疑心を誘發しぬ。艶子は猶ほも足音をひそめつ、敏子が後邊に立ちより手紙を一二行讀みたるに、男子の書風にはあなれど自己が豫想には違ひぬ。且つ傍らに置ける封筒には、東京郵便局の消印もあり。こはわれながら面伏なり。かゝる邪推はすまじきものをと、急には辭をも掛けかねしが、よくよく手段にや盡果てけん、無禮なりとは知るものから、敏子の肩胛骨のほとりをおさへしなり。敏子はキットふり顧りみるに、思ひ掛けざる艶子が後邊に立ちつゝあるにぞ、先づこなたへと一脚の椅子を與へ、

「敏子」艶子さん、貴孃は何時お出でなさいましたの、突然に……亂暴な事。「艶子」御免なさいよ。突然に……さう云ふ積りではなかつたですけども、貴孃が何か……御覽なすツて居らツしやるからそれでそれで……それで若しも……若しも御妨害になりはしまいかと思ひまして……「敏子」オホヽ、何もそんなにお云ひでなくツてもよう御在ますよ。もう他人と云ふではなし。マアお掛けなさいましよ。「艶子」ハイそれでは……どうか堪忍して下さいよ。「敏子」ナニモウよう御在ますよ。「艶子」アノ何で御在ますか。東京から御手紙が參つたので御在ますか。「敏子」さうですよ。鋭一から久しぶりに音信がありましてネエ。「艶子」アノ鋭一さんからお手紙が。そ

れは嘸ぞ御嬉しいでせうネエ。御令家も御變はりはおあんなさいますまいネエ。「敏子」ハイ難有う御在ます。鋭一は漸く中學を卒業しましたさうで……「艶子」アノ中學を鋭一さんが。それはマア御目出度い事ですネエ。大叔さんには別段おかはりも……「敏子」ハイ妾は少しも今まで存じませんでしたが、父の馬車が裏霞ケ關で衝突して大分怪我をしましたさうですよ。「艶子」エアノ大叔さんがお怪我を……マア大變で御在ますネエ……妾の方へは少しも何とも御通知もありませんでしたが……そしてモウ御快方で居らツしやいますか。「敏子」イエまだ臥て居りますさうで……大叔さんへお通知申しませんのも少し譯のある事で御在ますよ。「艶子」エ其譯とは。「敏子」イエナニ別段どうと云ふ譯もありませんが、若し大叔さんが御存じになれば、妾にもわからうかと思つてそれでお通知申しませんので御在ますよ。「艶子」エそれはまたどう云ふ譯でせうネエ。何に貴嬢が御存じなつて惡い事もありますまいに……「敏子」イエそれが斯う云ふ譯で御在ます。

敏子は覺えずも落しぬる一滴の涙の、手紙にかかりて看る〳〵にじみて月暈の様になれるをハンカチーフにチョット拭ひて艶子に渡せば、艶子は受けて之を讀むに、叔父高潔が其身は病床にありて全癒の程も計り難きに、其身を後にして敏子を勵ましぬる志、世に二人とあるべくも覺えず。今迄も否一セコンド以前迄も理性の宮殿をあれまはりし浮田と云へる曲者さへにいづこへか消失せ、敏子が心のうちを推量れば自己から涙ぐまるゝ。もろきは女子の情なめり。艶子さへにかゝる有様、敏子の意中想像るべし。斯くてあるべきにあらねば、敏子は態と話頭を轉ぜんと涙を拭ひて、

「敏子」艶子さん……アーア貴嬢迄が……モウどうか。つかぬことですが、艶子さん、松山さんとの一件はどうなりましたネエ。「艶子」エアノ松山の……あれはネエ。あの儘で浮田さんに委任して有りますよ。夫に……先日浪華オペラで父と操さんのおとつさんと口論をしましてネエ。「敏子」エ口論を、それはマアどう云ふ譯で……

敏子は艶子が傍へ膝をすりよせぬ。

第十一回

山村の敏子は女子にしては過激の方丈に、愛憎の情も亦た常人に勝れぬ。さはれ人の能を嫉み才を[illegible]むにもあらねば、好[illegible]人を愛する にもあらず、[illegible]を愛し[illegible]を[illegible]む、只はゞ[illegible]の質にて、殊に慈愛の心深かるから、前に[illegible]踏室にて松山の操が悶絶したる折にも可[illegible]なり、氣の毒なり、と思ふ一片の慈心より、既に看官も知り玉へる様に、其場のみかは日毎々々に操の許を訪問ひいたはり慰むる内には、操の性質も十分に知り得しかば、何[illegible]友愛の情捨難くなり行き、何事となくおのれの身にふりかかれる様に共に樂しみ共に憂ふる程になりぬれば、前には久松と云へる格段なる問題については時としては嫉ましとも思ひし事もありつらんに、今は殆んどそれをさへ忘れし如く、否[illegible]に忘れしのみならず、さる事はあるまじけれど、倘ひ如何なる支障出で來るもそれを打破りて操と久松とが氷人となりても兩人が伉儷を遂げしめんと思ひ定めぬ。こは尋常一樣の女子が容易になし得べき事ならねど、敏子は女子參政の熱心者なり、狂人なり、胸中唯一の女子參政と云ふ思想のみとも申すべき希有の女俠なるにぞ、參政の志望を達し得るの階梯ともなる理の事たらんには、素より其身をも顧みず、生命をも擲つべし。されば操と久松とが伉儷の氷人たらんと決心せるも、斯くなし置きなば女子參政の大

事天下の大問題となり、中原の鹿を爭ふの一段に至りて政黨の間に交際の場に、斯く有力なる紳士貴女等の援助を得る事とせしならばと、唯女子參政と云ふ無形の眞人の爲めにすなる節操と云はんか、政略と云はんか、此一段は少しく人情の外に走れる樣にはあるものから、看官望むらくは敏子其人となりすまして虛心平氣にして思ひ玉へよ。かゝる意外の思想發らずとも斷言なしがたからんが、こは且く問題として止め置くべし。かゝりしかば敏子は操の事とし云へば何くれとなく心を盡すに、自己が親族しかも叔父に當れる櫻田千樹と操が父たる松山凌雲との間に起りし或る部類の人より思へばいと賤むべき訴訟事件は、何れを曲とし何れを直とせん。千樹は素より富豪の紳士、殊に親しき叔父なるにぞ、其心の善惡は夙に知りつ、凌雲も世にうたはるゝ學士なり。其子操、夫人お節の情質を觀、凌雲の擧動を察するに、さる不正すべき人とも覺えず、こは何事かの行違ひか、さらずばあやつれるものあるか。過ぎつる頃臨江閣にて思はず聽き取りし隣室の內談、其人々さへ合點行かず、心に悟る由はあれども確證ありと云ふにもあらねば、直ちに手をも下し難く、其手掛をこそと求むる內に都の父の病氣の報知に思ひながらもさし置けるに、其折艶子が語りぬる千樹と凌雲とがオペラの口論素より根ある事にはあらねど、彼の賤むべき問題の爲めに互に心に一物あるから、千樹の怒りさへにひがみ行き・詐欺取財の廉をもて凌雲を告訴せんとぞする、いと穩便ならぬ沙汰なれどもそを强ちに無理とも云はれじ、凌雲も又甚く憤りつ、訴へんとならば訴へよ、我實に敢て恐れんやと、互に熱度が高まり過ぎて容易に手をばつけ難けれども、一人は伯母なる人の所夫なり、又一人は親愛せる操が父なり、何れをも傷けずして穩便に扱ふ手段もがなと、敏子は日々に思ひ屈し、今日も操を訪問れしに操の病氣も漸くに癒りつ、敏子が訪問れし折には醫士の勸誘にまかして何日ぶりにや、操の心には一年ぶりとも思ふ程の久しぶりにて、中の島公園に散步して今歸宅せし處なりけり。敏子は操が血色の日にまし淡紅を帶びつゝ今日は別して快きにや、薄紅梅の咲き初めしも斯く〳〵やと思ふばかりにいと愛嬌づきたるを見て、眞實心より溢れしと見ゆる程喜悅の眉を開きて、

「敏子」モウ操さん、大丈夫ですよ。アー實に嬉しい。こんな嬉しい事はありませんよ。マー先日中のお顔の色と云つたら、モウ實に悲しくなるやうで御在ましたが、今日のお色と云つたら如何で御在ませう。まるで化粧香水でもおつけなさいました樣ですよ……それに今日は中の島を……よくネエ……別段御疲勞も、それはよう御在ましたネエ。妾もお供を致したら御在ましたよ。また此頃に……其時には是非ネエ操さん。

操も敏子が是迄の介抱ぶり親も及ばず兄弟も及ばぬ世に難有き眞實心に、斯る人を我姉妹分にもと思ひ居るにぞ、其色は自然と面にあらはれつ。

「操」妾はモウ迚も全快るまいと覺悟して居ました程の病氣も、實に全く貴孃の御信切な御介抱で全く……何時も同樣にとばかり申す樣で御在ますが、妾は此御恩は決して忘れませんよ。「敏子」操さん、またそんな事を……モウそれはお止しなさいましよ。エー公園には何か御保養になる樣な事が御在ましたか。「操」イヽエ別段何にも御在ませんでしたが、人を一人……書生を一人助けて參りましたよ。「敏子」エ書生を……お助けなすツて……それはマアどう云ふ譯で御在ますねエ。「操」マア斯うで御在ますよ。今お

が……それで昨夜……とか何とかおツしやるので御座ませうが、父は非常に激怒しまして、穩かならぬ……穩かならぬ決鬪狀をおくるなんぞと申して……妾と操とでヤッとなだめて居るので御座ますが……「敏子」それは誠に……どうもお氣の毒樣で御座ますが、叔父にかはつて妾からお詫を致しますから、今少しの間父樣をおなだめなすツて、ネ操さん、よう御座ますか。妾が少し、聞込んで居る事も御座ますから、マアどうかそれ迄の處をネ。イヱ決して惡くは致しませんですから、どうぞネヱ操さん。エーありお宅の湯川、湯川と云ふ人は、ヘーあの少年時からさうで御座ますか、イヱナニ一寸伺つて見たので御座ます。イヱ何でもありませんよ。アノーそれに久松さんネ。「操」ハイ。

操は久松の事については既に敏子に打明けて、いろ〳〵頼みきこえたる事さへあれども覺えず胸悸きて少しく頭を垂れがてにすめり。

「敏子」其後兩三度久松さんのお宅に伺ひましたが、いつもお留守で御座ましてネヱ。久松さんもネヱ、左樣です、昨日妾の處へお尋ね下さいましたさうで御座ますが、また生憎妾が留守で御座ましてネヱ。まだお目にかかる事が出來ませんのであの儘になつて居りますが、貴嬢の方へも何とも久松さんの御樣子はおわかりになりませんですか。「操」ハイイヱまだ少うしも。「敏子」よう御座ますよ。此事も妾の身に引受けて屹度平和に、ナニ御安心なさいまし。イヱお委しなさッて置いて下さいまし。これも何者かの、マアよう御座ますよ。妾も山村の敏子、一諾は千金よりも重しで御座ますホヽヽホヽヽ。

敏子の語の切れし途端に、室戸を開いて侍女お竹入り來り操の傍に少しく體を屈め、

「お竹」お姫さま、先程の書生さんの病氣も餘程治まりましたやうで御座ますが、どう遊ばします。「操」さうかえ、今妾が行くから、よく早く治まつたネヱ。「お竹」ハイアノ湯川が知つて居る人と見えましてネヱ、大層信切に介抱して遣りましてよ。「操」ナニアノ湯川の……さうかえ今行くよ。「お竹」ハイ、それに湯川がアノー、山村樣に少々お願ひが御座ますが、おあとでお目通りをお願ひ申して呉れと申して居ります。「敏子」エ湯川さんが、さう今日は少し急ぐからネヱ、明日は午後は閑暇があらうと思ふから、妾の宿へ來てお呉れの樣に。「お竹」ハイ左樣に申し聞けますで御座ませう。

第十二回

浮田青萍は自己が專業とはなさねども、意外の事より甘く櫻田千樹夫婦に取入り、彼の松山の事のみならず、賣掛代金の延滯抵當貸物の始末、其他何くれとなく千樹の依託に應じ、事の六ケ敷さうなるは自身法廷へ罷出で、左なきは横田好吉に方略を授けつ、誠實親切に事をはかるから櫻田の方へには迚もイカヌと見切りし難物さへに、物の見事にしてのけるにぞ、千樹夫婦はえらい人ぢや、親切な人ぢやと又なき好人物とグット惚れ込み、我子の樣な心持になり、何や斯やと、心付くるに、旅館にお出では不都合であらう、幸ひ奧の書齋があいて居るからどうでありませう、あすこに引取つてはと、妻の政子が原案の提出に、艷子は異論あるべき筈もなく、心の中には手を合するばかり。千樹さへに信用し切つて居る事、それはよい處へ氣が付いた、早速に申込んで見ようと、横田をして浮田へ内々の相談を掛けさするに、浮田は素より思ふツボ。併し思つたよりも容易かりし丈けに何となう心おかれて態ッと五六度はそれでは餘りお氣の毒樣イヤ恐入つたる次第なり

と、斯つては見るものの、さう／＼は斯るも失禮ならめと、都合よき理窟を都合よくくツつけ、昨日旅館を引拂つて櫻田の書齋へ引移りしと云ふなり。艶子の滿悦は云ふも更なり。櫻田夫婦も一安心した樣な氣持、唯少しく頭を傾けしは横田にて、どうも少しく風が變りはしまいか、今の調子で參る日には浮田は此家の養子となるべし。左なる時には萬事の思想が以前とはガラリッと變るは定。ハテ少々思案を凝さずんばと湯川ばりへ相談やなすらん。

浮田はこれ迄はしすましぬ、此上は何とかせんと素より腹に毒ある程の曲者ならねど、艶子より結婚の催促に何とか方便もがなと思ひ餘つての根膽なるにぞ、唯櫻川夫婦の機嫌を／＼と思ふの外他事なし。今も今迚イザヤ親玉へ伺候せんと自己が部屋を出でんとするに、出會頭に入り來るは艶子なり。浮田も覺えず例の愛嬌餘りある目元にニーッと笑を含み、

「浮田」オー艶子さんですか。去來先づ。「艶子」ホヽホヽ、浮田さん、なんですよ。そんなホヽホヽ身振をなすッて、そして大層改まつて。「浮田」ハヽハヽヽヽ今朝から御目にかゝりませんでしたが、令尊公はどうなすッてお出です。今丁度伺はうと思つた所で。「艶子」家君ですか。家君はネエ、今客が參つて應接所で何か用談をしておいでだから、マア後刻になさいよ。私が來たからと云つて、そんなにネエ。何も。「浮田」ハヽハヽこれは恐入つた。貴孃がお出でだと云つて、嬉しいとこそ思ふが、それこそ何もです。時に横田は何處へか參りましたか。「艶子」奸吉、奸吉は先程何か商賣用で出掛けましたさうですよ。「浮田」フー何處へ行つたかしらん。「艶子」何かあの奸吉に御用があるの。「浮田」ナニ用と云ふのでもないですが、少し横田の事について令大人に御相談申し上げようと思ふ事があるので。「艶子」なんですか。何の御相談で御在ますの。「浮田」ナアニ何れ貴孃にもお話して御相談をしなければならんが、マア後にしませう。「艶子」また浮田さんは、郎君は何時もそんな事を云つて何だか判然おッしやらんのネエ。「浮田」ナニさう云ふ譯ではないさ。「艶子」イヽエさうは抜けさせませんよ。今度此室へお移んなさるのも、郎君は餘程おいやだつたんですネエ、イヽエ妾はようく知つて居りますよ。横田から聞きましたよ。何でもいやだとおツしやつたけども、何でも御出でなさいましと私が無理にお勸め申したッて、奸吉が申して居りました。イヽエさうですよ。さうに違ひありませんよ、どうせ、さうで御在ますネエ。「浮田」アーどうもこれは冤罪だ。何も我輩が拒んだ譯では、拒んだ譯ではないが、いかに御兩親が御親切に云つて下さると云つたッて、其處はそれネエ、さうは行かないさ。横田から御兩親のお志を承知した時にはそれは實に飛立つ樣に。「艶子」飛立つ樣においやでしたらうよ。それはモウ御無理はありませんのさ。ネエ浮田さん。「浮田」イヤハヤこれはどうも大變な横槍を入れられるものだ、何もいやのなんのとそんな譯であるなら、我輩も何もこれ程に、艶子さん其邊は貴孃も知つてお出ではないかネ。「艶子」イヽエ妾は馬鹿で御在ますから何も存じませんよ。それですから實に、實に口惜い事ばかりですのさ。浮田さん、郎君は浪華オペラの瀬川菊枝と云ふ小且に、イエその小且にお心易いさうで御在ますネエ。「浮田」エ、菊枝、イヽエ我輩はそんな女には知己はありませんな。「艶子」御存じありませんッて、アノ菊枝を。おとぼけなさいますなよ。郎君はマアどうしてそんなに。

と浮田の膝へ自己が膝を突掛け、睫には涙を一

杯にためて、浮田の顏をキット見詰め、再び口を開かんとなす折、侍女の聲として部屋の扉の隙より、

「侍女」アノーお孃樣は此室へで御在ますか。奥樣が御用とおッしやいますよ。どうぞお早くと申す事で御在ます。

柳浪曰く本編の浮田青萍といへるは、未來の第二大學の學生たる旨を云ひ置きしが、余が親友なる學生某氏來りて、余を詰りて云ふ。法科の學生にあらねど彼の浮田の如きクダラナキ人物現世は勿論未來の學生にあるべしとも覺えず。殊には現在の學生の上に就て名譽を傷くる嫌なきにあらねば、學生たりし事は學士なりとの事は修正する方穩當ならん」の説いとせめて理ありと思へば、余は今改めて浮田青萍は未來の某學校の生徒(獨乙語のシューレル)たりしと修正せんとす。看官幸に諒し玉へよ。

浮田青萍は櫻田の艷子にいかにしてや聞き出されけん、浪華オペラの小旦瀨川菊枝の事を只問られつゝ何とか遁辭を設けんと計るも、迫に急案も出でかねしや、こも亦た艷子の顏を見つめて艷子が第二の尋問は何程の處まで及ばんか、其結果は如何なる點にて止まらんか、と口をシッカリと結びたるまゝ、いと手持なき所へ侍女が來りて艷子を伴ひ行きしは、浮田が此時の心の内には大慈大悲の菩薩の弘誓の舟を得し心地やしけん。跡見送りてホーッと溜息をつき、

「浮田」イヤどうも恐入つた。怖る可きは婦人の嫉妬だ。どうして、どうして菊枝の事を、露見るゝ筈はないが、何人が饒舌つたか、不思議、不思議。どうも不思議だ。あの横田、彼奴彼奴、彼奴に違ひない、あの奸吉に違ひない。畜生、もと〳〵乃公を勸めて菊枝を呼ばしたのも彼奴だ。ひどい畜生だ。しかも初めての時には、オーさうだ臨江閣の二階の窓から例の、例の女學士が、艷子も居た樣だつたが、あの歸途に無理に勸めて菊枝の、あの演劇を見物したのがその逢ひかゝる初めさ。

愈酒席によんで見ると、藝人は藝人だけにまた格別、云ふに云はれぬ妙味があつて、迚も素人なんぞが、艷子なんぞが、鯱鉾立をしたッて迚も追付く譯のものぢやなし、殊に目下浪華第一の大劇場浪華オペラの人氣取り、昔の新駒の人氣がどうだからうだと云つたッて、それはなか〳〵どうして、菊枝に、其菊枝が先づむかうからなんだとかイヒヒヽヽ。どうも早や、有難は浮田大通士だ、凡そ天下廣しと雖も美人多しと雖ど、一たび大通士を見たらんもの何者かハヽハヽ。度があつて云ふ氣まぐれものがあるて。松田の娘、山村の娘子。殘念な奴らだ。併し一佳人を失ひて美人を得、へヘ差引勘定損德なしと云ふものだ。ハヽハヽ。

と興に乘じて獨語つ折、遽然として室内に足音あり。浮田は思はず笑を止めてキット室戸を見るに、艷子にはあらずして侍女にてもあるにや、足音は二間程隔てし千樹が居間の方へ遠ざかり、浮田は艷子ならんには如何なる手段を用ひて攻撃を拒ぎなんかと殆んど當惑なせしに左なかりしは幸ひなりしと又もや獨語つ樣、

「浮田」アーよかつた。艷子かと思つた。ナニどうかうか誤魔化しはするけれども大分激して居るので、萬一婦人が第一の攻道具と心得て居る紅涙潜然位ならいゝが、小兒の涕泣を眞似られた日には、兩親も知つては居ようけれども、知らないふりをして居る内は。が泣かるれば知れる、少しまづい、マアよかつた。一寸のびればひろとやら。ヤまた足音がする。が、イヤ艷子ではないやうだ。男の樣だ。だ

れかな櫻田かな。イヤ舅でも、ハ、ハ、ハ、舅と云ふも早い樣だが、まづさ、まづ意中の舅、ハ、ハ、櫻田も幸ひな男だ。浮田程の才子を、風流才子を、まただれか、横田かな。また遊つた。あの横田と云ふ奴はひどい奴だ。うまく湯川を誤魔化して松山凌雲の印形をぬすまして、一萬圓の、一萬圓の證書を贋造して、訴へると云へば、詐欺取財の廉を以て訴へると云へば、松山が、名譽を重んずる松山が、一時の汚名でも厭つて必ず内濟と來る、内濟と來れば幾許かの金を松山からふんだくつて、それを櫻田に渡して、さきに松山に貸してやると云つて櫻田から欺き取つて、太い奴だ、おのれらの腹を肥して居る貸金の内金に松山からよこした積りにして、櫻田を欺く積りの處が松山が、松山が強く出で、訴へるなら訴へろとビクともしないから、若し失敗する樣な事があつては、證書が、立派た證書はこしらへてあるが若し失敗する樣な事があつては、自分等の身の上にかゝる。少しおぢけが付いて、ハ、ハ、ハ、十分に法律を心得ないやつは、ハ、まさかの時になると、へ、商賣やに掛ければ、我輩が、見れば何でもないが、そこで臨江閣で我輩を種々辯口を以て殊にあの菊枝なぞを周旋したのも、へ、へ、我輩も一時は迷つたが、横田に同意しては見たが、よく考へると、横田が意中を察しると、少しをかしい。殊に、殊に松山に怨みが、操の事はあるけども、マアそれはそれとして、此上たゝるも及ばない事だ。あの位に意根をかへせば、こゝでは、へ、看官の意外に出でて、一思案かへねばならぬぞ。エーとマアどうしようか。

と云ふ折しも、突然室戸を開いて入り來るは艶子なりけり。

艶子が突然と入り來りぬれば、浮田は再び如何なる攻撃に出會はんかと、幾分の恐怖心（怖るべき嫉妬についての）をいだきぬれど、斯る時には斯く爲すこそよけれと、此方より先づ聲を掛け、

「浮田」艶子さん、何御用でした。大分お早くお濟みですな、令母お一人でしたか。「艶子」ハイイ、エ家君も一處で御在ました。敏子さんから手紙が參つたもんですから、妾へも參つたもんですから、それで。「浮田」さうですか、マアお掛けなすッてはどうです……へへー貴孃に來て呉れろ、至急に、内密で、フーン、何の用ですな。「艶子」さうですネエ。どんな事ですかなんともかいてないから、唯お宅と松山家の事について至急御相談致したいとかいてありますよ。「浮田」フーン、へー、成る、それで。

浮田は敏子より艶子への手紙に松山と關係の事につき内密に至急に相談致したし、松山との關係、至急に、内密に、扠は横田湯川等がはかりし事既に漏れぬるか、内密の相談とは敏子が兩家の間に立ち仲裁、調停を試みん爲めなるか、其手段はいかならんか、果して此事なるやあらずや、漏れたらんには何者が漏らしぬる、然らんには猶豫し難し、イザさらば余も亦千樹に事のあらまし、横田等が惡計の事のあらましを告知らして、自己が信用を得るの手段とせん。こは豫て思ひ計れる處なれども、此事若し敏子よりして艶子をかりて千樹に告げ、敏子が此事を知り得べき、知り得べき理由なければ、必ず漏せるもののあるべき筈なり。さあらんにはそれと共に余が事をさへにあしざまに、あしざまに、告げしも知れず。同謀なりと告げしも知れず……艶子が結婚の督責に堪へかね、此事を以て其手段、千樹の信用を得るの手段となさんには、先づ艶子にも事の心を第一に知らせ置きて、艶子が敏子より聞き得たりと横田等が事を

千樹に話するゝ時、浮田も既に漸々にこ櫻田家の爲めにはかると告げたれば、櫻田夫婦は猾吏に余を信じて徹て謀りし事さへに故障なく成就せん。さなり〳〵とわれに問ひわれに答へ、いと迅速に思案を定めて、

「浮田」それで敏子さんから手紙が……成る……時に艶子さん、先刻も一寸お話をして置かうと思つた、即ち横田の事ですがなア。「艶子」ハイ横田の、「浮田」其横田は實に奸惡な奴でおどろいた奴ですぞ。「艶子」ヘーそれはまた如何云ふ譯で御在ますかネエ。「浮田」イヤそれは外でもありませんなア……敏子さんの用と云ふのも必ず此事に相違なからうと思ひますて。「艶子」ヘー敏子さんの用も……アノ敏子さんの、ヘーそれはまたどんな事で御在ますネエ。「浮田」サア其事と申すは斯らです。エートアノ松山との關係と云ふのは、事實さう云ふ事が松山に貸した……一萬圓の貸金があると云ふのは決して事實のない事で、イヽエそれがさ……令尊からは金が出て居るに相違ない。其事は決して相違ないですが、横田が取次をして、松山の手に渡した……松山からの證書と云ふのも皆な事實にない事で……「艶子」ニ事實でない……松山に貸金のある事も……松山の證書と云ふのも……みんな事實でない……そして家君から金の出て居るのは、金の出た丈けが事實ですと。ヘー妾にはどうも少しも譯がわかりませんよ……金のユキハが少しもわかりませんよ。「浮田」それは其筈です。其金のユキハは外でもないです。即ち横田と湯川、松山の書生の湯川、此二人のポッケットに潛伏して居るので。「艶子」マア、それは……それは浮田さん、事實で御在ますか。「浮田」事實の事實でないのと云つて、浮田は貴女に對して虚言は吐かない積りです。「艶子」イヽエさうぢやないんですよ。浮田さん……さう聞いて下すッては……浮田さん堪忍して下さいましよ。妾がわるう御在ましたから……ネエ……そして其話はどうして郎君御存じで入らッしやいますの。「浮田」エそれですか……それはアノそれエーさ様、たしか敏子さんが一處の様でしたが、エー御兩親と敏子さんと四人連で堺の濱に御いでの事があつたでせう……おかへりに臨江閣にネ……窓から敏子さんと二人で。「艶子」ハイ郎君は横田と湯川と三人づれで……浪華オペラの方へ……「浮田」左様浪華オペラの方へ……あの初めて……「艶子」菊枝にお逢ひなすッて。「浮田」エハヽハヽどうも困る。話が横にそれては。マアお聞きなさい。其時臨江閣で初めて聞いたので……横田と湯川とが事實を打明けて話したので……敏子さんの用と云ふのも多分其事に相違ないでせう。「艶子」ヘーマアひどい事を……ヘー……敏子さんはどうして知つて居ませうネエ……

此時又もや人の來るけはひあるにぞ二人は話を中止しぬ。

第十三回

久松幹雄は壯年ながらも改進黨諸老輩に推されて、大阪同黨員の主幹となりて、國事に周旋なし、學識もあり、經驗もあり、輿望さへになみなみならず、素より富豪の家に生れぬれば、被選舉權を有する程の財産もあり、唯議員たるの資格の内年齢未だ三十歳にみたざるを以て、尚ほ未だ此榮譽ある議場に登るを得ざるぞ是非もなき。斯く名望學識經驗をさへに併せるから、既に前にも述べぬる様に某公の令嬢たち、久松が相貌堂々たる風采のみにても隨分情を動かすべきに、まして後來は内閣の首相とも仰がるべき人とし、戀ひ慕ひて交際と

終生の交情を結ばんものをと爭ひける內、彼の櫻田の艶子ははやくも父母の許を得て公然に緣談を申込みぬるに、久松は見る所ありしか否やはしらねど、少時交際を結びて後にこそとそれよりは訪ひも訪はれもしつゝありしに、ある夜某家の夜嚥に招かれ艶子と共に臨みけるに、艶子は何としぬるにや第一場の舞踏終りぬる頃より影さへに見せず、兎角なす內に第二の舞踏もはじまりぬ。艶子は尚ほも姿を隱しぬ。既に舞踏を終りぬれば、少時は尋ね探し控處に待ちもしつらんが、いつまで斯くてあるべきにあらねば、其夜はおのれ一人歸りて明日は必ず訪ひ來るべし、其折にこそ譯をも聞かめと待受けぬるに、終日來らず、其翌日には此方より尋ねぬれど家にあらずと云ふ。其後中の島公園にて出會ひぬれば、此頃は如何にやし玉ふと問ひ試みんとせしに、艶子は自己のあるを知らざるふりして人にまぎれ木の間に隱れぬ。其後も亦斯る事度々なりければ、久松は不審には思ふものから、われから求めし交際ならず、殊には斯る事に區々する性質ならねば、其儘に打捨てける內、此度は松山の操より先づ交際を許し玉はらんやと求めらるゝまゝ、其人となりをも試みん、彼の艶子の如きものならんには賴むに足らじと二三ケ月樣子を伺ふに、此貴女ならんには我終生の幸福を共にするとも少しも恥づべき廉なし、未來の子孫の教育を託すべきは此賢婦人ならめと打定まる迄に思ひければ、操との交情は日にまし深くなり行くに、君子は樂んで淫せずと云ひけんも、斯る才子佳人の上をやと世に評さるゝ迄にありけり。斯くて大阪改進黨の首領天方某が家例として開きぬる三月三日の夜嚥に臨まんとて、操と共に馬車を走らせ中の島公園を過りし折、思ひ掛けずも櫻田の艶子を見掛けぬ。此時艶子は浮田靑萍と云ふ久松も兩三度は出會ひし事ある人物といと親じく打かたらひつゝありしが、久松等が馬車の響きにや驚きし、浮田と共に腰掛を放れて此方を見たる事は見たりしが、顏をサと赤くし如何にもキマリのわるいと云ふ有樣なるにぞ、久松は心の內には扨はと悟りぬれど、態と會釋をなせしのみ、故らに公園の西より走らせ來たる馬車の方へ瞳子を轉じて我馬に一鞭を加へて南の鐵橋を渡り、天方がりへ行きぬ。此夜の宴會には天方の依賴によりて來客の接待を引受けるに、賓客の過半は來着しぬる後、取次の案內につれて入り來るは櫻田の艶子と、これ迄は見も知らず前に公園にて見掛けし車上の美人なり。名刺を見て初めて彼の有名なる東京女子參政黨の女學士山村の敏子なりと知りぬ。さればば久松も粗略なく何くれと周旋なし、或は賓客に引合せ、或は腕を與へなどして、殊に第一第二の舞踏の間にも松山の操と共に慰めなどしていと親切にものせしから、翌日は敏子訪來りて久松が倫敦に在學せし頃隨分厄介にもなり、親密にも交はりし谷川の名刺など出して、東京の事、大阪の事、問ひもし問はれもしける處へ、敏子へは電信をもて紹介し置かんと約しぬる谷川の紹介狀も、如何なる譯にや郵便にて來りぬ。さなきだに粗略には思はざる久松の事故、其後もいききしける內、敏子は時々女子參政の事を申し出づるに、久松は男女同權に就ては異論なき旨を答へて、別段に自己の持論は云ひ出でず、其後敏子が女政黨倶樂部の演說に就き操も亦敏子の主義を贊成して參政黨に加名せんなど云ひし時、久松は遠慮なく之を說破して操に其主義を遷めよと忠告なせしなり。其折敏子訪ひ來り、又も參政論を持出しぬれど、此時もよき程にあしらひ、敏子歸りて後山村敏子女史の演說を讀むと云ふ題を掲げておのれが主筆なる浪華タイムスの社說に於ていたく之を駁擊しぬるに、敏子よりも幾度となく反駁の書を寄

せければ・其都度之を新紙に掲げ、或は批評し、或は論駁し、一ヶ月程は文壇にて彼の女學士との筆戰に日を送りぬ。

斯くて久松は新紙上にて山村の敏子との筆戰に從事しつゝありしが、倘ほ敏子は折々訪ひ來りて私交の上に於てはいよゝ親密になり行きぬ。

五月二十何日にやありけん、某家の夜讌に招待されけるから、操をさそふべき(操も亦招待を受けぬるにぞ)約をなし、午後四時頃にもなれば、イザ松山許へと馬車の準備など命じける處へ、一封の書狀到來しぬ。久松は何人よりの來信にや、書風は操の手跡によく似つれども、封押し切りて讀み行くに、松山よりの書狀に相違なく、殊に其文面の穩かならぬ不可思議の限りなるにぞ、しばらく頭を傾けつゝ思案に沈める體なりしが、忽然として大いに打笑ひ、

「久松」アハアハ、、ハ、、ハ、、、、イヤ惡戲をする奴もあるものだ。よく筆意は似て居るが……どうも操孃ではない。なにやつかしらんが……馬鹿々々しい。ハ、、ハ、、、必ず理由のある事であらうが……こんな遺恨を受ける樣な……覺えはないけれども、不思議だ……絶交する、以來は絶交する、如何なる理由が有るか操孃に限つて片言を信じて此の如き過激なレツター(手紙)を送る樣な、どうも……こんな過激な性質ではない。例ひ……ある者が有つてある無根の……我輩に就て無根の惡説……操孃を憤懣せしむる……かく迄に憤懣せしむる無根の惡説をなすものがあつても……唯其者の片言を信じて直ちに此の如き……どうも操孃でない……あのレヂー(貴女)に限つて如此過激な……イヤ決して操孃ではあるまい……今試みに操孃について斯る事ありと假定せんに、操孃は果して何等の手段を用ひんか、かゝる過激の手段に出づべきか……否々々々操孃は必ず極めて平和の方法……其人に面して其事實なると然らざるとを確め、然る後に之に對する即ち……平和の方法、穩便なる手段を取るべし。余は斷じて此書狀は決して操孃の手に出でずして、ある惡漢の奸策に出づるを知る。斯る卑劣の手段を用ひてハ、、ハ、、、君子の交を破らんとする惡漢其者の意中……實にハ、、ハ、、ハ憫笑に堪へない。併し……我輩はそんな覺えは……遺恨を受ける樣な覺えはないが、操孃に於て……操孃に於て遺恨を買ひし事でもあるのか……イヤイヤ彼の品行端正の淑女が……資性順良の貴女が……殊に交際場裡の花王とも云はるゝ操孃が……よし……よし……今宵の夜會で必ず出會しようから、其時手段を設け何等の理由があつて斯る書狀を……ハ、、ハ、、、斯う考へるのは……操孃の性質を知つて居るから、ハ、、ハ、愚の至りだハ、、ハ、、、……

と打笑ふ折しも、馬車の準備とゝのひし旨を申出づるにぞ、久松は直ちに之に乘じて先づ約の如く松山がりへと思ひしが、イヤ假令惡漢の奸謀に出でしものとの余が推量の當れりとするも、絶交の書狀を送られし身が其婦人のもとにおとづれんも有繫なりと、招待を受けぬる某氏の夜會へ赴きぬ。久松は斯くは思ひ定めしものから何となう操の事の氣に掛りて、今や〳〵と心待しけるに、かゝる宴會に限らずこれ迄何れの處にても殆んど遲刻せし事なき操が、他の賓客は既に來着して待合室に充塞たるに、操は倘ほも來らず、叉手はいよ〳〵余が推量の如くにかれの書狀は惡漢の手になり、操は余との約束を守りて余のさそふを待ちつゝあるにや、さあらんには先に立寄りしものを殘念なる事をせしよ、さはれ最早來るべき時刻なるにと、山村敏子等と話す内にも終始久松の瞳子は待合

室の入口に注ぎて操の影や見ゆると待ちける内に、早や立食の時刻となり、主人に案内さるゝまゝ來賓と打連れ立食の室に至る間もふりかへり勝なり。天方夫人、山村敏子兩婦人の間に着席たし、猶來らずやと來客を見まはすに操に似たるものもなし。かくしては彼の書狀は正しく操の手になり、今此夜會に來らざるも余と會するを避けんとにや、余が人を知るの明なきにやと、有繫の久松も種々の妄想に苦しみしが、今は思ひ斷えて敏子等と共に立食を了りて舞踏室に行くに、此時は數百の來客一時に席を立ちぬる事故、ぢッと腕打組みし敏子とさへ推し離されん程なれば、假りに操と云ふ問題、尙ほ久松の腦裡に殘れりとするも、いかで尋ね探すの暇あらんや。漸くに舞踏室に達し、入亂れて舞踊るに、ト見れば何時の程にや來りぬらん、操は天方某と腕打組みて、或は遠く或は近く、摺れ違ふ事さへあるに、久松は聲を掛けんと思へど敏子と天方とに隔てられ、殊には操の顏色恨み怒れる樣にてまなざしのすさまじき、尋常ならず見ゆれば、萬一かゝる宴席にて不覺を取る樣の事ありてはと、心ならずも敏子と共に踊りて居れり。

去る程に久松は敏子と共に舞ひ終りながらも、終始操の事をのみ、そが顏色の尋常ならぬ意中をはかりかね、容易くは聲をも掛け得ず、いかにもして其序を得たんと思へる内に、操は何處へ立去りしか、天方は他の婦人と共に踊れり、第一の舞踏終りなば、其意中をも試みてんものを殘り惜き事をしてけりと、尙ほも視線を四方にはしらせんとなす折しも、當家の夫人來りて一封の書狀を渡さるゝに、こたびは如何なる書狀にやと封筒を見るに、電信局の印あるにぞ何事ならんと開き見たるに、這は一身に關はる事ならず東京改進黨幹事よりの電報にて餘程要急の事柄なるべし。久松は敏子に辭して直ちに天方某の傍に進み近づき、其事の大意を告げ知らせ、天方の指圖によりて直ぐ樣舞踏室を辭し去り、僅かに入口を出でんとなす折、舞踏室は、俄かにさながら病人にても出來し樣子なれども、そを顧みる暇もなく、さす方へと急ぎ行きしが、次の日人ありて告ぐるを聞けば、彼の時發病せしは操たりと云ふ。操は既に立去りて舞踏室にはあらずと思ひしに、何處にや在りし、たれと共にや踊りし、不審の限りなり。其は兎もあれ如何なる病氣なりしや、腦充血とは思ふものから、此儘には捨て置き難し、イザ操がりへとおとづれ容體をも探りなんと馬車を松山に走せ付け、操の君はと問ふに、取次に出でし二十ばかりの書生らしき男が、孃樣は今朝ほどより西京へ赴き玉ひしと云ふ。久松はさる譯はあるまじきにと一圓合點ゆかねば、御主人御夫婦にはと尋ぬるに、こも亦御同行ありしと云ふ。久松はさなき體にて松山を立出で、心の中にて小首を傾け、翌日再びおとづれしに、御親子お三人にて城の崎の溫泉へと答ふ。久松は引續いておとづれしに尙ほ歸り玉はじとの事に、今は早やこれ迄なり、昨夜の夜會にても操孃は病氣なり、且つは沈重なりと余に向ひて弔ひ顏に挨拶するなるに松山を訪へば旅行せりと云ふ、殊に山村の敏子孃はあの夜さり操孃を介抱なし、翌日より日々松山に出入すとも皆人の傳ふるに、不可思議の限りなれども推して問ふべき事ならぬにぞ、よき折もあらば敏子にあひてと山村の旅館を訪ふ事五たびに及びぬれども、折あしう不在の節のみ、また敏子より訪はれし時には、生憎に自己不在にて終に逢ふことを得ざるうちに、太陽も久松と共に、否尙ほ一層多忙なりと見え、今日とあゆみ明日とあゆみ、早くも一月あまりになりぬ。久松は素より婦人の上に就きて區々たる人にあらねど、おのれ此者はと思ひ込みたるに理由もなくして

斯る事になりければ、其實情のわからぬ間は何となら物足らぬ心地せられて、山村の旅館を尋ねしに、敏子は今日もあらずと云ふにぞ、其日も空しく歸り來り、翌日また尋ね見ばやと轉まだきより新聞の原稿など認めつゝ、夕刻にもならば山村がりへと心急がれつゝある午後二時頃仲女來りて山村樣の訪はせ玉ふと申し次ぐに、久松大旱の雲霓も啻ならず、早速に出で迎へて應接所に請じ入れつゝ丁寧に會釋をなし、敏子の顏をヂツと見るに、敏子はいかにも愉快らしく可笑然と打笑み、

「敏子」久松さん、誠にお久しぶりで御在ましたネエ……昨日は……先日も度々御いで下さいましたさうですが、何日も生憎留守の時ばかしで御在まして…… 「久松」イエどう致しまして、貴孃こそ度々お尋ね下すッたのに、イヤ實に失敬でしたなア。 「敏子」それはマアお互ひ樣として置きましてネエ、ホヽホヽ、久松さん、アノー……妾が今日あがりましたのはネエ。 「久松」ハイ。 「敏子」アノー操さんの事で伺つたので御在ますよ。 「久松」エ、アノ松山の。 「敏子」ハイ……エート一月ばかり以前に操さんのとこからお手紙が參りは致しませんでしたか。 「久松」參りました、書狀が。 「敏子」さうで御在ませうネエ……アー妾の推量通り少しも違ひませんよ。 「久松」エなんですと。 「敏子」貴郎はあの手紙を操さんから……操さんの直筆だと思つて居らッしやいますか。 「久松」アノ手紙を……左樣、筆意はよく似て居ますなア。 「敏子」それでは筆意が似て居るばかりで操さんの眞意からと思つて居らッしやいますの。 「久松」左樣、それは……其問題については少しく我輩も判斷に苦しんで居る處ですて…… 「敏子」しかしそれは……其書狀の眞僞で御在ますか、また操さんの心情の眞僞で御在ますか。 「久松」左樣、其眞僞に苦しんで居ますので……書風は似て居る、例ひ辨別し難い程似て居るとも、それは眞であらうが僞であらうが、少しも……少しも頓着は致しませんがな……唯其文意……其主旨が我輩には了解しかねるので……操さんの性質として、あの樣な過激な書狀を認める……イヤ操さんの平生に似合はぬ事であるので……唯此一點が我輩にはどうあつても判斷が就きかねますので……

敏子は終始久松の面に瞳子を注ぎつゝ、其思想の如何を視察しありしが、こゝに至りて、思はずも聲を放ちて打笑ひ、

「敏子」ホヽホヽホヽヽヽ、さうで御在ませうとも、それは實に其通りで御在ますよ。久松さん、それは斯う云ふ事情がありますので……今お話し致しませうが、マア斯う云ふ譯で御在ますから……貴郎もネエ、どうぞよう御在ますか、今お話し致しますよ……

第十四回

既に述べぬる如く、敏子は久松と操との交誼を以前にもまして親密ならしめんと自己が身に引受けて彼方此方と周旋しつ、漸く其運に至りしにや、今日は中の島公園にて久松と操とが出會の約調ひけるから、敏子は操と共に豫約の時間、尚それよりも半時間程以前に記念碑の傍らなる共同腰掛に倚りて久松を待受けつゝ、話に時をや移すらん。兩女が此日の扮裝は別段にあなぐり記さず、看官よろしく推し玉へよ。兩女が情交の密なるは、共にお揃ひの涼しさうなる夏服を穿ちたるにも知らるべし。敏子は何となく愉快らしく見え、操は十分に樂しめる眉の少しくしわめるは、久松の君に逢ひたなば先づ何と挨拶してよからんなど發明なる心の中にも思案をや凝らすらん。敏子はのぞく樣に操の顏を見て莞爾と笑を含み、

「敏子」操さん、ホヽホヽヽ實にお嬉しさうで御在ますネエ。

操もまた頭を垂れて莞爾と打笑み、顴骨のほとりより目のまはりを少しく赤くなし、

「操」ハイモウ誠に……これもみんな貴孃のおかげで……妾はなんだかこんな羞しい事は……ホヽホヽヽ。「敏子」なんですネエ。おもいれなにが羞しい事がありますものか。久松さんをおいぢめなさいよ……ナニ構ふ事がありますものかネ。妾もお手傳ひ致しますよ……が妾なぞは覺えがありませんが、どんな發明な方でもネエ、なんだかきまりが……ホヽホヽ、操さん、久松さんがお出でなすツたらなんにもおツしやることがお出來なさいますまいネエ。エ操さん。「操」ホヽホヽそれはさうで御在ませうネエ。「敏子」なんですよ、御自分の事だのに御在ませうツてホヽホヽ。「操」ホヽホヽ。

折柄馬蹄は車輪の響に和し馳せ來る一輛の馬車。兩女は迅速に頭をかへして車上の人を見るに、是れ別人ならず久松幹雄なり。敏子は直ちに腰掛を離れて久松を迎ふるに、操は身を起しぬるのみ。久松の方へは正しく對せず斜に記念碑に向ひて何となくきまりわろく、久松の顏をようは認めず、また心に浮ぶ第一の挨拶何と云ひてとたゆむなるべし。敏子は久松に定式の會釋なし、

「敏子」大層お早う御在ましたネエ。「久松」イエ大分遲刻致したやうで……いろ〳〵御盡力下さいまして……イヤお禮の致しかたもない位で……「敏子」ホヽホヽヽなんで御在ますネエ、そんな事をおツしやつて……アノー操さんも先程から、御覽なさいまし……それはあすこにお待ちなすツてお出ですから、サア早く彼處へ入らツしやつて……ネエ……「久松」ハイさうですか……萬事貴孃の御紹介を願ひます。「敏子」それは承知致して居りますから……

敏子は久松を伴ひて操のほとりへ來るに、操の以前のかまへの少しく變じて、敏子と久松に向ひぬれど瞳子の置き處には少しく困却せる樣子。敏子は中間に立ちて兩人に握手の禮を行はしめ、今後の交情は以前にましていよ〳〵親密になし玉はん事は云ふまでもなく、妾は御婚儀の席に侍りて今日の事を昔語に、第二の……最も榮譽ある第二の祝詞を呈らせん事を今より指を屈して一日千秋の思ひをなせりとの旨を告ぐれば、久松も操も今日再び覆水盆にかへりて、終生の交情を全うするは全く貴孃が友愛の賜なりと答へて、後兩人は各意の中に天に誓ひ、地にや盟はん。敏子は兩人を共同腰掛に倚らしめ、

「敏子」久松さん……操さん……實に馬鹿な者の奸計に……イヤそれも今日になりますれば、マアなんでもない事で御在ますから、今後はいよ〳〵……御如才も御在ますまいが、ネエ久松さん、操さん。「久松」イヤモウ種々御盡力下すツたので……今日の快樂……唯貴孃に鳴謝するの外はありません。「敏子」イエどう致しまして。「操」敏子さん、モウ何とも御禮の申し樣も……妾の心中はどうぞよろしくお察しを願ひます。「敏子」ホヽホヽ操さんまでがそんな事を……モウ〳〵そんな事は……モウよさうでは御在ませんか。それよりも操さん……ネエ……ホヽホヽヽ。

久松と操とは敏子を中間におきて、少時無言なりしが男子は男子だけにかゝる時にも女子に比べては無頓着にて、久松は堂々たる相貌の内に少しく笑容をあらはし、

「久松」……操さん、大分お目にかゝらぬ樣でしたが、ハヽヽどうなさいました。御病氣と申す事も伺つては居ましたが、モウ御全快

ですか。まだお顏の色も十分とは申されん樣ですが、モウお快方で……

操は久松が以前にかはらぬ挨拶ぶりに何と答をなしなんかと、頓にはいらへも出でかぬめり。操は何と答をなしてよからんかと頓にはいらへも出でかねしが、斯くて濟むべきにあらねば、軈て徐ろに却つて落付きたる樣子にて、

「操」ハイ色々御心配下さいまして……妾の顏色がそれ程……それ程にやつれて……これと申すも實に口惜く思ひました……「敏子」操さん、モウよう御在ますわネ……久松さんの御存じと云ふ譯でも……みんなあの惡漢どもの奸計であるので……併し不思議で御在ますネエ。あの書生が……此公園地でお助けなすッた書生が湯川の弟であつて……兄をたよつて……其兄が湯川……まるで小說にでもありさうな……シテ見ると人の性は善だと見えますネエ。湯川が……横田に誘惑されたとは申すものの……あれ程たくんだ事を……慈愛に感動したにしろ……操さんが弟をお助けなすッたお慈愛に感動したにしろ……すまぬ事をしたと云ふ良心に責められて、貸金一條の奸謀は勿論、浮田にたのまれてお兩人へ僞書を送つたのも、皆私の仕業であります、幼年から御恩をうけた御主人に、例ひ利慾に迷つて居たにしろ、どうしてあア云ふ心になりましたらう、かう云ふ恩しらずの畜生同樣な私の弟を、あれ程きたなく、乞食にも劣つたあのきたない弟を、孃樣が御自身に御介抱下さいましたと承つた時には、かう云ふ御慈悲深い御主人にどうして、どうしてマアあア云ふ、横田を怨恨む事も御在ません、私が利慾に迷つたばかりで孃樣を、孃樣を御病氣に迄致すとは、實に獅子身中の蟲、例ひ如何なる御處分がありましても、私は少しも厭ひません、實に可惡い事を致しました、御主人のお憤怒は如何ばかりとは思ひますが、どうぞ貴孃のお取計ひで、此事が極く平和に、私は少しも厭ひませんが櫻田さんの、何事も御存じない櫻田さんの御難儀になりません樣にと、妾の處へまゐつて謝罪しました時には、惡い人とは思ひましたが……所謂其罪を惡んで其人を惡まずとやら……妾もまことに氣の毒に思ひましたよ……湯川ばかりでなく、妾も共に操さんに謝しますのは……仇敵とも云ふべき湯川の爲にはいろ〳〵御盡力なすッて斯う平和に治まつたのは……獨り湯川の幸福ばかりでは御在ません、叔父の櫻田の爲めにも……御存じの通りの一コクでは御在ますが……おれの不明から……横田の樣な奸物を信用して、松山さんにあア云ふ汚名を……不名譽を冠らせたのは實におれの不明からぢやと大層後悔を致して松山さんのおッしやる通りにどんな謝罪でも致さうと申して居りますから、ネエ操さん、どうぞ御兩親に貴孃からもよろしくお願ひ申しますよ。

「操」ハイイエそれはモウ貴孃のお賴みがなくとも、妾も貴孃への……貴孃への恩がへしに、妾の身に引受けて……父も隨分怒つては居りますが、マア御安心なすッて居て下さいましよ。「敏子」難有う御在ますよ。どうかよろしくネエ。久松さん、貴郞もどうぞお含み置き下さいまして。「久松」ハイそれも我輩も可及的盡力致しませう。操さん、湯川も成丈け穩便に處分をなさる樣に、固より首謀と云ふでもなく、殊に自首した廉もあつて見れば……「敏子」左樣で御在ますネエ。妾も御同感で御在ますよ。「操」ハイそれも兩親に十分に申して置きました。多分湯川は國へかへし其かはりにあの弟を、湯川同樣に使ひまして、學問も修める事が出來る樣にと思ひましてネエ。「敏子」ヘエさうで御在ますか、

實に恐入りましたネエ、なか／＼どうして人には出來ない事で御在ます。櫻田では横田を、松山さんへの申譯に警察署に出す積りで：：妾も勸めて置きましたが、浮田：：あの浮田と云ふ人が：：此間から大層叔父叔母に取入つて非常に信用されて居ますが：：其浮田の說ださうですが：：今此處で横田を罪人に爲る樣では：：松山さんでも湯川を罪人になさるは必定であるから、先づ何事も平和に：：此事は萬事平和に治める方が：：横田の處分は放逐位に止める方が穩便でよからうと浮田さんが申すので：：叔父夫婦も之に同意したものと見えまして、モウ横田は居ない樣で御在ますよ。「操」ヘー：：浮田さんはアノー：：櫻田さんに同居してお出ださうで御在ますが：：「敏子」イ、エ同居と云ふ譯では御在ません。「操」浮田と云ふ人もひどい人で御在ますネエ。なにも：：恨みも何もないものを：：僞書を：：あア云ふ手紙を僞造して：：何の遺恨があるものでせう。妾には少しもわかりませんが：：若しや久松さんの方へさういふお覺えでも御在ますのですか。「久松」イエ我輩も少しも覺えがないので：：「敏子」別段遺恨のある譯ではありますまいが、妾はマア斯う思ひますよ：：

敏子は少時無言にて眉をしわめ居りしが、軈て久松と操に向ひ、

「敏子」妾は斯う思ひますよ。久松さんは別段浮田と御懇意と申す譯でもなし、操さんにした處が：：マア其通りで遺恨をお受けなさいます樣な事は：：決して操さん、貴孃の方にはありはしますまい。けどもしかし：：妙なもので飛んでもない事から：：小人と云ふものは誠に困るもので御在ますネエ。アノ：：浮田と申す人は：：妾は初めて此公園地であひましたが、其時はアノ：：艷子さんと一處で：：どうも妙で御在ますから、妾はいやな人物だと思つて：：可成交際を避ける樣にして居ますと、其後度々尋ねて參りましてネエ：：度々留守をつかひましたが、さうさうは氣の毒だと思ひまして兩三度面會して見ましたが：：何の用かと思へば用があると云ふでもなく、どうかすると語氣が：：冷情に傾く樣な工合で御在ますから、最後に：：妾も腹が立ちましたから、最後に少しく强く攻擊致したので：：頻りに辯解をしましてネエ、逃げる樣に狐鼠々々と歸つたツきり、其後は少しも參りもせず、櫻田で：：折々櫻田で出會ふ事がありましても、いつもはづす樣な塩梅で御在ますのさ：：毒氣を含んでる程の男でもない樣ですから、湯川なぞの說にしますと、貴孃に：：操さん、貴孃にラブ(戀着)、此樣な辭を用ひますのは實に失禮なはなしでは御在ますが：：マア操さん、お聞きなさいましよ：：あの浮田が貴孃に：：ネ：：：それであるから、久松さんと貴孃の御交情の親密なるを見て嫉妬心を起した上に、以前貴孃が：：冷淡に待遇なすツたのを意恨に、あんなクダラナイ人物は得てそんな事を意恨に持つもので御在ますから：：操さん、女子と小人は養ひ難しと申しますが、浮田の樣な人物は女子：：假に女子を或る一派の論者の樣に全く男子に劣れるものとしましてもネエ、操さん、ホヽホヽ、浮田の樣な人物は參政黨には勿論一般の女子にも決してなからうと思ひます。古聖人の格言かは存じませんが、單に小人と修正して女子の二字は取除けて貰ひたいものですネエ。ホ、オホヽヽ。「久松」ハハヽヽ、不相變敏子さんの極端論、ハ、ハヽしかし、何しろ浮田の樣な小人に會つては困却しますなア。「操」マア驚きますネエ：：マア實に：：驚いた人ですネエ。妾が大學を

卒業した頃から攻究會や夜會なぞで逢ひますとネエ、それはモウ……實にいやらしい程親切に世話しますから初めは妾も……妾も唯親切な人だと思ひましてネエ……一二度夜會に同行した事も御在ましたが、無禮な……妾に無禮な事を申し掛けましたから、妾も實に腹を立ちましてそれからは可成交際を致さない樣にして居ましたのさ……今になつて考へますと、妾が舞臺で發病しました……徽子さん、貴孃の御介抱をうけました、あの夜會の立食の時に、妾にいろ〳〵な事を……すぐ隣席に居つていろ〳〵な事を申したのも……自身が行つた……可惡い彼の假書の計策が效を奏したか奏しないか其の樣子を見る爲めであつたんですよ……實に惡い人で御在ますよ……湯川から、湯川が此度のことは萬事穩便に處置して、可成罪人の出來ないやうに、「私はどうなすツてもよう御在ますからと身を捨てゝ賴みますから……其志も不便だと思ひまして告訴……告訴する事も見合せ、何事も妾の身に關はつた事は不問に置きます積りで御在ますが……久松さん、あなたは何とお思ひなさいますか。「久松」我輩ですか、我輩に致してもあんな人物を相手にした處が……縱ひ謝罪狀を取つた處が左程名譽にもなりますまい。却つて此事を知らぬ人に迄も吹聽すると同樣であつて餘り譽めた話でもないから、矢張不問に附する方が上策でせう……ナニ浮田位な人物の爲めに久松が名譽にどうの斯うのと云ふ關係もありますまいからハヽヽヽ。「徽子」さうですとも、浮田の樣な人物をお相手になさるのは實に大人氣ない話で御在ますものを……それについても氣の毒なのは櫻田の叔父叔母で御在ます。艷子さんは仕方も……イエマアどうしてあア浮田を信用したのですかしらん。今度の一條も、貸借金の一條も浮田が、小利口な浮田ですから迚もいけないと見込んだものか、湯川と櫻田とが斯う〳〵云ふ惡計からと先づ艷子さんに話して、それから兩親に告げさしたものですから、叔父叔母は浮田を信用しきつて居るものですから、それで、實に氣の毒な、艷子さんの、艷子さんの婿にいたす事に略決定した樣で御在ますよ。「操」ヘーー艷子さんの、さうですかネエヘー。「久松」徽子さん、どうもいろ〳〵御盡力下すつて難有う御在ました。今日は少し他に約束もありますから、此處でお別れに致しませう。「徽子」さうで御在ますか。それでは……操さん、貴孃は妾の馬車迄御同伴下さいますまいか。またいろ〳〵久松さんにもお伺ひ申し度うも御在ますが、それはマア其内に致しませう……サアまゐりませうネエ。

第十五回

山村徽子は關西の大集會の期日も僅かに十四五日内に迫りぬれば、同黨の姉妹等と日々參政黨の俱樂部に集會して、其日の準備何くれと協議なし、或は關西の諸縣より來會せし有名の婦女等に訪はれ、訪ひもし、一日は一日より繁忙になり行き、此頃は夜もいたく更けて翌日の午前二時或は三時頃となる事さへあり。されば男子に比べては其體格の上に就ても構造と其に軟弱なるに、男子にても堪へ能はぬ程の繁劇に、女子の堪へ得べき道理なければ、徽子は何處と云うて指示す程の患を覺ゆるにあらねど、何となう心地例ならず、或は睡眠の爲めに、あるひは喧嘩の爲めに、事に從ふことの熱中なる迄惱み煩ふ事さへあれども、素より凡庸の女子ならず、自ら參政の發狂者なんと稱する稀有の女丈夫なるから、昨日も今日も常にかはらず俱樂部に出務して、何角と協議しつゝありし

に、卓子を共にせる對面の某令孃眉間に八字を寄せヂーッと敏子の顏を見詰め居りしが、如何にも憊ける樣子にて、手には筆を握りたるまゝ眼を閉ぢて思を凝らせる敏子に對ひ、

「某令孃」敏子さん、貴孃のお顏の色は……マア眞青で……今日は別段にお惡い樣で入らッしやいますネエ。

其隣席に坐りし某夫人も、同じく驚慌を帶びたる聲音にて、

「某夫人」ほんたうに、マア、敏子さん、貴孃どうなさいましたの。マア大變で御在ますネ。

敏子は胸先何となく閉られし樣にて、頭腦さへに少しも感覺なきが如く、如何にも席に堪へざる程なるを少しく立たば恢復せん、此位の事を堪へ忍ばずば、殊には今宵のみならず、此四五日は毎夜々々殆んど今宵の如くなるにと、些と仰ぎ過ぎはせぬかと傍からは見らるゝ程にグットト反身形に椅子に倚り、眉間はしわめるにもあらず、しわめざるにもあらず、平生よりは少しく眉毛が下りし樣にて、眼を閉ぢ口を結び、手には軸と筆を握りて尙ほも黨議について思案を凝せるに、何程かへるも同じ事にて、考へれば考へる程其思想は同一の區域內に徘徊彷徨せるのみ。脫凡の妙思想奇思も出づればこそ。ただボットせし樣に覺えて自分ながらどうして斯うであらうかと、呆れ惑ふ程なり。されば敏子と卓子を共にせし夫人令孃等が、敏子の顏色に不審を容るゝも無理ならず、頻りに尋ね問はるゝにぞ、敏子は漸くに眼を開きて頭をもたげんとするに、頭腦グラ／＼として目くるめきぬ。敏子はさてはと思ひたりしが再び徐かに眼を閉ぢて少時が程は折合はせんと頭を其儘に起しもせず、タメてありしが、軈て靜かに體を起して眼を開きて人々を見るに、誰彼を辨じ難き程に覺えぬ。敏子は斯くてはと勇を鼓して勉めて口を開きて人々に向ひ、

「敏子」ハイ、イ、エ少うし。ナニ大丈夫で御在ますよ。頭が、頭が少うしグラ／＼する樣で御在ますが、これは、妾の持病で、こんな事は始終あるのですから、決して、難有うは御在ますが、御心配をなさいません樣に。どうしてどうして春から浪華へ參つて居ますのも、全く關西大集會に臨席致して、今病氣になります樣では、妾の失望ばかりではありません、折角選拔、と申しますのは可笑しう御在ますが、マア妾にまゐれと依託された東京の姉妹に對しても、イエ妾は決して病氣にはなりません積りで御在ますよ。また假ひ、例ひ不幸にして病に罹る事が御在ましても、妾は、例ひどの樣な事がありましても、妾は決して……

「某令孃」ア、敏子さん、なんだかお苦しさうで、貴孃の御精神は衆姉妹が御存じで居らッしやるから、それはモウ御尤では御在ますけれども、併し御病氣、若しも貴孃が今日になつて御病氣におなりなさいます樣な事が御在ましては、貴孃の御不滿は申す迄もなく、實に我黨の大不幸で御在ますから。ネエ。

「某夫人」さう／＼、さうで御在ますとも、敏子さん、我參政黨の爲めに、否同胞姉妹の爲めに、お盡しなさいます貴孃の御熱心は、ようく存じて居ますが、萬一、若しもほんたうに御病氣にでもおなんなさいまして大集會に、若しも大集會に御出席がお出來なさいません樣な事が御在ましては、それこそ大變で御在ますから……今晩はモウ……オー今一時がなつて居ますから……モウ妾なども今晩は退出しませう、ネエ衆姉妹……さうしてどうで御在ませう……サア敏子さん、跡は妾どもが片付けますから、サア……お歸宅の方がよろしう御在ませうネエ。敏子さん、さうなさいまし。

衆人にすゝめらるゝも敏子は尙ほも椅子を離れ

ず少時は答もなさざりき。

敏子は人々の彼此と氣を揉みていと切に諫めけれども、なか〳〵に聞入るゝ氣色なく、尚ほ倚子に倚りたるまゝ筆を持ちたるまゝ左手を額に加へて思案を凝すに、唯ボットするのみにて新規の思想は浮びやらず、氣あせり心焦だてども病氣と云ふ強者には古の勇士でさへも打勝ち能はざるものを、俗に氣の持ち樣とは云ふものから、かよわき女子の身としていかでかは堪へ得んや。敏子の頭腦は一分は一分時より無感覺になり行きつゝ、世間は唯寂々莫々として耳は恰も聾せしが如く、又シーンとすみたるに似て、蟬聲の樣なる響ある内に、敏子さん、山村さんと自己が姓名を呼ばるゝは纔かに遠くにはきこゆるものの、何人が呼ぶにや何の爲めにや、唯誰か呼んで居る樣ではあれどあまり遠くて、何故傍には來らぬにや、妾は斯っ答へ居るに尚ほ達しないのか、ア、猶々遠くなる樣だが……ア、モウ聞えない……ア、いゝ心持だ……マア妾はどこへ行くのか……フハ〳〵として……いゝ心持……アーア……アーア。

人々は先程より敏子の容子の尋常ならず色はます〳〵蒼白くなり口をしツかりと……歯をしツかりと食ひしめ、先には閉ぢ居りし眼を開き人々の顏を見る樣なりしが、瞳子は漸々に上邊にうつり行き、終にはすわりて動かずなり、八字を寄せたる眉には何となう苦痛のさまを畫き、唯ウ、ウ…、と徐かにウナサルのみにて、氣早き看病人ならんには早くも線香を立てさうな容體なるにぞ、人々スハ事なりとさわぎ立ち、直ぐ樣電話機を以て醫師へ通ずるあれば、馬車を飛ばして櫻田家へ馳せ付くるもあり。寢臺に移せよ、イヤ此儘になし置けよと、素人にて爲し得る丈の手當をなす内に、是も參政黨の一人にて今宵は他に急病人ありとて午後八時頃に引取りし女醫師某迎への馬車を走らせて入り來り、敏子の容體、發病前後の容體など仔細に問ひ定め、且つ丁寧に診察せし後、取扱ひ方など指圖して寢臺に移さしめ、彼此と手當を盡すに、敏子は僅かに氣息の通ぜしや、脣を二つ三つ動かせし後眼を半程開きて人々を見まはす樣なりしが、再び眼を閉ぢて唯スーッ〳〵と呼吸をなすのみなれども、血色は漸々赤みを帶びけるにぞ、人々は僅かに心を安んじ、尚ほ彼此相談なしける所へ、櫻田の艶子は母の政江と共に慌しげに入り來りて、直ちに敏子の枕邊に近付き、敏子がスヤ〳〵と寢入りしを尚ほ悶絶しぬと思ひしにや艶子は敏子の額に手を押し當て一種奇異なる聲を發して、

「艶子」アアー敏子さん……敏子さんマア……どうしたの敏子さん。

と驚かしぬる艶子の音聲に、敏子は徐ろに眼を開きて二つ三つ脣を動かせし後、

「敏子」オー貴孃は艶子さんですか。どうして……オー叔母さんも……妾はどうしたので御在ますか。さツきからうと〳〵と……いゝ心持に……だが大變にあつくツてアー……マア此處は何處で御在ませう……過刻鋭一がまゐりましてネエ……父も病氣がなほりましたと見えて……オヤ何處へ……たッた今迄……家嚴さま〳〵これは妙だよ……叔母さん……艶子さんも早く止めて下さいましよ、切角……オー鋭一、よくお出でだ……エ大集會の傍聽にわざ〳〵操さんが……さうかえ……操さん〳〵ホヽヽ、久松さんも御一所に……よく……ネ參政黨に御加盟なさるツてオー嬉しい、これで妾の希望も……ホヽヽ、愉快々々アー愉快だこんな愉快な事は、オー寒くなつた、アー寒い寒い〳〵、オー寒い、早くそこの障子を、どうして向島はこんなに、オー、寒い、アー鋭一がまた、運動會の歸りなのか、いつか久松さんと散歩し

た時に、あの時は白い筋のある中學校の帽子だつたが、スチュデント、學生は學生の爲めに、ホヽホヽ、相變らず、艶子さんが浮田、アノ浮田と云ふ人は……

敏子は何としぬるにやまるで精神患者のたはことの樣に、其言辭にあらはるゝ思想には少しも連環なく、彼を思ふかと見ればこれを云ひ、一座の人々面々相うかゞひて絕えて聲をなすものなく、瞳子は各々敏子に注ぎ唯頭を傾けて溜息をつくのみ。醫師さへに施すべき術なきにや同じく頭を傾け居れども、口には心配するには及ばじ、こは一時の發熱によるものぞと云ふ。政江は自己が姉の事なり、敏子が此さまを見るよりひた案じに案じて醫師と敏子の間に居たり立ちたり、唯氣をあせるのみ、役には立たず、艶子もどうかなと心をいたむる内に、病氣の爲めに無頓着に、非常に無頓着になりし敏子が今しも浮田の事をさへ云ひ出でぬるに、ハット思ひて止めんにも詮術なければ困じ果ててぞ居たりける。

櫻田の政江、艶子は云ふも更なり、人々の切なる介抱にて、さしも劇しかりし敏子の病勢も曉近き頃にはその幾分を減じて、自己は如何にしてかく病氣とはなりしぞ少しも覺えなき程なれば、定めて人々の手をとりつらん、櫻田の叔母從妹をさへ迎へられし一時の混雜は今更謝し奉るに辭なしなど、もの云ふ事は尋常にかはらぬ迄快方に赴きぬれども、少しにても體を、體の一部分にても動搖せば、俄かに目くるめきて頭も破れんばかりなりと云ふ。されば醫師も未だ動かす可からず、臥床を移す可からず、夕刻迄は此儘になし置き玉へ、其時の容體により兎も角も指圖すべしと語るに、人々は異存あるべくもあらねば、各々然る可しと答へて等閑ならず介抱するに、夕刻に到りても幸ひに發熱せず、醫師も今は心安し此處に此病人此神經の過敏なる病人を置かん事は良策にはあらざるべし、見る物聞く物其感情を發動するの媒となるべく、精神の激昂する處再び今曉の如く驚かされん、よろしく閑靜なる此病人に最も適當なる閑靜の家を選みて之を移すに如かざるべしと云ふ。政江は艶子と計りし後、唳鶴館にも閑靜にして此病人に恰當なる良室あるべしと雖も、もとこれ旅館の事にしあれば介抱何くれと不自由多からんと思へば、自己の後園に一亭の數奇屋あり、樹木鬱蒼として鳥語靜かに空氣の新鮮なるは云ふ迄もなく、自己等親子かはる〴〵に介抱りなば旅館に在るよりもマシならんと云ひ出づる親族の情誼は斯くこそと、誰か一人異議を唱へん、最も然るべしと同ずるにぞ、政江は一々醫師の許しを得て彼是と指圖し、漸くにして櫻田家の後園なる彼の四阿にうつして看病等閑ならずものしける。

山村の敏子が發病を聞くもの誰か愕き憐まざらんや。發病の夜俱樂部に詰め合せし參政黨員は云ふも更なり、朋友知己悉く驚歎せざるもなきが中に、久松の幹雄松山の操、操の感情はそもいかならん。操が此驚くべき、驚くべき恩人の發病せりと云ふ一報を聞き得しは、翌々日の事にて、櫻田家に在りと知りしも同日の事なり。なみ〳〵の朋友の病氣と聞いてさへ心安からず思ふは友情の常なるに、況して自己が曾て殆んど同樣の有樣に在りし時、世に難有き敏子が介抱ぶり、それにもまして嬉しかりしは中の島にての、斯く迄に恩義ある敏子が病氣と聞きゝて少時も猶豫すべき操ならず、直ちに久松がりへ赴きしに、久松も亦此事の爲めに操をさそひて同行なさんと今馬車を命じて乘移りし所なり。さらばとて操は久松とともに櫻田が驅付け、云々なりと申入るゝに、暫く待たせ玉へと退きし取次が再び出來りてイザ此方へと請ずるにぞ、久松と操は前後相從ひて延

かるゝまゝに節子が病室彼の後園の四阿に到り見れば、節子は清潔なる寢臺に臥して人待ち顔に襟を斜になし此方を見詰め居りし有付、あの活潑なる女丈夫がいかなれば病氣とは云ひながら、色蒼ざめ顔骨秀で常には臙脂をさせし艶なる桃の唇も、褪め果てし紫の如く、猶ほ平生にかはらず眼一層鋭く威ありて見ゆるはヤヽ長くして炯々光ある一雙の眼のみなり。今操と久松とが視線内最も近き距離、手をのばしなば届かん程になれる時、その哀れむべき容貌の内にニーッと笑を含みしさま、久松と操の眼には何とか見られし、宇宙の廣き憐むべく悲しむべきもの數限りあらざれど、斯くまでに悲情を發せしめしものゝ過去には更なり、未來にも又あるべしとは覺えず、操は實に女性の事なり、涙もろきは女性のつねなり・ハラ／＼と涙を落し、節子の手をとり節子の顔を見詰め、先づアアーッと聲を發し、

「操」マア節子さん、どうしてマア、妾は實に吃驚しましたよ。貴嬢の御病氣の事を承つた時には、陸軍、陸軍では妾もモウ實に勿體ない程お世話になつて居りますから、實に吃驚しましたが、それも漸々今日解つた位、の、櫻田さんの、此四阿に居らツしやる事も、もう少うして鹿鳴館に伺ふ所で御在ましたよ。なんだか、如何で御在ますネエ、今日はお快い方で御在ますの。「久松」イヤ節子さん、なんでもない事で、實に驚きました。しかし世間の評判程には御重體でもない様に見受けますが、御國の御熱心の先政者、關西の大集會も近日の様に承知致しますが、それ迄には御全快なさる様にしたいものです。マア何に致せ御養生が肝要ですなア。「節子」ハイ難有う御在ます。どうしたので御在ますか、一體家嚴が醫病で……其筋……其醫病の筋でもひいて居るものと見えまして……イエ難有う御在ます。唯殘念なのは大集會に……大集會の當日迄にはア！ア迚も快方にはなりますまい……唯殘念なのはこればかりで御在ます。それも是非ない譯で來年の國會の開會迄は……また其時になりましたらアーア……操さん、貴嬢も素より御女性の事ですから、女子參政……婦女一般の幸福を增進し得る女子參政の上に就ては……御異論も御在ますまいから、どうぞ其時になりましたら十分の御盡力をネエ、操さん、今からお願ひ申して置きますよ。

操は少時頭を垂れて考案しつゝありしが、思ひ切つたる様子にて氣の毒さうに、

「操」それはマア貴嬢の……何事でも異存は申さん積りで御在ますが、これはかりは……私權の爲めに一般婦女の利害に關する……政治上の主義はどうも……枉げる譯には參りません。「節子」それでは貴嬢は……ユー……ウーン……

第十六回

浮田壽雄は櫻田松山兩家の間におこりし、否な湯川横田の奸計におこりし兒戯に等しき訴訟事件も、一方から論ずれば無氣力にも卑屈にも、一諾は千金より重しと云ふ大丈夫の言行をひくにもあらねど、其事のよかれあしかれ一應は承知して置きながら、男らしくもなく小怜悧に立ちまはりて、横田の奸計云々なりと與子して千樹に告げさせし後、湯川が先輩の後悔より事茲に露見に及びし。浮田の爲めには奏功の事のみ。千樹は松山より掛合はるゝ以前に殊に正直一片らしき浮田の申狀を聞き居るから、唯何事も然るべく仲裁の勞を取りてよし横田が處分さへに委任されしかば、浮田は萬事萬端圖にあたり、横田には湯川の口より彼の事露見に及びし上松山よりの掛合嚴重くして皆く

訴すべきも計られねば、貴公の爲めに策を選まば姿を隠すこそ良策ならめ、善後の策は余に任せよと、恐嚇の語を用ひ、友愛の意を示し、先づ横田を退けなば湯川をはかるはいと安し、と浮田がはかる所十が十迄孔明楠公も斯くやありけんと思ふばかりに行はれし。松山との出入さへにいと都合よく運びしかば、浮田が上に集りし櫻田家の興望は佛國前内閣の陸軍卿なりしブーランゼー將軍も物かは、政江からの發議は忽ちに千樹の批准も濟み、行々は浮田をもて艶子の婿となすべし、先づ古風らしいが内祝言をなし置くこそと、艶子浮田にも其旨を通ずるに、兩人の意中は如何樣にて其答は何とかなせし、今茲にあらはさずも看官の推し玉はんは定なり。筆無精な作者めと咎め玉はずば幸なるかな。

斯くて秋の末にもなりぬれば、櫻田夫婦は艶子浮田の爲めに一夜の宴を張りて、極親しき人々のみを招き、内祝言の披露を爲すに、始終は知らず今宵のさまはいと愛度くぞ見ゆめる。艶子浮田の兩人は豫ての希望茲に漸く達しぬれば、今は誰に憚る事もいらず、妹と呼び夫とよばれ羨まるゝ程に交情もよく、こも兩親の淺からぬ恵みぞと艶子は嬉しくも樂しくも日を送るに、

冬の初めより浮田は時ありて家に歸らず、初めは僅かに一夜位の事なりしに、或は二日或は三日と其度數さへに增し行くにぞ、艶子はまことに氣が氣でなく、嫉妬の心は先づさし置き、父母の思はく如何ならんと何となく遠まはしに氣にさはらぬ樣諫を容るれば、浮田は何時もあやまり入り何某へ交際なれば、止むを得ず酒の上など如才もなく云ひくろむれば、そこは女ははかなきものにてサテはさうかと機嫌もなほり、却つて機嫌を取つても見る、これで少しは安心なりと思ふ間もなくて、またはじむる、また諫むれば、またあやまり、止むかと思へば、またそれる。艶子も今は堪へかねしや、二日ぶりにて歸り來り、直ちに自己の部屋に入りてボンヤリとなせし處へ、艶子は侍女の知らせによりて入り來り、少時は何にも云はず浮田の顔を見居たりしが、

「艶子」郎君よくお歸宅で御在ましたネエ。今日はマアどう云ふ風の吹きまはしで御在ませう。マアダなか／＼四五日はお歸宅もあるまいと、モウ御用はお濟みになりましたので御在ますか。アノー父上も……母上も……靑萍も若い身ではあり、それに乃公なぞのあの位な時とは時世も大層にかはつて、交際……其交際と云ふ事がます／＼頻繁になつたから、決して、マア例ひ一月が半月歸宅らん事があつても、八ケ間敷く云うてはならんぞ、成る丈け自由にさせて置くがよろしい、とよく妾に……よく妾に御意見なさいますから、ナニ妾も妾だツても良人のお多忙しい、御交際のお多忙しい事も能らく承知して居りますから、決してどうかう思ひます事も御在ませんのさ……良人の御遠慮なさらねばならぬ父母があア仰しやッてですからネエ良人……お召物もあちらのにおきかへ遊ばし……ては、ハンケチもどうで御在ます。昨日買つて置きました、新形模樣のも御在ますから……「浮田」どうもさう云はれては、艶子……ウウー艶子さん、どうも……我輩がモウどうも……重々我輩が……「艶子」マア貴郎、どう遊ばしたの。ナニモよいでは御在ませんか……父母があア仰しやるし、ナニモ良人、あなたの御自由で御在ますものを……お召を出しませうネエ……どれになさいます……先日仕立上げましたあのフロックコート……あれがよう御在ませう……ナニおいやで御在ますツて……おいやでは仕方が御在ませんが、隨分ガラもよしオペラ……浪

早オペラへお出でなさいますならあの服がよ
ら御在ますよ……今流行で御在ますから、
俳優……貴方が別して賞美するとか云ふ事
で御在ますから、なんなら……妾もお供致
しませうが良人どうで御在ますネエ。
艶子の今日の饒舌ぶり平生とはオッーかはり
て、浮田も答辯の仕方に苦しみ、艶子の顔を見
詰めたるのみ。艶子はさもこそと攻撃の論理を
組立てける所へ、侍女來りて母公の召させ玉
ふと告ぐるに序わるしと思ふものから、心殘
して奥へと行くめり。浮田は僅かに艶子が攻撃
を避け得て艶子が後影を見送り、
「浮田どうも恐入るぞ。細君……細君ほど五
月蠅いものは……イヤモウ飽々した。アーツ
ペコペとぬかされては、しかし妙なもので斯
う細君と極つて仕まつては何でもかでも萬事
萬端其處はオッー以前の様には行かぬ場合も
あるので……細君其物の氣位迄が以前の様
には……だが妙なものだ。あの嫉妬家が先づ
嫉妬は二の次にして、兩親の前が何だのかだ
のと妙にかばつて呉れる處が、こゝが不思議
だ……こゝが妙だ。夫婦……夫婦の情愛と
云ふものはこんなものか。へ、だが今日の様
にいやアにオッー變手古に攻撃されては……
いかに何だッて癇癪の蟲がグヾーッとこみあ
げて來るて、何んだ生意氣に養子……無財産
の養子……だと見くびつて……ハヽハヽ、が
見くびられても仕方がないぜー之だから……
これだから家に居たくないのだ。へンそこは
それ菊枝……どうも何ともかとも……アー
行きたい……エー行からか……だがあの驕
妻めが……またグヅ〳〵……ナアニ構ふも
のかエー……いッその腐れだ。一寸一走り此
の御面相をへ、菊枝に見せてやんべエかハ、
ハ、、。
以前の扮装にて着代へもせず、艶子が來らぬう
ちにこそと、コソ〳〵として出で行きける。
艶子は母に呼ばれしまゝ、何事にやと心ならずも
母の部屋へ行きて見れば、母は故ら機嫌げに
笑を含める眼の邊に艶子の身には何となう不安
心なる廉も見ゆめり。艶子は自己が上ならねど
所夫浮田が日頃の不身持、その事にやと胸先づ
轟き、親しき中にも何とやら、氣の毒さうに用事
如何にと會釋をなして伺ひけるに、母も艶子の
心のうちを察し遣りてや、これまた氣の毒さう
な顔付にて、浮田が上を云々と極く簡單に說き
示して、今の様にては親御の手前もあまりほめ
たはなしでなければ、母が言うては廉が立つ、折
を見合せそなたから些と意見をしやるがよい、
と思ふにたがは母の言葉に、艶子は何と答も
出でず、少時は緘口ににらみ合ひしが、ソリ
ヤ妾も言はぬではない、隨分云うても見まし
たなれど……併し實際の忙しい身の上、あまり
たび〳〵はと扣へましたが、また折を見て意見
も仕りませうと、母の前をば退きつゝ浮田が
部屋へ來り見れば主はもぬけし空蟬の、そら頼
みなる無常の仕打ち、艶子はハッと胸迫りグッ
ト差込む癪をおさへて、そのまゝ母へも語らず
馬車を命じてさす方は臨淵閣へと尋ね行く。
「菊枝」アノー夫では浮田さん……あの奥様が
……へーさうですか。いやアにネエ、それで
郎君は……それでそれが怖いッて、それでオ
ホヽヽ、女子參政なんと大變えらい黨員が出
來て山村敏子さんとか云ふ東京の女學士が出
掛けて來る位ですから、女だッて今の女は
隨分怖ろしい女もあるにはちがひありません
が、だッてもあんまりイクヂがなさすぎます
ネエ。それも細君……細君がそんなに……
郎君はほんたうにイクヂがなさすぎますよ。
それでも先日のお約束ネ、あれもどうせ氣休
め……妾を誑かす氣休めでせうから、どうせ
妾は……そりやネエ、浮田さん、どうせ妾な

んぞが……エーモウ實に口惜くツてモウ……「浮田」エどうせさう思つちやア……イヤモウ困るな、さう云ふ譯でないんだから、乃公の心を知らんでもなからう。　菊枝「さうですとも、それはよく……郎君の心は知つて居ますよ。それだから、郎君の心がそれだから……妾は誑されたかと思ふと實にモウ〳〵口惜くツて口惜くツてエーモウ浮田さん……　「浮田」ウゥー……どうも……エーさう言つちやア、ウゥー何も誑すの誑さないのツてそんなつまらない事を今更……あんまり馬鹿々々しいぢやないか……「菊枝」そりやアどうせ妾は馬鹿ですよ。どうせ斯んな商賣を……俳優風情ですから、それはどうして郎君の奥様の樣には……それはモウ艶子さんの樣には、あんな發明なお方と一所にはなりませんのさ。怖がつて居らツしやるのも御無理ではありませんよ。ですから妾はこれまで夢を見たと思つてあきらめますから、エ浮田さん……

と姫蔦のグットすねたる樣子、浮田の胸には如何にやまつはる看官宜敷く推すべし。

「浮田」今更そんな馬鹿な事を……夢と思つてあきらめるなんとそんな馬鹿な事が出來るものか。それだから先日約束した通り、ナ、それ、あアやつてあの家を……それもモウ少しの間だ、それを今になつてなんのかんのとつまらない事になつた日にやア千日の茅とやら……彼女を叩き出し、おまへをナ、それ、それだから、今少しの辛棒だ。ナニ……彼女なんぞが怖くツて斯んな狂言が出來るものか、あんまり馬鹿々々しくツてハヽヽハヽヽ。

と打笑ふ。折しも部屋の扉を押破る樣なすさまじき勢にて足音荒く飛込むものあり。

艶子は浮田が今日の仕方あまりと思へば口惜きまゝ前後の思慮を爲す間もなく、必ず此家とメボシを定め臨江閣へ馳せ付けしが、直ちに尋ねんも有繫なれば、そしらぬふりして一間に通り態と二三品の肴など命じやりつゝ、廊下を散步する樣にもてなし、此室か彼室と伺ひ見るに、今日は何としたるにや日頃繁昌たる臨江閣も僅かに二三組か四組かの客あるのみ。それさへ多くは男のみにて我が思ふ人は奈滿與美の甲斐なかりきと、力も拔け少時は其處にたゝずみしが、此處は二階の北の隅にて窓明りさへ十分ならぬ陰氣さうな小部屋の前なり。艶子が茫然たる鼓膜を打ちて聽神經に傳ふる一聲、いとなまめきて故ありげなり。再び驚かすは男子の聲にてまがふべくもあらぬその人なるにぞ、艶子はさてはと心の押引、先徐ろに開戸に手を掛け音せざる樣少しく開きていと迅速に視線を放つに、瞳子に窺りしは二人なり。その一人は云はずもあれ、女の方は年の頃廿歳ばかり、婦人でさへ心を奪はるゝ程の美人、曾て浪華オペラにて、また浮田がカクシより出でし寫眞にて、度々見覺えのある女俳優瀨川菊枝に相違なければ、艶子は今更の樣に胸躍り、直ぐにも躍り込まんと足先づ進るをヂット堪へて、涙のひまより耳を澄して聞居るに、聞くにも堪へぬ甘たるきさゝめ言さへ手に取る樣、後には自己が上までも傍若無人にさみせしのみか、果は逐出さん、彼の女、彼の女とは誰をか云ふ、偸りと云へば、エーモウこれまでなりと躍り込み、直ちに浮田の前に進みて直ぐにも飛掛らん勢たりしが、そこは有繫は教育なき女ならねば、二三步此方に足を止め顏は紅の樣にて呼吸迫り十分に憤怒を含み、且つウハヅリしすさまじき視線は光こそ放たね射らるゝ如く覺えし。浮田は唯ドッキを拔かれて言句も出でず、菊枝はそれと覺れるものから、一向平氣にて澄した顏付、態と冷笑を含みて秋波一轉に浮田を見遣り、

「菊枝」浮田さん、どうなすツたの、此女中を御存じですか。何か怖い事でも、ヒケメになる

偉な事でもあるのですか。何樣でアしませんわネ……モシおまへさんもそんなに怖い顏をしずとも、云ふ事があるなら何も遠慮はいらないやネ、さツさと云ふ丈の事を云つてお歸りなネ。便々として居られちやア浮田さんとの……ネエ浮田さん、積る話の邪魔になるからネ、ほんたうにグツ〱されちやアネエ、浮田さん……

艶子は菊枝が今の一言自己を知りてしか云ふか、將た知らずして云ふにもせよ、餘りと云へば無禮の限り今迄堪へし理性も破れて、一層の憤怒に嫉妬の念も燃立つばかり、誰、浮田さん郎君はモウ、と浮田が右の腕へ狂氣の如くしがみつき、涙の額を振上げて辭もなくに見上げたり。浮田は艶子がこの有樣有繫に不便にも無理ならずとは思ふものから、菊枝の手前面白からず、日頃にもなく活潑さうにグット癇癪の目を釣り上げ、艶子が腕を捻ぢ返し背向になるを撞き放せば、艶子は素よりかよわき女の、斯く殘酷なる手荒き處置に前にのめりて倒れしまゝ、起上るべき力もなく、聲を惜みて泣き入るのみ。浮田は何ほも勢鋭く、

「浮田」イヤ艶子、このざまは何だ……誰が許して此處へは來た。いかに世間を知らんと云つて、場所の辨別も知らんのか。エー馬鹿の女だ。「菊枝」エ艶子さん……あの艶子さん……それでは貴孃が奧樣で居らツしやいましたか。さうとはすこしも存じませず、先程よりモウ失禮な事ばかり素より知らぬ事で御在ますから、さぞ口惜いとも殘念とも思召したらうが、ネエ貴孃どうぞ御免遊ばして……マアさう遊ばして居らしツては、サアお起き遊ばせ、ほんたうに亂暴な殘酷事を、浮田さん郎君もあんまり……マア奧樣を斯んな事を……

「浮田」菊枝、さうして置け。ナニ起して遣る事が入るものか。そんな目に逢ふのも自業自得だ、實に馬鹿なやつだなア……菊枝、酒の醉も醒めてしまつた。これから貴樣の處へ行つて呑み直さう。そんなやつはほつて置け。サア行かう……「菊枝」マア郎君、一寸お待ちなさいよ……アノと奧樣今日は誠にモウお詑の致し樣も御在ません。旦那もあの通りに怒つて入らツしやいますから、今日は酒の上と御堪忍遊ばして、モウ御歸りなさいます方がよう御在ませう。旦那にはまた跡で及ばずながら妾からよく申上げませうから、今日は何事も御堪辨遊ばしてネエ。貴孃それではまことに失禮で御在ますが、妾はお先にお暇致しますから、まことに失禮を致しました。左樣なら御免遊ばせ……一寸旦那御待ちなさいよ。アラ浮田さん、お待ちなさいッたらサア……

瀬川菊枝はこれ見よがしに浮田の手を引き、片頰に笑みて出で行きたり。艶子が意中如何なりけん。思ひ遣るだにいたましき。

第十七回

蜃中樓の世界は昨日と過ぎ、今日と暮れ、冬去りて春來りぬれど、此世界の人々には新年と云うて別段要用の記事もなく、昨秋よりの成行を申せば、敏子は倶樂部の發病より、今尚ほ病床にありて態々浪華迄出張せし關西の大集會にも臨み難く、同志の姉妹の報道と新聞紙とにて僅かに其景樣を知り得しのみなるはいかに口惜くも殘念にも思ひつらん。されば病は愈々重り行きつゝ心身の自由ならぬに付けても、少時も胸を去りやらぬは參政權の成行、且つは都に在す父上の長病快き方なりとの知らせは鋭一より絶えず云ひおこせど、六十歳に餘る老衰の上なり、どんな變事があらうも知れず、鋭一の手紙も疑うて見れば安心さする爲め氣休めではなきか。アーア氣の揉める事ではある。併し勿體な

い事ではあるが、是も人生の自然と思へば萬一の悲哀は免れぬ業、あきらめるより仕方もなし。唯此身にかへてもやり遂げたきは、女子の參政、これとても世に反對多くて殊に：：久松の幹雄と松山の操、あのものゝ周旋調和も皆水泡に歸しけるよ。今此參政の問題に付きて、今春よりは別けてまた、現内閣の方針さへかにかくと、世に喧しくて、來る三月の國會には、女子參政案を提出すべしと云ふ。今は既に二月の初めなり。最早一月の間もあらじ、如何にもして其以前に全快はせざるも少しにても身體を動かす樣になり得て、今一回の演說をもなし、世人の注意をも：：反對黨の注意をも惹起さんず。それに付けても心憎きは操、幹雄の擧動なり。既に今朝の浪華タイムスにも久松が改進黨俱樂部にて爲せしと云ふ演說の傍聽筆記を讀みたるに、一言一句我黨の主義に反對せざるはなく、攻擊せざるはなし。妾が目よりして之を見れば、徹頭徹尾迂腐の論點なるのみに、萬一若しも斯る議論が世に勢力を得る事しあらば、ア：：ア我邦人智の進步尚ほ斯く淺間しき地位に止りつゝあるか、歎くべく憾むべし。嗚呼參政權よ：：と、日々病床にありて此一事をのみ寢ても寤めても夢にも現にも獨語つめり。

久松の幹雄と松山の操とは、かの舞踏會前後の行違ひより殆んど五六週の間は既に看官にも知られし如き不幸の境遇にありしが、世に友情ある德子が計ひにて、中の島公園の再會より以前にもいやまして交情親密に成行き、秋の末にやありけん、久松の方より人して松山がり操を貰ひ受けたきよし言入れしに、壯年ながらも久松の名望改進黨は云はずもあれ、世の覺え愈々目出度きにぞ、松山凌雲夫婦も願うてもなき緣談と思へば、相談滯る節もなく、來春の二三月にもなりなば、輿入すべしとまでに調ひぬ。操が心には待遠しくし思ひつらんに、その年も暮れて翌年の一月初めにもなりしかば、何くれと其準備に身體が二つ三つ欲しくも思ふなるべし。久松は國會の開會も早や近づきぬ。豫てより噂高き女子の參政案が現内閣より提出さるべしと云ふにぞ、斯る急激不法の議論が今日に行はるゝと云ふは國の爲め人の爲めにいと慨歎しく思ふから故に、演說會を開き、或は某の宴會に於ても、自己が主義を吐露して國會の議場に於てかの急激不法の議論が勢力を得ざらん樣にこもまたいといそがしく日を送りぬ。

浮田と艷子との上は略看官もその有樣を知り玉はんが、其後も以前の有樣を繼續し兩人が間は日に冷淡と或熱度とを伴ひ行きぬ。

斯りし程に女子參政の問題は愈々社會に其勢力を得ると共に、反對の攻擊も愈々烈しく、中原の鹿誰が手に落つるやは國會開會の上ならねば豫言し得べくもあらぬものから、女子參政黨員等は種々雜多の方便を設けて、下等社會の婦人等に迄、下等社會の男子が選擧權を得たりし當時の熱心と結果とを說き、男と女とは身體の構造にこそ少しの違ひはあれ、其權利に於ては相違あるべくもあらず、おん身等姉妹が日々夫の壓制を受けてどうかすると忽ちに打ち叩かるゝ、男に女を打つてもよいと云ふ途方もない殘酷な權利を、天から許されたものであらうか、イヤ〳〵決してそんな譯があるものではない、天はそんな橫暴をする筈はない、これは東洋殊に日本なぞに於て、女には七去三從など云ふ馬鹿々々しい義務を無理に負はせたので、素より正當の理由がないので、女も男同樣に男がする程の義務は社會に對して立派に盡して居るのぢや、男に兵役と云ふ事があれば女には產と云ふ大役がある、して見れば差引甲乙のない筈、それをかやうに壓制されて居るのはあまり氣の利かぬ話ではないか、これは女の方

に十分の理窟があるからして、おんみ等姉妹も共に心を合して、先づ政治上の權利を取返してはどうであらう、イヤ是非共取返さねばならぬものぢや、と演說會を開き、或は公園などに集めて、俚耳に入り易き樣說聞かするにぞ、女子參政の問題は裏店社會に迄もすさまじき勢力を得る事とはなりぬ。

大阪の日本橋筋に長町裏と云へるあり。今の東京で申さば下谷の豐住町の裏町の樣に貧乏人の巢窟とも云ふべく、昔から、淨瑠璃本に隨分引合ひにも出で、彼の阿波の十郎兵衛なども此地に身を潛めて居りしとの事なり。されば貧乏人ばかりでなく邪惡非道の兇漢共が隱家多く、其家居のさまの如きも、市區改正ありし後は以前より町筋碁盤の目の樣なりし大阪の事ゆゑ、隨分斯る隅々までも家屋の改良行屆き、二三十年前に比較すれば雲泥霄壤の相違あるべけれど、よく〳〵貧乏人と兇漢とに契緣深き土地と見え、住居へる者共は今尙以前の有樣を繼續しつゝあるは、淺間しき限りなりけり。殆んど其中心とも云ふべき處へ、大阪にては珍らしき程の清水湧き出づる井戶あり。(尤も水道も引きありて飮水改良も十分行屆き居れども、)凡そ方二町許りが間の人々は此井戶に付いて用をたす事なるが、丁度午後四時頃でもあらうか、年は三十許りのブラ〳〵せしおかみさん、身幅も狹くゆき丈も短き隨分年數を喰つた洋服を穿ち、日本在來りの洗濯盥に二三枚の着物を入れたるを抱へ、ドタバダと家鴨の駈足と云ふ見得にて、件の井戶端に盥を卸せば其以前よりこれもまた同じく洗濯にでも來たものと見え、あやしげなる古布子に言譯程の帶をしめし六十四五の婆樣、今來りしおかみさんと顏見合せ、皺に不足もなき皺が尙ほ一萬筋もふえさうに、齒齦を現はしてゲタ〳〵と何かうれしさうに笑ひて、

「婆樣」オヤマア横町のお神さん、よくお精が出るネ……アノ洗濯、さうかえ、妾ん家の爺樣なんぞもモウ止せばいイのに相替らずの左ぎきで實に困るよ。コレ御覽な、こんねえに泥ツぼツけにしてさ、年げえがねエにも……モウ呆れ切つてものが云はれねエやな、おめエんとこの熊さんなんざア若くツて働きがあると云ふ稼ぎもんだから、アーア爺樣の正覺坊にもモウクサ〳〵するによ。「お神さん」オホオホヽ、またをばさんの愚癡らしい、何だネエ、叔父さんの樣な人の能い佛さまの樣な人アねエッて皆が賞めねエものはねエよ……をばさんの前だがネエ、モウうちの愚圖兒、にもモウ〳〵ほんたうにモウほッとするよ。叔母さん、聞いてお吳れよ、先日も先日で、マアかうさ。川口の會社だとか何だとかに建築があるから熊にも來て吳んねエかッて親方から云つて來たもんだから、わたいも親方を怒らしちやア仕方がねエし、それに右團扇で土鍋の下もばた〳〵とやる事も出來ねエ、今日此頃の樣ぢやア仕方がねエからと思つて、朝四時頃に飛起きてモゥ食つて行く許りにちやアんとしといて熊さんを起したんだアネエ、所がかうさ、今朝、おれやア腹が痛エと云ふかさ。叔母さん、おめエのめエだがネ、おめエあの體でお腹が痛エもねエぢやアねエかネ、又十八番だと思つたけども何と云つたツて稼人だから仕方がねエと、我慢をして遊ばせ言葉で漸とお起なつたは能いがネ、飯一杯かッこむのに三十分もかゝるだらうぢやネエかネ、今時の卅年者にどうだらう。おめエこんな野呂間がありやアしたいやネ。妾だッてさう〳〵は蟲が承知しねエから、一つ劒呑を……亭主に劒呑を食はせるツて事アよくねエと知らねエぢやねエが、おめエさん二言三言口を出したと思ひなせエ、スルトからさ直

きに十八番で手を擧げるのさ。妾だッて擲られちやア詰らねエから隣家の八さんの處へ逃げてツて斯う〳〵だと話をすると八さんも宿六とは兄弟同樣の中だから、そりや熊さんの仕方が惡いてツてどうか斯うか宿六を出しちまつて妾もあんまりクサ〳〵するから構ア事アねエ、やッつけろと思つて冷酒をあふりつけてお晝過まで大の字なりさ。ハヽハ、マアをばさん、聞いてお呉れよ。大の字なりに寢ツちまふと、能い心持に寢ッちまふと、オイオイと起す奴があるのさ。何奴だらう五月蠅エ奴だと思ひながら目を明けるとサア大變だらうぢやアないかネ。熊さんの來やうが遲いとツて親方が自分で呼びに來なすツたのさ。妾も斯う〳〵だッて親方にぶちまけようと思つたがネ、あんな馬鹿な野郎でも、ナニ構ふものかネ、亭主だッて何だッて野郎に違エねエから野郎呼ばはりをしたッても……マア聞いてお呉れよ。マアあんな野郎でも亭主だと思やアネエ、ホヽホヽ、それこそは妙だよ。惡い事は人樣に聞かしたくねエと思つて、どうか斯うか親方を誤魔化しちまつてマア野呂野郎はどうしたのかと思つてる所エ、ノッソリとお歸り遊ばしたのサ。妾も此處だと思つたからたまらネエ。どうだからだッて云ふ内に手を擧げやがるから、妾だッて承知しねエでたにもおめエが惡くッて人を擲る事アなからうッて武者振つくと、サン〳〵にたぐられツちまつて其上で出て行けと拔かしやがるつさ。妾だッて……女だッてベランメエてツて、此間、それ、をばさん、おまへもお出でだらう、眞田山で聞いたツけ、それ熨斗三錢ツてエのを持出して、野郎をサン〳〵にやッつけてやつたが、野郎殿はわからねエもんだから、野郎殿の方で泣寐入りさ。それからッてエもたア、なんでも構はねエで、三錢々々でやッつけるんだが、野郎なんて實に意氣地のねエもんだアネエ、ホヽホヽ、うちの三錢野郎……人玉野郎は何處をフハ〳〵と飛びまはつてるのかしらん……

と言葉の切れざるに、蠑螺の樣なゲンコツ飛來つてお神さんの橫ツ面をクヮーンと云ふ程叩付けたり。

今お神さんの橫ツ面をクヮーンと云ふ程たぐり付けしは何人ぞ。年の頃三十四五なる勇肌の男、尤も勇肌と云うても鳶の者とも見えねば職人らしうも見えず。お神さんがお婆さんへの話によれば大工職の樣にも思はるゝが、女房にまで斯程に讒訴さるゝ遊びくづした體つき、先づ俗に遊び人と云ふ容體、二三十年も前ならんには七五三の素袷に八反の三尺とゆきたい處を、鼠色になりしシャツの上に、何れ二三度は店頭にブラリッと引掛りしをブラリッと先生ブラリッと見付けたものらしきコヒ茶色のチョッキを穿ち、ズボンはお倉に……御自分のお倉にチャーンと仕舞つてあると申せば誠に人前のよき言分たれども、先づ早速のお間にはどうであらうか。シャツと似つこらしき色合なるズボンしたを極くゆッたりとはき、靴の裡のみを殘して踵の革は切り放ちたるを引ずり、面付をいかにと見れば目はキリヽとして苦み走り、浮氣な矢場女などには隨分大さわぎやらるゝたちにて、どうもお神さんと比べては方々へ夜遊び日遊びをした處がそれを怒るのはお神さんの方が無理ぢやと此界隈にての專ら評判、しやう事なしの野合夫婦。これまでは隨分辛棒もしたが啖と嗅とは何とやら、今日此頃はよく〳〵厭氣になつた處へ先程よりの山の神の讒訴を立聞きをせし事故、素より氣早の熊兄、此鐵拳が承知しねエとゲンコツが五六尺も先へ飛出し嚊殿の橫ツ面へ會釋もなくぶッつかり、直樣頭より三尺程も飛上り、武松もどきにグッ

と睨めばあはれなるかな嬶殿には、横ッ倒しにすべつてころんで容易に起き上れさうになかりしが、其處は長町きッての女武者、可愛亭主の熊さんと、見るより倏ち二つ三つもがいて立上り、玉ちる涙ハアッラハアッラとは少しく景容が上等すぎるが、エー口惜い何のイキに宿六めと、鳥狗爺の一丈青と云ふ見得に飛掛るを熊公ヒラリッと身をかはし、ハズミをうたして腰のつがひを足を飛してツンーンと蹴る。嬶殿も左る者なるにぞ、泳ぎながらも踏みとまらんと、腰のあたりに力やいりけん、却つて横さまに一捻りよれて流シの上にドッサリと、三つ四つまろびて片面溝へ打込んだり。熊公はエーやッつけろと云ふ氣となりしか再び足を擧げて踏まんとなすを、先程より唯大變々々と叫びし婆様が、一生懸命の急聲に八公忽ちに飛んで馳せつけ、熊公を羽がひぜめに抱きすくめ、

「八公」トヤ熊公、何をするんだ……待ちねエッたら、待ちねエ……何だ、マアどうしたんだ……箆棒、その上を踏んでたまるもんか……エー待ちねエ……待たねエのか……夫婦喧嘩も場所によらア……往來……往來中ぢやアねエか、見ッともねエや……マアいイッてば、いイやな、おれに……マアおれにまかしねエな……ナニお神さんが手前ん事を三錢……三錢野郎ッて……いイや、マア待ちねエ、三錢野郎……そりやお神さん……おめエの言分も賞められねエぜ……

八公が熊公をとゞむる間に、婆様と寄集ひし人の扶助により、漸と起き上りし嬶殿の御面相、額の眞中には、溝泥が一大隊ほど屯をなし、御大將と見奉るは中心の處にすりむきしにや、鼻尖が緋威の御冑らしく遙かに見ゆるなりけり。四方八方は一面の地雷火、血の樣なる火の子をプッ／＼と吹上げるありさま、束髮はほどけて散ばら髮になり、おどろ／＼しくなり、冠りたる土橋の累でさへ歩を打ちさうなりとは隨分恐怖しきお神さんならずや。そが上オー／＼とすゝり泣きに泣きながら、

「お神さん」オー／＼口惜い／＼、オー／＼皆さん放してお呉んなさいよ……オー此野郎めどうしやがるんだ。殺すなら、オー／＼サア、オー／＼殺せーッ……八さん……なんですと、妾が惡い……アーどうせ妾は惡っ御在ますよ。そりやおめエさんとこのお神さんにはハイ……あんなお神さんは大阪中さがしたッて……オー／＼……どうしてそりやア……おめエんとこなんぞも熨斗三錢の方だから、アー三錢の方だから……三錢野郎の肩を……

「熊公」なんだ、まだそんな事を抜かしやアがるか、此阿魔め……

「八公」マアいイやな熊公、マアおれに任しねエッてば……女が……マアいイやな、マア血の道のおこつたのと同樣だから……

「お神さん」なんだとエ、八さん血の道……妾が血の道がおこつてる。ヘンおめエんとこのお神さんぢやアあるめエし。ハイあなた方の奥樣は以前は上つ方の、ハイお姫さまで入らッしやるから、どうかすると血の道、血の道でお出遊ばすから、ハイ……何うも男に疝氣が……疝氣（これも女子參政員の演說を聞き、女子參政を熨斗三錢と聞違へしと同じく、選擧權の選擧をセンキと誤れるなるべし）がある……持つて居るからとッて、ヘン何もそんなにいばりでない。ヘンいまに疝氣を……女だッて疝氣がねエ事がねエ、もとッから女にも疝氣はあるものだッて……疝氣は持つてるものだッて……いまに其疝氣をとつてやるから見やアがれ……

「八公」ワハヽ、こりやア大笑ェだ、アハヽ、アハヽ、疝氣を取る……疝氣を持つてるアハヽ、ハヽヽ。

「熊公」此血の道阿魔アめ、何よ抜かしやがるんだ。ベランメエ。疝氣をとるなんて何を抜か

しやがるんだ。此氣違阿魔アめ。
氣違阿魔と云へる一言にお神さんはいよ〳〵やつきとなり、又もや武者振りつかんとなす折しも、遙かに警官の巡り來るを見て、見付けられては面倒なりと、八公夫婦の盡力にて漸と此場を治めしとぞ。

第十八回

此十数日は政治家にとりてはいと貴重なる日子なりしに、二月は既に萃れぬ。三月は議院開かれぬべき月なるにぞ、一月の末二月の初めごろよりは、議事傍聽の爲めにとて、苟くも政治思想を有ち紳士なんど呼ばるゝ人々は皆々東京に集る事にて、彼の久松幹雄も松山の操を伴ひ都に遊ぶ筈なりしも、婚期已に近づきて、三月の廿五日と云ふに、其準備のいそがはしけれぱ、操を同行すべしとの事を止めて久松は既に二月の末つかた大阪を立ちて東京に赴きぬ。其出立の折にも櫻田がりへ立寄りて、敏子の病氣を見舞ひつ。且つは都に赴き候が御手紙にても託されずや、何なりとも用事におはさば遠慮なう命されよ。令尊に御傳言はおはさずや、など申し試みにけれども、敏子は以前と違ひて遠慮勝の性質と變りしにや、虚心平氣なる久松には別段感覺も發らざれども、傍に侍りし侍使はどうも少うし御様子が變つて居ると思ひたるも無理ならず。敏子は久松の問に對して唯ハイと答へ、難有しとするのみ、時々口のほとりにてニッと笑ふが僅かばかりの愛嬌とはなるめり。久松は別段用事なきものと思ひ取り、國の爲めに自愛し玉へと別を告げ、其翌日東京へ出立せしとなん。敏子は議院開會の以前に一場の演説をなし、參政黨の主義を發揮し、一般政治家の注意を促し、反對論者へ駁撃を試みんと思ひしも、尚ほ病魔のつきまつはりて漸く二三日以前より僅かに庭中の小部分を散歩し得るがやう〳〵なれば、氣は愈々いらつばかりにて、又もや病氣がぶりかへしはせぬかと叔母なる政江が氣を揉むも理とぞ見えける。

敏子は今朝しも配達し來れる一二の新聞紙を讀み行くに、故らに二號活字をもて看官の注意を求めし一項あり。敏子は逸早く之を認めて、

○女子參政案　昨日午後東京發
女子參政案は本日の議場に提出されたり。
同議案は内閣諸公等が非常の熱心を示すにも拘はらず反對多く議論沸くが如し。

敏子は莞爾と眉を開きしが、又忽ちに八字を寄せ、

「敏子」アー愈々……愈々參政案も提出された……か、アーア漸くの事でこゝまでは運んだが……是非斯うならなければならん。斯うなるのが正理公道で有るから、必ず下院を經過するであらう。下院さへ經過すれば上院……上院には賛成者が多数だから大丈夫だとは思ふけれ共、併し下院昨日の電報で見ると、下院にて隨分反對者も。議事の模様は何うであるか……アーア傍聽がしたい。病氣……マア何うした因果でこんな病氣に罹るのだらう。是さへなければ……アーア東京に歸りたい。議事の模様を……委細の様子は東京の幹事から通知がある筈ではあるが……アーア靴を隔てゝ痒きを掻く……アー傍聽がしたい……アーア……エナニ示威會……

敏子が視線の思はずも次の項に移りしとき、瞳子に映ぜしは示威會の三字なり。敏子は何事にやと讀去るに、

○眞田山の示威會。女子參政の問題は日に増し勢力を得て、昨冬頃より裏店社會の劣等婦人に迄も其影響を及ぼし、殊に惡漢の巣窟と聞えし長町裏に住居せる下等女子等の間には穏かならぬ風説さへ行はれ、是等は畢竟女子參政と云ふ事も權利平等と云ふ事も辨

知せるものならねど、彼の女子參政黨の貴夫人令孃たちが種々の方便を設けて是等無智盲昧の劣等の女子等に遊說教唆に等しき演說をされしに因るといふ。さるほどに議院も既に開會し、女子參政案も提出さるべしと云ふ風聞と共に、該議案に反對者頗る多く、偖今議院に提出さるゝも容易に經過すまじきとの噂あるにぞ、一は同議案の提出を促し一は反對論者を恐嚇たさんとにや、昨朝午前四時頃より何者か首稱せしとも尙ほ未だ知り得べからざれど、何處よりとも知らず、午前八時頃には無慮一萬五千人程の下等女子等思ひ思ひの扮して眞田山へと蝟集せり。中には參政黨の貴婦人たちもたちまじりしとも聞え穩かならぬ演說を爲すものあり。數十本の旗には種々寓意ある狂畫を寫し、女子參政に反對せる諸政治家の肖像をかつぎ來りて、之を縛し、之を罵り、之を撃ち、遂には之を打碎きしが、其内には當府の名士久松幹雄君の肖像にも同樣の無禮を加へしと云ふ。正午十二時頃には益々增加して二萬人にも超ゆる大勢となり、三回の鯨波を發し、權利平等女子參政萬歲など書せし旗を眞先に推立て、當府廳を目懸けて推來るにぞ、各警察署は署を空しくして警官を繰出し、衛陣を込みしも、其手際に及ばざれば鎭臺に照會して鎭臺兵を繰り出し午後六時頃に至りて僅かに解散せしむるを得たり。重立ちし婦人等三十名許り拘引されしよしなるが、其内には隨分有名なる婦人もありと傳ふれども、其姓名は昨夜當新聞を印刷に附する頃には未だ聞く事を得ざりし。尙ほ探訪を怠らずして看官諸君に報道すべし。

敏子は件の示威會の記事を讀終りて憂ふるが如く眉を寄せ、

「敏子」エーそれでは……愈々示威會を催したのか。斯う云ふ事のない樣にあれほど榮姉妹を戒めておいたに……アーアしまつた事をする人達だ。劣等の婦女子には同じ演說をして聞かせるにもよく〳〵注意をせぬと妙に聞き違へて輕躁過激に流れ安いから……それであれほど戒めておいたのに……此記事によりて察すれば……參政黨の貴婦人たちもたちまじり……どうも斯う云ふ事がある筈ではないが、併し全く無根の事を書きはしまい。隨分我黨員にも……貴婦人の内にも過激な方がないとも云はれぬから……アー惜い事をした。此爲めに却つて世人の嫌惡を招きはしまいか……アー此新聞……新聞さへ賣らなければ如何なる手段を用ひてなりとも、買ふ事はさせまいに、東京を出立したとき汽車の中で乘合の人の評判もあり……谷川さんからも粗暴な手段を取らない樣にと色々忠告を受けたが、其時は……其時はまさかこんな成行にもなるまいと思つたが、アーア今更取返しも出來ないけれども……今日は誰か來られようから十分忠告をして、以來斯んな事のない樣にしたいものだ……アーア益々氣が鬱しる樣だ。庭にでも出て見ようか……今日は風もない樣だから、あの木の蔭に行つて、アーさうしよう……

敏子は徐かに病床をはなれ庭前の彼岸櫻の下蔭に安置しある寢椅子にかゝり、薄紅に色つきし梢頭の蕾を見上げ、ホーッと太く呼吸をつき、少時氣息を調へし後、再び新聞紙を讀み行くに、敏子は非常の感動を與ふる一項やありけん、例のキレ長き目をハッと見開きぬ。こは他ならず松山操が或席上に於てなせし演說の傍聽筆記なりけり。敏子は初め二三行は默讀なせしが、其讀聲は漸く高まりぬ。

（……若しかやうにして宇内の女子が政治に參與するに至りましたならば、其弊害はどう

でありませうか……唯國の繁榮を妨け人の智識を害ふ許りで御在ませう。（ヒヤ〳〵ノー〳〵ノーの聲盛んに起る）諸君教育なく志操なき多數の人に、投票權を有せしむる事の失策なることは今更喋々するにも及びません。然るに天下の政治家が自ら進んで亂雜なる人民に迄此特權を與へようと致すのは、妾は其理由を見出す事が出來ません。抑も政權なるものは各投票人が所有せる賭金に相當して配當さるゝが一定不偏の道理であるのに、近來は我國は素より歐米各國皆此眞理を蔑視して顧みず、貨財智力共に其國に對して重大の責任を負うて居るものも投票の時になりては毫も曖昧無智の裏店社會の下等人民に異りません。これは丁度貧富賢愚を均一にする樣な外觀があるので世人はこれを賞贊して自由と申しますのは、實に誤謬の甚しいものと考へます。今日現内閣即ち保守黨の諸公が女子を政權に參與させようと云ふ主意は、蓋し女子は通常宗教に心醉して變化を好まず、古法に染みて容易に動搖致しませんから、至極自黨の主義を擴張するに便利なるので御在ませう。（謹聽〳〵）先に職工仲間が投票權を得た先例もありますから、其道理上得失をも問はず、唯政黨の策略で以て女子を政海に突入せしむる事も決して難い事ではありますまいが、この樣な苟且姑息唯機に乘ずる政略は近年特に專ら我國の政治社會に行はるゝ處であります。（謹聽〳〵）諸君本年の國會に提出されし女子參政案は先づ實産を有する女子のみに投票權を得せしめようと云ふので御在ますが、この實産を所持するもののみに限るとの制は、果して豫想の如くに行はれませうか、先年無産の男子が政權を得たのを口實として此先例に倣はん事を要求する無産女子等が囂々として止むべからざるは、瞭然として明かで御在ませう。（謹聽〳〵）諸君、職に適ふもの衆に擢んず、とは代議政體の大原旨の一であつて、共和國は勿論君主政體の國に於ても重要なる原則であるが、今日の有樣では所謂職に適ふものも烏合の衆に多數を制せられて其技倆を逞うする事が出來ません。（ノーノーの聲殆どヒヤ〳〵を壓す）諸君、妾も女子の一人で御在ますから、女子參政と云ふ事は一箇人の上から申せば希望せぬでは御在ません。併し社會一般の公益を考へますから、斯の如き女子に不適當の演説も致すので御在ます。諸君、婦女子をして政海に入る事を得せしむるも何の益が御在ませう。但ま前車の覆轍を踏むのみ。智識の劣等なるが上に血の道にて情操の變じ易い人種を加へるの恐れがある許りで御在ませう。（ヒヤ〳〵ノー〳〵の聲交も起る）かやうに申せば女子參政熱心の諸君、或は保守黨の諸彥は、否々決して其恐れなし、余輩は唯實産を所持して投票權を利用するの資格あるの女子をして其特權を有せしむるものなりと申さるゝで有りませうが、既に前にも論破せし通り實産云々の制限を今日の政治世界に維持する事が出來ませうか。一旦苟くも女子をして政權に參與せしむるならば、最下等の女子をも參與せしむるの覺悟がなければなりますまい。現にうら店の熊八が學者と同じく投票權を有する事であれば、門付けにあるく新内語りの浮氣ッぽい女戶主も、又資産ある貴婦人と同じく其特權を有さないと云ふ理由はありますまい。（謹聽〳〵）故に資産云々の制限は其發表せらると共に、不平不法と罵られて自然消滅しなければなりません。アー何ぞ其論旨の薄弱なるや。（喝采）

敏子は少しく讀み勞れし樣にて、少時は新聞紙を傍に置くめり。敏子はこれまでとても操の演

象の樣なる攻撃に會ひし事なきにあらねど、操の演說なりと思へば別して不快の感情を惹起しけるにや、眉と目と口のほとりに形容も出來ざる程不滿の色を現はし、再び新聞紙を讀初めぬ。

……諸君、女子の男子に劣れる事は特り身體の上ばかりではありませぬ。智術道德の上にも亦懸隔があります。女子は概ね正理公道の何物たるを精究しない風が御在ます。又己れに餘り必要でないからして自主自由を人に與ふる考へも薄い樣に思はれます。且つ近頃の政治を觀ますのに、人の自由を掣肘する煩雜なる法令が增加した樣な傾があります。然るに若し女子をして政權に參與せしめたならば、この類の法令が愈々增加する事で御在ませう。抑も國民の道德と云ふものは議院がどうかしようと云ふ事の出來難きは何人も了知する處で御在ますが、女子は必ず議院の法令を以て國民の道德を鼓舞する樣な干涉、極つて專制に類する擧動をなすは、必然でありませう。（喝采）況や血の道になやんで逆上せる時の如きは如何なる法令を設けるかも計られません。概して女子は男子より橫暴自恣の念に富む事はユメ忘るべからざる處であります。（喝采）レナン氏の著書の中にも申してある事があります。昔羅馬の滅亡したのは耶蘇宗の婦女子をして男子と同樣の事務を執らしめた爲めに、男子は雄勇信神の氣象を失うた事が與つて大に力ありしと云ふ事であります。勿論多數平均の上から論ずる時には、男子の道德智者が必ずしも女子に優るとも云はれませぬが、甚だ尊重すべき性格が男子ばかりにあつて女子にはこれを缺く事が多う御在ます。それは他でもありません。即ち寬容大度と事物の判斷に沈着なる事等であります。（謹聽）アレキサンドル・ジューマ氏は現に幸福を享有せる女子は投票の事なぞに狂奔せざるべしと申されましたが、妾が思ひますには高名顯著なる女子も亦さうであらうと存じます。何故と申せば、これらの貴婦人たちは假令投票權を有さなくとも十分他人を頤使して己の意の如くになす程の勢力があるからで有ります。斯樣に論じて見ましたならば、女子で以て投票權を望む人々は唯妬婦か、婢婦か、さなくば無學にして不幸に遭遇せる女子達で有りませう。（ヒヤ〳〵ノー〳〵の聲湧くが如く起る）諸君斯くの如き人々を政治世界に入らしむればとて、空想と柔弱と血の道騷ぎのほかまた何の利益を持來さうか。妾には何も他の利益を見出す事が出來ません。（ノー〳〵ヒヤ〳〵）諸君、特に不幸なる女子なればこそ男子を親愛すべけれ、不幸なる女子は唯男子を睥睨する許りで有らうと思ひます。故に投票權を其手に委ねれば、自主自由の眞面目をも害する程の事に立ち至るは必然であります。況して今日の有樣の樣に女子をして男子の配下にあらしむるも、政治の運轉美妙にして著しき大過がないではありませんか。（ヒヤ〳〵ノー〳〵）然るを一朝政治上に男女の同權を許したならば、其結果はどうなりませうか。唯國の繁榮を妨げ、人の智識を害ふばかりであります。（ヒヤヒヤノー〳〵）諸君の中にはそのくせに自己の權利を伸張しようとはせず却つて男子の肩を持ち、女權を駁撃するのは女子にして女子にあらずなど批判する方々もありませうが、妾も女權の張らざるべからざるは希望しないではない。人なみ勝れて希望する方で御在ますが、唯政治上の一點に付いては雷同する事が出來ません。今日此不幸なる演說を致す妾の心の中のせつなさは如何許りでありませうか、妾は諸君の公平なる判斷あらん事

を熱望致します。

敏子が件の演說を讀去る音聲は、怒るが如く激するが如く、或は高く或は低く、果ては新聞紙を披き裂かんずるほどすさまじく激昂せし折、突然傍らより驚かすは彼の櫻田の艶子なり。艶子の今日の顔付いとゞ腫れぼツたい目が一層腫れ上りたるのみならず、眼球赤うなる程に充血し、髪毛はら〳〵ふりかゝる程に亂れし容體、どこから見てもたゞ事とは思はれず。故らに敏子に對ひて笑顔を粧ひぬれども、雨中の海棠か、但しは鉢前に立てる斷腸花の趣きありて、色好みの豆男に見せなば、アアーッと腰を抜かしさうなり。敏子は今しもウヤムヤせし折から、其儘に慰めざるも禮なしと思へば、勉めて艶子に對ひ、

「敏子」艶子さん、マアどうなすツたですか。ただならぬお顔色ですが……「艶子」エ　妾で御在ますか、妾はモウモウ……妾は生きて居る氣は御在ません。今更後悔したツて……アーア男ほど……敏子さん、貴孃の前で斯んな事を申しますのは、まことにお慚羞しい事ですが、妾はモウ生きて居る氣は御在ません……イエさう云つて下さるのは實に難有う御在ますが……ナニ妾だツても、唯この儘には死にたくありません。それだけの……それだけの怨恨は屹度かへして……屹度かへした上でなければ……妾にばかりでなく、父母にまで難儀を懸けようとする人……アーアこれと云ふのもみんな妾の不品行から親に迄難儀を懸けると思へば……イエ妾はモウ決心をいたしましたから……それに付いても貴孃に願つて置きますのは、あの……あの年の老つた兩親の事……敏子さん、これは妾の一生の御願で御在ますから……ネエ敏子さん、これ許りは御願申して置きますよ……

艶子は敏子が意見も耳に入らぬと見え、唯むせかへりて從ふべくもあらぬにぞ、敏子も殆んど困じ果てぬ。

第十九回

女子參政案即ち資産を有せる女子に投票權を與ふべしとの議案は、議院に於て非常の勢力を得第一の讀會は反對者あるにも拘はらず十と三との割合を以て經過し、第二讀會を開くに當り、最早第三讀會の討議を要せず、直ちに確定決議と爲すべしとの動議を提出する議員あるに到りしが、反對黨の名士某博士が此議案たる極めて重大の關係あるものなれば、其決議は鄭重に鄭重を加へざるべからざれば、次の月曜日迄其決議を猶豫すべしとの議に贊成者多くして、終に猶豫說に決しぬ。さる程に女子參政案の運命を開くと否とは、次の月曜日に差迫りし事故、女子參政黨は勿論、反對黨の諸名士等さながら狂奔せるが如く、所々に演說會を開き、或は示威會等を催し種々の方便を設けて自黨を利し、他黨を傷けんとし、騷擾云ふばかりなし。

山村敏子は、尙ほ平癒せしにあらねど、女子參政の運命既に斯の如くなれば、自ら心に張合も出で、日々東京よりの電報を披見して殆んど病苦も忘るゝ許りなり。然はあれど俱樂部より傳達する時間さへも待遠くて、心いらてば病を推して俱樂部に到り、同黨姉妹と周旋しつゝありぬ。斯くて或日の事なりしが、東京より電報來りぬとて、櫻田の叔母より持たせおこしぬるにぞ、何事にやと封推切りて讀取りし敏子の面色忽ち蒼くなりてブル〳〵と振へ、目は見張りしのみにて瞳子すわり、手に件の電信を確と握り辭もなくて自失せるものゝ樣なり。されば詰合はせし人々は、既に以前に懲りたれば又もや發病せしにてはなきかと、立騷ぐ中にも例の女醫士某婦人は直ちに敏子の傍に進みて手

を執りなんばかりに容體は如何にやと問ふ。敏子は俄かに眸子を轉じて女醫士の顏を仰ぐ。目の中は一杯にウルミ玉を結びてこぼれんとす。手中の電信を放ちて之を讀み玉はれよと云ふが漸々なり。女醫士は勿論其他の人々も此電信こそ……我黨の休戚にも關する程の事なるべしと之を讀むに、

山村敏子どの

鋭一より

父上養生叶はせられず今朝六時易簀し玉ふ。

とぞ書きたりける。人々は此意外の凶音に接し、敏子の心中さこそと察しやり、もろきは女子の情なめり。皆々一語を發するものなく先立つものは涙なるべし。中にも年嵩の婦人は漸くに思ひ返しやしけん、ハンカチーフにて鼻をかみつゝ、

「婦人」敏子さん、誠にもう大變な事で御在ましたネエ。貴孃のお心の中を察しるとマアどんなに御殘念にも、お力おとしもなさいませうが……モウお弔詞の申上げ樣も御在ませんよ……

敏子は漸く涙を拭ひて顏を上げ、

「敏子」イエモウこれも壽命で御在ませうから致方もない譯では御在ますが……アーア責めて傍に居て看病でも致したのなら、親の死期にさへ逢ふ事が出來ませんとは、マア何たる因果で御在ませう……病氣の爲めに……アーア病氣の爲めに大集會にも臨席する事も出來ず、親の死期にも逢へぬ許りでなく、實に此貴重なる時になつて……アーア東京に居つたなら……ば、主義の爲めに奔走する事も出來……父にも逢へましたらうに……參政權の運命もどうなりませうか。それも分らぬのに……父が此不幸なる運命……老年の上の病氣ではあり、蓐創……蓐創が出來たと云ふ事で御在ましたから、とても、モウ全快しようとは思ひませず、豫て覺悟はして居りましたが、鋭一からの……家弟からの手紙には、いつも少しづつ快方だと申して參りますから、全快しようとは思ひませんが、マアどうなりともして妾が歸京致す迄は……それ迄は生かして置きたう御在ました……アーア今更斯んな愚癡らしい事を、思ひ切りの……諦めのわるいとお笑ひもおはづかしう御在ますが、傍に居なかつただけ……死期に逢はぬだけ、アーア皆さん御免たすツて下さいまし。さぞ……どうぞ御推察を願ひます……

敏子が日頃にも似合はず尋常の女らしく、愚癡らしく落涙して打歎くも無理ならず見ゆれば、皆々慰めかねて見えし處へ、小使が又もや一封の電報を持來りて机上に呈するを見れば、東京女子參政黨幹事より、大阪女子參政黨倶樂部にて山村敏子殿とあり。敏子は直ちに開きて之を讀むに、久松幹事氏が上野公園にてなせし演說は反對黨に非常の刺戟を與へ、其影響は議院に迄及びて參政案の運命危殆の方に傾きたり。

此電報を見ると共に、敏子は勿論人々は顏を見合すのみ、一語を發するものだになし。

敏子は父高潔の訃音に接して哀傷腸を斷ちぬる折しも、又もや配達し來れる電報は、かゝる時の爲めにとてかけし情もあだとなり、仇とぞなりし久松の幹雄が上野公園にてなしにし演說、議員を動かして參政案の運命さへいと危しと告越しぬる遺恨骨髓に徹して眥も裂けんばかりに恨み憤れる餘りに、忽ちウーンと悶絕しぬ。人々はスハ事よと立騷ぐを彼の女醫士は推鎮めて一杯の興奮劑を與へ、介抱手を盡しけるから、少時ありて快復しけり。此度は昨秋の樣に熱發する程の事にはあらねど、神經非常に高ぶり、激昂甚しければ、女醫士の指圖により貴婦人一人同乘して櫻田がりへ送り屆けぬ。

敏子は叔母政江等が以前の病氣の直りきらぬに又々斯んな事になりてはと、いと切に介抱しける爲め、翌朝はさほどに障りたりとも思はれぬ程にぞなりぬ。敏子は過去の事を顧み、參政案の運命を想ひやり、思想に連環なきまで思ひ亂れし處へ、召使がお手紙なりと持來りしを見れば、上封じには山村敏子孃貴下、久松幹雄松山操とあり、その文句は他ならず、來る月曜日を以て兩人が結婚を執行ふべければ枉げて來臨なし玉はるべしとの意なり。且つ一昨日歸阪致しぬれど、結婚の準備に忙はしく次の水曜日までは訪問の禮を缺くとの旨は別紙にして、久松の添書なり。敏子は手に件の書狀を握りたるのみ、少時は辭も出さざりしが、

「敏子」アーア人の幸びを嫉むではないが、實に此手紙を…此手紙を見るさへもアーア腹が立つ。操さんが舞踏會で發病した以來、櫻田と松山との關係にまでもいろ／＼と盡力し…中の島公園で再會させた…再會させたのも…アーア人の心と云ふものはわからぬものだ。尤も…尤も人の心…人の思想にまで立入つて、どうのかうのと自分極めに極める事は出來ないにしろ、あの操…新聞紙で讀んだ演說、現に幸福を持つて居る女子は投票の事なぞに狂奔しない…高名顯著なる女子も又同樣である…投票權を望むものは、唯妬婦か奸婢か、さなくば無學にして不幸に遭遇せる女子輩であると…アーどうして…どうすれば斯んな無禮な事…を、とりもなほさず一般の婦人に無禮を加へたと同樣…妬婦奸婢、だれをさして斯んな事を、妾を…妬婦奸婢と妾を…論理の立つ立たないはともかくも、あまりと云へば無禮な人だ…あの溫順な性質でどうして、斯んな事を、察するに久松…久松が云はせたのと思はるゝ…上野公園での演說と云ふのも其筆記こそ見ないが、同主意に違ひはない…アーアあんな薄弱な議論が尙ほ勢力を得んとするとは、實に殘念な社會の有樣…だ、あんな人物があつてあんな議論を唱ふる限りはアー中々女權の擴張は出來ない。粗暴な云ひぶんではあるが、これら自由の大敵は一發の彈丸を以て…アーア實にモウ浮世には…アーアあき／＼した…

敏子は斯くかこちながらも尙ほ心の内には、あの樣なる…久松等の薄弱なる議論が既に九分九厘までは議院に勝を得たりし參政案を傷け得べしとは思はぬから、次の月曜日を一秒一日の思ひして待ちけるが、今日は漸くに待ち得たる月曜日とはなりぬ。

今日の月曜日には世人が待ちに待ちたる女子參政案の運命果して開くるや否や。わけめは今夜を過ごさざる事と思へば、一般の人心何となう騷立ち、至る處只此噂のみにて政黨以外の人々も此處彼處と集會を催す程なれば、敏子は病を推して倶樂部に至り、衆姉妹と打集ひて參政案の運命如何あらんと時々刻々唯東京より電報の達するを刹那一年と待ち付くめり。斯くて正午も過ぎ午後三時頃にやありけん、倶樂部の門前に集りし一隊の女子共が一同歡呼雀躍して女子參政萬歲と叫ぶ聲天地も震動する許りなれば、倶樂部の人々は東京よりの電信達して勝利の報知ありけるか、何處より發せし電報にや…と勇立ちしが暫くして門前の喧噪も鎭りぬ。四時過ぎて五時來りぬるも、尙ほ東京よりの電報は達せず。斯くて七時半とも覺しき頃、門前再び騷立ちて電報來りぬ…電報來りぬと傳ふる聲と共に、小使が韋駄天走りに馳せ付け手に持ちし電報を敏子の机上に呈するにぞ、敏子は直ちに封推切りぬ。衆眸悉く集りて敏子が手の開ける儘、

女子參政案は議場に敗れたり。

と件の電報を讀みし時は、ウーンと溜息をつく許りなり。

女子參政案議院に敗れたりとの電報に接せし參政黨の夫人令嬢等が、此時の驚愕と失望は如何なりけん。名を一々景容せざるも、看官は既に推量し玉ひつらん。敏子は別段際立ちて驚きし樣は見えねど、口は塞ぎたるまゝいつ開くべらも覺えず、瞳子は一處にすわりて活動を失ひたらん樣に思はる。唯平生に變りて見ゆるは手の打顫はるゝにや、握りたる電報がブルブルと動けるなり。人々も殆んど敏子一般の有樣にて十分間程は一語を發するものなく、水をうちたるも斯くやと思ふ許りなり。門前に集りし一隊は電報の吉左右如何にやと、こも亦鳴をしづめて控へぬ。斯くて何者か傳へしにや、參政案敗れたりと聞くや否、群羊の暴れ出でたらんやうに一種奇異の聲を發して、其中にてもきかぬ氣の夫人十名許り、何故に女子の參政を許さぬぞ、其理由を承らんと參政黨の人々が知りしかの樣に倶樂部に奮入し來り、今しも人々が驚愕と失望とに茫然自失せる眞中心へ遠慮會釋もなく躍り込み、何故に參政權を與へぬぞと突立ちたる權幕、顏は火の如くに赤く、呼吸は風の樣にあらく、恐ろしなんど云ふ許りなし。

人々は倘ほも一言を發せず、衆隊敏子の面に注ぎて如何に答をなすやらんと伺ふに、敏子は倘ほも以前の有樣を繼續し、恰も死せるものゝ樣なり。斯る事また十分許り、寂々として遠く門前の喧噪と近く面々の嘆息を聞くのみ。かのきかぬ氣の婦人等は此有樣に拍子拔けして、二の太刀を撃ちかねしが、再び勇氣を鼓して以前よりも一層勢ひ鋭く詰め懸くるにぞ、豫て口きゝなりと呼ばれし夫人令嬢等、僅かに口を開き、樣々に慰め賺して漸くに取鎮め、件のきかぬ連を退かしめ、さて此後の手段は如何にせんか、先づ山村女學士の御意見を承りたし、とまた／＼衆口は敏子の上に集りしが、敏子はこの事に付いての意見果して之なきにや、今倘ほ考案を廻らせるにや、衆人の望に背きて敢て口を開かず。二度三度問詰められし後、更に意見なしとの一言を發しぬ。人々は頼みきつたる敏子が、頼み甲斐なき此有樣に力も張りも拔け果てゝ、二度睨みあへるのみなりしが、更に日を期して會議を開き、相談に及ぶ方然るべしとの某夫人の發議に、しやう事なしに賛成者多くて、先づ此日は退散なす事に決しぬ。されば思ひ／＼に退散なせども、敏子は倘ほ以前の儘にて身を動さず、人々に會釋もかへさぬ勝ちなり。最後に殘りし女醫士某婦人は、敏子の傍らに進みて、實に我黨の今日の成行、……嗚呼是非もなしと云ふ一言より他に發すべき辭も候はず、殊に貴孃は御病氣中と云ひ、父君の御身上と云ひ、今日またかゝる不幸の電報に接し玉ひし御心中さこそと察しまゐらす、貴孃の日頃の御氣質として、斯く思ひ沈み玉ふは御無理ならず覺えはべれど、このまゝ此處におはせばとて其甲斐あるべしとも思はれず、殊には倘ほ恙おはす御身の事、又々以前の樣なる御病氣を引出しては獨り貴孃の御不幸許りでなく、實に我黨の大不幸なれば、此處は先づ引取り玉へよ、衆姉妹に代りて偏に頼みまゐらすと、信愛深き諫言振り。敏子はいと嬉しくも心に感じけるにや、口のほとりに少うし許り笑を含みて親愛の情の切なるを謝しつゝ、伴はれて倶樂部を出づるに、門前には倘ほ悉くは立去らざりしか、五六十人の婦人等は今敏子が出來るを見るより聲を發して喝采なし、敏子と女醫士を圍繞し、再び喝采の聲を發せんとするに、女醫士は之れが爲めに却つて敏子の健康を害せん事を恐れ、敏子に代りて衆人を諭しつゝ、僅かに件の圍を切拔け、中の島公園の傍まで同乘して、倘ほ櫻田がりへ送り申すべしと云ふを、敏

子は外に立寄る處もあればとて、共に馬車を降り立ち、漸くにして女醫士を去らしめ、何にやあらん御者に耳語なすに、御者は其心を得たるにや、敏子を殘して馬に鞭ち、忽ち見えずなりにけり。

久松幹雄と松山操とは豫期せし如く今日しも晴の中に耶蘇寺に行きて結婚の式を濟ませし後、豫て案内なし置きぬる親族朋友を高津の千峯樓に請じて盛大なる夜會を開きけるが、宴散ぜしは十時過ぎ、十一時近き頃なり。久松は操と車を共にして千峯樓を立出で、難波橋の鐵橋を渡るに、夜色沈々として轉た悽愴きを覺え空に懸れる一輪の半月は折から風に送らるゝ一片の雲に蔽はれ、唯樹間を漏るゝ瓦斯の光の水に寫りてキラ〳〵せるも果敢なし。斯る果敢なき、淀川の流れを一葉の小舟に棹さし、公園の岸を距る事十間許りの水面を漕ぎ廻りつゝあるは、そも何人ぞや。殊に伴ふ人もなくて遊山とも見受けられぬに、何等の必要あるにやあらん：：斯くて久松と操は徐かに馬車を進むるに、五六間程を隔てゝ自己等と同じく馬車をうたするものあり。既にして南の鐵橋を渡り終り、左に折れて豐國神社の前に來りし時、一發の彈丸水に響きヒューと音して飛來りしが、幸ひにして先なる馬車の馬を打倒しぬ。素より馬車は走れり。間髪を容れざる一呼吸の事故、久松の馬車は止むる暇なく、横様に先なる馬車に衝突し、二輛の馬車共に覆らんとする途端に、又もや一發の彈丸飛來りて馬車を打抜き、アアッと魂消る聲と共に、河中にドブンと音して人ありて水に落ちし様に聞えぬ。

第二十回

中の島公園の西の入口、梅檀の木橋の北詰に名代の珈琲店あり。まだ午前九時頃にて少うし不適當の時間と思はるゝに、早くも此店に休息せる二人の書生あり。各々年は十七八と見ゆるに、其話ぶりのマセ過ぎたる、傍聽せば隨分拘腹すべき事ぞ多かる。軈て十五六の愛くるしき娘さんが運び出す珈琲を前に扣へ、先づ甲なる書生の語るを聞くに、

「甲」君昨朝のあれを見たか：：あれをさ、あのフヘヤ(美人)を：：「乙」トゝヤ見んかつた。大變な評判だが、君は實際を目撃したか。「甲」ウム實に素的滅法界な別嬪であつたが：：君はよく〳〵女運の薄い男だぞ。そこは僕なんざアヘン：：「乙」ハゝハゝ、詰らん事を喜ぶ男だ。何も死んだ女を：：即ちお土佐を見たッて、さう自負する奴があるものか：：併し少しく僕においても心懸りなきにあらずだが、マアどんな女だつた。「甲」ナニどんな女だ：：どんな女だと云つてアーア：：「乙」早く言上せんか。歎息の聲は先づ跡廻しにして、先づ其容貌から形容しろ。「甲」ェ其容貌：：其容貌と云つたらアーア：：「乙」いやアに氣を揉ませるな。早く云へ、早く話さんか。「甲」ウム話さうか：：併し止さう。アーア。「乙」五月蠅く歎聲を發する奴だ。ェー話せと云へば話さんか。「甲」アーアそれでは愈々話さうが：：マア何を散財る。「乙」ェ驚いた。喰ひしんぼうな奴だ。ェー仕方がない。此店の勘定位は：：「甲」ナニ此店の勘定：：たつた。先づ御免蒙らう。どんなに安く踏んでもさうさ：：先づ北の新地のキャット二疋生捕の堺の濱位の直打は十分あるからな。「乙」ナニ藝子二人：：堺の濱そりヤア非常だ。先づ僕の方でも願下げにしよう。「甲」吝嗇な奴だ。「乙」ナニ吝嗇だ：：生意氣な事を云ふな。僕が吝嗇か：：君が吝嗇か。君自身のブレイン(腦髓)に判斷さして見るがいイ：：先日の新町、それから：：オペラ：：どうも實に：：君に御散財を懸け

て、ハ、實に恐縮の至りですから……「甲」オイ君謝罪つた。謝罪つた。アー謝罪つた。能いよ。今話すよ。能いぢやないか。君今話すよ……アー此店の勘定で澤山だとも……併し……エーまけて置け……「乙」話すなら話すで早く話したまいな。此店の勘定にした處か僕が好んで負擔する義務がある譯でもないから……「甲」君さう怒つちやア困るよ。今話すよ……アーア然らば愈々から座を構へて物語らん。「乙」さう氣取らんで話さんか。しつこく氣を揉ませる奴だ。話さんければ話さんで能い。「甲」マア無言つて聞き玉へ。先づその容貌を形容しようか。さうさ、先づ顏の眞中にツーンと高い恰好の能い鼻があつて……其上に目がエー何でも二つちやアんと並んで……下には慥かに口が一つあつて……「乙」なんだ此野郎、人を馬鹿にするな……眞中に鼻が在つて、目と口が其上下にあるのは、人間一通り何人にでもあるワ……モウ聞かんぞ。「甲」ハヽハヽヽ、マアサ聞き玉へ……君の發明した說かは知らないが、獸類だツて鼻を挾んで目と口とが陣取つて居るのは人間同樣だよ。「乙」畜生、いやに人をおひやらかすな……モウ聞かん決して聞かんぞ。「甲」ハヽハヽ、君の發明の通りに一般の人類には鼻目耳口が順序を逐うて陣取つてるには相違ないが、併し其鼻目耳口か一般の鼻目耳口とは違ふので、君なんざア隨分好男子、中々の色男だけれども……女と男の相違はあるが、同じ兄弟分の人間にもからも格段があるものか、左樣、高尾と累程の相違だ。尤も君が卽ち累であるので……さう怒つちやア……君の顏色か土橋の……愈々累たらざるを得ずだから……「乙」畜生……「甲」痛め〱……先づ鼻の恰好か。能くツてツーンとした處は古の小野小町の如く、そりやア小町に見參はしないが、マア斯んな鼻付であつたらうと思ふのさ。君の樣にさう眞面目に攻撃されちやア困る。形容だもの大目に、イヤ大耳に聞いて吳れ玉い。先づ鼻が小町の樣で、目は楊貴妃の啼後の愛嬌を有ち、口は嵯峨野の奥に想夫憐を彈じて打誦し玉ひし小督の局もかくなん……「乙」なんだ少しも譯の分らぬ形容詞だ……モウそんな形容は聞度くない……年は何歲位で名は何と云ふのだ。「甲」さうさ歲は廿歲位に見えるが、併し僕の慾目。「乙」なんだ君の慾目だ。ハヽハヽヽ、其慾目と云ふ理由が聞きたい。どこを推せばそんな音が出るんだ。「甲」その慾目の理由か。どこのことだつて、どこを推したツて此位な音は……美人だ、可哀想だ、惜い事をしたと思うた慾があつて……心に慾があつて、然り而うして後に目を以て觀察したから、そこで則ち慾目さ。何も不思議はなからう。「乙」呆れた事を云ふ奴だ。モウ聞かなくても能い。「甲」イヤ話す……心に思ふ事打出さゞるは腹膨るゝ心地だと、昔の坊樣が云つた通り、僕も云ふ丈は云つて聞かさう……先づ僕の慾目で見ると、さうさ十八位か九迄は上るまい。また……扮粧を慾目で見ると……「乙」又慾目か。モウ貴樣の話は聞かん……オイ姉さん、今日の新聞はないか……昨日の朝、此處の前に流れ着いた女の一件は出て居ないかネ。「女」ハイ此新聞に……これにも出て居ますよ。

と三四枚の新聞紙を件の書生の前に持來りぬ。書生は件の新聞を取上げ、先づ見出しのみを讀み行きしが、忽ち莞爾と打笑みたり。何程面白き珍聞を見出しぬるにや。

「乙」あつた〱。此處にあつた……美人の水死……これだ、これだ、君僕が讀むから聞き玉い。エー、

（　）美人の水死、昨朝栴檀の木橋の北詰に漂着

せし婦人あり。衣服によりて察するにあッぱれダウター（貴女）とも云ふべき扮裝にて、なかなかの美人なりしが、其姓名は未だ分明ならず……

「甲」何だ、それッきりか。「乙」ウムこいつアだめだ。此新聞は採訪が粗漏で不可んな……その新聞には何と出て居る。「甲」これも同樣だ……エー浪華タイムスはないか……ナニここへ、どれ、ウムあつた〱、これが、此新聞が一番事實が確かだ……エートイヤ妙な見出しがあるぞ……山村敏子女史の生死如何……ウ敏子女史……山村、さうだ、これは參政黨の、東京から出張して居た參政黨の女學士だが、生死如何……ハテナ……マア何にしても讀んで見よう……エート……

○山村敏子女史の生死如何　昨春以來當府に出張し、參政黨の主義を擴張すべく勉められし東京女子參政黨の女學士山村敏子女史は、昨秋參政黨俱樂部に於て卒倒されし以來、腦充血を患ひて平臥せらるゝ旨は前に報道し置きしが、女史は尙未全癒にいたらざるも、本年の國會には女子參政案が現内閣より議場に提出さるべしとの噂あるより、女子の活潑急躁なる、病室の無聊に堪へず、病を推して日々俱樂部に出會せられし由なるが、去る月曜日卽ち參政案生死の當日は早朝より俱樂部に詰め切り、東京よりの電報如何にと頷を延いて跂望されしが、彼の參政案が議場に敗れしとの報に接するや、參政黨の諸君の吃驚失望は如何なりしならん。女史は唯茫然として一語を發せず。午後十一時頃會散ずるの後、女醫士某夫人は女史の身上を氣遣ひ女史の寓居迄送り屆けんとせしに、女史は中の島公園にて女醫士を謝し遣り、且つ御者を懲して馬車をかへされし迄は聞くことを得たりしが、其後は何處に行かれしにや。豫て女史が寄宿せられし女史の親族櫻田氏にても種々手を盡して詮穿せらるゝも、今猶其行方は知れざる由。世間の風聞によれば、參政案の敗報より三日以前に女史の親父元老院議官山村高潔君逝去の報ありし時には、豫て孝心深き女史の事故、殆んど精神の錯亂する程に慟哭せられしと云へば、或はそれが爲めに發狂せられしにてはなきか。又一說には親父の訃音に接せられし爲めに發狂せられしと云ふも一理なき說にてはなけれど、參政案の敗れし當日迄精神平生の如く俱樂部に事務を執られしと云へば、女史は果して精神病に罹りて行方知れずとするも、其基因は參政案の敗報なるべしとも云ふ。櫻田家にても親族の事なり。東京なる女史の實弟山村鉞一君に電報して問合されしに直ちに未だ歸京なしと返報ありし由なり。されば女子は現に何れの邦何れの邊に彷徨さるゝか。學問あり、器量ある女史にして、若し此儘此世に出現さるゝ事なくば、參政黨の勢力に減殺を與ふるのみならず、交際場裡に一箇の花王樹を拔き去りしと云ふべし。女史の生死果して如何、昨朝公園の傍ら栴檀の木橋の北詰に漂着せし美人を山村敏子女史なりと傳ふれども、未だ信を置くに足らざるのみならず、女史は此の如き見苦しき死樣は致さるまじと信ず。此事に關して尙ほ探訪を懈らずして看官に報道すべし。

「甲」アー惜しい事をしたな。實に美人……非常の美人で……曾て演說を傍聽した事があつたが、辯舌と云ひ論理と云ひ、實に希有の女丈夫であつたが。「乙」さうか、松山の操さんがマア浪華一等の美人と云はるゝが、操さんでも或は二の町の評を得ないとは云はれぬ位の美婦であつたに……併し死にはしまい……「甲」僕もさうは思ふが此新聞によ

つて來ると、何ぞ死なないにした處が精神的に死つては、アー何にしても實に惜いではないか、殊に年が十八……「乙」妙だ〳〵其次の項を讀んで見ないか。又一層面白さうな見出しがあるぞ。「甲」オヤ、ウーこれか、エー……中の島公園美人の狙擊、こりやア妙だ……

何にても珍らしき事さへあれば打笑まるゝ年恰好の書生なり。殊には美人……狙擊……如何にも珍らしく面白さうな標題ゆゑ、われ讀まん……イヤ僕こそと甲なる書生爭ひ勝ちしか、

「甲」エーどうも此位な面白い種がなくッちやア……どうも新聞は面白くない。これだから浪華タイムス……この新聞が僕には至極適當して……「乙」マア何でもいイから早く讀まんか……オイ早く讀まんか……エー乃公が讀むからよこせ……「甲」どうも君は性急だから困る……讀むよエート……今讀むと云へば……マア待ち玉へ。少しは樂みの爲めにこんな話は……そんなら讀まう、謹んで聽聞しろ。「乙」いろんな御託を云はずと……「甲」エー仕方がない。讀んで聞かさう。エート、

(中の島公園美人の狙擊)去る明十日に改進黨の名士久松健雄君は、本紙にても豫て報道せし如く、女子大學の卒業生にて、交際の場の花と迄に世の聞え目出度き松山の操嬢と結婚の當日なるにぞ、君は結婚の式を濟ませし後、高津の千歳樓に親戚朋友を招きて其披露をなせし後、操嬢と同乘して中の島公園に懸られしは、午後十二時近き頃なりしが、何處よりとも知らず一發の彈丸飛來りて、君の馬車を打抜きしかと思ふに、君の運命の强かりしにや、狙ひは外れて一二間先だちて進みし一輛の馬車なる馬を打倒しぬ。操嬢は良人に怪我なかりしを喜ばるゝ間もなく、又も一發の彈丸飛來りぬ。此時は先なる馬車の進行僅かに止りし事故、君の馬車は之と衝突して、共に轉覆せし途端アアッと悲命の聲を上げしかば、君の御者馬丁等は君に過ちやありし、新夫人の身の上氣遣はしと、馬車を廻りて如何にやと見るに、君は早くも操嬢を扶けて立上られぬ。前なる馬車は倒れし儘馬丁等も怪我をなせしが、起さんとなす人もなし。されば君は自己の馬車は御者等に任せ置き、前なる馬車に近づき過ちはなかりしか如何にぞやと、窓より差のぞき見れば、中に二人の人ありて一團となり死せる樣なり。この有樣に君は非常に打驚き御者等に指圖し自己も手傳ひなどして漸くに件の馬車を引おこし、聲を掛けつゝのぞき見るに、流血淋漓として男女の死體橫はりぬ。此ことを僅かに起上りし彼方の馬丁に、馬車の扉を開かしめ、何人にやとよく〳〵見るに、二人とも一面識なき人にもあらず、男は浮田青年にて女は浪華オペラの小田原川菊枝なり。君は馬丁に命じて警察署に訴へしめ、檢事の臨視濟みし後操嬢と互に相視しつゝ恙なく歸宅せられしと云ふ。警察署にては其の掛りの人々が出張し、行兇者の探偵に盡力されしも、今朝に至る迄其の手掛りを得るに由なく、唯不審なるは櫻田千樹君の娘、卽ち浮田青年の細君筒子孃が昨夕刻より家を出で、今朝に至るも尙ほ歸宅せずとの事のみぞ不審なり。斯くて栴檀の木橋に美人の水死ありと傳ふるにぞ、警官は直ちに其處に派出し櫻田家よりも人を出して見せしめしに、昨夜より歸宅せずと云ふ筒子孃に相違なければ、檢視終りし後件の死體は櫻田家へ引取られぬ。こゝに至りて昨夜中の島公園にて浮田氏等を暗擊せしは筒子孃なる事と知られぬ。其こゝ

に至りし原因には、種々込入りたる事情もあるべけれど、道途の傳ふる說によれば　浮田氏が瀨川菊枝の手レンに掛りて、細君艷子孃を遇する事の極めて殘酷なるのみならず、艷子孃をなきものとなし、瀨川を引入れて櫻田家を橫領せんと企てしより、こゝに至りしとの事なり。一時は久松幹雄君が中の島にて暗殺されぬ、行兇者は參政黨の山村敏子孃なるべしなど、專ら風說ありしが、敏子孃は行方知れずなり、久松君は日々弊社へも出勤ありて、異常なし。尙ほかゝる說を信じ居らるゝ看官も、おはすべければこゝにこれを書添へぬ……

「乙」フー……女で以て暗殺仕ようと云ふ位だから、種々雜多の堪へられん事情があつたにしろ……平和の手段はなかつたものか。「甲」それはないでもなからう、隨分あつたらうが、情慾……情慾より怖るべきものはない、此情慾の爲めに女許りでなく、英雄豪傑の中に數へられる立派な人物でさへ、身を過つた例が多いから、君なんぞも隨分女難除けの御守でも下げて步行くがいイ。「乙」馬鹿を云へ……時に山村敏子孃は何處へ行つたのであらうか。如何なる事情があつたものにしろ、東京から態々出張して、關西の輿論を惹起さんと云ふ大任を負うて來る位の人物でありながら、一敗其身を隱すとはどうも馬鹿々々しい譯ではないか。「甲」それもさうだ。併しよく〳〵……オイあれを見んか。ソレ葬式が……立派な……葬式が……「乙」ウム何處の葬式だらう……ニ何だ、あの旗に何か……何と書いてある。「甲」ニー櫻田艷子の柩と書いてある。「乙」さうか、墓地は何處だらう、行つて見ようか。「甲」ウム散步ながらそれもよからう……

二人の書生は珈琲店の勘定を濟まして件の葬式に引添ひ去るめり。

山村敏子の生死如何と云ふ問題は、實に世間喧しく、新聞紙にも日々掲げざる事なき迄なりしが、多くは臆測の誣傳のみにて、彼の浪華タイムスも終に滿足すべき事實を報道するを得ざりしとなん。

脚本 目黒巷談

序幕

其一　松葉屋新座敷開の場

目黒の不動前の茶屋松葉屋の庭内に新築の離座敷落成につき、今日牡丹の開園をかねて座敷開をなす事となりたり。

舞臺の上手前に、小座敷二間續の離座敷あり、其裏手より下手へ掛け、一面の牡丹の花壇、座敷の傍及び下手に芽出しの楓、檜葉等をあしらひ、其外風情ある庭の趣致なり。

離座敷の前少し下手に、赤の毛氈を掛けたる床几一つを置きあり。

床几には八字髭黒紋付の紳士大村既に酒に醉ひたる體、柳橋の藝者千代治と二人腰を掛けて居り、花壇の前には、洋装(書甲)と袴着(書乙)の書生二人、商人體の男(甲、乙)二人、何れも牡丹を觀て居り、下手楓の木の下には、茶屋の女中お梅お竹、佇んで居る。此體にて幕開く。

千代『何時来たッて、此處の庭を見ると清々しますわ。加之に好い離家は出來たし、本統に一日遊んで居たいわねえ。』

大村『遊んで居たいなら、此儘居る事にしても可い。』

千代『だッて、今日は不可いわ。嶋本さんと小東さんを大崎屋に待たしといて、貴方と私と、此處に御神輿を据ゑちやア惡いわ。』

大村『なに惡い事があるものか。向うは向うで、邪魔を拂つた氣で居るかも知れないさ。寧そ此處で遊んで行くか。』

千代『私いやよ。其樣義理の惡い事をするのは。』

大村『お前は義理が惡いなら、勝手に大崎屋へ歸るとするさ。乃公は一人でだッて、後に殘りたい位なもんだ。』

千代『おやッ、怪しいわ、一人で殘りたいんですッて。』

　千代治は大村が醉眼を据ゑて、頻りに下手を見て居るので、

千代『まア、貴方何うしたッて云ふのよ、其樣に彼方ばかし見てえてさ。』

大村『えッ、なアに、お前の知つた事ちやアない。』

千代『今日は何だか怪しいわねえ、大村さん、何うかなさりやアしなくッて。』

　大村は返事もしないで尚ほ下手を凝視めて居る。千代治は漸と其と覺つて、

千代『あらッ、醉つてよ。おほゝゝゝ。』

大村『何だ、吃驚するぢやアないか。突如に大きな聲なんぞをして。』

千代『だッて、可笑しいんですもの。』

大村『何が可笑しい。』

千代『何がッて。おほゝゝゝ。貴方は何だよ、乾度此家のお妻さんを待つてるんだよ、もう來るかもう來るかッてんで、ね、御手の筋でせう。』

大村『はゝは、殘念ながら、其お手の筋なるものかね。』

千代『まア呆れた。だけども、無理もないわ。柳橋にお居での時から、柳橋小町ッて云はれたお妻さんだもの。』

書甲『目黒に歸つては、目黒小町なるものかね。』

　牡丹を觀て居た書生が、何日か大村等の傍近くに來て居て、突如に斯う云つた

で、千代治はいけすかないと云つた風で横を向きながら、大村を促し、
千代『貴方やア、さアお立ちなさいツてば。』
　書生乙は大村へ向ひ、
書乙『おい先生、君の艶福羨むべしですな。美人を擁して牡丹を観る、人生の歡樂極まれりだ。』
　大村が書生の相手になつて口を動かさうとするのを、千代治は無理に引立て、床几を放れる。書生甲、千代治へ近付きながら、
書甲『おい君、美人の君、名を知らんから、僕は美人の君と呼ぶんだ。おい、美人の君。』
　千代治は大村を小楯に取りながら、
千代『姉さん、鳥渡。』
　女中のお梅、千代治の傍に來る。
お梅『お呼びなさいまして。』
千代『お妻さんに宜敷くツてね。此次には緩々お邪魔に來ますツてね、賴みましたよ。』
お梅『まア御宜敷いぢやありませんか。』
千代『今日は連を待たして居るんですから。』
　千代治は帳場と女中とへの祝儀の紙包をお梅へ與へて、
千代『ぽつちりよ。』
お梅『姐さん、どうも濟みません。旦那、難有う御在ます。』
　お梅はお竹を呼び、とも〳〵禮を云ふ。
　千代治は大村を引立て〳〵上手に裏門のある心にて退場。書生甲乙、ドッカリと床几へ腰を卸し、顏を見合せ、
書甲『熊野、我黨は詰らんなア。』
書乙『然り、實に詰らん〳〵。今朝から下宿を出たのに、もう何時だと思ふ。去年の無錢旅行の時より辛い位だ。』
書甲『同感々々、餘り眼の方を優待したもんだから、腹の蟲が大きに不平を訴へて、喉元まで突貫して來たよ。』
書乙『代りに眼の玉が退却だ、あゝ詰らん。』
書甲『何處か安値な兵站部はないかなア。』
書乙『兎ても無いな。』
書甲『婆艦隊ぢやないが後へも前へも行かれないよ、是りやア。』
書乙『何家かで中立違反をしちやア呉れんかなア。』
　共に思案投首の體。
　前程より牡丹を見居たる商人甲乙、此時座敷の後より出來り、牡丹を賞めながら、書生の前に來掛り、
商甲『喜八さん、表座敷の方で、一杯遣りますかね。』
商乙『其事々々。ぐッとよしだの二階、ではない姉さん、彼方に明いて居る座敷があるかね。』
お竹『へい、お二方だけなら、何うにか都合を致しませう。』
商甲『そいつは難有い。』
商乙『諸事姉さんに限りやす、様子がよくツて親切で。』
お竹『どうもうまいお口ですこと。』
商乙『ヘン是でちら〳〵殺しやす。』
商甲『襟の虱をポッ〳〵と。』
商乙『兎角汚い方に持ち廻りたがるやつさ。』
商甲『代りに姉さんが綺麗な方に連れて行きます。』
　お竹、案内して商人甲乙、下手へ退場。
　書生吉田、熊野、商人等を見送つて、あゝと歎息する。
　下手より上品なる白髮の老人、何れも孫らしい十六七歲の束髮袴着の女學生と、七八歲の海軍服の男の子とを連れて登場。
　書生二人は女學生を見て生返つた樣に目を睜つて見て居る。

女學生と男の子とは、早くも牡丹の花壇を見付けて、

男子『姉さん、御覧よ、綺麗だね。』

女生『さうねえ、御祖父さん、彼所へ行つて見ても可くツて。』

老人『可いとも。』

女學生と男の子は手を引合ひ花壇の方へ急いで行く。同時に書生は床几を放れる。お梅、老人に向ひ、

お梅『入らッしやいまし、お掛けなさいまし。』

老人『あの奥の、不動様の御山の見える座敷が、明いて居ようかなう。』

お梅『はい、丁度明いたとこで御在ます。』

老人『さうかい。それは難有い。食事を爲たいでな、何か見計つて持つて來る様にな。』

お梅『畏りました。御案内を致しませう。』

老人の一連はお梅の案内にて、牡丹を見ながら離座敷の奥から退場。書生甲乙も囁きながら後を追うて退場。

請負師間大五郎、三十四五歳、醫者塚本賢亮、四十歳前後（鼻下に髭あり）、松葉屋のお妻、三十歳前後、何れも好みの打扮にて下手より登場。

大五『おゝ、庭の手入も悉皆出來上つたね。』

お妻『今朝まで掛つて、何うにか斯うにか、間に合つたんで御在ますよ。』

大五『まア何にしても目出度いや。』

お妻『それと云ふのも、旦那初め、皆様の御蔭で御在ますわ。』

賢亮『おゝ、花壇が大層見事だ。間の大將、何うです、あの牡丹は。』

大五『牡丹は後廻しツて事にして、先づ新座敷に落着きやすかね。』

賢亮『大きに、それがようがせう。』

お妻『旦那、何卒此方に。先生、さア上つて頂戴。』

お妻は大五郎と賢亮を、離座敷の上手の間に案内し、座布團など進めて、自分はまた下におり、

お妻『まア一人も居ないんだよ、お梅もお竹も何處へ行つてるんだらうねえ……旦那、鳥渡御免被りますよ、御煙草盆を持つて參りますから。』

賢亮『おッと待つたり。莨盆なら、其床几の上ので結構。』

お妻『お火が無いと不可ませんから。』

賢亮『おッと、火がない生活ぢや助からないが、慥かにあるみの鼻眼鏡、横目でちらと、にらんで置いた。』

お妻『よー／＼强薬の二つ彈丸。』

賢亮『なにさ、是が新發明の[illegible]式だ。』

大五『そんなダーえもつはきかんはつがいゝね[illegible]』

賢亮『よッ大將、頗る斬新とおいでなすつた、隅にやア置けない。』

大五『アハヽヽ、ぢやア眞中へ出て[illegible]でも振るかね。』

お妻『はい、お熱いの。』

お妻は莨盆を持つて來て、

お妻『全く好い火ですわ。先生は本統に目はしがお利きなさるわ。』

大五『眼も利きやア氣も利きやす、何たツて脈よりも病人の顔付を見て藥を盛らうてえ大先生だもの。』

お妻『[illegible]の病にやもつてこいね。』

賢亮『御用があつたら、いつでも勤めるよ。』

お妻『は何卒、いづれまた若く成つたらね。』

賢亮『へえー、其上若く成る氣かい。全體お妻さんの星は何だッけね。』

お妻『私、梅ぼしよ。』

賢亮『串談ぢやない、幾歳だね、全くの所は。』

お妻『もういゝ婆アですよ。』

賢亮『え、お前が婆さんだッて。あゝ勿體ない婆

さんがあつたものだ。拙なんぞも、何卒逆に年を取つて、せめて晋さん位の爺さんに成りたいものさね。」

　此少し前より、昨日までは目黒村の豪家、今日は尾羽打枯した上原晋太郎、二十四五歳、羽織着流の窶れた打扮、裏門より入つて來た心にて、上手檜葉の植込の蔭に偸聴して居る。

大五「お妻さん、晋さん見たいな男があるとこを見るてえと、年なんぞ苦にする事アねえぜ。」

賢亮「大きにさね。お妻さん、何歳違ふかね。」

お妻「何方とですか。」

賢亮「晋さんとさ。」

お妻「上原の若旦那とですか。」

賢亮「お前の情夫とさ。」

お妻「まア。」

　晋太郎はぞく／＼と嬉しい介。

大五「三歳も違ふかい。」

お妻「何うですか知ら。旦那は知つてらッしやる癖に。」

賢亮「僕に云はせりやア、五つと云ひたい所だが、六歳と來りやア、圖星だらう。」

お妻「そんなものかも知れませんよ。」

　晋太郎は賢亮がお妻と自分との年の相違を多く云つたのを腹の立つ介で、此時覺えず一歩前へ踏出して、

晋太「何だ、六歳違ふ。三つしきやア違はないのに。藪め。藪醫者めッ。」

　大五郎は早くも怪しんで、

大五「お妻さん、何人か居るやうだぜ。」

お妻「さうね、何方か何か仰有つた樣でしたね。」

　お妻は立つて、上手を差覗いて、晋太郎と顔を見合せる。晋太郎は左も懐愛しさうにお妻の顔に見惚れて、他愛もない笑を含む。お妻は大五郎等を見返つて、

お妻「若旦那が居らッしやいますよ。」

大五「晋さんが來たッて。」

　大五郎は賢亮の顔を見て、目顔で呼入れよと指揮をする。賢亮は片手を突いて差覗いて、

賢亮「いようッ、晋さん、さア何卒此方へ。間の大將もお居でで、丁度可い處でした。さア、御遠慮なしに、ずうッと此方へ。」

お妻「若旦那、今日は屹度入らッしやると思つて、お待ち申して居たんですよ。」

　晋太郎は此間に、離家の前、お妻の傍近く來たけれども、大五郎と賢亮とが居るのも忘れたかの體で、唯お妻の顔を見つめて、嬉しき介。

晋太「さう、私を待つてお呉れだッて。本統に待つてゝ呉れたの。」

お妻「本統ですとも。若旦那に虚言なんか、云やアしませんわ。」

　晋太郎は嬉しさにお妻の顔から眼を放し得ぬ介。大五郎と賢亮は顔を見合せては冷笑して居たが、

賢亮「いようッ、もてますな。」

　晋太郎は吃驚して、大五郎と賢亮が其處に居た事を思出して、きまりが悪いと云ふ介。

晋太「間さん、今日は。賢亮さん、久濶會ひませんでしたね。」

　大五郎は鷹揚に會釋して、

大五「昨日にも來てお呉んなさる筈だから、先刻まで宅で待つて居やしたが、此處で會つたなア、丁度能かつた。まア上つちやア何うだね。」

賢亮「晋さん、此處が能いでせう。」

　ト賢亮が席を譲らうとするのを、晋太郎は押止め、

晋太「いえ、私はまだ外に。」

お妻「若旦那、御上んなさいよ。」

トお妻は座布團を進める。晋太郎は其を敷いて腰を掛ける。

お妻「旦那、直きに御酒になさいますでせう。まア、お茶も上げなくツてさ。おほゝ。」

大五「勿論さね。下物は好い加減に見繕つて呉れるが可いよ。」

お妻「はい。」

トお妻は晋太郎に對ひ、

お妻「若旦那も御一緒でせうね。」

晋太「え、私。私は未だ、あの何ですから、後で彼方の方が可いよ。」

お妻「ぢやア、其積りにしませうね。」

賢亮「お妻さんと水不入で……晋さん、羨ましい御寸法でごすな。」

晋太「な、何、其樣譯ぢやアありません。」

大五『其樣譯でねえなんて、晋さん、隱す中でもあるまいぜ。こゝで一緒にのむがいゝさ。』

晋太「間さんに其樣事を云はれると、何だか何うも面目なくツて。」

ト晋太郎、羞かしさうに垂頭く。大五郎と賢亮は顏見合せて冷笑ふ。

お妻「私の留守に、お二人で若旦那を意責めないで頂戴よ。若旦那、直ぐにまゐりますよ。」

トお妻は愛想らしく斯う云ひながら、晋太郎に笑顏を見せて、下手へ退場。

大五「呆れたもんだ。」

ト大五郎は晋太郎が浮腰になつてお妻の後姿に見惚れて居るのを凝乎と見て、

大五「晋さん、おい晋さん。」

ト大聲にて呼ぶ。晋太郎は吃驚して我にかへり、

晋太『私をお呼びなすつたんですか。』

大五「呼んだかもねえもんだ。』

晋太「何か用でもあるんですか。』

大五「なに、用でもあるかだツて。」

ト大五郎は煙管もて唾壺を割れよと打いて、

大五「晋さん、用があるかたア何てえ云草なんだ。ぢやア何だね、晋さんは私に用は無えと云ふんだね。」

晋太「あツ其事ですか。其事なら、私は今お宅に何つて、松葉屋へお行でなすつたと聞いたから、後を追つて來た位ですよ。お前さんに用があるの無いのどこぢやありません。ソレ彼用と、彼用と、差當つた二つの用が、私の胸に、斯う閊へて居ますさア。』

大五「彼用と彼用と、二つの用が閊へて居るツて。はアてね。一つの用は分つてるが、今一つの用ツて云ふたア、晋さん、何樣用だね。」

晋太「え、其用ツて云ふのは、」

大五「其用ツて云ふなア、」

晋太「さう／＼は、餘り厚面皮くツて。」

ト晋太郎はもぢ／＼して云ひ得ぬ介。

大五「まア、其用は何うでも可いが、先日から延期ツて、三日延べ、五日延べ、もう彼此半月足らず、お前さんの云ひなさる通りに、延期て置いた、あの安樂寺前の地所の一件は、ありやア何う埒を付けてお呉んなさる氣かね。」

晋太『さツ、其事ですがね、私も種々、心配はして見たんですが、お前さんも知つてお居での通り、コレ此通りの今の身の上ですから、」

大五『おい晋さん、今日も亦十八番の待つて呉れろかね。」

晋太『そ、其樣な事を、私の口から云へた義理ぢやア無いんですが、」

大五「義理でねえと知つて居るなら、」

晋太「さツ、其處を何卒、親父の時からの馴染甲斐に、ねえ間さん、後生ですから今一度。」

大五『そりやア不可ねえ、佛の顏でせえ三度ツて云ふよ。」

晋太『それは左樣でも、」

大五「今度と云ふ今度は、金輪際承知が出來ね

えよ。」

ト大五郎は魚膠もなく云切る。晋太郎は當惑の介。賢亮は大五郎に顏を見合せて首肯き、

賢亮「晋さん、其事に就いては、お前さんの御依賴だから、私から間さんにお賴み申して、此前の時と其前の時と、二度まで延期を爲て貰つてあるのだから、今日は私に對しても、何とか始末をつけて戴きたいものですな。」

晋太郎は術なき介にて、

晋太「先生に左樣仰有られると、私は穴へでも入らなきやアなりませんや。」

賢亮「お前さんだッて、此目黒で上原さんと云へば、蔭でさへ樣付にされた舊家の旦那樣だ。其上原の晋さんが、唯出來ないとばかりでは、間さんだッて承知が出來にくいのは、無理も無い所ですよ。晋さん、古川に水斷えずとやらで、抵當替に何か出す物がありさうなものですな。」

晋太郎は凝乎と考へて居たが、

晋太「さア、其物があれば、私だッて、今日此松葉屋の座敷開に、此樣に尾羽打枯した扮粧ぢやア來ませんや。此までの義理にも、店から女中へ、祝儀も遣りたし、成らう事なら、お妻の名で、仕着を出して遣りたかつたのに、それも出來ないほどの此樣でせう。先生、コレ此私の扮粧を見て下さい。お妻も嘸ぞ肩身が狹からうと思つて、斯うしてる内だッて、氣が氣ぢやありませんや。」

ト晋太郎、漸次聲が曇つて、終に涙を拭く介。賢亮は態とらしく頻りに首肯き、

賢亮「さうお聞き申すと、實にお氣の毒だ。晋さん何うです、何か一つ、間さんが承知して下さりさうな物を、林でも可から、畑地でも可からうし、何かありさうなもんですな。」

晋太「さア、其林も、田地も畑地も、宅地までも、悉皆間さんの物に成つて了つて、今ぢやもう、手付かずの私の物と云ふのは、唯たあの家一つしきやアありませんや。」

賢亮「何うですかい、彼お宅を一時書入れて、せめては半額も入金、と云ふ事になすつて、間さんに延期を賴んで見ると云ふのは。」

晋太「えッ、何、家までも。」

ト晋太郎は垂頭きながら、此ばかりはと思ふ體で、輕く頭を振つて居る。

賢亮「晋さんが彼家さへ書入れる氣なら、私から間さんに賴んで、此所の凌ぎ、其外に、二十なり、三十なり、お前さんの手に入る樣に何うにか取計つて見る積りだが、晋さん、さう爲た方が、能くは無いですか。」

晋太郎は尙ほ默つて居る。

賢亮「晋さん、今二十と三十の金があれば、店にも女中にも、祝儀は出せようし、暫時は又心配なしに、お妻さんの顏が見られて、えッ晋さん、お妻さんも喜べば、お前さんも亦肩身が廣い。ねッ晋さん、餘り惡くも無い話ですぜ。」

晋太郎は稍心が動き掛つたこなし。

賢亮「晋さん、先刻お前さんの顏が見えない前に、お妻さんが染々お前さんの事を云つて居たですよ。」

晋太「な、なに、お妻が私の事を。せ、先生、な、何て云つてました。」

ト晋太郎ははや夢心地で、賢亮の顏を見ながら體を乘出す。

賢亮「何と云つてたッて、え丶と其の、晋さんが元の御身分でお居でなすつたらッて、艷かな彼顏に玉の涙がほろ〳〵。」

晋太「えッ、お妻が、私の爲に泣いてまで、あ丶濟まないなア。」

ト涙を拭く。大五郎も態とらしく溜息を吐いて、

大五「おい、塚本先生、女ッて奴ア、あの涙含

んだ處が、どうもいへないもんだてね。』

賢亮「全くです。眼のふちを紅ういろどつて、所謂その、海棠の雨になやめる風情とあつてな。』

ト晉太郎は何の分別も無くなつた樣子で、

晉太「せ、先生、あの家を、書入れませう。』

賢亮「えッ、お宅を。』

晉太「その代りには、その今の、三十圓なり五十圓なり、それさへ私の手に入る事なら、もう家だッて、えゝ構ふ事アありませんや。』

ト晉太郎はお妻の爲ならと、心も上の空。

賢亮は頻りに首肯き、

賢亮「さうなさりやア、此處の凌ぎはつく、お妻さんは喜ぶ、所謂一擧兩得と云ふものですな。さう事が極まれば、間さんだッて、ねえ大將、お聞きなさる通りですが、如何なものでせうかな、拙者の顏もお立て下さる事に願ひたいですが。』

ト大五郎は迷惑らしい樣子で考へて居たが、

大五「いや、ようがす。先生の顏を立てやせうよ。』

賢亮「えッ、私の顏を立てゝ下さる。晉さん、喜び玉へ、間の大將が承知して下さると云ふ事だ。』

晉太郎は大いに喜び、

晉太「間さん、難有ら御在ます。先生、何れお禮は致しますよ。さッ、何卒その、五十圓を、さッ、早く渡して下さい。』

ト心の急くこなし。大五郎は落付拂つて、

大五「晉さん、何時も云ふ事だが、金は證書と引替だよ。』

晉太「えッ、其はもう、素より承知です。』

大五「ぢやア、先生、御苦勞だが、お前さんの手で、鳥渡一筆お賴み申したいね。印紙は私の處にあつた筈だ。』

賢亮「承知しました。』

ト賢亮、證書を認める。大五郎は折鞄から印紙を出す。晉太郎は上の空で下手に心を惹かれて居る。其中に賢亮、證書を認め終り、大五郎から印紙を受取り證書に貼つて、晉太郎の前に置き、

賢亮「晉さん、此に實印を捺すのです。』

ト晉太郎は證書を能くも見ず、實印を出して、云はるゝまゝにベタ〳〵と捺して

賢亮へ返し、

晉太「先生、さア今の五十圓を。』

ト一層氣の急くこなし。大五郎は證書を鞄に藏めて、兌換券を數へて、賢亮へ渡し、賢亮から晉太郎へ渡す。晉太郎は兌換券を受取るより早く、直ぐに下手へ行かうとする。大五郎は呼止めて、

大五「おい〳〵、晉さん、數を改めねえでも可いのかい。』

晉太郎は兌換券を數へて、其一圓券二十枚なるを見るより、

晉太「えッ、こりやア僅た二十圓しきやア無い。』

大五「二十圓で惡きやア、返すが可いよ。前の地面の半金が四百圓に、利息が八十圓、あの家を五百圓の抵當に取りやア、殘金が丁度二十圓になるんだよ。』

晉太「えゝ、僅た二十圓ばかし。』

ト晉太郎は兌換券を大五郎へ返さうとして、返しかねる體。

賢亮「晉さん、彼お宅を五百圓なら、安い方でもない樣ですな。それとも私の顏を潰す氣なら、其二十圓を間さんに返しなさるが可いさ。地面は流れるか、美しいのは泣くか。それも可いですな。』

大五「晉さん、返すなら、さア早く返して貰はうかね。』

晉太郎は仕方が無いと云ふ思入、

晉太「聞さん、彼家ばかりは流さない積りだから、こゝ、此でも結構です。」

ト晉太郎は足も空に退場。途端にお妻は外の座敷を廻つて來た心で、下手花壇の横より新座敷へ來掛る。大五郎と賢亮は巧く行つたと云ふこなしで、

大五「晉の野郎の馬鹿さ加減にも、呆れ返らア。」

此時お妻は座敷の横手に來て、ふと耳に入る二人の話に、覺えず足を止めて立聞して居る。二人は斯くとも知らず、

賢亮「所が、馬鹿でなかつた日にやア、えッ大將、僅二十圓で、一月の中に、あの大屋體がお前さんの物に成りッこは無いからね。」

大五「此方の爲には、御方便に出來て居る奴かね。」

賢亮「御方便序に、僕の方にも、今此處で御方便に預りたいね。」

大五「ヘン、相變らず拔目が無えなア。」

ト大五郎、鞄の中から、いくらかの兌換券を紙に包んで與へる。賢亮は大仰に押戴いて、

賢亮「チエ、忝ちけねえと云ひたい處だ。久振で今夜はお出掛けなさるかな。」

大五「其面で態々品川くんだりまで、振られに行くたア、随分物好な藪先生さね。」

賢亮「藪にも功の者ありも古いが、面で女を買ふんぢやねえも古いか。」

大五「しッ。」

ト大五郎は突然手を上げて賢亮を制する。賢亮が體を伸して覗く途端に、お妻座敷の前に出る。大五郎と賢亮は吃驚して顏を見合せ、三人鳥渡氣味合の體。お妻は何ほ酒肴の來り居らざるに驚いた介で、

お妻「おやッ、まだお膳がまゐらないんですか。」

賢亮「まだ參りませんかとは、お妻さんの詞とも心得ないぜ。ぜんは急げとたとへにもあるぢやないか。」

お妻「何うも濟みません。籠合つてたんで、他の御座敷と間違へたんでせうよ。旦那、何うも濟みませんでしたね。唯今。」

トお妻が下手へ行かうとした時、女中のお梅とお竹が膳、下物などを持ち登場。お妻は見るより、

お妻「お前達は何を爲て居たんだよ。間さんの旦那の御座敷に、いまだにお膳も出て居ないぢやないかね。御贔屓になすつて下さるからッて、餘り失禮過ぎるよ。本統に氣を付けなくッちやアいけないよ。旦那、何うも濟みませんでしたね。」

お梅「籠合つてまして、つい遅なはりまして、何うも濟みません。」

お竹「それに泥醉のお客さまがありましたので、つい、先生、勘忍して頂戴よ。」

トお妻も手傳つて、膳を据ゑ、猪口を進めなぞする。大五郎と賢亮は猪口を擧げて、

大五「まア前の事ア何うでも可いや。お妻さん、酌を頼まうぜ。」

お妻「はい。」

トお妻は大五郎へ酌をする。賢亮はお梅に酒を注がせながら、

賢亮「其代りにはお妻の君、このところより外へはやらじと、」

大五「古くッて不可ねえ。いよ／＼、藪井竹庵老だ。」

お妻「先生が居らッしやるんですもの、外へなんぞ參るもんですか。はいお酌。」

賢亮「まゝ一つ獻じよう。」

お妻「いえさ、おーさへ／＼ですよも、目黑くさいわね。」

ト各々挨拶ある。お梅は下手を見て、頓狂な聲で、

お梅「あらッ親方か。姐さん、白金の親方が入らしってよ。」

お妻「さう、源次親方がかい。」

鐵道工夫の取締白金に住める阪本源次、年季三十二三、好の打扮。源次子分鐵道工夫の伊太郎、二十三四、背中に丸に鐵の字を白く抜いた法被を被つた好の打扮、花道より登場。

お妻は直ぐに大五郎等の座敷を離れて、いそ／＼と源次を迎へ、

お妻「親方、能く來て下すつたわねえ、先刻ッから、何様に待つこたか知れないんですよ。」

源次「早く來ようと思つたが、つい抜けられない用があつたんでね。」

お妻「でも、能く來て下すつたわねえ、おや、伊太さん、お入でなさい。」

伊太「お妻さん、御目出度う。」

お妻「難有う。お蔭さまでね。」

お梅「親方、入らッしやい。」

お竹「伊太さん、お入でなさい。」

ト お梅もお竹も大五郎等を残して源次等の傍に來る。大五郎と賢亮は早くも不快を感じた體。お妻は源次と伊太郎を、大五郎賢亮等の隣の座敷に案内する、其前にお梅が隣の唐紙を閉切る。

源次「剛氣と賑かな様だね。」

お妻「仕合せとね、天氣都合は能う御座んすし、午時ッからは手が廻らない位でしたわ。此でも今少時前から、いくらか樂になつたんですよ。」

源次「何にしても結構だね。今日は伊太公に、思入れ御馳走を爲て遣りてえんだ。伊太、何か下物を望むが可いや。」

お妻「伊太さんは何が好きなの。」

伊太「なアに、下物なんざ何うでも可いんだ。」

源次「飲みせえすりやア可いッて云ふんだらう。お妻さん、何か見繕つて遣つて呉んな。」

お妻「ぢやア、さうッて事にして、親方のも私に委して下さるわね。」

源次「可い様に頼まア。これはぽッちりだが一同へ分けて遣つて呉んねえ。」

ト 源次、一同への祝儀包をお妻へ與へる。お妻は受けて、

お妻「何うも濟みません事ねえ。お梅、お竹、親方から御祝儀を下すつたよ。お禮をお云ひ。」

お梅お竹「親方さん、難有ら御在ます。」

お梅「伊太さん、親方さん、宜敷く願ひます。」

ト お妻、お梅、お竹、祝儀の禮を述べる。お妻はお梅お竹に對ひ、

お妻「大急ぎで、可いかい。それから、皆の店の人達へ、後で親方にお禮をお云ひッて云ふんだよ。」

これにてお梅お竹、退場。

伊太「親方、私やア、牡丹て奴に、しみ／＼お目に掛つた事がねえから、鳥渡行つて來やすぜ。」

源次「なに、牡丹を知らねえ。見ッともねえ事を云ふぢやアねえか。見て來ねえ。」

伊太「知らねえこたアねえけれど、鳥渡お馴染になりてえんだ。姐さん、親方を頼みやすぜ。」

お妻「伊太さん、行つておいでなさい。」

ト 伊太郎、花壇の方へ行き、彼方此方を見ながら座敷の後に入る。お梅、膳を持つて登場。

お梅「親方、ようお遲なはりました。」

ト お妻お梅、源次へ膳を進める。

源次「何うして遲い處ぢやアねえや。滅法早くして呉れて難有え。お梅坊、お前が氣を利かして呉れたんだな。」

お梅「親方の事ですとね、一同が俟合ふんですも

の、ねえ姐さん。』
　お妻、源次に酌をしながら、
お妻『全くお梅が御云ひの通りですよ。親方が一日だッてお見えでないと、家中親方の噂ばかし爲て、日を暮らす位ですよ。』
源次『さうかい。虚構にしても左様云はれりや好い心持だ。お妻さん、一杯喫んねえ。』
お妻『はい。』
　ト源次、お妻へ猪口を差す、お梅、酌を爲る。
　此内隣座敷の大五郎と賢亮は、源次が好遇さるゝのに業を煮やし、不平のこなし色々あり、此時賢亮、溜りかねて掌を鳴らす。
お梅『お呼びなさいまして。』
　ト大五郎等が座敷の前に來る。
賢亮『何だ、お呼びなさいましたかだと。呼んだから來たんだらう。』
お梅『はい、何か御用で。』
賢亮『用が無いのに呼ぶ奴があるか。』
お梅『ですから、何つたんで御在ますわ。』
賢亮『先刻命けた銚子の代りは何うしたんだ。おい、之を見ろ。』
　ト賢亮、徳利を振つて見せて、
賢亮『馬鹿にしやがると、承知しないぞ。』
お梅『どうも済みません、つい籠合つて居たもんですから。』
賢亮『何だと、籠合つて居た。虚構を云ふなよ。餘所の座敷にやア、二人も三人もいちや〳〵して居やがつて、籠合ッて居ましたッて云ふ事があるか。』
お梅『つい、あの、何だもんですから、どうも済みません。』
賢亮『何だもんですからとは何だ。土地の者だと思つて、馬鹿にするなよ。』
　ト賢亮、頻りに怒立てるのを、大五郎は制しながら、
大五『先生、止しねえよ。人足と同一に見られねえだけが、まだしも目付もんだ。そろ〳〵出掛ける事にすりやア、いさくさはねえや。』
お梅『あらッ旦那、何卒其樣事を仰有らないで。』
　トお梅、當惑してうろ〳〵する。お妻は源次に目顔で、少し待つて居て下さいと頼んで、隣の座敷の前に來て、
お妻『旦那も先生も、何卒ねえ、行屆かなかつたのは、全く私が悪いんですから、何卒勘忍して頂戴な、ねッ後生ですから。』
　トお妻、二人へ謝しながら、
お妻『お梅や、早くお銚子を持つてお出で。』
お梅『はい、唯今。』
　トお梅は急いで下手に退場。
お妻『先生、後生ですから、何卒ねえ、お坐んなすつて。』
　トお妻は立掛けて居た賢亮を和める。賢亮は詮方が無いと云ふ介にて坐り、
賢亮『お妻さんにも似合はないぢやアないか、何をしにお前の處に來るか位は。』
大五『先生、もう可いや。』
　ト大五郎は先刻立聞された事があるので、多少お妻へ氣を置くと云ふ心で、強い事も云ひ得ぬこなしにて、
大五『お妻さん、心配しねえが可いよ。先生は何うも多飲ふと不可えんでね、悪い癖さ。』
賢亮『おい大將、多飲はうにも、銚子が唯た一本。』
大五『いゝッて事さ、私に委しとくが可いぢやないか。』
お妻『旦那の樣に云つて下さると、何々済みませんね。』
　お梅、下手より登場、銚子を持ちながら急足にて大五郎等の座敷に來る。
お妻『お梅、此方にお付き申して居なくッちやア

不可いよ。」
トお妻は大五郎と賢亮とに酌を爲て遣り、直ぐに源次の方へ來たのをお梅が後から尾いて來て、
お梅「姐さん、鳥渡お顏をお貸しなすつて。」
お妻「私に用がおありなの。」
お梅「え〻鳥渡。」
お妻「用があるんなら、此處でお云ひなね。親方の前なら、何をお云ひだッて大丈夫だわ。」
お梅「ですけども。」
お妻「私が可いッてッたら、云ふが可いぢやないかね。」
お梅「上原の若旦那が、是非姐さんを連れて來いッて、先刻からプリ／＼して居らッしやるんですよ。」
お妻「若旦那にも困るわねえ。」
トお妻は眉を寄せながら、
お妻「後で行くからね、お前は聞の旦那の方に行つて〻お呉れ。」
お梅は大五郎等の方へ行く。
源次はお妻の困つたらしい顏を見て、
源次「お妻さん、其若旦那てえのが、大層凝つて來るッてこッたね。」
お妻「實に困ッ了んですよ。」
源次「餘り困る方でも無からうぜ、世間の噂を聞いた所ぢやア。」
お妻「世間の噂には、私と若旦那と、深い戀情でもある樣な事を云つてるさうですが、私の方ぢやア、ねえ親方、何とも思つてるんぢや無いんですよ。」
源次「何うだかね。」
お妻「親方に隱す私ぢやアありませんよ。」
源次「さうかねえ。それだと、其若旦那てえなア、隨分可哀さうな譯なんだね。」
お妻は思入があつて、
お妻「可哀さうな事は、全く可哀さうな人ですよ。ですけどもね、私を何樣に思つて下すつても、弟見たいな若旦那は、何だか蟲が好かないし、私が斷らうだと思ふ人は、彼方で合手に爲て下さらないし。」
トお妻、源次の顏を鳥渡見て、
お妻「せめてはねえ親方、御猪口でも戴かして下さるが可いわ。」
トお妻、源次の前の猪口を引奪つて一息に飮む。途端に賢亮、大分醉が廻つたこなしにて隣座敷から柱につかまつて覗かうとする。
お梅「あらッ、先生、其樣事をなすつちやアいけませんよ。あらッ、先生、いけませんて云ふのに、あらッ。」
トお梅が止めても、賢亮、聞入れず、醜態をあらはに出して覗く。源次は賢亮を見て煙管を逆に持つて屹となる。お妻は氣を揉むこなし。處へ、伊太郎、牡丹を見て歸つて來た心で出來り、斯くと見るより、つか／＼と駈寄り、
伊太「野郎、なによ爲やがるんでい。巫山戲た眞似を爲やアがるない。」
賢亮「何だ人足めッ、失敬な事をいふな。」
伊太「酒を喰へ醉ッ堪め、大口を利きやアがると殴り仆すぞ。」
賢亮「殴り仆すと。さア殴り仆せ。」
ト賢亮、飛下りて伊太郎と打合ひ、取組合ふ。お妻、お梅、止めようとしても手がつけられず、
お妻「伊太さん、お止しよ。親方、止めて下さいよ。」
お梅「旦那、止めて下さいよ。あらッ、先生、お止しなさいッてば。」
此内、大五郎も源次も座敷から下りて、兩方から賢亮と伊太郎の間に割つて入り、漸く二人を引放す、賢亮と伊太郎

は背ほ飛掛らうとするのを、大五郎と源次が支へて、

大五「先生、お前さんが悪いんだ……まア可いッてこと。」

源次「伊太、詰らねえ眞似をするなよ。」

お友「伊太さん、後生だから、我慢してお呉れよ……先生もね、何卒、御勘辨なすつて下さい。」

ト お妻も雙方を和める。賢亮も伊太郎も稍と鎭まる。

大五郎は源次に對ひ、

大五「もし、白金の親方、御挨拶を致すのは初めてですが、何卒ねえ、酒の上の出來事だと、胸を撫つてお呉んなせいた。」

源次「間の旦那、申後れたなア、御勘辨を願ひやすが、旦那の方で、水に流してお呉んなさりやア、私の方でも否えでさア。」

お友「間の旦那、源次親方、何うも難有う御在ます。」

大五「白金の親方、お互に跡に遺恨を殘さねえ樣に、仲直りに一座をして、わッと一ッ騒ぎやせうかね。」

源次「さうしやせうよ。」

お友「さうなすつて下さると、私も嬉しう御在ますわ。」

ト此處に店の男女一同登場、源次に前の祝儀の禮を云はうとするのを、源次は押止め、

源次「おい、一同待つて呉んねえ。」

ト大五郎に對ひ、

源次「間の旦那、御手を拝借しやして、今の喧嘩の仲直りと、松葉屋の座敷開の祝をかねて、鳥渡しめようぢやアありやせんか。」

大五「それが可うがせう。」

源次「ぢやア、一同も手を貸して呉んねえな。」

ト一同手を拍つて、三度しめる。（幕）

同く返し　馬頭觀音前の場

舞臺は目黒村の一部、一面に奥深き孟宗藪を見たる小路の心。藪の中よりも一條の小路、上手奥より斜めに舞臺中程につきあり。小路の入口に馬頭觀世音立たせたまふ。

幕開くと、晋太郎の從妹にて許婚なるお米、十七八歳、好の打扮にて花道より出來り、物思はしげなる樣子にて、花道附際まで來りし頃、上手より上原の僕伍八、二十八九歳、好の打扮、晋太郎の弟松二郎、四五歳、病氣の體なるを背負ひ出來る。これも深き思に沈みたる體にて、擦れ違ひて行過ぎようとする。松二郎、お米を認めて、

松二「新家の姉ちやん。」

ト聲を掛ける。これにて、お米も伍八も立止り、振返りて、其と認め、互に歩寄りながら、

お米「おや、松ちやん、何處へお行でなの。」

松二「坊お醫者ちやまへ行くの。」

お米「さう、私松ちやん處へ行くのよ。阿母ちやんはお在宅なの。」

ト お米は松二郎と伍八へ掛けて問ふ。伍八は丁寧に會釋をなし、

伍八「御隱居さまお宅に居さッしやるでがすよ。」

お米「さう。」

ト お米は晋太郎の事も問ひたいけれど問ひ得ぬ介にて、

お米「伍八どん、お醫者さまへお行でだッて、何人か病人が出來たの。」

伍八「へい、御病人は坊さまでがすよ。」

ト此時はもう伍八の背に大儀さうに頭を附けて居る松二郎を、お米は驚きながら差覗き、

お米「えッ、松ちやんが病氣だッて。松ちやん、

何うお爲なの。』

伍八『なにね、今朝ッから、えらく咳欬さッしやるでね。』

ト伍八は振返つて、無理にも松二郎の顔を見ようと云ふ介にて、

伍八『坊さん、苦しい事ねえかね。』

お米『何だか苦しさうね。』

トお米も覗いて、

お米『松ちやん、苦しいかい。おゝ、いや〳〵をお爲だね。おやア、そんなでも無いの。伍八どん、咳嗽が出るッて云ふのに、お醫者に連れてかないで、來て貰へば可いのに。』

伍八『私も左樣思つたで、御隱居さまは、今日一日樣子を見べい云はッしやつたでがすが、なに左樣でねえ、一日だッて可愛い坊さまを、お醫者に掛けねえ法は無え。賢亮先生呼ばつて來べい思つて、私三度も呼ばりに行つたでがすよ。』

お米『まア御苦勞だつたねえ。三度も呼びに行つても、來て下さらないのかねえ。』

伍八『來て呉れるにも呉れねえにも、今朝ッから宅に居ねえッて云ふだからね、はア仕樣がねえだ。』

お米『それだと、今お行でだッても。』

伍八『今行つて居ねえでも、明日までには歸つて來べいから、私坊さまと寄込んで遣りますだ。』

お米『まア、伍八どんは、何時でも面白い事ばッかし。』

トお米、笑ふ。伍八も催されて笑つたが、

伍八『お米さま、御隱居さま御一人だから、嘸ぞ淋しかんべい、早く行つてお上げさッしやるが可え。私、ちよッくら行つて來ますだ。』

ト伍八、行き掛ける。お米はあわてゝ、

お米『伍八どん。』

伍八『呼ばッしやつたかね。』

ト伍八、立歸る。お米はきまりが惡さうに、

お米『叔母さんがあの、唯た一人で。』

伍八『だから、淋しかんべいよ。』

お米『さうね。』

トお米は覺えず太息を吐いて、

お米『伍八どん、あの、晋さんは、あの今日も留守なの。』

伍八『小旦那かね。』

ト伍八も覺えずしをれて、

伍八『小旦那には、私はア、呆れて了つただ。朝、飯かッこむか、ぷいと出掛けて、夜だッてはア、私が寢る時分までも歸らねえだもの。』

お米『夜もお歸りでないの、何處へお泊りなの。』

伍八『なにね、歸らねえ事は無えけんど、何時歸らッしやるか、朝見ると、寢床引被つて、高鼾かいてるだよ。』

お米『何うして彼樣にお成りなのか、ねえ伍八どん。』

トお米は胸が一杯になつた介にて垂頭く。伍八も掌を當てゝ水鼻を啜りながら、

伍八『お米さま、小旦那が何うして彼樣に成つたッて、お前さまが問はッしやる腹の内を考へると、私はア、お前さまに氣の毒でなんねえ。歴としたお前さまを、あの松葉屋の阿魔ッちよに見替えた罰だけでだッて。』

お米『あれッ、伍八どん、其樣事をお云ひでは、晋さんに惡いよ。私なんぞは、そりやれ、何うせ、容貌は惡いし、野暮な田舍者だし、柳橋とやらでも評判の藝者衆、此目黑でも小町と云はれてお居での、あのお妻さんに見替へられたッて、それはもう當然だしね、晋さんを怨む氣は無いけれど。』

伍八『さうでねえ、思入怨を云つて遣るが可えだ

に、お前さまが餘り溫和し過ぎるで、小旦那が可え事にして、放蕩つくすだよ。』

お米「いいえ、なに、私の事なんか、何うでも可いけれどね、叔母さんが、心配ばかし爲てお居でだから、見る都度に、漸次と窶れて、頃日は顏色なんぞも……伍八どん、私は其が悲しいよ。』

ト お米はそッと涙を拭く。伍八は續けさまに水鼻を啜つて、

伍八『尤もだ、お米さま、尤もだ。あゝあ、上、中、下と三つに分れた目黑村を、一つに引括めても、一と云つて、二が無えと云はれた、上原樣の御隱居だに、これ伍八、明日の物があるべいか、今夜の物は何うしべいかと、私に相談しる都度に、御隱居も泣かッしやれば、私も一緒に泣きますだ。』

ト 伍八は腕にて涙を拭く、お米も一入悲しき思入、

お米「私もね、叔母さんの不自由な事を知つてるから、何うにかしたいと思つて、いろ／＼氣を揉んでるの。だけども、私には何うしようッて力はないし、相談したいと思ふ阿母さんは、伍八どんも知つてる通り、自分さへ能きやア可いッて人だしね、私は唯思ふばかしで、何うする事も出來ないから、叔母さんへ御氣の毒でならないよ。」

伍八「お前さまの御親切は、御隱居も喜んで居さッしやります。隨分多くある親類だけんど、誰一人見舞つて呉れる人もねえに、お米だけが來て呉れるで、そればかりが樂みだッてね、お前さまの事べい云つて御座らッしやるだ。」

お米「叔母さんが私の事を、其樣に思つてお呉れだのに、私は手助も出來ないから、何だか極が惡くッて、門を入るのも辛いと思ふよ。」

伍八「なアに、お前さま、其樣事思ふ御隱居でねえよ。早く行つて上げさッしやれ、何樣に嬉しがるか知んねえよ。」

お米「ぢやア、私、叔母さん處へ行つて見るよ。」

伍八『さうして上げさッしやい。』

お米「ぢやア、伍八どん、行つてお出でよ。』

伍八『お米さま、直きに歸つて來ますだ。」

お米「待つて居るよ。」

ト お米は伍八の背の松二郎を覗いて、

お米「おや寢てお居でかい。」

ト お米は伍八と別れて行掛けたが、

お米「あの、伍八どん、もしもね、晉さんを御見掛けだつたら、

伍八「無理にも引張つて歸りますだ。」

お米「頼みますよ。』

ト お米は上手へ、伍八は下手へ別れようとした時、お米は藪中の小路に晉太郎を認めて、

お米「おゝ、晉さんが。』

伍八「えッ、小旦那が。」

お米「御覽よ、伍八どん。』

ト お米、伍八と共に屹と竹藪の中を見る。晉太郎、微醺を帶びたこなしにて、お妻に送られて藪中の小路を辿り來る樣子。お米伍八は下手藪蔭に身を寄せて窺つて居る。

お妻「若旦那、私もう、此處で御暇しますわ。」

ト お妻、藪中にて暇を告げる、晉太郎は何ほ別れともない介。

晉太「まだ可いぢやないかね。」

お妻「私はね、何處までだッて、御供をしたいんですが、またお客さまがありますもの。」

晉太「へえ、さうかい、外にお客があるから、私を送るのは可厭。」

ト 晉太郎はむッとした介にて、

晉太「どうせ左樣でせう。もう可い、もう送らなくッたッて可い。お妻さん、お歸り、早くお歸り／＼。」

ト晋太郎は腹の立つ介にて、奥から出て來る。お妻は持餘した體にて、晋太郎の後から出口まで來て、

お妻「あら、待つて頂戴よ、若旦那。」

晋太「もう送つて呉れないたッて可い。誰が送つて貰ふものか。」

お妻「まアお待ちなさいッてば。」

ト晋太郎、實はお妻に止めて貰ふ積りで、つか〳〵と上手へ行く。お妻は其儘見て居る。晋太郎はもう止めるか〳〵と思ひながら、お妻が止めないので、歩が漸次鈍る心にて、終に立止り、鳥渡お妻を見返る。お妻は手招きをしながら、こなしにて此處まで來いと云ふ。晋太郎はすねる介、お米は嫉妬の心にて氣を揉み、伍八は呆れる介。

お妻「若旦那、鳥渡此處までいらッしやいよ。私が惡かつたんだから、謝罪りますわ。だから此處まで……なぜ其樣に、私に氣が揉ませたいんだらうねえ。」

ト お妻は凝乎と晋太郎を見る。

晋太「なに、私が氣を揉ませるッて。何時私が、お前に氣を揉ませた事がありますっ。」

ト晋太郎は漸次お妻の方へ來ながら、

晋太「あゝ惡かつた。今日の座敷開に、私の行方が遲かつたし、御祝儀を出すのが後れたし。」

お妻「あらッ、其樣事ぢやアありませんよ。」

晋太「ぢえ、左樣でない。なに左樣でない事があるものかね。私とお前とは、今でこそ、お前に心願があると云ふから、唯兄妹見たいにして居ても、來年は夫婦になる約束だし、それを一同が知つてるのに、私の行きようが遲かつたし、お前の見得に成るほどの事も出來なかつたし、嘸ぞ肩身が狹かつたらう、氣も揉めたらうさ。お妻さん、勘忍してお呉れよ。」

ト此內晋太郎はお妻の傍に來る。お妻は挨拶に困る介にて、

お妻「店や女中へなら、彼だけ爲て下さつたんですから、私の肩身が狹い所ぢやありませんよ。」

晋太「なに左樣でないよ。私は何樣にでも爲たいがね、明日もあれば明後日もあるから、其積りでね、まだ此は殘してあるんだよ。」

ト紙入を取出し、

晋太「まだ此中に、十圓ばかしあるんだから、寧そ彼時、一緒に遣ッ了やア可かつたッけ。」

お妻「そんな事を爲て下すつちやア、却つて私が困りますわ。」

晋太「なに左樣でないよ。おゝ左樣だ、お妻さん、之をお前に上げるから、店へ持つてッて、一同に分けて遣つてお呉れ。」

ト晋太郎は紙入をお妻へ渡さうとする、お妻は其を斥けて、

お妻「そんなに爲て下さらないたッて、先刻のだけで澤山ですわ。」

晋太「なに、さうでないよ。」

お妻「いゝえ、あれでもう澤山ですから。」

晋太「さうでないよ。」

ト晋太郎、紙入を渡さうとする、お妻は取らじと爭ふ。先程から晋太郎の樣子に、呆れもし腹も立ち乍ら、怺へて居た伍八、此時つか〳〵晋太郎の傍に行く。お米も其後に引添ふ。

伍八「コレ小旦那、馬鹿つくすでねえよ。おらがに寄越しなさろ。」

ト伍八は晋太郎の紙入を引奪る。晋太郎もお妻も、初めて伍八お米を見て、共に驚く。晋太郎はお妻の手前面目ない介にて、

晋太「えゝ、何をするのだ、おれの紙入を。伍八、貴樣は、えゝ返しやアがれ。」

ト晋太郎は伍八に食つて掛る。伍八は

お米を小楯に取る。お妻は晋太郎を止める。

伍八「何をするも無えだ。お前さまこそ、なに馬鹿つくすだよ。おらア彼處から見て居たが、お前さま今其阿魔ッちよに、何云つてただよ。此紙入遣んべいから、宅に歸つて、店の奴等に打撒いて哭んろッて、能くまア彼樣な馬鹿げた口が利けただよ。」

晋太「なに、馬鹿げた口だと。貴樣こそ、主人の乃公に、能くも其樣口を利きやがつたな。」

伍八「おらア利くだよ、何樣口でも利くだよ。御主人さまの御前さまにだッて、おらア利くべき口なら利きますだよ。お前さまが馬鹿つくすだもの、おらアまだ〳〵、云ひてえ事が、こ、こ、此胸に、え丶口惜しいぞッ。」

ト伍八は紙入を持ちたる片手にて口惜しさうに胸を搔挘る。

お米は涙含んだ儘垂頭く。お妻は倘ほ急込む晋太郎を止めながら、

お妻「若旦那、其樣にお怒んなさらないで、機嫌を直して頂戴な。彼方だッて、若旦那の爲を思つて、彼樣にお云ひなさるんですからね、若旦那が惡くお思ひなさる事はないんですよ。さッ、機嫌を直して、御一緒にお歸んなさいよ。ね、さうなさいよ。ねえ貴女、さうなすつた方が、能う御座んすわねえ。」

トお妻はお米に對つて云ふ。お米は頭を上げてお妻に顏を見合せたが、此女故だ憎い女だと思ふけれど、何も云得ぬ介にて、また垂頭く。晋太郎はお妻の前にて、伍八に何かと云はれたのが、きまりが惡いのと腹が立つのとで、倘ほ鎭まらず。

晋太「お妻さん、お前は其樣に云ふがね、伍八め、主人の乃公に對つて、今の樣な。」

お妻「もう可いにして頂戴ッて云ふのに。若旦那は、私が賴んでも、聞いちやア下さらないんですか。」

晋太「きッ、聞かないッて云やアしないぢやないか。」

ト晋太郎、稍氣勢が挫ける。

お妻「ぢやア、聞いて下さるんだわねえ。え、聞いて下さる。能く聞いて下すつたわねえ。さう伺つて、私も安心しましたわ。ぢやアね、もう何にも仰有らないで、お宅へ歸つて頂戴よ。ねッ、能う御座んすか。」

ト晋太郎が爲樣事なげに首肯いたので、お妻は喜びながら伍八に對ひ、

お妻「あの、お前さん、若旦那のお供をなすつて、早く御歸んなさいよ。」

ト伍八も此古狐めがと云ふ介にて横を向く。お妻はお米に對ひ、

お妻「貴女、もし貴女、若旦那が機嫌をお直しでしたから、御一緒にお行でなさるが能う御座んすよ。」

お米も垂頭いた儘返辭をせぬ。晋太郎は伍八とお米を憎さうに睨んで、

晋太「おい、米ちやん、伍八、お妻さんが彼樣に云つてるのに、耳がないのか、おい伍八。」

お妻「あらッ、また怒るんですか。」

晋太「なに、怒つてるんぢやないが。」

お妻「ぢやア、もう何にも仰有らないで、ね、能う御座んすか。私はお暇してよ。」

晋太「えッ、歸るんだッて。」

ト晋太郎は俄かにしよげる。お妻はお米と伍八に對ひ、

お妻「あの、左樣なら、御免なさいよ。若旦那、左樣なら。」

トお妻は晋太郎等三人へ暇を告げ竹藪の小路を歸り行く。晋太郎は殘惜しげに、つか〳〵と竹藪の入口へ行き、お妻の後姿に見惚れながら、

晋太「お妻さん、明日また行くよ。」

トお妻は振返つて、
お妻「もう暫時、辛棒なさいよ。」
ト云捨てゝ、藪の中を上手に退場。晋太郎はお妻に見惚れながら歩む心にて上手へゆき、其姿が見えなくなつても、倘ほ他愛なく藪の中に見惚れて居る。
お米と伍八とは晋太郎の様子に、互ひに顔を見合せ、お米は涙を拭き、伍八は頭を振りながら太息を吐く。其内晋太郎は僅かに我に復つた介にて、お米と伍八を見返り、俄かに懐裡や袂を探して見て、つかつかと伍八の傍に來る。お米は隔てゝ、
お米「晋さん、久濶ですねえ。」
晋太「えッ、久濶、さう〳〵、何時逢つたッきりだッけかね。」
お米「さうねえ、私ももう、忘れるほどですね。」
晋太「なに、其様でも無いんだが、米ちやんの家と私の家と、餘り離れてるもんだから、つい逢へなかつたんだよ。」
お米「さうかも知れないのね。だけども、叔母さんには、私毎日、晋さんのお家でお目に掛つてるけどもね、晋さんは、何時行つたッて、ねえあの、何處とかへばかしお行でだッて、ねえ伍八どん。」
トお米の語に、晋太郎、流行にきまり悪き介。伍八は松二郎を揺上げながら、
伍八「お米さまが云ひなさる通りだよ。コレ小旦那、お前さまは知んねえけんど、お米さまは一日だッて、お袋さまを訪ねて來さッしやらねえ事はねえだよ。それだのにお前さまはまた、一日だッて宅に居さッしやる事ねえだから。」
晋太「伍八、解つてるよ。もう云はないだッて分つてるよ。」
伍八「何だッて、云はねえだッて解つてるだ。所が、解んねえだよ。お前さまの性根玉、おらがにはハア、何考えたッて解んねえだよ。」
晋太「解らなきやア其で可いよ。そんな事は何うでも可いから、伍八、其紙入を返して呉んな。」
伍八「いんにやア、返す事なんねえだ。」
ト伍八は紙入を懐へ入れようとする、晋太郎はまた急込み、
晋太「伍八、お前は返さないのかい。」
伍八「左様でがすよ。」
晋太「其紙入は私の紙入ぢやないか。」
伍八「お前さまの紙入だッて、馬鹿つくす爲の紙入だもの、おらは持つて歸つて、お袋さまに土産にしますだ。」
晋太「えッ、阿母さんに。」
伍八「さうだとも。」
ト晋太郎は母の手に入れば、我自由にならず、お妻へ逢ふ頼りも無いと、口惜しげに考へて居たが、屹と伍八を見て、
晋太「伍八、お前は何うしても返さないかい。」
伍八「お前さま欲しきやア、お袋さまから貰はッしやるがえゝ。」
晋太「伍八。」
ト晋太郎は呼掛けると共に、伍八へ飛掛らうとする。お米、晋太郎を支へる。晋太郎、お米を突放す。お米、伍八へ倒れ掛る。伍八も危く倒れようとした騒動に、伍八の背の松二郎、驚き覺めて泣出す。晋太郎も松二郎か泣出したので、覺えず躊躇ふ。お米は涙ながら松二郎に抱付いて、
お米「松ちやん、嘸ぞ吃驚お爲だらうね。まア、きい〳〵が悪いんだのにねえ。だけども、なにも可怖い事は無いんだよ。松ちやんの兄ちやんだよ、松ちやんの兄ちやんだよ。」
松二郎は僅かに大儀さうに頭を擡けて、晋太郎を見て、
松二「兄やア、兄やア。」

ト松二郎に呼ばれて、晋太郎も松二郎の病氣が氣に掛る介にて、伍八の傍に立寄り差覗き、

晋太「松坊、どうした。え、きい〳〵が惡いッて、何處が惡いの。」

ト晋太郎は、もうぐッたり突伏した松二郎の頭に手を當てゝ、

晋太「おゝ、これはえらい熱だ。」

ト伍八は乾と晋太郎を見て、

伍八「小旦那、坊さまの其熱が、お前さまにも分るだね。其熱が解るなら、御兄弟の情合だけは、まだしも忘れて居さッしやらねえだ。コレ小旦那、お前さまの性根玉の、諸所が惡いでね。此坊さまを見さッせい。其大熱だに、良え醫者さまに掛けてえにも、其工面さへ出來ねえのは、何人の所爲だと思はッしやるかね、お袋様の云はッしやるには、此樣情ねえ境界になつたのは、天命と諦める外はねえ、松坊は可哀想だけんど、此子の運が惡いからだと、私は諦めて居るだから、もうお醫者にも掛けねえッて、あのお袋さまが熱い涙を、ほろ〳〵ほろ〳〵零しなさつただ。」

ト伍八は腕に額を摺付けて泣く。お米も顏に袖を當てゝ泣く。晋太郎も鳥渡顏を背向けたが、

晋太「阿母さんは愚癡ッぽいから、其樣事を云ふんだよ。なアに、賢亮さんなら、何時だッて呼べもするし、藥禮だッて、今日が今日遣るにも及ばないし、伍八、何故賢亮さんに見せないんだよ。」

伍八「お前さまが云はッしやらねえでも、下手ッ糞でも詮樣事が無えでね、今賢亮さまへ行く所だよ。」

晋太「それなら、早く行くが可いよ。」

伍八「それは行きますだ。だけれどね、小旦那、私が今云つたことを、お前さまは何う聞かッしやつたかね。」

晋太「阿母さんが餘り愚癡ッぽいんだよ。彼樣に愚癡ッぽくッても、困ッ了はア、ねえ米ちやん。」

お米は晋太郎の語が餘り無情に聞えたので、涙の眼に情なささらに晋太郎を見上げたが、何も云はないで、直ぐにまた袖を顏へ當てゝ泣く。伍八も情なさに、涙に暮れて居る。

此時間大五郎登場。藪中の小路より來掛り、晋太郎等三人を見るより、四五本重合つて生えた竹の根方に身を潛める。

伍八は聽て涙を拂つて、

伍八「小旦那、あのお袋さまを、お前さまが云はッしやる、其愚癡ッぽいお袋さまには、誰が爲ましただ。今の境界は天命だで諦める、松坊さまは運が惡いで、もうお醫者にも掛けねえッて云はッしやつた、お袋さまの心の中は、コレ小旦那、何樣に辛かんべいか。おらは其時、泣いて、泣いても泣足らねえだッたに、お前さまは、他事ほどにも思はッしてらねえだね、昔からしがねえ生活をさッしやつたのなら、仕方もねえけんど、目黒きつての分限者、上原樣の御隱居さまだもの、諦めていにも諦められねえのが當然だに、それを諦めたッて云はッしやる、あの心の中の苦しみが、小旦那、お前さまには見えねえかね、あの窶れさッしやつた顏色が、お前さまの眼には見えねえかね。」

お米「晋さん、全くですよ、叔母さんの顏を見るとね、私も、何時だッて、胸が一杯になつて、お氣の毒で〳〵、本統に、かッ、悲しくなるんですよ。」

トお米は聲を出して泣く。伍八も涙に聲が亂れながら、

伍八「それと云ふのが、小旦那、お前さまが彼古

狐に誑かされしやつたばかりだ。」
ト晋太郎はお妻を古狐と云はれて腹の立つ件。
伍八「あの古狐め、田地田畑吸取りやがつて、畜生ッ、畜生ッ。あの畜生めが、上原様の家邸を野原にしても飽し足りねえで、後には晋太郎さまッて云ふ小旦那の、被笑草を生やす氣だんべい。え丶、胴畜生めッ。」
ト伍八は拳を握つて口惜しがる件。晋太郎はもう耐らなくなつた件にて、
晋太「コレッ、伍八、何だと、お妻、古狐ッて。失敬な、何を云ふんだ。お妻はたア、貴様なんぞに、其様事を云はれる様な女ぢやないのだ。それに何だと、上原の邸跡に、晋太郎ッて云ふ被笑草が生えるッて。よく其様な失敬な事を、伍八、能くも云つたな。む丶解つた。貴様は、そッ、其、紙入が欲しいから、それで其様事を云つて、私を怒らして、返さない算段をするんだな。お丶さうだ、さうだ〳〵。其様に欲しい紙入なら、中の金ごと呉れて遣らア。』
伍八もむッとして、
伍八「なに云はッしやるだ、何云ふだよ。おらは其様さもしい氣は持たねえけんど、朝夕の心配に、氣を勞らして居さッしやるお袋さまに、せめては、半月なり、一月なり、樂をさせてえ思ふだから、お前さまに意見もしたけんどなア……なアに、此様金、なに欲しかんべい。返すだよ、持つて行かッせえ、さア返すだよ。』
ト伍八は懐から紙入を取出し、晋太郎へ突付ける。晋太郎は紙入を引奪り、懐中へ入れ、胸を合せて確と押へて、
晋太「不用い金なら、おれが藏つて置く。もともとおれの金だから、だれに遣る事アありやアしない。え丶、馬鹿な奴を相手にして、あ丶、氣がムシャクシャすらア。さうだ、松葉屋に行つて、飲直して遣らう。」
ト晋太郎は藪中の小路へ駈込まうとする、お米、追縋り取付いて、
お米「晋さん、其様事をおしだと、惡いでせう。」
晋太「米ちやん、お前の知つた事ぢやアないよ。」
お米「だッても、それでは餘り……。」
晋太「邪魔お爲でないよ。」
ト晋太郎、お米に取られた袖を、勿義道に振放す。お米、餘されて倒れる。晋太郎は藪中の小路に走入つたが、屹と伍八を見返り、
晋太「伍八、覺えて居ろ。」
ト云捨て丶、晋太郎は藪中深く走り入り退場。倒れたお米は漸く起上り、怨めしさうに晋太郎を見送る。伍八も茫然として見送つて居たが、
伍八「お米さま、小旦那ははア、もう駄目だよ。』
お米「伍八どん、何うしたら可いだらうね。」
ト お米は泣く。
伍八「何うするッて、お袋様に相談するより詮様がねえだよ。斯うしますべい、私坊さまの藥べい貰つて、直きに歸るだからね、お前さまは、前に行つて待つて居なさるが可えよ。
お米「おやア、さうするからね、お前早く歸つてお呉れよ。」
ト伍八は下手へ急いで退場。お米は上手へ行かうとして、何ほ藪中に氣の殘る心にて躊躇ひ、終に思切つて行き掛ける。途端に大五郎、小路より出來り、酒に醉ひたる件。
大五「おい、お米さん、鳥渡お待ち、おい、お米さん。」
ト大五郎、お米を呼止め、お米が見返る間に、お米の前に廻つて遮る。お米は可厭な奴に逢つたと云ふこなしにて、
お米「私、いま急ぐんですから。」

ト駈抜けようとするのを、大五郎は又遮り、

大五『お前さんの急ぐ事も、其用事も知つてるんだから、其で止めたんだぜ。』

お米『何だか知りませんが、何卒通してお呉んなさい。』

大五『通さないたア云はないがね、晋さんなんぞへ、心中立するなア詰らなからうよ。』

お米『何でも能う御座んすから。』

トまた駈抜けようとするのを、また止める。

大五『お妻なんて悪婆に魅かれてる晋さんだよ。詰らねえから止すが可いよ。』

トお米は無言にて駈抜けようとして、また遮られ、段々下手へ来る。

大五『お米さん、お前、もう阿母さんから聞いてるだらう。え、聞いた筈だよ。おいらのお神さんに欲しいともつて、疾うから話が為てあるんだ。阿母さんは承知だッて云ふから、お前だッて諾否はねえ筈だが、此處で逢つたのが幸だ。乃公のお神さんになる氣か、ならない氣か、直接返辭を聞きてえんだ。お米さん、お前否ぢやアねえんだらう。え、何うだね、唯た一言で可いんだ。なる氣か、ならねえ氣か、お米さん、おい、返辭をして呉れたッて可いぢやアないか。』

ト大五郎、益々迫る、お米は無言にて、其虚を窺ひ、今しも其間を得たので、つと上手へ駈抜ける。大五郎が逃がさじと、お米の帯へ手を掛ける、お米は振返りざま、雙手に力を籠めて突放し、一散に上手へ、退場。大五郎は馬頭觀世音へ躓れ掛らうとして、危く踏止つて、残念さうに逃行くお米を見送る。(幕)

二幕目

其一　上原晋太郎宅の場

舞臺は廻り縁附の座敷より庭の體。上手に離座敷あり。前より下手は庭の拵へ也。室内は調度など更になく、わびしき有様なり。

幕開くと晋太郎の母お霜(四十四五歳、縞物の古くよごれたる袷を着る)古き黒塗の火鉢の傍に、身體の加減が悪いといふ體にて坐り、其傍に松二郎、薄布團にくるまつて寝て居る。塚本賢亮、手鞄を膝の横に置き、今しもお霜を診察し了つたといふところにて、聴診器を藏ひかけて居る。下手に伍八、かしこまつて心配さうに打守る。

お霜『難有う御座ます、伍八、お手洗を上げてお呉れ。先生、いかゞで御座ませうか。』

賢亮は伍八が不器用な手附をして持つて来た金盥にて手を洗ひながら、

賢亮『左様、少し熱はある様ですが、なに、大した事は無いでせう。』

伍八『寐付かッしやる様な事はありましねえかね。』

賢亮『イヤ、そんな事も有るまいよ。なに／＼、ほんの一時の事だから、心配する程の事も無からう。』

お霜『夫で安心致しました。昨晩なぞは大分苦しう御座ましたので、臥せる様な事がありはしまいかと、心配したので御座ますよ。』

賢亮は巻莨を出して吸付ける。新家の娘お米、登場。

お米『叔母さん今日は、おや先生。』

ト挨拶する。

賢亮『これは、お米さん、お變りもないかな。』

お米『お蔭様で別に……。』

賢亮『阿母様もお壮健で。』

お米『はい、ついノヽ御不沙汰ばかし致して居ります。』
賢亮『いやノヽ手前からこそ。』
伍八『醫者樣にやアはア、成るだけ不沙汰の方が宜えだれ。』
賢亮『是や一言もない、アハヽヽヽ。』
お米『叔母樣、また惡いさうですねえ。』
お霜『昨夜なんぞは、また胸が痛くッてね。』
お米『熱でも餘程高いんですか。』
賢亮『三十七度七分、脈搏八十一、高熱の方でもないですな。』
お米『何うして左う弱いんでせうねえ。』
　お米は心配さうにお霜の面を見る。
賢亮『なに、或は流行感冒の氣味かも知れないですが、熱は低いから左程氣遣ひな事は無いです。』
お米『左樣で御在ますかねえ。』
伍八『お袋樣の惡いてえと、おらはがんノヽ頭が痛えだ。』
　お霜とお米は嬉しき樣子。
賢亮『いや、伍八どんの主思ひは、實に感心しますな。』
お霜『伍八が此樣にして呉れますので、どれほど氣丈夫だかしれませんよ。』
お米『全くですね、叔母さん。』
伍八『今ぢやアもう、お袋さまばかりだから、心配でなりましねえ。』
賢亮『藥を進けますが、少し飮み惡いかも知れないですから、砂糖でも交ぜてな。』
お霜『難有う存じます。』
　お米は後前を見て、晋太郎の影の見えぬを、物足らぬ樣な面付、少し聲を低くして、お霜に對ひ、
お米『叔母さん、義兄さんは。』
お霜『今日も朝から見えないのだよ。』
お米『まア、さうですか。』
　トお米も手持不沙汰なり。
賢亮『何處へか、出掛けられたですかな。』
お霜『はい、いえ、[illegible]らずで御在ましてね。』
　お米は溜息つき、お霜の窶れた顏色を氣にする樣子にて、
お米『叔母樣、大變に顏色が惡くなつた事。』
お霜『さうかねえ。』
お米『いろノヽ心配お爲だからですよ。』
伍八『弱らッしやるも無理はありましねえ、おらでせえくさノヽするだもの。』
賢亮『いや、直きに御全快です。』
　お霜は仕方がないと云ふ思入。
お霜『いえ、最う持病も同樣だからね。』
お米『だッて、私、見て居ても辛いんですもの。』
お霜『なアにね、此方もう打遣つて置くほか仕方がないんだから、心配しておくれでないよ。』
お米『それでもねえ。』
　トお米は何ほ氣遣はしさう、お霜はふと聞耳立て、
お霜『伍八や、何方かお入來の樣だよ。玄關へ行つて見てお呉れ。』
伍八『ほんに、聲しる樣だ。』
　ト伍八、退場。
お米『義兄さんがお歸りぢやないか知ら。』
お霜『でも何だか大勢の樣だよ。』
賢亮『私はそろノヽお暇しますかな。』
お霜『まア、お宜しいでせう。』
　此時どやノヽと、間大五郎好の扮裝で、山本藤吉、恩田吉次二人共間の子分、入來る。跡より伍八、續いて登場。何れもよき處に住ふ。
お霜『おや、間さん、おいでなさいまし。』
　間は鳥渡會釋。お米の居るのを見て、少し都合が惡いと言ふ心地にて、賢亮にも鳥渡默禮。
大五『まだお小さいのが惡いんですかい。』

お霜「いえ、私が惡いので、どうも困り切ります。」
大五「晋さんが見えない樣だが、御留守ですかい。」
　お霜は答辭に究した體で、
お霜「はい、鳥渡出まして。」
大五「そいつは、困つたなア。」
　お米と伍八とは大五郎が何を言ひ出すかと、心配さうに見守つて居る。
賢亮「聞さん、大分斷う、夏めいて來ましたな。」
大五「左樣さ。」
賢亮「新綠の眺めといふやつは、花にも劣らぬ風情ですな。」
　大五郎は答へるも面倒らしい顏付。お霜は賢亮に氣の毒さうに、
お霜「左樣で御在ますね。」
　大五郎は苦り切つたる樣子にてお霜に對ひ、
大五「晋さんは、直ぐにや歸んなさらねえですかい。」
　お霜はいよ／＼當惑さうに、
お霜「はい、最う歸るだらうとは思ひますが。」
大五「晋さんが居なくても、どうも仕方がねえ、お霜さん、御氣の毒だが、今日は此家邸を受取りに來たんですぜ。」
お霜「え。」
　トお霜と伍八は術なき面付。お米は吃驚する。賢亮は態と意外だと云ふ顏付。
大五「お霜さん、斯うなるなア、疾うから判り切つてるんだ。」
お霜「そ、夫はもう、左樣で御在ますけれど、」
大五「僕だッてね、藪から棒に、こんな事は言ふんぢやアねえ、待てる丈けは待つて上げた積りだ。」
お霜「御尤もで御在ます、夫につきましては、只今、お願ひ申します積りで……。」
　お霜は喉が詰つて、物も言ひ得ぬ體。
大五「左樣ですかい。何を云ひなさるんだか知らねえが、今度といふ今度こそは、最う肯かれませんや。待つと云つても、大抵方圖があるだらうぢやアないかね。」
お霜「は、はい、其は、御尤もさまですが。」
　ト何と云つてよいのか困つた體。
お米「叔母さん、義兄さんも御不在ですしね、其事をお話し申してね。」
　ト小聲で言ふ。大五郎はお米の口から晋太郎の事を言つて、お霜を庇護ふやうにするのが、殊の外氣に障る顏色で、苦々しく見遣る。
お霜「晋太郎も、不在の事で御在ますから。」
大五「晋さんの不在の事ア、先刻から承知して居ますさア。始終お茶屋に酒浸しになつて、滅多に自宅にや居ねえ人だ、ねえ、お米さん。」
お米「最うお歸りでせうねえ、叔母さん。」
大五「晋さんが居ようが居なからうが、話の筋は變らねえんだ。」
　お霜、お米、伍八、當惑のこなし。大五郎の子分吉次、
吉次「旦那、手取早く遣付けた方が、世話なしで宜うがすぜ。」
　ト伍八、吃驚したこなしにて、
伍八「まア待つて吳らッせえ。何云つたッても、小旦那がはア、戸主だからなう。」
　大五郎は伍八の詞は耳へも入れず、お霜に對ひ、
大五「ヘン、立派なお戸主さまだ、自己の身始末も出來ねえで、他人に尻を拭かせるたア、立派なお戸主さまさ。お霜さん、お前さんも宜い息子さんを持つて、お幸福だね。」
　ト大五郎はわざとお米に掛けて言ふ。お霜は悔しいといふ思入、お米はあるにもあられぬ介、伍八も晋太郎の歸らぬのに

氣をもむこなし。

お霜「もうあんな狡い者で御在ますから、人さまに御迷惑ばかり掛けまして……。」

ト お霜、面目なきこなし。賢亮、わざと見かねたと云ふ思入にて、

賢亮「間さん、御當家の御事情も止むを得ん事で、いかにもお氣の毒ですから、こゝは一つ大腹中の間さんだ、晋太郎さんが歸られるまで、猶豫して下さる譯には參りますまいかな。」

大五「塚本さん、お語だがね、晋さんが歸つたッて、猶且待つて呉れに極つて居まさア。斯う言つちやア何だが、晋さんに五百圓はおろか五十圓もむづかしらがさア。それもね、裁判に持出さねえ中なら、話合の付かねえ事もなかつたんだがね、もう裁判が確定して了つた今になつちやア、一寸逃れの仲裁なんざ聞いちやア居られねえや。」

賢亮「いや、貴方の方に無理はないですが、併しまた一方を考へると何うも御氣の毒で。」

大五「塚本さん、僕やお前さんにも言分があるんだよ。」

賢亮「へッ拙者にッ。」

ト 間の語調かはる、賢亮、ひやりとした介。

大五「おい先生、お前さんだッて、萬更對岸の喧嘩の氣ぢやア居られめえぜ。」

賢亮「むゝ。」

ト 賢亮、當惑のこなし。

大五「此家の事で、晋さんに口添したなア、塚本さん、お前さんぢやねえか。」

賢亮「それは左樣です、併し、その、實は、其の……。」

大五「實は其が何うしたんだ。お前さんだッて幾許か責任が付いてるんぢやねえか。」

賢亮「そんな積りぢやなかつたんですが。」

大五「何だ、積りでねえ、串戲云つちやア不可ねえぜ。半分はお前さんを信用して居たんだ。」

賢亮「夫は何うも、實に。」

大五「この家の處置が附きやア、僕やお前さんの方にもかゝる氣なんだ。」

賢亮「是は何うも、大した事に成りましたなア。何分何うか、お手柔かに願ひたいので。」

ト 頭を掻く

大五「塚本さんの方は、まア後にして、おい吉公、手前達二人で手傳つて、日の暮れねえ内に、當家の人に片付けて貰ふが可いや。」

吉「左うしやせう。」

藤「是でも些たア、がらくたが有りやすからね。」

吉「おい、手傳はうぜ。」

藤「ヨシ來た。」

ト 吉次藤吉は立掛る。先刻よりこの有樣にきよと〳〵して居た伍八は、此時兩手を揚げて押止めて、

伍八「まゝ、待つて呉らッせえ、待つて呉らッせえ。」

ト おろ〳〵と大五郎の方ににじり寄つて、

伍八「間の旦那さま、お願えで御在ますが、こゝの處は何うかはア、待つてお貰え申してえで御在やすだ。」

ト 叩頭する。

大五「伍八どん、切角だが、今更仕方がねえや。そんな事を言ふ手間で、片付物でもした方が宜いぜ。」

伍八「旦那さま、おらが一生のお願えだ、まゝ聞いて下せえよ、今追立てられたッてはア、行先もありましねえだ。」

大五「そんな事を、おいらに云つたッて仕樣がねえや。お前達の背中にやア法律ッて云ふ火が着いて追立つてるんだから、出て行くより外はあるめえぜ。」

伍八、暗涙を含みて、少時無言。總てまた

大五郎に對ひ叩頭して、

伍八『旦那さま、あれ見て下せえよ、坊様は寢て御座るだし、お袋様も病氣で弱つて御座るだから、落着く目的もねえに、追立てられて、何う成りますだよ。』

ト手拭で涙を拭く。

大五『さうだな、そりや氣の毒だ。氣の毒なア百も承知だが、何うも仕方がねえ。他の行先の心配まで仕ちやア居られねえよ。』

伍八『そ、其處でがす。お願えといふなア其處でがすよ。無理と知りつゝお願え申すも、斯う申しちやア何だけれど、お前樣の身代なら、十日や二十日待つて呉れさツしやつても、家に不自由さツしやる事はねえ筈だ。僕等が方はさうでねえ、この家を離れて見さツせえ、路頭に迷はねえぢやアなりましねえだ。』

大五『其怨言なら、晋さんに云ふが可からうぜ。』

伍八『そ、そ、さうかも知んねえけんど、間の旦那さま、おら晋太郎樣の爲に、お前さまにお詫をするぢやねえでがすよ。勿體無えけんど、亡くならしやつた大旦那に成り代つて、お前さまに、お賴み申しますだ。』

ト聲を顫はし泣きながら言ふ。

大五『おい、日が永えたツて、暮れる日だ、便々と泣事を聞いちやア居られねえ。』

伍八『大旦那の好誼も、お前さま、もう忘れただね。』

大五『なんだと。』

伍八『大旦那さまの好誼を、忘れてるだよ、お前は。』

ト伍八、拳を握る、お霜、止めて、

お霜『コレ伍八、最う何にも言つてお呉れでない。間さんのお言なさる通り、家邸をお渡し申さうよ。』

お米『あれツ、叔母さん。』

トお霜、大儀さうに立ちかゝり、ひよろひよろとなる、お米、支へる。

伍八『お袋さま、お前さまは思切りの能え事云はツしやるけんど。』

お霜『だツても、此が一日や半日延びたツて。』

伍八『そツ、其もさうだけんど。』

お霜『もう諦めて、お前は松坊を。』

伍八『坊さまを負へなら負ふけんど、餘り忌々しいだから。』

お霜『伍八、お前、私の云ふ事を聞かないのね。』

ト伍八も今は詮方なく、しを／＼と大五郎等の前を通り上手へ行く。お霜お米兩人、松二郎を伍八へ背負はせる。松二郎、目をさます。

松二『睡いんだよう。』

お米『おゝ可哀想ね。』

トお米、松二郎を介抱する。

松二『寢んねするんだよう、いやだよう。』

お霜、お米、泣く。

伍八『坊さま、好え兒だでね、少時の間だからおらが背中で、寢んねして御座らッせえ。いまにゆツくら寢かして、樂にして上げますだ。坊樣偉えだ、偉え、偉え、大將樣になるだものね。』

松二『いやだ／＼、寢んねするよう。』

伍八『無理は無えだ。いやだッぺえよ。』

と伍八は漸く松二郎を賺す。お米はお霜がまとめた風呂敷包を抱へて立つ。

お霜『間さん、お約束通り慥かにお引渡し申します。』

大五『がらくた物は、物置に投込んで置いて遣るが可いや。』

お霜『先生、其内お目にかゝります。』

賢亮『いや、是は、先づ御機嫌克う。折角御大切に……。』

伍八は怨めし氣に大五郎賢亮、其他二人を見返し、お霜お米に續いて退場。大五

郎と賢亮は旨くいつたと云ふ思入。

其二　上原家門外の場

上原家門外の體、舞臺中央に屋根附の門、左右廢塀、塀外に立木あり。門の屋根塀などに、所々破損の跡見え、住ふに昔名高かりし豪家の俤を偲ばしむ。

蓬聞くと、伍八、松二郎を背負ひ前に立ち、つゞいてお米風呂敷包を抱へ、お霜を介抱しながら、門内より登場。

伍八「お袋さま、何處へ行つたら可かッぺいねえ。」

ト伍八、當惑の介にてお霜に問ふ。お霜も何處と云ふ目的もなき介にて、

お霜「さうさね、私も今、其を考へて居るのだがね、全く親類が無いと云ふのでないし、何處へでも頼めない事はないがね、さうしたなら、晉太郎が何々肩身が狭からうし、成らう事なら、何處か遠い所へでも行つて了ひたいよ。」

お米「叔母様が其様事をお云ひなさると、私は實に悲しいよ。」

お霜「此限逢へないと云ふのではないし、左う氣をもんでお哭れでないよ。」

お米「せめて義兄さんが居て下すつたら、何うにか仕やうがあるでせうのにねえ。」

伍八「あゝあ、何處を歩いて御座るだか。」

お霜「歸つたら、嘸ぞ吃驚おしだらうね。」

伍八「御先代さまも、嘸ぞ口惜かんべい。この家屋までも、人手に渡すだもの。」

お霜「夫を思ふと、儂は最う。」

ト袖を面に押當てゝ泣く。

伍八「小旦那も惡いけんど、松葉屋の阿魔ッちよが爲る事だ。えゝ如何して遣んべい、あゝあの胴畜生めッ。」

伍八は齒を噛んで怒る。

お米「義兄さんもあんまりだね。」

お米は、晉太郎を怨む思入。

夕鴉が鳴き連れて行く／＼、伍八、仰いで見て、

伍八「おゝ、鴉も塒に歸るだに。」

お霜「儂達は何處へ行つたら可いだらうねえ。」

ト悄然となる。間の子分吉次、門を閉めに來た心にて門内から差覗き、

吉次「やア、奴等ア、まだ、魔誤ついて居やがるんだな、足元の明るい中に、首でも縊りに行きやがれッ。」

ト吉次、手荒く門を閉める。お霜、お米、伍八、口惜がる思入。

門を締めた音にて、松二郎、眼を覺し、

松二「お家に歸らうよう、お家に歸らうよう。」

伍八「おゝ、今歸りますだ。コレ若旦様、お前さまは偖えからね、早晩あの家を取返すだよ。」

トお霜も伍八も見送つて泣く。お米も涙に暮れて居たが、お霜に向ひ、

お米「叔母さん、まア何にしても、私の宅まで御行でなさいな。」

お霜「難有う。だがねえ、伍八。」

伍八「今夜は私が懇意しる、あの左五郎が家に泊めて貰ひますだ。」

お霜「御氣の毒だねえ。」

伍八「さア御座らッせい。」

お米「叔母さん、私も送りますよ。」

お米はお霜の手を取つて、段々下手へ行く。伍八も振り返り／＼三人諸共に退場。

其跡にて賢亮耳門より登場。間めッ旨い事をしたと云ふ心にて、門を振返り直ぐに花道附際まで來た時、花道より松葉屋の歸途と云ふ心にて晉太郎、登場。

晉太郎と賢亮は花道附際に行きあふ。

賢亮「おゝ晉さん。」

晉太「先生、何處へお行でなさいました。」

賢亮『えッ、何處へ。何處へどこぢやないよ。晋さん、何うしたもんだね。』
晋太『何うしたッて、何がです。』
賢亮『何がですぢやないよ。晋さんの様に暢氣でも困るね。君が居なかつたので、僕まで大いに苦しめられたよ。』
晋太『へえ、左うですかね。』
賢亮『左うですかねは驚いたね。全體君は、是から何處へ行くんだ。』
晋太『はゝ、先生、是れでも家がありますア。』
賢亮『ところが無いね。あゝ飛んだ事さ。』
晋太『何を言つて居るんです。』
賢亮『君こそ何を云つてるんだ。君の家は無いんだよ、既う。』
晋太『はゝゝ先生、串戯も大概にして下さい。』
賢亮『左う暢氣だから、斯ういふ事に成るのだ。實に歎かはしい事さ、君の家は既に他手に渡つたよ。』
晋太『えッ。』
ト半信半疑。
賢亮『君は疑つてる様だが、事實が證明してるからね、それッ彼通りさ。』
晋太『眞箇ですか、先生。』

賢亮『まだ疑つてるのかね、まあ行つて見るが宜いさ。』
ト賢亮、足早に下手へ退場。晋太郎は俄かに色を變へたが、尚ほ半信半疑の體にて、つか〳〵と門前に行き、耳門を開けんとして開かざるにぞ初めて打驚き、大門の扉を押せどもまた開かず、俄かにうろ〳〵し出して、
晋太『伍八、伍八、開けてお呉れよ。おい、開けるんだよ。伍八、開けるんだッて云ふのに。開けないのか。開けるんだ、開けるんだ。』
ト夢中に成つて叩く。
藤吉『誰だい、騒々しいやい。』
ト耳門を開けて藤吉首を出し、晋太郎が矢庭に入らうとするのを突戻して、
藤吉『吃驚すらい、こん畜生、火の玉の様な野郎だな、突然にころげ込まうとしやがつて。』
晋太『おッ、お前は何だ。退いてお呉れ。お退きえゝ退かないか。』
ト晋太郎、また入らうとする、藤吉は又突戻して、
藤吉『無理に入りやアがると、野郎とッちめるぞ。』
晋太『し、失敬なッ。おれを何だと思ふんだ、この主人だぞ。』

藤吉『ふざけるない。此家の主人が聞いて呆れらア。こゝは間の旦那の家だい。』
晋太『えッ、間が、大五郎がッ、むゝ。』
ト晋太郎、口惜しき思入にて、
晋太『上原晋太郎が、晋太郎が用がある、大五郎を呼べ、間を呼べッ。』
藤吉『やかましいやい。あの婆も河童野郎も、疾に出て失しやアがつたんだ。がらくた物が欲しけりやア、背戸から田甫におッぽり出して置いたから、さつさと持つてうしやがれッ。』
晋太『むゝッ。』
トまた門内へ入らうとする。
藤吉『えゝしつッこい野郎だなア。』
ト力任せに胸を突き、荒らかにくゞり戸を締め切る。晋太郎はよろめいて尻居に仆れ、切石で膝頭を突き破つた思入、門を睨んで無念の形相。（道具廻る）

其三　上原新家背戸の場

舞臺中程より下手、田舎屋の物置より裏口（繩暖簾を掛く）を見せ、物置の傍に井戸、上手より奥へ掛け見晴の田甫。上原新家、お米母お爲住居背戸の體。

幕開くと直ぐにお爲、五十歳前後、好の打扮にて繩暖簾の内より登場。お米が其邊に見えぬかと云ふ心にて、四邊を見廻し、昇を仰いで、

お爲『もう日が暮れるのに、何處をほツつき歩いて居やがるだらう。』

ト井戸端に行き、田甫の方を見て、

お爲『晋の野郎の處ばかし行きやアがつて‥‥歸つたら、思入油をとつて遣んねえぢやア。』

ト物置に用のある心にて入つて了ふ。

上手より百姓娘二人、お兼、お高、何れも十八九、野良歸りの心にて、お兼は鍬を擔げ、お高は目籠を背負ひ、好の打扮にて登場。今まで互に談話を爲て居た心にて、

お兼『あれツ、虚構ばツかり。私だツて勘さん見たいな彼様人を、いやな事だよ。』

お高『だツて、一同が左樣云つてるんだもの。勘さんの方でもお兼さんを。』

お兼『あらツ、また諧戲つてさ。』

ト打たうとする、お高逃げる心にて身をかはして、

お高『だツて、お兼さんは美女だツて、勘さんも勝さんも賞めてるもの。』

お兼『お止しツてば、お高さん。』

ト お兼、此處はお米の宅の背戸と云ふ心にて家の方を見ながら、

お兼『美女ツて云ふのは、此家のお米さんの事さ。』

お高『お米さんは別だもの。だけども、上原様の小旦那が彼様だから、可哀想だね。』

お兼『全くだね。それに何だツて云ふよ、お米さんはもう、小旦那のお神さまにやア爲ないんだツて。』

お高『まア何うしてなの。』

お兼『何うしてツて。あのね。』

ト お兼は聞かれては惡いと裏口を見て、誰も居ないから話しても可いと云ふ介にて、

お兼『お米さんの阿母さんね、あのお爲婆さんが、もう晋さんには遣らないツて云ふとさ。』

お高『だツて許嫁だのに。』

お兼『許嫁だツて、上原さまの身代が惡くなつたからだツて。』

お高『まア酷い婆さんだ。』

お兼『お米さんが上原さまに出入しても怒るとさ。』

お高『薄情な婆さんだね。』

お兼『お米さんを遣る氣で、お金のある人を探してるツて云ふよ。』

お高『まア驚いた。お米さんは泣いてるだらうよ。』

お兼『だから世間で、鬼婆ツて云ふんだよ。』

お高『全く鬼婆だもの。鬼婆ツて怒鳴ツて遣りたいよ。』

お爲『怒鳴れるなら、怒鳴つて見な。』

ト お爲、二女の話を聞き腹の立つ介にて物置より出來る。お兼とお高は吃驚して、下手よき處まで逃げる。

お爲『逃げたツて、面ア知つてるだ。お兼もお高も、喚に出掛けて行くから、忘れねえが可い。』

ト お爲が怒鳴る詞の一句々々に、お兼とお高は可怖しげに顔を見合せては後退りして居たが、終に一散に逃げて下手に退場。

お爲は尚ほ腹立しげに沸々口小言を言ひながら、井戸端に行き水を汲んで手を洗つて居る。

お米は上原の母等の立退を、晋五郎の家まで送つて歸つて來た心にて、花道より登場。花道中程まで悄然として垂頭い

て來たが、無意識に足が止つたほどの心にて立止り、母や松二郎の上を懐ふ樣子にて揚幕の方を見て、涙を拭く介などありて、軈て花道兩際に來る。お爲は井戸端からお米を認め、

お爲「ヤツと歸つて來やがつた。」

ト怒の聲を高くして、

お爲「お米、お米。」

此にてお米はお爲の顏を見て、早く本家の大變を知らせねばならぬと思ふ心が俄かに動いた體にて、

お米「阿母さん本家が、たゝ大變だよ。」

ト云ひながら母の傍に駈寄り、

お米「阿母さん、晉さんの家を、間に、と、と、奪られて了つたよ。」

ト泣く。お爲はお米の泣くのが腹の立つと云ふ思入にて、

お爲「晉の家なんざ、何うなつたツて可いぢやないか。」

お米「だツて、だツて。」

ト悲しさに聲が反跳んで、云ひたい事が云へない介にて泣く。

お爲「ピイ〳〵ピイ〳〵、何を其樣に泣くんだ。何が悲しいんだ。晉の事べい云やアがつて、阿母さんの事なんか、思つても居ねえんだらう。何か云ふと、二言目には晉の事だ。晉が何だ、放蕩ばかし盡しやアがつて、阿母さんなんざ、彼奴の面を見るのも可厭だ、聲を聞いても慄然とするよ。何だツて又本家に、彼樣馬鹿野郎が生れやがつたらう。考へても腹が立つよ。目黒の上原ツて云へば、昔ツから聞えた大身代だよ。それを彼野呂作の晉めが、」

お米「阿母さん、晉さんの讒訴なんか何時だツて云へるよ。今其樣事を云はないだツて、本家の叔母さんだの、松ちやんだのの事を考へてお遣りが可いよ。叔母さんが松ちやんと今夜の居所にも困つてお居でだから、阿母さんにだツて、親類だしね、出來ない迄も力になつてお上げよ。二日でも三日でも可いから、家に引取つて。」

お爲「馬鹿な事をお云ひ。本家にはね、假令野呂作だツて、晉太郎ツて云ふ男が附いてるんだよ。宅を見るが可い、阿母さんとお前と、女ばかしの力で、辛と取續いてるんぢやアないか。他の世話なんぞ燒けやしないよ。」

お米「ぢやア、何うしたツて不可いの。」

お爲「此貧乏世帶で、人の世話なんか眞平だ。」

お米「ぢやア、我家が貧乏いから不可いツて云ふの。」

お爲「さうさ。」

お米「我家を貧乏くしたのは、誰なの。」

ト お米は母の無情に激して、つい母へ突掛る心が起つた樣子。

お爲「何だツて、」

お米「我家を貧乏くしたのは、阿母さんぢやないか。」

お爲「えツ、何だツて。此子は飛んでもない事を云ふよ。」

お米「だツて、世間では、みんなが左樣云つてるよ。お米さんの阿母さんの心掛が惡いから。」

お爲「え、虚構を云ふと承知しないよ。」

お米「だツて。」

お爲「えゝ、だまらねえか。親に其樣口を利きやがつて。」

ト お爲、怒つてお米の手を取り、家內へ連れて行かうとする。

お米「いたいぢやないか、阿母さん。」

ト お米はお爲の手を振拂ふ。お爲、また手を捕らうとする、お米、爭ひ、お爲、下手、お米、上手に入代る。途端に晉太郎、

田甫傳ひに來た心にて、上手奥より登場。
お爲お米の爭ひ居るを見るより、止める積りにて、足早になつた時、早くもお爲が認めて、
お爲『野呂作が來やアがつた。』
お米『えゝ晋さんが。』
トお米は振返つて、晋太郎を見るより駈寄りたいと思ひながら、流石に母に氣をかねる心にて、凝乎と見て居る。
晋太郎はお爲とお米とが爭を止めて、此方を目戍つて居るので、急に面目なくなり、頭は垂り、歩は鈍り、進まうとして進みかぬる介にて近寄る。
晋太郎が近寄るに連れて、お爲は漸次に横を向いて、態と取付端なく仕向ける介。
お米は溜らなくなつて聲を掛ける。
お米『晋さん、晋さんの家の事を、知つて居て。』
晋太郎は一人面目なき介にて、
晋太『もう、米ちやんも知つてるのかい。』
お米『知つてるのかッてね、私あの時叔母さんの見舞に行つてたんだもの。』
晋太『そッ、さうか。米ちやんも居たのか。それでは、米ちやんは知つてるだらう。』
お米『えッ、何をなの。』
晋太『何をと云つて、私の。』
ト云ひにくいこなしにて、
晋太『私の、阿母さんや、松坊が何處へ行つたか、米ちやんが其時居たッて云ふなら、何處へお行でだつたか、知つてお居でだらうね。』
此時お爲は晋太郎の方を向いて、お米が答へようとする間に、晋太郎を呼掛けて、
お爲『晋さん、おいで。』
晋太『へッ、叔母さん、御無沙汰を致しました。』
お爲『何ういたしまして、私の方からこそ、御無沙汰ばかしさ。晋さんも丈夫の様だし、皆さんも御變りがないだらうね。』
晋太『へッ。』
トばかりで、晋太郎は術なき介にて少時は何にも云ひ得ず。
晋太『叔母さん、どうも面目がありません。』
ト晋太郎、面目なきこなし、お爲は態と遠恍けて、
お爲『晋さん、何だねえ、出拔に、面目ないなんて。』
晋太『叔母さんはまだ、御存じぢやアないんですか。』
お爲『私が知らないかッて、何様事なの。』
ト晋太郎は面目なくて自分の口から云はれぬ介。お米は母の仕向を餘りだと思ふ思入にて、
お米『阿母さん、知つてお居でぢやないか。』
お爲『えッ、私が知つてるッて。さうかねえ、何様事だらうね。』
お米『阿母さんは知つてる癖に。ほら、私が歸つた時話した事、晋さんの家を、あの間に奪られた事なの。』
お爲『えッ、』
ト仰山らしく吃驚したこなしにて、
お爲『私はまた、お前が戯言を云つてるんだと思つたよ。』
お米『戯言に云へる事ですか、其様事が。』
お爲『おやア、まつたくなのかい、まア、驚くぢやアないかね、えゝ晋さん。』
晋太『どうも、叔母さんにも面目がありません。』
ト顏も上げ得ない介。
お爲『晋さん、お前家まで無くなして了つて、阿母さんや松坊を何處へお遣りだつたかい。』
晋太『そッ、そッ、其事です。私が居ない時でしたから、ど、ど、何處へ行つたんだか、多分新家の叔母さん處だと思つて。』

お爲『私の處にはおいでぢやアないよ、また來られた義理でもないからねえ。』

お米『阿母さん、そんな事を云ふもんぢやないよ。』

お爲『默つてお居で、お前なんぞが、口を出す幕ぢやアないよ。』

トお爲は、覺えず氣色ばんだ晋太郎を、屹と見据ゑて、

お爲『晋さん、まアお前と云ふ人には、實に呆れて物が云へないよ。何處の世界に、茶屋酒に現を拔かして、親や弟を見え失くす人があるだらう。本統にまア、何と云ふ人だらう、お前と云ふ人は。』

トお爲はじり／＼と晋太郎の傍に寄り、

お爲『おい、晋太郎、上原と云へば何だよ、權現さま時代からの舊家だッて云ふし、目黑澁谷大崎きっての財産家だッて云はれたんだよ。其上原を位牌の置き所もない樣に、能くもお前は爲てお呉れだね。お前、彼家には何だよ、御先祖さまの御神體を、御稻荷樣にして、庭の隅に祭つてあるんだよ。お前は能くもまア、御先祖の御稻荷さままで、他人へ渡してお了ひだつたね。』

お米『阿母さん、もう可いぢやないかね、過ぎた事なんか云はないだッて。』

お爲『また口を出すよ、引込んで居な。』

晋太『米ちやん、私が惡いんだから。』

お爲『斷らないだッて、惡い事は知れてるよ。それもね、商賣の手違だとか、見込んだ投機が外れたんだとか云ふのなら、まア詮方がないが、能くまア惜氣もなく、松葉屋の古狐に注込めたものさ。古狐に注込むお金は借りられても、親類を貢ぐお金は借りられないと見えて、能くも、私へ辛く當つてお呉れだつたね。』

お米『阿母さん、もうお止しよ。阿母さんは始終、晋さんに迷惑を掛けてた癖に。』

お爲『小うるせえ孩兒だ、默つて居なッ。』

晋太『叔母さん、何卒もう何です、どうせ私が惡いんですから。』

お爲『へん、惡いと云やア、御先祖に濟む氣かい。』

晋太『それは何ですけれど、もう私は覺悟を極めてるんですから。』

お爲『へえ、覺悟を極めてるッて。お前の覺悟なら、どうせ碌な覺悟ぢやアなからうさ。』

晋太『さうでせう、何うせねえ。米ちやん、左樣なら。』

ト晋太郎、下手へ行かうとする。お米、氣遣はしげに、

お米『あれ、晋さん。』

お爲『晋太郎、待ちな。』

晋太『何です。』

ト晋太郎、立止つて振返る。

お爲『お米はもう、お前とは緣が斷れたんだよ。』

晋太郎、屹となる。

お米『晋さん、うそだよ。』

お爲『お米は間さんに遣る約束だから。』

晋太『えッ、間に。』

ト口惜しきこなしにてたじ／＼となる。

お爲『途中で逢つたッて、指も差す事はならないよ。』

晋太『承知です。』

お米『晋さん、いやだよ。私や何時までも晋さんの。』

お爲『何を云ふんだよ。』

お米『お神さんだよ。』

トお米、晋太郎の傍へ行かうとする。お爲、支へる。

晋太『米ちやん、もう逢はないよ。』

ト晋太郎、下手へ駈出す、お米はあるにもあられぬ思にて、

お米『晋さアん、叔母さんと松ちやんはね、』

晋太郎、また振返る。

お米『叔母さんと松ちやんは三五郎の家だよ。』

晋太郎は屹と首肯き下手へ駈込む。お米はお爲に支へられたまゝ袖を顔へ當てゝ泣き伏す。お爲は氣味よささうに下手を見送る。

（幕）

三幕目

目黒不動瀧の場

舞臺は目黒不動境内。正面中央より上手へ斜に石段を見せ、石段の中程左側に大樹立てり。下手は瀧壺、籠堂、上手は女坂の書割、其上一面の山、樹木鬱蒼として、淋しき夜景なり。

幕明くと、上手より晋太郎、お米、今迄參詣人を避け居たる心にて登場。

お米『晋さん、是から何うするつもりなの。』

ト お米、晋太郎の心配らしく俯向き居る顔を覗き込む。

晋太『何うと言つて、先刻から言つてるやうに、私は最う仕様がないんだ。』

お米『そんな事を言つてちやア、叔母さんや松ちやんが、仕樣がないでせうよ。』

晋太『夫りやア左うだけれど、米ちやんと彼處で逢ふまでに、いろ／＼考へて見たんだがね、どうも好い工夫が付かないから、困つてるんだ。』

お米『ほんとうに困るのね、何うしたら宜いんだらう。』

晋太『外に相談する人もないんだし、松葉屋に行つて見ようと思つたけれど、（後獨白の樣に）家を取られたなんて、極りが惡くツて、そんな事は言つて行けやしないし。』

お米、呆れもし嫉ましくもあるといふ心にて、ヂツと晋太郎を見て、

お米『晋さんは、お妻さんでなきやア、外に相談する人は無いの。』

晋太『お妻でなきやア、誰に相談したら宜いだらう。』

お米『私には、判らないけれども、晋さんが克うく考へて見たら宜いでせう。』

晋太『お妻でなきやア、米ちやん許の叔母さんだけれど……。』

ト 兩人、しばらく無言。お米、思入ありて、

お米『晋さん、やつぱし晋さんの阿母樣に逢つて相談した方が宜いわ。』

晋太『だツて私は、何うしたツても、阿母樣には逢へないよ。先刻米ちやん家から歸りに、三五郎の家の傍まで行つて見たけれど、何うしたツて逢へないもの。』

お米『私が一緒に行つたら可いでせう。』

晋太『夫でも宜いけれどね、まア待ちよ、お妻に逢つてからでも宜いだらう。』

お米はまだ其樣事をと云ふ思入。

お米『私の言ふ事だツて、偶にやア肯いて吳れたツて宜いわ。』

晋太『だから、行かないと言つてやしないよ。』

お米『だツて、お妻さんに逢つてからで無きやア、行かないツてお言ひぢやないか。』

晋太『逢つてからだツて宜いだらう。』

お米『晋さんはお妻さんの事ばツかし。』

ト お米、くやしき介。晋太郎、やゝ不平の體にて、

晋太『米ちやんも、お妻の事を惡く思つてるんだね。皆ながなぜそんなに、お妻の事を惡く言ふんだらう。米ちやん、お妻はそんな惡い女ぢやないよ。』

お米『晋さんは、お妻さんと、來年は何樣にお成りだツていふ事だから、お妻さんより外に好

い人はないんでせう。』
晋太『誰がそんな事を言つたんだよ。』
お米『自分が言つた癖に。』
晋太『いゝ加減な事を言つてるよ。私が何時そんな事を。』
お米『あら言つた癖に。ほらあの、馬頭様の藪の處で、お妻さんと二人でお話しだつたのを、私伍八と二人で聞いてたよ。』

晋太郎、ぐつと詰る。お米は夫見たことかと云ふ介。

花道より阪本源次、松葉屋に來て居た心にて、不動堂へ參詣の爲め登場。

お米は人の足音を聞き、晋太郎を促し上手の方へ徘徊する心にて退場。

源次、石段の下まで來り、上を見上げて、

源次『今夜はいやに蒸しやがるなア。』

ト石段を上り行き、やがて其姿の見えずなりたる時、花道よりお妻、登場、花道の中程まで來りし頃、あとより伍八、お妻をつけて來し心にて片手に鎌を持つて登場。お妻は本舞臺の方を見て、

お妻『親方は最うお山にお上りだつたと見えるよ。』

ト言ひながら歩み、石段の少し手前まで來し時、伍八、つか／＼と覘ひ寄り、突然に斬り付け、闇に覘ひを誤り空を切る。お妻は只ならぬ氣勢を感じて覺えず身を避す、伍八、お妻の足音を目當にまた鎌を振上げて、

伍八『この阿魔ッちよめッ。』

ト斬り付ける。

お妻『アレッ、何をするんだよッ。』

ト飛び退く。

伍八『汝殺して了ふだッ。』
お妻『えッ、私を殺す……。』
伍八『おゝ殺さねえでか。』
お妻『誰なの……亂暴だよ……儂を殺すなんて……人違ひをしちやいけないよ……。』

ト逃げ廻りながら言ふ。伍八、追掛けながら、

伍八『人違えで無えだ。この松葉屋の阿魔ッちよめッ。』
お妻『まア私を殺すッて……アレーッ誰か來てお呉れよ。』

ト伍八、追ひ廻し、お妻は逃げ廻り、宜しく立廻りある。此の間上手より晋太郎、怪しみながら出來り、お妻の聲を聞くと共に、つか／＼と駈け寄る。お妻は

い

石段を五六段駈上る、伍八も追うて上りかゝるを晋太郎、背後より抱留める。此時月さし昇りて四邊を照らす。晋太郎、お妻を見上げて、

晋太『お妻さんぢやないか。』
お妻『おゝ若旦那ですか。その人が私を殺すッていふんですよ。』

トお妻は晋太郎の來りしに稍心強く成りし介。

晋太郎は伍八が振放さうともがくを猶抱止める。

お米『晋さん、退いてないと怪我をおしだよ。』

トお米、晋太郎を氣遣ひてハラ／＼する介。

源次は坂を下りかけて、下の動靜をうかがふ。

晋太『伍八、なぜそんな亂暴をするんだ。』
伍八『この阿魔ッちよ、殺さねえぢや置かねえだ。小旦那、なぜ止めなさるだ。お前樣を欺くらかいて、邸宅まで失くさした古狐でねえかよ。お前樣も手傳つて殺すが宜えだ。』
お妻『まあ、お宅まで間さんに奪られたんですか。』

トお妻、驚く介。

晋太「面目ないが、今夜から最う、寝る家も亡くなつたんだよ。」

お妻「あら、間さんも實に酷い事をする人だよ。」

伍八「間に罪をかづけて、汝べえ逃げようたッて、だめな事だ。」

お妻「お前さんがそんな無理をお言ひだッてね、私にやあ其樣な覺えはないんだよ。」

伍八「嘘べえ吐くな。夫婦約束を餌にしやがつて、小旦那をつり込んで居たでねえか。」

お妻「其ン事なら、私の知つた事ぢやないんだよ。若旦那が間さんと賢亮さんとに煽動てられて、御自分ばかり、さら極めてお在でなすつたんだよ。」

晋太「え、お妻さん、何を言ふんだよ。お前そんな氣だつたのか。」

お妻「若旦那、こんな事を言つちやア濟まないんですが、實は若旦那を、別に何とも思つて居たんぢやアないんですよ。」

晋太「えゝッ。」

ト晋太郎、驚き、伍八を抱止めて居た手を放し茫然となる。伍八も意外の介にて覺えずたじ／＼と成る。お米も驚く介。

お妻「若旦那、ようく考へて御覽なさいな。間さんにお取られなすつたお金と、私の許でお遣ひなすつたお金の高をお比較べなすつたら、私の方は百分一にも足りますまいよ。私が一度だッて、若旦那に無理なお金を遣はせた事がありますか。若旦那に無駄なお金を出させまいと思つて、私や始終止めてたんですよ。それと云ふのも、若旦那が間さんに酷い目に逢つて居らッしやるのを、お氣の毒だと思つたからですよ。私だッて稼業ですもの、若旦那からお金を取らうと思や、何樣にでも取れたんですよ。私が其樣事を爲たか爲ないか、考へて下すつたら、お解りなさるでせう。」

ト お妻は伍八に對ひ、

お妻「伍八さん、私は今云つた通り、若旦那を誑かして居たんぢやないからね、私を怨むのは止して下さいよ。今になつて、此樣事を云つたッて詮樣がないけども、私が早く、若旦那を御斷り申した方が可かつたんだよ。だけども、客商賣を爲て居て見ると、まさか左樣も行かないし……伍八さん、此事ばかしは、私が悪かつたんだから、若旦那にもお前さんにも、今此處で謝罪りますからね、何卒、私を恨まないで下さいよ。」

ト お妻、眞實見えて云ふ。晋太郎は初めて夢の覺めたるが如く、お米に對しても、面目なき介。お米は此にて晋太郎が本心に立歸るべき機を得たかと喜び、伍八も今更手出しのならざる介。此内源次、徐く石段を下來り、

源次「もし、上原さんの若旦那、私や彼處で聞いて居やしたがね、お前さんが全く、彼間ッて野郎の欺瞞に掛つて居なすつたんだ。」

晋太郎も今は全く自分の非を悟つた思入にて、

晋太「はい、私が全く、間の欺瞞に掛つて居たんです。今、お妻さんから話を聞いたので、私や全く夢が覺めたのです。」

お妻「若旦那、私を怨んで下すつちやアいやですよ。」

晋太「な、何、お前さんを怨むものですか。私やお前さんにも面目ないよ。」

お妻「あらッ、私こそ濟みませんよ。お米さん、あなたも嘸ぞ私が憎かつたでせうねえ、何卒勘忍して頂戴よ。」

お米「いゝえ、怨んでなんか居やしませんよ。私は此で晋さんが本心に成つてお呉れかと、實に嬉しう御在ます。」

源次「もし、伍八さんとやら、お前も女なんぞを相手にしねえで、若旦那の力になつて、上原さんの身代を取返す工風を爲なすつた方が可かアないかね。」

伍八「はい、私も左樣思はねえぢやねえけんど、お前さま、今ぢやもう、差掛つて、御隱居さま置くべい小屋もねえでがすよ。」

源次「そいつは何しろ御困りだらう。斯うしちやア何うだね、私や多寡が鐵道の人足だから、碌な御世話は出來ねえが、晋さんも阿母さんも、某家私の家へ御居でなせえな。」

お妻「私だツて、若旦那の御世話になつてるんですから、私の家にお置き申したツて能う御座んすよ。」

源次「お妻さん、お前が左樣思ふも道理だがね、お前の家ぢやア客商賣だし、阿母さんも氣塞だらうし、何うも乃公の方が可い樣だぜ。」

お妻「それもさうですね。ぢやア、親方お賴み申しますよ。」

源次「晋さん、伍八さん、左樣しなすつちやア何うですかい。」

晋太「は、はい、難有うは御在ますが、見ず知らずのお前さんに、餘り厚顏しくツて。」

お妻「若旦那、此親方の信心は、私が能らく知つてるんですから、御遠慮なさる事はありませんよ。伍八さん、お前さんも左樣お爲の方が可いでせうよ。」

此前より伍八、源次お妻等の義俠に感激し、暗涙を催して居たが、

伍八「お妻さん、私はア、お前さまに、えらく御無禮致しましただア。私謝罪るだから、何卒了簡して呉れさツせえよ。」

お妻「なアにお前さん、譯さへ分りやア、それで可いんですよ。お前さん、了簡も何もありやアしませんよ。」

源次「晋さん、伍八どん、間ツて奴ア、質の能くねえ野郎だから、早晩見て居なせえ、乃公が首根ツ子を取捕めえて、晋さん、お前さんの復讎を、屹度してあげやさア。」

お妻「私もね、彼人達の奸策を聞いた事もあるんですから、若旦那、今に復讎をして上げますよ。」

晋太
伍八「親方、お妻さん、何卒可い樣にお賴み申します。」

源次「それぢやア、そろ〳〵行きやせうか。」

お妻「お米さん、御一緒に行からぢやありませんか。」

ト一同立上る。

（幕）

大詰

其一　間新宅門外の場

舞臺はすべて、間新宅の裏門外にて、上手寄りに門あり、生垣など結ひ廻し、手廣き構へにて、今日は婚禮と轉宅祝とを兼ねたる宴會の催しあると云ふ噂なり。

幕明くと、上手より近邊の百姓、鍬を擔げ來かゝり、下手より料理屋の出前持、出前の籠を擔ひて登場。兩人行き逢ひ、

百姓「喜八どん、大した出前の樣だが、何家さ持つて行くだね。」

喜八「今夜は間さんとこで、お目出度があるんだ。」

百姓「ぢやア、いよ〳〵お內儀さま來るだね。」

喜八「そんな話だ。」

百姓「あの人も運の宜え人だ、上原樣の屋敷さア手附かずで奪つて、おまけに小旦那と許嫁のお米さんまで引張込んだだア。」

喜八「何だか知らねえが、世間ぢや、あんまり好かア言つて居ねえ樣だ。」

百姓「好く言はねえなア當然だよ。彼樣に酷え

事ばかりしるだもの、この先いゝ事はあんめえよ。
喜八「其處を考えると、お互に正直に稼ぐ事だ。」
百姓「左うだ〳〵、正直の頭に神やどるてえだから。」
喜八「まあ、せつせと稼ぎなせえ。」
百姓「そのつもりで、早う歸つて、草鞋でも作るべえか。」
喜八「おいらも遲くならねえ内に、行くとしべえよ。」
ト百姓は下手へ、出前持は裏門へ入る。花道より阪本源次羽織着流し、聞より招かれた心にて登場。花道中程迄來ると、跡より松葉屋のお妻、好みの打扮にて登場し、源次の後姿を見て、
お妻「お、あすこに親方がお行での樣よ。」
ト足早に追付き、
お妻「親方、」
源次「おゝ、お妻さんか、お前手傳にしちやア滅法遲いぢやねえか。」
お妻「だッて、餘り氣も進まないんだもの。」
ト兩人、話しながら舞臺の中程に來る。
源次「今日は大分客が來る樣子かね。」
お妻「それ程大勢でもないでせうよ。親方の外に二人か三人、村の人を招ぶ位なもんでせうよ。轉居祝だア云ふけれど、婚禮を兼ねて居るんですからね。」
源次「お米も可哀想さなア、あのお袋にも隨分掛合つちやア見たんだが、强突張め、遂々こんな事にしてしまやアがつたんだ。」
ト鳥渡思入。お妻も同じく、
お妻「晋さんも、口ぢやア斷念めたやうな事を言つてお在でだが、心の中ぢやア嘸ぞ悔しからうねえ。」
源次「そんな宴席にわざ〳〵乃公を呼びやがるんだな。」
お妻「それもね、親方が晋さん始め皆さんを引取つて、世話をしてお在でだから、故ッと面當に呼ぶんだよ。」
源次「胸糞の惡い野郞ぢやねえか。」
ト源次はいま〳〵しいといふ思入。
お妻「だから、今夜は思入言つてお遣んなさいよ。」
源次「むゝ。」
ト源次、首肯く。
お妻「私も思ふさま言つて遣らないぢやア。」
源次「それが可いや、うんと面の皮を引剝いて遣んねえ。」
ト下手から伍八、晋太郎を搜す心にて、うろ〳〵見廻しながら登場。
伍八「おゝ親方樣で御在ますかね。」
源次「伍八どんか、何うして來たんだ。」
お妻「伍八さん、暫くでしたねえ。」
トお妻も伍八が會釋したので、鳥渡首を下げる。
伍八「小旦那が何處へ行つただか、お前さまが出さッしやると間もなく、見えなくなりやしただ。」
源次「え、晋さんが。」
お妻「晋旦那が、何うなすつたんだらうね。」
ト源次とお妻、口を揃へるやうに言ひながら考へる介。
伍八「お袋樣太く心配さッしやつて、おらに鳥渡見て來うと言はッしやつたで。」
お妻「夫れに、ほかの時と違ふしね。」
源次は腕を組んで何か思案の介。此時裏門を開けて、聞の女中お花登場。お花はお妻を見て、
お花「おや、おつまさん、來て下すつたんですか。」
お妻は呼ばれて、折が惡いといふ思入に

て、

お妻『お花さんかね、つい遲く成つてね。』

お花「わたし今、迎ひに行かうとした處なんですよ。」

お妻『まア左う、何うも濟みません。早く上らうと思つたんですが、外せねいお客樣があつたもんですからね。」

ト源次に向つて、

お妻「ぢやア親方、一足お先に參りますよ。伍八さん、左樣なら。」

お妻はお花と共に上手へ入る。

伍八「親方、小旦那も口惜しかんべえから、報仇しべえ思つて、此家へ來さッしやりや仕めえかね。」

源次「まさかに、其樣事もあるめえが、年が若えからなア。」

ト源次、氣にかゝる介。

伍八「何うか、間違の無え樣にしてえだねえ。」

源次「まア兎も角も、お前は其足でもう一遍、其處いらを見廻つて來ちやア何うだね。」

伍八「左うしますべえ。萬一の事でも有つちや成んねえからの。」

伍八は下手へ引返さうとして、裏門から上手の方を見廻して、

伍八「親方、見違えるやうに成つただねえ。」

源次「むゝ、金にあかして、すつかり手入を仕やがつたんだな。』

ト源次も忌々しいといふ介。

伍八「眞正直な小旦那を欺くらかしやアがつて、泥棒野郎め。」

ト拳を握る。

源次「まア致方が無えや。伍八どん、乃公も手を代へ品を代へて、動きの取れねえ證據を押へて、とッちめて遣りてえたア思つてるが、上手に法律の目をくゞつて居やがるから、尋常ぢやア手出しが出來ねえんだ。」

伍八「惡い奴に逢つちやかなはねえだね。」

源次「だがなう伍八どん、乃公も白金の源次だ、乘りかゝつた船ならどんた激浪でも乘切つて見せらア。此方の生命せえ抛り出しやア、何でもねえんだ。いざてえ時の用意はして來て居らア。伍八どん、氣を揉まねえで待つて居ねえよ。」

伍八「親方樣、お前樣ばつかりが、僕らたのみだ。」

源次「よし、お前も其つもりで、最う一度其邊搜して見るが可いぜ。ところでと、……むゝ斯うしよう、何うしても晋さんが見えねえやうだつたら、間の家まで歸つて來て、乃公に耳打をして呉れるがいゝや。』

伍八『左うしますべえ。ぢやア最う一遍、見て來ますべえよ。」

ト伍八は下手へ退場。源次は跡を見送つて鳥渡思入、直ぐ上手へ退場。

目黒不動にて時の鐘をつき出す、とぼとぼ暮となる。

花道より上原晋太郎、登場。うろうろしながら舞臺のよき處に來り、

晋太「おゝ立派にしやがつたなア……米ちやんまで手込にしやがつて。」

ト晋太郎、口惜しき介あり、裏門を這入らうとして入り兼ね、躊らうろうろして、遂に生垣の隙間より忍び入るこゝろにて退場。上手から吉次藤吉、提灯を持つて登場。花嫁のお米を迎ひに行かうとして、

吉次「最う日が暮れるてえのに、滅法遲い輿入ちやア無えか。」

藤吉「なアにお前、花嫁樣のお輿入は、暮六つが世間の定法だアな。」

吉次「大きに左うだ。旦那だッて、なにも此樣に急き立てねえだッていゝぢやねえか。」

藤吉「それかよ、的にやアお前、木虱が喰ひ込んでるんだから、途中でどろんじられちや成らねえてんだ。」
吉次「夫でわざ／＼お迎えか。」
ト兩人、花道の附際まで行き向うを見て、
藤吉『おゝ、前方からやつて來たぜ。』
吉次「おゝ左うだ／＼。なにも案じる事アありやアしねえ。』
ト二人は向うを見てゐる。揚幕より前に提灯を持つた男、つゞいて塚本賢亮、媒介者のこゝろにて先に立ち、お米高髷にて嫁入衣裳、待女﨟の心にて女一人附添ひ、次にお爲、其他見送りの男數人續いて登場。
藤吉「先生、只今お着きで御在やしたか。」
吉次「お迎へに參りやした。」
賢亮「や、是は／＼、御苦勞だつた。恰度時刻を見計つて出たんだが、何しろ斯うお練りといふ譯でな、存外手間が取れたよ。」
お爲「どうも御苦勞様でしたね。』
吉次『へゝ何う致しやして。』
藤吉「私や一足お前に、旦那へお知らせ申しやせうよ。』

ト藤吉は引返し退場。お米は、間の裏門が見えるので、急にまた悲しくなつた思入にて俯向く。賢亮そろ／＼と歩み、吉次は、入代つて一列の跡に附く。上手から伍八、晋太郎を搜しあぐんだこころにて登場。舞臺の中程まで來り、ばつたり先立ちの提灯に逢ひ、鳥渡身を避し、直ぐ其跡の賢亮に顏を合せて、一足退りきツとなる。賢亮は知らぬ顏にて少し横を向き行き過ぎる。其あと、伍八は次のお米と顏見合せなさけなき思入。お米も同じ思入にて、鳥渡會釋をしたが、横を向き手巾にて顏を隱して泣く介。待ち女﨟は怪訝な顏付をし、お米と共に行過ぐ。伍八はお爲を見て、口惜しき思入にて意氣込む、お爲はつんと澄まして行くを、伍八は見送る。終りの吉次、故と伍八に突當り、ねめつけながら行き過ぎる。
行列と少し離れるまで伍八は口惜しげに見送つて居たが、今しも行列は上手に退場。吉次つゞいて退場せんとせし時、伍八、聲をかけながらつか／＼と進み寄る。

伍八「これ、鳥渡待つて異らッせえ、鳥渡待つて異らッせえ。
吉次、不愛想に振り返り、
吉次『呼んだなアおいらかい。
伍八『お前様だよ。ま、待つて異らッせえ。」
ト伍八、漸く近づく。
伍八「お前樣は、間さんの家のお人で御在ましたッけなう。」
吉次「夫が何うしたんだ。」
伍八「憚りだけんどね、ちよつくらお賴み申してえ事があるだがね。」
吉次『用があるなら早く言ひねえ。』
伍八「お前さまのとこさア、白金の源次親方が御座らッしやる筈だで、憚りだけんど、ちよつくら呼んで異らッせえよ。』
吉次「そんな使は、おらア眞平だ。」
ト吉次はすげなく行かうとする。伍八はその袂を押へて、
伍八『そんな事言ふもんで無えよ。ちよつくら親方に左う言つて異らッせえよ、お賴みだから。』
吉次「御免だよ。おらアまだお前の使をする程耄碌は仕ねえんだ。」
伍八「そんげな事を言はねえで、おら此通りたの

むだから。』
ト伍八、片手は吉次の袂を取り、片手に拜みながら頼むこなし。
吉次『小うるせえ土百姓だなア、放さねえかッ。』
吉次は捕られた袂を振切り、また取り付かうとする伍八を鋭く突放して、足早に上手へ退場。
伍八、よろ〱となり踏止つて、憤怒の思入、すぐまた氣を變へて、
伍八『これさ、待つて呉らッせえ。お、おたのみだに、待つて呉らッせえ。』
ト手を揚げ、吉次を追うて、同じく上手へ退場。

（道具廻る）

其二　間新宅宴會の場

舞臺は二幕目第一場の上原の母屋を其儘用ゐ、凡ての手入をなし飾附けなど立派になり、下手の庭は植込石燈籠程よく配置し、見變へるばかりの造りとなりたり。
幕開くと座敷の中は既に配膳終り、上手に源次、中程に大五郎、夫より段々端近に五左衞門、與兵衞等住ひ、お妻、取持の心にて座の中央に、女中お鶴、お花、程よく住ふ。
大五『皆さん、何も有りやせんが、今日はゆつくり召食つてお呉んなせえ。』
ト大五郎、挨拶する、客一同會釋をする。
五左『いや何らも、今日はお目出たら御在やして。』
與兵『僕等まで太え御馳走樣に成りやすだ。』
源次『間の旦那、今日はお目出たう御在やす。』
大五『難有う御在やす。お口に適ふやうなものも無えんですが、まア膝でも崩してゆつくり飲つてお呉んなせえ。』
源次『難有う御在やす。』
この間、お妻は源次と大五郎へ酌をし、女中は其他へ酌をして廻る事よろしくある。また大五郎より源次始め一同へ盃を獻す、返杯等あるべし。
大五郎の子分藤吉次の間から首を出し、
藤吉『旦那お迎えに行つて參りやした。』
大五『や、何らした。』
藤吉『最うお着きになりやすよ。』
大五『左らか、御苦勞だつた。』
藤吉退場。代つて塚本賢亮、お米の母お爲、登場。お米に離座敷にて身仕舞をさせ婚禮の式は別席にて擧ぐる筈なり。
賢亮は源次の次、お爲は賢亮の次に住ふ。
大五『先生、今日は御苦勞樣で御在ます。』
賢亮『何う致しまして。』
ト賢亮、一座へ挨拶。
お爲『皆さん御免下さいまし。』
トお爲も挨拶よろしくある。
女中は賢亮お爲に膳を居ゑる。
大五『白金の親方、何うしたもんだね、お前さんが左う生帳面にして居たすつちやア、自餘の方が窮屈がつて可けねえ。何うか膝でも崩して、ぐん〱やつてお呉んなせえな。』
源次『先刻から戴いて居りやさア。』
お妻『親方、おすごしなさいなねえ。』
トお妻は源次に酌をして其儘傍に坐る。
大五郎は不圖聞耳立てゝ、
大五『何だか騷々しい樣だが、何をしてやがるんだ。』
ト奥の方を見返る。奥から吉次の聲で、
吉次『なんだ〱こん畜生。土足でこんな處へ迄入つて來やがつて。』
ト吉次、藤吉は伍八を支へながら登場。
一座いろめく。

大五「おい、手前達は何うしたんだい。お客様の前に、不躾ぢやアねえか。」
吉次「へえ、旦那何うも済みやせんかね、この野郎が、いくら止めたッて、づか／＼上り込んで來やがるんでね。」
藤吉「何てッたッて歸らねえんでさア。」
大五「なに。」
　ト大五郎、伍八を見て、むッとした介。
大五「汝は伍八ぢやアねえか、何しに來た。」
　伍八は最う眼の色を變へて、少し逆上氣味にて、
伍八「なアに、宜えだよ。來たッて宜えだよ。」
　トづか／＼と出て座の中央やゝ下手よき處に住ふ。
吉次「やい／＼こん畜生、肥料臭え圖體をしやがつて、何てえ眞似をしやがるんでい。」
伍八「お前ら默つてるが宜えだ、お前等出る幕で無えだ。」
藤吉「畜生ッ、ふざけやがると、摑み出すぞッ。」
大五「待て藤吉、お客樣の前だ、靜かにしろい。」
　藤吉、吉次は默して後に退る。伍八は大五郎に對つて、
伍八「大五郎樣、今日はお目出てえだね。」
　大五郎は苦り切つて無言つて見詰めて居る。
　伍八はお爲に對つて、
伍八「新家のお袋樣、今晩はハアおめでてえ事だねえ。」
　お爲は横を向く。
　此時晋太郎、生垣より這入つて母屋の樣子を窺つて居たが、今しも伍八の聲を聞き付けて、下手植込の中より座敷をのぞく。大五郎は居丈高に成つて、
大五「伍八、全體汝は何しに來たんだ。用があるなら聞いて遣るが、馳走の殘物でも欲しいのなら、勝手の方に廻るが宜いや。」
伍八「アハヽヽ。お前樣ぢやねえだ、殘り物なんざ入らねえだ。」
大五「之ぢやア、何の用があつて來たんだ。」
伍八「用は無えだ。」
大五「なにッ。」
伍八「用は無えだよ。」
大五「用は無えと。」
伍八「用無えだッて、宜えでねえか。おらが御主人の家におらが歸つて來るに、用あるも無えも、宜えでねえか。」
大五「なに、貴樣の家だと、あゝ貴樣は逆上せたな、可哀想に最う正氣が無えと見えるな。」
伍八「あに、おらが正氣が無えだッて、正氣は無えかも知れねえが、お前見た樣な盜賊氣も無えだよ。」
大五「なんだと。」
　ト大五郎は赫となる介。
伍八「お前の樣にたら、恩も何も忘れて了うて、正直な人を欺らかいて、家まで掠奪るやうな太え魂性ッ骨はおらがは持つて居ねえだよ。」
大五「伍八、欺して家を取つたゝア、な、何だ。」
伍八「取つたから取つたと言ふだ。藪醫者と二人で宜え加減な事を言やがつて、小旦那欺くらかいて、證文さ判押さしたでねえか。」
　ト賢亮にも掛けて言ふ。
賢亮「怪しからん事を言ふ。まるで騙りだな、貴樣は。」
大五「塚本さん、まア、宜らがさア。野ら作の晋の野郎に宜い加減な事を聞きやがつて、有る事無え事言ふんでさア。おい伍八、汝は何も知るめえが、あの證文を書く前に、乃公が何の位止めたか知れねえんだ。ねえ塚本さん、お前さんも知つて居なさらア。只た一軒しきやア殘つて居ねえ家までも書入れるたア、あんまり向不見だ、それだけは止しなせえッ

て、塚本さんと代りん〳〵止めたんだが、金せえ見りやア家も何も見さかひの無え人なんだ。乃公も仕方が無えから、晋さんの言ふ通りに晋かしたんだが、氣の毒で無え事もなかつたのさ。」

ト大五郎は客に聞かせる心にて云ふ。

賢亮「其通りです。あの時は中間に介つて、僕も實に當惑したですよ。」

晋太「夫りや譃だ、えゝッ、譃だ〳〵ッ。」

ト晋太郎、覺えず植込より出來り、緣先より大五郎をきッと見上げる。

大五郎始め源次、賢亮、お爲、お妻等一同、打驚く、伍八も意外だといふ思入。

伍八「小旦那、そんな處に居さッしやる事無えだ。お前樣の家だもの、なに遠慮する事無えだよ。爰へ來さッせえよ、來さッせえよ。」

晋太郎は上つて大五郎の前近く坐る。

晋太「は、間さん、だ、大五郎さん、お前ッ、きッ、貴樣はッ。」

ト氣ばかりあせつて口が利けぬ介。大五郎は嘲笑つて、

大五「晋太郎か、なんだ盜人じみた眞似をしやがつて、用があるなら、何故表から這入つて來ねえ。情ねえ魂性に成つたなア。」

晋太「きッ、貴樣こそッ、泥棒だ、どッ、泥棒だ、ぬッ、ぬッ、盜人だッ。」

大五「なんだと。おれが盜人だと。馬鹿な事を言ふな。」

晋太「け、賢亮と二人で、私を欺して、あ、あの證文を、あの證文は、私が書きやアしない。」

大五「うそを吐けえッ。」

ト激しく冠せて言ふ。

此時、源次の傍のお妻は、我知らず立たうとする。源次、袖を取つて押へ、目顏で、止せと留める。お妻は吸物椀の蓋を取つて酒を注いで一息に呑む。

賢亮「晋太郎さん、何うしたもんだ、外の場合とは違ひますぞ。座興にしても聞捨てられんですな。貴樣はこの目出度い席を汚す爲めに、言掛りをするのだね。」

ト賢亮もやゝ座を進み出る。

晋太「なんだ、お前さんまで、あの時私をお前さんが、勸めたぢやないか。」

ト晋太郎は怒りに舌も縺れ、はら〳〵と涙を滾す。

賢亮「怪しからん事を。お默んなさい。」

お爲もにぢり出て、

お爲「これ、晋太郎、何だね、お前は。失禮な事を言はないで、早くお歸んなさい。間さんにお詫をしてお歸りッ。」

お爲は叔母だといふを笠に着て晋太郎をたしなめる。

晋太「おゝ、新家の叔母さん。」

ト晋太郎はくやしき介。

晋太「叔母さん、米ちやんも、おッ、お目出度う御在ます。」

お爲「難有う。お前も喜んでお呉れよ。」

お米は此前より離座敷を出で、座敷の緣側より晋太郎を覗きいろ〳〵介あり。

晋太「むゝ……。」

ト晋太郎は口惜しさに最う物も言へず、拳を振りほろ〳〵と涙を滾す。

お妻は、この内時々我を忘れて口を出さうとしては、源次に引留められ、癇癪押へに椀の蓋で酒を注いでは飲んで居る。

大五「新家の阿母さん、お前さんの甥公さんだが困つたもんですねえ、何うしたもんでせう。」

お爲「皆さんのお邪魔をして、何うも濟みませんねえ。ほんとうに仕やうのない奴だ、皆さん何卒撮み出して下さい。」

大五「ぢやア、左うしやすかね。おい吉、藤吉と

二人で、連れてくが宜いや。』
吉次『ようがす。藤公、手を貸しな。』
藤吉『よしきた。』
ト吉次、藤吉は、立ちかゝり晋太郎の手を取つて、
吉次
藤吉『さア、うしやアがれ。』
ト晋太郎は立つまいとする、吉次、藤吉は無理に引立てる。
伍八『お前等は小旦那を何うしる氣だ。』
ト伍八も立ちかゝる。
源次『おい、晋さん、最う歸んなすつた方が好うがさア。』
晋太『親方、わ、私は、く、く、口惜しい。』
ト晋太郎、袖を額に當てゝ泣く。
源次『おい、お妻さん。』
ト目顔で指圖する介。お妻は立つて晋太郎の傍へ來て、
お妻『若旦那、誰が聞いたツて、判つてますからね、最うお歸んなすつた方がよござんすよ。』
ト劬りながら伍八に向ひ、
お妻『伍八さん、若旦那をお連れ申したら宜いでせうよ。さ、若旦那、伍八さんと一緒にお歸んなさいよ。』
晋太『えゝ、お妻さん、歸るよ、歸る事は歸るけれども。』
ト源次の顏を見る。源次は目顔にて呑込ませて、
源次『私に任せてお歸んなさるが、克うがさア。伍八どん、早く行くがいゝぜ。』
伍八『小旦那、くやしいけんど、參りますべえ。』
ト伍八、晋太郎をすゝめて庭に下り立つ。晋太郎は行きかねるを伍八すゝめる。お米伸上つて見る。
お爲『なにを、ぐづ〳〵して居るんだらうねえ、あのお前さん達、早く撮み出して下さいよ。』
晋太郎むツとした介で座敷へ引返さうとする、伍八、押止め無理に引立て退場。お妻は、二人の退場と共に座敷の中央に、酒に醉つた介にて坐る。吉次と藤吉は次の間へ退場。
お米は晋太郎の退場と見ると心もそゞろに、雨の袂を前に抱へ裙を引上げ、晋太郎の跡を追ふ心にて、庭を上手へ退場。
大五『いやどうも、飛んだ事で、折角の興をさましやしたツけ。今銚子を代へやすから、新規蒔直してえ事に願ひやせう。』
一座默禮する。一時退場して居た女中、また登場、酌をして廻る、五左衞門は盃を手に取りながら、
五左『上原の小旦那も困りもんでがすなア。』
大五『左樣さ。』
與兵『變れば變るもんだ。』
ト立去つた跡を見込んで思入。
賢亮『何う見ても上原の總領とは思へませんなア。實に何うも、あの風體といつたら、全然ゆすり騙りの體でさア。』
大五『人間もあゝ成つちやア、御仕舞ですよ。』
お爲『私もあんなものを甥に持つて、どんなに肩身がせまいかしれませんよ。』
賢亮『實にお察し申すです。』
大五『そんな話なんざよしにして、酒の方を最うちつと流行らせやせう。』
トお妻を見て、
大五『おいお妻さん、何うしたもんだね。』
お妻は、醉が出てうつとりとした處を大五郎に呼ばれて、氣が付いたといふ介にて、
お妻『え、何ですツて。』
大五『何ですぢやねえよ、お前が取持つて吳れねえぢやア、薩張酒が流行らねえぢやアねえかね。』
お妻『何を、私が取持つんですツて。』

ト お妻は故と合點のゆかぬ介。
大五『おい、何をいつてるんだ。お客様のお取持ちが、お前の役だらうぢやアねえかね。』
お妻『お客様のお取持ちですツて。ヘン、何處のお客様なの。ちやんちやら可笑いや、人を。』
ト空嘯くこなし。
大五郎は突然にお妻の様子が變つたので、不審に思ふ介にて、
大五『お妻さん、お前が左う早く醉つて呉れちやア困るぢやないか。』
お妻『酒に醉やア何うしたツて言ふの。お酒を飲みやア醉ひもしようさ。ヘン、誰がこんな水ツぽい酒なんかに醉ふものかね。』
大五郎は、むツとしたが直ぐまた打解けた介にて、
大五『面白え。醉はなきやア、醉つて見ちや何うだ。おい是がよからうぜ。』
ト大五郎、吸物椀の蓋を取つて獻す。
お妻はじろりと見て、せゝら笑ひ、
お妻『お前さんも御串談もんだね、そんな物でなら、最う疾うに召しあがつたのさ。私を醉はしたきや、是に注ぐがいゝよ。』
ト手近の盃洗を取り、水を膳にこぼし、大五郎の前に突出し、
お妻『おい姐さん、お憚りだが、なみ〳〵とついでお呉れ。』
女中は膽を潰して注ぎかねる。大五郎はむツとして、
大五『お妻、お前夫で見事飲む氣か。』
お妻『是で飲みやア何うしようツていふの。』
大五『あんまり我儘が過ぎようぜ。』
お妻『なに、我儘だツて、なにが我儘なんだよ。』
ト眼を据ゑて大五郎に突かゝる。大五郎は默つて居る。
お妻『ちよいとお花さん、こんな水ツぽい酒ぢやア醉へないからねえ、松葉屋に人をやつて、生一本の正宗を二挺でも、三挺でも、菰冠ごとよこせツて言つてお呉れ。』
大五郎、最う勘忍ならぬといふ介にて、
大五『お妻ツ、默つて居りやア附け上りやアがつて、其口は何だ。』
賢亮は見かねた介にて、
賢亮『おいお妻さん、お前其上醉つちやア仕様が無えだらう。』
お妻『お前さんなんぞが餘計なお世話さ。』
賢亮『餘計なお世話とは何だ。我輩に對して失禮千萬な。』
ト賢亮、反身に成つてお妻を見据ゑる。
お妻『失禮だもないもんだ、詐僞師の共謀者のくせに。』
賢亮『詐僞師とは誰の事だ。』
お妻『其處に居る間さんさ。』
賢亮、愕然とする。大五郎、色を變へる。
お妻『其顔は何だよ。まア揃ひも揃つて、詐欺師面を能くもお並べだねえ。ほゝほ。爭はれないものさね、お前さん達のその顔を私が見りやアね、ちやアんと詐僞師と書いてあるんだよ。まアをかしな顔さねえ。おほゝゝ。』
源次は苦笑をする。さすがのお爲も、度膽を拔かれた介。大五郎、わざと落付いて、
大五『お妻、汝も氣が違やアがつたな。』
お妻『ヘン、人を氣違ひ扱ひにして、自己の惡事を、ごまかさうたツて、左うはいかないよ。』
大五『惡事とは何だ。』
お妻『お前も忘れツぽいねえ、私ん家の座敷開の時の事をお忘れなの。』
大五『何だと。』
お妻『何だもないもんだ。私に聞かれて、二人共面くらやがつた癖に。』
お爲『まア驚いた。何て口だらう。其口をうまく使つて、本家の身代をはたかしたんだね。』

お妻「おやお婆さん、おつた事をお言ひだね。娘を詐僞師に押付ける様な人に、よくそんな口が利けたねえ。」

お篤はぐッと詰る。

お妻「自分の親方、聞いて下さいよ、嬰兒の手を捻ぢるやうな眞似をして、晋さんの家を捲上げて了つたんですよ。」

源次「夫りやア左うだらう。先刻からの事を見ても判つてらア。間さん、お前も随分たちの惡い惡黨だねえ。」

大五「おい源次、たちの惡い惡黨たア何だ。」

源次「たちが惡いぢやねえか。法律の手品を使つて、晋さんを奈落に突落しやがつたぢやアねえか。」

大五「しやら臭えやい。法律にせえ觸れなきやア、何が惡事なんだ。」

源次「間ッ。」

ト鋭く言つて、源次は手早く羽織の紐をほどき、うしろにかなぐり捨て、

源次「法律でとつちめられねえ奴ア、おいらがとつちめて遣らア。覺悟をしろッ。」

ト源次、懐中から短刀を出し鞘を拂つてをどりかゝり、大五郎が驚いて身を避さうとする處を、肩先に一刀浴びせる。大五郎は肩口を押へて縁から庭に飛び下りる、つゞいて源次も飛び下り、立廻り宜しくあつて、逃ぐるを逐ひかけ裏手の方へと二人退場。

この内女中は驚いて奥へ逃げる、五左衛門も與兵衛も、腰をぬかさぬばかりに驚き、うろたへて奥へ退場。お篤もつゞいて退場。賢亮は大五郎を助け、源次を支へるところで、庭へ下りかけるをお妻、うしろから引止める。賢亮はお妻を突仆して庭に下りる、お妻、起上つて逐ひかける。

この模様にて（道具廻る）

其三　間新宅奥庭の場

舞臺は間新宅奥庭續にて、上手に榎の大樹、其他立木よろしく、大樹の下に小さき稲荷の祠あり、中央は遙かに森を望み、下手竹藪よろしくあり。

稲荷の祠の前に、晋太郎、お米、既に情死せし體にて仆れ居る。

幕明くと、上手奥、祠の後より伍八、源次子分伊太郎、登場。

伍八「伊太郎さん、お前おれに離れねえで來さッせえよ。」

伊太「滅法闇えぢやねえか。伍八どん、飛んでもねえ方に引張つてッちや不可えぜ。」

伍八「俺等にこの庭の案内間違えッこ無えだから、わしらに放れねえで來さッせえ。」

伊太「よしきた。」

伍八「小旦那にも困るだ、また途中で見えなくなつただ。」

伊太「屹度此家へ引返したに違えねえ。おいらにしたッてそんな目に逢やア、其儘歸れねえなア當然だ。」

伍八「親方が居さッしやるだから、大丈夫だけんど、間違えがあつちや成んねえから、伊太さん、早く行くべえよ。」

伊太「親方も居りやアおいらも附いてらあ、安心して居ねえ。」

兩人探り／＼稲荷の傍まで來る。此時月森の木の間に昇り、梢を洩れ、清光祠の上を照らす。

伍八「おゝ、御先祖様のお稲荷様の前に來ただ。」

ト伍八、目禮する。

伊太「伍八どん、何だか其處に居る様だぜ。」

ト伊太郎、晋太郎とお米の死骸を透かしみて怪しむ介。

伍八『え、何が居るだね。』
伊太『それ、そこのお稲荷様の前に居るぢやねえか。』
伍八『え、誰か寝てるだよ。』
ト伍八、死骸を見て、驚く介。
伍八『ひやアッ、これ小旦那だ。』
伊太『え、晋さんだッて。おッ、一人はお米さんだ。』
ト兩人、仰天の介。
下手より大五郎、傷を負ひながら源次に追はれて登場。
つゞいて源次、匕首を振り上げ大五郎の跡を逐うて登場。
伍八は晋太郎お米を介抱の介。伊太郎は、物音を聞き付け、下手を見て屹と身構へする。
源次『大五郎、此場に成つても逃げる氣か。惡黨にも似合はねえ野郎だッ。』
大五『汝みたいな溝渫に呉れるやうな命ぢやねえや。』
源次『呉れねえだッて取つて遣らア。』
ト立廻つてよろしく止る。
伊太『やッ、親方だ。親方しつかりしねえ、伊太が來たぜ。』

源次『おゝ、伊太か。汝は爰を意はねえで、彼方へ行つて、お妻に怪我をさせねえやうにしろ。』
伊太『合點だッ。』
ト伊太郎、一散に下手へ退場。
源次『さア大五郎、覺悟をしろッ。』
ト源次、また匕首を振冠る。
伍八『親方様、小旦那とお米様が、死んで居さッしやりますだよ。』
ト伍八、晋太郎を抱きながら聲をかける。
源次『なにッ、晋さんとお米さんが死んだか。』
伍八『これ見さッせえまし。』
ト伍八、死骸に額を付けて泣く。
源次『左う聞きやア此の野郎、いよ／＼活かしちやア置かれねえ。』
ト立廻る。
下手より賢亮を逐うて、伊太郎、續いてお妻、登場。
お妻『親方。』
トお妻、源次に加勢の心にて、大五郎に小石を掴んで投付ける。
源次『お妻、晋さんとお米さんが死んだッていふから、お前は彼處に行くがいゝや。』
お妻『えゝッ、若旦那も、お米さんも。』
トお妻、仰天の介。すぐ祠の傍へ駈け寄つて伍八と共に介抱する。
源次は遂に大五郎を斬り仆す。途端に賢亮、伊太郎と立廻るはずみに源次の傍へよろめきながら寄り來る、源次は一刀に掩る。賢亮仆れる。お爲、此前より裏手の方を氣遣はしさうに、うろ／＼して居たが、この體に驚き怖れて片影に隱るゝ。源次、伊太郎、直ぐ死骸の傍に寄り集まる。
源次『晋さんも早まつた事を仕て呉れたぢやア無えか。おいらが生命を抛り出して、大五郎を殺した處を、見せて遣りたかつたに、殘念な事をして了つたなア。』
お妻『若旦那もお可哀さうだが、お米さんも氣の毒な事に成つたぢやないかねえ。』
伍八『親方様だッてお妻さんだッて、此様に心配して呉れさッしやつたに、小旦那が死んで了うちや何にも成んねえだ、お袋様が聞かしやつたら、嘸ぞ吃驚さッしやる事だらう。おらもはア、がつかりしただア。』
ト源次、お妻、殘念の介。伍八、泣く。此内隱れ居たるお爲、お米の死を聞いて驚き出來り、お米の死骸に取付き、
お爲『お米、勘忍してお呉れ。私が、わ、惡かつた

から、ね、お米、勘忍してお吳れよう。』

伍八『新家のお袋樣、とんでも無え事に成つただねえ。』

お島『伍八、お前にも面目ないよ、皆さんにも、合せる面が有りません。』

　源次、身づくろひして、

源次『お妻さん、おいらア是から自首して出るから、跡の處は、お前と伍八どんと、相談してやつて吳んねえ。』

お妻『親方は覺悟の上だらうがね、何うにか仕樣は無いものかねえ。』

源次『人を殺して、そんな未練な眞似は出來ねえや。』

伊太『親方、私を代りに遣つてお吳んなせえな。』

伍八『親方樣、わしらが行きますだよ。』

源次『お前等の親切は嬉しいが、伍八どん、お前にやア、まだ晋さんの阿母樣や松ちやんが居るぢやねえか。伊太、汝にやア子分の事を賴むから、おいらの跡を立てゝ吳んねえ。ぢやア、おいらア最う行くとしよう。』

　ト源次、行かうとする。お妻、殘り惜し氣に引留めようとする。伍八、伊太郎、お島、共に別を惜しむ介よろしくあり。

（幕）

年譜

文久元年

六月八日、長崎市材木町に、久留米藩士廣津俊藏の次男として生る。本名直人、幼名を金次郎といふ。

父俊藏は長崎にては富津南嶺といふ名に隱れて醫を業とせり。

明治二年

漢學修行のため、肥前國田代在の酒井村に行く。約二年近く酒井村に止まる。初めて「楠勳功記」「神稻水滸傳」を讀みたるはこの頃なり。甚だしく腕白。

明治四五年頃

父外務省の官吏となりて上京せしより、母故鄕久留米に移り住む。即ち酒井村を去つて母の膝下に侍す。

明治六年

再び長崎に行き、向明小學校に入る。小學校として長崎最初のものたり。

明治七年

上京。麴町番町小學校に入る。成績頗るよく、常に首席を占むれども、腕白なる事も亦校内第一なり。同窓に野口寧齋あり。

この頃馬琴等を讀む。唐本の「三國誌」は殊に愛讀せしものなり。

父朝鮮經營に心を潛め居たるにより、軍人の出入する者多し。野津大將（當時大佐）大沼少將（當時少佐）等特によく來る。それ等の人々に勸められ、幼年校に入らんとせしも、病氣して時期遲る。

明治十年

番町小學校卒業。父の長崎時代の醫業を繼がんとして、外國語學校（獨逸語）より大學醫學部豫備門に入る。入澤達吉博士等同窓たり。

明治十一年

肺尖加答兒に罹る。病後醫學に向かざる事を感じ、廢學す。商人たらんとして、五代友厚に從ひ大阪に行く。大阪商業會議所の書記となる。

明治十三年

大阪より再び上京。

明治十四年

農商務省官吏となる。これより官吏生活の五年間は放縱を極む。

明治十六年

五月父を喪ひ、六月母を喪ふ。

明治十八年

官吏を止め、二年近く放浪す。

明治二十年

六月友人山内愚仙の勸告に從ひ、初めて小說を書く。「女子參政蜃中樓」これなり。「東京繪入新聞」に連載す。これ文壇に立ちし第一歩なり。

明治二十一年

蒲池鎭厚長女壽美子と結婚。

明治二十二年

長男俊夫生る。

『殘菊』を書き、世評高し。

明治二十四年

牛込矢來町に住す。轉々として居を移す癖あれども、この矢來町には終に十年間を暮せり。

次男和郎生る。

明治二十八年

主觀的作風より客觀的作風に轉ぜんとして二三年前より苦心せし效果、やゝ現れ始む。

『變目傳』『黒蜴蜓』『龜さん』等を書く。

明治二十九年

『段々染』『河内屋』『今戸心中』『淺瀬の波』外九篇を書く。最も油の乘りし年なり。

明治三十年

『非國民』『あにき』『靑大將』『畜生腹』外九篇を書く。

明治三十一年

『羽拔鳥』『五枚姿繪』『縺れ絲』外數篇を書く。七月妻壽美子死去。

明治三十二年

『骨ぬすみ』『紫被布』『二人やもめ』外十篇を書く。『骨ぬすみ』は前年の『縺れ絲』翌年の『目黑小町』等と三部作をなす。

明治三十三年

『目黑小町』外六篇。

明治三十四年

『八幡の狂女』外十數篇。

明治三十五年

『雨』『姫様お貞』外數篇。

高木武雅長女潔子と結婚。

この頃盛んに轉宅す。早稲田鶴卷町より、市ケ谷甲良町に移り、間もなく麻布櫻田町に移る。

明治三十七年

『松原饅頭』『兄の煩悶』外十數篇を書く。

移轉癖尙癒えず、櫻田町より霞町一番地に轉じ、更に笄町に移り、再び霞町二十二番地に移る。この霞町二十二番地は牛込矢來町と共に最も長く住ひし家なり。

明治三十八年

脚本『目黑巷談』を書く。高田、河合一座にて本鄕座に上演。

明治三十九年

この頃より厭世的傾向次第に强くなる。創作に熱なし。

明治四十一年

二月『二六新聞』に長篇『心の火』を掲載し始め、三百回餘に及ぶ。それまでも度々新聞小說を書きたれども、大概通俗小說なり。『心の火』は本心より書きし唯一の長篇小說と云ふべし。――後『人』と改題して金港文淵堂より出版。

長男俊夫早稲田大學政治經濟科に入學。

明治四十二年

次男和郎早稲田大學英文科に入學。

厭世的傾向益々强し。創作的興味殆んど消失。

明治四十五年（大正元年）

俊夫早大卒業。

大正二年

和郎早大卒業。

大正三年

六月肺を病む。長男名古屋にあり。次男は入營中なり。

大正四年

初秋、病を養ふために名古屋の長男の許に行く。

大正五年

知多半島師崎町の海濱病院にて療養。やゝ快方に赴く。

大正六年

晩秋、相州片瀨に移り住む。間もなく鎌倉坂の下に移る。

大正十二年

鎌倉小町にて震災に遭ふ。家屋倒壞して下敷きとなりしも、寢椅子に梁を支へられて不思議に助かる。

昭和三年

十月十五日大森木原山にて逝く。

川上眉山集

遣付けろ。腕一杯に遣付けろ。梅、手前もいゝ野郎になつたな。手前が左樣いふ氣を出してくるのは己ア實に有難え。ナーニ、あとの事は案じるな。己も男だ。何をくよ〳〵思ふもんか。高が三年や五年の間、ぐツと一寢入して待つて居たッて濟まア。此方の心配は些もいらねえ。今でも鍛鐵の平作だ。己アまだ〳〵老込まねえ。目こそ滿足に遣へりやア、手前と一所に行つて見る位な元氣だ。アハヽヽ、行け〳〵。行かねえぢやア譃だ。何でも一番うまく遣つて、己の鼻も高くなるやうな、立派な身の上になつてくれ。己ア今ッから樂みにして待つて居るぜ。」

あゝ、其實平作は病氣で惱んで、昨夜も一睡寢られなかつた位だ。一昨日も起きられない身を我慢して、杖を力に漸と仕事に出たが、途中の坂で流石の强情も遂にへたばつて、片手に笛を持つたまゝ、辛うじて支いて居た杖に取縋つて、稍多時は前へも踏出せなかつた。「あゝ己も年を取つた」と、思はず知らず出た言葉もつくづく身の衰へを感じたからでもあらう。けれども今は十分の元氣を裝つて物の見事に言つてのけた。閉合つた目は淋しさうに笑を含んで、我子の方へ向いて居る。

聞いて梅吉はぞく〳〵するほど嬉しがつた。着物に餘る膝頭の前を搔合せながら乘出して、

「父樣、よく言つてくれた。何にも言はねえ。忝けねえ。父樣なればこそ左樣いつてくれるんだ。其有難え挨拶に對しても、己ア屹度遣つて來るよ。行つて歸つた曉にやア、望次第の贅澤も爲てえ放題させて見せらア、己ア眞個に腕ツ限り魂限り遣つて遣つて遣りぬく氣だ。」

と思はず拳に力も這入る。平作も身を進めて、

「うむ、うむ、手前なら屹度遣るだらう。あゝ己アいゝ子を持つた。」

「ナニお前、譽めるなア未だ早えや。だが己ア、少しの中でもお前に別れて居るのが實を言やア、嫌だけれど、それを言つた日にやア仕樣がねえ。」

と流石に少し萎れ顏、聞く身の思も色には出たが、忽ち變つて聲鋭く、

「べらぼうめ、其樣な氣で可けるもんか。己を見や。此樣な身體で居るけれど、これンばかりも弱い音は吹かねえ。」

一搖身を搖つて梅吉は又乘出した。目には一雫涙を浮べて、

「父樣、有難え、有難え、己ア禮のいひ樣も知らねえ。最う逡巡は決してしねえよ。一も二もなく我無者に出精さア。喜んでくんねえ。」

「それでこそ己の子だ。己ア外に言ふ事アねえ。たゞ確かり遣つてくれろよ。」

「うむ遣らなくッて、何うするもんか。」

と聲に力の籠る折節、臺所の方からかん高な女の聲で、

「梅樣、今鰻と酒が來たが、こりやアお前が誂へたんだらうね。」

「左樣だ〳〵。今そつちへ行くよ。」と、父の方へ振返つて、「父樣、お前の好な蒲燒が來た。一盃飮んでくんねえ。」

「手前又費えな事をしたな。止しやアいゝに。」

「ナーニお前。」

と捨臺辭で梅吉は出て行つた。

平作は唯心の中に、あゝ可愛い奴だ。一日も早く出世をさせて遣りてえ。己の身體は何うなつても構はねえ。うんと氣丈夫にして出して遣らう。己ア最う澤山だ。先は見えてらア。これが眞實の娑婆塞げだ。こんなものに氣を置かしてなるものか。左樣だ。左樣だ。

とばかり眉は自然と寄る途端、梅吉は無骨な手つきで膳を持つて這入つて來た。傍に出て居る火鉢を除けて、足の曲つた能代の膳の縁の、剝

れて居ない方を父の前へ差向けながら、「さあ父様、始めよう。いゝか注ぐぜ。」

「うむ、此奴ア御馳走だ。手前の志だと思やア、己ア眞箇にうまく飲めるぜ。」

「左樣いつてくれりやア、酒が活きらア。まあまあ重ねねえな。」

肴といへば鹽と菜漬ばかりだ。器はいづれも滿足なものはない。部屋は素より風穴だらけで、根太は凡うから拔けて居るから、腹の切れた疊は波を打つて居る。天井といへば屋根裏ばかりの、何處も彼處も煤古けて居る。此樣な中にも、金で買はれない樂は二人の間にある。

「梅、手前は些も飲まねえぢやアねえか。己ア酌をしてえが勘が惡いから。」

「ナーニ先刻から一人で飲つて居るよ。うむ、すッかり忘れて居た。己ア此間一寸山仕事を遣らかしてね、儲けた金がこゝに八兩ばかり有る。何かの足しにお前取つて置きねえ。それから今度行く事が極まりやア、親方から遣す金も少しある。それも皆お前に遣らア。」

盃を下に置いて平作は手を拍つた。

「ナニ己アいらねえ。何日中くれたのも、未だ手を付けねえでそツくりして居らア。食つて行くばかりなら按摩でちやアんと渡れるんだ。其樣に貰つたッて仕樣がねえ。手前それで出稼ぎのお名殘に、何か前祝でもするがいゝや」

「祝は歸つて來てから思ふさま爲らアな。其樣た事を言はねえで取つて置きねえ。え、よう、折角持つて來たんだ。」

暫く押合つたが遂に取らせた。流石平作は老人染みて、

「手前は何うして此樣によく氣を付けてくれるんだ。己アつひぞ親らしい事もしず、野放しに拋出して育てた手前だが、親と思やアこそ斯らして始終……、あゝ子は持ちてえもんだなア。梅己ア決して忘れねえよ。」

此上優しい言葉を掛けられたらば、涙もこぼしさうな樣子で、殆ど泣聲で言出した。首の骨を曲げた事は無えと若い時分言はれた意地も、容易く折れて手をつくのを梅吉は慌てゝ押止めた。

「何だな。止しねえ、見ツともねえ、お辭儀なんぞをして、其樣な事をされちやア己ア困つちまはア、子が親にするに何の不思議があるものかな。左樣かと言つたツきりで默つて納つてくんねえ。」

周邊の壞れた火鉢の上に手を負ひながらも湯氣を吹いて居る鐵瓶の中から新らしく燗のついた徳利を引拔いて、

「さあ、熱いのが出來た。最う少し飲きねえ。お前まだ些も醉はねえぜ。」

「ナニお蔭でいゝ心持になつた。いつも左樣いふが、手前と飲むと早く醉ふぜ。」

「己もお前と飲むほどいゝ心持の事はねえ。だが嘸父樣、今に確かり儲けて歸つて、かうして又二人で飲んだら、其時ア何んなにいゝ心持だらうな。」

「左樣とも、左樣とも、早く左樣いふやうにしてくれろ。」

「父樣、一つ差さう。」

「うむ貰はう。」

父も喜び子も喜んで、彼是する中に時も移る、醉へばいよ／＼大束に出て、さも勇ましく今度の見込を話す梅吉の言葉を、喜んで平作は身を入れて聞いて居る。果は前後も左右もなく、我子の愛といふより外は何も彼も忘れて、其昔寐酒の膝の傍に未だ十歳ばかりの梅吉を引付けて、「梅手前は強えなア」と肴を挾んで與つた時のやうに、何とも知らずいゝ心持になつた。

「最う飲けねえ。すッかり醉ッちまつたぜ。ああ酒はいゝものよなア。何んな時に飲んでも事が面白くなる。こゝが有難え。」

「まだお前餘ッ程あるぜ。ぢやア殘して行かう。そんなら父樣いづれ改めて暇乞に來らア。これから歸って親方に其事も話をして、それから勝藏親分の所へ行って來よう。」
「最う行くのか。まあいゝぢやアねえか。」
「うむ、又來るよ。」
「左樣か。ぢやア又其中に逢はう。」
梅吉はやがて歸って行った。時は早暮方になって、片隅から次第に暗くなって來た。豆腐屋の聲と茹出饂飩と賣殘りの鹽辛が入亂れて行く跡から、何處かの製造所から出て來たか腹の減ったやうな顔付をした一群が、思ひ〳〵の足並で往還を通過ぎる。路次向うでは赤ん坊が泣出す、隣の家では膳を踏返す、何の祝か遠くの方で花火の音が聞える、鍛冶屋の槌が鳴渡って、米屋の臼が響くといふ其中に埋って平作は柱に凭れながら、半ば眠ったやうにポツネンとして居た。折しも吹起る風の音に、氣が付いて耳をそばだてゝ、
「あゝ惡く風になったな。梅は住馴れちやア居るだらうが、川ッ端は嘸寒からう。」
縦になって居る破障子はどゞツと吹撲られて、今にも飛んで行きさうだ。
「あゝ梅は最う家へ着いたらうか。」
遙かに法華寺の太鼓が聞える。四邊はすッかり暗くなった。

（二）

號外の呼聲は遠くなって、いつも通る辻占賣も未だ廻って來ない宵の取付、左衞門河岸の裏道を辿って行く一人の女がある。三河屋と大きく假名で散らしたぶら提灯をさげ、棒縞の半天の袖に千草色の包を抱へて、島田は根が重たくッてと言ひさうな銀杏返しに銀の一本插、東下駄の突掛工合にも俠といふ處が見えて、白粉無しの口紅ばかり、少しは御自慢らしい風の娘だ。
恰度其時後から、俯向きながら歩いて來る大男がある。女の足の造作もなく追付かれて、前の娘は何心なく振返った。
「おやッ、梅ぢやないか。」
提灯を取直して莞爾見上げる。男はそれと見て忽ち顔を和らげた。
「おゝ、お千代さん。今時分何處へ。」
「何處へも無いもんだ。お前は酷いよ。」
「何故々々。」
「此提灯で誰だか分りさうなもんぢやないか。後から來ながら聲も掛けないんだもの。たんと左樣するがいゝのさ。」
「詰らねえ事をいふぜ。己ア考えながら歩いて居たから、前なんざア見やしねえ」
「何を考へながら歩いてたの。誰かの事をかえ。」
「止せえ。癪をいふなえ。眞實に何處へ行ったんだよ。」
「いゝ處。」
「話しねえな。」
「何ね、一寸用があって大富さんの處まで行って來たんだよ。眞實にいゝ處で遇ったねえ。お前は嫌だらう。」
と擦寄って一寸顔を見る。見返す梅吉も萬更でない笑顔で、
「馬鹿ア言ひねえ。さあ、一處に歸らう。」
「直に歸らなくッたッて可いぢやないか。未だ早いやね。眞實に態と拵へたやうに落合ったねえ。私ア此樣に嬉しがってるのに、お前は何とも思はないから平氣だよ。憎らしい。」
と優しく睨む。
「べらぼうめ、男といふものはな、表へ出して其樣にぎやア〳〵騷ぎやアしねえ。これでも腹の中ぢやアな、」
「無據くと思ってるんだらう。お前は不實だ

よ。」
手を擧げて二の腕をぷツつり、梅吉は大げさに顏を顰めて、
「あ痛え、邪慳な事をするぜ。そんなら一寸何處かへ寄つて行かうか。左様いへばお前に話して置きてえ事もあるんだ。」
と打解けて物和に出る。さうなると又女の方は掛出して來る。
「何もお附合に其様な事をしなくツてもいゝよ。」
「其様な事をいふなえ。おつう惡く出るぜ。最う斯うなつちやア嫌だツたツて連れて行かア。」
と少し御機嫌を取る。お千代は片笑凹に內心を見せながら、
「そんなら負けて上げようか。」
「なぞと恩に着せる奴さ。餘り粗末にすると男罰が當るぜ。」
「おほゝゝ、さあ行かう。」
と言ひながら持つて居た提灯を吹消す。
「何だツて消しちまつたんだな。下らねえ事をするぢやアねえか。」
「私ア闇の方が嬉しいわ。」
「なアんだ。」と一つ笑つた様子、「闇が好けりやア盲目に成んねえ。」
二足三足前へ歩出した。お千代は後から追掛けるやうな調子で、
一人の氣も知らないで何だねえ。あれ、恐いから手を引かれておくれよう。」
「チョツ、困つた孩兒だなア。」
軒の下に寢て居た赤犬は吠えようか吠えまいかと言ふ風で、怪訝な顏をして後を見送つた。闇は遠くなつて行く足音を埋めて、只見る中に二人は横町へ曲つた。
路次を拔けて左へ折れて、浮世鮨の角から右へ這入れば、其處は阿多福新道と言つて、艶かしい住居が並んで居る處、「黃金升にて米量る」と怪しげな聲で若衆が稽古して居る出格子の家から三軒目に、鳥といふ擦硝子の招牌を掛けた家がある。淺黃の壁に箕垣といふ拵の處から這入つて、飛石傳ひにずツと通れば、安普請の見付ばかりの、鈴蟲の籠といふ建築の二階家がある。室は大抵二疊三疊四疊半、大きな胡瓜があれば插んで遣りたいやうな小間ばかりで、細長い緣側が蜘手に折曲つて居る。表二階の裏梯子を下りると、猫の額ほどな中庭があつて、横手に又一つ小座敷がある。床には贋一蝶の浮世人物、脇に氷柱形の掛花瓶が水も入れた事もないから中は塵埃だらけで、誰が謔戯をしたのか護謨細工の花簪が插してある。
暫くして其室に姿を見せたのは先刻の二人だ。鍋を中に差向つて箸を餘所に談話をして居る、梅吉の煙管の詰つたのを、お千代は通して遣りながら、
「女房がないと如此だから困るねえ。」
「一人ありやア澤山だ。」
「おや何處に。」と白ばツくれる。
「べらぼうめ、外に有るもんかえ。其奴はな、三河屋の娘でお千代と言つてな、自慢ぢやねえが美い女よ。お前まだ遇つた事はねえか。」
「馬鹿にお爲でないよ。お前は何だか當にならないよ。」とは言つたが腹では莞爾。
「これほど惚くなつても、未だ不足か。だが喃、考えて見りやア氣が咎めらア。」と口三味線で、
「大事々々のお主様、勿體ながら家來の身、」
「おほゝゝ、久松にしちやア色が黑いねえ。」
と掃除を仕舞つて弗と吹いて見て、
「一服つけて上げようか。」
「うむ、氣が付くな。お前のなら美味からう。」
「嬉しがらせはお止しよ。そりやア何うせ中洲の彼の人見たいにやア行かないのさ。」
「止しねえ。彼様なものを兎や角いつたツて始

まらねえ。」
「お前ア性悪だから油断がならないよ。」
と言ひつゝ一寸吸付けて、
「さあ。」と煙管を差出したが、「おゝ苦い。」と顔を顰めて口を拭く。
「ハヽヽ、お前初めてか。」
「誰が外の人に此樣な事をするものかね。」
談話が途切れて食事が始まる。やがて梅吉が差出す猪口に、お千代は手輕く酌をしながら、
「お前先刻私に話して置きたい事があるとか言つたね。何だえ。」
「うむ、そりやア是非話さなければならねえ。少し眞面目な事だ。」
「二人で世帶を持たうとでも言ふ事かえ。」
「其もあり是もあるんだ。」
「おや嬉しいねえ。早くお話しな。」
とお千代は乘出す。梅吉は膝を直して、容を改めるといふほどでも無いが、少しきまつて、
「まあ一盃注いでくんねえ。おッと可し、」と一口飲んで下へ置いて、「お前まアよく聞いてくんねえ。已ア見掛けた山があつてね、此頃に遠い處へ出稼ぎに行く事にしたんだ。」
話出すのをお千代は遮つた。
「一寸待つておくれ。お前私を置いて何處かへ行くのかえ。私ア嫌だよ。好い事かと思つたら何だねえ其樣な事を。」
「まあ聞きねえ。それも一つにはな、親父に飽くまで樂をさせてえし、一つにはお前だッて、今の已の身の上ぢやア、貰掛けた處が親方がてんから承知もしめえ。そればッかりぢやアねえ、已だッても、人に押されねえ身になりてえや、そこで已ア身上を拵へに、一番力瘤で出掛ける心算だ。左樣すりやア暫くの間は、お前にも別れて居ざアならねえ。お前もまあ乘掛つた船だ。それも嫌なら仕方がねえけれど、已を思つてくれるなら、歸る時まで我慢して待つて居てくんねえ。已の爲なりお前の爲だ。ぐッと呑込んでいゝ挨拶をしちやアくれめえか。」
目瞬もせずお千代は梅吉の顔を見詰めて居る。言終つて梅吉も亦ぢッと見返した。
「そしてお前何邊の方へ行くの。」
「ぐッと乘切るんだア。先は米國だ。」
「米國。」と目を見張つて、「あの大津繪で唄ふ米國かえ。何だッて其樣な處へ行つ仕舞ふんだねえ。私ア嫌だよ。其樣な遠い處へ行つて跡の私を何うするんだえ。私ア嫌だよ。一寸逢ふッたッて中々逢はれやしないぢやないか。嫌だよ。嫌だよ。私ア聞かないよ。」
「分らねえなア、」と眉を顰めて、「それだから事を分けて言つてるぢやアねえか。」
「私は何うせ分らないよ。」と生憎らしいダダをいふ。
「其樣な事を言つちやア困らアな。冗談ぢやアねえ、落付いてよく考えて見ねえ。」
お千代は聞入れず只首を振通す。
「私ア嫌だよ、何が何でも嫌だよ。一日だッても私ア離れる氣はないよ。お前それでも強ッて行くんなら、私を一所に連れて行つておくれ。」
「仕樣がねえなア。聞きねえ。そりやア已だッてもな、お前に別れるのは勿論嫌だ。嫌は何處までも嫌だけれど、そこが浮世だ。左樣兩方いいやうにやア行かねえ。當座の別離を兎や角いふのは、そりやアお前鼻元思案だ。ぐッと先へ目を付けねえ。斯うしてぐづ／＼萎びて仕舞ふか。うんと大ばちな身の上になるか。考えなくッても分るだらう、お前どつちがいゝ。苦勞の爲時ッて言ふ若え年頃をあッけらかんと暮らしてなるものかな。お前も從つていゝ目に遇ふんだ。お前此位な辛抱が出來ねえか。」
未だ肚に據らねえかと、顔に言はせて屹と見込んだ。流石にお千代も折れて來て、さら我儘も

言はなくなる。
「それなら何うしてもお前は行くの。私はまあ何うしようねえ。」投首で素出したが、「そしてお前何の位の間行つて居るの。」
「見込をつけた處は三年だ。」
「え、三年。」と又目を見張つて、「そんな長い間顏を見られないのかえ。私ア嫌だよ。嫌だよ。嫌だよ。」
と又蒔直しをする。
「そこが辛抱だ。お前の肚は分つてるが、こゝは何うしても己を立てゝくれなくツちやアいけねえ。」
「お前は自分の勝手ばかり言つてるよ。分つてるとお言ひだけれど、お前私の身に成つても御覧な。其間私アまあ何んなだと思つて居るの。些とはお前察しておくれよ。」と心細い聲で言出す。
「尤だ。そりやア己も思はねえぢやアねえ。」
太い聲もいくらか物優しくいふ。お千代は何もしんみりと、
「私のやうなものだッて、お前可憫さうぢやないか。私ア何うしても離れる氣はないよ。お前は平氣で私を置いて行くほど、それだけ情がないのだよ。彼地へ行つたらお前又浮氣をお爲だらう。」と怨言まじり。
「べらぼうめ。其樣な氣樂な事が出來るもんかえ。最う文句はいらねえ。待つか待たねえか返事をしろ。嫌なら嫌でいゝや。勝手にしねえ。」
と癇癪聲、お千代は吃驚して顏を見上げた。
「あら、お前怒つたの。」
「怒りやアしねえけれど、何時までも形がつかねえからよ。己ア其樣に優長にしちやア居られねえ。」
「お前は何故さう氣強いのだねえ。私ア待たないとは言はないよ。けれどもお前、別れるのが辛いといふ私が惡いかえ。」
「だッてお前仕樣がねえや。」
「私ア何うして可いか分らなくなつて仕舞つたよ。それなら何だね、斯うして談話をするのも最う僅の中だね。私ア最う何だか悲しくなつて……。」
「左樣言つてくれるな。己だッてもお前を忘れる空はねえ。」
顏を見合せて暫く無言、目は互に物を言つて居る。流石女氣のお千代は涙、梅吉はそれなり俯向いて仕舞つた。徳利はいつの間にか冷くなつて居る。

（三）

立並んで居る船宿の中で三河屋が一番早く起きた。今日は梅吉がいよ／＼行くといふ日だ。立振舞の酒を出して、親方は目出度く門出を祝つてくれる。朋輩の誰彼も、ぢやア達者で行つて來ねえと、言葉は淡白して居るが、十分實意を含んで、銘々に別離の心を酌交はす。そんなら是から親父の處へ暇乞にと、漸く其處を立出でたのは未だ朝汐の退かない時分であつた。
河岸には始終上乘りをした舟が、舳を並べて繋つてある。水は無心に流れて行く。朝霧を冠つて居る厩橋は墨繪のやうで、向島はたゞ髣髴として居る。
あゝ、數へて見れば幾年越、朝夕となく通馴れた處、今が別れかとつく／＼見渡せば、勇む心も流石にたじろいで、暫く其場を去りあへず佇立んで居た。水に曝れて腐込んで居る杭に古簑の破れたのが引掛つて居るのも、心あつて目を付ければ何となく裏悲しくも見える。
思返して漸く歩出した。親父の方へ行く前に梅吉は一つ寄る處がある。先刻家の首尾を擔へて三河屋を一足先に出て行つた人がある。梅吉は其人と落合はなければならぬ。梅吉は急ぎ

足になつて其方へ行つた。只有る淋しい町の二階で、梅吉の上つて來る影を見るより、待つて居たよとばかり莞立つて迎へた人がある。それはお千代だ。

* * * * *

「あのねえ。これは紫繻子で異しいけれどねえ、昨夜私が祕密で拵へた胴卷だよ。先達よく締めて居た帶を破したんだから、お前後生だから何うぞ身につけて行つておくれな。其中にお金が少し這入つてるよ。それはお前も知つてる田舍の叔母さんがね、何か買へッて私にくれたんだよ。それから水天宮樣の護符も這入つてるよ。それからね、大變あつかましいけれどね、」と一寸羞かしさうに笑つて、「私の寫眞も這入つてるよ。」

「そりやア種々と有難え。帶を胴卷とは妙に思付いた。歸つて來るまで肌身を離すめえよ。其金は己アいらねえ。」

「左樣いはないで私の心意氣を受けておくれよ。少しばかりだけれどお前の何かの足しになつたと思へば、私ア何んなに嬉しからう。私ア知つてる通りおッ母がふんだんだから、それが無くッても少しも不自由はしないよ。」

「ぢやアまあ貰つて置かう。あゝお前も己のやうなものに掛り合つたが因果で、いろ〳〵氣を遣はせると思やア、己ア眞箇に氣の毒でならねえ。」

「其樣な事はいゝけれど何うぞねえ、一つ事を五月蠅くいふやうだが、お前彼地へ行つたら身體を大事にして、屹度病つておくれでないよ。何うぞ早く歸つて來て、ねえ、一日でも早く喜ばせておくれ。それにしても、最う直に別れなければならないかと思ふと、私ア眞實に堪らなくなつてくるよ。」

「そりやア己だッていゝ心持はしねえ。」

「何だッて今日に決めちまつたんだねえ。」

「其樣な事を言つたッて仕樣がねえ、だが啁、己アお前といふものがあるので、先方へ行つてからも何んなに勵みになるか知れねえ。言ふまでもねえけれど、お前も身體を厭つてな、必ず達者で居てくんねえ。己ア行つて仕舞つてからは、歸つてお前の笑顏が見られるといふのが最上の樂みだ。」

「私ア別れるのが實につらいよ。」

「最うそれを言つてくれるな。無理にも笑つて見せてくんねえ。」

「何うかして最う一日延しておくれな。」

「其樣な事を言つちやア切はねえ。勝藏親分は新橋で待合してる筈だ。最う何うにも猶豫はたられえ。」

「仕樣がないねえ。お前最う外に言置く事はないの。私ア言ひたい事だらけだけれど、何だか胸がつかへて仕舞つて……。」

「己も何だか別れともねえけれど、最う左樣しちやア居られねえ。」

「其樣に早く行つちやア嫌だよ。」

「それだッてお前……。」

「私ア寧そお前と一處に行つて仕舞ひたいよ。」

膝に縋つて、お千代は泣伏す。亂れかゝつて居る髮と眞白な首筋を梅吉はおッと見詰めて居たが、思はず知らずはらりと一雫衿元へつい振落す。お千代は濡優る顏を上げて、

「お前も泣いてくれるのかえ。」

と涙で一杯な目に見上げたが、「お前、」と梅吉の諸手を把つて、

「忘れてくれちやア聞かないよ。」

「そりやア己も屹度賴むぜ。」

把合つた手は容易に離れない。稍多時は其まゝ言合したやうに顏を見詰めて居る。漸く氣をかへて梅吉は遂に引離した。

「あゝ、斯うして居ると何だか行きたくなくな

つて來る。己ア一思に出掛けるよ。ぢやアお前、達者で居ねえ。」と立上つた。お千代は無言で裾を押へて居る。

「とめてくれるのは嬉しいけれど、それぢやア己ア困らアな。よ放しねえ。」

お千代は倘確かり押へて、忍音に唯泣いて居る。しよう事がなく梅吉は再び坐つた。

逢ふの嬉しさ別れのつらさ。思ふ中なら道理ではある。だましつ賺しつ、漸くの事で納得させて、梅吉は遂に往還へ出た。お千代はいきなり手摺の處へ駈出して手巾を嚙〆めてぢツと見送つた。梅吉も又振仰いで、見れば思へば流石に引かされる。無言で挨拶すれば涙で答へる其いぢらしさには、踏出す力も一時はなくなつた。

「畜生め、おつう遣るぜ。」

と車力體の男は聞えよがしに言つて過ぎた。梅吉ははツと急足にきまり惡さを隱す。お千代も同じく中へ逃込んだが、細目に引開けた障子の間から、目は何處までも後姿を離れない。

雁が共音に鳴連れて行つた。

（四）

「そんなら父樣。」と梅吉は出掛ける。

「うむ、最う行くのか。勇んで行きねえ。文句はいらねえが、うまく遣つて來てくんねえよ。」

聲尻たしかに父は元氣よく言放つ。子は其顔を見詰めて居たが、

「父樣、如才もあるめえが、何うぞ先刻言つた事をな。」

「うむ、呑込んで居るよ。最う何も氣に掛けるな。あとへ心を殘すやうぢやア、先へ行つて踏張つた仕事は出來ねえ。己の事は決して案じるにやア及ばねえよ。大丈夫だ。目こそ不自由で些少ひけるが、身體はいつでもシャンと來いだ。さあ行きねえ。ぐツと景氣をつけて行きねえ。」

「うむ行くよ。ぢやア父樣無事で。」

意を決して梅吉は行きかけたが、名殘惜しさについ振返る。今まで屹として居た平作は、樣子を變へて急に立上つた。

「あゝ梅、」と見當の違つた方を招いて、「一寸待つてくれ。」

聞くまでもなく梅吉は駈戻つた。見詰める目には有餘る心。

「父樣、何だ。」

我知らず平作は梅吉の肩へ手をかけて、

「梅、笑つてくれるな。別れに何らかして一目手前を見てえが、そりやアとても出來ねえ事だから、せめて手探りにでも能く覺えて置からと思ふんだ。梅、親の心だ、探らしてくんねえ。」

「うむ有難え。己も最う一遍よく父樣を見て置から。」

覺束ない手で平作は撫廻した。梅吉はいふに言はれぬ悲しさを覺えて、鷲握にして居た手拭で窃と目の縁を拭く。

「父樣、お前よく分るか。」

「分るとも。手前己が目の利いて居た時分と些少も變らねえな。あゝ小氣味よく肥大つてるぜ。何うぞ此身體を痩せさしてくれるな。」

身體を抱くやうにして、見えない目で暫く見詰めた。

「梅、己ア眞實に手前を可愛がつたぜ。」

「己だツても喃、一日もお前を思はねえ日はねえ。」

「達者で居てくれろよ。」

「お前も倘更身を大事にしてくんねえ。」

「梅……。」

「父樣……。」

「あゝ目が明きてえなア。」

はら〳〵と落つる梅吉の涙は、肩へ横にかけて

居た平作の手首を濡した。平作は心付いてはッと引離れた。

「あはゝゝ、つい下られえ愚癡になつたぜ。よしねえ事をした。さあ、一つ笑つて別れよう。」

梅吉は返事もせず唯顔を見て居る。

「梅、何をして居るんだ。」

「己ア最う些少こゝに居よう。」

「えゝ思切の悪い。梅、未練だ。何をぐづ〱して居るんだよ。其様な事ちやアいけねえ。最ッと威勢をつけや、な。未練だ〱。」

未練だといふ平作にも未練は十分ある。励ます口の下からも、別れともない色は穂に顕はれないまでも見え透いて居る。形ばかりに二人は又別れの言葉を交した。梅吉は未だ其まゝ立つて居る。平作は遂に手を把つて外へ押出した。

「いづれ目出度く會はうぜ。」

笑つて見せてピッシャリ障子を閉めて仕舞つた。梅吉は無據く歩出した。二三間踏出して礑と立止つて我にもあらず振返つたが、それなり又駈戻つて來た。

「父様、父様。」

平作も實は障子の蔭で、竊に耳を欹立てゝ居た。

「何だ。未だ其處に居るのか。何をして居るんだなア。」

とは言つたが急がはしく障子を引明けた。梅吉は直と身を寄せて心を籠めた目にしげ〱と振仰いで見た。

「父様最う一度顔を見せてくんねえ。」

（五）

木枯の果が帆柱の森を鳴らして、沖の鷗も何處へか見えなくなつた冬の半過、梅吉は遂に横濱を出て行つた。追手の風が殘る烟を吹撲つた跡は渺茫たる水と雲ばかり、汽笛の聲も半ばは太平洋の方へ散つて仕舞つた。波止場の浪は寄せて返して、其後外國船は度々來たが、言つた通り三年の間彼は歸つて來なかつた。

桑港へ着いてからの彼の歴史は、勞働の歴史である。彼は腕の續く限り有らゆる力役に身を委ねた。彼が一念は天晴稼出してといふより外は無い。斯くして半年餘りに漸く百弗の金を得たけれども、此ばかりの事で兎ても滿足しては居られない。「こんな道を拾つてちやア仕樣がねえや。」と終りに言放つて、更に荒い稼ぎに目を付けた。彼は一轉して獵虎船に乗組んだ。ベーリング海の波濤はしば〱彼を呑まんとした。張りきつて居る彼の氣は更に危險をも感じなかつた。アラスカの雪を渡つて横手なぐりに吹く風に海は黒吼に吼えて、寒暖計も徒に凍りつめる寒さの中に、彼は一意奮つて事に從つた。絶海の荒磯際に見るものとては何もない。耳も劈く怪しげな鳥の聲を聞いて、遥かに浪を蹴つて行く一群の鯨を眺めながら、一滴のジンに辛くも勞を慰める位が山である。そればかりにも滿足して、彼は飽くまで辛苦に堪へた。

幾度か彼は故郷を想起したであらう。あはれ老に臨んで明を失つて、憂世の渦中に一人格闘して居る父の上を、彼は思はずには居られなかつた。今一人取分けて心を惹く人が、此方の空を見詰めて唯待焦がれて居る姿を、幾度か彼は現に見たであらう。されど彼は離れて居る間、よしない物思をしまいと決心した。彼は其思を紛らす爲に、進んで忙しい中に身を置いた。彼はたゞ閑暇を恐れた。其上にも有りと有らゆる手段を求めて、それからそれと心を移した。人の思の斯くしても止まるものではない、彼は身を休める直に酒を飲んだ。彼の酒量は非常に上つた。醉つて其儘寐てしまつて、目が覺めるや否や寸時の猶豫もせず飛起きて働いた。

運よくも意外の獲物は日頃の十倍に越えて、乘組員は皆多額なる配當の仕合せを喜んだ。多獵の船が着くといふ報知は早くも桑港に來て、是等水夫の上汁を吸はうといふ輩は、手ぐすね引いて待網を張つて居た。されど梅吉は骨牌の席へも臨まなかつた。紅帳の家へも行かなかつた。一瓶のブランデーに疲れを醫して、醒める直に他の仕事を求めた。何處を何う潜り込んだか、彼は熊坂松と綽名された下田生れの男と共に又も或る祕密の船に傭はれた。彼は並外れたる報酬にかへて、抜賣の仲間へ入込んだ。

彼はそれより北米沿岸の津々浦々を航海して廻つた。一行の仕事は闇の夜である。彼は最もよく其職を盡した船員の一人である。船長の滿足は彼に非常の好遇を與へた。彼は其下に立つて最も大膽に最も敏活に働き廻つた。其健腕と其勇氣とは、あまねく船中の稱する所であつた。斯くして彼は遂に太平洋を横ぎつて濠洲へと押渡つた。

彼は船長に愛せられて次第に無二の幕僚となつた。再び桑港へ歸つた時、人々は莫大の利益に從つてそれ〴〵の配當を得て、多くは此船を立去つたが、彼は尚留つて片腕と頼まれて居た。三たび桑港へ歸つた時は彼が豫て定めた三年の期限であつた。彼は強ひて止められたけれど押して船長の許を辭した。船長は給料と利益の配當との外に餞別として更に夥しい金を贈つた。上陸しても彼は長く其地に留つては居ない。彼は既に其目的を達した。かの紫繻子の胴卷の中には合せて今三萬弗の手形がある。隧藏親分の許へ行つて十分の禮をして父とお千代とにと目を驚かすほどな土産物を買つた後、彼は直ちに歸國の途についた。日は花やかにテレグラフ、ヒルの燈明臺を射る冬の朝早く、チャイナ號は彼を載せて海原の霧を分けて行つた。

船を共にして歸朝する同國人の中に兩人の紳士がある。彼等は歐洲から廻つて來た人々である。一人はグラスゴー大學出のバチェラー、オブ、サイエンスで、一人はリオン大學出のドクトル、アン、ドロアである。幾年かの修學によつて得た學位と名譽とは其兩肩にからまつて彼等は如何にも得々として見える。されど其得々たる點に於ては梅吉も更に讓らなかつた。彼は兩位の紳士よりは尚大なる艱苦を凌いだ。愛嬌のあつた彼の眼からは、人を射る鋭い光が出て、ふツくりとして笑ふやうに見えた頬も、いつの間にか淋しくこけて仕舞つた。骨折からいへば梅吉は今日の結果を此紳士達よりは或は高く買つたかも知れぬ。けれども彼は少しも其事は思はなかつた。己は己だけの事を遣つてのけたんだと、彼は實に得々として居た、あゝ彼が滿腔の喜びは今何れほどであらう。彼は一直線に日本の空を見詰めた。波は浮いて雲は懸つて見渡す限りたゞ縹渺として居る。チョツ、此船はべらぼうに遅いぢやねえか。

（六）

「し、し、し、しッ、しまつた。父様は、あの父様は、な、な、亡くなつて仕舞つたか。情ねえッ、何故死んだ、何故殺した。己ア…、己ア…、己ア…、むゝゝゝ。」

無念の齒嚙に身を震はせ、拳を握んで突立つ梅吉、其まゝ犬居に摚と仆れる。太助も何と慰める言葉もない。

「尤だ。尤だが何といふにも過ぎた事だ。約束事と諦めるより外に仕方はない。お前の腹ぢやア成程そりやア濟むまいが、斯ういふ事が世間にもよくある。それだけ殘念がつて居るお前の心持で、不樣も浮ぶといふものだ。諦めなさい。諦めなさい。」

梅吉は殆ど前後不覺で、人前も構はず男泣き

に泣出した。手を付けかねて太助は見て居たが、
「そんならお前平様の事は些少も知らなんだか。」
哀悼の涙に亂れて梅吉は半夢中で居る。
「父様、何故死んでくれた。何故死んでくれたよう。愚痴を言ふぢやアねえけれど、三年の辛苦は何の爲だ、何故我慢にも待つてゝくれねえ。こんな事になると知つたなら、先の長え己の身體を、何あせつて踏出すものか。く、く、口惜しい。己ア口惜しい。思ふお前を先立たして、何うして己が濟むと思ふ。父様恨みだ、何故死んでくれたよう。あゝ何故死んでくれたよう。」
又も聲を擧げて正體もなく泣出した。顏は熱して火のやうになつて、最早拭はうとも爲ない涙は、滾々として其上を押流れる。氣の毒とばかり太助は宥め顏に、
「いくら歎いても仕樣はない。取つて返しの出來ない事だ。是非もない運と諦めて、喃、思切つて目を拭いて仕舞ひなさい。」
梅吉は漸く涙の隙から、
「今更泣いたッて追付かねえけれど、太助さん察してくんねえ。己ア此樣な筈で歸つちやア來ねえ。己ア此腸が實に破裂けるやうだ。」と落ちかゝる涙を拂つて、「太助さん、己が行つてから後の事をお前知つて居なさるだらう。後生だから聞かせてくんなせえ。」
「それも話せば涙の種だ。然しこりやアまあ追つて話さう。此上お前の歎を見るのも氣の毒だ。」
「構はねえから話してくんなせえ。ざツとでも可い。聞きてえから。」
「それぢやアまあ皆打明けて話して仕舞はう。聞きなさい。斯うだ。お前が出掛けてから當座の一年足らずといふものは、何も彼も極々無事でな、平様は毎日稼業に出るし、一所に居る彌太郎夫婦も、知つてる通り悪氣のない人達だから、出來るだけは隨分世話もする。あの儘で行けば何もないんだが、こゝが平様の運の悪い處だ、恰度冬の取附だッけ、隣家の土方の處から火事を出してな、あツといふ中に家は全燒だ。平様は其前に出掛けて夢にも知らないで、歸つて見ると着て居るものより外に何もないといふ始末さ。彌太郎夫婦も仕樣がないので、田舎へ引込んで仕舞ふといふ事になる。並々のものならば實に途方にくれるといふ處だ。だが平様は如彼いふ氣性だから、灰になりやアそれ迄だ。惜しいと思ふ身代でもねえ。あはゝゝゝ。ッてお前言つたぜ。私も心易くした中だから、兎も角も梅様の處へ知らせて遣つて、後の相談でもしなければ早速困るだらう。」と種々言つて見たが平様は一向聞入れないで、「ナニお前、梅は今一所懸命に稼いでる所だ。此樣な事を聞かせて餘計な心配をさせたくねえ。彼奴はお前親思ひだから、知らせて遣りやア直に歸つて來る。左樣すりやア折角遣りかけた仕事も、中途で止めさせて仕舞はざアならねえ。此位な事で己ア彼奴の邪魔アするのは嫌だ。遣る所まで思ふさま遣らして見てえ。眞箇によ、此處から若し聲が届くものなら出來るだけ威勢をつけて遣りてえのだ。ナニ己ア一人で何うにかするよ。食ひさへすりやア、生きて居るんだ。譯はねえやな。」と斯う言つたぜ。」
「うむ、それほど迄に己を思つてくれたか。あゝ父様、己アこれといふほどの恩返しもしねえに、お前は何うして左樣己を可愛がつてくれるんだ。」
とばかり重ねて目を押拭つて、「うむ、それから。」と又聞きかける。
「それッきり平様は誰にも知らせずに、何處か

へ行つて仕舞つたぢやアないか。私も一人で嘆心配して居ると、それから丁度三月ばかり經つてひよッくり私の處へ訪ねて來た。驚きながらも先づ〳〵安心して、何處へ行つて居たと聞いたが其事は一向言はず、見れば樣子もひどく窶れて、顏の色も心細いほど惡いんだ。氣になるから聞いて見たが、何ともねえとばかりで其も言はずさ、自分の苦勞は全體いはない人だからと思つて、慰めるやうなまあ話をして居ると、『實はお前に少し頼む事があつて來たんだ。』と言ふから、『私のやうなものだけれど、出來る事なら及ばずながら頼まれよう。』と言つて私も膝を進めた。

すると平樣のいふには、『此樣な事を言出しちやア早まり過ぎたやうで、何だか膽ッ玉の小せえやうにも聞えるが、人間といふものは脆えもので、いつ何時どんな事があるかも知れねえ。己も此頃は年を取つて愚痴になつたよ。そこでお前に頼みと言ふのは外でも無え梅の事だ。ひよッとして己の亡え後に梅が歸つて來たならばね、己の心を何うぞよく傳へてくんねえ。己アね、斯うして居ても絶間アなく思出すのは梅の事だ。實を言やア……』と言掛けたが氣をかへて、『そりやアまあいゝや。梅に斯う言つてくんねえ。己ア梅が一生懸命に稼いで居てくれると思つて心丈夫に其日を送つて居た。處で或日の事、梅が立派に出世した夢を見て、（此夢は眞實に見たんだ）いゝ心持さうに笑つたッけが、其日に目出度く往生したと、忘れずに屹度言つてくんねえ。くれ〴〵もお前頼むぜ。』

これで外に心殘りもない。とばかりで直に歸りかけるから私は慌てゝ止めた。第一居處も聞かないで、それに何だか心元ない容體の儘で別れて仕舞ふ事は私は何うしても出來ない。そちこちして居る中に晩方にもなる。足元も危いからと漸との事で引止めて、其晩とう〳〵家へ泊めたが、」

こゝまで續けて太助は俄に言葉を止めた。暫くして鼻を詰らせながら、

「その翌朝の事だッけ、」

とばかり後を繼ぎかねて、竊と梅吉の顏を見る。聞く身の素より覺悟はして居ても、弱いは流石に子の心、梅吉は總身を我と引〆めて、聲は立てないが苦しげに唸いて居る。太助は目をしばたゝいて、

「私は委しく言ふ事は出來ない。實に其、俄の事でな、私も其時は何うしようかと思つたよ。それッといふので醫者の處へ人を飛ばして遣つたが、最うそれも間に合はずさ。見る中に平樣は土氣色になつて、囈言のやうな事ばかり言つて居たが、いきなり頭を持上げて、『梅を、梅を、呼んで來てくれ。早く呼んで來てくれ。』と最う正氣もなくなつて來た。其中に、『水を水を。』といふから、急いで一杯遣るとごッくり咽へ通つたが、うんと身悶えして一尺ばかり乘出して、ほッ、ほッ、と苦しさうに息切れをさせながら、『梅や。梅や。』と二言ばかり言つて、兩手を出して空を摑んだ。」

「た、た、澤山だ。最う其あとは聞かせてくんなさるな。」

庭の紅葉は心なく散つて居る。堪へかねたる咽押破つて、一聲絞る梅吉の悲鳴に、折しも往還を通りかゝつた巡査は、何事と思はず足を止めた。空もいつしか一時雨、其雲の色。

（七）

梅吉は實に暗黑の底へ投込まれた。彼は其中に埋つて出ようともしない。が其暗黑の上に、闇を照すべき光明が一つある。梅吉は此世の中に今一つ慰むべきものを持つて居る。愛の手は此時彼が胸の中にある琴の絃に觸れて美妙の力を以て彼を喚覺ました。彼は初めて首を回ら

して他の方面に目を付けた。此上はたゞお千代に逢つて、あはれ此鬱を忘れんものと、漸く氣を取直して、見れば憂きに堪へぬ心は苦みを免れん爲に彼を騙つて、直ちに三河屋へと道を急がせた。

あゝ其途中である。恰度聖堂前へ差懸つた時、向うから來る一群の人があつた。結城の羽織に同じ小袖、腹懸股引の裾をからげて、女夫鼻緒の草履をいなせに突掛けて居る三十恰好の男は、其群の頭分といふ樣子で先に立つて、後に付添つて來る四五人の野郎共、一杯機嫌の顔を彩つて、中の二人は折を下げて蹌踉々々して居る。小脇に一人、荒木の中に花の色を見せて、派手を裏に着飾つて居るのは、此頃丸髷に結つたらしい未だ年若な女、前の男に何事か話掛けて嬉しさうに微笑つた。梅吉は何心なく其女の顔を見たが、愕然として思はず歩を止めた。

それは紛れもないお千代である。

風采、容態、爭はれぬ丸髷、見る／＼梅吉の腸は煮返る。己れッとばかり歯を喰ひしばつて、道の眞中へ仁王立に突立つた。

近づくまゝにお千代も心付いた。はッと流石に一足退つて、我にもあらず前の男の顔を見たが、咄嗟の間に思案を定めて、態と何氣なく落付いて見せた。胸はもとより人知れず轟きながらも、平氣な顔で餘所見をしながら、足も慄へず寄つて來た。

「オイ、お千代さん。」

静かには言つたが、根に含む怒氣を樣子に見せて、梅吉は屹とお千代を睨付けた。一群の目は一齊に梅吉の上に集つた。

「おや梅かへ。お前まあ何時歸つたの。先刻生家へ寄つたけれど、其樣な話は些少もなかつたから、私ア未だ彼地に居るとばかり思つて居たよ。お前何だとねえ、彼地で綺麗なお内儀を貰つて、大そう仲好く暮らして居たとねえ。いづれ此地へ一處に連れて來たんだらう。逢ひたいもんだね。」

「やい／＼。そんな手で丸められるやうな梅吉ぢやアねえぞ。己ア、よくも己の面へ泥をなすりやアがつたな。」

「お戯けでないよ。泥をなすつたとは何だえ。人聞の惡い、大概におし。私アね亭主がある身だよ。詰らない冗談を言つておくれでない。お前なんぞに指でも差される覺えは、これんばかりも有りやしない。體よく挨拶して遣りやアいゝかと思つて、生家の父の耳へでも這入つたら、お前は何んな目に遇ふか知れやしない。」

其ぬけ／＼とした脣からは嘗て燃ゆるが如き情を含んだ言葉が、そも／＼幾度出たであらう。手の裏返す冷熱は單に人前といふばかりであらうか。千計萬策は今お千代の胸裏を駈廻つて居る。

「お千代、何だ。」と彼の親分らしい男は問掛ける。

「姉御、何でがす。」と一人が差出るあとから、

「一體何うしたんで。」

「何ね、お前さん。」とお千代は前の親分に向つて、「此アね、前に生家で使つて居た梅ッて言ふ男なの。お前さんの思はくも有るわ、私ア口惜しくッてならない。大方いつか暇を喰つたのを遺恨に思つて此樣な事を言ふんだらうが……。」

「此阿魔ア。」

梅吉は猛り立つて飛掛つた。見るより親分は割つて這入つた。

「何しやがるんでえ。」

いきなり梅吉の横ッ面をくらはせる。梅吉も氣は立ちきつて居る。忽ち一場の格闘が始まつた。ついて居る野郎共はそれッと言ふより酒の勢は十分に加はつて、各自に親分を助けて打つてかゝる。拳固の雨は梅吉の眞向に隙間もな

く降注いだ。黒鐵作りの筋骨ではあるが、多勢に無勢の仕方はない、梅吉は遂に投倒されて、息もつかれぬほど散々に打ちすくめられた。

「ざまア見やがれ。さあ行かう〳〵。」

あとには塒を急ぐ鳥と五六人の人立。漸くに身を起した梅吉の、顔は脹上つて衣服は寸裂々々に裂けて居る。痛むほど倍沸返る無念に、血走る眼、逆立つ髮、嚙む脣に一筋血を引いて、最早見えぬ後影を睨詰めたが、

「己、何うするか見やアがれ。」

（八）

月夜も暗い木の間を潜つて、薇重なる落葉を蹴散らして出て來た一人の男が、小脇に抱へて居るものを摚と投下した。此處は上野の森の裏手である。夜はしん〳〵と更渡つて遠くの梢の木兎の鳴く聲が、何となく凄味を添へて居る。投下されたのは女である。口には猿轡を嵌められて、後手に嚴しく縛められて居る。男は衿元を取つて引据ゑた。

「やいお千代、此處で恨を霽すんだ。付覘つてるとも知らねえで、うッかり遠くへ出やアがつた歸り道、捕捉めえたが百年目だ。改めて言ふにやア當らねえ。己の胸に覺えがあるだらう。よくも心變りをしやアがつたな。己ッ、己ッ、己ッ。」

二度三度力まかせにこづき廻して、うんと高蹴に蹴返した。嗚呼これは梅吉である。やがて腰に差して居た出刃を引拔いて卷いてある手拭を解放した。

「やい。こゝ一時が此世の別れだ。覺悟をしやアがれ。」

逆手に持つて振冠つた。折しも雲間を離れた月は、磨ぎすました刃の上にきらりと宿つて、同時にお千代の眞向から、名殘とばかり優しい光を投掛けた。四邊はたゞ闃として居る。霜の碎ける音がいとゞ冴えて聞える。

梅吉は屹と見下ろした。お千代は最早惡びれない。流石に顏を得上げないで壞れた髮をがツくりと横へ曲げて哀れな姿で死を待つて居る。梅吉は髻を掴んで仰向かせて、再び屹と顏を見た。あゝこれが寐ても覺めても忘られなかつたお千代である。あはれ我が半生の幸福を分けてと、樂みに樂んで歸つて來たお千代である。顏も容も其以前命から二番目のものであつたお千代と、それに付いて變りはない。梅吉は其まゝ暫くぢッと見詰めて居た。

あはや血を貪る出刃はずんと下る。途端に梅吉の手は躊躇つた。片手はいつか髻を離れて、たじ〳〵と二足三足あとへ退つたが、出刃を捨てゝ摚と坐を組んだ。

月は皎々として高く冴渡つて居る。森を搖動る風は木の葉を捲いて、やがて何處へか消えて行つた。夜はいよ〳〵深くなつて最早寂寞を破るものもない。

矢庭に梅吉は立上つて、づか〳〵とお千代の傍へ行つた。

「やい。よく聞け。手前の命は最う無えものだ。此出刃で一つ剜りやア、それで此世はおさらばだが、己ア手前をな己の手にかけちやア殺せねえ。己ア此樣に踏付けにされても、心から手前を、」と口惜しさうに淚をこぼして、「憎いと思つちやア居ねえのかも知れねえ。えゝい、其樣な事ア言はなくッても可いや。さあ早く歸れ。歸つて亭主に實を盡せ。」

手早く束縛を解放して、一寸顏を見込んだが、其まゝ足早に行つて仕舞つた。

お千代は夢に夢を見たやうで茫然として稍暫く佇立んで居た。初めて、心から惡かつたといふ一念は其時さながら堤を切放したやうに押上つて來た。我知らずばた〳〵と前へ駈出して、夢中になつて梅吉の跟を追つたが、最う影も形も

見えない。
「梅、梅さん、梅吉さアん。」
お千代は殆ど絶叫した。けれども返事は更に無かつた。若し引返して来る足音もと、お千代は耳を欹立てた。四辺は底の底まで闃として居る。
「梅吉さアん。梅吉さアん。」
再び聲振絞つて呼立てた。答へるものは風ばかりだ。木兎が又啼初めた。
「梅吉さアん。」
三たび根限りに呼んで見た。其聲が反響にひゞくばかりだ。川はたゞ渦巻つて居る。木枯は亂れた横鬢を吹拔つて行つた。
翌る日の朝早く、大川端にわや〳〵と人立がある。勝手な事を口々に言つて、眉を顰めるものもあれば笑ふものもある。物見高い市中の事、人の頭は忽ちに黒山を築いた。今しもゆくりなく通掛つた梅吉は、思はず其方へ目を付けた。人々は今其處へ漂着した溺死人を、寄つて群つて評して居るのだ。一目見て梅吉は色を變じた。嗚呼、それはお千代の亡骸であつた。

（九）

なみ〳〵注けば滿五升、猩々倒しと銘を打つた大盃を提げて、市中を徘徊する一人の男がある。口を開けば彼はたゞ「酒だ。」といふ。二言めには「酒の事だ。」といふ。彼は到る處の酒屋へ飛込んで、其大盃に滿々を引いて飲んで廻つた。覺めれば直に飲む。覺めずとも追掛けて飲む。彼は酒と討死せんずばかりの樣子で、醉つて〳〵醉ひつぶれた上にも、尚引掛けて飽くまで飲む。二六時中彼は盃を離した事はない。彼は酒の中に其身を葬つて終らんとした。
彼は何者であらう。
かくて其後時を經て、彼は其大盃を枕に、大の字なりに踏反りかへつた儘、最期の言葉もなく息の通ひを止めて仕舞つた。酒精中毒との診斷の下に、彼は敢なく淺はかなものにされて、程もなく只有る寺の土となつた。松吹く風は颯々として居る。誰一人後を弔ふものもない。消えて行く哉。

書記官

(一)

色に媚ぶる野萩の下露もはや秋の色なり。人々は早くも歸りを急ぎぬ。小松の温泉に景勝の第一を占めて、さしも賑合ひし梅屋の上も下も、丘越しに通ふ廊笛の音に哀れを誘はれて廊下を行交ふ足音も稍淋しくなりぬ。車のあとより車の多くは旅鞄と客とを載せて、一里先なる停車場を指して走りぬ。暇の通ひ茶の通ひに久しく馴睦みたる婢共は、流石に後影を見送りて暫し佇立めり。前を遮る溪河の水は、淙々として遠く流れ行く。彼方の森に鳴くは鶫か。

朝夕のたつきも知らざりし山中も、年々の避暑の客に思はぬ煙を増して、瓦葺の家も木の葉越しに處々見ゆ。丘上に雲あり、一際高き松が根に起りて、巖にからむ蔦の上に靉靆けり。立續く峰々は市ある里の空を隱して、爭ひ落つる瀧の千筋はさながら銀絲を振亂しぬ。北は見渡す限り目も藐に、鹿垣きびしく、鳴子は遠く連なりて、山田の秋も忙がしげなり。西は遙かに水の行方を見せて、山幾重雲幾重、鳥は高く飛びて木の葉は自ら翻りぬ。草刈の子の一人二人、心豐かに馬を歩ませて、節面白く唄ひ連れたるが、今しも端山の裾を登行きぬ。荻の湖の波はいと靜かなり。嵐の誘ふ木葉舟の、島隱れ行く影もほの見ゆ。

折しも松の風を拂つて、妙なる琴の音は二階の一間に起りぬ。新たに來たる離座敷の客は耳を傾けつ。

絃につれて唄出す聲は、岩間に咽ぶ水を抑へて、巧に流す生田の一節、客は又更に心を動かしてか、煙草を餘所に思はず其方を見上げぬ。障子は隔ての關を据ゑて、松は心なく光琳風の影を宿せり。客は其まゝ目を轉じて、下の谷間を打見やりしが、耳は尙曲に惹かるゝ如く、鬚を撚りて身動きもせず。玉は亂落ちて俄かに繁き琴の手は、再び流れて淸く滑かなる聲は次で起れり。客は又も其方を見上げぬ。廊下を通ふ下婢を呼止めて、唄の主は誰と聞けば、顏を見て異しく笑ふ。さては大方美しき人なるべし、何者と重ねて問へば、私は存じませぬとばかり、はや岡燒の色を見せて、溜室の方へと走行きぬ。定めて朋輩の誰彼にそれと噂の種なるべし。客は微笑みて後を見送りしが、水に臨める緣先に立出でて傍の椅子に身を寄掛けぬ。琴の主は何惜氣もなく美しき聲を送れり。

客はさる省の書記官に、奧村辰彌とて、賣出しの男、はからぬ病に公の暇を乞ひ、漸く本に復したる後の身を養はんとて、今日しも此梅屋に來れるなり。燦爛かなる扮裝と見事なる髭とは、帳場より亭主を飛出さして、恭しく辭儀の下より最も眺望に富みたる此離座敷に通されぬ。三十前後の顏はそれよりも老けたるが鋭き眼の中に言はれぬ愛敬のあるを、客擦れたる婢の一人は見付出して口々に友の弄りものとなりぬ。辰彌は生得馴るゝに早く、咄嗟の間に氣の置かれぬお方樣となれり。過分の茶代に度を失ひたる亭主は、急ぎ衣裳を改めて御挨拶に罷出でしが、書記官樣と聞くより尙一層、敬ひ奉りぬ。琴はやがて曲を終りて、靜かに打語らふ聲のたしかならず聞ゆ。辰彌も今は相對ふ風色に見入

りて、心は早そこにあらず。折しも障子は颯と開きて、中なる人は立出でたるが如し。辰彌の耳は逸早く聞付けて振返りぬ。欄干にあらはれたるは五十路に近き滿丸顏の、打見にも元氣よき老人なり。頸も埋るゝばかり肥太りて、角袖着せたる布袋を其儘、笑ましげに障子の中へ振向きしが、話掛くる一言の末に身を反らせて打笑ひぬ。中なる人の影は見えず。

我を嘲る如く辰彌は椅子を離れ、庭に下立ちて其まゝ東の川原に出でぬ。地を這渡る松の間に、亂立つ石を削成して自らなる腰掛としたるが處々に見ゆ。岩を打ち岩に碎けて白く青く押流るゝ水は、一叢生ふる綠竹の中に入りて遙かなる岡の前にあらはれぬ。流に渡したる掛橋は小柴の上に黒木を連ねて覺束なげに蔦蔓をからみ付けたり。橋を渡れば山を切開きて、わざとならず落し掛けたる小瀧あり。杣の入るべき方とばかり、僅かに荊棘の露を拂うて有りの儘にしつらひたる路を登行けば、松と櫟樹の枝打交はしたる半腹に見るから淸らなる東屋あり。山は俄かに開きて鏡の如き荻の湖は眼の前に出でぬ。

圓座を打敷きて辰彌は病後の早くも疲れたる身を休めぬ。差向ひたる梅屋の一棟は山を後に水を前に心を籠めたる建樣のいと優なり。ゆくりなく目を注ぎたる彼の二階の一間に辰彌は又或物を認めぬ。明放したる障子に凭りて此方を向きて立てる一人の乙女あり。彼の唄の主なるべしと辰彌は直ちに思ひぬ。

顏は隔たりて能くも見えねど、細面の色は優れて白く、すらりとしたる立姿は更に見よげなり。心ともなく此方を打仰ぎて、しきりに我を見る人のあるにはツとしたる如く、急がはしく室の中に姿を隱しぬ。辰彌も遂に下行けり。

湯治場の日は長けれど暮れて夜にもなりぬ。今しも届きたる二三の新聞を讀終りて、辰彌は浴室にと宿の浴衣に着更へ廣き母屋の廊下に立出でたる向うより、湯氣の渦卷く濡手拭に面を延べたる首筋を拭ひながら階段のもとへと行違ひに歸る人あり。乙女なり。彼の人ぞと辰彌は早くも目を付けぬ。思ひし如く姿は極めて美し。つくろはねども自らなる百の媚は浴後の色に一入の艶を增して、後れ毛の雫暖かき頰に掛かれるも得ならずなまめきたり。其下萠の片笑靨の僅かに見えたる情を含む眼のさりとも知らず動きたる、嫺娜かなる風采の更に見過ごしがてなる、あゝ、辰彌は暫し動き得ず。

折からこれも手拭を提げて、ゆる〳〵二階を下來るは先程見たる布袋の其人、登りかけたる乙女は振仰ぎて、おや父樣、又お入浴りなさるの。幕無しねえ。と罪なげに笑ふ。笑顏の匂は言はん方なし。

親子、國色、東京のもの、と辰彌は胸に繰返しつゝ浴場へと行きぬ。あとより來るは布袋殿なり。上手に一つ新しく設へたる浴室の、右と左の開扉を引開けて、二人は齊しく中に入りぬ。心も置かず話掛くる辰彌の聲は直ちに聞えたり。

程もなく立昇る湯氣に包まれて出來りし二人は、早打解けて物言交はす中となりぬ。親し易き湯治場の人々の中にも、かゝる事に最も早きは辰彌なり。部屋へと二人は別れ際に、何うぞチトお遊びにお出下され。退屈で困りまする。と布袋殿は言葉を殘しぬ。是非私の方へも、と辰彌も挨拶に後れず輕く腰を屈めつ。

かくして辰彌は布袋の名の三好善平なる事を知りぬ。娘は末の子の光代とて秘藏のものなる由も事の序でに知りぬ。三好とは聞及びたる資產家なり。良し。大いに良し。あだに費すべき此後の日數に、心慰みの一つにても多かれ。美しき獲物ぞ。と長閑に葉卷を燻らせながら暫くして、資產家も亦妙ならずや。あはれ此時を失

はじと獨り笑傾けて又煙を吐出しぬ。峰の雲は相追うて飛べり。松も遠山も見えずなりぬ。雨か。鳥の聲の轉たけはしき。

（二）

半日の閑暇に互の胸襟を開きて、善平は殊に辰彌を得たるを喜びぬ。何省書記官正何位といふ幾字は、昔氣質の耳に立優れてよく響渡り、かゝる人に親しく語らふを身の面目とすれば、訪はれたるあとより直に訪返して、只管に倚睦まじからん事を願へり。才物だ。中々の才物だと頻りに贊稱し、あの高振らぬ處が何うも豪い。談話の面白さ。人接のよさと一々に感服したる末は、何とかして、綱雄などの中々及ぶ處でないと獨語つ。光代は傍に聞いて居たりしが、それでもあの綱雄さんは、最つと若くつて上品で、沈着いて居て氣性が高くつて、彼の方よりは餘ッ程ようござんすわ。と調子に確かめて膝押進む。ホイ、お前の前で言ふのではなかつた。と善平は笑出せば。あら、左樣いふ譯で言つたのではありませぬ。唯からうだと言つて見たばかりですよ。と顏は早くも淡紅を散らして、嫌な父樣だよ。と帶締の打紐を解きつ結びつ。綱雄といへば旅行先から、歸りがけに此處へ立寄ると言つて遣したが、お前は嘸嬉しからうなと戯謔ひ出す善平。又其樣な事を、最う私は存じませぬ。と光代はくるりと背後を向いて娘らしく怒りぬ。

善平は笑ひながら、や、然し綱雄が來たらば、二人で同腹になつて己を遣込めるであらうな。此上倚威張られては堪らぬ。己は奥村樣の處へでも逃げて行からうか。これ、後楯が付いて居ると思つて、大分強いな。と煙管に一寸背中を突きて、はゝゝゝと獨り悦に入る。

光代は向直りて、父樣は何故さう奥村樣を御贔屓になさるの。と不平らしく顏を見れば。何故とは何ういふ心だ。譽めて可いから譽めるのではないか。と父親は煙草を拂く。それだつても、他人ではありませぬか。と思ひありげなる娘の顏。うむ、分つた。綱雄を贔屓せぬのが氣に入らぬといふのか。成程それは御尤の次第だ。いや最う綱雄は見上げた男さ。お前のいふ通り若くて上品で、それから何だッけた、うむ其沈着いて居て氣性が高くて、まだ入用ならば學問が深くて腕が確かで男前がよくて品行が正しくて、あゝ疲勞れた、何處に一箇所落といふものがない若者だ。

たんと其樣な事を仰有いまし。綱雄樣が來たらば言告けて上げるからいゝ。眞箇に憎らしい父樣だよ。と光代はいよ〳〵むつかる。いやはや御機嫌を損ねて仕舞うた。と傍の空氣枕を引寄せて、善平は身を横にしながら、左樣した處を綱雄に見せて遣りたいものだ。と尙も冷かし顏。

よう御座います。いつまでもお弄りなさいまし。父樣はね、其樣な風でね、私なんぞの事もね、蔭では何んなに惡く言つていらつしやるか知れはしないわ。これからは私ア最う父樣の仰有つた事を眞實にしないからよう御座んす。一體父樣は私を其樣に可愛がつて下さらないわ。それだから此間家に居た時も、私を出拔いてお芝居へ行らしつたんだわ。私は大變に恨むからいゝ。

はて恐いな。お前に恨まれたらば眠くなつて來た。と善平は其まゝ目を塞ぐ。あれ、お休みなさつては嫌ですよ。私は淋しくつていけませんよ。と光代は進寄つて搖動かす。それなら謝罪つたか。と細く目を開けば、私は謝罪る譯はありませぬ。父樣こそお謝罪りなさるがいいわ。

何故々々。と仰向けに寐返りして善平は猶笑顏を洩らす。それだつても、さん〳〵私を嫌がら

せて置いて。と光代は美しき目に少し角を見せていふ。己が何を嫉がらせるものか。お前が獨りで嫉がつて居るのだ。それは最う綱雄は實に此上もない男さ。

父綱雄様の事を仰有る。それは最う奥村様はえらいお方でございますよ。私ア眞實に、眞實に、眞實に、眞實に、眞實に、眞實に怒つたわ。

はいはい、大そら眞實に怒つたな。怒るのを一々斷るものは無いものだ。お前は眞實に怒つたから、己は實に、實に、實に笑はうか。

何とでも御勝手になさいまし。私ア最う……、私ア最う……、私ア家へ歸りますよ。歸つて母様に左様言つて、此縁を取つて貰ひます。綱雄様と私は奥村様に見かへられました。私は最う此間拵へて戴いた召物も彼の金鎖も、帶も指環も何もいりません。皆ソックリ奥村様にお上げなさいまし。此間仕立てると仰有つて、其まゝにして家へ置いて來た父様のお羽織なんぞは、態と裁損つて疵だらけにして上げるからいゝわ。それから其前お茶の手前が上がつたと仰有つて、下すつた彼の仁清の香合なんぞは石へ打付けて破して仕舞ふからいゝわ。

善平は更に掛構ひもなく、天井を見て莞爾々々笑ひながら、いやもう綱雄は實に天晴た男さ。

父、父、父様は最う。とばかり光代は立掛かりて、いきなり逆手に枕をはづせば、すとんと善平は頭を落されて、や、ひどい事をする。と額を顰めて笑ふ。いゝ氣味! と光代は奪上放しに枕の栓を抜捨て、諸手に早くも半ば押潰しぬ。

無據く善平は起直りて、それでは仲直りに茶を點れようか。彼の持つて來た干菓子を出してくれ。と言へば。知りません。と光代は未だ餘波を殘して、私はお湯にでも參りませうか。と疊みたる枕を抱へながら立上る。其樣な事を言はずに、これ、出してくれよ。と下から出れば、こゝぞといふ見得に勇立ちて威丈高に、私はお湯に參ります。奥村様に出してお貰ひなさいまし。

(三)

御散歩ですか。と背後より聲を掛くるは辰彌なり。光代は打驚きて振返りしが、隱るゝ事もならず程よく挨拶すれば。いゝ景色ではありませぬか。貴孃、湖水の方へ行つて御覽なされましたか。と聞く。いえ未だ、實は今宿を出ましたばかりで。と氣を置けば言葉もすらりとは出でず、顏も自ら差俯向かるゝを。それならば御一所に此其處等を歩いて見ませう。今日は氣も晴々として、散歩には誂向といふ好い天氣ですなア。お父様は先刻何處へかお出掛けでしたな。といつもの調子輕し。

ですが親父が歸つて來て案じるといけませんから、餘り遠くへは出られません。と光代は浮足。

なに、お部屋から其處等は何處も彼處も見通しです。それに私もお付申して居るから、と言つても隨分怪しいものですが、まあまあお氣遣ひの樣な事は決してさせません心算、然しお孃では仕方がないが。

孃でございますとも流石に言ひかねて猶豫ふ光代、進まぬ色を辰彌は見て取りて、尚口輕に、私も一人でのそのそ歩いては直に飽きて仕舞つて詰らんので、相手欲しやと思つて居た處へこゝにお出なさつたのは貴孃の因果といふもの、御迷惑でもありませうが、まあ一所に付合つて下さいな。其かはりには私は又、貴孃の何んな無理でも聞きませう。と親しげにいふ。

否みかねて光代は遂に從ひぬ。時は朝なり。空は底を返したる如く澄渡りて、峰の白雲も行くに處なく、尾上に殘る高嶺の雪は分けて鮮かに、堆藍前にあり、凝黛後にあり、打靡きたる尾花野菊女郎花の間を行けば、石は漸く繁

く松はいよ〳〵風情よく、瀲耀たる湖の影は忽ち目を迎へぬ。

何處までも其歡心を買はんとて、辰彌は好んであどけなき方に身を置きぬ。たわいもなき浮世咄より、面白き流行の事に移り、芝居に飛び音樂に行きて、有る限りさま〴〵に心を盡しぬ。光代はたゞ受答への返事ばかり、進んで口を開かんともせず。

妙な事を白狀しませうか。と辰彌は微笑みて、私は貴娘の琴を、此間の那須野の外に、まあ幾度聞いたとお思ひなさる。といふ。又其樣な事を。と光代は逃ぐるが如く前へ出でしが、あれまあ一寸御覽なさいまし。いゝ景色の處へ來たではありませぬか。あの島の樣子が何とも言はれませんね。おゝ綺麗だ。と話を消して仕舞ひぬ。

名にし負へる萩は處狹く繁合ひて、上葉の風は靜かに打寄する漣を碎きぬ。こゝは湖水の汀なり。爭ひ立てる峰々は殘りなく影を涵して、漕行く舟は遠く其上を押分けて行く。松が小島、離れ岩、山は浮世を隔てゝ水は長へに清く、漁唱菱歌、煙波縹渺として空は更に悠なり。倒れたる木に腰打掛けて光代は暫く休らひぬ。風は粉膩を撲つてなまめかしき香を辰彌に送れり。

參りませう。親父も最う歸つて來る時分でございます。と光代は立上りぬ。此處等はゆツくり休む處もなくつて可けませんな。と辰彌も遂に又の折を期しぬ。道すがらも辰彌は種々に話掛けしが、光代は唯かたばかりの返事のみして、深くは心を留めぬ態なり。見るから辰彌も氣に染まず、流石思に沈むものの如し。二人は默して歩みぬ。

おや。といふ光代の聲に辰彌は俯向きたる顏を上ぐれば、向うよりして善平と共に、見知らぬ男の此方を指して來りぬ。綱雄樣。と呼掛けたる光代の顏は見るから活々として、直ちに其方へと走行きつゝ、まあ何時いらつしやつたの、何んなに待つて居ましたか知れませんよ。貴郎がお出でなさらない中はね、父樣がね、私をいぢめてばツかり居るの。と嬌優る目に父を見て、父樣最う負けはしませんよ。と笑ひながら又綱雄に向ひ、何故もつと早く來て下さらなかつたの。餘りだわ。私なんぞの事は些少もお構ひなさらないから酷いわ。あら嫌な、髭なんぞを生やして。と言掛けしが其時そこへ來たる辰彌の髭黑々としたるに心付きて振返りさまに、あら御免なさいましよ、おほゝゝゝ。と打つて變りたる素振なり。

これは私の親戚のもので、東條綱雄と申すものです。と善平に紹介されたる辰彌は例の隔てなき挨拶をせしが、心の中は穩かならず。此青白き、仔細らしき、あやしき男はそも〳〵何者ぞ。光代の此擧の尙心得ぬ。或は、とばかり疑ひしが色にも見せず飽まで快げに裝ひぬ。傲然として鼻の先にあしらふ如き綱雄の仕打には幾度か心を傷けられながらも、人慣れたる身はさりげなく打笑へど、綱雄は更に取合ふ氣色もなく、光代、お前に買つて來た土産があるが、何だと思ふ。中てゝ見んか。と見向きもやらず。

善平は獨り中に立ちて、只管二人を親しがらせんとしぬ。書記官と聞きたる綱雄は浮世の波に漂はさるゝ此あはれなる奴と見下し、去年哲學の業を卒へたる學士と聞きたる辰彌は、迂遠極まる空理の中に一生を葬る馬鹿者かと竊かに冷笑ふ。善平は更に罪もなげに、定めて共に尊敬し合ひたる事と獨りほく〳〵打喜びぬ。早くお土産を見せて下さいな。と甘える如く光代はいふ。此處では落付いて談話も出來ぬ。宿へ歸つて一盃酌まうではありませぬか。と言出づる善平。最も妙ですな。と辰彌は言下に答へぬ。

綱雄、さあ行からではないか。と善平は振向きぬ。綱雄は冷々として、はい參りませう。心々に四人は歩出しぬ。私は先へ行つてお土産を。と手折りたる野の花を投捨てゝ、光代は子供らしく駈出しぬ。裾はほら〳〵、雪は紅を追へり。お歸り遊ばせ。と梅屋の聲々。

（四）

飽まで無禮な、人を人とも思はぬ彼の東條といふ奴、と醉醒の水を一息に仰飮つて、屡彌は獨り我が部屋に、眼を光らして一方を睨みつゝ、全體己を何と思つて居るのだ。口でこそ其とは言はんが、明かに己を凌辱した。おのれ見ろ。見事己の手だまに取つて、こん粉微塵に打碎いてくれるぞ。見込んだものを人に取らして、指を啣へて居る己ではない。狙つた上は決して兎さぬ。光代との關係は確かに見た。我物顔の其面を蹂躙るのは朝飯前だ。己を知らんか。己を知らんか。はゝゝゝ流石は學者の迂濶だ。馬鹿な奴。いや徐々政略が要るやうになつた。妙だぞ。妙だぞ。漸く無事に苦しみかけた處へ、いゝ塩みが沸いて來た。十分うまく遣つて見ようぞ。こゝが己の技倆だ。はて事が面白くなつて來たな。

光代は高がひい〳〵たもれ。唯一撃に打覆締だ。否も應も言はせるものか。然し彼の容色は外に得られぬ。先づは珍重する事かな。親父親父。親父は必ず逃がさんぞ。あれを巧く說込んで。身贖の出來ぬ己の負債を。うむ、それも佳しこれも佳し。さて謀をめぐらさうか。事は手取早いがいゝ。「兵は神速」だ。駈を追つて直に取懸らうぞ。よし。始めよう。猶豫は御損だ急げ急げ。

身を返しさま柱の電鈴に手を掛くれば、待つ間あらせず駈けて來る女中の一人、あのね、三好さんの處へ行つてね、又一席負かして戴きたいが、外にお話もありますから、お暇なら直にお出でを願ひたい。と斯う言つて來ておくれ。急いで、いゝか。おツと櫛が落ちたぞ。

＊　＊　＊　＊

それはお前の一克といふものだ。其樣に擯斥したものではない。何と言つても書記官にもなつて居る人だ。お前も少しは我を折つて交際つて見るがいゝ。と宥むる善平に反を返して、綱雄は飽まで屹として居たりしが、いや私は彼樣な男と交はらうとは決して思ひません。見るから浮薄らしい風の、輕躁な、徹頭徹尾蟲の好かぬ男だ。私は顔を見るも嫌です。折角樂みにして此處へ來たに、彼の男の爲に興味索然といふ目に遇はされた。彼樣なものと交際して何の徒がありませう。貴郎は又何處がよくつて、彼樣な男がお氣に入つたのです。

私も何だか彼の方は好かないわ。と指環を玩弄にしながら光代は言ふ。

左樣だ。左樣あるべき事だ。と綱雄は一打揮管を拂く。其音も善平の耳に障りて、笑ましき顔も少し打曇りしが、それは何んな人であつても探せば缺點は屹度出る、長所を取合つて、お互に面白く樂しむのが交際といふものだ。お前は段々偏屈になるなア。其樣な風で世間を押通す事は出來ないぞ。と流石に聲は未だ穩かなり。

然し彼の男の何處に取柄があります。第一。と言掛けるを押止めて、もういゝわ、お前はお前の了簡で嫌ふさ。私は私で結交ふから、もう此事は言はぬとしよう。それで可いではないか。顔を赤め合ふのも詰らん事だ。と言へども色に出づる不滿。綱雄は何處も我を張りて、では有りますが、これが他人なら兎に角、貴郎であつて見れば私は何處までも信ずる處を申します。

私は强ひてお止め申さんければならぬ。

默らつしやい。と荒々しき聲は遂に迸りぬ。

私は最う聞く耳を持たんぞ。何だ。出過ぎた事を。
あら父様、お怒りなすつたの。綱雄様だつて悪氣で言つたのではありませんよ。何ですねえ其様な顔をなすつて。
えゝ引込んで居ろ。手前の知つた事ではないわ。と思はぬ飛沫に口を噤む途端、床彌より使は急がはしく來りて言はれたる通りの口上を述べぬ。半ばは意氣張りづくの善平は二つ返事に承知の由を答へて歸しぬ。綱雄は腕を組んで差俯向けり。
光代は氣遣はしげに二人を見かはせしが、其儘立上る父を止めて、父様、それではお互に心持がよくないではありませんか。何とか仲を直してお出でなさいな。私は困るわ。
其投首のしをらしさに、善平は一時立止まりて振返りぬ。綱雄はむづかしき顔も崩さず、眉根を打寄せて默然たり。見るに此方も燃立つ心、
いゝわ、打捨つて置け！
袖振拂つて善平は足音荒く出行けり。綱雄は打沈みて更に言葉もなし。溪行く水は俄かに耳立ちて聞えぬ。
綱雄様、貴郎は何故そんなにも奧村様をお嫌ひなさるの。いゝ加減にあしらつて居れば可いではありませんか。え、何うかして左様おしなさいな。こんな事になると私は何方へついていゝか分らなくなつて眞個に泣出したくなつて來るわ。としみ〴〵言出づる光代、出來るならねえ、何うぞ氣を取直して見て下さいな。え、貴郎。と顔を覗込みぬ。人を惹く風情は更なり。動かされてか綱雄は顔を上げて少しく色を直しぬ。されども言葉は更に讓らず。私は自分を枉げる事は出來ん。彼の男は何處までも私の氣に入らんのだ。私はもとより據るところがあつて言つたのであるが、伯父様が用ひて下さらねばそれ迄の事、お前はまあ彼の男を何う思ふ。
私なんぞには能くは分りませんが、あんなに喋々しい人といふものは、しんには實が少いだらうかと思ひますよ。
うむ、よく言つた。と綱雄は微笑を洩らして、お前の方が未だ分つて居る。感心なものだ。と飾らねども顔には情を含めり。
それにね、あの方は何だか氣味が悪いわ。私の氣の故だか知らないけれど、一體變でならないの。
何うして。と綱雄は目を送れば。なにね、何でも有りませんけれどね、あのう、あのう、唯なんだか訝しいの。だから私は好かないと思つて居ますの。と目顔に言はする心の中。ふむ。とばかり綱雄は冷笑ふ如く、彼奴の事だ、其様な事があるかも知れぬ。片言でもそれに類した事を口に出したが最後、思入れ恥をかゝせて遣れ。彼様な奴の餌食になるは死に優した大不幸だ。
私は何ういふ事になるかも知れないと思ふと恐くつていけませんから、貴郎ね、此處に居る間は後生だから、傍について居て下さいな。こんな事を思ふと早くねえ……。あのう……。と羞かしさうに打笑みて、まあ止しませう。
何を言つて居るのだ。と綱雄も初めて清く打笑ひしが、いや然し私も折角此處へは來たけれど、伯父様はあの通りであるから、彼の男は毎日入込んで來るだらう。彼奴を見るばかりでも氣色に障つてならんから、到底平和に行く譯はない。私は寧その事直ぐに歸つて仕舞はう。
あら其様な事をなすつては、なほ父様に當るやうでもありますし、それに私を、まあ何うして下さるお心算なの。私は一人で嫌な事、貴郎がお歸りになるなら私も御一所に歸りますよ。
それは可かん。と綱雄は心強く、お前は伯父

樣を御介抱申さねばならん。お前は未だ三好の娵だぞ。伯父樣を大事と思はんか。何だ馬鹿な涙ぐんで。

それだつても私は……。貴郞は餘りだわ。と襦袢の袖を啣みしめしが、それでは父樣に無理に願つて皆一所に歸つて仕舞ひませう。貴郞は何故さう思遣りがないのだらう。私なんぞの事は何とも思つておいでではないんだよ。貴郞は私を泣かせて嬉しいの。

そんな事を言つては困るなア。と綱雄は苦笑ひして、なに、後での氣遣ひはないやうに、それとなく伯父樣に注意は必ず與へて置から。私も好んで歸りたくはないわな。

嫌、私は歸しませんよ。と光代は捏廻す。

いつまで詰らん事を言つても仕方はない。これから又暫く別れるといふのに、お前は其樣な顏を見せてくれるのか。

何でも嫌、私は歸さないからいゝ。

綱雄は默して俯向きぬ。光代は摺寄つて顏を覗込み、美しき手を膝に掛けて、貴郞は其樣にもお歸りなさりたいの。

綱雄は見もやらず何口を噤みぬ。それならば。と光代はあどけなく、寧そ私を連れて行つて下さいますか。え。と顏を近付けて、ねえ、連れて行つて下さいな。

うむ、寧そ、兩人歸つて仕舞はうか。と僅かに首を上げたる綱雄の眼には、嬉しき光の同時にひらめきしが、瞬く間もなく本に返りて、いや、左樣でない。お前はまあ居て上げるがいゝ。

あら嫌、又其樣な事を仰有るんだもの。よう御座んす。私は一人で歸つて仕舞ひます。

何うせ任せた蔦かつらと、田舍の客の唄ふ濁聲は離れたる一間より聞えぬ。

御療治はと廊下に膝をつくは按摩なり。

＊　＊　＊　＊

綱雄は折れず遂に歸りぬ。流石に一封の手紙を殘して、筆に心を知らせたるまゝ、光代にも告げず善平にも告げず、飄然として梅屋を立去れり。雲は行き水は走りて、車は此山にさらばの響を殘せしが、消えて失せにき。

（五）

勇立ちたる聲のいとゞ喜ばしげに綱雄々々と室の外より呼はりながら歸來るは善平なり。泣顏の光代は悄然坐りたるまゝ迎へもせず。何だ。何うした。綱雄は何處へ行つた。

綱雄樣は歸つて仕舞ひました。これを御覽なされ。と光代は手紙を差出す。善平は手にも取らず、何だ。怒つて歸つたのか。馬鹿な奴。とばかり後は忘れたる如く、其樣な事は何うでもよい。捨てゝ置け。と慌はしく硯を引寄せ、手早く認めたる電信二通、神を呼立てゝ直ぐにと鞭打たぬばかりに追遣り、煙管も取らず茶も飲まず、顏はいきり立つて眼は或方にさも面白きものゝ影を見詰むる如く、掘出し物掘出し物、これが眞箇の掘出し物だ。何にしても書記官といふ後立を、背中に背負つて居れば論は無いさ。綱雄などには斯ういふ處が見えぬから困る。兎にも角にも有名な木島炭山、二十萬とは馬鹿々々しい安價だ、倍値に賣つても五十萬の折紙、毎年の採掘高は幾十萬圓、利益配當の多い事は先づ炭山には殆んど稀で、其炭質の良い事は遠く三池の石炭にも増して、內外諸方へ軍艦用として賣込むものでも毎年凡そ何十萬噸、いや福の神は飛んだ處にお出でなされた。何として他所へ迯らしてなるものか。それにしても奥村は働手だ。どの道惡い首尾にはならぬ。とさながら前に人も無げなり。

何事か起りたるとは知らぬにあらねど、光代は差當りての身の物憂げなるを、慰めてくれぬ父を恨めしと思ひぬ。憂ひに重ぬる不滿は穗にあらはれて、父樣詣りませぬから私も歸ります

る。と辛きに當てて不興らしく言ふ。善平は更に耳にも入れず、何にしても彼の炭山が手に入れば、例の失策の株以來、手ひどく受けた痛みもすッかり療治が出來る。其上日清事件の影響から、海産物に及ぼした損失もこれで埋合せがつくといふもの。いや首尾よく遣つて見たいものだ。と我を忘れて調子づく。

父樣、父樣ッたらば父樣、私は歸りますよ。と光代は聲を勵まして最どけはしく言ふ。善平は初めて心付きたる如く、なに歸る？　私も歸るさ。一時も早く東京へ歸つて、何彼の手筈を極めねばならぬ。光代、明日は夙く發たうぞ。それにしても炭山は是非共手に入れたいものだ。と半ばは先に心を奪はる。

明日の朝直ぐの發足と、容易く言はれたる光代は案外なる思、少しは窘めて困らせて譫々我意に從はせて、そして一所に歸らんとの、所思の張合を拔かされたるが、乙女心の氣に入らず、初めよりして構付けられぬが、何氣に入らず、進寄りて、父樣、それは眞實なの、え、父樣、あれさア、身に染みて聞いて下さいよう。じれつたい。父樣ア。とばかり果は耳を引張る。善平は五月蠅げに、え丶喧ましい、默つて居ろ。考へ事の邪魔になる。チョッ、湯にでも這入つて來るがい丶。

よう御座います。たんと左樣なさいまし。と先例の如く言放ちて光代は拗返りぬ。善平は更に關せざるものの如く、二言めには炭山がと、心は殆んど身に添はず。

疊障りも荒々しく、障子に當散らして光代は部屋の外へ出でぬ。折しも母屋へ通ふ廊下を行くは辰彌なり。上と下とに顏見合せて、辰彌はいつもの如く笑うて見せぬ。光代は艴としたる顏して尾上に目を反らしぬ。辰彌は打笑みて過ぎけり。

いひし如く善平は朝まだきに歸りを急ぎぬ。今日も同じく勦られぬに光代の顏は打解けねど、心は早く此家を出づる事を喜べり。見送りにとて辰彌は出來りぬ。見るより光代は眉を顰めて顏を背けぬ。辰彌と善平とは稍多時囁合ひて、終りは互に打笑へり。光代は知らぬ振して唯餘所をのみ見詰めぬ。別れ際に辰彌は一言、光代樣、綱雄樣にお逢ひの節は何らぞ宜しくと仰有つて下さい。

（六）

上野の森の影を迎へて、光代は初めてほツと息をつきぬ。明日とも言はず母親に強請みて許しを受け、羞かしさも或思に殆んど忘れて、直ぐに綱雄の許へと行きしが、あはれ、綱雄は未だ歸來らず、すご／＼として引返したる光代の、拂ひもあへぬ後れ毛を吹亂すは、いかに身を知る秋の風なりし。

家に歸りてより善平は席も暖かならず、東に行き西に馳せ、半ば物狂ほしく日毎に奔走しぬ。三人四人打連れて訪來る客は、一間に閉籠りて屢ゝ密議を凝らせり。日は急がしきに連れて矢の如く飛びぬ。露深く霧白く、庭の錦木の色にほのめく或朝の事、突然車を寄せて笑ましげに入來るは辰彌なり。善平は待構へたる如く喜び立つて上に請じぬ。光代は姿を身て何とも知らず又慄としたり。

其日よりして三好の家に辰彌の往復は磯打つ波のひまなくなりぬ。善平との間はさながら親戚の如くなれり。家内の皆々は辰彌の此度の事件に重なる人なる事を知りぬ。先に立つ善平につれて誰も彼も疎略には思はざりき。辰彌は思ふが儘に蜘蛛の絲を吐掛けて、人々を悉く網の中に裹みぬ。かくして末の婢より上の隱居に至るまで、辰彌は親しき中の親しき人となりぬ。三好の家と辰彌とは、漸く離るべからざるものとなれり。中に立つて光代は獨り打腹立ちぬ。

見るほど何故とも知らねどいよ／＼疎ましき展彌に、斯くまで語らひ寄る父の恨めしく、阿意を置かぬ母の口惜しく、心易げなる姉の憎く、笑顔を見する兄の喰付きても遣りたく、三方四方面白く無くて面白く無くて、果は焦れ出す癇癪に、當り散らさるゝ仲働の婢は途方に暮れて、何とせんかと泣顔の浮世の態はたゞ不思議なり。光代は一筋に綱雄を待ちぬ。他の氣も知らず綱雄はいつまでも歸來らず。光代は一人物憂げに朝夕の雲を望めり。指して定まらぬ行方に結ぼるゝ胸はいよ／＼苦しく、今頃は何處に何うしてかと、打向ふ鏡は窶れを見せて、それもいつしか太息に曇りぬ。

善平は見もやらず心もそゞろに、今日は又珍客の入來とて朝まだきの床の中より用意に急がしく、それ庭を掃け、裀を出せ、銀穂屋付の手爐に、一閑釣瓶の煙草盆、床には御自慢の探幽が、和歌の三夕これを見てくれの三幅對、銘も聞けがし宗甫作の花入に、野山の錦の秋を見せて、あはれ心を筑紫潟、浪に千鳥の蒔繪盆には鎌倉時代と傳へたる金溜塗の重香合、砧手青磁の香爐に添へて、銀葉挾みの手の内に霞を分けて入る柴舟の、行方は煙の末にも知れと、しば／＼心に點頭くなるべし。脇には七寶入の紫檀卓に、銀孔雀の置物を据ゑて、これも談話の數に入れとや、極彩色の金屏風は、手を盡したる光琳が花鳥の盛上、天晶座敷や高麗縁の青疊に、玉を置くとも羞かしからぬ設けの席より、前は茶庭の十分なる侘を見せて、目移りゆかしく此處を價値の買處と、客より先に主人の滿足は、額に横撫の煤を付けながら、獨り妙と隈なく八方を見廻しぬ。

一寸は苔石の清拭せよ。利介はそれ／＼手水鉢、絲目の椀は土藏にある。南京染付蛤皿、それもよしか是もよしか、光代、光代は何處に居る。光代々々。と呼立てられて心ならずも光代は前に出づれば、あの今日はな。と善平は競ひ立ちて、奥村様はじめ大事のお客であるから、お前も酌に出て貰はねばならぬ。今ッから衣服も着更へて早く支度を。と言付くる。

初めより光代はよき顔もせず、耳の役とばかり聞いて居たりしが、今日はお腹が痛みますから、御免を蒙りまする。といつもの我儘のかゝる時に勢を見せて、そのまゝ背なく座を立ちぬ。其日は遂に、室の外へとは顔も出さゞりき。

程もなく入來る洋服扮裝の七分は髯黒の客人、座敷に入りて暫くは打潛めきたる密議に移りしが、やがて開きて二側に居流れたるを合圖として、運出づる杯盤の料理は善四郎が念入の庖丁、四隣未だ半ばならず早くも笑ひさゞめく聲々を、餘所に聞きて光代は口惜しげに涙ぐみぬ。座敷の急がしさに取紛れて誰一人此處を訪はんとせざるも、女心には恨みの一つなり。

夕暮となり宵となり、銀燭は座を渡りて客は漸く散じたる跡に、殘るは倭彌と善平なりき。別室に肴を新たにして、二人は込入りたる談話に身を打入れぬ。善平は息繼ぎの盃を下に置きて、それならば、貴郎も兎角はござりますまい。御周旋料は少うござるが一萬圓として置いて、成功の上は千圓づつ謝金を年々に差上げませう。なに、御同僚其外貴郎と事を共にした今日の方々にも、幾分かの割賦金と仰有いますのか。それは、成、成程、其樣な支拂にもなりませうが、追ッつけ其邊は同志のものと、又相談の上いづれにか計ひやうも御座いませうから、貴郎に對するお手數料は先づそれだけに極めて置きまして、何はさて置き、國友商會の願書を途中で遮って一時も早く、私の方のを官へ差出すが上分別、兎にも角にも此首尾を取纏める方に、早速ながら御盡力を願って、事落着の上で御報酬の方は極める事に致しても、別に差閊へは無いではござりませぬか。

辰彌は笑ましげに頭を掉り、さあ、私の申すのを卽ちこゝですて、成程貴所の御了簡では、書面進達さへ急に運べば、萬事は後日の事として、差閊へはないと仰有るのも御尤ではあるが、其願書の事に付いては、私一人では何うあつても計ひかぬる場合と申すは、豫てお話もしてある通り、一體國友商會のは、初手は私の擔當であつたが、今では局長が引受けて、萬事表面上商會の世話をして居る仲であつて見れば、すでに明日か二三日中に願書が出來て、商會からこれを本省へ差出す日には、途中に居つて邪魔をする好分別が更にないので、依ては事の未然に先立つて、彼の局長を我手に引入れ、うまく說込んで遠方へ旅行させるより外はありませぬ。すでに局長が東京に居らず、又旅先から商會の願書を遠く牽制して出させぬやうにして居る中には、私の方便で、監督署長の、それあの先刻來た頰髯の濃い男、兎に角彼の男を利用して、此局面の衝に立たせ、私はどちらへも手を出さずに、竊かに綱を引きませうが、それには、萬一のあつた時、我々三人の生涯は貴所の犧牲とならねばならず、それも成功の後ならば兎も角、それ御存じの待合事件の後を受けて、又々其樣な行跡が社會へ暴露した日には、實はよくない事ですからねえ。そこで私折入つての願ひといふのは、先刻申した、ね、あの、事は何うあつても、ここで貴所の御同意を得て、尙其上に、今一つ、それは又此お話のものとは性質を異にしたもので、是非共お聞入を願ひたい事もありますが、併し、それは追てとして、先づ今日は、先刻のお話申した筋だけは、三好さん、何うにかお計ひで、お約束をなさつてもいゝではありませんか、成功の上は三十萬圓、早速明日が日にも純益を見られる譯ではありませんか。

成程々々。とばかり應對うて善平は又盃を上げしが、それも左樣ですなア。もとはと言へば不思議の御緣で、思寄らず貴郞のお目に掛つたので、この御相談も出來たと申すもの。事の起りも、納りも皆貴郞お一人の御丹精にある事故、その御丹精に免じまして。と暫く言葉を途切らせしが、よう御座います。それだけは差上げませう。

膝を進めて辰彌は一しほ笑ましげに、漸く御承知になりまして、此奧村も安心しました。然し。と葉卷の灰を拂ひながら、假令何のやうな結果になりましても、他日に至つて貴所に決して御異存はありますまいな。私共も時宜によつては、袂を列ねて官職を辭し、共に民間に居て永久に事を取るだけの決心でありますから。

勿論事の破れとなつて、私共は毛頭も利益を得ません時は？

よろしい、我々の周旋費、それは半分に負けて上げませうが、と眼に微笑を見せて、若し又豫て期したる如く事の成就した曉は？

されば、何なりと私の力に叶ふ事なら、貴郞のお望みに應じまして、それは家屋なり別莊なり、至當のお禮は別に屹度いたすとしませう。

いや、それは重々のお心添、忝なく申受けまする。と辰彌は重ねて笑作りて、らむ、貴所の力に叶ふ事なら、私の望みに應じてとは三好さん、屹度ですぜ。と冗談らしく念押す。

本望、まあ何の樣なお望み。と善平は醉に乘じて膝押進む。左樣さ、先づ申して見ようなら、貴所の拵へたものを戴きたいといふやうな事。と辰彌は上づりていふ。はてなア。何か樣子のありさうな謎ですな。と善平も笑出す。いや、其謎は他日是非解いて戴かう。先づ今度の前祝ひに、改めて獻じませう。と辰彌は盃をさしぬ。對手もなくば善平は早眠き頃なり。

事は思ひしまゝに滯りなく行きぬ。一、薄儀、金二萬五千圓也。辰彌は其夜例の如く新橋泊。

（七）

綱雄の漸く歸來れる報知は、人傳によりて三好の家に達しぬ。されども此方へは容易く顏も出さざるを、世間氣質の善平は大に面白からず思ひぬ。第一不斷から己を輕蔑して、と伯父甥の間は次第にむづかしくならんとす。光代の母は素からの學者嫌、かゝる折に口を噤みては居ず。全體日頃から情のない綱雄の事、此位の仕打は何でもありませぬ。先達ての火事見舞にも來てはくれず、此間の產の祝も忘れた時分に漸く遣すやうな仕儀。と、世情に疎き綱雄の非は、それからそれと限りもなく數へられぬ。

堪へかねて光代は密かに綱雄の許を音訪れぬ。綱雄は家に在らざりき。光代は時の許す限り待ちに待ちぬ。綱雄は遂に歸らざりき。泣くばかりなる身を起して、しを／＼と漸く我家に着けば綱雄は其留守に來りしとなり。あゝ何といふ緣のない事やら。と光代は心の中に泣きぬ。奧に善平は烈火の如く打腹立つて居たり。娘を見るより聲を勵まして、光代、綱雄との緣は破談にしたぞ。あんな偏屈な分のわからぬ奴にお前を遣る事は出來ぬ。これまでの約束はこれぎり最うないものと思へ。

* * * *

木島礦山拂下に付いての運動は雙互の間次第に其競爭烈しく成行き、國友商會に屬する一派も、互に對抗して相下らず、これに加ふるに競爭者の相手も今は數人の多きに上りて、所謂見積りの價格なるもの又次第に騰貴して、三十五萬圓の聲を聞き、尙其競爭の容易に止まるべくもあらざれば、流石に當路の者も撰びかねて、玆に一片の閣令を出す事となりぬ。この閣令には礦山の借區若くは拂下の條規を規定せるものなれば、彼の拂下願書の如きも更に再びこれに據つて呈出せざるを得ざるに至れり。

其閣令が官報紙上に將に現はれんとする前日なりき。辰彌は急に善平を人知れず或る待合の樓上に招きて、事の危急に迫れるを知らしめ、斯くして最後の大勝利又眼前に臨めるを告げたり。

さて愈〻かねての事件も、こちらに負けず國友派の例の運動が烈しいので、雙方非常の競爭となつて貴所も是迄は長々のお骨折でありましたが、當局大臣も明日頃は多分一篇の閣令を發して、それを以て勝敗を一時に決めさせる見込ださうですが、然しこれとても祕密の中の祕密で、當局大臣の外省中のものは誰とて知つて居るものはないのです。

得意らしげに微笑を送つて、我を見よと言はぬばかり辰彌は意氣揚々と靜かに葉卷の烟を吹きぬ。

それは大事な魂膽をお聞及びになりましたので。と熱心に傾聽したる三好は顏を上げて、して其事は何のやうな條規を具へて居るものに落札する事になりませうか。

さあ其條規も格別に、これと六ケ敷いことはなく、たゞ其閣令を出す必要は、その法令を規定した總ての條件を具へたものには、早速拂下を許可するが、さうでないものをば一齊に書面を却下することとし、又相當の條件を具へた書面が幾通もあるときは、第一着の願書を採用するといふ都合らしく、依つては今夜早速に夫等の相談を極めて置き、愈〻今度の閣令が官報紙上に見えた日に、それを待受けて居て即刻に書面を出す事にしたならば、必ず旗は此方の手に上がるに相違ありますまい。

左樣な譯であつて見れば、早速今夜にも拂下

の願書を認めて置きたうございますが、先づ差當つて困りますのは其願書の書方ですが、それは。

さあ其邊の次第もあらうと、豫て手配をいたして置いて、其閣令の草案も今日漸く手に入れました。

や、それは。と善平は我知らず乗出して、それは重々の上首尾で、失禮ながら貴郎の機敏なお働きには、この善平いつもながら實に感服いたしまする。

ひらめき渡る辰彌の目の中に或物は今躍上りて此機を掴みぬ。得たりとばかり膝を進めて取出し示す草案の寫を手に持ちながら舌は輕く、

三好さん、これですが、然しこれには褒美がつきますぜ。

善平は一も二もなく、心は半ば草案に奪はれて、

唯々、それは最う何なりとも。

外ではありませぬ。と莞爾と打笑みて辰彌は突入りぬ。此間それ謎のやうな事を申した、あの光代樣さ。懇望して居るのは大抵お察しでせう。ようございますか。お貰ひ申しましたよ。

* * * * *

我は此後の事を知らず。辰彌は此頃妻を迎へしとか。其妻は誰なるらむ。とある書窓の奥には又、あはれ今後の半生を懸けて、一大哲理の研究に身を投じ盡さんものと、世故の煩を將つて塵塚の當中へ投捨てたる人あり。其人は誰ならん。荻の上風桐は枝ばかりになりぬ。明日は誰が身の。

うらおもて

（一）

ゆくりなく目を覺ましたる勝彌は怪しき影の障子を掠めて消えたるを認めぬ。我にもあらず首を擡げて、中仕切の硝子越しに訝しき目を注げば、折しも奥の間に夜を守れる有明の火影の、淋しげに餘れる光を投掛くる廊下の中程に當りて、其處に烏散なるものの行けり。時も時ならず、しかも此平和なる家の中に何事ぞきびしく身を固めて、鼠を窺ふ猫の如くそよとの足音をも忍びに忍び、弓手に父が許に有りける手文庫の、中には貴重なるものを藏めたるをしかと抱へたる、おのれ曲者、と思はず、叫ばんとしたる其時此時、勝彌が動ける氣勢を敏くも聞付けて振向きさまに炯々たる眼光の力なき燈火を衝いて矢の如くに射込まれしが、蜿りあがれる其眉と拔上れる高き額と、其鈎の如くに曲れる鼻と眞一文字にさながら一度出だしたる言葉を決して引かじと誓ひたる如き脣の、鋭く嚴しき其顏を一目見るより、愕然としてあつとばかり、滿身の肉に小動ぎ打たせて度を失へる途端に曲者は電光の如く、身を躍らすと見る間もあらせず姿は忽ち闇の中に消えて、今まで庭に冴えたる蟲の音の、俄かに礑と靜まり返りしが、見越の松の一搖ゆられたるを同時に、巧にひらりと下立つ足音の早くも聞えたり。

夢か、あらず、僻目か、あらず、何事ぞ、慈善家として、德行家として少からず人に知られたる彼波多野十郎は、夜深く他の家に忍入りて竊かに財を掠去れり。あはれ勝彌が身を許し、身を盡し、身を與へ、身を擲ち、身を捧げて相慕ふ靜子の父は、賤むべき惛むべき盜賊なりき。

よし渾身の血は名殘なく飛失せて見る／＼白骨と化し去らんまでも、勝彌は此の如く驚かざりしなるべく、又此の如く悲まざりしなるべし。勝彌は實に言はん方なき苦痛を覺えぬ。今しも目の前に立現れたるは、清く美しく何をも知らぬ靜子の顏なり。

罪は購ふべし、罪は消ゆべからず。潔き心いかでこれに堪ふる事を得む。戀は割くべし、戀は滅ぶべからず。わりなき心いかでこれを强ふる事を得ん。勝彌は殆どせんすべを知らざりき。彼は又も靜子の涙を思ひぬ。

ひとしきり蟲の音の際立ちて繁く、朝風梢を鳴らして曙近き東は[illegible]て白み渡れり。急がはしく起上がりて勝彌は竊かに窓を押開きぬ。一、父上まで申殘し候。御手許の文庫しばらく拜借仕候。明日歸宅の上委細可申述、と筆の跡いとむつかし。消殘る薄月はやがて忍出づる姿を送りて、朝霧は早く蒼白めたる顏を隔てつ。

（二）

明行く空に霧霽れて日は花やかにさし昇りぬ。押開きたる門の前に飼犬は只目を開きて、地は箒のあとの清けに、そよ吹く風は塵をも動かさず、常盤木の色も鳥の聲も、車井戸の音も昨日のまゝ、波多野の家は高く四邊を拂つて立てり。

十郎は未だ起出でず。

髮は亂れ、眉は顰み、目は殆ど物をも見ず、夢の如くに此處まで來れる勝彌は、ゆらぐ心を引きしめて中に進入りぬ。勝彌が此家を訪ふは初めてなり。あゝ、かゝるさまにて此處に來らんとはいつか期したりし。怪しく怯れたる如き聲

しておとなへば、折しも周邊に人もなく、家の中はいと靜かにて頓に應ずるものなし。再び呼ばはる聲に奥の方より、輕き足音の小走りに近づきて、やがて襖を押開くは、あなや其人、かゝる時に逢ふことを望まぬ彼の美しき靜子なり。

さもあるべし、見るより靜子は打驚きてひたひたと傍へ差寄りぬ。何として此處へは來たまひし。其たゞならぬお顏の色は？　如何なる事の起りてか。え、何事、その何とも御返事のないは、言ふまでもなくよからぬ事か。と氣遣はしげなる眼は早やおろ〳〵として、それにしても何として此處へは。と俄かに後へ振返りて、人目を憚るを見るもなやまし。

父樣に遇はせたまへ。と勝彌は僅かに言出でぬ。

えッ、父樣、それなら貴郎は、あの父樣に御用のありてか。父樣とはいつの間にか、はやお相識になられてか。それにしても其氣遣はしき御樣子は？　もしや何事かお身の上にいやな事でも有るのでは？　そのやうな事ではござりませぬか。何故に聞かせては下さりませぬ。

父樣に遇はせたまへ。と勝彌はたゞ苦しげにいふ。

父樣は。と言掛けて心付きたる如く、父はまだ寐て居ります。お人來の由を申しまするほどに、兎も角こちらへ。と應接の間へ導きながら、餘所を憚りて囁く如く、何とて其やうに改まりて、むつかしい顏をなされる事やら。これほど申すのにそれでは貴郎あんまりでは有りませぬか。少しはいつものやうに打解けて下されても。と眉は深き思を語りて、目は更なり。

たゞ父樣に遇はせたまへ。と勝彌は唸き出だしぬ。あとを繼がんとするに言葉出でず。それより外を彼は言ふに堪へざりき。

（三）

出でて座につきたる十郎の如何に端嚴なる姿ぞ。奥まりたる閑室に相對したる勝彌は、昨夜の眼のもしくは僞りならざりしかと疑ひぬ。

漸くに顏を上げて、唐突夢を驚かしたる事をゆるしたまへ。密かに御身に問ひたき事あり。また密かに乞ひたき事あり。かく朝込に推して遇はんことを求めぬ。御心に觸るゝ處もあるべけれど、願はくは忍びて聞きたまへ。もとより他聞を憚る事なり。こゝにても苦しからぬか。と有得るかぎりなか〳〵に落着きて見せしが、生憎に亂るゝは心を押へたる聲なり。

御身は以前に我を知れりや。と問には答へず十郎の聲は突として起りぬ。

振仰ぎたる勝彌は其時鋭く他を讀まんとする十郎の輝ける眼を見たり。流石に少し氣色立ちて、然り、故ありて我は御身を知れり。

如何なる處にて我を見たまひし。と其聲は却つて穩かなりき。

初めて御身を見たりしは何處なりけん。其時心を留めてよくも見ざりしならば、今の此苦しき思はなかるべきに、其後いくたびか餘所ながらに見たる事のありしが、そは皆よの常の處なりき。されど昨夜……。

おゝ昨夜！

顏を見合せて暫く聲なし。驚くべしと思の外に十郎は色をも動かさず、稍ありて徐ろに、御身はこゝに來れる事をさしも御身の限りなき好意と思ひたまふか。

勝彌は此言葉をよくも解せず、思はず少し聲を上げて、御身はこれを好意ならずとしたまふか。たゞ我が醉興とのみ思ひたまふか。

否、まこと御身の好意なるべし。されどそは何かあらむ。と十郎は屹となりぬ。御身は氣の毒なる人なるべし。されどそれも何かあらむ。我は豫め斯かるべき事を知りぬ。よし、十幾年

渉れるところの道を、我はたゞ一刻にして捨てんとは思はず。世はかゝるものなり。人はかゝるものなり。あはれなる御身よ。我は一筋に我が道を行くより外を知らず。我が道に殉じたまへ。

避くる間あらせず躍掛つて、突出す拳は稲妻の如く、眞の當身かそれかあらぬか、驚く隙さへ、怒る隙さへ、叫ぶ隙さへ、許さばこそ、胸を目がけて打當てんずる間髪一機の危き途端に、襖の蔭より咄嗟とばかり、轉ぶが如く入來れるは靜子なり。

我を覺えず割つて入り、身を投掛くるも上の空、父の腕にすがりつきて、父樣ッ、なゝ何事でござりまする。もし、勝彌樣、どうぞ御免しなされて。父は時々、このやうな無法な事を致しまする。ならぬ處も私にかへて、ゆるして、ゆるして。と言葉も絶え〴〵、色を失ひたる顔は早や涙ぐまんとす。

あはれ、いかめしき十郎の顔に時しも怪しき氣色のひらめき渡りて見えしが、掴みたる手は敢なく離れて、殆ど我を忘れたる如くなりぬ。怒立つたる勝彌が面はさながらに朱を濺ぎて、爛々たる眼に稍しばらくは睨み据ゑたるのみなりしが、御身はそも何たる人ぞや。十郎殿、御身が義に報いるの禮はかゝるものか。我は最早御身に向つて人らしき言葉を費さざるべし。御身は我等が嚴明なる法律の制裁に適するより外には、その式の如く穢れる血の中に何物をも持たざるなるべし。一點の私情、あゝ我は餘りに愚かなりき。我は只我が父が失ひたる權利を求めんのみ。我は御身に向つて覺悟せよとは言はず。此世が御身に與ふるところの刑は、寧ろ御身には大いなる慈悲なればなり。

十郎は更に答へんともせず、眉を垂れたる彼は半ば眠れるが如し。

勝彌樣。と情に堪へざる聲を擧げて靜子はたゞ身を以て訴へぬ。

おゝ靜子殿。我は最早御身に隠さざるべし。あらるべき事か、御身の父は盗賊なり。我は昨夜現に十郎殿が、しかも我家に於て盗をなせるを見き。あゝ其御身の驚愕よりも、我が驚愕の如何に甚しかりしかを思ひたまへ。されど、我は此罪惡を憎むよりも尚深く御身を思へり。自ら我を陷るよりも尚深く御身を思へり。御身あればこそ、我は敢て此罪を蔽ひ、御身あればこそ、我はこの罪を引受けて父を欺き、御身あればこそ顯れざるに事を治めんとしてわざ〳〵此處まで來たれ。御身よ。如何に我が志の謝せられたるかを御身はよく見たまひしなるべし。御身の父を諫めんとする、御身の父をして辱しめを免れしめんとする、翻つて正義の道を守らしめんとする、其間において微かなる我が御身に向つての望はありき。されどそれも誤れり。御身の父が犯せる罪はこれのみに止まらざるべし。いづれの時いづれの處に、かゝる人を長くゆるす世かあるべき。おゝ御身よ、二人が夢は果敢なかりき。嘗て未來に向つて描けるさしも美しかりし夢は、あへなく昨夜にて崩果てたり。我はかくても我が愛を濟へんとは思はず。されど我はいかにして、憚る處なく盗人の子の手を執つて世に立つ事を得可きか。我等が戀は割かれたり。我は御身と離れざるを得ず。されど期せよ。我は決して御身を忘れざるべし。此あたゝかき血の波立ちて、長き短き此命のあらん限りは、我は御身を忘るゝ事を得ず、春風秋雨、神はこれより後、昔の夢に泣く我を見たまふべし。あゝ、我に一點いかなるものも遮る事を得ざるべき涙あり。其涙のいかに清く如何に悲しきかを思へ。あゝ御身よ。御身が父をして破れたる二人が戀を冷笑はしめよ。此濁りなき心と心とを、その黒鐵の如き手に屠らしめよ。靜子殿。さらば。

袖振拂つて勝彌は直ちに其處を出でんとす。父と勝彌との顔を見比べて、驚き呆れたる樣子は慌しく、其前にかけ塞がりぬ。

勝彌樣。お氣を鎭めて下されませ。父を指して盗人とは、あの忌まはしい盗人とは、餘りと言へばお情ない、其やうな誣言を、たとひ貴郎のお言葉とは言へ、何で眞實と思はれませうぞ。其やうな者か者でないか、生れた時から今日が日まで、傍に居通す私が、知らぬといふ筈がござりませうか。勝彌樣、此事ばかりはお免し申す事は出來ませぬ。酷い、つらい、お恨めしい、何といふ事でござりませう。父樣、もし父樣、日頃の嚴しいお心で、何で默つておいでなされまする。何で明りをお立てなされぬ。其お心が私には分りませぬ。よもや、よもや其やうな恐ろしい…とはいへ左樣して口を噤んでおいでなさるは。もし、父樣、何とした事でござりまする。若し此事が眞實なら、眞實なら、私は…あの私は……もし父樣、私を可愛いと思召すなら、私を助けるとお思ひなされて、一言、たゞ一言、この私に安心の出來るやうな事を、どうぞ仰有つて下さりませ。

十郎は靜かに手を額に加へたり。呟く如くみづからに語る如く、あゝ我は我に一人の娘ある事を忘れたり。

佇向きたる目をあげて今しも凝然と二人を見詰めぬ。勝彌殿とやら。と呼掛けたる聲は甚だ沈重なりき。しばらく我が言葉を聞きたまへ。御身は御身が信ずるところを行き、我は我が信ずるところを行く。違ふべからざる御身と我との間に、我が娘の相互に繋がれて立てるを知らざりき。よし有らゆる世のものは盡く打破すべし。我は遂に我が子の愛を斥くる事能はず。あゝ、我は今まで或事を知らざりき。勝彌殿、我は改めて御身が好意を謝し、また其好意に報いるところあるべし。倘其上に深く顧み入るところあるべし。料らざりき、御身は我をして再び得がたき或る動機を得せしめんとは。あゝ久しき以前より我はかゝる時の來らん事を樂めり。我は程もなく何者も犯すべからざる最も尊きものとなる事を得ん。いでこれを初め終りとして、聊か我が消息を御身等二人に傳へんとす。勝彌殿、願くは忍びて聞きたまへ。

我も初めよりして斯かりしにはあらず。初め我は最も正直なりき。世の人はこれに對して何とか言ひたる。人は我を目して欺きよしとせり。初め我は最も善良なりき。人は我を目して愚かなりとせり。初め我は最も温厚なりき。人は我を目して意氣地なしとせり。我は人に交るに德を以てしぬ。人は其德を利用してたゞ自己の利を計れり。我は人に交るに義を以てしぬ。人は其義を奪取つて遠く逃去れり。我は人に輕んぜられたり、卑しめられたり、嘲られたり、踏付けられたり。そは何等の故にもあらず、唯我が善人たるが故なりき。

初め我は大に富みたりき。能あり才あり智ある人々は蟻の如くに我家に集まり來れり。日として時として我家は多くの賓客と食客との影を絶ちし事なかりき。彼等が交りを求むる事の切なる、其時の我が一言の招きには猛火の中をも辭せざりしならん。彼等が言葉はいと巧みなり。彼等が禮はいと恭し。彼等は皆我を喜べり、我を慕へり・我を好めり。されど彼等の多くは皆産なきものなりき。我が餘れる財を散ずるに吝ならざる、彼等が請ふがまゝに與へもし貸しもする事を決して惜まざりき。かくて稍久しかりける後、彼等は一人去り、二人去り、三々五々、果は殘りなく一時に跡を絶ちぬ。其時我には既に明日の食もなかりき。我が恩と信とに對して、彼等が酬いたるものはそもそも何ぞ。空になりたる我が財布と更に夥しき負債なり。其他のものを求めたれど何もあらざりき。

我が窮迫と困苦との、其後を言はんとすれども言ふに堪へず。さしも我が恵みに與れる幾多の人々の中に、一人として我を顧みんとするものなく、一人として我を厭はざるものもなし。曩の巧笑は變じて嘲罵となり、曩の所從は全く惡意となりぬ。彼等は有りし世より我を逐うて未だ倦きたりとせず、尚も進んで我を葬らんとせり。

然り、何故に我はかくまでの憂目を見ねばならぬかを、我は殆ど解釋するに苦しみぬ。此時なりき。眼を放つて仔細に我と人とを比べたるは此時なりき。我の以て善とするところのものと、人の以て善とするところのものと、甚しき相違あることを我は遂に見出しぬ。

驚くべし。つくづく見來れば如何なる世ぞ。滔々たる無數の人類中、我はたゞ私利の肉塊を見るより外に何をも見る事能はざりき。彼等が所謂善といひ仁といひ徳といひ義といひ忠といひ信といひ孝といふもの、何者かこれ彼等が敵に備ふる精鋭なる武器ならざる。彼等が所謂宗教とは如何なるものぞ。彼等が所謂道徳とは如何なるものぞ。此等は悉く彼等が自家保護の機關ならずや。世を舉げて皆僞れり、恐ろしく飾れり、凄まじく衒へり。或者は自ら僞れる事を知らず。或者は更に僞り、僞れる上を僞る。彼等は自己の心靈を汚せり。彼等は他の心靈を無視せり。我はたゞ彼等の强者が盛に暴威を振ふを見き。彼等の優者が飽まで我意を逞うするを見き。

我は彼等に教へられたり。我は素より進んでかかる世を救はんとする大德にはあらず、又退いて道を守らんとする隱者にもあらず。我は人間なり。我は寧ろ我等の優者が爲すところを學ぶべし。こゝに於て、我は彼等が以て本尊とするところの其利を尊みたり。彼等が以て手段とするところの其智を敬したり。斯くして我は新たなる世界に入れり。斯くして我は遂に盜賊となれり。

御身は我が行爲を以て赦すべからざる罪惡となすか。あゝ御身は彼の白晝意氣揚々として公然盜をなすものを見ずや。區々たる財帛の掠奪もし罪とすれば最も微なる最も小なるもののみ。御身は今天下に行はるゝ偉大なる掠奪を見ずや。彼の自由を盜めるものは如何に？ 彼の名譽を盜めるものは如何に？ 彼の生命を盜めるものは如何に？ 彼の權力を盜めるものは如何に？ 彼の功勳を盜めるものは如何に？ 彼等の或者は其罪を飾るに無辜の血を以てせり。人は其血に向つて盛に喝采せり。彼等の或者は其罪を誇るに無數の屍を以てせり。人は其屍に向つて誠意を以て祝せり。御身は此等のものを取つて何とかいふ。

されど御身よ。我は嘗て世に弄ばれたるが故に、翻つて世を弄びたるのみ。我は既に我が善を味ひ盡しぬ。また我が惡をも味ひ盡しぬ。我は善の苦みを知つて其樂みを知らざりき。惡の樂みを知つて其苦みを知らざりき。我はたゞ飽まで我意を振はんとせり。端なくも今日、そは或る大なる力によつて遮られぬ。我は愕然たりき。あゝ知らざりき知らざりき。我は自ら其道に當つて而も知らざりき。我は今にして初めて知れり、世は遂に善を以てのみ立つ事を得べからず、また惡を以てのみ立つ事を得べからず。

我は志を翻せり。庶幾くは今よりして、其善惡を超脱したる一歩高き人となる事を得べきか。我は再び御身に謝す。御身はまこと我が爲に有難き導師たりき。曩に我は御身の好意に對して少しは人らしく報いるところあらんといひし事を覺ゆ。御身よ。しばし御身に供ふべき我が贄を待ちたまへ。

郁子。我は日頃汝を慈しむ事に於て言葉少か

りき。されど我等をよく知るものは心と心たり。我等が間にはよしなき言葉の必要を見ざればなり。よし、我は足れるが上を餘りに多くは言はじ。靜子、いつにても美しくあれかし、誠あれかし、健かなれかし。尚その上に、最も幸ひあれかし。

十郎はやがて立上りぬ。書齋は此室と一間を隔てたり。出行く後姿の逞しきを、勝彌と靜子が見送りてより後幾程もあらせず、爆然たる短銃の音は其書齋に響きぬ。

烟の下に昨夜の手文庫と一通の書あり。それは勝彌に宛てゝ、あはれなる贄の子に目を掛けたまへ。さらば。となり。

うつせ貝

（上）

萑は鎌の刃に刈りこぼせども、織草の月代いつの世にか果つべき。何の蒜の上の偸羅、臭骸の添伏嬉しからずと悟りながら鴫立つあとの夕暮に、獨身のつく〴〵と淋しき事あり。呉竹の根岸の里に桂木華舟といふ男、丹青を其身の技として心安く世を渡りけるが、今年三十にして未だ定まれるものを持たず。親もなく兄弟もなき身の浮世を氣まゝにしなし、内弟子一人に何事も埒明けさして、朝寝の床の前に煙草盆の火いつか灰となる世帶。鉢の木は水をやる事を忘れて、松に一歳の色もなく、着物の綻びは我慢のならぬ迄產證いて、餘所目の見苦しきを構はず。無頓着は大家の常、自墮落は男の持前と、塵を忘年の友として、畫堂は十疊の廣きも畫帖粉本に取亂れ、自身の座蒲團をのけては、足を容るべき隙間もなき中に寛々と胡坐かいて、繪筆に脣を染めながら指先を働かし、明石の月も鹽竈の煙も、居ながらにして知る名所はこれなり。朝夕それを樂みにして外に望みもなかりけるが、松の心にも自ら春風わたりて、いつぞやの寐覺に不圖身の末を考ふる事あり。我もかくて世に立つ上は、老を契るものなくては叶はず。一人貰受けたらば、是迄の樣に手桶の底ぬけて、月も宿らぬ不始末はあるまじ。さらば娶るべきか。こゝぞ大事、人生一代の關所うかと通過ごすべきにあらず。罷間違ツて飛んでもなきものに添當て、座敷の中もお高祖頭巾着せて、向ふ火鉢に顏を避けて坐るは厭な事なり。娶るならば我望むほどの美女、先づ顏は面長に、色は白くして光澤あるべし。黑味勝の眼涼しくして釣方に口傳あり。鼻眉口元これぞ桂木流三箇の大事なり。身内は花車にして骨節高からず。高慢ならず輕卒ならず。氣立温柔にして其中に氣のきゝたる取廻し。此外別に望む所なし。地位は如何なるものにてもよし。資產は我願にあらず。なるならば丸裸の嫁御寮、婚禮の日に縫の衾して今の世の木下藤吉郎と世間を笑はしてやるべしと、此一念思立ツたるは二年前の如月上旬、それより眼を鷹の如くにして廣く世間を見渡せども、長し短し丈が揃はぬ裏表、いづれ我着物と肌に着くべきものもなし。たま〴〵それかと見れば早く餘所の庭の内に眺められて、折る事も高根の花や。さてもさても世になきものは比久尼の並備と尋ぬる美人、我國の人員あらましは四千萬の其半ばを女性として、此多き中に我望むものはなきか。そも〳〵上代に小町あッて、今の世に板額ばかりといふ筈はなし。縱令なきに極めし上も我一念の此まゝ止むべきにあらず。我一代の間は魂を蝶にして、あるかぎりの花の色を尋ぬべしと心に誓約さら〳〵と男の胸固く、其後露霜たのみなく置き變りて、月日は旅人の休みなく、二年は繪具解く間になくなりて、今月只今いまだに獨身の桂木華舟。「せくなせきやるな浮世は車、」その辛棒の續くかぎりはと、繪卷物を卷きかけて、今日も又暮れるさうな。

折しも頃は四月のはじめ、先師の記念會として兩國まで行く事あり。日の影南の窓に廻る頃忽がはしく家を立出しが、歸途は少し酒に亂れて、足つきをかしく、上野の廣小路より、山の邊を便りて池の方に近寄れば、春風やはらかに醉顏を掠めて心よさ得も云はれず。東叡山を

見れば、雲か雪か一面心のまゝに咲きかけて見殘す春もなし。今日來ずば明日は雪とぞといふ内、浮氣は風にもたせ身の花英、ちら〳〵目の前に散來れば、何處の誰樣の眺めを避けて、此處へは散來る花ぞと笑ひながら、とてもの事に木の下蔭に立寄りて、優しき主人殿に一枚の眺めを惜むべしと、花ある方に登り行けば、入相の鐘早くも人を散らして、山内は思ひしよりも靜かなり。夕日枝を爭ひ、花は素肌の姿自慢、これを見捨てゝ歸る奴は燒團子の串にさゝれて死んだがよしと、獨りつぶやきながら只ある床几に腰掛けて、命々と浮かれけるに、しをらしや暮れ行く春を惜みていまだに花の下を去りあへぬ一群の人あり。いづれも年若の女性、世には賴もしき方もあるかな。天晴今日の情知りとつく〴〵見れば、其中に一人これは〳〵、矢がすりの小袖に蝦夷織の帶しめたる息女、年來思ひかけたる雛形に少しも變る事なし。尙しげしげと見るほど割符を合す面ざし恰好。暫くは眼もくらみて心身を飛去り、花ははしたなく餘所になりて、一念凝ッたる化石の如く、滿山狹からねど其方のよりの姿はなかりしが、思ひは限なくして時に定めあり。程なく塒あらそふ鳥の聲に驚きて立去る人々、其中にも息女は足後れて、何殘惜げに梢を見返り勝なるをうれしく、ならばその梢に登りたき願ひ、それも暫しありて後影次第に遠くなれば、此まゝの別れ一しほに悲しく、身はいつか床几を離れて現に跡を慕うて行くに、石段を下りて、其處に待たせ置きし車に乘らるゝが最後、黑鴨は韋駄天の如く駈出せば、華舟翼なき身の跡追ふこともならず、車の紋を花菱とばかり覺えて、後影ぢッと見詰むれば、姿は車のうちに埋もれて、記念は一點文金の島田髷、それもまたゝく中に柳の蔭に隱れて、殘る砂烟を散らすは、えゝ見たくでもなき鐵道馬車！ 森の色夜を急ぎ、闇は黑幕のうちより、星の影は世界にさしたる光なくて、花は一簇の綿を浮かすほどになれば、茶店の老婆も最後の足音を極めて、葭簀卷きかけながら、賣れ殘りの燒團子を最惜しがる時、笑止や桂木華舟、山は我一人の闇となるも知らず、五官に働くことをなくして、惘然として立ッたりしが、程近き時の鐘空蟬の耳を驚かして我に歸れば、誰に見らるゝともなけれど、流石に今迄の仕打何とやら恥かしく、そこそこに山を下りて我家へ急ぎしが、戀は四面の暗きより覆ひかゝりて、何處とはなけれど、身に添ふ面影、次第に蹈み行く土を忘れて、うつつの如く我宿に歸れば、出迎に立出づる弟子の華山、彼樣もし我妻と定まらば、此の薄黑き華山の首は、先程見たりし笑顏にかはりて、お歸りませの聲も細く淸く、さぞや品よかるべしと、一念唯それに亂れて、華山が云ひし事も耳に入らず。言葉はなくして居間の眞中にどッかと身を投ぐれば、灯なき闇はあやなし。花の香小窓より吹入れて、暖みし春の風に心ふら〳〵と搖ぎ、面影目の前にあり〳〵と美しき時、華山「らんぷ」を心得顏に持ッて這入るに、えゝ入りもせぬにと思はず口走れば、華山けげんな顏して、入りませぬかといふ。いや〳〵その事ではなしと餘の事に紛らせしが、まことや戀は實をくらまして月花を黑くし、物の音の調を狂はして耳に怪しき響あり。先程垣間見の時よりの我は、心に日頃の覺悟離れて、あるよりは一しほの白癡となりたり。何の名も知れぬ――素性も知れぬ――況して心樣も覺束なき女を、今の思ひは我ながら氣の知れぬ話。あゝ厄體もなし。此邪念拂ふに若かずと、つら〳〵と思切りて、最愛の書帖取出し、心をそれに移さんとせしが、戀は蓮の絲の幾條となく折口より繫がりて、いつとなく前の心となり、一念もや〳〵のうちに亂れて、魂の入物ひとつ、身の置所を忘れ、

あるにもあられず。蚊帳を投出して萬山床取れと燈火吹消し、夜着の中に潜りて枕は棧橋——頼むは夢の中のお言葉。

逢はぬむかしとは誰がいひそめし言の葉ぞ。物思ふ身となりては、前後不覺の心狂はしく、もどかしく、苛痒く、侘しく、あとは涙を足して此思ひ我と我身で手のつけられぬ苦しさ、古より戀に惱みし人皆かゝる憂目に遇ひしか。忘れては夢かとぞ思ふ、その思ひの間も跡より責め來るは戀。如何にもして彼の息女の名所人と爲りを知りたく、それより思はゞ花に浮かれ人となりて、人の出盛る向島飛鳥山、上野の舊跡はもとより、足音の繁き所は見殘すかたもなく廻りめぐれど、逢はぬは此道のならひか、早くも半月を過ごせど悲しや似た人もなし。いつしか花も散りて青葉がくれに鳴く時鳥、我も血を絞る思ひ盡きじ。

あまりに堪へかねて、せめては俤を座右に眺め、逢ふまでの切なさをそれに忘るゝ事もと、燒筆をおッ取り、眼に深く刻み込みし御姿を繪絹のうちに寫し、彩筆に清めて、丹精はこゝ一念絞込んで仕上にかゝれば、腕の鈍さよ、筆の拙さよ、あられもなき繪姿見るも厭なり。我はこれほどの下手かと、愛想は癇癪に盡きて一枚ずた〳〵に裂捨てぬ。それより筆を洗ひ、心を洗ひ、身の一大事魂を籠めて又一枚に筆を染むるに、これも同じき虎の猫、いらだつ手の内に又眞二つになしぬ。三度目の油汗も墨黒々と塗消し、四度も仇となり、五度も氣に入らず。果は精神疲れ果てゝ、とても筆捨の美人と、横に倒伏してあとは夢となりしが、戀は繼矢のきびしく、又も心を取直して、書いては捨て、書いては裂き、合せて三十五枚は反古の山を築きぬ。此上もし成らずんば、繪筆を燒捨てゝ一生丹靑を取るまじと心に誓ッての上、丁寧周密芥子粒ほどの一點にも滿身の血を灑いで、一面書き終れば、出來たり〳〵。まざ〳〵と在すが如き繪姿、生氣凝成して今にも動き出でんず有樣に、筆を擲りしまゝ思はず躍上り、顏は喜びに溢れて心の在家を知らず。見るほどふるひつきたき花顏、笑を含む目尻、睫の一筋だも繪は其まゝの鏡なり。現は早く抜けて華山を經師屋へ走らし、日ならず表装見事に作らせ、これを座右の掛物として朝夕眺めを離さず、酒もこれに樂み茶もこれに浮かれ、逢瀬を願ふうちにも思ひの道場出來て、聞えぬ耳に心を囁きて暮しぬ。此上の慾いつか燃立つ時あるべし。胸の烟心元なや。

（十一）

同じ繪の道に無二の友とせし若水芳村といふものあり。如月のはじめに大和廻りを志して、日夜行交ひの袂を分ちしが、只今無事歸京のよし門口より申入れて、旅の衣を脱ぎもあへず、芳野の土を踏みし靴そのまゝに此處へと言へば、華舟喜びて座敷に通し、先づは健固の大慶、雙方の口より走りて、それより猿澤の池、春日神社、二月堂、三月堂、さては名勝の七堂伽藍、法隆寺の什物はこれ〳〵と、古人の手柄を今にして目新らしく物語に時を移し、我留守中の都——殊に其方の上に耳の役に立つほどの話はなきかと云へば、華舟膝を進めて、あるとも〳〵。それは何？　何と容易くいひ盡すべき話でなし。我は戀の奴となりたりといへば、芳村大笑して、其方が戀に？　さては木醂の秋をも待たずして自ら落ちしなるべし。さすが選好み強き其方も待つにもどかしく、あらぬ花の色に心を入れたかといふ。華舟聞きもあへず心を見切賣にする我ならず。先方は誂へ通りの美女、妻を持たば陰麗華と古人の手前も鼻高きものなりと、少し反身になッていへば、芳村笑ひながら、こゝ聞所なり。先づはじめより

委しく話せよと、呑みかけし煙草をはたけば、華舟未地になッて、上野に初見參、そも〳〵より、思ひを絵姿に洩らせし事まで、親しき交情とて少しも隱さず、胸の闇を打明けて話せば、深くも思込みしもかな。年頃の好尚はこゝ、我一臂の力を惜むべき時にあらず。先づ其絵を見せよといふ。直ぐに書堂へ導き、最愛の絵姿、我が心をこめし處を見よと幅を指させば丹青の妙これはと驚き、目もあやにつく〴〵と眺めしが、振向いて、此姿に少しも違はぬかと聞く。問ふまでもなし。面ざしは三十枚むだにせし程の骨折、微塵粟粒ほども似ぬ所はなし。衣裳も帯も見たまゝに餘計の筆を加へず。化粧の色合笑の亂れは、眞を失はじと無量の心を苦しめたりといふ。芳村座に歸りて暫く言葉なかりしが、まゝならぬを定めの戀、殊更戀は怪しき働きあり、人の力の及ぶ所でなし。其方これほどの思ひを重ねても、首尾よく手に入れる事ならずして、悲しくも添はれざる曉はいかにと聞けば、其上は詮なければ……。潔く諦むるや？　何として、諦めのつくほどの淺き思にあらず、我戀は終初物此外に一人と心は運ばじ。不幸にして願ひ叶はざれば、世に埋木の花を捨てゝ、枯木のうちに此絵姿を抱き、これを一念執着のすがり所とすべし。それにしても未練は……といひかけしが、少しせはしく、あゝ不吉々々、その思ひだも厭なり。成りもせぬ前によしなき事をと、獨言のやうにいふ。芳村その顏をしげ〳〵見て居たりしが、世界は廣し、花に一つのみに限るべからず。これより上に立優る美色はいくらもあり。さりとは近頃狹い了簡といへば、華舟首を掉ッて、優劣といふは餘人の眼なり。我にはひとつ――これより外に魂を打込むべきものなし。そもそも二年以前の如月より、世間にあるほどの花は見て〳〵見ぬきたれど、一つとして褄先から上へ取上ぐべきものなかりしに、今や最後の眼にうつりしものはこれ、さればそれにつけての我思ひは、とても人間にあるほどの言葉で云ひ盡し得べきにあらず。優劣の兎角は何にてもあれ、惜まず濺ぎこみし我一念、縱令ば仁王が黑鐵の挺でも動くべきや。世界は廣しと云はれたれど、我には此姿の外に世界なければ、餘所に芳野あるを知らず、松島あるを知らず。我には天下一品、其方の知る所でなしと語氣前よりは鋭し。芳村俯向きたる額を上げて、駿馬癡漢を載せて走るとか、世間は一筋繩のものならず。茶花に蝶を風が邪魔する類ひは、大方の世の定めなり。才子も痘痕面に滿足し、絕代の美人もつまらなき男に添當てゝ終ること、二足三足世に出でなば直ぐに眼に入ることなり。世間皆思ふものを娶り得べきものならば、惡女は生涯身の置所なく、缺脣の男生れながらにして出家すべし。殊更先方は如何なる身の上とも知れぬものを、一途に思込んで、もしそれが蟲食ひの花ならば、其方は何とする心ぞといへば、華舟せき心になッて、其方は我望みにけちをつけて、戀は叶はぬと云ふかの口吻。先程よりの言葉は我に氣落させんとの腹かと詰となれば、芳村ぢッと見て、さる了簡はなけれど、絵姿に少し心當りあればといふ。華舟思はず聲を上げて、さては彼樣を知ッてかと聞けば、芳村急に立上ッて、それは此處では云ふまじ。仔細は四日のうちに知らすべければ、兎角は胸を沈めて待つべし。これは思はぬ長居と、華舟が次の言葉をも待たず、足早に外へ、つ――い。

（下）

心も心ならず。待宵の苦を初めて知りて、立つもつらし、坐るもつらし。千里の道を牛の背に任す心地して、もどかしさの千秋――浮世の三日をやう〳〵過ごせば、四日めの東雲に一通の

手紙ひら〳〵と舞込みたり。としや遅しと封を解けば、

三日三晩少しも睡まずして、かきくらす思ひに亂れ申候。胸中迴らぬ筆にものし候へど、とてもこれにて書盡したるには無之候へば、半の上は賢察を仰ぎ候。其方が命かけたる戀人は、誰あらう豫て御話し申せし我が許嫁の妻藤にて候。先日繪姿をながめし時は、一目見るよりはッと致し候ひしが他人の空似といふ事もあり、もしや餘の人かとつく〴〵見れば、見覺えある矢がすりの小袖、其上蝦夷織の帶は去ぬる日旅立の前に贈りしものに寸分違はず。さてはと心騷がれし時、はしなく眼に入るは插込に打ツたる花菱の紋、これにて紛れなしと胸を衝き申候。人もあるべきに、知らぬ事とはいへ我妻と定まりしものをと、世に無う情なく、それより其方の心をそれとなく承り候ひしに、なみ〳〵の浮きたる戀にはあらで、淺からぬ心のまことを聞くほどつらく、悲しく、恨めしきに、其思ひを包む苦しさ。果は席にも堪へず逃歸り申候。あれほど迄に思込みしものを、もし我物と聞くならば、其時の落膽は何れほどと思へば、其方が無念の顔色目の前にあり〳〵として心苦しさ譬へん方もなし。同じくは藤に熨斗をつけてと、胸に問ひし事幾度か知れず。そもそも年久しく陳雷の心を盡して、もし骨肉と生れてもこれほどの交情はと語ひし其方に、身も命もさら〳〵惜むべしとは思はねど、こればかりは如何にしても力及ばず候。此事も御耳に入れじとは存じ候が、藤は大恩ある都筑の娘にて、昨年都筑が死去る時にも、くれ〴〵藤に不便を加へてよとの遺言、殊更病床の前にて、内祝言の盃を交はし候へば、此緣を切ッて其方に讓らん事は、幾度思返しても成りがたく、それのみならず申しては異なものなれど、其方に何隱すべき、緣定まッてより此方、末は女夫の心深く、月に思ひ花に思ひ、年頃相馴れて、二の玉の緒を一つ戀にからみつけし結び目、火水の中にもこれは解かじと言葉をかはし、變るな變らじ一念五百生と語ひしものを、これを捨てんは凡夫の我にてはとても忍びがたし。今年は婚禮も遠からねば、其後にて旅の空に笠草鞋のたしなみは覺束なし。まだ獨身の心安き時に、かねて望みの大和廻りを果すべしと旅支度すれば、藤は我が爲に旅の衣裳を縫ひ、暫しの別れも心憂けれど、御身が願を妨ぐるはよしなしと、逢はぬうちの思出に二人立並んで寫眞を撮り、それを止めて我は天涯の客となりしが、情の衣と寫眞は身を離さずして、孤天に東を望むうちにも、其方を思ひし外は皆藤の事なり。これほどの思ひを引裂かんとする心の中の苦しさは、其方に察せられぬ事はよもあるまじ。身の勝手には似たれども、此事よく〳〵賢慮を廻らされ度候。されど其方の心中を推測れば、此事知れし曉に其方の悲みには、我餘所目に見流して怺へおほすべきにあらず。これは如何すべきと、立歸りし夜はそれが爲に寝られず。其方の戀は一目の結果、隣の人だも時によれば顔をも知らで過ごすならひもあるに、相知らざりし身を何とて藤の其方が居合す時上野には居たりしかと、笑ふべき愚癡を獨言ちし時もあり。兎や角と心亂れて、二日の夜も腕

を組みしまゝに明かし、三日の夜も同じく過ぎ、つく〴〵思へども良き思案も無し。さりとて此事其方に知らさで過ごすべきにあらず。約束の日も來りぬ。手紙を認めかけたれど、其方が讀む時の心を思へば書續く氣力も出でず。此迄書くうちにも幾度筆を捨てしか知れず候。我今滿身の血を絞ッて其方に願ふ事あり。年來の舊誼を思ひ、しかも其交の膠漆も只ならざりしを思ひ、我をあはれと思はば、普天の下に都筑藤といふ娘ある事を忘れて、我妻に若菜藤あることを思ひ、是迄の戀を捨てゝ一人の妹を持ちたる心となり、美しき交を新に結ばれん事、これ我一生の願なり。其方の胸苦しさ萬々推察致し候へども、憂身をやつす我に免じて、枉げて此義を叶へられ候へ。されど、其方若しこの爲に世を捨物となす如き事あらば、我も藤を娶りて安閑とそれを見過ごす事は成りがたし。一生獨身の境遇に身を果すべきなり。たゞたゞ我心をあはれんでさらりと心を入れかへられ候へ。さらば我一身の力を盡して、藤に百段も立優りしものを必ず御手に入れて見すべし。御所存如何にや。返事待入候。頓首。

四日午前三時認

華舟盟兄　　芳村

胸は塞がりて言葉なし。華舟手紙を握りつめしまゝ、前にひれ伏して居たりしが、起直りて、此戀忘れねばならぬかと、思はず絞り出せし一言、目を上ぐれば、莞爾々々として此方を見る繪姿、其笑顔が命を刻む。我を地獄へ落す氣かと突と立上り、兩手にばらりずんと引裂き捨つれば、軸の端花瓶に當りて、插けてありし牡丹の花は散り〴〵。

絃聲

（一）

瘦細つて絲のやうになつた手を膝の上にかけて、涙の目にわッと泣込んだ事ばかりが心に殘つて、芳樹は遂に最愛の妻を失つた。誰あらう都に琴の名手として遙かに儕輩を挺んでて居つた上に、美色の噂は雲井の處にまでも高かつたのである。しかも其身と同じく都の住居を脫つて、結婚の式を擧げて間もなく、此一村に身の置處を求めて、其妻琴は此横笛に合はされて只二人の世の外に萬事を忘れて暮らして來たのである。其妻を芳樹は遂に墓の下に送らねばならぬやうになつた。

春の初め料らず風邪を引いたのがもとで、僅かの間に病は重つて妻の手足は次第に細く、夏の暑さに憔悴れた身體は猶更瘦せて、秋風のそよりと立初めた頃より遂に寐返りもならぬ程になつてしまつた。醫師は素より手の盡せるだけは盡したが、良人は殊に戀女房の女もならぬほどの介抱に心を碎いたが、あゝこれも天命であらう。

午後の九時は芳樹が妻を失つた時刻で、其頃になると在るに在られず、只野に出でて草花を踏みしだいて、其處等あたりを駈廻つて、一時なりとも此悲しさを忘れようと勉める。勞れゝば其を幸ひに閨に入つて寐るといふよりは倒れてしまふ。醫師は少からず心配して切りに其不可を說いた。芳樹は其言葉に點頭かぬではないが、悲歎の涙は道理もなく止まらぬので、果は醫師の言葉をさへ、此悲みは妻を失つた人でなくば到底分らぬ、彼はそれを知らずに說くのだと無理に理窟を付けて、なか／＼に煩くなる。聞くまいとする。歸る途すがらの醫師の歎息、其折は芳樹が泣いて居るのである。

或日例の思ひに堪へなくなつて、又も表へ飛出さうとした。折節秋雨はしめやかに降つて、外は將に暮れんとして居る。餘りの事に雇婆は其袖を引止めた。氣はたゞ前へあせつて居るので、振返りもせず其を拂はうとする。

「あれ御覽なさいまし。彼樣に降つて居りますのに。」

と言はれて見れば成程今朝からの雨で、餘りの事と氣が付くと同時に、力のない吐息と共に其處へ腰を下してしまつた。

「勘、何時だ。」

「はい、最う七時すぎで御座いませう。まア何う遊ばしたので御座います。あんまり氣をお遣ひ遊ばすとお毒でございますよ。」

「うむ、然し何うも堪らんのでなア。俺は何うかしたのか知らん。每晚まるで寢ないからかも知れんが。」

と絕えず俯向いて居た。是は妻を失つてからの癖で、昔はかういふ事はなかつたのである。お勘は傍に寄つて、

「お寢らないので御座いますか。」

「うむ、寢られんのだ。寢ると夢を見るからなア。」

「それがお惡うございます。其樣にお考へ遊ばしたつて奧樣は。」

と言掛けたが、また思ひを增させる種と口を噤んでしまつた。芳樹は力のない吐息を洩して、

「やつぱり其が可かんのだらう。けれども忘れられんよ。俺と巨枝とは通常の夫婦とは譯が違ふ。よし通常な仲でも悲しくない事は無論な

い。お前に言うたとて分るまいが、[illegible]した、聞いてくれ。玉枝はもと身分あるものゝ娘で、立派に世の中に立つて居られるのだ。都の眞中に立派な淑女として立つて行かれる身體だ。殊に琴は都でも第一とまで言はれた名人で、俺も知つて居る。音樂會から招待を受けぬ事は一度もなかつた。けれども或事からして、甚だ心面白からぬ日を送つて居た。其時俺は國風音樂校の教師をして居た時分であつたが、譯があつて都に居るのが非常に厭になつた。其譯は、お前に言うても分らんから止さう。自體俺はあんまり人の中で樂器を持つ事が嫌ひで、たゞ專心一意生徒に教へて、何の事も考へなかつた。もとより世の中の榮華も幸福も願はず、たゞ其儘に世に埋れようと思つた。すると、或日校長からの賴みで、初めて或音樂會に出て笛を吹いたが、恰度其時玉枝が來て居て、俺の笛を聞いたと見える。其翌日親友が來て或音樂に熱心な女に笛の出稽古をしてくれぬかといふ。素より職分であれば、次の日から教へに行つてやる事にした。そこで逢つて話をして見ると、名人と噂に聞いた玉枝で、一曲所望したが成程凡手でない。味には同國人といふ事も分つて、それから繁く往來する中に、遂に結婚するやうになつた。互に心を明して見れば都に居るもつまらん、何處か世の中の事か聞えぬ處で、一生を樂しく送りたいと、相談が出來ると、矢も楯も堪らず都が厭になつて、玉枝に少しの財産あるを幸ひに、後見をして居た叔父といふのが、承知せぬのを無理に此村に引籠つた。それから全五年の間、俺は實に幸福であつた。此上もなく樂しかつた。お前の目にもさう見えたらうと思ふ。其玉枝が死んだのだ。言はんでも分らう、俺の心の中は言はんでも分らうと思ふ。なア勘。」

と涙を拭ひつゝ言葉をつゞけた。お勘は慰める事も忘れて、老の目の涙は止度もなく返事も出來ぬ。芳樹はそれをぢツと見詰めて居たが、

「泣くからには分るのだらう。」

と獨り點頭いて、稍勢ひが付いた膝を一搖り進めた。

「なア勘、おれも玉枝も慥かに未だ樂みは盡きなかつた。人間は一度死ぬの位は知つて居る。けれども二十五では壽命とは言はれんぢやないか。俺が死ぬか狂氣にならんのがまだ不思議なのだ。あゝ最う言ふまい。幾度言つても同じ事だからなア。」

憮然として長大息の後に、ごろりと其處に横になつて、雨に暗い天を當途もなく見詰めて居る。お勘はやう／＼涙を拭ひ終つて其傍に寄りながら、

「お風を召すと可けません。もうお寢みなさいまし。御酒でも召上りませんか。お燗を付けませう。」

「いゝや、酒も飲む氣にならんよ。最う寢よう。頭が痛んで仕樣が無い。明日は二七日の逮夜だなア。早いものだ。」

とすご／＼我部屋へ行つてしまつた。お勘はあらゆる雨戸を閉めて、最後に臺所の戸を閉めに行つた。折から雨は止んだ、星影が水瓶に映つて居る。小犬が蹲踞つて居る納屋の陰に、風が藁を弄ぶ音を聞いて居ると、芳樹が閨で、

「勘、勘。」

とけたゝましい聲がする。お勘は驚いて行くと何の事はなく、

「何うも堪らん。暫く其處に居てくれ。」

「はい。宜しうございます。何うか遊ばしましたか。」

「なに、何うもせんけれども何だか堪らんよ。あゝ。」

とばかり。外は風の聲も次第に更けて、幽かに水車の音が響いて來る。

どは寐て居て下さいませんか。藥もなにもそれでは利きません。」

と醫師は深切にも今芳樹の家を見舞ふと、お勘がこれ〳〵との話に驚いて、其儘こゝに駈付けたのである。

「はい歸りますから、何うぞお先へ。」

「いえ、御同道致したいですな。出來るならば御墓參は當分止めて戴きたいのですけれど、已むなくば何うか晝間散歩かた〴〵として下さらんでは。」

と其袖を取つて引立てようとした。芳樹はそれを振拂つて、

「今暫くです。はい、誓つて歸りますから何うぞお先へ。」

と禮も言はず言葉は角立つて來る。醫師は別に怒りもせず、

「はア左樣ですか。それでは必ず早くお歸りなすつて下さい。必ずですよ。」

と念を押して去つた。餘り逆ふのも爲でないと思つて、程近い木蔭に身を潛めたのである。間もなく芳樹は歸る氣になつて立上つた。さらばと誰に言ふでもなく別れを告げて、よろめきながら二間ほど草を踏分けたが、不意に立止つた。墓は柿の木の月影になつて半ば黒く、傍の柳が折からの風に散りかゝつて居た。

芳樹は一町ほど俯向きながら歩いて居たが、首を上げるや否や又も宙を飛ばんばかりに我家に立戻つて來た。お勘は走出でて、

「お歸りなさいまし。眞實にお詣りをしてお出遊ばしたのですか。」

「うむ、お前に宜しくと言つたよ。」

冗談かと思へば、さうでもない樣子、お勘は愕然として其顔を見詰めたが、芳樹は委細構はず、何と思つたか、亡き玉枝の部屋に入つた。お勘は猶更恐くなつて、身の中は寒く毛穴の立つのを覺えたが、如何にも氣に掛るので、竊と窺いて見ると、芳樹はいつも玉枝が坐つて居た處に胡坐を組いて、子供のやうにしく〳〵泣いて居る。

此時、門に人の足音がするので、お勘は其處へ出て見ると、醫師が跡を追うて來たのである。

「おや先生、まア寔に御深切樣に有難うございます。如何でございました。」

と襖を外し〳〵問掛ける。

「何うも困るねえ。心配になるよ。どれ何んな樣子だか一寸見て來よう。」

「彼の只今ねえ、寔に變でございます。何うか遊ばしたのではございますまいか。」

やがて連立つて、部屋を窺いて見ると、芳樹は只默然として居る。二人は息を凝した。

（三）

芳樹は只當途もなく見詰めて居る垣の外を、東西から人の足音がして、今其處で行逢つたらしい樣子で、

「おや治兵衛さん、大分お遲く。」

「はい、少し用事が御座いましてな。もう何時頃でございませう。」

「左樣、かれこれ九時、過ぎましたかな。氣を付けてお出なさいまし。」

と互に挨拶をして立分れた。九時といふ聲が聞えるや否や、芳樹は立上つて目を据ゑた。

月はやゝ影更けて、小窓に薄い影がゆらめいて居る。折から蟲の音を亂して稍強い風が吹いて來た。其と同時に、幽かな、極めて幽かな、琴の音が不意に續けて聞え出した。外から通ふ響ではない。部屋の口に佇んで居る二人は等しく耳を傾けた。

お勘は次第に足元が亂れて、くひしばる齒も折々合はぬさまである。琴の有るか無きかの響は、絶えるでもなく、高くなるでもなく、時には草の葉を渡る風の音に紛れて、何處から響

いて來るか慥とは聞きとれぬ程である。芳樹は矢張突立つた儘に眼を光らして庭を見詰めて居た。

稍あつていつ消ゆるともなく、其低い琴の音はなくなつてしまつた。二人は猶去りやらず佇んで居る。

芳樹は軈て其處へ倒れた。四邊が如何にも靜かなので、其音が殊の外高く聞えた。同時にまたもや低い前の響が斷續し初めた。暫時して其音がやゝ高くなつた、俄然芳樹は打たれたやうに起上つて、振向きざまに床の間を屹と見据ゑた。床には琴柱を立てた儘の琴一面彈く人もないに、幽かな響を立てゝ居た。

覘いて居た二人も同じく床の間を見ると、音の源は此主のない琴であるのに、お勘はきやッといふ聲諸共、のめる樣に臺所の方へ逃げて行つた。醫師は猶息を凝して居た。

芳樹はお勘の叫聲に驚きもせず、一心に琴を見詰めて居たが、其膝はじり／＼と床の方へ近寄つて來る。醫師は次第に身體を部屋の中に入れて、今は殆んど半身を入れて仕舞つた。芳樹は這ふやうにして次第に床の間近くなる。琴は猶其幽かな響を斷續さして居た。

芳樹は早床にまで至つた。やゝ暫く琴を打守つて居たが、そッと手をあげて片手を琴にかけた。忽ち其響はぱッたり止む。

やゝ暫く、芳樹は掛けた手を其儘に睨んで居たが、やがて手を離すと、又もや荻の友摺のやうな音が響いて來る。「玉枝。と一聲急に叫んだまゝ、芳樹はばッたり後に打倒れた。醫師は直ちに其部屋へ駈込むと、芳樹は拳を握りしめて、射るばかりに天井を睨み据ゑて居た。

醫師は抱起しながら、

「早乙女さん、何うしました。慥かりなさい。え、早乙女さん。」

と言葉をかけたが更に物を言はぬ。已れの手一つではと、お勘を呼んで怖がるのを叱るやうに、やう／＼閨へ擔込んで辛くも床の上に寢かし付けた。

夜半にも近い頃まで、醫師は傍に附添つて何かと看護に手を盡して居たが、芳樹も何うやら靜まつた樣子なので、

「それでは私は最う歸るから、能く看病をして上げるやうに氣を付けてね、私は明日の朝また來るから。」

と立たうとする。

「はい、あの。」

とお勘はおろ／＼聲で、目に立つて震へて居た。

「何にも怖い事はないよ。琴が鳴るのが少し變なやうだけれど、なに別に怖いほどの事はない。今夜は御苦勞でも傍に付いて居てあげておくれ。明日の朝私が又代るから。」

「あの誠に申兼ねますが、何うか今晩はこゝへお泊りなすつて下さいませんか。何ですか何うも私には心細くつて怖くてなりません。」

「何の怖い事があるものか。よく看病をしてあげておくれ。夜の明けるのも最う直ぐだから。」

といひつゝ芳樹の顏を見ると、たゞ空に靜かなので、此分ならばと立上らうとする途端、芳樹が倒れた時止んだ琴は俄かに響音を高めて鳴出した。はッと思ふ二人より先に芳樹は矢庭に跳起きて、非常な叫聲と共に躍上つて其部屋をして駈込まうとする。お勘は驚いて狼狽へるばかり、醫師は力かぎりに抱止めたが、猶身をあせつて行かうとする。お勘もやがて力を合はせて、漸くの事で寢床に納めると四邊はまた夜に歸つて、琴は尚怪しく響くが如き音を絶えず傳へて居た。

（四）

明くる朝早く、山村醫師は心にかゝる儘に晉

訪れて來た。もとより別懇の間であるので案内もなく上へ上つて、直ぐに寢室へ行つて見ると、芳樹はうつら〳〵と夢に入つて、お勘は獨りまじ〳〵と自分の膝を打眺めて居たが、山村の姿を見たので急に出迎へながら、

「さア何うぞ此方へ、昨晩は誠に有難う御座いました。まアお早くお出下さいまして。」

と急がはしく其席を設けた。山村は先づ芳樹の寢顏を覗いて、竊と脈を取つたまゝ、何かは知らず考へに沈んで居る。お勘は差寄つて眉を寄せて、

「如何で御座います。」

と片手を下に片手を膝に置いて、氣遣はしさうに顏を打目成つた。山村は執つて居た手を離して、

「何うも困つたものだねえ。何かね、昨晩はあれから別に騒いだやうな事も無かつたかね。」

「はい。あれから大分お靜かで、只今迄お寢み通しで御座います。」

話聲が耳に入つたと見えて、芳樹は幽かに目を開いた。

「早乙女さん。如何です。お心持は。」

と山村は笑傾けて尋ねかけた。

「や。お早く何うも。」

と起上つた氣色は、更に通常の人と異つた處もない。昨晩の事は全然知らぬやうなさまである。

「何うでした。昨晩のお心持は。」

と山村は膝を進めて竊かに此病者が如何なる心を持つて居るかと尋出さうとする。芳樹は何か記憶を呼起さうとする樣子で、

「左樣でしたなア。」

と目を閉ぢて默想して居たが、やがて、

「いや昨晩は妙でした。はじめ何といふ事はなく、笛を吹いて見る氣になりましてなア。まア笛を吹いて居たです。するとつい昔の事を思出して來て言ふに言はれぬ心持になつたです。それから笛を捨てゝ外を見て居る中に、急に其、何へ、墓へ參りたくなりましてな。何だか少し夢中で、自分ながらよく分らんのです。墓へ行つて見ると、いゝ月夜でしてな。暫く草の中に轉がつて居ましたが、左樣、一時間程も其處に居ましたか。其中に種々雜多な事が心に浮ぶと、それが一々目の前に見えるやうに思はれるです。いや實際見えたのです。さも在るやうに。」

山村はぢッと其樣子を見ながら、

「それから何ういふ氣分になりましたな。」

「其から何でしたな。氣が何だか遠くなつたやうでしたが、急にそこら四邊が眞暗になつてしまつたのです。頭腦は烈しく痛んで來て、堪らんので家へ歸つて來る途中、不圖又妻が臨終の時を思起したのです。其有樣が判然目に見えるですな。其時に、あゝ今頃だ、九時であつたと思つて。いや其時は妻の部屋の中に居ましたよ。すると何でも表の方から、誰であつたか、九時だ、と言ひながら此方へ飛込んで來るやうでした。其聲を聞くと同時に棒か何かで腦を打たれたやうな感じが起つたですな。それから後の事は少しも記憶がありませんが、何でも妙な夢を見たのです。やはり妻の部屋の中でしたが、不思議にも妻が獨りで琴を彈いて居ると、非常の怪物が今にも噛付かうとして居るのです。其怪物ですか、まア鬼ですな。大きかつたですよ。雲を衝くやうでな。色は半分金色で、半分は銀色をして居ましたよ。そして其周圍には雨風が非常に烈しくつて、黑雲が渦卷いて居るです。私は驚いて妻を助けようと思ふと、聲が出ないのです。身體も更に自由が利かんやうになつてしまつたですな。やう〳〵一聲、玉枝、と僅かに呼ぶ事だけが出來たのですが、其苦みは又非常でした。さうすると又不思議で

すな。」
と話はやゝ勢ひに乘つて來る。山村は絶えず其顏色動作に注意しつゝ耳を傾けた。芳樹は更に言葉をつゞけて、
「其時俄かに、何とも言ふ事の出來ぬ美妙な音樂が聞えるです。はッとして顏を上げて見ると、天女です。慥かに天女です。其怪物の反對の方に、繪にかいたやうな天女が何時の間にか舞下つて居るのです。背後は一面に光明が赫燿として、何處ともなく異香が薫じて來るやうで、蝶などが舞つて居て鳥が囀つて居るのです。する中に怪物も天女も、次第に妻の方に近寄つて來るので、何うなる事かと思つて只見て居ましたが、兩方一時に妻の手を取つて引立てようとすると、妻は非常に苦み出したのです。身を踠いて居る其有樣が如何にも見て居られんのです。自由にならん身體を遁ふ樣にして、妻の肩に手を掛けて助けようとすると、忽ち前に霧のやうなものが一時に滯立つて、其怪物も天女も妻も一度に其中へ包まれて、見えなくなつて仕舞ひました。すると遙か上の方で、頻りに私を呼ぶ妻の聲がするので、急いで行かうとしたが、身體が何うしても利かんので、踠廻る途端に私は何者にか引立てられて、無理に地の底の方へ連れて行かれたやうでしたが、それから後は雲のやうで何だか分らん事になつてしまひました。夢のやうでもあり、夢でないやうでもあり、何とも何うも譯が分りません。妙ですな。」
と漸く語終つた。山村は昨夜の有樣を思起して、猶仔細に芳樹の樣子を打目護つて首を傾けて居た。

（五）

其日の中は、案じるほどの事もなく芳樹は落付いて、機嫌よく勘を相手に話などをして居たが、夕方近くなる頃から、またも妙に考へ初めて樣子も次第に變つて來た。勘はまた事のないやうにと竊かに心を配つて居たが、九時の時計が鳴るや否や、不思議にも昨夜の如く床の間の琴は自然に鳴初めた。其音を聞くより芳樹は忽ち自分の部屋を駈出して、琴の前に坐つたまゝ其を凝視して居る。晝間の芳樹とは全然別人のやうで、慥かに狂人の姿である。
勘は少しも目を放さなかつた。琴は昨夜よりは響を高めて鳴つて居る。今夜は如何なる事に成行くかと、勘は獨り心細い折から、芳樹は急に四方を見廻し出した。やがての事、何やら火[illegible]になつて琴の方を見て居たが、俄かに[illegible]として、
「勘。勘。」
と傍に居るのも知らず呼立てる。
「はい。何か御用で御座いますか。こゝに居ります。」
と[illegible]なかに傍へ寄ると、琴の方を指して、
「來たよ。來たよ。」
と果は大聲に突出すので、いよ／＼氣味惡く、
「何が參りました。」
と訊ねるのを待ちかねたやうに、
「來た。來た。昨夜來た。遠々から來たのだ。湯を取つてやれ。湯を。早く、勘。勘。湯をはやく取つてやれ。」
と言捨てゝ縁端に走出した。勘は何といふ事も出來ず、只氣を揉むばかりでおど／＼して居ると、芳樹は怒つて、
「勘。早く取つてやらんか。馬鹿め。逃げて仕舞ふではないか。そら逃げる。勘。捉まへてくれ。早く。早く。早く。」
「はい。はい。」
とばかりで勘は途方に暮れてしまつた。芳樹はます／＼狂出して、
「逃げる。逃げる。逃げるよ勘。そら逃げた。」

と言ひさま縁より飛下りた。勘は驚いて止めようとしたが、遅い。芳樹は早くも枝折戸を開いて表へ出てしまつた。

勘は狼狽へてあとを追つたが、月はあるが夜の事で、姿は早くも見えずなつてしまつた。詮方盡きて、暫く其處に立つて居つたが、其儘捨ては置かれないので、勘は共々探して貰ひたさに、兎に角主人の最も親しい友の、山村醫師の家へと驅出して行つた。

勘が音訪れて來たので、山村は慌しく玄關へ出て來た。

「早乙女さんが何うかしたかね。困るなア何うも。」

勘は一禮もそこ／＼に、

「何うも寔に困つた事になりました。夕方から旦那樣が大變におなりなすつて、今しがた何處かへ往らしつてしまひました。」

「困るねそれは。何處へ行かれたのだ。」

「何方へでございますか分りませんので。」

「うむ。飛出されたのか。それは大變だ。萬一な事をしてくれなければ宜いが。」

「誠に恐れ入りますが、お手をおかし遊ばして、お探し下さる譯には參りますまいか。」

「無論探さんければならん。直ぐに行から。少し心當りもあるから。お前はまア家へ歸つて待つて居るがいゝ。」

「左樣でございますか、ではお言葉に甘えまして宅へ歸つて居ります。夜中何とも恐れ入りますが何分何卒お願ひ申します。」

と猶も賴み聞えて勘は歸つた。山村は見當を付けて、月明りを幸ひに、先づ例の墓へ行つて見ると、嘗て見覺えのある芳樹の帶が泥まみれになつて落ちて居たので、偖はこゝへ來たと見えるが、何處へ行つたものか、更に當途もないに困じ果てゝ、兎も角も此邊の人に尋ねての上と心當りの家をそちこち聞いて見たが、更に分らぬ。尋ねあぐんで歸つて來る途中で、ばツたりお勘に行逢つた。

「や。何は歸つて來られたのかね。」

「いゝえ。あの只今、八幡樣の社務所からお使が來まして、あの旦那樣は其處にいらつしやるのださうで御座いますから、それで出て參りましたので。」

「さうか。それはまア知れてよかつた。それでは私が行くからいゝ。私でなくば手に合はんかも知れん。歸つて待つて居な。」

「誠に何うも度々恐れ入ります。」

といふ勘の言葉を聞捨てに、山村は程近い八幡の社へと志した。

社務所へ行つて禮を述べて、芳樹を迎ひに來たよしを通じた。出て來た神官は、

「早乙女さんは飛んだ病氣が出たものですな。先刻から拜殿の緣の下に這入つてしまつて、何う言つても出られんので、只今迎ひを上げましたが。」

と其處へ案內して行つた。

緣の下の、蜘蛛の巢だらけの中に、芳樹は悠然と構へて、何か嘖々と笑つて居た。山村は見るより近く寄つて、

「早乙女さん。さア最うお歸りなさいまし。お迎ひに來ました。」

と差覗けば、芳樹はにこ／＼として、

「いや久し振で妻が來ましたから、私は今しばらくこゝに居ります。」

と脇を振向いて、

「御挨拶をせんか。山村さんだ。」

と言つて又山村に向つて、

「まアお這入りなさらんか。」

と何か家の中にでも居る心と見える。

いつまで斯らしても置かれんので、山村は及腰に手を執つて引立てようとしたが、芳樹の力は日頃に十倍して、中々動くどころではないので、

居合した神官の力を藉りて、何うやら斯うやら引出すと、それなり又急におとなしく、言はれるまゝに連れられて歸つて來た。勘は待ちかねて其々介抱して寢かし付けた。

（六）

芳樹はそれなり正體もなく、次の日の晝過まで寢通しに寢て、二時頃になつて漸く起出でたが、只ぼんやりして、お勘が心持をたづねたのにも返事さへせず、庭の有様を見るともなく眺めて居た。

夕方から雨になつた。それでなくとも淋しい家の中。しと〳〵と降り下して、あたりは寂として遠い砧の音が幽かに聞えるばかりの、何となく物悲しげな晩である。芳樹は又日が暮れると變になつて、きよと〳〵四邊を見廻しはじめた。

九時の時計が物凄く打つと、例の琴が又鳴初めた。一日ましに其音は高くなつて行くやうである。芳樹はそれを聞くや否や、昨夜の通り矢の如く其處へ行つた。勘はツとして後から附添つて行つた。

芳樹は一心に琴に向つて居たが、次第に近く膝をすり寄せて、兩手を其にかけてしまつた。

やゝあつて、

「玉枝。」

と一聲叫んだ後、恰も其人が其處に居るやうに、

「自體お前が餘り無情ぢやないか。決してさういふ約束ではなかつた筈だ。いくら病氣だつてそんな理窟があるものか。それは人間一度は死ぬものだ。けれども今お前が死ぬといふ譯がない。それが間違つて居るよ。ならんね。許せないよ。何うしても死ぬのは承知が出來ないとも。死ぬのなら勝手にするがいゝ。俺はかまはん。けれどもお前がそれで濟むと思ふのか。え、なにか、濟みません。すまんだらう。濟むわけがない。俺の此顔のやつれを見てくれるがいゝ。これほどに病氣の癒るのを願つて居る。其心も知らずに死ぬ。甚だ分らんぢやないか。え、何とおもふ。」

と恰も答を待つが如くに、しばらく琴を見詰めて居た。琴はたゞ例の音を續けて居る。しばらくして芳樹は莞爾として、

「さうだとも、無論なほる。なほらん事があるものか。俺のおもふ心だけでも屹度なほる。なほして見せるよ。安心して養生するさ。なにを泣く。泣く事はない。」

といひながら芳樹も兩手を琴より放して涙を拂つた。

「それなら何か、サツぱりお前は死ぬといふのか。お前には似合はん分らない事を言ふぢやないか。能く考へて見るがいゝ、お前が死んだら俺の身體は何うなると思ふ。何うもならんで居るものか。そんな、そんな、輕薄な心は持つて居ないぞ。」

と嘲るが如くに獨り怒つて居たが、急に色を直して聞耳を立てゝ、

「なに癒る。うむ、なほれ。さア早くなほれ。なほらんと承知せんぞ。」

と言續ける處へ、今夜は何んな有様であらうかと、それを見に山村は這入つて來た。芳樹は其姿を見るより、

「や、山村さんよく入らしつた。今勘を迎ひにあげようかと思つて居た處でした。」

山村は片頰に笑を含んで、

「何か御用ですかね。何なりとも仰有いまし。」

「いや別に用ではないです。實は今日お蔭で妻がよくなりましたから、ほんの心許ですが全快の祝を爲るのです。まアゆツくり召上つて下さい。久し振で例の合奏でもお聞かせ申します

から。」

と滿面青ざめて居るが、如何にも嬉しさうで、勇ましく其處らを歩きはじめた。山村は、

「左樣ですか。それはお目出度いですな。」

「目出度いですとも。實に目出度いです。」

と更に烈しく歩行いて居る。山村は徐ろに感に打たれて、其有樣を見守つた。心の中には、あゝ此人が此春までは、夫婦樂しく笛と琴とに日を暮らして居たのである。

やゝ暫く往きつ還りつして居たが、俄かに山村の傍に進寄つて、

「山村さん。」

とばかり。打つて變つた悲しさうな調子で、其處にどッかと腰を下した。

「詰らんですなア世の中は。」

とつく／＼思入つたやうな顏色である。山村は温顏に慰めて、

「何が其樣に詰らんのです。今お目出度いのではありませんか。」

「目出度い。何が目出度い。貴方は失敬な事を言ひますな。」

甚しく機嫌を損じたが、又しを／＼となつて、

「目出度いどころではありません。私は此間妻を失つてしまひましてね。詰らんですよ。何の樂みもなくなつてしまつたです。實は最う死にたいですけれど……。あゝ、詰らん／＼。嫌だ／＼。」

と涙は頬を傳はつて居る。なほ暫くすゝり上げて居たが、やがて又立上つて運動を初めた。山村は其動作に注目して居ると、芳樹は又も傍へ寄つて來て、

「山村さん。山村さん。」

と如何にも周章てた樣子で、

「妻が何だか危いですよ。何うか助けてやつて下さらんか。實に一生の願ひです。よう御座いますか。」

と言ふかと思へば、又も頻りに運動を續けて居る。

傍から勘は山村の袖を引いて、

「如何でございませう。お癒り遊ばしませうか。」

と小聲に聞くと、早くも芳樹はそれを聞きつけて、振返りざまに、

「なほる／＼。今なほるよ。そら癒つた。」

と聲をあげて笑出した。山村は、

「さうさなア。困るなア。昨日から見ると何うやら惡いやうだね。」

といふのを何と聞いたか、

「左樣ですとも、癒らんければならんのです。死ぬなんて、そんな。そんな。」

と嘲るやうに言ひながら、行きつ戻りつ次第に其足は早くなる。

琴は猶怪しき音を止めず。雨の音は次第に烈しくなつて、夜はます／＼深くなる。折から芳樹は何とも分らぬ歌を高々とうたひはじめた。

（七）

午後の九時。時刻を違へず琴は不思議にも例の響を立初めて、日毎に其音を高めて行く。芳樹は次第に其狂態を增して、屢勘の手に餘る事もあつた。普通のものならとうに暇を取つてしまふのであるが、長く奉公して居たのでもあり、外に手もない此病人を獨りあとに殘して行きかねて根が實意ものゝ、何うぞして癒るものならばと、年寄だけに神佛などを祈つて、眞心盡しの介抱をして居た。いつも晝間は多く靜かで、今日も芳樹は別に騷ぐ事もなく、たゞ折々妙な事を口走るばかりであつたが、さし込む月が漸く庭の木立を離れて、下の小流に影を見せて來た頃、何を思つたか暫く捨てゝ居た笛を俄かに取出して緣へ出た。勘は又何事もなけれ

ばよいがと、目を瞬さずに見て居ると、芳樹は其處に座を構へて、やがて一聲、思ひも寄らぬ冴え〴〵とした音を立てゝ吹初めた。

かくて暫くは吹續けて居たが、俄かに烈しく氣色立つて來て、息のあらん限を荒々しく歌口に吹込むやうになつたので、笛は忽ち鳴らなくなつてしまつた。ならぬに益々癇癪を起して、咽も破れんばかりに吹立つて居たが、折しも例の時刻を過ぎて、琴の響は次第に高く聞えて來る。芳樹は不圖首を上げて、耳を澄してそれを聞いて居たが、俄かに笛を捨てゝ、勢ひ込んで其部屋へ駈入つた。

勘は又も如何なる事に立至るかと、あとを追つて行つて見ると、芳樹はたゞ兩の拳を握つたまゝ、一心に琴を見詰めて居たが、病は烈しく起つて來たと見えて、身體は絶えず震へて居る。忽ち、右手の指を口に入れたかと思ふと、ぶッつり嚙切つたと見えて、血は脣を洩れてぼたぼたと滴り落ちて來た。勘はハッと驚いて心の中に事なかれと祈つて居ると、芳樹は指を口から離して、つか〳〵と琴の傍へ進寄つたが、いきなり琴の上に其指を當てゝ、力を極めて無茶苦茶に絃を掻き亂した。見る〳〵血は飛沫のやうにはねて、琴の胴はもとより、床の間一面そこら中に赤い斑點が印せられた。勘は例の狼狽へながら、兎に角寝間の方へ連れて行かうとして、漸く抱止めて床から引離して、さま〳〵だましつ賺しつしたが、芳樹は耳にも入れず身を踠いて其手から離れようとする。勘は尚も抱締めて居たが、芳樹は、折々怪しい聲を出して、叫ぶ度毎に其力は増して來る。勘は女の事ではあり、年寄つた身の力があらう筈はない。一生懸命になつて抱締めて居るとはいふものゝ、次第に腕は疲れて來て、今は早や兩腕が折れさうになつて、力を借りようにも人はなし、山村は折あしくなか〳〵來てくれぬ。殆んど泣出したくなつて、更に良策を考へる間も何もなく、只成行に任せるばかりである。

忽ち芳樹は非常な叫聲と共に、勘の手を振解いた。あれッとばかり勘は泣聲になつて取縋つたが、及ばゝこそ。芳樹は一散に庭の方へ走出して早くも縁を飛下りた。勘は直ちに後を追つたが、捕へられる處の騒でない。彼方此方と出口のある處を飛び歩行く芳樹の早さ。殆んど飛鳥の如くである。然しいづこも鍵が掛けてあつて、表へ出る事がならぬので、ます〳〵猛り狂つて、遂に垣の片隅をばり〳〵と破りにかゝつた。勘の驚きは一通りでない、表へ出しては又如何なる事を仕出かすか、誠に危險千萬であるので、辛くも追縋つて腰のあたりへ武者ぶりついたが、一も二もなく跳飛ばされて、あはやと見る間に芳樹は垣を押破つて表へ駈出した。

（八）

山家の心やすさは只籬を圍んだ一家中。其日の働きを果たす噺に語りながら、食ふうちに足れば外に何の心配もなく、六十何歳の老爺は手作り酒に醉うて睡枕に噂けて居る傍に、五十二三の老婆は絲車の響をたてゝ、其の子かとも見える十七八の娘は、一心に機を織つて居る。脇の爐火は隙洩る風にしばたゝいて、爐の自在鍵には何やら煮立つ鍋が掛つて居る。

「寝べい。」

と老爺は起直つて、兩手で眼を頻りに擦つた。それが可笑しいとて娘は譯もなく笑出した。老婆は委細かまはず車を廻して居た。

「寝べいよ、なア。」

と老爺は誰にいふともなく言ひながら、大きな欠伸を續け樣にした。其日はとろりとして、顔は眞赤で、ふッくらして、いつも笑つて居るやうで、誠に氣のよささうな爺さんである。娘は筬の手を止めて、絲屑を口に啣へながら父の

寢床を取りにと立上つた。老爺は[illegible]きながら、雨戸をがたぴしと外して背戸へ出て、用を足して、身震ひと共に出た嚔一つ、やをら雨戸を閉てようとする折から、かたばかりに結んだ垣のあたりで、がさ／＼と何やら物音がする。老爺は聞耳を立てゝ其方を見たが、音は次第に高くなつて、果は人の呟くやうな聲が聞える。何であらうと又外へ出て、月にすかして物音のあたりを見廻し、突如に、驚いて後ずさりをする途端、垣の熊笹の中からむツくり起上つた人がある。

芳樹は一散に我家を飛出して、此夜は妻の墓へも行かず、道のない處をも構はずひた走りに走つて行つたが、半里ほど先にさまで高からぬ峠が一つある。其麓に人家が二三軒木の間をあやどつて居る。其窓のあかりが見えたので、芳樹は直ちに其方へ駈けて行つたが、家近くなつて全く疲れたと見えて、垣の熊笹の中へ寢轉んでしまつたのである。

老爺は驚いたまゝ其處に立縮んだが、芳樹は起上るや否や、飛鳥の如く家の中目懸けて駈込んだ。母と娘は何の事やら更に分らず、あツけに取られて、只兩方から目を見張つて、芳樹の顏を見上げて居ると、芳樹はそこらをきよろ／＼と見廻して居たが、つか／＼と娘の傍へ寄つて來て、血だらけの手で容赦もなく引寄せようとする。娘は吃驚して飛退くと、芳樹は又も傍へ寄つて來る。色を變じてあとから逃入つて來た、父親の後へ隱れると、芳樹は猶も追掛けて來る。老爺は慌てゝ中を押隔てながら、

「あんだお前、あにをするだア。」

と謂ひつゝ其顏をつく／＼見て、

「や、笛の旦那だア。」

此年老はいつも芳樹の住んで居る村に、炭を賣りに出るのを商賣にして、芳樹の家も其花主の一つである。殊に或夜芳樹夫婦が合奏を垣の外から聞いて、分らぬながらも頗る心を動かした事がある。其から笛の旦那と呼び馴れて、日長を一日、緣に腰を掛けて芳樹を面白がらした事も有つた。四五日前やはり炭を持つて芳樹の家へ行くと、お勘は涙ながらに今の有樣を語つた。爺はやがて其を思起したものの、こゝへ來る事の不思議さに呆れはてゝ居る。

芳樹は飽く迄も娘を捕へようと爲る。娘は泣聲を上げながら逃げまはるので、老夫婦は其を取りさゝへようとしたが、中々年老の手には餘つて、殆んど困じ果てゝ居た。娘は家の中に居たたまらず、遂に表の方へ逃げ出して行くと、

「玉枝。玉枝。」

と叫びながら、やらじと後を追うて隙間もなく追縋るので、狂も走れば不狂も走つて、老爺は慌てゝ驀直にあとを追つて行つた。

娘は一散に坂道を走せ下つて、右へ切れて里の方へ急いだ。月夜とはいひながら木の下道は眞闇で、芳樹は右へ曲つた事とは知らず、まツすぐに、

「玉枝。玉枝。」

と叫びながらとある野道へ出た。其處は二道の追分になつて居る。芳樹はきよと／＼あたりを見廻し、直ぐ傍に立つて居る地藏に目がついた。何を思つたかつか／＼其傍へ行つて、暫くそれを見詰めて居たが、

「玉枝。お前は何故逃げたのか。分らんではないか。何が怖い。今合奏をして見ようと思ふのに、お前が逃げだしては可かんぢやないか。ああ。それだから嫌だ／＼。世の中は最う嫌だ。俺もお前見たいに死んでしまはうか知らん。それがいゝ。それが何よりだ。」

と獨言を言つて居る時しも、遙か向うに提燈が見えて、それが次第に近くなつて來た。山村はお勘の通知に驚いて、二三の人を頼み處々探しに出て、今しもこゝに來たのである。

無事に居たのを喜んで、無理に引立てゝ兎角して連れて歸つて來た。

（九）

芳樹が狂態は日毎に進んで、今は全然何事も分らなくなり了つた。體も手足も憔悴して、顔は尖つて、目は血走りきりになつて居る。或夜近頃に珍らしく芳樹は靜かで、前後も知らず夢に入つて居る樣子故、樹は此分ならば翌朝迄は何事もあるまいと思ふ弛みが心に出ると、日頃の介抱の疲が一時に出て、斯うではならぬと思ひながら、知らず〳〵うと〳〵として、何時の間にか其處へ倒れて寢てしまつた。夜半過ぐる頃、風の音が耳に這入つて不圖目を開いて、俄はいつの間に寢入つたかと驚いて、一先づ芳樹の樣子を見た上で、變がなくば床に就かうと芳樹の寢間の口まで行くと、中は如何にも靜かで、あたりの蟲の聲が著しく高く聞えるのみである。

樹は耳をすましたが、中には鼾の聲もないので、是はとばかり寢間の中を見れば、床はのべてありながらも主は居ないからである。樹はまたも墓所へと走つた。

芳樹は夜半ごろ目を覺して、微かに部屋の中の運動を初めたが、急に起つて縁側へ出て、獨りに外へ出る處を探して方々を歩き廻つて、臺所の水口の戸が引忘れてあつた處から、またも表へ飛出したのである。

それから後はひた走りに、何の墓へと一散に走出した。秋の末であれば月の光も冴え〳〵更けて、人影に絶えてない所を、芳樹は何をか口に呟きながら、間もなく墓に走りいつた。

「玉枝、」

と喉より絞出したやうに一聲叫んで、其儘其處に倒伏したが、やがて起直つて又さめ〴〵と涙にくれて居た。

「玉枝。早く支度をしろ。早くだよ。最う餘程遲い。早くせんと間に合はんよ。」

と何を思つたか今迄泣いて居たのを忘れたやうに、勢ひよく立上つて、

「まア待つて居ろ。今一所に連れて行つてやる。」

と墓の石に手をかけて、遂に押倒してしまつた。それより半時間ほども掘つて、やうやく臺石を取りのけたが、やがて傍にあつた卒都婆を引拔いて、頻りに墓の下を掘初めた。

田舍でした土葬であれば、棺のある下もさまでに深い事はない。其棺の中には玉枝が假の世の姿を止めて居るのである。

暫しばらくの間、芳樹は何かくど〳〵いひながら、一心になつて土を取除けて居たが、遂に棺の蓋に達した。卒都婆を投捨てゝ其蓋に手をかけて、また一時間程の後、遂に其蓋をも取除けてしまつた。さて眞面目に其傍に立寄つて、

「玉枝。早く行かんか、其樣な處に何をして居るのだ。早く來んかよ。愚圖々々して居ると置居はねてしまふ。」

と獨言をいひながら、棺の中へ手を入れた。折から風はやゝ烈しく吹起つて、月は寒く冴渡つて居る。芳樹は玉枝が亡骸の髪を手に摑んで引摺出さうとしたが、髪の毛は引くがまゝに惡く脱けて來る。芳樹はそを投捨て〳〵、遂に毛は一筋も殘らずなつてしまつた。

「お前は何故來んのだ。早く來んと遲くなるといふのに。え、何處か心持でも惡いのか。」

といひつゝ自身穴の中へ這入つて、棺に手をさし入れてぐツと抱上げたが、玉枝の死體は間もなく土の上に横はつた。

其儘、芳樹は玉枝の首のあたりに兩手をついて、ぢツと其顔を見守つた。あはれ昔は玉の如しと歌はれた顔は、其肉大方腐爛し去つて、眞白な骨が處々あらはれて居る。芳樹は莞爾と笑を

合んで、
「うむ。似合ふ、よく似合ふよ。お前は矢張髷の方が何うしても似合ふ。品がいゝな。其帯も非常によくなつた。やはり紋付がいゝな。皆よく似合つた。立派なものだ。」
と絶えず口元に笑うて居たが、やがて亡體を掻抱いて、すた／＼と我家の方をさして歩出した。月は遥かに其後姿を送つて行つた。

（十）

芳樹は屢々家を脱出でて種々な事を仕出かすので、山村は勘と協議の上、遂に玉枝が部屋を座敷牢にして芳樹を其處へ入れた。午後の九時、例の琴がなり出すと、其處へ行かねば承知せぬので、已むなく其部屋を選んだのである。芳樹は其處を出たい度に、
「玉枝。こゝを明けてくれ。」
と言暮らして居る。
それより後芳樹は次第に狂ふ事が烈しくなつた。冬のはじめ、ある日朝から風は烈しかつたが、晝頃から雨をさへ加へて嵐はたゞ荒れに荒れまさつて居た。天地は只騷然として木の折れる音が物凄く聞える。晝ながら四方は薄暗くなつて、木の葉は雨のやうに飛廻つて居る。夕方からは芳樹の狂ひやうも益々烈しく、手とも言はず腕とも言はず、そこら中を噛みちぎつて其血を壁に吹掛けるやら、衣服を寸々に引裂いて投散らすなど、見るさへ恐ろしい樣である。外には軒も碎けんばかりの雨、石をも吹飛ばす風の聲。勘は恐ろしさに小さくなつて居ると、山村は深切にも此嵐の中を見舞ひに來た。勘は盲龜に浮木の心地で、
「誠にひどい嵐になりました。毎々まことに有難うございます。」
「ひどく荒れて來たね。」
といひつゝ奥の物音を耳につけて、
「や、大分早乙女さんは甚いぢやないか。」
「はい、今日は何で御座いますか朝からあの通りでございます。まアあれでもよくお成り遊ばしませうか。」
「困つたものだ。」
と話の中に、九時の時計は嵐に亂れて幽かに時を報じた。突然例の琴は鳴初めたが、いつものやうな低い調子ではなく、非常な高い音を上げて、潮の如く鳴響いて來た。嵐は其時一層の度を加へて、芳樹はます／＼荒れに荒れて狂廻つた。
既にして嵐は其極に達した。樹の倒れる音、枝の裂ける音、物凄まじい外につれて、琴の響はいよ／＼烈しくなつて來た。どッと一吹ふきつける風に、芳樹が居る處の窓の戸を吹飛ばされて、烈風は眞直に部屋の中へ舞込んで來たので、芳樹は叫びつゞけて飛廻つたが、再び吹入る風と共に琴は殆んど最高調の響を出すと、今迄飛びあるいて居た芳樹は、俄かに琴の前に立止つて、一心にそれを凝視しはじめた、寄付けなかつた山村は、今しも飛入つて取押へようとする途端、又もや一煽りの風はどッとばかり吹入つて、琴の音は一段急に烈しく、忽ち非常な響を發して懸連ねた絃は一時にばらりと切れてしまつた。芳樹は飛上つたなり、仰向けざまに打倒れた。

＊　　＊　　＊　　＊　　＊

嵐が止んで、月になつて、かれ殘る蟲の音が一時に起つたが、芳樹の家はひツそりとして何の音もなかつた。

小町紅

（一）

「ちよいと、ちよいと芳岡様、あれ芳岡様てのに。」

と焦れッたさうに立止つた。十五ばかりの丸髷の裏道具の見事に揃つた、恐ろしく愛らしいのであつた。中人高に、花簪、花櫛、鼈甲の前挿小[illegible]を插して居る。光琳模様を地[illegible]散らしにした華美な友禅に、下着は緋無地の八丈縞、赤地の蝦夷錦の帯を締めて、言ふまでもなく唄化粧。

處は小田原の本通り、[illegible]の中程に青柳と言つて土地で鳴らして居る料理屋から三四間手前の角。呼掛けられたのは、此子の家の、菊菱といふ藝者屋の、つい近所に住つて居る藩士の[illegible]局生で、二十三四の、薄ッぺらな、重みのない男だ。知らずに行過ぎたが漸くに聞付けて振返ると、忽ち其相を崩したもので、

「おゝ鈴ちやんか。甚く綺麗だな。お座敷だね。」

直ちに後戻りして傍へ寄つた。松山進といふ其藩士か、菊菱の掛り付けであるばかりでなく、其初め菊菱の家へ養女に來て、やがて亡くなつた養母の跡を受けて、今では大姐で切つて廻して居る粂次といふのが、此小鈴の實の姉で、小鈴は又松山の一人息子の操といふ同い年のと乳兄弟といふ縁で、操は那樣處へ繁く立廻るのを家では叱られながら、子供の時分から、行くとちやほやされるのに浮かされて隠れては遊びに來る。其操を玉に使つて芳岡も、これは父[illegible]の[illegible]で時折しけ込むといふ手續きになつて居るので、芳岡は菊菱の家中、上は粂次から、下は駒といふ黒斑の猫に至るまで懇親いのだ。

「はア、今青柳さんへ出るの。」

と小鈴は小さな口元に言はれぬ愛嬌を見せて、直ぐにあどけなく、

「芳岡さん、あのね、貴方にね、私少し聞きたい事があつてよ。」

芳岡は打笑つた。

「ふむ、鈴ちやんの聞きたい事なら言はずと知れて居る。」

「あら、何うして。」

「きまつて居るさ。[illegible]の人の事だらう。聞けば内所で[illegible]を斷つてるんだつてね。恐ろしい[illegible]心だね。」

「あれ、」

と場所[illegible]れず[illegible]を染めた。

「可くつてよ。芳岡さんは本當に人が悪い。」

「でも然うだらう。」

「知らないわ。最う聞かないから可い。」

つんとして行つて了はうとした。笑つて芳岡は前へ廻つて、

「これさ、何うしたのだ。何も怒る事はないぢやないか。」

「だつて那麼事を言ふんだもの。」

「可し、それぢや言ふまい。聞きたいのは何だ。」

「厭、最う。貴方は屹度調戯ふもの。」

「なに調戯ふものか。さア、何だよ。」

「厭よ。笑つて居るから。」

「ちよツ、面倒な孩兒だな。那樣事ばかり言つてると最う何も知らして遣らないよ。」

小鈴は急に風向を變へて袂に取付くやうにした。

「あれさ、後生。お願ひだからさア。」
「だから何だと言つてるのに。」
「あのね、」
と莞爾して、
「本當はね、矢張あの何なの。」
「それ見るが可い。言はない事ぢやない。」
「あれ最うそれは可いとして教へて頂戴よ。あの何は操さんは此頃に東京へ行つて了ふんだつて。本當？」
と稍眞顏になつた。
「うむ、譃と言つて遣りたいが本當だ。あとが思遣られるね。」
と冗談口、小鈴は受付けず口早に、
「そして最う日が決つたの。」
「まだ決らないが何れ近い中だ。」
「えツ、近い中。」
言つたぎり默つて了つた。面白半分に芳岡は又、
「可憫さうに泣別れだね。」
俯向いて居たが、忽ち顏を上げて、
「知らない。何うとでもお言ひなさいよ。難有う。左樣なら。」
會釋其儘衝と立離れた。芳岡は流石に拍子を拔かれて、
「あッ、聞きッ放しで行つて了ふのか。餘り現金ぢやないか。いくら俺には用がないからと言つて。」
小鈴は振返つて、
「あら御免なさいましよ。おほゝゝゝ、いづれね、」
とませた口吻に目顏で點頭いて見せて、引別れると遲くなつたといふ風で、褄をほら／＼急がはしけなポックリの音を立てゝ駈けて行つた、後を見送つた芳岡の、未だ其處に立つて居た樣子といふものは、お話になつたものぢやない。

（二）

見た處五抱へもありさうな、幹には注目繩を掛渡して、蜘手に四方へ根を張つた大銀杏が路の角にぬいと立つて居る。兒供の惡戲か見上げる下枝に古草鞋が引掛つて、烏が一羽、日影を眞向に浴びて上に羽を休めて居た。處に名物の漬物、鹽辛、挽物細工などを商つて居る店から二軒置いて、梅屋といふ、料理、待合、旅籠を兼業にした田舍流の一寸したのがある。奥の小座敷に差向ひの、一人は落付かず、さも坐心の惡さうに、
「僕は厭だ。這麽處へ來たのが自家へ知れると甚麽に叱られるか知れやしない。僕は最う歸るよ。伯母さん處へ行くのが遲くなつて了ふ。」
と立ちかけた、色白の、くり／＼と肥つて、ぱツちりした眼に、秀でた眉の見るから可憐げの美少年。
「あれ操さん、」
と慌てゝ止めたのは、菊菱の小鈴なので、一寸お詣りにと言つて、姉の前を拵へて出て來たのだ。荒い棒縞の御召に薄紫の矢飛白の羽織、鶸茶の常着帶に、紅入友禪の前掛を締めて居た。
「先刻も那麽に言つたのに、餘りだわ。私本當に談話があるんだからさ。後生だから些少の間此處に居て頂戴よ。家へ知れる事はありやアしないよ。私此處の喜代ちやんとは仲好しだから。譯を言つて能く話して置いたから大丈夫よ。私だつて姉樣に譃を吐いて出て來たんだから知れると大變だわ。」
操は迷惑さうに、
「僕はそればツかりぢやない。何だかきまりが惡くツて仕樣がないもの。」
「だつて誰も來やしないわ。」
「來やしないツて這麽處だもの。」
「でも外に恁うして談話をする處はないから、私も間が惡かつたけれども思切つて此處にし

たの。昨日家へお出たつたさうだけれど、私やお座敷へ出て居たもんだから、ついお目に掛れなくッて、歸つて明日の事を聞いて本當に泣きたかつたわ。此儘で逢はれずに別れて了つたら何うしようと思つて、一生懸命になつて漸との事で恁うしたのだもの。貴郎も些少は察してくれたつて可いわ。」

と、しんみりとして、黒味勝ちの、張の强い眼を凝と見上げた。操は輕く、

「なに僕だつて、鈴ちやんに逢はないで行つて了ふつもりで居やしない。」

「そんなら何も、私を嫌つて那樣に立ちさうにしなくッても可いと思ふわ。」

「何を言つてるんだ。誰がお前を嫌ふものか。僕はきまりが惡いからと言つてるぢやないか。」

「いゝえ、然うぢやなくッてよ。那樣事にかこつけて逃げようと思つて。貴郎は本當に人の氣も知らない。」

と涙組んだ。操は見て、驚いたやうな顏をして、やがて頭を擡出して、

「困るな。那樣事を言つたつて僕ア……。可いやそれぢや居るから、先刻言つた其談話ッてのをお聞かせな。」

小鈴は眞顏に、言ひあへぬ心の籠つた聲音で、

「操さん、貴郎は私が甚麼氣で居るか知つて居るの。」

「え、甚麼氣ッて。」

操は訝かしげに眉を寄せて、

「あれ、あれだもの。私ア本當に遣切れないわ。」

俯向いて、術なさうに見えた。操は目を瞬つた。

「何うしたんだい。僕には何だか譯が解らない。」

「可くッてよ。」

と恨めしさう。

「厭だ。那樣顏をして何うしたんだよ。え、何うしたんだよ。」

小鈴は答へず、暫くして、

「貴郎は私を何とも思つてお出ぢやないんだもの。」

「何故、

「何故ッて、貴郎は平氣で東京へ行つておしまひぢやないか。」

「だつて僕は行かなくッちやならないのぢやないか。鎌倉の中學校へ行くよりは、吉井の叔父さんも居る事だし、何うでも東京の方が學校も好いからと言つて、伯父さんが阿父さんに勸めて、それで僕は東京へ行く事になつたんだ。」

「あれ、私は那樣事を言つてるんぢやなくッてよ。」

「それぢや何を言つてるんだ。」

「貴郎は私を打捨つて行つておしまひぢやないか。」

「だつてそりやア仕方がない。」

小鈴は思込んだやうに膝を進めて、

「それ那樣不實な事をお言ひぢやないか。貴郎は本當に餘りだわ。」

「無理だ。那樣事を言つたつて僕が何うする事も出來やしないぢやないか。僕は困つて了ふ。」

「可いわ。貴郎は那樣氣で居るんだから。」

「那樣氣ッて解らない事ばッかり言ふぢやないか。鈴ちやんは何うかして居るよ。」

小鈴はせき上げた。

「はア何うかして居ますとも、私ア這麼に氣を揉んで居るのに、貴郎は全ッきり察しておくれぢやないんだもの。」

操は更に、解きかねた心に、つく〲顏を見詰めて、

「鈴ちやん、お前何か思つてる事があるなら言

つてお了ひな。一人で那樣事ばかり言つてたつていつまでも僕にやア解りやアしない。」

「言つたつて仕樣がありやしないわ。私ア最う捨てられたんだから。」

「捨てる？　鈴ちやんは何故那樣思ひも付かない事ばかり言ふんだらう。僕が東京へ行つて了ふから、それで捨てるなんぞといふのかい。そりやア僕だつて鈴ちやんや何か皆に別れて行くのは厭だけれど、いつまでも這麼田舍に居ちやア何も覺えられやしないからね、行かずに居りやア詰らないものになつて了はなけりやならない。」

「それだから私なんぞは、後で甚麼にならうと構はないで行つておしまひなんだらう。」

「だつてそりやア…。」

「可くッてよ。可くッてよ。貴郎は那樣に邪慳だけれど、私や、私や…。」

と既おろ／＼聲。

操は持てあつかつたやうで、

「鈴ちやん、それぢや何うすれば可いんだよ。」

「操さん、」

と小鈴は涙を持つた眼を上げて、思切つて、

「貴郎實があるなら私を東京へ連れて行つて頂戴よ。」

「えッ東京へ、」

と思はず聲を上げて、

「那樣事が出來るもんか。」

「おや何故出來なくッて。矢張私が厭だもんだからそれで那樣事をお言ひなんだらう。貴郎は何うして然うだらうねえ。」

「だつて僕が何うして鈴ちやんを連れて行かれよう。那樣無理を言つたつて仕樣がありやしない。」

「何が無理よ。貴郎に別れるのがつらいから連れて行つて頂戴と言つて居るのに、いくら私が這麼者だからと言つて、それぢや貴郎餘りだわ。餘りだわ。餘りだわ。」

「困るなア。鈴ちやんは本當に解らない。」

「貴郎こそ解らないのだわ。那樣、那樣貴郎ぢやなかつたけれど…。」

雙方共に解らないのだ。年が行かないだけに、小鈴は思ふ心を十分に言つてのける事が出來ず氣ばかりあせり立つて眼に精一杯の力を見せても、操には何の效もなく、

「僕は最う知らないよ。勝手におし。」

と又立ちかける。小鈴は堪へられず、矢庭に袂を取縋りさま、金茶の縮手巾を、袂から引出すと顏に押當てゝわッと泣いた。

（三）

座敷の方には、父の進と、伯母と、今度操に附添つて行くといふ伯父との三人が、夜の更けたのも忘れて、操の遊學の事で未だ何彼と話合つて居た。

明日があるからと言ふので、操は早くから寐かされて、今夜を名殘の、其臥床に入つたが、目は冴返つて寐られようともせぬ。

宵の間の父の訓戒、伯母の注意、そればかりでもなく、住馴れた地を離れて行くそればかりでもなく、漠とした未來の希望、目的などの胸に往來するそればかりでもない。

今迄つひぞ覺えた事もない心地で、何と問はれても確に答へもならぬ事が、後から妙に心に掛るのだ。

操は更に目が冴えた。

枕も定まらず、闇の中に、其眼を皿のやうにして、まじ／＼と見詰めると、晝間見た小鈴の涙組んだ顏が歷然と前に見えた。何とも知らず、胸は引締められるやう。昨日までも、それほどには思はなかつた別離が、言ふやうもなく惜しくなつて來る。

腑に落ちなかつた其時の小鈴の言葉も、今にな

つて、怪しく身に應へるやうで、此少年の未だそれと氣が付かぬ胸に、初めていぢらしいといふ心が起つた。

其場の行掛りで、先刻は心にもない面白からぬ別れ方をしたので、伯母の許から歸り掛けに内所で寄つて、仲直りをして行かうと思つたのが、折を惡く、伯母に連立つて家へ來られたので、つい立寄る事も出來なかつた。

鈴ちやんは嘸僕を怨んで居るだらう。

再び以前の泣顏が、ありありと目の前に見えた。

家は其中に寢靜まつて、空には歸る雁の聲。窓の前には竹の戰ぎ。遠く海の音が聞えて、裏手の田面には彼方此方に歌を合せて蛙が鳴交はして居た。

生暖い、夢心の春の夜であつたが、操はそれ處ではないのだ。

時は移つて行く。疲れて僅かに目を合せたかと思ふと、物驚きをして不意に覺めた。外はいつの間にか明るくなつて居る。遲くなつたかと慌てゝ跳起きて、急がはしく身支度して部屋を出ると庭の彼方で、

「おゝ操、最う起きたか。はゝ、今朝ばかりは起されなかつたな。」

父の進は、早くも起出でて、一人庭を徘徊して居た。操は見ると手を支いて、

「お父樣、お早うございます。」

「應。」

とさも機嫌よく、

「早く顏を洗つて來い。」

「唯。」

とばかり駈出して、手拭、楊枝、藥局の芳岡が手に成つた齒磨を持込んで、庭の下の、流れの前へ降りて行つた。

幅は三四尺、流れて落ちる早川の裾から引いて來た水が、細流の美しい波の綾を見せて、細かい音を立てゝ流れて行く。石の白いのに、底はさながら見え透いて、玉のやう。

前の田面は、一帶に薄霧で包まれて、蛙は其中に未だ鳴連れて居る。目近に立つた一本柳は夢のやうに煙つて、彼方に遠く、明神の森に、消殘つた常夜燈の光が瞬いて、前の畦路を、鼻唄で流して行く頰冠りの影が見える。東はポツカリと、眩いやうな銀鼠に縁を取つた、紫走りの横雲の下から沸いて上る淡紅の色に染返して、其處に此處に目ましく雀が囀散らして居る。

下の川棚へ出ると、右も左も、水に冠さつて咲溢れるやうな山吹の花。

操は口を嗽ぎ出した。

流れの上の、菊菱の家では、糸次の客が、今日起拔けに皆な連れて箱根へ遊びに行くといふので、近頃類のない早起、糸次は最も遲れて呼起されて、今急がはしく身拵ひの最中である。

既支度の整つた小鈴は、例の瀬彩色を塗上げて、進まぬ顏色も、濃い化粧の下に隱して居たが、姉を待つて居る中に隙を見て裏口から外へ出た。

逢つて恨みを言ふだけの便りが、其僅かな中にあるとは思はれぬが、一目だけでも、とばかり、情に驅られて、扮裝に似合はぬ臺所履の下駄を突掛けたまゝで、飄と出て來たのだ。

流石に氣遣ひの背後を振返つて、やがて家を離れると、直と急ぎ出した。操の家は其處から一町ばかり家込の間を少し行くと直ぐに田甫で、右へ折れた先は操が降りて來た裏口だ。

小鈴は角へ出ると、はツと思つた。今しも水を手に掬んで居る操の姿は、言ふまでもなく目に入つた。

走寄らうとして、不意と見上げると、常から恐いものに思つて居る進が、庭先に立つて居る。

上と下に、操とは二間と離れて居ぬ。

途端に此方を向いたやうなので、我にもあらず慌てゝ身を引いて、小蔭へ隱れて立つた。足は進まず、暫く佇んだまゝで居た。操さんは其中に上つてお了ひだらう。何うしたら。と兎つおいつ。

思付いたやうに、急はしく手巾を取出して、帶に插んで居た紙入から、小さな紅筆に三折の紅板、下に屆んで前の流れに筆を濕して、紅を溶いて手巾に書きつけた女文字、其儘押丸めてはらりと水に投入れた。

投入れた手巾は、ふはりと開いて、水に一つ輪を畫いて波にもつれてさら〳〵と流れて行つた。小鈴は瞬きもせず其方に見詰めて居る。

勾配が付いて居るので、思ふ其方へ水は逸早く優しげな便を乘せて、操の立上らうとする時前に流れて來た。

ゆくりなく操は目を止めた。見覺えのある金茶の色に、隈の紫模樣、昨日小鈴が涙を拭つたそれと見るより、思はず手に取ると、忽ち目に入る其筆の跡、

「あなたはあんまりひどい。」

操は思はず水上へ振返つた。小鈴はぢツと眸を凝らして居る。岸の榎に遮られて、操はそれと氣も付かぬ。

「操、操、」

同時に上で進の聲。つか〳〵と寄つて來た。操ははツとして急に手巾を押隱した。

「─操─」

肩の上の山吹を越して進の顏が見えた。心を殘して、詮方なしの返事と共に操は上つて行つた。

其後影、小鈴はこれを、二人の長い別れと竊かに思つた。

姿が見えなくなると、胸は俄かに塞がつて衝上げるやうに涙が沸いて來る。いつか俯向いて、すご〳〵歸掛けると、目もあやなく小石に躓いて、よろ〳〵と倒れようとした。生れて初めて、憂きといふ事を、犇と身に覺えたのであつた。

* * * * *

國府津まで見送る爲に、進は操と共に發つた。伯父と、二人に伴はれて、操は其朝菊菱の前を通つた時、中を窺いたが、小鈴は既、姉と、三人の抱妓と共に、客に連れられて箱根へ行つた後であつた。

其裏若い胸の中に、初めて音訪れて來た物の音は、此やうにして斷えようとする。「あなたはあんまりひどい。」故郷を離れると共に操は又思出した。

身を賣物の濁江の中に、小鈴は何時まで此儘で居られよう。國府津の彼方に、操は振返ると朝夕目に馴れた箱根の山は名殘を惜むやうに見えた。名殘、名殘、其名殘、其處には小鈴が、あこがれた眼に、此方の空を眺めて居たのであつたが、操は固より知らなかつた。

春宵

（上）

「叔母さん。」

と黄昏の勝手口に、未だ若い、嬌かしい聲、尤も近所をかねて、持前の甲高なのを殺して言つたので、中では聞逸らしたか、重ねて呼掛けて見たが、返事がない。

「おや居ないのか知ら。」

と口の中、伸上つて奥を透したが、いつまで躊躇ひもせず、其まゝ中へ入ると、身輕に臺所を上へ、未だ閉めてない引窓から、ちら〳〵と星の影が、暮初めた椽の端に、既瞬き出した下を、斜めに切つて右に竈、左に鼠不入、膳棚の最う暮の色に迫つて見える脇を、ほッそり柳腰、ひらりと袂の影を打つて、衝と茶の間へ入つて來た。

途端に次の間の隅、出窓の脇の、三尺仕切の押入の前に、何か片付物をして居た四十前後の、身嗜みの好い、色の淺黒い、扮装から小瀟洒した風の女、それと氣が付いて、振返つて襖を片手に中腰の身を捩向けた。

「おや、高ちやん。」

「あら、那樣處に居たの。」

と向直つて見返つた娘、言ふ間に逸早く傍へ來ると、早莞爾して其まゝ、

「早かつたらう。」

「其筈だわね。」

「厭よ。」

「何故さ。」

「知らない、又調戯はうと思つて。」

と立つたなり、少し身をくねらして、袂を返して、何と言ふ事はなく胸に押當てゝ、言知らずそは〳〵した様子。笑つて年上のは、手ばしこく片付物を濟まして、襖を閉めて立上ると、

「おや〳〵最う暗くなつて來たね。めツきり又日脚が伸びたと思つたに、何かして居ると待つてる間もありやアしないねえ。」

言ひ〳〵茶の間へ入つて來て、

「此方へお出でな。まアお坐り。今火を點けるから。」

言捨てゝ又、先刻お高の入つて來た板の間の方へ出て行つたが、小脇で洋燈を扱つて居る物音がすると、やがて彼方から、

「憚り。其處の自在をいつもの處へ掛けておくれな。」

「おや最う人を使ふの。」

「何だねえ。動き泣きをすると寄せ付けないよ。」

「おゝ恐い。」

と笑つて尻輕に立つ。ぱッと燈火が射して程もあらせず、

「御覧よ。此風變りの洋燈を。昨日冷かし過ぎてつい押付けられたんだがね。そら、いつも廻つて來る源さんにさ。彼の人は商ひが上手だねえ。」

部屋は六疊の間、脇に長火鉢を据ゑ、壁に寄せて中古の茶簞笥、上から三味線が一挺、久しく使はぬと見えて、棹に塵埃が溜つて居る。背後は押入、並んで佛壇、此方の柱の隅から繭玉が下つて、天井の眞中には蟲封じの御符が見えた。

年上のは此家の女房の、お定と言つて、其處等に氣さんじの噂の女、亭主は田舍廻りの吳服、それからそれと渡り歩いて、月の大方は留

守にして居る、子もなく厄介もない家、お定は一人暮しのやうな身を、然し氣樂にして過して居た。元は何であつたか、何處となし垢脱けがして、昔鳴いて居たと思はれる跡も見え、時とすると、恐ろしく下卑た言葉遣ひをする。見たところ一癖有りさうな、油斷のならぬ相好はして居るが、奥には別に惡氣のない、野暮らしい程の實も持つて居る。今の良人と一處になつたのは、二十八九からとか。いゝ加減世帶染みて、今は最う餘り自墮落にもして居ないのである。

お高は十七ばかり、力味の勝つた、涼しいぱッちりとした眼に、淡く描いたやうな眉、引締つた口、片笑靨、細面の色は白い方ではなかつた。襟の掛つた瓦斯の着物に、帶は小柳繻子、髪を結綿にして、黄八丈の前掛を締めて居た。

お定は佛壇に灯を供へて、其處等の片締りをして歸つて來ると、

「さア、これで何も彼も事濟みだ。」

と火鉢の前、重さうに鐵瓶を下して、下の火を覗き込んで、

「おや〳〵まア、何時の間にかすッかり消えて了つた。よくしたものさ。些少ばかり暖付いて來ると、直ぐに最う火がお留守になるわね。」

言ひ〳〵炭を加いで、跡の灰を直して居る。お高は後插を拔いて、首を傾げて、可愛らしく眉を寄せて痒さうに髻の下へ差入れたが、元へ直すと、

「本當よ。だが餘ッ程暖かになつたのね。今紺屋へ寄つて來たんだがね、此處まで少し急いで來ると、最う汗が出るんだもの。」

「然う。那樣に急いだの。」

とお定は意味あり氣に、

「矢ッ張急がせるものがあるとねえ。」

と顏を見る。お高は白ばくれて、微笑みながら、

「あゝ、早く叔母さんの顏を見ようと思つてね。」

「おや、憚りさま、お門違ひだよ。」

「あら本當よ。」

「おほゝゝ、何處を押しやア那樣音が出るだらう。其口の下から焦れないやうにおし。伊之さんは毎度遅いから。」

「始つたよ。又厭がらせをお言ひなんだらう。叔母さん。惡い病よ。」

お定は又笑つた。

「だつてお前、那樣事でも言はなけりやア埋らないぢやないか。つけ〳〵見せ付けられてばかり居るんだもの。」

「あら厭だ。叔母さん、那樣事を。」

「でも目にも餘らうぢやないか、焦らして一人で居たつて、打捨つて置きやア、直ぐに手ばなしだもの。」

「おやいつ私が……。」

「始ッ終さ。」

「まア可哀想に。」

「はいお茶。」

「おゝ吃驚した。」

「さまして召上れとさ。」

「おほゝゝ、厭だねえ。」

と出してくれた煎茶を一口、飲んで下に置くと、お定も相伴のやうに湯呑を取上げたが、

「時にと、今夜は無盡があるから私は構はず出掛けるよ。來たら伊之さんにね、確かり留守番をおしと言つておくれ。」

と立上る。お高は其涼しい眼に一寸張を見せて、

「あら、それぢや今私一人になるの。」

「淋しかア玩具を出さうか。」

笑つて態とらしく、

「一人になるとお化に喫べられて了ふわ。」

「おほゝゝ、お化は可かつたね。安心おし、出

るものは煤埃と鼠ばかりだよ。」
「鼠にも引かれるわ。」
けてね、御亭は違つたもんだね。那様事を言つて内々一八になりたがつて居る癖に。」
言ふ中に簞笥の上の角縞の半纏を引掛けて、持つものを持つて、やがて支度を濟ますと、近く來て、見下したまゝ、
「ぢや行つて來るよ。温順しくお留守をするんだよ。」
「おほゝゝ、お土産は。」
「おや厚顏ましい。氣を通して行つて遣るんぢやないか。默つて拜んで居るが可い。」
「でも今の中は留守番だらう。」
「まア、此子は、お剰錢を取る氣だよ。」
「おほゝゝ、育ちが悪いからねえ。」
「おほゝゝ、まアお樂み。」
言捨てゝ室を出る。前の襖を開けると横手に掃出し窓のある二階の上り口、跟いて送つて出たお高は、
「叔母さん、提灯は。」
「なに最うそちこちお月様が上るよ。」
と土間へ下りて、下駄の歯をからりと言はせると、振返つて、
「ぢやアね。」
とばかり、お高は障子に摑まつて、立ち身に輕く、
「行つてお出でなさい。」
お定は其まゝ出て行つた。表は宵の間の町を隔てゝ遠く賑かな人通り、月の上り前の東はぼうツと明るく、何處となし花の香が動いたと思ふと、風に連れてちら／＼と格子の中へ櫻が散込んで來た。障子を閉めて、お高は茶の間へ歸つて來ると、何といふ事はなく、今更のやうに其處等を見廻して、やがて又火鉢の前、待つ身の落付かず、立たうとして又坐つた。待つたが、急に來ない。
「辻占入り花林糖。」
と其時。

（中）

それと行違ひに、突掛け下駄の勢ひよく、がらり格子戸を開けて、飛込むやうにして入つて來た。
「今晩は。」
お高は言ふ迄もなく、それと胸を躍らしたが、態と返事もせず、急に素知らぬ風で、横を向いて澄し返つた。外のは拍子脱けの體で、一寸足を止めたが、いきなりづいと上つて、つか／＼と來て襖を引開けた。
「何だ。居るのか。人を馬鹿にして居やがる。」
笑つて入ると、其まゝ火鉢の向ふへ通つて、どツかり坐込んだ。切立ての、中橋の唐桟に八端の平絎、よろけ縞の同じ唐桟の半纏を引掛けて居た。髪を綺麗に分けた中肉の色の黒い、二十四五の職人風であつた。
「お定さんは。」
と直ぐに聞く、お高は初めて振返つてじろりと見ると、冷やかに、
「誰だえ。お前さんはお定さんに何の用なの。」
相手は氣を打つて、
「何だ。何うしたんだい。いきなりに變な事を言はれちやア面喰ふぢやねえか。」
「些少は面喰ふが可いよ。癖になるから。」
と言つて又態と、
「お前さんは誰だよ。」
「驚いたな。へい、私ア町内の若え者で、伊之助といふ、しがねえ奴でござえやす。何分宜敷願ひやすよ。へい。」
とお前立ちの狛犬といふ身で畏る。お高は笑ひもせず、
「然う、伊之助ッてえのはお前さんかい。私ア

那樣人ぢやアないと思つたよ。」
「へい、最う些少男が好かつたかね。」
「男前よりは實が有る筈だよ、さんざッぱら人を待たして置いて、今時分のそ〳〵來るやうな情無しぢやアないと思つて居たのさ。」
「解つた。其事か。突如だから見當が付かなかつたらうぢやねえか。勘忍しねえ。今出ようと思ふと、そら、新道の寅が來たんだ。」
「寅が來ようが、猫が來ようが、那樣事を私が知つた事ぢやアないやね。此方は正直に、先刻から馬鹿な顏をして待つて居るだらうぢやないか。伊之さん、氣の利いた按摩は最う三軒ばかり稼いだ時分だよ。」
「一言もねえ。不飾りだ。劈頭から然う浴びせられちやア、文句の出やうもねえぢやねえか。俺が先へ來て居る約束だつたから言ふ事ア出來ねえが、俺も那樣に待たせたつもりぢや無かつたんだ。」
「矢ッ張私を見くびり切つて居るからさ。」
「むゝ、今夜は甚く付けが荒えな。まア茶でも飲ませねえか。」
お高もはずみで言つたやうなものゝ、事實怒つて居るといふ程でもないから、其間に言葉を柔げて、
「察しるが可いやな。一人で待つて居ると、じれッたくッて、じれッたくッて、仕樣がありやしないぢやないか。」
と茶を注いで、猫板の上へ出す。
「解つたよ。最う可いやな。負けとけ。嬶ア大明神ッ。」
と茶碗を取つて、一息にぐいと仰飲つたが、
「熱つゝゝゝ。」
「おほゝゝ、いゝ氣味だ。」
「冗談ぢやねえ。ほう。」
と息を引いて、
「腹の底まで煑え込んだらうぢやねえか。」
「餘りまんがちだからさ。矢ッ張罰だわね、おほゝゝゝ。」
伊之助も苦笑ひ、
「いゝ面の皮だ。あゝ、未だひり〳〵する。」
と言つて、調子をかへて、
「時にお定さんは何うしたんだ。」
「無盡と言つて外したの。」
「むゝ、それでお前の一人天下といふんだの。」
「なに私ばかりぢやないよ。」
「何故。」
「お前といふものが有るぢやないかね。」
「はゝ、何の事た。甚麼に安くして居ながら。」
「あれ、何を安くするものかね。なんぼ私だつて、亭主は亭主と思つて居るわ。家に居る時だつて、私は最う娘の氣ぢやアありやしないよ。」
「うまく言ふぜ。」
と伊之助は上げ煙管、喫してぽんと拂くと、
「其氣で亭主風を吹かせうか。」
「おほゝ、今から世帶の稽古かえ。伊之さん、私はね。」
と持前の片笑靨に、
「お前は亭主になると屹度邪慳だらうと思ふよ。」
「馬鹿言つちやア可けねえ。邪慳處かい。いつも此通りだ。頭の上つた例はありやしねえぢやねえか。俺こそ然う思つてるんだ、同棲になつた日にやア、それこそ尻に敷かれ通しで、から最う意氣地のねえ事だらうと、本當よ。だが、それでも俺ア得心するつもりで居るんだ。」
「まア、可哀想に。私ア那樣風に見えるかねえ。私が甚麼に無考へでも嗜む處を嗜む位は知つて居るわね。お前私を那樣女だと思つてお出なの。」
「然うでなけりやア此上なしよ。だがお前は、

何故父俺を邪慳だなんて思つてるんだい。」
「でもね、外で調子の好い人は、内ぢやア甚くむづかしいツて言ふから。」
「へえ俺が、これでも調子が可いのかえ。」
「でも誰に向つてもいゝやうな事ばかり言つて居るぢやないか。」
「然うか。那樣事なら譯なしだ。これから無上に突慳貪にして遣らう。二言目にはぽかりと喰はせる。面白え。然うしてくれべい。」
「まア、那樣事をされて堪るものかね。」
「いゝや然うする。其方が甚麼に勝手が好いか知れねえや。やい。まご〳〵すると撲りのめすぞ。」
「おほゝゝゝ、それぢやア喧嘩腰だアね。」
「可いやい。默つてろい。」
「まア、手が付けられないよ。」
「なにい。」
と不意に立上る。
「何だねえ。急に氣の狂つたやうに、お止しよ最う。」
伊之助は何うするかと思ふと踵を返して、向うへ出て行つた。
「あれ何處へ行くの。」
「雪隱だ。」

「おや厭だ。おほゝゝゝ。早く行つてお出でよ。」
其まゝ伊之助は障子の外へ、後にお高は、流石逢瀬の嬉しさの、目色に動いて、際立つて晴やかに見えたが、只見ると、今伊之助が投出して行つた煙草入、木彫の虎の根附の着いた桟留の前提が、丁ど此方へ向いて口を開いて、煙草の隅から畳んだ紙の端が一寸見えた。お高は何心なく目を留めたが、膝行り寄つて手に取つて少し引出して見ると、文殻で、中は見覺えの女文字。

(下)

お駒と言つて、三年前まで同じ小學校の同じ處に、二三の席順を爭つて同じく通つて居た、隣町の棟梁の娘、相手はそれであつた。
急がはしく讀んで行く中に、お高の手はぶるぶると慄へ出した。顏は熱し、眼は光つて、思はず手紙を摑んですツくとなる。
中には近い頃の逢引の事が書いてあつた。
舌ツたるい、種々の事が添へてあつた。
屹度よ。屹度よ。といふやうな字は到る處に、後から腹の立つばかりの行を追つて、見捨てると聞かないよと留めてあつた。

縁を踏んで、何も知らず伊之助は歸つて來る。
障子越しに屹と其方を見返つたお高は、常から氣の勝つたやうな顏の、其時物凄いまでに見えたが、何と思つたか急に手紙を隱して、歯を喰ひしばつて押堪へるやうに、ぢツと面の色を包んで待つた。
障子が颯と開く。お高はぴたりと坐り直した。
伊之助は元の座に返つて、腰を下すと何心なく、
「おい、お前今夜は些少ア遲くなつても可いのか。」
お高は耳にも留めず、改つて、ひたと打向つた時は、既氣味の惡いほど落付返つて居た。
「伊之さん。今度は冗談で言ふのぢやないからね、お前さんも其氣で聞いておくんなさいよ。可いかい。私は今夜ツから、今夜もたつた今ツから、お前さんとは最う縁を切つて了ふから、其つもりで居ておくんなさい。」
「えッ。」
と伊之助は不意を喰つて、流石に氣色を變へて打目戍つたが、
「な、何を言ふんだい。戯るにも程があらア。切れるとは何の事だ。よせ、本氣ぢやあるめえな。譯を言はなくツちやア談話が出來ねえ。切

れるたア、な、何で切れるんだい。」

「おほゝゝ、那樣に恐い顏をおしでない。伊之さん、私は今、お前の煙草入の中にあつた手紙をね。」

と出して颯と擴けて、前に突附けようとする。

「なに、手紙ッ。」

思はず立掛る伊之。

「其處から御覽な。お駒さんのさ。不意と見付けたもんだから、つい皆讀んで了つたのさ。私も言ふ事はそりやア胸に持切れないほどあるけれどね、恁うなつては最う何も言はない。今更いがみ合つたつて始まらないから、綺麗に別れて了はうよ。切れた印に此手紙は貰つて置くよ。」

言ふなり立上つて行掛けた。伊之助は證據を出されてから、當座に詰つてまづい顏、少からずたじろいで見えたが、遮るやうにして其時、

「待ちねえ。それにやア譯が有るんだ。むゝ、入組んだ譯があるんだ。まア下に居て聞いてくれ。」

「何だねえ。未練らしい。お前の器量が下るばかりだよ。通しておくれ。歸るんだよ。」

とひらり身をかはすと、衝と通抜けて駈出した。

「おい、待たねえか。おい。」

と伊之助は跡を追つていきなり臂を伸ばしたが、屆かず、先へ拔けて、お高は既板の間を駈下りた。

「おい。お前は。」

と半ば言はせず、

「知らない。他人のお前に最う用はないよ。」

と敷居を外へ、言ふ間に水口の脇に立つと、

「さよなら。」

と前面を向いた儘、態とらしい元氣のいゝ聲で言つて、ふいと行つて了つた。

外は朧月で、未だ春の夜の人の行交ひ、見上げる向うの高みに、背後を見せて居る料理屋の二階から、入亂れて騷歌の聲が、崩れて下へ瀧のやうに落して來る。片側塀續きの下は空溝の處々草が生えて數町。

お高は一人になると、最う上の空、見えず、聞えず、何處へ來たのか、何處へ行くのか、何も知らず、地を踏鳴らして遮に無に前へ、駈けるやうにして行つた。畜生、人でなし、何うしたら、何うして遣つたら、と思ふは只其事のみ、波立つ胸に面は變じ、目は輝き、歯を喰ひしばつて夢中に行拔ける。下駄の前齒を折つたのも、袖を噛裂いたのも、櫛や簪を振落したのも、半ばうつゝで、人こそ無けれ、朧でこそあれ、亂れた姿を月に曝露しにして、物狂はしく先へと足に任せて行つた。途端に脇から、

「やい、お高ぢやねえか。ど、何處へ行くんだい。」

と慌しく呼止めたものがある。お高は吃驚して、俄かに我に返つたやうに急がはしく其方へ振返つた。間近に、月を浴びて、唐棧揃、腹掛に白木の三尺、四十恰好の、苦味走つた顏、思掛けない親父の金五郎であつた。

「あら、まア阿父樣。」

「何うしたんだい。え、おい、全で氣が違つたやうに、夢中になつてまア何處へ行からてえんだ。」

「此處は何處なの。」

「馬鹿、己が居る處も解らねえのかい。一體何うしたんだ。」

「私……私、今あの……。」

とお高は息のはずむのに、辛うじて紛らしながら、

「私、今其處で犬に追掛けられて、夢中で此方へ逃げて來たもんだから。」

と言つて今更のやうに胸を撫つて、

「あゝ恐かつた。私本當に何うしようかと思

つたわ。」
「何だ、俺ア何事が起つたかと思つたい。手前は又何たつて今頃其麼處をまごついて居るんだ。」
「え、何ね、先の紺屋へ行つた歸りに一寸お定さん處へ寄つてね、今其處から出て來た途中なの。本當に最う晩餐時になつて了ふかと思つたわ。」
「まア何うしよう、髮も這麼にし了つて、簪も何處へ落して來たんだらう。おや／＼下駄もまア。」
「ちよッ、縛られねえ目に遭やがつたな。まア可いや。怪我をしねえだけ目付け物だ。さア、一處に歸らうぜ。」
「阿父樣、お前は何處へ行つたの。」
と聽て立竦んで、帶を一搖り、むら／＼と又、波立つ胸をおッと押へて、心ならずも引添うて行く。何も知らず金五郎は、
「俺か。俺ア小山の旦那ん處から、一寸來てくれッて言ふ使で出掛けて行つたんだ。仕事の用と思つて行つて見ると、思掛けねえ談話よ、矢張お前の事だ。」
「え、私の事。」
「さア家へ行つてから緩くり話さうよ。」
「あれ、可いぢやないか此處だつても。何處で話したつて同じ事だわね。私の何なの。」
「だが往來中で言ふのも變だからな。」
「可いやね。誰も聞いて居やしまいし。」
「ちよッ面倒だ。むゝ、何よ。あのそれ新道の高岡さんな、高岡樣の。」
「あゝ、あの人が何うしたの。」
「彼處の若旦那がな、お前を嫁に欲しいッてえんだ。」
「えゝッ。」
お高は目を睜つたが、然し顏を赧めはしなかつた。
「と言ふ小山の旦那の談話なんだ。冗談ぢやねえ、先は何萬ッて言ふ身代だ。なア、此方はお前、引張つたつて高の知れた植木屋だ。何うした氣紛れに吹込んで來たかは知らねえが、付けもねえ、全で談話のやうぢやねえか。段々聞きやア、それも若旦那が何でもッて言ふ意氣込みで、親旦那を説付けたッて言ふんだから、一通りは斷つたとは言ふもんの、然し俺ア不承知だ。お見立てで有難えと言ひてえが、俺ア些少も有難かアねえ。何だつてお前、高岡の旦那が彼迄に仕上げた、其本を洗つて見ねえ。人の面ア冠つた奴の出來る仕事ぢやねえぢやねえか。」
お高は默つて耳を傾けて居た。金五郎は見も遣らず、片側に掛つた突掛草履の片方を其儘、月下に黙然として、
「植木屋の金五郎は、土地に生れて四十年からして居るが、憚りながら[illegible]ちやア潰つて來ねえ。べらぼうめ、男を見損やがつたかい。」
と言つて少し腰を折つて、
「とは思つたが、義理のある小山の旦那の前だ、餘り向見ずな事も言へねえから、た、頼んでも私にねえ事でえす、何しろ釣合はねえ取組で、私にやア飲込めねえが、然しよくまア考へた上で又、と言ふやうな事にして歸つて來たんだ。」
「…………。」
「なア、手前も俺の子だ。よもや那麼處へ目のくれる女ぢやあるめえ。解つてらア、なア、一も二もあつた談話ぢやねえ。」
お高は稍暫く言ひかねたやうに見えたが、思切つて、
「阿父さん、でも若旦那には罪はないだらう。」
聞きも敢ず、矢庭に振向いた金五郎の眼はぎらりと光つた。
「な、何だと。」
お高は其時決然とした面持で、
「阿父さん、時々家の盆栽物を見に入らつしや

るので、私はあの方をよく知つて居るよ。先が本當なら私嫁く氣だわ。」

「這畜生、な、何を言やがるんでえ。己ア那樣了簡を持つて居やアがるのか。呆返つた奴だ。さア、最う一度言つて見ろ、己、只は置かねえぞ。」

「あれ、何だねえ。いくら人が居ない處だつてまア靜かにおしな。阿父さん、私も言ふ事があるから家へ歸つてよく聞いて貰はう。」

「聞かうとも聞かなくツてよ。俺もみツしり言はにやアならねえ。さア、早く來い。」

「行くわね、そんなに急がなくツたつて。」

「來やがれ。えゝ、さツさと歩かねえかい。」

「おほゝゝ、何も那樣に怒らなくツても可いわ。」

路は坂になつて其處から振返ると、左手に月を迎へて、巍然とした其高岡の一構、月にも侘しげな伊之助の家の軒の傾いた影も見えた。お高はぢツと見て、振仰いで又親父の顏を見上げたが何も言はなかつた。櫻の多い山の手の、西も東も花の香取籠められた中を、親子は二人、坂を彼方へ、やがて物蔭に消込んで了つた。

ゆふだすき

（一）

いや、驚いたよ君、何ものほほんで歩いて居た譯ぢやなかッたが、不意に横ッ手から、
「あら、まア、梅原さんぢやアありませんの。」
と甲の高い、調子の走ッた、化生の者の叫び聲だ。何者と振返ッて見ると、銀鼠の頭巾を深く黒のコートに羽衣ショール、粋と鎧ッて居るのだから、正味は解らなかッたが、しやなりとした姿から最う、只者ではない。見たやうだが、思出せないで居ると、向うは馴れ〳〵しく、
「まア、お珍らしいぢやアありませんか。」
と近く、ぱッちりとした涼しい眼でぢッと見る。此方は少からず狼狽いた形、變な調子で、
「失禮だが誰方だッたか……。」
「あら、お忘れなすッたの。實が無いのねえ。私は彼の下谷の若狭屋に居ました時分……。」
「むゝ、今ちやんか。」
「おほゝゝ、昔の名を仰有ると恥かしうござんすわ。」
「や、然うだッたかい。樣子が變ッて了ッたから、すッかり見違へたよ。」
實に樣子ばかりぢやない、何から何まで變ッて了ッたのだから、見違へる方が至當だ。僕がそれや、彼の時には君にも苦い異見を喰ッたが、お笑ひ草さ、例の小房ね、彼女と一つ家に抱妓で居た、其時分は小今と言ッた女だ。古い談話で、何しろ最う一昔前、今ぢや夢さへも見た事がない。跡形もなく忘れて居たのが不意に清臕出幕になッたので、何だか妙な心持になッたが、併し斯う廻遇ッた處で、何うの斯うのといふ仲ぢやないのだから、其儘別れる氣で、當座の挨拶をして居ると、
「矢張し氣が差したんですね。今日は朝ッから、何だか嬉しい事が有るやうな心持がしてならなかッたんですが、此處で突如にお目に掛られようとは思ひもしませんでしたわ。本當に何年振でせう。でも思ひは屆くものですねえ。」
と斯うだ。妙な事を言ふとは思ッたが、寄らず障らず、
「いや全く此處で遇はうとは思掛けなかッたよ。不思議な處で珍らしい人に遇ッたもんだね。」
と言ッて、別に人目もなかッたから、
「今ぢや何處の奧樣だね。」
と態と言ッた。すると譯もなく笑出して、
「おほゝゝ、這麼で奧樣に見えますかね。生憎と未だ獨り者よ。」
「はて、何う間違ッたのだ。其樣子で獨り者なぞとは、勿體なさ過ぎて本當にされないぢやないか。」
「まア、いゝやうな事を仰有ること。それはね、相手は降るほど有りは有りますけれどもね……。」
「ふむ、餘りお高いんで……。」
「とでもして置きませうか。未だ御存じない中は、何とでも言ッて置けますからね。おほゝゝほ。まア、それはそれとして、あの不意に這麼事を言ふのも何ですけれど、實は貴方には、種々とお談話もしお願ひもしたい事が前から有るのですが、何うでせう御迷惑でも一寸、宅へお寄りなすッて下さる譯には參りますまいか。あの、つい此先なんですが。」
「え、家へ。」

と何だか樣子が知れぬから、流石に少し躊躇した。それと見て取ッたか直ぐに、
「なに些少もお心遣ひの要るやうな家ぢやありませんの。外にお差合ひも何にもありません。貴方、本當に後生ですが……。」
「だが私に何の用だね。」
「まア、那樣事を仰有らないで、お馴染甲斐に一寸ねえ、あら、何を考へていらッしやるの。」
「なにそりや、幸ひ用もないんだから、寄るには寄ッても可いがね……。」
と少しは好奇心も先に立ッた。相手は舌を置かず、
「まア、有難い事。本當に、這麼嬉しい事はありませんわ。何しろ路中でお談話も出來ません。それぢや御案内を致しませう。さア入らしッて下さいまし。」
といそ〳〵先に立つ。何だか譯が解らない。少々魅まれの姿ぢやあッたが、丁度身體は明いて居たし、内々面白づくが手傳ッて、何も談話の種位の氣で、一處に出掛けたと思ひたまへ。
何でも五六町、只有る新開へ入ッて、二度ばかり曲ッたと思ふと、未だ眞新らしい門構への、庭を小廣く、手の入ッた植込を越して、奧に氣の利いた二階家が見える。其處だ。表の標札に大川いま。
見た處で恁ういふ向きの住居とは思はれぬ。それも案外だ。さては被圍だな、と早合點に見渡した途端、
「此處でございますよ。本當に汚穢しい處で。」
「や、恐入ッた。大方這麼始末だらうとは思ッたが、大分いゝ者を捉まへて居るね。」
「あら那樣のぢやアないのですよ。これでも今度、自分で買ッて入ッたのですよ。」
「ふむ、自分で、と言ふと?」
「おほゝゝ。まア、お話申しますからお入りなすッて。」
潛門を開けると、花崗の短册石に、左右を敷松葉、掃除が届いて、塵一つない。
ばら〳〵と出迎へに來た十三ばかりの小婢と、三十一二の見苦しからぬ女中、
「お歸りなさいまし。」
續いて、
「お歸りなさいまし。」
此方は心易げに、輕く、
「はい只今。あの、お客樣をお連申したよ。」
と振返ッて僕に、
「さア、何うぞ此方へ。」
少々處か、いよ〳〵魅されの姿になッて來た。
玄關、中の間、座敷の模樣全く不相應な普請の態に、猶更不思議立ッて兎もあれ導かれるまゝに座に着くと、やがて上の物を脱捨てゝ來たお今は、座敷へ入るから既走込むやうにして、
「本當に能く入らしッて下すッた事。いゝえねえ、這麼時が何うかしたら來る事があるだらうかと當にしないやうにしてもつい當にして居たのですが、恁うして思掛けなく來て戴かれる事にならうとは、全く思ッて居ませんでしたの。貴方は御存じありますまいけれど、私最ら、這麼嬉しい事はありませんわ。」
見ると裁下しの黑縮緬の羽織に、深川鼠の縞御召の小袖、銀杏返しに薄化粧して、年は三つ四つも若く、何處となく垢拔けのしたのに、昔の影を殘しては居るが、見馴れた其頃の俤とは、さながら別の人のやうに變ッて居る。
何れにしても腑に落ちないので、
「併し私には何だか全で了解めないね。」
「おや何がえ。」
とお今は先づ微笑みながら訊く。
何がと言ッて、何から何まで解らないづくめ

だ。第一まアお今さんの今の身からして全で讀めないね。」
「おほゝゝ、まア何に見えませう。」
「然うさね、神吏一氣でもなしと言ッた處で此の體だらう。そりや主のあるには決まッちゃア居るが……。」
「あら、先刻も獨り者だと言ッたぢやありませんか。」
「むゝ、然う言はれると猶の事だ。何だか野暮の事を訊くやうだが、全體今何をしてお出だね。」
「遊んで居ますのさ。御覽の通りで。」
「はてね、そして。」
「それッきりなの。何も有りはしませんわ。」
「さアいよ〳〵解らないね。」
「何もむつかしい事は有りはしますまい。兎に角恁うして暮して居るんですもの。これでも御覽なさるよりは生帳面ですよ。そりやア泥水上りにしちゃ可哀想な位で。おほゝゝ。」
「解らない。矢張り解らない。」
「おほゝゝ、大層氣になさるのねえ、居心がお惡いやうなら申しますがね、正は最う後家さんで……。」
「むゝ、少し當りが付き出したね。」
「今ぢや元の素人ですの。お差障りはないのですから、其處だけは御安心なすッて下さい。おほゝゝ。」
「なに、然ういふ譯なら、有ッた處で仔細はない。むゝ、それぢや疾うに足を洗ッて了ッたのだね。併し折角然うなッたに、餘り早い別れやうぢやないかね。今の若さに何といふ事だらう。様子は知らないが、お氣の毒の事だね。」
「はい、まア然う仰有られて見れば那樣ものですけれど、なに、然うまで思合ッた仲ぢやなし、言はゞお互ひの便利で同棲になッた人なんです、いゝ鹽梅に仕事が當ッて、めき〳〵儲けたのを其儘で殘して逝ッてくれたのですから、お蔭は、十分に受けて居ますがね、なに、亡くなる時にも、外にくれて遣る先もないから、殘らず貴樣に讓ッて遣る。無理に俺ん處へ來た埋合せに、これから浮氣の仕放題をしろ。何うせ又、濡れ手で掴んだ泡沫錢だ。遣へるだけ面白く遣つて見ろ。と恁う言ッて逝ッた位なんです。一昨年ですよ。臺灣熱でね、急に取られて了ッたのです。貴方、私は臺灣までも流れて行ッたんですよ。此方へ舞戻ッて來たのはつい此頃の事です。」
「それぢや其迄の間には、隨分面白い芝居も打ッた事だらうね。」
「はア、そりや種々な風にも吹かれましたよ。何しろ最う十年越しですからね。」
「むゝ、譯のありたけ仕盡してかね。」
「おほゝゝ、飛んだお綱ですね、なに、氣の利いた事は一つだッて有りやしませんよ。御覽なさい。未だに恁う遣ッて一人ぼッちで居る位ですもの。」
「では最う跡釜を探して居るといふのかね。」
「いえ最う其方は澤山ですから……。」
「當分お休みかね。」
「さア、昨日までは然うでしたがね……。」
「先は請合はれないのかい。や、油斷がならない。」
「本當に御用心なさいよ。おほゝゝ。」
「はゝゝ、なに、此方には那樣心配はないから安心さ。」
と這麼事にはなッたが、全體何で此處へ招かれたのか、其方は未だ一向に解らない。僕は只旗色を見て居たのだ。

（二）

其中に酒が出る。肴は並ぶ。何か手を盡した事

で、一寸は歸れないやうな始末になツて來た。それにしても、何を言はれるのか、様子が更に知れないので、それとなく切ッ掛けを待ツて居ると、お今は其中に稍改まツた形で、

「まア、何からお話し申しませうね。」

と少し考へて居るやうに見えたが、

「貴方も御存じの通り、以前の商賣にも不向な位でしたから、這麼時に巧く譯なしに出て來ないから困るんですよ。なにね、厚顔しい段に掛けちやア、相應に場數も踏んで來たんですから、隨分阿婆擂れの氣ぢやア居るんですけれど、何うかすると地金が出て來るもんですからねえ……。」

と何か怪しく言惡い様子で、不意に、

「まア最一つ戴きませう。」

と進んで盃を受けて、其儘衝と干した。此方を見て、笑ひながら、

「何だか酷くむつかしいやうだね。」

「ほア、一寸出やうがないもんですからね。」

「むゝ、全體何の事だい。」

「待ツていらツしやいよ。急かれちや猶仕様がありませんわ。おほゝゝ、何だか生娘のやうに、極り惡いから可笑しいぢやありませんか。」

と言ッて急に投出したやうに、

「馬鹿々々しい、這麼事におこついて何うなりませう。恁うして燒継だらけの身體でもツて、那様お人柄な事を言はれた義理ぢやありませんね。面倒ですから最う、色を付けないで露出しに言ツて了ひませう。」

「むゝ、何だか口上が馬鹿に長いが、全體これから何うしようと言ふのだね。」

「これから貴方を口説かうと言ふのですよ。」

「なに、口説く？」

「はア、飛んだお談話でせう。」

「然うさね、何う間違ッたか知らないが、此方にやとんと支度がないのだから、何とも挨拶の仕様がないね。」

「ですから取付きやうがないので、這麼にうぢついて居るぢやありませんか。」

「第一口説かれる覺えがないからね。」

「おほゝゝ、でも此方に覺えがあるんですもの。仕様がありませんね。」

「はゝゝ、冗談ぢやない、調戯ひやうが些少くど過ぎるね。」

「あれ、本當なんですよ、これでも。」

「最ういゝ加減にしないかい。馬鹿々々しくツて談話にもならないぢやないか、いくら火移りが早いと言ッたからツて、昔は只の見知り越、今の先不意と逢ッて、未だ、久し振の挨拶さへ切れない中に、餘り手輕過ぎて、其方の御了簡方が積られるやうな話だ。まさかに那樣安ッぽいのでも無からうと思ふが、餘り嘘付けられると此方もつい言ひたくならうぢやないかね。」

と笑ひに紛らしながら、少し突込んで言ッて見た。聞くと居住居から、何も冗談でないやうな風で、

「然うでせう、そちらぢや御存じない事ですから、然うお思ひなさるのも御無理はありません。ですが貴方、此事は、昨日や今日に始まッたのぢやないのですよ。今になツて這麼事を言ふと、取ッて付けたやうにもお思ひなさるでせう。身體はさん〴〵に持崩して了ッて、勝手な時に這麼事を言はれた義理ぢやないのですけれど、可哀想だと思ッて下さい、これでもねえ、彼の時十六の、未だ何も知らない時分から、恁うして思込んで未だ忘れずに居るのです、折がなかッたし、縁がなかッたので、打明ける間もなくッて居る中に、何うでせう、貴方、最う一昔になッて了ひましたわ。」

と何か知らず俯向いた。最う口先ではなくたツて來たので、流石に又焦いたが、言はれるほど猶更に了解めない。

「むゝ、變な、思ひも付かない事になツて來たぜ。譯は解らないが兎も角承らう。今も言ツた通り、覺えのない事だから、何とも御返事は出來かねるがね、一體まア何うしたといふのだい。然うまで言ふからにはまさか冗談ではあるまいがね。」

「冗談處ですか……冗談なら貴方、もツと氣の利いた言ひやうが有りますわね。本當に先刻お目に掛つた時は、あゝ未だ縁が盡きなかツたかと、心ぢやそれこそ手を合はさないばツかりでした。來て下さると仰有ツた時、これを機に、とてもと胸に思ツて居た事を、出來るなら何うかして、と直ぐに思付きはしましたものゝ、お目に掛ツた今日が今日、最う、慫う言出されようとも思ツて居ませんでしたが、餘り長い事胸に疊ツて居たもんですから、つい堪へられないで口に出して了ひました。貴方、慫うなると愚に返ツてねえ、何だかわく〳〵するばかりで、思ふ事の十分一も全で言へませんの。笑ツて下さい。これで二十六ですよ。おまけに相應に鹽も踏んで來たのぢやありませんか、何だか焦れツたくて癇癪が起ツて來さうですわ。」

「だがね、其方ぢやまア然うでもあらうがね、聞く身の此方ぢやア全で初耳だからね、いきなり然う無暗に浴せ掛けられちやア、面喰ふばかりで全で始末が付かないさ。考へなくツても知れて居る。全で此方の氣も知らないで、だしぬけに那樣事を言出すのは、餘り醉興が強過ぎるぢやないか。」

お今は其儘にぢツと見たが、

「あゝ、貴方は私がほんの浮氣で這麼事を言ツて居ると思ツていらツしやるのですね。」

「よしんば、然うでないにした處がさ。」

「そんなら最う少し身を入れて下さるだらうに、いくら這麼身だからと言ツて、貴方も又餘りですわ。」

「まア何方にしろさ、てんで本當にはされないぢやないかね。」

「いゝえ、そりや御無理とは言ひませんよ。何うせそれは然うでせうけれど、些少は、些少だけでも此方の氣が知れさうなもんだのに、矢張り思ひやうが足りないのかしら。」

「むゝ、仰有る事は大分殊勝だがね。」

「貴方、何うしたら可ござんせう。」

「然うさ。まアいゝ加減に笑ツて了ふのだね。」

「まア、何故然うでせう。最う浮かれてお談話をしては居ない積りですが、まさか底に工みでもあるやうにはお取りなさいますまい。」

「なに、那樣事より、實は頭から全で解らないのだよ。」

「ですから、最初から今初まツた事ぢやないと言ツたではありませんか。それでなくて這麼事が、なんぼ何でも遇ツたばかりで言はれるもんですか。何の、出來心なら貴方、這麼冷語な氣を揉まないでも、何處にでも好きな者が選取りのやうに轉がツて居ようではありませんか。爲ようと思ツたら那樣事に不自由をする身ではありません。」

「勿論然うと、言ふがものはない。何も物好きに、這麼處へお鉢を廻して來るには當らないと思ふ。何か以前からとかお言ひだツたが、これと取留めた談話すらした事のない私に、何うの慫うのといふそれからして解らないぢやないかね。」

「それですよ、今から言ふと可笑しいやうですがね、最初お面識になツた時から、貴方は最う人の物、手を出す事も出來はしませんでしたし、羨ましいとは思ツても、那樣方の氣は出もしませんでしたが、忘れもしません彼の房ちやんの

亡くなツた晩私も見舞ひに行合はして居ましたが、彼の時貴方が枕元で、臨終の房ちやんに仰有ツたお言葉を聞いてからの事なんです。あゝ、思合ツたとは言ひながら、然うまで眞實の方があるものかと、涙が溢れるやうに眞から身に染みましたが、あれから以來自分でも何うかしたのかと思ふやうに、貴方の事を思はない日はなかツたのです。それは最う本當に自分でも抑へきれないで居たのですが、場合が場合で、それに未だ十六になツたばかりのずぶ子供で居た時なんでせう、一人で氣ばかり揉んで居る中に、貴方は最う遠くなツてお了ひなさる、私は濱の方へ行ツて了ふやうな事になツて、それから先は、自分で自由にならない身で、彼方へ縛られ、此方へ縛られて、到頭今までお目に掛れなかツたのですもの、覺えが無いと仰有るのも御至當で、此方には又、無理にも強く出られない引け身があるのですから、本當に何うしたらば、此事が、貴方のお肚に入るやうに出來るだらうかと、實は先刻からそればツかりに氣を盡して居るのです。」

「むゝ、まアそれにした處がさ、大抵最う黴が生えるまで、一途に那樣事を思ツて居る筈でもなからうぢやないか。知らないで言ふのも不躾だが、それからこれまでには、那樣事よりはもツと實のある面白い遣入れが何の位あツたか知れないと思ふがね。」

「はア、それは最う何も隱すには當らないから申しますが、隨分浮氣も仕盡しましたから、思ツたよりは種々な目にも遇ひました。けれども其度に思出されるのは貴方の事ばかり、貴方だツたら然うぢやあるまい、あゝ、這麼に焦躁りながら何故然う貴方に遠くばかりなツて行く事だらうといつも思はない事はないのです。と然ういふと何だか、勝手な事を言ツて居るやうに聞えますが、あゝ何うしたら私の眞の心を言ツて見る事が出來るでせうねえ。」

變ぢやないか。これまで類のないのにも隨分出遇ツたが、未だ這麼目に遇ツた事はない。冗談には應答ツて居ながら、先刻から見て居ると、何も飾ツて居ない確かな影が何處にも動いて居る。此處に至ツて稍退避がざるを得ないのだ。

それとはなしに、

「そこで結局、何うしようと言ふのだね。」

「まア、何をお聞きなさるの。解ツて居るぢやありませんか。お察しなさいよ。」

と言ツて不意と見て、

「ですが然う言ツたら、嘸厚顏ましいやうにお思ひなさるでせうね。」

「はゝゝ、酷く又其方を遠慮するぢやないかね。なアに、今更那樣事を洗立てした處が仕樣があるものか。」

「あら、本當に。」

「だが返事には少し狼狽くよ。」

「だからさ、察して下さいと言ふのですわね。」

「まアさ、それにしてもさ、些少は此方の了簡も見据ゑるが可いぢやないか。何しろ些少向不見だぜ。第一那樣事を言出すには、相手の氣心を最う少し知ツてからにするが可いぢやないか。私が今甚麼に解ツて居るか知りもしないで、那樣安價で思切ツて卸して了ツて雅んだ器量を下げたら何うするのだ。」

「いゝえ、それは外の人になら、何で這麼事を言ふものですか。貴方にだからこそ何も最う考へないで言ふのですわ。それは私のやうな這麼者ですけれど、誰にもこれまで、此方から手を下げた事はありはしません。思込んだ弱身といふものは這麼ものだらうかと、自分ながら口惜しくもなる位ですもの。いゝえ、正味を言ひますがね、餘り此方の氣を汲んで下さらないと、實の處腹が立つやうな氣にもなるのですわ。いゝ加減最う目は見えないんですからねえ。」

「なに、此方だツて浮氣で行くなら文句はないのだ。二つ返事でお辭儀は不躾、御意は好しさ、何の事はありやしないがね、最う那樣上つツた方は、今ぢや全で氣がなくなツて居るからね、一寸融通がむづかしいのさね。なんなら異見の一つも樣子によツちやア言ひたい位に、疾うから質實になり切ツて居るのだからねえ。」

「それこそ猶更ですわ、私の願ふのも最う、那樣空ッ調子で行かれる事ぢやないんですもの。」

「ふむ、それも一つ聞いて置から。」

「はア、聞いて戴きませう。ですが貴方、私がねえ、若しか願ひが叶ツたら、此先何うするとまア思ツていらツしやるの。」

「解るものかね、それが解る位なら、這麼餘計な口を利いて居るものかね。」

「おほゝゝ、まア、それから先へ言ふのでしたわね。」

「はゝゝ、何だか獨りで了解んで居るぜ。性が知れないだけに氣味が惡いね。併し兎も角地道に聞から。で何うするといふのだね。」

「聞いて下さい、私はね、假令此思ひが此儘届いたからと言ツて、全で其上の慾は何も有りはしないのです。貴方も勿論最うお一人の身ではお有んなさるまいし、外にお樂みの方もないとは思ツて居もしません。其中へまア割込んで、無理な願ひを押付けにするのですもの、それも這麼身でなかツたなら、何とか取りやうもあるでせうけれど、今更何が言はれませう。貴方、此場になツて這麼事を言ツたら何う又お思ひなさるかは知りませんが、私はこれまでに、それこそ數ばかりは掛けましたが、眞から思込んで係らうと言ツたのは、遂に一度ありはしないのです。貴方の事を思出すのも只それなので、いつでもねえ、たゞの一日でもいゝから、何うかして貴方のやうな方に一言優しい事を言はれて見たいと、それなのです、今の願ひも只それなのです、同棲にならうの、一人占めにしようのと、那樣大それた事を何思ひますものか。樣子が何うの氣前が何うのと、那樣事も最う通過ぎた昔で、只最う今迄一度も受けた事のない人の眞實を、一度は身に受けて見たいばかりなのです。あゝ何だか理に落ちて、お聞きなさるのも厭におなりでせう。自分ながらも愚癡ッぽくなツて、言ふ事が皆これですもの。平素は這麼私でもないのですが、何うしたのでせう、何を言ツて居るのか解らないやうな事がありますわ。」

ぢツと其儘に眼を着けて居た儘は、其時思はず知らず、

「最う可い。何も能く解ツた。それほどまでに思ツて居てくれたとは、聞くまで全く知らなかツたよ。併し此私が那樣に思込んで居るほどの者だか、何うだか、請合ふ事は少しむづかしい談話だ。」

「いゝえそれは最う、何と仰有ツたツて聞くのぢやありません。それでなくツて誰が貴方、下谷の時から今迄も思續けて居られるものですか。」

「用心おし、間違ふぜ。」

「えゝ、那樣事なら何とでも仰有いまし。あゝ併しまア これだけ言ツたので安心しました。百分一でも私の心が通じたと思へば、最う昨日とは、心持が違ひますからね。さア最う一ツきり息を拔きませう。貴方、お一つ。」

と小盃、銚子を取りながら、

「貴方も併しお變りなすツたのねえ。此頃彼の土地へは。」

「最う一向さ。なに彼處ばかりぢやない。然ういふ方はとんと知らずに居る。」

「何ですねえ。御卑怯た、お隱しなさるだけ罪が深いわ。」

「はゝ、それ處か。此頃は後生願ひだ。だから今の談話だツて内々珠數を繰ツて聞いて居た位だ。」
「おほゝゝ、那樣珠數なら、いつでも切ツて見せますわ。」
「や、恐ろしい。まア精々お手柔かに願はうよ。」
「呆れますね。那樣風ぢやア、全で本當の事は仰有いますまいね。」
「何をさ。」
「お佯惚けなさるな。それだから先刻も、人が一生懸命になツて居る傍から、那麼事ばかり言ツていらしツたのだわ、憎らしい。」
「はゝ、那樣に氣が付いて居るのなら、彼の時何とか言ツて敎へてくれるが可い。此方は何も知らないから、まごつきながら間の拔けた返事ばかりして居たのだ。」
「仰有いよ。本當に人の惡い。」
「はゝ、這麼事ばかり言ツて居れば罪はないが、何しろ今日は思ひも付かない事で、何だか恁う昔の夢を見て居るやうな氣持がする。全くね、何處で誰に遇ふか解らないもんだね。」
「其上飛んでもない事を言はれたんですもの。ですが、偶には這麼目にもお遇ひなさるのが可いのですよ。平素の罪滅しにね。」
「はゝ、這麼罪滅しならいくらあツても可いね。」
「おほゝゝ、宜しければいくらでも持合はして居ますから。」
「では腹一杯にまア頂戴して見ようか。意地の汚い處で。」
「那樣事を仰有ると又持出しますよ。今度は最う、はぐらかしだけぢや聞きやアしませんから、其積りで些少は御用心をしてお置きなさいまし。」
「や、又續け打ちか、今度は最う討死だ。」
「巧い事を。何うして手に負へるもんですか。間際へ行ツたら、又逃げられるは決ツて居ますわ。」
「なに、いつまでも那樣逃げを張ツて居られるものか。第一其方樣が承知が出來まいと思ふがね。」
「あれ、私が最う、何う聞いたツて仕樣がありますものか。殘ツて居るのは貴方の御挨拶だけぢやありませんか。」
「むゝ、それぢや若し、聞かなかツたとしたら何うするね、綺麗に笑ツて了ツてくれるかね。」
「まア、貴方は那樣に譯なしに見ていらツしやるの。聞かれなかツたらそれまでで引下れるやうな、那樣根の淺いのぢやないのですよ。貴方、口でかう言ひますけれど、恁うまで十年越し思ひ續けて、何う思切る事が出來ませうか。勝手なやうですが、察して下さいましと、言ツたのはそれなんです。」
「むゝ、併しこればかりは無理押し付けに出來る事ぢやない。何うでも又聞かれなかツた曉には……。」
「えゝツ、そ、そんなら貴方は……。」
「なにさ、なにさ、此方は未だ、何とも挨拶をしたのぢやないぢやないか。其曉は何うすると聞いて居るのだ。」
「まア、那樣事を聞いて何うなさるんです。」
「可いから考へだけを聞かして貰ひたい。さア何うする其時は。」
「なに、然うすりや此儘で。」
と無理に微笑むと見せて、沈んだ影を眼縁に隱したが、
「死ぬまで片思ひで居るばかりですわね。」
「むゝ。」
と俊は稍行詰ツた形で、思はず目を下にした。途端に耳を打ツて、さながら思入ツた聲音に、

「あゝ貴方、本當に最う、何處まで人をお苦め
なさるの。」
時の拍子であツたか何か知らぬが、僕は此時、謂
ふ事の出來ぬ心地を覺えた。敢て其懷嬌の目眩
が、僕の胸燈の下に恐ろしい力を持つ那樣方の
肌合のものぢやない。顏を見合せたが、最う冗
談口も利かれない氣になると、調子も妙に變ッ
て、
「可し、お前の心持は十分に腹へ入ッた。さア
それぢや、本氣になツて些少話合はう。」
「えツ、本當。」
と聲に迫ツて、躍立つ氣勢に、お今は眼を輝か
したが、何を言ふかと思ふと不意に、
「貴方、今日は最うお歸し申しませんよ。」

* * * * *

事情が通じまいと思ふから、有りの儘を君に話
したのだ。去年の春の事だがね、其處で些少妙
だが、久し振で上京して來た君に改めて僕の
妻を紹介する。此室へ連れて來るが、君今言ッ
た女がそれだよ。
待ちたまへ。恐らく僕も娶る筈で居た、桐原家
の令嬢の事を君は必ず何とか言ふだらう。地位
と言ひ、才藝と言ひ、殊に品性の上に何の缺點も
ない彼の人を捨てゝ、何で物好きに這麼古物を
拾ッたのか。兎に角にまア見てくれたまへ。首に枕胼
胝には絲道が着いて居るだらう。
もあるだらうがね、談話で想像したやうな女だ
か何うだか、見てゝ上で聞かうぢやないか。な
に、馬鹿な、何處に酔興で嫁を呼ぶ奴がある
ものか。

ふところ日記

(一)

東濱に物あり。嘗て名づけられて玉耕といふ。化して眉山となれる時、愚なる事太郎兵衛殿の黄牛の如し。三年この方物狂はしくも哲學を疑ひ、宗教を疑ひ、世を疑ひ、我を疑ひたりし果は、此肉と骨とを粉韲せむ事を思ひ、遂には了々の眞を見出し得ざる癇癪まぎれ、目に障るべき凡ての物を無法無徹に打破し盡して、強ひて快を呼ばむとしたる去年十二月末つかたなりけむ、突如として一道の光明に接したる其時此時、心機がらりと一轉して、思知らず十幾年ぶりの嬉しさに醉ひたりし其心を以て、冀はくは世に臨まむとするに、猶暫しの骨休めをとのみ又も旅せむ事を思立ちぬる三十一日の夜、おもひよらず二葉亭子の都門を出でむとして立寄れるに會して好き道連れを得たるを喜び、慌しく支度して、直ちに牛込の停車場に向ふ。大つごもりの事なれば、大路を埋めて沸くが如き群集の行通、空も醉ふべき燈火の星月夜、肩と肩との間を見せて、車上ひそかに我が市民のよき年を迎へむ事を念じつゝ、漸くにして停車場に着きたるは八時に近き頃なりき。目黒あたりに宿かりて、二葉亭子は其處にて静かに筆を執るべく、われは一夜を共にして、それより旅路に上らむ事を思ひ、折しも闇夜の外面は見えず、汽車の中に相對して、一是一非の談話の程もなく早く目黒と呼ぶ聲す。

此處等あたりの除夜はいと静かなり。家々は多く戸を鎖固めたれど流石に話聲の未だ其處彼處に聞ゆ。停車場前に出でて車を求むるに隻影なし。われは身輕の扮装なれども、二葉亭子は手に餘る荷物を携へたり、車夫の家を尋ねて頼みよれども應ぜず、せむ方なくて他の家に求むるに、漸くにして一人を傭得たり。我等の足は健やかなれば、提げたる荷を負はせて宿ある方へと案内さす。道いと暗し、車夫は醉ひたり、先立つ提燈の右に左に搖めくに、我が覺束なき限の足場を料り得ず、辿る〱大國家といふに入る事を得て、大けさなれど先づ無事でと腰を落着けたるも可笑し。酒を呼ぶに酒おもしろく、肴を呼ぶにそれもおもしろく、われは酒客の滿を引いて、笑うて行年を其茶室がかりの離亭に送りたりき。

明くれば元日の朝、屠蘇を運ばれておうと心付きたるほど無頓着に、年と共に酒を迎へて無事殊勝に一日を暮らし黄昏近く二葉亭子に送られて停車場に袂を分つに、何とも知らず別れの惜まるゝもわりなし。時は六時に近く、まことは汽車に乗後れて心に可笑しく輕車を飛ばせて直ちに目黒を出づ。月もなし、起きたる家もなし。二本榎あたり、門松竹の兩側に立並びて、注連にゆらめく幣のほの白き道を過ぐるに、行くものは唯我が車あるのみ。都會の元日の寢姿もよし。車夫よく走る。風を衝いて飛ぶ事少許にして、早く品川を望む。車を下りて停車場に入るに混雜いふべからず。水際立つたる人々のきほひや春や此夜や、俄かに正月のなだれに入りて少からず雜沓に降參して、辛うじて汽車に上るに、のがさじものと春は猶こゝまでも追來る。客の顔の多くは紅に、其舌の多くは滑らかに、態度もしどろに四邊いと騷がし。中に軀幹長大の外國人一人、笑はず動かず人を直視して憚らず。それもよし此もよし。近

くにたわいなく居眠る人も愛らしく、脇に油斷せぬながら續けざまに欠伸する人も愛らしく、行儀崩さずしをらしく腰掛けたる女性更に愛らしく、年玉なるべし未だ箱に入れたる玩具の蓋を開きて、幾度となく中を差覗く男の兒いよいよ愛らし。紋御召と西陣と、吾妻コート、フロックコート、香水の匂、蘭奢の薫、驛はいつか過ぎたれど都ぞ此室に殘りぬる。

（二）

門生二人、一を梨園生とし一を冒險生とす。一は焚火を供し、一は据風呂を斡旋する水蔭子が別墅に止まる事二日、下を流るゝ片瀬川を隔て、左手に江の島を望み、右手に鵠沼を望み、一帶の平砂茅が崎の方に遠く、馬入の注ぐ處、花水の盡くる處、高麗山は前に濃く、箱根足柄の衆黛は後に淡く、躍然として聳てる大山を先立てゝ、優如たり戚如たり盛如たる我が懷かしき富士は、其玲瓏たる姿を薄藍染めたる半天に懸けて雲の中帶ゆたかに引流したるに幾度か振仰がれて、三日の午後といふに一先づ相の南端を一周せばやと醉の醒むるを待ちて此處を出づ。龍口寺の下腰越の村、此處等も新暦の春を壽く松出でて、春着の新しく東京仕入の花簪して團子の如く粉をふける少女、頰冠りして道逢ふ若者、こゝにかしこに門に立ちて用も無げなる人々の多き中を過ぎて、早く七里が濱に出づ。波いと靜かなり。砂の上に打並ぶ船は皆胴の間に松立てゝ、船毎に記號の小旗を飜へす。行逢川のほとり、こゝに天幕を張りて傳道に從事する人あり。湯茶を供して行人の勞を扶く。野夫五六人、そを取卷きて說法を聞く。人の世のおもしろさよ、愛の力のおもしろさよ。と私かに基督といふ人の德を思ふに、心いよいよやすらかなり。坂の下は早く過ぎて笑聲多く羽根突く音の盛んなる長谷を東に逗子の方へと志すに、日なほ高ければ笹目が谷に天知子を訪ふ。主はしなく夕影子の東京より來れるに會す。主人と共に鼎坐して語る事時あり、一本高き西山の松の末だ黑まぬと思ふ間もなく、暮は近く前に開ける田園より迫りて、三人兩語の中に席上燈火を見るほどとなりぬ。今宵は逗子に泊るべしと前より思ひゐたれば、別れを告げて家僮に送られ、提灯の光をたよりて鎌倉の停車場に着く。汽車の内も外も甚だ淋し。某の士官と相對して默々として行く。逗子に下りたれど指すべき途を辨ぜず。人に問ひ闇を辿りて行く。日陰の茶屋といへる名の優しさに其處に宿ある[illegible]を思ひ、道程を聞けば十町ばかりといふに心忙しく其方へと急ぐ。川あり、田越川と云ふ。[illegible]水に添ひて山際かけたるよき道を歩むに、海は漸く遠くなりたるらしく、僅かに打寄する浪の音を聞く。崖に少しく松あれども暗くして、よく見え分かず。道やゝ高し。鐙摺といふ處は、こゝなるべしと思へども、波の光とたゞ黑きものあるのみ。行く事猶少許、左に燈火を見る。これを日蔭とす。此夜も亦酒に亂れたり。約束したる小說のはじめを書きさして、更けて臥床に入るに、はしなく都の諸友と相逢うて笑ひけるを夢みて、覺めて客舍の十疊の間に我と我が寢姿を見たる時、僅かなれども、流石に地を異にしたれば、其心いと濃やかなり。諸子恙無かれや。兄等が健康を祝して、明日は一盃を飲まむ。

（三）

四日早起。昨夜起草したる稿を繼ぐ事少時、別に私書二通を認めて、日高く宿を出づ。村松風は靜かに幹を吹きて、浪いと優しげに磯を打つ。空は晴れたり。見渡す島山は打霞みて、雲雀は高く上に鳴き連れて、さながら春の心地す。道は更によし。一帶の沿岸風色すべて佳なり、森戸

の川を渡るに、一帶松深く風情やさしき處、ここに明神の祠あり。千貫松とやらむ、昔ありしと聞けど、今は見ず。岩淵漸く盡し。既にして一帶高く出でたる長者が崎の上に出づ。風色更に佳なり。由井が濱、秋谷村が崎、七里が濱の波は玉を延べて、江の島山は寔に盆石を浮べたり。長井の荒崎は南に長く、天神が島は近く三浦が崎は遠く、蒼々十幾里、大島の煙は、ほのかに空をかすめて、伊豆の山脈は蜒々遙かに雲煙の間に出沒す。我が富士なるかな。いづく如何なる時にも處にも秀いよ〳〵秀に、從容迫らず麗はしけれども侮られず、靜かに扶桑の美を收めて高く雲表に傑出す。折しも淡靄かすかに裾を罩めて空の匂いと深し。我が富士なるかな。と獨り斷崖の上に立ちて、暫し去る事能はざりき。

大崩の下を過ぎ、浪打際を縫うて處定めず行く。十歩一景を生ず。風光至る處によし。既にして暫く田畔の間に入る。僧侶三四、年賀の贈物持たせて、各戸を廻るに遇ふ。前を行く男女に語らひ寄りて道を共にするにいとをかし。苫打つ竹を擔げて行くもの、魚籠肩に急來るもの、まだ正月の遊びありくもの、背負梯子を背後に焚木を積重ねて熊手さしかけて歸るもの、處を問へば此處を鷹名とかや。連の男我が爲に遠廻りして導きて又渚に出づ。鹿島といふは此處等あたりなるべし。白砂前に走り青松後を遶りて、いと麗かなる入江なり。海は凪ぎて鏡の如し。見渡す方は皆打烟りぬ。投網を手にしたる男三人、海中に立ちて、鰡の寄り來るを窺ふ。一群の士女、紅紫を交へて渚に立てり。眞砂を踏んで屈曲したる濱邊を徜徉く事少時、僅かなる鹽田を見る。鹽燒く煙もあらばと思へど、未だ閉したれば無し。空は霞渡りて浪いよ〳〵優なり。のどかに打語らうて徐歩長井の村に入る。連の男の酒を好むといふに、飲ませむと思ふ興深く強ひて酒亭に案内さす。土藏づくりの中二階に通されて、窓を開くに海其處もとに近し。丸裸なる漁家の兒群三十人ばかり、手に手に標繩を持ちて、地を打叩きつゝいふ。「出ーさいな、出さいな、出ないものはがにぐぞう。」と相追うて去る。

（四）

隣うて長井を出でたるをいつとも覺えず、端山繁山さりとも淺けれど、樹の間がくれの茅が軒端に竈の烟の立昇れる方を、むかし和田の義盛が生れし處ぞと聞きて、丸三つ引の旗風にこらわたりの野をも山をも打靡かせたる三浦の一黨が鎧爽かなりし當時を思ふに、村老既に記せず、行人更に顧みもせで行過ぐる山田の畔に、鴫一羽ちよろ〳〵駈けありく風情またあはれなり。古人こゝにあり。われ今こゝにあり。匆々七百年、縱令其人々は立つて、乾坤の上に挺んずべき大人物ならざりしにせよ、今將こゝに來る、多少の感慨たき事を得むや。傍への孤つ松に近寄れば、鴫驚きて飛ぶ。四面寂たり。行脚の僧一人、遠く山越しに行くを見る。侘しかりき。

既にして行々又海を見る。日は早く暮れむとす。堤防長く練絹の如き波を限れる水の江の際に出づ。島あり、波島といふ。右に荒崎を望み、左に黒崎を指す。夕日を洗ふ沖つ白波一簇しげき磯松の水に躍つて、空に飛べる、墨色太だ秀でたり。舟もなし。鳥もなし。臙脂を流す雲と波とそれも暫し、日は西に名殘の色をとゞめて、忽ちにして水のあなたに入る。

行暮れて宿かる頃や花の香を探るべき時にも處にもあらねば、道端に薔薇積みかけて、明日は房州に送らむとぞ立働ける男に問うて、外に宿なければ止むなくいぶせき家に泊る。主人は三崎に魚を求めて未だ歸來らず、酒待つ程に名

ばかりの庭に出づれば、暮煙近く島根を包みて、水の色心ゆくばかり美しきに、家に舟ありやと聞けば、ありといふ。名は何とか言ひけむ、家の子を呼寄せて舟を出さす。櫓拍子静かに漕て漕出づる波の上の心又なべてならず。煙波渺として、近きは黒く、遠きは白く、漁村の燈火二つ三つ松の樹の間にきらめけるあたり、炊煙一条の雲を吐きて僅に見え初むる星屑のそれも又よし、舟は揺々として浪を分けて行く。思ひぞ出づる癸巳の歳、日に清見潟に舟を浮べて、山と水と酒と月とに明くるを忘れたる事もありけるが、歳月流るゝが如し、我に聞えたる彼の酒好む老漁夫将何となりけむ。今も猶我が與へたる盃を銜みぬるや。はた死にけるにや。東西幾十里、此星同じく其家をも照らせども、と思へども甲斐なし。人の心の嬉しさよ。其歳七月、我吾妻に帰らむとするを送りて、涙を含んで興津の停車場に立ちける時、目をしばたゝきて旦那様、命があつたら又お目にかゝりませうぞ。私は取る年ぢや、これが永のお別れになるかも知んねえ。と巌の如き身を泣崩しける哀れさに、押して再會を約しけるが、汽車既に発するに、彼なほ去らず、走り來りて、旦那様よ、まめで御座れよう、と其聲今あるが如し。櫓聲僅かに聞くに堪へず、急に舟を漕戻して宿に歸る。老漁夫なほ念頭を去らず。酒を飲んで愁を消するに愁更に長し。あゝ彼と余の舟師ながら深き所縁もなき我を動かす事斯の如き一片の哀情或時吾膚の如きものあつて存せりき。原頭人目に墳墓を築く、彼なほ健やかなりや。去年沼津に赴きける時は、事多くして行くを果さず、此度こそは彼が家を叩きて、笑ふ時は赤児の如く、奮ふ時は野牛の如き彼に再び遇はむかな。と盃を捨てゝ眠る。夢は我を彼の浦に載せざりき。

（五）

幾度か寝覚勝ちに、夢より夢に入る事多く、日の影襖を洩るゝに驚き、跳起きて海を望むに、心なき雲幾重見渡す方を残りなく遮りて、波より外に何も見えず、風はならひに變りて、寝起の肌膚いと寒し。舟路を油壺に行かむとしたる心構へも此雲と風とに消されて、頭重ければ、連りに太白を引いて、其まゝ宿を出づ。起伏したる道を行く事少時、路傍に椿落ちて、いさゝ村竹、左右に繁き處を過ぎ、村を出でて畠に入り、畠を出でて小山に入る。藻屑を籠に盛りて背に負へる少女に遇ふこと數次、そを何にするぞと問へば、畠の中へ突捏ねまするといふ。一群又一群、我が足早ければ、皆遙かに後にして行くに、道にて逢ひけむ、行けども行けども沼津ありと聞きける方に出でず、人に問はばやと求むる折しも、十四ばかりの少女一人、例の藻屑を負うて脇の小徑より來る。手拭引冠りたれど、端より洩るゝ黒髪すぐれて艶やかに、瓜實顔の口元愛らしく、鼻筋通りて、黒味勝ち目の美しさ言はむ方なし。かゝる所に、はしたなくて斯かるものもありけるよ。と言葉を交はすに、初めは打驚きて、後には心よく打笑めるもをかし。親はと聞けば無しといふ。兄弟はと聞けば、それも無しといふ。いかなる身ぞと問へば、去年雙親を失ひて、又家を失ひ、生れし方を去りて、遠く此里の所縁に身を寄せけるとぞ。憐むべし薄倖の身、自ら薄命を說きて薄命を知らず、語りて後は笑顔に返るほど心足らぬ裏若さもあはれなり。妙齢の好女、此末何となるらむ。家の人々は善き人かと言へば、然なりと點頭く。幸ひなれかし。と竊かに見入りて、途を問ひて別るゝに、我振返れば、彼も亦振返る。一樹の緣、また會ふべき時ありやとのみ、互みの笑顔に打別れて道を下るに、面影なほ目の前にある心地する、優し。

漸くにして渡津に出づ。舟子我が來るを見て棹を突立てゝ待つ。三戸の濱を後に入江を横切りて、對岸近く小網代に着く。高きに登りて一たび振返れば、江は足元に三戸の崎黒崎荒崎皆歷々として指すべし。彼の少女と別れぬる松原近きあたり逸早く日に入るに、其人いづこと望めども見えず、我は處定めぬ旅客なり、明日は幾里をや隔つべき。日を重ぬる事漸く多く、相隔つる事いよ〳〵遠く、南伊豆に行き西駿河に出で、甲斐が根を廻りて、遂に都に歸らむに、いづれの日か、重ねて彼の目に殘る笑顔を見むとすらむ。京華事多し、我は長く汝を見る事能はざるべきか。と思廻らすに心を惹く事更に深し。いと寒ければ、酒ある家に就きて、手に一升を提げて、荒井の城址を尋ねつゝ行く。歩武數百、麥作り菜作る方を過ぎて、松林の中に入る。こゝに荒次郎の墓あり。太龍院殿云々といふ。嗚呼蓋世の勇士、其名は八州に震ひ、其力は萬夫に當りけるが、徑は荊棘に亂れて松籟たゞ昔の夢を吹く。寂淋しき塚の主や。いにし永正十三年なりけむ。油壺の波を紅にしける御身が末路も亦悲しかりき。時を隔つる事四百歲、こゝに來つて御身を弔ふ、契淺しとせむや。」花は無ければ、路傍の枝を折掛けて、一傾の酒を濺して出づ。松風颯たり。濤聲近く聞ゆ。此浪嘗て此人が矛を枕の夢にも通ひけむ。

（六）

徑は斷崖に窮まつて、こゝにも村松と浪の音の相爭へる方に、一基の墓あり。導寸義同の刻字を見る。左手に稍深き松林の中、一面平布の芝原あり。荒井の城址として殘るは此あたりのみ。松の露夕に落ちて、汐風枯草の上に吹渡らむ時、怨魂將いづこにさまよはむとすらむ。十二の要害九つの切所、勇士雲の如く、千駄の粟を積んで、籠城幾歲に及びけるが、滔々たる小田原勢、將は好漢北條新九郎入道早雲なり。勢の馳する處、命の歸する處、高が延鐵細工の劍いつの時にか折れざらむ。戰國敗餘の武人弓矢の意地も亦憐むべし。烏兎匆々、深仇なりし其人も逝き、其武も盡くる時あつて其國も亦滅びたり。あゝ當時の智や勇や略や術や血や劍や功や淚や、すべて朝雲暮煙に先立ちて、只今たゞ帝國大學用地と記したる木標のもとに、一文人の立てるあるのみ、北風凛として武山をおろし來る。むかし大中黑の征矢引絞つて櫻すかしの鏃を飛ばしける武士が鉢金さばきの蓬髮を吹拂へると、今しも一壺の酒を携へて目を遮るそれにこれに心を寄する我が袂を飜へすと、彼も一時なり、是も一時なり、時の戲れのあやしさよ。山河偏へに命長し、我將いかならむ。と遠く小田原の方を望んで感久しかりき、丘を下り、浪に添ひ、岩を跳越え、松に縋りて、危き崖下を行く事少時、巨巖浪を衝いて勢飛動せむずる根もとに出づ。かたへの稍平なる方に下立ち、岩の狹間に枯枝を積み、火を放ちて酒を煖む。都門色彩の中、一たび手を拍てば窈窕たるもの佳肴を捧げ、綽約たるもの美酒をすゝむるそれに比べて、落寞たる城址の下、沖の白帆を見る眼の友として、旅にしあれば椎の葉のそれも無ければ、柏の廣葉を折敷きたるを器に、手近に生へる紫海苔を自らなる潮に採み、袂の玉子を打添の下物としたるに自ら一段の好風流を許し、落散る色貝の美しきを盃として飲みかくるに、酒は嬉しくも地酒にあらぬ下りなり。追掛け引掛け、果は盃もどかしく、瓶子を口に仰飲む事幾度か。酒早く盡く。瓶子を浪に投込みて立上るに、時なるかな、風は雲を拂盡して塵も交らぬ乾の空に我が白妙の富士は、漫々たる蒼波を排き、其山此山足柄つゞきの薄墨を拔いて高く婉として立つ。大島

も見ゆ。天も見ゆ。巖に攀ぢ登れば、近きに諸磯長鴨が崎、小手を翳して、遙かに望めば、南濱[illegible]園のあとをも見るべし。蒔繪を摺す千鳥幾群、人をも恐れず我が袂近く飛びありく、おもしろきかな天地のたゝえ。山は屹として聳ち、水は汪として涵る。雲鳥天を掠めて天窮まる處を知らず、長鯨浪を蹴つて浪盡くる時なし。昨日人あり、其人兵を鳴らす。今日人あり、其人仁を思ふ。天と地と、之を徹ひ之を載せて、時と共に轉々す。悠なるかな。と獨り胸襟を打開きけるが、岩を枕にいつしか夢に入りて、打眠る事幾時、俄かに寒きを覺えて、眼を開けば、陰雲急に四面をとざして、目に入るものは逆捲く浪、寄せ來る敵かそれかあらぬか、松風の音する度に千頃萬頃水と水との波頭見渡すかぎり、盡く白し。天將に雨降らむとす。此處も是迄いでやと立てば、何に驚く磯千鳥のむら／＼ぱつと群立てる其影のみぞ名殘なりける。

（七）

小山、竹藪、庚申塚、賤が伏屋に鷄はあれども、よろけ華表に草はあれども、目を惹くほどの心ゆかしもなく、空合愈々難かしきに、先を急ぎて、今は人に語らひ寄らむともせず、足を早めて三崎を指せる道すがら、思出づるよしなし事のそれよりこれより、兎にも角にも酒を愼まむ事を思ふ。曾て來日に飮む事三升を下らず、手先づ違る盃のかゝるさまに成了せたる身の程を思ふに、紅顏十四、其時既に受けて辭せざりし程の宴もありけらし。先考之を戒め故叔之を嘆き、I氏之を言ひ、B氏亦之を言ふ。O氏、F氏、殊にはI、S氏の世に嬉しき涙を以て、我に說きし事もありけるが、其の他辱知の諸友其人此人取出でて言はゞ我爲に其名をも汚すべし。我に滿腔の情あり。一髮の青に動き、半點の紅に動き、一絲に動き、一毫に動く。況や風雨雷電朝霞暮雲をや。況や又妙の琴柱の波立てる胸と胸とに相觸れたる懷かしき言の葉をや。我が涙之が爲に灑ぎ、我が恨、之が爲に殊に深かりけるが、孺子敎ふべからず、醉骨依然として未だ餠を慕ふに遑なし。花はもとより樽前の花、月はすべて盃中の月、李白が、屑に戯れ、其角が眸に遊びて、水に落ちたる玉兎雪踏のそれかあらぬか、恍たる月日を返すに難きいたづらの身や。一盃一壜に代へ、三盃一國に代へ、百盃命に代へて、餘り安さの五十年、それまで能く生存ふべきやなど、不圖思起す時、却つて打笑ふ若氣の至り思ふほど口惜しく、野心なきにしもあらず、抱負なきにしもあらねど、それを言はゞ[illegible]樣だにとのみ、事は變れど詰る處は同じやうなる命を延りて、死なむが爲に生きむ事を力むる米や魚鳥や牛乳や肝油や、不朽[illegible]きか無限有[illegible]きか。古來英雄すべて寂寞、盛名論もなく馬前の塵、枯骨纔先に掘出されたる幾百年の後、世話焼なる古實家に騷がれて、俄かに碑を立てられたると、もしくは刑場の露と消えて、生理學者の御參考とやらむ室の一隅に釣下がれる骨骸と、其間徑庭あるが如くに思召す事全く汁粉の御嗜りなどと私かに嘲笑ひける醉語我ながら面憎く、如何すべきと思入る度の心の下より、今も遲早く、三崎に行かば飮むべし。と直ちに思定むる心根の下劣なる事を恥づるの次第是非もなし、此間一里思ふところ多くは口腹の慾のみ。常盤、島村、中華など、念頭に上りたるものの第一なるべし、何故とも知らず斯かる處に來て時なれば貝柱を思ひ白魚を思ひ、獨活を思ひ、筍を思ひ、針魚を思ひ海鼠腸を思ひ、鰹を思ひ、果は其處等目に入る鳴鶉にも及びける卑しさの張三李四と選ぶ處なきそれも恥かし。既にして茶間盡く。刺子の如きもぢり着たる老漁夫前を行き、間祝被りて頰冠りしたる若き漁夫脇道より來れり。

三崎は近し、軒やゝ繁く遣羽子の、潮瀬追ふ風にも迎へられつゝ。

（八）

君來ずば、閨へも入らじ濃紫、其元結に霜白き夕とばかり五歳六歳、八歳がほどは音信も聞かざりける女に、ゆくりなく三崎の町中に行逢うて、物々しく言掛けられ、はじめは面影を打忘れて、心付き驚きて如何にして斯かる處へと差寄れば、答へはせで先づ涙ぐむ。此女我が知れる男に淺からぬ契ありて思ひ思はれける月頃日頃餘所目にも餘るほどなりけるを、如何しけむ男すさずなりてより、此女も俄かに都を去れりとのみ聞えしが、朝の雲夕の雨、行き行く水の流渡りて、其身に取りては好ましかるまじき此處等わたりにあらむとは、さりとも思ひ寄らざりき。今は何するぞと問へば、それより先に彼人は如何したまひしと言ふ。雲鬢花顏、いで其頃は一笑百媚の中に幾百の心をも奪ひたりけるが、鏡にや泣く移ろふ色の笑止や、むかしの花もなし、只有る家に誘はれて、其事此事言出づるに、我も十九血氣の伊達の當時、二十といふ、行からの後先知らぬ笑顏も殊に懷かしきを、思ひきや、三浦の半島に彼一句此一句うら若かりし夢の片割を描出して、今更に跡形もなき往時を忍ばむとは。なほ其心事を聞續くるにいと哀れなり。脂粉汚れたりと言ふこと勿れ。士や其德を二三にす。彼男の家には又新しく犬張子のあるを、といと苦しければ、思ふほどの言葉を盡して、やがて別るゝに再び逢はれまじとや泣くもしをらし。なほ此處にあるやと問へば、心ならぬ人と共に明日は名古屋へ行くべき身とぞ。落花飄零、いかなる日を見むとすらむ。包渡れる夕松島も、思へば果は侘しかりけり。

我嘗て日光の山中に歌舞の女の成れる果を見て、むかし諸侯の奧に爭ひ召されきといふ振袖の盛時を思ひ、翡翠のかづら花萎れける檜垣の白拍子が、みづはくむまで老いにける古を忍び、其後田子の浦回にては又分けて人を動かしける女の、驚かれぬる埴生の宿にさま變りてありけるに邂逅ひて、かゝれとてしも烏羽玉の黑髮長く根を曳けるに、其むかし桂の眉の匂、美色の誇りに世を世とも思はざりける眼の色の殊に冴え〴〵しかりし頃は、拙なかりし心も嬋妍たる中に隱れ、なまじひの才藝も目覺ましきものに思ひなされて、心のまゝの振舞をも人は許すより先に譽めて騒立てけるが、一朝光失せて身はさすらひの蜑はあらはに、言甲斐なくも誘ふ水あらばいなむとぞ苫屋のもとをも辭まざるほどに思屈しけれども、我を見るより面を蔽うて避けむとしたる心根の餘りに不便なりき。自ら立つ事能はざる髪長き人の横にそれたる果のあはれは、見るにあさましく、聞くに胸いたき事のなほ夥しきを、彼等のすべて識なき事を思へ、了智なき事を思へ、力量なき事を思へ、僞りの涙の憫むべき事を思へ。僞りの媚の更に憫むべき事を思へ。松にたよれる藤はまだよし、葭にすがれる朝顏の秋風吹けども咲かむとすらむ。後の殿御の心いづくぞ。

（九）

枕に近き早咲の香をなつかしむ袖なれば、片敷く宵の床の中、夢は那邊に通ひけむ、一風吹かば如何にせむ、花に宿る鶯と、越殿樂と聞えたる昔の物の音に驚かれて、目を見開けば、有りながらの三崎の宿、前に手焙煙草盆、朱塗の盆に小建水、有明の燈火の影ほの暗く、梅の匂のさながら溢れて挿花瓶の幾輪白きは闇にもしるきそれなりけり。波たゞ此處許に寄るといひけむ、曉方の四邊分けて淋しきに、折添頼の小雨いとしめやかに、枕に通ふ島千鳥の、ほの

かに耳を誘ふにも趣くは旅の心なるべし。再び眠りがたければ宵に取寄せたる札引きつゝ、燈火かきたてゝ物書かむとするに、心亂れて一字をも成さず。葉山にて書捨てにしたる稿を取出して、幾度かあとを繼がむとするに、興來らで遂に止みぬ。讀むべき書をも持來らねば、斯かる時のつれづれを何とせむかたもなし。果は凡夫のすなる故郷を無佗びて、彼人懷かしく、此人ゆかしく、逢うて語りて偕語りてなど、いたづら心の終りも知らず長かりけるが、漸くにして華嚴の十玄に辿りつきて、嘗て其光輝に眩惑せられたりし頃を思出でて微笑む事少時、亂想辛うじて靜まるに、今こそと再び筆を染むるに、又始の如し。よしさらば俳句にてもよし、歌にてもよし。止むを得ずんば、賦よし、錄よし、讃よし、偈よし。と連りに紙を費すに、一として取るべきものなきに、いつもの癇癪筆を擲折り大いに叫びて臥床に飛入りける、愚か狂か癡か、知らず。

明けて雨ならば是非なし垂籠めてと思ひける朝のほどは陰晴定まらず、心も共に結ぼほれたる中に過ぎ、午後ともなるに、空合いかにと障子引開けて打仰ぐ折待顏に日の影の雲押開きて俄かにあらはれ出でたるに、引繕ひ其處等見むと走出でて先づ向が崎に渡る。大椿寺と聞えたるは、椿の御所のあととして前に耳にしたる處なり。そこをと心當てに小高き方を急着くに、あるべき習ひながら一わたりの田舍寺の四邊は更なり、一顧の價すらもなし。高きに登りて遙かに望めども、雲未だ深くして見るべき方も見えず、西風吹荒れて、波の上の心許なきに、舟して城が島をめぐらむと思立ちける望も失ひ、いま〳〵しさに三崎の家居の櫛の齒の如く立續けるをも、冷し瓜の如き城が島の間近く浮べるをも、千石二千石五百石の帆柱の冬木立をも漕連れて來る漁り舟の興あるをも、前の岩が根に鵜の飛交へるさまの風情あるをも、そこそこに見捨てゝ、もとの道へと下り、鯖釣る餌に鰯割く男と、そを釣針につくるに忙がしき男の一群、船に浪除の苫打つ一群を僅かに見たるまゝ、再び顧みるまでもなく渡津ある方に急ぎ、飛乘りさまに着くより早く向う岸へ躍上る。櫻の御所とのみ名ばかり優しげに殘れる本瑞寺は燒失せて、同じく見るべき處もなし。何とかしけむ、此日心いと冷やかに、打過ぐるものゝ何にも動かされず、足ついでたればと砂を蹴散らして見桃寺へと赴きける心の中のなかなかに進まざりける卑し。

（十）

急ぎ候ほどに是は早見桃寺に着いて候。記念の枝もあらばこそ、只したゝかなる荒寺の、鎖せる扉蔦かづら、さながら古りたる眺めかな。綠竹の、音にも通へる松なれば、昔の友とみさぶらひ、みかきと申せ木の下の、露は昔の露ながら、變り果てたる有樣かな。そこに休らふ賤の女は此處等わたりに住むものよ喃。如何に桃の御所とやらむ、名に聞えたるは此處の事か。いやそれとも存じ寄らず候。所には住み候へども。何をもいざや白波の、寄する渚に世を送る、海女にしあれば藻をかづき、すなどる業に暇なみ、黄楊の小櫛を取りあへぬ、はかなき身なりみるめかる、汐馴衣恥かしや。汐馴衣恥かしや。

かゝる仕儀にて埒明かず、もとより心の進まざりける折なれば、面倒なりと其儘に打過ぎ、向井氏數世の塚の前をも、通りすがりの一瞥に捨てゝ當途もなく逆行けるに、砂漠萬里忽然として前に開けて、身は俄かに駱駝の如く波に突出でたる半島の上に出づ。西山風急に、未申より戌亥にかけたる天の一方際立ちて明らかに、折しも西に傾ける夕日の、紅、天城の紫、三段

流れの海雲の伊豆より駿河に棚引渡れる、裏は淡紅地の中空に見れども見れども飽かぬ富士の雪美しき立姿を、仰ぐもんから結ぼれたりし胸は直ちに解去りて、足もそゞろに磯際かくれば、狂へる濤の澎湃たる響に競ふ浮心、さし來る潮の花に亂れ、岩に激して躍上る數丈の雪の瀧返し、巴返し雲珠返し、返しては寄る高浪のいよ〳〵吼ゆるに、船も帆も沖には見えず、大島の三原の煙は横になぐれて、八重の汐路を風ばかり遮るものなき相模灘を、折しも一點ほの黑き汽船の影の突如として現はれ出でしが、忽ち隱れて行方も知らぬ蒼茫〳〵たる波の上、横切る鷗の十字に翳されて岩の彼方へ飛去れるも、をかしき海の風情なりけり。

見る〳〵紫立てる天城の頂は裾より逼る紺青に追はれて、眞紅に凝れる夕日を肩に、雄たる層峰西に高く踏み跨がれる其さまの、ゆゝしきまでに心地よきに、我を忘れて良久しく佇立みたりける背後にあたりて、物音するに振返れば、いつの程にか來集へる最寄の童七人ばかり、ところに見馴れぬ我が姿のめづらしきとか、我を遠卷にして齊しく好奇の目を注ぎたり。塵けども恐れて來らず。いづれも濱の黑太郎、才槌頭、兜盔頭、白雲頭をこきまぜて、取るべき首もなかりけれども、それも愛らし。兎角して招寄せて語遊ぶに、軈て馴れては憚らず稚なき知識の底を返して囀散らす鄙の調も亦面白し。此時我に一點の私心なく、彼等に對する父の如く又兄の如くなりけるが、世の所謂善惡なるもの、奸佞なるもの、刻薄なるものに對しても、同じく此心を以て應ずべきほどに他を愛せではかなはざるを、折にふれ、事にふれて未だ至らぬ節多きを如何にすべき。と西が濱を過ぎて、再び三崎の宿に歸る途すがら竊かに思入りける折節、風落ちて雲遲く、纖月觀音山の上にほのかなるあたり、鐘聲かゝる時よし。

(十一)

其夜は殊勝にも身を勵はりて僅かに一陶にして盃を伏せけるが、かゝる時しも一服の抹茶あらばと望みけるに、南相地僻といふにもあらねど、蜑の釣舟それのみの浦回なればや友千鳥、むら〳〵千鳥浦千鳥、千鳥茶巾の折かけて、茶に入る月の影はあれども、爐に枝炭の雪も知られず。流石に駿河にありける頃は、臺子點に我を驚かしける人の娘もありけるがなど侘しがるに、小石川なる我が宗匠が新築の茶室忽に日に入る心地す。今しも床は炭飾、軸は紫野の大德か。我が好む四方棚に注連結廻して、棚飾は香合なるべき、棗なるべき、何なるべき。と移し心のそれよりして利休を思ひ、紹鷗を思ひ、珠光を思ふ。あゝ松は雪に後れて筧の音の絕え絕えなる此頃、響渡る銅鑼の聲に露次を入る心地のいかに妙ならむを、と思寢の枕に今宵も千鳥の聲のいと憂しげなりけるに、折しも近き岡の邊の娼家に絃歌の聲沸くが如く、淫猥聞くに堪へぬ三崎甚句を慕なしに浴せ掛けられたる土地柄なれば詮方もなし。

明くれば風は强けれども北位なり。昨日の如き波はよもあるまじ。いつまで此處に在るべきにもあらねば、滿天雲深けれども、今日を外すべきにあらずと舟押出して城が島を廻らむとす。駘蕩四月の頃にもあらば、透徹九月の候にもあらば、さぞな浪路を幾返り、見過しがての岩根も少からぬを、いと寒ければ舟も止めず、黑島鳶が島の中を分けて城が島の南口に出づ。空打曇りて波黑く、安房の洲の崎大武崎、富山あたりいとほのかなり。漁り舟の其處彼處に、箱目鏡を口に啣へたる漁夫幾人、身を舷に乘出して、あまねく海底をあさりつゝ行く。蛸引く舟は稍遠く、鯖釣り石鮫魚釣るは遙に遠く、沖の鷗のさながら白きは、翁さびたる冬の海

に、凄まじげなる粧ひなり。淡崎を過ぐる頃ひ波大に起る。赤羽根とやらむ、屛風を立てたる絶壁に逆捲上る荒波の、見る／＼奔天の悍馬の如く、忽ち奈落にただれ落つる其度毎に我舟は風に浮ぶ木の葉より、塵より輕く上下左右に咄嗟今にも覆らむとするを、流石に馴れたる船頭なり、艫柄取る手の大どかに見向きもやらず打笑みたる、壯夫用ふべし渥丹其儘の顏の色も毛蟲の如き太眉も力籠りて見るに心地よし。我もと水を好む事甚しければ寄來る浪を物ともせず、沈まぬ限りは風も狂へ浪も狂へよ主人振にと、山に躍つて玉に散るさまの勇ましげなる其さまの、忽ち碎けて忽ち全き狂瀾怒濤いよ／＼興を添へたる折しも、迫れる巖礁の間を過ぎて波急に靜かなる入江を過ぐ。舟は多く業を捨てゝ歸り來れり。西南雲深くして大島も見えず伊豆も見えず、左右奔雷の響につれて、見渡すかぎり壯又壯、雄渾譬しへもなし。

(十二)

それより西千鳥島、釜島獅子が鼻長鶴が崎、舟は奔濤を衝いて早く北口に入る。東湊崎より長鶴に至る約半里、南北四町、周圍一里何町とやらむ、城が島全島を擧げて奇勝の取出でていふべきなし。漁家七八十、畑あり、寺あり、燈臺あり、松林ありと言はゞそれにて盡すべし。雨もやあらむ、吹結ぶ雲いよ／＼深きに馳せて再び舟に移り、舟子を勵まして急に三崎に歸る。此行、葉山に於て殆んど春、こゝに來つて全く冬なる凍雲怒濤劈く如き風、大楠山の揚雲雀と、向が崎の濱千鳥と、附句の差合えせ俳諧の槍玉にやあがるべき。をかしと宿に急ぐ途すがら、折掛垣の梅白く下道急に香はしき方を過ぐるに、如何なる心のゆかしなりけむ、それとこれとは緣もなくて譬へば小琴の風に觸れて有るか無きかの絃の調を傳ふる如く、「百千鳥、花になれゆくあだし身は、果敢なきほどに羨まれぬる」といへる六帖の歌の不意にあらはれて長く心を惹きけるが文章將何するものぞなど、果はあさまになりけるもよしなかりき。

宿に歸りて靜坐する事久し。蕭閑心悠に筆を追うて落書して遊ぶ。其文に曰く、

一　能ありて識なきものは卑しむべし。識ありて能なきものは憫むべし。能なくして識なきものは憐むべし。識ありて能あるものは親しむべし。

二　豚牛の智を嘲るものは陋也。土石の徳を輕んずるものは晦也。傲慢畢竟蠻族の虚飾のみ。從容迫らず然も九鼎の重きものあらずんば丈夫に非ず。

三　斷頭臺の下、勇なるによつて神色自若たるものはをさなし。智なるによつて自若たるものはいやみなり。仁なるによつて自若たるものに至つて始めて可なり。

四　自己の神聖なる所を思へ。尊嚴なる事を思へ。他の同じく神聖なる事を思へ。尊嚴なる事を思へ。而して後禮あり義あり仁あり。天下を擧げて共に手を携へて樂しむべし。亦快ならずや。

五　愛、自己の外に出でざるものは言ふに足らず。其子の外に出でざるものは醜也。戀人の外に出でざるものは癡也。骨肉朋友の外に出でざるものは庸也。一鄉一國の外に出でざるものは腐也。愛萬有を蓋ふに至つて始めて稱すべし、推すべし、語るべし、友とすべし。

六　蒼天の雲の大なるを知つて卯の毛の露の大なるを知らざるものあり。尾上の松の高きを知つて谷の小草の高きを知らざるものあり。彼等の識見すべて迂也。滿目青山、心會いつを期せむ哉。

かゝる事數限りもなく書散らしけるが、四邊小

晴うなりぬ。手習の君机を離れて又もとの旅客となれば、通ふ千鳥や島吹越ゆる風の音して。

（十三）

朝まだき空打曇りたれど結束して立つ。相馴れたりし相模灣をも、三崎も今は後にして、濱松が枝を引結ぶ名殘の袂もなかりければ、柳の蔭に振返る家居も其まゝ眺捨てゝ、向が崎より岡幾つ例の藪椿。麥畑蘿蔔畑の中を過ぎて道稍高く浪遠き小山がかりの松原に出づ。梢を走る白帆の影、葉越に浮ぶ小島の姿も、目には飽きたる風情ながら、流石無下にも捨てがたし。磯傳ひして松輪へと期したるものから、崖にかけたる小徑を見附けて浪打際へと近づけば、岩が根黑き磯蔭に海苔採る少女の一人二人、吾妻褁の裾短に、女なればや袂より帶の端より紅の洩れて見ゆるも色めかし。洲に引上げたる虚舟、打寄る藻屑汐木の中を行く事少許、一條細く濱芝の上に殘れる足跡いよ〳〵幽かに、徑は忽ち怪石の前に窮まつて、左峭壁右荒浪の行止りとなれり。辛らじて足場を求めて巖に攀登れば、行手は浪に限られて入江の水は右手に幾十間の彼方に走る。舟もなければ汀に添ひ、岩に縋り岩を傳うて漸くにして小徑を求め、行けば纔て浪も見えず忽ち高く忽ち低く、小笹枯芝小杉の幾簇、松の外山の下かけて數頃の田面の眺めもよし。樹頭の鵙の聲、丘の彼方に鶸の聲、前の鶺鴒上の雲雀、飛禽の縱横一幅の幽境また喜ぶべし。四顧人もなく、雞犬の聲もなく、茫々たる風漠々たる雲、我が足音を聞きつけて、ほく〳〵ありし此時他に求むる處なく、天に地に山に樹に草に石に飛ぶ鳥に人爲の係累ある事なくして、我も亦自然の中なる一箇の人類たるより外に過ぎざる事を思ふに、何とも知らず崇敬の心起りて自ら頭の下る如き心地す。あゝ斯かる時も遂に來りけるか、いにし三歲とも言はず去歲の春の半ばまでは、よし如何ならむ世の偉力にも心よりして膝を屈する事もなかりけるがなど、思去り思來る片時のほどに、身はいつか只有る丘の根を廻りて得知れぬ森の下蔭に來る。右すれば海なるべしと行けども行けども濱に出でず、尚行くほどに踏迷ふ小笹が原の路もなく、陸の限りの知れ渡りたる三浦半島横に轉けても出づべきものをと思ふものから、猶幾度か途を失して突如として出でたるは菊名の濱邊なり。松輪に南を臨むべかりし其方の海は幾里の跡に、前は浦賀の海峽の水を隔てゝ保田、金谷、鋸山も手に取るばかり、花こそなけれ君まさば盥に乘りても通ふべく見ゆ。波なれや其舟なれや何の奇もなき磯山も流石に水を得て面白げに、安房の鷗も今日武藏、招くは柳應ふるは浪の鼓か松風か、月の夜は此方の岬、雪の日は彼方の浦回、對岸すべて若干の風流、相望む心もありや。折しもは千鳥の聲に、千駄が崎は日の匂、白帆三つ行く島の彼方の、磯根が崎は汐煙、雲稍開きて浪靜かなりき。此日浦賀に泊る。梅ありて枕に通ひぬ。此處も南に寄りたればにや、室にはあらずと云へり。一月上の八日。

年譜

明治二年

三月五日、大阪に生る。川上榮三郎の長男にして幼名を幾太郎、長じて亮と改めた。烟波山人、眉山等の號がある。年少父に從つて東京市本鄉區春木町に移る。初めお茶の水師範學校附屬小學校に入り、後本鄉小學校に轉じた。

明治十三年

二月、本鄉小學校を卒へ、神田の東京府第一中學校に入學した。此の頃の眉山は、性質極めて溫和、外見は玉の如き美少年であつた。學科の成績よろしく、擊劍の科目のみは零點であつたが、何時でも級の首席を占めて居た。同窓の細川風谷、その他丸岡九華などと相知る。

第一中學校より本鄉元町の進文學舍に進む。同級に石橋思案、丸岡九華などがあり、大學在學中の坪內逍遙、高田半峰氏などが敎鞭を執つて居られた。眉山の文學方面への傾倒の一要素として坪內氏等の薫化、思案、九華等との交遊が與つて重きをなしたことは見逃せない。又、此頃也有の『鶉衣』、許六の『風流風選』などを頻りと耽讀した。後年の諸作に其の影響は深く現れて居る。

明治十七年

東京大學豫備門に入る。尾崎紅葉、山田美妙等と相知る。

明治十八年

春、紅葉、思案、美妙等と硯友社を起し明治文壇に一新生面を開く。

明治二十一年

七月、第一高等中學を卒業して帝國大學法科に入る。一年にして、文科に移り、卒業に先つて退學した。是より先、二月、處女作『雛膽祕事枕』を『我樂多文庫』第十六號に發表、六月には同誌上に『黃菊白菊』を發表した。

明治二十三年

三月、『眞木柱』を『文庫』に、『雪折竹』を『日本の文華』に、四月、『墨染櫻』を『新著百種』に、六月、『艶の言』を『江戸紫』に、七月、『振分髮』を『東京中新聞』に、『風流狂言記』を『日本の文華』に發表した。

此頃可成り俳句に凝る。

明治二十四年

三月、『うつせ貝』、四月、『藤かつら』を『都の花』に、七月、『源氏雲』を『東洋新報』に、八月、『寶の山』を『少年文學』に、九月、『染小袖』を『都の花』に發表。

明治二十五年

八月、『青嵐』を『讀賣新聞』に發表。十一月、『撫子』を『柴車』に、十二月、『袖頭巾』『撚小木辨』を『萩桔梗』に發表。

明治二十六年

一月、『奥様』を『婦女雜誌』に、四月、『白藤』、五月、『賤機』を『讀賣新聞』に、九月、『二枚袷』を『春夏秋冬』に、十一月、『かゝり舟』を

「讀賣新聞」に、十二月、「お駒」を「春夏秋冬」に發表。

此年春木町の父の家を去つて小石川の富坂に居を構へた。此頃から込入つた家庭の事情の爲に次第に沈鬱な性格となつた。

明治二十七年

五月、「有明」を「春夏秋冬」に、『ゆく水』を「讀賣新聞」附錄「心の闇」に、十一月、「落葉」を「春夏秋冬」に發表。

明治二十八年

一月、「青葉」を「春夏秋冬」に、「大盃」を「文藝倶樂部」に、「一夜天下」を「少年世界」に、二月、「書記官」を「太陽」に、七月、「左褄」を「よつの緒」に、八月、『うらおもて』を「國民の友」に、十一月、「暗潮」（後「網代木」と改題單行）を「讀賣新聞」に、十二月、『松風』を「五調子」に發表。

明治二十九年

一月、「黄薔」を「文學界」に、二月、「狭筵」を「めざまし草」に、三月、「鹿の子絞」を「文藝倶樂部」に發表。五月、「大村少尉」を春陽堂より上梓。六月、「六分蚤」を「中央新聞」に、七月、『千紫萬紅』を「文藝倶樂部」に發表。

明治三十年

二月、『鹿の子絞』を「文藝倶樂部」に、三月、「島田くづし」を「太陽」に、八月、「餌差竿」を「國民の友」に、「朧富士」を「新小說」に、十月、「十萬圓」を「國民の友」に、「絃聲」を「文藝倶樂部」に發表。

此年硯友社同人江見水蔭氏の片瀨の家に約半歳を寄寓し三浦半島などを廻つて歸京した。可成り逆境の時で、この旅の記が後に「ふところ日記」として發表された。

明治三十一年

一月、「船橋」を「文藝倶樂部」に、「當座帳」を「新小說」に、「柴栗」を「太陽」に、三月、「其日」を「國民の友」に、六月、「扇巴」を「新小說」に、八月、「寢覺」を「文藝倶樂部」に發表。

明治三十二年

一月、「夕霧」を「新小說」に、二月、「きみ子」を「ふところ子」に、六月、『青春怨』を「萬朝報」に、八月、『蓬ケ杣』、十一月、「西施乳」を「新小說」に發表。

明治三十三年

一月、『いさゝ川』を「太陽」に、「親父殿」を「太平洋」に五月、「五十年」を「新小說」に、七月、『命綱』を「文藝倶樂部」に、『うしろ向』を「新小說」に、『神出鬼沒』を「二六新聞」に、九月、「店暖簾」を「新小說」に、十二月、『逸樂篇』を「太陽」に發表。

明治三十四年

一月、『眞弓槻弓』、二月、『袖枕』を「新小說」に、「碧水志」を「中學世界」に、四月、「黄昏」を「太陽」に、「小町紅」を「小天地」に、六月、「眼前の春光」を「太陽」に、八月、「梅紅葉」を「女學世界」に發表。九月、「ふところ日記」を文祿堂より上梓。十月、『若菜垣』を「春燈集」に發表。

明治三十五年

一月、『甚兵衛』を「中學世界」に、『春潮』を「女學世界」に、「梅の栞」を「太平洋」に、三月、「無言の聲」を「文藝界」に、七月、『右左』を「太平洋」に、九月、「野人」を「太陽」に、十二

月、「行衛」を「太平洋」に發表す。

明治三十六年

二月、『重縁』(後に『二重帶』と改題單行)を「太陽」に、四月、「一軒百姓」、「春宵」を「文藝倶樂部」に、八月、『鶴澤橋』を「太陽」に、十月、「凡人界」を「文藝倶樂部」に、十一月、『廢人』を「文藝界」に、十二月、「餘寒」を「新小說」に發表。

此年、眉山氏の女鶯子を入れて室とす。此間富坂町より北山伏町に移り、更に天神町に住つた。點茶、盆栽を好愛し、天神町の家には二三十種の盆栽があり常に丹念に手入をした。

明治三十七年

一月、『虛僞の價』を「太陽」に、四月、『三銃士』を「二六新聞」に、八月、「瀟久帖」を「戰爭文學」に發表。

明治三十八年

一月、『綾小袖』を「文藝倶樂部」に、『片影』を「太陽」に、二月、『滑稽相續三人男』、六月、「澪標」を「文藝倶樂部」に、七月、「萬平」を「太陽」に、九月、「爪木折」を「時好」に、十一月、『妖艶』を「太陽」に發表。

明治三十九年

二月、『ゆふだすき』を「早稻田文學」に、四月、「弱氣筋」を「太陽」、「希望」を「中央公論」に發表。同月、「觀音岩」を有倫堂より上梓。七月、『仙臺平』を「文藝倶樂部」に、『小妾記』を「太陽」に、九月、『わかれ水』を「趣味」に、十二月、『小半日』を「文藝界」に發表。

明治四十年

一月、「横雲」を「太陽」に、「裏座敷」を「文藝倶樂部」に、二月、『新家庭』を「二六新聞」に、『縒ちがへ』を「家庭文藝」に、六月、『明眸』、七月、『觀音岩後篇』、十一月、『破倫』を「文藝倶樂部」に、「再會」を「新小說」に發表。

明治四十一年

一月、『同胞』を「太陽」に、六月、『自殺』を「女子文壇」に、『魔道』を「文章世界」に、「塵影」を「文藝倶樂部」に、七月、「八重子」を『新小說』に、『昔の戀』を「太陽」に發表。

六月十五日午前四時三十分突如として自ら逝いた。一片の遺書もなく、死因に就ては或ひは生活苦のためと云ひ、或ひは藝術上の行詰りと解し、或ひは發作なりと云へど詳かならず。越えて十七日、駒込吉祥寺に葬らる。芳文院眉山清亮居士。遺兒に晴彥、國彥の二氏がある。

齋藤緑雨集

緑雨君の作を讀みて

緑雨醒客齋藤賢君は、明治中期の文學に於て、全く獨立の位置を守つた優れたる作家の一人であつた。明治二十二、三年頃からして、新文壇にさへもう二三の團結ができてゐた。硯友社派、早稲田派、民友社派などがその主なものであつた。緑雨君はその孰にも屬して居らず、當時では、それらの新文學者からは輕視されてゐたところの舊戲作者の畑に近い小新聞の雜報記者の間から身を起して、獨力、獨歩で、當時の大作家としての實力と位地とを獲得した人である。それで、緑雨君の作物には、その文體に於て、その取材の方向に於て、當時の文學のなかでは、極めて特異なる個性が顯然と表はれて居る。

緑雨君の青年時に於ては、漢字を一通り覺え、その使用を誤らざること、日本の古典、及び徳川文學、即ち過去の文學を一わたり知つて居ることが、文學者の必須の資格と考へられてゐた。記憶力の人に優れてゐた緑雨君のさういふ方面での修練は遺憾なくできてゐたと云はなければならぬ。

緑雨君は早く職業に就いたので、當時の三十歳以上の人々、即ち成人の間で十分に揉まれたのであつた。それ等の人々のなかには、世事を知り、世情に通ずることに於て、緑雨君のために絶好の指導者となつた所謂通人ともいふべき人もあつたと傳へられて居る。

當時の善き文學者は、何よりも先づ文章を練るといふ點では驚くべく良心的であつた。詰り、字句の末に至るまで、鏤心彫骨の苦心を極めるのであつた。一句若くは一行に就て、數日苦吟するが如きは、敢て稀有な例とはいはれなかつた。緑雨君の如きはさういふ傾向の最も甚だしい作家であつた。要するに所謂凝り家であつたのだ。緑雨君の作品は、文章としては、明治の文範として、正に後昆に傳ふるに足る金玉の文字である。それならば、緑雨君の作物は、その當時に於て、舊式に屬するものであつたかといふに、決してさうではなかつた。語句の結合に於て、文體全體に於て、將又世相に對する自由にして奇警なる觀察に於て、緑雨君は優に新人物たる頴才を發揮して居る。

小説家としての緑雨君は、纏まつた作品と云つては幾つも遺して居らぬ。此れは斯の作家が病身な人であつたが爲めもあるが、一面では、餘りに一字、一句にまで慘憺の苦心をなして、自ら遲筆にならざるを得なかつたためもあるであらう。更に又、世相にもよく通じ、世相に對しても一家の見識を持つてゐた緑雨君は、特にその晩年に於ては、當今の小説家が描寫するやうな材料、結構では滿足し得られなかつたのでもあらうと考へられる。

『おぼえ帳』『ひかへ帳』『日用帳』の如き隨筆に至つては、恐らくは、あゝいふ文壇に於ての、空前絶後の名文であらう。著者の見聞の該博の廣汎なる、その觀察の透徹せる、全く類を絶して居る。その文體の精巧に至つては、正に百年の軌範と云はざるを得ない。斯の隨筆は雜誌「太陽」に續き物として分載されたのだが、その材料に就ては、緑雨君は坐臥にも考慮を怠らなかつた。思ひつく度毎に、洋燈の紙の笠などへ、筆で□や△などを書いて心覺えにしてゐた。「毎回の始めに、機關車とでもいふやうに、後の項の總序になる事項を書きだしにすること、各項の終りが同じにならぬやう、例へば、前のがなりで終つて居れば、その次の項の終りはなりでないやうにすることが一寸苦心だ。」さう緑雨君は云つてゐた。

昭和四年二月　　馬場孤蝶識

おぼろ夜

長者になると口々に何れは長者ならぬ人の子や、小路隠れに呼ぶ聲するに暮るゝさうなと見上ぐれば、今の先迄唯黒かりし富士の姿の、渡船場のほとり漕来つるわづか五足六足に消えて、げに星一つとおもふに一つならず二つ三つとこゝかしこ數はまさりて、向河岸なる阿波屋が二階に、はや銀燭のかゞやき出でぬ。あれ今棧橋に出たは誰であらう歟、屈んでなれば能くはわからねどお榮さんらしき脊恰好、あんまりな此川隔てゝ女の呼びもならず呼んだとて用一つあるではなけれど、あの二階見るさへ名殘とおもへば何やら知らず呼びたいやうな、吹くが嵐の常とはいへど添竹もたぬ草の花、倒れてはならぬ身の憂きを小夜着の襟に泣明かした昨日迄の奉公も、今日からおもへば殘惜しく、明日なる運の末からおもへば猶殘惜しゝ、つらいがつらいにならず嬉いが嬉いにならぬ人の世は、たとへば泡沫と誰かにきゝしを此處なる流れに見るにつけ、果敢ないものと今更の心地がする、せめては手招ぎにと思ふに露のなければ通じたさうな、こちら向きなさんした顔のくつきりと白いはお榮さんに紛れもなし、儂とはおない年のそれも三月の下なれど早くより馴れし水調子、淵にも瀨にもとんとまかす氣の元は中洲に居なさんしたとか二場所程を渡り來て、おとす節のおのづから浮々としたるにあがり下りの音締かしこく、厭なはみんな引受けましよと如才ない取廻し、男といふは死ぬものと突然の言葉を何故々々と人の問へば、女の十五は花の蕾口紅の何につくともなき心を、もうよからうとほんの通りがかりに吹く春風に、開かば大抵は薄かるべき命の末をも思はずつい譯知りそめて、今迄に持ちし男の數は三人、どうでも初手は失せぬ纏樣氣きやしやをいはゞ白魚の事、舌障りのやはらかいばかりを好きしがあれかこれかのえらみ喰ひに味しめて、後にはきりゝと締り加減の少しは骨の歯にあまるやうなもあつたなれど、一葉散り二葉散り三葉散る門の柳よりも脆いは人の秋にかぎらず、老少不定と御文章樣のそでない詮議をなされたもの、あなかしこ儂のは端から皆死にましたと、聞けば成程の內證もあけすけないつもの癖とて、傘の破れかぶれ末は棄てるやうな口つき、それはお前が丑なれば三世相にもあることぞ、どれが一番いとしかつたと問返されてさあ其事、初めなが可愛しいは女の忘れぬものと誰も承知、中なのも今に忘れねばやつぱり可愛しく、末なもまだ忘れるほどの日がたければ可愛しさはどれもこれも異りは無し、ことし廿一のこれなり稅を納めて露寒き庵の白萩、新屋のひとりつくねんと竹緣の端に物思うても居られねば、これからは些憎いなを探しましよと立たうとしなさんしたを、それは又どうしてとあの時傍に居たは石切河岸から通ひ勤め、梶原と綽名に呼ばるゝ士族出の年嵩の意地惡のごますりの情なしの、さらでも出しやばるげぢく眉、這ひかゝつて聞耳立つるに儂もおもはず朝の役目、ねざめ拭きかけし手をとゞむれば、笑止や可愛しいばかりが色であらうか、憎いなも持つて見ねば苦勞が誨ふる浮世の底、とごりの正味は唯振つたではわかりませぬ、花なら盛りの一枚倚に活けたはいかさま美しいとまでの事、少々は散際の床柱にさびの見えて、捨てたくもあり捨てたくもなき差引が風流の汐といふもの、ふつり香を間着の袖

變らずもがな大事にとめて、夢に痴話するやうながいつ迄面白からう、憎からぬ初心のほどに死別れたれば、それで儂がのは後先いはず皆いとしい、若し憎かりさうなが遺ちて居たら何も人助け、八幡取持を賴みますとづけ〳〵と言つてのけなさんしたに、板前の彌太さんとて最うこれ四十男、みづ貝のもとより片方なれど離れぬおもひを懸け居たるが、其一言の木枯しや圖らずさつと日口にしみこみて、雲吹飛ばす腕の晴れわざこちとらが面は向けられず、氣位の月の高ぞら冴返りたるあとの一段と凄からう、色は賣人の事以來袂にも手は觸れまいと俄の懺悔、それでは此日頃お前は儂に牛の角文字、涎に書かさば打つて附けの戀の謎ほれて居たのか、鏡に表裏の透徹つたがなければ儂には見えなんだ、まことをいへば小簾の花影蜂も來て舞ふ 志 の殊勝なに、祝儀なりと遣りましよと昨夜のまゝの紙包、ぽんと投出さんしたに一座はどつと瀧川の笑ひに落ちながら、小面の憎いと何彼に蔭口の絕えなんだも、お客樣のお榮〳〵と一つは器量がたすけて、聲のたんと懸かるに女同志の妬みもあつたこと歟、今夜は足が冷えてならぬ、一處にと賴みなさんすに儂は新參、何事も厭とはいへず端からそつと這入りしに、抱かれて寢ると抱いて寢ると、所詮これぎりの天地に次第は一つ、さうではないかとおつと顏見なさんすに儂は背けて、馴染淺き心の裡又してもと眉ひそむれば、何で其やうにお前は氣を置きなさる、重ねても薄綿もめん蒲團のたゞさへぎごちないに、肩が出はせぬか足が出はせぬか、師走にかゝつて人の娘風邪ひかせては儂がすまず、もつとこちらへと枕つき合せて、なあさうではないかと再言掛けなさんすを儂の猶躊躇へば、明神の森の小烏あけても暮れてもかうした事言うて居たら、定めしお前は面白いと思ひなさらう、いや〳〵可笑しいと思ひなさらう、いつそ淺ましいとでも思ひなさらう、人といへば儂も人ういつらいはお互ひの身、おぼえて居て下され涙もたぬではなけれど、泣くも盡きず泣かぬも盡きぬにしめ〴〵と海士の袖、しほたれて居るばかりが悲しいと限つたでもあるまい、花に月に春秋をよりわけて泣いて居るは、大方涙の種のたしないのでがなあらう、泣かば儂等が生れぬ先から死んだ後迄、よしや泣通すとも止まりといふが世にあらう歟、霞は老木の枝をもこめる、露は若木の葉をもそめる、畢竟ながめと思うて居たら何の仔細は無さうな、一生は旅の東海道つぎ〳〵のちやん〳〵着て、京のあがりの日向ぼつこ孫のもりする何處のか婆樣の、生噂すやうに言はれながらも百とは聞かなんだ、どう轉ばうにも數は知れた賽の目、附木引裂きて誰某と名をしるしたる墨のにじんだが、雙六のめぐり〳〵て後に塔婆の形であらうぞ、儂は泣かぬにきめました、世間はいろ〳〵せちがらい中を繼づけで呼ばるゝお方ありて、なんと十二分の手當は遣らうがと人橋かけて仰せられたを、折角なれど娘食ふほど、膽のすわつた親でもござりませぬと昔氣質は板屋の霰、ぶつかり次第ぴんと跳ねのけ皺肱張つて反返りしも、上總戶のしつくりとは行かぬ瘠世帶朝夕に閊へて、嫁入支度の到底も手元ではなりかぬれば、一廉貯めさせる氣でこんな奉公に出したが親の不覺、何日と知れたら洗ひもならうに今ではおちぬ膝の酒じみ、何の彼のとつゝき散らされて猶一際のうかれ心、まゝよ染色のこれが新衣にもどるでもあるまいと、われとわが身をすたり物のゆきたけかまはず、隨分と馬鹿を盡しました、自然親の耳にも入りしに芝居でするやうに襟髮おさへて、不孝の奴め其いたづらを誰がをしへた、どの道拔のつくとわかればあの方が御懇の言葉の露、難有く承けてお屋敷へ上げたもの、妾てか

けと言はれうとも掟嚴しき圍ひの裡、さう迄は行儀崩れず枝振のまんぞくであつたらうにと悔むも愚癡、降るも照るも初めから皆天のさづかり事、先頃藝者にと言うてくれた人もあつたなれど、盃のそこにはそこの模様見え透きてうつかり呑めぬ勤の內裏、あれにならぬがまだ性のあるのと思うて下され、氣骨折るほどならこんな處に儂は居ませぬ、末はいづこの野とも山とも、わからぬが人の世の面白いではなからう歟、お前がやうにいつもいつも、しよんぼりと雨の鷺物案じ顏で此奉公は立ちにくい、何もお前これが唐紙の繪では無したまには羽ひろげて、そこらは知れた蘆の枯穗ぱつとした料簡にもなつて見なされと、振向けば皆の寢たるに聲低く、しみ〴〵と語嗣ぎなさんすに何と挨拶したものかと、思ふも待たず儂等は腐れ玉子、きみゆゑ流れて惡い臭ひのつきそめたればもうかへらず、それには何日數のないお前の身、手堅くなされと年寄めいたことを言ふものの我儘なだけ儂は妹、お前は何だか苦勞しなさるらしいにやつぱり姉様、仲好うしようではないかと囁きなさんすに儂はあの時、どうぞとばかり便りなきまゝ覺えず縋着いた、何處の隅にどう潛んで居るともわからぬは情、それからここに三月四月俄にお榮さんの慕はしく、湯にも連立てば頭の物も見立てゝ貰うて、一も二もあの人でなければならぬやうに思うたが、えゝ何たる不吉の星の儂が上にめぐり合せて、すぐ離れるといふも約束づく元々緣の無かつたのか、今一度こちら向きなさんしたらと待つに本意なやお客様のお入來とおぼしく、駈けるやうにして上つて往きなされた、內からお友さんの呼びなさんしたでもあらうぞと、來かゝりし河岸の柳の唯一本、わかき綠の髮やゝ亂れて往きともなげに暫し佇めば、やがて煙の木をも人をも淡く鎖づるにそと吐く息もそれにまぎれて、この程はぬるき水の面の、見るに漸く暗くなりぬ。あゝあのお友さんも稀なよい人、儂が末のおもひくらべて目に映るやうなと、それは〳〵親身に泣いて下された、これが女中頭何分ともにと初の目見得に、其折はまだ名も知らなんだお榮さんの傍から口そへて紹介せなさんすを、おづ〳〵と雲井わづかに仰ぎ視れば濃き生際のかりがね、おそらく北向の大分の沖を越えて來なさんしたらしいに、誰やらが面影に生うつしと考へればそれよ鏡山の岩藤、無體なこと言掛けて町人の子と皆をいぢめなさんすのであらうと、元からが儂は氣弱なさうな直ぐにも逃歸りたい程にぞつとしたるに、忽ち其處に惡局が姿のあり〳〵と現れて、言葉の端々何處か身をさすやうに思ひしも、月日とともに重なる馴染おのづから本末の測られて、心してきけば根から刺のあるでもなく、さはられぬを薊といへど女なればこそ眉つくりとも呼ばれて、やさしさは是れも春咲く花表面ではきめられず、それにもやつぱり忘られぬはあの棧橋、丁度其日は火曜會のまだ何方も入らせられぬ晝の事、流し物する儂が帶の引摺るではないかと跡から下りて來て、お前は一人つ子と口入の話に聞いたがと、どうやらしたつゞきから以前の事をたづねなさんすに、實はと言つて實は言へずこれこれと少しは取つくろうて、いづれ儂が口のぼつりぽつりとおもひ出すやうに始終を告げしに、おゝそれは氣の毒な嘸かしお前はつらからう、されどこの世は乘合舟と昔からの譬喩もある、浮きも沈みもお前一人にさするでなければ、誰しもの事と必ず胸を痛めなさるな、聞けば極樂の唯じやらくらとさへして居ればこの奉公は濟みさうなれど、見れば地獄の何とて呵責をまぬかれようぞ、四十は姥きつちりになりましたと洒落半分、何處にかまだ櫻にまじる氣で居たも三年跡、いつしか秋風の鬢に吹入りて落つるを

白鬼かと、老は初めの弱き哉まさかの事にも驚かるゝに、猶朝晩を人に使はれてやがてこの儘果てもすべき儂が上にも、頼に気の一通りならぬ辛苦はあつた、そも／＼儂がこの奉公に出たころは今と違つてお客様のむづかしく、何から何まで定規づくめとお栄さんが所作をその時一寸くさしなさんしたが、それでねと行水の話は絶えず張出しの縁に腰掛けかへ、ひとり生えの瓦松こちらが育ちのいやしいに、玉の園生の貴いは願はず唯堅氣なをとおもふ矢先、尠くも月に三度はきまり者の丹後様とて、お連れの有る無しによらず浮かれ烏のいつも夜飲みに見えたこゝの馴染の、儂にはそれらしい冗談一つ言ひなされたでなかつたが、器量は問はぬ是非買ひたい處があると唄のやうな觸出し、たとひこの大川の逆さに流るゝともこれ程なは又とあるまい、取外してはと人々のいふに儂も其氣になりて、年は十から違うたれど嫁入したをまあお前、幸福とおもひなさる歟、客とは空蝉の世にこれも假の名、正體はもぬけの殼一時の外見をのこすに過ぎず、必ずともに夏衣の表ばかりに目を留めなさるな、裏かく魂膽の顧るに今もおそろしや、卸しもする小賣もする、絲屋といへば通つたものと聞えは縢るに鮮かなれど、思うたには似ぬ主が色酒、そめてかへらぬ遊び癖の碌々家によりつかねば、商人の長くはつゞかず締括りの儂がゆかぬ前から亂れて、こゝもかしこも引負ひだらけ解くよしもなき内輪の必迫、唯一人殘りし小僧相手に留守する儂の繰廻せど、女にはならぬ暖簾の掛引たゝまる苦勞を胸にをさめて、ぎつちり詰まりしむすび玉のどう成行くかと相談旁々、折には異見めいたことの一つもいへば、えゝくさ／＼すると其儘ふいと羽織引被け、出れば歸りは日といはず夜といはず微醉の銜楊子、夏冬の物とて儂も多分の支度があつたでなけれど、枝に蛙の心懸けて茶屋奉公のしがない中から、やつとの念ひで取附けたを皆なくしたに、縫はれぬは人の口段々に傳はりて、それは手前が欺されたのだ、あんな者と言うたら流石夫婦の中、腹を立たうも知れぬがあんな者に添うて居て何日うだつが上る、離れてしまへと親なき後は兄やら姉やら、あへば叱るやうに交る／＼言うてくれたれど、運もある事さう一概にも行きますまいと、それを儂の背かなんだは心殘りといふではない、落ちたる木の實の椎とも櫟とも、まぎれぬものなら初めから拾ふに仔細なけれど、よいつもりなが惡かつたで今退いたら棄てるも同然、人のふびんは却つて襟垢の男が末にかゝりて、しばしなりとも歌三味線の浮いた岸に立つた因果、出が出ゆゑと水臭いは其筈ででもあるやうに儂が元の袖にかけはぎ、何う此うと洗ひ揚げてそこらあたりに行々噂されう、おもへば去るでもなし去らるゝでもなし今が大事の辛防時、雪より後の松の操いつかは實意の彰れて、相生のめでたきものと振返らるゝこともあらう歟と、或夜は悲しくくやしく恐しきあと／＼の、さうならぬを見て驚き起てば眠らぬつもりの身は床の裨、あてし手を其まゝに胸撫下しながら、取直す氣のいとどやきもきと儂一人があせり立つれど、肝心の男の張もなく意地もなく義理もなく乾枯らびし魂の紙風船、懷に物さへ這入ればふはり／＼と飛廻りて、息のぬけるとひとしくぺたりと元の火鉢の前、あるまじきは算盤持つ身の胡坐かきて口から出放題の大きな事ばかりならべて居るに、三方四方あきたる穴のいよ／＼ひろがりて寄せも引きも遂にかなはず、仕入殘りの品諸共詮方なければ人手に渡し、昨日を表店のさりとは錦ともおぼえぬに今日は襤褸の裏家住居、それ見ろと兄なり姉なりたがはぬ眼鏡を今更のやうに誇るに猶棄てられず、賣喰ひのさう／＼はなり難ければどうが

なして儂のせがむに、組合の書記とかいふものに男は漸く仕込みて、かつ〱ながら先づありつきし其年の冬の半、空もしぐるゝ袖もしぐるゝ儲けし兒を脇に抱きて、物思ふ夜の月は黒かるべし炭團埋けかへ、いつもの時刻の疾うに過ぎたにと出つ入りつの路次の足音、駒下駄なりしがと聞耳立つれど男は歸らず、あくる日人の來てたづぬるに此方よりこそといへば、はてなと首傾けたは譯のある事、輒ともすればやくざ男に有勝ちの不粹節どかりと遣る氣の相場にでもかゝつたもの歟、勤務の上にも大分明るからぬ始末の出來て居たさうなに、一日二日と後見よもやにひかされて待ちたれど影も見せぬは正しく逐電、何といふ腑甲斐ない人かと怨めど歎けど及ばぬに儂は家をたゝみて、額向けのならぬを知りつゝ一先姉の許へ戻つたは三年目、老先長き身のいつ迄寄食人でもすまされねば、仕合せと早く乳の放れしに兒だけ預けて、儂は邯鄲の夢の阿波屋一炊の間の榮華とて見たでなけれど覺むればもとの女中奉公、入れ直す髷の小枕もう〱懲りしに男は持たず、それなりけりの寢起をこゝに送りて其兒といふたも今では十九、この間も逢ひに來た娘をお前もそれとは察して居なさらう、器量はよからずとも儂には珠の一粒もの、根掛も指環も櫛簪もねだらぬほど猶買つて遣りたく、片親とおもふに可憐しさの加はりて儂等が勤は水の月、手にたまらぬを無理にもためてつましくするもあの兒ゆゑ、請取一通綿入一枚並々の書縫ひはおぼえてくれと、諺の夜の鶴我飼殺しの分をも忘れて、さもなき事にも側に居ねば何如か〱と案ずるより外に、あゝ儂とても何樂みのない明暮とあら〱ながらの物語、聞けば尤も一人々々に憂身の果、曰くはあると其時は思うたが隣先づ潰るゝ今度の一條、つらいとも悲しいともこの心持一つの適當まる言葉も無い、たよらば柱はこゝの旦那中間へ立つて貰うたら、今一吹の嵐の家あぶない處も又何とか、支へのつかぬでもあるまいとお友さんの力を入れて、落ちかゝる災難を手にでも受けるやうに騒いで下されたなれど、父様がもぎだうは今始まつた譯でもなし、言出したらきかぬ氣性人を人とも思ひなさらず、おれが娘勝手にするとお定りのあくたいもくたい、誰にでも喰つて蒐りなさるにさうなつては恥の上塗、どちらへも儂が立たねばとかなはぬ次第を涙に告げて、泣々暇貰うて別れたは昨日の今頃、母子のやうに思うて下されたお友さんも、姉妹のやうに思うて下されたお榮さんも、何日また逢ふとも測られぬに迷ひに他人、世界の親子兄弟が皆この通りの他人で居たなら、貧富の外の夢たりともせめては今より安からう、短いが美しく長いが醜き道理でもあること歟、たのまぬ佛は他人なり言うては濟まねど鬼は父様、たのむに却つて背げられておつつけ骨をも削られう、運と不運の境界が線なら儂は外で生れたさうな、殆々愚癡も言飽いたと猶去りやらず眺むる空、河こつそりと這ひ來る響のなぶるが如く耳に入るに、聽きともなや聽きともなや、この鐘なりときかぬ里のあれかしと思はずぞつと心裏に震へて、又叱られうぞとわづかに立ちかゝる御藏橋の袂、駈來る車を中に隔てゝ行逢ひし男の姿、あ安ちやんと避ける機會に躓きながら見るより早く呼留むれば、濱さんかと彼方よりも近きて懷懸くるに、縋らんとしたる手と手と執合ひてこゝは小高き欄干のほとり、歩むともなくあゆみ寄れば慥十三日の月の出際、唯赤く唯大きなるが東の水門に懸かりて、振向けば誰そや今宵の名のみなれども首尾の松影、猿屋町にのこれる櫓をかけて一面にかすみぬ。顔色の悪いは儂よりお前、どうしたさんしたと女は摺寄りて、親故なれば飛びもならず明日からは籠の鳥、くけ紐の

赤い青いに彩られて鳴け鳴けと知らぬ梢端に、香を戀みの誰が前にも侍らるゝのであらう、重ぬる二人が思羽のもぎ離されて、儂は賣らるるにきまりました、花も人も今こそと土手に咲きつゞき出つゞく伊達模樣、かざす扇のうかれうかれて色香に醉ふが羨ましいではなけれど、儂に限つて撫廻す風の黑く冷たく、じり〳〵と地の底深く引込まるゝやうなを何故かとそれは悲しい、盛りの春なら春らしく甲乙共に都は長閑でありさうなに、天道も片手落いかなる憎しみを受けたもの歟、繰返すだけが愚なれどお前がまだ石原に居なさんした頃、若い衆のこゝらに生ふるは孰れも蓬の風儀わるきに、煙管筒屋の安ちゃん一人は町內に交る麻の目に立ちてしをらしく、祭でもなければ夜遊びに出るではなく稼柄に似ぬ內氣者、神妙に働きなさると儂の母様が言ひなさんしたを、さうかなと見るに風釆のおのづから軼れて、不圖其儘を心に留めたが今でいうたら迷ひであらう、あのねと呼ばれて何えといそ〳〵駈着くれば、何でもないと又だまされたながらあかず顏見合せて、唯莞爾とするが戀ならば戀とは神の幼兒が一度は誨ふる戲れや、頭が病めると儂の母様が二月越しの長わづらひ、藥もきかず鍼もきかずあの時は儂も一處に逝きたかつた、命は明方の音せぬ風に揉まるゝ孤燈の光、かき立つる丁子のあれといふ間に空しく落ちて、還らぬ事になつた以來遺されし儂の闇に縋るはお前の母様、これもどうぞと甘えるやうに持込む面倒をいつでもおいでと萬事の世話、頬板貸して下さらぬか、盥をお使ひなさらぬかと繁々の出入に向前の馴染は母様の折よりまさりて、相合炬燵のどちらから寄るともなく隔てぬ譯のお前とできたを、當座は人の湯歸りにも指さす程にはやしたれど、何のあれは疾うからの約束、其內表向きになる筈と稽古所の房さんはあの邊での女作者、面白づくに觸立てたかやがては誰もからかはぬにもうお許しの出た料簡、夕月の影踏む戸口に互ひに晴れて呼交はすを、あはれとお前の母様の薄々は承知の上、嫁にほしいと言ひなさんしたにこれは大事のひとり娘、ぱらりとした目鼻立ちを三層倍四層倍、もつとにも親は見まする、出世とは女にある事迚て左團扇の歡樂も盡したいなれば、遣られませぬと儂の父様が慴體な挨拶振、にべもしべもあるどころか家には置けぬと騷ぎ廻つて、夢みし儂が悦びは消ゆるに早き春の雪の、阿波屋へ奉公に出しなさんしたにお前の母様もいつかな負けぬ氣、こちらとても掛替のないひとり息子、職人の素より四角な物は讀めませぬが、讀む人よりは稼も地道、恐らく孝行もしてくれまする、世間に若い女の種が急に切れたといふではなし、器量ぐらゐの望んで望めぬ事もありますまいと、立出でて門にあてこする腰障子の明暮、唯がたぴしと井戸流しにも顏そむけて、角突合ひの果がこゝに居ずともと今の安宅へ俄の引越、儂とお前は繪草紙に見る妹山背山、中を大川の横はりてしばしといへども流るゝ月日、逢瀬はそれゆゑ絕えたれどおもひはそれゆゑ猶絕えず、二階の廣間にお手が鳴るわづかな隙をも欄干にもたれて、つく息のよしや微かなりともまかせぬ胸の萬分一、送り風の吹分けて囁く程にはとどきもするかと、戀は何處迄みじめなものやらじれるに嚙裂く襦袢の袖、涙に色の無ければとて忘れぬを譃とは思うて下さるまい、髮結のお虎さんが媒でもあり梳手でもあり、跡嗣でもある筈の松や〳〵と呼ばれたはお前も知つての泣黑子、目にとまる取合せのをかしければ緣は異なものこれは判じ物と、其ころ人の笑うた看板書きの助さんと內々と落人節、見るかや野邊をほつき歩いて有金をつかひ果たすに、とう〳〵お虎さんも我を折つて外手町の親方を

假の仲人、近間な處と火の見下へ別に世帶を持たせたに、何がさて好いた同志のいざこざも起らず最合の箸筥、腹にあつた小いのも程なく生れたと、殊更に例に引くでもないが逃げるといふは造作もない事、寧あの通りに行くものならと常住胸臆の浮びながら、父樣も追々とる年の床屋が鏡に、髯濕めす手際りの少しは痩せた影形を我れと可憐しがる時の來ようも知れず、實のではなけれど石置場の伯母さんもあることなれば、其時理解をきかせたらと分別らしく考へたもやつぱり若氣の無分別、初めから添はれぬに定つて居たのであらう、さうと知らねば客の手前帳場の手前、朋輩衆の手前は勿論張詰める氣がね氣くばりは蜘の絲の、風の簷端に並大抵のがまんではなかつた、聞いて下され僕の行つたは去年の盆過、座敷は見習ひのまだいくらも經たぬ九月のはじめの夜、酒は名代のちびり〳〵と長つ尻の御前が漸くお立ちのあと、上の間からさげる杯盤の仕附けねば廊下に手のふらつきて、生憎それは由ある皿の重ね方でもわるかつたか、はつと思ふより早くすべり落ちて眞二つ、そんな事で通ひができるかと散々に叱らるゝうしろから、洗方の蔦どんといふが何の氣もなく覗き込んだを、内々舌でも出すかと振返りたいほどに身のひがまれて、粗忽は僕の重々詫びても足らぬものに承知しながら、それとは別のやうな別でないやうな悲しさくやしさ、寐てからの枕に前髮の毀れかゝるも厭はずひたと喰着いて、いつ迄もいつ迄も今度鳴つたら三時のいつ迄も眠られず、宵は絃歌のよそより賑しきに更けてはよそより一際寂しく、遠く響くぼつくりの此れは雛妓の睡さうなればと、夜あかしの四疊半に吟味取りの氣が附いて遲ればせのお暇、箱丁と二人が代地邊から歸るとおぼし橋そこ〳〵に渡りて新道の中程に音の止まりしと耳には定かにきゝ分くれど、心には分かぬ物の影の右左に駈けめぐりて、寧この夜を起きて居ようかと思ふ折しもぱら〳〵と一村雨、頭をもたぐれば窓漏る薄明りの全然月は隱れしにもあらず、四隣は今を夢の最中に斷れつ續きつ壁近く鳴く蟋蟀の聲、肩させ裾させと必ずなりし母樣が口癖の憶ひ出されて、何やらひやりと腸に浸み透るやうなとともに、寒さに逐はるゝ針の手元の在りしにかはらず、其姿はまぼろしの眼を閉れども猶目見ゆるに、儘僕の滅えもするかとほんに堪難かつた、それも日數の餘儀なく匿すにわづかに馴れの來たとばかり、何處でたりとも負はねばならぬ苦の薄らぐと言つては誰にもあるまい、ほつと一肩休ますか休まさぬに又も災難は降りかゝる木葉舟、かひなき身にも藻搔かせて遂には卷込む波の思惑、それなら初から沈まうにも底には底の流れ絶えず、朽ちて腐れて跡留めぬ迄さいなむが慣ひの興でもあらう、紅白粉は皆の化粧と思うたに僕には明日からの涙の種、泣くやうな中の二人でないと心裡にいつやら叱つたなれど、斯うなつて考へればやつぱり泣くが世の定め歟、善惡倶にまゝならず正氣で置かるゝが恨めしいと、齋先づうるめば眼も浥むに折柄の風のよそ〳〵しく、だら〳〵下りなる角屋敷の淡紅色の花しづかに散りて、但しはこれにも和げとや女が殤の前垂を遊ぶが如く吹返しぬ。

（明治三十年十一月作、前半畢）

門三味線

（一）

ほたけ祭り東々に一
一點る袖垣中もよく

何らぞとお言ひと敎へられてお重ねしたる手に、買つて貰ひし籠の螢の光うつくしく、過行く橋の上の町よりは夜風涼しきにおどろきて、消えらも知れぬと袂へ隱したる幼心、尊やいつも子供にてとおもへど、伸びる脊丈は衣といへども納めはならず、塵のたゝざる日も夜もなし、持ちやう一つの心に神はありながら棚にまばゆき燈明かゝげて、守らせたまへと形の神をたのむ果敢なさ、ながめは初花も蕾のまゝ開かずば、だまされて誇る色香の末、雨によごるゝこともなし、這ふまい立つまい歩むまい、這ふとも立つとも歩むとも、六つか七つか八つを限りに何故人は死なぬぞ、それ其處に敵があるサツサと逃げたが誰のはじめ、年ゆゑ汚るゝ淺ましの身は、うまれたが是非なの世にこれも因果か。又濱樣の來て下された、早う仕やといはれて立出づるはお筆とて、土一升金一升の古句も今猶通町の紙問屋がひとり娘、いづれ玉のやうなる生れ落から疵つけまいと乳母が日傘、さしかけの窓深く育ちたりしも磨くに光る親の慈愛、お待遠よと燕口かゝへて下駄穿くにこゞむ姿の、袖も袂もありあまる家の子見るからゆたかに、手をひき合うて莞爾と笑ふも罪なし、お濱とは其横町の荒物屋が娘にて、親は御恩を受くる美濃屋の嬢樣とお筆を呼ぶにも隔てあれど、隔てぬは子供同志年もお濱が唯一月ちがひ、姉さまごッこ鬼ごッこ晝はおまへが所で遊んだれば、晩にはわたしの家で飯事をしましよと、鞠にも羽根にもお手玉にも、お四ゥざくらの睦じきお七つざくらの仲よしと、自分々々にゆるしの色、あかぬ交りも子供のこととて、ついした事に馴れすぎて偶にはいさかひすれど、物の一時經たぬ間に今啼いた烏がもう笑ひ顔、これ上げうと紙の名も千代の折鶴、取替ごッこに互の機嫌直りて、雛にも七夕にも筆樣濱樣と、揃はねば淋し野邊の尾花、まねぎまねがれて十四に近き今日が日まで、稽古所の往復りにも必ず待ち合うて離れぬ友垣、姉妹の氣の結ぼれ目堅し、らか〳〵と話に實が入りて曲らんとする新道の角に、寢て居たる犬の尾をお筆の踏みしに、不意なれば犬は驚きてけたゝましく吠ゆるを此方もおなじく不意なれば驚き、路にすべりてあれ〳〵と手を取合ひしまゝ逃惑ふ折、駄菓子屋の店の緣に腰掛け居たるは町内の頭が子、巳之助とて十五六なるが走り來り、エヽこの斑めがと小いたがらの拳振りあげて逐退け吳れしに、其間にふたりは駈けぬけて遠い所から巳之さん難有うと、振返りつゝ師匠が門の格子戶あけて、あゝ恐かつたといきせき裡に入りぬ。

（二）

一絶えず變らぬわらんべの
ちくま遊の千代かけて一

喫驚したのと駈上りしお濱が膝から先きへとんと突きて、座敷の口へ投ぐるやうなる辭儀ながらに言ふを、筆樣も何をエと今こまかい一組の濟みしとおぼしく、ちよつと小休みも幸ひに長煙管手にしたまゝ、振向く師匠の年は三十を四つ五つ杉垣の生地あらく、色も香もなみの女の何處と取るべき目鼻ならねど、渡世柄あくぬけたれば見るにうしろ姿は、花千雨のひつか

け帶堅いやうでも堅からぬ藝が身を助けて、物の本にも稽古所はいつも新道にお誂へ の格子戸造り、これを畫にすれば竹窓に蕣顏時は誰かが哭れし鉢一つ、紅のが明日咲く莟の筆の文字兼と呼ばれて、平家の鳥帽子源氏の兜唄淨瑠璃にも盛衰あり、宮古路の岐れの末、今が江戸にて流行の常磐津にすぐれて聲美きより、子供を託けるに氣遣ひのない年配、結句師匠は器量の醜いがよし、蜥蜴喰ふではあるまいと遠近に名の聞えて、家筋よき弟子も尠からず、どうも家のは聲が惡いでといへば、何の聲よりは節廻しが此方のは格別で御座ります、わたしが所のはいまだに調子がといへば、それも呑込ひとつ彼方のは聲のよいが一倍お德で御座りますと、遣らず遣さずどちらにも御座りつければ、親はいづれも我子よい氣の盆正月の包物も厚く、これを彈語りの手も口も文字兼がかねし巧者、子供へ世辭は親への世辭なり、僕もとお筆は其處なる見臺近く坐りて、恐かつた事はと猪胸撫でて居るを、何處やら笑ひ出しさうな其顏から が謔らしい、過日も路に八百屋の荷が轉覆りて、そこらがお師匠樣の面よと言ひなさるを何かと思へば、疱瘡だらけと惡い事ばッかり、又かつぎなさんすナと文字兼のからかへば、それは彼處の若い衆が爾言うて哭れと賴んだ事、ほんとうは今日犬が吠えてと、さすが子供の眞顏になりてお濱の言ふに、賴まれたら此の僕を盜みとも言ひなさらうか、吠えぬ犬はおもちや屋が店へ行かねば御座んすまい、それからと哮ぬればお筆は傍から、巳之さんが來て逐うて哭れましたと、話はそれまでの事前もなし後もなし、おふたりながら明ければ揃つて十四の孃樣娘樣、いつまでか飾るねゝさまの氣で犬一疋恐いやうでは、伊勢屋は角稻荷は隅、あの物は何處にも轉がつて居る江戸の町は歩けませぬ、都合よく居合せた巳之さんとは、い組の頭が子の職、たしか十二の師走おふくろに逝かれて、こゝに足掛け五年親父の手一つに育つたなれど、何ぞといへば臍天目懸けて蒼口ぶちこむ稼業の荒いに似ず、根からが優しい質れと見えてつひぞ惡あがきしたことなく、眼のくるりとしたるは親に似て親よりも愛嬌あり、色も白し男振もよしあの儘で癖さへ附かずば、刺又梯子纏立派に跡の繼げるは請合、美濃屋樣は親父が出入場なれば、やがて筆樣の代には丁度あれが御贔屓受ける筈と、言ひさして文字兼は三味線引寄せ、撥當てゝ試して倘高いめの二の絃いぢくり居たり。

（三）

「皆なでし子の手を揃へ
優しき聲の張つよく」

さあ浚ひましよと師匠が聲のあらたまればふたりが容もあらたまりて、犬に逐はれしも理の今日は久しぶりの猿曳、僕は持つて來ませなんだとお濱の言ふを、こゝにありますとお筆はおもやひの稽古本徐かにあけて、ならぶや小娘が其文句にもある花靫はなやかに唄ひ出すに、節はお濱がおぼえしまゝを稍ませたれども、質とて聲はお筆が美し、稽古了りて左樣ならと出づる格子戸口、紐の垂れしを抱へながらに卷きつくる燕口、又犬が吠えうぞと師匠がからかひ口、三つ寄せて品玉小玉の賣聲おもしろき玉屋があとより、五步六步何の氣もなく跟いて行きしが、師匠の詞におぢ氣づきしお筆は不圖立どまり、恐いわ斑が彼處にまだ居て吠えるも知れず、何うせうぞといふ折稽古朋輩の向うより來るをお濱は呼留め、居なんだかと聞けば僕は犬の番は仕ませぬと、あくたい吐いて往過ぐるに猶心元なく、もすこし行つて見ましよとお濱に手を取られて、恐々路四五間步みし橫の路次より、倍大きなる黑のぬつと出でしにソリヤ居たと兩人は飛ぶが如く駈戻りて、あんた事言

ひなさんしたゆゑ、又居ましたと文字様が家の窓のすだれ越しに聲懸けながら、弱いと見れば噛着くは犬のみならぬ世に、こちらから行くと往復三町餘りの廻り路、あまり遅いに見て來やと出されし迎ひの小僧と行違ひに、晩には乾度と角より別れて兩人は歸りしが、燈の點くを待ちかねて約束は地藏の縁日、きんも行けとお筆は常から娘様育ちの附人ありて、居措るほどに寄添うて連立ちしお濱と路々の話に、こなひだの時雨の傘の白いのはあるゆゑ黄のを買ひしに、又してもお洒落めが同じやうな物を何本も何本も、それを插す頭がお前には幾つある、皆つかへというて遣るお鳥目と思ふか、少しは貯める氣にもなつて、お正月が來たときの足しにしろと、僕が所の阿母さんは口喧しく、全體が廿過ぎると阿父さんまでが叱られたで、今夜はお賽錢上げるばかり何も買はぬのと、何處にか恨みのあるやうにお濱が語れば、翌日見てよごれの知るゝ縁日物を買ふではない、欲しくば何なりとも良いのを宛がうて遣ると母様の言ひなされど、さりとて買うたとて爾は叱りもされませぬとお筆の言ふに、其筈貴女の家は問屋様とてお金もあり、僕が所は小商人の唯せはしないばかり、較べ物にはなりませぬと聞嚙りを其儘、それでも店に箱がある、お金のたい家があらうかと云はれて、此とは子供が詞にいづれ埒はあらず、おもちやの賣物賣る店の前に立ちて、あの紋も紫若のかとお濱のさんに問ふを、この人が何知りませうとお筆は笑ひながら振返るうしろに、巳之助の通るを認けて先刻は難有うといへば、何だ斑の事か、あの畜生尻尾を踏まれて喫驚しやがつたから吠えたなれど、ふだんはおとなしい犬どうもするのでないと巳之助は傍へ來て、濱様の帶が解けて居るぜ、おさんゐ傜所の子でも同伴のだ、氣を注けて遣れと頭の子は頭の物言、たとへば勇ましの鯉のうみしは鯉の勢ひ、登れば龍吐の振込む筒先、水は名に大江戸の微塵まじり無し、おとならしい事をとおさんが負惜言ふに、べらぼうめ男の十六はもう大人、おやぢの名代にことしの年始はおれが廻つた、これを看ろと縫詰めし袢纏のい紺とあるを自慢顔なり。

（四）

「五色いろどる寶船
　よい乘合と被來れても」

一緒に行こと誘はるゝまゝ巳之助も同伴になりて、子供同志が袖摺合はす他生の縁日、晴れねばさゝぬ傘も一流太白餡の、斜ひに店出したる角を西河岸へ沿いて曲れば、こゝにも立つや人波油煙は空に漲りて、月に二度か三度變らぬ賑ひ、住むには地藏様も都の事なり、何ものが嘗來なんだればとお筆の立寄りしは、治に居て亂を忘れず名にのこる長刀鍛冶、好くに女の子のあつかひ馴れて、選取りし半ばをお前にもと分けて遣れば、お濱は見取りの直ぐから鳴らしながら、御覽よと隣に指すは古蓙一枚大地に敷きて、袖も裾も今はこの世も破れ三味線、音色も貧ゆゑ狂ひてわづかに渡る橋のたもと調子あぶなく、何やら彈いて居る四十あまりの盲女、張上ぐれば上ぐるほど猶ふるふ聲の今宵のみならねど、お筆は殊にあはれにおぼえ往過ぎしものを立戻りて、世にあれば何れは生れしあれも人の身の果、われより幼きが傍に臥したるは手引とおぼし、乞丐せうとて習ひし藝はあることならず、いぢらしのほんの親子か、遣りましよと錢若干取出し、お止しとお濱の鶴と囁きて袖曳くを肯かずさんに渡さんとするに四邊に見えねば、これはこの度生捕りましたる鐘太鼓の音からが傳りある看板にだまされて、何處にか長六尺の鼬の口上に足とめて居ることと、今の錢は巳之助に投げさせて見世物小屋の前を、名を呼び呼び索したれど見つからず、この上お

互ひに又はぐれてはと猶眼は配りながら捨てゝ通りに出で、逆つて遣らうと巳之助は男の足の前に立ちて、一町來しころ忘れたとお濱のあわたゞしく云ふを、何ぞと問へばお參りとの事に、忘れるほどのお參りなら何うでもいゝ、溜めて置いて一度にドット拜みなせえ、喰へるでもねえ地藏樣何をお賴み申すのだと、巳之助は歩むにも手の所在なければ、袢纏の裾まくりて頭から被りつ脫ぎつ、それでもお賽錢を貰うて來たものとお濱の當惑げなるに、上げたつもりで飴ん棒でも買ふ事買ふ事と取合はず、ほんとうは家内安全、商賣繁昌を願ふのだと教はつたれど、儂に欲しい帶のあるを阿母さんが背いて吳れぬゆゑ、それでとお濱はまだ思案三分、とぼけた事を言ひなさんな、吳服屋でもなし仕立屋でもなし、何を地藏樣が拵へて吳れるものか、おれも明日から文久一つ宛三日あげたら、丁度四十五文がとこの帶が出來ようも知れぬと、明かすも正直けなすも正直、路も眞直に來しを幸ひに跡よりさんは追着いて、十六の大人が能う噂るぞと、巳之助が背をとんと叩きしときは既に美濃屋の門、もう破れたとお筆は其處に酸漿はき棄て、あばよしばよ三人三方、別れておのが家へ歸りぬ。

（五）　「おぼこ娘の振袖に浮れてふはと乘物を」

大丈夫斑は居ねえと其翌日も翌々日も、屈託なければ子供同志の馴染むに早く、逢へば必ず一言二言つい三言、それから四言五言いつとはなしの心安げに、やがて六言の向うからも聲懸けて、今日又彼の駄菓子屋の前にめんことやら仕て居ながら、兩人を見て何處へ行くのと云ふに、遲くなつたの此れからお稽古にといへば、師匠の所ならおれも行かう、お待ちと巳之助は立上りてお濱に貰ひし蜜柑の皮剝き、跡から附いて行くに頭の伊三も折々來る事、もとより其子を文字鍬の知らぬにあらねば、久しう遊びに來なんだの、見るたび脊附のおとなびて男があがつた、もうめんこでもあるまいといふ傍から、たつた今彼處でとからかひ面にお濱のいふを、又濱樣が默つて居なせえ、彼處でおれが何うしたのだ、言つて見なと巳之助は師匠の傍なる三味線取上げ、おれも習はうかと掻鳴らす音のをかしきに兩人は笑ひ出せば、これでも稽古すれば濱樣ぐらゐには直ぐなるのだ、笑ひなさんなと鳶の子の口の中々まけず、今から稽古所這入は末が案じらるゝ、それよりも木遣一節聽しなと師匠に云はれて、未ほんとに知らねえものと此れには困りて逡巡るを、何だのこゝでハニカミは要らぬ話、ほんとに知つて居ようとは此方でも思はず、父さんの眞似して見なと再三強ひらるゝに、強ひらるれば猶ほ出ぬ筈を子供の事とて、ふとしく立つる宮柱太からぬほどによいこらさと、喜六彌六に定まりし音頭の端、いたづらしう唄ふを師匠は片頰に笑ひながら聞きて、今によい聲にならうとそやすに、ひやかすから不可ぬと流石赧む顏は子供なり、歸途も巳之助を中に挾みて三人連立つて來しに、文字燒の屋臺を圍み居たる小さいのが認けて、煎つても煎つても煎り切れぬと、男と女は豆いりの口から先へはじけし灣泊、頰邊につきし蜜擦りながら喚き立つるに、何言やがると巳之助はこらへず振返りて、爾言ふ手前達も豆いりだ、何日も肴屋のおたふくと遊んで居るぢやねえか、手前のおふくろは長家評判の鐵棒引、通る者は誰でも路次に立つて居て饒舌りつけ、年が年中毒口、おかまひでないとお濱の引留むる間に、何が恥しさの袂に顏を隱せしこと疾、駈けてお筆は先へ往過ぎしが、入來しやいよと呼戾されてお濱の家へ行けば、人は皆障子の奥なるに

今日はいらず、巳之さんもおいでと皆から直ぐに硯を出せば、二階は兩人が遊び場なれと遊びもなし、可愛い憎いを仕ましよとお濱は硯取出し、奉書紙のこれははんぱなればと差ひきて、お前からと先づ巳之助に取らすれば、可愛いはお筆憎いはお濱、こんな事は面白くねえと巳之助は臆み、そろ／＼と足投けだしたり。

（六）

「兩に綻ぶけはひとは　女子をのぼすかけ詞」

おぼえておいでと横目に巳之助を睨みながら、今度は筆様よと又新らしくお濱の書いて出すを、お貸しなさいとお筆はみづから筆取り上げ、端から一々印附けしを明けて見れば、可愛いはお師匠さんと其處の仲通に名高き金鍔と、今一つは冥加なれや男巳之助、憎いは又しても犬とお濱、わたしはよく／＼意地が穢いと見えて、これにまで金鍔が可愛いとさ、可笑しい事とお筆の笑うて看返すを、碌でもないとお濱は矢庭に引奪り、破つてまるめて噛んで壁に投附け、何うせ僕は憎う御座ります、たんと兩人でおいぢめと仲好し同志遠慮薄く、すねるは一寸の事にも女の兒の遊の習ひ、手荒く突放したる硯箱の墨の圖らず跳りて、立掛けありし稽古草紙の襟に觸れば、擦ならされど八當りお濱お客子もおのづからつんと鳴る音、きゝ捨てかねて巳之助は起直り、濱濱でもねえ無理難題、もとかお互ひの遊びにした事根も葉もなし、いぢめるのいぢめぬのと詞の花に實を持つて、ひねくれて出る蔓の胡瓜、苦いが必ず薬とは限らず、斯うして居るに譬へれば憎い可愛いと、人にもよれ隔ては濱様になければ筆様にもなし、腹を立つがものは何處にもねえと、年齒だけに勝す理合、もとよりそれは承知の上の言掛りとて、犬と一つに憎まるゝ僕、わからぬは當然腹も立てます吠えもします、お前は筆様が可愛く筆様はお前が可愛し、言合したやうに兩人はそれで氣が濟まうなれど、僕は獨ぼつち仲間に外れて、今日知れたでもない根性曲り、胡瓜の尻尾で御座りましよとお濱の猜突懸かるに、だから面白くねえとおれは一度で止したに、差附けて濱様から仕出した遊び、誰も知つて言つたではなしそれ程腹が立つなら、代りにおれが極々、もつと極の憎いのにならう、ねえ筆様と振向きてお筆を見れば、袖は濱様かいつもの事とわづかに點頭きしまゝ取合はず、落散らばりし紙の小截れと今の筆とを拾うて、怒らしてお置きと言ひしばかり一心に何やら書いて居るを、馬鹿に顏の細長い筆様と巳之助の覗き込みて言ふに、おもはずお濱も見る氣になりてふつと噴飯せば、巧かろと我ながらお筆も噴飯し巳之助もふきだし、お手本無しに書くが上手と、三人共々顏見合せし高笑ひに忽ち機嫌直りて、忘れしやうなる今のいさくさ、御免よと殊更立ちてお濱のあやまるも何子供也、明日又とつがへし詞の其の明日も明後日も、こゝに久しく世は廻り舞臺、おなじことに明けおなじことに暮れ、一月二月と經つは夢の如し早う幾つ寐たらと數ふる程なく、改まる暦の上段下段、天地おしなべて春復來れば、自他平等、一方は何々の間萬よしあしも無し好嫌ひもなし、一つ宛年取るに有無を云はさず、紙鳶に男の兒の勇ましく、羽根に女の兒の優しく、遲ればせながらと申納むるもあれば、お早々と申すもありて、御慶の聲も既十日足らず聞きし頃の事、店の長暖簾の蔭に巳之助の佇めるをお筆はちらと視て、羽子板手にしたるまゝ奧よりはしり出で、莞爾と口よりも目に笑うて立てる姿、初春とて着飾りし衣は綾か錦か、押繪にまさりて唯美しきを巳之助はじろ／＼と睨上げながら、こなたには物言はず丁稚の多吉とらへて、頻りに囁き居るは何の用やら。

（七）「一色にや團扇も撥詰の
　　　誰が行司にたつか弓」

嘩多吉どんと巳之助はやがて其處に蹲踞みて、これ程おれが先刻からあやまるのだ、お前にしても不延喜春早々、ふくれッ面を態とはいへず松竹の手前もある、勘忍するに不動さまも罰は當てまい、元々投げる氣でおれが仕たではなし、雷電だのと取らねえ内の力自慢お前から仕掛けし相撲、突放すハズミに膝頭へ摺剝疵の些とやそつと、膏藥ほどでもねえこと男なら我慢する筈、それをおれが家へ突然駈け込んでの言告口、血が出たと針を棒、突いたか切つたかのやうにお前は仰々しく言ふが、鰯の腹からでも出る血何の不思議はねえ、見せたせえ今ごろは最う癒つたら、痛とは知らず親父は眼をむき出し、こゝに繁昌の長暖簾問屋は數あれど、「サ」と一口に通町でも美濃屋様は大事の出入場、御主人ばかりに辭誼するが分にあらず、よしや丁稚どのと汝と少年同志の事にもせよ、氣を附けるとも疵を附けては濟まぬぞ、粗忽は掩むよりあやまるに恥はねえ、直ぐ行けとあたまから叱られて出て來たおれだ、何日だッけ鷹この往來で何處かの小僧と、お前が撒水の懸つた懸らぬ喧嘩に、持つて居た料紙包でこつ〳〵と喰はされて居るを、横から一寸加勢して遣つた事もあるぢやねえか、お願へだおれと一緒に親父の所へ行つて、何とか言つて哭んなせえと繰返し頼みながら、傍なる荷包の藥引拔きてむしり居るに、何だつて芥にするのだと多吉は前垂撲きて、まだ其言草が譃だから勘辨ならず、お互ひに怪我が厭ゆゑ投げッこ無しの角力の約束、待つたと聲を懸けしもかまはず遮に無に組んで、捻倒し、弱い雷電もあるものと兩手を揚げて、これ見やと鳴散らしたが私は無念、成程たんとも出ぬ血おまへは自分のでないゆゑ、不思議はないと言ひなされど、人のを吸つて來た蚊の血でさへ、押潰さるれば悶いて居る、痛い〳〵若渋みようかと湯へも行かず、三年痛いか五年痛いか但しは生涯痛み通すか、何しろこれの癒らぬことには、私は承知でも心が承知せず、店に仕掛けた用もあれば早く歸つて下されと、半起ちかゝりて肯れず、何ぼお前が總菜育ちでもそれはあんまり因業過ぎる、おれの言ふのが譃でお前の言ふのが本統でも、あやまると云ふに文句は罪だ、お前弱味へつけこむ氣かと巳之助の言ふを待たず、おまへの馳走になるではなし總菜でも三度は三度、育ちばかりかお蔭さまで風邪もとんと惹かず、跡であやまつて濟むことなら、私も些投げたいものと多吉は空嘯き居るに、去りもやらず聽居たるお筆は、兩人が詞に大方知りし此場の容子、勘忍しろとあれ程頼まるゝに、意地の惡い何故肯かぬと初めて聲懸ければ、肯かれぬゆゑきかぬので御座います、嬢様までが此奴ひいきになされば、親からが稼業のとんび凧町内に伸し切つて、何處へも攫む二枚絲強がつてなりませぬ、奥の御用で燒團子買うて歸る往來中、多吉どんと呼留めるを何ぞといへば、串はおまへが貰ふのかと不斷から此奴め、私を馬鹿にするゆゑ斯んな時敵打、頭ねつこを押へて遣りますと、節々憎らしの多吉が挨拶、どうでもかとお筆の問返すに、ハイと猶勿體振りは丁稚に似ず。

（八）「未さゝ啼の摺火打
　　　石より堅い棒組に」

彌した氣ならと立寄りて念を押締、ひねくる羽子板の表は吉例春の朝比奈、丁度ことし猿隈のひくや停まかり出でしひとり立、裏は描くにも薄紅梅の疎き一枚、御當のお筆は指に其畫をなすりながら、僕にもきかれぬ事が少しあれど、多吉おまへは男の常々我強い、きかぬと斷然言つたからは一切肯くな、何と言はれても屹度肯か

ぬがよい、儂はおまへの投げた石が眉間へ當つて、酒屋の勘太泣かせた事も、ちよつと店の眼を掠めて、屋臺のお汁粉喰べに行つた事も、深川名物かりん糖賣る跡から、眞似して歩いておこられた事も、足元の小皿蹴飛ばして粗忽とはいへ破しながら、知らぬ〳〵とさんに科塗着けた事も、今こそ思ひ知つたるかと身振聲色、物干へお隣の猫たゝき附けて目を廻さした事も、通る小按摩の杖引奪つて、内の禿がと話す背後へ番頭の來たのを見て、喫驚敗亡駈出す拍子に泥濘へすべり、ふところから燒いた大福の轉げ出た事も、まだ〳〵横着なは奥から過日もおかちん偸んで來て、生の儘お小用場の戸口で噛つて居た事も、數へれば八つ九つ十六七にもない惡戯、何も彼も一つ殘さず知つて居る、縱令巳之さんの惡いにしても、おまへはこゝへ年季奉公お使ひに出た途、角力取れと誰が命けた、餘所へおまへは告げに行くほどなら、儂も父樣へ皆告げて遣りますと言ふに、周章てゝ多吉は袂つかまへ、人惡な孃樣のそれほど迄御ぞんじの事、ためて置いて今更告口は酷過ぎます、あがつた種は是非もなし爭ひ立は致しませぬ、唯お免しと嚇されて騒ぐ野狐、まんまと罠に掛りしにお筆は猶首を掉り、告げらるゝ身にはいづれ酷いが當り前、今もお前の言うた通りあやまつて濟むことなら、生餅偸み出して儂も喰べう、告げた所が父樣とて、命取るほどの小言もあるまい、安心して居やと弄るに多吉は安心せず、この通り拜みますと掌を合せて、これほど頼みますに何故孃樣、きいて下さりませぬと果は恨めしげ、何故とはおまへの肯かぬも何故、儂の言ふ事をきいたらと言ふ尾について、何なりとも此の多吉叶ひますことなら、得てしは輕業逆さに立つて、三度までは梯子段の昇り降りも致しますと言ふに、そんなら先刻から巳之さんのあやまるに、うんと一言當つて碎けるが男の氣性、勘忍せよといへばそりやなりませぬ、譯が違ふといふを遮はゞ儂もならぬ、それは御無理、儂にも無理と鸚鵡返し、問詰め引詰めの擧句多吉は負け、ヤイ巳之と言ひかけしを尤められて巳之助樣、おまへ樣は冥加の樣孃樣のおかげ樣、拙辨すればおれも多吉樣と口に解けても心が解けず、早うと促されて起つも澁々、喚にしようと再應厭がらせに佇む折柄、筆よと呼びしは母のお浦、この子のには老けて年四十に近し、着替へぬかと言ひつゝ奥より出來り、裾が揩るとお筆に教はりて漸う其處に立上りし巳之助を看て、おゝ巳之か今夜藏開きの客來、子供は仲の間で雙六歌留多大勢寄つて遊べば、汝も來いといふ傍から、濱樣も來るのよとお筆も辭を添へぬ。

（九）

「五つや三つの頃よりも
小弓に小矢を取添へて—

面白からうにといふ内も目を離さぬは背子の形振、愛らしと人の見るは菖蒲杜若較べてのことなれど、親は中々手にも足にも觸られうともかへぬ卞和が玉、抱いたり負んだり一粒種のこれを寶、鬼ケ島やらかち〳〵山やらさては猿蟹が柿の種、八年十年わが子なればぞ飽かぬ夜伽、添寢の床にわれは播卷の袖着てもこれには冷えさせまい心遣ひ、育てゝからが傍眼にしても、よその子のまんぞくなが疎ましい程のもの、わけて姿の秀れしといへば、三層倍にもおもふ娘が事、わが櫛に髻のほつれをお浦は梳上げ遣りて、店に閊さへなくば巳之の相手多吉も入れて遣ろ、たのしき初春の遊びは一人でも多いがよし、枯木も山の賑かなはなさんが頓狂、そつと置くやうにして振れど賽は昔からまゝならず、一か二か三度目に漸と小田原はわしハ—在所、物眞似はいつも外郎賣やがて京へのぼつて、慾もあまれば大津草津、もどかしがる面が可笑しいと、子供へも愛想はこゝの内儀が常、しかし

父さんに聞いてから來い、默つては出まいぞと言捨てゝお筆の手を執れば、巳之さん此度とお筆は振返りながら連れられて其儘、塗家なれば店と奥と、隔つる霞の網戸ひきしめて影は入りしに、おまへは家の贔屓役者晩にする百人一首の、宜べやま風を嵐吉といふ所、旨く遣るのと目送果てゝ多吉は立上り、相撲の仇は歌留多で取る、今の間一寸行つて遣らうと、兩人が仲も遂にこれにて治る御代、遊ぶに正月は子供も忙しく、其夜お濱は早くより來り、芝に出店の旦那が娘御、壓潰したるやうなる顏のも參られ、始めは雙六の世もおなじ旅の宿、人間わづか五十三次何らなるものかの捨鉢が圖らず當りて、却つて勝を取込む菓子も袋ぐるみ、大きにお釜をおこしと來たと明けて見し多吉が口合、笑ひさざめけど猶巳之助の來らねば、何うした事とお筆は案じ顏、呼んで來ましよとお濱の立つを、夜は女の子の爾は出ぬものと、客の手隙に覗きに來しお浦はとゞめて、一走り多吉行て來やと命くれば、遊びたいに使はれてつひぞ無い事、はいと返辭より尻輕く、馳行きし多吉とともに程なく入來し巳之助、何故遲いと皆から問はれて、手前のやうなもの呼んで下さるは難有けれどがらツぱちの此方徒等が稼業に讀書きも疎々させず、殊におふくろの亡い後は野に駒の放し飼、何かと云ふと唯寢轉ぶばかりなれば、滅多た所へ出て粗忽でもあつては、此おやぢが濟まぬと出して吳れず、それゆゑと答へは袢纏着る身に、腹掛のつゝみかくしも無し、此處へ〳〵とお筆お濱の呼ぶに何方へも行兼ね、其處に多吉と並びて既崩れし膝を、今出がけに聞きし親父が詞にこゝろづきて坐り直したるが、今度は歌留多とお濱が一旦立ちて播きし札を、おら知らねえと巳之助は下に置くに、儂が仲間にして遣ろとお筆が云へば、そんな猾い事とお濱は諾はず、組にしましよと云ふに、それもよい、濱樣と多吉とは、聞きも了らず多吉どんは厭、勿論儂も厭、これは〳〵と傍に多吉は頭抱へぬ。

（十）

「庭の廣間の晴いくさ　勝てばや戀のにしき鷄」

それだものと撒きかけし歌留多の手にあるをお濱は投出し、自分にも厭なを儂に組めとは、筆樣とも思はれぬ質の惡い、いづれ巳之さんに限りましよと、見れば只美しき蕾の小娘ながら、あるは若枝にも薔薇の刺とてちくりとしたる詞の端、さすがお筆の爾でなけれど聲も判然せず、多吉は上手なればとわづかに言ふを、それは大人のいふおためごかし、上手なら猶の事あなたとは主家來、守らうにも攻めうにも都合のよい筈、巳之さんの知らずば敎へるに儂でもできるを、貴女とばかり極めるは合點ならずと、勝敗の歌留多に先だつ言葉戰ひ、呼懸けしお濱のいづく迄もと追詰めるに、喧嘩すまいと折柄お浦の居ねばさんのあつかひて、たとへば此の庭に此の松のあるもよしあし巳之助は何方へもつかず、障らぬは梢に月の出店の娘御と組み、口まめなれば多吉は讀手がてらと定りて、機嫌とともに皆が座も直れば、又賑かに笑の種を撒き直す百人一首、わが衣手の紛らはしき露と雪、ふり行くものと故鄉寒くも、書きし字の似つこらしきに間違ひは今一たび、御幸と逢ふことゝお手附三枚三番ほどは忽ち濟みて、いつも涙にふくろ背負ひし多吉のかこち顏や、菅家このたびは息もつきあへず二手に分れ、紅葉の錦ちらしとて膝前ませ、和田の原の一聲に漕出づるも早し海士の釣舟、御座りましたと取上ぐるをそれではない、沖津白浪と讀みながらの人に拾はるゝもあれば、身を盡してとのみ聞きて、戀渡るべきの末まで聞かず、慥こゝらに逢はんとぞ思ふと、右を左に目を配るもをかしく、我名はまだきと讀むにつれて、人知れずこそ何

處に往きたる、彼處なるは人こそ知られ、此處なるは人に知られて、人をも人つて人の命、人には告けよ人目も草も、いでそよ人々索むるに誰れも見當らず、如何にしたると一順見廻したるお濱の心利かして、お筆が袂に掩はれたるを若しやと、手を伸ばすも疾し遲しお筆も認け、ふたり一度に颯と押へて互ひに退かず、これ程探したに無いは不思議、其筈は目もくらやみは公方様とても見えぬ袂の下、匂ふではなけれど嗅當てしは儂とお濱が引張れば、知つてゝ隱して置いたでなし、いきごめば袖の嵐にこゝにも散りし花一ひら、眞先に拾ひしは儂とお筆も引張りて、實に源平なれば景清三保の谷、紐まんず勢ひ果てしなきに傍に見かねて、其一枚は除物數には入れまいと多吉の言へど、先細も先細兎角面白からねばお濱はきかず、除けたら定めしそちらでは宜からうなれど、こちらで取つたを數に入れぬ歌留多といふは、未例にも儂は知りませぬ、多吉どんおまへには筆様はお主、依怙も贔屓も忠義の内御褒美も出ようが、儂はよそのもの其んな得手勝手は眞平と、年嵩の前も遠慮なく憎まれ口をたゝく疊、ある程の其邊の歌留多引搔散らし、よしねえと巳之助の止めるを拂うて立上りたり。

（十一）

傍からむつと請消の
なくて七くせ七つ梅—

何うした譯と其とき聲懸けて入來しは子供らも馴染の文字龜、べたつかぬが常からこゝの氣に入なれば、當年も相變らず藏開きの客の取持、今一獻おゝさへおゝさへの御祝儀勞々、旦那様の前には詞からが遊ばせ上手、きまつて奥へ招かるゝ事なり、あの濱様の恐い顔色、此とぐらゐまゝにならずとも一年に一度の正月、雙六歌留多を一人でするでなければ、皆お互ひに譲葉下に居るに損はなし、うらじろと云はず面白ら遊ぶが子供は賢い、儂は立つとも腹を立つではは御座んせぬ、これが猫の兒でも爾はいがみ合はず、日のあたる南窓福壽草の鉢の傍で、今朝も仲能う儂が所の大屋のは遊んで居た、過ぎにしを稽古する昔から筆様と濱様と、よすぎる程の交情は姉妹には却て無し、他人同志の心安立から偶には喧嘩もあらうが、性は知れしもやしの三つ葉、根を持つほどの事もあるまい、何なりともお兩人の氣の合うたを、一段聽きたいと奥のお客様が御所望、それゆゑ呼びに來た儂の顏といふたら、師匠よりは後生願うたがよいかも知れねど、どなたも儂にめんじ、幸ひの事仲直して下され、ねえ濱様品物は何にしましよと、何や彼や嘗端をひく三味、流石師匠、名に書く文字も草書なるべし圓すに角立てず、渡世とて慣れし調子やはらかにいへば、初から儂が我をはるの遊び、喧嘩しようといふたではなし、今の一枚は除けずとも、濱様のになされと散らばりし歌留多選分けて折れて出る笹の竹輪お筆のおとなしく言ふに、そんならと両半らう氣のお濱は山々、笑ひたけに見ゆれど行きがかりとて間のわるく、おもひ返せばむしやくしやと子供ながらも肚癒えずや、除けうと除けまいと歌留多一枚、いつ迄かそれに拘泥けれど、主ぶる筆様の友達にもない我儘、捌きが氣に入りませぬと疊蹴立てゝ、儂や歸りますと行くにお浦も出來りて、濱様お待ちと呼留むれど顧みず、明日から喧嘩よの仲斤間放したるまゝ、横町へ曲りても尚響く下駄の音、荒らかに馳歸るに座は白け、意地つぽい兒と跡に文字龜の呟くはお浦の手前、こちらの嬢様に限りさうの譏とも知らず、解けかゝりし前帯の紐締直しながら、ほんによと嬢様は合槌をうつかり者、今迄拗居たるお濱と、つれなく見えし別れより、それ出た馬鹿つきはおまへの手元と、教はりてもまごつくに笑ひ聲の又きこえて、もう一遍のお役の遣

取りに其夜に果てしが、捨てゝも置けずと母のいふに翌日、遺し往ける菓子の箱袋つか足したるをお筆は紙に包みて家にたづね行きしにお濱は居らず、荒物屋とて小賣すれば一文が糊にも、難有うの世辭ならべながら小錢の釣錢調べ居たるは、お筆が母よりは三つほど年下、噂には氣性も名の通りのお勝、振向きてオヤ筆様、濱は今買物に其處まで參りましたれど、手間のいらぬ事もう直ぐ歸りましよ、お上りなされませと言ふにさらばと、何處のか其糊買の噂楽と入れちがひに敷居跨けば、まあ此處まで、おあたりなされと火鉢にかけし鐵瓶外し、しかも一寸手をあてゝ見て、毎度濱が上りましてと子供とも思はぬ待遇、いかさまお濱の嘗て言ひし如く、美濃屋様には御恩のあるらしゝ。

（十二）

「常聞く唄も今の身に
　思ひ當りし親の慈悲」

頂きますばかりと會釋ながら手に受收めし菓子包を傍なる茶棚の上にお勝は置きて、あなたの父様母様、夜分にもと仰有つて下さいましたなれど、春も暮もほんの心持うるさいは小商ひとて、床延べて這入つたばかりの表戸割るゝほど敲かれ、夜深けさふけ寒いとは思ひながら商賣冥利、附木一把に起きもせねばなりませず、斯んな所へも何の年取るがめでたいやら、年頭の御祝儀と號たらけの海苔包一帖でも持つて來らるれば、平生疎遠なのほど世辭のひとつも餘計に言うて、居催代りと出した酒は良人のが御ぞんじのなる口ゆゑ、誰の顏見ても儲からぬ儲からぬで、きまつた叢話も相手に依つては長たらき、かき玉と名ばかりは上品なれど、薄下地の中に泳いで居るやうな吸物拵へるにも、跡仕舞をかけてつい一日は費えます、近間に居てぞんじながらの御無沙汰、お世話になるより外知らぬやうでは御座りますれど、其處にあるいろは和歌貧乏暇無し、どちら様へもあがらぬ頭と、起つてうしろの佛壇より取下す鶯餅、老いて猶嗜るに題目探まず、こゝの主が凝りの一代法華、誰の口より勝の口は出逢ひし者の御難と知るべし、あなたには珍しうもないもの、ありさへすれば濱が口へ、未仕舞はぬを珍しいと思うて、お厭ならずばひとつ召上れ、昨晩もお邪魔致しましてとはお勝の言ひかけしに、切れ目待ちしお筆は内氣の育ち、濱様の昨夜氣に入らず怒つて歸られたれば、行つて來いと今朝母様の言附け、何うなされしと初めて言へば、煙草吸ひの俯くにおのづからかぶさる半天、襟にお勝は手を遣つて直しながら、又してもあれが癇癪、道理こそをかしい昨夜の容子、怒つて歸つたと家では知りませねば、面白かつたらうと云ふに返辭せず、何交ぞ語つたかと聞けば知りませぬとのみ、其儘寐てしまひましたに何へば何うもならぬ子、這ひ這ひが漸との頃から御機嫌を取る砂糖豆、甘過ぎる親父が掌に載せるやうにして仕附けましたれば、かいぐりかいぐりトット言ふ事をきゝませず、傍から僕が一言いへば此頃では直ぐ口返答・あのものものとすねし擧句はお定まりのおどし泣、涙でなければならぬ事に思うて居ます、修業とはいへ兄は年季奉公、妹は家で遊藝でもないと人様の思召しませうが、おぼえた事に損は無いと親父が肩入れましてあゝして置くを何ぞの恩のやうに、お稽古お稽古にかこつけて飛歩き、明けたればこれもう十四あなたと違ふ生活と知らず、手助け一つする氣もなく仲能うして下さるに附入つて、折角呼んで下された歌留多は自分も好の事、外なら知らず貴家へ出て、子供らしうもない氣に入るの入らぬのと、怒つて濟む事では御座りませぬ、親の眼にもあまる片意地、今に歸りましたらといふ時恰も歸るお濱、只今と襖に入るを見るより、筆様の先刻にから待つて居て下された、聞けば昨夜おまへは腹

立て、留めらるゝを振切つて歸つたさうの、爾とは知らぬ僕等にまでぶり／＼と當り散らし、それをよい氣の朝寐髮とくと考へて見や、怒るを可愛がつて下さるお濃屋様か、これこゝに筆様から頂いたお菓子、斯うして迄尋ねて下さるを何と思ふぞ、お詫も申せお禮も申せと母の眼めつくるに、しよんぼりと居縮まるお濱はひともと菫、紫の襦袢の襟にうなだれしまゝの顏埋めて、返すに詞嵐のあと弱り果てし姿なり。

（十三）　一柳はませた振袖の
風にゆらゆら表向—

あのそれはと少時ありてお濱は小さき花の脣、開かんとするをあのではない、ふだんから善いも惡いも染めし絲の絢強く、こんがらかつて出るがお前の癖ゆゑ、ちよつとしても意地を結びツ玉、貫く氣でも術はさゝぬ針の穴、横に世間は通られず、いづれは拔いて棄つるか、切つて接ぐかの二つに一つ、灸は今こそすゑぬ其足にすゑられし頃の事、折檻も親が情の內あつい味おぼえて居るなら、偶には憶ひ出してみやま樓、花簪が何日まで插されう、人の振見てわが枝振若木の間に氣をつけて、些とは自分にも直す料見、持つに髮ばかりが振ではない、動ともすればそれはこれはと、今も腫らした口答へ、お前等の怒らうとも、何處に[illegible]蟲ともおぼえず思はがらう、あやまればよい事と心掛けてお勝は聞かせず、傍に見るお筆は氣の毒がりて、詫も[illegible]もあらためては要りませぬ、御內儀様の怒つてでさへなくば、もとより僕に論は無し、氣の立つは勝負事の習ひ、一言二言昨夜は僕も言うたなれど、これが仇敵の顏背け合ふといふではなく、幼立から互ひに隔てぬふたりが中、何ひとつ今朝となりて肚にのこらず、水にしましよと解け易き春の氷、むすぼれしお濱の此れから屹度と、つれて流れて母の前に手を突くに、纔かに和らぐお勝の面、お遊びとお筆は勸められて登るいつもの二階、今何處へ往つたのとお濱に問へば、紅買ひに通まで、大抵はお父様が出た序、下村で買つて呉れるのなれど、何有るとおもひしに切れし間に合せ、焦けて良くないとお濱は文庫取出しながら、あなたのはと問返すに何處のか僕は知らねど、先の番頭の此程は京とやらに在りて、飛脚たのみて送り來し小町紅、徒らに費ふまいと何日も母様の塗けて下さるとお筆は答へて、御覧よとお濱の出す男人形、又買うて貰うたのと言へば、いゝえ此間淺草の禿の伯父様、僕へ土産と持つて來て下された、着物は僕が[illegible]行の羽子の殘り切、伯母様にねだつて拵へて貰うたれど、帶が未ないゆゑ其儘仕舞つて置くの、ふつくりと口元の愛嬌、誰やらに似てとお濱のいふに、誰にとお筆が手に取りて瞻むるを、巳之さんにと聲に一際お濱は力入れて、爾言へば何處かとお筆のいふを待たず、何處かよりはまる／＼生寫し、風采は丁度好し絲鬢奴、巳之さんは貴女のほれて居る男、この人形も可愛がつて遣つて下されとおとなびし口振、搔廻す文庫の底の物ありげに言ふに、濱様の憎らしい其んな事、巳之さんは家へ出入りの頭が子、おとなしいとて皆が贔屓にすれど、ほれて居るの居ぬのとお稽古の文句ではなし、何んなこと歟子供の譯も知らず母様の聞かれたら、僕や叱られねばなりませぬ、もう言うて下さるなとお筆は手に持つ人形、下へはおかず猶ほ膝へ置くに、もう言ひませぬ今言ふばかり、叱らるゝも巳之さんゆゑなら苦になるまい、隱しても花は簾越し、容子に知るゝとお濱の押返せば、嘘々容子に知るゝはお前こそ、いつぞやも態々袂へ蜜柑入れて……て、途に巳之さんにこれ上げうといふたを、……なれば僕は知つて居る、一體何うしたが……と尋ぬるやらなお筆が言葉、それは……考へて、たゞ好

き・・・・くもあらず。

註　[illegible]の[illegible]分は[illegible]作の[illegible]り居れる所[illegible]破れ[illegible]り[illegible]、文[illegible]なり、七九[illegible]いて、一[illegible]、[illegible]れたの、と少し、な[illegible]らの[illegible]にてあ[illegible]へきにや

（十四）　蝶々や御室の花盛り　浮氣な蝶も色かせぐ―

髪結うて貰はねばとお筆は別れて梯子下りながら、後刻に誘ふよと中程に殘す一聲、見れば薄すらと日は元の通りさしたるに、ぽつ〳〵と降出す氣まぐれ雨、風も東側の軒傳うて草履穿きし子の急ぎ行くに、今朝幾度か鳥の啼いたれば間もなく晴れう、駈けて歸ろとお筆のいふをお勝はとゞめて、傘ひとつ貸さぬと母様の思召すも知れず、美濃屋の嬢様が雨の中駈けるも品わるし、持つておいでなされませ、まだ此れが優しと出すはお濱のなるべし、そんなら今程お稽古の行きがけ、返しますと請けて開けば、小僧どんの序でもあつた時、何の急がうでは御座りませぬ、どうぞ父様母様皆様へ宜しうといふを背後に聞きて、さよならとお筆は二足三足不圖出逢ふ巳之助、頭おさへて雨に飛ぶ濡燕、塒貸さうにお筆は呼留め、入れて上げうと言ふ聲きゝつけしお濱、家は向なれば横手の窓推明け、狐の嫁入たんとは降らず、筆様今の事態ら似合うて二階より瞰下すに、あら厭と看上ぐるお筆の何とも知らず恥しく、簾に散るもみぢがさ隱さんとするに風の吹きつけて、顔と袖に一ト沫濡れます色、次第にあかるく空もなりてちぎれし雲の足諸共、わが家の門に行過きしころ、傘つぼめて仰ぐに店から奥へ、おやもうあがる雨なり、正月も暮れ二月も暮れ、やがて謠にすら誰も來る花の三月、酒の名も色盛りの香に醉ふ櫻狩、鳥も歌へ蝶も舞へ世は太平の都の春の光、今がといふに文字兼は例年の事弟子引連れ、豫てより松川菱染めし紋も揃ひの手拭、面に汗をふく風そよ〳〵と麗かなる日を選みて、けふを一世の晴の粧ひ、小野とはおのが娘の跡から、隨いて行く親の氣に古今一、そとわに歩く小町もあれば、差詰おれがの若い衆も在原もどき、光らすなり平前揃合はすに、これ程氣障は稀代もきかず、こいつ四文は大きに康秀と、下戸は途から團子の横啖ひ、まるめて頭に吉原かぶり一寸一ぷく煎じ茶の喜撰に似たるもあれば、かつぎし樽のつのる文句、今に上戸は口駄をまく遍照金剛、足元もよろ〳〵鎧に見立てし手習草紙、洗へど黛はつひに黒主、飛んだ目に大伴と躍めて明日吹くもあるべし、老も若きも獸交ぜつ是れや六歌仙、詞花言葉のつらぬる袂色紙の如し、[illegible]へるはこゝに雲の上野に觀花の催し、お筆も行きお濱も行き、巳之も行けと師匠に伴なはれて、むらがる頭の黒門前に向到るに、上見れば花の山花笑ひ、下見れば人の山人笑ふ、遠きはまねき近きは薫る、花も人も匂ひは實に百萬の大都かた、其處なるは何れの殿ぞめぐらしたる幕すこし離れて、文字兼が一連も地に鋪く花毛氈、うしろに遲櫻の今から開く割籠、はしから猪口の廻り遠しと果ては茶碗酒、耳は拳より亂れはじめて、狐に獵人庄屋の日待ちと三味線き鳴らせば、子供等は山から山を鬼ごッこ、小さ過ぎると除けられし蝶々髷に一片二片、落來る花の木の下逐ひつ逐はれつ、それ筆様が捕まつた、鬼よ〳〵と囃されて逃げそこねしお筆、はにかむは常からの途方なげに誰れをぞ逐はへんとする前にスックリと立跨がれる醉漢一人、これも花見に去來が句の何事ぞ長刀、面も朱鞘の嚴しきにお筆はおびえて、儂はもう拔けますといふ傍近く來し巳之助、代つて遊らうといふを夫れは不可ぬと、隔てたり文もお濱の。

（十五）　―斬込む刀もぞ戻つて　落花微塵に八重櫻―

いゝおやねえかと扱きし手拭の両端両手に

つかみて、くる〱と廻しながら巳之助の言へば、菅原様のお濱めと一しに振子の片袖、よりかゝる枝垂櫻のこれも風に花の首ふりて、捕まつて抜けるは鬼ならねば、傍よしの師匠様に傍とて代らねてはなけれど、逢ふにも逃げるにも上手下手のあるのが可笑しさの鬼ごッこ、お互ひに代り合うていゝ事なら捕まる迄もなし、初めから鬼は彼れいはず、巳之さん一人と極めて置いても濟む筈、それが何の面白からうと云るに、父と口にこそ言はねお箏は避けて、誰やらが手招きするまゝに其處を去れば、だから濱様は嫌ひだ、文句ばかりいふと巳之助も退ひては否はず、何うせねとお濱も稍と拍子抜けして、興は是れより降りし雨の花、とめて皆散らんとするに傍に老爺の、師匠が奧の御新造様といふが見かねて聲かけ、怒るまい事花も笑ふと和めしに、もとより子供等の遊びたい一心、さらば稽古とお箏をも呼入れて復立上れば、おれが鬼と名乘りかけし巳之助は胸に一物、ありあけ櫻夕櫻香匂か散花の樹間くゞりて縫ふやうに逃げるお濱の跡のみ、わざと逐ひすがりて袖捕へしに、僕ひとりを目の敵今のを意地に持つてか、僕はぬけます、巳之さん代つてと氣取るに早く、ねぢれる枝にも咲かす理窟、つかまへには容赦なし誰でも鬼、代つてはならぬとタッチ、今お前は言つた、おら聞いたと巳之助のきかぬに續きかけ、言つたとも言つたとも、當り前の事を當り前に言つたに不思議はなけれど、今のはおまへの當り前でなく外の人突退けてまでも、わざと僕を追駈けてと皆まで聞かずに、逃げればいゝと巳之助の言へば、逃げようにもおまへは男僕は女、あゝして懸るに捕まらぬ筈はない、ぬければそれ迄と小娘も嘯く虎尾櫻、ふまへて動かぬに巳之助は塞りて、ぬける奴があるものかと餘儀なきまゝの捨臺詞も、誇りかけし勢ひお濱は捨てず、それでは師匠様は何うしたもの、捕まつてぬけるは僕ひとりか、おまへは師匠様が好きゆゑ捕まれずとも代る氣、嫌ひの僕は捕へても代つて呉れぬの、ようございます澤山お嫌ひと拗ねし一言、つまらぬ事をと巳之助はあくまし氣色、そんなら何故僕の代りは厭、どうでも代つて貰はねばと邪せつく折柄、スハや喧嘩、逃げよ逃げよと四邊の騷がしきに振返れば、最前の醉漢が幕覗きして事起りて、言葉戰ひ無益なりいざと引拔きて翳す太刀、何をと幕の内より躍り出でし二三の武士、血氣に逸り酒氣に逸りて切結ぶ太刀の音、見るに子供等の魂も身に副はず、われ先きと驚きおそれて逃惑ふに連れはなし、御師匠一所、お箏は何方かみふ中をわれも駈けて、一旦に三橋まで來て振りと一息、またも騷がしく胸騒でならぬ、お師匠さんはとおもはず言ひて伸上るを、分るものかと傍から引戻すに、誰かと見れば巳之助、今迄ひとりはぐれし氣のお箏か、心つけば二人しつかり、手と手を握り合はし居たるなり。

（十六）「綻びかゝる生娘と　よい道連のやさ男」

一緒とは知らなんだと握りし手をお箏はわれから密と放し、花も人も盛りの仲町角の樂みを、散らすは意地惡の嵐に似たるお侍、僕が前に醉かし眼をすゑてぬつと立たれし時、噯とともにふんと酒の香の鼻を衝きて、能うもあの息に櫻の馨香せぬこと、恐らしいと見しに案の定、露偸む蜂の憎らしき頭に無、ますを威しの落花狼藉、拔くより早く切結ぶ影は稲妻、消え入るほどに魂のおどろきて何が何やら、今にも殺される氣で一散走り、誰れと手を取るとも知らず足にまかせて、逃げて逃げて僕は漸と此處まで、來て見ればお前も息は繼はずみながら、おびえし顔色の次第にもとに復りて、直に手を遣りて簪探るもさすが女や、おら何處へか落つこ

とした、つまらねえと巳之助は額の汗を拭で共きて、筆様はあの花下に少しは濡れて居たでよけれど、喫驚したはおれ後坂が抜いたは直ぐのうしろ、斬られるおぼえはねえと思ひながらも、逃げろ／＼の人なだれに押倒がされ、見れば筆様のひとりはぐれて、おれがツレ虫ごッこの時腰掛けて居た切株、頭かうとする所へ起上つて漸う追附き、手を取つて其まゝ一目散、斯んなおツかねえ花見は臍緒切つてから初めて、お互ひに怪我のねえがまだしも仕合せ、師匠は向うへ下りたやうだと言ふに、濱様はと問へば僅一所、こゝに待つて居ても仕方がねえ、前になるか後になるか、いづれ今の太刀風に人足も散る花吹雪、飛んだ遊びが江戸にはある、話の種だ歸らうと促されて、あゝとは答ふれど氣にかかる花の雲、のこるお濱が事師匠が事、何うしたぞと氣遣ふに捗取らず、これから家まで一すぢ路、待つか待たるゝに逢ふも知れずと、言ひつゝ遠かる森の梢見返り勝にお筆の歩むに、向うは五人七人のおとな連、そんなに心配したものでもねえ、却つて此方を案じて居よう、どの道歸るなら早いがいゝとすゝめる巳之助、でも濱様がとお筆のいふを、安心なものよ悪ざかしいあの濱様、人の頭を蹴飛ばしてでも、もう歸つたに違えねえ、先刻もあれほど筆様はいぢめられながら、矢張仲よしかと頓着なし、一概が濱様は癇持、ちよつと氣に入らぬと直ぐ怒れど、儂とは手習朋輩稽古朋輩、互ひに癖を知つて見れば、いぢめるのとは儂は思はず、唯このごろお前と儂のとお筆は言ひかけて、あらと黙りしほどにもあらぬ街頭の埃、わざとらしう拂ふ振袖模様の花にうかれて、春は町にも蝶の飛ぶを目送りながら、又兩人斯うして歸る影でも見たなら、捨てゝ行つたと屹度怒るに相違無し、ぢつと看るあの眼が、儂は好きなやうで嫌なやうでと、何處やらまとまらぬ話の本末、打棄つて置きなせえと巳之助のあしらふ間に、既渡る日本橋、新道へ寄らうか寄るまいかと、立ちつくす背後に歸り來しお濱、お揃ひと大きく聲懸けて駈拔けしまゝ見も返らず、お筆は急に應さうと別れて、表と裏と大路小路おのが家々へ時も入相、今ごろは上野の鐘に、かの武士はいかにしたる、唯ひつそりと花の散らうぞ。

（十七）

一むすめ心の一筋も
男ゆゑなら曲り角一

氣をお附けと母は今から餘儀なき用達前掛締替へ、一筒賣は此の口と子供に留守をさしづも倉皇、急げば廻ると小戻りして、阿父様の若其の間に歸られたら、新場迄と言やと言置いて出往きしに、樂みあれば苦みあり、櫻花の翌日、唯ひとりお濱が店番がてら、南京玉の赤いの白いの青いの黄の、色々のを交る／＼絲に通し、指環拵へて居る折柄巳之助の前過ぐるを認け、何處へと呼べば振向きて來て店に腰掛け、お稽古はと聞くに今日は休んだの、今し方筆様の誘ひに來て吳れたれど、留守言附かりたれば出ることならず、昨日はお樂みとくツつけしやうに言ふを、爾いふ濱様も行つたぢやねえか、おればかりがお樂みかと巳之助の片頰に笑へば、ばかりは勿論それで言ふの、儂等は三日も前から氣もそらの照々坊主、何うぞと待ちし幸ひの花日和、面白う遊んで居るを邪魔なは武士が長刀、切りつ打つつに花よりも興のちり／＼ばらばら各自に草臥儲けと呟いて歸る中に、お前ばかりはおさぶらひ様々、あの騒擾ゆゑのお樂みと奥歯に物、鋏下に置きてこれ上げよかと、出來あがりし指環差出すに、何故よと巳之助は合點ゆかず、其んなおもちやは入らねえと推返せば、何故とは考へても知れそな事、いらずばおよしおとぼけでない、好きな筆様と餘人交へず、雨に蛙うれしげに手を取合ひ、二人仲よし

の僻の僕まで捨てゝと、いつも末は語るに落し水、わが田に引きつけてのお濱が怨言、聞く内に巳之助は勃然と面色變りて、何だと濱樣、もう一度言つて見なとおり〳〵と店に躍上り、兎角お前は物嫉みの悪癖、乾度衛と昨日筆樣も言つて居た、捨てるも捨てぬもあの騒動、押さるゝ踏まるゝ蹴らるゝに山に上を下、ごッた返す最中何うなるものか、筆樣は親父が出入場のお孃樣、長年ひいきを受けて居れば何ぞの時、おれにしても氣をつけるは當り前、ひとり同伴にはぐれておろ〳〵として居る手を取り、連れて歸つたに好きも嫌ひもねえ、三枚橋で少しはお前を待つたと知らず、あとから來てお揃ひのと往來中、駈け拔けながらの憎まれ口引捕へてと思つたれど、衝でもねえ町内の兒と扣へたに又してもねぢけ根性、おとなでもある事か子供に似ぬ舌長、おれを二歳の年上とお前は知らぬか、わるく放言くと承知しねえぞと稼業の氣早、詰寄る權幕のおそろしきにお濱は喫驚、さほどの心にもなければ跡に退りて、今のは僕がほんの冗談、本氣でもあるやうに巳之さんの恐い顏して、隔てぬ中に偶の言過ぎ、其んなに睨めずとも勘忍々々、あやまると言ふに巳之助の面も直り、冗談も品に依る何ぼ子供とて、聞きえては外の事と違ひ美濃屋樣へ濟まず、二度と言ふな言ふとこれだ、お見舞申すぞと拳の早業、突出して店口に片足ぬぎし草履引寄せ、立上らんとする所へ新道より歸るお筆、何うしてと尋ぬるに何でもないのとお濱はつゝめど、遣附けたのだと巳之助はつゝまず、又後向とひとりは右ひとりは左、殘るひとりは素足のまゝ戸口出で、雙方の後影目送分けて、良久しく敷居の上に立ち居たりぬ。

（十八）「桃や柳のいたづらに
　　　色香たがひに爭うて」

何だつて氣の早いと目送果てしお濱はやがて裡に入りて、ひろひし絲屑まるめつほぐしつ、舐めしまゝ片端口に片端手、中程を指にて彈くに鳴る音をかしく、しかも何やら囁語むるやうなる表に八百屋が聲、來たらばと母が出がけに言附けし京菜二三把、お錢は今わからぬと置かせて臺所へ運ぶ程なく、父も母も一足ちがひ歸り來しに、間は僅なれどもまゝならねば籠の鳥、御苦勞といはるゝを子は恩にして、放さるゝより早く飛んで出るを、何處へと問はれて筆樣が所へとは、今迄おぼえぬ喧嘩のこのごろ度重れど、さのみとは自分等が心におもはず、濟し谷の小川底迄すきすく幼友達、かき濁すもよどまず直ぐと流れて、互ひの氣々もすむとおぼしゝ座一點のこらぬ諍念、其後も巳之助と折節行逢ふに、何處へ彼處へのいつもの挨拶、胸に隔ての雲なければ晴れて澄らす月の笑顏、同じことに日を送りし其年九月、文字節が秋の温習とて、夜は男師匠の若い衆が込合へば、いまに一本の女師花嫁ツ子は晝の事、藝も磨く化粧も磨くに、われ落ちにきと語物はかねて師匠の定めて、ぴら吹上ぐる風に競うて入來る子供等、待間うつぶく姫百合のしをらしき、垂るゝ前髪そと撫でるの可愛らしき、さては能う馥香る女の萬、うらみたらしい口桔梗やら刈萱やら、小いのが噛り着くぺん〳〵草も立交りて、あれ又泣くは誰もお煙草盆、何處へでも出しやばる稽にと、あちらに一組こちらに一組寄合へば喧すし、年嵩なるが床離れて、順の來る間三人四人窓近く集れるに、連立ちて入來しお筆お濱、つつみし物を師匠が前に置きて其處に加はれば、おめかしと坐るを待たず隅から一言、誰亦とお濱がいへば貴女だよと二言、それでも阿母さんが言葉數欠第に殖えて、年は年だけの鷺の出來から、縞柄のよしあし下駄のはやりすたり、伯母樣に連れられて觀に行きし芝居の噂など、

それ〴〵に點を打紐の解けしも知らず、帶留のくゝりなき話も其身は乘地、このお淺ひから筆樣は忙しく、二道かけて裁縫のお稽古とお濱が言ふに、何處へおあがりと聞かれて此先のとお筆が答ふれば、あすこなら此中僕も行きます、初は向うの仕立屋へ行きたれど、店に逐はれて敎ふるにぞんざいでならず、先ごろ取りかへてと言ふはこの内の年頭、濱樣はと尋ねるに僕は未わからず、いづれ少しは習ふのなれど、内で阿母さんが敎へて呉れるかと思うてといふを少しどころか唄や三味線より、第一は裁縫をたんと習はねば、お嫁入してからの道が足らぬと、僕の家では阿父さんまでがやかましく、遠からずこゝはさがる筈、あなたとて女の身の早晩御亭主も持たうものと、言聞かせ顔なるにお濱は例のきかぬ氣、お嫁といふが其んなにむづかしくば、僕は行かぬばかりと負けまい迄の減らず口、一生行かぬなら尼かと彼方も默つて居ず、尼でも飴でもおかまひといへば、尼が常磐津は入らぬ修業、ねえ筆樣あなたはお嫁に入らつしやらうと言ふ傍から、筆樣は物持のひとり娘、お嫁ではないお婿樣と今一人が添口、お嫁に行くは仕方なけれど、お婿樣の來るは何だか可笑しいやうなと、嫁婿の譯も知らず又ひとりの子の言ふに、それに筆樣は婿にはとられず、お嫁に行きたい所がタッタ一つと、いつもの事に仔細げのお濱が言葉、何いふやらとお筆は窓に凭れて、氣にもとめず外ながめ居るを、子丑寅卯辰の次は筆樣何、今もそれ其處通つたと背後より搖すぶるに、又濱樣がと忽ち振返りてお筆は打つ眞似、其手をお濱のちらと見るより、人に今からかはれしをお筆に當りて、筆樣おぶち澤山おぶちと、事あれかしにお濱が咲かす喧嘩の花、根を持ちかけてサアと摺寄りたり。

（十九）「こなたも胸は篝火と　悋氣の角の橋姫や」

でもお前がと假名書のお筆は優しき係り結び、おほかたの天仁波も口の内端娘言葉寡く、そんな事言ひなさんすゆゑと手を引くに、ぶつ眞似睨む眞似は子供が中に珍しからず、常は自分の事ながら兎角このごろ角目立つ鬼蔦、何をか根に持ちて軒から軒の行掛り、弱いにつけこみ猶摺寄り、其んな事とは何處までも搦むお濱、巳之さんが事をとお筆のいふを、いつ巳之さんと言ひましたと横に車、おしろいしたる顔あかめて、辰の次は巳よ巳とは必ず巳之さんが事か、納豆屋に明け油屋に暮るゝ都大路、豆腐屋は日に三度も通ります、何も僕から指したでないに、ほれて居れば見るもの聞くもの、皆巳之さんの事のやうに當推量、これだもの言はなくツてさとお濱が賣詞、又お定りのほれた腫れたと、僕や何んな事やら知りませぬ、何彼に濱樣の噪いふから見れば、多分はお前こそと爭はぬ氣にも、こらへかねしお筆が買詞、喧嘩は屋根に烏のすること、彼の年頭のが喙容れて、埋地に霖雨のしたではなし、ほれうと惚れまいと入らぬ穿鑿、子供が身の額に筋、張合ひもないと止むれどお濱は止まらず、いつでも筆樣のわが都合に依つては、僕に着綿のまる〴〵くるむ黄菊にも白菊にも、隠すほど顯はるゝ袖の薫、巳之さんの事といへば何差措いてもかばひ立は今春の歌留多でも知れて居る、おもざしの似たと聞いて取上げし男人形、下へも置かず瞻詰めて居たは誰れ、ことによらば僕もほれて居ようか知れねど、相合傘でまだ表も歩かねば、花見の同伴を途へ棄てゝ、兩人手を引合うて先へも歸りませぬ何ぞといふと仲よし仲よしと、それは口先ばかり今では僕より巳之さんでなうては夜も日も明けまい、言うたが筆樣には大事の人、勿體ながらうが多寡が菖の子、巳之公と呼ばうにも僕は何でもなし、問屋の嬢樣にはよ

い釣合、それで打たるゝなら寧本望、何處からなりともサア御縋、ぶつ氣なればこそ擧げた手、今更引込ますにも及ばず、阿母さんの尺に毎日打たれつゞけの僕の物差、ぶつて癒ゆる貴女の腹なら、お打ちお打ち存分おぶちと身を押當てるに、筒ではとばかり蹶へ下りて、唯當惑けのお筆の面色、かまはぬ氣の年頃ゆが暫し傍に觀て居たるも、朋輩の事さすがに捨置き難く、きかぬが憎らしさのお濱を睨て、今も連立つて來たほどの兩人が中に、これは又濱様の何うしたもの、筆様のおとなしいを幸ひと突懸かる猪の牙、むきに嗔るに見た所では理のあるやうで、原因は濱様の言出し主、自分の事は棚へあげて、今にも喰着きさうな其聲からが外聞わるい、縦し誰と彼と仲能うしようとも、自分にさへ痛い痒いがなければと未言了らぬに、餘計なお世話と是れにもお濱は默つて居ず、僕は猪です哮ります嚙みつきます、突懸かりますといふを其れでは濱様、猶惡いと又一人のなだめんとするに、外聞のわるいは彼方へ行くと、衝と立ちてお濱の其處を離るゝ時、筆様、濱様、今度はあなたよとお温習の順來りて、取次ぎて呼ぶにハイとお筆は立上りたれど、衣紋こそそつと直したれお濱は返事もせず。

（二十）

一彼方へ引けば此方へも　もつれもつるゝ綾棒一

早くよと走るやうなる一聲帶を上げながら文字兼の促すとき、お筆が姿は既其うしろに立ちたりしも、只今とのみ答へて何して居るやらお濱の來らねば、濱様やと名ざして再呼ぶに師匠の前、筒までは拐ねかねてのそりとはせずつかつかと寄來るお濱、僕や筆様と一緒に語るは何故か今日蟲が好かねば、何なりと別の物にして下されと言ふに、又この子がとひそむる眉の文字兼は顰蹙詰めて、どうした風の吹廻し歟から棒、騒ぎ立てゝ何お言ひぞ、今度も筆様と掛合ひ物、將門にしてと自分から極めながら、今更好く好かぬが能うぞ言はるゝ、さては喧嘩してかとお筆をも見返りて、それにしては先刻僕の前へ、ふたり連立ちて來なされたに喧嘩でもあるまい、兎角變へるといふはお温習の延喜もわるし、お互ひに我儘は言はずッこと、文字兼の譯は知らず賺すにお濱は澁々、式程にうなづきて『忍夜戀曲者』、けい古本手に持ちて別々に床に上れど、上れば床の狹きに離れもならず並ぶ姿、おのづから袖重なるを避と見れば、お筆はほつそりと秋の蝶園に君はれしに品位高く、お濱は稍肥えて春の曠野に育ちしに、[illegible]深し、あゝかうと先刻までは睦じく縋がりて、いひ合はしたる襲衣すぐに氣も揃ひて、つめて眼こたもつ事もなかりしについ今方、かけし切れの俯けば見ゆるひとりは深紅ひとりは淺黄、争ふ色の解け合はず結ぼれし心と心、それ左行子にありと云ふと、唄ひ出す兩人がいつになく乘らぬ調子、三味線持ちし文字兼の怪みて傍から心づくれど、兩は連りに古御所ならず顔ふ聲、光圀様とわざとお濱の横向きて言へば、偖こそ變化とお筆も亦横向きて言ふに、何と申しと逢に出合はず、お腹が痛いと矢庭にお濱の飛んでおりしに、文字兼はあきれて手をとゞむれば、僕もと續いてお筆の下りる機會、揃つた揃らぬに復冴返る兩人が喧嘩、唄の間外したで澤山なを未足らぬか僕が肱へぶつかッて、何うする氣と力まかせお濱が突飛ばせば、おもはず蹌けしとこらへたれど最う堪へぬ、お前が巧らんで外した唄の間、僕からのやうにのめのめと盡を此書中、天道様も見その前で吐くにも程のある、どんな事にも僕は當てたおぼえなけれど、當つた所がたゞの癪怨、口で言へば濟むと繰返すに、嬢様々々と人のいふを鼻にかけて、小賢しい理

宿請あそんに耳聞く耳を僕は持たず、泣かぬ用心とお濱は端と一打、生れて父様にとても打たれぬ頭、手出しはお前からとお筆も一打、これはと文字雛の詰懸くる間に兩人は武者振つきて、ほそき手に打ちつ撲きつつねりつ果ては引掻きつ、お筆が髷をお濱の引掴みて放さぬを漸う推分け、何からの起因か僕は知らねど、いつにない兩人の素振御も揃はず調子も合はず、絃の音のとんと合點がならなんだ、喧嘩は兩成敗何方を何うとも僕は言ひません、何せよこゝでは温習の邪魔仔細はあとでも分らう、筆様か濱様かひとりは先へ最うお歸り、相手が無ければ出來もすまいと、睨み合ひし兩人を隔てゝ割つて入りし師匠が捌き、おちつけば熱さめてお濱はきまりわるげに、では僕はと逃ぐるが如く挨拶して、誰やら明放し置きたるを幸ひの格子戸、突懸けて出でしぽッくり右左は穿替へ、一遍は跡振返り見て匆歸り往けり。

（二十一）　「念ひは同じあすか川瀬と變り行く昨日今日一人のわるいと跡にお濱と快からぬ子の口々けなすやら誹すやら、あの子にはかなはぬと文字雛も呟けど雙方わが弟子、取分けて徳は笠恩はみの屋が愚昆着ながらも、人の見る温習の席氣の流石偏りかねて、途で又逢うてもまづい、少しの間あちらで皆と遊んでと其儘、今度の番は年がしらのと共に床に上れば、お筆は纔に點頭きしのみ猶騷ぐ胸さすりて、最前の窓の下くやしさに噛む袂、こらへし涙紛らすに皆の來て取卷き、今にはじめぬ濱様が片意地、誰とでも喧嘩が病僕も一度や二度でなし、何が其んなに腹の立つやら仲よしの貴女へまで喰つて蒐つて、一月でも逢へば姉様の癖に弱い者いぢめ、あんな憎いのもないものと一人が言へば、ほんとに濱様と云つたら、下手に扱へば燃える燒酎、氣の強いこと此上無し大人にも負けず、いつぞやも新粉屋の店に駈けて來る拍子、自分から撞突つて置きながら、居るが惡いとあくたいもくたい、つけ／＼と言つた擧句逃際にぷッと掛けし唾、跳つ返りとも何とも僕等にはたとへられぬ、何うして何うしておとなしい貴女なぞの、濱様の傍へ寄られませうか、仲のよかつたが不思議と今ひとりの一厩ぶり、恐らくはこれもわが事は棚の上らしゝ、痛かつたでしよといはれてお筆は頬へ遣る手、さして血のにじむ程にもあらず、斯んなにしてと落つる前髪、元結もぬけしを一人の取上ぐる時、年頭のが語了りて床より降來り、僕が背後へ廻りて梳上ぐれば、何うにかをさまる髷の毀れ見よげになりしに、難有うとわれも一寸撫でてみて立上るお筆、言へば僕も叱らるゝ濱様も叱らるゝ、今の事言はずにと文字雛に斷りて、其處までもと年頭のを初め二三人の言ふまゝ、挾まれて共に出でし新道の角多くは其處より曲りたれど、年頭のばかりは送らうといふを、又の日と別れて其先はお筆ひとり、蚯蚓腫れの痕おさふるに頸すこし曲げて、さりとは未解けぬ心に考へながら歩く路筋、夕河岸賣る男の行違ひさま鰮子と高く呼びしに、おどろきて振仰ぐとともに思案は消えし歟、それからの足は早目に歸る我家、それはと坐るより早く母に頬指されて、吹上ぐる風の竹簾どこの家のか、うッかりと通る横顔を擂剝疵、痛みもしませぬと拵へて言ひぬければ、軒下歩くが和女の癖痛まいでも疵は疵、油藥塗けて置きやと母様はいつも優し、ほつと其處退いて可成は見せず、中庭の縁に出でて詠むる鉢の松は父が秘藏、立てる姿に變れる色のお筆はなかりしも、聞くに晩餐すゝまず常よりはやく寢に就きしと、明けの日は婢を供母に連れられ裁縫の弟子入、自然新道への時刻かはりたればお濱に會はず、往かぬ來ぬに四五日經ちし

頃は花も秋の彼岸、けふは入とお浦は佛の事とて、できし物多吉に持たせこそれ〻龍らし序、濱様にもひとつ遣らうぞ、和女行くかと尋ぬるに冠掉るお筆、止してもと言ひたいを母は知らねば、強ひては問はず多吉出し遣りぬ。

（二十二）

一緋むくは椿白無垢は　繭のつぼみのかざ車一

路草喰ふなと日に幾たびか聞馴れし丁稚が耳、今では遊んで來いの合圖とも心得て、へえと其場は恭々しげに下へ手をかけし重包、敷居から一足そとへ出れば直ぐとぶら提げて、あいた片手に米屋の紙鳶引張つて叱らるゝにも亦馴れたり、いゝかえと念入れて教へられし口上の半分も傳へず、濱様にと投出すごとく店先へ突附け、折から町の子の竹輪廻しながら來るを見るより、おれにも貸せと引取つて既群に入る多吉、美濃屋様から何か下されたぞと四十餘の男の店にて呼ぶは、治助とてお濱が父此の界隈に名代のお人善し、毎度何うもを口癖に繰返すお勝、このほどの日和に張りし々物の針の手をとどめて、重から皿へ明暮蒙る店のおかげ、蓋にうつり紙の折る膝は丁稚にも卑く、どうぞ宜しうと出で來しに居らねば、呼ぶに多吉どん多吉どんと二聲許、用は忘れずおいと濟う多吉の駈寄りしに、このごろは一向筆様のお見えなさらず、何うかなされたでもない御容子、又ちと遊びに入來つてと言へば、其ことづては駄目の皮西瓜の皮、滑つた轉んだの入譯は私が知つて居る、まあ當分は出にくいと何の氣もなく言ふを、今聞くが初めてのお勝は何故よと不審の顔つき、何故でもないといふ時二階より下來しお濱、言ふな言ふなの手を振るに多吉の躊躇へば、早くも見て取りしお勝は振向きさては濱めが又しても喧嘩か、多吉どんお聽かせと問はるゝにわれが火元、今更消しもならず語る始末、つまらぬ事から氣の粟津合戰、鎬を削る詞のはしはし宇治か瀬田か、互ひに調子そらしたが破れ小口、どちらが負けても器量よし肌の白旗、血にこそならね蚯蚓腫れの痕押へて、誰も知らぬと云つて實は私も湯習の翌日、人にきいた迄委しい事は矢張知らぬと、じろじろとお濱の顔看ながら言棄にて衝と逃出し、それからとお勝の問返すころは通りまん中、空包頭へ載せて乙姫さんはの物賣が眞似、何處でか一度は落さねば氣はつかず、濱やと尻目に懸けて入りしお勝の呼ぶに、今に何とか言はれうと心裏に懐へしお濱、おづおづと奧に行けば貰ひし物取分けて、お前に下されたのと出さるゝに少しおちつき、手に取らんとするを何と思うてか不意の一句、さてこそはツと控へて俯く顔、しらんとしてお聞きと是聲音の先にお勝は支へ、この間[illegible]目向らからも見えず此方からも行かず、筆様の事の字一つ言はぬは可笑しいと儂は思うて居たに、多吉どんが今の話成程相違あるまい、筆様にはあの日着せて出した仕立卸し、歸つて脱いだを見るに最う綻びが入つて居た、[illegible]とでもならねど分けて筆様と喧嘩すな、何ぼ子供同志とて親御の思惑、度重なれば何うあらうも知れぬと、何彼の合圖に言ひきかせたも是迄何[illegible]、外でもない美濃屋様に御[illegible]といふは、利は薄けれど[illegible]物[illegible]かねばならず、元手なり代物なり時折は仕入れのお金なり、そのみの不自由もお店ゆるさず斷らしてお前へ下さるも些とではなし、筆様はあの通り柔和な子、喧嘩と云つてもお前から仕出したは知れて居る、[illegible]し通す氣が子供ながら儂は憎い、それでお前は濟む氣かと詰寄られてお濱は答無し、濱が筆様に疵つけもしたとこと、出て來い[illegible]に[illegible]から立ちて來し治助、飛んでもねえと言ひつゝどツかりと火鉢の前に坐るに、お前さんも平氣なものだねと是れにも向くる餘沫、おツかないと所間にて

は言へど、波荒き浮世の海漂ふが皆舟ならば、こゝの梶取りは差詰この女房とおぼし。

（二十三）　一波の鼓もはる秋の　調に通ふ四つの海一

泣く事はないと廣げし疊紙のまゝお勝は縫物引寄せ、一しづく二しづく涙ぐめるお濱を睨むやうに視遣りて、悲しうて泣くか口惜しうて泣くか、言はれて泣くほどの事何故仕出した、膝に落す露をよすが、おぼえあれば訊ぬるに答へは泣蟲めが、唯めそ〳〵として見せたで果てようか、今から美濃屋様へ飛んで行き、過日は濟みませなんだと店の衆なり奥の方なりへ、一遍通り頭低げて來いと喝し半分懲らし半分、合すればひとりの子の爲と護る枳殻垣、觸るにとげとげしきも實は薬とかや、何ぞ言はねばならぬやうに聽居る治助の衛しろ〳〵と傍より口添ふるに、子供とて外見あればきまりわるく、理には責められながら今更はいと起ちかぬるお濱、常強い氣もこれには何うも肩すくみて、もぢ〳〵と横直りの足もおのづから引込み、ぢつと復俯きし儘涙に誘はれし鼻液啜り居るを、それ見よお前にしても行きにくからう、好好んであやまり言ふものは世界に無い筈、これからは免さぬに屹度身に徹へて、女は女らしくふッつりと惡戯すな、今こゝくけたら僕が連れて行く、みツともない其顔狀いて待つて居よと叱る内もわが子、やがてお勝は立上りて先へ出るお濱呼留め、ちよつと帶直し遣るも苦勞の一つ種、ふたり連立ちて美濃屋の勝手より通るに藏に何やら片附物の今了りしお浦、先程はの禮を些許とうなづきて受け、濱樣の姿を暫らく見なんだ、このごろは筆も出ずあちらに居る、行つて御覧といへどお濱は立たず、用なき袂のぞき込みて母の背に添ふに、誠に此れめが飛んだ事致しまして、其お詫にと不取敢お勝のいふを、何事と爨婢に茶佾めさせながら顧みてお筆よとお浦の呼べど、お筆は氣を奥の間の袋戸棚の前、返事しつゝ床柱に隱れて出來らず、あの譯はお浦の未知らぬらしきに言ひそびれしお勝、何うすべきかと稍躊躇ひしも若しもの事、たとふれば忍ぶとも雪の下駄、あとより露はるれば詮なし新道の温習の日、濱めが筆樣に難附けましたさうなる始終、多吉どんに聞いた通りを語れば、それは僕も今が初耳さつぱり知らず、何のまあ子供の仕た事態々親御が出て、あやまるの詫びるのと改まつて要らぬ心配、喧嘩は子供に附物僕等が何思ひませうぞ、四日五日往來は絶えうとも何處でか逢へば、すぐと仲直りの早いが結句それも遊びの内、あの日筆が頻に蚯蚓腫れ何うしたと聞きしに、途に簾で擂剝きしと何でもない顏、爾とばかり僕は思うて居た、大概は離れぬ濱樣と筆と成程言はれて見れば、此程は一緒でなかつた容子、多吉めが男の癖に入らざるお饒舌、氣を揉ませて濟まなんだ、筆やこゝへおいでと寛ぎしお浦が言葉、爨婢が臺所にて數へし所に依るも、尠くとも恐れ入りますの二十餘りは陳ねて、殊の外恐れ入りしお勝出來るした、今度ぎり堪忍して何うぞ又元の通り、遊びにも來て下され遊びにも上げますと言ふに、默つて居るのとお浦は執成し、和女の座敷へ連れて往つて、お遊びと玆に再び友垣の中の破目直りて、前程に捗々しからぬ色の時偶見ゆれど、筆樣濱樣と互ひに呼交はすに變り無し、春は花間の鳥たのしげに笑ふ日、秋は月前の蟲かなしげに泣く夜、繰返し繰返すに休まぬは隙行く駒、友も敵も一つに載せて誰れかまはず、其年も其あくる年も凡そ二年足らず忽ち過ぎぬ。

おぼえ帳

（一）

○紙十枚ばかり綴ぢたるをおぼえ帳とて、幼きころは誰もしつる事なり。初めは犬張子を書きつけて假名ふるに過ぎざりしが、母上が賜はりし月の小遣ひの出入、戯れも石筆いくらと迄はよかりしも何々様の縁日に葡萄餅いくらより亂れて、果は武者の首二つ三つ、これは清正ぞと烏帽子の蛇の目丁寧になぞりしを、或時すこし引ちぎりて紙撚の用に立てしが、遂に鼻拭紙にをはる兆なりけり。似たるものなればわれもここにおぼえ帳と名けて、見聞くがまゝの浮世といふも烏滸がまし、都にこそ育ちたれ随筆といふ年にはあらず、興なきがやがてお話なるべしと次第も定めず、ほんのそこらの落葉時雨、窓の下に筆の遊の只かきつくるものなり。

○ことし二月、小石川の蓮華寺といふに火を放けたる者あり、渦巻く煙の裏手一面掩ひかゝれるをさりとは白川夜船、のりの道とて夜は寐るものなり起出でざりければ、山門推明けて巡査は走り入り庫裏の戸破るゝほど叩きたるに、夢の彼岸の驚かされし住持は何ゆゑの火とも辨へず、唯われ過てりとのみ跳り出づるより早く姿を隠しぬ。寺中の僧ども、住持の見えざるを氣遣ひて黒きものに頭を包み、しるしの着きたる提灯を振りかざし、ひごろ互ひに寺の名を呼び合へばにや、高き石段の上なる高き御堂の、さしも焼けほこりて火の粉は佛の庭に降りかゝる蓮華寺蓮華寺と、つゞけさまに呼立てゝ今や棟の落ちんとする堂の周圍を幾たびとなく廻り居たり。其姿、其聲、稀有なる事なりし。

○寺の名は忘れたれど駒込なり、火出づると聞くや住持は逸早く尊像さゝげ持ちて境内の隅なる公孫樹の下に壇しつらへて遷したてまつり、おのれは袈裟嚴かに掛けて側らに侍し、什具とては何一つ取出さず、經靜かに口の裡に誦し居たり。冷骨癯貌、一夜に佛二つ見たるは此時と、或人語れり。

○衣きら〳〵と眩きばかりなる老僧の、何事か出で來つる、電話かけ給ふを淺草の局にて見しことあり、似合はしからず覺えぬ。

○花の雲、上野も已に遲しといふほどの事なり。動物園前の木の下に毛氈鋪きて、僧四五人、やがて行く春の名殘を惜まんとやおもむろに茶を煮ながら、あかぬ色香を世に墨染の袖に留めて、日は暮近きに去らんともせざりしが、掌に茶碗撫でつゝ老いたる一人が、ゆたかに見上ぐる梢に、もとより淡紅の今はた褪めたる雪一つかみ、やゝ若き僧が覗き込みて散りまするてとのみあとは復言無かりし。衾を着する春風の歌おもひ出されて、さのみの事ならねどわれは忘れず。

○入相の鐘に花ぞ散りけるといふ歌ほど、やさしきこゝろの何人にも解せらるゝはなかるべし。されどもそは此歌の殊て秀れたる故にはあらず、春の夕暮おもひに勝へぬはもとよりなるを、偶々この歌主の早く世に生れたる仕合せなり。文にも詩にも歌にもさては俳句にも、先取權の利益といふはあるものなり。

○くものふるまひかねてしるしもの歌に就て、或人戯れて曰く、鼠啼は衣通姫の頃よりありしと、をかし。

○吾兄子の來べき宵なり玉子酒とは、金玉の十千萬堂氏が風流妄語と題したる句の一つなり。艶なるものとて評判高かりしも、われはいさゝ

か服し難きものあり、もと茄子漬は調へて待つ品ならず、必ず宵にと約したる男の更けて簷の下ら來りしに、かゝる時はと女の急立ちて鍋の下あふぐを、男はことさら嬉しともいはず其處に重ね敷きたる物の上にはや寢そべりて長羅宇の煙管取上ぐるともいふことならでは、おもひぞ煮ゆる茄子漬の折角煮きもきゝめなし、いづれは待宵にきみしろみの取合せよろしからねば、鮟の煮崩りの謬ならずやと、つい馴れし口もたゝかるゝなり、いかゞや。

○髯生えたるは髯のお方、眼鏡かけたるは眼鏡のお方、路行く人を恰も望遠鏡の如く見るまゝのことに言掛くるは、彼處にても貌表立たぬ家の習ひなり。世は泰平の酒の香高き男、眼も危く足も危く喘よろ／＼と通り過ぐるを、内より女の格子にすがりて、千鳥足のお方と呼べば、生酔は忽ち立どまりて、おれが事か。

○噂には何なる字すら／＼と讀みて、家一番の學者と呼ばるゝ女あり、傾城瀬川傳とかいへる赤本の茶棚の上にありしを客の取出でて、宜なる言やと此處に見ゆるは何ぞと問へば、女は良久しくながめ居たる後、むべといふ字はよろしといふ字なり。故にむべなるとはよろしなるといふ事なるべし、されども、されどもと首傾けて、この「片言や」がわからぬ。

○知らぬお方に三圓貰ひこれが御縁(五圓)になればいゝとは、一ころ落語家の繰返し唄へる所なり。いさゝかの無心を遂げたる客の許へ、浮草や流れの身は愛想盡かしも手管の一つ、扨とやの文おくりたるが、大方は宛字の妙を窮めたる女のこととて、なき縁と書くべきをなき圓と書きたり。適切といふこと思はぬ邊にあるものかな、客もあまりの可笑しさに見返り柳、吹かけられしまゝを果したりとぞ。

○さる好事家の連立ちてあやしき處に登り、探究を忘れ給ふなと言交はしたるを女聞きはつりて、さばかりの洋語われ理解せざらんや、そは難有らといふ事なるべし、何のお禮ぞと言ひけり。

○今は早十年の昔なり、二三の銀行紳士打寄りて英書を修めたることあり、志は殊勝なれど孰れも若からぬ人々なれば、物忘れしば／＼なるに師は困みしが、漸くパーレーの萬國史に辿り着きしより、片言にもあれ平生努めてこの方の語を用ひたまへと勸め置けり、或時其中なる年長者の家に相談會ありしに、おもひしより早く果てしかば、幸なりこれより教師迎ひに遣らんと主人の言ふを、皆々それ然るべしと同じたるに、なにがしの紳士のみは之れを遮りとゞめて、今日は止めたまへ止めたまへと言張りたれども、さる不熱心のことにてはと皆々の聽かざるにさらば餘儀なし、わが供をと紳士はおのれの車夫を走らせたり。およそ物の二時間を經て、參りしといふに此方へとて入來るを見れば、さても訝しや天地は昨日の天地なるに人は今日島田髷、オホとばかりの笑ひ聲に皆々膽を奪はれぬ。この師、萬國史には精しからざれどもお座附に精しく、譯讀は清元出の此鼻にかゝれど、彼のなにがし紳士の其音をいつくしみて柳橋に囲ひ置く盤なりとぞ。名を聞けば小千代、即ち千イちゃん。

○老大通は知れることなるべし。松呂といふ男至極の半可なり。さる人のもとへ何々の代金御拂可被下候と書送るべきを、御佛と書きたり。さる人可笑しがりて其由松呂に語れば、松呂あまたたび頷きて、されば忙はしきまゝ書誤りたり、げに拂といふ字は行人偏なりし。

○淺草の俚俗堀田原に、近きほとりの子供六七人あづかりて、明治の今も寺子屋といふを開き居る人あり、貧しき家の子供等の月謝とては白銅壹個超ゆることなければ、家賃なり飯料なり

の[illegible]引見るべくもあらず、傍ら[illegible]道具の繕ひを受負ひて、わづかに一人口をすごし居れり。常に子供等に訓へて曰く、文事ある者は必ず武備あり。

○母なる人の買食好きにて、これもいらぬ、あれもいらぬと屑屋が手に渡すをつね／＼見る子の歳は六つか七つか、やかましき伯父の久々たづね來て、其家の勝[illegible]の勝手わるきを、かゝるは無きも同然なりいらぬものなりと呟きしに、聞くより早く子は母に囁きていふ、屑屋に賣るといゝね。

○これも同じ年ごろの男の兒なりし、あわたゞしく外より驅込來りて、三丁目の家にてはいよいよ昨夜あかん坊の產れしといふに、さては男か女かと母の問返せば、それは知らねど何でも雙生兒なりといふ。よもさる事はと母の合點ゆかぬらしきに、でも何處かのをばさんが來て、お二人ともお達者でと言つたもの。

（二）

○花のもとにてと例の法師が蟲のよき註文も、つまりは其きさらぎのもちの皮、人の榮耀に過ぎず。霜更けて聞く櫓の聲、千鳥啼くらん冬の夜の身投の數の尠きは、新聞の記事に徵するも明かなり。死は宜しく自力なるべし、他力たる可からずとの論出でしに、さらばとて死の工夫をさま／＼と案じはじめたる人の傍より、鐵道往生こそ最も手短なれと混返す如く言ひし者ありしに、其人忽ち躍りあがりて、イヤあれは危險い。

○おもひ迫りて心中と約したる男女の南無とばかりにひとしくモルヒネをのみしに、其量の少かりければ互に手を取合ひたるまゝ、いづれこの世は夢かうつゝか、ぐつすりと唯眠りに眠りたるのみ。やがて眼覺めたる女の、はやあの世といふへ來しとおぼえて、そと男を搖起し、ちよいとお聞きよ、こゝへも豆腐屋が來るよ。此は予が幼き折芳町にありたる話なり。

○さとの雨、ゆかしきよりは淋しきまゝの事なるべし、女四五人一室につどへて、今も昔もおなじ勤めの憂しやつらしや、末しら梅の因果物語といふを、さる人の聞かせけり。香に高きこれが由來は大方の人の袖、らつし傳へて知ることなれども、序なれば左に抄錄すべし。

菅谷次郎八といふは大御番組勤役、食祿四百石を給はれる者なり。新吉原角町、家田屋の抱遊女白梅といふに馴染を重ねて、御番の暇、雨風いはず通ひけるが、延享[illegible]年間夏のはじめ、京都[illegible]御[illegible]在番に當りて、いよ／＼出立と定まりしより、其由白梅に語りけるに、殊の外名殘を惜みて夜一夜泣明かしたり。來ん年の[illegible]の末には戻るべし、わづかに一年の辛防ぞとて、詮方なければ次郎八も涙ながらに別れしが、其ころ大阪に竹田[illegible]といふものありて、巧に人形を作るよし傳へ聞きしかば、次郎八は白梅が面體こまかにかきて、それを人程の大きさに作らせ、白梅と呼びて寵愛しけり。ぜんまい仕掛にて手足動き、いさゝか人に異るなし、この製造近來御法度なり。ある夜人形と一つ床に入りて、いかに白梅汝はわれを可愛しと思ふかと、戯れに次郎八の言ひしに、眞實可愛しうござんすと、人形の口動かして答へしは、白梅が聲と違はず、次郎八むつくと起上りて、奇怪至極、われ白梅の色香に迷ひ、片時も忘るゝひまなきを狐狸の覗みて、誑かすと覺えたり、これゆゑ大切の御奉公疎略に致し、勿體なき事なり、ゆるしたまへと天地を拜し、枕元なる脇差取るより早く、人形眞二つに斬つて棄てしは、流石武士の本心なり。一年の勤務了りて江戶に歸り、兎も角

もと家田屋に行けば、白梅は相果てたりといふ、いかにしてと問ふに、何者とも知れざる初會の客ありて、座敷も面白からず引けしが、其客白梅の寢入りたるを覘ひ、胸元を刺通し、かへす刀におのが咽喉を貫きて雙方とも落命したり。おもふに其客、身に不首尾の事ありて、わざ〳〵里に入込み、科なき遊女を手に懸け、相對死ともいふやうに、こしらへしものと見えたりと、委細の話に、それは何日と聞けば、七月五日夜八つ時、即ち次郎八が人形を切りしと、同年同月同日同刻なり。あまりの不思議に次郎八は唯驚きあきれて、頓に好色の心を改め、白梅の山谷邊へ葬られけるを、本所の本行寺（日蓮宗）といふへ移し、深教院妙香白梅信女とて、塚をも築き、跡懇ろに弔ひけるとぞ。

はじめより耳傾けてきゝ居たる女の、よその哀れに誘はれて泣くほどなるが一人見えしが、翌朝辨當といふのの殘れるをつゝき散らす如く頰張りながら、前に一枚の男の寫眞を置きて、もが〳〵と口の裡にて呟くを何ぞと人の問へば、今なら寫眞が物を言ふかと思つて。

○言交はしたる男のいつの程よりか秋風立ちて、露しげき野に取殘されし葛の葉のうらみ堪へ難く、涙はこゝに片時雨の染め出すもみぢの卷紙へ、其かず〳〵を由とつらねたる末、折を見て死ぬべく候と書きしは、さとの女のおのづからなる心なり。男これに答へて、死ぬに折は入るまじく候。

○このたびは〳〵とてあやしき發明に製造場の門太しく建てゝ、屋根葺く頃には見事倒るゝが例なれば、隨つて家産は全く傾け盡し、石鹼にもあれ香水にもあれよろづ製造に明るきとともに、よろづ損失にも明るき士族出の老人ありしを、人皆嘲りて發明家といひけり。枯木の身にも今一花の心失せず、彼の壹錢蒸汽の收入夥しときゝて、二週日ほど大川緣を往きつ戻りつ、いつもながらの思を凝らしたるを漁夫ならぬ巡査の、内々は今の世の屈原とも見たるならん歟、衆醉ひ我醒めたる心算のやがて熟したりとおぼしく、懇意なる質屋の隱居が許に行きて、金主たらんことを賴み、二挺櫓三挺櫓の數を增して、八挺となさば競爭は易き事なり、晴には鷗も水馴棹、さすともなく來て舷に遊ぶべく、雨には苫を推退けて、振返る待乳の森の初杜鵑、いづれも歌によまるべし、汽船と和船と、風情のほどをも思ひやりたまへとて縷々數千言、いつ已むべしとも見えざるを隱居が遮りて、大約一艘の乘客何程一人の賃錢何程と問へば、いよ〳〵したり顏なる發明家は、吸ひさしの烟管ぽんと撲きて、それはまだ考へませぬ。

○芝居觀てもどりたる人の、團十菊五のひいき爭ひ果てしなき折柄、このほどより寄食の田舍漢口を挾みて、定九郎は出ましたかと言ふに、おの〳〵顏を見合はするばかり、忠臣藏の狂言ならねばと言へば、田舍漢は首を掉りて、イヤ彌でない、あんな惡い奴なれば、いつ何處へ顏を出さうも知れぬ。

○うづらを取寄けとて、物なれぬ書生を芝居茶屋に遣せしに、途にて書生は鶯とあやまりしも、機轉利きたる茶屋男の、こま〳〵と噛みふくめて歸しけり。かへり來りて書生は奧樣に告げていふ、先刻鶯と仰せられしは鶉の誤りなり、鶉は無き由なり、併し、併し、鷹ならば御座りまする。

○其家の車夫亦うづらを知らず、奧樣の御出ましにあたり、下女にむかひて、雀よりは些と大きいがの、よく啼く鳥があるだらう、何とか言つたつけのと問ふに下女は何の氣もつかず、鶯かえといへば、それよ〳〵、西の鶯だ、

○名のみはやさしき富といふ房州者を、わが

家に置きたることあり、今婆のかけた鶏へたるに、其有は灰皿に置いおき、腹僅にのぞみて取出し、客婆一日僅一日、葉のやうにして食へり。後温飩のもりを與へたるに、先づ温飩を食ひて、あとにて汁を吸ひ居たり。

○月見芋とはいかなるものぞ、あたり芋なり、客解せず。いかにして製したるぞ、臣をおとしたるなり、客猶解せず。いかにして食ふべきぞ、紫をかくるなり、客猶々解せず。こは予が嘗て荷車に出したるものなれども、まことは深川の或女婆に見たるなり。客の都人ならぬは勿論なれども、婢・帳場の数通りを守りたる新参の者なりし。

○夏の事なり、五目蒸しといふを或會席茶屋にて出したるに、席に在りたる老大通の、わが着たるは帷子ぞといはぬばかりの顔色、昨晩から大分積りましたなといへば、婢はとりとも知らず、それはお楽み。

○老いて醜き妓の其席に侍りたるが、あなたには何處でかお目に懸りましたやうなと紋切形のこと言へば、多分は上野の動物園でと老大通の苦々しげなるに、これも妓は遂に曉らず、この春でしたかねえ。

○なにがしの子爵殿、御ひいきの茶屋へ参られて、このきんとんは何故いつも冷たいぞ。以上二つは、あま雑にとり用ひたり。

○まぐろの土手の夕嵐、身を切賣の皿の中とあまり蛙に書けるを見て、或批評家は太く難じたり。何ゆゑとも分きかねたればたづねたるに、批評家の曰く、天下豊まぐろを以て築きたる土手あらんや。

○支那料理知らぬ人の偕楽園に行きて、問ふは恥ならずと婢にむかひ、菜單とは何ぞ、豚か鶏か。

○たえて世に疑問といふもの有たざるによりて、綽名を明治先生と呼ばるゝ人あり、婿がねのがねとは如何なる義ぞと一學生の質しけるに、先生言下にこたへて曰く、庶がねのがね、釣がねのがねと、げに明治なりけり。

○熱心なる菜食論者の、人も牛も異ることなき由を説明かしけるに、聴き居たる一人、頭をもたげて曰ふ、でも僕等には角がない。

○若き人足の足場組むを下より頭の看上げて、うまい〳〵、素人跣足だ。

○この花の色はと元我家の出入なる植木屋の爺の、垣に唯一輪の今咲かんとする薔薇を指すに、白ならずやといへば君も白しと看たまふか、われも白しと看るなり、されども昔の白しといふとわれの白しといふと、異して同じなるべきか疑はしとおもひよらぬ言葉に、それはと少々因みある事共聞かすれば、見たまへ歳は學問なりと、來る毎にこの爺誇りてやまず。

○これは新聞にありしと覺ゆ、火事は隣番地といふに一方ならず立騒ぐ折柄、障子紙門を持出す者あるを細君の認めて、そんなものは何うでもいゝよ、大屋のものだよ、これをきゝと亭主差つけて頬冠りの額覗けば、其人は大屋。

○馬喰町の旅治といふは、古くきこゆる宿なり。東京見物に來りたる男の、一夜は花のよし原に遊びたしといふに、添状書きて知れる茶屋へ送り届けたり。乗せ行きたる車夫、くれぐれも首附けられしと見えて、茶屋の内儀にむかひ、ちよつと一筆、お客を預つたと書いておくんなさい。

○廓のきぬ〳〵われもの心頻なれども、さすが友にも語りかねて、ひとりひそかに大門を入相の鐘の聲、暮れて花咲く仲の町の西の宮といふへ踏入り、何分よろしくと羅馬字入の名刺を出したる人あり、なにがしの文學士なりといへど、そは偽りなるべし。

○去年の夏、かしこに祭禮あり、神武天皇御東征の人形を造りたるさへ、眉ひそむる人ありし

に、猶聞けばわが軍凱旋のつくり物といふもありて、何々少將が儼然と立ちたる傍らの杭に、筆太にしるされたる文字は、大日本遊廓。
○女の部屋に、高貴の御肖像を掲げたるもをかしく、東湖が三たび死を決しての軸を掛けたるもをかしけれど、處柄とて最も可笑しきは、大なる額に一六居士の書にて、研精而不倦とありし事なりと、さとに委しき人のいへり。
○揷花遊と書ける額の、解し難しと一人がいへば、又一人のいふ、勘定を綺麗にしろといふ事だ。

（三）

○博士といふも人の端とや、相會したる時彼方の曰ふ、亡き何某の翁はまことに稀なる碩學なりし、されども惜むべきは愛憎の念つよく、往々あらぬ人を賞揚したりと、其語の未了らざるに此方の曰ふ、だが激く君を賞めて居た。雙方新體詩を以て長く世をなやまし、猶なやまさんとする博士なり。
○從三位樣、御歳已に七十を踰えたまひて御足元のあぶなければ、杖をと令扶共の勸めまゐらすれどきゝ給はず、軒詰めたる絨氈に躓きて廣間の口に轉びたまへるを好き機會と、館の男女打揃ひて切に諫めたてまつりしに、從三位樣嗔頭をこすり／＼皆を睨まへ、むかしはわれを駕籠に取りこめて、山青く水白き長の街道を些の便宜も與へず、たま／＼開明の世の月も花も自由なるに遇へば、忽ちわが好かぬ杖をもてといふ、さりとは御聲一段荒く、主を主とも思はぬ奴よな。
○君も人なりわれも人なり、同じなるべしとの意を、さる地方にての戲れ言に、おぬしとて××でもあるまい、おらとても大名ではない。
○そつと行く人といへる題を得て、蜻蛉の手づらまへと答へたるもよし、勘定の外といへる題を得て、小楊子の摑み取りと答へたるもよし。
○建附のいゝといへば、すかぬといふ程なるは誰も知ることなれども、一ところ江戸にて、才能足らぬ男を富津といひしは、ばか貝の名所なるによりてなりとぞ。
○赤犬黑猫といふことあり、犬は赤きが、猫は黑きが、味ひの美なればなりと。
○箔を延ばすに用ふ、故に金銀を延ばすなりといひ、粉を寄するに用ふ、故に金銀を寄するなりといふ。晦日蕎麥とていづれは慾淺き人々の、小遣ひ錢に間へぬとばかりの延喜に過ぎざれども、西と東と言ふ所異れり。
○上州は高崎の者とか、鍛冶屋の小僧の十三ばかりなるが手も足も眞黑になりて追使はるゝを、何處が顏ぞと人のからかひしに、小僧振返りて、息の出る方が前だ。
○町すこし隔てゝ辻占賣の聲、何とは知らずあはれの誘はるゝものなり、それなる小僧の江戸に出でて、一たび其聲を聞きてより歸りて後も耳につきて忘られず、遂に主家を出奔し、人の命は五十年夢よりも淡路島、大路小路を通ふ千鳥の波のまに／＼、浮世の海に何騷ぐらん戀の辻占賣となりて、春はおぼろ秋はさやかの月に一しほ聲張上げ、うれしきたよりの提灯かたげて、生涯を屹度だよのおたのしみに送りけるとかや。
○朝は淺草、晝は芝のは少しく劣れり、夕暮かけて夜は上野の鐘、最も妙なり。今はぺんき塗の間よりひゞき出づるに、莊嚴の七分は失ひぬと或人の言ひしかど、かしこの笹原茅原芒原なりしは、さのみ古きことにもあらず、強ひて無給にて住込みたる男の、わづかに山下邊の志ある人々より、飯米を得れば食ひ得ざれば食はず唯鐘撞きて、これも白髮の世を終ふる末迄やめざりしがあり、聞くにこの男妻を先立たせたる悲みに得堪へず、せめては其冥福を祈らん

がためなりしと。

○所用ありてこの猩動坂のほとりに行きしに、壁落ち柱傾き畳朽ち屋根破れて、人住むとも見えぬ家の裡に聲するに訝しければ、近間なる友にたゞしけるに、さても其あばらやに翼を張るは蝙蝠ならず、鳶とは名のみ勇ましき四十男、のそりと出でてはのそりと歸り、多くはあらぬ腹掛の底はたきて、皆酒にするもののよし、面白きはこの男、人の前にては何事をも言得ず、二才等が頤の先の指揮をも受けて、おい/\とばかり働けど、家に戻りて一盃二盃三盃目より大胡坐、壁に向ひて其日の心に滿たぬ事共諄々とならべ、漸く聲高になりて、さあおれが相手だ、矢でも彈丸でも持つて來いと、たけり立つ勢ひ凄じく、初めはまことの喧嘩かと疑はれしに、敵手はあらでいつも一人なるに今は隣も立寄らず、やがて勞るれば其儘寢入りて、あすはまた例ののそり/\と、こゝに久しく變らずとなり。

○をかしさの今に折々憶ひ出さるゝは、横濱の人とおぼゆ、旅費口路りぬときゝて、ほんのしるし迄と赤飯を警察署に持行きたる事なり。

○わが知れる人の巡査を拜命したるとき、願なるは大道に立ちて說諭といふことをするのなりと言續けしが、今日はこれより非番の歸り途、立小便する人あるを見て、わざと避けて近き横町裏に入りしに、折しも夏の眞晝なり、こゝには裸體の男、これはと元へ取つて返せば、彼處の小便絶まず。

○われ今宵、日本一の事をなすべしとて日本橋の上より川中目懸けて、尿したる人あり。

○臆病を以て聞えたる新進作家の、夜深けてひとり路行かんはいと/\危し、闇にもきらめく刃の稲妻、聲をも懸けず後袈裟に斬附けらるゝこともやと言ふに、君はさる恨を受くべき身かといへば、いえ/\用心せぬと、世間には人違ひといふ事があります。

○一里が程の渡船に乗合の誰彼、疾く汽車の通ぜよかし、櫓の音の唯ぎい/\とのみにては、急の間に合ひ難しと呟けば、船頭憎さげにこれを尻目にかけていふ、お前方は何うしてそんな事がわかる、何日汽車と船と乗りくらべなすつた。

○落語家がいふやうなる事を目前に見るは、區役所の戸籍課なりとぞ。三十許なる女の來て、もう一日もあんな人とは添つて居られませぬから、どうぞ籍をお取りなすつてといふに、亭主の名はと問へば、名なんか知るものですか、たゞ内のお前さんでさあね。

○六十あまりの老婆、送籍を願ひますといふ、籍は何處に在るぞといへば、こちらのお役所へちやんと預けて置きました。

○私の親父は何處に埋けてありますと、廿五六の若者の躍込みし仔細をたづぬれば、八年前家を出でて今日都へ還りしに、家もあらず父もあらず噂には死したりときゝて、直ちに區役所へ驅來しなり、行倒人の名簿の中に、右衛門と左衛門の唯一字違ひなるがありければ、これなるべしと假埋葬地を教へ遣りけるに、若者は[illegible]を[illegible]きて、お役所といふは難有えものだ、もう御迷惑は掛けません、それでお手數料はいか程でございます、いづれ改めてお禮には出ますが。

○あやしけれども絲織の小袖に、縮緬の羽織着て、年も三十五六と見ゆる丸髷の、これより宇都宮へ行かんと思ふなり、着かば早速爲替にて返上すべし、汽車賃を貸したまはれといふに、此處はさる事を扱ふところならずと、懇ろに區吏の諭せども立去らず、あぐれ果てゝ一錢もなしといへば、女は悄然と戸口迄到りしが、忽ちキッと看返りて、何だお役所だなんて、大きな屋臺骨をして居たがら、二兩二分や三兩のお

金が無いのだとさ、鄙吝にも程があるね。

○期満ちて廓を出でたる女の、これも送籍の屆けに來て、お粗末ながらと掛員の前へ、濱名納豆の曲物を出しけり。

○未入籍を了らざる妻の出產したるは、いかなる手續に據るべきやとの問に、庶子として屆けよと口頭にて答へたるに、認め來りたるを見れば、初子。

○何といふ娘の籍を、わが方へ入るゝとて參るとも必ず御却けと若き男の言入れて歸りし跡へ、果して其屆けあり、譯あるべしと雙方を呼出し、先づ娘より調べたるに、娘が父は髮師にて、彼男今は油賣なれども、元は其處へ出入の羅巺服なり、おもひ思はれて逢瀨の度の重りしを親は咎めず、嬉しや添はせてとらすべしとあるに彼男用意の折柄、不圖聞けば娘は已に二度迄緣づきたる事ありしも、いつも戻さるゝは夜の床しとゝに濡れて、恥は天日に曝さねば果てぬ病のある故といふに、それはと彼男も厭氣になりて、俄に療治代の一箱と轉べば、親は彼男の罹りたるを幸ひ、有無を言はさず押附けんとて、さて籍の捫著は生じたるなり、更に男に就てたゞさんと其次第を告げたるに、それには彼男答へはなくて、突然娘の髻を引摑み、この阿魔め、お役人様の前で飛んだ事を言やがつた。

（四）

○こきまぜて只一色の都の錦も、青きは柳赤きは櫻の十五區が裏を見渡せば、それ〲風俗のおのづから異るものあり、純粹の江戸つ子は今深川に多く本所に多し、深川のは魚河岸とおなじく土着なるがあれども、本所のは然らず、眼先の一寸に明るく足元の三寸に暗き江戸つ子の、これも生存競爭の理にせめられて、餘儀なく河を渡りて退轉し來れるなり。われは幼きころ深川に住みぬ、後本所に移りぬ、兩國橋より來る引越車の、見るに運好きはあらで、孰れもそれの傾きたるなり、昨日まで繁華の町に表店かまへたる身の、今日俄に勝手元の切詰め難しとや、初めは本所も入口の邊に價にていはゞ五圓許の家賃を拂ひ、それも叶はずなればこの度は中程の地に、家賃は三圓許庭の少々添ひたるを借受け、やがて又々かなはぬ果に、はじめて本所の本所たる奧深き處に引籠りて、月の屋根代は壹圓あまり貳圓足らず、めぼしきは纔に燈明皿の是れも磨かぬに光薄く、有りし昔を夜毎の夢に見て、猪口に肴屋八百屋の小言を絕たぬも果敢なや。本所の文明はつねに東に向つて漸めり。

○うなぎ繩手の名、今は全く忘れられたれども、本鄕の開化は最も新しきものなり、書生によりてなされたる者なり、雜誌と牛肉と卷煙草との上に於て進步したるものなり、さる頃よりわれもこの區の下宿屋に在り、下宿屋はこの區の勢力なり、商品は總べて下宿屋向なり、江戸つ子よりいへば本鄕は村なり、宿場なり、衣食住に就ての誤解者が巢窟なり、肩掛着たる束髮の佳人、月あかき夜を厭はず內に入りて羅紗直切りたまへば、たて掛けたる葭簀の外に黑き高帽の才子、髭をひねりて待ちたまふが如きは、到底他區にては看得可からざるものなり。

○威權堂々などいふ聲を本鄕にて聞くときは、浦里が忍び泣きすりやを本所にて聞くときなり、其差異を簡略に示すものは、錢湯と緣日となるべし。

○二三度顏見たる娘の、名を美代とか喜代とかきゝおぼえて、美いちやん喜いちやんと今度の折呼懸くれば、あいよと知らぬ人にも受答へしつゝ行くは、われの淺草に居りて見たる事なり。これらの娘、朔日十五日の休みには必ず行廚かゝへて、柳盛座若くは開盛座に入込むにお互

ひなれば誰もとがめず、さる母の娘に誨へて曰ふ、嫁ぐに身代相應なるは何時にても得らるべし、歡樂はわかき時の事なり、わかき時は二度と無し、只それ身代を撰めと。これを呑込める娘の、一旦は町內の若い衆と手を携へて奔らざるは罕なりとか。

○歳は二十になるやならずの小綺麗なる娘、母と妹と一家三人花簪を內職に、四季いろ〳〵の眺めはあれど貧の嵐の音や吹きのけて、あけて言はれぬ戸棚の裡に何一つ貯へのあるのならねば、活計の爲おのづから細々と身も心も痩する程なるが淺草にありしが、島田に、銀杏返しに、またはつぶしに、折々形に變れども娘の髮の何日見ても翠濃く、露の垂るやうなるを訝しと探れば、こは人に召ばるゝ節或處迄行きて、嬢樣風、藝者風、お妾風の好に隨ひ、一時間乃至二時間の損料着と着更ふるなりとぞ。風寒き師走の空、はや三十日といふに此娘給着てふるへ居たるが、其夜外套の頭巾に深く面をつゝみたる一人の男、前は井戸隣は明店ときゝしを心當てにたづね來り、酒すこし、肴すこし、母と妹は久しぶりの寄席へ遣られて、其歸りの路次口に出行く男と摺れ違ひしが、何かは知らず翌日の家內忙はしく、今は一夜寐て正月元日の娘が扮裝、襟のよごれも袖のやぶれも痕を留めず、さりとは俄に美々しやと立寄りて熟視れば、帶はめりんす、羽織はきやらこなりし。

○盛りは已に杉葉隱れの、花といふほどの器量ならねど、脊恰好よろしき三十あまりの女、本所に住みけり。義理は辛き世をわづかに飾職の亭主に逝かれてこゝに半歳許、すゝぎ洗濯の女の腕に糊口だけは何うにとも仕法の附けど、ことし十二になれる男の兒の尋常科を卒へたるに、今更學を廢めさすること口惜しゝと、差配捉へてしば〳〵嘆ちたりしが、いつの頃よりか此家に連込まるゝ客一人ならず二人ならず夜毎變りて、急に障子の中硝子に紙を貼りしは、覗かでも知らるべし細工は粒々、仕上げたき其兒が讀書の聲、一たびは絕えしも斯くて復續くやうになりぬ。

○稱のきたなきも姑しなればゆるしたまへ、數ある中にも彼の安私窩子なるもの、わが聞知れる所にては、人の妻ならぬは無かりしやうなり、淺草にても、本所にても。

○晝はぶら〳〵と酒の香去らぬ銜楊子、夕暮よりかけておのが女房のもとへ客を引き來る亭主の、胸毛こそ深けれ獸にもあらず、あさましき事なり。今の男の起ちかゝりて起ちもせず時移したるは、おもふに汝が引留めしなるべし何故のひそ〳〵話ぞと、これをはじめに棟割長屋の內と外にて、一夜に三度は必ず定例の如く喧嘩する夫婦、本所にありたり。

○[illegible]はさまかへ、この泥溝に住む鯰のうちにも、岸から岸を渡り者といふ出女ありて、往々家を賣出すに抱主は衣服取上げ、蒲團にくるみて品物の如く座敷に放下し置き、さあれば其處へ埋入るゝといふは、淺草にてきゝたる話なり。屋根代、飯代、蒲團代と二[illegible]僅少の中より差引かるゝにより、この女何事も力及ばず、生れながらの昔に還りて、常に素裸なり。

○兄は九つ、妹は七つ、每夜雨園橋のたもとを左右に立別れて、何うぞや〳〵の頭を低ぐれば、貰ひは平均拾四五錢を下らず、歸りて父の前に差出すに、人力車夫なる父は其三分の二を取りて、酒も上なるを唯飮むなり、殘る一分を子は手につかみて、人形燒、[illegible]燒、又は蜜豆など、たゞ食ふなり。これは無情き母親の夫に厭きて、二人を棄てゝ走りし後におぼえし事なりと、うらめしげに、されども誇りげに、其子の語りき。

○蜊々、から蜊よと六歳許なる男の兒の

草鞋穿きて朝夕呼び來るを、あれも人のと物好きなる噂衆の走り出でて素性を問へば、兒は早くも眼をうるませて、父は先頃歿り、母は今病の床にと言ふに、いぢらしやと人々寄集まりて、要るも要らぬも買うて遣れば、兒は嬉しげに空籠擔ぎ、看返り〳〵橋一つ越えしが、其處に立ちたる女の傍へ、阿母あ、もうみんな賣つちまつたと馳寄れば、女は兒の頭撫でつゝ、爾か早かつたね、今日は何遍泣いたえ。まことは父は入牢の身なりしと。

○九年の久しき中風に罹りて足腰かなはず、お祖母さんは何日死ぬのと、頑是なき孫の顏覗きて問ひかくるに、應々と唯點頭くのみなりしが、いよ〳〵の時孫を枕元にまねきて、汝に面白き歌敎ふべし、わしが死んでも誰れ泣く者ないが、山の鳥が泣くばかり、山の鳥もたゞ泣きやせぬが、まくら團子の喰ひたさに、言うて見よ言うて見よと其儘音もなく果てしと。中國の人なれば、歌も其邊のなるべし。

○最愛しき孫の亡せたるは、あまりにお祖母樣の命長ければなりと嫁の當り散らすに、疾く引取りたまへと神佛に祈りたれど甲斐なく、嫁の死したる後迄も猶ほ姑は存在りぬ。

○右手に枕の下なる財布引摑み、左手に若き男妾の胸ぐら捕へて、蹴き死にしたる金貸婆の最期ほど、凄まじきを見たるはなしと或者言へり。

○劫の間は死にもすべし、つくばりては容易く死なずとは、古き諺のよし。

○いさゝかにても意に滿たぬ事あれば、茶碗小鉢の嫌ひなく投附けて、打壞さでは已まぬ旦那殿の癇癖を、諫むれどもきかれぬに妾は一策を案じ、澤山投げて澤山壞したまへ、われもお手傳ひと家に大切の皿に手を掛くれば、旦那殿周章てゝ、もう好いもう好い、以來は壞すに及ばぬ。

○今は世に亡き紳商の、新右衛門町に川樣とてときめきし頃、月々の物宛がひ置く女の、常に人中にて川の字〳〵と忘られぬもののやうにほのめかすを、この上もなく思ひ取りて特なる心づけもありしが、聞けば其女の川の字といふは、川樣の川ならず、河崎屋鯉江の河。

○圉々焉、洋々焉たる池の緋鯉の燒麩目蒐けて群がり來し時、誰やらいたづらに卷煙草の吸さし投入れしに、あツと一人が遽しき聲を何かとおもへば、鯉が火傷するといけない。

○龜戸天神の池にて、ある夜ひそかに大なる鯉を偸み捕りし男の、もとより出來心の事なれば器なきに窮し、股引ぬぎてそれに入れ、あと先縛りて持歸る途に、手の腥ければとて錢湯見附けて飛込み、のび〳〵するぞと流しの眞中に太平樂の折柄、着物戸棚より彼の股引の躍り出でしに、これは珍事と番臺の人も驚き板の間の人も驚き風呂の中の人も驚くに、其男も亦驚きて鯉ではないぞ〳〵と取つて押へ、裸のまゝ小脇に抱へて猶且鯉ではないぞと、終に股引といふこと言はざりしとなり。

○牛は犬は猫はと問ふに、もうと啼く、わんと啼く、にやあと啼くと迄は尋常なりしも、戲れに虎はと聞けば、慧しげなる女の兒のしばらくは小首傾げ居たるが、良ありて、とらあと啼く。

○螢の火の風に消えうも知れぬとて、籠を袂に掩したるは此兒なり。嘗てわれの門三味線に採り用ひたる。

（五）

○たゞ何事も不法の世に、趣意は言はずとものことなるべし、飽くまで不法の言論を鬪はさんとて、不法俱樂部なるものを發起したる人ありしが、さて其日となりて會する者十名ばかり、彼れやいかに、此れやいかにと頻りに面は見交

はせども、俗に所謂儀には評落られませぬと同じく、差詰りての不法もなくて各々一語をも發せず、其儘空しく散會といはんよりは、一人逃げ、二人逃け、遂に皆こそ〳〵と逃け歸りしは、不法ならぬ限りなりしと、後に其一人の言へり。

○よしや正體の枯尾花は、見るとも見ぬに興あるべし、何々の作用など小むづかしきことは言ふに及ばず、不思議は何處迄も不思議として、首傾けて語り續ぐにおのづからの妙は存するなり、われらは唯其不思議を樂まんのみと、柏木探古氏のおもひ立ちて、毎月一回、怪談會といふを催したることあり、雜誌をも出だすべき筈にて、大槻如電氏に執筆を乞ひたりしが、其はじめの幹事に當りたる人の、常に約束の時日をたがへしより、會も雜誌も諸共の幽靈となりて、世に沙汰するほどに至らず立消えしたるは、今よりおよそ九年の前なり。

○谷村[illegible]順翁の如き話の上手は、又と世に得難かるべし、翁は彼の南新二氏の兄君にて、氏にすこしく先ちて歿られたり、翁の談話は敢て奇巧を求むるにあらず、日常ありふれたる事も一たび翁の口にのぼれば、聽く者おぼえず膝をすゝむるなり、圓朝の如きもつねに之を嘆賞したり。さる紳士の翁と茶道の交ありて、月二回若くは三回、强ひて翁を晩餐會に請じたるにわれも列りければ、贅澤もの語ともいふべき事實談を數多翁よりきゝ得て、こまかに手帳に書附け置きしが、先年讒人賊のために持去られて、翁とともに竟に還らず。

○翁は稀なる見世物好にて、代はお戻りの緣日のとても、必ず觀のがしたる事なかりしとなり。

○おもふにまかせぬ由ありて半途に廢したれども、俗語の出所をたづぬること、工商の符牒をあつむること、及び詐騙の變遷を敍すること等を、われの嘗て企てたるは、全く翁が談話に基きたるなり。

○木遣音頭といふものの事を少しく調べたるに、今は知らず五六年前にての上手は、檜物町ろ組の新太郎、花川戸ち組の是れは名を忘れたり、淺草東仲町の綽名をへんこ豐、この三人なりし。

○松林伯知に朝顏酒の事を傳へたるに、即日兩國の定席なる福本に於て、夜櫻にうかれ入りたる人の、きぬ〴〵の別れに朝顏酒云々と辯じ居たるには、われも思はず失笑したり。さる小說家の櫻の盛りに、裏の圃より蠶豆採り來て云々と書けるもこのたぐひなるべし。

○講釋師の中にて、最も文字あるは伯猫なりと聞えしが、わがもとに送り越せる手紙の宛名に「若先生閣下樣」、けにこれ程あれば澤山なり。

○よき衣着て、よき車隨へたる人の、われに恭しく禮を施しければ、われも亦恭しく禮を返したるが、其人の誰れとも分きかぬるに心安からず、往過ぎてそと供を呼留め、何方ぞと問へばいえ恐れ入ります、播摩屋でござります。即ち時藏が事なり。

○われの未文界に入らざるの前、菊之助と一つ家に起臥したることあり、日本橋の店にて屢々、新藏と落合ひしことあり、菊之助死し、新藏死す、われ幸ひに技倆すゝまず、命めでたし。

○おかみと呼ぶは待合の女將よりはじまりて、出所ある事なり。今の小說家のそれとも知らず堅氣の内儀は勿論、下宿屋の女房にまでこれを用ふるは、不穿鑿も亦太甚しからずや。

○吾妻コートに五つ紋つけたるをわれは見たり、星ケ岡の茶寮の女なりとか。

○是非このたびは御紋附をと、途にて幇間のせがむに大盡うるさくなりて、つと傍らの古着屋に入り、夏冬いはず紋の着きたる羽織を皆出ださせ、即座に何十枚かの價を拂ひ、幇間を顧

みて、何うだこれだけで好いか。

○明治に唯一人の氣障とて名高き男の、或年の首め、小紋縮緬の三枚着といふを作りたることあり、上は一面の粉雪にて、中は雪やゝ疎く裾に藪柑子をゑがき、下は淡雪の大きなるが斑に降積み、狗の子二疋戯るゝさまを笠仙に誂りて染出し、いづれの宴席に行くも、醉ひたるふりして一々脱ぎ居たり。

○ひとりは熊谷、ひとりは敦盛に扮し、升田屋の棧橋より萬八目懸けて、馬にて神田川を乗切らんとし、其筋へ引致てられし人あり、萬八は今の龜清の處なり。

○年月おのが旦那と侍きたる人の、まことは大賊にて今捕はれしと聞くや、面目無しと其儘家に歸らず、途より逐電したる藝者、新橋にありたり。

○これは柳橋なり、魚軒醤油の濺ねかゝりしに、周章てゝ上着の片肌ぬぎしを見て、銀行頭取なる旦那殿、忽ち通はずなりぬ。

○掛引は商人の慣ひなれど、これはあまりと一時噂の立ちしは、名だゝる木綿問屋の若隱居、おなじ土地なる妓の手を切るに、人を以て百圓にきはめ、さて自身それを携へ行きて妓に向ひ、ナントこゝでもう五圓まけぬか。

○番頭様なる者の、折々日本橋に遊びて、勘定書を手にする毎に必ず曰ふ、十露盤を持つて來い。これを知りぬきたる家にては、はじめより添へて出だすなり。

○下谷にて名の賣れし妓の、一度用ひし鼻紙を再袂より取出したるには、さすがに客も眉をひそめたりとぞ。

○場末は是非もなし、客の手の髭に觸りて圖らず毀したるに、髪結賃四錢呉れとて、其小女の泣きて已まざりしと。

○おきんお茶が事は、われも油地獄に記したり、櫻痴居士はこれが年代を攺へてあはれ浮世中の人物の名に用ひられたり。

○石橋の田村屋が鹽煎餅屋なることは、最早知れ渡りたれども、都人ならでは解し難きふし、一葉女史の小説に猶多し、われからに島原切つての美人とあるは、西京のならず、假宅時代の新富町の事なり。大晦日に西應寺の娘のもととあるは、寺ならず、町の名なり。されども三月縛りの高利を九月に借りて十二月が期限なりと書したるは、女史のおぼえ違ひなり。

○にごりえの子供が名も太吉、うつせみの下男が名も太吉、うらむらさきの小僧が名も太吉、たけくらべの一件であげられました大工が名も太吉。

○蛤貝知らぬ兒の、つく〴〵と鐵段仰ぎ視て、青葉があげてある。

○有合なれどもと、蜆汁を出したるに、がりがりと殼ぐるみ嚙砕きて、これは國には御座りませぬ。

○えだ豆の貝足煮といふを知らず、こは侮ると覺えたりと一書生の居丈高になりて、下宿の女房呼びつけ、おれは馬ではないぞ。

○汁は蘿蔔、煮附けは鹿角菜、このほかに望なしと出來星紳士の或會席茶屋に來て誂へけるに、主かしこまりて調進し、さなきだに此家は廉ならぬ魚鳥の五倍を請求しけり、紳士頗るひるみたれども然り氣なく外に出でて、人にむかひ、君は未彼處の鹿角菜を知るまい、あれを喰はんやうでは人物でない。

○をとゝし出でたる文學士の、俗曲をしらぶるときゝて、都谷に依りてはわが年來の材料を參らすべしと、其人の友に就てしらべは何からと質したるに、先づ初めは常磐津から。

○今ひとりの新しき文學士も、俗曲研究に熱心の由にて、これは珍書とあるを何かと見れば、宮薗千種道種、實は園八の稽古本たるに過ぎず。

○十尺見は十寸見の書損なるべし、鳰鳥集とまでは言はずもがな、物識りのためには若夢集十山集などもよかるべし、醒雪氏は近松の玉子酒生姜酒の作品に、われの敬服せるよし記されたれども、われに於ては然るおぼえ曾て無し、多分何をか氏のおもひ誤られしものなるべし、われは「細へ朧がほとゝぎす蒲團かけたる」などいふ程なるを、先づ〳〵好くたり。

○少しは名のある由なる新體詩家の、何々集とか題したるものを新聞紙上にて見たるに、種は懷中の活版本の小唄をいづれも焼直したるものにて、「一籠が小籠で筋斗うたれぬ」山雀を、時鳥に改へたる如きは中にても拙の極なり。

○「おまへは濱の」に擬したる新體詩を、何やらにて見たり。作る人も作る人なり、載する人も載する人なり、調子といふもの毫もわきまへず。「小町おもへば」の歌を取れる如きも、唯何かなしといふに過ぎざるべし。

○「朝顔がたよる竹にも振放されて、うつぶきや涙の露が散る」とは、かの東山の唱歌とともに、山陽の作なること、人の知る所なり。「四書を讀み〳〵」の作者なる中島棕隱にも、春の袖といへるあり、左に錄す。

今はおもひのまゝにもなりて。昔に匂ふ花の袖。誰とかされんゆき丈も。ちやんと揃ひしはし紙に。お客の名をばかきぞめの。春のなさけの結び昆布。縁と月日を待ちおほせたは。嬉しからうぢやあるまいか。

（よき作にはあらねど、伊勢古市、備前屋の染吉といへるが歌に、

玉くしげ二見の浦のなみならぬ君が情の嬉しさはやしほにまして朝夕に祈りまゐらせ候かしく

○「散るが無理な歟散らすが無理歟、無理と無理とで出來た世に、無理がなければ花もない」。これはさる頃或人のもとへ、われの書きおくりたるものなり。

○はじめの日はイの字、次の日はロの字と、一日に片假名一字づつ書きおぼえて、無筆なりける女の、遂に母のもとへ手紙を出すやうになりしが、廓にありしと聞く。

○これも里の女の、たえて算盤といふことを知らず、寸燐を二つに折りて、大を一錢、小を五厘とし、いかなる時にもそれを並べて、一々細かに數を讀み居たりと。

○假に明治を三段に別つべし、上の十年は越後地方の者多く、中の十年は美濃尾張の者多く、下の十年即ち當今にては、山陽道かけて九州の者多しと、或人言へり。

○[illegible]とのみにて定かならねど、郡、市、町、村と順次に區分し行けば、それぞれの出稼人の多き地は、其前に於て、私生兒の多き地なりしなるべしとおなじ人の言ひしも、一理ありげなり。

○女より客におくりたる、客より女におくりたる、それ〴〵の文殼を、傳を求めてわれの數多蒐めたるは、やがて何事をか見出さんとてなり。商家の息子なりとか、文の末に春雨の句をかきて女におくりたるが、翌日はがきを以て、「や」は「の」の誤。しかも新聞紙とおなじく、圏點を打ちたり。

○今迄に得たる文の中にて、客の方の秀逸は、主家を逐はれて近江に行きたる男の、八景をよみ込みて女に恨を述べたるものなり。但し罫紙七枚つゞき。郵税六錢。

（六）

○よしわれに著述ありとも、活版本を以て世に傳ふることをなさざるべし、われは唯寫本を以て傳へんのみと、著作家ならぬ人の、今の著作家に向つて語りしとぞ。

○炎天に瓢かたげて人の行くを、何れへと問へ

ば、向島邊へといふ、何の御催しと重ねて問へば、今ぞ合歡の花の盛りと思うて。

○人の親曰く、さる頃會社へ用ありて外人の來りけるに、能く出でて應接する者なし。幸ひにわが倅の外國語に熟せるによりて、通辯を命じたるが、この時の如く困りたる事はなしと後に倅に言へり、何ゆゑとなれば、倅の修めたるは英吉利語なるに、來りたるはそれと異りて、阿米利加人なりければ。

○佛學者と漢學者と連立ちて途を行きけるが、やがて夕やけの空を指して、あれが雲霞といふのですなと佛學者のいへば、漢學者はしば〳〵耳傾けて、ボアイ、成程、佛蘭西では霄車しますか。漢學者竟に何事とも曉らず。

○所謂紳商の間に、ことさら解しにくき語を造りて待合に代ふること、一時流行したり。オリエンタルハウスとは、吉原仲之町の引手茶屋、東屋の事なり。こは、夜と朝日の譯者、益田氏の發意に係れるなりとか。

○兩國の藥研堀に、もと水明樓といふ待合ありたり。大阪なる富田屋の妓の來りて開けるものにて、今は木挽町に移りて旅館となれり。嘗て岩崎氏の淺田氏等とともに、氏名を告げずこの待合に遊びて、首尾克くつゝみ果せたる氣の、互ひに目顏に笑ひ興じたるが、いざお立ちとなりしに、內儀は逸早く座に走り出でて、車夫を呼んで曰く、岩崎樣の御家來樣、さすがに皆々ぎよつと立止まりしとなり。

○今は亡き川田氏のこれも詐りて奧州商人と稱し、淺草大代地の待合名倉といふに到りしに、こゝの女將は聞ゆる穎通なれば、さま〴〵の人の名をつらぬるに可笑しくなりて、川田さんを知つて居るかと問へば、知つて居りますとも、昨日もお入來になりました。

○烏賊魚の小きをカイツといふ、これをケイヅといふは例の江戸訛なり。長唄の勸進帳にカイツの浦とあるは地名なるを、或小說家の江戸がりて、歌うて曰く、ケイヅの浦に着きにけりと、一座皆くつがへりぬ。この小說家は、山谷の重箱といふべきを、麵桶といひしによりて名高き人なり。

○どゝく(都々逸)る、ちやづ(茶漬)る、などいふは落語家より始まりしものなるべし。下足をゲソ、澤庵をタク、若くは勘定をチヨカンなどいふは素より職人手合のことなれども、近來は甚しくなりて、ごまかすといふ可きを、ごまけるなどいふに至れりとぞ。

○汝士分の面目をおもはゞ、かの流行言葉といふを耳にすとも、決して口にする勿れとは、わが物の師の堅く誡めたまへる所なり、この頃わが談話なるものの中に、「おつ」といふやうなる語を見受けたれども、そはわが口より出でたるにあらず。

○翔甸といふ男、職を免ぜられたりとて、年の瀨や賣り殘したる日本刀と、わが許へ書きおこしたり、われ直ちに、賣れ殘りたる二本棒と、其儘朱を加へて戾したるに、幾くもなく復召し出されて、さて任に何處にといへば、臺灣に行きけり。

（七）

○久しき前、われは某會社の巡回員に、後或人は各地の小學教員に、或人は地方の新聞社に、それ〴〵手を盡して託したれども遂げざりしは俗謠蒐集の事なり。これが完成はわれらも望む所なり。今又あちこちに廣告見ゆ、

○注意せられたきは元唄と替唄の差別なり、ふと見たる日に章句のうつくしきため替唄のみ取りて、よく聽かば曲調の耳にたゞしかるべき元唄の捨てられたるが如きこと、今迄に尠からず。

○この程の人の俗曲を論ずるを見るに、多くは

絃のしらべ歟、松の葉の端本か、太甚しきは端唄補かとみ程のもの歟に據れるに過ぎず。さる人のこゝに久しく一中の拍子扇を求むれども得ずと、質物になりて流れるもをかし。

○猶可笑しきは或新體詩家の、隣座敷に藝者衆の唱ふを聞けばとかきて、「今度ござらばもて来てたもれ」の歌を擧げたる事なり。

○おなじく今は新體詩家なれども、やがて小説家にならるゝ由なる何がしの文學士の、君と別れて松原行けばの歌を、萬葉のよりもあはれ深しとたゝへられしにも拘らず、其新作に「ひと聲高く囀けば、あなや梢のさくら散る」といふを、無台圏點附きにて出されたり。駒が勇めば花が散るの俗謠よりも、哀れ深かりしにやと、これもをかし。

○露伴氏よりきゝ得たる歌に、「西がくもれば雨となる。東が曇れば風となる。千石積んだる船でさへ。波風荒けりや出て戻る。儂ぢやとても其通り。縁がなければ出て戻る」。

○西は雨、東は風のなだらかに起りて、突如、千石積んだると言出づる趣は、恐らくは今の新體詩家の、未會得せざる所なるべし。

○川風寒く千鳥啼くといへば、皆端唄なりとおもへど、こは貫之が「おもひかね妹がり行けば」の歌より出でたるなり。今の暇ある新體詩家は、俗謠に就てかゝる類ひを多くにはおよばず、いさゝか取調ぶるも、益なきにはあらざるやに思はる。

○最も近くのこれる投節に、「葉うら葉表葉おもて葉裏、萩の葉うらに鳴くきり〴〵す」といふがありたり。彼の門を入るよりはじめて、水道尻に到りて唄ひ切ることなりしとぞ。

○「うそに涙が出るならば、さえた月夜に雨が降る」云々といふは、名高き二上り新内なり。これをホウカイ節とかいふものに唄ふを、このごろ町にてきゝたり。疎ましき限なり。

○わが知れる俗謠の中にて、おもひ出す毎に理窟の極とおぼゆるは、「一笠がよう似た清十郎が笠に、笠が似たとて清十郎であれば、お伊勢参りは皆清十郎」。

○後の都々逸にはこれにひとしき一體あり、「痘痕あるので人間らしい、犬に痘痕があるものか」の如き、是れなり。

○「下着にのこる移り香」と、四言にて止めたる調をきかんとて、先年上方唄の上手を尋ねたれど、この地にはなかりし。

○巣林子が作にも、「それは皆僻言」「たとへば命抛ち」と、疊みかけて四を用ひたるものあり、猶異りたる例もありしとおぼゆれど、われは今それらの書を持合はされば、今は擧げず。

○われの高等中に通學せる頃のことなれば、年は十五六なり、友なる上田氏は歌舞伎新報の愛讀者にて、しきりに世話狂言の事を取しらべ、われは俗曲に關する事とも、別段これぞの考へもなく蒐めたるが、長唄及び富本、常磐津、清元には外題附けといふべきものなきまゝ、一冊の手帳に書き附け置きしに、この程不圖行李の底より出でたり。これは稽古本として今に傳はれるもののみなれば、かの歌曲類纂とは同じからず、幼き頃のわざとて確とは言難きも、其十の六七迄は擧げ盡せりと信じ、殊更に寫して左に出すなり。但し注意を缺きたるもの三つあり、一は作年月を記さざることなれども、これは稽古本になきため、何の辨へもなくたづねざりしものなるべく、二は狂言作者の慣例にて、題の五字七字にかゝづらひ、「茂」と書きてナツコダチと訓ましむる如きことあるを、わが手帳には其振假名を脱せし事なり。三は、たとへば、「燕鳥故郷軒」とのみにては、いかなるものとも分き難きに、梅川忠兵衛といふやうの註を入れ置かざりしことにて、其當時は記憶し居たるなるべきも、今にてはわれも大半忘れたり。

いづれにも精しき人の、猶よく訂したまはんことを祈る。

長唄の部

勧進帳　隈取安宅松
老松　女夫松高砂丹前
對面花春駒　今様[illegible]
春調娘七種　亂菊枕慈童
拍子舞名取種　教草吉原雀
花車岩井扇　三升猿曲舞
狂亂雲井袖　狂亂吹雪の雛形(近松門左)
狂亂左當升(松井幸三)　廓三番叟
雛鶴三番叟　今様四季三番叟
種蒔三番叟　呼出三番叟
再春菘種蒔(櫻田治助)　英執着獅子
わらべ獅子　相生獅子
越後獅子　枕獅子
俄獅子　[illegible]獅子贔屓物
濱松風戀歌　姿の鏡關寺小町
傾城道成寺　二人道成寺
百千鳥娘道成寺　京鹿子娘道成寺
一奏現在道成寺　いろはの比翼紋
風流妹春の柱立　初昔文仲立
正札附根元草摺　御贔屓根元草摺
[illegible]元草摺引　菊壽の草摺

新草摺引　蝶鳥千歳摺
吾妻八景　巽八景(立川焉馬)
二見潟磯の濡衣　雁の文
春の色　千代の春
みめより(櫻田左交)　小原女
廓の禿　羽突の禿
鶴亀　石橋
秋の色種　室の八重咲(瓜の日)
織殿(三學堂)　錦のはた織(藤の家)
唄上るり(瀬川如皐)　追羽根
初子日([illegible])　初しぐれ
松の緑　百夜車
七福神　白酒賣
木賊刈　面かぶり
四季の椀久　高尾さんげ
紅葉がり　新紅葉狩
天人羽衣　新羽ごろも
さごろも　新まつかぜ
鷺娘　うしろめん
ゆかりの月　おぼろ月
朧の[illegible]　江の島
秋巣籠　五大力
もみぢ葉　仇名草
明の鐘　亂れ鳥

まん菊　小夜衣
びんづる　きせう
さかづき　水かゞみ
くろかみ　三勝道行
昔[illegible]　四つの袖
たゝみざん　ふたつ文字
高砂　寶船
白妙　わがこゝろ
ねこのつま　門太郎名殘
長五郎紙すき　金屋たん前
花錦嫩丹前　准心の引綱
雨洲隅田川　寫繪雲井弓
嫩染分紅葉　櫻草娘髷
女伊達姿花　助六雪手傘
夜鶴綱手車　衣被思破車
男舞曲相生　初咲法樂舞
釣狐春亂菊　柳絲引御攝
小裾重　關東小六後雛形
乘掛情の夏木立　愛敬有哉稚萬歳
其容形七枚起請　我背子戀の合槌(櫻田治助)
七枚續花姿繪(同上)　八重霞花掛合(同上)
紅葉袖名殘錦繪(同上)　七小町容彩四季(福森久助)
舞扇蘭生梅(松本幸二)　梅開冬至樂(瓜の日)
法花四季臺(狂言堂左交)　花桂照颯奏(瀬川如皐)

外題目續　　同　傀儡師
其面影二人椀久　　閨絃姿八景（瀬川）
雪月花䔍繪巴（同）　　月雪花名殘文臺（同）
花街曆色所八景（櫻田治助）　　七所攝初翁槳（瀬川如皐）
返す〳〵餘波大津畫（杵屋六三）　　復新三組盃
拙筆力七以呂波（瀬川如皐）　　四季詠寄三大字（同上）
辻花七化粧　　深山櫻及兼樹振
其九繪彩四季櫻　　寄三津再十二支
三人形紅の彩色（松本幸七）　　六歌仙容彩（松本幸二）
七重咲浪花土産（近松門左衞門）　　八重九重花姿繪（三升屋二三治）
七字の花在姿繪　　五月菊名大津繪
九變化（松本幸二）　　遲櫻手葉七文字
桃櫻戲暖簾　　八朔梅月の霜月（櫻田左交）
邯鄲四季の花道

富本の部（義太夫より取れる段物は省く）

老松　　寶來宮
年朝嘉例壽　　御世榮稔穗富種
羯鼓賓錄壽都錦（松井由輔）　　今樣十二段
道行比翼の菊蝶　　道行垣根の結綿
道行野邊の書置（櫻田治助）　　道行念玉蔓（同上）
道行柴積[illegible]（同上）　　道行戀飛脚
道行戀橋づくし　　幾菊蝶初音道行
戀罠擲環菊　　稚女夫手管掛罠
女鳴神瀬川帽子　　茜染野中の隱井

夫婦酒替奴中仲　　名酒盛色の中汲（瀬川如皐）
七重咲浪花土産　　瓦屋橋女夫主從
眞似三升姿八景　　俠客形近江八景（松井由輔）
達模樣吾妻八景（松井由輔）　　四季詠寄三大字
夜花姿の三日月（花川戸）　　染幟菖蒲の彩色（[illegible]村）
春夜障子梅　　殺生石十二怪
十二段君が色音（櫻田治助）　　在姿浄瑠璃世界（同上）
新曲高尾懺悔（同上）　　彼狂夫葦集（同上）
席書扇繪合（同上）　　柳絲戀苧環
全盛操花車　　其妹脊花朧（福森久助）
妻夫事雨柳（同上）　　其俤朝間嶽
ちらし連理の橘　　徒髮戀曲者
茂懺悔睦言　　櫻草對の龍（瀬川如皐）
散殘花貌鳥（同上）　　艷容錦畫姿（同上）
棲寒疑振袖（同上）　　月柳廓髮梳（河竹新七）
新曲神樂獅子　　四十八手戀所譯

常磐津の部（前同斷）

老まつ　　子寶三番叟
積戀雪關扉（寶田[illegible]）　　願絲縁苧環
其儘旅路の嫁入（櫻田治助）　　其常磐津仇兼言（同上）
姿花鳥居が色彩（同上）　　八百萬國生梅枝（同上）
倭假名色七文字（同上）　　千種野戀の雨道（同上）
神樂諷雲井曲毬（同上）　　夜鶴思雪僻（同上）
笑門俄七福（同上）　　帶文桂川水（同上）

閨茲姿八景（同上）　　戀[illegible]（同上）
七枚續花の姿繪（同上）　　四季寫土佐畫拙（西沢一鳳）
芝八景（六朶園二葉）　　巽八景（同上）
桃太郎（福森久助）　　三津朝床敷觸（同上）
戀中車初音の旅（同上）　　夜の鶴雪篭（同上）
忍夜孝事寄（寶田壽助）　　心中浮名の鮫鞘（中村[illegible]）
花舞臺霞猿曳（同上）　　內裡模樣源氏紫（同上）
狂亂娘撫子（三升屋二三治）　　唐人（鶴屋南北）
歲旦福は內　　歲旦惠方の寶船
乘合船惠方萬歲　　三福對和歌姿畫
邯鄲（狂言堂左交）　　三世相錦繡文章（同上）
節句遊戀の手習（同上）　　茜染野中の隱井
初陣の兒鎧　　八犬義士譽勇猛
道行丸い字　　道行三度笠
其扇屋浮名戀風　　其姿花圖繪
明烏夢泡雪（佐々木市蔵）　　戀娘昔八丈
戻駕色相肩（櫻田治助）　　道行榮花月（同上）
新曲胡蝶夢（同上）　　今樣望月（同上）
今樣高野物狂（同上）　　色直肩毛氈（奈河本助）
恩愛瞔關守（同上）　　褄重袷羅衣（笠縫專助）
蜘蛛絲梓弦（金井三笑）　　狂華法手向（三升屋四郎）
帶抱小蝶昏（津打治兵衞）　　帶文川傍柳（三升屋二三治）
初日背庚申　　比翼の初旅
濃楓色三段（松木[illegible]）　　仇枕夢玉鉾（同上）

四季詠（い）の夜（同上）　天王八江田入（[illegible]）
后月酒宴ノ島臺（同上）　松の色操高砂（同上）
元紋日廓形（同上）　路山色 瑋（同上）
浮名ハ散書（[illegible]）　道行面影草（同上）
雨顔月姿繪　初櫻淺間嶽（[illegible]）
倚幹色水上（同上）　花來媒色鶏
近頃戀世話　若木花容彩四季
男作出世ノ貝歌　花吹雪富士菅笠（[illegible]）
燕鳥故郷軒（[illegible]）　紅葉傘絲錦色木（[illegible]）

清元の部

梅の春　北州千歳壽
深山櫻及兼樹振　山歸□枯木
明烏花濡衣（[illegible]）　儘花手向橋
其小唄夢廓（[illegible]）　由縁ハ暦哥（同上）
道行浮塒鴎　道行旅路花聟（[illegible]）
〆能色相圖（同上）　廓花對編笠（同上）
后月名殘の島臺　初霞淺間嶽
月花茲友鳥（[illegible]）　袖浦替中備（同上）
道行思案條（同上）　御名殘押繪交張（同上）
花江戸繪寄場彩（同上）　再茲歌舞伎花轢（同上）
再春菘種蒔（同）　四季三葉草
傀儡師　逢見□井字（[illegible]）
闇梅夢手枕（同上）　彌生□中淺草祭（[illegible]）
おどけ俄煮珠取（[illegible]）　朝日影俄の隠取（同上）

優平家後段景事（[illegible]）　大和い手向五字（[illegible]）
江戸櫻衆由土産（[illegible]）　色彩間苅豆（同上）
色由解深川（[illegible]）　俠客近江八景（同上）
袖浦涙春雨（[illegible]）　絲の五月雨（[illegible]）
重褄閨の小夜衣（[illegible]）　能中縷摂の花轢（同上）
六歌仙容彩（[illegible]）　須叟三保浮氣貫（同上）
五諸車引哉袖褄　二面東寫繪
道行初音旅　夢結露濡事
藪鶯啼別路　梅柳中宵月
仕浴衣汗雷（[illegible]）　由縁色穩紫（同上）
日月星書夜織分（同上）　源氏供養由縁紫（同上）

（八）

○比較的、場末に今多きは常磐津の師匠なり、常磐津がこの都を支配したる頂點は天保なるべし、後漸く清元の侵す所となりたれば、其中央を去れるも故なきにあらず、今の清元の師匠の、これも比較的年齢の若きもの多しといふも、同一理なるべし。勿論こゝに師匠といふは、いづれも女のなり。

○本所に居たるときは、向側に清元の師匠ありたり。淺草のときは、裏に常磐津の師匠ありたり。さる頃より丸山に轉れるに、見れば前に長唄の師匠あり。

○長唄、若くは清元常磐津は、むざと眞似事になり難けれど、其聲に於ての義太夫は易きのみならず、都會其に調子に太甚しき差異なければ、各處の宴會に必ずこれを聽くは、やはり汽車が持來りたる流行なり、江戸敗北の一徴候なり。

○猶敗北の例をいはゞ、浪花節といふもの、都の中央にては大ろじといふに折々かゝるのみなりしが、この程は宴席の餘興にも召されて、これが寄席に旦那様奥様の黑のお羽織を見ること、敢て珍しからずと聞く。

○されば流行のおそろしきことは、これにつれて昔乞丐の唄なりしものをも、今は玉簾の内やゆかしき高樓にて、憚りなく唱ふなり。

○よき歌ありともおぼえねど、淋しき座の慰みといふは、いと尠きものなり。上野にありけるを青々園氏は書寫し、上田氏は去年人より購ひて藏し居れり。

○其手に三絃をも學ばれしほどなれば、大槻如電氏の歌曲に精通せるは、言はずもあるべし。されどもわが知れる人にて最もよく渉獵りつくしたるは、幸田露伴氏なり。

○うち萎れたる浪人の出に、「ひとり來てふたり連立つ極樂の」の唄を用ひ、「清水寺の」といふとき花道よき處にとまりて、徐ろに振仰ぐや

本釣鐘一つ打ち込み、一鐘の音と唄ひをきめたるは、わが觀たる芝居の中にて、すぐれて風情の好かりしものなり。十餘年のむかしなれども、今に眼に映りて、折々憶ひ出ださる。

○この唄は園八のとりべ山なり、人皆の好くとおぼしく、或老大家はこれを小說中のあしらひに取りて、女肌には白無垢や と書くべきを、男肌にはと書かれたり。

○ひく三味線は祇園町と、かくれんぼの表紙にしるしたるは、園八のならず、さらへ講より出したるなれば、所謂上方唄のなり、おなじく鳥部山の一句なれども。

○初心の人の床に上りて、用意の一腰口にといふべきを、用意の一口といひかけてハッと心づき、しばし躊躇ふ折しもイヨ喰つたかと誰やらの聲掛けしに、はからず釣込まれて諸共に、イヨ喰つたか。折角の明烏も、それにて名題の夢泡雪、まんまと消了りぬ。

○素人の芝居するとて、白石噺揚屋の段を出したるに、ところところでかはる物言其やうにといふとき、補襠の裾ふまへて宮城野の大の男、どんと音するばかりに仰向に轉げしが、起上りて又更に、其やうに笑はぬもの。これは元藥研堀なりける常磐の主人なり。

○妓樓の面々打寄りて催したるとき、何中米の主人とやらんが、然らば後刻と時代にいふべきを世話にいひたるため、しらせの木の入れかねて穴の明かんとしたるに、腰なる扇子を拔取り、さつと開きさまに自ら口にて、チョーン、御意得るでござらう。

○高梨氏が根岸座の興行にも、をかしき事數多ありたり。扇や熊谷に扮したる富貴樓の主人の、いざ笠を脱るにのぞみ、見物のわや〱言ひければ、俄に逆上せて忘れしか臺詞出でず、顫へながら唯立ちたるのみなりし。

○今は或會社の重役なる人の、其とき十段目の久吉を勤めけるが、あわてゝ草鞋をぬがず二重へあがりしを、人の草鞋々々とはやしけるに心おくれて立上らず、あとへ〱と其儘ゐざりて引込みたり。

○彼のトッタリは本職を傭へることとて、二番目の新作物に、この大刀を振上ぐるより早く皆飜るに、やがて後見に切掛けしが、これも助五郎なれば亦能く飜るに、いよ〱遣端のなくなりて、遂にうしろの黑塀に切附けける。

○これは紳士連のにはあらざりしが、チョンと手拭を取りしに、肩にはかゝらで、其處に曳きわたせる鐵線にかゝりたり。生憎其人の脊低かりければ達かず、ふはり〱と風に吹かれて幕になりぬ。

○さる年新富座にて、對面一幕出したることあり、今度の曾我は團十郎の一世一代ださうですなど或劇評家のいふに、左樣ださうですといへば、それで五郎は誰が勤めるのです。

○大向とて捨つ可からず、面白きことを言ふものなり。嘗て歌舞伎座にて、例の申上げの出でたるを見て、忽ち呼んで曰く、往復はがき。

○言語の上より近松を研究すと呼ばはれる人の、國性爺は知らざりけん、天網島をよみて、李留天といふこと腑に落ちず、神か佛かと問ひけり。

○月のかつらとあるべきを、今の飜刻本のことなれば、月のうつらと誤りたるに、或國文家の其上にも讀誤りて、逢ふ人毎に問うて曰く、月の鶉といふのは何でせうか。

○試驗委員の犯すといふ字を出したるは、オとヲの假名遣ひをみんとてなり。一生あり、恭々しく傍訓を施したるを見るに、むじな。

○何故これがムジナなりやといへば、才偏なるによりて、一生懸命考へたるなりといへり。

○シンテイシ、シンテイシとさる老先生の眞面目にいふをきゝて、新體詩家の頭を抱へざるは

無しとかや。

○わが知れる建具やにて、七言絶句をよみ下したるため、店の出入を差留められし男あり、げに腕をいへば、よき方にてはなかりし。

○歳は十一なり、夜晝なしの坐睡を常に笑はれ居たる小僧の、あゝあ、と突然大聲揚げたるを、又かと主人の叱れば、いえ居睡ではござりませぬ、夢を見たのでござります。

○着物の數有たぬほど不幸なるは無しと、世馴れぬ女房のくど〳〵と嘆くに、儂共を御覽なさい、小遣錢に困ることもござりますと隣家のが慰むれば、何の貴女、何家だつてお小遣ひは火鉢の抽斗にあるぢや御座いませんか。

○やりくりにて兎も角も送れる人の妻の、アイスクリームといふは、たゞ高利貸の異名とのみおぼえ居りぬ。知合のもとに行きたる折、夏は馳走もなし、アイスクリームなりともと言はれたるにハタと憤りて、あなた、嘲弄なすつてはいけません。

（九）

○政論擔當の約束にて、初めて新聞社に入れる或英法學者の、はや机に倚りて筆取上げながら、忽ち隣席の記者を顧みて曰く、一體現時の形勢はどんなものですか。

○久しく官に在りて、後新聞社に入れる人の、ルビといふは別の物なるを知らず、この社には假名の附いた活字が無いのかと、手痛く組方を叱責したるに、さすが組方も默しかねて、そんなものは有りませぬといへば、逞しき虎髯逆に撫でつゝ、其人いよ〳〵居丈高になりて、早く會計に告げて買つて貰へ。

○これも初めて新聞記者となれる人の、凡そ四五十行程なる記事を請取りしが、馴れねば筆の運び難く、やがて半に至りて編輯主任にむかひ、明日では不可ませぬか。

○わかき記者の名を賣るに忙はしく、他新聞より拔きたる記事のもとにも、猶ほ誰々抄錄と書きけり。

○鉛版にて託されたる廣告を、一々丁寧に校正し居たる人あり、後に小說家になりぬ。

○新聞記者といへば、何の事情にも明るしとおもふは不覺なり、彼の所謂雜種記者の如き、時の内務大臣の名をすら記憶し居らざるもの、わが知れる所にては、多數なりき。

○已に前回に於て死したる人の、又々後回に現れ來れるに、讀者の怪む所となりて、甲は乙の誤りなど言繕むる如きは、一頃の新聞小說に珍しからぬことなりしが、嘗て或人は其續物中に啞を出し、はからずそれに口きかせたるを翌日になりて心づき、周章てゝ正誤文を掲げて曰ふ、前號の紙上啞の言語を發したるは全く筆者のおぼえ違ひなり、今後は誓つて物言ふことなかるべし云々。

○人のしろうるりと書けるを見て、こは何ぞとたづねたるはさる國文の敎師なり。

○桶の底破れて水の流れ出づるほとりに、ひとりの女佇めり。傍なる井戸釣瓶に牽牛花卷きつきて、上に細き三日月出でたり。これは今の或浮世繪師の、千代能をとたのまれて揮毫したるものなり、すさまじと謂ふべし。

○草いろ〳〵の花の濃きも淡きも、見るに由なし、常に變らぬめでたきを出したまへと盲按摩のいふに、さらばと植木屋の仙人掌をあてがへば、やにはに手に引取りて、痛々、お客樣だ惡戲をしなさんな。

○鶴龜ならねばをさまらぬ老公の、今度も愁嘆場があるかとたづねらるゝを、さりとは茶屋男のおもひ到らず、しんみりとした幕ばかりでございますと言へば、それでは見物は此次に致さう。

○あの妓をと紳士より望みて、已に一夜の約定

もとゝのかしか、いざとなりて待合の女將にむかひ、病の氣はと問ふに大丈夫と答ふるを、ほんとうかと紳士の念を入るれば、ほんとうですとも、皆さんが爾仰有ります。

○海外留學のため、日ならず發向と定まれる男の、送別會の歸途友に囁きてこの儘異域の鬼とならぬともかぎらず、是非に今宵は連れたまへといふを何處へときけば、日本の女知らぬは口惜し。

○京に遊びて金銀閣寺知らざらんもと、少しは生利たる旦那衆の伴連れて行きしに、例の茶出されて喫む術を知らず、しばらく惑め居たる折しも山高帽の大官人らしきが令孃とともに入來りければ、これに傚はばやと待つにおなじく茶碗を前に置きて、たゞ瞻むるのみなり、果てしなければ左手に持ちてぐいと飲むに、彼方にても亦左手に持ちてぐいと飲む、即ち四人一度にぐいと飲む。

○深く妙法樣に歸依したる婆の、未曾て麥酒といふを見たることあらず、人より贈られて、これは西洋のお水と三拜しぬ。

○去年の夏の夜、森氏と連立ちて靑木堂に立寄りしに、續いて入來れる二人の書生風の男、われらを見るより指もて卓子に文字かいつけ、しきりに頷くを少し傾上げて何かと覗へば、右鷗外左正太夫、われらは早々逃出したり。

○あま蛙一冊たまはれと昔劉染の言越せるに、生憎手元に無かりければ、田中屋といふに行きて求めたり。こゝの名代娘の太く打笑へるをわれは何とも合點ゆかず、秋骨氏にたゞしたるに、それでも著者ではございませんか、寫眞でわかりますと娘の言ひしとなり。われ之れを聞いて、復びかしこの店に立たず。

○われ嘗て人々と戯れて曰く、小說家は小說家の徽章なかる可からず、天狗にては稍威嚴に過ぐ、宜しく合して潮吹きの面を被らしむべし、とう〱彼我も面も被るやうになつたなど、なかなかに面白かるべしと、今は早其要もなくなりぬ。神田は法律連中多ければさのみの事なけれど、本鄕は最うるさし。紅葉氏に聞くに、牛込も同樣なりといへり。

○ひとしく褒めるにもシナのあるものなり、成文堂の店頭に立ちて、春の舍は下締もうまいと言ふは、いづれあの邊りの學生なり、これには坪内氏も恐縮なるべし。

○いづれの若旦那かとおもはるゝ人の、藝者幇閒を引具し、意氣揚々、われこそ正太夫なれと殊更名告らるゝを、恰も隣室に在りて晝食をなし居たるわれの、聞くともなくきゝたる時は、冷汗忽ち背に傳はりて、おのづから身も縮まるやうの心地したり、今考ふれば、其人僅かに、われよりは美き衣着け居たりしに相違無し。

○煤掃なればと辭むもきかず、朝より妓樓に推登りて、疊十數枚積重ねたる上に大胡坐をかき、こゝへ酒よこせ、肴よこせ、第一は女よこせと喚き立つる人の、やはり正太夫と稱し居たるよし、程經てわが知れる役者の話にきゝたり。

○それがし、くれがし、相携へていつ〱の夜、某樓に眠りぬと探偵の語るに、それがしは溫厚、くれがしは謹直、共にわれらが先輩なり、一人々々聞くも猶信ず可からざるに、況んや二人連立つといふに於てをや、決してさる道理無しといへば、それは知らず、帳簿を檢するに明白に記入しありたりと言ひぬ。これは前のとは異りて、おのれらが名をつゝまんがため、新聞紙の奧附などにて見置きたるを、當一時詐稱するなり。たとへば宿帳に加藤清正、武藏坊辨慶、西鄕隆盛と書したりと落語家のいふに似て、其場遁れなるだけに、非なるものなり。

○すまじきものは宮仕へとこそ聞け、虛名のわれらを苦むるは今更にあらず、新小說の寫眞の

先後を爭ひし人の如き、何の意ともわきまへ難し。

○冷かにあつかひて遲したる初會客の、後に新小說の紙頁に據れば、當今知名の作家なるに女は呟きて曰ふ、これならもう些と何うかして遣ればよかつた。

○これは貴郎でせうと又或作家の寫眞突附けられて、ハッと思ひしも他人のそら似、おのれならずといへば、女はやゝしばし見較べて、左樣でせうね、よもや此人が儂達のところへ來る筈が無からうから。

○或自稱詩人の、何々はおのが作なりといひしに、あとにて女は之れを朋輩に語げて、馬鹿にして居るよ、あんな奴に何ができるものかね。

○其人なりとは知る由なければ、お聽きなさいよお聽きなさいよと屢々搖起すに、遂に一夜を自作の小說に惱まされ通したる人あり、讀畢りて女は曰ふ、思つたよりくだらない。

○藏前なる古本屋にて、人の小說買ひ居たるを何の氣もなくのぞき込みしに、この邊ならばお安うございますと小僧の差出したるは、無殘やわが著書なりけり。

○われの國會新聞社に在りける日、甲府の人のよし來りて面會を求むるに、何用かと立出づれば、先生は御出勤なきやといふに吾なりとは少しく憚はれて、おもはずハイと答へたり。翌日わが住居に來れるに再われの立出づれば、今日も御不在なりやといふに進退谷りしが、實は旅行中と答へたり、こはわれの白き鬚もたざるによる事なり。

○小說志願の趣長々と書立て、偖貴殿の初學心得に依るとすれば、凡そ何箇年ほどにて成業の見込なるやと、長崎より照會し越せる人あり、返信用の切手を添へたるにわれも餘儀なく、貴所方の御覽ぜらる可き品にては無之候と答へて、纔に呵責をのがれたり。

（十）

○鈍きは耳なり、馬にだも及かず、馬は能く自ら耳を動かし得る也と或人言ひしが、舌も亦發達せざる者の一なるべし、今の人の料理を論ずる、多くは標準を自家の臺所に取來るなり。

○島村を言はんと欲せば、八百善を知らざる可からず。八百善を知らざる人の、島村をいふが如きこと、このごろ何の社會にも流行なり。今は島村も太く亂れぬ、若し八百善の暑中休業を廢することあらば、日本料理は早滅亡と謂ふも不可なし。飯を喫する者多かりし常磐家も、今にては妓を聘する者多き常磐家となりたり。

○くだりて植半なる老女將の、おのれも客膳控へて一々檢し居たるは當然のことなるに、さりとは古風と既に五七年前に於て囃されたるが、今は客のみならず、名ある會席の主人にて、料理を解せざるもの甚多し。

○昔深川にありきといふ魚十が衰微は、おもに湯殿など手廣くしつらへしに基るせりとぞ、即ち客の漸く雜駁になり行けるを知らず、たゞ〳〵市中の評判にうかれし故なり。

○新著月刊が掲げたるわれの談話に、龜清は其頃繁昌云々とあるは、筆記者の誤りなり。繁昌をいはゞ、寧今の方なるべし。河岸の折は什器も古代なるがありしが、賣るといふに人々切にとゞめけれど肯かず、膳も椀も皿も鉢も、皆今出來の百人前なるに改めて、さて橋際の本陣的高樓に移りたるなり。

○凌雲閣の横手なる煮賣屋が看板こそ、最をかしきものなれ。申す迄もなくペンキ塗にて、黑き羽織着たる客の前に、さしみ口取數々のものを載せたる膳を置き、婢ありてこれが酌に侍するの圖なり。されど流石に、烏賊鍋、蛤鍋、河豚鍋の本性は忘れざりけん、下足札をかきそへ、記して曰く、五百番。

○あまさがると枕詞いふ程ならねど。十三許なる小娘の端には相違なき處より來れるに、鳥か魚か、何なりとも馳走すべし、この上の無き好きを言へといへば、煮たる炙きたる皆望まず、たゞ鰮のといふに少しくあきれながら、其尾について鰮の何ぞと問へば、から鮓。

○骨をもあまさずと稱する老人に、これはと鱚を出したるに、やはり剩さざりき。

○極めて辛きを好むと、極めて甘きを好むと、端なくも人の許にて落合ひたり。其家の內寶の素麵を供したるが、辛き方は生醬油なりしに、やがて箸をとゞめて、こは甘し今少しく生醬油をといへば、甘き方も素湯なりしに亦箸をとゞめて、こは辛し今少しく素湯をと言ひけり。

○日本橋より今川橋に到る間なり、或夜通行の際便所を索むれども得ず、街角なる賣卜者に就て、今差懸りたる身の上の大事とたづぬれば、內々ながらと誨へくれたるは後の溝板に、三寸四方ほどの穴を穿ちて、常々自らが用に充て居たるものなり。げにこれは內々なるべし。

○横濱永樂町にたづぬる人あり、不知案內の事なり夜の事なれば、大江橋を渡りて煨栗賣居たる婆に問ひしに、あはゝとのみにて答へず、更に四五間行きて、大道易者の前に小腰屈むれば、はや算木に手をかけしが、あゝた樣か吉原へおいでか、尋ねば永樂町といふは、同地の遊廓なりしに初めて思入りぬ。

○きそばの「そ」の字の可笑しくひねくれて、紙にてつくれる姉樣の如きこと、何れの家の看板も一樣なりしは、其折同地にて際立ちて目につきしものなり、看板かきの少きゆゑにや。

○月あかき夜打連れて上野に入り、うかうかと屏風坂を降りけるに、彼處なる車は他に往かず、きまり物の由突然馳來りて、七錢といはゞ聞えの高かるべしとや、旦那參錢五厘宛と聲懸けたり。

○兩國橋のたもとに車をよびて、賃は言ふまゝに與らすべし、何處なりとも各々が好む處に曳行けといひしに、われを乘せたるは本所を一周して、復元のたもとに下しぬ。翔伺を載せたるは蔦直に、彼の門といふに曳込みぬ。今ひとりの三といへる男は、砂村十萬坪に持行かれて、こはいかにと言へど約束なれば下り給へと車夫はきかず、一番高き車代を取られて、寂しき冬の夜道をとぼとぼと歸り來りぬ。

○四五步曳出せば、車に乘りつけたる人かあらぬかは判るなり。小憎らしきは束髮婦人などの、抱若くは宿ののやうにかまへて、乘る時はわるくこぎりたる賃錢を、下りる時はそと背せぬやうに蒲團の上に置いて行く事なり、かゝる人はわざと呼留めて、こまかに錢をよみたる後、はじめて大聲に難有うといふなりと、或客待の車夫語れり。

○わが知合なる漢學者の、酒まゐりたりとていさゝかの事なれども、醉うて途に羽織落したるを、通りかゝれる車夫の拾ひ上げて、貴方のと差出せば、いや俺ではない、俺は自家からちやんと着て來た。

○四書は勿論、史記左傳の小き唐本に仕立てられて帙に入りたるが、待合の床の間に堆く積まれたり。人の之を見て讓受けんといひしに、先祖からのなればと元はそれ者なりける女將の諾はず、何だか知つて居るかといへば、自家のですから多分淨土だと思ひます、蟲がつくのでこゝへ出しては置きますが。

○今は名高き或語學者の、嘗てしばしば茶屋より勘定を促せども、いつもお手紙にて埒明かず、あぐねて其儘になりしに仕濟ましたりと又參られたり。二階に登りて、不圖新しき額あるに目をとむれば、思ひきや選りに選りて其最も長きお手紙。

○庭に田舍家を造りたりといふに往きて見れば、腰張の反古の中に「さ」と頭字を書きたるわが手紙も雜り居たり。剝がさんとおもへど及ばず、心に懸るのみにて三年を經たるが、偶〻改築の事あり反古は一切取除けられしに、ほつと安堵したり。

○人の妾となれる女のもとへ、年下なりし男の今又わかきを得たりとて、心中もすべきさまなり、されども命なくなるなり、よき智慧あらば貸したまへと戲れに言送りしに、女の直ちにこれに答へしは、撥取りし手に似ず至極の能文なり、寫し置きたれば左に掲ぐ。

　御返事申上まゐらせ候當節は智惠と申ものたんとなく候へども姉弟のよしみ少しばかり申上候　一命に別條なき法は山中へ身をなげるか海中にて首をくゝるか但しは小やうじにてのどを突くことに候差支ないと存候ほんの少々の智惠御かし不申いつそ差上申候なほ又入用の節は取りに御つかはし可被成候めでたくかしく

新體詩見本の一節は、われ實にこれより採れるなり。

○おんまへ樣われに厭きて、いよ〳〵捨て給ふよのと、いきまき荒く女の問へるに、男の返事亦よし。

　文披見致候世界は雨降り風吹く是非なきものに候　乍序申入候　郵便切手は貳錢かゝり候客なき宵の汁粉の方同じくはうまかるべく候匆々

○日の字四つ書きて、ヒヾカジツといふ人、今越後に在りとぞ。むかし谷の字四つ書きて、ヤヽタニヤと呼べる人の、松平氏の家中にありしと一對なり。

○文化元年、御尋に付申上候とて、諸家より書きて差出したる姓名のおもしろきをこゝに抄記すれば、寺五分刑部左衞門、狩野鹿太左衞門、大恩有難左衞門、七里鎌倉左衞門、竹串傳衞左衞門、松飾目出度左衞門、竹下太八左衞門、入文彌六左衞門等、いづれもまけず劣らずなり。牧野佐渡守内、四月朔日夏右衞門とあるは、ワタヌキと讀むのなりと、人言へり。

○一二三四五六も同じ時、百貫滿足兵衞とともに、毛利甲斐守内とあり。長坂血鑓九郎、野呂山野狐六、穴山宮内兵衞、一石八斗兵衞、三分一所典膳、草刈鎌由兵衞、加賀自由之兵衞の如きも、亦多からぬものなり。

○すぐれて長きは有馬中務大輔内、太田亦三郎兵衞之助、鍋島阿波守内、嬉野千石諸家彌太郎、水野日向守内、大岡田村新助之進五郎左衞門。姓とも名とも分かず、殆んど一口に讀上げ難きほどなるは、奥平大膳太夫内、菅沼筑紫分妊高山綾太郎彦刑部左衞門。

○二字なるは此頃多くあれど、其時珍らしと稱したるは、京極能登守内、今一。

（自明治三十四年四月至十二月）

眼前口頭

○今はいかなる時ぞ、いと寒き時なり、正札をも値切るべき時なり、生殖器病云々の賣薬、廣告を最も多く新聞紙上に見るの時なり。附記す、予が朝報社に入れる時なり。

○代議士とは何ぞ、男地獄的壯士役者と雖も、猶能く選擧を爭ひ得るものなり。試みに裏町に入りて、議會筆記の行末をたづねんか、截りて四角なるは安帽子の裏なり、貼りて三角なるは南京豆の袋なり、官報の紙質殊に宜し。

○啾々を鬼の哭くといふは非なり、こは一樂絲織若くは縮緬の、鹽瀬縮珍の類と相觸るゝをいふなり、紳士淑女の途行く音をきゝて知るべし。

○世に茶人ありて、せめて色とも名のつくことを得ば、今の小說家の望に足れるなり。されどもこれは目的にあらず、目的は孜々として倦まず、書肆の倉を建つるに在り。

○今の小說と、ながらとは離る可からず。寢ながら讀む、欠伸しながら讀む、酒でも飲みながら讀む。されどこの讀むといふことより、代金の手前といふことを差引きて、若幾餘あらば、そは小說家が社會に與ふる偉大の功益なり。

○明治の政治史は、伊藤山縣黑田井上後藤大隈陸奥板垣松方が名を、いやでも脫すこと能はず、今の自ら政客と稱する者に至りては如何、芳を千載に傳ふる固より難し、寧醜を萬世とはいはず、わづかに其日々々の新聞紙に遺す。

○されども歷史とは、不幸なる世の手控へなり、くら闇の恥をあかるみに出すものなり。憂目は虎の皮の留まれるが故に、敷革にせらるゝ如く、人の名の留まれるが故に、呼棄にせらる。

○およそ人は、姿を畫につくられざる程なるをよしとす。畫につくらるゝ人の、壁に貼られざるは稀なり。即ち、英雄豪傑は壁に貼らるゝものなり。

○總理大臣たらん人と、われとの異なる點を言はんか。肖像の新聞紙の附錄となりて、徒らに世に弄ばれざるのみ。

○拍手喝采は人を愚にするの道なり。つとめて拍手せよ、つとめて喝采せよ、渠おのづから倒れん。

○學士と精錡水とは、其點に於て甚しく相似たるものなり。先の大いなる瓶に盛り、これに無數の小石を投入れ、其ボクボクたる音を發するを待ちて、一々取上げて口紙を貼るなり。是れ卒業證書授與式なり。われは精錡水の吟香翁を富ましたるを聞けども、未學士の國家を富ましたる者あるを聞かず、門前の松屋のみ稍富みしとなり。

○途に、未學ばざる一年生のりきみ返れるは、何物をか得んとするの望あるによるなり。既に學べる三年生のしをれ返れるは、何物をも得るの望なきによるなり。但し何物とは、多くは奉公口の事なり。

○所謂政客の節操を重んぜざるを以て、娼妓に比する者あれども當らず。賣る可き節と、賣る可からざる節と、節たがへり。娼妓は鑑札を有す、至公至明なり。政客は有せず。

○兒を生まば女の事なり、誤ちて娼妓となる

とも、代議士となることなし。

〇一生の思出、代議士たらんとすといふ者あるを笑ふこと勿れ、寧ろ渠等は見切賣の勇氣ある者なり。已に見切賣なり、ひけ物きず物曰く物たるは論を俟たず。

〇選む者も愚なり、選まるゝ者も愚なり、孰れか愚の大なるものぞと問はゞ、答は相互の懐中に存すべし。されど愚の大なるをも、世は棄つるものにあらず、愚の大なるがありて、初めて道の妙を成すなり。

〇われは今の代議士の、必ずや衆人が望に副へる者なるべきを確信せんと欲す。衆人曰く、金がほしい。故に代議士は曰く、金がほしい。

〇日本は富強なる國なり、商にもよらず、工にもよらず、將農にもよらず、人皆内職を以て立つ。

〇このたびの文相の世界主義なればとて、日本主義なる大學派の人々のために説をなす者あれども、そはまことに無用の心配なり。何となれば、再言す何となれば、主義を持することと、箸を持することとは自ら別なればなり。

〇渠はといはず、渠もといふ。今の豪傑と稱せられ、才子と稱せらるゝ者、いづれも亦の字附きなり。要するに明治の時代は、一も亦一の時代なり。

〇男のほれる男でなけりや、眞の年増は惚れやせぬ。窮めたりといふべし。されども惚れらるゝは、附入らるゝなり、見込まるゝなり、弱處にあらずんば凡處を有するなり。程や容子や心意氣や、其何れを以てするも、われより高き人のわれに惚れるといふの理なし。

〇普通の俗説に從へば、緣はむすぶの神業に歸すと雖も、これとても都々逸以外に存立す可くもあらず。おもふに結婚は、一種の冒險事業なり、識らぬ二人を相擁かしめて、これに生涯の德操を强ふるなり。

〇統計上、年々離婚の增加するは人の知る所なり。妻を迎ふるに同居籍を以てするもの、亦將に漸く多からんとす。古の所謂人倫の大綱とは、わづかに朝夕顏を見交はすに過ぎず。

〇賣女が手管の巧なりとも、竟に智にあらず、三つ蒲團の上に於て初めて生ずる習慣なり。若今の夫婦間に、若干の德ありといはゞ、恐らくは暇をかけ合せたる時に於て、初めて生ずるそれも習慣ならん。

〇樂は偕にすべし、いづれ一間買ふべき桟鋪なればなり。苦は偕にす可からず、高利貸が門に合乘を停むるの要なければなり。

〇敢て貞節のみとは言はず、身に守る者いよ〳〵多く、心に守る者いよ〳〵少し。心身の二字妥當を缺かば、宜しく表裏と改むべし。道德は必ずしも實踐におよばず、口先のものなり、寧ろ刷毛先のものなり。霞の光のありとのみにて、雲の影のなきも可なり。治まる御代の景物なり、御愛敬なり。

〇おもへらく、親子兄弟、是れ符牒のみ。仁義忠孝、是れ器械のみ。

〇涙ばかり貴きは無しとかや。されど欠びしたる時にも出づるものなり。

〇熱誠とは贋金遣ひの義なり。註に曰く、其目的の單に製造するに止まらず、行使するに在るを以てなり。

〇眞實、篤實、堅實、確實、これらは或場合に於ける活字の作用に過ぎず。即ち今の精神界を支配するもの、勢力を以ていはゞ活字なり。これを六號にするも五號にするも、廣告料に於て差違なく、四號にするも二號にするも、工手間に於てまた〳〵差違なし。

○官人のために氣を吐くも、民人のために氣を吐くも、一つ口は同じ口なり、怪むを要せず。[illegible]と[illegible]とは正反對のものなれども、共にタチツテトの行に屬す。

○國家といはず、個人といはず、清まばタメなるべきも、濁らばダメなるべきこと、これも假字より出でたり。

○犧牲に供すとは面白き語なり、天神地祇は之れを看行すのみ、何日ともなしに人の取下げて、多くは自ら喰ふなり。

○泥棒根性なきものは人にあらず、これありて初めて世に立つを得べし。格をいへば豪傑たり才子たり、分をいへば强盜たり巾着切たり、素は一なること今更にあらず。

○人は殺すよりも、殺さるゝに難きものなり。殺すよりも、殺さるゝに資格を要するものなり。ねがはくは殺されん、殺さるゝを得ずば、ねがはくは殺さん。殺さず殺されざるも、猶人たるの甲斐ありや疑はし。勿論こゝに殺すといふは、刃に血塗る事なり。

○われは今の文學者の品位の、いかばかり高しとは得言はざれど、嘔吐を催すと學堂氏のいへるは稍過ぎたり。氏はおもに假名垣時代を見たるにはあらざるか、年も人も漸く遷り來れるを知らざるにはあらざるか、伊藤侯が十年前の政治家なるとともに、學堂氏も亦十年前の論客たるなくんば幸ひなり。

○小說家とは何ぞや。小說にもならぬ奴の總稱なり。われは之を以て、最も簡單なる、最も明白なる、恐らくは最も公平なる解釋とす。

〰〰〰

○何故にといふ語こそ、沒風流の極みなれ。說明し得べきと、得べからざるとの間に、妙不妙の別ちは存するなり。豆腐を好む者にむかひて、いかなるを味の妙となすと言はゞ、それはとばかり執しも逡巡すべし。即ち妙とは、說明すべきものにあらず、說明し得べきものにあらず、もし其幾分を說明し得たりとせば、說明し得たる幾分は、已に其妙を失へるものなり。

○不幸も弔はるゝ程なるは、猶樂しきものなり、これや限りの眞の不幸は、竟に弔はるゝことなし。

○あとなる人のおのれと同じく、溝飛越えしを見て、ほいなきものに思ふことあるも人の性なり。あとなる人の己とおなじく、溝に陷りしを見て、氣味よきものに思ふことあるも人の性なり。樣々なるが如しと雖も、しかも是れ同一人の性なり。

○わが世に大人なるものありや、君子なる者ありや。口にしばしば大人君子をいふ者は、手にしばしば追剝をなす者なり。後の世の人の、前の世の人を捉へて、身の箔となすに必要なる威嚇文句を、字に書きて大人君子とは云ふなり。

○夙に何々の志ありなどいふも、後人の附會なり、傳記家の道樂なり、立志編に限りて用ひらるゝ形容詞なり。偉人たらんことを欲ひし人の、偉人たりしことなく、多くは其邊の受附に隱れたまはず、曝されたまへり。

○有る智慧を出すに慣れたる果は、無き智慧をも絞るに至るものなり。凡人たれ、凡人たれ、凡人たれ、勉めて凡人たれ、是れ處世の第一義なると共に、修身の第一義なり。めでたく凡人の業を卒へたる時に於て、較すぐれたるものあるは、自己も猶よく認め得べき事なり。

○偉人たるは易く、凡人たるは難し。謹聽すべき逸事逸話は、凡人に多く偉人に少し。われは今、世を同うせる人々のために、頻に逸事逸話を傳へらるゝの偉人多きを悲む。

〰〰〰

○問うて曰く、今の世の秩序とはいかなるもの

ぞ、答へて曰く、錢勘定に精しき事なり。

○善は一箇の商法なり、文明的商法なり。當に金穀を養育院に出すに止まらず、姓名を新聞廣告に出す。

○陰德あり、故に陽報あるは上古の事なり、近代に入りては陽報あり、故に陰德あるなり。盛年重ねて來らず、こゝを以て學ぶべしと古人は言ひ、遊ぶべしと今人は言ふ。今は古にあらず、義理を異にする怪むに足らず。

○恩は掛くるものにあらず、掛けらるゝものなり。漫りに人の恩を知らざるを責むる者は、己も畢竟恩を知らざるものなり。

○恩といふもの、いと長き力を有す、幾たび報いるも消ゆることなし。こゝに於てか責る者あり、忘るゝ者あり、棚と同義たらしむ。

○僞善なる語をきく毎に、僞りにも善を行ふ者あらば、猶可ならずやとわれは思へり。社會は常に、僞善に由りて保維せらるゝにあらずやとわれは思へり。

○若し國家の患をいはゞ、僞善に在らず僞惡に在り。彼の小才を弄し、小智を弄す、孰れか僞惡ならざるべき。惡黨ぶるもの、惡黨がるもの、惡黨を氣取る者、惡黨を眞似る者、日に倍と多きを加ふ。惡黨の腹なくして、惡黨の事をなす、危險これより大なるは莫し。

○まことの善とまことの惡とは、醫の內科外科の如し、稱は異れども價は一なり。亂世の英雄たるもの、まことの惡ならば、治世の奸賊なるもの、まことの善なり。僞惡の出づるもこれが爲のみ、僞善の出づるもこれが爲のみ。

○賢愚は智に由て分たれ、善惡は德に由て別たる。德あり、愚人なれども善人なり。智あり、賢人なれども惡人なり。德は縱に積むべく、智は横に伸ぶべし。一は丈なり、一は幅なり、智德は遂に兼ぬ可からざるか。われ窃に思ふ、智は兇器なり、惡に長くるものなり、惡に趨るものなり、惡をなすがために授けられしものなり、苟くも智ある者の惡をなさざる事なしと。

○更におもふ、人生の妙は善ありて生ずるにあらず、惡ありて生ずるなりと。世に物語の種を絶たざるもの、實に惡人のおかげなり。吾をして歷史家たらしめば、道眞を傳ふるに勉めんより、時平を傳ふるに勉めん。吾をして戯曲家、小說家、若くは詩人たらしめば、徒らに神の御前に跪かんより、惡魔とともに虛空に躍らん。

〜〜〜〜〜〜〜〜

○人の常に爲さざるによりて善は勸むといひ、常に爲すによりて惡は懲すといふ。勸善懲惡なる語の、由來する所此の如くならずとするも、波及する所此の如し。

○善も惡も、聞ゆるは小なるものなり。善の大なるは惡に近く、惡の大なるは善に近し。顯るるは大なるものにあらず、大なるものは顯るゝことなし。惡に於て殊に然りとす。

○善の小なるは之を修身書に見るべく、惡の大たるは之を新聞紙に見るべし。

○勤勉は限有り、惰弱は限無し。他よりは勵ますなり。己よりは奮ふなり、何ものか附加するにあらざるよりは、人は勤勉なる能はず。惰弱は人の本性なり。

○元氣を鼓舞すといふことあり、金魚に蕃椒水を與ふる如し、短きほどの事なり。

○懺悔は一種ののろけなり、快樂を二重にするものなり、懺悔あり、故に悔む者なし。懺悔の味は、人生の味なり。

○打明けてといふに、已に飾あり、僞あり。人は遂に、打明くる者にあらず、打明け得る者にあらず。打明けざるによりて、わづかに談話を續くるなり、世に立つなり。

○奠都三十年祝賀會の、初めは投機的におもひ附かれしものなること、言ふを俟たず。これ

が勧工場に息したる人々の意をたゝくに、多くは新平民の同情者なり。たのもしき東京市の賤ひといへば、車に乗れる貧民の手より、車を曳ける紳士の手に、一夜の權利を移すに過ぎず。

○知己を後の世に待つといふこと、太しき誤りなり。誤りならざるまでも、極めて心弱き事なり。人一代に知らるゝを得ず、いづくんぞ百代の後に知らるゝを得ん。今の世にやくざなる者は、後の世にも亦やくざなる者なり。

○己を知るは己のみ、他の知らんことを希ふにおよばず、他の知らんことを希ふ者は、畢に己をだに知らざる者なり。自ら信ずる所あり、待たざるも顯るべく、自ら信ずる所なし、待つも顯れざるべし。今の人の、ともすれば知己を千載の下に待つといふは、まこと待つにもあらず、待たるゝにもあらず、有合はす此句を口に藉りて、わづかにお茶を濁すなり、人前をつくろふなり、到らぬ心の申譯をなすなり。

○知らるとは、もとより多數をいふにあらず。昔なにがしの名優曰く、われの舞臺に出でて怠らざるは、徒らに幾百千の人の喝采を得んがためにあらず、日に一人の具眼者の必ず何れかの隅に在りて、細かにわが技を察しくれるたらんと信ずるによると。無しとは見えてあるも識者なり、有りとは見えてなきも識者なり、若し俟つ可くば、此の如くにして俟つ可し。

○かしこきは今の作家や、われたゞ一つを傳ふれば足るといひて、さるが故に平生勉むるにあらず、さるが故に平生なぐるなり。知己を待つこと、數ひく弓のまぐれ當りを待つが如し。

○ほまれは短く、恥は長し。譽れは身をつゝむものなり、恥は身をそぐものなり、頭にかゝるものなり、面にのこるものなり。つゝみて懸かるは雲の如し、吹かば飛ぶことあるべく、そぎて遺るは瘢の如し、拭へども去ることなかるべし。譽れなきも恥にあらず、恥なきは譽れたり。ほまれを求めんよりは、恥を受けざるに如かず、されど譽れもなく、恥もなきを世は人といはず、恥とほまれと相半したる間に於て、人の品位は保たるゝなり。

○唯それ活字の世なり、既に言へりし如く、活字に左右せらるゝ世なり。榮と辱と、一箇の活字を置換へたるに過ぎず。萬朝報が日々市内の死生を記すを見て、人は生れてより死するまで、遂に活字の緣を離れざる者なるをおもふ、尠くとも六號活字を脱離し能はざる者なるをおもふ。

○褒するに分あり、過ぐれば却て阿するなり、世に碑文書きほど、事實の本意を弄へたるはあらじ。さもなきに父祖の業をのみ輝かさんは、却て父祖の業を辱しむるものなり。

○死せる者は谷中に行くなり、生ける者は染井に行くなり。葬るに自他の別ありと雖も、其共同墓地たるに於ては一なり。

○優れるが故に勝つなり、劣れるが故に敗けるなり。強者の弱者を救はざるを責むと雖も、強者は何の度、何の點、何の域にまで、弱者を救はざる可からざるか。いつまで草のいつ迄も、唯限り無くといはゞ、強者は己のために勝ちて、他のために敗けざるを得ず。

○力の強弱なり、理の是非にあらず。しかも代々、弱者の理に富めるが如き觀あるは、一に攻守の勢ひを異にするに由るなり。弱者の強者にくらべて、理をいふに都合よき地位なるによるなり。愚癡や、怨みや、泣言やを繰返すの便宜あるによるなり。要するに弱者の數多ければなり、口喧しければなり。

○強きを挫き弱きを扶く、世に之れを俠と稱すれども、弱に與せんは容易き事なり、人の心の

自然なり。義理名分の正しき下に、強に與せんはいと〳〵易し。悶ゆる胸の苦少きを幸福といはゞ、弱者は強者よりも寧幸福たり。

○劍を以てするも、筆を以てするも、強者は遂に弱者を扶くることなし、長く扶くることなし。弱者を扶くるは弱者なり、どの道のがれぬ弱者なり、同病相憐れむに過ぎず。

○正義のために起つといふは、身正義に代れるなり。貫き能はで斃れたるとき、正義は猶存在するものなりや否や、埋沒せられざるものなりや否や。

○貧は強ち恥辱にあらざる可きも、さりとて到底榮譽にあらず。まづしき也、とぼしき也、憂ふるに人さま〴〵の輕重ありとも、孰か心の奥を問はれて、富に優るといふ者あらんや。貧を誇るは、富を誇るよりも更に陋し。

○濫せざるは罕なり、世に清貧なるものあるべしとも覺えず。先ごろ人の之を言爭へるも、概ね字義に拘泥したるの論のみ。富は餘れるなり。貧は足らざるなり、鹽噌の料に逐はるゝも、酒色の債に攻めらるゝも、算盤の合はざるは一なり、貧は一なり。必要を辨ずる能はざるを貧といはゞ、貧に清濁の別ちあるなし。即ち清貧とは、欲を衒ふに過ぎざる假設文字なり。

○富は手段を要す、此に於てか貧に安んずといふことあれども、實は安んずるにあらず、安んぜざるを得ざるなり、餘儀なきなり。人は銅貨の大よりも、銀貨の小を取る者也、取らざる迄も、其貴きを知れる者也。貧に安んずる者ならぬは明らけし。

○今日しばし貧に安んずとも、有りし昨日、有るべき明日を夢みんは定のものたり。悠然、澹然などいふも、つまりは負惜みの臺詞なり。

○謂れなきに富者の憎まれ、貧者の憫まるゝことあり。覺らぬ人の心の、身を富者の地位に置かず、貧者の地位にのみ置きて考ふるに因るなり。

○金庫は前にす可きものにあらず、後にす可きものなり。金庫に向へる人の膝は屈めるなり、金庫に倚れる人の肩は聳ゆるなり、そり反るなり。

○他人の迷惑を顧ず、慮らざるもの、傳記家を以て第一とす。知られぬが幸ひの手形足形を、さがなき此世に掘返して、おのが樂みに耽るなり。傳記家が文辭を修飾すればするだけ、他人の迷惑は加はるなり。

○われは傳記家の筆によりて、前人が罪過の數へらるゝを悲まず、功績の列ねらるゝを悲む。靈あり心あらば、地下に其人の然ばかりならぬを泣かんかとて。

○罪は遺す可し、功は遺す可からず。人の眞價は罪有るによりて誤られずと雖も、功有るによりて却て誤らる。迷惑は罪の大なるよりも、功の小なるを擧示せらるゝに在り。

○歌歌ひ、舞舞ふ人の常に曰ふ、やんやの聲はこゝぞの時に聞くことなく、さらでもの時に聞くこと多しと、巨人、偉人、大人なる者の傳記に就ても、われは此憾なきを保する能はず。

○人間が標準相場は、功名を以て定む可きにあらず、假なれば也。過失を以て定む可し、眞なれば也。

○褒するに辭は限有れども、貶するに限無し、例せば利口といへる唯一つのほめ言葉に對し、馬鹿、阿房、間拔け、拔作、とんま、とんちきなど、惡口は數ある如し。世とて人とて、到底誹られで果つまじきことは、これにて知るべし。

○謂はゞそやすは義理づくなり、けなすは眞けんなり。人のたづぬるに遇へば、一はまあ爾言

つて置くのさといひ、一はそれが當前ぢやないかといふ。

○恐る可きもの二つあり、理髮師と寫眞師なり。人の頭を左右し得るなり。

○さる家の廣告に曰く、指環は人の正札なりと。げに正札なり、男の正札なり。指環も、時計も、香水も、將又コスメチックも。

〰〰〰〰〰〰〰〰

○つとめて穿鑿すべし、つとめて穿鑿すべからず。かく反對せる二箇の用意を、一身に負ふべきは歷史家なり。瀰漫たる嶺の櫻と見しは、白雲なりしと言ふとも、水蒸氣の凝れりしと迄は言ふこと勿れ。陷り易き歷史家が弊は、穿鑿家たるに在り。

○されど水蒸氣と知らず雲を敍し、雲と知らず櫻を敍するが如きは、最も愚劣なる歷史家の事なり。

○詩は建國のものにあらず、亡國のものなり。建つるよりは、亡ぶるに奏かなへり、品具はれり。畏くも後醍醐、後村上の帝を首めたてまつり、南朝の歌集の極めて誦すべく、北朝の一として看るに足らざるが如き、轉ずればやがてよき例證にあらずや。

○亡國の臣など呼ばれぬる人の、いかばかり風情に富みたりけんと、おろかしき事をも時には思ひ出さる。こはわれの日本の民なるが爲か、深編笠の浪人姿を、土間の一二三邊りに在りて喝采したる日本の民なるが爲か。

○那翁が母國の遺憾なく遂げられたらんには、今の如く我邦に最屓を有することなかるべし。德川氏の治下に出でたる歷史なるにも拘らず、一枚上に置ける秀吉の如きも、亦然らん。

○例を低きに取らば佐倉宗吾を看よ、大方の人の渠に動かさるゝは、奮ひて起てる初めなり、中ばなり、終りにあらず。願達きて渠が身の全からば、稱する者九分を減ずべし。

○目的は巓に在れども、山に遊ぶの快は、幾曲折せる坂路を攀づるに在り。登れる者は下らざる可からず。

○めでたきものは平凡なり、めでたき正月の生活は、人皆平凡なり。

○詩竟に盛えんか、衰へんか、われ之を知らず。唯其動搖し、騷擾する毎に、急ぎて歸着點を明かにする者なるをおもふ。

〰〰〰〰〰〰〰〰

○革命來を呼べる人あり、今猶呼ぶ人あり、倶に戲れなるべし。信仰なき民は、革命なる文字を議するといはず、弄するの資格だになき者なり。

○假に細民の群り起てりとせよ、襲ひ擊たんは何處なるべき。米屋、薪屋、炭屋、日濟し貸、及び差配人のでこぼこ頭のみ。

○口若くは筆もて富豪を責めんは、徒勞に屬す。幾千萬言を重ねて其暴橫をいふとも、暴橫より得たる權勢は、其間も猶暴橫を逞しうし續くるの餘地あるなり。勝を必せざる攻擊は攻擊にあらず、攻擊の甲斐無し、敵をして防備を嚴ならしむるに過ぎず。

○非を遂けよ、希はくは非を遂けよ、非は必ず遂ぐ可きものなり。成功は非を遂ぐるに由りて來り、失敗は半途に非を悔い、非を悟り、非を悛め、能く遂けざるに由りて來る。

○獨り斃れて已まんとは、潔き言葉なり、唯夫れ言葉なり。われをして言はしめば、人一人なりとも多く倒したる後に、われは倒れん。ふびんなれども冥土の路連れ、彼れ斃れずば我れ斃れじ、獨りは斃れじ、斃るゝとも已まじ。

○萬歲の聲は破壞の聲なり。河原の石の積上げられたるよりも、突崩されたるに適す。

○今もちよん髷といふを戴きて、明るき都の

兩側町を行く人あり。頑迷なりといふ勿れ、固陋なりといふ勿れ、拙くとも主義を頭に載せたる人なり。

〜〜〜〜〜〜〜〜

○理ありて保たるゝ世にあらず、無理ありて保たるゝ世なり。物に事に、公平ならんを望むは謬なり、惑なり、慾深き註文なり、無いものねだりなり。公平ならねばこそ稍めでたけれ、公平を期すといふが如き烏滸のしれ者を、世は一日も生存せしめず。

○どうせ世の中は其様なものだ。この一語は、泣ける者をも慰むべく、怒れる者をも慰むべし。斯くして人口は年々增加すとも、減少することなし、めでたからずや。

○家あり、妻なかる可からず。妻が一家に於ける席順を言はゞ、蓋し鼠入らずの次なるべし。人の之れを米櫃の保管者となせども、任に能く保管に堪へんこと覺束なし、恐らくはそれの輕重を單に報告するに止まらん。

○與へられし或權限をすら守り得ず、然かも與へざる或權限を超ゆる者は妻なり。

○凡ての場合に於て、妻は參考品なり。分別をなすに於て、なさしむるに於て、爲さざる能はざらしむるに於て。

○二人だから何うもならないといひ、一人だから何うかなるだらうといふ。夫婦者のは晴れたる苦勞也。獨身者のは陰れたる苦勞也。世に遣瀨なき思ひといふは、おほむね頭數を以て算出せられ判定せらる。

○少年諸君のために言はんか、腦病に倒れんよりは胃病に倒れよ。雜誌を買うて腦病に倒れんよりは、ひとしく學資の上前也、くすねる也、菓子を買うて胃病に倒れよ。腦と胃と、機關の因緣淺からずと雖も、士は一に名分を重んぜざる可からず。

〜〜〜〜〜〜〜〜

○漫に隈板二伯を嗤ふを休めよ、人間らしき內閣を組織したることに於て、二伯が功は沒す可からず。われらが知見の及ぶ限りを以てすれば、何れは人間の手に由りて造らるゝ內閣の、斯の如く明白に、寧ろ斯の如く巧妙に、人間の眞情を露出といはんよりは捧呈し得たるもの無し。是實に世界に於て、空前の事たるとともに、恐らくは亦絕後の事ならん。但だ衆の望め、かく迄に人間らしき內閣を得んと欲したるに在りしや否ずやを知らずと雖も、今にして思へば藩閥打破を疾呼せる渠等が醉の、頗る人間らしかりしをわれは歎稱せざるを得ず。

○一日も政治なかる可からず、茲に於てか月給を奪ひ合へり。一日も政黨なかる可からず、茲に於てか看板を奪ひ合へり。車宿の親方の常に出入場を爭ふの故を以て、內閣大臣の偶ゝ出入場を爭ふを不可とするの理をわれは發見する能はず。然り發見する能はず、車宿の親方の果敢なきが故にあさましく、內閣大臣の然らざるが故にあさましからずといふの理をも發見する能はず。

○憲政の美といふことを一言に約すれば、壯士の收入を增すといふ事なり。

○あゝ政治家よ、あゝ我邦今の政治家よ、卿等は唯一つなる刑の名をも知らざる者也、熟せざる者也、諳んぜざる者也。竊盜をなすも、强盜をなすも、ひとしく刑に處せらるべしと雖も、刑に於てすら名を重んぜざる卿等は、遂に何等の肩書をも有する事なし。

〜〜〜〜〜〜〜〜

○政界今日の事を以て、狂的行動となす者あり。一應はきこえたり、再應はきこえ難し。愚

人の大人と相隣れるが如く、狂人は傑人と相隣れり。渠等を愚と言はんか、愚は猶賢なるものあり。狂と言はんか、狂は猶偉なるものあり。所謂彼等は愚人、狂人以下なるのみ。

○一の大人、偉人なしと雖も、隣れるを以て近しとせば、千百の愚人、狂人あらんも亦聊か慰するに足る。恰も一町先の酒屋の深けて起きざるによりて、角店の水臭きをも忍ぶが如けん。愚人の量、狂人の見だになき世となりては、政治といふもの、竟に一杯の寐酒に若かず。

○譬へて今回の變を言はゞ、總領の狡猾に人の氣を許すことなかりしも、次男の正直にふびんかゝりて、思はぬ相互の不手際を演出するに至りしなり。政治系統の外に立ちて、單に因果の理法よりすれば、國家を誤る者は大隈伯にあらず、板垣伯なり。

○政治運動とは、一名集會の業なり。胸襟を披くと稱し、十二分の歡を盡すと稱す。幾たび盡すも十二分なると共に、幾たび披くも舊の胸襟なり。

○鬱勃たる不平の迸り出づる時、これを支へんは酒なるかな。敢て段落を見計ふを要せず、まあ一杯とさしたる洋盞の渠が手に移らば、疑ひもなく麥酒は其場の結論たるべし。

○それが何うした。唯この一句に、大方の議論は果てぬべきものなり。政治といはず文學といはず。

○絶えず貢獻なる語を口にする人あれども、おもふに腹のふくれたる後の事なるべし、掛くとも、一日三度の飯を食得たる後の事なるべし。片手業なるべし。小唄なるべし。

~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~

○與す可きにあらず驕りて瞰下すか、齒す可きにあらず謙りて瞻上ぐるか、處世の要はこの二つを出づること莫し。されば朝夕の辭儀口當も、おまへは馬鹿だと言ふか、あなたはお利口なと言ふかの二つよりあること莫し。

○上流に比すれば樂多かるべし、されど下流に比すれば苦多かるべし。社會の勢力は總て中流の有なること、今更にもあらざる可き歟。維持するに於て。壞亂するに於て。

○米錢の事と限るにあらず、力をお隣のをばさんに假るに、裏家に在りては味方なり、慰藉を得るの便り也。表店に在りては敵なり、誹謗を招くの基也。理の本は斯くひとしけれど、情の末は斯くたがへり。

○下なる人は之を寄せ合ふなり、上なる人はこれを猜み合ふなり。同情なる文字の誇りに社會に稱せらるゝにも拘らず、解を求むればまさに斯くの如し。

○立身出世といふことあり、人のうまれの當に恰からば、誰も爲し得んものに思ふは大なる誤り也。何處にか阿房の本體をとゞむるにあらざれば、立身出世はなり難し。立身出世を希はん者は、見え透きたる利口と、見え透きたる阿房とを兼有せざる可からず。併存して而して巧に表出せざる可からず。

○虎といふものこそ可笑しきものなれ、身は動物園の鐵柵に圍まれて出づるに由なく、遂に自由なるまじき境と知りつゝ、猶其處に一分時を安んずる能はず、最も、最も、最も柵に近き邊を、日夕往返し居るなり。

○軍人の跋扈を憤れる人よ、去つて淺草公園に行け、渠等が木戸錢は子供と同じく半額なり。

○山縣侯の手に成れるこの度の内閣は、雅味ある内閣也。一概に之を斥けんは、人類學攷究の價値を知らざる者也。組織と言はず、宜しく發掘と言ふべし。

~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~

○一の政治家なし、數多の政論家あり。一の政

論家なし、數多の政黨屋あり。强ひて家の字を附す可くば、われは之を一括して、經世家といふの妥當なるを信ず。經綸の經にあらず、經過の經なり、卽ち世を經るなり、どうかからうか渡り行くなり。

○正札だからまけますといふ世にありて、特り看板に僞りなきは、彼の自ら有志家を以て任ずる輩也。一定の職なく、業なく、右往左往に唯わや〳〵と立廻りて、剛體と稱す、志の有る所知る可きのみ。三輪のうま酒うまさうなる時に、多くの人は志を呼ぶものなり。

○奔走家といふも新しき營業也。抱への車夫に給分を渡すことなくば、一層新しき營業也。

○曩に大臣の名の安くなりぬと說きし人に問はん、そは從來高上りせる我邦政治の價の、漸く平位に著かんとしたるものにあらざる乎。この度の內閣は如何、亂高下とも言ひかぬるなるべし。止むなくば休日越しの相場歟、開市の曉は直ちに改正せらる可き者なり。

○政治は人を亡し、文學は國を亡す。國のために政治をいひ、人のために文學をいふ。誤らずんば幸也。

○極めて謂れ無き事なれども、姑らく傳ふるに隨せて、醫は仁術なりとせんか。古は人を活すが故也、卽ち患を除く也、今は人を殺すが故也、卽ち苦を去る也。字義と雖も世とともに推移するに、怪しうはあらじ。

○諺に曰く地震雷火事親父と、是れたゞ危險の度を示したるに過ぎず。苦痛の量よりすれば、親父火事雷地震也。

○世は殿樣の譫なる哉、孃樣の琴なる哉。喝采の豫約せられたる如きものを以て、豫約せられたる如き喝采を得るも、猶長く悅べり。

○月給は人の價にあらず、されども月給は人の價なり。各人が遭遇する場合の多少より言はば。

○官吏が權勢を射利の用に供すること、今始まりしにあらずと雖も、過ぎにし事の迹をひそかに察するに、藩閥內閣に屬するは、地位のために獲たる儲け口なりし。政黨內閣に屬するは、儲け口のために得たる地位なりし。卽ち前者は偶然也、偶然といふを得可し。後者は必然也、必然といふの外無し。彼の杉田を看よ、肥塚を看よ、草苅を看よ、所謂憲政の賜としては醜穢なりとは言はず露骨なりしを、われらは藩閥の前に恥ぢざるを得ず。

○風紀は一片の禁令の、能く支持す可きにあらず。學生を取締り、諸藝人を取締り、遊び人乃至物貰ひの徒を取締るといふも、畢竟威壓のみ。腐敗せしめよ、大に腐敗せしめよ、世を擧げて全く腐敗し盡すを得ば、尠くとも人互ひに感染し、浸潤するの患を除くに庶幾からん。

○彼方には火鉢を取除け、此方には茶棚を取除くるは、朝々の掃除にも面倒なる事也。掃除し畢りて顧みれば、塵は塗盆の上に猶鮮かなるべし。如かず機を得て、一時にどつと掃出ださんには。

○人は早晩、何の點と限らず墮落す可きに定まれる者也。强ひて墮落を抑へんは、發せしむるに過ぎず。あしき墮落をなさざるの前に、噫われはよき墮落を誨へんかな。

○一夕、大學生の語るを聽く。曰く、彼奴もなかなか進化したと。玆に進化とは、縮珍の紙入を藏するの義也、われらが認めて墮落となす所の者也。要するに學問は自己を諒解するの道にあらず、辯解するの具なり。

○今の教授法といふは、泥水清水の混合物也、倂せ飮ましむる也。よしや溯れば清水の多分なりとも、攪き交ぜられし末は泥水の行渡れる

を以て、滿腹と稱す。宜なり藥學に淸水を見ず、汲かば必ず泥水なることゝや。

○漫然、他を罵りて無學といひ、無識といふは卑賤なる、但しは卑怯なる語也。いかなる大學者、大識者に向つても言得べきと共に、いかなる大學者、大識者と雖も、之を言釋かんに途なき事なればなり。眞正の學者、識者の口より、この語の出でしをきゝし事なし。

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

○教育の普及は、浮薄の普及也。文明の齎す所は、いろは短歌一箇に過ぎず。臭い物に蓋するに勉むる也。國運日に月に進むなどいふは、蓋する巧の漸々倍加し來ぬる事也。

○天保老人氏曰ふ、今を昔に比ぶるに、男次第に妍く、女次第に醜し、是れ何が故ぞと。戯謔にはあらざるべし、眞ならばげに是れ何が故ぞ。未能く答ふるを得ずと雖も、われは敢て風俗上の問題となさず、教育上の問題として、之が因由をたづねんと欲す。

○女といふは榮ある者哉、紅きもの、白きものもて彩るを得るなりとは人の言也。女といふは效なき者哉、紅きもの、白きものもて彩らざるを得ざるなりとはわが言也。

○聖賢の道といふものこそ、いと心得ね。大方の場合に於て、女子は即ち色なりと解し、格外に之を忌み怖れたり。風を以てするも、利を以てするも、つまりを言はゞ欺く也。總ての意味の上に、欺といふは元アザムキ也。僅に女一人を欺き得ず、何者をか欺き得ん。女は欺く可し、欺かば足りぬべきものなり。

○炊がざれば米は食ふにたへず、炊ぐは當然のみ。女を欺くに何の罪ぞ。

○たまたま女の僞りを陳ずることありとも、たゞす勿れ、責むる勿れ、とがむる勿れ。僞りかあらぬかをさへ、問ふに及ばず。女の謊は、唯聞いて置くに宜しき事也。

○女子の貞操は、貧の盗みに同じ。境遇の強ふるに由る。

○涙以外に何物をも有せず、女の涙は技術なり。

○女は猶鶯の如き者か、羽色のために拂はるゝよりも、啼音のために拂はるゝ價也。最もよく玩弄に適したるを、最もよき女とは謂ふなり。

○嘗て女の手に、劍を執れる世もありき。戰へる也。扇を取れる世もありき。舞へる也。今は只男の肩に懸くるか、頸に懸くるかより能無き世となりぬ。哀なる也。

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

○才を要らんよりは、財を要れよ、女の才は用なきもの也、直用することなきもの也。なまなかなるは不具たるに若かざるべし。財あるに如かず。財を獲たらんは、才を獲たらんより耐へ易く、忍び易し。

○人の妻を遇するを見るに、之を裝飾品となす者は座敷に置き、日用具となす者は臺所に置く。共に動産たり。妻みづからも亦身の置場、据場、寢床とより上の觀念を有するものなし。若これありとせば、そは裝飾品の風通を買はれざるを恨み、日用具の綿子を賣らるゝを怖るゝのみ。この時初めて、夫あるを覺るに過ぎず。

○凡て女子の心にとは言難し、身に夫あるを覺るは、滿ちたる時にあらず、缺けたる時なり。全き時にあらず、乏き時なり。謝す可き時にあらず、訴ふ可き時なり。恩に非ず、怨也。

○已に動産と稱す、妻を迎ふるは一箇の富を增すなりといふ者あるにわれは抗論せざる可し。醫者樣の物置に、菓子、鷄卵の空箱の積まれたるを富なりといふ者あるにも、われは又亦抗論

せざる可し。

○文字ばかりをかしきは莫し、實を傳へざるは莫し。内助の二字の如き、殊に然り。單に鍋釜を整理し、配置し、按排するの謂とせんも、猶諸買物通帳は、常に夫の前に提供せらるゝにあらずや。世に内助の功なんどいふもの、到底有得可しとも覺えず。

○彼の妻を見よ、飼犬を見よ、大差ありや、餌を與ふることを忘れずば、吠ゆることなし。

○寒い晩だな、寒い晩です。妻のナグサメとは、正に斯の如きもの也。多くもこの型を出でざる受答への器械のみ。之に由りて、世の寂寥を忘るといふ者あり、げに能く忘るべし、希望をも忘るべし。

○前なる夫に告ぐ、渠は今、公に、後なる夫の膝に凭りて笑ふ也。後なる夫に告ぐ、渠は今密かに、前なる夫の墓に詣でて泣く也。いづれぞ心の誠なる。いづれも形の僞り也。

○生殖作用は、生活作用也。飢ゑざらんが爲といふこと、女子が結婚の一條件たるを以て見れば。

○豫め轉賣を諾されたる者は娼妓なり。されども權利者の誤解をまねくこと多し。この誤解を招くこと無き者は妾なり。

○雜誌、新小説の懸賞規則を見るに、當選者の肖像を寫眞版となし、之を卷頭に掲ぐべしとあり。あゝ明治の青年は、斯の如くにして犠牲に供せらるゝ也、葬らるゝ也。

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

○戀とは口にうつくしく、手にきたなき者也。こは嘗て神聖論を拒否するにあたりて、戀とはうつくしき詞もて、きたなき夢を敍するものぞとわれの言へるを、詳かにしたりとも、約かにしたりとも言得べきもの也。

○危きは世に謂ふ戀なるかな。一たびするも、十たびするも、符號を遺すことなく、痕跡を留むることなし。

○相見ば戀は止むべきか、相逢はゞ戀は止むべきか、相語らば戀は止むべきか。切に求めて休むことなきものは戀也。

○須らくわれも世につれて、相思ふを戀といふべし。最後やいかに、限りなきおもひの程を互に表示するに於て、通告するに於て、將又交換するに於て、唯一つなる方法は××××××にあらぬか。

○ふたりが戀の契約書にありては、××は證劵印紙なり。之を貼用するにあらざれば、自己も猶效力を認めず。

○戀は親切を以て成立す、引力也。不親切を以て持續す、彈力也。疑惑は戀の要件也。

○夫婦は戀にあらざること、言ふ迄もなし。夫婦は戀の失敗者と失敗者とを結び合せたるものなること、亦言ふ迄もなし。一鮨をと思つたが蟇口の都合で蕎麥にして置くのだ」とは、われの既に言へる所なり。

○握手は子をなす事なし。夫婦の愛は肉より生ず。かの嫉妬なるものを看よ、そを四隣に吹聽して憚らず、以て儀式となすにあらずや。

○唄淨瑠璃は言ふにも及ばず、古への和歌の今に傳へて人の誠となすもの、戀となすものの多くは××也。倶に×××ことを望めり。いづれの邦の歴史と雖も、かけには必ず×××の伏在せる者なるを思ふ。

○劇にて見たる初菊は、いと率直なる婦人なりき。公衆の面前に於て、せめて一夜の祝言を強請せり。

○何故に女子は××ならざる可からざるか。何故に女子をして××ならしめざる可からざるか。女子に×××と信ずる者は、自己の零落を知らざる者也。相携へて途上を行くとせよ、妻の眼の何ものに注がれ、夫の眼に何ものの映

れるかを、夫は察知するの能力なき者也。況んや抑制をや。能力と言はさる迄も、妻が夜毎の夢の始終を、明かに聽く可き信用だに無き者也。

○希はくは安んぜよ、滿天下の女子諸君。現行犯ならざる限りは、すべての女子は××しき者なり。

○恐らくは×××は、法律の禁ず可きものにあらざるべし。

○われは貞婦、烈女の傳を讀みて、かゝりし人のまことに在りけんよしを確信したり、嘆稱したり。されど若われと同じき世に在らしめば、もはや理窟の要なし、これはたまらぬとより多くを言ふ能はず。

○十年の語らひも、一言によりて去り去らるゝを夫婦といふ。よしや倶々、あかぬ中にも仔細ありて、啼いてくれるか初杜鵑、血を吐く程の別れをなしたりとも、十日、廿日、一月を隔つれば心全く他人也。女子の進退は、毫も暦日と關係無し。

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

○戀は花か、色は實か。花の實となるは必然にして偶然也、偶然にして必然也。散れよ花、花は初めより散るに如かず。忘れよ戀、戀は初めより忘るゝに如かず。

○花間に月下に、言はぬ思の唯打對ひて果つべき生涯ならば、われは戀の神聖を疑はじ。彼れと此れとは倶に初戀の、つゆ動かぬ保證を公に得るものならば、われもさまでは疑はじ。

○戀ふるにいさゝかの價ありとも、戀はるゝに價なし。成就の一方より言はゞ、戀はまぐれ當り也、ぶつかり加減也、一寸したキッカケ也。

○獻身的戀愛となん、呼ばるゝものありとぞ。日に三たびは飯食ふべき身を獻げ來らるゝも、時に依りては迷惑なるものに思はる。

○戀と言はず、更に色と言はん。われは混ずることなかるべし。色とは富の副産物なり、屈託なき民の鬨の聲なり、今日の如くめでたきものなり。

○こゝを以て、われは一押二金といへる人よりは、一暇二金といへる人の炯眼に服せざるを得ず。其共に「をとこ」を三位に置けるも、故なきにあらず。男の器量を貨幣につもらば、僅に三錢四錢の顏剃代を以て上下する者なればたり。

○爨婦も丁稚も打交りて臥せる低き屋根の下と、坊ちやまも孃樣も各お座敷を有せらるゝ高殿の上と、所謂醜聞の孰れに多きかを比較し看よ。是亦餘裕の一例なるべし。

（自明治卅一年一月至卅二年三月）

罪々刺々

○端なくもわが眼前口頭は、法の問ふ所となりぬ。正面と反面と、事の描寫と理の表白と、わが文に於て殊に甚しく混讀せられ、誤解せらる。われや黄口の一書生、字を知ること少きの罪か、將多きの罪か。全く知ることなからましかばと、今に及びて悔いるも詮無し。われら不文の徒、須く戒心を要す。

○道徳を言ふ者、道徳の假面を被る者、近時著しく增加したり。未然に言ふに非ず、既然に言ふ也。言ふ者奚ぞ恃むに足らん、被る者稍恃むべし。一國文化の增進は、この假面あるがためなること、夙に歴史のわれらに諭示する所也。

○何人も異議なき道徳の見解は、自身之を守るを必せず、他人之を守るを必すといふことに歸着すべし。

○偶ゝ道徳を論ずるの故を以て、これが躬行を迫るは、箱根以東に化物あらしめんとする者也。思つたり、したりは出來ませぬとは、特に論者がために設けられたる好句ならんかし。

○喰はざれば佳人と雖も、桃花の晴に笑ひ、李花の雨に泣くの媚を競はんこと難し。こゝに喰ふといふは、大口あく事也。懸棟飛閣の人の目を眩するものありとも、或時は人の鼻を掩はしむべき下掃除の、門近に出入するを禁じ得ざるものなることを忘る可からず。

○時弊を救ふと稱へて、人の祕事内行を訐くに力むる者あり、是亦一の時弊にあらざる乎。策を失したる矯風は、矯風にあらず、挑發のみ、勸誘のみ、助長のみ。惡を懲らすといふもの、まことは惡を勵ますものなり。

○今の時、所謂ヒューマニチイを說くといはず、好くといふべし。それら諸君子の前に、敢て一笑話を獻げんか。橋詰の巡査は、諸君子のために有力なる同論者也。切に行人に誨へて、左へ〳〵といふ、是れ豈人道を主張する者にあらずや。

○偏に法律を以て防護の具となす者は、攻伐の具となす者也。楯の兩面を知悉せる後にありて、人多くは高利貸となり、詐僞師となり、賭博師となり、現時の政治家となる。

○謙信智あり、信玄膽あり、是古の戰なり。星移り、物變りぬ。すばしツこきをのみ智謀といひ、づう〳〵しきをのみ膽略といふ。掏摸と追剝とは、最もよく通俗的に、この二つの表現せられたる者也。

○罪の輕き者は監獄に行き、重き者は酒樓に行く。かしこには鐵の鎖あり、笞あり。こゝには金の鎖あり、女あり。

○夜は休息のために附與せられ、計畫のために使用せらる。總ての方面に涉りて、夜は見せ掛けの時間也。人の意の天の意に乖くや久し、戻るや久し。

○もろ〳〵の物價の盡く騰貴せる際にも、猶ほ以然としてあげず、あがらざるものは夫れお賽錢乎。

○あゝ作家諸君、諸君は原稿料引上げの行はれざるを恨み給ふな。其時は神、若くは佛になり得たりと思ひたまへ。たゞの神佛に比すれば、諸君は口の働くだけでも多能也。

○老熟は或意味に於て意氣の銷沈なれども、意氣の銷沈は必ずしも老熟にあらず。新進作家に代りて白す。

○絶えず作を出さざれば、作家にあらずといふ乎。作家は何の日を以てか、得て修養せん。今

の批評家の言ふ所は、今の作家をしてお目留まりますれば、直ちに次なる甕に取掛るの輕技師たらしめ、手品師たらしめんとするもの也。何等の曲折をもとゞめず、絶えず語るを以て壯なりとせば、希はくは去つて九段公園の噴水器に觀よ。

○今の作家は、今の批評家のために毫も開發せられたることなし。されども今の批評家は、今の作家のために常に生活するなり。

〰〰〰〰〰〰〰〰

○身、貧にありて志を改へざるは易き事也、多き事也。富にありては難き事也、罕なる事也、人の節操を貧にのみ見て、富に見ざるは早計也、速斷也、鼻元思案也。

○貧の墮落は要求なり、充たさんと欲して充たさるゝことなきなり。富の墮落は強請なり、飽かんと欲して飽くことなきなり。憐むべし貧の墮落は、一人の墮落なれども、憎むべし富の墮落は、一國の墮落なり。されど共に心の自然たるや、言ふを俟たず。

○智は有形也、德は無形也。形を以て示すを得、故に智は進むなり。形を以て示すを得ず、故に德は進むことなし、永久進むことなし。若有之りとせば、そは智の色の餘れるをもて、德の色の足らざるを一時、糊塗するに過ぎず。

○富をなすの道は智に在りて、德に在らず。貧人と長く語らんは、富人の損害なること疑無し。闇夜の溝に陷れる者を救はんと欲せば、自己も手を泥に汚さざる能はず。

○人の心の最きよらかなるは、人の心の最おろかなるなり。魚の多數は澄江に釣らず、濁流に釣るなり。

○稼がざる可からず、こは世に必要の事なれば、人皆知れり。何故に稼がざる可からざるか、こは更に世に必要の事なれども、知る者鮮し。

○納豆屋の聲に明け、豆腐屋の聲に暮るゝは、塵深き都の光景也。太く、短きを便とするものあり。細く長きを便とするものあり。品さまざまなるとともに、聲亦さまざまなり。われは茲に世間一切を、姑く賣品といはん。利は日の中の聲の大なるものに薄く、夜の闇の聲の小なるものに厚し。卽ち賣聲の相違は、營業の相違也、反比例的に利得の相違也。

○號外賣の聲と、辻占賣の聲とは、新舊思想の比較の上に、最も顯著なる例證をわれらに與ふるものなり。何ぞ殊更に嗜好といはんや、趣味といはんや、將又品性といはんや。

○涙は誠意なりとぞ、猿はよく啼く者也。血は熱心なりとぞ、蚊はよく喰ふ者也。

○汝は犬なり、馬なりと言はゞ、人必ず憤怒すべし。されど場合によりては、身自ら犬馬に比して怪まず。辭は外に遜るなりといへど、意は内に飾るなり。利害の關係は、飾るに畜類を以てするも、猶安んじ得べきものと見えたり。

○口を極めて相罵るの時にも、畜類よりは下すことなし。人の身近く置かるゝがゆゑに、犬、猫、牛、馬の常に標準とせらるゝこと、迷惑の至りなるべし。若彼等をして言語の通ずるを得せしめば、其第一に訴ふる所は、人の身に關する事件なるや必せり。

○鳥は高く天上に藏れ、魚は深く水中に潛む。鳥の聲聽くべく、魚の肉喫ふべし。これを取除けたるは人の依怙也。

○何樣なるを世間とは謂ふと問はゞ、われは立どころに下の如き答辯をなすことを得べし。曰く、善人榮え、惡人亡ぶるの場處なりと。

○一に就かんよりは十に就け、是極めて當世の事也。諸人の感服することに感服し、諸人の感服するものに感服し、諸人の感服するときに感服せば、期せずして幸福は頭上に到來せん。斷りたくも斷れざるべし。

○按ずるに社會の智識は、賣れぬ本といふものに由りて開拓せらるゝたらん歟。賣れぬ本といふは、すぐれて良きか、良からぬかの二つに出でず。この二つは先後別々に、大なる教訓を提げたるものなればなり。約言すれば社會の智識は、書肆の戸棚也、戸棚の隅也、隅の塵也、塵の山也。

○古の歌人の月花を脱し得ざるが如く、今の新體詩人は、唯一つの星を脱し得ずとは、某批評家の言なりと聞く。げに歌人、詩人といふは可笑しきものかな。蝶二つ飛ぶを見れば、必ず女夫なりと思へり。塒に還る夕烏、嘗て曲亭馬琴に告げて曰く、おれは用達に行くのだ。

○沈醉せり、醒さざる可からず。老衰せり、葬らざる可からずとは、今の批評家の紋切形也。天才結構、大結構、今の批評家の召に應ずる天才あらば、われら一生の思出、疾く拜顔の榮を得んことを望む。もし其言の如く、悲壯なる其言の如く、われらをさへ交へて僅に五七人を葬るを得ずば、今の批評家は墓地の穴掘りにだも及かざる者也。悲壯は原稿の埋草也。

○現時の政黨は、一の商賣なりといふにあらずや。さらば其宣言書の、彼此共に異るなきを嗤ふを要せじ、各々樣[illegible]克くの引札に過ぎざればなり。利をかゝげて勸誘に力むるを嗤ふを要せじ、何日間賣出しの景物に過ぎざればなり。

○無鑑札なる營業者を、俗にモグリと謂ふ。今の政黨者流は、皆このモグリなり。鑑札無くして賣買に從事するものなればなり。

○正義を唱ふるの士は、正義を行ふの士なりと思へ。公德の缺乏を慨する者にして、一己私德の上にだに缺乏せる者あるを思ふことなかれ。要は唯信ずるに在り。信ずるはめでたきものなり。天下太平の策、こゝに於てか定まる。

○京藏氏が言に曰く、見ると聞くとは大きな相違と。然り見ると聞くと、大いに相違することなくば、今日にありてはゆゝしき大事也、國家の大事也。

○一切の虚僞を排するは、一切の眞實を排するなり。虚僞と眞實との關係は、鰹に對する酢味噌の如し。まことそらごと取交ぜるにあらざれば、遂にお話はなり難し。

○譃は藥か、誠は毒か、相待つて世に悠久に健かなるを得るなり。何事も造化の配劑に歸したる古人が言も、蓋この意に出でざるべし。

○譃も誠も物の名のみ。時と處とによりて、おのづから運用の別あるのみ。浪速の蘆は伊勢の濱荻たるの類のみ。

○欺くは智也、欺かるゝは德也。されども人は、欺くほどの智ある者に非ず、欺かるゝだけの德ある者なり。

○祕する者は祕し、祕せざる者は祕せず、ことわると否とに關せざるべし。祕密を迫るは、公開を迫るなり。陰蔽は流布なり。人より祕密を語げられたる時は、われらが最も戒心すべき時なり。

○人の世に最大不必要なるもの、唯一つあり、名けて識者といふ。

○學問は宜しく質屋の庫の如くなる可からず、洋燈屋の店の如くなる可し。深く内に蓄ふるを要せず、廣く外に揭ぐべし、ぶら下ぐべし、さらけ出すべし。其庫の窺知し難きも、其店の透見し易きも、近寄る可からざるは一なり、危險は一なり。

○換言すれば古の學者は、不透明體なり、今のは透明體なり。更に其說く所に由りて判ずれば、古のは固體、今のは氣體なり。

○鏡を看よといふは、反省を促すの諺也。されどまことに反省し得るもの、幾人ぞ。人は鏡の

前に、自ら恃み、自ら負ふことありとも、遂に反省することなかるべし。鏡は悟りの具にあらず、迷ひの具なり。一たび見て悟らんも、二たび見、三たび見るに及びて、少しづつ、迷はされ行くなり。

○何人か鏡を把りて、魔ならざる者ある。魔を照すにあらず、造る也。即ち鏡は、瞥見す可きものなり、熟視す可きものにあらず。

○老いたる人の肖像といふを見るに、何處にか鬼相を止めざるは莫し。人の面は、など斯く恐ろしきや、老はなど斯くあさましきや。

○過去、現在、未來を分けてもいはず、總ての燈は、總ての人を惡業に誘かんがために、點ぜらるゝなり。罪の手引なり。

○燈の數は上野公園に少く、淺草公園に多し。着手以前に用あれども、以後に用なし。

○燈影明るき處、罪業あり。暗き處、悔悟あり。燈と鏡と枕とは、歴史家の遺棄す可からざるものなり。

○驕奢の風、都鄙に瀰蔓すといふは眞歟、恐らくは是れ、驕奢の誤解なるべし。わが繹ね得たる所を以てすれば、昔時驕奢と稱せられたるは、多く他を潤せり。今時のは單に、自己を潤すに過ぎず。

○故に一人倒るれば、昔は數人共に倒れたり。今は一人の倒るゝに止まる、寧倒さるゝに止まる。

○之を一家内に見るも、夫が驕奢は、妻に係はる事なし。妻が驕奢は、夫に係はる事なし。おのれ〱が驕奢のためには、夫が飯のつめたきも、妻が衣のいやしきも、相互ひに顧慮する事なし。

○あゝそれ驕奢なるかな、豪侈なるかな。われは人の數十金、數百金を投ぜるを目撃す。併せて指環は其人の手に、時計は其人の胸に存在せるを目撃す。依然財產たり。

○聚めんと欲せば、先づ散ぜよといふは、轉んでも只は起きぬの同義なりと信ず。

○公益を計らんものは、私益をも計らざる可からず。生命、榮譽、財產を擲つと稱する際にも、猶萬一といふ語を、成功の上に置かず、失敗の上に置くなり。

○誰にもあれ、一事一業を起さんとするを見たる時は、荐に之れに親めよ、寧ろ狎れよ。其漸く成らんとするを見たる時は、竊に之れを羨めよ、寧ろ嫉めよ。而して不幸、中途に敗るゝに遭はゞ、其時は唯其人の自業自得なりと言へよ。是れ今日の秘傳也。

○羅綾を穿ち、錦繡を纏ふ。之を今朝に見て駭くが如きは、都人士の事に非ず。昨夜に聞かばよその藏に、拘禁せられ居たるは言ふ迄も無し。風媚かに花を吹きて、春面白き小袖幕も、實は番頭を泣かせたるものなり。

○拘禁といふに若語弊あらば、改めて保管といふべし。吾家なるは鄭重にし、質屋なるは嚴重にす。俱に與に、字は重んずるなり。

○體裁は夏向ならず、冬向なり。入りて悄然たる者は、出でて傲然たる者なり。質屋が店の格子の如く、人の心に急速なる變化を與ふるはあらじ。

○歳毎の春の花也、秋の月也。特り今年に限りて、物飲み、物食ふを要せんや。故に風通、一樂の車をつらねて斯行くは、山樓水亭の何れにもあらず、鹹き鮭一切れ、晩餐の膳の上にお還りを待てばなり。今の驕奢といふは、大抵此の如きもののみ、所謂路人に耀かすに過ぎざるもののみ、人前のみ。

○名は必ずしも紳士錄、職員錄に上れるをもて、遂げたりと思惟する勿れ。あまりにそれは輕はずみ也、早手廻し也、無論けちなる料簡也。

高利貸といふ者の臺帳に記入せられざれば、世間は決して名士と呼ぶことなし。

○名士の高利貸に於けるは、狐の稻荷に於けるが如し。司命者也。高利貸なかりせば、世は斯の如く靜穩なる能はず、隆盛なる能はず、箸の上げ下しにまで萬歲を唱ふる能はず。

○洋の東西、時の古今に論なく、國力充たず、國威揚らずなどいふことあるは、其處に高利貸を缺くがためなり。利のみならず、總てに高き營業なることは、文明國に多く棲息すといはんよりは、跋扈するを見て知るべし。

○縱橫計不就、慷慨志猶存。高利を借れるなり。人生感意氣、功名誰復論。情婦を持てるなり。

○待てと一人、わが言を遮りて曰く、驕奢者狹斜也、義者妓也、音相通ずるにあらずやと。げにもクンシは漢音也、キミコは和訓也。

⊙さらば爾等、醉へや眠れや夢よや。覺めざれば呼ばず、さめて初めて天を呼ぶは、人各〻に定まれる義務にてもあるべし。

○衆皆醉ひ、吾獨醒むといふは、九尺二間の事なり。裏長家の事なり。運命を總後架と、掃溜とに隣りて有する不理窟なり。今と雖も、遂に水に赴かざるを得ず。

(明治三十二年六月)

巖下電

○黒かる可からず、白かる可からず、人の生ける要訣は、鼠色なるに在り。之を天にかたどりては、半晴れ、半陰れる雲の如くなるべし。之を地になぞらへては、半乾き、半濕れる泥の如くなるべし。交錯せる、掩映せる、猶黒白の辨たるべし、全く混化せよ、融合せよ。所謂たんまりしたる儲口は、多く鼠色の產む所たり。

○墨子練絲に泣けるは、以て黄にすべく、以て黒にすべきが爲なり。今人會すれば輒ち曰ふ、潔白なりと。潔白のあかりを立つること、今人の如く急なるはなかるべし。いかにも潔白なり、潔白なるが故に油斷ならざるなり。往の潔白は、いつ何時、歸りに染まるを保せざればなり。

○赤は花の色也、火の色也、血の色也、舌の色也、補襠の色也。而して古來の傳說に據れば譃も眞赤なる者也。

○茲に虛僞と、廉恥との關係を究むるにおよばず。恥も譃と同じく赤きものとぞ。

○どうやらまばゆき薄紅葉、ぽつと赤らむるといふは、あまりに素顏の不味なるを氣遣ひて、神の加へたる色彩也。人間より言はゞ、天賦の才能なり、藝術なり。これを發するの場合と、方法とは隨意なり。

○恥はもとより倫理上の事に非ず、生理上の事也。醉はゞ一層赤かるべし。

○赧顏とは、赧顏ならぬ時の謂也。形容詞に屬す。實際赧顏を告白し、披陳し得る程にわが同胞は卑怯ならず、臆病ならず。

○特更に赤心を吐露すといはざれば、吐露するもの赤心にあらざる乎。赤心、丹腸、われ之を岩谷天狗の居宅に觀、着衣に觀る。岩谷天狗は落靑の名人也、國益の親玉也。

○われは飽迄、月は靑しといへる高山氏の說に同ぜんとす。かさねし月の末に至りては、人皆靑息を吐くときけばなり。言ふ迄もなく、「憂鬱なる潤色」を與ふるなり。

○俗に聲音を色に取りたるもの、古く唯一あるのみ。黒といはず、白といはず、赤といはず、靑といはず、黄色いといふ。まことや思ひはかれば、黄はこがねの色也、京傳本に就て考ふるに、こは中に求めて、外に治ふの聲たるが如し。

○年を積むこと三十三、少からずと謂ふもしかも多からず、熟せりとは謂ひ難かるべし。明治の事々物々は、猶ナマたるを免れず。ナマは生氣なり、生氣は現時社會の一般を通じて、表裏に躍動するなり。この故に才人智者、略して現ナマと稱す。煮るを要せず、炙るを要せず、萬民擧つてかく簡易に、かく輕便に唱和せるは、未東西の歷史に見ざる所、隨つて教科書に見ざる所なり。

○官吏も商ひなり、議員も商ひなり、一として商ひにあらざるは莫し。商ひの盛んなるは、賣買の盛んなるなり。賣買の盛んなるは、金錢授受の盛んなるなり。要するに商業は金錢也。商業より金錢を脫離せよといふは、天下比類なき不法の註文也。況んや各自、商業の發達を企圖しつゝあるに於てをや。金錢重んずべし、崇ぶべし、百拜すべし。日本は世界の商業國たらざる可からず。

○恐るべきペストよ、恐れても且恐るべきペストよ。來りて惡者を殺せ、猶來りて善者を斃せ。

人幾千萬を驚したる時、金萬能の世は少しく搖きて、其處に微かなる信仰の光を認むるを得んか。

○是れ戯談のみ、孰か一ペストのために、國の安寧、靜謐を害するをゆるさんや。各人相戒めて豫防する今日に於て、金錢は生命ならざる今日に於て、あゝこれ一場の戯談のみ。

○獲では叶ふまじき金の手に入りたる時、必ず正當に其目的に向つて、全額は支拂はるゝものなるか。有用、無用は姑く言はず、これも問題也。恐らくは其二分の一、三分の一は當初の目的が包含せざりしことに、使果たさるゝを例とするならん。甚しきは其獲ざる以前は、元金の償還なりしも、獲たる以後は、利子の塡補に止まるもあるべし。人は自己が手中の錢の頭を張るか、剃るかして悦ぶ者なり、樂む者なり、わづかに活くる者なり。即ち他人の棒先は切らざる迄も、自己の棒先は切る者なり。

○我邦二箇の政黨が有する性弊は、曾て伯爵各一箇を推戴せる間に於て、いとよく分明にせられたり。隈伯の德なきに行はんとする、今尙進步派の者たり。板伯の智なきに用ひんとする、今尙自由派の者たり。政黨は一人の政黨に非ず、奈何せん、一人は政黨の一人也。彷彿として名殘は去りもやらず、盡きもやらず。遼遠たるかな、渺茫なるかな。

○若板伯に惜むといはず、責むるに時勢の推移を知らざるを以てせば、隈伯にも亦惜むといはず、責むるに時勢の推移を知らざるを以てせざる可からず。面前よりすると、背後よりするとの別あるのみ。喝すると、囁するとの別あるのみ。

○名に敗れたる自由派は、漸く利のものとなりぬ。利に敗れたる進步派は、漸く名のものとなりぬ。轉換なり、異動にあらず。異動なり、革新にあらず。

○體裁好く言はゞ、進步派は筆なり、鴉なり。自由派は劍なり、豚たり。是れ文武の差あるを言へるにあらず、鳥獸の差あるを言へるなり。再記す、體裁好く言へるなり。

○少數は手拍子也、建設也。多數は足拍子也、破壞也。

○總理を置けるは、引附けんが爲なりき。總務に更へたるは取込まんが爲なり。

○大惡筆を揮つて、大偏額を書する者あるを見たる時、われは世に星亨君あるをおもひぬ。龍蛇走るといはんか、風雨生ずといはんか、まことに淋漓たる墨の痕也。されど到底、字の形にあらず。

○前に立つを、提灯持といへり。今の提灯持は、殊に今の政府の提灯持は、いづれも後に立てり。

○人の目、人の耳はやがて掠むるを得べし、視聽の力は老衰に伴ふ者なればなり。人の口は遂に掠むるを得可からず、頰桁は死に瀕するも猶叩かるゝ者なればなり。なべて老者の邪魔がらるゝは、口の邪魔がらるゝなり。厄介がらるゝは、口の厄介がらるゝなり。口ばかり始末惡きはなし。

○人形の愛らしきにむかひては、口利くこと吾妹子の如くならんをおもひ、吾妹子の優しきにむかひては、口利かぬこと人形の如くならんをおもふ。

○紳士とは服裝の事なり、思想にあらず。車馬の事なり、言語にあらず。かくて都は樂土たり、人物の會萃たり、幾十百種の書の發行處たり。

○自ら揣らざる者は、他をも揣らざる者なり。容喙するに如かず、自己の地位、境遇、力量を忘れんと欲せば、つとめて容喙するに如かず。

○いたいけなる人の子よ、怪我過ちにも己を知るなかれ。己を知るは上無き悲み也、苦み也、わづかに知らんは、死を待つにひとし。大いに知れるとき、腰に辨當あり、神田橋を出入せざる可からず。肩に天秤あり、鮫ヶ橋を往返せざる可からず。

○思ふにつけて巣鴨こそは、いとゞ興饒き處なれ。女學校あり、瘋狂院あり、監獄署あり。

○己を知らざるもの、詩人を以て最とす。狂人之れに次ぐ。

○聞くならく詩の熱は、情の熱とぞ。大天才を得るに先づて、大色情狂を得ざる可からず。是れ實に緊要の事也、必須の事也。眞面目の事也。

○幸ひに上に、かの侯爵閣下あり。下に、文學隆盛なり。

○生活のためにしたるものは、名のためとなり了るべく、名のためにしたるものは、生活のためとなり了るべし。

○各自が實名に、戸籍簿以外に存す可くもあらず。他は虚名のみ。虚名は飯の湯氣なり。長く虚しからぬ名を求めんとする人は、長く温かならぬ飯を求めんとする人なり。

○われらは作者諸子が、われらに慈悲の教訓を垂れんがために、夜を日に繼ぐの勞苦に服するを謝せざる能はず。こゝに於てか社會は諸子の前に、粗末ながら米の飯を呈したり。猶其上にも諸子の脊に愬ふる所あるは、諸子が慾の稍過ぎたるものにあらざるか。

○多才なる作者諸子と雖も、飯食ひ茶碗は唯一つなるべし。他の品を盛るの餘地あらんや。いさゝかだに餘地あらば、其處に早く盛られたるは空氣なり。

(明治三十二年十二月)

青眼白頭

○後生を口にすること、一派の癖のやうになりぬ。陸に汽車あり、海に汽船あり、今や文明の世の便利を主とすればなるべし。何故といはんも事あたらしや、お互に後世に於て、鼻突合はす憂なければなり。憂は寧ろ、虞に作るをよしとす。

○仰有る通り皆後世に遣りて、後世は一々これが批判に任ぜざる可からずとせば、なりたくなきは後世なるかな。後世は應に塵芥掃除の請負所の如くなるべし。

○おもふがまゝに後世を輕侮せよ、後世は物言ふことなし、物言ふとも諸君の耳に入ることなし。

○天下後世をいかにせばやなど、何彼につけて呼ぶ人あるを見たる時、こは自己をいかにせばやの意なるべしと、われは思へり。

○人無茶苦茶に後世を呼ぶは、猶救け舟を呼ぶが如し。身の半は既葬られんとするに當りて、せつぱつまりて出づる聲なり。

○識者といふものあり、都合のいゝ時呼出されず、わるい時呼出さる。割に合はぬこと、後世に似たり。示教を仰ぐの、乞ふのといふ奴に限りて、いで其識者といふものの眞に出現すとも、一向言ふ事をきかぬは受合也。

○僅に三十一文字を以てすら、目に見えぬ鬼神を感ぜしむる國柄なり。況んや識者をや。目に見えぬものに驚くが如き、野暮なる今日の御代にはあらず。

○今人は今人のみ、古人の則に從ふを要せずと。尤もの事なり。後人亦斯く言はんか、それも尤もの事なり。

〰〰〰〰〰〰

○さま〲なる世に在りて、いづれを上手と定めんは、いと難し。孰れを下手と定めんは、いと〲難し。上手を定めんよりも、下手を定めんは一層難き事なり。

○長く所謂素人たれ、黒人たる莫れ。技やよしあしの何は問はず、黒人は存外まづいものなり、下手なものなり、いやでも黒人となりて、其處に衣食するに及べば、已に早く一生の相場は定まれるものなり。之を素人より見るに、黒人ばかり物知らぬはなし、辨へぬはなし。

○染めて返らぬ黒人が身は、進退共に一度づつ、足を洗はざる可からず。素人は自在也。

○志は行ふものとや、愚しき君よ、そは飢に斃るに過ぎず。志は唯卓を敲いて、なるべく高聲に語るに止むべし。生半なる志を存せんは、存せざるに如かず、志は飯を食はす事なければなり。志は缺くも、飯は缺くを得ざればなり。

○さりとも志を棄てんは惜しき時、一策あり、精々多く志を仕入れて、處嫌はず之を振廻さん事なり。成功を見ずと雖も、附け屆けを見ん。背負切れざる程なるをもて、志の妙となす。此れにも入るべし、彼れにも加はるべし、推移するに憚らざるが故に、さてなん人々今を聖代と稱す。

○丈夫四方の志と唐人の言ひけん、こは恐らくは八方の誤りなるべし。

○志を抱いて死す、さもしからずや。一般字典の訓ふる所によれば、大丈夫は男の義なり、女を抱いて死せんのみ。何で死んでも廣告代

は同類也。

○英雄を罵る、快事たり。美人を罵る、亦快事たり。されども共に、錢なき時の事たり。

○慷して慨せざる可けんやと、息卷き人の聲の、暮日の中より出づるものならぬは、今に於てわれの確信する所なりと雖も、曾て燕趙悲歌の士多してふ語をきける毎に、定めしお金が無かつたらうとおもふを禁め得ざりき。我れの矛盾にあらず、彼れの進歩のみ。

○儲けるを知つて遣ふを知らず、斥くべし。遣ふを知つて儲けるを知らず、是亦斥くべし。さらば何とかすべき。儲けて而して遣へとは、儲けぬ人の言なり。遣つて而して儲けよとは、遣はぬ人の言なり。金ならずして斯くの如く同一なる問と、同一なる答との繰返さるゝはなかるべし。世に其問、其答の明瞭に過ぐるものは、おほむね不可能の事なり。繰返し來れる今日にありては、殊に不可能の事なり。吳にして越、火にして水を兼ねしめんとするものなり。

○使ふべきに使はず、使ふべからざるに使ふ、是れ錢金の本質にあらずや。疑義を挾むを要せず。

○一國、一家、一人を分けてもいはず、金に就て論議の生ずるは、乏き時なり、少き時なり、お恥かしくも足らぬ時なり。工夫も然り、有る時にせず、無い時にす。

○孰か我邦の現狀に見て、金は一切の清めなりといへる諺の、遂に奪ふまじき大原理たるに首肯かざらんや。近世最も驚くべきは、科學の進みたりとぞ。

○貧人が唯一の味方は、詩人なりと。げに然らん、詩人も唯一の貧人なれば。

○畫をかく人々、字をかく人々に告ぐ。お金を拂つて買つて下さるは、まことに難有いお方なり。併しながら大抵は、わからぬ奴なり。

○按ずるに筆は一本也、箸は二本也。衆寡敵せずと知るべし。

（明治三十三年十一月）

長者短者

○腸や、胃や、肺や、皆わが有なり。われ人の身の疾患は、古への所謂治下の民の、其領主に背けるが如きか。薬剤は兵なり、みだりに動かす可からず。牛乳を與へ、鶏卵を與へ、くさぐさの滋養物を與へて、以て政の仁なるものと爲すと雖も、要するには一時の安きを偸むのみ、欺くのみ。わが有にしてわが命に聴かず、誅せずして可ならんや。

○われ久しく治法を誤りて、天下何の處か波立たざるべき相模の濱に、死にもやらず、生きもやらぬ身の今も猶漂泊へり。こゝに醫の言を斥けて、再び筆を把りて文場に見えんとす。病は抗すべし、抗せしむべからず、是れまことに最後の[illegible]令也。題して長者短者といふも、われに在りては太平の歌なり、祝詞なり、さりとはつらき東雲のストライキ節の如きものなり。憚りあれや、他を規せんとにはあらず、自ら諷せんとのみ。隨感隨録、斯くして無爲を粧はんかな、あゝ斯くして長くわれは無爲を粧はんかな。

○堪へて朽ちざるもの、日本に都々逸あり。中に曰く、頭禿げても浮氣は止まぬと。何ぞ夫れ人の老を脅迫し、窘迫するの太甚しき。われ思ふに毛髪は、天に對する租税なり。喜ぶにつけ一本、悲むにつけ一本、苦樂の何れにつけても一本一本、其全く徴收せられたる時、即ち唄に謂ふなる頭の禿げたる時、天は徐ろに之を地に引渡し給ふにはあらぬか。

○剃りたる頭、禿げたる頭、すべて毛の無き頭を叩いて、これに冤ぜよといふが如きは、多少の因緣なきにあらず。但し止まぬ筈だよ先の無い時にも、依然として禿げざる頭の脱税者なるや否やは、別箇の問題に屬す。

○古色をたゝへても蒼然といひ、暮色をたゝへても亦蒼然といふ。語の妙は盡くるなし、嘗て骨董亡國論をきゝぬ。

○定めなきを果敢なしといはゞ、美術品といふものゝ價こそ、浮身の世にも果敢なき極みなれ。作れりし人は既に去りて、藏せりし人の之を賣らんとするに、買はんとする人々の競合ひて、著しき昂騰を見ること、歐洲にも其例尠からずとよ。美術品の價値は、破産によりて生ずる價値なり。

○鵠沼よりしたるわが手柬の一節を、下に抄記すべし。『今の紳士の別莊を愛し候は、美術を愛し候と同じく、其眞意義、其眞趣味を解し候にあらずして、其物、其地の時價を解するに止まり候』。われは敢て其高いが故、安いが故の如何に進言せず。

○嚢に三猿伯の各地を回りて、大に節儉を慫慂するや、先づ生平愛惜せる金屏風を售らんとせりきと。其後の事は知らず、されども若之を購ふ者あらば、折角なる伯の慫慂は同時に破れたるにひとしからずや。大方の折に節儉とは、おのれ一人を誡むるものにあらず、他人を陥るゝものなり。

○犯さんがために法律あり、破らんがために道徳あり。犯す者、破る者なくば、何の日か法律、道徳の效果を表顯し得ん、發揚し得ん。今や法律の完きは紙の上に及び、道徳の尊きは舌の先に及ぶ。法律は墨の溌ねたるなり。道徳は唾の飛びたるなり。尊からざるなく、僞はらざるな

きを名けて、新時代といふ。

○其要とする所、道徳は柿筒也、法律は酒捕也、柿筒、酒捕、共に早く市中の商社業たり。一は損料を以てし、一は請負を以てす。美麗ならざるを得ず、清潔ならざるを得ず、更に大に文明ならざるを得ず。

○潜らば頭觸るべし、潜る可からず。跨がば足觸るべし、跨ぐ可からず。道徳といひ、法律といふ、元是れ一條の繩の杭より杭に張られたるなり、牽かれたるなり。飛越すべし、驀地に飛越すべし、身を挺でて飛越すべし。支配すといへど、束縛すといはず。

○法律は人恐れて然かもこれに近づき、道徳は人敬ひて然かもこれを遠ざく。其矛とするに宜しく、盾とするに宜しきは、兩者相同じ。

○よく思はるゝも誤解也、辯ずるものなく、わるく思はるゝも誤解也、默するものなし。誤解は傑物を出し、愚者を出す。徒らに眞價の有無を云々するが如きは、誤解が治國の大本なるを知らざるものなり。

○されば卞和の玉に哭する、三日三夜。何はさておき、腹の減つたことなるべし。

○[illegible]がごとく[illegible]の望みて、未醫するに至らざるもの二つ。日々に見る新聞廣告は、殊にこの感をして深からしむ。曰く利かぬ薬、曰く賣れぬ本。

○薬として利かざるは莫し、[illegible]ある所以。本として賣れざるは莫し、著者ある所以。是亦新聞紙の證明する所也。

○讀んで字の通りといふことあり、彈丸硝藥是膳羞、分捕事件は多く爭ふの要なし。

○幾たび落すも、舊の膽也。幾たび潰すも、舊の膽也。將又幾たび拔かるゝも、猶儼として舊の膽也。こゝに於てか肝膽は、長へに相照しもすべく、片照しもすべし。膽は其狀、其質、素用、護謨鞠に似たるものなり、おもちやなり。世上別に紙風船の製あり。

○豆腐は豆腐よりも硬くするを得べし、蒟蒻は蒟蒻よりも軟かくするを得べからず。煮炙は感化なり。感化は豆腐に施し得べきも、蒟蒻に施し得べからず。

○措けよ論者、みだりに志をいはんは危からずや。今の弊は、志無きより生じたるに非ず、各人各箇、志の有り過ぎるより生じたるなり。

○月日は洗濯曹達の如し、垢も膩も罪も穢れも、夢より早く除き去ることを[illegible]也。星霜を經つといへる[illegible]は、常に史家、作家に[illegible]有せしむ可きにあらず。[illegible]の内外をいはず、民として民の[illegible]多くは、自國の文典を辨へざる者なり。

○枯淡閑寂、之をサビと稱す。サビは土鍋の味、菜と粥とのみ。風流を以て牛肉、豚肉の看板を律せんは誤れり。

○餓を忍ぶの心ありて、風流は纔に會得せらるべし。悟りは斷食也。

○仁義はヒソメキ也、菜食のひそめき也。富強はドヨメキ也、肉食のどよめき也。後に涙あり、彼れはいよ〳〵瘦すべく、前に笑あり、此れはいよ〳〵肥ゆべし。人道を說く、難からずとせず。況んや坐ながらなるに於てをや。

○自ら行ふを得ざる時、忽ち椽大の筆を揮つて、高論清議なるものを出す。われには許せ敷島の道、これも人の癖なるべし。

○俗に卓見を和けて、できない相談と訓ず。惜みても惜むべきは世の何ものをも、胃の腑の咎に歸する志士仁人の、やつぱり胃の腑を有する事なり。

○翠減ず鏡の朝、紅鎖す燈の夕、花に[illegible]き月に濺ぐ、涙は斯く樣々なるものなれども、一

滴もこぼさざる涙の言現すべき術なきにより
て、假に之を萬斛の涙とは呼做すとぞ。

〰〰〰〰〰〰

○政界、文界、サヽ法界の何れと限らず、日々
聞視する所のものを以て、この世直ちに可笑し
と人の言はゞ、われ亦然りと言はん。されども
其可笑味や胸底に非ず、鼻端也。あはゝに非
ず、ふゝん也。畢竟明治は話談の料に富みて、
記錄の材に乏しき時なり。

○鎖さぬ御代といふものありき。九尺二間に戶
の一枚なりしにもあらず、戶の無かりしにもあ
らず。

○大路馳行く黑塗車の、聲荒らかに叱咤するに
遭ふとも、必ず振仰ぎて癪にさへたまふ勿れ。
曳ける人の苦痛と、乘れる人の苦痛と、卽ち二箇
の苦痛を揭げて急ぐ者なればなり。曳ける苦痛
は一時なれども、乘れる苦痛は永遠なり。

○一面の繁榮は、一面の危險也。繁榮の都は、
危險の都也。東京市の膨脹は、寄留籍の膨脹
也。

○頗る恰當ならざるが如くにして、頗る恰當な
るが如きを覺ゆるにより、われは玆に觸接な
る文字を拈出す。觸接は虛僞を生む、只これ
だけ也。面と面と、手と手と、すべて觸接を重
ぬるは、虛僞を重ぬる也。有形無形を別たず、
男女を別たず、交際の義と知るべし。

○事有れば愚癡の爲替也、事無ければ自慢の爲
替也。彼我の愚癡と自慢との取組高を、月末、
若くは年末の帳尻より差引すれば、交際はゼ
ロ也、不必要也、冗漫の手數也。まちがつて損
を見るとも、益を見ることなし。

○我を揚げ、我をたゝへんが爲に友は存在する
者にあらず。我を抑へ、我をそしらんが爲に存
在する者なり。

○友は心さびしき時、懷つめたき時、つまり
お錢のほしいやうな氣のする時、互ひに一寸小
當りに、當り合ふものなるに過ぎず。

○慈悲は一種の醉狂也。手近くは之を途上に
看よ、一文二文の微かの投錢も、老女の破れ三
味線に薄くして、幼童の阿房陀羅經に厚きにあ
らずや。

○明朝、米を買ふの錢は工面するに難く、今宵、
女を買ふの錢は算段するに易し。上下誰しも
の事なり、譃とおもはゞ實驗すべし。

〰〰〰〰〰〰

○青年は青年也、顏の青きに止まらず、一切に
於て青き也、菜の葉也、來もせぬ蝶を夢る也。
白粉のためなると、活字のためなるとあれど、
いづれは鉛毒の結果に外ならず。

○夢ならずば醉也、青年は或意味の醉漢也。醉
つて渠の如く青きもの、醒めてます〳〵青かる
べし。どうしたとても青二歲也、醉生夢死也。
中に雜誌の一篇も書かうといふお方は、甚だ見
上げたものなるべきにより、姑く例外とす。

○渠等が夢の一つは歷史的也、奈勃翁也。他の
一つは稗史的也、丹次郎也。これ卽て壯士と箱
丁とある所以、鞭聲肅々と梅にも春とある所
以、新聞記者にも硬軟の稱ある所以。丹次郎は
度すべし。奈勃翁は度すべからず。

○今の青年は綠雨を好まず、綠雨は今の青年
を好まず、お互ひ樣なり。書肆の語る所によれ
ば、地方向、青年向ならざれば賣行よからずと。
されども綠雨は都に俟つ、地方に俟たず。一
人前の者に俟つ、青年に俟たず。たゞ少しく困
るといふは、綠雨ももと地方人にして、今の青
年たる事なり。

○抱負の大もよしあし也。わが胸に置くに堪へ
ずして、ひとの耳に置くに至る。精力は手に非
ず、口也。性根に非ず、面附也。

○歲の五月、われは小高きに登りて、夥しく

も捨てられたる時々、家々の吹流しを觀る毎に、先づおもへらく此俺兒あり、帝國の將來を祝せざる可からずと。次で又おもへらく、[illegible]あり、昔の捕つて鯉になるでもなきを祝せざる可からずと。

○ただ生を商賣に寄し、希はくは膝き甘き、甘きの限りなからんか。十九二十にも足らぬ少女の九割は、この點より見る不幸の目標也。赤きてからは洪々之を急立てゝ、草地に溢るの造花也。身は已におもひ切髪の、男になれるよりも果敢なし。

○白魚たりともあさましきは、俳人も言へり。腹ふくよかに袖にも掩されぬを抱へて、人馬間き間を縫行く姿ばかり、世にあさましきは無かるべし。賢も不肖も、手を束ねて斯くなは能ふべき道理なければなり。

○其勞力や、其時日や、民人の義務且權利也。家運、國運を增進するの法、また多岐なるかな。

○流眄といふを知らざる女は、無用の長物なりと信ず。

～～～～～～～～～～～～

○人は鳥ならざるも、能く飛ぶものなり。獸ならざるも、能く走るものなり。されども一廣、[illegible]なる[illegible]律に從はゞ、人は魚ならざるも、能く泳ぐものなり。

○利口さうなると、正直さうなるとは、人間帯有の[illegible]意也。一般社會は此さうなるを以て、信用の基礎となすものゝ如し。利口なるなかれ、正直なるなかれ、凡てに語尾の明確ならんは、[illegible]没をまねくに殆かるべし。

○眞人間無きにあらず、眞人間の世を渡るもの無きのみ。紅塵青史、利を競ひ名を爭ふ、眞人間の棲ふる所ならんや。勳位あり、爵祿あり、洋館あり、煉瓦あり、石門鐵墻の嚴めしきあり、强ひて眞人間を作るの要あるを見ず。

[illegible]日く、眞摯なれと。こは己に責むべき事也、他に責むべき事に非ず。よしわれはわがマジメを藏するも、むやみに人樣に御覽に入れんとは思はず。

○故にわれの洒落と談ずるを欲せざるは、酒を欲せざるのみならず、實に其人、其談を欲せざるなり。わが知れる限りを以てすれば、洒落は早速本心を申上ぐる者なればなり。手中一箇の盃に代へんには、餘りに惜しきわが命なればなり。

○飲んだ話をする奴は、飲まぬ奴也、飲みたい奴也。當世の事、酒を飲まざれば女にあらず。

○流行はわれに來らず、われは流行に赴かず。情ある流行のわれに來るものは、感冒のみ。

○若よく人言を容るゝ者あらば、其物時たるを察すべし、如持も[illegible]に容るゝ時なるを察すべし。

○醫者殿より健勝を賀し奉らるゝは、方丈樣より開端を賀し奉らるゝと同じく、弔意を以て賀儀を受取らざる可からず。因果はめぐる小車の、やがてこの後は逆まの世や、慶意を以て弔儀を受取らざる可からず。

○いつも變らず健康ならんをねがはゞ、頭の運動を怠るべからず。頭の運動は即ちおじぎ也、おじぎは即ち營業品也。長上に對する機警の處世は、おじぎを以てすべきこと、夙に一世の知悉する所也。

○天職とは我自ら壽命を切りこまざきて、本町に運ぶの謂也。神聖なる文學圖ともいふものを編製すべくば、日本橋區本町三丁目は、これら諸大人の咽喉を扼するの地也。博文館も本町三丁目なれば、金港堂も本町三丁目なり。

○新に文藝界なる大册を得て、われは誇らずも神を呼びぬ、作家は猶餓死すべき時にあらざる

をおもひて。

○多くの雜誌の末期に見れば、雜誌は作者を毒し、讀者を毒し、然り而して發行者の懷中を毒するものなり。

○時は梅に繼ぐに櫻を以てし、身は貧に繼ぐに病を以てす。近日の動靜を問はるゝまゝ、かく答へてさて回思すれば、梅と貧、櫻と病、それと定かに情趣の指しは得ざれど、おのづから一致せる者あるやに感じたるも、美名に就かんのわが聞えたるべきか。

○櫻は矛盾の花なること、このごろの半文錢にも記しぬ。濃抹なるもの、淡粧なるもの、朝なるもの、夕なるもの、其或時ははれ〴〵と笑ふが如く、其或時はさめ〴〵と泣くが如し。櫻は大和民族の花なるとともに、精神病の花なり。

○天は不束なる人間の智の、狂せでは已むまじきを知れるが故に、たとへば流れの樹の如く、櫻を與へてこれを堰き留むるなり。殊に智を用ふるの眼を細す程なる都人に許へて、一年一度の春の逆上盛りを、この花の下に醉歌せしめ、狂舞せしめ、歸るを忘ると言ひつゝ忘れもせず、安全に家路に歸らしむるなり。綺羅を纏へる男女の足を、上野、隅田に向はしめて、巣鴨、小松川より救はんとするものなり。即ち都のお花見とは、瘋癲に對する年賦也、濟崩し也。

○爛漫といふ語の櫻花に冠せんよりは、狂人に冠するの的確なるが如き、好證憑にあらずや。

○櫻咲く櫻の山の櫻花、常に斯くある可からずの戒むるものか、時々斯くある可しの慰むるものか。天意の窺ひ得られざるは、其深奥なるが爲に非ずして、平凡なるが爲也。

○人の天によらず知れる事は、形鷄頭に似たるを以て、鷄頭花と名くといふの類のみ。わづかに命名の先後を以て、出生の先後を判つのみ。

○計畫の十の九は齟齬するものなり。齟齬せざればまことの計畫にあらず。

○死して許多の財物を遺さんは、心懸けよき所爲とも思はれず。汗水垂らして不孝の子と、不貞の妻とを作るにひとしければ。

○行末かけて愛護の念あらば、妻は貧泣かしむべし。貧困は德操を保たしむるに於て、唯一の方便也。道とはいはず。

○良妻とは素より夫のいふ事ならず、他人のいふ事也、利害痛痒の關係なき他人のいふ事也、責任を帶びざる評言也。

○某君の新婚を祝ぎたるわが先年の大々蕪辭を、左に採錄す。

妻は茶漬也、全きを之に求むるは夫の非道也。夫をして飢ゑざらしめば、妻の勤務は畢れる也。△△君、味淋經節は一時のみ、茶漬は永久也。予は君が新なる妻女をも、茶漬以外に置く能はず、隨つて永久に必要なるべきを信ず。

○制裁は租稅の償ひ也、上より下に及ぼせども、下より上に及ぼす事なし。善には善の報いあり、國家の理法は明白也。

○世態の日に紛糾に赴くを以て、幸福の誤解なりとする者あれども、實はといへば富の誤解なり。幸福と富とを、銀行に併せ求むるが爲のみ。

○心ゆかざるは人道を提げて、豪富の門に迫らんとする人々也。道義のなせる富にはあらじ。

○何ぞ同情を強ゐるの、けふ此頃の忙はしき。

同情を贏得ん願ひの身も、同情なきを罵するの權利ありや。

○道德の示す所は、虛假の衰へ也。世は爭ひの竟に勝つ能はざるとき、道德を唱ふるもの多し。道德國は早老國也。

○老者の道德は、壯者の香水に異ならず。

○僧の戒律を持するは、習慣を持するなり。これをも道德堅固とは言得るなり。

○古來の道德によれば、女の操は肉の操也。身をだに汚すことなくば、何等の處決も要せざるが如し。われはこゝにも節操と、年齡との對比すべきものあるをおもふ。

○あたら盛りを涙の窓に鎖ぢて、赤い信女たらしむるに忍びんや。われは再婚を許すを不可とせざるも、其果の三婚、四婚を許すに至らんを遺れざるものなり。

○戀は野合をなせども、配偶をなさず。不朽は色の働きに在りて、戀の働きに在らず。

○之を戀といふも、色といふも、些の面上に印するものなきは、神意に出でて最も人意に適せる事なり。法律は行爲を罰すれども、意志を罰せず。貞烈義勇の女子傳は、修身書として高價のものにあらざるべし。

○勝てば官軍まければ賊、千古の格言也。この

故に法律も和姦と、强姦とを分てり。

○法律は姦淫を禁ぜず、されど墮胎を禁ず。

○われは法律に於て不通なれども、つねぐ\の見聞きに其一端を知りて、運用の妙の尠からずおぼえたるは、本夫の告訴に待つにあらざれば、有夫姦罪を構成せざる事也。

○怪しき夢を結びけりなどあるは、目前動作を敍するの辭なるも、未一たびも其筋の嚴命に接せず。偶ゝ時弊を描きて、一二の名詞をつらねたるものは、秩序風俗を亂すとせらる。われの羹に懲りて、今かく膾を吹くもをかし。

〰〰〰〰〰〰

○信義に二種あり、秘密を守ると、正直を守ると也。兩立すべき事にあらず。

○秘密なき者は誠なし、匿さぬ心事の洒々落々とは、少數のために多數を瞞するをいふなり。

○事の眞實を語る者あれば、さうか知らぬといふ、疑ふ也。虛僞を語る者あれば、さうで有らうといふ、信ずる也。眞實は頭を以て否まれ、虛僞は頷を以て可かる。前者は打かたぶかれ、後者は打うなづかるれば也。世にもすぐれて輕々と信賴せらるゝは、うそつき也。

○得も行かぬに仰有るまいとは思へど、平生僞りに慣れたる人は、さりとて損も行かぬに仰有るとも見えたり。

○五官はよきを反撥し、あしきを吸收する。觀る可きを觀ず、聽く可きを聽かざる今人の耳目こそは、生れながらに一種の彈力を具せるものなれ。

○食ふは本業也、言ふは內職也。口は開くべき理由あるも、閉づべき理由なし。

○師父のわが幼時を叱して曰く、食ふばかりの口ではないぞと。今にして追憶すれば、食ふばかりの口なりしなり。食はんものは、言はざる可からず。

○言ふ者ますぐ\多く、默する者ますぐ\少し。問ふを休めよ、是れ何人の爲にするにもあらず、本人の爲にするものなり。

○折々は米の夢見る首陽山。われ義人あるを知る、併せて川柳あるを知る、更に併せて今の義人のたれ死することなきを知る。

○どんがらがん節の神髓を得たるものは、當今第一流の論客なり。

○花開けば人集り、花落つれば人散ず、あたり前の事ならずや。市内は何區何番地に住みてわざとにも何の里といはざれば氣の濟まぬ風流人とかは、へんな譯から泣いて居るものなり。

○寃ハ憂患の初め也、又終り也。字を知ることなくば、考へ〳〵年を取るわれらと雖も、今のやうには鼻であしらはるゝ事なかるべし。

○われに門なし、白き襟なし。われは世を恨みず。

〰〰〰〰〰〰

○よき果實を收めんと欲はゞ、よき肥料を下さゞる可からず。人の衣食住を美にせんとするも、亦この範に超ゆるを得ざるべし。肥料は臭きものなり、穢きものなり。即ち操守の不美なるにあらずば、衣食住の美なることなきなり。

○おだては美言也、おごりは美酒也。美言を以て美酒を沽ふ、あいつ煽動てゝ奢らせるは、是れ其略式也。武藏野の月の草に於けりし如く、口より出でて口に入る。

○尊卑大小の何れにありても、兎角に間取の住好からぬは、臺所と雪隱との爲也。この二つを撤するを得ば、諸人が家居の今よりも美しかるべきは、想察するに餘りあらずや。されども無意味なる人生の、全く無意味に歸するとも見えざるは、依然この廚と、厠とを存置するによる事也。

○斷えず春なる花の都に、佳人無しといふに之れを劇場に覓め、公園に覓むるが故也。ねがはくは今一たび、之を墓地に覓めよ。

○命日缺かぬ殊勝の墓參とは、誰に盟ひの袖の珠數ぞや。逝ける彼人の靈を慰むるに始まりて、のこる此身の心を安むるに終る。

○信仰は誦經なりとする者あるによれば、宗教は死人のものなり。

○死者を送るを葬儀といひ、生者を送るを婚儀といふ。其穴に投ずるは一なり。死者は永へに還ることなきも、生者は何日ひよつくり還らぬとも限らざれば、近年の葬儀の衒耀に過ぐるに反して、婚儀の儉素に過ぐるは、これもかしこき自然の默示なるべし。

○遺言に依り生花、造花、放鳥の御贈與は堅く御斷り申上候。これを紙上と、門前とに對照するに、謝絕は或時勸誘を意味す。

○知れる者は知らぬ振、知らぬ者は知れる振をなすは、會葬人名簿中の普通事實也。死は一方に難有の友を失ひ、更に一方に難有の友を得るものなること、故ありてわれの既に世に告げたる所也。

○煮るだけ煮たる道德の果は、他人の疝氣を頭痛に病む事なり。學者に問へば極致となん。

○どうあるとても嫌は嫌、好は好、克己は貧乏神の御符也。

○元の白地がましぢやもの、悔悟也、昔の女は斯く唄ひぬ。元の十七にして返せ、忿恨也、今の女は斯く唄へり。

〰〰〰〰〰〰

○あゝ正成よ、尊氏よ。起るものもあゝ也、僵るゝものもあゝ也。伸も欠も痛痒も溜息も、喜怒哀樂悉くあゝ也。世は嗚呼なる感動詞の、いかに投入せらるゝかに就て、虎となり鼠となり、龍となり蚯蚓となりて、相搏ち、相のたくるに過ぎず。

○功成りて力の足らざるあり、力足りて功の成らざるあり、紛らはしき嗚呼といふべし。

○佛にしては之を佛に咀ひ、魔にしては之を魔に祈る。受驗準備に勞れたる學生のいふ、自分のできるよりも、ほかの者のできぬがいゝと。さればなり己れを推すに先ちて、他を排するを今は競爭と稱し、運動と稱せり。

○喜びは一人のもの、憂ひは萬人のもの也。こゝを以て合同は握手に非ず、反目也。提携に非ず、衝突也。

○爲す有るの人にきかず、爲す無きの人に聞く

は、愼重の態度とかなり。流行語の域を脱して、便利品の域に入れる者。敢て告ぐ、史家は動を記せど、靜を記さず。

○腰のぬけたるを茫然といはゞ、眞のすきたるを毅然といふべし。

○意志の剛健とは、ほらを吹く事なり。ほらは信用の大部分なり。

○そも噂は極端のものなり。正鵠を得ることなし。

○憤れる者は湯に入らしめよ、湯果てゝ酒を與へよ、肉を與へよ。緩和の功のやゝ現るゝを待ちて、女を與へよ。天地一切の理窟は消散すべし。

○二錢、乃至二錢五厘の湯錢を以ても、人は快を取ることを得る者也。

○女子の來りて命を捧ぐといふとも、男子自ら警めてこれに惑はさるゝ莫れ。女子は世界の統計上、男子よりも長壽なればなり。我れ我が一生を短縮するの勇あらば、細君操縦策の如き學ばずして可なり。

○凡そ下手なるは、女の世辭なり。あら何處へ、行きたいことね、どうぞお土産を、順序は此三段に出でず。誰某の女が罠に罹れりとあれど、われは弱者を過度に保護するの、其折角に非なるを見るのみ。

○女ののぞめる親切は、ほんの口先、手先の[illegible]也。其飽くまで生理的に存在せるは、縱令すねても拒ふべくもあらず。

○見積相場の善に對するを賞金とし、惡に對するを罰金とす。賞金と罰金との差額は、行ふ可きを行へると、行ふ可からざるを行へるとの差額也。善は惡に比して、價格太だ廉也。

○賞金の善者を罰することあり、罰金の惡者を賞することあり。

○節婦、孝子の志を渝へず、十年一日の如しと聞ゆるや、官はこれに金一圓、金三圓、高々金五圓を賞賜す。其旨の來る所は表彰にして、及ぼす所は評價なり。

○世柄には似ぬ奇特といへど、世柄なればの此奇特なるべし。忠孝は金錢に拘泥せず、故に金錢の如く通用せず。

○文化あまねき今となりて、金に買はれぬもの一も無し。若し有ればよく〳〵の事、買つた處が何の役にも立たぬもののみ。嵯峨や御室の花盛りに、朧氣ならぬ殿振を見そめる如き淫猥の曲は、士君子の聽を瀆すに忍びざるを以て、音締オツなる三味線に迄、菅公、楠公を瀆せしめんとする大帝國なるを知らずや。

○因みに說ふ、士君子は一[illegible]者なり、團十郎の如き者なり。耳にせず、目にせず、況んや口にするをや。唯やたらに鼻にし、腹にするものなれば。

○金といへば直ちに多少を感じ、女といへば直ちに妍醜を感ず。是れ所謂時代精神也。

○藝妓が劍舞の廢れたる後に、女教師が柔術の興りぬ。

○いやな女の盛飾せる、むすめ義太夫にとゞめたり。われ嘗て之を評して、髷を振毀すの術、顏を赤らむるの術、眼をつぶるの術、口をまぐるの術、自ら號令して身悶えするの術と爲せり。更に古作者の心血を叩散らして、滅くちやにするの術なることを追加すべし。

○血に哭かば女よりも時鳥の事也。女の血は中將湯以下也。

○心に餘る男の熱と、身に餘る女の熱と、もとより發作の一樣ならず。合せ物は離れ物たるの理、茲に存す。

○いかにせば男女が情量の均一を保ち得べきか。保ち得ざる時はいかにすべきか。

○相讓らざれば戀は成立せず、相許らざれば戀に

は持續せず。ミエとミエとを取合せ、組合せたる自由結婚の弊は、干渉結婚の弊と異ることなし。

○天下何人か今朝はお諸のお粥を啜れりといふを以て、相逢ふ戀の話題となす者あらんや。其ミエなるを否まんものは、乞ふ來りて之れを解け。

○汝を呼ぶは金の事、嘲世罵俗の大文字といふも、所詮は隱せぬ襟垢の俳味のみ。聞く者の寒きにあらず、言ふ者の寒きなり。嘲罵せんよりは、嘲罵せられん。

○黄金を抱きて世を罵るものなきは、論理學上、矛盾、撞着の避くべきを證示するものなり。

○罵り〳〵て倒さんことをおもふは、優先者に對する策の得たるものにあらず。力を用ひずして克たんは、ほめ〳〵て一途に褒め倒さんことをおもふべし。

○老物が死の其人の爲には悼むもよし、此世の爲には悦ぶもよし。たゞ之をして今際の舌の硬張りて、三寸の息のめでたく絶ゆる迄は、成丈樂地に在らしむべし。強ひて窮境に追入れんは、何彼と後のうるさきに堪へじ。

○若きより見たる老が仕種も、滑稽劇也。老より見たる若きが仕種も滑稽劇也。滑稽を以て、滑稽に代ふる也。代ふるが即ち生命也。

○這へば立て、立てば歩めの最愛兒が脊丈は、同じ比例に親の皺なり。興がれとてや刻一刻、死に近くを成長との。

○賺しだまして育てし子なれば、すかし欺して親に報うなり。子の親に預け、親の子に預けたるほど、物の不安の甚しきは莫し。

○金でも拾はねば分らぬが今の正直也。一押押さるればわれら非力の徒は、金を拾ふにも人後に落ちざる可からず。

○弱者が手頃の棍棒は、強者が手頃の棍棒也。自ら撃つに如かず。

○必要あり、不必要あり。極めて明々にこれを區劃せんがために、女といふは世に出で來しなり。

○さなきだに女の腐れ易きは、鯖の腐れ易きが如し。其ともに腐れざる以前をいはゞ、無論箸は女よりも、鯖に揚ぐべき事也。

○戀は二人にして、一人の事をなすと傳ふ。さらば片戀は一人にして、二人の事をなすものなるべし。

○京阪の京は西京の京なれども、京濱の京は東京の京なり。戀愛と婚姻とを混ずる勿れ、情婦と女房とを混ずる勿れ。

（自明治三十五年二月至八月）

正直正太夫死す

今年今月今夜、星江東に殞つ、雲将く雨暗し、たづぬれば我親愛なる正直正太夫の、沽はんかな家翁伯、ひよつくり鶴と化しけるなり、ああ痛ましの殿が身や、薤露を歌はんか、蒿里を唱へんか、題目か念佛か、神樂がお好きでトットやくたいなる最期を遂げられたること、重々惜しき限なり、況んや誰あつて碑する者なく、空く肝癪玉を呑んで、骨を日暮里に焼かるゝに於てをや、魂魄さまよふ所、遺憾盡くるなからん、仰ぎ願はくは佳人才子、其花に濺ぎ其月に聊つの涙を分けて、これに手向けの水心、聊か弔ひ給はらば、渠も兎角は武士の果、七世の後に於て、豈魚心の無しとせんや。

我之れを何かに聞く、勁松は歳寒に彰れ、貞臣は國危に見ると、宜なり正太夫、文壇亂れて糊細工の大家多く、附燒小說世を惑はすの日、疾風迅雷我無洒落に出で來り、一喝一棒大いに其邊を騷がせり、是れ誠に勁松なり、是れ誠に貞臣なり、されども竊かに渠が兜の裡を窺へば、學淺く識狹し、内に玲瓏の機智なく、外に花藻の文章なく、つまりが夕ゞの野郎なり、多寡がひとりの子僧なり、腕強きにあらず、刃鋭きにあらず、七縱八横薙廻りたりと見ゆるも、實は目指せる大家諸氏の、思つたよりも沈毅にましまし、豎子何かあらんと目もくれ給はねばなり、其無名菌の名を辱うしたるが如きは、ソリヤあんまりな間違のみ、はやまり過ぎたる鑑定のみ、さるにても頃ろ文壇聲なく色なく、醉へるが如く眠れるが如し、正太夫敵手なきに倦きて、猛虎は伏肉を喰はずと稱し、遁れて埴生の小屋にツクネンたり、一日天を仰いで歎じて曰く、俳諧論を誦せんか、新體詩を學ばんか、寧ろ叡山に登つて腹かッさばかんと、何がしが贈れる善罵劍を撫して五色の息良久しうしたりしが、しんぞ命もと縋る者もなく、アレ寐なんすかと呼ぶ者もなければ、正太夫の目算こゝに齟齬し、忽ち西方に向つて掌を合せ、是れ天地の委形なりと、莊子が夢の餘味言、溘然永訣を告げたり、奇と謂ふべし。

逝きぬ、正太夫は逝きぬ、十萬億里の旅の空、鐵道の設未だあらず、死出の山風笠を吹き、三途の川浪舟を囓む、苦艱思ふもあはれなり、右せんか極樂、左せんか地獄、正太夫の墮つる所いづこなるべき、嘗て劍を揮つて人を斬れり、さては地獄ならんか、斬りしは人を助けんが爲なり、さては極樂ならんか、何たる因果ぞ正太夫、死んでの後迄問題となる、南無阿彌陀佛妙法蓮華經。

明治二十三年八月二十二日の夜、

鐘と撞木のあひが鳴る時

正直正太夫自ら記す

俳句

春一ダース

金剛杵をこんがらぎねと讀むが如き評者と彼れ此れ論ずるでもあるまいと正太夫又々出でず候司馬溫公も露伴兄昨今都に居らず候間締切日迄には如何與と存候就てこのたびは小生より其埋合せとは參らず候へども景物とも申すべき珍なるもの少々御覽に入れ申候例の「月落烏啼霜滿天寒哉」を一口に讀み下し候ことは正太夫自ら公けに致候にはあらずさる人の口より傳はりてしば／＼世に引出されたるものに候小生は句と申すものとんと心得ず唯大流行とのみ承り居り候處去十二日の朝雨降り候節不圖春雨やと申す五文字浮び出で候に付さては句と申すは斯る時の事と其春雨やを幾たびとなく繰返し居り候間にまんまと雨垂れの音は歇み候オヤと思つて障子を明け候へば空は雪と變じ居り候によりあわてゝ今度は淡雪やを繰返すことに改め候折柄友の參りてそれは易き事なり梅の花といはゞ動きは無かるべしと被教候卽ち「春雨やオヤ淡雪や梅の花」我ながらめでたきものにおぼえ候今一つやの字あらばめでたさは三倍すべく候それより十日の修行が左の通りのものと相成候譯にて珍と申すは此故に候ナニモ句まで上手になりたいとは思ひ居らず候間あれとこれと斯ら置替へてなど申す野心寧ろ俳諧氣はさら／＼持たず候へども古人のも多くは讀まず今人のは猶讀まず候により萬一似たるものの候はゞ用捨なく棒を御引き被下度候

紅梅や姫が御惱のおこたりぬ

紅梅や伯母御も元は京生れ

三千妓流無俠骨緋桃哉

菫生ひぬ白井權八小紫

尼御前の横顏寒し梨の花

海棠や文殼の紅にじみたる

海棠や娘が戀のしだらなき

垣越しに物問はれけり春の雨

よみ人は誰であつたか春の雨

春雨や柳より先づたそがるゝ

歸る雁姿見橋に夜は明けぬ

二丁目の使もどらず夕櫻

先づ一ダースだけに致置き申すべく人事複雜至極色つぽい所に御目留められ度候。廿二日。

鷗外樣。綠雨。

（明治廿九年三月）

のこり物

床屋もすなる俳句が少々器用にできたりとて、直ちに文學領に引入れんとするが如きは、殊の外の馬鹿野郎なり。生噛の美論などを强ひて之れに結び着けて、よい御代の春をきめこまんとするが如きは、猶々の馬鹿野郎なり。われらが眞似事の句を捕へて、かれこれ理窟めいたることを捏ね廻すが如きは、いよ／＼以て馬鹿野郎なり。などと平氣で言つて居るに至つては一倍輪をかけた馬鹿野郎なり、世の中を馬鹿と言ひはじめたら、言ひはじめた奴からが馬鹿は勿論の事なり。

諸君は義捐金の額と姓名との新聞廣告に出づるを待つやうなる當世的慈善家にあらざる諸君は、これなる文藝倶樂部に拾何錢を投ずるを吝まずまことの陰徳を施さんとする諸君は、尠くとも檀那寺の和尚さんが椀の芋を轉がしたるときは、庄屋どん以下一統之に倣うて、芋を轉がすの昔噺を御ぞんじなるべし。左に掲ぐる又の一ダースは、先頃さる斯道の先達に、こんな物はとて捨てられたるものなり。さればわれも、こんな物はとて捨つるなり。諸君も亦おなじく、こんな物はとて捨てたまへ。棄てゝ棄てて、つまりが口繪の寫眞版だけが畫帖になつて殘つて居るも、さしたる不思議にあらず、海嘯は本年に於ける歷史上の記念なればなり。但し其畫帖をそつと引繰返した中から、地方美人のが出ようとも、それは前號の分とおもへば差支へなし。

片枝は草鞋かゝれり桃の花
桃咲くや椽からあがる手習ひ兒
物申す頭の上を燕かな
春雨や暮るゝ橋行く澁蛇の目
春雨やお次に釜のたぎる音
鬢櫛を娘じれけり春の風
春風や玉屋の爺が額鐵
春風やかりん花咲く塀の角
張板に蝶々まどふ日永かな
布子一貫あご鬚撫づる日永哉
ぼつくりの其處を曲りぬ朧月
辻占の提灯重しおぼろ月

皆春の殘り物なり、不句ありと地口る迄もなかるべきか。今の季節のものとはおもへど、去月中旬より病に臥し、食を絶つことこゝに二週日餘、何をする氣もなし。きがなければ句にならぬぐらゐの處にこ、このたびは御免蒙るべし。今に達者になつて見たまへ、所謂こんな物の千や二千、三千は三膳の飯粒程にもなき字數ならずや、何の造作あるべき。フン笑はせやがると熊さんが聲色は、かゝる場合に持出すべきものかと思はる。（明治二十九年七月）

小細工集

初雪や、大坊主小坊主どう轉んだとて假名の十七字、まんまとお備へを起す氣の運座とやらへ、それがしも一二度は列なりしが、まあこの邊とお慈悲の選みにあづかりしは、總計にてタッタこれだけ。

五月雨やお手紙正に拜見す
水髮のけふ男らし青すだれ
夏の月誰れ彼れいはず美くしき
蟷螂や車井に日の薄れ行く
木枯や夕日突きぬく塔の尖

夏より秋、冬と段々いやになりて、もうこの後は恐縮々々、一句も無しとはもと俳より出でし言葉歟。句は病ひ、五七は雨を上でもいけず下でもいけず、中々苦勞の苦は句也、五つは即ちごくらう也、これを劇評に徵するも、名題の藝とは自分ながら信じ難し。いづれを見ても育ちは山櫻哉いてふの木、そつと指を折つて二字餘るうちが花なるべし。（明治二十九年十一月）

枯菊十句

菊枯れて黒き手筥のほこり哉
菊枯れて油障子に日の赤き
菊枯れて錦の裏の花壇かな

菊枯れて庭に炭ひくあるじ哉

菊枯れて隣のおやぢ風をひく

月痩せて露の白菊枯れにけり

絲屑のからみ着いたり枯るゝ菊

枯菊の沓ぬぎ石に置かれけり

枯菊や正體知れぬ蟲の殼

枯菊や茶巾ほしたる窓の先

(明治二十九年十二月)

ひとりごと

花の雲、上野に行きぬ。雨俄に降出でたり。

ぬしある人の物を言ふ

かく思ひうかべたれど、句を成さず。再び行きぬ。ほこり熾んに立のぼれり。

あらずもがなの女かな

是亦句を成さず。花は早ちりぬるを、うゐのおくやまけふとなりて、猶共に五文字を得ず。われは櫻の色うすきを好くなり、一重を好くなり、散るを好くなり、こぞは句三つあり。

おぼろ／＼花降かゝる三の絲

ふるき人はこれをよしといへり。

枝折戸の闇を櫻のそつと散る

新しき人はこれをよしといへり。

散る櫻散らずばおれが散らさうか

みづからはこれをよしと思へり。われは遂に作者にあらず。

(明治三十一年四月)

豆の花

ありとも知られぬからたちの花白くあらく、小雨そぼ降る朝の井戸に、水汲む女の傘さゝぬが目につきて、はね釣瓶はね釣瓶と暫しは繰返したれど、口には出でず遂に止みたり。後、谷中を過ぎて、

むらさきの豆の花咲く垣根哉

まことに打見たるまゝの戀にはあらざりしを、どこやら由緣のありげなりと言はれて、これもけふ迄躊躇ひぬ。つねには好かぬ戯れなれど、折にふれては句の眞似をする鴉とも洒落ばやといへば、其の方がよく聞ゆるとて人皆笑へり。

(明治三十一年八月)

小唄

こほろぎ

鳴くな蟋蟀鳴かるゝほどは、この世稀なる仕合せ者よ。露を命の互ひの上に、ないてよければ苦勞はいらぬ。月は落ちたか曇りはせぬか、今の小雨は夢ぢややら。獨寝た夜の枕の手前、泣くに泣かれぬ身を思へ。

からす

烏憎いとそりや誰が言うた、戀と烏は浮世のかたみ、明けりや憎かろ暮れゝば可愛い、邪魔があるので慾もある。たとひ野の末山の奥、百合も咲かうし菫もあろし、戀の芽ざさぬ世もなけりや、烏歌はぬ里もない。

まつの木

松は男の立姿、意地にや負けまい吹け吹け嵐、枝は折れよと根は折れぬ。

つき

お前出る月わしや沒る月、ながめあかそと約束したが、見えぬ二十日をどうせうぞ。

えんきり

切れてくれなら切れぬでないが、おもひ出すなは未練が過ぎる。心一つをお前にあづけ、切れりや今日から儂の心、あかの他人が世話燒くことか。倶によかれと願うた中も、今ぢや切れるが身の爲ならば、口もきくまい話もすまい、思ひ出すのは儂がまゝよ。見込みや動かぬ岩下水の、堰かれて流れぬものでなし、堰かれて流れぬものでなし。

すみぞめ

墨染に、咲けと昔のいたづらな。野邊の櫻し心が有らば、咲いて見せぬと限らりよものか。お國開けて二千年、三千年の春來る毎に、咲かば赤いと知れたが花よ、變りや世もない人もない。戀と無常は腹合せ帶、見えぬ處にそつがある、かはらぬ處に味がある。今年ばかりを言ふ事きけば、あとの櫻がをかしかろ。

みじか夜

短夜の、月に寝たのはつい今し方。夢に似たよな囁きゝつけて、まだも明けぬと手枕の、そつと團扇をあたりへ投げりや、

日影まばゆし紅の花。

珠數かひ

明暮れの、鐘が厭ぢやと佐平次どんは、とめてとまらぬ竹の杖、老の坂路踏越えて、鐘の無い里たづねに往たが、やがてたよたよ戻つて來たを、何故に早いと立寄り聞けば、後生知らずの佐平次どんも、其時はじめて南無阿彌陀佛、鐘の無い里見附けはしたが、花の無い里おりや住まぬ。誰れも一度は戀の山、花も咲け〳〵鐘も撞け、明日は朝立ち京へ出て、おのしや行かぬか何御用、案じてくれるな珠數買ひに。

こひ中

散る花の、行方いづことあこがれて、還らぬ春のわかれ路、名殘ごゝろに佇めば、風が載せ行く鐘の聲、鐘が載せ行く花の色、ひらりひら〳〵ひら〳〵〳〵。廣野の果に入相の、消行く鐘のあと見れば、散行く花のかげ見えて、所在はこゝと人の子の、香には喩べど譬立たず、蝶にもならぬ宵の夢、ひらりひら〳〵ひら〳〵〳〵。覺めておぼろの窓の先、掃はぬ庭をながむれば、鐘も今宵はそつと鳴る、花も今宵はそつと散る、鐘と花とは戀中や、ひらりひら〳〵ひら〳〵〳〵。歌にも久し花と鐘。

くぜつ

泣けといはれて山郭公、闇にうつかりなかれもせぬが、泣くなと言はれりや猶せきあげて、なかずにや居られぬ川千鳥、涙ひとつがまゝならぬ。

つき花

花は散る、月は曇るの世の中に、ういもつらいも古めかし。あかぬ別れのあればこそ、戀おもしろき人の春、散らずくもらず別れずば、涙は假りの化粧水、醉も光も夢も香も、繪に見る袖の皺なれや。別れ厭はゞ戀をも厭へ、ふたり目と目に花のかげ、逢うて笑ふが戀ぢやない。ひとりひとりの月の前、別れて永き胸の苦を、泣くがまことの戀の味、散るでうつくし曇るで清し、逢うて行末別れがなくば、年は十六名はお七、戀物語殘りやせぬ。ながめ氣疎き月と花、思ひある身はおもひに痩せよ、戀にやつれよ中絶えよ。痩せてやつれて中絶えて、あらぬ別れに泣けよかし。

わかれ

さくら花、散るをわたしが知らぬぢやないが、散れば復咲く春もある。わたしや別れてそれなりに、つひぞ逢はれず逢ひもせず、戀に似たよな花ぢやとて、散るを別れとそりや等閑な。花にをしへの有るとはいへど、敎へももとは人手業、花になさけの何あることぞ。立たぬ喩へを幾代々かけて、歌よむ國のをかしらし。散るはたび〳〵別れは一度、どうせわた

しは花ぢやない。

ねざめ

曉の、鐘に泣いたは昔の夢よ」。果てぬ仔細に隔てられ、のけば互ひに知らぬ人、見ぬ人逢に逢はぬ人。おもふことなき箭なれど、なぜか寢覺の燈火を、掻立てゝ見る片明り。窓をたゝくは村雨か、ばらりばら〳〵木葉もまじる、騷ぐまいぞや小夜嵐。一今ぢや夜中の鐘に泣く

くりこと

撞いてくりやるな今宵の鐘を、きけば悲しゝ聽かねば寂し。一つ人の世荒れにけり、妹が垣根のつぼ菫、古郷の事おもひ出す。二つ再び逢ひ難き、御墓の下の苔の露、親々〳〵の事憶ひ出す。三にさりとは告げられぬ、今の憂き身を鐘の數、四つ聽けば四つおもひ出す。五ついつまで飛ぶ雲の、ちぎれ〳〵に腸を、風にまかせて捗ろより、撞かざ止むまい鐘たらば、富も榮えも榜ひも、われや仇たる戀も名も、闇から闇へ唯一撞きに、死んでしまへと何故撞かぬ。

かね

鐘がいふ、明ける暮れるをわしや知ろことか、人の撞く鐘人が泣く。晝は長かれ夜は短かれ、わしは撞かれて只鳴るばかり、白い黑いは空に問へ。

穂すゝき

白い蝶々は戀知らず、花に寢ぬ身のさりとては、いらぬ命をながらへて、翅弱々〳〵露が置く、やがて時たちや霜が置く、草の野原を唯一つ、すねも拗ねたり行暮れて、所詮この世は假の宿、茂る芒に潜込めば、いつか其儘穂になつた。のくとはすれど退きかねて、義理がゆるさぬ手招ぎの、ほんのり赤いを何かと思や、神の惠みの依怙いはず、浮びた夕日の顔ぢやげな。昔にかへる夢心地、今を忘れてうと〳〵と、眠る傍から風の音、さうはさせぬと揺起されて、はからず立てばたちまちに、ふはりふはりと舞ひあがる、蝶が穂ぢややら穂が蝶ぢややら、何處へ行くよと見送れば、ずつと外れに里がある、里のはづれに森がある、森のはづれに山がある、山のはづれに庵がある、それより高い空の上、一かたまりに凝まりて、末は詩になる秋の雲、あれが眼であろ星であろ。折柄庵の窓の戸明けて、痩せた翁のひとり言、あすもどうやら日和ぢやえ、エ、ソレあすも日和ぢやえ。

くさの戸

梅が咲きます土筆が出ます、去年の古衣わしや着たまゝの、春は隣の垣の外。いつの此身に惜からぬ、花が咲こやら芽が出ようやら。障子あければ雀が三羽、日向あちこちちゆッちゆッちゆ、阿房な枯木もあるぞいの。

出もどり

わしが嫁入おぼろ夜の、お月樣さへ恥かし嬉し、暈に隱れて居さんした。さられて戻る此ゆふべ、泣いてたもれな倶々に、見ればやつぱりかさの內、お月樣ぢやて時雨もあらう。ほんにお歲は十三七つ、合せりや二十は先一昨年の、わしや春秋に老けて行く。

まよひ

ほれた初めは實あるお方、今ぢや不實の類無し男、十分一なと初めの實が、今もあるなら斷れても見せう、なまじ不實が斷れさせぬ、あゝ何とした身の因果。

ちりの世

雨の來て、咲けと誘へば花は咲く、横からそよと風の來て、散れと誘へば花は散る、濃いも淡いも大空の、神をたのみて物言はぬ、何處に植ゑても一つ色、花は私無けりやこそ、歲經て光かはらざれ、私多き人の身は、盛りの春の時得ても、處を得ねば咲きもせず、一たび老いてちりの世の、つひの悶えの苦の上、復かへり來ん由もなし。されば恥づるや深張の、隱せど傘を洩る袖も、あやかりたさの花模樣。

いのち

まゝよ風にも吹かれて見よか、うるさ世の中名ぢや富ぢや、かりた命は返すぢや迄の、花も散るので惜まれる。

やみ夜

散れば惜かろ咲かねば散らぬ、咲こか散ろかの花の闇、鐘につく〴〵おりや考へた、同じ事なら寢て咲かぬ。

まばたき

鐘が鳴る、鐘の絶間を雨が降る、雨の絶間を蟲が啼く。蟲は何蟲父戀し、母も戀しの彼君も、今居ぬ人の皆戀し。蟲の絶間を寐もやらず。寐もやらねども夢を見る。夢の絶間を燈火の、まばたき暗き床の中、秋の夜長をわしや一人、あゝわしや旅に唯一人、枕仕替へて眼をつぶる。

略傳

（一）

綠雨醒客齋藤賢君は、別號、正直正太夫或は江東みどりともいふ。伊勢の人齋藤利光氏（母は信子）の長男で、慶應三年十二月三十一日伊勢の神戸で生れた。雙親に從つて上京したのは明治十年であつたといふ。父利光氏が藤堂老侯の侍醫であつたので、一家は本所區綠町三丁目の藤堂邸内に住した。綠雨君と竹馬の友であつた文學博士上田萬年氏の記するところに據れば、綠雨君は、彌勒寺橋畔にあつた土屋學校に入り、東洋小學に轉じ、更に又、回向院裏の江東小學校に轉じたが、後一つ橋にあつた東京第一中學に入り、又直きに内幸町東京府廳構内にあつた第二中學に轉じ、そこを中途で退學してからは、本所にあつた明治義塾に入つたが、半年も經ざるうち退學して、明治法律學校（今の明治大學の前身）に移つて、法學を學んだるも、業卒へずして、退いてしまつたといふのである。

綠雨君から親しく聞いたところでは、家貧しくして、二弟（讓、謙）に教育を與へるために、自身は早く學を廢さなければならなかつたといふのである。綠雨君には他に、姉さんと妹さんがあつた。

利光氏が其角堂永機と親交があつたので、綠雨君もその宗匠のところへ遊びながら行つて、俳句を學んだ。綠雨君自身は句作には深くは力めなかつたのだが、遺つて居る君の句だけで見ても、綠雨君の句作の才能決して侮りがたいものがある。

小學校での成績に就ても、

『讀書と數學は、いつも高點なりき。習字と書學は、いつも落第點にちかかりき』

と、綠雨君自ら記してゐるだけあつて、少年の友だちが集まつて作つた廻覽雜誌でも、綠雨君の句や文が群を拔いて優れてゐたといふ。

假名垣魯文の門に入つたことに就ては、綠雨君は次の如く記して居る。

『年十七八の比なれば、猶學校に通へりしと覺ゆ。永機翁の紹介によりて、魯文翁に面したり。駒半錢に撰したる印一つ贈られしを、用ひこそせざれ今も藏せり。いかなる事を書きしか全く忘れたれど、携へ行きしわが一文に名を眞猿と署し、芳譚と稱する雜誌に出されたり。

綠雨君の名の賢は、まさると讀ませてゐたので、眞猿の號ができた譯であつたのであらう。

『假名垣派より出でたりとて、竊に或人のわれを太く貶しめしが、われはこの點に就て爭はじ、妨げじ。若然らば假名垣派の多くは亡びたるに、われひとり存れるをせめては恃まんのみ。筆執る前に師ありや、後に弟子ありや。今の人の師弟と稱するもの、糊口の道を授くると授けらるゝとによりて岐るゝ字也。われは戲作者の亞流を以てよし呼ばるゝとも、散髮頭の春水となりて自ら喜ぶが如きことなかるべし。序なれば記す』

今日では戲作者の時代は、最早歷史中のものとして觀ることができるので、吾々も公平な感を持ち得るのであるが、明治中期ぐらゐの時代には新文學の徒は、やゝ自衞上の意味でも、戲作者を蔑視しなければならなかつたのだ。

緑雨君は、新聞記者としての自身の閲歴を左の如く記して居る。

『誰々は元校合方（註、校正係のこと）なりきと、よらでもあるべき人の垢を、より〲噂の世に流れしが、われも最初新聞社に入れる時は、やはり校合に從事したる身分なり。今日新聞といふに二度入りて、二度逐はれたり。自由の燈といふに入りしが、こゝには改革沙汰の起りて除かれたり。朝日新聞の東京に創まるにあたりて、少しは取立てられしも退きたり。東西新聞の倒れしより、大江氏の下に政論社に在りしが、江湖新聞の倒れしより、又も同社にもどりて、末廣氏（註、重恭）の大同新聞となる迄居續けぬ。されど他に合併の都合ありて、放たれたり。國會新聞、改進新聞は惰け者なればとて、逐はれたり。二六新報に入り、時論日報に入りしも、われを迎ふるほどの社の、など倒れでは止むべき、共に法の如き最期を遂げぬ。逐はれしといひ、放たれしといふもの、皆わが罪なり、他人の罪にはあらず、決して他人の罪にはあらず。最早われは新聞社に所縁をもつまじきものに考へ定めて、長らく浪人修行に慣れたりしも、あらぬ望のあゝさて凡夫なりけり再び動きそめて、萬朝報に入りしに、こゝはわれより退社を申出でたるなれば、逐はれしにはあらざるべし。猶めざまし新聞、讀賣新聞にも寄書したる事ありて、いかにも渡り者の埒無き末とわれも思へど、假に一切を運といはゞ、運は菅の根の長きも一年を超えず、蘆の葉の短きは二月に足らざる程なれば、われの筆取りし時間を總計するに、まことに僅少なる事なりしなり。十露盤手にせぬ商人の扶持によりて、先つ年迄立ちしわが身をおもへば、變るにをかしきは元來空蟬の人の志よな』

（二）

今日新聞の社長であつたといふ小西義敬氏は當時の所謂通人であつたので、緑雨君の世間知識は多く斯人に負ふところがあつたといふ。緑雨君から聞いたところでは、緑雨君自身何かの會社に使はれたことがあつたらしいのだから、それは小西氏の配下に於てではなかつたらうか。とにかく、小西氏などから金錢の使ひ方を教へられたことは確らしい。

緑雨君は元より當時の所謂小新聞の雜報記者から身を起したと云つて宜しいのであるが、その時代の作物は大凡左の如くであつたといふ。

『名は元かり蕊の分けもたゞさず、亂れし本末の闇の礫、甚だあたらぬ字義のまゝを、今は一般に小説と呼慣れたれど、以前はいづれの新聞社にても、單に續きものと稱へしなり。われの初めて之れに筆執りしは、明治十九年一月、住處にちなみて江東みどりと號し、善惡押繪羽子板といふを、今日新聞に出したるときの事なり。引つゞきて二三の新聞紙に雨夜の狐火、杜鵑里初聲、比翼莚鴛鴦毛皮、紅白梅花笄、春寒雪解月などいふを出したるが、何れも所謂お伽草紙、七五づくめの極めて甘たるきものなりしは、已に命題に明かなるべし。はやく手元より取棄てたれば、書きし事柄の一部をさへ、われは全く記憶せざれど、むかしを言はゞ櫨の一本、面はもみぢす可きに定まれるを、あれのこれのと洗ひ立てのうるさければ、自らこゝに名告り置くものなり。』

緑雨君作のこれ等の續き物は、無論後年の作とは比べものにはならぬのであらうが、それにしても、流石に緑雨君の筆になつたものだけあ

つて、文章には一種の風格があつて、當時の同種の作物のなかでは、異彩を放つてゐたと傳へられて居る。

明治二十二、三年頃、當時まだ文學者志望の青年であつた僕等が最初に綠雨君の作物に接したのは、綠雨君が正直正太夫の別號の下に書いてゐた「初學小說心得」「小說評註問答」「評註端唄文學」といふが如き諷刺的批評の諸篇に於てであつたと思ふ。正直正太夫の戲號の由來は、綠雨君が伊勢の生れであつたからだと云へば、その上の說明には及ぶまい。

ところで、綠雨醒客の號の由つて來るところは、何うかといふと、

『二十二年、三年頃たるべし。今おもへばいらぬ雅號も、見やう見眞似にほしくなりて、友なる紫瀾子の紅露情禪、綠雨醒客とかきて送られしに、前者は其ころ咲盛る文壇の花形ともいふべき作家の、頭字一つ宛寄せたるにひとしければ、避けて後者を擇みしは、是亦住處に因みあればなり。綠雨は若葉のしづくを謂ふとぞ。』

紫瀾子は坂崎氏、土佐の人で、『汗血千里駒』といふ坂本龍馬のことを書いた小說などの作があつたと思ふ。

小說作家として綠雨君の名が當時の新文壇で認められるやうになつたのは、二十四年に出た『油地獄』からであらう。『かくれんぼ』も殆ど同時の作であるが、此の方はそれ程世評に上ぼらなかつた。綠雨君は後年『隨筆』『日用帳』のなかで、自分は『油地獄』より『かくれんぼ』の方が得意だと書いてゐる。

『油地獄を言ふ者多く、かくれんぼを言ふ者少し。是れわれの小說に筆を着けんとおもひ、絕たんとおもひし雙方の始なり、終なり』

綠雨君の歿後、坪内大人は、『かくれんぼ』に於ける綠雨君の描寫力を激賞せられた。『春水が何頁をも費して描いて居るところを、綠雨君は一二行で鮮やかに描いて居る』といふやうな言葉であつたと記憶する。

（三）

綠雨君が雙親を失つたのは、二十八年だといふのであるが、弟君と共に、下宿住ひを始めた。上田氏の記憶によれば、明治三十二年の春までに、綠雨君は左の如く轉宿してゐる。

駒込蓬萊町の奥井、本鄕弓町の高桑（文學士高桑駒吉氏の家）、淺草向柳原の中村氏方（これは綠雨君の妹婿の家）、本鄕丸山新町の某館、その前に千葉縣の市川に居たことは、『ひかへ帳』のなかに書いてある。丸山新町の崖の上の宿に綠雨君が居た時分（明治三十年の十月頃）、僕は綠雨君を知つたのであつた。森川町の蘿藤といふへ移つたのは、その翌三十一年であつて、その前後に萬朝報へ入つたのだと思ふ。その宿には、故大野酒竹君が下宿してゐた。其所では、田岡嶺雲、幸德秋水、久津見蕨村、井原青々園などの諸氏の顏を見かけたことがある。朝報紙上に書いてゐた隨筆の『眼前口頭』のなかの婦人論の部分が筆禍にかゝつたので、黑岩淚香からの勸告で、綠雨君は退社した。三十二年の秋であつたかと思ふ。此の頃にはもう「太陽」へ綠雨君の『おぼえ帳』が出てゐたと思ふ。

鵠沼の東屋へ行つてゐたのは、その翌年であらう。それから、小田原へ移つたのは、三十四年になつて、同所の綠新道といふへ卜居したといふ通知があつたが、その年の暮に中澁谷の與謝野寬君のところで、綠雨君と落ち合つた。綠雨君の次の弟さんの理學士讓氏が臺灣で病死したのは、三十三年五月であつたといふ。その後綠雨君は綠新道から十字町へ轉居し、三

十五年の秋東京へ出て來て、十二月淺草須賀町の明治病院の路次の或る家を借りて、少時住つてゐた。そこから、本郷の千駄木林町二百三十番地へ移つたのは、三十六年の五月一日であつた。同じ年の十月二十三日に本所横網の二丁目七番地へ轉居した。誰にも知らさずに、隱棲してゆつくり療養がしたいから、誰にも云はずにゐてくれと、固く口止めをされたので、已むを得ず、人から聞かれても、默つてゐた。

家は御藏橋より一町程手前のところを右に曲つた路次と云つていゝくらゐの狹い横町の中程の右側の三間程の平家であつた。何處かの隱居所の一部を仕切つたとかいふので、狹くはあつたが、そんなに汚い哀れな家ではなかつた。あのあたりは、先年の震火に一掃されてしまつたので、今日では、周圍がまるで變つてゐるであらう。

翌三十七年になると、綠雨君が宿痾(肺患)がだん／＼に重りだした。二月の或る日、何うも病氣がよくないと云つて來たので、尋ねて行つて、養生費の工面に關する相談を受けて、僕の從兄の野崎左文に話して、盡力して貰ふことにしたが、綠雨君と考の相違ができて、十分に盡し得なかつたのは殘念であつた。綠雨君の末弟の小山田謙君は、軍醫で滿洲へ出征中であつた。

四月十一日の夕方であつたが、綠雨君の妹婿さんの中村氏が、僕がその時住まつてゐた麹町區飯田町五丁目の家へ尋ねて來て、綠雨君が危篤だから、來て遺言を聞いてくれといふのだ。直ぐ駈けつけると、綠雨君は氣分は確であつた。何時もと少しも變らぬ物靜な聲で、『いよいよ醫者から絕望だと宣告された。今夜もう一度注射を受けるが、その後は注射も利かなくなるといふんだ』といふ話をし、千駄木以來、出版の目的で綠雨君が一閱してくれることになつてゐた樋口一葉君の日記を、樋口家へ返してくれと云つて、家人に言ひつけて、文庫のなかから出させた。それから、

『僕本月本日を以て目出度死去致候間此段謹告仕候也、四月一日　綠雨齋藤賢』

といふ死亡廣告の文案を、綠雨君の口授のまゝに書き取つた。『文筆の士に枕邊に居られるのは、何でもない唯の人間齋藤賢として死にたい自分の最期の心がゝりになつていけないから』と綠雨君がいふので、僕は直き引き取つて、綠雨君の知人の主な人々へ、綠雨君危篤の通知を出した。翌十二日の午後四時頃、勤先からの歸途、見舞つたが、もう逢ふのも苦しいからといふ傳言であつたので、直ぐ歸つた。

十三日の午前十時過ぎに、野崎左文から、綠雨君死去の電話がかゝつた。それからは、與謝野、幸田、坂本(紅蓮洞)、幸德、野崎その他の人々と、綠雨君の家で落ち合つて、葬式の手傳ひをなし、遺言通り、翌早朝、三河島の火葬場へ遺骸を送つた。その途中で幸田君に戒名をつけることを賴むと、露伴君は、暫らく沈思の後で、『六字ばかりにはなるが、春曉院綠雨醒客として、居士とも、信士とも附けずに置いたら何うだらうか』と云つた。火葬場の方で待つてゐた人々にも話して、戒名はそれにきめてしまつた。

越えて十六日、午後一時から、本郷東片町の大圓寺で、埋骨式といふ名義で、葬式を行つた。文壇知名の士は大抵會葬してくれた。幸田君は友人を代表し、與謝野君は新詩社を代表して、弔辭を讀んだ。大圓寺は齋藤家の菩提所である。家は綠雨君の遺言で、養子などをせずに、絕家になつてしまつた。

綠雨君は、當時の文壇の何れにも屬さなかつ

た人である。當時の文壇の主流であつた硯友社の人々に對しては、全く反抗の態度を執つてゐた。しかし、何の作家に對しても、偏頗は無かつた。公けにした短評は皆痛烈、皮肉を極めたものであつたが、ことごとく十分の根據あるもので、決して漫罵ではなかつた。緑雨君の頭腦は極めて論理的に働き、しかもそれが驚くべく鋭敏であつた。それが聯想の上に働いた結果が、あの思ひつきの豐なパロディ(作り代へ)の作となり、戯評の妙文となつて現はれて居ると思ふ。

緑雨君の時代に於ては、言文一致がまだ搖籃時代であつて、作家は皆根本に於ては徳川時代の文脈を學ばなければならなかつた。緑雨君の優れたる記憶力はその方面に於て、驚くべく豐富に働いて居る。當時の所謂文章に於ては、語句の洗練には謂ふべからざる勞作と苦心とを要したものであつた。緑雨君の小説はその種類の作物として最も顯著なる實例である。僕はそのなかでも最も代表的なものとして、斷片ではあるが『おぼろ夜』を選んだ。

緑雨君が文學者として發揮した技能は可なり多方面であつた。俳句、和歌、小唄に至るまでも皆一家の風格を持つて居る。即ち、それ等の一時の興にまかせたやうな作品にも、作家の特調、個性が明確に印刻されて居る。本集には、緑雨君のあらゆる種類の作品を、謂はば見本的に一わたり集めてみた。此の方が反つて斯の異彩ある作家の全豹を示すことができると思つたからである。

緑雨君の事に就ては、明治三十七年の五、六月頃の「明星」「新小説」「帝國文學」、内田魯庵君著『思ひ出す人々』、及び拙著『孤蝶隨筆』等を參照あらんことを願ふ。

猶緑雨君の手紙は皆殆ど藝術品と云つて宜しいくらゐの名文なのだが、今口絵の分をその實例として左に活字に附して置く。

うもれ木の御返し迄にみだれ箱昨夜差出し
申候
例の彌次馬歌三つ至急御點を得たく存候
これでも公刊物に掲ぐるつもりに候
(けふ御間に合はゞ明星にても)

笛の音のすみれの岡の薄月夜
誰が子麓を白き駒やる

啼けばこそ山時鳥名にもたて
京は青葉の用なきところ

なでしこのおもひの垣の雨の朝
赤きも枯れぬ白きも枯れぬ

御近況如何文集界の寺岡村御待申居り候
貧いよいよ貧敵は中々勘辨せず着た切雀の
宿にのみとぢこもりて茫然とくらし居り候

廿六日　緑雨

右は『鐵幹大兄』(與謝野寛氏)にあてたもので、『近きところへ參り候ことゆゑ先日落合先生を御たづね申候』と追て書きが誌されてゐる。

昭和四年二月三日　馬場孤蝶

著作年表

標題	掲載書目	發表年月
善悪押繪羽子板	今日新聞	（明治一九・一月）
雨夜の狐火		
杜鵑里初聲		
比翼蓮鴛鴦毛皮		
紅白梅花笠		
春寒雪解月		
紅涙	讀賣新聞	（二三・三）
小説八宗	同	（二三・一二）
唯我	讀賣新聞	（二三・一）
初學小説心得	同	（二三・二）
置炬燵	同	（二三・三）
小説評註問答	同	（二三・三）
若武者		（二三・四）
犬蓼		（二三・八）
正直正太夫死す		（二三・八）
鶉網		（二三・九）
評註端唄文學		（二四・一）
大いに笑ふ		（二四・一）
油地獄		（二四・六）
かくれんぼ	文學世界	（二四・七）
柴小舟		（二四・八）
百鬼夜行	國會新聞	（二四・八）
一家言		（二四・一二）
酒の上		（二四・一二）
のこり艸		（二五・五）
弓矢八幡	國會新聞	（二六・一）
寶花翁	同	（二六・二）
さゝ棲	改進新聞	（二六・六）
文學一からげ		（二六・六）
鷗外漁史に與ふ		（二六・一二）
新體詩見本	二六新報	（二七・一二）
門三味線（未完）	讀賣新聞	（二八・七）
觀面	國民の友	（二八・八）
金剛杵	めざまし草	（二九・一）
雨蛙	太陽	（二九・一）
乙女	帝國文學	（二九・二）
春一ダース		（二九・三）
のこり物		（二九・七）
霹靂車	めざまし草	（二九・八）
小細工集		（二九・一二）
合作十二ヶ月	文藝倶樂部	（二九・一二）
枯菊十句		（二九・一二）
百鬼行	文藝倶樂部	（三〇・四）
のこり草	文藝倶樂部	（三〇・六）
若武者	同	（三〇・九）
方角早見五十音		（三〇・九）
ひかへ帳	太陽	（自三一・一 至三一・一二）
眼前口頭	萬朝報	（自三一・一二 至三二・三）
ひとりごと		（三一・四）
豆の花		（三一・八）
おぼろ夜	文藝倶樂部	（三二・一）
日用帳	太陽	（自三二・五 至三二・一二）
霏々刺々	萬朝報	（三三・六）
朝寢髪	讀賣新聞	（三三・九）
巖下電	萬朝報	（三三・三）
わたし船		（三三・三）
雨口一舌	太陽	（三三・一）
青眼白頭	同	（三三・一二）
ふところ談義		（三四・一）
面影草	明星	（三四・三）
おぼえ帳	太陽	（自三四・四 至三四・一二）
長者短者		（自三五・二 至三五・八）
半文錢	太平洋	（自三五・三 至三五・八）
緑雨集	單行	（四三・二）
緑雨全集	單行	（大正一一・四）

（右のほか、『かくれんぼ』、『見切物』、小杉天外との合著『反古裝』（實は、賣花翁一篇のみ緑雨の作）の小説集、『あま蛙』、『あられ酒』、『わすれ貝』、『みだれ箭』の隨筆集ある）

昭和四年三月一日印刷
昭和四年三月三日發行

現代日本文學全集 第七篇

著者 廣津柳浪 川上眉山 齋藤緑雨

發行者 山本美
東京市芝區愛宕下町四丁目六番地

印刷者 杉山愛二
東京市牛込區市ケ谷加賀町一ノ一二

發兌 東京市芝區愛宕下町四丁目六番地
改造社
振替東京八四〇二番
電話芝(43) 一一二一番 一一二二番 一一二三番 一一一四番

株式會社秀英舍印刷